変態異常自虐少女ゆかりの記録

暗闇魍魎

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
変態異常自虐少女ゆかりの記録

【Ｎコード】
Ｎ８０９８ＩＫ

【作者名】
暗闇魍魎

【あらすじ】
ゆかりは自分が幼い頃から異常性欲者だと認識していた。性器を徹底的に破壊する。それが、ゆかりの夢だった。それでも人に迷惑をかけなければ何も問題ないと、日々密かに自慰に耽る毎日だった。だが、その自慰はどんどんとエスカレートしていく……。そして、ゆかりは……。

※奴隷になったゆかりが処刑され絶命する姿は別作品「檻の中の幸福」ゆかりの章にて掲載しております。

２部に入ってからは、メス奴隷たちが頻繁に処刑され壊され絶命する様子が描かれていますので苦手な方は気を付けて下さい。

1、放尿

変態異常自虐少女の記録

1、放尿

・・今日こそ実行しなくちゃ・・

ゆかりは、学校からの帰り道、黒いセーラー服を着て歩いていた。膝上までの黒いプリーツのスカートは上衣と同じく黒である。夕暮れ近い時間であったがまだ周囲は明るく、そこそこに人の姿はある。ゆかりは歩きながら、これからやろうとしている事を頭に浮かべ顔が赤くなってくるのを感じた。

・・どうしよう…なんか恥ずかしいな・・

三つ編みお下げの黒髪に眼鏡をかけたゆかりの顔はお世辞にも美人や可愛いとは言えないが、真面目で大人しそうな印象を与えた。その地味な印象からすれ違う人を振り返させる事もなく、すれ違った瞬間にはもう顔を忘れられている。そんなゆかりだった。家までの道を歩きながらゆかりは、実行するタイミングを計っていた。

・・そろそろいいかな・・

ゆかりは一応辺りを見渡してみた。周囲に知っている顔は顔はなかった。人通りもそれ程多くなく、歩いている人の多くが家路を急ぎ、

周りに注意を払っているような人はいないように思えた。

・・やりなさい、ゆかり・・

ゆかりは自分に命令する。しかし、いざ実行しようと、なかなか踏ん切りがつかなかった。でも、今日実行しなければ、また後悔することになる。

・・なにしてるの、やりなさい、ゆかり・・

歩きながらゆかりは辺りをキョロキョロと見回す。

・・もう、今しかない　早くしなさい、ゆかり・・

もし、万が一ばれたら体調が悪い事にすればいい。前からやろうやろうと思っていた事を、また実行しないと何時まで経っても欲求不満のままだ。

・・はい御主人様・・

心の中で答えたゆかりは下腹部に力を入れた。しばらくしてスカートの下に穿いた黒いタイツの内側が黒く濡れてきた。道行く人で気付いた者は居ないが、ゆかりは歩きながら放尿していた。注意深く見ていればゆかりの黒い学生靴から溢れた尿が地面を濡らしているのに気付いただろうが、この地味な少女をそこまで観察している者は皆無であり、また夕暮れ時の薄暗い時間でもあるため気付いた者は誰もいなかった。

・・ゆかり、歩きながらオシッコしてる・・

股間から内腿、足に感じる生温かい感触にゆかりは自慰をしている時と同様の興奮を味わっていた。やってみればなんという事もなかった。もっと早くやればよかった。ゆかりはようやく毎日妄想していた事を実行し、興奮していた。

・・どうしよう、オシッコじゃないものも違う穴からいっぱい出てる・・

ゆかりは小便以外のものでも激しく股間を濡らし始めていた。今すぐ自慰したいという欲求に耐えゆかりは足を速めていった。
自宅に戻ったゆかりは離れの自室に真っ直ぐ向かい、ドアに鍵をかけると立ったままスカートをめくり大きく足を開くと小便と愛液でぐっしょりと濡れた股間に右手を当てる。そして、そのまま激しく擦り始めた。

「おっおっおっおっ」

小さな声を出しながらゆかりは、絶頂に向かって上り詰めていった。

2、野外自慰

2、野外自慰

夜になりゆかりはもう一つの計画も実行しようと考えた。入念に下調べをし道具も揃えてある。あとは実行にうつすのみであった。ゆかりは全裸になると、太ももの付け根まである黒いサイハイソックスを穿き、既に勃起しているクリトリスに紐を巻き付けるとその先に本名を書いたネームプレートをぶら下げた。そして、ネットで購入した浣腸器を手に取り浣腸液を充満させる。一回で五百ミリリットルも注入できる大型の浣腸器を肛門に突き刺すとゆかりはシリンダーを押していく。ゆかりの下腹部に冷たい感覚が広がっていった。五百ミリリットル全てを注入したゆかりは、再び浣腸器いっぱいに補充しまた肛門に突き刺した。一回目の時よりも抵抗が大きく注入に時間がかかったが、それでもゆかりは全て注入する事に成功した。一リットルもの浣腸液を注入され、ゆかりの下腹部はぽっこりと膨らんでいる。

・・これで許されると思うな、ゆかり・・

ゆかりは自分に告げ、さらに浣腸器に液を充填する。そして、肛門に突き刺すとゆっくりと注入していく。かなりの抵抗があり苦労したがゆかりは肛門から自分の体内に浣腸液を全て注入し、浣腸器を抜いた肛門を押さえながら用意しておいたアヌス栓を手に取り、たっぷりとローションを塗った。

・・尻を突き出すのだ、ゆかり・・

自分の命令通りゆかりは、尻を大きく突き出し肛門にアヌス栓の先端を当てる。

・・力を抜け・・

ゆかりは肛門の力を抜き、アヌス栓を押す手に力を加えた。

「あっ」

円錐形の形状で最大直径四センチもあるアヌス栓は途中からなかなか入っていかなかった。それまで三センチクラスのアナルディルドゥを肛門に挿入し自慰に耽った経験はあったが、四センチもの太さは初めてだった。

・・痛い。入らないよぅ・・

ゆかりはアヌス栓を回転させたり抜き差ししながら肛門をほぐし、少しずつ確実にアヌス栓を肛門に押し込んでいった。そして、最大直径部を越えた瞬間、にゅるりとアヌス栓は肛門に入っていった。長さ二十センチ、直径四センチの巨大なアヌス栓で肛門を封印したゆかりは、紺色のコートを身に付け母屋の様子を伺った。

・・大丈夫だ・・

ゆかりはそっとドアを開け夜の町へ歩き出した。十二月の夜の空気は、コート一枚では震える程寒かったが、興奮しているゆかりには心地好く感じた。

近所の公園までたどり着いたゆかりは辺りを見渡すと公園に入り目

をつけていた林の中に足を入れた。

・・思った通り・・

夜の公園の林は、外からは中が見えにくく、逆に中からは外の様子が良く見えた。ゆかりは林の中で着ていたコートを脱ぐと、足を大きく開き両手を万歳のように高く挙げた。開いた足の中心に本名を書いたネームプレートがクリトリスからぶら下がっり、浣腸液を大量に注入された下腹部は大きく膨らんでいる。

・・ゆかりのオナニーをご覧下さい・・

そう言うとゆかりは股間にぶら下がるネームプレートを握り一気に引っ張った。

「あ、うっ」

結んでいた紐がクリトリスを引き伸ばし、そして、抜ける。

「あっあっ」

息を荒くしながらゆかりは急いで事前に用意しておいた木と木の間に張ったナイロンのロープに跨がり、アヌス栓を掴むと肛門から抜き取った。そして、性器の中心にロープが食い込むように位置を調整すると両手を挙げ歩き出した。

「おっおっ」

性器がロープで擦れゆかりは小さな声を出す。浣腸液を注入された肛門も我慢の限界が近づいていた。

何とかロープを渡り終えたゆかりは、今度はそのまま後ろ向きに歩き始めた。肛門がロープで擦れ大便が洩れ始めていた。

・・もう、だめです・・

ゆかりの肛門から一気に大量の浣腸液と大便が噴き出す。ロープに付いた大便がゆかりの性器を糞まみれにしていく。後の樹木までたどり着くとゆかりは、寄り掛かるように背中を樹木にあずけ腰を前後に振り出した。

「おっおっおっおっ」

ゆかりは大便を漏らし、性器を糞まみれにしながら、食い込んだロープで自慰し続ける。

「いぐぅぅぅっ」

だらしなく声をあげたゆかりの股間から小便が湯気をたてて溢れだす。ゆかりは大小便を漏らしながら樹木に寄り掛かり、虚ろな目をしていた。

3、ピンチの使い方

3、ピンチの使い方

ゆかりは自慰に耽っている時以外は、その自慰に使用する道具を自作したり、ネットで探しだすのが日常の作業になっていた。そうして製作した物に、ピンチに錘を取り付けた物があった。見た目通り挟んで引き伸ばす調教具であるが、ゆかりはこの調教具が気に入り大量に製作していた。ピンチのバネを強化し、紐に付けた錘を結び付けたシンプルなものであるが、そのシンプルさ故に汎用性に富み、最近のゆかりは自慰の際この調教具を使用する頻度が多くなっていた。

何時ものように学校から帰ったゆかりは、離れの部屋で太ももの付け根に食い込む黒いサイハイソックス以外全裸になり、錘付きピンチを取り出した。そして、まず左の乳首を挟みこむ。

「痛っ」

小さく声をあげたゆかりだったが、構わず右の乳首も挟んでいく。左右の乳首からピンチに挟まれ錘で引き伸ばされる痛みがじんじんと伝わってくる。普段の自慰の際は、この後鼻や耳、唇や舌などに大量にピンチをぶら下げて自慰に耽るのだが、今日のゆかりは違う事を実行しようと考えていた。

普段、胸は乳首以外挟まないのだが今日は乳房の部分もピンチで挟み痛め付けようと考えていた。しかし、ゆかりの胸はほとんど膨らみが無いため指で摘まんで挟まなければいけないので、ゆかりが思

った以上に時間がかかってしまった。乳首の周り一帯にピンチをぶら下げたゆかりは、じんじんと胸に広がる痛みに下腹部が熱くなってきていた。

・・足を開きなさい、ゆかり・・

ゆかりは自分に命令し、足を大きく開き腰を突き出した。そして、ピンチを手に取ると小陰唇を摘まみ挟んだ。

「痛いぃぃぃっ」

思わず声をあげてしまいゆかりは辺りを見回した。離れの部屋であるのと、ゆかりが勉強に集中したいからという要望で、しっかりと防音されている為、辺りはしんと静まりかえったまま何も変わらなかった。

・・こんなに痛いの・・

ゆかりは自慰の際、普通のピンチで小陰唇を挟んだ事はあったが、この強化した調教用ピンチを小陰唇に使用するのは初めてだった。しかし、その性器に受けた痛みに反応しゆかりの性器は大量に分泌液を溢れだした。

・・やっぱりゆかりは変態だ・・

ゆかりは自分を普通の女子学生とは思っていなかったが、改めて自分の異常性を認識した。

・・もっと気持ち良くさせてあげる・・

ゆかりは二本目のピンチを小陰唇に挟み込もうとしたが、手やピンチが滑ってしまい上手く挟む事が出来なかった。ゆかりはティッシュペーパーで性器をキレイに拭き、ようやく二本目のピンチを小陰唇に取り付ける事が出来た。しかし、三本目を取り付けようとした時にはもう濡れてしまっており、またティッシュペーパーで拭くしかなかった。

・・この変態ドブス女、我慢しなさい・・

ゆかりは自分を罵る。そして、いちいちティッシュペーパーで股間を拭きながら一本ずつピンチをぶら下げていった。片側四本ずつ、計八本もの錘をぶら下げたゆかりは、今までと異なる錘付きピンチを手に取った。今までぶら下げてきた錘付きピンチの錘の重量は一つ二百五十グラムだが、手に取ったピンチは倍の重さ五百グラムあるものだった。これ一つで、缶飲料の細缶二本分になる。ゆかりは性器をティッシュペーパーでキレイに拭くと、勃起しているクリトリスを摘まみピンチで挟んだ。

「ひあぁぁぁぁぁっ」

身体の中心を電流が流れたような激痛に、ゆかりは再び悲鳴を上げる。

・・ひぃひぃひぃぃぃぃっ・・

錘を重くした分外れるのを防ぐ為、挟む部分もヤスリで削り鋭角状に加工し、バネも二本に増やし更に強化している為、ゆかりの小さな突起に激しく食い込み潰していた。

「おおおおっ」

声が出るのを必死に押さえながらゆかりは、性器の後端、会陰部にも二本の錘をぶら下げた。

「うぅぅぅっ」

ゆかりは、涙を拭き、ごく普通の顔に見えるよう努めた。

4、ピンチの使い方2

4、ピンチの使い方２

ゆかりは苦痛の声をあげないよう、急いでセーラー服を身に付け、プリーツのスカートを穿く。セーラー服は身体のラインを出さない為、胸に付けた錘も外から見ただけでは分からなかった。スカートも膝上まである為強風などでスカートが捲れない限り股間にぶら下がる錘に気付かれる心配はなかった。
ゆかりは股間に合計三キロもの錘を付けたままドアを開け外に出た。黄昏時で薄暗くなってきていたが、まだセーラー服で歩いていても違和感はない時間であった。

・・行くよ、ゆかり・・

道路を歩き出したゆかりだったが、歩く度に錘が揺れ性器や胸にずきずきとした痛みがはしる。特にクリトリスにはしる痛みにゆかりはしゃがみこみそうになるのを必死にこらえて歩いていた。

・・ゆかりのマンコ、泣いてる、喜んでるの・・

ゆかりは涙が滲んでくるのを気付かれないようにそっと拭き、端から見たら散歩をしているかのように普通に歩く事を心掛けた。それでも、性器と胸を襲う痛みはどんどん増していきゆかりは立ち止まりながらよろよろと歩を進めていた。ゆかりの考えでは公園を一周して戻るつもりであったが、最悪の場合、公園の林に逃げ込みそこ

で錘を取り外す事も考えていた。

・・うぅ痛いよぅ・・

ゆかりは心の中で叫びながら、表面上は平静を装い歩いていた。

・・ゆかりのマンコどうなってるの・・

おそらく、クリトリスも小陰唇も伸びきり千切れるばかりになっている事は容易に想像出来た。そんな性器の状態を想像する事で、ゆかりは痛みとは別に、下腹部が熱くなり今までにないくらい性器が濡れているのを感じていた。

・・ゆかりは変態でドブスの女子です・・

ゆかりが、ようやく公園を三分の二程回った頃には、もう日も暮れかけていた。ゆかりは急がなければと思いながら、激痛の為歩を速める事は出来なかった。しかし、人影が少なくなってきた事もあり多少ぎこちない歩き方をしても大丈夫だろうと考えたゆかりは下腹部に手を当てハッとした。

ゆかりは自身も気が付かないうちに、小便を漏らしていた。確認するとサイハイソックスの内側がぐっしょりと濡れている。

・・ゆかり、お漏らししてたんだ・・

ゆかりは小便を漏らしながら性器に錘をぶら下げて歩いている自分の姿を想像し激しく性器を濡らしていた。

・・どうしようもない変態だ、ゆかり・・

ようやく離れの自室に帰り着いたゆかりは、セーラー服とスカートを脱ぎ、小便で汚れてしまったサイハイソックスも脱ぎ捨て全裸になった。そして、胸から錘を外していく。ピンチを外したあとは、内出血し赤黒く変色していた。次に性器に付けた錘を外す。ゆっくりとピンチを外していくと、クリトリスも小陰唇も同じように赤黒く変色し、伸びたままの状態になっていた。

5、少女時代

5、少女時代

ゆかりは幼い頃の事が頭に浮かんできた。小学校低学年の時、何気なく跨がった鉄棒で股間を圧迫された時、初めての快感が下腹部を突き抜けた。それから、ゆかりは股間を圧迫すると気持ち良くなる事を覚えたが、幼いながら隠さなければいけない事との認識があり人目を忍んでいろんな物に股間を押し付け遊んでいた。机の角やベッドの柵等様々なものがゆかりの遊び道具だった。

小学校も高学年になり、それは自慰という行為だと分かってから、ゆかりの自慰は段々とエスカレートしていった。性器上端のクリトリスを刺激すると　果てしない快感を得られると学習したゆかりは、それまでの股間を圧迫する自慰行為に加えてクリトリスを直接痛め付ける方法も考えていった。

六年生になった時、庭に建ててくれた離れの子供部屋に空いている時間は引きこもり、ゆかりは毎日自慰行為に耽っていた。ゆかりはこの至福の時間が邪魔されないように勉強も成績が落ちないよう気を使い、優等生を演じ続けてきていた。

ゆかりは学校から戻ると部屋に鍵をかけ、スクール水着に着替える。ゆかりは低学年の時から身体を締め付けるスクール水着がお気に入りだった。もちろん自分のサイズよりワンサイズ小さい水着を選んでいた。そして、スクール水着に着替えた後、物入れから部品を取

り出し組み立てる。この幼い時からゆかりは自慰行為に関する事に対しては労を惜しまなかった。

部品を組み立てると、それは小型のギロチンの様なもので、片側の柱は無くコ字型の上部に刃の換わりに重量のある木製の板がぶら下がっている。ゆかりはその器具を壁につけ自分も仰向けになってから腰を壁につけ丁度逆さに吊られた様に身体を動かした。そして、足を　開き股間の中心に板が落ちてくるよう調節する。本当は実際に逆さ吊りになりたかったのだが、まだこの頃のゆかりにはそこまでの力はなかった。

準備を整える頃にはゆかりは既に息を荒くし大きく開いた股間の中心に染みを作ってしまっていた。これから自分の性器に加えられる激しい痛みを想像するとゆかりはそれだけでスクール水着の股間全体を濡らすほど興奮していた。

・・覚悟しなさい、ゆかり・・

ゆかりは自分に告げる。そして、木製の板に付いているロープのストッパーを外す。次の瞬間、板は勢いよく落下しゆかりの性器を直撃する。

「おぉぉぉっ」

思わず声をあげてしまいゆかりはけ慌てて口を押さえた。そして、急いで近くにあった先程脱いだ下着を口に入れる。口の中に自分の小便の味と臭いが拡がり、ゆかりはさらに興奮する。

・・もっと痛め付けないと・・

ゆかりはロープを引き木製の板を再び上端まで持ち上げ、手を離す。板はまた勢いよく落下しゆかりの性器を叩き潰す。

「うごっごぅっ」

口を塞いでも多少声は漏れてしまう。ゆかりは再び手を伸ばし用意しておいたガムテープをとり口に何重にも張り付けた。そして、目にもガムテープを張り付け視界も塞ぐ。ゆかりは満足したようにロープを引き落とす。

落とす、落とす、落とす、落とす。

ゆかりは連続して自分の性器を叩き潰す。知らないうちにゆかりは小便を漏らしていた。股間中心から小便が溢れだしスクール水着を漏らしていく。それでも構わず性器を叩き潰していく為、小便の飛沫が辺りに飛び散った。

ゆかりはこの自作の自慰用器具が気に入り、毎日この器具を使い自慰に耽っていた。

6、少女時代2

6、少女時代２

中学生になったゆかりが考えた自慰器具が扇風機を利用した鞭だった。カバーを外し羽の代わりに鞭を固定しスイッチを入れれば自動で鞭を打ってくれる器具に変身させた。ただ、そのままでは回転が速すぎて鞭が外れてしまうので、電圧を下げるコントローラーを取り付けることで対処した。

扇風機の前で足を開き股間が上を向くような姿勢をとりスイッチを入れれば、好きなだけ満足するまで性器を鞭で打ってくれる。扇風機の高さを調整すれば鞭打つ位置も調整出来、ゆかりは鞭の先端でクリトリスを打つのが好みだった。

無制限に性器を痛め付けてくれるので、この性具もゆかりのお気に入りであったが、足を開いて腰を上げる姿勢が長時間維持することが出来ず、それが以前考案したギロチン台との使用頻度の差につながった。

それでも、ゆかりの自慰に対する執着は凄まじいものがあり、もっと小型の扇風機を台に乗せて使用すれば立って足を開いた状態で性器を鞭で打てるのではと気が付いた。

早速、ホームセンターで小型扇風機を手に入れたゆかりはその日の内に準備しスクール水着に着替えた。そして、足を大きく開き閉じられないように買ってきたパイプにガムテープで足首を固定し、さらに腰が引けないように後の柱に荷物を固定するバックル付のナイロンベルトで自分の身体をぐるぐると固定する。最後に口と目をガ

ムテープで塞ぎ、両腕を柱の後にまわすとガムテープで両腕を自縛する。
当然、この時にはもうゆかりの股間に染みが拡がり固く勃起した乳首がスクール水着越しにその存在を主張していた。

・・さぁゆかり、苦しみなさい・・

ゆかりは自分に告げ、手にした扇風機のリモコンのスイッチを入れ、止めることが出来ないように放り投げた。

「おっおっおっおっ」

鞭が連続で激しくゆかりの性器に叩き込まれる。セットしたタイマーが切れるまでゆかりは性器を鞭で打たれ続けるほかなかった。

・・うぅ痛いよぅ・・

ものの五分もしないうちにゆかりの身体は汗まみれになり低い嗚咽が漏れだした。容赦なく性器に打ち込まれる鞭の激痛にゆかりは号泣しているのだが、目も口も塞がれている為嗚咽にしかならなかった。

「おぉぉ、おぉぉぉっ」

ゆかりは泣きながら性器を鞭で打たれる。目を塞いでいる為、時間経過も分からず、何時この苦痛が終わるのかまるで予想出来ない。
ゆかりは果てがない恐怖に囚われながら、性器を鞭で打たれ続けていた。

・・もう、許してぇ・・

ゆかりは、目と口を塞ぐ行為にも興奮していた。何も見えなく何も喋れない。その状態が自分が性器を痛めつけられる物のように思えゾクゾクした。
この頃からゆかりは遠くない未来に、自分で自分を処刑する日がくると漠然と考えていた。

「ひゃぁーーーっ」

そんな事を妄想しながら性器を鞭で打たれているうち、ゆかりは失禁していた。いつものようにスクール水着の股間から、ショーッと音を出し湯気を立てて小便が溢れだす。

・・マンコ痛くて、気持ちいいぃーーっ・・

ゆかりは自分がどうしようもない変態だと誇りに思いながら、絶頂に上り詰めていった。

7、少女時代3

7、少女時代３

毎日、このような性具を使い自慰に耽っていたゆかりは、もっと性器を痛め付ける為に、何も身に付けず直接痛め付けたらどうだろうと考えた。ゆかりがスクール水着を身に付けるのは、その拘束感が気に入っているのと自分の裸体が嫌いだからだった。

細い腕にほとんど膨らみのない胸、くびれのない寸胴の幼児体形、華奢な上半身に反比例して出尻と言われる突き出た尻に太い足。ゆかりは他のスタイルの良い女子に比べ激しい劣等感を抱いていた。

それを多少でも誤魔化す事が出来るのが普段着ている制服であり、自慰の時もスクール水着を着用するもう一つの理由は自分の裸体を見たくないからであった。しかし、自分の裸体への嫌悪より、この時のゆかりは性器を痛め付ける事を優先した。

直接、性器を鞭で打つ。直接、性器をギロチンで潰す。教室内で妄想していたゆかりは、この思いつきに興奮し下着を激しく濡らしていた。

学校から自宅に戻ったゆかりは、離れの部屋に入ると鍵をかけ服を脱いでいく。そして、姿見にその姿を映してみた。

・・無様な身体・・

鏡に映った自分の姿にゆかりは殺意さえ覚えた。

・・性器を痛め付けるんだから、他のところは何か身に付けた方がいいかも・・

そう考えたゆかりは脱いだばかりの白いスポーツブラを身に付け、太ももの付け根近くまである黒いサイハイソックスを穿いてみた。その姿を姿見に映すと全裸の時よりもはるかに引き立ったように感じた。そのまま自慰を始めようとしたゆかりだったが、ふと思い止まり、どうせならもっと性器を痛め付けられるようにしようと考えた。

そして、前にネットで見た性器開口具を参考に自作した器具を使用することにした。

ゆかりは両方の太ももにベルトを巻くとそこに付けてある小型のピンチで自分の小陰唇を挟んでいった。

・・痛い、痛い・・

ピンチはバネを増やし挟む力を強化しているので、これだけでも性器拷問といえた。涙目になりながらも片側三本のピンチで小陰唇を開いたまま固定したゆかりは、そのまま足を開いてみた。足を開くにつれ小陰唇がさらに引っ張られていく。

・・無様な格好・・

姿見に映る性器の中身まで晒した自分の姿にゆかりは興奮していた。ゆかりは急いで自分の身体を何時ものように拘束し、目と口も塞いだ。

・・どれだけ痛いんだろう・・

今までと違い直接性器を鞭打たれるうえ、開口具で性器の中身まで晒している。軟らかな膣前庭窟を直に鞭で打たれる事を考えると、ゆかりは震えてきた。

・・どうなるんだろう、私の性器・・

・・血塗れになって、もう使えなくなるのかな・・

妄想が膨らみゆかりは太ももの内側が光るほど濡らしていた。

・・性器処刑を執行します・・

ゆかりは自分に告げると、スイッチを入れた。

「おぉぉぉぉっー」

直に性器を鞭打たれる激痛はゆかりの想像を超えるものだった。それが連続で容赦なくゆかりの性器を打ち据える。

「おごぉぉぉっっ」

ゆかりは小便を漏らし始めていた。尿道から溢れる小便が鞭の打撃で空中に舞い上がる。そして、その中に赤い液体が混ざり始めた。激しい鞭の打撃でゆかりの膣前庭窟が裂け血が混じり始めたのだった。

・・痛いよぅ誰か助けてぇ・・

中学生のゆかりが性器を鞭で打たれ号泣していた。もし口を塞いでいなかったら辺りに響き渡る絶叫を発していたに違いなかった。

・・もう、ゆかりのマンコ壊れちゃう・・

膣口からクリトリスにかけて鞭が叩き込められるように位置を調整してある為、正確にゆかりの性器に容赦なく鞭が叩き込まれる。

「おごぉぉぉっっ」

性器に鞭を受けながらゆかりは、ぶっと大きく放屁した。そして、ゆかりの肛門から大便がぼとぼととこぼれ落ちた。悪臭が周りに漂う。

・・マンコ、死ぬぅぅぅ・・

どんなにゆかりが泣きわめこうが、鞭は容赦なくゆかりの性器に叩き込まれる。ゆかりに、この激痛から逃れる術はなかった。

・・あぁぁぁ、マンコ殺してぇぇっっ・・

心の中で絶叫したゆかりは身体を硬直させ意識を失った。それでも弛んだままの肛門はぼとぼとと大便を垂れ流していた。

8、小説・性奴隷ゆかり

8、小説・性奴隷ゆかり

ゆかりは、自慰以外の時間を自分が登場し自分の願望の詰まった小説を書く時間に当てていた。すでに何篇かの短編を書いており、それを読み返しては興奮していた。

「性奴隷ゆかり」

性奴隷のゆかりを購入してからしばらくたつが、非常に良い買い物だったと男は満足した。十三年物で外見も男の好みであった。黒髪を三つ編みお下げにし太い眉に眼鏡をかけた地味な顔。ほぼ膨らみのない胸に桃色の乳首、そして、寸胴の幼児体型につるつるの恥丘、適度に肉の付いた太もも。あまりに男の好みなので、毎日処刑したい欲望を抑えるのに苦労している。

今日も男は、ゆかりのスカートの中に頭を突っ込み、ゆかりの股間の匂いを嗅いでいた。ゆかりは足を大きく開き、男が股間の匂いを嗅ぎやすいようにしている。

今日のゆかりのコスチュームは上半身はジュニア用のスポーツブラのみ、下半身は白のスコートの下には女児用の股上の深い綿のパンティを穿かせている。そして、太ももの付け根まである黒に白いラインが三本入ったサイハイソックスを穿き、足には女子学生用の黒いローファーを履かせている。男にとって全裸よりも、遥かに刺激的な格好だ。そんなゆかりのスカートの中、男はゆかりの性器から発する匂いに興奮していた。

・・いい匂いだ・・

ゆかりの匂いは男好みの匂いだった。男はゆかりの太ももを抱きかかえるようにして股間に鼻をつけ、その匂いを味わっていた。そして、匂いを満喫した後、ゆかりの綿の白いパンティのクロッチ部を捲る。クロッチの下から桜色の性器が現れ、匂いが一層強くなる。男は我慢しきれず舌でゆかりの性器を舐めた。ゆかりの味も男好みだ。男はさらに、ゆかりの性器を開き舌で舐め回した。尿道の辺りは小便の味がして、男はさらに興奮した。その後、膣口から舌を突き入れ、ゆかりの性器を存分に味わい一旦スカートから頭を出し、ゆかりに男が性器に口を付けたら小便を漏らすよう命令した。

そして、再びスカートの中に頭を突っ込みクロッチを捲り、ゆかりの性器に口を付ける。ゆかりは男の命令通りチョロチョロと小便を漏らし始めた。男はゆかりの小便を味わいながらゆっくりと飲んだ。そして、ゆかりの膀胱に溜まっていた小便をすべて飲み干す。

・・いい味だ・・

男の興奮はもう抑えきれなくなっていたので、ゆかりを跪かせると口を開くよう命令する。そして、ゆかりの頭を両手で押さえると、ゆかりの喉奥まで自分の性器を突き刺した。苦しさで涙を流すゆかりの顔に、さらに興奮した男は、そのままゆかりの頭を押さえつけ腰を激しく振る。

「げひっげひっ・・」

ゆかりの口からおかしな声と涎と唾液が溢れ出る。

・・溜まらんなっ・・

男は口元に笑みを浮かべながら腰を振る。あまりの苦しさにゆかりは逃れようとするが、正座させられ両腕は後ろ手に縛られ頭を押さえつけられている為逃げることは出来ない。男は容赦なく腰を振り、ゆかりの喉奥に射精した。

ゆかりの口から性器を抜いた男は、ゆかりの涙と鼻水と涎で汚れた無様な泣き顔を見て再び興奮してきた。泣いているゆかりの髪の毛を左手で鷲掴みにすると右手でゆかりの頬を激しく打つ。パーンという頬打つ音と、ヒーというゆかりの悲鳴が響き渡る。男は続けて二発三発とゆかりの頬を平手打ちしたが、ゆかりの無様な姿を見てさらに興奮し、拳でゆかりの顔面を殴りつけた。ゆかりは、ぎゃふぅという無様な声を出して後ろに転がる。そして、起き上がろうとするが両手を縛られている為もがくだけで起き上がれない。仰向けに転がったままもがくゆかりを男はうつ伏せにすると、尻を上げるよう命令する。そして、膝を曲げ尻を上げ突き出したゆかりのスカートを捲くるとパンティを下ろした。ゆかりの性器と肛門が、男の前に晒される。

・・いい眺めだ・・

男は笑みを浮かべながら、ゆかりの肛門に指を突っ込んだ。

「ふぎゃっ　」

ゆかりはまたおかしな声を出す。男は、そんなゆかりを笑いながら、いちじく浣腸を手に取ると、ゆかりの肛門に突き刺し浣腸する。すして、もう一個、また一個。男は続けてゆかりの肛門に浣腸する。結局、一ケース２４個ものいちじく浣腸を、ゆかりの肛門から注入していた。

そこまで書いてゆかりは、もっとひどい目にあわせないと考え書き直す。

結局、二ケース４８個ものいちじく浣腸を、ゆかりの肛門から注入していた。そして、それだけでは男の欲望は治まらず、男は自分の性器をゆかりの肛門に突き刺し、そのまま、ゆかりの中にジョーッと放尿した。ゆかりの下腹が破裂しそうな程膨れてくる。

「苦しいぃもう許して下さい」

馬鹿なゆかり、その程度で許される訳ないでしょう。ゆかりは小説の中の自分にさらにひどい仕打ちをする。

男はゆかりの肛門に、灯油ポンプを無理矢理突き入れバケツに入れた水をゆかりに注入していく。

「許して下さいぃぃもう死んじゃいますぅぅ」

許しを乞うゆかりの声を楽しみながら男は休む事無くポンプでゆかりの肛門から水を注入する。

「おばぁぁ」

ついにゆかりが口から水を吐き出した。そして、水と一緒に大便も口から出てくる。ゆかりは肛門から浣腸され、逆に口から大便を捻り出していた。

男は、泣きながら口から排便するゆかりを見て楽しそうに笑っていた。

口からうんちするゆかり最高、本当にこんな事されてみたいです。

ゆかりは我慢できず性器に手を当てると自慰を始めた。

9、ゆかり変態オナニー

9、ゆかり変態オナニー

「ゆかりのマンコを二度と使用出来ないように徹底的に容赦なく処刑して下さい。」

ゆかりは言いながら大きく足を開き両手を挙げた。

「これから、ゆかりが本当に頭のおかしい女子だということを証明します。」

ゆかりは前に設置した撮影用のビデオカメラに向かって言った。カメラには三つ編みお下げに眼鏡をかけた地味な顔のゆかりがノーズフックをつけ鼻の穴を晒している姿が映っている。さらにゆかりは肩付近まである黒いロンググローブと太ももの付け根近くに食い込む黒いサイハイソックスを身に付け、それ以外は素肌を晒していた。ほとんど膨らみのない胸の先でピンク色の乳首が固く勃起し、つるつるの恥丘の下にやはりピンク色の小陰唇がわずかに見えている。

「これから、この性具を使ってゆかり自身のおしっこで浣腸します。」

ゆかりはカメラの前に円錐形の長さ十五センチ、直径五センチ程もある巨大なアヌス栓を映す。アヌス栓は最大直径を過ぎた所で細くなり挿入後容易に肛門から抜けないようになっており後端からは二本の透明なチューブがぶら下がっていた。

「このアヌス栓は先端に穴が開いていてチューブにつながっています。途中のコックを開くと注入や排出できるようになっています。」

ゆかりはコックの部分をカメラに映す。

「アヌス栓を挿入した後、注入用のチューブをおしっこの穴から膀胱まで突き入れます。そして、もう1つの排出用のチューブをゆかりの子宮口から子宮の奥深くまで挿入します。」

ゆかりは興奮した口調で話す。

「そして、注入用コックを開いてゆかりの膀胱からおしっこで浣腸します。そして充分時間をおいてから排出用のコックを開いて子宮の中におしっこととうんちを注入します。」

ゆかりの息は荒くなり乳首は固く勃起していた。

「それでは、ゆかりのマンコ調教を開始します。」

ゆかりはアヌス栓にローションを塗り、さらに肛門にもローションを塗った。

「それでは挿入します。」

ゆかりは前屈みになるとアヌス栓の先端を肛門に当てた。そして、徐々に力を入れ押し込んでいく。

「あっ・い、痛い・・・」

アヌス栓の先端部はローションの助けもありすんなりと肛門に挿入されたが残り五センチ程がどうしても入らなかった。

「痛い、痛い。」

ゆかりはアヌス栓を回転させたりして何とか無理に挿入しようとするが、肛門が裂けそうな痛みに調教は思うように進まなかった。そこで意を決したゆかりは椅子を用意すると足を開いて股がりアヌス栓の底面を座面に当て徐々に腰を下ろしていった。

「あっうっ」

ゆかりはゆっくりと腰を上下に動かし少しずつ肛門を拡げていき、そしてついにアヌス栓を挿入する事に成功した。

「は、入りました。」

ゆかりは椅子を外しカメラの前に尻を突き出す。ゆかりの肛門からは二本のチューブが垂れ下がっていた。

「それでは次に排出用のチューブを子宮内に挿入します。さすがに見ながらでないと挿入出来ませんので膣鏡でゆかりのマンコを大きく開いてから子宮口に深く挿入します。」

ゆかりは興奮で息を荒くしながら膣鏡を手に取ると自分の性器に先端を当てた。そしてそのまま回転させるように挿入していく。

「おっおっ」

既に充分濡れていたゆかりの性器は膣鏡をすんなりと根元まで呑み

込んだ。ゆかりは慎重に膣鏡を操作し自分の膣を開いていく。そして最大まで開くとＬＥＤのライトを点灯し性器の前に置く。

「挿入作業の前にゆかりのマンコの中身をご覧下さい。」

ゆかりはＬＥＤライトで明るく照らされる性器の奥をカメラの前に晒す。赤黒い子宮の中心に小さな子宮口がはっきりと見えている。

「どぶすで変態のゆかりのマンコの中身をご覧下さい。」

ゆかりは荒い息で頬を紅潮させカメラの前で大きく足を開く。そして右手で肛門から垂れ下がっているチューブを手に取る。

「それでは子宮にチューブを挿入します。」

ゆかりは排出用の太いチューブを子宮口に当てると力を入れた。

「おっ、」

思わず声を出したゆかりだったが手は緩めず慎重にチューブを子宮に挿入していく。

「子宮とおしりの穴の連結が終わりました。」

ゆかりは膣鏡を性器から抜く。ゆかりの股間の割れ目に肛門から出たチューブが間違いなく挿入されていた。すでにゆかりは全身汗まみれになっている。

１０、ゆかり変態オナニー２

１０、ゆかり変態オナニー２

「次におしっこの穴にチューブを挿入します。」

ゆかりは続けてもう一本の細い方のチューブを手に取ると左手で性器を開き尿道口に先端を当てる。本来ならば滅菌用のローションを塗布しスムーズに挿入出来るように準備するのだが、ゆかりの場合性器調教が目的で尿道を痛め付けるためにそのまま挿入する決意だった。

「覚悟しなさい、ゆかり。」

ゆかりは自分に言う。そして尿道にチューブを挿入する作業を開始する。

「痛いっ」

肛門にアヌス栓を挿入した時とはまるで異なる激しい痛みにゆかりは涙を流していた。

「痛い痛い痛い。」

呪文のように繰り返しながらもゆかりは手を休めず少しずつ尿道にチューブを挿入していく。そして三センチ程挿入した時ゆかりは先端が膀胱に当たった感触を感じ取った。ゆかりは大きく息を吸い込

むと右手に力を入れ一気にチューブを突き入れた。

「あうぅぅっ」

思わず苦痛の声を上げたゆかりだったが、そのまま膀胱内にチューブを挿入していく。ゆかりの顔面は涙と鼻水で無様に汚れていた。ゆかりの肛門から出た二本のチューブはゆかりの割れ目の中に消えている。ゆかりは冷蔵庫からミネラルウォーターのペットボトルを取り出すと栓を開け一気に飲み始めた。そして、半分程飲んだところで一息つくと再び残りを飲み始める。ゆかりは一リットルものミネラルウォーターを全て飲み干した。

「ふぅっ」

膨れた腹部をさすりながらゆかりはグンゼの女児用白無地の下着を手に取る。そして、それを穿いてカメラの前に立ち足を開く。へそまで覆う股上の深い白い下着がゆかりの下腹部を強調する。

「それでは、おしっこがしたくなるまでオナニーをします。」

ゆかりは開いた足の中心に右手を当てる。そして、自分の性器を刺激し始める。

「おっおっ・・」

ゆかりは傍らのピンチを取ると勃起している右の乳首を挟んだ。

「おっあっ」

乳首の痛みにゆかりは思わず声をあげる。しかし、ゆかりはもう1

つピンチを取ると今度は左の乳首を挟んだ。そしてそれだけではあきたらず自分の唇もピンチで挟んでいく。上唇に四個、下唇に五個。さらに舌を出すと先端に二個、左右に二個ずつピンチを取り付ける。ゆかりの目には涙が滲んでいた。自分の顔を無様に飾り付けたゆかりは、さらに激しく性器を刺激する。

「おっおっ」

ピンチで口を閉じられなくなったゆかりはよだれを垂らしながら声をあげる。そして、残ったピンチで太ももの内側を挟み始めた。

「おあっーー」

片側に四個ずつピンチを付け激しく性器を刺激していたゆかりは天を仰ぐと一際大きな声をあげ放心したように硬直する。

「おっおっおっ」

しばらく放心状態だったゆかりはノロノロと穿いている下着を脱ぎ始めた。太ももを挟んでいたピンチが弾けるように床に落ち、ゆかりは小さく声をあげる。そして、ゆかりは下着の汚れ具合をカメラにアップで映した後、顔のピンチを外しその汚れた下着をクロッチ部が鼻や口に当たるようにして頭に被った。

「それでは、ゆかりのおしっこで浣腸します。」

ゆかりはカメラの前に立ち足を開くと尿道からのチューブに付いているコックを開く。透明な液体がアヌス栓の方へ流れていくのが確認された。

「あっ」

ゆかりは足を開いた姿勢のまま下腹部に両手を当てる。しばらくそのままの状態でいたゆかりは便意を覚えたのか再び身体が汗ばんできていた。

「それでは、いよいよゆかりの子宮にうんちを注入します。」

ゆかりはカメラに向かってそう言うと、躊躇することなくコックを開いた。どろどろとした固体がチューブの中を流れていく。

「あっあっ入ってくる。」

ゆかりは自分の子宮の中にどろどろと入ってくる大便の感覚に激しく興奮していた。

「ゆかりは今、本当に子宮の中にうんちを注入しています。」

ゆかりは子宮の中に流れ込んでくる大小便の感覚に、乳首とクリトリスを勃起させ、今にも絶頂に達しそうになっていた。
ゆかりは興奮で意識が朦朧となりながら、線香を1本取ると火を点けた。

「これもやってみたかった事なんです。変態ゆかりがいくところをご覧下さい。」

ゆかりは左手でクリトリスの皮を剥き、クリトリスを剥き出しにする。ビンビンに固く勃起しているクリトリスは触るだけでいってしまいそうになっている。

「あぁぁーーーん」

ゆかりは、これから自分が行う事を思い浮かべ中学生とは思えない声を出していた。そして、ゆかりは左手でクリトリスを摘まみ狙いをつけると、容赦なく線香の火をクリトリスの頂点に押し付けた。

「ほぎゃぁーーーっ」

じゅっという音を出し、クリトリスに押し付けられた線香の火が消えた瞬間、ゆかりは奇声を上げ失神していた。

１１、針付き下着

１１、針付き下着

「これから、ゆかりの性器処刑を執行します・・」

離れの部屋の中で太ももの付け根近くに食い込む白いサイハイソックス以外全裸になったゆかりは自分の気持ちを確かめる意味で呟いた。

・・ダメ・・・もっと大きな声で宣誓しなくちゃ・・

ゆかりは姿見に向かって、両手を高く上げ足を大きく開き背筋を伸ばし顔を上げると息を吸った。

「これから、ドブスゆかりの性器を徹底的に処刑します。ゆかりの泣き叫ぶ姿をお楽しみ下さい。」

ゆかりのほとんど膨らみのない胸で二つの乳首が固く勃起し、股間でもクリトリスが痛いほど固く勃起していた。ゆかりは自慰したい衝動を必死に抑え、純白の下着を手に取る。股上の深い女児用の綿の下着の股間部分には画鋲が埋め込まれていた。一センチ程の針先が縦に五本、クロッチ部の中心に並んでいる。今まで、性器を調教され泣き叫ぶ自分の姿を妄想しながら自慰を繰り返してきたゆかりだったが、妄想だけでは我慢が出来なくなっていた。そこでゆかりはネットで自分と同じ女性の自慰の情報や体験談を検索してみると赤裸々な告白が多数ヒットした。なかでもゆかりが興奮したのが、

自分の性器に針を刺し絶頂に達する女性の告白だった。彼女は膣前庭窟に数本の針を刺したり、勃起したクリトリスの頂点から三センチも針を突き刺した行為を告白していた。その度に彼女は失禁し失神していた。その容赦のない自虐行為にゆかりは興奮し励まされたのだった。そして、ゆかりがネットでの情報を参考に自分の性器を痛めつけるために作成したのがこの針付きの下着だった。ゆかりはその画鋲をしばらく見つめた後、ゆっくりと下着を穿きはじめた。

「あっ・・・・」

前端の針先がクリトリスの前部に、そして後端の針先が会陰部に、残り中央三本の針先がゆかりの縦割りの中、膣前庭窟にチクッとした刺激を与える。

・・ここに刺さるんだ・・

ゆかりの息が荒くなっていく。そして、ゆかりは自分の下腹部の中心が今まで経験したことのないほど熱くなっているのを感じた。

・・凄い濡れてる・・

ゆかりはゆっくりと足を開いていくと右手で股間部を軽く押してみた。

「あぁぁーーーーっ」

性器を襲った痛みに思わずゆかりは声を上げ、慌てて周囲を見回すと右手の力を抜く。

「あっあっあっあっ・・・・」

ゆかりは荒い息のまま一度画鋲付きの下着を脱ぐと性器を開き手鏡を使い状態を確認した。

・・まだ刺さってないよね・・

軽く押した程度の事だったので性器は損傷もなくごく普通の状態であったが、下腹部はさらに熱くなり太ももの内側を光らせる程いつもの自慰では考えられないくらい濡れていた。

・・もう我慢できないです・・

ゆかりは改めて下着を穿くと足を開いた。

「これから、ゆかりの性器に画鋲を刺します。」

ゆかりは下着の両端を握り締めると股間に食い込むよう一気に引き上げた。

「あっうっ・・」

チクッとした痛みがゆかりの股間を襲う。

・・本当に刺さっている・・

性器に突き刺さる針の感覚にゆかりは興奮した。しかし、それはゆかりの想像していたものよりはるかに軽い痛みであった。ネットでの体験談からゆかりは、無様に失禁し失神するほどの痛みを想像していたのである。

・・もっとマンコ痛めつけたい・・

そこでゆかりは先ほど脱いだ画鋲付きの下着とは別の下着を手にした。見た目は同じ純白で股上の深い綿の下着だったが、性器の当たるクロッチ部にはさらに太く長い針が十本も縦に並んでいた。そして、その十本の針の両側にも三本ずつ針先が突き出ている。十本の針が性器の中心に突き刺さり、股間部大陰唇に両側の針が突き刺さるように作成してあった。

・・これだったらもっと性器を痛めつけることが出来るよね・・

ゆかりは三センチ近くある凶悪な針を眺めながら、この針が自分の性器に突き刺さる様を想像した。

・・本当にこれで刺しちゃう?・・

夢中で作製したものの冷静になってから怖くてしまい込んでいたこの下着を、今ゆかりはウットリしたように見つめながら自分の性器を襲う激痛を想像した。そして、さらに残酷な考えがゆかりを興奮させる。

・・今から処刑執行する?・・

処刑・・。ゆかりが自慰する際いつも妄想している自分の性器を容赦なく徹底的に痛めつけ使い物にならなくする残虐行為だった。そして、最後には首を吊られ大小便を漏らしながら絶命する。ゆかりは、そんなことを妄想しながら激しく性器を濡らし興奮していた。

「渡邊ゆかり。これから性器処刑を執行します・・。」

ゆかりは声に出してみた。ゆかりはそれだけで絶頂に達しそうになり、慌てて平静を取り戻すよう努めた。そして、この針が埋め込まれた凶悪な下着を穿こうとしたゆかりだったが、ただ穿くだけではなく処刑なのだからもっと性器を痛めつけたいと考えた。

・・何時もの公園に行こう・・

ゆかりはコートだけ羽織り、針付きの下着をガムテープ等を入れてあるバックに入れるとドアから外の様子を伺い部屋を脱け出した。そして、野外で自慰するときに利用している公園の林の中に入ると手慣れた様子で準備を始めた。

１２、針付き下着、その後

１２、針付き下着、その後

いそいそと準備を進めるゆかりは、林の外で声が聞こえ身を隠す。夜には、林の外から林の中は見えないが、念の為である。ゆかりは自慰が終わった後に発見され自分の精神を疑われるのは構わなかった。それは自分が変態であるのは自覚しているから…。でも、自慰の前に発見され保護されてしまうのは避けたかった。自慰が、ゆかりの生きがいだから、自慰が出来なかったら生きている意味がなかった。それくらい、ゆかりが自慰にかける情熱は燃えていた。

・・早く、行ってよ・・

なかなか公園から出ていかない中年の男に、ゆかりはイライラしてきた。早く自分の性器を痛めつけたいという思いで公園まで出てきたというのに、とんだ邪魔者がいたものだ。そのうち男はベンチに横になり眠ってしまったように見えた。恐る恐る林から出て男に近付いてみると、酒に酔っているようでだらしなく公園のベンチに横になり寝息を立てている。でも、とゆかりは思う。この男の着ているスーツはゆかりが見ても高級そうな仕立てだ。こんな所で寝たらシワになってしまうだろうと心配になる。それに靴もストレートチップの高級そうな革靴を綺麗に磨いて履いている。短髪で眼鏡をかけた男の顔も、一流商社のビジネスマン風だ。最初、パッと見た時には中年の男と思ったが、近くで見ると意外に若いのかもしれないと、ゆかりは思い直した。

・・これだけ熟睡してれば大丈夫か・・

ゆかりは、また林の中に戻り自慰の準備を続ける。木の間にロープを張り、他の仕掛けも整えた。そして、全裸になったゆかりは針付きの下着を穿いてゆく。ゆかりの性器に針先が当たり、チクッとした痛みが襲う。ゆかりはそこで下着を穿くのを止めると、ロープに跨り足を大きく開くと鉄のパイプを置き足首とパイプをガムテープでぐるぐる巻き足が閉じられないようにする。そして、自分の口をガムテープで入念に塞いでいく。もう、この時点でゆかりは下着を濡らし始めていた。

・・あと少しだよ、ゆかり・・

ゆかりは自分に言葉をかけ、頭上からのロープを握ったまま両腕を背中にまわし器用に自縛した。これで頭上からのロープを放せば、今ゆかりの跨いでいるロープの反対側に付けた重りが落ち、ゆかりの股間にロープが容赦なく食い込む仕掛けだった。当然、下着に仕込んだ針もゆかりの性器に激しく突き刺さるという計画だ。

「ふっふっふっふっ」

ゆかりの息が荒くなっていく。しかし、ゆかりはなかなかロープを放せないでいた。もう逃げられない自分の性器を襲う痛みを想像し、ゆかりは決断出来ずにいた。あの凶悪な針が自分の性器に深く深く突き刺さる。

・・どれだけの痛みなんだろう?やっぱり失神しちゃうのかな・・

ゆかりは目を閉じて、いろいろ想像していたが覚悟を決め目を開けた時、目の前にベンチで寝ていた男が立っていた。

「ひぇぇっ」

ゆかりは声にならない悲鳴を上げる。男は咄嗟にゆかりの口を押えると自分の口の前に、しっというように人差し指を一本立てた。

「おっと、失礼。自分で口を塞いでいたんだね。感心、感心」

男はガムテープで厳重に塞がれたゆかりの口を見て、素晴らしいと頷きゆかりの口から手を離した。男の口調は子供に言い聞かせるような雰囲気で、脅したり怒鳴り付けたりするような威圧的な感じではなかった為、ゆかりは少し安心した。

「乱暴な事はしないから騒がないで僕の話を聞いてくれるかい？」

男は、こんな姿のゆかりを見て驚かないばかりか、話を聞いてくれと言う。ゆかりは思わず頷いていた。

「そうだ。その前にせっかくの君のオナニーを邪魔してしまったね。これだけ仕掛けを創るなんて素晴らしいよ」

男は、ゆかりの握っている頭上からのロープを強引に取り上げると、これを放せばいいんだねと、ゆかりの見ている前で放してしまう。

「ひっ」

ゆかりが身構える間もなく、反対側の重りが落ちゆかりの股間のロープがピンと張られ性器に勢いよく食い込む。そして、下着に埋め込まれた鋭い針がゆかりの性器に深く突き刺さり抉った。

・・ひぎぃぃぃぃーーーっ・・

ゆかりは、ゆかりの想像通り性器を襲った激痛で白目を剥いて失神してしまっていた。しかも、ゆかりは失禁したらしく小便がぽたぽたと滴り落ちている。そして、液状の大便も少し漏れていた。男は、そんなゆかりの姿を眺め、ロープが食い込んだだけで失神して大小便を漏らしてしまうのかと不思議に思ったが、ゆかりの股間を確認し下着に針が埋め込まれているのを確認すると、口元に笑みを浮かべた。

・・これは掘り出し物かも、しれんな・・

男は、ゆかりの口に貼られたガムテープを剥がし、大小便を漏らしながら木の幹に寄りかかり失神しているゆかりの体を何枚も撮影しながらじっくりと観察し、大声で笑いたいのを必死で堪えていた。

――――――――――

ゆかりが気を取り戻した時、男はまだ傍にいて、ゆかりの体を撮影していた。

「君は中学生かい？僕の好みの体型だったから、つい写真撮ってしまったけど、ネットで拡散させたりはしないから安心して下さい」

男は、まだ中学生のゆかりにも丁寧な言葉遣いで、ゆかりが気を失っている間にも、ゆかりの体にイタズラした気配はなかった。意外に信頼出来る人かもとゆかりは思い始めていた。

「撮った写真は僕が個人的に自慰する時に使うだけだから、他の人には見せないよ」

ゆかりは驚いた。こんな私の裸見て自慰するの?胸も小さく寸胴で自分の体型にコンプレックスを持っているゆかりには信じられない言葉だった。

「こんな私の裸で自慰出来るんですか?」

「ああ、君の体は僕にとっては最高の体型だ。しろと言うなら今この場で出来るよ」

ゆかりは、男から好きと告白されたようで嬉しくて顔が火照ってきた。

・・どうしよう、私、性器が熱くなってきてる。針が刺さっているからじゃないよね・・

ゆかりは、この出会いは運命ではと考え始めていたが、男の方はどう思っているのかズボンのファスナーを開けると、自分の勃起した性器をゆかりに見せる。

「ほら、これが証拠だよ。君の裸体を見ているとこんなになってしまった」

ゆかりは、ごくりと唾を飲み込んだ。本物の男性器を見るのは初めてだった。

「どうして私が気を失っている間に犯さなかったんですか?途中で私が気が付いても、口は塞いであるし腕も縛ってあるから何も抵抗できないのに」

「確かに抵抗出来ない君の性器や口、肛門を無理矢理犯すのは楽しいだろうね。でも、僕も変態だからね。君を犯すより痛めつけたいと思ってしまったんだよ。僕に犯されて泣き叫ぶ君の顔より、僕に性器を拷問されて絶望に顔を歪ませる君の方が見たいんだ」

男は不気味な笑顔で、ゆかりを見る。ゆかりは、やはりこの人も私と同じ変態だと心の底から感じた。すると、男は、ゆかりの見ている前で自分の勃起した性器をしごき始める。

「失礼。生の君の裸体を見ながら自慰したくなったので」

男はゆかりの体を見ながら性器を擦り、うっと声を出した。ゆかりは慌てて男の性器を咥えると、ゆかりの口の中に男の精液が溢れた。男は驚いていたが、ゆかりは男の性器をきれいに舐めてから顔を上げて言う。

「いいですよ。私のこと痛めつけて下さい」

男は、ゆかりの目を見て頷くと今日はもう時間が無いからメールアドレスを教えて下さいと、ゆかりのアドレスをメモし、それではと立ち去って行った。後に残されたゆかりは、これで一人ではどうしても出来ない事も出来ると考え興奮していた。

13、ネットの少女

１３、ネットの少女

学校から帰宅したゆかりは、離れの自室でセーラー服とスカートを脱ぎ、白いスポーツブラと同じく白い綿の女児用下着、太ももに食い込む黒いサイハイソックスだけの姿になると机の前の椅子に腰掛けた。そして、パソコンの電源を入れ起動させる。パスワードを入力し、ホーム画面が表示されるとゆかりは、メールをチェックする。公園で出会った男からのメールはなかった。すぐ連絡くれるものと思っていたゆかりは落胆した。

・・もう…。本当はゆかりなんて好みでも何でもなかったんじゃないの・・

あの時、男の精液を飲むだけでなく、もっと媚びを売っておけば良かったと後悔した。あの時の足を閉じられない状況で、針の刺さった性器を思い切り蹴ってもらえば良かった。そうすれば、私を痛めつけるのは楽しいと実感してもらえたのに…。こちらから連絡しようにも、アドレスも名前も住所も知らない。ゆかりは、大きく股を開いたまま逆さに吊られ無防備に晒す性器を鞭で思い切り打たれたかった。作成した鞭打ち機で性器を鞭で打つことは出来るが、開脚逆さ吊りにされ両腕も厳重に拘束され口も塞がれ許しを請うことも出来ない状態で性器を鞭で打たれ続ける。ゆかりが自慰の際よく妄想するシチュエーションだ。それが、ようやく実現出来ると思ったのにと、ゆかりは悲しくなったが、気を取り直して今までネットから収集したデータを確認していった。そこには、ゆかりと同様の性

に関する様々な情報が集められていた。

・・凄いな、この女の子・・

女性達の赤裸々な告白の中には、ゆかり以上の自虐行為を実行している女子も居り、初めて彼女達の告白を目にした時ゆかりは、頭のおかしいのは自分だけではないと感じて感慨に耽った記憶がある。

りえという名前で投稿されているものは、その文章の拙さからゆかりには小学生くらいに感じるが、内容は凄いものだった。

「マンコ火炙りの刑　りえ」

投稿文のそのタイトルを見た時ゆかりは興奮した。

・・マンコを火炙りにするの？・・

ゆかりは性器を火炙りにするという発想に興奮し、思わず右手を自分の性器にもっていくと既にじわりと濡れていた。ゆかりは息を荒げながらタイトルをクリックし本文に進む。

★　★

「マンコ火炙りの刑　りえ」

マンコを痛めつけるのが大好きなりえはマンコを火炙りにする事を思いついてやってみました。
鏡の前で服を脱いで裸になって台に立てた火をつけたロウソクに跨ります。あそこの毛が生えていれば、先にあそこの毛を燃やしたか

ったんだけど、りえはまだ毛が生えていないので毛が生えてきたら燃やしたいと思ってます。

跨った後、両手でビラビラを開いてマンコの中身を出して、鏡を見ながらかがんでマンコを火に近づけて痛めつけます。

初めのうちは熱くてびっくりしておしっこ漏らして火を消しちゃったりしたけど、何度も火炙りしているうちに慣れて随分近くでマンコを火炙り出来るようになりました。

そして、それを何度も繰り返してマンコを火炙りで痛めつけた後、最後に蝋燭にマンコを押し付けて火を消します。凄く熱くて痛かったけど気持ち良い。

もちろん、マンコ火炙りの様子はスマホで撮影して、泣きながらマンコを火で痛めつけているりえの無様な姿は記録してあります。

火炙りの刑の後、火傷したみたいでしばらくマンコが痛痒かったけどもっともっとマンコを痛めつけたい。

★
★

ゆかりはこの投稿を読んで早速蝋燭を購入していた。そして、さらに性器を痛めつけるプランを考えていた。

・・この女の子は多分まだ幼いから、これ以上思いつかないんだ・・

ゆかりは自分もまだ十三才の中学生だというのに、大人のつもりでこのりえという少女を見下していた。ゆかりは以前、性具を使った自虐行為で処女膜を貫通している。それからも徐々に大きな性具を使い性器を痛めつける事に余念がなかった。ゆかりは処女を大切にする事よりも自分の性器を痛めつける倒錯した快楽を選んだのだ。

もちろん、ゆかりはまったく後悔していなかった。性器を痛めつけ

る幅が広がった事で寧ろ興奮していた。ゆかりはりえの性器を火で痛めつけるという発想にヒントを得て、さらに性器を痛めつける行為を思いついた。

・・子どもには思いつかないよね・・

ゆかりはネットでしか知らないりえに対して優越感に浸っていた。ゆかりが考えたのは、膣鏡を膣に挿入して大きく開いた後、火の付いた蝋燭をそのまま膣内に挿入し膣壁や子宮口を蝋燭の火で焼き痛めつけるというものだった。ゆかりはその自分の考えに激しく興奮し何度も何度も自慰を繰り返した後、妄想を実行に移す為、ホームセンターで必要なものを買い揃え入念な準備をしていった。更にりえのように自分の無様な姿を撮影し記録に残す為、親に買ってもらったスマートフォンとは別に、格安のスマートフォンと三脚も購入し着々と準備は整っていった。

１４、子宮火炙り

１４、子宮火炙り

ゆかりは学校から急いで帰宅すると離れの自室に一直線に向かい鍵をかけた。セーラー服を脱いで下着姿になると我慢できずに自慰を始める。しばらく下着の上から性器を擦っていたゆかりだったが、すぐに股間に染みができ声が出始める。

「おっおっおっ」

ゆかりは下着を脱ぐと、汚れたクロッチ部が鼻と口に当たるように下着を被る。そして、直径５センチのアナルデルドゥを手に取るとローションを塗り肛門に先端を当てた。

・・さあ、調教を開始するよ、ゆかり・・

ゆかりは、ずぶずぶと肛門にアナルデルドゥを押し込んでいく。毎日、肛門の調教を続けていたゆかりの肛門は難なく５センチのアナルデルドゥを受け入れ根元まで押し込むと、次に１センチの尿道プジーを尿道に当てる。

「ふぅっふぅっふぅっ」

ゆかりの息が荒くなり膣口から白濁した液が溢れてくる。ゆかりは尿道にもプジーを突き刺したまま今度は膣口に直径１０センチもある巨大なデルドゥの先端を当てると押し込んでいく。

「おっおっおっおっ」

小さな声を上げながら根本まで押し込んだゆかりは、三つの穴に性具を挿入したまま白い下着を穿き、二つの乳首にも重り付きのピンチを挟みぶら下げる。そして、普通にピンクのトレーナーを着て、チェックのスカートを穿くと母屋に向かい食卓に着いた。そして、両親と一緒に食事を済ませるとテレビも視ずに自分の部屋に戻って来た。ゆかりにとって家族の団欒より、自分の自慰の方が遥かに優先順位が高かったのである。食事を済ませてしまえば、もう母屋に行く事はないし、おやがここに来る事もない。ゆかりはゆっくりと自慰に耽る事が出来るのである。

ゆかりは、急いで全裸になり、さっそく準備に取りかかる。台の上に蝋燭を立て、スマートフォンをセットし、自分の膣に膣鏡を挿入し最大に拡げる。鏡で確認すると赤黒い子宮がテカテカと光っている。ゆかりは満足し、膣鏡が抜けない様にベルトで固定する。この時点でゆかりはもう息を荒くし性器を濡らし始めていた。そして、蝋燭に火を点けると両手を背中に回し器用に自縛すると、火の点いた蝋燭を股がり握っているスマートフォンのリモコンのスイッチを入れ録画を開始する。

・・さあ、覚悟しなさい、ゆかり・・

ゆかりは、ゆっくりと腰を落としていく。前に置いた姿見で蝋燭の火が自分の性器に近付いてくるのがわかる。そして、火が膣鏡の中に消えた。

「ひぎぃぃぃぃーーーっ」

ゆかりは、あまりの熱さに絶叫していた。そして、慌てて両手の自縛を解くと口に穿いていた下着を詰め込む。いくら防音の部屋でも激しく絶叫すれば聞こえてしまうかもしれない。ゆかりは更に念を入れて、もう一枚下着を押し込みガムテープを何重にも貼り付け厳重に自分の口を塞ぐと、再び両手を自縛し蝋燭に跨がった。

・・さあ、存分に泣き叫びなさい、ゆかり・・

ゆかりは、また腰を落としていき膣の中に蝋燭の火を入れていく。どれだけ入れれば子宮が焼けるのか、事前に計測しておいたゆかりは前の姿見を見て蝋燭につけたラインを確認しながら腰を落としていく。

・・ひぎぃぃぃーーーっ熱いぃぃぃーーーっ・・

ゆかりは天を仰ぎ涙と鼻水で汚れた顔で、小便を漏らし始めた。しかし、蝋燭の火は膣内なので消えることはなかった。

・・ゆっくり、１０数えろ、ゆかり・・

ゆかりは自分に命令する。

・・１、２、３、…・・

泣きながら数を数え始めるゆかりの肛門からブリブリと大便も漏れ始めていた。がに股で大きく足を開きぶるぶると太ももを震わせながら大小便を漏らすゆかりの姿は鮮明にスマートフォンに録画されている。

・・……、１０・・

ようやく数え終わったゆかりは、力尽きたように腰を落とし、子宮が蝋燭に触れジュッと火が消えた。

・・あぎゃぁぁーーっ・・

ゆかりは床に転がり、自分が漏らした大便に顔を突っ込んだ。そして、鼻の穴に大便が詰まってしまい呼吸ができなくなる。両手を自縛しているゆかりは、大便の中に顔を埋めたまま起き上がれずにもがき苦しんでいた。

・・私、死んじゃうの・・

ゆかりは、こんな無様な死に方するなんて嬉しいと興奮しながら気を失っていった。

気が付いた時、ゆかりは大小便まみれで仰向けで寝ていた。体の奥がズキズキと痛み、ゆかりはそれから暫くは学校を休む事になった。そして、撮影した動画はゆかりにとって宝物と呼べる物になった。

１５、奴隷認定書

１５、奴隷認定書

学校から帰宅したゆかりはセーラー服を脱ぐと、机の前に座りパソコンの電源を入れ、メールチェックすると八通のメールが届いていた。タイトルに目を通していくとアダルトサイトの勧誘メールやダイエット食品等の広告メールばかりである。

・・まったく何処でアドレス調べるんだろう?毎日毎日嫌になるなぁ・・

ゆかりは憤慨し中身も見ずに削除していったが一通のメールに目が止まった。

・・奴隷認定書?何だろう、これ・・

思わずゆかりは、差出人不明のメールを開いていた。

「あなたは私の奴隷として認定されました。

一、奴隷は命令に絶対服従

一、報告は迅速・詳細に行う

今回の命令は添付書類参照のこと」

・・なに、これ・・

ゆかりは心中毒付きながらも、これは先日出会った男からのメールかもしれないと思い、添付書類を開いてみた。

「命令書

奴隷は洗濯鋏を三つとストロー、グラス、漏斗を用意する。

奴隷は全裸になり乳首と陰核を洗濯鋏で挟む。（なお乳首・陰核は予め勃起させておくこと。）

奴隷は尿道にストローを挿入し膀胱まで突き通し、でてきた小便をグラスに注ぐ。

奴隷は漏斗を肛門に挿入し、グラスの小便を注入する。

奴隷は全裸で黒いニーソックスだけ身に付け、そのままコートを羽織り先日出会った公園まで行き、コートを脱ぎ立ったまま排便しながら自慰する。」

ゆかりは自分の顔が真赤になっているのを感じた。十三歳、まだ子供といえる中学生のゆかりは、こんな形で男から命令されるのは初めてだった。

・・クリトリスを洗濯鋏で挟んで、おしっこの穴にストロー入れるの・・

そんな事は経験済みのゆかりだったが、男に命令されて行う事に興奮していた。ゆかりの息はどんどん荒くなり、知らず知らずに指示

された物を用意しドアに鍵を掛けていた。そして、服を脱ぎ始める。興奮のためゆかりの乳首と陰核はすでに固く勃起していた。

「あっ痛いっ・・」

自分の小さな胸の乳首を洗濯鋏で挟んだゆかりは想像以上の激痛に思わず声を漏らす。なぜかいつもよりも痛い気がした。しかし、自分の身体の股間の中心がいつもの自慰では感じられないくらい熱くなっているのに気が付いた。

・・どうしてぇ？・・ゆかり、恥ずかしい液、でてきてるの。命令されるの嬉しいの？・・

ゆかりは自分の性器が自慰以上に濡れはじめているのを感じていた。ゆかりは左手で自分の幼い性器を拡げ、勃起した陰核に洗濯鋏を近づけていく。そして、容赦なく陰核を挟んだ。

「痛いぃーっ」

乳首を挟んだ時以上の痛みにゆかりは思わず声を上げ慌てて口を押さえた。やはり、いつもより痛く感じる。

・・聞かれていないよね・・

ゆかりはドアに鍵が掛かっている事を確かめると、さっきまで穿いていた白いパンティーを手に取った。そして、それを裏返し自分の股間に当たっていたクロッチ部分を見つめる。一日ゆかりの性器に触れていた白い綿のクロッチ部は黄色い染みが縦に付き、小便のツンとした匂いが鼻につく。ゆかりはその汚れた部分を自分の口に押し込み、さらに残りの部分も口に押し込むと姿見の前に立った。

・・ゆかり、奴隷になるのが嬉しいんだ・・

乳首と陰核を洗濯鋏で挟み、口に下着を押し込んだ自分の姿にゆかりは押さえられない興奮を感じていた。

・・ゆかり、奴隷だから命令には逆らえない・・

姿見の前に座り込みストローを手に取るとゆかりは足を大きく開き自分の性器を覗き込んだ。そして、尿道にストローの先端を当て徐々に力を入れていく。

・・痛いぃぃっ・・

ゆかりは涙を流しながらも尿道にストローを押し込んでいく。太いストローの為、いつものチューブよりも径が大きい。

・・こんなことして、大丈夫なの・・

尿道の焼け付くような痛みにゆかりは恐怖を覚えるが、それよりも、男に命令されて行う自虐行為の興奮にゆかりの性器は愛液を溢れさせていた。

・・痛いよぅ。痛いのにいつもより気持ちいいですぅ・・

ストローを押し込む手に膀胱の手応えを感じたゆかりは、力を入れ一気に尿道にストローを押し込んだ。

「うがっ・・」

激痛にゆかりは一瞬手を止めたが、さらに深くストローを突き刺していく。そして、ゆかりの尿道から膀胱に達したストローは、そこに貯まる小便をゆかりの意志とは関係なく体外に排出しだした。

・・ゆかり、無理矢理おしっこ出されてる。どうしよう、どうしてこんなに気持ちいいの・・

ゆかりは股間に突き出たストローから湯気を立て流れ出す小便をグラスに受けながら、姿見に映る自分のこの惨めな姿にかつて経験したことのない興奮を感じていた。

・・恥ずかしい液、いっぱい出てる。命令に逆らえない奴隷って気持ちいいよ・・

ゆかりは自慰したい衝動を必死に押さえ、次の命令を実行にうつす為、漏斗を手に取った。

１６、奴隷認定書２

１６、奴隷認定書２

ゆかりは、漏斗を逆さまに置くと、先端に肛門を当てゆっくりと腰を沈めていく。

「あっ」

漏斗の先端が肛門に入るまでかなり抵抗があったが、そこを過ぎると一気ににゅるりと身体の中に入ってきた。ゆかりはそのまま壁に腰を当て肛門が上を向く姿勢をとると、肛門に挿入した漏斗にグラスの小便を注いでいく。

「あ・あ・あ・あ・・・」

直腸内に入ってくる自分の小便の生暖かい感触にゆかりは失神しそうなほど興奮していた。

・・お腹があついですぅ・・

ゆかりはグラスの小便を全て注ぐと漏斗を抜き、急いで太ももの付け根近くまである黒いサイハイソックスを身に付けた。

・・急がないと漏れちゃいます・・

ゆかりは裸のままコートを着ると急いで外に出、自転車に跨った。

前に男と会った公園は自転車で三分程度の距離にあった。ゆかりは下腹部を刺激しないようサドルに腰を下ろさず立ったまま自転車をこいでいった。

・・着いた・・

ゆかりは公園の入り口で自転車を降りると、さらに何時もの林の中に入り辺りを見回した。と、奥の方の木に何やら白いものが見えた。ゆかりは下腹部を押さえながらその木に近付くと、木の幹にゆかりと書かれた白い紙が貼り付けてあった。

・・ここ?・・

ゆかりは再び辺りを見回す。周囲に人の気配は感じられなかった。

・・ご主人様は?・・

ゆかりはメールの差出人を見つけようとしたが、もう我慢の限界にきていた。コートを脱いだゆかりは、それをたたみ離れた場所に置くと自分の名前の貼られた木の前に立った。そして、足を開いた瞬間・・。ゆかりの意志とは無関係に肛門から汚物が噴出した。

「あぁぁぁーーー」

止めることも出来ず、ぶっぶっと放屁を伴って噴水のように排出される汚物がゆかりの足下を濡らしていく。深夜の閑静な公園にゆかりの排泄音が響き渡る。

・・誰かきちゃったらどうしよう・・

ゆかりは顔を真っ赤に染めながらも、もし見つかったらそれはそれで嬉しいと考えながら、足を大きく開き両手を股間に当てた。

・・ゆかり、命令通りオナニーします・・

深夜の公園で裸で排便しながら自慰をする、ゆかりにとっては何でもないが、男に命令されて行っているという異常な行為にゆかりは我を忘れていた。

「あぁぁーーっご主人様ぁー・・ブスでスタイルも悪いゆかりのマンコを処刑して下さいぃぃーーーーっ・・」

普段、真面目で大人しいゆかりが絶対に口にしないであろう言葉を口にしながら絶頂に達しようとしていた。

「マンコ壊してぇぇー・い、いぐぅぅぅーーー・・・」

ゆかりはそのまま糸の切れた人形のように跪くと動かなくなった。

「あっ・・」

しばらく放心状態だったゆかりは我に返ると辺りを見回した。興奮状態から醒めたゆかりは慌ててコートを羽織るとその場を逃げるように後にした。

・・ゆかり、やっぱり頭がおかしいんだ・・

部屋に戻ったゆかりはシャワーを浴び身体の汚れを流すと、子供の穿くような臍の下まで覆う股上の深い綿の下着を穿きスポーツタイプのブラを着け、そのまま自分のした行為を思い返し戸惑っていた。

今まで自分の意思でおこなっていた行為と変わらないものではあるが、男から命令されておこなうと明らかに普通の行為とは逸脱した変態的な行為だとは中学生のゆかりにも理解できた。

・・こんなことしてる中学生、ゆかりくらいだよね・・

ゆかりは下着姿のままパソコンデスクの前のイスに座ると、足を開き右手を性器に当てた。思い出すだけで顔が火照り性器が熱くなってくる。

・・また、オナニーしたいです・・

ゆかりが下着の上から性器を刺激始めた時、画面の中で新着メールを知らせるウインドウが開いた。ぼんやりとそれを見つめたゆかりの目に「奴隷確定書」というタイトルが入った。

・・また・・

ゆかりは期待と不安で息が荒くなりながら、本文を表示する。

17、奴隷認定書3

17、奴隷認定書3

「あなたは私の奴隷として確定しました。

添付の書類に詳細を記入後返信すること。

今回の命令は添付書類参照のこと」

たった三行のメールであったがゆかりは再び自分の気持ちが高ぶってくるのを感じていた。一度意識してしまった自分の性癖に対して、もう後戻り出来ない身体になっていた。

・・今度は何を命令されるんだろう？・・

ゆかりは添付書類を開いてみた。一つはゆかりの自己紹介用の用紙。本名や住所・年齢・学歴・スリーサイズなどの他、顔・全身・性器などを撮影しその画像を添付するよう指示されていた。そして、もう一つが命令書だった。

「命令書

奴隷は奴隷に相応しい身体にするため以下の処置を施す。

一、抜歯。全ての歯を抜く

一、脱毛。陰毛を永久脱毛処理する

一、ピアシング。左右の乳首、小陰唇、及び陰核にピアスを装着する

一、焼き印。胸、腹部、恥丘に焼き印を押す

一、眼球破壊。視力を奪うため目を潰す。

一、手足切断。完全に性具化するため両手両足を切断する。

日時場所については覚悟が決まり次第下記アドレスまで連絡すること、以上」

ゆかりは恐怖で身体が震えていた。脱毛くらいは理解できる。つるつるの恥丘にして辱めるのだと分かるが、もともとゆかりはまだ陰毛が生えておらず子供のような性器であるためこの処置については、永久という言葉が気になった程度であった。

抜歯・・。二度と普通の食事は出来ないことを意味していた。そして、ゆかりの口は性処理の道具としてのみ使用されるという事がゆかりの僅かな性知識でも理解できた。

ピアシング・・。耳にさえピアスを付けていない真面目なゆかりにとって乳首と性器に穴を開けピアスを付けるなど想像したこともなかった。あの敏感な箇所に針を貫通させられピアスを装着されると思うとゆかりは自分の身体が震えてくるのを感じた。さらに、焼き印。眼球破壊。手足切断。もはや人とは思われずモノとして扱われる事を意味していた。

・・こ、こんなこと許されるの・・

変態ではあるが基本的に真面目で優等生のゆかりはあまりの衝撃に

手が震えマウスがうまく動かせなくなっていた。しかし、その反面ゆかりは自分を人と思わない容赦のない徹底した処置に自分の性器が熱くなってくるのを感じていた。

・・こんなことされたら、ゆかりどうなるんだろう・・

ゆかりは奴隷処置を施される自分の姿を想像していた。全裸にされ両手を背中で縛られ頭を押さえ付けられ麻酔もかけずに一本ずつ歯を抜かれていく。泣き叫ぶゆかりにお構いなく全ての歯が抜かれていく。そして、次にまだ桜色の乳首が摘まれなんの躊躇いもなく針が突き通されピアスが装着される。ゆかりは狂ったように泣き叫び暴れるが何人もの男がゆかりの足を広げ腰を押さえ付ける。そして、まず左右の小陰唇に針が貫通されピアスが装着され、いよいよ一番敏感なクリトリスにピアスを装着する作業が開始される。涙と鼻水で汚れた顔でゆかりは必死に逃れようとするが、ゆかり一人の力では身体を動かすことさえ出来ずにいた。そこへ今までより太い針が用意されクリトリスが摘まれる。ゆかりの泣き声が大きくなり、一瞬止まった次の瞬間。今まで以上の絶叫が響き渡る。ゆかりは小便を漏らしていた。しかし、男達は何事もないようにゆかりのクリトリスにピアスを装着する。小便を漏らし放心状態のゆかりに、さらに加わった男がゆかりの身体を押さえ付け、真っ赤に焼けた焼き印がまず左右の胸に押し付けられる。再び絶叫するゆかりの胸には「ブス」と、そして、腹部には縦に「ゆかり」と焼き印が押された。最後に恥丘に小さく「変態女子」と焼き印が押されてしまう。二度と消せない焼き印を押され泣き叫ぶゆかりの目にペンチが入れられ、そのまま両目を潰された。そして、流れ作業のようにゆかりの手足が肘と膝から切断されていく。数十分後には、ゆかりの奴隷化作業は終了した。男達が去った後もゆかりは自分の肉の焦げた臭いの中、短い手足を振りながらいつまでも泣き続けていた。

ゆかりは想像した自分のその無様な姿に先刻以上の興奮を感じ始めていた。

・・ゆかり、本当に奴隷になりたいんだ・・

ゆかりはもはや押さえきれない想いに突き動かされるように自己紹介用の書類に本名、住所など個人情報の全てを記入し、命令通りデジタルカメラで自分の顔・全身、そして、性器を撮影した。全身画像は正面からの直立姿勢の画像と両手を上げ足を開いた状態で正面と後ろからの画像の指定があったため、カメラに慣れないゆかりは苦労した。性器部分も普通の閉じた状態と、開いて中身を晒した状態が指定してあったが、慣れてきた分こちらはスムーズに撮影することが出来た。
ゆかりはメールに画像を添付するとそのまま返信した。

・・もう後戻り出来ないよ、ゆかり・・

ゆかりは立ち上がると姿見に全身を映し、そのまま先刻カメラで撮影したように両手をあげ足を開いた。

「渡邊ゆかり。十三歳、私立北中学校一年生です。ドブスでスタイルも悪くて性格も暗いゆかりはオナニーしか経験がありません。」

ゆかりは背筋を伸ばし胸を突き出し顔を上げさらに大きく足を開くと鏡に向かって、頭に浮かんだ想いを意を決して言った。

「ゆかりの・せ、性器を処刑して下さい・・。ゆかりの性器を容赦なく痛めつけてください。ゆかりが女の子に生まれたことを後悔して、そして本当に完全にゆかりが絶命するまで徹底的に残酷に性器を処刑して下さい・・・」

ゆかりは自分の下腹部がかってないほど熱くなっているのに気が付いた。

・・やっぱり、ゆかり、頭がおかしいんだ・・

ゆかりはそのまま性器に手を伸ばすと狂ったように自慰を始めた。

１８、奴隷認定書４

１８、奴隷認定書４

ゆかりは、男からのメールに返信以降、まだ奴隷化される日時については連絡していなかった。奴隷にされる覚悟がなかったのではなく、奴隷にされて自由がなくなる前に済ましておきたい事をやっておこうと考えていたのだった。

ゆかりは、その間に再び送られてきたメールを確認する。それは、ゆかりの性器を処刑する同意書だった。奴隷化されてからでは、目も見えず手も無くなっているので事前に送付したとの説明があった。しかし、ゆかりはその内容を見て震えてきた。ゆかりは奴隷化され性具として散々使用された後、性器を処刑され始末されるという事だった。

「私、殺されちゃうんだ」

ゆかりは、どんな風に性器を処刑されるのか想像し性器を濡らしていた。数々の残虐な性器拷問を受け、無様に死んでいく自分の姿を想像しゆかりは我慢できなくなり、離れの自室で自慰を始めた。

「おっおっおっおっおーーっ」

ゆかりは、いつになく早く絶頂に達してしまった。そして、紅潮した顔でメールを返信する。

《性器処刑同意書》

一、私、渡邊ゆかりは性器を処刑していただく事に同意致します。

一、性器とはクリトリス・小陰唇・大陰唇などの外性器、膣・子宮・膀胱。卵巣などの内性器、その他ゆかりの女の子の証といえる全ての部分を含みます。

一、本同意書提出後、奴隷化が終了した時点で、ゆかりの人格は破棄され、女の子の形をしたモノとして扱われる事に同意します。

一、性器処刑執行後ゆかりが絶命していない場合、さらなる処刑が執行され、ゆかりが完全に絶命するまで女の子の身体を破壊され続ける事に同意します。

以上。

★
★
★
★

ゆかりは翌日、登校すると周囲に注意を払っていた。ゆかりの学校では〝いじめ〟が問題になった事があり、ゆかりのクラスでも、それは分からないように密かに行われている気配があった。今までゆかりは、それに気付いても気付かないふりをしていたが、今日はそれに気付いたら注意するつもりであった。ゆかりが急に正義感に目覚めたわけではなく、ゆかりは奴隷になるまえに、しばらく惨めに虐められたかったのだ。そして、いじめを注意したゆかりは、さっそくグループから呼び出され放課後、体育館の裏で暴行を受けることになる。

「ごめんなさい。許して下さい」

ゆかりは土下座させられ、いじめグループに謝るが当然その程度で許されるわけはなく髪の毛を掴まれ立たされると顔面を殴りつけられた。

「ひいぃっ」

ゆかりが悲鳴を上げると、さらにもう一発殴られる。そして、鼻血を流し震えるゆかりにスカートを脱ぐよう命令される。そして、足を開かされ何枚も下着姿の写真を撮られたあと自慰をするよう命令される。

「許してください」

ゆかりは、また土下座して謝るが、そのゆかりの頭がグリグリと地面に踏みつけられる。そして、今度は腹に蹴りが入れられた。

「おげぇぇーーっ」

ゆかりは腹を押さえて地面を転がり回る。その下半身下着姿で地面を転がるゆかりの姿もしっかり撮影されていた。そして、ゆかりはまた髪を掴まれて立たされる。今度は下着も脱がされて足を開かされ、丸出しの性器を撮影されてしまった。

「よーし、最後にもう少し痛い目にあわせて帰してやるよ」

リーダー格の少女が言うと、心得たように別の少女が鉛筆をだしてくる。そして、鉛筆をゆかりの膣に突き刺していき、もう一本は肛

門にずぶずぶと突き刺した。

「あっ、うっ」

ゆかりが小さく声を上げるが、構わずに鉛筆は押し込まれ、さらに二人がかりでゆかりの足を押さえ付ける。そして、リーダーの少女が思い切りゆかりの鉛筆が突き刺さる股間を蹴り上げた。

「ひぎぃぃぃぃーーーっ」

ゆかりは両手で股間を押さえてのたうち回る。

「早く病院に行きな。ちゃんと、オナニーやり過ぎてこうなりましたと言うんだぞ」

リーダーの少女は、号泣するゆかりの顔面を踏み付けながら、ゆかりを見下ろして言う。ほかの少女も笑いながら帰って行った。

「渡邊さん、大丈夫？」

そこへ同じクラスの男子生徒が心配そうに顔を出す。どうやら、ゆかりがグループにシメられているのを見ていたようだ。ゆかりのスカートを持ってきてくれたが、下着は見つからなかったと、ゆかりに言いながら実はポケットの中に入れていた。

「凄い血が出てる。早く病院に行かないと」

そう言いながら男子は、ゆかりの両腕をガムテープで縛り上げ、口もガムテープを貼り付け塞いでしまった。

「うぅぅうぅぅ」

抵抗するゆかりの膣に男子は自分の性器を押し込んでいく。そして、根元まで突き刺すと激しく腰を振り出した。

「渡邊さん、いいよ。あっ」

男子は、ゆかりの中に放出すると満足したように帰って行った。一人残されたゆかりはスカートだけ穿くと、親に見られないように離れの部屋に急いで戻り、それから病院に連絡した。

19、私刑（リンチ）

19、私刑（リンチ）

しばらく学校を休んでいたゆかりが再び登校すると、早速昼休みの屋上に呼び出された。そして、周りを囲まれ土下座させられる。

「私たちの事、誰にも言ってないよね？」

土下座した頭を、足で踏まれながらゆかりは震えていた。

「訊いてんだろ、はっきり答えろよ」

ゆかりは、ビクッと大きく体を震わせると、はい、言ってませんと震える声で答える。

「ようし、じゃあ立って両手を上げて足を開きな」

ゆかりが命令された通りに、手を上げて足を開くと、前に立っていた少女が、ゆかりの股間に思い切り蹴りを入れる。

「あうぅぅーーっ」

ゆかりは呻き声を上げ股間を押さえて転がった。セーラー服のスカートが捲れ上がり白い下着が丸見えになっている。少女たちは、そんなゆかりの姿に爆笑し、スマホで何枚も写真を撮影する。

「誰が寝ていいって言ったんだよ。早く立って足、開け」

ゆかりが立ち上がって足を開くと、またゆかりの股間に蹴りが入れられる。今度は少女たち四人によって体を押さえ付けられているので、ゆかりは倒れることも出来ずに股間に蹴りを入れられ続けていた。

「おうぅっ、おうぅっ、おうぅっ…」

何発蹴りを入れられたかも分からない程、連続で性器を蹴られたゆかりは、漏らしてしまっていた。

「汚ったねえ!!　こいつ、漏らしやがった」

「ちょっと。順子ちゃんの上履き濡れちゃったじゃない。謝りなさいよ」

「ごめんなさいぃ。許してください」

ゆかりは、また土下座して許しを乞うが、少女たちの怒りは収まらない。ゆかりの三つ編みの髪が掴まれ無理矢理立たせられる。

「祐一、呼んできて」

順子が、少女の一人に言い、少女は駆け出した。そして、一人の男子生徒を連れてくる。

「祐一、こいつ、ボコボコにしてやって」

「いいのか？　俺、手加減出来ねえぞ」

「いい、いい。構わないから徹底的にやって」

祐一は少女たちに押さえ付けられているゆかりの眼鏡を外すと順子に渡した。そして、恐怖で震えているゆかりの顔面に容赦なく拳を叩き込んだ。

「ぶひぃぃぃーーーっ」

ゆかりは鼻血を流し悲鳴を上げるが、祐一は構わすゆかりを殴り続ける。

「ぶひ、ぶひ、ぶひぃぃぃーーーっ」

ゆかりの前歯が何本か折れ、顔は腫れ上がり悲惨な状態になっていた。

「もう、ゆるちてくだしゃい」

ゆかりは泣きながら許しを乞うが、ゆかりの両腕が背中に回されガムテープでぐるぐると固定され、更に首にロープが巻かれ屋上のポールから吊り下げられる。ゆかりは爪先でやっと立っていられる状態にされ、さらに全員から暴行を受ける。もう、ゆかりの顔面はぐちゃぐちゃだった。

「やめてぇ、もう許してくだしゃいぃぃーーーっ」

ゆかりが泣き叫んでも無駄だった。少女たちも祐一も、無様なゆかりの姿を見て笑いながら暴行を加える。

バシッ、ズガッ、ボコォ…

ゆかりへの暴行は果てしなく続き、ゆかりは号泣しながら、まだ殴られていた。そして、殴り疲れた少女の一人が、こいつのマンコに根性焼きしてやろうよと言い、全員が賛成する。

「ひっ、ひぃぃぃーーーっ」

悲鳴を上げるゆかりの下着が脱がされ、性器が露にされる。そして、ゆかりの足が持ち上げられ大きく開脚される。ゆかりの首のロープに体重がかかり、首に食い込んだ。

「早くマンコ拡げて!!　こいつ首吊られて死んじゃうよ」

足を持ち上げている少女とは別の少女が、ゆかりの性器をくぱぁと拡げる。そこへ、順子が煙草に火を点けて、じゅっと押し当てた。

「ひぎぃぃぃーーーーっ」

ぶりぶりぶりっ

ゆかりは性器に煙草の火を押し付けられ、大便まで漏らしてしまった。

「きったねえ!!　こいつ、ウンコまで漏らしやがった」

「順子ちゃん、お仕置きでけつの穴にも根性焼きした方がいいんじゃない」

仲間の言葉に順子は頷き、じゃあマンコと同時に押し付けようと言

うと他の少女も、私もやりたいと言い出す。そこで、一旦ゆかりをおろしセーラー服を脱がし全裸にする。そして、改めて拘束し、身動き出来ないゆかりを取り囲み、全員が火の点いた煙草を持つ。

「いい、一斉にいくよ。ゆっくり近付けて、徹底的に焼いてあげて…。せーの、それっ」

順子の合図で、ゆかりの舌、２つの乳首、クリトリス、肛門に一斉に煙草の火が押し付けられる。

「あびゅゅゅーーーーっ」

ゆかりは、口から泡を噴いて失神していた。少女たちは笑いながら、ゆかりをそのまま放置して立ち去った。

「また、放課後ねぇ。渡邉さん」

順子が言った言葉は、ゆかりには届いていなかった。

２０、駿河問いという拷問

２０、駿河問いという拷問

放課後、ゆかりは中学校の体育館の裏に呼び出されていた。昼に股間や胸、さらに肛門にまで煙草の火を押し付けられたゆかりは、まだ火傷した部分がジンジンと痛く歩き方もぎこちなかったが、順子たちに連れられ生徒や先生も来ることがない体育館裏の奥の林の中まで連れられて来ていた。

「ここなら、渡邉さんをゆっくり痛め付けられるね」

楽しそうに言う順子にゆかりは土下座する。

「もう、許して下さい」

「はぁ…。何言ってるの。あんたの事、許すわけないじゃない」

順子は土下座するゆかりの後頭部を踏みつけ、ゆかりの顔面を地面に押し付ける。

「よーし、このまま尻を突きだしな」

ゆかりは、頭を踏まれたまま尻を突き出すとスカートを捲られ白い下着を晒される。

「じゃあ、このままオシッコしてもらおうか」

周りの少女たちがスマホを構え、一斉に撮影準備にはいる。そして、ゆかりの股間から下着を濡らし、湯気をたてて小便が溢れ出す様子を様々な角度から撮影されてしまった。

「あーあぁ、こんなとこでオシッコ漏らして。お仕置きが必要だね」

ゆかりは立たされると両腕を背中で押さえ付けられ髪の毛を掴まれ頭も押さえ付けられた。そして、順子がゆかりの頬に思い切り平手をぶち込む。

バシィ

「あうぅぅぅーーっ」

ゆかりは悲鳴を上げるが、構わず順子はゆかりの頬を打ち続ける。

バシィ、バシィ、バシィ、バシィ…

「ひいぃ、順子ちゃん、もう許して」

「はぁ？　奴隷のお前が何馴れ馴れしく名前よんでんだよ」

「ごめんなさい！　姫野さま、許してください」

ゆかりは泣きながら許しを乞うが、順子の平手打ちは止まらない。

そこへ、男の声がかかる。

「何やってんだ、君たち」

順子たちがビクッとして振り向くと、そこにはクラス委員長の山本和彦が立っていた。

「最近、渡邉さんや君達の様子がおかしいから注意してたんだ」

「いや、委員長。これは遊んでただけで…」

そうそう、と他の少女も頷く。すると和彦は近付いて来ると、いきなりゆかりの顔面を殴り付けた。

「ぶひぃぃぃーーーっ」

ゆかりは無様に地面に転がるが、そこへ更に和彦は蹴りを入れる。

「あばぁぁぁーーーっ」

更にゆかりの髪の毛を掴んで立ち上がらせる。

「ひぐっひぐっひぐっひぐっ」

泣き出しているゆかりの顔面を、また殴り付けた。そして、順子たちの方を向く。

「渡邉さんを痛め付けるなら、僕も仲間に入れて欲しかったんだ」

「へっ？」

順子たちは顔を見合わせたが、取り敢えずホッとした表情をする。

「優等生ぶって、私は貴方達と違うなんて態度が鼻についてたからね。いつか痛め付けてやろうと考えてたんだ」

「へぇ、委員長が仲間になってくれれば心強いね」

順子が残酷に笑い、他の少女もニヤリと微笑む。

「さっそくだけど、渡邉を痛め付ける為の拷問したいから手伝ってくれないか。動けないよう、うつ伏せに押さえ付けてくれ」

拷問という言葉に興奮しながら順子たちは頷くと、ゆかりの体をうつ伏せにして押さえ付ける。和彦は、逃れようと必死に暴れるゆかりの右手首を縄できつく縛り、左手首も縛っていく。そして、手際よく両足首もそれぞれ縄で縛ってしまった。

「さあ渡邉さん、苦しんでもらうよ」

和彦は、ちょうど頭上にある外灯の太いポールに縄を通しゆかりを吊り上げていく。ゆかりは両手首と両足首を1ヶ所にまとめてポールから吊り下げられ悲鳴を上げた。

「あうぅぅぅーーっ、痛いよぅぅぅーーーっ」

ゆかりの顔が苦痛で歪んだ。

「何これ…。凄い痛そうだけど」

「ああ、相当痛いよ。肩と腰の関節に全体重がかかるからね。それに背骨も反って折れそうだろ。渡邉さん、いい格好だよ」

「へぇ。凄く苦しそう。でも、いい気味ね」

「拷問だからね。苦しめる為のものだから。でも、これで終わりじゃないぞ」

和彦は大きな石を探してくると、それに縄をかけ、さらに吊り下げられているゆかりの腰に縛り付けた。

「ぶひぃぃぃぃーーーっ」

ゆかりが絶叫し、肩や腰の関節もギシギシと悲鳴を上げる。

「ひぐっひぐっひぐっひぐっ」

号泣するゆかりの体は2つに折れてしまいそうな程反り返っていた。

「ほら見なよ、この渡邉の顔。涙と鼻水と涎でびしょびしょだ」

大笑いする和彦に、順子たちもつられて爆笑する。

「この拷問の恐ろしいところはこれからさ」

まだ何かするのかと順子たちが見ていると和彦は、吊り下げられているゆかりの体をクルクルと回し始めた。そして、手を放すとゆかりの体が独楽のようにクルクルと激しく回転する。

「おもしろーい。私もやる」

順子たちは争ってゆかりの体を回転させるが、そのうちにゆかりは大量の汗をかきだし、さらに顔が赤くなり、目・鼻・口・耳から血

を流し始めた。

「えっえっ？　何、どうしたの？」

順子たちが慌てて和彦の顔を見るが、和彦は落ち着いたもので笑っている。

「言っただろ。これがこの拷問の恐ろしいところさ。こんな風に際限なく回転させられれば三半規管は平衡を保てなくなって、更に血流は頭に集中する。だから、血管の弱い所が破れて血が噴き出すのさ」

順子たちは改めてゆかりの姿を見ると、ゆかりは苦悶の表情で血を流しながらクルクルと回転している。

「ちょ、ちょっと。渡邉は大丈夫なの？　死んだりしないよね。さすがに殺したらまずいからね」

「ああ、まだ大丈夫だよ。でも、もう回転は止めた方がいいかな。本当はもっと苦しめて殺したいとこだけどな」

順子たちは、クルクル回っているゆかりの体を押さえ付けて止めると、ゆかりは目鼻口耳から血を流し無様に白目を剥いて失神していた。

21、さらなる拷問

21、さらなる拷問

ゆかりは、〝駿河問い〟の拷問にかけられ苦しんでいた。目や鼻や口から血を流し、肩や腰の関節は外れそうで激痛が走る。

「あうぅぅぅーーーっ」

苦し気に呻き声を上げるゆかりに、和彦はもう一つ大きな石を見つけると縄で縛り、ゆかりの腰に結び付けぶら下げる。ゆかりの腰に石の重量が加わり、ゆかりは体は更に反り返る。

「ぎゃびぃぃぃーーーっ、いだいぃぃぃーーーっ、だじげでぇぇぇーーーっ、じぬ、じんぢゃうぅぅぅーーーっ」

和彦は、石を二つもぶら下げられて苦しむゆかりのスカートを捲り白い下着を露出させ、スマホで撮影し喜んでいる。

「委員長ってさ、何か渡邊に恨みでもあるのかな?」

順子が、ゆかりを痛めつけて喜んでいる和彦を見て隣の少女に訊いてみる。

「知らないけど。女を痛めつけて喜ぶ奴っているじゃない。委員長もそれじゃないの?」

「あっ、私、知ってるよ」

結衣という少女が二人の会話が聞こえたのか、話に入ってくる。

「委員長、渡邊さんに振られたのよ。前に渡邊さんにコクッたんだけど、冷たく拒絶されたみたいよ」

「へぇ、そうなんだ。でも好きだった女の子に、あそこまで出来るんだね」

順子は、にやっと笑うと和彦に声をかける。

「そろそろ場所変えよう。巡回が来るからさ。他の場所で渡邊を痛めつけようよ」

順子の提案で郊外にある廃ビルまで、ゆかりを連れて移動した一行は、震えるゆかりをぐるりと囲んで殴る蹴るの暴行を加える。

「じゃあ、渡邊さん、制服脱いでもらおうか」

「えっ」

「えっじゃないよ。早く脱ぎな」

ゆかりがためらっていると、順子がゆかりを殴りつける。

「早くしないと、階段から落ちた事にして腕の骨折ってあげるよ。ああ、そうだ。服脱ぐ前にみんなの前でオナニーしてもらおうか」

「ひえっ」

「早くしろよ。毎日やってるんだろう」

順子に脅されゆかりはスカートの中に手を入れ自慰を始めた。

「おっおっおっおっ」

初めは小さかったゆかりの声がだんだんと大きくなってくる。

「お、おぉぉぉぉーーーーっ」

ゆかりは一際大きな声を上げると、ガクッと腰を落とし放心状態になっていた。順子はゆかりの頬を平手で何度も打ち覚醒させる。

「ようし、早く服を脱ぎな」

ゆかりは震えながら制服を脱いで下着姿になるが、順子は全部脱ぎなと命令する。ゆかりはブラを外し下着も脱いだが、胸と股間を両手で隠す。

「誰が隠していいって言ったんだよ。殴られたくなかったら、両手を上げて股を開くんだよ」

ゆかりは泣きながら両手を高く上げ、両足を大きく開き股間を露わにする。順子は和彦にゆかりが穿いていた下着を渡した。

「ほら、渡邊さんが穿いたままオナニーした下着、あげるよ。おしっこも漏らしてるからけっこう汚れてるけどね」

「ありがとう、姫野」

和彦にゆかりの下着を渡した順子は声を張り上げる。

「さあ、撮影会だよー。好きなだけ撮って」

ゆかりの恥ずかしい姿を撮影しながら順子は、和彦に近付くと耳打ちする。

「ねえ、委員長。私たちが押さえ付けとくから渡邊のこと犯しちゃいなよ」

「えっ」

「また痛めつける前に少し位いい思いさせてもいいんじゃない。何回でも満足するまで犯していいよ」

「そうか？　そうだな」

和彦が頷くと順子は仲間の少女たちに、ゆかりを仰向けにして手足を押さえ付けるよう指示し、スマホで撮影の準備をする。

「もう、渡邊さんオナニーで濡れてるから、すぐ入れちゃっていいよ」

和彦はズボンを下ろし性器を出すと、ゆかりの膣に当てグイッと根元まで突き刺し腰を振る。押さえ付けられて動けないゆかりに容赦なく激しく腰を振る和彦。

「そのまま中に出しちゃっていいよ」

撮影しながら順子が、笑いながら言う。ゆかりが嫌々と首を振るが和彦は、うっと声を出すとゆかりの中に放出した。

「ほら、口で綺麗にしてあげるんだよ」

順子たちが、ゆかりの頭を押さえ付けて和彦の性器を口に入れさせる。そして、再び硬くなった和彦の性器で膣を貫かれた。その後も何度も犯されたゆかりは、ぐったりとして押さえ付けなくとも動かなくなっていた。

「じゃあ、そろそろ痛めつけるか」

さすがに和彦も疲れたのか、再びゆかりの拷問に移っていく。ゆかりをうつ伏せにすると手首を縛り足首も縛っていく。

「嫌ぁ、もうあれは許して、お願いしますぅ」

許しを乞うゆかりに関係なく、ゆかりはまた両手首両足首を一か所にまとめられ吊り下げられ〝駿河問い〟の拷問で痛めつけられる。

「ここならコンクリートの欠片が沢山あるから思う存分痛めつけられるな」

和彦はコンクリートの欠片を集めてくると、ゆかりの腰にぶら下げていく。

「ぶぎゃぁぁぁーーーっ」

大きなコンクリートの欠片を二つもぶら下げられて、ゆかりの背骨

が折れそうなほど弓なりに反りかえる。

「いだいぃぃぃーーーっ、だじげでぐだざい、だじげでぇぇぇーーーっ」

泣き叫ぶゆかりに和彦はさらにコンクリートの欠片を結びつける。ゆかりは、なんと五つものコンクリートの欠片をぶら下げられ、もう腰の所から二つに折れるほど体が折れ曲がっていた。

「じぬぅーーっ、じぬぅーーっ、ゆるじでぇぇーーーっ」

「死ぬ死ぬ、うるさいよ、渡邊」

和彦は、重り付きの洗濯ピンチでゆかりの舌を挟む。そして、五つもの重り付き洗濯ピンチでゆかりの舌を挟み、ゆかりは舌を出したまま喋れなくなった。

「あびぃあびぃあびぃ」

喋れないゆかりは無様な悲鳴を上げる。

「おもしろそう。私たちにもやらせて」

順子たちもゆかりの体に重り付きの洗濯ピンチを挟み始める。ゆかりの顔面は、上下の唇、鼻、瞼、頬と挟まれていき顔中重り付きの洗濯ピンチで埋め尽くされる。

「他も、こいつで挟んで重りぶら下げようよ」

少女の一人が言い、全員で楽しそうにゆかりの体に重りをぶら下げ

る。真っ先に狙われたのは乳首とクリトリスだった。他にも乳房、小陰唇、大陰唇、太もも、下腹部などあらゆる所に重りがぶら下げられる。

「あとさ、いつかこれやろうと思って持ってきたんだ」

結衣がバックから５００ｍｌシリンダーの浣腸器とグリセリン液のボトルを取り出す。

「ほんとは薄めて使うもんなんだけど、このまま入れちゃおうよ」

吊り下げられているゆかりの尻を二人がかりで開くと肛門に浣腸器が刺され原液のままグリセリンが注入される。さらに、もう一回。ゆかりはグリセリンの原液を全て注入されてしまった。

「でも、このままウンコ漏らされたら汚いね」

「このコンクリートの塊、入れればいいんじゃない」

少女たちは、ゆかりの肛門からコンクリートの塊を、３つ４つと押し込んでいく。ついでに、ゆかりの膣にも転がっていた５センチ角の角材を無理矢理ねじ込む。

「じゃあ、そろそろ回そうか」

順子が楽しそうに言い、酷い状態のゆかりの体を念入りにくるくる回していく。そして、手を放した。ゆかりの体が高速でクルクル回転する。ゆかりは、それを繰り返され、また目・鼻・口・耳から血を流し始めた。

「また、血、出したよ」

今度は笑いながらゆかりの苦しむ姿を撮影し喜ぶ順子たちだった。

「これから毎日ここで渡邊さんと遊ぼうよ」

順子の提案に、全員大喜びで賛成する。苦しむゆかりの呻き声と、少女たちの笑い声がいつまでも響いていた。

22、拷問は続く

22、拷問は続く

「この時、筆記者である先生は、どういう気持ちでKに対していたか、分かりますか？」

国語の授業中、山川先生が質問すると数人の生徒が手を挙げる。山川先生は、手を挙げた生徒の顔を見回し、おやっという顔をする。いつも必ず手を挙げる渡邊ゆかりが手を挙げていない。国語が得意なゆかりにしては珍しい事だった。

「渡邊さん、体調でも悪いのですか？」

心配になった山川先生が、ユカリに声をかける。ゆかりは多少青ざめた顔をしているが普通に答えた。

「いえ、何でもありません。大丈夫です」

「そう。ならいいけど」

山川先生も、それ以上はゆかりに尋ねず授業を進めていった。その後ゆかりは昼休みの時間中に順子たちに屋上に呼び出された。

「ちょっと、まさか先生の気を引こうとしてやってないよね」

土下座させられ周りを少女たちに囲まれゆかりは、ぼこぼこに蹴りを入れられていた。

「違いますぅ、毎日、姫野様たちに拷問されて腕が痛くて上がらないんです」

「あら、それは可哀想。でも、私が悪いっていうのね」

「ひぃぃっ、違いますぅ、姫野様は悪くありません」

「順子ちゃんが悪いっていうの？　渡邊ぇ」

少女たちは、さらに激しくゆかりに蹴りを入れる。

「それくらいにしときなよ。後は放課後のお楽しみ」

「はーい」

少女たちは最後に強烈な蹴りをゆかりの股間に叩き込んだ。

「あびゅーーーーっ」

ゆかりは両手で股間を押さえ、小便を漏らしながらのた打ち回る。

「あーあ、また漏らしちゃったね、渡邊さん。ちゃんと着替えるんだよ」

少女たちは笑いながら去っていった。

★ ★ ★ ★

放課後、いつもの廃ビルに連れ込まれたゆかりは、着替えた半袖の体操服とブルマ姿で〝駿河問い〟の拷問にかけられていた。

「いだいぃぃーーーっ、もうごの拷問はゆるじでぐだじゃいぃぃーーーっ」

吊るされて泣き叫ぶゆかりの姿を笑いながら見ていた少女たちは、ゆかりの腰にコンクリートの塊をぶら下げ始める。

「今日は塊が大きいから三つにしといてあげるよ」

順子が少女たちに指図し、〝駿河問い〟で吊られているゆかりの腰にコンクリートの大きな塊を三つもぶら下げる。ゆかりの体が腰から折れてしまいそうな程、激しく反り返った。

「いぢゃいぃぃぃーーーっ、だじげでぇぇぇーーーっ、もうゆるじでぇぇーーーっ」

「ひゃははっ、いいね、渡邊さん。ブルマ姿で吊るされて、その無様に汚れた顔、最高」

順子は楽しそうに大きく笑うと、ゆかりの体をくるくる回し始めた。

「ほーら、また回してあげるよ」

「いやだぁぁーーっ、まわさないでぇぇーーっ、ゆるじでぇぇーーっ、だじげでぇぇーーっ」

「だーめ、渡邊さん。いつもより沢山回してあげるわ」

順子は、ゆかりの体をクルクル、クルクルと何時もより念入りに多く回す。もう逃れようがないと悟ったゆかりは激しく号泣する。

「そろそろいいかな。それじゃ放すよ、渡邊さん、覚悟してね。みんな、撮影よろしく」

順子が手を放すと、ゆかりの体は高速で回転を始める。

「ぶぼぉぉぉーーーーーっ」

悲鳴を上げながら高速で独楽のように回転するゆかりの顔がだんだんと赤くなる。そして、ゆかりの血管が破れ、目、鼻、口、耳から血が噴き出す。ゆかりの股間からも小便と悪臭が漂い始めた。どうやら、ゆかりは大便も漏らしてしまったようだった。

「いけない。回しすぎたかな」

順子が、ゆかりの体を押さえて止める。ゆかりは顔の穴という穴から血を流し、ぐったりとしている。順子はゆかりの髪の毛を掴み、平手で頬をバシバシと打った。血の涙を流しながらゆかりは、順子を焦点の合わない目で見る。

「だじげでっ、ゆるじでぐだじゃい、だじげで、だじげで、だじげで…」

ゆかりはうわ言で呪文のように繰り返す。

「なんだ。まだ生きてるんだ。じゃあ、もう少し回すよ、渡邊さん」

順子は、またクルクルとゆかりの体を吊るしている縄を巻き上げていく。そして、その手を放す。再びゆかりの体が高速で回転を始めた。

「ははははっ、無様な格好だね、渡邊さん」

顔面からは血を流し、股間からは大小便を垂れ流しながら、吊るされて回転するゆかりの姿を見ながら少女たちはスマホで撮影しながら大爆笑していた。

「明日、土曜日で学校休みだから、朝から渡邊を拷問して遊ばない」

「いいね、それ。そういえば委員長が新しい拷問の準備してるって言ってたよ」

「あっ私も聞いた。何か道具作ってるって言ってたよ」

「それじゃ、委員長も誘ってみんなで拷問しようよ」

「楽しみだねぇ、拷問って最高っ」

「私、スクール水着、着てこようかな」

「えっ、どうして？」

「だって、汚れた時に洗いやすいじゃない」

「ああ、そうか。渡邊さん、血、流したり、ウンチやオシッコ漏ら

して汚いもんね」

「じゃあ、みんなスクール水着で揃えよう」

「はーい。あと私、お弁当作ってくるよ。そうすれば、ずっと拷問できるもんね」

「何か凄い楽しみだね」

少女たちが楽しく相談している最中、ゆかりは、まだ吊るされたままクルクルと回転し苦しんでいた。そして……

「おげげぇぇぇっ」

ゆかりは、口から吐瀉物を嘔吐し泡まで吹き出した。

「うわぁ、渡邉さん。ゲロ吐いて、泡まで吹き出してるよ」

「おもしろーい。誰か早く撮影しといて」

少女たちは、ゆかりの無様な姿に激しく盛り上がっていた。

23、石抱き、そして釘打ち

23、石抱き、そして釘打ち

結衣は、早々にスクール水着姿になり、みんなの到着を待ち侘びていた。

・・早く来ないかな。一日渡邊さんを拷問出来るかと思うと興奮しちゃうよ・・

結衣は作ってきたお弁当を廃ビル内にあった机の上に並べていると、ゆかりを連れた順子たちが入って来た。ゆかりは、襟だけが赤い白いセーラー服でスカートは少し動くだけで下着が見えるマイクロミニ姿で、首輪に付けられた鎖を引かれ両腕は後ろ手に縛られよたよたと歩いている。その、ゆかりの哀れな姿を見ると結衣は更に興奮してきた。

「おはよう、渡邊さん、その格好で連れてきたの?」

「そうだよ。だって、渡邊は奴隷じゃん。ほんとは全裸で引っ張って来たかったけどね」

「あーっ、全裸で歩かせたいね。名札も付けさせてさ。それ撮影したら楽しそう」

「結衣も結構凄いこと言うよね。ところで委員長はまだ来てないの

？」

「うん、まだ」

「それじゃ、委員長が来るまで何時もの拷問で渡邊を痛めつけとくか」

順子の言葉で全員が、許してと泣き叫ぶゆかりの体を押さえつけ手首足首を縛りつけ宙に吊るす。そして、ゆかりの腰に大きなコンクリートの塊をぶら下げていく。ゆかりの関節がぎしぎしと軋み、背骨が激しく反り返る。

「ぶびぃぃぃーーーっ！もおごの拷問はゆるじでぐだざいぃぃーーっ！！ぶでどあじどれじゃいまずうぅぅーーーー！！！」

「いいねえ、渡邊さん。じゃあ、いつものように回していくよ」

「いやぁぁーーっ！だじげでぇぇーーっ！まわざないでぐだじゃいぃぃーーっ！じんじゃうぅぅーーっ！！！」

しかし、構わず順子はゆかりをクルクル回し、手を放す。

「ほげぇぇぇーーーーっ」

高速で回転するゆかりの目や鼻、口から血が流れ出した。

「いつ見ても渡邊のこの顔、最高だね」

順子たちが、ゆかりを見て爆笑しているところへ和彦がやって来た。悪い悪いと頭を下げながら持ってきた道具をひろげて準備する。順

子たちが見ていると和彦は四角い木材を斜めに切り三角にした物を頂点が上を向くように床に並べていく。

「何これ？どうするの？」

床に置かれたぎざぎざの木材を見て順子が不思議そうな顔をして尋ねる。

「この上に渡邊に正座してもらうんだよ」

「ええっ」

結衣が驚きの声を上げる。

「このぎざぎざの上に正座っ！むちゃくちゃ痛そうだけどっ！」

「そりゃあ痛いさ。拷問だから。さあ早く渡邊を下ろして、この上に正座させてくれ」

順子たちは、気を失っているゆかりを下ろすと両腕を背中に回し縛りつけ、無理やりぎざぎざの上に正座させ押さえつける。

「よーし、そのまま背筋を伸ばして押さえといてくれ」

和彦は大きな石版を重そうに持ってくる。

「前に来た時に見つけておいたんだ」

和彦は残酷な笑みを浮かべると、暴れないように押さえつけておけよと言い正座しているゆかりの太ももの上に石版をドスンと乗せる。

「ふぎゃぁぁーーーーっ！」

気を失っていたゆかりが激痛で意識を取り戻し悲鳴を上げ逃れようと体を捩るが、順子たちの押さえつけられた体は動かすことが出来ず泣き叫ぶ。

「いだいぃぃーーーっ！だじげでっ！！うぎゃぁぁぁーーーっ！！！」

和彦は満足気に頷くと、さらにもう一枚の石版を重ねて乗せた。ゆかりが絶叫するが、構わず和彦は石版を運んでくると、どんどん積み上げていく。一枚６キロ近くある石版がゆかりの太ももの上に７枚も積み上げられている。

「もう、動けないだろうから押さえつけなくていいよ」

和彦は、本当はもっと重ねて痛めつけたけど次の拷問があるからね、と笑う。石版はゆかりの胸の位置まで積み上げられていた。ゆかりは悲痛な悲鳴を上げ続けている。

「これは見てるだけでも痛いわ」

順子がポツリと言い、他の少女もうんうんと頷く。ゆかりは石版の重量で動く事も出来ず号泣している。和彦は、ゆかりの太ももの上に載せられている石版の上に、今度は木の板を載せた。ちょうど、ゆかりの乳首の高さになる。

「渡邊さん、もっと痛めつけてあげるからね」

和彦は、ゆかりの乳首を摘むとぐいっと引き伸ばす。そして、順子にここに当てて持っていてくれと釘を渡した。順子は和彦の指示通り和彦が引き伸ばしているゆかりの乳首の上に釘を当てた。

「あの、この釘どうするの？」

「釘は打つに決まってるだろう」

和彦の言葉に順子たちは、ゴクッと息を呑む。和彦は順子たちの反応も楽しみながらゆかりの乳首に当てた釘に金槌を振り下ろした。

「ひぎぃぃぃーーーーっ」

絶叫するゆかりの苦痛に歪む顔を楽しみながら和彦は、コンコンとゆかりの乳首に釘を打ち込んでいく。そして、釘を根元まで打ち込むと今度は反対側の乳首に釘を打ち始めたが、途中で順子が私にも打たせてと金槌を奪い取ると思い切り打ち始め根元まで打ち込んでも、まだゆかりの乳首を金槌で打っていた。

「楽しいーーっ、もっと打っていいよね」

順子は、ゆかりの乳首にもう一本釘を当てると打ち出した。

「ふへへっ、どう、渡邊さん。渡邊さんの乳首、二つとも釘で打ちつけられちゃったよ」

順子は、興奮した顔で号泣しているゆかりの顔を見下ろす。和彦は、また石版を持ってくると、ゆかりの乳首を打ちつけた板の上に重ねて置く。そして、また何枚かの石版を重ねゆかりの口の位置に高さをあわせ木板を置いた。

「渡邊さんの口を開けて舌を出して押さえといてくれ」

和彦の言葉に順子は、嘘っという顔をしたが言われた通り結衣がゆかりの口を開け順子がゆかりの舌を出したまま押さえつけた。和彦は、順子の想像通りゆかりの舌に釘を当てる。そして、容赦なくゆかりの舌に釘を打ち出した。

「あびゃあびゃあびゃあびゃ」

ゆかりは押さえつけられたまま舌を釘で打ちつけられていく。その哀れな姿に順子は激しく興奮し、また和彦から金槌を奪い取ると釘を打ち始めた。けっきょく、興奮した少女全員がゆかりの舌に釘を打ち込み、ゆかりの舌は五本以上の釘で板に固定されてしまった。

「ひゃはっ、渡邊さん、まだまだ時間あるから、もっともっと痛めつけてあげるからね」

順子は、和彦の持ってきた乗馬鞭を手に取り動けないゆかりの体に叩き込んだ。休みなく連続で鞭で打たれ、ゆかりの体にミミズ腫れがどんどん出来ていった。

23、石抱き、そして釘打ち（後書き）

お読みくださり有難うございます。
このところ女の子の名前を考えるのが苦労してます。みんな同じ様な名前になってしまっているようで、これもう使ってるな、みたいな感じです。
何か良い名前がありましたら教えて貰えれば幸いです。
宜しくお願い致します。

２４、小説・ゆかり無惨

２４、小説・ゆかり無惨

放課後、廃ビルで土下座させられているゆかりの後頭部には、順子の足が乗せられている。順子はゆかりの顔面をコンクリートの床に押し付けながら周りの他の少女と談笑していた。

「渡邊さん、さあ。国語の成績良いんだから、今度自分が痛めつけられる小説書いてきなよ。それ読んで痛めつける参考にするからさ」

順子の言葉に結衣が、面白そうと反応する。

「順子ちゃん、いいね、それ。渡邊に自分が痛めつけられる小説書かせるなんて最高。渡邊さん、短くていいから明日までに書いてきな」

結衣は楽しそうに、土下座するゆかりの股間を蹴り上げた。それはちょうどゆかりの肛門にクリーンヒットする。

ぶりぶりぶりっ

ゆかりは大便を漏らしていた。白い下着がこんもりと盛り上がる。

「あーあ、またウンコ漏らしたよ、渡邊さん。子供より始末悪いねぇ」

周りの少女が、土下座しながら大便を漏らすゆかりを見て大爆笑する。順子は、明日までに書いてくるんだぞ、とゆかりの頭をぐりぐりと踏みつけた。

★　★　★　★

翌日昼休み。屋上に呼び出されたゆかりは書いてきた小説を順子に渡す。

「さすが真面目な渡邊さん。きちんと書いてくるんだねぇ」

順子たちは、ゆかりの書いた小説を回し読みしていく。そして、読み終えると満足したように爆笑する。

「渡邊さん、最高だよ。御褒美に、ボコってやるからそこに立ちな」

震えながら両手を上げ足を開いて立つゆかりに、いつものように殴る蹴るの暴行がはじまった。ゆかりの小説を読んで興奮していた順子は、いつもの何倍もの暴行をゆかりに加える。数分後にはゆかりはボコボコにされぼろ雑巾のように屋上に横たわっていた。

★　★　★　★

女子中学生ゆかりの願望

この文章は私、ゆかりの処刑方法を私自身が検討し記述したものです。十三歳、まだ中学生の私が考えたものなので物足りない面も多々あるかと思いますが、私の処刑を楽しんでいただけるよう精一杯考えました。私の処刑執行のお役にたてれば嬉しいです。

名前・・渡邊ゆかり
年齢・・十三歳
身長・・一四九センチ
髪型・・三つ編みにしたお下げ髪
容姿・・童顔で幼児体型。眼鏡も掛けてます。身体、胸、おしり共、ちっちゃいです。あそこの毛も生えていないので前から割れ目が見えてしまいます。
服装・・小さめのレオタードやスクール水着等、拘束感のあるものが大好きです。
性癖・・性器を拷問されたり、膣を処刑されたりすることばかり想像しオナニーしている頭のおかしな変態女子です。

一、まず、私の女の子の身体を徹底的に辱めるため白いオーバーニーソックスを残し全裸にされます。

二、全裸にされた私は両腕を後ろ手に縛られ仰向けに寝かされた後、足を開き腰を持ち上げるよう命令されます。顔を上気させる私の性器が乱暴に拡げられ、クリトリス・尿道口・膣口などが時間をかけじっくりと観察されます。性器をじっくりと観察され声を出してしまっている私の膣に膣鏡が当てられ、私の腰と太ももがしっかり押さえ付けられます。そして、私の膣に容赦なく膣鏡が押し込まれ、激痛に腰を動かし逃げようとする私の頬が思い切り何度も打たれます。腰と太ももを押さえ付けられたまま私は本当に根元まで膣鏡を押し込まれてしまいます。涙を流し許しを乞う私のことなどまるで構わずに膣鏡は一杯まで拡げられ、私は膣の中身まで晒しものにさ

れます。

三、膣鏡を膣に取り付けられた私は足を開き腰を高く持ち上げたまま、目と口を大きく開くよう命令されます。泣きながら命令通りにする私の顔におしっこが浴びせられます。思わず目を閉じてしまう私の両眼はとうとう無理矢理開けられ、隅々までおしっこが浸みるよう直接眼球におしっこが浴びせられたうえ目を動かすよう命令されます。次に鼻の穴と耳の穴にもおしっこを注入され、口に注がれたおしっこはゆっくり味わって飲むよう命令されます。そして、とうとう膣鏡で拡げられている膣内にもおしっこを入れられてしまいます。

四、あまりの惨めさに号泣する私に、今度はそのままの姿勢で排便するよう命令されます。おしっこまみれで必死に息む私のおしりの穴からようやくうんちが出てくると、そのうんちは必死に許しを乞う私の膣内に容赦なく詰められていきます。そして、私の膣がうんちで完全に埋められてしまうと、次に目と口と耳の穴が埋められ呼吸用に鼻の穴にチューブが入れられた後、顔全体をうんちで塗り込められてしまいます。

五、うんちで性器と顔を封印された私は拘束台の上に仰向けに寝かされ、大きく足を開かされたまま身動き出来ぬよう厳重に拘束されてしまいます。そして、うんちの上から眼鏡をかけ前髪も整えられた後、安全ピンを左の乳首に突き通され「渡邊ゆかり」と本名を書かれた名札を付けられます。

六、勃起した乳首に名札を付けられ、髪もきれいに整えられた私は、そのままガラスケースを被せられ展示されてしまいます。

七、うんちで女の子の大切な部分を封印された惨めな姿をたくさん

のゲストに観察していただいた私は、その後、水槽に投げ込まれ洗浄されます。

八、洗浄された私は太ももを三分の二以上覆う白いサイハイソックスだけ穿かされた後、両腕を背中にまわされ拘束具で完全に固定されます。そして、私の足首に足枷が取り付けられ天井から逆さに吊り下げられ、そのまま足を左右に開かされ性器を無様に晒されます。そのうえさらに背後の拘束台から伸びる拘束具で私の腰と太ももは厳重に固定されます。

九、無防備に晒す私の性器が拡げられ再び膣に膣鏡が根元まで押し込まれ思い切り拡げられます。開脚逆さ吊りで膣を拡げられ涙を流し震える私に火の点いた赤い蝋燭が見せられます。そして、その蝋燭は私の股間の上へ移動し、ようやく自分が何をされるのか理解した私は泣き叫び必死に哀願し許しを乞います。

十、恐怖で泣き叫ぶ私の膣内がライトで照らされ、私の子宮口が確認されます。そして、泣きながら哀願する私の膣内に容赦なく鑷が垂らされます。直接子宮口に熱鑞を垂らされた私は絶叫し、おしっこを漏らし失神してしまいます。しかし、失神した程度で許されるはずもなく、頬を打たれ覚醒させられると私は膣内が完全に鑞で埋め尽くされるまで膣を調教されてしまいます。

十一、膣を鑞で埋められてしまった私はさらにクリトリスの包皮を剥かれ小陰唇も拡げられ、おしっこを漏らしてしまった尿道口も含む敏感で柔らかな舟状窟にも直接熱鑞を垂らされてしまいます。真っ赤な鑞で完全に性器を封印されてしまった私は涙と鼻水とよだれで顔を汚し号泣しています。

十二、性器を封印された私は開脚されたまま仰向けに固定されます。

そして、私の鼻の穴から呼吸用のチューブが挿入されます。恐怖でただ震える私に口を開くよう命令されます。私が口を開くとそのまま押さえ付けられ、口の中にも鑞を垂らされます。口の中を鑞で埋められ悲鳴も上げられなくなった私の両眼が大きく開かされます。そして、容赦なく私の眼球に鑞が垂らされます。

十三、顔全体を鑞で固められ性器も封印された私は乳首に名札を付けられガラスケースを被せられると、再びその無様な姿を展示されてしまいます。

25、ゆかりの生理

25、ゆかりの生理

最近、順子はゆかりに書かせた小説を読むのが楽しみの一つになっていた。自分が痛めつけられる小説を書いてこいと、ゆかりに命令して書いてきた小説を初めて読んだ時、この女は間違いなく変態だと確信した。順子の頭では考えられない内容の小説が書かれていた。放課後、いつもの廃ビルに集まった順子たちは、まずゆかりを全裸にし痛めつけようとしたが、今日に限りゆかりが下着を脱ぐことに激しく抵抗する。

「今日はパンティだけは許してください」

泣きながら抵抗するゆかりだったが、結局押さえ付けられ無理矢理脱がされてしまう。脱がしたゆかりの下着の股間には赤く染まったナプキンが貼りつけてあった。

「はーっ、生理あったんだ、渡邊さん。この前随分犯されていたけど、まだ犯され足りなかったんだね」

「じゃあ順子ちゃん、今日は初めに渡邊のマンコ痛めつけようよ。どうせ、血塗れなんだし」

結衣が楽しそうにゆかりの股間に蹴りを入れようとしたが、靴が汚れるのを恐れて途中で足を止めた。

「危ない危ない、いつもの癖で渡邊のマンコ蹴っちゃうとこだった」

結衣は、廃ビルの中をウロウロ歩き回り、しばらくすると工事中と札のついた汚れた杭を拾ってきた。杭は5センチ角の太さで地面に刺す為、下は鋭角に削られている。順子は結衣から杭を受け取ると、自分が見つけてきた3センチ角の角材にぐるぐると針金が巻き付いた棒を見比べる。そして、まずは細い方からいくかと針金棒を持ち、にやりと笑う。

「渡邊さん、まずこれで性器の中、綺麗に掻き出してあげるよ。オリモノ多くて汚そうだもんね」

ゆかりは大きな作業机の上に仰向けに寝かされ、大の字に拘束される。順子はノートに何か書いていたかと思うと、それをゆかりに見せ、撮影が始まったらこの通りに言いなと命令する。そして、色々な角度から何人かの少女がスマートフォンで撮影を開始する。

「こんにちは、渡邊ゆかり、１３歳です。本日、生理中のゆかりは、血塗れのマンコを綺麗にお掃除していただく事になりました。オリモノ一杯、ゆかりの汚マンコ、アップで撮影予定です。汚物満載、苦痛満載の動画になりますので気を付けてください」

ゆかりの挨拶が終了すると、さっそくゆかりの膣に針金棒が突き入れられる。

「い、痛いぃぃーーっ」

ゆかりが悲鳴を上げるが構わず順子は針金棒を押し込み、グルグルと回転もさせ、その後激しくピストン運動させた。そして、一度膣

の外に出すとグルグル巻かれた針金に、どろりとした血の塊やオリモノが詰まっていた。それは、スマートフォンで鮮明に撮影されている。

「汚いな、渡邊さん。臭いも凄いよ」

順子は、その後も散々ゆかりの膣を針金棒で掻き回し痛めつけた後、抜いた針金棒をゆかりの口に入れる。

「自分のものなんだから綺麗にしなさいね」

口に針金棒を突き入れられながらゆかりは、同時に膣に工事中の杭を突き入れられる。

「ほごぅ、ほごぅ、ほごぅ」

塞がれた口で許しを乞うゆかりだが、杭はゆかりの膣にグリグリと押し込まれ、ようやく治りかけた膣がまたビリビリと裂かれていく。

「うごぅ、うごぅ、うごぅ、うごぅ」

大の字に拘束され身動き出来ないゆかりは涙と鼻水を流し苦しむが、そのゆかりの頬が平手でパンパンと叩かれる。

「うごぅうごぅ、五月蝿いんだよ」

順子はゆかりの頬を叩きながら結衣を呼ぶ。

「お湯、沸かしてくれる。渡邉さんの膣、消毒してあげないとね」

順子の残酷な笑みを見て結衣は、順子のやろうとしている事を想像し興奮してきた。

・・渡邉のマンコに熱湯かける気なんだ・・

結衣は、用意しておいたキャンプ用のシングルバーナーの上に水を入れたケトルを載せ火を点ける。しばらくしてお湯が沸く頃には、ゆかりは腕はそのままで両足の拘束は解かれ、頭の両側に足がくるように縛り直されていた。ちょうど上を向いたゆかりの膣に工事中の杭が深く突き刺さっている。

「あぼぼぼぼぼぼっ」

ゆかりはまだ順子に膣をグリグリと抉られていた。ゆかりは苦し気に呻いているが、これからされる事を知ったら気を失うのではと結衣は考えた。そして、結衣がお湯が沸いたと合図を順子に送ると、順子はゆかりの膣から杭を抜き、今度は膣鏡を根元まで突き刺し大きく開いていく。ゆかりは、ようやく膣と子宮を杭で抉られる激痛からは解放されたが、次は何をされるのか恐怖で顔を強張らせ泣いている。順子はそんなゆかりの目に黒い布を何重にも巻き付けて目隠しをしていった。

「これからされる事が見えると可哀想だから目隠ししたよ、渡邉さん。私、優しいでしょう?」

順子はわざとらしく言う。結衣は、目隠しなんかされたら余計に怖いじゃない。順子ちゃん、渡邉には容赦ないなぁと思いながら自分もゆかりの口にゆかりの下着を押し込んでいく。これからゆかりがされる事を思うと、絶対大声を出すに決まってるから口も塞いどかなきゃね。結衣は早くゆかりを痛め付けたくてウズウズしてきた。

「さあ、それじゃあ渡邉さんの膣消毒を開始しまーす」

順子が高らかに宣言し熱湯の入ったケトルを近付けていく。全員が、これから起こる事を期待し、スマートフォンを構えながら息を呑んで見つめていた。

「うわっ、きったねぇ！」

ゆかりの膣内を覗いた順子が大声を上げる。生理中の血やオリモノの他に、泥だらけの杭を突き刺されたりした為、ゆかりの膣内は酷い状態になっていた。

「じゃあ入れるよぉ」

順子は顔を背けながらゆかりの膣内に熱湯を注ぎ込んだ。

「ぶぎゃぁぁーーーーっ！！ばぼっばぼっばぼっぼぼぼぼぼぼぼぼっ！！！」

ゆかりは口を塞がれていても凄まじい悲鳴を上げ、そのまま意識を失い動かなくなった。

「おーい！　渡邉さん。生きてるかい？」

ピクピク体を痙攣させ気絶しているゆかりを撮影しながら、少女たちは大声で笑いあっていた。

26、無限浣腸

26、無限浣腸

読んでいた小説を読み終えた順子は自然と笑みが浮かんでいた。今日はこれでいこうか？順子の頭の中に様々なアイデアが浮かび、放課後が待ち遠しかった。一つ隣の席に座るゆかりを見つめると、ゆかりは真面目にノートを取りながら真剣な眼差しで授業を聞いていた。どこから見ても真面目な女子中学生だ。服装も校則通り膝上のスカートに、髪型も三つ編みお下げの黒髪だ。素っぴんの顔に細い黒淵の眼鏡をかけたゆかりは成績も優秀な優等生だ。そんな女子が、自分の奴隷かと思うとそれだけで順子は興奮してきた。今、真面目に授業を受けているゆかりの膣と肛門には、昼休みに挿入したままの性具が深く突き刺さっている。膣には極太のデルドゥが根元まで、肛門にも特大のアナルプラグが押し込まれていた。ゆかりがどんな状態で授業を受けているか知っている順子は、早いとここいつを痛め付けたいとそればかりを考えていた。

そして、待ちに待った放課後がやってくる。何時もの廃ビルへ行くまで我慢出来ず、体育館裏で順子はゆかりを殴り付けスカートを捲るよう命令する。

「足を開きな！」

順子はゆかりの開いた足の中心、デルドゥとアナルプラグが突き刺さっている股間を思い切り蹴り上げた。

「おっびゃゃゃーーっ！！」

股間を押さえてのたうち回るゆかりの無様な姿に興奮した順子は、更にゆかりに蹴りを入れる。

バキッバキッバキィィ…

「許して、姫野様、許して」

ゆかりの許しを乞う姿に余計に順子は興奮したが、なんとか自分を抑え廃ビルまでゆかりを連れ込んだ。

「今日はさ、こいつが自分で小説に書いてきた事をやろうと思うんだ」

「あっいいね。どれも苦しそうだもんね。渡邉さん、よほど苦しい目にあいたいんだね」

結衣はすぐに賛成し、他の少女も異論はなかった。そこで、さっそく準備が始まる。ゆかりはスカートと下着を脱がされ、作業机の上に四つん這いにさせられ、両腕と両足を机に縛り付けられる。ゆかりは下半身丸出しで、デルドゥとアナルプラグが挿入されている股間が丸見えだった。

「後ろの穴の方は抜いてあげるわ」

順子はアナルプラグを掴み、思い切り引き出すとズボンッと大きな音を立てゆかりの肛門から特大のアナルプラグが抜け、その開ききった肛門から、ぶびぃぃっぶっぶっぶっぶっとゆかりは放屁し、少し大便も漏れていた。

「くっさっ！ほんとにこの女、恥ってもの知らないんだね」

「また、消毒した方が良いかもね、順子ちゃん」

その消毒という言葉を聞いたゆかりは、悲鳴をあげ体をよじり必死に逃げようとする。

「あらら、渡邉さん、よほど消毒が嫌なんだね。だから、臭くて汚いのに。今度また消毒してあげるから、自分でも洗うんだよ」

ぶるぶる震えるゆかりに結衣が地獄の宣告をする。

「道具は置いてあるから、今日、この拷問が終わったら消毒してあげようよ。渡邉さんの消毒、楽しいし…」

結衣は、ゆかりの髪の毛を掴み顔を自分の方に向けさせると残酷に笑った。

「じゃあ、渡邉さん。苦しんでね」

順子たちは、ホースを持ってくると先端をゆかりの肛門に当て押し込んでいく。そして、２０センチ程ゆかりの肛門に挿入すると、ホースが抜けないようにガムテープを貼り付け厳重に固定した。

「始めようか」

順子の合図でポリタンクに入れてあった水を、ホースのもう片方の口に取り付けたジョウゴに入れていく。１８リットルのポリタンクだ。持ち上げる方も重労働であるが、それを入れられる方はたまっ

たものではない。
ゆかりの下腹部が段々と膨れてくる。

「ぐるじいぃいいいっ、だじげでぇぇぇぇっ」

ゆかりは涙を流し許しを乞うが許される筈もなく、休みなく肛門から水を流し込まれていく。

「おっおっおっおっ、だじげで、じんぢゃうっ！」

ゆかりは体をよじり、肛門からホースを抜こうとするが、体を押さえ付けられ水を注ぎ込まれる。

「おっおっおっおっおっ、おっばぁぁぁぁーーーーっ」

ついにゆかりは口から水を吐き出した。

「おっげぇぇーーーーっ」

涙を流し水を吐き続けるゆかり。

「はーい、一回、水止めて」

順子の言葉で、水を注いでいた少女たちがポリタンクを置く。

「ひゅう、ひゅう、ひゅう」

水が止まり、ゆかりが苦し気に呼吸する。

「いいよ。また、入れてっ！」

再び注ぎ込まれる水で、ゆかりの口からまた水が溢れ出す。

「おっぱぁぁぁーーーーっ」

「はい、止めて」

順子はゆかりが水を吐き出し呼吸が出来なくなるタイミングを見計らい、水を入れたり止めたりする。ゆかりは、この終わりなき水責めの拷問に苦しみぬく。そして、１８リットルのポリタンクの水がなくなり、ニ個目のポリタンクの水が注入され始めた。

「もお、ゆるじで」

力なく訴えるゆかりを笑いながら少女たちは撮影していた。
ゆかりは、その後も解放される事はなく。五個のポリタンクが空になる前に、少女たちは近くの公園に水を汲みにいき、この拷問が終了する気配は微塵も感じられなかった。

・・だじげで、だじげで・・

長時間に渡る拷問で、ゆかりの頭はもう早くこの拷問から解放される事だけを祈っていた。

27、風紀委員

27、風紀委員

ゆかりは今日もまたブルマ姿で〝駿河問い〟の拷問にかけられ、血の涙を流し嘔吐し泡を吹き意識を失いながら、激しくクルクルと回転させられていた。

「あばばばばばばばばば」

「何言ってるか分からないよ、渡邊さん」

少女たちがゆかりを見て爆笑していると、いつの間にかこの廃ビルの中に二人の少女が入ってきていた。

「あなたたち、何してるの？」

爆笑していた少女たちは、ギョッとして振り返るとセーラー服の少女が二人、順子たちを睨みながら立っていた。

「何なの？　あんたたち？」

「私は風紀委員の橘理津子」

日本人形のような綺麗な黒髪でロングヘアの少女が、その髪を手でばさっとかき上げながら言う。

「同じく私は香坂麗華」

もう一人のショートヘアの少女はセーラー服の袖に付けた赤い風紀委員の腕章を見せる。そして、理津子が順子たちを睨みつけながら言った。

「何をしているか、訊いているんだけど」

「あ、あの、みんなでここで遊んでいるだけですよ」

「そこで、ブルマで吊るされている子は随分苦しそうだけど?」

「えっ、いやっ、そんなことないですよ」

理津子はゆかりに近付くと、ゆかりの様子を確認し麗華と二人で縄を解きゆかりを床に下ろした。激しい拷問でゆかりは意識を失い体をビクンビクンと痙攣させている。その、ゆかりの目、鼻、耳から血を流し泡を噴いている口を、眉をひそめながら見ていた二人は順子たちに振り向いた。

「随分、酷い事をしたみたいね。まあ、いいわ。どっちにしろ、あなたたちにはお仕置きが必要ね」

「ほら、そこに整列しなさい」

順子たちは不承不承横一列に並んだ。

「まず、左端からいくわね。名前はっ?」

「か、柏木結衣、です…」

「じゃあ、結衣ちゃん。後ろを向いてスカートを捲くりなさい」

「えっ？」

「えっじゃないわよ。おとなしく言われた通りにしなさい」

結衣が後ろを向きスカートを捲り、白い下着がむき出しになる。

「尻叩き１００回いくからね。自分で声出して数えるんだよ。それじゃあ結衣ちゃん、覚悟してね」

理津子が竹刀を振りかぶると、思い切り結衣の尻を打ち据えた。

パシィッ

「痛いぃぃっ」

鋭い音がして結衣が悲鳴を上げる。

「ほら、ちゃんと数えないといつまでたっても終わらないよ」

「ひぐっひぐっひぐっ」

結衣は泣きながら、また尻を突き出す。理津子は、また思い切り結衣の尻を竹刀で打った。

「いじぃ」

パシィッ

「にぃ」

泣きながら結衣は、尻を打たれた数を数えていく。だが、５０回を超えるあたりから結衣の白い下着が赤く染まってくる。そして、ついに７０回で結衣は倒れてしまう。

「あらあら、まだ終わっていないのに」

理津子は残念そうに、倒れた結衣を見ながら肩を竦める。

「あのブルマの女の子がやられていた事、やってみたいな」

麗華が言いながら結衣の手首と足首を縛り始める。そして、その縛られている手足が一箇所にまとめられ一気に吊り上げられる。

「んぎぃぃぃーーーっ」

悲鳴を上げながら結衣は吊り上げられていった。

「いだいぃぃーーっ、だじげでぇぇーーっ、ゆるじでぐだざいぃぃーーっ」

しかし、理津子は結衣の腰に石塊をぶら下げていく。４個、５個、６個。

「ぐるじいぃぃっ、おれじゃうよぉぉっ」

結衣は頭と尻がくっつきそうなほど反り返り号泣しながらプシャー

と小便も漏らしていた。白い下着の股間の部分が黒く濡れてきたかと思うと、湯気をたてて透明な液体が溢れだした。

「おげげげげげげっ」

無様な声を上げる結衣を見ながら麗香がスマートフォンでなにか調べていたが、一人頷くと顔を上げる。

「理津子さん、これで吊り下げたまま回転させるようですよ」

麗香が、結衣の髪の毛を掴みクルクルと回していく。

「嫌だぁ、まわずのだげはゆるじでぐだぢゃいいいいいっ」

「へぇ、回されるの相当嫌みたいね」

麗香は楽しそうに結衣の体を回し続け、これくらいで一度放してみますと手を放した。その途端結衣の体が高速で独楽のように回転し、結衣の体が汗ばみ顔が赤くなってきた。

「ぶっびゃゃーーっぶぶぶぶぶっ」

赤くなった結衣の口から血が流れ、続いて目と鼻と耳からも血が流れ出した。

「へぇ、面白いわね。今度は私が回すわ」

理津子も楽しそうに結衣の体を回し始めた。

「やめでぇ、じんじゃうぅぅ」

血の涙を流し泣き叫ぶ結衣を無視して理津子は、麗香よりも多くぐるぐると結衣の体を回す。

「だれがぁ、だぢげでぇ」

必死に助けを求める結衣の顔を笑いながら見て理津子は、それっと手を放す。結衣の体は、一回目より更に高速で回転する。

「あびゅびゅびゅびゅびゅびゅびゅびゅびゅびゅびゅ」

結衣の顔が真っ赤になり、辺りに血が飛び散る。回転が止まったかと思うと今度は反対に回転する。それが繰り返され、ようやく本当に回転が止まった時には結衣は血の涙を流し鼻血を出し耳からも大量に出血し口からは血の泡を吹いて失神していた。
その無様な姿を笑いながら見ていた理津子は、面白いからあなたたちも全員吊るしましょう。と竹刀を構えて睨みつけた。

「ふざけるなよ、あんた何様のつもりだっ！」

堪えきれなくなった順子が、理津子に殴りかかるが簡単にかわされ逆に理津子に竹刀で鋭い突きを下腹部に入れられてしまう。

「うぎゃーっ」

悲鳴をあげ転がった順子の髪の毛を掴み麗香が立ち上がらせると腹部に思い切り拳を叩き込んだ。

「おげぇぇーーっ」

再び腹を押さえて転がる順子の顔面に容赦なく蹴りが入れられる。
順子は鼻血を出し、白目を剥いて気絶していた。

28、風紀委員2

28、風紀委員2

「まったく、この女はきついお仕置きが必要ね」

「そうですね、理津子さん。再起不能にしてあげましょうよ」

麗華は、コンクリートの床にあお向けで鼻血を流して気絶している順子の顔面にプッと唾を吐いてローファーでグリグリと踏みつける。そして、ジロリと並んでいる少女たちを見つめる。

「あなたたち、この女の服を全部脱がしなさい」

それでも、少女たちは動こうとはしなかった。

「あら、私たちの言う事きけばお仕置きは許してあげるわよ。それとも、この吊るされてる子と同じ目にあいたい？」

「い、いえ、私はやります」

一人が言うと次々に少女たちは私もと同意し、順子のセーラー服を脱がしにかかる。そして、順子のセーラー服とスカートを脱がし、ブラとパンティも脱がしていくが、そこで少女たちは、あっと声を上げる。パンティの股間部分がぐっしょりと濡れていた。どうやら順子は漏らしてしまっていたようだ。麗華は、全裸にされた順子を

スマートフォンで何枚も撮影する。そして、順子の体をごろっとうつ伏せにする。

「さあ、あなたたちで、この女の手首足首をまとめて縛ってくれる。それで吊るすから頑丈にね」

少女たちは麗華に言われた通り、順子の手足をまとめて厳重に縛り上げる。そして、理津子と麗華は、順子の体を吊り上げる。

「あぎゃぁぁぁーーっ！痛いぃぃーーっ！千切れるぅぅーーっ！！！」

吊るされて、あまりの激痛に覚醒した順子が悲鳴を上げる。

「あれれ、自分がやってた事でしょう。千切れたりしませんよ。でも、これからもっと酷い事をして差し上げますから、折れたり千切れたりしちゃうかもですね」

理津子が残酷に笑い、竹刀を構える。

「これから、まず、あなたのマンコ突き１００回します。今まで５０回まではマンコに突きを入れた事がありますけど、その女子はマンコ使えなくなって自殺しちゃいました。あなたには、その倍の１００回突き入れますから、当然マンコは二度と使えなくなるでしょうね。ふふっ」

理津子は楽しそうに笑うが、順子は手足の痛みも忘れて青ざめる。

「そんな、なんで私がそこまでされるの？あんたたち頭がおかしいんじゃないの」

「あなたみたいな女には、中途半端は駄目なのよ。徹底的に無茶苦茶に壊さないとね。あなただって自分がどんな女か分かってるでしょ。まあ、もう女じゃなくなるけどね」

理津子は少女たちを見ると、この女の足を開いて押えときなさいと命令する。少女たちは吊られている順子の両側にまわると、順子の足を持ち大きく拡げる。

「さあ、いくわよ。覚悟しなさい」

「ちょっと、待って！本当にそんな事する気？犯罪じゃないの？訴えるわよ！」

「犯罪？よくそんな事言えるわね。あなたのやってる事はなんでしょうね。それに、あなたのような女は世の中に必要ないから裁いてあげるのよ。神様が罪人を裁くのに犯罪だと言う人はいないでしょう。あなたは自分のやってる事、正しい事だと思ってるの？　どうせ反省なんかしないだろうから、私たちが裁いてあげるのよ」

「何？　自分を神だと思っているの？　やっぱり、あんたたち頭がおかしいわ。それに私に、こんな事したら祐一が黙ってないわよ」

麗香がスマートフォンを操作して、理津子に見せる。

「要注意リストにある　”佐瀬祐一　”ですね」

「ああ、それならこれを機会に彼にも廃人になってもらいましょう」

麗香は、分かりましたと電話をかけていた。

「ちょっと、何こそこそ話してるの？」

二人の態度に不安になった順子が尋ねるが、理津子はもう順子と話す気はなかった。

「もう、話してても時間の無駄ね。いくわよ」

理津子は竹刀を構え順子の性器に狙いをつける。

「まずはここっ！！たぁぁーーっ！！！」

理津子は掛け声と共に鋭い突きを順子の性器の小さな突起クリトリスに突き込む。

「うっぎゃぁぁーーーーっ！！！」

絶叫する順子のクリトリスがプチッと潰れ血が飛び散る。

「あっ、あっ、あっ、あっ」

無様に涎を垂らしガクガクと震える順子を見て理津子と麗華が爆笑する。

「まだ1回ですよ。あと99回あります。前の女はもう少し耐えましたけどね」

「まあまあ、理津子さん。その程度の女なんですよ」

「ああ、そうだ。麗華さん、そっちの吊るしてある子も、もっと回

して苦しめてあげてくだい」

「そうですね、石塊ももっと提げますか。どうやら、この二人が首謀者のようですし」

「ええ、そちらの子は麗華さんに任せますわ。徹底的にお願いしますね」

「はい、二度とこんな事が出来ないよう徹底的に痛めつけますよ」

麗華は言ったようにすぐに結衣の腰にまた石塊をぶら下げ始めた。

「うぎゃぁぁーーーっ！！！！」

背骨が折れる程の激痛に結衣が覚醒し絶叫する。二人の風紀委員は笑いながら順子と結衣を見つめていたが、この二人を再起不能にする為にもっと痛め付ける必要があると判断しスマートフォンを手に取ると電話をかける。

「西園寺くん？　橘です。いつもの道具、持ってきてもらえる？そう、もちろん手伝ってもらうわ」

「西園寺くん、ＯＫですか？」

「ええ、彼が到着するまでに、この女のマンコ壊しておかないとね」

理津子は再び竹刀を構え、順子の性器に狙いを定める。クリトリスは、もう潰したので今度は膣だ。いよいよ順子は大切な性器を壊される事になる。しかし、当の本人はクリトリスを潰され壊されたショックで、まだ呻き声をあげ周りの事に注意がいっていなかった。

むしろ、順子の足を押さえている少女たちの方が、これから起こる事に恐怖を覚え震えていた。

「さあ、ここからは地獄の苦痛になりますよ。我慢しないで遠慮なく泣き叫んでください」

理津子が楽しそうに竹刀を構える横で、麗香が石塊を追加した結衣をグルグルと回していた。そして、回しながら結衣の耳に口を近付け残酷な宣言をする。

「結衣ちゃん、あなたも、あっちの子のマンコ処刑が終わったら、理津子さんに同じ事をしてもらうからね。もう結衣ちゃんはオナニーも出来なくなるんだよ。良かったね。こんな事しなければ普通の女の子でいられたのにね」

結衣は口をパクパク動かし、目からは大粒の涙がこぼれ落ちた。

29、風紀委員3

２９、風紀委員３

号泣する結衣に構わず麗香は、グルグルと回転させ手を放す。再び結衣は独楽のように高速で回転する。

「だじげでぇぇーーっ！！おっぱぁぁーーっ！！」

結衣の目、鼻、耳、口から、また血が流れ出す。そして、ようやく回転が止まったと思うと麗香はまた結衣の体をグルグルと巻き上げていく。

「あっちの子のマンコ処刑が終わるまでは結衣ちゃんには、これで苦しんでもらうからね」

「もう、ゆるじでぐだぢゃい。しんぢゃうよぉぉーーっ」

「ふふっ、大丈夫。殺したりはしないわよ。でも、死んだ方が良いと思うかもね」

「いやだぁぁ！もうこんな事じまぜんがらぁぁ！！ゆるじでぐだぢゃいぃぃーーっ！！！」

「ダーメ！！　もう結衣ちゃんの処分は決定してるの。あっちの子と一緒に女を辞めてもらうのは勿論、廃人になってもらうのは確定

済み。お友達は選ばないとね」

「だって、私、順子ちゃんに言われてやってただけですよぉ。だから、だじゅげでぇぇーーっ！」

「あの子、順子っていうんだ。フルネームは？」

「姫野順子ですぅ。おねがい、ゆるじでえぇ」

「残念、結衣ちゃん。結衣ちゃんみたいな女の子はね、もうやりませんと言って必ずまた同じ事をやるのよ。だから、私たちは再発防止で徹底的に処分するの。それに、結衣ちゃんたちが撮影してた動画観ると、結衣ちゃん、随分積極的に参加してたよね。だから、結衣ちゃんもアウトなの」

もう自分は、この残酷なお仕置きから逃れられないと悟った結衣は激しく号泣する。麗香は、順子がマンコ処刑される様子を結衣に見せる為、顔の向きを順子の方に向けた。そこでは、理津子がまさに順子の膣に突きを入れるところだった。

「たあぁぁーーっ！！」

理津子の掛け声と共に竹刀の剣先が順子の膣に突き入れられる。

「ぶっひぃぃぃーーーっ！！！」

絶叫する順子に構わず理津子は、休む間も与えず続けて順子の膣に突きを打ち込む。

ドスッドスッドスッドスッドスッドスッドスッ！！

順子の膣は血塗れになっていた。順子は全身汗ばみ、顔は涙と鼻水と涎でグショグショになっている。理津子は一旦順子の膣に突き入れるのを休止すると、前に回り順子の髪の毛を掴むとグイッと顔を上げる。

「あらあら、こんなに顔、汚して。でも、あなたの元の顔よりも良い顔だわ」

「こんな事して楽しいの？　あんたたちにも天罰がくだるわ。私は絶対、許さないから」

「はいはい。いつまでその元気が続きますかね。それに、あなたは廃人にされるのよ、分かってる？」

理津子は再び順子の後ろに回ると竹刀を構えた。

「たあぁぁーーっ！！」

掛け声と鋭い突きが順子の膣に突き刺さる。

「ぶびぃぃぃーーーーっ！！！！」

順子の絶叫と血が飛び散った。

「おそらくあと1、2回で、今度は子宮の中にも突きが入りますよ。そこで、あなたの女は終わりです」

理津子は残酷に笑い、今まで以上に力を込めて突きを繰り出す。その渾身の突きは順子の子宮口を抉じ開け、子宮内にまで到達した。

「おっぎゃあぁぁぁーーっ！！あばばばばばばばばばばばばばっ」

「ほーら、続けていきますよ！」

グチャ、グチャ、グチャ、グチャ、グチャ、グチャ、グチャ

順子の膣から夥しい血が流れ出す。順子は口から泡を吹きながら意味不明の声をあげていた。その凄惨な順子の姿に、足を押さえている少女たちも泣き出している。

「たあぁぁーーっ！！」

続けて突きを入れる理津子が、あれっという顔をする。

「あっ手元が狂ってお尻の穴に入れてしまいました。肛門は裂けたみたいですが、まあ大丈夫でしょう」

理津子は笑いながら竹刀の先を見ると、順子の大便がべったりと付いていた。

「あら、汚いですね。でも、あなたのマンコに突き入れていれば綺麗になるでしょう」

そして、理津子は大便の付いた竹刀をそのまま順子の膣に突き入れ子宮の中まで押し込んでいく。理津子は、さらに突きを繰り出すときに回転を加え順子の子宮を徹底的に壊していく。その容赦ない責めに、ついに順子の心も崩壊する。

「だじげで！もう、だじげで！！ゆるじでぐだぢゃい！！！マンコ

いだいぃぃーーっ！！！」

「あら、そんな小さな声では聞こえませんわ」

「ごめんなざいぃぃ！！もう、ゆるじでぐだぢゃいぃぃーーっ！！しんぢゃいまずぅぅーーっ！！！」

「分かってきましたね。今さら遅いですけどね。さあ、まだまだ半分以上残ってますよ。反省しながら苦しんで下さい」

「もう、いやだぁぁ！！だれがぁ、だじげでぇぇーーっ！！！じぬぅぅーーっ！！！」

泣き叫び必死に逃れようとする順子の性器と肛門から、血がドクドクと流れ出していた。順子の性器は、この時点でもうボロボロであったが、勿論、理津子は途中で止めるつもりはまるでなかった。その、順子の無様に泣き叫ぶ哀れな姿を見て結衣は、次は自分の番かと思うと恐怖で体が震え涙が止まらなかった。

「結衣ちゃん、ただ待ってるのも嫌だよね？私も暇だから、もっと痛め付けてあげるね」

麗香の言葉で結衣は震え上がった。

３０、風紀委員４

３０、風紀委員４

「これ、何だか分かる？」

「釣り針？」

麗華は、結衣の目の前でぶらぶらと手に持った釣り針を揺らす。その釣り針には反対側に重りが取り付けられていた。結衣は、嫌な予感がして顔をゆがめる。

「これから結衣ちゃんの体に一杯ぶら下げてあげるね。結衣ちゃんも動画の中で同じような事やってたよね。ふふっ」

麗華は楽しそうに笑い、結衣の乳首を摘まむ。

「ひいぃぃ！やめでぐだじゃいぃぃーーっ！！」

しかし、麗華は摘まんだ結衣の乳首に針先を当て、プツッと釣り針を突き刺す。

「ひぃぎぃぃぃーーーーーっ」

「本当に結衣ちゃんはいい声で悲鳴あげるね。一個づつぶら下げていって、それから数増やしていくからね」

麗華は結衣の二つの乳首に釣り針で重りをぶら下げた後、今度は結衣の顔に移り舌先、上唇、下唇、鼻、耳と次々に釣り針を突き通し重りをぶら下げていく。

「いだいよぉぉーーっ！　いだいぃぃぃーーーーっ！！！」

「ふふっ、結衣ちゃんの可愛い顔が台無しだね。でも、もっと酷くしていくからね」

麗華は容赦なく結衣の両唇に釣り針を突き刺していく。もう上唇に五個、下唇にも五個、舌にも五個と、口だけで１５個もの重りがぶら下げられていた。一つの重りが１００グラムあるため、口だけで１．５キロの重さになる。結衣の唇と舌が、びろーんと伸び口から涎が溢れ出る。

「あぶぶぶぶぶぶぶぶっ」

喋ることも出来なくなった結衣が悲し気に声を上げる。麗華は、結衣の鼻、頬にも追加でどんどん釣り針を刺していく。

「あはっ、結衣ちゃん、凄い顔になったよ。次は、結衣ちゃんのおっぱいにいこうか」

麗華は、結衣の乳首にさらに釣り針も突き刺していく。そして、乳首だけでなく結衣の小さな胸の膨らみ乳房にも釣り針を突き刺し始めた。

「おごっ、おごっ、おごっ、おごっ」

結衣は涙を流し、重りのぶら下げられた口を動かす。

「何？　何言ってるのか、わからないわ」

麗華は結衣の口に耳を近づける。

「ゆるじでぐだぢゃい。おねがいじまぢゅ。だじげでぇ、こわいですぅ」

泣きながら訴える結衣に、麗華は冷たく言い放つ。

「大丈夫。もう少しすれば発狂して何も感じなくなるからね」

「やだよぉ、そんなのいやだぁ！　ごわいよぉ、ゆるじでぇぇ！！」

「じゃあ、一杯重りぶら下げたから、また回していこうね」

顔面に合計3キロ、胸にも合計3キロの重りを釣り針でぶら下げられた結衣を、麗華はグルグルと回していく。結衣の泣き声が大きくなる。

「じゃあいくよ、結衣ちゃん」

麗華が手を放すと結衣は独楽のように高速で回転する。

「うぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼっ」

重りの重量でさらに回転に勢いが増し結衣の顔が真っ赤になる。

「おっぱぁぁぁーーっ」

今まで以上の勢いで結衣の目、鼻、口、耳から血が流れだす。そして、いくつかの重りが遠心力で結衣の体を引き千切り飛んでいった。結衣の唇、舌、乳首が千切れ血が噴き出す。

「重りが全部千切れ飛ぶまで回してあげるね、結衣ちゃん」

凄まじい責めを受けている結衣の隣でも順子が絶叫していた。

「やっと残り３０回ですね。ここからはこれを竹刀に付けて突きを入れますね。使用するのは初めてですから興奮しますわ」

理津子は、にやりと微笑み竹刀の先端にアダプタを取り付ける。それは一面に無数の鋭い棘が付いたアダプタだった。それを取り付けたことで太さも一回り以上太くなっている。

「さあ、それではいくわよ」

理津子は順子の血塗れの膣に鋭い突きを容赦なくぶち込んだ。それは、順子の子宮まで串刺しにする。

「あっばぁぁぁーーーーーっ！！あばばばばばばばばばばばっ！！」

順子から人間とは思えないほどの凄まじい絶叫が迸る。理津子は、竹刀を順子の子宮から抜く時にグリッと竹刀を回転させ肉を抉る。

ズボッ

理津子が竹刀を抜くと順子の膣口から血が溢れ出した。順子の足を押さえている少女たちが、ひぃーっと悲鳴を上げる。

「あら、大丈夫よ。子宮や膣がなくても死にはしないから。もうこの子は女としては終わりだけどね。この穴を使って気持ちよくなる事は二度と出来ないわね。あなたたちも、こんな風になりたくなかったら私たちの言う事をきくのね」

震えて返事も出来ない少女たちに理津子は、もっと大きくその子の足を開きなさいと命令する。そして、大きく開いた順子の股間、もはや何度も突きを入れられ開いたままの血を溢れだす順子の膣に狙いをつけ、理津子は容赦なく突き入れる。

ズボッ!!ズボッ!!ズボッ!!ズボッ!!

「あばぁっ!あばぁっ!あばぁっ!あばぁっ!」

順子は繰り返される自分の膣と子宮を襲う激痛に正気を保てなくなっていた。それでも、繰り返される子宮破壊に、とうとう順子は発狂してしまった。

「あばばばばばばばばばばばばばばばっ」

「あら、まだ終わってませんのに発狂してしまいましたか。でも、終わりまできっちり突き入れますからね。もう、膣も子宮もなくなってるでしょうけど。ふふふっ、そーれ、まだいきますよ」

ズボーーッ!!グリィ!ズボッ!!

「あびゃぁ!あびゃぁ!!」

条件反射で順子は突きを入れられる度に悲鳴を上げる。

「さあ、それでは最後の1回になりました。最後は私の一番強力な回転突きで終わりにします」

理津子は竹刀を構え精神を集中すると、理津子の体からオーラのようなものが立ち上がる。

「だりゃぁぁーーーっ!!」

今まで以上に気合の入った理津子の掛け声と共に、高速の突きが更に回転され順子の膣に突き刺さる。その凄まじい威力で順子の小陰唇や大陰唇、膣壁、全てが抉り取られ子宮もぐちゃぐちゃに破壊される。

「ぶっぴぃぃーーっ!!あば、あば、あば、あば、あば」

理津子は、順子の髪の毛を掴んで顔を上げさせると、にこりと微笑む。

「お疲れ様、マンコ１００回突きは終了ですよ」

「あはぁ、わだぢ、マンコ壊されちゃいましたぁ。あひゃひゃっ」

発狂した順子に反省の色が見えない事に理津子は不満を覚え、早く西園寺くんが来ないかしらと心待ちにしていると麗華が、こっちの子もマンコ破壊お願いしますと言ってきた。

「ああ、それなら、初めからこのアダプタを付けて突きますわ。そうすれば、３０回も突けばマンコなくなりますからね」

「お願いします、理津子さん。マンコは無傷で残してありますから、徹底的に破壊してくださいね」

理津子は少女たちに結衣の足を開かせ、アダプタ付きの竹刀を構える。結衣は顔面と胸を血塗れにして気絶していた。

31、風紀委員5

31、風紀委員5

結衣は、自分の股間から下腹部を襲う凄まじい激痛で覚醒する。

「おっぎゃぁぁぁぁーーーー！！」

まだ、結衣は自分の体に何が起こったのか理解できなかった。股間から自分の体を貫くように焼け付く痛みに気が狂いそうだった。が、続けてまた同じ痛みが襲う。そして、更に続けて次の痛みは結衣の体の奥深くまで貫いた。

「あっばぁぁぁぁーーーーっ！！！」

結衣はようやく自分の性器が破壊されているのだと気付いた。順子が受けていたあの恐ろしく凄まじい性器を破壊する責めを自分も今受けている。先程の体の奥深くまで貫いた痛みは、おそらく子宮を串刺しにされた証だと理解した。もう自分も順子のように泣き叫びながら性器を破壊されていく。恐怖と激痛で結衣は目が霞んできた。その結衣の目の前に麗華が立っている。

「ひどいよぉ、もお私死んじゃうよぉ。だじゅげでぐだじゃい」

結衣は、藁にもすがる思いで麗華に必死に懇願する。

「それより、結衣ちゃん。せっかく付けてあげた重り、みんな取れちゃったから、また付けてあげるね」

麗華は、結衣の必死の願いもまるで無視し結衣の舌を無理矢理掴み釣り針を突き通していく。結衣は顔面に釣り針で重りを付けられながら、同時に性器も破壊されていた。結衣の膣は既に血塗れで、もう子宮まで深く突き入れられ女としての機能は全く果たせなくなっていた。

「あわわわわわわわわっ」

「ふふっ、痛いよねぇ、苦しいよねぇ、結衣ちゃん。今度は瞼にも付けてあげるね」

結衣は上下の瞼にも重りをぶら下げられ、顔面に32個もの重りがブラブラと揺れていた。そして、結衣は胸にもまた重りを付けられ、性器に突きを入れられる度に顔面と胸の重りが激しく揺れ、結衣を痛めつける。

「あっびゃぁーーっ」

ぶっぴーっぶりぶりぶりぶり

結衣は、大きく放屁すると大量に大便を漏らし始めていた。

「汚いですね。あなたたち、その子のしたウンチ、全部その子の膣の中に詰めてください」

理津子が少女たちに命令し、少女たちは結衣の大便を床から取り、結衣のポッカリと開いたままの膣に詰めていく。結衣の性器の中が

大便で埋め尽くされたのを満足気に見つめた理津子は回転突きを放つ。高速で回転する棘付きアダプタが装着された竹刀が結衣の膣から子宮に突き刺さり大便を子宮の中まで押し込みながら子宮の肉もグチャグチャに抉る。

「あびゃびゃびゃびゃびゃびゃ」

「頑張るねぇ結衣ちゃん、まだ正気を保っているんだ。ふふっ、それなら、そこのあなた、こっちに来なさい」

一人震えていた少女を麗華は呼びつけると棘の付いた鞭を渡す。棘鞭と云われる西洋で処刑に使用される凶悪な鞭だった。

「その鞭で結衣ちゃんの胸を思い切り打ちなさい。結衣ちゃんの胸に付いてる重りを全て叩き落せなければ、あなたのマンコも壊してもらうわ。ちゃんと見ているから手加減してるのが分かったら即アウトにするからね。もう結衣ちゃんは女じゃないから、必要ない胸、全部抉りとる気持ちでやりなさい」

「ひぃぃ、分かりましたぁ、やりますぅ」

少女は思い切り結衣の胸に鞭を叩き込んだ。

ビシィーーッ!!

「あがががががががっ」

たった一発で結衣の胸は血塗れになり、いくつかの重りが吹き飛んだ。それを見ながら麗華も鞭を持ち、自分は結衣の顔面に狙いをつけ容赦なく鞭を叩き込む。それを見て理津子も完全に結衣の股間を

破壊しようと考え、足を拡げている少女にチャッカマンを持たせる。

「いい、足を拡げながらそのチャッカマンで、その子のクリトリスとおしりの穴を焼きなさい。分かりましたか？　黒焦げになるまで焼くのですよ」

少女たちはあまりの恐怖で震えが止まらず声が出せず、強張った顔ではいと頷きチャッカマンに火を点けると結衣のクリトリスと肛門を炙り始めた。肉の焦げる臭いが辺りに漂う。そして、理津子も更に激しく結衣の性器に突きを入れる。まだ中学生の結衣が同時に五か所も激しく責められ女として人間として壊されていく。そんな地獄の激痛を３０分以上も与えられ続け、結衣の頭は狂い始めていた。棘付きアダプタを何度も突き入れられ子宮も膣も二度と使用出来ないよう徹底的に破壊され尽くし、火で炙られたクリトリスと肛門は真っ黒く焼け焦げ炭になり、重りを付けられたまま激しく鞭を叩き込まれた顔面と胸もぐちゃぐちゃに壊され、結衣はついに発狂した。

「あひゃひゃひゃひゃ」

顔面も胸も股間も血だらけでグシャグシャに壊された無様な体で、結衣は泣きながら笑い続ける。それでも結衣は許されず痛め付けられていた。そこへタイミング良く西園寺が機材を持って到着する。もう女としての機能を完全に破壊され発狂した順子と結衣だが、まだまだ許される事はなく、二人の女子に対する容赦ない責めは、この後も続いていく。

「お待たせしました。急いで組み立てますね」

西園寺は慣れた手つきで機材を組み立てていき、あっという間に完成させる。それは古来より女性の拷問に使用されていた三角木馬で

あった。さっそく、順子と結衣を降ろし背中合わせに二人を木馬に跨らせる。破壊され尽くした性器に三角木馬の鋭角が激しく食い込み、更に二人の性器を痛め付ける。そして、理津子たち三人は、順子と結衣をそのまま一緒に縛り上げていく。二人は背中をぴたりと合わせたまま身動き一つ出来ないよう一つの物のように厳重に拘束され、口には自分たちの穿いていた下着を詰められたうえボールギャグが装着され、目にも黒い布でお互いの頭も動かせないように一緒にグルグル巻きにされ目隠しされる。

「最初は１０キロでいいですよね」

西園寺が確認しながら二人の足に鉄球を取り付けていく。片側１０キロの鉄球が両側、二人の両足に取り付けられ計２０キロの鉄球が二人の足にぶら下がり更に性器に三角木馬が食い込んでいく。

「あばばばば」「おぼぼぼぼ」

「二人同時に三角木馬に跨らせた事は初めてですけど面白いですね。二人一緒に拘束してるからか、人ではなく物みたいですよね」

西園寺が感激したように言うが、理津子と麗華は特に感じる事はないようで残った三人の少女に目を向ける。

「さて、あなたたちはこれから犯されます。犯されるだけですんで良かったですね」

「この二人と同じ目にあったら嫌でしょう?ちゃんと言う事きくのよ」

理津子と麗華は三人に服を脱ぐよう命令する。そして、四つん這い

になって尻を突き出すように姿勢をとらせる。

「では西園寺くん頼みます。私たちは、あの二人の仕上げをやっておきますので」

理津子と麗華は順子と結衣に向かい、残された西園寺は泣きながら尻を突き出している中学生女子三人を順番に犯していく。当然、膣内に中出しし口で奉仕させると次の女子を犯す。それを繰り返し、性器だけでなく三人の肛門も犯していった。その間、理津子と麗華は順子と結衣の両耳に爆竹を詰めていた。そして、何の躊躇いもなく導火線に火を点ける。

ボンッ！！！！

順子と結衣の耳に入れた爆竹が破裂し、二人の耳から血が流れだす。

「これで鼓膜が破れましたから、何も聞こえなくなりましたね」

「じゃあ、これで一晩このまま放置して、あとは西園寺くんに任せましょう、理津子さん」

その西園寺が三人の少女を犯し終えてやって来た。

「西園寺くん、いつものように一週間お願いします。明日の朝は私たちも来ますけど、その後はお願いしますね」

「了解しました。毎日、鉄球片側一つ計二個追加でいいんですよね。一週間で１４０キロか、少し軽すぎませんかね。今回、二人なので倍でもいいかと。あとは毎日鞭打ち１００回ですよね」

「そうですね。それでは鉄球は倍でお願いします」

三角木馬に跨され呻き声を上げる順子と結衣を見て、ようやく理津子と麗華はすっきりとした顔になった。このまま三角木馬に跨されて毎日鉄球を追加され、目も見えない、耳も聞こえない、喋る事も出来ない、そんな状態で一週間もたてば、元の人間に戻ることは不可能だろう。もう人間の形をした物である。このまま二人はオブジェとして、どこかに飾るか展示するのが一番有効な使い道ではないかと考える理津子であった。そして、その時ふと理津子はある人物の名前が浮かぶ。そうか、あの女にこの二人を渡せば、それで済む。理津子は残酷に微笑むと〝豪徳寺葉月〟の電話番号をプッシュすると、二人の引き渡しを伝えた。

「理津子さん、どこに電話したんですか?」

「豪徳寺葉月という女よ。頭のおかしいサイコパスね。あまり関わりたくない相手だけれど便利な時もあるのよ。いつか私が制裁を加えたい相手の一人でもあるわね」

「そんな女がいるんですか?」

「ええ、その女はもう改心の余地はないわね。なにしろ実の妹も処刑したらしいから」

「本当に?そんな女こそ制裁が必要ですね」

「まあ、今はあの女は凄い権力を持っているから、こちらも利用させて貰うわ」

理津子は、さあ行きましょうと麗香を促し、西園寺に後は宜しくお

願いしますと告げると歩き出した。

32、風紀委員6

32、風紀委員6

一晩明け理津子と麗華が廃ビルに来てみると、西園寺がすでに三角木馬に跨された順子と結衣の体に鞭を浴びせていた。

ビシィ！ビシィ！ビシィ！ビシィ！

「おごうっ、おごうっ、おごうっ、おごうっ」

鞭の激しい打撃音と口を塞がれている順子と結衣の呻き声が響き渡っている。

「お早うございます。西園寺くん」

理津子が声をかけると西園寺は鞭を打つのを止め振り返る。

「お早うございます。理津子さん、麗華さん」

「おはよう、西園寺くん。また女の子の胸ばかり鞭で打って。顔や下腹部や太ももも打ってあげなさいよ」

「すいません、麗華さん。女の子の胸を鞭で打つのは最高に気持ちいいので、つい」

「まったく、西園寺くんは変態ですね。でも、他の女の子にはそんな事をしないで下さいね」

「もちろん、理津子さんたちに依頼された時以外はしませんよ。僕だって風紀委員ですからね」

「よろしい、よく言えました」

「当然ですよ。それに僕が好きなのは、橘理津子さん一人だけですから」

「こんな所で告白ですか。まあ今は昔とは違いますからね。不純異性交遊なんて私は言いません。合意のうえであれば何も問題ないでしょう。でも、すみません、西園寺くん。君には色々と手伝ってもらって有難いと思っていますが好きだという気持ちはまったくありません」

「分かっていますよ。そんな理津子さんが僕は大好きなんです」

「なるほど、もしかしてですが西園寺くんは私の胸も鞭で打ちたいと思っているんですかね」

「えっ、いや……。実は理津子さんを拷問する妄想で毎日自慰していました」

「正直ですね。それにしても私を拷問する様子を妄想して自慰なんて西園寺くんらしいわ。いいですよ。お好きなように拷問してください。これは合意のうえですから君を咎める者はありません。麗華さん、証人になってくださいね」

「はい、理津子さん」

「では、どうぞ西園寺くん。遠慮なさらず私を拷問してください。全部の穴も犯してくれて構いませんよ。ああ、もちろん君の気の済むまでやってください。私が、泣いたり苦しんでも気にしないでくださいね。途中で止めたら却って不満になるでしょうから」

「本当にいいんですか？　理津子さん」

「もちろんです。君の普段の献身と好意に対する私の感謝の気持ちですから」

「嬉しいです。今日は最高の日だ。もう僕は死んでもいい」

「死なれてしまっては困りますよ、西園寺くん。これからも私の為に力を貸してくださいね」

「はい、理津子さん。僕はこれからも必ず理津子さんの力になる事を生涯誓います」

「さあ、それではいつも君が妄想しているように私を拷問して犯してください」

さっそく腹這いにさせた理津子の手首足首を背中側でまとめて縛りつける。

「これだけでも、かなり苦しいですね」

「これから、もっと苦しくなりますよ、理津子さん。それでは吊るします」

西園寺は理津子を吊り上げていく。律子の手足が引き伸ばされ、理津子の体が空中に浮き、ぎしぎしと理津子の骨の軋む音がする。

「うっうっうっうっ」

理津子の整った綺麗な顔が歪み、目から涙が零れ落ちる。西園寺は自分の腰の位置で理津子吊り上げるのを一旦止める。そして、西園寺は自分の硬く勃起した性器を出し律子の頭を押さえ付ける。理津子は、目の前の西園寺の性器を見つめ察したように口を大きく開ける。西園寺は、その開けた理津子の口から喉の奥の奥まで、自分の猛り立った性器を容赦なくぶち込んだ。理津子は呼吸が出来なくなり逃れようとするが、西園寺は理津子の頭をがっしりと押え、さらに奥まで性器を突き入れる。理津子の目から涙が溢れだす。そして、西園寺は理津子の頭を押さえたまま激しく腰を振りだした。

「おごっおごっおごっおごっ」

理津子は泣きながら喉を犯され、激しく腰を振る西園寺の腰で鼻も激しく殴打され鼻血も流れ出していた。

「ああ、理津子さん。僕は今本当に理津子さんの喉を犯しているんだ」

西園寺の腰の動きが更に早く激しくなる。

「あぁぁーっ理津子さぁん」

西園寺は理津子の喉奥に激しく放出していた。息を荒くしながら西園寺は続けて吊られている理津子の体をくるりと回し理津子の股の

間に立つとスカートを捲り理津子の白い下着の股間部分を切り取る。理津子の性器が露わに晒される。西園寺は理津子の性器を両手で拡げると顔を近づける。

・・理津子さんのマンコ、なんて良い匂いだ・・

西園寺は、さらに理津子の性器を舐め始める。膣口、尿道口、会陰部、膣前庭を執拗に舐め、膣と尿道には舌先を突き入れた。西園寺に性器を愛撫されているうちに理津子は、クリトリスを硬く勃起させバルトリン腺から粘液を分泌し始めた。

「おっおっおっおっおっ」

理津子の口からも小さく声が漏れ始めている。

・・理津子さんの味も最高だ。特に尿道付近の、おしっこの味と混ざりあってるところがいいな・・

理津子の性器を犯す前に、理津子の小便も飲みたくなった西園寺は、麗華を振り向く。

「麗華さん、拷問用に色々な道具を持ち歩いていますよね。カテーテルとプジーとおしりに入れる一番大きなプラグ貸してくれませんか？」

「ええっ！　でも……」

「いいんですよ、麗華さん。彼の好きなようにやらせてあげてください。私の事は気にしないで大丈夫です」

「はい、分かりました。理津子さん」

理津子の言葉で麗華は、西園寺に一式を渡し、西園寺はその中から導入用にカテーテルを取り出す。それも拷問に使用するカテーテルの為、太いのは勿論、表面がヤスリ状に加工され、使用された者の尿道を破壊する為のカテーテルだった。そして、西園寺は理津子の尿道口に、その凶悪なカテーテルの先端を当てると、力を入れて理津子の尿道に突き刺していく。

「い、痛いっ」

理津子が小さく悲鳴を上げる。

「うっうっうっうっうっびゃぁぁーーっ」

尿道を削られ裂ける激痛になんとか耐えていた理津子だったが、とうとう膀胱に突き入れられ括約筋を破壊されると、さすがに号泣しだした。

「痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い」

痛い痛いと泣き続ける理津子に構わず西園寺は、理津子の尿道に突き刺したカテーテルを銜え、理津子の小便を飲み始める。

・・おしっこも美味しいです、理津子さん・・

理津子の小便をゆっくりと味わいながら飲んでいるうちに、再び硬く勃起してきた西園寺は立ち上がり理津子の膣口に自分の性器を当て、そのまま突き入れた。そして、また激しく腰を振る。

「おっおっおっおっおっおっ」

理津子の声がだんだん大きくなってくる。

「西園寺くん、かまわず私の中に出してくださいぃぃ！！」

理津子が絶叫していた。

「うびぃぃーーっ！！」

理津子がイクと同時に西園寺も射精していた。

「ハァハァハァハァ」

息を荒くしながら西園寺が理津子の性器を見ると、理津子は性器を激しく濡らし糸を引いている。

「理津子さん、気持ち良いのはここまでです。ここからは苦痛しかありません。覚悟して下さい」

「どうぞ西園寺くんのやりたいように拷問して下さい。私は何をされても構いませんよ」

理津子は、いつもの凛とした表情で西園寺に告げる。西園寺は心のそこから、この橘理津子という女性を尊敬した。自分に対する感謝というだけで、ここまで自分を犠牲に出来る人が他にいるだろうか？

・・理津子さん、僕はあなたの命令なら何でもやります。死ねと言われれば死んでも良い・・

西園寺は心に誓いながら、理津子の体を更に高く吊るし上げた。

33、風紀委員7

33、風紀委員7

「はふぅ、はふぅ、はふぅ」

西園寺に犯されイッてしまった理津子は息を荒くしながら次の拷問に備えていた。西園寺くんの事だから徹底的に私の体を破壊してくる。特に性器に関しては容赦なく破壊してくるだろう。今、イッてしまったのは女として最後の快感だったのかもしれない。理津子は今一度覚悟を決める。ここで耐えれば確実に一歩前進できる。あの西園寺家と、確固としたパイプをつなげる事が出来る。その為には自分の体などどうなろうが構わない。理津子は、大丈夫、私なら耐えられると自分を勇気づけた。理津子を高く吊り上げた西園寺は、いよいよ本格的な拷問に取り掛かる。まず、理津子の腰に石塊を手際よくぶら下げていく。いくつもの石塊を腰に下げられ30キロ近い重量が理津子の吊るされた体を襲い、理津子の体は激しく反り返り、ギシギシと骨の軋む音がする

「ううっ、痛いっ、背骨が折れそう」

理津子は腕が千切れ背骨が折れる恐怖と苦痛に耐える。

・・背骨が折れたら私は死ぬか、よくて半身不随ですね・・

理津子は冷静に事態を分析し、痛みを忘れようと努力する。

「理津子さんのセーラー服姿可愛くて大好きなんですが、拷問の邪魔になるので切り裂いて全裸になってもらいますね」

西園寺はカッターで理津子の制服を切り裂いていき、白い下着姿にした所で何枚も撮影し、黒いオーバーニーソックスとローファーだけ残し全裸にする。

「ああ、理津子さんの裸を視られるなんて最高だ。男子全員羨ましがりますよ。僕は幸せ者だ。あれっ、理津子さん、震えていますけど怖いんですか？」

「それは拷問されるのですから怖いですよ。でも、西園寺くんは私の泣き叫んで苦しむ顔が見たいのでしょう。西園寺くんの期待通りになるか分かりませんが、私のそんな姿で喜んで貰えるなら光栄です。遠慮なく拷問して下さい」

「ありがとう、理津子さん。これから理津子さんの体に重りを付けてから回しますね。まず口を開いて舌を出してください」」

理津子は震えながら舌を出すと、西園寺は理津子の舌をクランプで挟みきつく締め付け口の中に戻せないように固定する。そして、釣り針付きの重りを理津子の舌に突き刺しぶら下げていく。その数はなんと１０個。舌に付けられた重りだけで１キロになる。さらに西園寺は理津子の上唇と下唇にも釣り針を貫通させ重りを下げていく。

「痛いですか？　理津子さん」

喋れない理津子は、涙の溜まる目で西園寺を見つめコクンと頷く。

西園寺は嬉しそうに苦痛で歪む理津子の顔を眺めると、今度は鼻に

釣り針を突き刺し重りをぶら下げ始める。中央の鼻柱に3個、左右の鼻翼に3個ずつ。上下の瞼に1個ずつ。理津子の顔は重りだらけになっていたが、更に西園寺は長さ３０センチあるニードルを手にすると理津子の右頬から左頬に貫通させる。それも1本ではなく3本も……。そして、その貫通したニードルにも重りをぶら下げていく。1本のニードルに4個。さらに理津子の顔が酷い事になっている。

「ううううううっ」

理津子が悲し気に呻き声をあげるが、構わず西園寺は理津子の胸の膨らみに向かう。そして、理津子の桜色の乳首に釣り針を刺していく。右の乳首に5個、左の乳首にも5個。勿論、乳首だけで済む筈がない。乳房にもどんどん釣り針を突き通す。そして、なんと西園寺は理津子の乳房にもニードルを貫通させた。右の乳房から左の乳房へ一直線に容赦なく突き通す。1本、2本、3本、4本、5本。そして、それぞれのニードルにも重りを下げる。

「あわぁぁぁーーっ」

理津子は悲痛な声を上げているが西園寺は理津子の股間に移動する。理津子も次は自分の性器だと認識し覚悟していたが、それはとても耐えられる痛みではなかった。理津子のクリトリスに釣り針が突き通され多数の重りが下げられていく。

「あがぁぁぁーーーーっ!!」

ぶりぶりぶりぶりぶりっ

理津子は無様に大便を漏らし始めた。普段の凛とした理津子を知る

者にとって、理津子が人前で大便を漏らす事など信じられない事であった。西園寺は慌てて理津子の大便をボウルで受ける。西園寺にとって、理津子の大便は欲しくても手に入らない貴重な品であった。その貴重な大便を、目の前で理津子は脱糞している。西園寺は興奮した眼差しでスマートフォンで動画撮影を続ける。大きく拡がった理津子の肛門から排便される太い大便を西園寺はアップで撮影し、それは理津子の排便が終わるまで続けられた。

「ひぐぅひぐぅひぐぅ」

理津子は重りを下げられた痛みと、人前で大便を漏らした恥ずかしさで号泣している。

・・あの理津子さんが、うんちまで漏らしてしまうなんて・・

理津子が拷問される様子を見ている麗香も、理津子の大便まで漏らす無様な姿に震えが止まらなかった。

・・理津子さんは止めないで下さいと言っていたけど、本当に止めなくていいんですか・・

麗香は、理津子の身を案じ心配で堪らなかった。しかし、西園寺はそんな麗香などまるで存在しないかのように理津子の拷問を進めていく。理津子はクリトリスに8個もの重りを下げられ、クリトリスが千切れそうになっている。そして、西園寺は小陰唇に釣り針を刺し始め、左右の小陰唇に計20個もの重りが下げられ理津子の小陰唇も千切れそうなほど引き伸ばされる。それだけでは終わらない。西園寺は理津子の大陰唇にも釣り針を刺していく。その様子を見ている麗香は、もう理津子さんを許してあげて下さいと祈らずにはいられなかった。しかし、西園寺は嬉々として理津子の拷問を進めて

いく。理津子に重りの装着を終えた西園寺は、いよいよ吊られた理津子の体を回していく。ただ回されるだけでも苦しい〝駿河問い〟の拷問に重りを顔面、胸、性器に付けられた理津子の苦痛は相当なものだろう。理津子もこれから起こる自分への拷問に、ひぐひぐと泣き続けている。重りだけでも何キロになるのか、すぐには計算出来ないほど大量の重りが互いにぶつかり合い、カンカンと音をたてる。西園寺は念入りに、これでもかという程ロープを巻き上げていった。そして、手を放す。

「あぎゃぁぁーーーーっ」

理津子の体が回転し絶叫が響き渡る。その回転速度は、順子や結衣が回された回転速度より遥かに速かった。理津子の顔面、胸、性器に付けられた重りが、理津子の体を引き千切り吹き飛んでいく。そのあまりの高速回転に理津子の体は忽ち汗ばみ顔が赤くなる。

「ぶっぼぉぉーーっ」

理津子の口から血が流れ出し、続いて目と鼻と耳からも血が流れ出した。

「ぶぼぼぼぼぼぼぼぼっ」

その高速回転で理津子に釣り針で付けられた重りは全て吹き飛びニードルに付けられた重りだけが残っていた。理津子の顔面と乳房に突き刺されたままのニードルが痛々しい。ようやく回転が止まった時、理津子は血塗れになり、ぐったりと気を失っていた。西園寺は、理津子の顔面を殴り覚醒させると、乳房を貫通しているニードルを引き抜き、頬を貫通しているニードルも抜いていく。そして、舌に噛ませたクランプも外し、理津子の無惨な体を見ると嬉しそうに笑

った。

「理津子さん、どうですか？」

「顔と胸とマンコの感覚がありません。それに、手足と腰が耐えられない程痛いです」

吊られたままの理津子が震える泣き声で答える。

「さすが、理津子さん。これだけの拷問をされても、しっかりしてますね。それでは、これから本格的に拷問を始めますね」

西園寺の言葉に、理津子は大きく震え出す。西園寺は、火の中に入れていた直径3センチ程の真っ赤に焼けた鉄棒を取り出し理津子の髪の毛を掴むと、グイッと理津子の頭を持ち上げ正面を向けさせる。そして、理津子に告げた。

「それでは、理津子さん。口を大きく開けてもらえますか」

理津子は、次に自分が何をされるか分かりながら大きく口を開いた。理津子は遠目でも分かるほど大きく震え、涙を流している。麗香は、さすがにこれはもう拷問ではなく処刑だと西園寺に近付き止めようとするが、それに気付いた理津子が首を横に振り、来るなと止めた。

「本当に理津子さんは凄い。僕の、いや全男子の憧れの女子だ。これから何をされるか理解しているのに動じない。でもね、理津子さん。僕は、そんな理津子さんの心が砕けるまで徹底的に拷問しますから覚悟して下さいね」

頭を押さえられ自ら大きく開いている口に迫る、真っ赤に焼けた鉄

棒を理津子は涙と血で滲む目で凝視していた。

３４、風紀委員８

３４、風紀委員８

理津子は目前に迫る真っ赤に灼けた鉄棒の熱気に惨めなほど体が震え涙が止まらない。

・・怖い、怖い、怖い、怖い、怖い・・

「ひぃぃーーっ、もうダメ」

ついに理津子は、目を閉じ、口もギュッと閉じてしまう。西園寺は満足気に笑い、灼けた鉄棒を一旦火の中に戻した。

「さすがの理津子さんでも怖いですか。まあ当然ですよね。仕方ないので少し準備します」

西園寺は大きなペンチを持ち、理津子の口を開けさせ前歯を挟むと、力任せに理津子の前歯をへし折った。

「はぎぃぃぃーーーっ」

悲鳴を上げる理津子に構わず西園寺は、理津子の上下の前歯４本を折ってしまう。そして、口を開けたままに固定する開口ギャグを装着していく。

「見えると理津子さんでも怖いよね。だから、この布で目隠ししてあげます」

西園寺は、理津子の頭に黒い布をグルグルと巻き、理津子の目を見えなくする。さらに髪の毛をロープで縛り、手足を吊るしているロープに巻き付け理津子の頭が正面を抜いたままに固定する。そして、麗華に声をかけた。

「麗華さん、いいですか」

「えっ？　はい」

「理津子さんの頭を動かないように、両側からがっしりと押さえ付けてください。かなり暴れると思いますから力一杯押さえ付けてくださいね」

「えっ、えぇぇーーっ」

麗華は、戸惑ったが理津子を見ると動かせない頭で微かに頷いている。どうぞ、彼の言う通りにして下さいと訴えていた。麗華は理津子に近付くと、理津子の頭を思い切り押さえ付けた。

「さて、それでは準備が出来ました。理津子さん、いきますよ。覚悟して下さい」

西園寺は灼けた鉄棒を再び手に取り、理津子の口に近付けていく。凄まじい熱気が近付いてくる感覚で、理津子は目隠しされていても自分に迫ってくる凶悪な拷問具に恐怖していた。もう、頭も押さえ付けられ口も閉じられず、この凄まじい拷問から逃れる術はない。

「おうっおうっおうっ」

理津子は、これから自分を襲う想像も出来ない苦痛に、激しく号泣していた。頭を押さえている麗華の手に理津子がぶるぶる震えているのが伝わり、理津子がどれ程恐怖に耐えているのかが分かった。そして、ついにそれはきた。口腔内で何かが爆発したような凄まじい激痛が理津子を襲う。断末魔のような咆哮を上げる理津子の肉が焼け焦げ爆ぜる音が混じり、白煙が理津子の口と鼻から流れ出る。そして、頭を押さえられている理津子の吊られた体が、この拷問から逃れようと必死に激しく暴れていた。しかし、西園寺は、理津子の口腔内にどんどん灼けた鉄棒を押し込んでいく。もう３０センチ以上押し込まれ、理津子は喉の奥の奥まで焼かれていた。

「さあ、次は鼻の穴も焼こうか」

西園寺は、理津子の口に鉄棒を突き入れたまま、新たに直径１センチ程の灼けた鉄棒を２本手にする。そして、西園寺は理津子の左右の鼻の穴に灼けた鉄棒を突き刺す。

「ほげぇぇーーっ！！！！」

じゅうという理津子の鼻を焼く音が響き、理津子の体が硬直する。西園寺は目隠しと開口ギャグを装着され口と鼻に灼けた鉄棒を突き刺され煙をあげている理津子の哀れで無様な顔を何枚も撮影していた。そして、麗華の顔を見る。

「麗華さん、今度は理津子さんのお尻を開いてくれますか。おしりの穴が良く見えるようにね」

麗華は、もう理津子に対する凄まじい拷問に恐怖で何も考えられな

くなり、西園寺の指示通り理津子の臀部を左右に開き肛門が見えるようにする。西園寺は、理津子の顔の鉄棒は突き刺したまま後ろに周る。

「理津子さん、このまま冷えるまで突き入れておくからね。呼吸が苦しいだろうけど我慢してね。鉄の棒が冷えたら抜いてあげるね。ふふっ、冷えた鉄棒を抜く時、焼き付いた理津子さんの口の中や鼻の中がバリバリ剥がれていくのを想像すると楽しくなるよ」

残酷に笑いながら西園寺は、また直径3センチの灼けた鉄棒を手に取り、理津子の小さな肛門の穴に狙いをつける。

「理津子さん、今度はおしりの穴から理津子さんの体の中を焼くから相当苦しいですよ。ショックで死なないでくださいね」

「あぶぶぶぶぶぶぶぶっ」

理津子の体は小刻みに震えたまま止まらず、もう叫ぶ力もないのか小さな呻き声を出すだけだった。そんな理津子の姿を嬉しそうに見ながら西園寺は、理津子の肛門に灼けた鉄棒の先端を当てる。じゅっという音と共に、たちまち理津子の肛門が焼け焦げていく。西園寺はそのまま捻じり込むように理津子の肛門に灼けた鉄棒を押し込んでいった。

「おっびゃぁぁーーーーーっ」

肛門から直腸を焼かれ理津子が絶叫し体をビクビクと痙攣させる。西園寺は、さらに奥まで鉄棒を捻じ込んでいき、理津子の直腸を焼き尽くす考えのようだった。体の中を焼かれた理津子は肛門から煙をあげ死んだように動かなくなっていた。

「麗華さん、あの二人の処置はちゃんとやっておきますから、もう帰られた方がいいのでは？　これ以上見ているの辛くないですか」

麗華は、西園寺に声をかけられ我に返ったように首を振る。

「いえ、私は理津子さんのお側を離れるわけにはいきません。このままここにいさせてもらいます」

「麗華さんもさすがですね。空手と柔道の有段者の麗華さんなら簡単に僕を殴り倒せるのに」

「何があっても止めないでくださいと云うのが理津子さんの指示ですから」

西園寺は、もう何も言わず直径1センチの灼棒を持ち、今度は理津子の尿道に見つめる。

「理津子さん、死んでないよね」

理津子の微かな息遣いを確認した西園寺は、次はおしっこの穴を焼くよと残酷に告げ、理津子の尿道に押し込んでいく。じゅわぁと尿道が焼け焦げる音がするなか西園寺は理津子の膀胱まで突き入れてしまう。理津子は小さく声を上げたが、もう見た目にもぐったりとし理津子の胸が上下に動いていなければ死んでいるのかと思う程弱っていた。

「さあ、いよいよ理津子さんのマンコ拷問だ。今まで妄想してきた事全部やりたいから理津子さん、頑張ってね」

西園寺は、そう言うと真っ赤に灼けた膣鏡を手に持った。

「マンコは灼けた鉄棒を突き入れて焼くだけじゃ面白くないからね。この灼けた膣鏡で膣を焼きながら開いて子宮も徹底的に壊すから理津子さんの女も終わりになるね」

理津子に、西園寺の言葉が聞こえたか定かではなかったが、いよいよこの凄惨を極めた理津子への拷問も終焉を迎えようとしていた。

35、性器破壊される理津子（前書き）

今回は、かなり酷い内容になっていますので注意して下さい。

理津子が性器拷問ではなく、性器を破壊される描写が多くなっております。縛られて抵抗出来ない理津子が性器を残酷に破壊されていき、カニバリズム描写もある酷い内容になっていますので、苦手な方は読まない様にして下さい。

この作品では、私の他の作品とは違いあまり酷い描写はしない様に書いてきたのですが、ついにやってしまいました。この章が終わったら、また元のような内容に戻すつもりですので御容赦ください。

３５、性器破壊される理津子

３５、性器破壊される理津子

ゆかりは、教室に順子と結衣の姿が見えない事に不安になっていた。他の三人はいるが、苛められている立場の自分から、どうしたのか尋ねるのも気が引ける。それになぜか、ゆかりを避けているような雰囲気であった。昨日、自分が拷問され気絶している間に何かあったのか？気が付いたら自分の部屋の中にいたゆかりには見当もつかなかった。その、いつもとは違う三人の雰囲気にゆかりは気になって仕方なかった。

・・委員長なら何か知っていると思うけど・・

しかし、以前、和彦の告白を無下に断ってしまったゆかりは尋ね辛かった。大体、ゆかりは恋愛などにまるで興味がない。恋愛なんかに時間を使うより、何をおいても優先するのは自慰と自虐だ。今になれば、和彦があんな性格であれば、本当の奴隷になる前に一時的に彼の奴隷になっても良かったなと思ってしまう。それはやはり、一人でする自虐には限界がある。このところ毎日受けていた拷問でゆかりは、そう気が付いてしまったからだ。

・・姫野さんがお休みなら、今日は拷問ないのかな・・

ゆかりは、ならば今日はどんな自虐をしようかと白い下着をぐっしょりと濡らしながら考えていた。

★
★
★
★

学校では、とっくに授業が開始されていたが、西園寺の、理津子に対する拷問はこれから佳境に入る所であった。灼けた膣鏡を持った西園寺は、いよいよ理津子の性器の破壊に着手する。今まで自慰の際に妄想していた理津子への性器拷問を実際に行える幸運に西園寺は神に、そして理津子本人に感謝した。最後にもう一度理津子の味を味わいたくなった西園寺は、理津子の性器に口をつける。こんな酷い拷問を受けながら理津子はバルトリン腺から粘液を分泌し激しく性器を濡らしていた。西園寺は理津子の分泌した液を綺麗に舐め尽くす。

「理津子さん、拷問されながらマンコ凄い濡らしているよ。理津子さんも本当は変態のマゾだったんだね。あの理津子さんが、マゾだったなんて嬉しいよ。理津子さんの望み通り、徹底的にマンコ壊してあげるからね。もう、マンコ濡らす事もマンコで気持ちよくなる事も出来なくなるからね」

西園寺は膣鏡を火に戻し、まず理津子の外性器から破壊しようと確認すると、釣り針を付けた重りで引き千切られた小陰唇とクリトリスは無惨な状態になっていた。

「ははっ、けっこう酷い状態だね。これはもう切除するしかないな」

西園寺はポツリと呟くとメスを取り出し理津子の左右の小陰唇をびろーんと伸ばし切り取っていく。そして、クリトリスも根元から抉りとった。西園寺は、理津子から切り取ったクリトリスと小陰唇を

持参したホルマリン液の満たされたガラス瓶の中にいれ、ふと気づいたように理津子の乳首も切除するとガラス瓶にいれホルマリン漬けにする。そして、ようやく灼けた膣鏡を容赦なく理津子の膣に根元まで挿入し最大まで開く。灼けた膣鏡が当たっている理津子の膣壁はじゅうと焼け爛れていった。

「うぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼっ」

性器を焼かれて相当な激痛なのだろう。死んだように反応しなかった理津子が悲痛な声をあげる。膣鏡で開かれた奥には、理津子のピンク色の可愛い子宮が顔を見せていた。その理津子の可愛らしい子宮を見ていると西園寺は自制心を失い、理津子の子宮を早く破壊したい衝動にかられてきた。そして、火の中に入れておいたニードルをとり真っ赤に灼けたニードルを理津子の子宮に突き刺す。そのまま子宮を串刺しにするかのように深く深く突き刺していった

「あばぁぁぁーーーっ」

さらに、二本、三本、四本……。次々に理津子の子宮に灼けたニードルを突き刺し、理津子の子宮はたちまち針山になる。すると、今度は携帯用のガスバーナーに火を点けた西園寺は理津子の膣の中をその強力な青い炎で炙っていく。青い炎が理津子の膣や子宮、子宮に刺さるニードルを焼き尽くし、理津子の膣内は黒焦げになり嫌な臭いが充満した。

「理津子さん、もう我慢できないから理津子さんの子宮引き摺り出して理津子さんのマンコ破壊するね」

西園寺は大きな太い釣り針が三つ付いた道具を出す。三本針と呼ばれる頑丈な釣り針だ。それを理津子の子宮口から子宮内に無理矢理

入れようとするが、さすがに三本針が大きすぎ入らない。そこで、西園寺は子宮口を切開して、三本針を理津子の子宮内に入れた。そして、理津子の子宮内に針が三本とも深くかかったのを確認し三本針に付いたテグスを思い切り引く。が、なかなか子宮が引き摺り出せない。この時点で理津子の膣壁に焼き付いていた膣鏡は抜いてあり、理津子の膣は血塗れになっていた。子宮を抜く為に西園寺は膣を拡げようと考え、メスを使い理津子の会陰切開をする事にした。そして、理津子の性器の会陰部を正中切開し肛門までつなげてしまう。

「さっき、理津子さんの子宮切開した時もそうだったけど、理津子さんのマンコ切り刻むのって凄い興奮するよ。他の女子のマンコは汚くて嫌だけど、理津子さんのマンコは最高だ」

西園寺は、理津子の会陰を切開した後、ハンドウインチを用意し機械の力でテグスを引き出した。今度はさすがに理津子の子宮が引き出されてくる。膣口から針山にされた理津子の子宮頚部が顔を出した時、そこまで完全に容赦なく性器を破壊されてしまう理津子の哀れな姿を見て麗華は、両手で自分の性器を守るように押さえ大きく震え出す。

・・いいんですか、理津子さん？　もう、理津子さんのマンコ、取り返しがつかないですよ・・

そして、さらに引き摺り出される理津子の子宮を見て麗香は、あまりの恐怖で小便を漏らし失神してしまった。ガックリと床に腰を落とした麗香の股間から小便の水溜まりが大きく広がっていく。

「あびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃぁぁぁーーーーーっ」

そして、絶叫する理津子の子宮が、丁度、膣口から半分ほど出たところで西園寺は一旦摘出作業を停め、理津子の姿を撮影する。子宮を膣から半分も引き摺り出されている理津子の無様で哀れな姿に西園寺はたまらなく興奮していた。そして、西園寺は理津子から冷えた鉄棒を抜いていく。鉄棒に焼き付いている理津子の口腔内や鼻の組織がバリバリと剥がれ血が溢れだす。さらに開口ギャグと目隠しも外していき、次に肛門と尿道からも鉄棒を引き抜いた。鉄棒を抜いた瞬間、尿道と肛門から血が噴き出す。

「あびゃびゃびゃびゃびゃっ」

「じゃあ理津子さん、また子宮抜き再開しますよ。もう口は自由だから思う存分泣き叫んで下さいね」

西園寺はまたハンドウインチを操作し理津子の子宮をズルズルと確実に引き摺り出していく。

「あっびゃぁぁぁーーーーっ!!　じぬぅぅーーーーーーっ!!　ゆるじでっ!　もうゆるじでぐだぢゃいぃぃーーーーーーっ!!　おねがいじまぢゅうぅぅーーーーーーっ!!!　もお、いやでずぅぅぅーーーーっ!!!」

「いいよぉ、理津子さん。さすがの理津子さんも麻酔もなくて生きたまま子宮引き摺り出されたらたまらないよね。引き摺り出した子宮は、グチャグチャにして形も残らないほど壊すからね。もし、このまま理津子さんが発狂したら僕が一生面倒みてあげるよ」

「だじげでぇぇぇーーーっ!!　だれがぁぁだじげでぐだぢゃいいぃーーーーーっ!!　りじゅこのじぎゅう、いだいよぉぉぉーーーーっ!!!　おねがいじまぢゅう、もお、だぢゅげでぐだぢ

やいいいいーーーーっ！！！」

理津子は泣き叫ぶが、唯一西園寺を止められる麗香は気絶してしまっていた。そして、西園寺は再びハンドウインチを止めると、ほとんど引き摺り出されている理津子の子宮をガスバーナーの青い炎で残酷に炙り始めた。さらに子宮全体にニードルも突き刺していく。理津子の大切な子宮が徹底的に破壊されていった。そして、理津子の子宮は何十本ものニードルが貫通し、バーナーで黒焦げにされ、ピンク色の可愛かった子宮頚部も真っ黒な炭になっていた。その理津子の子宮を、西園寺は更にメスで切り裂きガバッと中を開くと、子宮の中までバーナーで焼き黒焦げにする。そして、西園寺は、またハンドウインチを操作しだした。

「あびゃびゃびゃびゃびゃっ！！」

意味不明な言葉で絶叫する理津子の子宮が、ついに膣口から引き摺り出される。

ずぼぉぉっ！！！

「あっびゃぁぁぁぁぁぁーーーーっ！！！」

理津子の子宮についていた卵管は両方とも途中で引き千切れ、ぶらぶらと垂れ下がっている。

「あばばばばばばばばばばばばばっ」

理津子は発狂してしまったかのように意味のない言葉を叫んでいる。西園寺は、抜き出した理津子の子宮を火で炙り、きちんと焼いていくとナイフで一口大にカットし、なんと理津子の口の中に入れた。

「どうですか、理津子さん。自分の子宮の味は？　ちゃんと噛んで、しっかり飲み込んで下さいよ」

西園寺は結局、理津子の子宮を全てを理津子本人に食べさせてしまったが、すでに理津子は自分が何を食べさせられているのか分かっていないようであった。もし、この時自分の食べている物の正体が分かったら、この時点で理津子は発狂していたのは間違いなかった。

「理津子さん、まだ終わりじゃないよ。理津子さんの膣も完全に消滅させるからね。理津子さんの性器は跡形も残らないよう完全に破壊するよ」

西園寺は、自分の子宮を食べ尽くし呆けたように涎を垂らし虚ろな目をして呻き声を上げている理津子に、直径１０センチはある電動ドリルを見せるが、理津子はそれを見てはいるが、それが何か認識出来ていないようであった。

「仕方ないな、理津子さん。一応説明しとくと、この電動ドリルで理津子さんの膣を削りとるからね。膣壁も、その周りの筋肉もバルトリン腺も全て抉り取って、只の穴にしてあげる。バルトリン腺も無くなって、もう股間を濡らす事もなくなるし、子宮も膣もクリトリスも無くなって理津子さんは女の子じゃなくなるよ。哀れだね、理津子さん」

西園寺は嬉しそうに電動ドリルのスイッチを入れる。キュイーンと高速でドリルが回転し西園寺は、理津子の膣口にドリルの先端を当てると簡単に理津子の膣が削り取られ血と肉片が飛び散る。

「さあ、理津子さん。理津子さんのマンコの最後だ。苦しんで下さ

いね」

そして、西園寺は、容赦なく理津子の膣にドリルを突き入れていった。

ギュオーン！！！！

「ひぎぃぃぃぃーーーーーーーっ！！！！　あびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃーーーーーーーーーっ！！！！　もう、じぬぅぅぅぅーーーーーーーっ！！！！」

西園寺は、理津子の膣に３０センチもドリルを突き入れてしまった。理津子の股間から大量の血と肉片が辺りに飛び散る。そして、ドリルを抜いた理津子の股間にはぽっかりと丸い穴が空いていた。西園寺は、その穴に腕を突っ込み、なんと理津子の豆のような卵巣も２つとも取り出す。取り出した卵巣はバーナーで黒焦げの炭にして、足で踏みつけ粉々に砕いてしまった。

「せっかく理津子さんのマンコを、ここまで破壊したんだから、卵巣だけ残ってたら可哀想だからね。これで理津子さんのマンコ完全に破壊出来たね」

そして、西園寺は、その理津子の股間の穴に、－３０度まで冷却出来る強力なコールドスプレーを至近距離から噴射し理津子の穴を凍結する。そして、理津子の腰にぶら下がる石塊を取り外し、吊るしていた体を床に下ろすと戒めを解いていった。ようやく理津子は自由に体を動かせるようになったが、長時間に渡る拷問で理津子の手足はなかなか理津子の思うように動かなかった。それでも、なんとか手足を動かした理津子は、ボロボロにされた体で泣きながら西園寺に土下座する。

「ごめんなぢゃい。もお、りぢゅごをゆるぢでぐだぢゃい。おねがいじまぢゅ。なんでもじまじゅがら、おねがいじまぢゅう」

口腔内も破壊され、上手く喋れない理津子が必死に懇願する。その哀れで無様な理津子の姿に西園寺の方が驚いていた。

・・あの理津子さんが、土下座して許しを乞うなんて…。もう少し痛め付ければ理津子さんの心も完全に壊れるな・・

西園寺は、理津子を試すように言ってみた。

「理津子、僕の靴を舐めろ」

理津子は、ノロノロと動くと西園寺の靴を舐め始めた。理津子は焼け爛れた舌で必死に西園寺の靴を舐める。靴の上から底まで理津子は泣きながら舐めていた。自分の靴を舐めている理津子の哀れな姿に、西園寺は驚愕していた。西園寺は、理津子を殺すつもりで容赦なく拷問していた。理津子が死んだら、自分も死ねばいい。そう思っていた。それほど理津子を拷問する事は、西園寺の夢だったのである。なのに理津子は生きているばかりか、発狂さえしていない。西園寺は、改めて橘理津子という女子の凄さを認識した。そして、靴を舐めている理津子の顔面に蹴りを入れると、理津子の両腕を高手後手にきつく縛り上げる。

「残念、理津子さん。理津子さんの拷問は、まだ終わらないんだよ。とても許してあげられない。だって理津子さんの女の子の部分は全て破壊すると決めたからね。顔と胸と股間、覚悟してね。もう死んだ方がましと思う体にしてあげるよ」

西園寺は残酷に笑い、理津子を徹底的に壊し理津子の心も完全に破壊する事に決めた。

「もう無様な肉の塊の廃人になってもらうよ、理津子さん。でも心配しないで、理津子さんの事は僕が家でずっと飼ってあげるから」

理津子に対する凄まじい拷問は、まだ続いていく。

36、廃人にされる理津子（前書き）

前回に続き酷い内容となっています。

理津子は、どこまで破壊されるのか？

性器を破壊されてしまった理津子が、体も壊されていきます。理津子の破壊シーンばかりですので苦手な方は読まないようにしてください。

36、廃人にされる理津子

36、廃人にされる理津子

再び両腕を背中にまわされ後ろ手に固く拘束されてしまった理津子は、これから自分を襲う苦痛を想像し、何があっても許してもらえない、その苦痛から逃れるためにはもう死ぬしかないという絶望で泣いていた。

「ひぐ、ひぐ、ひぐ、ひぐ、ひぐ、ひぐ」

「ああ、ダメだよ。普通の女の子みたいに泣いてる理津子さんを見ると可愛くて我慢できなくなる。もう、すぐに壊すよ」

西園寺は、泣いている理津子の両足首にロープを巻いていく。そして、そのまま理津子を開脚逆さ吊りにした。また、吊るされてしまった理津子はさらに激しく泣き出している。西園寺は、理津子の股間にポッカリと開いている穴に、建築等で使用する巨大な四角錐の楔を打ち込んで理津子の穴を塞ぐ。そして、理津子の股間を埋めた西園寺は、コールドスプレーを使い理津子の股間を、大陰唇を凍結させていく。

「理津子さん、竹刀借りるね」

理津子の竹刀を上段に構えた西園寺は、そのまま思い切り理津子の凍り付いた股間に打ち下ろす。

ピシィ！！

理津子の大陰唇にヒビが入る。続けて西園寺は、理津子の股間に竹刀を叩き込んだ。

ピシィ！！ピシィ！！ピシィ！！ピシィ！！ピシィ！！

理津子の大陰唇に、どんどんヒビが広がっていく。このまま凍結が溶ければ激しい裂傷が残ることになるが、西園寺は構わず股間に竹刀を叩き込んでいく。

パキィィ！！！

理津子の大陰唇が砕け散っていく。これで凍結がとければ、もう取り返しのつかない事になっているのは明らかだった。が、西園寺はさらに激しく竹刀を叩き込み、理津子の大陰唇は砕け散っていき、理津子の股間は抉られたように大陰唇を含め全てが消滅していた。

「ふう、次はここだよ、理津子さん、サカメ釘って知ってる？　釘の打ち込まれる部分に逆目の溝があって抜けないようになっているんだよ。それを、理津子さんのここに打てるだけ打ってあげるね。体に釘打たれるんだから相当痛いけど理津子さんなら大丈夫だよね」

西園寺は、理津子のビキニラインを指でなぞりながら顔を近づけていき舌で舐め始める。

「理津子さんのマンコの味は最高だったけど、他の所もいい味だよ」

西園寺は感激したように息を大きく吸い込んだが、理津子の方はそ

れどころではなくぶるぶると震えていた。少し前に釣り針を刺されただけでも思い出したくないほどの激しい痛みであったのに、今度はさらに太く長い釘を打ち込まれようとしている。しかも、打ち込んだら普通に抜けない凶悪な釘である。西園寺は、理津子のビキニラインに釘を当て容赦なく打ち込む。

「あっ！！びゃぁぁぁーーーーーーっ！！！」

絶叫する理津子に構わず西園寺は、理津子のビキニラインに間隔を空けず次々に釘を根元まで打ち込んでいく。

「あっあっあっあっあっ、だぢゅげで、もう、だぢゅげでぐだぢゃいぃぃ。りぢゅご、じんぢゃう。もう、じんぢゃうよぉ」

しかし、西園寺は、理津子の反対側のビキニラインにも釘を打ち付けていく。そして、両側合わせて２０本の釘が理津子のビキニラインに打ち込まれていた。しかし、まだ釘打の拷問は終わらない。西園寺は、次にスクリュー釘をじゃらりと床に広げると、１本取り理津子の恥丘に当てる。

「今度も痛いぞぅ理津子さん。理津子さんのツルツルの綺麗な恥丘から恥骨貫通させて理津子さんの体の奥深くこのスクリュー釘を打ち込むからね」

「だじゅげで、だじゅげで、ゆるじで、ゆるじで、ゆるじで」

理津子は呪文のように繰り返すが、西園寺は理津子の恥丘に釘を打ち込んでいく。それも、１本や２本ではなく理津子の恥丘が埋め尽くされるほどの大量の釘が打ち込まれていった。

「あびゃびゃびゃびゃびゃびゃっ、もう、じんぢゃうよお、だじげでぇぇぇーーーーっ！！！」

恥丘に何十本もの釘を打ち込まれ泣き喚く理津子に、西園寺は残酷に告げた。

「さあて、次は理津子さんの胸だ。理津子さんの2つの胸の膨らみも破壊するからね。さすがに疲れたから、ここから少し楽させてもらうよ。理津子さんを壊すのは変わらないけどね」

「もう、いやぁ。おねがいじまぢゅ、りぢゅごをゆるじでぐだぢゃいぃぃ」

西園寺は、逆さに吊られている理津子の二つの胸の膨らみにコールドスプレーを吹きかけカチカチに凍結させる。そして、理津子の胸を指で叩き固く凍っているのを確認し、ハンマーを思い切り理津子の胸に叩き込む。

バキィバキィバキィバキィ！！！！

西園寺が氷の塊を砕くように、理津子の胸を砕いていく。

「どうです、理津子さん。これなら痛くないでしょう。溶けた時が大変ですけどね」

西園寺は、ハンマーを振るい続け理津子の胸を徹底的に破壊する。しばらくすると理津子の胸は粉々に砕け散り消滅していた。

「さあ、理津子さん。残るは理津子さんの顔だね。二目と見られない顔にしてあげる」

「いやだぁぁーーっ!!もお、ゆるじでぇぇーーっ!!ごわいよぉぉーーっ」

しかし、西園寺は、理津子の胸と同じように理津子の顔、そして頭にも一３０度のコールドスプレーを至近距離から噴射し念入りに凍らせていく。怖い怖いと泣き叫ぶ理津子の口も凍りつき声が出せなくなった。そして、理津子の鼻の穴の中にも噴射した西園寺は、そのまま理津子の鼻の穴に指を突っ込むと、パキィと理津子の鼻が取れてしまった。

「あれ、理津子さんの鼻取れちゃったよ。面白いな」

西園寺は、理津子の両耳もパキッと折ってしまい、凍り付いた理津子の綺麗な黒髪もパリパリと折っていく。そして、理津子の口の中にも噴射し、理津子の残った歯を全て折ろうと手を口の中に入れていると、バキィと大きな音がした。西園寺が何だろうと手を抜いてみると、理津子の下顎が折れ取れてしまっていた。西園寺は、困ったという顔をして肩を竦める。

「ごめんね、理津子さん。あご取れちゃったよ。今更接着剤で付けるわけにもいかないし、いいよね」

下顎が丸ごと取れ、鼻も耳も無くなり、髪の毛も無くなった理津子は、女の子の顔は元より人間の顔としても見られないものになっていた。キリッとした顔立ちでスタイルも良く、男子だけでなく女子からも羨望の眼差しで見られていた理津子が、見るも無残な姿に変貌していた。

「そろそろ、仕上げかな」

西園寺は、理津子の太ももの付け根にベルトを巻き、ぎゅうぎゅうと固く締め付けた。これから行う作業の為の血止めの準備だった。理津子は、あごが無くなり口も凍結されている為、声も出すことが出来ない。これから理津子が味わう痛みを考えれば、ちょうど良かったと西園寺は思う。そして、西園寺は電動チェーンソーのスイッチを入れ、理津子の太ももの真ん中辺りにチェーンソーの刃を当て、理津子の太ももを切断していく。血と肉片が飛び散り、理津子の肉と骨を切断する嫌な音が響き渡った。

ギュオーン！！！バリバリバリッ！！！！ズバァッ！！！！

理津子の左の太ももが切断され、理津子は右足1本でぶらーんと吊られている。西園寺は、理津子の股間の穴に埋め込んだ楔を抜き、代わりに〝あんこう〟を吊るす時に使用するギャフという巨大な釣り針の切っ先を理津子の穴に入れ突き刺して理津子の下腹部に貫通させる。そして、理津子は右足も太ももから切断された。理津子は、吊られた〝あんこう〟のようにギャフ1本で、まるでもう人間ではないように哀れに吊られ、ぶらぶら揺れている。そのマンコからギャフで吊られている理津子の無様な姿を見て、西園寺は興奮を隠せなかった。

「もう、理津子さん。女の子どころか人間に見えないよ。食肉加工用の肉塊みたいだ」

そう言いながら今度は理津子の肩口に血止めのベルトを巻いていき、後ろ手に拘束していたロープも解く。理津子が自由になった腕で必死に抵抗するが、すぐに押さえつけられ、どうせ切断してしまうからと指の骨が全て折られ、肘の関節も折られる。そして、二の腕の真ん中で、両腕とも切断されてしまった。理津子は、四肢を切断さ

れ股間に貫通されたギャフで逆さに吊られ、ゆらゆら揺れている。更に肉塊に近付いた感じだ。そして、だんだんと凍結されていた部分が溶けていき、麻痺していた感覚が蘇ってくる。理津子の全身を地獄のような激痛が、一気に襲った。手足、股間、恥丘、胸、頭。凄まじい激痛で理津子は、のたうち回る。

「あっあぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーー！！！！！」

喋る事の出来ない理津子の口から、ただ大きな音が漏れ、理津子の体がぶらぶらと大きく揺れる。激しく揺れる為、ギャフが突き出ている下腹部から血が溢れだした。西園寺は、見つけてきた姿見のような大きな鏡を理津子の前に置き、自分の姿を理津子に見せる。理津子は鏡に映った自分のもう取り返しがつかない姿に目を見開き涙を流した。四肢を切断され股間も胸も顔面も完全に破壊されマンコのあった所にギャフを突き刺され吊るされている自分の無様で哀れな姿を見ているうちに、笑い声のような音が理津子の口から漏れ始めた。

「びゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃ」

哀れにも理津子は、ついに発狂してしまった。全身を襲う激痛と、もう普通の生活出来ない絶望、それに性器を完全に破壊され女ではなくなった事、すべてが理津子の精神に大きなダメージを与え、さすがの理津子の強靭な心も砕け散ってしまった。

「理津子さん、凄いね。ここまで正気を保っていたなんて信じられないよ。でも、やっと発狂したね。こんなに体も壊されて、頭もおかしくなって、もう理津子さん終わりだね。でも、もっと酷い目にあわせてあげるね」

そんな、哀れな理津子を更に追い込む為、西園寺は理津子の耳に爆竹を詰める。そして、点火し理津子の鼓膜を破いた。理津子は、耳も聞こえなくなってしまった。穴しかなくなってしまっている理津子の耳から血が流れだす。

「びゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃ」

それでも笑い続ける発狂した理津子を、西園寺はまだ痛めつけようとしていた。手足が無くなり喋れなくなり耳も聞こえない理津子の最後に残った視覚も奪うつもりのようだった。ペンチを開いて理津子の左眼に突っ込む。

「じゃあね、理津子さん。もう理津子さんに何を言っても分からないだろうけど、これから理津子さんの目も潰しますよ。可哀想にね、理津子さん。何か見ておきたいものがあったかも知れないけど、もう、今すぐに潰しますからね」

西園寺が、理津子の眼球を挟んでいるペンチに力を込める。理津子の左眼が潰れていく。

グジャッ！！

理津子の眼球が潰れ、中身の硝子体がぶしゅっと飛び出す。そして、西園寺は最後に残った理津子の右眼にペンチを入れ眼球を挟む。

「ふふっ、これで理津子さんを完全に壊せる。ああ、もう興奮して射精しそうだよ」

西園寺が、力を込め理津子の眼球が潰れていく。

「やめてぇぇーーっ!!西園寺くん、お願い、やめてっ!!」

やっと気が付いた麗華が大声で叫ぶ。西園寺が振り向いて麗華を見る。

「私の目を潰して構わないから、理津子さんの残った目は潰さないで下さい。お願いっ!!」

「勘違いしないで、麗華さん。僕は、理津子さんの目は潰したいけど、麗華さんの目は別に潰したいとは思わないよ」

「なら、私の事、犯して構いませんから。西園寺くん、今、理津子さんを拷問して興奮しているんじゃない?私の穴、全部犯していいですから」

そこで、西園寺は少し考える。最後に理津子の目を潰したら、その理津子の哀れな姿を見ながら自慰しようと思っていたところだった。もう理津子は、ほぼ壊してしまったから目を一つ残しても別に悔いはない。自慰よりも麗華の体を使えるならいう事ない。西園寺にとっては、橘理津子以外は眼中にないが、香坂麗華と云えば理津子と人気を二分する美少女だ。西園寺の悩む姿を見て麗華は駄目押しする。

「私の三つの穴、全部処女だから楽しめますよ。特にマンコは処女膜突き破る感覚味わえるから気持ちいいよ」

麗華は、せめて理津子の最後に残った外界との接点である目だけは守りたかった。麗華は、理津子の本当に生きているのかとさえ思われる無惨な姿に涙が出て止まらなかった。

36、廃人にされる理津子（後書き）

後少し風紀委員編続きます。

その後は、ゆかりが戻ってきますので安心して下さい。

37、肉塊にされる理津子（前書き）

今回も酷い内容です。

読まれる方は注意して下さい。

37、肉塊にされる理津子

37、肉塊にされる理津子

昼休みの時間に和彦が、ゆかりにちょっと来てくれと耳打ちする。そして、屋上に連れ出したゆかりに、自分の署名と印鑑を捺した紙を渡す。

「この紙に、私は合意の上、山本和彦に拷問を受けています。私に何があっても合意の事なので問題ありませんと書くんだ。そして、印鑑捺して持ってこい」

ゆかりは、何のことか分からなかったが紙を受け取り了承する。

「どうやら、姫野と柏木は始末されたらしいからな。僕はそうならない様に手をうっておかないとな。こうしたきちんとした合意の書面があれば風紀委員長の橘は文句言わないそうだからな」

「えっえっ、姫野さんと柏木さん、始末されたって？」

「渡邉は嬉しいだろうな。自分を拷問してた奴が始末されたんだから」

「そ、そんな事ないです。同じクラスメイトなのに」

「あと佐瀬祐一も始末されたみたいだからな。まあ、みんなこの学

校の問題児だ。始末されてホッとしてる奴も多いだろうさ」

「始末されたってどういう事なの？」

「今日、みんな学校来てないだろ。そういう事だよ。たぶんもう二度と学校に来る事はないな」

噂には聞いた事があった。風紀委員に睨まれた生徒は、学校に来なくなり、二度とその姿を見た者はいないと。その時、和彦は気が付かなかったが、二人が始末されたと聞いてゆかりは非常に興奮していた。

・・始末って事は処刑されちゃったんだよね。あの二人、どんな風に処刑されたんだろう。マンコ壊されてから処刑なら羨ましいな。私ならマンコ徹底的に壊されて、その後、おっぱいも顔を壊されて処刑されたい・・

ゆかりは、それとなく風紀委員のメンバーに聞いてみようと考えていた。そして、和彦と屋上で別れてから別棟の各委員会の部屋が並ぶ中から風紀委員会の委員会室へ行ってみたが、今日はまだ委員長も副委員長も登校して来ていないので何も分かりませんと言われてしまった。もしかしたら、あの廃ビルに行けば何か分かるかも、ゆかりは放課後密かに行ってみようと考えた。その廃ビルで、ゆかりが熱望する処刑が執行されているとは知らずに……。

★　★　★　★

学校では昼休みになっている頃、麗香は西園寺に激しく犯され、性

器を血塗れにし無様に泣き叫んでいた。最初こそバルトリン腺から粘液を分泌し、自慰よりも気持ちが良いなどと思っていたが、膣から処女膜を突き破られ激しく腰を動かされると、初めての麗香にとって快感などまるでなく激しい痛みしかなかった。

「破壊した理津子さんを眺めながら麗香さんのマンコを犯せるなんて今日は最高の日だな」

西園寺は感激しながら麗香の性器を犯し続ける。麗香は四つん這いで制服のスカートを捲り、下着を膝まで降ろした格好でバックから性器を突かれていた。

バコッバコッバコッバコッバコッ

廃ビル内に麗香が犯される音が響き渡り、それに麗香の泣き声が重なっていた。

「うっ」

西園寺の腰の動きが止まり、麗香の腰がグッと押さえ付けられる。そして麗香の膣内に精液がドピュッと放出された。その後押さえ付けられていた腰から手を放された麗香は、グタッと床に横たわった。スッキリした顔の西園寺は、理津子の股間のギャフを抜き理津子を床に仰向けに寝かせると、コンクリートの大きな固まりを持ち理津子の頭の前に立つ。それを見て麗香は不安になった。

「西園寺くん、何するの？」

「何って？　このコンクリートの固まりを理津子さんの顔の上に落とすんだよ」

「ちょっと西園寺くん、もう止めるって言ったじゃない。そんな事して理津子さんを殺す気なの」

「人聞き悪いなぁ。ちゃんと目を潰すのは止めたでしょう。でも、理津子さんを痛め付けるのは、まだ止めないよ」

そう言いながら西園寺は、コンクリートの固まりを理津子の頭に落とす。

グシャァ

「ひぃぃぃっ！！」

思わず麗香が悲鳴を上げるが、理津子の頭は潰れてはいなかった。しかし、西園寺は落としたコンクリートの固まりをまた掴み持ち上げる。そして、また落とす。

グシャァ

また、持ち上げる。そして、落とす。それを何度も繰り返され、理津子の頭から骨が砕けるような嫌な音がしてきた。

「本当にもう止めて、西園寺くん。お願い。理津子さん、死んじゃうよ」

「そうだね。このコンクリートの固まり、けっこう重いからね。さすがに僕も疲れた。だから次の拷問に変えるよ」

西園寺は、理津子の潰れた顔の前に屈み込むと、理津子の顔に液体

のようなものをかけている、続けて抉られた胸にも振りかけた。そして、チャッカマンを点火すると火を理津子に近付けていった。

ボオォォォッ

理津子の顔と胸から激しく炎があがる。

「ひぃぃぃっ！！」

麗香がまた悲鳴をあげるが、西園寺は楽しそうに理津子の顔と胸が焼けていくのを眺めていた。そして、黒焦げになった理津子の顔と胸に小便をかけて消火する。

「ははっ、理津子さんの顔や胸におしっこかけるなんて気持ちいいな。また、興奮してきたよ。よし、次の拷問だ」

麗香は言葉がなかった。こんな状態の理津子さんを、まだ拷問して痛め付けるつもりなの。もう理津子さんは死ぬまで拷問され続けるしかないの。ギャフで股間から吊るされていた時も、理津子はもう肉塊にしか見えなかったが、今は更に酷い状態になっている。麗香は、あまりの恐ろしさに体の震えが止まらなかった。

「ほら、この新しい三角木馬見て下さいよ。あの二人をもっと痛め付ける為に作ってきたんですが、先に理津子さんに跨がってもらいますね」

西園寺の言った通り、新しい三角木馬が置いてあった。その三角木馬は頂点の部分に杭が４本突き出ていた。両側が太い杭、中の２本が細い杭になっていた。

「あの杭にマンコと肛門を突き刺すんですよ。そうすればマンコと肛門に深く突き刺さるのは勿論、体を動かす事も出来ずに木馬がマンコに食い込んでいくんです。もちろん、それだけじゃなくて、あの杭は電極になっていてマンコに電流を流せるんです。強さも変えられるから焼き加減も調整出来て便利だと思いますよ」

麗香はその恐ろしい三角木馬に戦慄した。順子と結衣に使用されるだけなら、凄いじゃない西園寺くんと絶賛したところだが、それがあの凄まじい拷問で体を破壊され、もう生きてるのかさえ怪しい弱りきった理津子に使用されるとなると、恐ろしい処刑具にしか見えなかった。そして、西園寺は麗香の手足をロープで縛り動けないようにする。

「ごめんね、麗香さん。麗香さんに邪魔されると困るから、先に縛っておくね」

芋虫のように床に転がる麗香の前で西園寺は、理津子を担ぎ上げ新型の三角木馬に跨がらせる。理津子の股間の穴と肛門に杭がズブズブと深く突き刺さり三角木馬の頂点が激しく食い込んだ。そして、西園寺は、理津子の僅かに残った太ももに内側にびっしりと針の付いたベルトを巻いていく。そのベルトには外側に何個かリングが付いており西園寺は、そのリングに重りを吊るした。

「理津子さんだから、最初から５０キロくらい平気だよね。あんな小物のメス２匹とは違うからね」

西園寺は、理津子に重りを付けたついでに順子と結衣にも重りを追加していく。各々２０キロの重りを追加され計４０キロになったが、理津子よりは軽い重さだった。

「これだけじゃ理津子さんに失礼だから、これも着けてあげるね」

西園寺は、内側に幾つか突起の見える頭全体を覆う鉄仮面を理津子の頭に装着する。鉄仮面からはコードが延びていた。この目の部分だけが空いている赤錆色の鉄仮面を被せられた理津子は、まるでこれから処刑される罪人のように哀れで無様な雰囲気を醸し出している。

「これも電流が流れるように出来てるんだよ。これで、理津子さんの脳ミソにも電気を流して焼いてあげる。大丈夫、殺したりはしないから、死ぬ寸前の一番苦しいところで停めるからね」

この人は悪魔なのか、どうして理津子さんをここまで苦しめる事が出来るのか、麗香にはとても理解出来なかった。

「それじやあ、スイッチを入れるよ」

麗香は、止めてと叫ぼうとするが、口がパクパク動くだけで恐怖で声が出なかった。

・・誰か助けて!!理津子さんが脳ミソとお腹を焼かれて死んじゃうよ・・

麗香の悲痛な思いは、しかし誰にも届かなかった。

38、処刑される理津子（前書き）

今回も、前回に引き続き惨たらしい内容です。
理津子の人格等無視して、とことんまで痛め付けられてしまいます。
女の子が痛め付けられるシーンばかりですので、苦手な方は読まないようにして下さい。

38、処刑される理津子

38、処刑される理津子

「あーーーーーーーーっ」

ようやく声が出せた麗華だったが、言葉が出せない。麗華の少し先では、手足も切断され胸も抉られ三角木馬に跨され鉄仮面を装着された哀れな姿の理津子が居る。その理津子はこれから頭と股間に電流を流され、まさに処刑されようとしていた。西園寺は、ロープで輪を作り、また何かをやろうとしている。

・・これ以上いったい何するの・・

麗華が床に転がったまま不安な目でみていると西園寺は、理津子の首にロープの輪を通し天井から吊り上げていく。理津子は首吊り状態になっていた。太ももには50キロの重りが下げられている為、理津子は上下に引き伸ばされ、それまで前のめりだった姿勢がピンと背筋を伸ばした姿勢になる。理津子の首がギュゥーッと伸び、切断されわずかに残った腕が苦しそうにグルグルと動いている。麗華はそれを見て理津子がまだ生きていると安心したが、このまま首を吊られていたら確実に死んでしまうのは間違いなかった。

「おっ、お願いっ理津子さんをもう許してっ!!」

ようやく声の出た麗華が叫ぶ。が、西園寺は聞こえないのか、電流

のスイッチを入れてしまった。

「んんんんんんんんんんんんんんんn！！！！！！！」

声にならない絶叫が鉄仮面の下から迸り、理津子の残った腕がぶんぶん振り回され体がびりびりと震えている。鉄仮面から見える理津子の残った右眼は白目を剥いて飛び出しそうに盛り上がっている。

「もお、やめてぇ！！理津子さん、死んじゃうっ！！代わりに私を拷問してっ！！」

麗華の叫びに今度は西園寺は反応し振り返った。そして、電流のスイッチを切った。

「もう理津子さんの拷問やめて下さい。代わりに私が拷問受けますから」

麗華を怪訝な顔で見つめながら西園寺は呟く。

「麗華さん、どうして君はそこまで理津子さんの為に自分を犠牲にしようとするのです？僕には理解出来ません」

「人間同士なんて理解出来るわけがないでしょう。私だって、あなたの事が理解出来ません。でも言うなら理津子さんは私にとって大切なくてはならない友人だからです」

「僕にとっても理津子さんは大好きなたった一人の女子ですよ。だから、理津子さんの全てが欲しい」

「平行線ですね。それでは折衷案です。私と理津子さんを一緒に拷

問して下さい。その代り理津子さんの首のロープは外してあげてください。それならいいでしょう」

「本気ですか？麗華さんのマンコ、もう使えなくなるかも知れませんよ。排便だってどうなるか分からない。この三角木馬の杭を見て下さい。マンコ用が直径１８センチ長さ３０センチ、肛門用が直径１０センチ長さ２０センチあります。膣は裂け、子宮は串刺しになりますよ。肛門だって裂けるかもしれない」

「構いませんよ。それくらい、理津子さんの苦しみに比べれば。それより早く理津子さんの首のロープ外してください」

西園寺は、麗華に押されるように理津子の首のロープを外し三角木馬の両側に踏み台を置いた。ロープを解いてもらった麗華は自ら踏み台に乗り三角木馬に跨るとスカートを捲る。

「パンティは脱がなくてもいいですか」

「僕は別に麗華さんのマンコ見たい訳ではないので構いませんよ。下着一枚くらい問題なく突き通しますから」

「私のマンコは先程さんざん見ましたからね。拡げられて中身も見られて、臭いも嗅がれて、舐められて味もみられて、その後処女膜貫通して中出しもしましたから、もう興味ないのでしょうね」

「いやいや、誤解ですよ。麗華さんのマンコは理津子さんの次に素晴らしいです。麗華さんが許してくれるなら何回でも犯したいところです」

「西園寺くん、残念ながらそれはないです。では、この木馬に跨ら

せて頂きます」

麗華は少しずつ腰を下ろしていくが、先端の尖った鋭い杭が近付くにつれ恐怖で体が震えてきた。

・・怖い、怖い、怖い、怖い・・

「うぅ！」

冷たい金属の感触が膣に当たり麗華は更に怖気づく。しかし、約束した以上ここで逃げる訳にはいかない。麗華は少しづつ膣内に杭を挿入していく。円錐形の杭はまだそれ程の太さはなく痛みもなく膣内に入ってくる。しかし、肛門にも杭が入り始めた頃から膣の杭が太くなり、そのままでは入らなくなってくる。もう足場を取り自分の体重で無理矢理挿入するしかなかった。両腕は後ろ手に縛られているので、足場をどかせばもうマンコを串刺しにされる事を阻む手立てはない。

「さ、西園寺くん、足場をとってください」

麗華が震える声と体で一大決心して言うが、西園寺は何の感情もないようにあっさりと踏み台を外す。三角木馬の杭が一気に麗華の膣と肛門に突き刺さる。

「あっばぁぁぁぁーーーっ！！！」

麗華の膣と肛門から血が噴き出し下着を赤く染める。西園寺は背中合わせで三角木馬に跨っている理津子と麗華を一緒にグルグルと拘束していく。そして、麗華の太ももと足首にリング付きのベルトを巻き、リングに重りを下げていった。

「麗華さんは重り下げるところ多いから理津子さんの倍の１００キロでいいよね」

信じられないという顔をする麗香を無視して、西園寺は息を切らしながら麗華の足に重りを下げていく。そして、片足５０キロ、計１００キロの重りが麗華の足に吊り下げられる。

「あっびゃゃゃーーーーーっ、あびゃびゃびゃびゃびゃびゃっ！！！！」

麗華の足がピンと伸び切り、骨が軋む音が響く。性器と肛門には深く杭が突き刺さり、目は白目を剥き大量の涙と鼻水とよだれで顔を汚していた。

「だじげでっ！！ゆるじでぇぇ！！！」

「麗華さんもさすが副委員長ですね。こんなに重り下げられてるのに、まだ喋れるなんて余裕ですね。せっかくなのでもう少し重り下げてあげますね」

西園寺は、さらに麗華の足に重りを追加する。片足に１０キロずつ。麗華の足がミシミシと悲鳴を上げ、クリトリスは潰れ、恥骨も割れる寸前だった。

「あっびゃーーーーーっ！！あばばばばばばばっ！！」

泣き叫ぶ麗華の頭にも電極を取り付けた西園寺は楽しそうに笑う。

「それじゃあ、電流ながすよ。約束通り、理津子さんは殺さないよ

うに気を付けるけど、麗華さんが死んじゃったらごめんね」

西園寺がスイッチを入れ三角木馬に跨されている理津子と麗華の性器と頭部に電流が流される。

「んごぉぉぉーーーーーーーーーーっ！！」

「あっぴゃぁぁぁーーーーーーーーーーーっ！！！」

二人が揃って絶叫する。

「ふふっ、理津子さんの方はどんどん強くしてあげるからね」

西園寺はダイヤルを回し、理津子の方の電流を強くしていく。二人の体がブルブル震え、悲鳴が途切れる事はなかった。西園寺は、きっちり1分間も電流を流し止めた。理津子は鉄仮面を装着されているので表情が分からないが、麗華は目鼻口耳から血を流し、まだぶるぶる震えている。

「あばばばばばばばばばばばばばばっ」

麗華は、股間からも大量に血を流し放心したように悲鳴を上げ続けている。

「だじげで、あたまとマンコ、すごくいたいの、もう死んじゃうよお」

西園寺は苦笑するが、麗華は激痛と死への恐怖でもう心が折れていた。

「泣き言ですか、麗華さん。理津子さんと一緒に頑張るんじゃないのですか」

「理津子さん、ごめんなさい。私はもう怖くて痛くて耐えられない。本当にごめんなさい。だから私はだじゅげでぐだじゃい」

麗華は、号泣する。

「いいですよ。僕は別に麗華さんを拷問するつもりはなかったので…。でもね、理津子さんを裏切って自分だけ助かろうとする行為は僕には許せないので最後に、もう一度特別に麗華さんに電流を流してあげます」

西園寺は、憤慨した顔で麗華の足首にもコードを巻き付ける。そして、セーラー服を捲り上げるとブラもずらし乳首へコードの付いた針を深く刺していく。

「ひぃぃーーっ！！」

麗華が悲鳴を上げるが西園寺は次にコードの付いた二本の釘を持つ。

「今度はもっと痛いですよ、麗華さん」

西園寺は麗華の下着の上から恥骨の両側に釘を打ち込む。

「ひぎゃぁぁぁーーーーーっ！！」

「準備オーケー。今度は全身いくよ、麗華さん。時間も長くするからね。特にマンコは何倍にもなるから子宮沸騰して溶けちゃうかな」

「いやだぁぁぁーーーっ！！やめでぇぇぇーーっ！！おねがいいい、わだぢをゆるじでぐだぢゃいいいーーっ！！！」

「ダーメ！！」

「あっぴゃぁぁぁーーーーーーーーーーっ！！！！」

麗華の全身が、今まで以上に激しく震える。

「あびゃびゃびゃびゃびゃびゃっびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃ！！」

ブッシャァーッ！！

麗華の、目鼻口耳から血が噴き出した。股間からも血が溢れ出し足を伝い床に血溜まりを作っていく。

「さて、理津子さん。理津子さんもいきますよ、それっ」

「んんんんんんんんんんんんんんんんんん」

理津子の体もブルブル震える。

「理津子さん。やっぱり、理津子さんだ。最高に強くして倍の時間いきますね」

理津子の頭に被っている鉄仮面の隙間から煙が立ち始める。そして、股間からも煙が上がり始めた。西園寺は、更に電流の強さを上げていく。すると、ぶるぶる震えていた理津子の頭から残った右の眼球が飛び出してしまった。理津子の眼球は床に転がり、眼窩から激し

く血が噴き出す。

「ははっ、理津子さん、目まで飛び出しちゃったよ。もう脳ミソもちょうど良い具合に焼けちゃったかな」

電流を止めても二人は、もう死んだようにピクリとも動かなかったが、西園寺の興奮はまだ収まらない。

「もう駄目だよ、理津子さん。我慢出来ない。最後のボタン押すね」

西園寺は、ロープを解き気絶しているのか死んでるのか分からない麗香を三角木馬から降ろし、理津子の背後に鉄パイプを取り付け、理津子が背筋を伸ばした姿勢で固定する。そして、理津子の首を後ろに倒し口が上を向くように固定し鉄仮面の口の部分を開口した。

「さあ、理津子さん。このボタンを押すよ。この三角木馬のマンコ用の杭は電極だけじゃなくて、もうひとつ仕掛けがあるんだ。それはね」

西園寺は楽しそうに笑う。

「このボタンを押すと、杭が伸びてマンコだけじゃなくて体を口まで串刺しにしてくれるんだよ。理津子さんを串刺しに出来るかと思うと、ゾクゾクするよ、もう射精してしまいそうだよ」

西園寺は、三角木馬に跨がったまま固定されこれから串刺しにされる理津子の姿に、この上なく興奮し体が震えてきていた。そして、震える指でボタンを押す。

ザシュッ！！！！

「ぶぼぉぉぉっ！！」

鋭い音と共に理津子の上を向いた口から血塗れの杭が突き出ていた。串刺しにされた理津子の体がビクンビクンと大きく痙攣する。三角木馬に跨がりながら串刺しにされた理津子は、目・鼻・口・耳・胸・恥丘・性器・肛門、全てを破壊され四肢も切断された惨めな姿でビクンビクンと無様に痙攣している。西園寺は、そんな哀れな理津子の姿を見ながら、我慢出来ずに自慰をしていた。そして、西園寺は自慰をしながらまたボタンを押し杭の長さを元に戻してから、またボタンを押す。

ザシュッ！！！！

理津子はまた串刺しにされた。西園寺は、それを何度も繰り返す。

ザシュッ！！！！

ザシュッ！！！！

ザシュッ！！！！

さらに串刺しにされたまま電流も流される理津子。その哀れで惨めな姿を見ながら西園寺は射精していた。

その様子を、昼休みが終わってから早退してこの廃ビルに来ていたゆかりが物陰で震えながら見ていた。

39、橘理津子、その後（前書き）

今回、少し驚きの展開かも知れません。
かなり強引ですが、ご容赦ください。

３９、橘理津子、その後

３９、橘理津子、その後

ゆかりは、放課後いつもの廃ビルへ様子を見に行こうと考えていたが、我慢しきれず早退届を提出し廃ビルへ向かっていた。そして、誰もいないと思っていたビル内に人の気配を感じ身を隠す。ゆかりと同じ学校の制服の少女が泣きながら犯されているところだった。バックから犯されている少女は、痛い痛いと号泣しているが男は構わず激しく腰を動かし犯し続けていた。ゆかりは犯されている少女に目を取られていたが、その近くに吊るされているモノに気づきギョッとする。初めそれが人間だとは気が付かなかった。それほど酷い状態の人間が逆さに吊るされている。手足を切断され、胸も顔もグチャグチャで、股間に巨大な釣り針のような物を突き通され吊られている。その股間と体型から、その吊られている人間が女の子であると、ゆかりは思った。もちろん、ゆかりは自分の学校の風紀委員長である橘理津子の事は知っているが、いつも颯爽と胸を張り歩いている理津子が、この変わり果てた惨めな姿で吊るされている女子と同一人物とは気付く由もなかった。

「マ、マンコからあんな大きな釣り針刺されて吊るされてる…。す、凄い…」

ゆかりは、自分が想像した事もない凄まじい責めに恐怖よりも興奮し性器を濡らしていた。

・・ゆかりも奴隷になったら、あんな風にされるのかな・・

ゆかりは、手足を切断され奴隷化された自分が性器からギャフを突き通され逆さに吊られている姿を想像し太ももまで濡らすほど興奮していた。そうしているうちに、吊るされていた理津子は床に下ろされ今度は頭に大きなコンクリートの固まりを落とされようとしている。

・・嘘だよね。そんな事許されないよ。あの女の子死んじゃうよ・・

しかし、無常にも動くことも出来ない仰向けの理津子の顔面にコンクリートの固まりが落とされる。それも何度も何度も。

「ひぃぃーーっ」

ゆかりは小さく声を上げてしまい慌てて口を押えたが、理津子を破壊する事に夢中になっている男・西園寺に気付かれる事はなかった。そして、その後杭の突き出た三角木馬に跨がされる理津子。

・・マンコとおしりの穴に、あんなの突き刺されて跨がされちゃうの・・

ゆかりが驚愕して覗き見るなか、理津子は鉄仮面を装着され電流を流されていた。

・・これが処刑……。あの女の子、もう処刑されちゃうんだ・・

ゆかりは初めて見る処刑に興奮して息が荒くなってきた。すると、先程犯されていたセーラー服の女の子も三角木馬に跨がされ重りを付けられる。そして、二人一緒にぐるぐるとまとめて縛り付けられ

た。

・・あの女の子も処刑されちゃうの？・・

ゆかりは、一体あの二人は何をやってしまったのか考えもつかなかった。その時、奥の三角木馬に跨がされている順子と結衣に気が付いた。今まで手前の処刑に気を取られて目に入らなかったらしい。

・・姫野さん、柏木さん、もう処刑されちゃったのかな？・・

ゆかりは、彼女たちの安否を確認したかったが、距離が遠くハッキリと確認する事が出来なかった。

「あっぴゃぁぁーーーーーーーーーーっ！！あびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃっ！！」

セーラー服女子・麗香の凄まじい悲鳴が響き渡り、ゆかりか驚いて見ると、麗香は顔面の穴という穴から血を噴き出し、股間からも大量に血を溢れさせ気絶してしまったのか、それとも絶命してしまったのか、まるで動かなくなっていた。

・・死んじゃったのかな、あの女の子？・・

セーラー服女子の安否を気遣うゆかりだったが、もう一人の肉塊といっていい体にされた女子は更に酷い事になっていた。ポンッと眼球が飛び出してしまい血が噴き出す。それでもこの仮面女子は許してもらえないようで、ゆかりの見ている前で串刺しにされた。仮面女子の口から血塗れの杭が突き出た時、ゆかりは心臓が止まる程の衝撃を受けていた。

・・あの仮面の女の子、死んだ。本当に串刺しにされた。殺されちゃったよ・・

ゆかりは、生まれて初めての実際の処刑現場で女の子が物のように扱われ処刑され串刺しにされた恐怖と興奮で過呼吸になり気絶してしまった。

★　★　★　★

理津子は、自分の甘い考えを後悔していた。理津子の考えでは、３つの穴を犯されて、性器や胸を痛め付けられる程度だろうと想定していた。それが、ここまで徹底的に自分の体を破壊されるとは想像していなかった。もう、自分は普通の生活を送る事は不可能だろう。女の子として大切で大事な性器も徹底的に破壊されてしまったので、もう女の子の快感を得る事は不可能なうえ手足も失い視聴覚に言葉も失った。もう生きていても何も出来ないだろう。しかし、理津子はそれでもまだ生きようとしていた。西園寺グループの力を手に入れる為には、これ位の犠牲は当たり前。始めからそういう覚悟で挑まなければいけなかったのだ。理津子は自分の考えの甘さを責め、処刑の激痛に必死に耐えていた。ここで意識が飛んでしまったら私はそのまま死ぬだろう。死んでしまったら何にもならない。理津子は耐える。

・・コギト・エルゴ・スム・・

我、思う、故に我有り。理津子は以前、そんなの当たり前と馬鹿にしていた言葉を思い出す。今はその言葉の意味がよく解った。こうして考えている自分の意識がある限り、私はまだ生きている。存在

しているんだ。まだ、こうして記憶している事が思い出せる。私の脳を焼き切るつもりのようだけど、脳の海馬もまだ働いてる。理津子は、それからも必死に、暗闇で無音のなか耐え続けた。長い長い時間の経過後、突然理津子の頭の中に、誰かの声が飛び込んできた。聴覚を失っている理津子が聞こえる筈がない。それは理津子の頭の中に直接飛び込んできた言葉だった。

・・理津子さん、ごめんなさい。私が強引に止めていれば・・

理津子は、その声の主が誰かすぐにわかった。

・・麗香さん?・・

・・えっ!!・・

理津子が頭の中で思うと、相手は驚いたようだった。

・・理津子さん? 理津子さん、ですよね。私です。麗香です。もう一度聞かせて下さい・・

・・麗香さん、お久しぶり。どうやら私、生きているみたいですね・・

・・生きていますよ、理津子さん。良かった。こうしてまた理津子さんと話せるなんて、私は今初めて心から神様に感謝しています。それにしても理津子さんの声が直接頭に入ってくる感じなのですが、どういう事なのでしょう?・・

・・私は視聴覚も言葉も失っていますが、そこに麗香さんがいるのを感じます。おそらくですが、普通、人間は脳の力を使いこなせて

いないのが当たり前。それが私は脳に電流を流されたのが要因か定かではありませんが、脳の力がアップしたようです。これは、テレパシーや第六感と云うものでしょうかね・・

・・凄いですよ、理津子さん。さすが理津子さんです。ここは、西園寺くんの病院のＩＣＵです。今、西園寺くんも急いで呼んで来ます・・

理津子は麗香が病室を出ていくのを感じた。そして、暫く後、慌てて駆け込んでくる気配の後、理津子さんと呼ぶ西園寺の声が頭に飛び込んできた。

・・理津子さん、本当に理津子さんなんですか？・・

・・西園寺くんも久しぶり。間違いなく私、橘理津子ですよ。私を処刑して楽しんで頂けたようで何よりです・・

・・理津子さん。いや、理津子様。これからは僕の事を手足と思って遠慮なく使って下さい。もう、僕の全ては理津子様の物です・・

・・ありがとう、西園寺くん。私も不自由な体なので遠慮なく使わせてもらいますね。ところで今日はあれから何日たったのでしょう？・・

・・ちょうど一週間です、理津子様・・

・・そう。それなら私をあの廃ビルまで連れて行って下さい・・

・・畏まりました。理津子様・・

理津子の要望でセーラー服に着替えた後、理津子は車椅子に乗せられあの廃ビルへ向かって行った。豪徳寺葉月に、あの二人を引き渡す為に……。

４０、対峙

４０、対峙

ゆかりが気が付いた時には、人の気配はなくなっていた。恐る恐る顔を出し覗いて見ると、三角木馬に跨がった順子と結衣だけが取り残されていて、後は誰も居なくなっていた。

・・あの、処刑された二人はどうなったんだろう？・・

ゆかりが確認してみると、血の跡だろうと思われる染みが残っていたりするが、綺麗に片付けて清掃されているため、ここであったことを想像できる物は残っていなかった。

・・姫野さんも柏木さんをも、まだ生きてる・・

二人に近付いてみると、二人が微かにうめき声をあげているのが分かった。背中合わせで一緒に拘束されている順子と結衣は股間から血を流し何キロあるか分からない程の重りを下げられ足はピーンと一直線に伸びきっている。そして、目も口も塞がれ耳から血も流れているので鼓膜も破られているのかもしれない。全裸にされた二人の身体中ミミズ腫れが覆っている。顔も、特に結衣の方の損傷が酷い。ゆかりは、二人を見ていったいどれ程の拷問が行われたのか想像もつかなかった。

・・まだ生きてるけど、この二人も処刑されて殺されちゃうのかな？・・

ゆかりは、初めて見た処刑シーンを思い出していた。情け容赦なく処刑されていく少女。手足を切断され顔も胸も破壊され串刺しにされる少女。ゆかりは、またバルトリン腺から粘液を激しく分泌させ、太ももまで濡らし始めていた。

・・もうダメ、早く自慰しないと我慢出来ない・・

ゆかりは逃げるように廃ビルから飛び出すと、自宅に向かって走り出していた。

★　★　★　★

西園寺は車椅子を押しながら、理津子を処刑した事を思い出していた。あれほどの処刑を受け、体を破壊されながら生きている理津子に心の底から感服していた。

・・やはり理津子様は、僕の想像を超える女子なんだ。僕は一生この方に付いていく・・

西園寺が決意を固めていると、車椅子に座っている理津子が、後ろを振り向く。黒髪のウィッグを付け顔中包帯を巻かれた理津子を見て、西園寺はドキリとした。

・・ごめんなさい。驚かせて。目がないのに癖で振り向いてしまうのですよ。それよりも、ありがとう西園寺くん。もう私は誰かがいてくれないと何も出来ないので助かります・・

理津子の声が、西園寺の頭に入ってくる。そうだった、理津子様は人の考えていることが分かるんだった。西園寺は、ある意味前の理津子より凄みを増した理津子に今まで以上に頭が下がる思いだった。

廃ビルに到着し西園寺と麗香は、順子と結衣の様子を確認する。そして、目隠しと口枷を外すと二人はヒャハハと笑いだした。凄まじい拷問で性器を破壊され発狂した二人は、この一週間の放置にも耐え抜き生きているようだった。

「大丈夫、生きてます。もし死んでたら、僕が処分しようと思いましたが、これなら引き取って貰えますね」

・・そうですね。何より処刑が好きな女ですから・・

その時、麗香が腕時計を見る。

「理津子さん、そろそろ時間です。体は大丈夫ですか？　もし、体調が悪くなったらすぐ教えて下さいね」

・・ええ、大丈夫です。それよりも豪徳寺葉月は怪物です。二人とも気を付けて下さいね・・

西園寺と麗香が気を引き締めていると、カツカツとハイヒールの音が響き、それに続いて大勢の靴音が響いてきた。そして、現れた葉月の姿を見て西園寺と麗香はギョッとする。葉月は全裸に赤いハイヒール、股間の小陰唇に重りをぶら下げ、クリトリスには葉月と書かれたネームプレートを付けていた。

・・何ですか、この人？・・

・・とても、お近づきになりたいとは思いませんが・・

西園寺と麗香が理津子に頭の中で問いかける。

・・これが豪徳寺葉月です。ご覧の通り頭のおかしなサイコパスです。ただ大変な力を持っています。あなたたち二人とも、もう少し大人になれば好むと好まざるに関わらず、この女と関わりを持っていくことになるでしょう。なので今のうちに顔を売っておくのもいいでしょう・・

西園寺と麗香は、３人の打合せ通りに事を進めていく。

「豪徳寺葉月様でよろしいですね。初めてお目にかかります西園寺晋作と申します」

「私は、香坂麗香と申します。以後よろしくお願い致します」

「ほうっ、西園寺グループの息子に香坂家の娘か。さすが橘だ。良い友人を持っている。だが、その姿はどうした？酷い有り様だが」

「理津子様は事故に遇われまして、この様な姿に……」

「口も不自由になってしまわれましたので、私たちが代弁致します」

「ふん、橘ともあろうものが情けない。だが、その全身から発する気は間違いなく橘のものだな。それも以前よりも凄まじい気だ。さすが橘というところか。それで、ブツは？」

「こちらです。豪徳寺様」

西園寺が、三角木馬に乗せられている順子と結衣を示す。葉月が残酷な笑みを浮かべると、背後にいるスーツ姿の男性に合図する。男たちは手際よく順子と結衣の拘束を解き三角木馬から下ろそうとする。

「あっ、気を付けて下さい。その二人、性器と肛門に杭が突き刺さっていますから」

男たちは心得たと順子と結衣を上方に静かに上げていく。二人の性器と肛門からズルズルと杭が抜け、性器と肛門はポッカリと大きく開いたままになっていた。

「それじゃいただいて行くわね。ありがとう、橘さん。また何かあったら宜しくね」

葉月は、男たちに順子と結衣を運ばせ、いそいそと立ち去っていった。葉月の頭の中は既にこの二人をどうやって処刑しようかと、そればかりを考えていた。

・・さあ、それでは私たちは登校いたしましょうか・・

理津子の言葉に二人は驚いた。

「登校って、理津子様。まだそんなに動いては駄目ですよ」

「そうですよ。まだ入院していないと」

・・何を言っているんですか、二人とも。私たちは学生ですよ。学業が本文です。さあ、行きましょう・・

理津子に圧倒された二人は車椅子を押して歩き出した。

４０、対峙（後書き）

順子と結衣の二人が処刑され絶命する様子は、別の作品「檻の中の幸福」で執筆しています。興味のある方は、そちらの作品もお読み頂ければ幸いです。

４１、ゆかりの自虐三角木馬

４１、ゆかりの自虐三角木馬

ゆかりは、廃ビルでの凄まじい処刑を見て以来、以前よりもっと酷く自分の性器を痛めつけたいと考え始めていた。ゆかりは、そのための準備を進める。そして、準備が整ったゆかりは逸る気持ちを抑えつつ全裸になり、１３０デニールの黒タイツを穿き、お気に入りの旧スクール水着と言われるクラレｋｋ７０を着用した。そして、首に首輪を両手首に手枷を両足首には足枷を装着し、さらに太ももに股枷を装着した後、鼻にフックをかけると思い切り引っ張りあげ首輪に固定した。
この時点ですでに固く勃起しているゆかりの乳首を用意しておいたピンチで挟む。

「ひ、ぎゃっ」

思わず声をあげてしまったゆかりは慌てて口に手を当てる。このピンチはバネを多くし挟む部分もヤスリで削り鋭角にしたゆかり自作の強力な拷問具といえた。

・・痛いよぅ・・

涙目になりながらゆかりは、当初考えていた上唇と下唇をこのピンチで挟み、さらに舌にもピンチを挟んでいく計画を改めた。

・・声を出せないように口を塞いだ方がいいよね・・

そう考えたゆかりは、今まで穿きながら自慰し汚れた下着を手に取ると自分の小便や体液で激しく変色したクロッチ部が舌に当たるように丸めて口に押し込んでいった。さらに完璧にするため、その上からボールギャグを装着する。

「もごごごっ」

声を出すことも口を動かすことも出来なくなったゆかりは満足し、設置しておいたビデオカメラのスイッチを入れていった。いろいろな角度から撮影出来るように四台のカメラを固定しておいたのだった。カメラの録画ボタンを押した後、ゆかりは最後の準備にはいった。前に使用した針付の下着を再び穿いていく。その常人では怖くて穿くことの出来ない針付の下着を興奮した顔で身に付けたゆかりは性器に刺さる針の位置を確認し踏み台に乗り自作の三角木馬に跨がっていく。そして、足枷と股枷に先に鉄球の付いたチェーンを付けていった。一つの重さが十キロになるため、合わせて四十キロ。ゆかりの体重ほどの重量になる。最後の仕上げにゆかりは黒い布で目を覆い視覚も遮断した。そして、両腕を背中にまわすと手枷に付いているリングで両腕を動かせないように固定した。あとは今乗っている踏み台を蹴り飛ばせは、三角木馬の足の下に置いたブロック状の氷が溶け両足が床につくまでゆかりは動くことも助けを呼ぶことも出来ず性器を襲う激痛に苦しみ抜くしかないのだ。ゆかりはその性器を痛めつけられる自分の姿を想像し興奮していた。

・・覚悟しなさい、ゆかり・・

ゆかりは自分に告げると一気に踏み台を蹴り飛ばした。

「おごごごっーー」

声にならない叫び声がゆかりの口から迸る。三角木馬の頂点が食い込み下着に埋め込まれた針がゆかりの性器に深く突き刺し抉る。

「うがぁぁぁっっ」

ゆかりの想像をはるかに超える激痛に目隠し越しに涙が流れ落ち、股間からは小便が溢れだした。

・・痛いよぅ、誰か助けてぇ・・

声を出せないゆかりは心の中で絶叫する。両足は鉄球の重みでピンと伸びきったまま動かすことも出来ない。三角木馬下の氷塊はまだ溶け始めてもいなかった。

・・痛いよぅ痛いよぅ・・

ゆかりは少しでも性器の痛みを減らそうと身体を反らすが、足首だけでなく太ももにも付けられた鉄球の為腰から下を動かす事は不可能だった。ゆかりの体重プラス鉄球の重量が三角木馬の鋭角が食い込む性器に集中する。それだけでも耐え難い苦痛であるが、さらに画ビョウの針がゆかりの性器を抉る。

「おがあぁぁぁっ」

顔面を涙と鼻水で汚し小便も漏らしながら苦しむゆかりの姿は鮮明にビデオカメラに記録されている。そして、あまりの苦痛にゆかりの頭の中から抜けてしまっているが、ゆかりは自分の性器をさらに痛め付ける用意をしていた。それは、氷の厚さを変え時間差で鉄球

が追加される仕組みだった。そして、一番薄い氷が溶け一つめの鉄球が転がり落ちる。

「おごぉぉおっっ」

鉄球が両足に追加され、ゆかりは絶叫する。片足に三つの鉄球がぶら下がり、その重量は三十キロ、合わせて六十キロにもなる。

・・許して、許してぇぇ・・

ゆかりは誰にでもなく許しを乞う。しかし、ゆかりの下半身はビクリとも動かすことが出来ず、三角木馬の鋭角は容赦なくゆかりの性器に食い込んでいく。もはや考えることも出来ないゆかりは無意識に両手の戒めを外そうともがいている。その時、二つめの氷が溶けさらに鉄球が追加された。

「・・・・・」

今度は股枷に左右一つずつ追加され、これで合計八十キロ。ゆかりは最早もがくことも出来なくなっていた。黒いタイツに包まれた足は一直線にピンと伸びきり、股間には三角木馬が鋭く食い込んでいる。

「・・・・」

周囲にはゆかりの汗と小便の他にゆかりの股間を濡らしてしまっているゆかり自身の液体の匂いが混ざり、ムッとする空気になっていた。また、それに伴う部屋の温度上昇もあり氷の溶ける速度が速くなっていた。そして、ついに最後の氷が溶け鉄球が転がり落ちる。

「・・・・・」

左右の足枷にさらに一つずつの鉄球がぶら下がり、合計百キロもの重量がゆかりの性器に襲いかかる。悲痛な呻き声をあげ、上半身まで　ピンと一直線になったまま身動きも出来ないゆかりの両足はミシミシと音をたて恥骨は今にも割れそうなほど三角木馬は激しく容赦なく食い込んでいた。そして、下着に取り付けた画ビョウの後側三本はゆかりの会陰部と肛門に突き刺さり抉っている。そのため、ゆかりは肛門が弛み大便まで漏らし始めていた。

スクール水着に黒いタイツを穿き、その上に針を埋め込んだ女児用下着を身に付けたゆかりは、三角木馬に跨がり汗と涙と鼻水と大小便漏らしながら乳首は固く勃起したままだった。

ゆかりは、このまま自分は死ぬかもしれないと考えた。このまま絶命し誰かにこの無様な姿を発見された時のことを想像するとゆかりは、下腹部が熱くなり、もう潰れているであろうクリトリスが固く勃起し大量のゆかり自身の体液が溢れだすのを感じた。

・・だ、だめ・・

ゆかりはまだ死ねないと思い返した。この無様な姿のまま絶命するのも、ゆかりにとって非常に興奮することであるが、まだやっていない事がある、まだ早い。そういう思いがゆかりの中に沸き起こってきた。

外性器は処刑したけど、膣や子宮の内性器は処刑してない。ゆかりはやり残していることがあると感じた。

・・もっと徹底的に女の子の大切なところ全て処刑しないと・・

42、ゆかり、再びの拷問

42、ゆかり、再びの拷問

ゆかりは自虐のダメージで学校を休む羽目になり、体が回復してから廃ビルに行ってみたが、既に順子と結衣の姿は無かった。

・・最初の二人みたいに処刑されて、もう処分されちゃったのかな？・・

ゆかりは順子と結衣の行く末を案じるというよりも、どんな風に処刑されたのかが気になっていた。

・・委員長は風紀委員の人が始末したって言ってたから、やっぱり委員会に行って聞いてみようかな。クラスメイトの心配してもおかしくないよね・・

ゆかりは昼休みに風紀委員会の部屋に行ってみたが鍵が鍵が掛かっており誰も居ないようであった。仕方なくゆかりは放課後まで我慢し再び風紀委員会室へ向かう。今度は鍵は外されており、ゆかりがノックすると中からどうぞという声があった。そして、中に入ったゆかりはそこにいた生徒を見て息が止まりそうになった。凄まじい処刑を執行していた男子。処刑されていた女子。そして、車椅子に座っているのは串刺しにされ処刑された女子。何が起こっているのか分からないゆかりの頭の中に声が響く。

・・あなた、私が処刑されるところを見ていたようね。どうだった？感想を訊きたいわね・・

「えっ、えっ？」

ゆかりは辺りを見回すが誰の声なのか分からず狼狽えていた。

・・私ですよ。渡邉ゆかりさん。串刺しにされた風紀委員長の橘理津子です。私は近くに居る人の心が分かるのです・・

愕然とするゆかりに更に理津子は続ける。

・・あなたは随分特殊な趣味をお持ちのようね。ああ、心配しないでプライベートな事は他の人には言わないから。それにもう欲求が溜まって爆発しそうね。いいわ、あなたの欲求を解消してあげる。これから、あなたの好きな駿河問いの拷問で痛めつけてあげるわ・・

ゆかりはまだ今目の前に居る車いすに座る少女が自分に語り掛けているとは信じられなかったが、自分の隠してきた性癖まで見透かされている。信じないわけにはいかなかった。

・・麗華さん、西園寺くん。彼女を駿河問いの拷問で痛めつけてくれる。気絶するまで徹底的にね。それと、江越くんか清宮くんを呼んできてください・・

理津子の命令に西園寺は承知しましたとすぐに頷きどちらかを呼びに部屋を出ていくが、麗華は驚いて理津子に訊き返す。

「あの、この女子を？　真面目で大人しそうな女子ですがいいんですか？」

・・ええ、少し痛めつける必要がありますのでお願いします・・

麗華もそれ以上理津子に異は唱えなかった。すぐに麗華は車椅子を押しゆかりと風紀委員会の処刑室へ移動する。そこで、ゆかりは全裸にされ床にうつ伏せに寝かされた。そして、両手足首が背中にまわされ一つに纏めて縛り上げられる。

「ううっ」

これだけでもかなり無理な姿勢になるため、ゆかりが呻き声を上げるが容赦なく吊り上げられていく。そして、すでに弓なりに反りかえっているゆかりの腰に5キロあるブロックが吊り下げられた。

「うびゃぁぁぁーーーーっ!!」

ゆかりが苦痛の悲鳴をあげるが、そのままクルクルと回されていく。そして、十分巻き上げられた後、手を離されゆかりの体は独楽のように高速で回転する。

「あっびゃぁぁぁぁーーーーっ!!!」

高速で回転するゆかりの体が汗ばみ顔が赤くなってくる。

「あばばばばばばばばばばばばばばっ」

ブシュッ

真っ赤なになったゆかりの頭部の毛細血管が破れ、目、鼻、耳、口から血が流れ出す。

プッシャーッ

ゆかりはクルクル回転しながら小便も漏らし始めていた。そこへ、清宮を連れ西園寺が入ってきた。

「うわっ汚いな。おしっこ漏らしてるじゃないですか」

「本当に渡邊さんだ。僕は渡邊さんのおしっこなら汚くないけどな」

それぞれ感想を言いながら拷問を受けているゆかりを見つめる西園寺と清宮だった。

・・あら、清宮くん。彼女のこと好きなんだ。なら、この拷問が終わったら犯していいわよ。最後に喉犯しながらハンマーで下腹部打ち付けてくれる。彼女がウンチ漏らすまでね・・

「えっいいんですか橘さん。嬉しいなぁ」

清宮は早くこの拷問が終わらないかと心待ちにしていた。そして、回され続けたゆかりがついに失神する。さっそく、ゆかりは机の上に仰向けに寝かされ左右に周った麗華と西園寺がゆかりの手足を大の字に広げ押さえ付ける。清宮はゆかりの性器を指で拡げ舌で隅々まで舐めまわす。クリトリスや小陰唇の襞の隙間や会陰、尿道、膣口、そして、肛門まで清宮はじっくりとゆかりの性器を味わうと、ゆかりは失神していながらもバルトリン腺から粘液を分泌し性器を濡らし始めた。清宮はゆかりが濡らし始めたのを確認し、ゆかりの性器に自分の性器を突き刺した。そして、ゆかりの腰を押さえ付け腰を激しく振る。

「渡邊さん、いいよ。中に出してあげるからね」

清宮は、ゆかりの中に大量に射精すると今度は頭の方にまわり机から出ているゆかりの頭を倒して押さえ付け口に突き入れ喉の奥を犯す。そして、餅をつく杵のようなハンマーをゆかりの下腹部に叩きつける。

ブリッブリブリッ

ゆかりの肛門から大便が勢いよく溢れだし、ボトボトと床に零れ落ちる。ゆかりは泣きながら大便を漏らし、喉の奥の奥まで犯されていた。

４３、小説・性器爆竹責め

４３、小説・性器爆竹責め

ゆかりはぐったりと机の上で放心したように転がっていた。その間に風紀委員４人で、ゆかりの処置について話されていた。もちろん理津子は約束通りゆかりの異常な性癖については口外していないが、理津子の考えに逆らう者はいないため、理津子の思うように話は進んでいった。そして、ゆかりに決定した内容を伝えるため頬が平手で激しく叩かれる。

「うーん」

気を取り戻したゆかりに理津子が語り掛けた。

・・渡邊さん、これからあなたは毎日昼休みと放課後に犯されて拷問されます。学校のない時は西園寺くんのお屋敷の地下室で行います。よろしいですか？・・

ゆかりは理津子の包帯で巻かれた顔を見つめると、コクリと頷いた。

・・よろしい。それではこれからはそのスケジュールで進めます。それと、渡邊さん。その鞄の中に入れている自作小説の原稿、読ませてくれませんか？　もっとも私は目が見えないので麗華さんに読んでもらう事になりますが・・

ゆかりは、そこまで分かるのかと動揺したが、どうせ理津子にはもう全てが把握されてしまっている。それが一人増えるだけだ。ゆかりは鞄から封筒に入った原稿の束を取り出すと麗華に渡した。

・・ありがとう、渡邊さん。後でゆっくり読ませてもらいます・・

★
★
★
★

ゆかりの性器爆破

作・渡邊ゆかり

ゆかりの性器がとうとう破壊されることになりました。太ももの付け根近くに食い込む白いオーバーニーソックス以外全裸にされたゆかりの両腕が背中にまわされきつく縛り付けられます。そして、足を開いて立つよう命令されます。

「もっと大きく足を開くのだ」

恐る恐る足を開くゆかりに叱責がとび、ゆかりは慌てて大きく足を開きます。

そのままゆかりは性具として提供され飽きられるまで犯し続けられる予定でしたが、観察の結果ブスでスタイルも悪く頭のおかしなゆかりに普通の女の子と同じように気持ち良くさせる価値はないという事になりました。そして、ゆかりの性器は爆竹で破壊することに決まり、両腕を縛られたまま立ち上がったゆかりにさらに足を大きく開くよう命令されます。そして、震えるゆかりの膣口から爆竹が挿入されます。

「火を点けろ」

冷酷な命令で躊躇無く導火線に点火され、同時にゆかりには膣に力を入れ爆竹を落とさないよう命令されます。

「あ、あ・・・」

恐怖で泣き出しているゆかりにおかまいなく導火線はどんどん短くなっていき、ついにパンという音とともに膣内の爆竹が破裂します。

「おぉぉーーーっ」

絶叫したゆかりの股間から煙が立ちのぼり辺りに火薬臭が漂いますが、意外にもゆかりの性器から出血はありませんでした。そこで、今度は二本の爆竹が膣に入れられ点火されます。

パンッ

鋭い音が響いた瞬間

「おおぉぉーーーーっ」

再びゆかりが絶叫し、今度は性器から血が滲み出します。しかし、この程度でゆかりが許されることはありません。女の子のゆかりの性器を容赦なく痛めつけることが面白いのですから、恐怖と苦痛で号泣し暴れるゆかりの身体が押さえつけられ、いよいよ三本の爆竹がゆかりの膣内に挿入されます。

「うわぁーーーっ」

涙と鼻水で顔を汚し号泣するゆかりの姿を楽しみながら、導火線に火が点けられます。髪を掴まれ晒されたゆかりの顔は恐怖で歪みながら小さな胸では左右の乳首が固く勃起しています。その哀れなゆかりの股間で三本の爆竹が破裂します。

「お・おぉぉぉぉーーーーっ」

文字通り絶叫したゆかりは口から泡を吹いて失神し、性器から血が流れ出しました。

失神したゆかりは仰向けに寝かされ足を開かされ性器の状態を確認されます。ゆかりの膣口は連続で爆破された影響で口を開けたまま煙があがり血が流れ出しています。性器の状態を確認されたゆかりはさらに性器を痛めつけられる事になりました。まず、失神しているゆかりの顔におしっこが浴びせられます。覚醒したゆかりにそのままおしっこを飲むよう命令され、仰向けで大きく開いたゆかりの口へおしっこが注ぎ込まれます。咽せながらもようやくおしっこを飲み干したゆかりの両足が大きくひろげられ性器が晒されます。そして、今度は膣へ五本の爆竹が入れらます。

「い、痛いですぅ・・。」

無理矢理膣内に爆竹を押し込まれゆかりは泣き叫び逃れようとしますが、押さえ付けられたゆかりの身体は動かすことは出来ません。そして、膣内に爆竹の挿入が完了した後に、さらに尿道と肛門にも爆竹が入れられることになりました。

「怖いですぅ、助けてくださいぃっ」

ゆかりは必死に哀願し抵抗しますが、まず肛門に爆竹が挿入され、次にゆかりの細い尿道にも爆竹が挿入されます。

「ひぃっぃ、痛いぃぃっ」

泣きじゃくるゆかりの腰は押さえ付けられ、尿道に容赦なく爆竹が挿入され、ゆかりは女の子の股間の三つの穴全てに爆竹を入れられてしまいます。

「立って足を開くのだ。」

ゆかりは命令通り立ち上がると震えながら足を開きます。

「もっと大きく足を開くのだっ。」

叱責の声が飛びゆかりはビクッと身体を震わせると、慌てて立っていられる限界まで大きく足を開きます。

「よし。背筋を伸ばし前を向き顔と胸を晒すのだ。」

ゆかりは背中を伸ばすと命令された通りに顔を上げ、膨らみのない平らな胸を晒します。正面を向いたゆかりの視線の先には仮面を着けた大勢のゲストの姿があり、舐めるようにゆかりの裸体を見つめています。

・・ゆかりの事を知っている人がいたら・・

素顔も本名も住所も個人情報を全て晒しているゆかりは、そんな想像をするだけで恐怖よりも興奮が勝り、平らな胸で乳首を固く勃起させ爆竹を詰められている性器も濡らしてしまいます。

「挨拶をしなさい」

震えるゆかりに命令が告げられた。

４４、小説・性器爆竹責め２

４４、小説・性器爆竹責め２

麗華はゆかりが書いた原稿を続けて読んでいく。目の見えない理津子は麗華が読むことで、麗華の頭の中を読みゆかりの小説を読むのと同じ感覚で内容が頭に入っていく。

★
★
★
★

後ろ手に縛られ大きく足を開くゆかりに命令が告げられ、ゆかりは顔を真っ赤に染めながら口を開きます。

「わ・渡邊ゆかり、十三歳の女の子です。これから、尿道、肛門、そして、膣を爆破していただきます。女の子の三つの穴を爆破され無様に泣き叫ぶゆかりの姿を存分にお楽しみ下さい・・。」

俯きがちになるのを懸命に抑え、ゆかりは正面を向き素顔を晒し続けます。が、先程までの興奮が消え、これから自分の性器を襲う残酷な拷問にゆかりは涙と鼻水を溢れさせ、遠目にも分かるほど震え始めます。そんなゆかりの姿を楽しみながら、ゆかりの大きく開いた股間に垂れ下がる導火線に点火されます。歯を食い縛り背筋を伸ばし立っているゆかりの、まず肛門が爆破されます。

「おぁぁーーーーっ」

足を開いたまま仰け反るように悲鳴を上げるゆかりの尿道が続いて爆破され、絶叫するゆかりの尿道口からおしっこが溢れ出します。そのおしっこで膣の導火線の火が消えるかと思いきや一瞬早く点火され鈍い音とともに膣が爆破されてしまいます。

「あ・あぁぁーーーーーっ」

ゆかりは絶叫と共に文字通り飛び上がり、床に転がるとブリッジのように身体を反らせ爪先立ちになり腰を高く上げたまま足を開き、今まさに爆破された性器を晒します。ゆかりの膣・尿道・肛門から煙が立ち昇り、膣からは血が溢れ出します。ゆかりは虚ろな目から涙を溢れさせ口からはだらしなくよだれを垂らしたまま幼い身体弓なりに反らしたままビクンビクンと痙攣させています。放心状態のゆかりは、両足を掴まれさらに大きく足を開かされ爆破され血を流す性器を無様に晒されます。

ゆかりのその無様な姿が好評で、ゆかりの性器はさらに痛めつけることになりました。頬を打たれ覚醒したゆかりは二人の男性に担ぎ上げられ、そのままもう二人の男性に両側から大きく足を開かされます。そして、無様に晒したゆかりの性器に膣鏡が根元まで挿入され、膣が裂けるほど大きく開口されます。

「あっあっいた・・痛いです・・」

悲鳴を上げるゆかりにお構いなく性器の奥・子宮口が晒され、再び爆竹が用意されます。

「ひぃぃーーっいやぁ許して下さいっ」

自分がこれからどんな目にあうのか察したゆかりは必死に許しを請

いますが、ゆかりの哀願など意味もなく、むしろその無様な姿が興奮を誘っています。

「あぁあぁーーー・・」

さすがのゆかりも恐怖で号泣し必死に逃れようと暴れますが、両腕を拘束されたまま男性四人に押さえ付けられては、ゆかりの力ではどうすることも出来ません。子供のように号泣するゆかりの子宮口に鉗子が挿入され、こじ開けられた子宮口から子宮内に一本ずつ慎重に爆竹が入れられ、六本もの爆竹がゆかりの子宮の中に入れられてしまいます。さらに膣鏡で拡げられた膣内にも再び爆竹が詰め込まれ、今度は十三本の爆竹が無理矢理押し込まれます。そして、鉗子と膣鏡が抜かれ床に降ろされたゆかりは性器から爆竹が抜け落ちるのを防ぐため、女児が穿く股上の深い綿の白いパンティを穿かされます。

「顔を上げ胸を突き出し大きく足を開きなさい」

大声で号泣するゆかりに命令が告げられ、ゆかりは泣きながら徐々に足を開いていき、限界まで大きく足を開きます。

「挨拶をしなさい」

再びゆかりに命令が告げられます。

「ゆ、ゆかりはこれから・・女の子の一番大切なし、子宮を爆破していただきます・・こ、怖いですぅ・・うっうっ・・・」

ゆかりは涙と鼻水で顔を汚し、恐怖のあまり言葉を詰まらせてしまいます。それでも、ゆかりは泣きながら言葉を続けます。

「せ、性器に続いて子宮も爆破される女の子なんて、こ、こんな楽しい見世物はないと思います・・女の子の一番女の子らしい部分を痛めつけられるゆかりの無様な姿をお楽しみ下さい・・」

必死に顔を上げ背筋を伸ばし足を開くゆかり。その恐怖に震えるゆかりの股間で容赦なく導火線に点火されます。

「あっあっあっあっ・・・」

そして、導火線がゆかりの膣内に消えた次の瞬間・・。

ボンッ!!

今までより格段に大きく鈍い音に続きゆかりの下腹部が一瞬膨らむと、次に白いパンティの股間の中心に赤い染みが拡がり、パンティの脇から煙が流れ出します。

「おぉぉーーーーーーーーーっ」

子宮と膣を爆破された瞬間大きく目を開き口を開いたまま硬直していたゆかりが数秒遅れて絶叫し、ゆかりはそのまま白目をむき床に崩れ落ち、身体をビクンビクンと痙攣させます。その痙攣するゆかりの身体からパンティが脱がされ、両側から足首を掴まれると大きく足を広げられ煙と血が流れる性器を晒されます。

この、ゆかりの無様な姿がまたも好評で、ゆかりはこの場で性器にトドメを刺される事になりました。もちろんそれはゆかりの性器を完全に破壊し、ゆかり自身も絶命させることにほかありません。

「助けて……」

ゆかりが必死に抵抗しますが、ゆかりの力で逃げられる筈がありません。押さえ付けられたゆかりの子宮内にニトログリセリンのような液体爆薬が注入されます。さらに、ゆかりの性器を完全に破壊する為、尿道から膀胱内にも液体爆薬が注入されてしまいます。

「あ、あ、あ、あ」

ゆかりは立たされると拘束台に厳重に拘束されます。そして、頭まで拘束され動けないゆかりの口にダイナマイトが突き入れられます。

「さあ、皆さん。撮影準備はよろしいですか。それでは点火します」

無常に導火線は短くなっていき……。

ボンッ!!

ゆかりの下腹部一帯が性器もろとも吹き飛び肉片となって飛び散ります。その後、数秒の時間差で口に入れられたダイナマイトが爆発し、ゆかりの頭部が砕け散り、ゆかりは完全に絶命します。

★　★　★　★

「これは渡邊さん本人が書かれたものですよね」

・・ええ、そのようですね・・

「見た目はごく普通の中学生ですが、これはかなり病んでいると言

えるのでしょうか」

・・人の考えや性癖なんてそれぞれですからね。人に迷惑をかけなければ良いのではありませんか・・

「そうですね。それで理津子さん、あんな提案をされたんですね」

・・彼女、基本的に真面目ですからね。こちらも手助けしてあげようと・・

理津子と麗華は、委員会室で二人ゆかりの原稿を読みながら委員としてゆかりが間違った選択をしないよう注意しなければと切実に思っていた。

４５、射的の的

４５、射的の的

ゆかりはセーラー服を着たまま腕を縛られ机に上半身を押し付けられ、スカートを大きく捲り上げられ下着を脱がされバックから犯されていた。清宮はゆかりの腰を押さえつけパンパンと激しく腰を動かしている。

「あう、あう、あう、あう、あう」

「うっ」

清宮はゆかりの中に射精するが、すぐにまた固く勃起していた。

「やっぱり渡邊さん相手だと回復が早いよ。次はおしりの穴を犯すよ」

清宮はゆかりの尻を両手で広げると肛門を確認する。そして、指を突き刺しゆかりの肛門をほぐしていく。清宮は、二本、そして三本と突き入れる指の数を増やしていった。

「おぅ、おぅ、おぅ、おぅ」

肛門を愛撫されゆかりが声を出し始めた。十分にゆかりの肛門をほぐした清宮は、ゆかりの肛門に自分のモノを当て突き刺した。

「おぁわぁわーーーっ」

清宮はゆかりの肛門に根元まで突き刺すと、ゆかりの腰を押さえつけまた激しく腰を振り出した。

「いだぁぁーーっ、いだい、いだいぃぃーーっ」

ゆかりは激しく肛門を犯され、肛門が裂け血が流れだしている。しかし、かまわず清宮はゆかりの肛門を犯し続ける。そして、激しく動いていた清宮の腰の動きが止まった。清宮はゆかりの腸内に放出していた。清宮はゆかりの頭の方に周ると、ぐったりしているゆかりを机の上に仰向けにさせ無理矢理ゆかりの口を開ける。

「さあ、それじゃ口でキレイにしてもらおうか」

清宮は無理矢理開けたゆかりの口へ汚れた自分の性器を突き入れる。そして、そのまま喉の奥まで突き刺していった。

「やっぱり渡邊さんは良いよ。渡邊さんの喉を犯していると思うとまた回復してきたよ」

清宮はゆかりの喉に突き入れたまま激しく腰を振り出した。

「おご、おご、おごぉぉぉーーーっ」

呼吸の出来ないゆかりは白目を剥いて口から泡を噴きながら喉を犯されていた。しかし、そんな状態のゆかりにも容赦なく清宮が喉を犯していると、ゆかりの股間からシャーッと音を立てて小便が噴き出す。ゆかりは喉を犯され意識を失い失禁していた。

・・いけない、渡邊さん、死んじゃうよ・・

清宮は慌ててゆかりの口から性器を抜くがその際思わず放出してしまう。ゆかりの顔面に精液がドピュッドピュッと放出された。清宮は平手でゆかりの頬を打ちゆかりを覚醒させる。

「あっぽぅ」

ゆかりが気が付いた時、ちょうど理津子たちが部屋に入ってきた。

「あら、清宮くん。お楽しみ中？」

麗華が清宮を横目で見ながら理津子の車椅子を押して行く。その後に西園寺が続けて入ってきた。

「今日はね。これで渡邊さんを痛めつけようと思うんだ」

西園寺が、手にしたものを清宮に見せる。

「それはエアガン」

「そう。これの的に渡邊さんになってもらおうと思ってね」

「えーっ、それは楽しそうだね。僕にも撃たせてくれるよね」

「もちろんだよ。弾はたくさん用意してあるから、みんなで楽しもう」

「よし、それじゃ早く準備して楽しもう」

清宮たちはゆかりのセーラー服を脱がしていき全裸にする。そして、鉄のポールにゆかりを縛り付け逃げられないように固定する。ゆかりはこれから自分が何をされるのか想像し震えていた。

「ふふっ渡邊さん、これから何されるか分かるかい？答えてみてよ」

清宮の質問にゆかりは顔を赤くしながら答える。

「はい、ゆかりの体を鞭で打っていただくのだと思います」

「へぇ渡邊さん、鞭が好きなんだ。でも残念、今日は違うんだよ」

清宮は手に持ったエアガンを見せながらゆかりに説明する。

「今日は渡邊さんにこのエアガンの的になってもらうよ。このプラスチックの弾で渡邊さんを撃ちまくるからね」

「これは僕が改良して威力を上げてあるから結構強烈だと思うよ。渡邊さん、どれくらい耐えられるかな」

西園寺が補足し、ゆかりの股間に手を入れ性器の具合を確認する。ゆかりはバルトリン腺から粘液を分泌し激しく性器を濡らしてしまっていた。西園寺の指が糸を引くのを見て全員が笑みを浮かべる。

「さてと渡邊さん、一応目隠しして目は保護しておくからね」

ゆかりは眼鏡を外され革製の目隠しが装着される。そして、口には開口ギャグが装着された。

「渡邊さんの口の中は撃ち込みたいからね。口を閉じられないようにしておくよ」

「私は渡邊さんの顔を撃ちまくってもう見られない程の顔にしてあげたいわ」

「麗華さん、けっこう怖いですね」

「理津子さんをあんな目に合わせた西園寺くんには言われたくないわ」

わいわいと楽しそうに話しながら準備を進めていく三人を理津子は微笑みながら心で感じていた。

・・どう、渡邊さん。私のアイデアだけど気に入ってもらえたかしら？エアガンで撃たれるなんて一人では出来ないですからね・・

・・ありがとうございます。橘さんには感謝しています・・

ゆかりが心の中で謝辞を述べているうちに、まず清宮がエアガンを構えゆかりに狙いをつけた。

パシュッ！

発射された弾はゆかりの胸に命中し落ちる。弾の当たったゆかりの胸は赤く腫れあがっていた。清宮は続けてエアガンを撃つ。

パシュッパシュッパシュッ

「うごぉ、うごぉ、うごぉぉ」

ゆかりの胸に赤い痣が増えていく。ゆかりに対する拷問はまだ始まったばかりだった。

４６、性器射撃

何発撃たれたのだろう。ゆかりの胸は真っ赤に変色していた。

「渡邊さん、次は顔を狙っていきますよ」

麗華がエアガンを構えゆかりの顔面に狙いをつける。

パシュッパシュッパシュッパシュッ

ゆかりの顔面に続けてＢＢ弾が撃ち込まれる。

「あぼぉぉぉー――っ」

開口されたままのゆかりの口中にも容赦なく弾が撃ち込まれ、鼻や頬、額には赤い斑点が多数出来腫れあがっている。数十発ものＢＢ弾の直撃を受けゆかりの顔面は酷い状態になっていた。

「女の子の渡邊さんの顔が酷いことになっちゃっいましたよ。次はいよいよマンコですね。マンコも女の子の大切なところなので酷いことにしてあげますね」

ゆかりは拘束を解かれ、改めて駿河問いの形に宙に吊るされる。さらに足が閉じられないようパイプで膝の部分を固定されてしまった。

ゆかりの股間が丸見えになり、性器の割れ目もくっきりと見えている。

「さあ、渡邊さんのマンコ射撃を始めますよ。楽しみです。弾はあとどれくらいありますか、西園寺くん」

「まだまだ数千発はあるから、どんどん撃って大丈夫ですよ、麗華さん」

「まず、このまま撃って大陰唇を痛めつけますね 」

麗華はゆかりの股間に狙いをつけてエアガンを発砲する。

「あうっ！」

しかし、弾はゆかりの性器を外れ、内ももに命中した。

「麗華さん、もっと近くから撃てばいいじゃないですか 」

西園寺の助言を受けて、続けて撃った次の弾がゆかりの割れ目に直撃する。

「あひぃぃっ！！」

柔らかな割れ目にＢＢ弾を撃ち込まれゆかりは悲鳴を上げる。

「いい声出しますね、渡邊さん 」

パシュパシュパシュパシュ

麗華は連続でエアガンを発砲する。慣れてきたのか全弾ゆかりの性器に直撃し、何発かはクリトリスや割れ目を直撃した。

「ひぎぃぃぃー―っ！！」

至近距離からＢＢ弾を撃ち込まれゆかりは激痛で絶叫するが西園寺はもっと面白くしましょうと、ゆかりの小陰唇を何か所もクリップで挟み、クリップに付けた紐を引きクパァと性器を拡げたまま固定する。ゆかりの性器の中身が無様に晒され、ピンク色の膣前庭窟に膣口や尿道口がはっきりと見え、これから何をされるか悟ったゆかりは泣き出していた。

「ふふ、渡邊さん。もう何をされるか分かっていると思うけど今どんな気持ちなのか教えてもらえるかな」

麗華がゆかりに問いかけ、清宮がゆかりの髪を掴みぐいっと顔を上げさせる。

「ううっ、マンコ撃たれるかと思うと怖いです」

ＢＢ弾で顔面も撃たれ腫れあがっているうえに涙と鼻水でグショグショに汚れた酷い顔で泣きながらゆかりは答える。

「ふふ、それじゃあ渡邊さんの期待に応えられるよう徹底的にマンコ狙ってあげるね。まだ弾はたっぷりあるからマンコ酷いことになるね。しばらく渡邊さんの大好きなオナニーも出来なくなるね」

麗華は楽しそうに笑うとゆかりの性器に狙いをつけエアガンを構える。

「さあ、覚悟して渡邊さん」

パシュパシュパシュパシュパシュパシュパシュパシュパシュパシュ

正確にゆかりの開いた性器に撃ち込むため更に至近距離からの射撃にゆかりは絶叫する。

「あぎゃぁぁぁーーっ!!」

「うん、渡邊さんの声好きだけど、さすがに煩くて耳障りだから塞がせてもらうね」

清宮が、ゆかりの穿いていた下着を手に取ると、ゆかりの口に押し込んでいく。

「渡邊さん、今時珍しい綿の大きなパンティなんだね。全部入れるの大変だわ」

そう言いながら清宮はゆかりの口中に下着を全部押し込み、さらにガムテープを何重にも貼りゆかりの口を完全に塞いでしまった。ゆかりは目と口を塞がれ体も拘束され何も抵抗できない状態で性器をエアガンで撃たれることになる。

・・怖いよう、どれだけ撃たれたら許してもらえるの・・

ゆかりは、当然許されるまでには自分の性器は麗華が言ったように酷い状態になっているだろうと想像していた。ゆかりはそんな想像をするだけでバルトリン腺から粘液を分泌し激しく性器を濡らし始めた。

「あらあら、渡邊さん。こんなにマンコ濡らしちゃって早くマンコを撃ってほしいのね」

麗華は笑みを浮かべるとエアガンの引き金を引いた。

パシュパシュパシュパシュパシュパシュパシュ

「おおぉぉぉー――――っ!!」

ゆかりの開いた性器に至近距離から連続でＢＢ弾が撃ち込まれる。

ゆかりの膣口も尿道口もクリトリスも引き延ばされた小陰唇も容赦なく撃たれていた。

パシュパシュパシュパシュパシュパシュパシュ

麗華、清宮、西園寺の三人が交代でエアガンを休みなく撃ち続ける。

ゆかりの性器は射撃の的にされだんだんと酷い状態になってきた。

それでも、ゆかりは許されることはなく性器にＢＢ弾を撃たれ続けていた。

47、ゆかり徹底拷問

47、ゆかり徹底拷問

ゆかりは性器を撃たれ続けていた。麗華、西園寺、清宮が交代で、ゆかりの性器を的にエアガンを撃ち続ける。もう何百発ものBB弾がゆかりの柔らかな性器に命中していた。

「うわ、渡邊さん。すごい顔だよ。顔中撃たれてぶつぶつ腫れ上がって、目隠しから涙が溢れてて、鼻から鼻水がすごくてグショグショだよ」

清宮がゆかりの顔を眺めながら爆笑する。

「せっかくだから、もっと酷い顔にしようかな」

清宮はゆかりの口を塞いでいるガムテープを剥がし、口に押し込んでいた下着も取り出す。そして、ゆかりの右の鼻の穴から細いチェーンを入れ始めた。鼻の奥にどんどんチェーンを入れられゆかりが噎せるが、かまわず清宮がゆかりの鼻にチェーンを入れ続けていると、ゆかりが大きく噎せ口からチェーンの先端が出てきた。

「ほら渡邊さん、鼻と口がチェーンで繋がったよ。もう片方も入れてあげるからね」

清宮はチェーンのもう片方の先端を左の鼻の穴に入れ、また口から

出した。

「それじゃあ、このチェーンの先端に重りを付けてあげるね。それと、せっかくチェーン入れたから、よく見えるように鼻にフックもかけてあげる」

ゆかりはチェーンを入れられた鼻の穴にフックを掛けられ思い切り引かれ無様に鼻の穴の中も晒していた。さらに口から舌も摘まみ出され、クリップで挟まれ重りが下げられる。

「おごっおごっおごっ」

ゆかりが声にならない悲鳴を上げる。清宮は次にゆかりの乳首に狙いを付けていた。

「胸もけっこう撃たれたから酷い状態だね。でも、もっと痛めつけてあげるよ」

清宮は西園寺に合図して二人で針を手にする。麗華は他の物を用意していた。

「さあ渡邊さん、１６Ｇの太い針だからけっこう痛いよ」

清宮と西園寺は同時にゆかりの左右の乳首に横に針を貫通させる。

「おごぅぅぅーーーっ！！」

ゆかりが絶叫するが、かまわず今度は十文字になるように針を貫通させる。そして、さらに乳首の頂点から縦に針を突き刺していく。

「渡邊さん、貧乳だからあまり深く刺せないから少し残念だな」

そう言いながらもズブズブとけっこう深く針を刺していく二人だった。そして、麗華が用意していた装置を、ゆかりの乳首に貫通している針に取り付ける。それは細いワイヤーでぶら下がった燭台だった。当然、重さもあるのでそれだけでも立派な拷問だが、その燭台の蝋燭に火を点ける事でワイヤーが熱せられ、更には乳首に貫通している針も熱せられる仕組みとなっていた。

「渡邊さん、思う存分泣き叫んでね」

二人は蝋燭に火を点けると、ゆかりの性器に向かった。そして、腫れ上がったクリトリスを見て残酷に笑う。

「何本刺せるかな。三人で順番にクリトリスに針を刺していって、刺せなくなった人が後でコーヒー奢りね」

「良いですよ」

「了解」

笑いながらジャンケンで順番を決めた三人は、まず麗華からゆかりのクリトリスに針を突き刺していく事になった。麗華はゆかりのクリスマスを摘まむと横に針先を当てる。そして、じょじょに力を加えていった。麗華は、プツッとした手応えのあとゆかりのクリトリスに刺さっていく針をすぐには貫通させないでわざとゆっくり動かしていた。

「おっぱぁぁぁーーーーっ!!!」

ゆかりの絶叫を楽しみながら麗華は興奮した面持ちで針を貫通させていく。そして、再びプツッとした手応えで針はゆかりのクリトリスを突き抜け貫通した。その頃、熱せられている胸のワイヤーも赤くなってきていた。

「渡邊さん、顔と胸とマンコ、どこが一番辛いのかな？」

清宮が問いかけるがゆかりはもう悲鳴を上げるばかりで答える事が出来なかった。その時にはもう西園寺が2本目の針をゆかりのクリトリスに十文字になるように貫通させていた。自分の順番がきた清宮は待ってましたとばかりに、ゆかりのクリトリスに斜めから針を突き刺しプツッと貫通させる。

「おっびゃぁぁぁーーーーーっ！！！」

麗華がゆかりのクリトリスの頂点から、ゆかりの中に深く針を突き刺していった時、一際大きなゆかりの絶叫が響いた。続いて西園寺も頂点から奥深く針を突き刺し、清宮もやはり頂点からゆかりの体に深く針を突き刺していた。

「あびゃびゃびゃびゃびゃ、だじげでぇぇぇ！！！」

１０本以上の針をクリトリスに突き刺されたうえに、乳首に貫通している針も赤くなってきていた。結局、順番的に不利だった清宮の負けとなり、三人はゆかりのクリトリスに突き刺した針にもワイヤーで燭台をぶら下げ蝋燭に火を点ける。

「あんびゃぁぁぁぁーーーーーっ！！！」

ゆかりがまた絶叫するが、これだけで拷問を終わらせる気は三人に

はなかった。ゆかりの膣に一番巨大なサイズの膣鏡を無理矢理挿し込み、最大まで大きく開く。ゆかりの桜色の子宮が三人の目に晒される。

「渡邊さん、聞こえてる？　今度は渡邊さんの子宮を的に至近距離からエアガンを撃ち込みますよ。乳首とクリトリスも痛くて熱くて大変でしょうけど、子宮も大変な事になると思うから覚悟してね」

麗華が言葉とは裏腹に、ゆかりの耳元で優しく呟いた。

４８、ゆかり徹底拷問２

４８、ゆかり徹底拷問２

ゆかりは号泣していた。乳首とクリトリスの痛みが、ゆかりがかつて経験した事のない激痛に襲われていた。それも瞬間的な痛みではなく継続した消える事のない痛みである。その痛みが時間が経つにつれどんどん大きくなってくる。麗華がゆかりの耳許で何か囁いていたようだが、ゆかりには麗華の言った言葉を聞き取る程の余裕もなかった。

「お、ばぁぁぁーーーーーっ！！」

呻き声を上げるゆかりの乳首とクリトリスに貫通している針は、ぶら下げられている燭台の蝋燭の火で真っ赤になっていた。そして、そのうえ膣鏡で開かれた膣の奥、子宮目掛けてエアガンが撃たれようとしている。それも狙いを外さないよう超至近距離から撃たれる事になる。もっとも、ゆかりにはそんな事は知る由もないのだが。

「渡邊さんの子宮を痛め付ける為に射撃開始します」

麗華が楽しそうに宣誓し、エアガンの引き金を引く。

パシュ、パシュ、パシュ、パシュ！！

「あ、びゃぁぁぁぁーーーーーーっ！！」

絶叫するゆかりにかまわず麗華は引き金を引き続ける。ほとんどゆかりの性器に触れる程の距離からの射撃なので外れるわけがなく全弾ゆかりの子宮に命中する。

「あびゃびゃびゃびゃびゃびゃ！！！！」

「面白ーい　子宮口から中に入んないかな」

麗華はゆかりの子宮の中心に狙いを定めて撃ち続けると、一発の弾が子宮口にめり込み、次に撃たれた弾がそれに当たり最初の弾を押し込んでいく。麗華は夢中になってエアガンを撃ちまくっていた。そして、何発かの弾はゆかりの子宮内に撃ち込まれていた。

「次は僕だ」

清宮がゆかりの膣内から溜まった弾を掻き出し新たに子宮に狙いを付ける。もうこの時点でゆかりの子宮は内出血で赤黒く変色していた。

パシュ、パシュ、パシュ、パシュ、パシュ！！！

それでも更に子宮に弾丸を撃ち込まれるゆかりの絶叫が響き渡る。そして、西園寺の順番になると彼は何か丸いリングに直角に曲がったネジが数本付いた道具を持ち出してきた。

「何、それ？」

麗華が首を傾げて訊くと西園寺は、これはアナル開口具だよと楽しそうに言う。

「渡邊さんも子宮ばかりじゃ飽きてしまうだろうから、肛門の中にも撃ち込んであげるんだよ」

西園寺は話ながら慣れた手付きでアナル開口具をゆかりの肛門に装着していく。まず、リングの中心に集まった直角に曲がったネジの先端をゆかりの肛門に押し込んでいき、次にネジを回して少しずつゆかりの肛門を拡げていく。

「ふんごぉぉーーーっ！！」

また別の場所の痛みにゆかりが反応し声を上げるが、西園寺はネジをどんどん回していき、ゆかりの肛門は五センチ位まで拡げられていた。

「まあこれくらいが限界かな。これ以上拡げたら肛門裂けるかもね。やってみたい気もするけど、あとが大変だから今日は止めとくよ」

「うわ、渡邊さん、お尻の穴の中も丸見えだよ。写真撮っておいてあげるね」

興奮した面持ちで麗華がスマートフォンでゆかりの肛門の中を何枚も撮影する。

「じゃあ撃つよ」

西園寺が引き金を引き、容赦なくゆかりの肛門の中に発砲する。

「あんびゃぁぁぁぁーーーーっじぬぅぅーーーーーーっ！！」

肛門の中、直腸を撃たれたゆかりは断末魔のような悲鳴を上げる。

「うわっ凄い声だね、渡邊さん。でも渡邊さんの声、可愛いから好きだよ。もっと可愛い声出してよ」

清宮は手に持った真っ赤な激辛ソースをゆかりの肛門に流し込んだ。そして、次にはゆかりの膣内にも……。

「ひぎぃぃぃーーーっあづいぃぃぃーーーっ！！」

吊られた体を揺らし逃れようとするゆかりだが、体を揺らす事で乳首とクリトリスに下げられた燭台が揺れ動き、その三点に激痛が走る。

「酷いことするなぁ清宮くん。ならもっと痛めつけてあげようか。渡邊さんはまだ通電された事はないと思うけど」

西園寺はクリップの付いた電線を用意すると、ゆかりの左右の乳首の針とクリトリスの針をクリップで挟む。そして、新たに針を一本用意すると、何処に刺そうかと思案する。そこにすかさず麗華が、子宮でいいんじゃないと提案し開口したままのゆかりの膣内に長い針を入れズブズブとゆかりの子宮に突き刺していく。ゆかりは激辛ソースの刺激で感覚が麻痺しているのか、子宮に針を突き刺されているにも関わらず大きな反応はなかったので、麗華が不満そうな顔をしたが西園寺はまあまあとなだめた。

「麗華さんに、このマンコの方のコントローラ渡しますので好きに使用してください」

麗華にだけコントローラを渡す西園寺に、清宮が不満を述べると西

園寺ははっきりと言い放つ。

「清宮くんは加減を知らないからな。この胸の方のコントローラは心臓が近いから気を付けないと殺してしまうよ。だから、君は渡邊さんの苦しむ姿と声を聞いて楽しむように」

そこまではっきりと言われると清宮は二の句がなかった。それでも自分もやりたいのにと恨めしそうな顔で西園寺を見つめる。

「あーっもう、分かったよ。君はこれを使いな。いいかいこの赤い線から先には回さないように」

コントローラのダイヤルの位置を清宮に確認させると、西園寺はゆかりの頭に電極付きの全頭マスクを被せた。

「さあ、それじゃあ自由に楽しんでください」

西園寺の言葉で全員がダイヤルを回し始めた。

「あばばばばばばばばばばばばばばばばっ！！！」

ゆかりは頭、乳首、性器に通電され全身がぶるぶると震える。ゆかりの地獄が始まった。

49、ゆかり徹底拷問3

４９、ゆかり徹底拷問３

ゆかりは、頭・乳首・クリトリスに通電され続け絶叫をあげ続けていた。

「あびゃびゃびゃびゃびゃびゃぁぁぁーーーーーっ！！！！」

通電されながらゆかりは乳首とクリトリスは間接的に焼かれている。乳首とクリトリスに貫通する真っ赤に焼けた針が、容赦なくゆかりの敏感な部分を焼いていた。そして、麗華たち三人は通電したままのコントローラを置き、再びエアガンを手にすると、ゆかりの子宮と肛門目掛けて射撃を再開した。

「おっびゃぁぁぁぁーーーーーーっ！！」

絶叫していたゆかりの声が途切れ、頭がガクッと力なく項垂れる。ゆかりはあまりの激しい拷問に失神してしまっていた。泣き叫んでいたゆかりの反応がなくなり興醒めした三人は通電を止め燭台を外し膣鏡とアナル開口具も抜き、吊るされていたゆかりの体を机状の拘束台の上に降ろす。そして、今度はゆかりの体をその拘束台に仰向けで大の字に拘束する。手首、肘、足首、膝と順番に拘束していき、首と腰にもベルトが巻かれ拘束される。ゆかりは、もう何をされようとも逃げることは出来ないよう厳重に拘束された。乳首とク

リトリスに貫通する針以外はチェーン等全て外されたゆかりだが、全身エアガンで撃たれていた痕跡は一見して分かる程はっきりと残っており、その痛々しい姿は哀れですらあった。しかし、ゆかりに対する拷問はまだ終わらず麗華、西園寺、清宮の三人は次の拷問の準備を進めていた。

「さてと、カメラの撮影準備も整えたし、そろそろ渡邊さん起こして次にいきますか」

西園寺の指示で清宮がゆかりの頬を平手で何度も打ち覚醒させる。ゆかりは目隠しはそのままで目を塞がれ、口にはボールギャグが押し込まれ口も塞がれていた。

「起きたようだね。それじゃ順番にいこうか。まずは渡邊さんに燭台になって貰います」

カメラを操作する西園寺の前で蝋燭を持った清宮がゆかりの乳首に蝋燭を垂らし始める。そして、股間ではやはり蝋燭を持った麗華がゆかりのクリトリスに蝋燭を垂らし始めた。

「おっ、おっ、おっ、おっ！！」

敏感な部分に熱蝋を垂らされゆかりが声を上げるが、二人はかまわず蝋燭を垂らし続け、そこに木綿の糸も置き、さらに蝋燭で固める。二人が、準備ＯＫと離れるとゆかりの乳首とクリトリスで固まっている蝋に木綿の糸が飛び出していた。西園寺はアップでそれらを撮影し、点火の合図を二人に送る。二人は躊躇する事なく、ゆかりの乳首とクリトリスから飛び出している木綿の糸に点火する。ゆかりの乳首とクリトリスでオレンジ色の火がゆらゆらと燃え上がった。その様子を西園寺は克明に動画撮影している。

しばらくは何をされているのか分からないという雰囲気のゆかりであったが、固まっていた蝋が燃え溶けて火が近付いてくるにつれ耐え難い痛みが自分の敏感な部分を襲ってくる。

「ぼびゃぁぁぁーーーーっ！！！　ぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼっ！！！！」

口を塞がれ何も言えないゆかりが激しく首を左右に振り必死に訴える。乳首とクリトリスに点火された火は、もう直接ゆかりの肉を焼いているように見えた。

「ぶぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼっ！！！」

ゆかりは狂ったように首を振り、拘束された体を必死に動かそうとしていた。しかし、ゆかりがいくら力を込めようとも拘束台はびくともしない。そうしている内にゆかりの乳首とクリトリスはオレンジ色の火に無慈悲に焼かれていく。その時、ゆかりの尿道から小便が溢れ出した。続いて、ぶぶっと大きな放屁のあと、肛門から大便も漏れだしていた。

「渡邊さん、おしっことうんち漏らして最高だよ」

清宮が感激してゆかりの鼻の穴に爆竹を一本ずつ入れた。そして、導火線に点火する。導火線は、シューッと凄い勢いで短くなっていき、ゆかりの鼻の穴で爆竹が破裂する。

パーン！！

高い音の後、ゆかりの鼻の穴と口から煙が上がり、鼻の穴からは血も流れ出した。

「おもしろいわね」

麗華も爆竹を手にしたが、そういえば以前読ませてもらったゆかり自身が書いた小説で爆竹責めの事が書かれていた事を思い出した。

・・渡邊さん自身が望んでいる事なら満足するように実行してあげないとね・・

麗華は清宮にゆかりの頭を押さえておくように指示し、ゆかりの両方の耳の穴に爆竹を詰める。そして、導火線に火を点けた。

パーン！！

今度はゆかりの耳から血が流れ出す。

・・次は渡邊さんが待ち望んでいる処にいくよ・・

麗華はゆかりの膣に爆竹を詰める。

・・確か四本くらい詰めるって書いてあったと思うけど・・

麗華は四本の爆竹をゆかりの膣に詰め、導火線をよじり一本にまとめて火を点けた。西園寺も興奮した面持ちで録り逃さないようにしっかりカメラで狙っている。そして、導火線の火がゆかりの膣内に消えた次の瞬間。

パーーーン！！

「おっびゃぁぁぁぁーーーーーーっ！！！！」

今までより大きな音とゆかりの絶叫が響き、膣から煙が立ち上る。
ゆかりの膣は爆破の衝撃でしばらく開いたままになっていた。

「次は僕に入れさせて下さいよ」

清宮は、ゆかりの膣に麗華より多い六本の爆竹を押し込む。そして、それだけでは飽き足らずなんとゆかりの尿道と肛門にも爆竹を詰めている。

「せっかく、三つ穴があるんだから全部平等に爆破してあげないとね」

清宮は笑いながら導火線に点火した。ゆかりは耳を爆破され、話し声も聞くことは出来ずただ激痛に泣き叫んでいた。その泣き叫ぶゆかりの股間で3つの穴が同時に爆破される。

バーーーーンッ!!!

「おっぱぁぁぁーーーーっ!!ばぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶっ!!!!」

ゆかりの尿道、膣、肛門から火薬臭と共に白い煙が上がり、尿道から血の混じった血尿が垂れ、肛門からも血の混じった血便が飛び出していた。ゆかりは口から泡を吹いてびくんびくんと痙攣しているが、麗華はそんなゆかりの膣に膣鏡を入れ大きく開いている。

「麗華さん、何してるの?」

「まだ爆破してない処があるでしょう」

えっと怪訝な顔をする清宮に麗華はゆかりの膣の奥の子宮を指差す。

「えぇ、そんなとこ爆破して大丈夫なの？」

「ここだけ爆破しなかったら可哀想でしょう」

麗華の言っている意味が分からなかったが清宮は、ゆかりの子宮が爆破されると思うと興奮してくる感情を抑えられなかった。麗華は細い子宮口を鉗子で抉じ開け、防水紙に包んだ爆竹を一本ずつゆかりの子宮内に入れていく。時間をかけて８本もの爆竹をゆかりの子宮内に詰め込んだ麗華は満足した顔で導火線に火を点ける。

シューッ！

導火線の火がゆかりの膣内に消えていき、さらに子宮内に消える。

ボーーーーン！！

「おっびゃぁぁぁぁーーーーーっ！！びゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃっ！！！！！」

くぐもった爆発音とゆかりの絶叫、そして一瞬大きく膨らんだゆかりの下腹部。その後の火薬臭と白い煙に続いてゆかりの膣からも血が流れ出してきた。その頃になって、ようやくゆかりの乳首とクリトリスで燃えていた炎が燃え尽きて消えていた。

５０、ゆかり徹底拷問４

５０、ゆかり徹底拷問４

ゆかりは膣、尿道、肛門、それに子宮を爆破されて泡を吹いて失神していた。体はビクンビクンと痙攣し、顔は苦悶の表情を浮かべたまま固まっている。

「うーん、けっこう酷い状態だけど、どうします。今日はこれで終了しますか？」

清宮が残念そうに言い、麗華も判断に迷っていたが、そこへ理津子が頭の中に語りかけてくる。

・・どうせ、西園寺くんの病院で治療するのですから、もっと徹底的に痛め付けて差し上げればいいのではないですか・・

理津子にそう言われれば何も遠慮する事はない。麗華は、さらにゆかりに拷問する事を決め、清宮に早く渡邊さんを起こしなさいと指示を出す。

「そうだ。それなら最新の串刺し機があるから、それで渡邊さんを串刺しにしようよ」

「串刺しって、何処を串刺しにするの？」

麗華が、まさか渡邊さんを殺すわけはないからどうするのだろうと西園寺に疑問を投げ掛ける。

「どこって？　決まっているでしょう　マンコからクチまでですよ」

「ちょ、ちょっと、そんな事したら渡邊さん死んじゃうわよ」

さすがに殺人はダメでしょうと麗華が慌てるが西園寺は自信たっぷりに胸を叩く。

「大丈夫さ。完全コンピューター制御で、渡邊さんの体をスキャンしてから重要な臓器を避けて串刺しにするからね。もちろん、串刺しにされる痛みはそのままだから、人によってはショック死という可能性はあるけれど、渡邊さんなら大丈夫だよ。それに昔の串刺し刑でも、串刺しにされて何日も生きていたっていう事例もあるしね。僕の串刺し機を使って、終了した後すぐに治療すれば問題ないよ」

それでも半信半疑な麗華だったが、理津子の言葉がゆかりの串刺し実行へ後押しする。

・・私も串刺しにされましたけど、こうして生きていますよ・・

「ほら、理津子さんだってＯＫですって！　それにしても理津子さん、あんな状態だったのに串刺しにされた事も分かっているんですね、凄いな」

・・ええ、分かっていますよ。体の中心を焼かれるような激痛で、多分私、おしっこもうんちも漏らしてたんじゃありません。それを、一度や二度ではなくて何度も何度も串刺しにされて、ああ私はこんなに憎まれているんだと思いしりました・・

「あ、いえ、憎いのではなくて大好きなんです。好きで好きでどうしようもなくて何度も串刺しにしてしまいました。理津子さんの串刺しにされている時の姿を見ると、もう我慢できない程興奮してしまいます。今でも毎日あの時に撮影した理津子さんが串刺しにされる動画視て自慰していますよ。僕の宝物です」

・・そ、それは喜んで良いのでしょうか・・

理津子は疑問のようだが西園寺は、もちろんですと大きく胸を張る。そんな理津子と西園寺のやり取りの間に、清宮がゆかりを目覚めさせていた。そして、ゆかりの目隠しとボールギャグも外してあげる。そのとたんゆかりは大声で泣き出した。よほど苦痛だったのだろう。ゆかりは泣き続けていたが、麗華が平手でゆかりの頬をピシャリと打つ。そして、続けてパンパンとゆかりの頬を打った。泣き続けていたゆかりが泣き止んだところで麗華がゆかりに残酷に告げる。

「泣いてるところごめんなさい。これから渡邊さんに処刑に近い拷問をするんだけど覚悟してもらっていい。ショック死されると困るから先に伝えておくけど、これから渡邊さんを串刺しにします。マンコから突き刺して、口から穂先が出るまで完全に串刺しにするから覚悟してね」

「く、串刺し……」

ゆかりは、ぶるぶると震えていた。

「私、もう用済みで処刑されるんですか?」

そういえば順子と結衣の姿が消えている。噂では、あの二人は既に

処刑されてこの世にいないと云われていた。

「そんな事はないわ。串刺しにはするけどね。まあ、もう渡邊さんが何を言っても逃げられないから覚悟するしかないのですけどね」

ゆかりは、串刺しにするけど処刑ではないと言う意味が分からなかったが、これから自分が串刺しにされるのは間違いない事実だと理解した。串刺し……。ゆかりが自慰の際の妄想でよく考えるシチュエーションではある。しかし、それはあくまで妄想であって現実に串刺しにされるとなると、また違う話である。ゆかりは体の震えが止まらなかった。

「それじゃ機器をセットしていくよ」

西園寺が楽しそうにてきぱきと動き、清宮も嬉々として手伝っている。麗華は、ゆかりを串刺しにする巨大なニードル状の器具を見て興奮していた。

・・これが渡邊さんの子宮を串刺しにして口まで突き抜けるんだ・・

「そうそう、麗華さん。それ消毒しておいてくれますか」

麗華が見ている巨大ニードルを指差して西園寺が言う。麗華は頷くと滅菌シートでニードルを綺麗に拭きだした。清宮はゆかりの体の中心をスキャンしている。

「あっ、それとそこの細いニードルも消毒しておいてくれますか。ついでに渡邊さんの尿道から突き刺して膀胱も串刺しにしようと思いますから」

「えっ、これですか？　おしっこの穴に入れるには太い気がするのですが　」

麗華が直径１５ミリはあるニードルを持ちながら尋ねる。

「いいんですよ。渡邊さんの尿道も裂いていく為のものですから、潤滑剤塗らないで太いの無理矢理尿道に入れていきますから相当苦痛ですよ。ククク」

麗華は自分の尿道にそれが突き刺される姿を想像して背筋が寒くなった。

・・渡邊さん、しばらくオシッコも普通に出来なくなるね・・

麗華はそれでもゆかりが可哀想などとは少しも思わなかった。それよりも、もっと痛め付けてゆかりを苦しめたいと思うようになっていた。

自分を串刺しにする準備が着々と進むなかゆかりは、爆破されたせいで耳がよく聞こえないが自分の尿道と膀胱も串刺しにされると聞こえ震えていた。尿道にカテーテルを入れた経験から、本来物を入れる場所ではない尿道に太いニードルを突き刺されるというのは想像を絶する痛みだと理解していた。それでも、経験から痛みの度合いが分かるのはまだ良かったが、性器から口まで完全に串刺しにされるなど、それがどれ程の痛みなのか想像も出来ずゆかりは本当にぶるぶると震えていた。

・・怖い、怖い、怖い、怖い・・

ゆかりは自分の意思で行ってきた自虐とは違う、容赦のない許される事もない処刑が執行される事に震えが止まらなかった。ゆかりが

どんなに泣き叫び哀願しても途中で許される事はないだろう。その震えるゆかりに西園寺の準備完了という大きな声が飛び込んできた。

51、ゆかり串刺し執行

51、ゆかり串刺し執行

拘束台に厳重に固定され、性器から串刺しにされるゆかりの準備が進んでいく。正確に子宮から口まで串刺しにするため、もっと性器を見える状態にするため〝大〟の字に仰向けに拘束されているゆかりの足をもっと大きく開くことに決定した。カチャカチャとゆかりが固定されている拘束台を操作していた西園寺がスイッチを入れると、ゆかりの足がグイーンと無理矢理開かされていく。

「い、痛いぃぃーーっ!!」

思わずゆかりが悲鳴を上げるが、西園寺はかまわずゆかりの足を開き続け、ゆかりの足が一直線になるまでスイッチを入れ続けた。ゆかりは〝大〟の字から〝土〟の字になった状態で固定された。

「ひぃひぃひぃ、痛いぃぃーーっ!!」

無理矢理足を限界以上に開脚され、ゆかりはすでに号泣していた。

「痛いよね、渡邊さん。でも、もっと痛いことするからね」

麗華が優しく残酷にゆかりに告げる。西園寺は二本のニードルをセットし準備万端という感じでいたが、急に眉をひそめ清宮に指示を出す。

「渡邊さんの小陰唇が邪魔だな。メスで切除したいところだけど、そこまでやるのは一般女生徒の渡邊さんには悪いから、クリップで拡げたまま固定してくれないかな」

清宮はすぐに了解し、ゆかりの小陰唇を強力なクリップで挟むと、太ももに着けたベルトに固定してゆかりの性器の中身を丸見えにする。ゆかりは性器をくぱぁと拡げられたまま、まじまじと観察されていた。

「よーし、OKだ。それじゃあ渡邊さん、串刺し開始するよ」

西園寺が機械のスイッチを入れると、ニードルがゆかりに向かって突き出していった。ニードルはゆかりの膣口から、ゆかりの中に侵入していく。

「ふぅふぅふぅふぅ！！」

ゆかりの息が荒くなっていく。

「まだ、膣内でしょう、渡邊さん。そんなに興奮しないでこれからが本番だから、もうすぐ我慢出来ない痛みが襲ってくるよ。本当に串刺しにされるんだから」

わざとゆかりに声をかけ、怯えさせている麗華を西園寺が呼ぶ。そして、モニターを見せ説明する。

「今、僕の串刺し機には渡邊さんのスキャンデータとニードルのデータが入力されているんだ。だから、ほら、このモニターでニードルが今渡邊さんの体のどこを突き刺しているか分かるんだよ」

西園寺の説明で清宮も後ろから覗き込む。モニターにはゆかりの体が映り、スキャンしたデータでゆかりの子宮や胃、食道等の位置が反映されていた。ニードルは今、ゆかりの膣内にあるのがはっきりと確認できる。ニードルはゆかりに恐怖と苦痛を与える為、ゆっくりと動きゆかりの中へ奥へ奥へと進んでいた。

「さてと、こちらも始動するか」

西園寺が別のスイッチを入れると、２つの器具が作動しだした。１つは尿道を串刺しにするニードルだが、もう１つ円筒形のものは何だろう？と麗華が西園寺に尋ねる。

「ああ、こっちは渡邊さんの肛門を切り裂く機器だよ。肛門を串刺しにすると腸は壊死しやすいから治療が面倒だからね。だから、括約筋を切り裂くだけにしたんだ。そうそう、膣も切り裂く為の装置があるからね。３つの穴、全部破壊されるのって素晴らしいでしょう」

これを聞いて同性として麗華は、そこまでされてしまうゆかりに対して嫉妬に似た感情を抱いていた。

・・きっと渡邊さん、理津子さんと同じくらい気に入られてるんだ。この人たち、私のマンコ見ても何も思わないもの・・

嫉妬心に捕らわれた麗華は、ゆかりをもっと痛め付けてやろうと残酷に考える。

「せっかくだから渡邊さんのマンコ串刺しにしながら、通電もしてあげれば喜ぶんじゃない」

しかし、麗華の提案に西園寺は難しい顔をする。

「通電すると体が震えるからね。正確に串刺しにするのが難しくなるよ。渡邊さんが処刑対象で殺していいならいいけどね」

「それなら、串刺しと通電を交互にすればいいんじゃない？　串刺ししてる時は通電を止めて、通電している時はニードルを止めるの」

「それなら良いか。それで麗華さん、渡邊さんの何処に通電したいの？」

「子宮がいいんじゃない。串刺しにもされて通電されるなんて最高でしょ」

「麗華さん、それいいよ。僕も渡邊さんのその姿見たい。西園寺くん、頼むよ」

清宮の賛成もあり、西園寺は麗華の提案を取り入れ、すぐに準備にかかる。いったん、ゆかりの膣からニードルを抜き、膣鏡を挿入しゆかりの子宮を確認する。

「子宮に電極を貼り付けてもいいけど、針で奥まで刺した方が効果的だな。清宮くん、これを渡邊さんの口に詰めてくれるかな。子宮に針を深く刺すから舌を噛み切らないようにね」

清宮が口枷をゆかりに装着しようと、ゆかりは首を左右に激しく振って抵抗する。

「許して下さいぃぃ！！怖いぃぃーーっ！！」

しかし、麗華がゆかりの頭をがっしりと押さえ付け、清宮が口枷をきつく装着する。

「ふご、ふご、ふご、ふごぉぉっ！！」

口を塞がれてしまったゆかりの子宮の両側に西園寺は針を当てる。子宮の中心から串刺しにするニードルの邪魔にならない位置を狙い突き刺していった。

プツゥ

軽い手応えの後、針はゆかりの子宮に突き刺されていく。

「ふんがぁぁぁーーーーっ！！！」

ゆかりが泣き叫ぶが、針はゆかりの子宮に深く深く突き刺されていった。

「よし、それじゃ串刺しの再開だ」

西園寺はスイッチを入れ、機械が始動する。再びニードルがゆかりの膣に消えていく。

「ふ、ふ、ふ、ふぅぅぅーーーーっ！！！」

西園寺はモニターを見ながらニードルがゆかりの子宮口を抉じ開けた所で停止させる。そして、ゆかりの子宮に電流を流し始めた。

「あびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃびゃ！！！！」

涙を流しながらゆかりの体が細かくブルブルと震えている。かっきり３０秒もゆかりの子宮に通電した西園寺は、ニードルがゆかりの口から突き出る際の邪魔になるので、このタイミングでゆかりの口枷を外してから、またニードルを操作する。自分の子宮口を抉じ開け、子宮内に入ってくるニードルの冷たい感触にゆかりは恐怖で震えていた。

・・うぅ、怖いよぅ。もぉゆかりを許してくださいぃ・・

もう、物のように固定され動けないゆかりの膣にニードルがどんどん突き刺さっていく。

「あ、あ、あ、あ、あ、あ」

ゆかりの息が荒くなっていった。そして、ゆかりが息を止めた次の瞬間!!

「あぁぁぁぁーーーーーっ!!!!」

凄まじい絶叫が響き渡り、ゆかりの膣から血がドボドボと流れ出した。モニターではニードルがゆかりの子宮を串刺しにしたことをはっきりと告げていた。そして、ゆかりは厳重に拘束されていながら、逃れようと必死に体を動かす。

「いけない、動いては。麗華さん、清宮くん、渡邉さんの体を動けないように、もっときつく拘束して」

麗華と清宮は、ゆかりを拘束するベルトを更にきつく締め、新たに拘束部分も追加する。もう、ゆかりは雁字搦めに縛られ、一切動く

ことが出来なくなった。

「さあここから、どんどんキツくなるからね。渡邊さん、死なないでよ」

西園寺は笑いながら言い、ニードルを停め、また電流を流した。

「あっびゃぁぁーーーっ！！あぶぶぶぶぶぶぶぶっ！！！！」

麗華も清宮も興奮した表情で食い入るように、子宮を串刺しにされ通電されるゆかりの凄惨な姿を見つめていた。

「痛いよぉぉーーっ！！　誰かぁ助けてよぉぉーーーっ！！！」

意味不明の言葉を発していたゆかりが、言葉を発した時点で通電が止まり、再びニードルが動き出したのだとモニターを確認しなくとも推測出来た。そして、ついに他のニードルも作動を開始した。ゆかりの尿道と肛門を切り裂く為の凶悪な機器が近付いていく。

「たすけてぇぇーーっ！！　もう許してぇぇーーーっ！！！」

泣き叫ぶゆかりだが、まず肛門に円筒形の機器が突き刺さっていった。ゆかりは、これからかつて味わった事のない地獄の苦痛を味わう事になる。麗華たちは、そんなゆかりの姿を期待に満ちた目で眺めていた。

52、ゆかり、絶命？

52、ゆかり、絶命？

ゆかりの肛門に入っていった円筒形の機器から鋭いカッターのような刃が飛び出す。その8枚の刃はゆかりの肛門の括約筋を簡単に切り裂いた。

「うぎゃぁぁーーっ！！　いだぁいだいよぉぉーーーっ！！」

肛門から血を噴き出しゆかりが泣き叫ぶが、すぐに今度はゆかりの尿道にニードルが突き刺さり、切り裂いていく。

「イヤだぁぁーーっ！！　ホントに痛いよぉぉーーっ！！　助けてぇぇーーーっもおぉぉーーーっ！！」

ゆかりは膣と尿道、肛門から血を流し串刺しにされていく。

「あびゃぁぁぁーーーっ！！　だじげでぇぇぇーーーーっ！！！！」

小柄なゆかりのどこからこんな大声が出るのかと思うほどの絶叫が響き渡る。

「あびゃぁぁぁーーーっ！！！　がびょっ……」

絶叫していたゆかりの声が突然途切れ、ゆかりの口からも血が溢れ

だした。

「麗華さん、渡邊さんの口からの吐血をこれで吸い取って！！　清宮くんは渡邊さんの鼻にカテーテル入れて気道を確保！！！」

西園寺の指示で二人は素早く動く。麗華は、吸引機を使いゆかりの吐血を吸い取り、清宮はゆかりの鼻の穴に管を入れてゆかりが呼吸出来るように空気の通り道を確保した。

「ゴバッ、ゴバァッ！！」

ゆかりは血を吐き白目を向いている。

「ようーし、渡邊さんの胃を突き抜けて食道に入った。あとは口まで一直線だ。ここまでくれば、同時責めも大丈夫だな」

西園寺は、なんと串刺しにされているゆかりに通電を始めた。

「ギョバァ、ギョバァ、ギョバァ、ギョバァ！！！」

ゆかりは串刺しにされながら通電され、血を吐きながらブルブルと体を震わせる。しかも、通電されているゆかりの子宮から煙が上がってきた。そして……。

「ギョッバァァーーーーッ！！！！」

ついにゆかりの口から血塗れのニードルの先端が顔を出す。そして、それはゆかりの口からどんどん突き出てきた。

「す、凄い　本当に串刺しだ　渡邊さんが本当に串刺しにされてい

る」

清宮も麗華も興奮が収まらなかった。ゆかりは性器から口まで完全に串刺しにされビクンビクンと痙攣している。そんな、ゆかりにも容赦せずに西園寺は通電もしていた。

「あまり上げ過ぎると感電死してしまうけど、ギリギリまで上げてあげるからね　存分に苦しんでね」

西園寺はカチカチとダイヤルを操作し電流をコントロールする。

「渡邊さん、かなり痙攣しているけど大丈夫なの？」

麗華が心配して西園寺に尋ねるが、西園寺は平気な顔で楽しそうに答える。

「温泉地なんかで電気風呂というのがあるだろう。僕も入った事あるけど、けっこうピリピリするだろう。それが電圧１０Ｖ、電流１０ｍＡくらいなんだ。今、渡邊さんに流しているのは、それより少し高いくらいだからね。相当痛いだろうけど、まだ大丈夫さ。ちなみに４２Ｖは死にボルトと言われているからね」

冷静にゆかりへのダメージを分析している西園寺に麗華は背筋が寒くなる思いがした。

「そうそう、どうせ渡邊さん、すぐＩＣＵに入れるからさ。もっと苦しめてあげようよ」

「えっ、何するんですか？」

清宮がこれ以上何するのと西園寺に尋ねると、西園寺はゆかりの陰毛を処理したツルツルの恥丘を指差す。

「これこれ。この渡邊さんの形の良いつるつるの恥丘にさ、釘を打ち込んでみたいと思わない」

「そんな事して大丈夫なの？」

「大丈夫もなにも、もう渡邊さん串刺しにされているんだから、もっと無様な姿にしてあげようよ」

西園寺の言葉に清宮も、それもそうかと頷く。麗華もゆかりを更に痛め付ける事に賛成だった。

「よし、じゃあ釘打ち開始」

西園寺は銀色に輝く釘をゆかりの恥丘に当てる。そして、金槌を持つと思い切り釘を打ち込んだ。

ガィィーン

串刺しにされているゆかりの恥丘に釘が打ち込まれていく。ゆかりは動くことも出来ず、恥丘に釘を打ち込まれていった。西園寺は興奮したように何本もの釘をゆかりの恥丘に打ち込んでいく。ゆかりは恥丘に釘を打たれる度に口と性器からピュッピュッと血を吹き出し、死んだように動かなくなっていた。

53、小説・ゆかり串刺し

53、小説・ゆかり串刺し

ゆかりは小さな部屋の中を見回した。たった今自分が入ってきた扉はすでに固く閉ざされゆかりの力ではピクリとも動かない。部屋の中央には先の尖った直径三センチ程の杭のようなものが小柄なゆかりの身長ほども突き出ており、その前方の鏡が埋め込まれた壁と床にカメラのレンズらしきものが備え付けられている。

・・この杭で私、処刑されるの？・・

ゆかりは杭の両側にある踏み台に足をのせ跨いでみた。すると、丁度ゆかりの股間の大切な割れ目に杭の先端が触れるよう微妙に高さが調整されているのがわかる。

・・どうしよう、気持ちよくなってきちゃったよぅ・・

ゆかりが股間に杭の先端を当てたまま顔を赤らめていると、左の壁からまるでファックスが受信したデータを吐き出すかのように一枚の紙が飛び出してきた。

「処刑方法について
部屋の器具を用い、自ら性器を破壊し絶命すること。ただし、観賞するに値しないと判断された場合、ただちに処刑は中止され四肢切断、眼球破壊、快楽の源である乳首・陰核切除のうえ生涯地下牢に

て拷問を繰り返される。以上」

一般社会では中学校に通う年齢、まだ十三歳のゆかりであるが命令の内容は即座に理解できた。

・・私、自分で自分の性器を串刺しにして絶命する姿を楽しんでいただくんだ・・

ゆかりは部屋の中央に突き出た貫通具に近づき触れてみた。僅かに丸みを帯びた先端に表面はヤスリのようにざらざらとしている。そして、ゆかりの手では握りきれないほどの太さだった。自分の中に入るその貫通具を眺めているうちにゆかりは、無意識にその先端を口に含んでいた。

・・こんな太いのが私の中へ・・

小さな口を思い切り開き貫通具をくわえながらゆかりは、股間から血を流し泣きながら貫通具を性器に突き入れていく自分の姿を想像していた。

・・無様な私・・

ゆかりは手を伸ばし下着の股間部の湿り具合を確認すると、すでにバルトリン腺から粘液を分泌しグッショリと濡れていた。ゆかりは貫通具から口を放すと鏡の前に立つ。そして、衣服を脱ぎ白い女児用の股上の深い綿の下着と、同じく太ももに食い込む白いサイハイソックスだけの姿になる。ゆかりの膨らみかけた小さな胸で乳首は固く勃起し、割れ目の中では大切な突起が幼いゆかりには痛いほど固くなっていた。

・・私の恥ずかしい染み、ご覧ください・・

ゆかりは足を大きく開き純白の下着の股間部をレンズの前に晒し、自分の恥ずかしい液が下着を染み出す様子を楽しんでもらおうとした。白い下着の中心に出来たゆかりの恥ずかしい染みは、見られていることを意識するゆかりの気持ちそのままに大きくなっていく。

「それでは私の絶命する姿をごゆっくりお楽しみください」

ゆかりは自分の惨めさを強調するため下着を穿いたまま性器を貫く考えだった。慎重に貫通具の先端を自分の膣口に当てたゆかりはゆっくりと腰を下ろしていく。

「・あっ・・・」

それはゆかりの想像を遥かに超える激痛だった。そのままでも幼いゆかりの性器には太すぎる貫通具であるうえ、下着を穿いたままの状態ではさらに一廻り太く感じる。

・・入らない、痛くて入らないよぅ・・

ゆかりは必死に腰を下ろし貫通具を自分の中に入れようとするが、その太さと激痛のため先端が僅かに膣に入った状態から先に進まなかった。

・・踏み台を倒さないと・・

ゆかりは自分が足を乗せている踏み台を思い切り蹴飛ばした。その途端、自分の体重が膣一点に集中する。

「あぁぁっーーーーーーーーっ！！」

凄まじい悲鳴を上げたゆかりの股間から血と小便が吹き出した。ゆかりの幼い性器は無残に裂け、その激痛でゆかりは失禁してしまっていた。

「痛いぃっーー！！　助けてくださいぃぃっ！！」

恐怖と激痛で足を閉じ、両手で貫通具を掴み必死に哀願するゆかりの尻からぼとぼとと大便も漏れ始めた。

「あ・あぁーーーーーっ！！」

性器を裂かれ大小便を漏らしながら泣き叫ぶゆかりの、貫通具を掴み必死にその挿入を止めようとしている両手が、いつの間にか部屋に入って来ていた男たちの手で無理矢理離され、背中にまわされるとそのまま縛り上げられる。

「あひぃぃーーーっ！！」

そして、必死に閉じているゆかりの足も大きく開かされ、残酷に開脚具で開いたまま固定された。

「ひぃぃーーーっ！！　やぁぁーーーーっ！！」

狂ったように泣き叫ぶゆかりの足首にさらに二十キロの錘（おもり）が取り付けられる。

「あぁびゃあぁぁあぁーーーーっ！！」

強制的に開脚され、自らの体重と錘(おもり)で性器を串刺しにされていくゆかりにさらに絶望を与えるため、黒い布でぐるぐると目隠しがされ、口に大きなボールギャグが無理矢理押し込まれた。

「お・お・・・」

さらに見ることも叫ぶことも出来なくなったゆかりの首と腰に鉄パイプの付いた拘束用の黒い革のベルトが装着される。背中の鉄パイプでゆかりは背筋を伸ばした姿勢で拘束された。

「ぶご、ごぉ・・・」

大きく開脚されたまま体中を拘束され身動き出来ず泣きながら性器を串刺しにされていくゆかりの哀れで無様な姿はビデオカメラで鮮明に記録されている。

・・助けてください、やっぱり死ぬのは怖いですぅ・・

ゆかりは夥しい涙と鼻水、そして口からは大量のよだれを垂らしながら、残酷にゆっくりと貫通具に性器を貫かれていく。ゆかりはその恐怖と苦しみで発狂寸前だった。

「・・おぼ・おぼ・・おぼぉぉ・・・」

すでに五十センチ以上ゆかりの性器を貫いた貫通具は、ゆかりの性器から溢れる血で真っ赤に染まっている。そのゆかりの足首にさらに錘が追加された。ガクンと一気に貫通具がゆかりの性器に突き刺さっていく。

「ぶごぉぉーーーーっ！！」

ゆかりは絶叫し口から血の泡を噴き出した。その後、ゆかりは意識がなくなったのか声も上げなくなり、拘束された身体がびくんびくんと大きく痙攣をはじめていた。そして、開脚されたゆかりの両足がようやく床に届いた時、ゆかりは哀れにも苦しみ抜いて発狂し絶命していた。

拘束され残酷に性器から串刺しにされたゆかりの身体は、その無様で惨めな姿を楽しむためそのまましばらく放置された。

★　★　★　★

「うーん、どうやら渡邉さん、本当に串刺しにされてから、その刺激が忘れられないようですね」

「まったく、こんな小説を書くようでは本当に自分でやりそうですよ、あの娘」

「参りましたね。あの苦痛で少しは考えが変わると思いましたが、逆効果でしたね」

理津子と麗華は風紀委員会の部室で頭を悩ませていた。ゆかりは治療のため病院に入院しているが、空いた時間を見つけては、狂ったように小説を書きなぐっていた。入院中で日課だった自虐行為が出来ないため、その欲求不満が溜まっているようで、さらに過激な事を行ってしまいそうで理津子と麗華の心配の種になっていた。

５４、小説・ゆかり串刺し２

５４、小説・ゆかり串刺し２

入院中のゆかりは個室のベッドの上で自慰に耽っていた。声は出さないように気を付けていたが、ベッドの軋み音が響き渡り何をしているのかは筒抜けであった。自慰が出来る程ゆかりが回復したという事であるが、ゆかりは自虐が出来ない事で欲求不満になっていた。それを小説に書くことで、なんとか平静を保っていたのだった。

★
★
★
★

「本日、処刑していただくゆかりと申します。十三歳、中学生です。この封筒の中に私の処刑方法が書かれています。」

ゆかりは手にした封筒を掲げると震える手で封を切り、書類を取り出す。

「それでは、発表します・・」

ゆかりは唾を飲むと震える声で続けた。

「私は後ろ手に縛られ足を大きく開いたまま拘束していただきます。そして、無防備に晒した私の性器の穴に処刑用の太い槍を突き入れ

ていただき、そのまま容赦なく女の子の大切な子宮を貫いていただきます・・」

ゆかりの身体は遠目にも分かるほど震え始めていた。

「子宮を貫かれ泣き叫び命乞いしながら苦しむ私の哀れで無様な姿を楽しんでいただいた後、口から穂先が顔を出すまで槍を突き入れていただき、性器から口まで完全に串刺しにしていただきます・・」

ゆかりは唇も合わせられないほど震えながら辛うじて立っていた。

「身動き出来ぬよう拘束され性器から口まで串刺しにされた私が苦しみぬいて絶命する姿をごゆっくりお楽しみください・・」

処刑台の上で小さな声で震えながら言い終えたゆかりは羽織っていた白いローブをゆっくりと脱いでいく。形よく膨みはじめた綺麗な胸ではピンク色の乳首が勃起し、陰毛も生えていないなだらかな恥丘の下では桜色の割れ目がしっとりと湿り敏感な突起が痛いほど固く勃起していた。ゆかりは適度に肉の付いた太ももを大きく開きその幼い裸体が晒しながら、腰を突き出し両手で性器を拡げその中身を晒す。

「それでは・私が選びました・処刑用の衣服に・・着替させていただきます・・・」

震えながらやっと言ったゆかりは、黒いパンティストッキングを震える指で伝線させないように注意しながらゆっくり穿いていった。そして、濃紺の旧タイプのスクール水着を身に付けてから、顔を赤らめ純白のパンティを水着の上に穿いていく。

「私の変態で恥ずかしい姿、ご覧ください・・」

ゆかりは両手を高く挙げ、足を思い切り大きく開いた。
濃紺のスクール水着に黒いパンストを穿き、その上に白いパンティを穿いたゆかりの姿が照明に浮かび上がる。そのゆかりの後ろに仮面を付けた処刑執行者が現れ、高く挙げているゆかりの両腕を掴むと背中に回しきつく縛り付けていく。

「あ・あ・・」

小さな声を出すゆかりの背後に頑丈な拘束台が用意され、拘束台から伸びる拘束具で、まずゆかりの首、そして腰が固定された。次に大きく開いているゆかりの太ももの付け根に拘束具が巻かれ容赦なく締め付けられる。

「あ、あ、い、痛いですぅ・・」

太ももの付け根に深く食い込む拘束具にゆかりは声を上げた。しかし、さらに太ももの中心にも拘束具が巻かれ思い切り締め上げられる。

「う、あぁ・・」

最後に、目に涙を滲ませるゆかりの足首も厳重に固定されていった。

「あぁ・・あぁぁ・・」

すでに泣き出しているゆかりの下半身が身動き一つ出来ないことを確認した仮面の執行者は黒い帯状の布で涙で濡れるゆかりの目を覆っていく。

「あぁっ、怖い、怖いよぉ・・」

逆ワイの字に拘束され自分の意思で動くことも見ることも出来なくなったゆかりは恐怖から大声で泣き出した。

「許してくださいっ、私、やっぱり、怖いですぅ」

泣きながら哀願するゆかりの小さな胸の先と股間に電動ローターが当てられガムテープで固定され、電源が入れられる。

「あっあっ、気持ち・い・い・ですぅ・・」

恐怖に震えていたゆかりは、三つの敏感な突起を刺激され泣きながら声を出しはじめた。

「あ、あ、私の性器、私の性器じゃなくなったみたいなんですぅ・・」

ゆかりは拘束されたまま全身汗まみれで、三つの突起を固く勃起させ無様に声をあげていた。そして、ゆかりの白いパンティの股間中心にみるみる染みが出来はじめる。仮面の執行人はゆかりの股間を濡らす恥ずかしい染みを確認すると、快感で声を上げているゆかりのことなどまるで無頓着に電源を切りローターを取り外した。

「あっ、あ・・」

快感に溺れていたゆかりは無情にローターが取り外されたことで、いよいよ自分の処刑が執行されることを悟り再び泣き出す。

「怖い、怖いですぅ・・」

夥しい涙が目隠しから滲みだすゆかりの無防備に晒されている股間、染みの中心にゆかりを串刺しにする凶悪な処刑用鉄槍の先端が当てられる。そして、その鋭い切先は躊躇することなくゆかりの膣内へ挿入されていった。

「あぁーーーーーーーっ」

文字通りゆかりを串刺しにする処刑用鉄槍はまずゆかりの膣を簡単に切り裂いていき白いパンティに血を滲ませた。

「痛いぃ痛いですぅっ・・」

自分の膣内に挿入され膣を切り裂く冷たい鉄槍の感触にゆかりは怯え遠目にも分かるほど細かく身体を震わせる。そして、身体の奥深く挿入されてくる処刑具の恐怖にゆかりはとうとう大声で泣きだした。

「嫌ぁ許してくださいぃっ、漏れちゃう、漏れちゃいますぅーーっ」

少しづつ確実に文字通り自分の性器を貫くために挿入されてくる鉄槍にゆかりは発狂したように泣き叫んだ。そして、泣き叫ぶゆかりの股間から下着越しに湯気を立てて小便が勢いよく溢れだす。

「怖いよぅー、許してくださいぃっ」

無様に失禁し股間とパンストを小便で黒く光らせながら、ゆかりの呼吸はどんどん早くなっていった。

「あ・あ・あ・あ・あ・あ・・」

そして、大きく口を開け酸欠のように息を荒くするゆかりが息を止めた次の瞬間。

「あぁぁーーーーーーーーーーーっ！！」

凄まじい絶叫がゆかりの口から発せられた。そして白いパンティの股間部が激しく赤く染まっていく。

「痛いぃーーーーーーーっ！！」

鉄槍で子宮を貫かれていく想像を絶する苦痛にゆかりは無様に大便も漏らしてしまった。ゆかりの股間が大便で盛り上がり悪臭が漂ったがゆかり自身はそんなことに気付く余裕もなくただ悲鳴を上げ続けていた。

「あびゃぁーーーーーーーっ！！」

大小便を漏らし股間を血で赤く染めながらゆかりは鉄槍で貫かれていく。幼いゆかりの無様で哀れな姿を楽しむため鉄槍はゆっくりと、しかし容赦なくゆかりの性器を貫いていきとうとう子宮を貫通した。そして、ゆかりにさらに苦痛を与えるため鉄槍がドリルのように回転させられる。

「あうぅぅーーーーーーっ」

鉄槍で子宮を滅茶苦茶に引き裂かれたゆかりは身体を強張らせ絶叫する。そして、さらに幼いゆかりに串刺しにされる苦痛を存分に味わわせ苦しむ姿を楽しむため、ゆかりは何度も何度も繰り返し性器

を貫かれた。

「お、お、おびゃぁーーーっ！！　・・・」

性器をぼろぼろにされ、か細い悲鳴を上げる瀕死のゆかりの胸と太ももに薬剤が何本も注射され頬が激しく打たれる。そして、意識を取り戻したゆかりに最後の挨拶をするよう命令が告げられ、髪を掴まれたゆかりの涙と鼻水と涎で汚れた顔が晒された。

「ゆ、ゆかりの絶命する姿をお楽しみください・・・」

囁くような声でようやく告げたゆかりの性器に最後の鉄槍が容赦なく突き入れられとうとう胃に穴を空けた。

「げ・ふぅ・・」

悲鳴を上げていたゆかりの口から血が溢れ出し、身体が細かく痙攣する。そんなゆかりの髪が掴まれると頭を後ろに倒され固定された。その間も鉄槍はゆっくりとゆかりの身体を貫いていく。そして、とうとう上を向いたゆかりの口から鉄槍の穂先が血塗れで姿を現す。性器から口まで鉄槍を完全に貫通させられたゆかりは身体をビクンビクンと痙攣させながらそれでもまだ生きていた。

スクール水着に黒いパンスト、そして白いパンティ姿で逆ワイの字に拘束され性器から串刺しにされたゆかりの哀れな姿が光の中浮かんでいる。そして、瀕死のゆかりに自分が串刺しにされている事実を残酷に認識させる意図から、ゆかりの涙が溢れる目を覆っている黒い布が取り外された。ゆかりの虚ろな目は自分の口から突き出ている血塗れの鉄槍を認めた瞬間大きく見開かれ止めどなく涙が溢れ出した。

★　★　★　★

「困りましたね」

「自分が殺される小説を悦んで書いているようですね」

理津子と麗華は頭を悩ませていた。もう退院しても大丈夫と西園寺に言われていたが、うっかり退院させると何を仕出かすが分らないという不安があった。それでも、何時までも病室に閉じ込めておくわけにはいかない。勉強の遅れもある。風紀委員として初めての事態に理津子と麗華は頭を悩ませた。

５５、待ちわびた調教

５５、待ちわびた調教

ようやく退院したゆかりはリハビリを兼ねて近所の公園の中を歩いていた。入院中ずっとベッドに寝ていたのですっかり筋肉が落ちており、こうして歩いているだけでもしんどいものがあった。

・・こんなに体力落ちてしまったら調教してもらえない・・

ゆかりは、それが一番気掛かりだった。勉強の方は入院中もオンラインで授業を受けていた。それに検査や治療で参加出来ない時も録画しておいた授業を後から再生し復習していたので、クラスメイトと比較して遅れているという事はなかったが、体力は動けなかった事で相当落ちているという実感があった。

・・早く体力を戻して、また吊るしてもらいたい・・

ゆかりは退院したものの、まだ自宅療養の状態だった。

・・早く学校に行きたい・・

ゆかりは、理津子たちの顔を思い浮かべ性器が濡れてきていた。

★　★　★　★

ゆかりは、ようやく登校出来るようになり待ちきれずに朝から風紀委員室へ行ってみた。中に入ると理津子と麗香がすでに来ていた。

「あら、おはよう、渡邉さん」

麗香が明るく挨拶してくる。ゆかりも挨拶を返すが、その後言葉が続かなかった。すると、頭の中に理津子の声が響いてきた。

・・仕方ありませんね。もう我慢出来ませんか、渡邉さん。まだ激しい事は出来ませんがよろしいですか？・・

「はいっ」

理津子の言葉にゆかりは思わず大声で答えていた。

・・西園寺くんはもう登校している筈です。呼んできてもらえますか・・

理津子に頼まれ麗香がドアを開けて出ていった。ゆかりはもう顔は火照り、性器はぐっしょりと濡れていた。

しばらくして麗香が西園寺を連れて戻ってきた。

「あれ、渡邉さん。もう、登校していいのかい？」

西園寺が驚いて尋ねるが、ゆかりが答えるよりも先に理津子の声が頭に入ってきた。

・・渡邉さんはもう待ちきれない様なんですよ。軽く痛めつけてあげてくれませんか・・

西園寺は理津子に頼まれれば是非もない。さっそく、準備に入り始める。ゆかりはセーラー服を脱がされ、ブラも下着も脱がされる。そのまま、手を上げて足を大きく開いて立つように命令された。ゆかりは黒いオーバーニーソックスと上履きだけ履いた姿で、両手を上げ足を大きく開いて立った。

「まずはそのまま僕たちが見ている前で放尿してもらおうか。顔を伏せないでキチンと前を向いて放尿するように」

西園寺がゆかりの開いた足の下に盥を置き、撮影も開始する。ゆかりは前を向いたまま下腹部に力を入れ、チョロチョロと放尿した。透明な液体が湯気を立てて、ゆかりの割れ目から流れだし下の盥に溜まっていく。

「ハァハァハァハァ」

見られている前での放尿にゆかりの顔は火照り息は荒くなっていた。

「次は排便もしてもらおうか」

命令されたゆかりは排便しようと息むが、どうしても出てこなかった。それを見て察したように西園寺が笑う。

「ごめん、ごめん。渡邉さん、便秘なのか。申し訳ない。それなら、浣腸してあげるからね」

西園寺と麗香は手早く浣腸の準備を整える。

「さあ、渡邉さん。グリセリン、直接いくよ」

西園寺が５００ｍｌのシリンジにグリセリンを満たし、麗香がゆかりの尻を左右に開き肛門を露にする。そして、ゆかりの肛門に浣腸器を突き刺しグリセリンを注入する。

「う、ううぅっ」

肛門から腸内に注入されたグリセリンの冷たさに思わずゆかりが声を上げるが、すぐに2本目のグリセリンが注入される。ゆかりは両手を上げ、脚を拡げ立ったまま次々に浣腸されていく。そして、６本3リッターも注入された頃にはゆかりの腹部はぽっこりと膨れパンパンになっていた。

「口から吐くまで注入したいけど渡邉さんもまだ退院したてだから今日はここまでにしておくよ」

そう言いながら西園寺は３０センチはあるアナルプラグを手に取ると、容赦なく浣腸したゆかりの肛門に押し込んでいく。そして、根本まで押し込んでガムテープで抜けないように固定する。

「うーん、ちょっと物足りないな。渡邉さんもこれじゃ詰まらないよね」

西園寺は、良いものはないかとウロウロしながら考えていたが何か思い付いたようで、ゆかりを大きな処刑台の上に仰向けに寝かせ手足を大の字に革のベルトで拘束する。そして、ゆかりは頭だけ台から出されて倒された。

「せっかく、下から注入したんだから、上からも注入してあげるよ」

ゆかりは西園寺の言っている意味が分からなかったが、西園寺はまたシリンジに何か白いどろどろした液体を詰めている。

「このローションを渡邉さんの鼻から注入してあげるよ」

西園寺はゆかりの頭の前に立つと、麗香にゆかりの左の鼻の穴を押さえてくれと言い、ゆかりの右の鼻の穴にシリンジの先端を突き入れた。そして、ヂューッとローションを注入する。

「あぼぅ、あぼぅ、あぼぅ」

鼻の穴からローションを注入されゆかりは苦しげに噎せていた。

「あはは、苦しいよね、渡邉さん。でも全部注入するからね」

西園寺はシリンジ内のローションを全て注入してしまう。ゆかりは涙を流し、口からローションを吐きながらも性器を濡らしていた。

「まだまだ終わりじゃないからね。今度は両方の鼻の穴から注入するよ」

麗香にもシリンジを持たせ同時に鼻の穴から注入しようとするが、ゆかりが嫌々というように激しく首を振り抵抗する。よほど苦しかったのだろうが、ちょうどやって来た清宮がゆかりの頭を押さえ付ける。

「面白そうな事やってるね。渡邉さんの頭押さえとけばいいかな」

西園寺と麗香は頷くと、ゆかりの両方の鼻の穴にシリンジを突き刺しギューッと同時に注入する。

「ぶぼぉっ！！」

ゆかりは涙を流し口から激しくローションを吐く。

「駄目だよ、渡邉さん。せっかく入れてもらったのに出したりしたら」

清宮はゆかりの口も押さえてしまう。

「ふごっ、ふごっ、ふごぉぉ！！」

ゆかりは必死に逃れようとするが、仰向けに固定され頭を押さえつけられて動くことも出来ない。

「さあ、渡邉さんも慣れてきたと思うから次はこれを注入するよ」

西園寺はなにやら赤い液体をシリンジに満たしている。

「これは匂いで分かると思うけどタバスコだよ。刺激が強いから相当苦しいだろうね」

西園寺と麗香は笑いながら赤いタバスコを満たしたシリンジをゆかりの鼻の穴に突っ込み容赦なく注入する。

「ふんごぉぉぉーーっ！！」

ゆかりは押さえられた口で絶叫し涙がポロポロと溢れ出す。そして、

大の字にされた脚の中心からシャーッと尿が噴き出した。

「あーっ、渡邉さん、漏らしちゃったよ。仕方ないな、これは尿道も痛め付けてあげないとな」

「でも、人手が足りませんよ」

麗香が、どうするのと西園寺に尋ねる。

「鼻の浣腸はイルリガートル使って注入するようにして、シリンジで尿道から注入しよう」

さっそく器材がセットされイルリガートルに今度は薄めたアルコールが満たされる。そして、イルリガートルに付いたゴム菅がゆかりの鼻の穴に深く挿入された。両方の鼻の穴にゴム菅を挿入されたゆかりはガムテープで口も塞がれてしまう。そのガムテープに針で呼吸用の小さな穴が申し訳程度に空けられ、イルリガートルから注入が開始される。

「ふんっ、ふんっ、ふんっ、ふんっ！！」

ゆかりは忽ち顔を真っ赤にして苦し気に頭を振るが、３人はゆかりの尿道の前に移動していて気付く気配もなかった。そして、ゆかりの尿道にシリンジを突き刺しヂューッとタバスコを注入した。西園寺が注入し終わると今度は麗香が注入を始める。

「ふんごぉぉぉーーーーっ！！」

ゆかりの絶叫が響き渡った。

56、ホームルーム（前書き）

特に章立てていませんが、このお話から「ゆかりの記録」最終章に突入です。変態のゆかりがどんな末路を辿るのか。幸せな結末など有り得ません。待っているのは救いようのない未来だけです。

56、ホームルーム

56、ホームルーム

ゆかりは鼻の穴からアルコールを浣腸され、顔を真っ赤にして苦しんでいる。必死に頭を振り鼻に挿入されているイルリガートルのゴム菅を抜こうとするが、深く挿入されている為ゴム菅は抜けず、頭を振っているため余計にアルコールが回るのが早くなっていた。

「ふんごぉぉぉーーっ！！」

ゆかりは塞がれた口で、涙を大量に流しながら必死に助けを求めるが、西園寺たちはゆかりの尿道からタバスコを注入するのに集中していて気付きもしなかった。

・・渡邉さんが死にそうですよ・・

理津子が助け船を出し、西園寺たちが慌ててゆかりの口のガムテープが剥がし、ゆかりはぶふぉっと口からアルコールを吐き出し九死に一生を得ていた。

・・渡邉さん、どうです。いっそのこと、全校生徒の奴隷になりませんか。もう、自分の性癖の事を全員に知って貰って痛めつけてもらうのです・・

理津子の提案にゆかりはさすがに二の足を踏む。今まで目立たず普

通の女の子として生きてきたのに、それが本当は頭のおかしい変態女子だと分かれば、みんなの見る目が変わってしまうだろう。しかし、そんなゆかりの心など分かっているように理津子は更に続ける。

・・こんな事されて喜んでいる渡邉さんが、今さら何をいうんですか。本当はもっと恥ずかしい目にあいたいと思っていますよね。もう、人間辞めた方が幸せなのではないですか。まあ、今日１日時間を差し上げますよ。よく考えてご覧なさい・・

ゆかりは今まで想像した事もなかった理津子の提案に戸惑っていた。奴隷契約を送付していることもあり、ゆくゆくは性玩具に沈められたいという欲求は常に持っていたが、それは密かな閉じられた空間での場合を想定していた。それが、白日のもとで晒されて大袈裟に云えば全世界の人間からゆかりはもう人として見て貰えなくなる。しかし考えてみれば、ゆかりにとって理想とも呼べる世界だ。毎日、２４時間、責められ痛めつけられ犯される。

・・ふふふふ・・

ゆかりは生まれて初めて心の底から笑っていた。簡単な事だったのだ。自分の心に素直になれば良かったのだ。人間である必要はない。女の子の形をしたモノになればいい。死ぬまで痛めつけられる。考えればもう、それが一番理想だ。家族も友人もいらない。お金だって欲しくない。

・・永久にマンコを痛めつけられる・・

ゆかりは、激しく潮を吹いていた。

「うわっ、どうしたんだ?渡邉さん?」

西園寺たちが驚く。尿道を責められている最中に、潮を吹くなど考えられなかった。

・・覚悟が決まったようですね、渡邉さん。それでは全て手配しておきますよ。もう、渡邉さんは明日から人間でなくなります。渡邉さんと呼ぶのもこれが最後ですね・・

理津子の声がゆかりの頭に響く。

・・よろしくお願いします・・

ゆかりも頭の中で答えていた。

★　★　★　★

翌日、セーラー服を着たゆかりは校門で立ち止まり校舎に吸い込まれていく生徒の人波を眺めていた。このまま校庭を横切り校舎に入れば自分は人間ではなくなる。いや、もう理津子が根回ししている筈なので、一部の人にはゆかりの本性がすでに知られている筈だった。そう思うとゆかりの性器は濡れてきていた。

「渡邉さん、どうしたの？」

突然、声をかけられゆかりはビクッと飛び上がり、尿を少し漏らしてしまった。振り向くと同じクラスの蜂須賀彩音だった。ゆかりは、何でもないというように首を振り歩き出す。彩音もゆかりに並ぶように歩いて来る。

・・どうして今日に限って……・・

いつもはクラスメイトに声を掛けられることなどないゆかりは一緒に歩いて来る彩音が煩わしかった。

・・私はもう人間ではなくなるからほおっておいて・・

ゆかりは口に出したかったが、そう言うと何故と訊いてくるだろう、それが面倒だった。

「私、渡邉さんとお友だちになりたかったんだ」

彩音の言葉にゆかりは苦笑する。

・・何、言ってるのこの子。もうすぐ私の本性が分かる。後悔するよ。私は人間でなくなるから・・

「今まで渡邉さん、1人の殻に入っているみたいで話しかけ難かったんだけど、今日は何か何時もと違う感じがして……」

彩音が話しかけてくるが、ゆかりは無視して上履きに履き替え教室に向かう。

教室に入ったゆかりは心臓の鼓動が早くなってきた。今、私の周りにいる、この同級生たち全てが私の御主人様になる。もうすぐ私は人間でなくなるんだ。ゆかりは心臓だけでなく、息も荒くなってきていた。そうしているうちに、1限目のホームルームの開始を知らせるチャイムが鳴った。ゆかりの心臓は飛び出そうだった。

ガラッ

教室のドアが開き担任の男性教諭が入って来る。そして、ゆかりと目が合った。ゆかりは瞬時に、担任はもう全て知っていると確信した。当たり前だ。風紀委員長の理津子やこの学校のオーナーでもある西園寺グループの息子が根回ししているのだ。もう、この学校の職員には全員ゆかりの事は周知されているのは間違いない。担任は教壇に立つと、さて今日のホームルームだがとまた、ゆかりに目を向ける。その時が近付き、ゆかりは性器をビショビショに濡らしていた。

「渡邉っ！前に来いっ！自分で宣誓しなさいっ！！」

・・とうとう、きた。私の人間の人生が終わる・・

何時もは穏やかな担任の命令口調に、まだ何も分からないクラスの同級生たちも驚いていた。ゆかりは、何事かとクラス全員が自分に注目を集める中、席を立つと教壇に向かって歩き出した。脚がガクガクと震え、緊張で漏らしてしまいそうだった。そして、教壇に立ったゆかりは、注目しているクラス全員の顔を見回し大きく息を吸い込んだ。

・・サヨナラ、渡邉ゆかり。今この時から私は人間ではなく女の子の形をしたモノになるの・・

ゆかりは、口を開いた。そして、人間として最後の言葉を発する。

「私、渡邉ゆかりは……」

57、ゆかり、奴隷化

57、ゆかり、奴隷化

教壇に立ったゆかりは、いよいよ自分の人間として人生が終わる宣誓をする。ゆかりは顔を真っ赤にしながら大きく息を吸い込んだ。

「私、渡邉ゆかりは今日この時を限りに人間ではなくなります。皆さんには今まで大変お世話になりました。これからは人間としてではなく、物として扱ってください。この後は、私が何を言おうと聞く必要はありません。私を人間と思う必要もありません。私は奴隷です。マンコを痛め付けてもらうのが大好きな性玩具です。このホームルームの時間は担任の山岸先生が皆さんに奴隷の扱い方をレクチャーしてくれます。それでは、皆さん、さようなら」

ゆかりが話し終わると、担任の山岸先生がゆかりの口に、口が閉じられないようにする開口ギャグを装着する。ゆかりの話を呆気にとられた顔で聞いていたクラスメイトたちも、実際にゆかりの口に開口ギャグが装着されるのを見ると、ざわつき始めた。

「マジか？」

「本当なの？」

「大人しい子だと思ってたけど頭おかしいの？」

全員が信じられないという顔でゆかりを見ている。しかし、口を塞がれたゆかりは、クラスメイトの見ている前でスカートを捲ると脚を大きく開いて横を向いた。教壇の上で、ゆかりと先生が向き合う形になる。男子も女子も、ゆかりの自ら捲って丸見えになっている白い綿のパンティに釘付けになっていたため、担任の先生が何を持っているのか気付いていなかった。

ヒュッ

鋭い風切り音が聞こえたと思うと、高い打撃音が響く。

ピシィッ!!

「ふごぉぉぉーーーっ」

続いてゆかりの絶叫が響いた。

ヒュッ!ピシィッ!!

ヒュッ!ピシィッ!!

ヒュッ!ピシィッ!!

ゆかりは開口ギャグから舌を付き出して絶叫し、ボロボロと涙も流している。ここへきてクラスメイトたちも、ゆかりが何をされているか理解してきた。

「渡邉さん、マンコ、鞭で打たれているの?」

女子の一人が思わず口に出していたが、担任が聞きつけ注意する。

「こらっ、伊藤！こいつはもう渡邉なんかじゃない。名前もない、ただのメス奴隷だ。みんなもしっかり頭に入れとけ。こいつはただのメス。人間じゃない」

担任の言葉と、クラスメイトの前で実際に性器を鞭打たれているゆかりの姿に、ようやくこれは冗談でも何でもなく本当にゆかりは奴隷に堕ちたのだと理解した。

ピシィッ、ピシィッ、ピシィッ、ピシィッ、ピシィッ、ピシィッ、ピシィッ、ピシィッ！！

担任はゆかりの性器を鞭で打ち続け、汗だくになっていた。

「よし、俺は少し休憩するけど、山田、お前から順番に前に来てこのメスを殴っていけ。お前らもこのメスを痛めつけるようにならないとな。いいか、可哀想なんて思うなよ。こいつはもう人間じゃないからな」

担任の指示で廊下側の席の一番前の男子生徒が立ち上がり教壇に立つ。ゆかりはスカートを持っていた手を離し両腕を万歳のように上げ、涙が滲む目で山田を見つめる。山田はそんなゆかりを見て、殴る事が出来ず立ち尽くしていた。

「山田、早くしろっ！後がつかえているぞっ！」

担任が山田に注意すると、ようやく山田は手を振り上げゆかりの頬に平手を叩き込んだ。

パシィッ！

「ふごっ　」

ゆかりの頬が赤く染まる。

「よーし、次っ！」

パシィッ、パシィッ、パシィッ、パシィッ、パシィッ、パシィッ、パシィッ、パシィッ、パシィッ、パシィッ、パシィッ、パシィッ、パシィッ、パシィッ！！

ゆかりは次々に元クラスメイトたちに頬を打たれ両頬とも真っ赤になっていった。そして、蜂須賀彩音の順番になった。彩音は開口ギャグを装着され涙を流しながら元クラスメイトに頬を打たれているゆかりを心配そうに見ていたが、担任に早くしろと催促される。

・・渡邉さん、ごめんなさい。マンコ、鞭で打たれて、頬もずっと打たれていて痛いよね・・

彩音は心の中で謝罪しながら、ゆかりの頬をピシャリと打った。その後も順調にゆかりは頬を打たれていき、残り二人になった時、ゆかりの前に立った女子がゆかりを汚い物でも見るような目で見つめる。

「私はあんたみたいな真面目ぶってる奴が嫌いだったんだよ。それが、こんな頭のおかしいメスだったとはね、大笑いだよ。遠慮なくこれからあんたを痛め付けてやれると思うと気持ちいいわ」

東條佳純は残酷に笑うと担任に顔を向けた。

「先生、このメス、どこ殴ってもいいんでしょう?」

「ああ、もちろんだ」

「蹴ってもいいですか？」

「問題ない」

佳純は今度はゆかりに顔を向ける。

「おい、メス。脚、開けよ。スカートも捲れ。私の前に股間をさらすんだよ」

ゆかりは佳純に命令されるまま、スカートを捲り脚を大きく開いた。

「ホントに奴隷だな。その無様な格好、似合ってるよ。こんな奴を真面目で大人しいと思ってた私も馬鹿だわ。覚悟しろよ、メスッ！！」

佳純は足を振り上げると思い切りゆかりの性器を蹴り上げた。それも爪先で……。

ドスゥッ

「ふごぉぉぉーーーっ！！」

ゆかりの膣に佳純の爪先がめり込んでいた。ゆかりは文字通り飛び上がり、教壇の上で股間を押さえて転げ回った。

「よし、良いぞ東條。次、最後。山本だ」

委員長の山本和彦が教壇に上がった。

・・渡邉の奴、こんな頭のおかしい変態だったとはな。これから毎日めちゃくちゃにしてやるよ。学校公認だから、もう遠慮する事はない・・

和彦は大声で笑い出したかった。

「早く立てよ、メス。スカートも脱げ。そして、股を大きく開くんだ」

ゆかりはヨロヨロと立ち上がりスカートを脱ぐと脚を開いた。和彦は、そのゆかりの性器に狙いを付けると佳純同様、思い切り蹴り上げた。

ズボォォーッ!!

「ほげぇぇぇーーーーっ!!」

佳純以上に和彦の爪先がゆかりの性器にめり込む。ゆかりは両手で股間を押さえ、泣きながらのたうち回った。

「よし、良いぞ。これからも、みんなでこのメスを痛めつけていくんだぞ。今日は、このホームルームの後も1日授業は中止して、このメスを痛めつける事になっている。朝の職員会議で考えた方法を先生が試していくから、みんなもこれからメスを痛めつける参考にしてくれ」

その担任の言葉に彩音は恐怖していた。

・・これ以上まだ渡邉さんを痛めつけるつもりなの・・

彩音が耳を疑っているうちに、再びゆかりの性器へ鞭が叩き込まれ始めた。ゆかりは両手を上げ、脚を大きく開き泣きながら性器を鞭で打たれている。

ピシィッ、ピシィッ、ピシィッ、ピシィッ、ピシィッ、ピシィッ、ピシィッ、ピシィッ、ピシィッ！！！！！

「あうっ、あうっ、あうっ、あうっ、あうっ、あうっ、あうっ、あうっ！！！！」

拳を握りしめ舌を付き出して必死に耐えているゆかりの股間で、白い下着が赤く染まり始めていた。ゆかりの生理が始まったわけではない。鞭で打たれ続けゆかりの性器から出血が始まったのだ。それでも、ゆかりは性器を鞭で打たれ続けた。

58、変態マゾ奴隷ゆかり

58、変態マゾ奴隷ゆかり

「あうっ、あうっ、あうっ、あうっ、あうっ」

ゆかりはクラスメイトの前で無様に性器を鞭で打たれ続けて涙と鼻水を流し惨めに号泣していた。これだけ長時間、性器を鞭で打たれ続けたのは、ゆかりにとって初めての経験だった。もう性器の感覚が失くなり、鞭が叩き込まれる度に体の中心に激痛が走る。さすがに変態であるゆかりも、もう許して下さいと土下座したい所まで追い詰められていた。しかし、もしゆかりが土下座して許しを乞うても、奴隷であるゆかりの声など聞いてもらえるとは思えなかった。すでにゆかりは人間ではなくなっているのだ。ゆかりの人権も、人格も全て無視される。ゆかりは女の形をしたモノとしてのみ存在を許されているのである。ゆかりは卒業するまで奴隷として扱われ、卒業後も然るべき施設に入れられ死ぬまで人間として扱われる事はもう無いのだった。

★　★　★　★

風紀委員室で理津子が麗香にゆかりの状況を聞いていた。

「渡邉さんは奴隷として調教を受けていますね。先程教室を覗いた

ところ性器を鞭で打たれていました」

・・性器鞭打ちですか。あれは当たり処によっては息が止まる程の激痛がありますからね。でも、そのピンポイントにヒットした時は、鞭を打った方も打たれた方もたまらない快感がありますからね・・

「そうですね。私も経験があります。ちょうど自分のマンコの割れ目に鞭がピタリと入って柔らかい膣前庭窟を打たれた時の電流が流れたような快感。確かにあれは一度味わってしまうと病み付きになりますね」

そう言いながら麗香は股間に手を当てモジモジしだした。

・・どうしたんですか、麗香さん?・・

「もう、理津子さんがそんなこと言わせるから鞭で打ってもらいたくなってしまいましたよ 」

・・なら、西園寺くんにでも頼めばいいではないですか・・

「西園寺くんの頭には理津子さんしかありませんから、理津子さんからお願いして下さいよ」

理津子は、やれやれという感じで頭を振った。

★ ★ ★ ★

ゆかりは性器を鞭で打たれ続け、ゆかりの白い下着の股間がもう真

っ赤に染まっていた。

「あうぅぅーーっ　」

ゆかりは無様に声を上げながら性器を鞭で打たれていたが、そこへガラッと担任が入ってきた。体育館に道具が届いたので、そこに移動だと言う。

「昨日、慌てて発注した木馬がやっと届いたよ。これも昔の拷問では欠かせない物だからな。女の性器を痛め付けるのに特化した道具だ。そのメスにちょうどいい」

クラス全員がゆかりを連れてゾロゾロと体育館に移動した。体育館のバスケットボールのゴールの下に鋭角の三角木馬が鎮座していた。そして、ゴールのポールからはロープが垂れ下がっている。

「これから、そのメス奴隷をこの木馬に跨がらせてやるが、その前にメスの着ているもの全部脱がすの忘れるなよ。これは跨がらせた女を辱しめる道具でもあるからな」

ゆかりは、ようやく性器を鞭打たれる事からは解放されたが、すぐに次の拷問を執行される。ゆかりは両手を上げ、足を開いて立つように命令され、そのままセーラー服を切り裂かれていく。東條佳純を始め数人の女子が楽しそうにゆかりのセーラー服をジョキジョキと切り裂いている。ゆかりは、あっという間に白いスポーツブラと白い下着だけの姿にされてしまうが、当然その下着さえ切り裂かれていく。

「何、目を瞑ってるんだよ。目を開けて前を見な。そして、自分でマンコ拡げて、中身をみんなによく見せるんだよ」

佳純がゆかりに命令する。ゆかりは両手を性器に当てると、くぱぁと開いた。ゆかりはクラスメイトの前で全裸にされ、さらに性器の中身まで見られ羞恥で顔を赤らめていた。

「バケツ、持ってきて」

佳純が男子が持ってきたバケツをゆかりの開いた足の真ん中に置く。

「しょうべん、しろよ」

「は、はいっ」

ゆかりは両手で性器を開いたままチョロチョロと放尿する。クラスメイト全員が、放尿するゆかりの姿を撮影していた。

「ウンコもしろ」

容赦なく佳純が命令する。ゆかりは下を向いて息み始めたが、佳純がゆかりの三つ編みを掴み顔を上げさせる。

「何、下向いてんだよ。ちゃんとみんなに顔見せて、ウンコするんだよ」

「は、はいっ

ゆかりは顔を上げ正面を向いたまま下腹部に力を入れ息んでいる。三つ編みお下げで真面目で大人しそうな顔のゆかりが全裸にされ、排便の為に立ったまま股を開き息んでいる姿にクラス全員が興奮し自慰を始めていた。佳純も委員長も自分の股間に手を当て刺激して

いる。ゆかりの事を気にかけていた蜂須賀彩音でさえ、スカートの中に手を入れてしまっていた。

・・渡邉さん、こんなことさせられて恥ずかしいよね・・

そう思いながら彩音は右手の動きが止められなかった。

「うん、うん」

息んでいるゆかりの肛門が大きく広がっていった。

ぶりっ、ぶりっ、ぶりっ

そして、ついにゆかりの肛門から大便がぼとぼとと排泄され、バケツの中に落ちていく。

ドピュッ、ドピュッ

シャーッ

ゆかりが無様に全裸で立ったまま排便する姿を見て、そこかしこで男子は射精し女子は潮を吹いていた。彩音も潮を吹いてしまい、がくがくと膝に力が入らなくなり体育館の床に座り込んでしまった。

「ホントにこいつ、頭おかしいわ。こんな、みんなの見ている前でマンコ開いて、平気で小便やウンコしてるよ」

「ホント、真面目そうな顔して頭おかしいね。こんなメスのマンコ壊してやりたいわ」

自分達もゆかりの排便する姿を見て自慰していたのを棚に上げ、ゆかりは汚い物でも見るような蔑んだ目で見られていたが、ゆかりはその元クラスメイトたちの冷たい視線にぞくぞくするような快感を得ていた。

・・ゆかりはもう人間ではありません。変態のマゾ奴隷です。もっと、ゆかりのマンコを痛め付けて泣き喚く惨めな姿を笑って下さい・・

ゆかりは心の中で、もっと早く人間辞めれば良かったと思っていたが、これから廃棄されるまで奴隷として痛め付けられる事を軽く考え過ぎていた。人間として扱われない。それは、ゆかりが考えているような軽いものではなかったのである。

★　★　★　★

体育館でロープを持ちながら担任は、ゆかりのほとんど膨らみのない胸を見て悩んでいた。

「随分貧弱な胸だな。これでは吊り下げるの少し大変かもな　まあでも折角の機会だ　ようし、みんな、まずこれから、このメスの乳房吊りを始めるぞ。手伝ってくれ。乳房吊りで吊り上げて三角木馬の上に落とすんだ」

担任の号令で委員長や佳純たちがゆかりの前に集まってくる。

「普通は女子の胸の膨らみを直接縛って吊り下げるんだが、このメスは胸の膨らみがないから、まずこの二枚の板で上下に胸を挟むん

だ」

担任の指示で佳純と女子がゆかりの胸の下に板を当てる。そして、上から板でゆかりの胸を挟もうとするが、ゆかりの小さな胸はなかなか上手く挟む事が出来なかった。

「ちょっと男子、手伝ってよ　このメスの乳首持って引っ張って」

佳純がイラついたように声を上げる。二人の男子がそれぞれ左右の乳首を掴み思い切り引っ張った。

「いたあぁぁーーっ」

思わず声を上げるゆかりの頬を佳純が平手で思い切り打ちつける。

「奴隷が喋ってんじゃないよ。ほら、自分でも胸を突き出せ。中学生にもなって、こんなツルペタの胸で笑わせる。生理もきてないんじゃないの」

ゆかりは命令通り胸を突き出す姿勢をとるが、それでも板で挟むのは至難の技で、男子が乳首から引き伸ばし、ようやく板で挟む事に成功した。２枚の板はボルトで思い切り締め付けられ、ゆかりの小さな胸はペシャンコに潰れている。ゆかりは胸を潰された激痛に涙を流して泣いているが、この後、

これ以上の激痛に泣き喚く事になる。もう、ゆかりには安息の時間が訪れる事はないのだ。ゴール下では三角木馬の金属の鋭角部分が、ゆかりの性器を裂く事を待ちわびるように冷たく輝いていた。

59、変態マゾ奴隷ゆかり2

59、変態マゾ奴隷ゆかり2

ゆかりは2枚の板で胸を潰され泣いていたが、それだけで終わりではない。ゆかりは両腕を高手小手に縛られ、胸を挟んでいる板の中央にロープが結び付けられた。ゆかりはこのまま乳房吊りにされるのである。

「ああ、そうだ。多分うるさいだろうから、口も塞いでおいた方がいいな。これをやられた女の罪人は獣のような悲鳴を上げたという記録が幾つもあるからね。まあ、乳房だけで自分の全体重をぶら下げるんだから当たり前だね」

担任のアドバイスでゆかりの口中に切り裂かれたゆかりの下着が口一杯に詰め込まれる。そして、さらに梱包用の強力なガムテープが貼られ、ゆかりの口は完全に封印されてしまった。

「ふぐ、ふぐ」

ゆかりは何かを必死に訴えようとしているが、もうゆかりの言葉は聞こえない。もっとも、奴隷に堕ちたゆかりの言葉など、ゆかりが喋れても聞いてくれる者など誰もいないのだが。

涙の滲む目で、ふごふごと必死に訴えるゆかりに構わずロープが引かれていく。ロープが引かれるにつれ、ゆかりの胸が引き上げられていき、ゆかりはだんだんとつま先立ちになっていった。そして、

さらにロープが引かれる。ゆかりの体が宙に浮くかと思われたその時……。

ズボゥッ！

ゆかりの胸が、挟まれていた板から抜けてしまった。ゆかりはバランスを崩し床に倒れると、両腕を拘束されている為起き上がる事も出来ずにもがいている。押し潰されていたゆかりの胸は真っ赤に変色していた。

「うーん、思った以上にこのツルペタの胸は厄介だな。これは胸が抜けないようにする工夫が必要だぞ」

担任が困ったように腕を組むが、佳純がハイと手を上げる。

「簡単ですよ、先生。板に釘を打ち付けて、その板でこのメス奴隷の胸を挟めばもう抜けませんよ。胸が千切れるかも知れないけど……」

佳純の恐ろしい提案は、確かにそれなら抜けないだろうと即座に実行される事になった。さっそく、2枚の板に無数の釘が打ち込まれる。釘は板を突き抜け、まるで剣山のようにその切っ先を反対側に光らせていた。それを見たゆかりは恐怖で体が震え出していた。あの無数の針山のような板で胸を挟まれる。ゆかりは以前、乳首を釘で打ち付けられた時の激痛を思い出していた。今度は釘の数を見てもあの時の比ではない。それに今度は乳首だけではない。ゆかりの胸全体に釘が打ち込まれるのと同義なのだ。

ゆかりは立たせられ、ぶるぶる震える体を押さえ付けられる。ゆかりは涙を流して逃れようと暴れるが、両腕を縛られている上に男子生徒に二人がかりで押さえ付けられては、小柄で非力なゆかりでは、

もう動く事も出来なかった。

「ふごっ、ふごおっ」

必死に何かを訴えるゆかりの胸の下に剣山のようになった板が当てられる。ゆかりは性器を調教される事に関しては、自虐をしていた事もあり濡らしてしまう程興奮してくるが、正直性器以外の部分については苦手意識があった。しかし、当然そんな事は関係ない。ゆかりがどう思っていようと、問答無用で痛め付けられるのだ。そして、ゆかりの乳首が今度はペンチで挟まれ思い切り引き伸ばされる。ゆかりの小さな胸がビローンと引き伸ばされ、間髪入れず上から無数の釘が突き出る板で容赦なく挟まれた。

「ふごおぉぉーーーーっ！！」

ゆかりの引き伸ばされた小さな胸に上下から釘がブスブスと突き刺さり絶叫するゆかりに構わず板はボルトできつく締め付けられる。ゆかりの胸は哀れにも引き伸ばされ潰された挙げ句、無数の釘で貫かれていた。そして、狂ったように号泣するゆかりの胸を挟んでいる板の中央に、またロープが結ばれた。

「よーし、慎重にゆっくりと引け」

担任の声に従いロープはゆっくりと引かれていく。ロープが引かれるにつれゆかりの胸が持ち上げられていった。ゆかりが仰け反るような姿勢になる。

「ふごおぉぉーーーーっ！！」

この時点でゆかりはもうあまりの激痛に絶叫していたが、ロープは

容赦なく引かれていく。ゆかりはつま先立ちになり必死に自分の体重を支えていたが、さらにロープは引かれる。

「ふご、ふごおぉぉぉーーーーっ！！！」

一際大きくゆかりが絶叫した時、ゆかりの足が床から浮いていた。今度は胸が抜ける事などなく、ゆかりは乳房吊りにされ、獣のように絶叫していた。

「凄い、本当に胸だけで吊られているよ」

「暴れるかと思ったけど、最初に叫んだだけで大人しく吊られてるね」

「そりゃ暴れたり動いたりしたら吊られてる胸に千切れるような激痛が走るからね。じっとして耐えているしかないだろう。乳房吊りをされた女の罪人は皆号泣しながら例外なく棒のように体を硬直させていたようだよ。激痛は勿論だけど乳房が千切れるかもという恐怖も体を硬直させる原因だろうね。ほら、よく見ておきなさい、この哀れなメス奴隷の姿を……」

担任が解説すると、生徒たちは成る程と頷いた。ゆかりは担任の言うようにまったく動かず棒のように体をピーンと一直線にして叫ぶのも止め静かに泣いていた。おそらく絶叫するだけでも胸に激痛が走るのだろう。ゆかりは、その状態のまま吊り上げられ、もう床から足が1メートル近く浮いていた。

「よし、引き上げるのはその位で良いだろう。これから三角木馬の上に降ろしていくぞ」

「ちょっと待って先生」

「どうした東條？」

「私、この状態のメス奴隷を鞭で打ちたい」

「おお、それはいいな。乳房吊りされてる状態で鞭か、いいじゃないか。どんな反応みせるか見物だな。せっかくだからクラス全員で鞭打とう」

担任の指示で二列に並んだ生徒が順番に2人ずつゆかりを鞭打つ事になった。乳房吊りされているゆかりは必死に激痛に耐えている為、そんな話がまとまっている事にまったく気が付いていなかったので、いきなり自分に体に与えられた焼けつくような痛みに絶叫してしまう。すると、その為に胸が千切れそうな痛みに襲われる。ゆかりは絶叫したいのを必死に呑み込み、体を襲う鞭の激痛にも動かないように必死に耐えていた。そんな哀れなゆかりの体にみみず腫れが無数に出来ていく。そのゆかりの様子を列の一番後ろから蜂須賀彩音が見ていた。

・・渡邊さん、こんなに酷い目にあっているのに騒いだり動いたりしないで平気でいるみたい。本当に渡邊さん、こんな事されるのが嬉しいのかな・・

彩音は乳房吊りにされ鞭で打たれても暴れたりしないゆかりを見て大いに勘違いしていた。その時、ゆかりは必死に耐え祈っていたのだ。

・・いだいぃぃ、もうだじげでぇぇ・・

乳房吊りのまま鞭打たれゆかりは、もう心の底から許される事を願っていた。変態で被虐思考のゆかりとはいえ、まだ中学生の女の子である。こんな厳しい本物の拷問を受けて耐えられる筈がなかった。ゆかりが興奮していたのは元クラスメイトの前で放尿脱糞した時迄で乳房吊りをされてからは、もう苦痛しかなかった。ゆかりがもう少し大人であれば自分の考えがいかに浅はかであったのか理解出来ただろうが、ゆかりはまだ中学生。あまりにも経験と知識が足りなかった。その浅はかさ故、ゆかりはもう哀れな末路を辿る事が確定してしまったのである。

乳房吊りされ泣きながら鞭で打たれているゆかりに最後の二人の順番がきた。列の最後に並んでいたのは彩音と佳純だった。そして、佳純が声を上げる前に彩音が男子に声をかけていた。

「男子にお願い。その奴隷の足を開いてマンコ見えるようにしてくれる」

彩音のお願いで男子生徒二人がそれぞれゆかりの足首を持って左右に広げる。ゆかりの性器が露わに晒された。

・・渡邉さん、マンコを鞭で打たれるの好きみたいだから、打ってあげるね・・

ゆかりの性器に向かって鞭を構える彩音を見て佳純が感嘆の声を上げる。

「蜂須賀もなかなかやるじゃない。私が頼もうとしてた事だよ。こんな頭のおかしい奴のマンコは徹底的に痛め付けてやらないとね」

佳純はニヤリと笑うと、ゆかりの性器に向かって鞭を構えた。

「蜂須賀、同時にいくよ」

「うん」

二人はタイミングを計って、ゆかりの性器に同時に鞭を叩き込んだ。

ビシャッ、ビシャッ！！

「ふんごおぉぉぉーーーーっ！！！！」

自分の性器を襲った激痛にゆかりは絶叫してしまった。そして、思わず男子に掴まれている足を閉じようと激しく動いてしまう。その途端今度は胸が千切れそうな激痛がゆかりを襲った。

・・もお、ゆるじでえぇぇーーーーっ・・

ゆかりはもう頭の中が真っ白で、ただただ救いを求めていた。しかし、佳純は楽しそうにまた鞭を構える。彩音も遅れないように鞭を構えていた。

「連続でいくよ、蜂須賀」

「うん、わかった」

ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ！！

「ふごおぉぉぉーーーーっ！！！！」

もう、ゆかりは自分の性器に直接打ち込まれる鞭の痛みに耐えられず、鞭の打撃から逃れようと体を捻ってしまった。その結果、釘の刺さった胸から血が吹き出す。ゆかりは哀れにも乳房吊りにされ性器を鞭で打たれて胸から血を流し号泣していた。

60、変態マゾ奴隷ゆかり3

60、変態マゾ奴隷ゆかり3

ゆかりは両腕を縛られ口も塞がれた上に乳房吊りにされ、ぶらーんと哀れに吊るされていた。それも普通の乳房吊りではない。ゆかりはほとんど胸の膨らみがない為、無理矢理胸を引き伸ばされ釘の付いた板で挟まれぺしゃんこに潰されたうえに、その板毎ロープで引き上げられ吊るされているのだ。その苦痛は通常の乳房吊りの比ではない。しかも、その状態で足を開かされ二人がかりで性器を鞭で激しく打たれているのである。

バシィィッ！バシィィッ！バシィィッ！バシィィッ！

「ふぼおぉぉぉーーっ」

ゆかりは必死に耐えようとするが、どうしても悲鳴を上げてしまう。もう、ゆかりの大陰唇はみみず腫れが無数に浮かび、小陰唇も真っ赤に腫れあがっていた。そして、ゆかりが悲鳴を上げる度に、挟まれて吊るされている胸が千切れそうな激痛に襲われる。ゆかりの頭はもう真っ白になり何も考えられなかった。興奮も快感もそんな物は何処かにいってしまった。言葉では言い尽くせない程の痛みだけがゆかりの体を駆け巡っている。

・・ゆるじでえぇぇ。はやぐ、おろぢでぐだじゃいぃぃ・・

ゆかりは痛感していた。自分で行う自虐はギリギリのところで甘さがあるが、他人から責められる拷問は当然だが容赦がない。ゆかりが、どんなに泣き叫び苦しもうがお構い無しに拷問官が満足するまで執行されるのだ。もう、ゆかりは元の生活には戻る事は出来ない。そんなに都合よく立場を変える事は出来ないのだ。ゆかりには、これから死ぬまで奴隷として生きていく道以外残されていない。まだ、奴隷になり1日も経っていないのに、ゆかりは自分の浅はかな考えを呪っていた。やはり、一人密かに自虐を楽しんでいれば良かったのだ。ゆかりは後悔したが、もう遅かった。

「よーし、東條、蜂須賀、もう良いだろう。そろそろ三角木馬に降ろすぞ」

担任の指示で、血走った目で鞭をゆかりの性器に叩き込んでいた佳純と彩音もようやく鞭を止め、次の準備に入る。

「いいか、慎重にゆっくり降ろしていけよ。このメス奴隷の割れ目に上手く三角木馬の頂点が食い込むようにするんだ。山田と佐藤、メス奴隷の足開いて位置調整しなさい」

ゆかりは少しずつ降ろされていき、性器の中心に冷たく輝く三角木馬の鋭角がくるように微妙に動かされ調整されていた。

「木馬に降ろしたらすぐに次の拷問をするから用意しておきなさい。〝五感剥奪〟と云うらしい拷問だ。人間の五感を封印すると古い書物に記載されているが、結局、視覚と聴覚を塞ぐ拷問のようだ。その書物によると人間は、見えない、聞こえない、喋れない、触れないとなると自分が死んだと勘違いして本当に死んでしまうそうだよ。まあ、五感全て遮断するのは不可能だけど、幾つかこのメス奴隷で試してみようじゃないか」

「なんか、想像すると少し怖いですね」

「ああ、人間にやったら犯罪だけどな、もう、人ではない奴隷になら問題ない」

これから、もっと酷い事をゆかりに出来るのかと思うとクラスの生徒たちはゾクゾクする程の興奮を覚えていた。

・・そうだよな、こいつはもう自分で人間辞めたんだから、何やってもＯＫなんだよな・・

クラスの生徒たちは、それぞれ他のクラスメイトの顔を見回しながら恐ろしい事を考えていた。そうしているうちに、ゆかりの割れ目にピッタリと三角木馬の鋭角が合わせられ、ゆかりは三角木馬に跨がらせられる。自分の全体重が性器の割れ目に集中し胸の痛みは少なくなったが、今度は性器を裂かれる痛みがゆかりを襲う。

「ふごおぉぉぉーーーーっ！！」

ゆかりはまた絶叫していた。以前、自作の三角木馬で自虐していたゆかりだが、この痛みはその比ではない。これが本物の拷問器具〝三角木馬〟なのだとゆかりは思いしらされた。

「そのままメス奴隷が動いて位置がずれないように押さえておけよ。ほら、手の空いてる者は急いでメス奴隷の足に錘をぶら下げろ」

生徒たちは手分けしてキビキビと動き始める。ゆかりの体を押さえる者、足枷、もも枷を装着する者、錘を運ぶ者。そして、ゆかりの足の太ももと足首に装着された枷に錘が取り付けられた。一つ５キ

ロの重さの鉄球が太ももと足首に一つずつ。左右合わせて四つの鉄球で計20キロにもなる。

「ふごおぉぉぉーーーーっ！！」

ゆかりの割れ目に三角木馬が激しく食い込み、ゆかりは天を仰いで絶叫する。ゆかりの足はピーンと伸びきり、三角木馬の位置をずらそうと必死に腰を動かそうとするゆかりだが、もう足も腰も動かす事は出来ずさらに深く三角木馬が食い込む事になる。

「よし、次だ。さっき準備した物を装着していくんだ」

〝五感剥奪〟の拷問。これから、ゆかりは視覚と聴覚を奪われる。生徒たちは脚立をゆかりの両脇に立て、そこに乗りまずゆかりの頭を押さえ付け耳の穴に粘土を詰めていく。口を塞がれているゆかりは、涙が滲む目で許して下さいと訴えるが、完全に無視され耳を塞がれてしまった。穴を塞いだ耳の上にさらに念入りにガムテープも貼られる。ゆかりは何も聞こえなくなり、恐怖と性器を襲う激痛で号泣していたが、その涙を流す目の上に黒い丈夫な布がぐるぐると巻かれていく。ゆかりは、とうとう視覚も奪われてしまった。さらに、ゆかりは鼻の部分に呼吸用の小さな穴だけが空いている革の全頭マスクを被せられ、ベルトでしっかりと固定された。もう、ゆかりは見る事も聞く事も喋る事も出来ない。無音で暗闇の中、三角木馬で性器を責められる激痛に耐えなければならないのだ。そして、更に恐ろしいのはこの拷問がいつ終わるのか分からない点だ。いつまで耐えればこの拷問から解放されるのか、まるで分からない状態で人間が耐える事が出来るのには限りがある。限界を超えた人間の精神は崩壊し発狂する。そして、二度と元に戻る事はない。しかも、視覚聴覚を奪われ時間の感覚が分からない状態では、その限界がさらに早く訪れる事になる。

「さて、これでしばらく様子を見てみよう。今、このメス奴隷は感覚を奪われているから、僕らの1分が1時間にも感じている筈だ。だから、60分程放置して様子をみてみようじゃないか」

「60分だと、このメス奴隷にしてみれば3日近く放置された感覚になる訳ですね」

「そうだ。それまで、このメス奴隷が発狂しないでいられるか楽しみだな」

担任が楽しそうに笑うのを見て彩音は恐怖で震えていた。

・・渡邉さん、痛め付けられて嬉しいのかも知れないけど、発狂させられちゃうなんてやり過ぎだよ。みんなは平気なの?さっきまでクラスメイトだった女の子だよ。真面目で大人しくて悪い事なんかしていないのに・・

彩音は辺りを見回すが誰も彼も楽しそうに笑っていた。ゆかりは黒い厚革の全頭マスクでしっかりと頭を覆われてしまっているため、もう呻き声も聞こえなくなっていた。体を全体がピーンと伸びきったような姿勢で微動だにもしない。

・・渡邉さん、まさか死んじゃったりしてないよね・・

彩音は三角木馬に恐々と近付いてみた。すると、ゆかりの体が微かに震えているのが分かった。ゆかりは必死に恐怖と性器に食い込む激痛に耐えているのだと理解した彩音は心の中で、頑張ってとゆかりにエールを送っていた。その時、ゆかりは心の中で土下座していた。もう何でもしますから許して下さい。ゆかりは泣きながら土下

座してクラスメイトたちの靴を舐めきれいにしていた。それでも、クラスメイトたちはゆかりを許さず去って行ってしまう。ゆかりは一人音の無い闇の世界で泣いていた。

・・もう許してえぇ、マンコ痛いぃぃ、裂けちゃうぅぅ、頭もおかしくなっちゃうよおぉぉ・・

ゆかりがどんなに泣き叫ぼうが、もう声は届かず、もう許される事もない。ゆかりにとって唯一の逃げ道は発狂してしまえば、こんなに苦しまずに済むという事だけだった。
ゆかりは、もう恐ろしく長い時間が経過していると感じていたが、実際にはまだ5分も経っていなかった。

・・もう、いやだあぁぁ……。もう、殺して下さいぃぃ……・・

ゆかりは狂っていきそうな自分に恐怖し、早く死にたいと願っていた。

61、メス奴隷の証

61、メス奴隷の証

目も耳も口も塞がれたゆかりは恐怖と絶望と後悔と苦痛の中、それでも耐えていた。だが、それはゆかりが人並み外れて精神的にタフだったからというわけではない。ゆかりは、もう早く殺される事を願っていた。こんなに怖くて苦しい状態から一刻も早く死んで抜け出したかったのだ。ゆかりは今、三角木馬に跨がらせられ錘も下げられてしまい性器を裂かれるような激しい激痛に苦しんでいる。これが幸いしていた。性器を処刑され絶命する妄想は、変態マゾのゆかりが自慰の際思い描いている最高のシチュエーションだ。ゆかりは自分の性器に強烈な痛みを与えられている事で、逆に正気を保っていられるのだった。しかし、それはギリギリのバランスの上で成り立っている。本当に性器が容赦なく破壊されてしまえば、中学生のゆかりがその衝撃に正気を保っている事など出来るわけがなかった。生きながら女の子の性器を徹底的に破壊される地獄の苦しみに無様に発狂して死んでいくのが目に見えている。今、ゆかりが正気でいられたのは奇跡に近いといえた。

★　★　★　★

ゆかりがまだ正気を保っている事に、６０分後に確認に来た担任は驚愕していた。ゆかりの姿は複数の生徒が監視している上にカメラ

で撮影もしているので、誰かがゆかりを助ける為に行動したという事実もない。ゆかりが自力で正気を保っているのだ。

・・ふーむ、この状況で正気を保つなど信じられないな。こうなれば責め続けて地獄を見せて発狂させてやろう・・

担任は自分がメス奴隷ごときに馬鹿にされたように感じ、ゆかりを徹底的に絶望に追い込み発狂させようと考えた。ゆかりは、もうそこまで追い込まれようとしているのだ。今までの自虐やいじめとは次元が違っていた。

担任は、生徒を集合させるとプリントしたＡ４の用紙を配布する。そこには、これからのゆかりに対する処置が印刷されていた。そう、拷問ではなく処置。ゆかりは、まずメス奴隷に相応しい体にされ、それからまた発狂してしまう迄拷問を受ける事になっていた。生徒の中には、その内容を見て青ざめている者もいる。蜂須賀彩音も、その一人だった。

・・こんな事されたら渡邉さん、本当に普通の女の子では失くなってしまう。こんな事、やっていいわけないよ。いくら何でも酷すぎる。渡邉さんがかわいそう・・

彩音は渡された用紙の内容を見て背筋が凍りついていた。そこにはもう、ゆかりを人間とは思わない酷い処置が記載されている。彩音は担任に異議を申し立てようとするが、クラスメイトの中にはこの用紙を見て楽しそうに笑っている生徒の数も多い。かたまって談笑している女子のグループは、明らかにゆかりを痛めつける事を楽しんでいそうであるし、依然として三角木馬に跨がされているゆかりの姿を克明に撮影している男子のグループも楽しそうだ。彩音と共に担任に直訴してくれそうな生徒はほんの一握りもいなく、みんな

彩音同様気の弱そうな生徒たちだった。それでも彩音は一緒に先生に抗議してくれるよう頼んでみるが、誰もみな先生が決めた事だからと言って首を縦にふってくれる人はいなかった。仕方なく彩音は一人でも担任に抗議しようと思ったが、どうしても足が動かず、そのまま俯いて立っていた。

・・渡邉さん、ごめんなさい・・

彩音は、これからのゆかりの悲惨な運命を思うと涙が出てきていた。

★
★
★
★

ゆかりは一度、三角木馬から降ろされ全頭マスクも脱がされ婦人科の診察台のような拘束台に足を開いた格好で拘束されていた。

「お願いします。もう許して下さい」

ゆかりは、準備の為、辺りを動き回っている元クラスメイトに必死にお願いしていた。何をされるか分からないが、また酷い事をされるのは明白だった。

「これから何をされるか分かった方が恐怖を覚えるかも知れないからな。一つ教えてやろう。メス奴隷に相応しく性器を飾ってやる。性器ピアシングだ。これを入れられれば誰が見てもメス奴隷と分かるからな。メス奴隷の証だ」

担任の言葉でゆかりは、ホッとした。というよりは興奮していた。先程までの拷問と違い、むしろ望むところだった。

・・ゆかりのマンコに本当にピアスをして貰えるんだ。嬉しい・・

耳にピアスもつけていないゆかりにとってピアシングは初めての経験である。その初めてのピアシングが性器だという事に、ゆかりは興奮して性器を濡らしてしまっていた。

・・どれくらい痛いのかな。マンコに穴空けるんだから痛いよね。いくつ、入れられちゃうのかな。クリトリスとビラビラには当然入れられるよね・・

先刻までの後悔はどこかに消えゆかりはピアスを入れられた自分の性器を想像し再び興奮していた。ピアスや穴を空けるニードルを用意してゆかりの性器の前に座った女子が、これから性器に穴を空けられるというのに、ぐっしょりと性器を濡らしているゆかりを見て、このメス奴隷本当に変態なんだと呆れ果てていた。

「私はアウターラビアピアシングを担当します」

どうやら、それぞれ担当を決めてゆかりの性器にピアスを入れるようだった。アウターラビアピアシングとは大陰唇に入れるピアスである。担当の女子はゆかりの大陰唇を滅菌剤入りのウェットティッシュで消毒する。そして、太く長いニードルを手に取ってゆかりの大陰唇に当てた。

「ふっ、ふっ、ふっ、ふっ、ふっ、ふっ」

ゆかりは自分の股間に当たるニードルの冷たい感触に息が荒くなってくる。

「ふふっ、ここにニードル突き通してバーベルタイプのピアスを入れてあげるね」

女子生徒は楽しそうに言い、ニードルをゆかりの大陰唇に突き刺した。

プスッ

「いだあぁぁ、いだいよおぉぉおっ」

ゆかりが絶叫するが女子生徒は構わずゆかりの大陰唇にニードルをずるずると通していく。ゆかりは目を大きく見開き大量の涙を流し、口からは舌を突き出し絶叫している。

プツッ

ニードルはゆかりの大陰唇を突き抜け、そのニードルの後に手際よくピアスが入れられる。

「はひゅーっ、はひゅーっ」

息を荒くするゆかりは、ついに切り裂く以外取り外せないメス奴隷の証、性器ピアスをとうとう一つ入れられてしまった。一見真面目そうな顔のゆかりの股間で銀色のバーベルタイプのピアスが輝いている。そして、すぐに反対側の大陰唇にもニードルが突き通されていく。

「ばびゃあぁぁぁぁっ！！」

普段、大声など出した事のないゆかりは、もう絶叫し過ぎて声も枯

れてきてしまっていた。ゆかりの左右の大陰唇にしっかりとバーベルタイプのピアスが入れられ、ゆかりはもう見た目にもメス奴隷として確実に奴隷化が進められていた。

大陰唇に二本のピアスが入れられたゆかりの性器の前の女子が入れ替わる。

「私はインナーラビアピアシング担当だから、ラッキーだわ。入れるの簡単そうだし、何個も入れられるから楽しいしね」

女子は嬉しそうにゆかりの小陰唇を摘まむと、びろーんと伸ばすが、ゆかりの性器が濡れている為指が滑り上手くニードルが当てられない。

「このメス奴隷、ド変態だわ。こんな事されてるのにマンコ、ぐしゃぐしゃに濡らしてるから掴めないよ」

何枚もウェットティッシュでゆかりの小陰唇を拭き取った女子は、ようやくゆかりの小陰唇にピアスを入れられると残酷に笑みを浮かべていた。

62、性器ピアシング

62、性器ピアシング

ゆかりは拘束され性器にピアスを入れられていく。中学生の女の子が奴隷に堕ち、性器にピアスを入れられていく様子にクラスの男女は皆興奮していた。

・・ううっ、ゆかり、本当にあんな処にピアス入れられちゃった。もう私、誰が見ても正真正銘のメス奴隷なんだ。今度、ビラビラにもピアス入れられる。当然、クリトリスにもピアス入れられるんだろうな・・

ゆかりは取り返しのつかない無様な姿にされていく自分に興奮していた。そして、以前書いた奴隷契約書を思い出していた。

・・あの契約書どうなるのかな。まだ私、日時の返事してないけど、どうしたら良いのかな・・

真面目なゆかりは、それが気になっていたが、そもそも相手の事などまるで知らないゆかりにどうする事も出来なかった。

・・あの契約書だと奴隷はピアシングだけじゃなくて、他にも色々されるみたいだから、今、私もされちゃうのかな。本当に私、もう人間じゃないんだ・・

ゆかりが考えているうちに性器に耐え難い激痛が走った。

「あぎゃあぁぁぁーーーーっ！！」

思わず大声で絶叫するゆかりに、元クラスメイトたちは顔をしかめて耳をふさいでいた。

「このメス奴隷、大人しいと思ってたら、何だよこの大声。五月蝿いから、また口を塞ごうぜ」

一人の男子生徒の提案でゆかりの口はまた塞がれる事になり、今度は何で塞ぐか協議になったが女子生徒の一人が見つけた物を自慢気に披露する。

「ほらほら、見て。これ凄いよ」

その女子生徒が手に持っていたのは、巨大な男性の陰茎を模した性具が付いたギャグだった。

「これだったらメス奴隷の喉の奥まで入れられるから静かになると思うよ。ほら、男子。頭押さえて、口開けさせて」

女子生徒の指示でゆかりは頭を押さえられ口を大きく開けられる。そして、ゆかりの口の中に性具は突き入れられていく。

「おごっ、おごっ、おごっ」

ゆかりは苦しげな声を出すが、そのまま全て喉に入れられベルトがしっかり締められ固定された。ゆかりの喉が性具の形に膨らんでいる。

「これで声出せないでしょう。マンコの穴空け始めていいよ」

ゆかりの口を塞ぐ作業が終了し、ゆかりの性器ピアシングが再開される。ゆかりの小陰唇を引き伸ばした女子生徒はニードルの先端を、ゆかりの小陰唇に当て残酷に笑うと力を込めた。

プスッ！

「ふごおぉぉっ」

小陰唇ニードルを突き通される激痛にゆかりが悲鳴を上げるが、構わずに女子生徒はズルズルと小陰唇をニードルで貫きピアスを入れていく。ゆかりが小陰唇に入れられたのは定番のリングタイプのピアスだった。が、小陰唇へのピアシングは1個では終わらない。最低でも左右で2個のピアスが入れられる事になるが、ゆかりはそれだけではなく小陰唇に6個ものピアスを入れられる事になっている。女子生徒は楽しそうにゆかりの小陰唇にニードルで穴を空けリングピアスを入れていく。しかも、この女子生徒はゆかりを痛め付ける為、わざとニードルを動かしたりしながら時間をかけて穴を空けている。ゆかりの苦痛は相当なものであるのは間違いなかった。女子生徒はゆっくりと楽しみながらゆかりの小陰唇にピアスを入れていき、ついにゆかりは小陰唇に6個ものピアスを入れられてしまった。

「ふーっ、ふーっ」

泣き続けるゆかりの股間で合計8個ものピアスが輝いているが、ゆかりの性器へのピアシングはまだ終了ではない。まだ、肝心な処が残っている。そこにもピアスを入れなければ奴隷化は終わらない。

「じゃあ始めるよ。しっかり撮影もしといてよ」

ニードルを持ってゆかりの性器の前に立った女子生徒が、カメラを持った男子生徒に命令すると、ゆかりのクリトリスを消毒し摘まんだ。

「ふぐっ」

ゆかりが小さく声を上げるが、女子生徒はクリトリスの側面にニードルの先端を当て、そこで止めゆかりの反応を窺っていた。

「ふぐ、ふぐ、ふぐ、ふぐ」

・・怖い、怖い、怖い、怖い・・

ゆかりは当然摘ままれたクリトリスにニードルが貫通されると分かっている。自分の敏感な部分に突き刺さる太いニードルの恐怖にゆかりはぶるぶると震えていたが、同時にそれを期待する自分もいた。ゆかりは震えながら性器を濡らしクリトリスと乳首を固く勃起させていた。

「刺します。ちゃんとメス奴隷の痛がる表情も撮っておいてよ」

女子生徒はニードルに力を込めていく。

プスッ！

「ふごおぉぉーーーっ！！」

クリトリスに太いニードルを刺され、ゆかりは絶叫する。ゆかりは

涙と鼻水で顔を汚し無様に泣き叫んでいるが、そのゆかりの惨めな姿は同級生の男子により克明に撮影されていた。

プツゥッ！

「ふんごおぉぉーーーっ！！」

ゆかりのクリトリスをニードルが突き抜け、リングタイプのピアスが入れられた。まだ中学生のゆかりがクリトリスにもピアスを入れられてしまった。しかし、ゆかりのクリトリスへのピアシングがこれで終わりではない。

「早く代わって、次は私の番だよ」

女の子の敏感なクリトリスにピアスを入れられたゆかりを見て興奮した女子生徒が、強引に前の女子生徒と入れ替わる。

「私はね、トライアングルピアスというのを入れてあげる。私は知らなかったけどね、クリトリスを包皮毎横から貫通するピアスだよ。包皮、クリトリス、包皮と三ヶ所貫通するからトライアングルらしいよ。これもすごく痛そうで楽しみだね」

女子生徒は嬉しそうに舌舐めずりするとニードルをゆかりの右側のクリトリス包皮に当てた。そして、そのまま力を込めていく。

プツゥッ！

「ふごっ、ふごおぉぉーーーっ！！」

またもゆかりは絶叫するが女子生徒は容赦せずゆかりのクリトリス

包皮を貫きクリトリスにニードルを突き刺していく。そして、この女子生徒もわざとゆっくり時間をかけてゆかりのクリトリスにバーベルタイプのピアスを入れた。ゆかりのクリトリスに2本のピアスが入れられたが、それでまだ終わりではなかった。

「今度は私、イザベラというピアシングだよ。トライアングルと交差するようにクリトリスの包皮毎、恥丘側からお尻に向けて縦に入れるピアスだよ。こんなにたくさんクリトリスにピアス入れてもらえて嬉しいでしょう」

ゆかりは立て続けにクリトリスにニードルを刺されピアスを入れられ、もう失神寸前だったが許される事なく、またクリトリスにニードルが刺されピアスが入れられる。

プツゥゥッ！

「あぼおぉぉーーーっ！！」

容赦なくニードルがゆかりのクリトリスに突き刺さる。

「ほら、グリグリしてあげるね」

女子生徒は楽しそうにゆかりのクリトリスに突き刺したニードルをグリグリと回しながら貫通させていく。ゆかりは全身汗でびっしょりと濡れ、哀れにも苦痛で泣き叫んでいるが、ニードルは貫通され、ピアスが入れられる。

「ほーら、イザベラの完成だよ」

ゆかりは、いきなり敏感なクリトリスに3本ものピアスを入れられ

哀れにも失神してしまっていた。

「何、呑気に寝てやがんだ。起きろよ。まだ終わってねえぞ」

男子生徒がゆかりの頬を平手でバシバシ叩き、ゆかりを覚醒させ、股間に鏡を当てゆかりに自分の性器の状態を確認させる。ゆかりの性器は大陰唇に2本、小陰唇へ6個、そして、クリトリスに3本のピアスが入れられ、これが中学生の性器とは思えない状態になっていた。ゆかりは、もう取り返しがつかない状態になった自分の性器を見て号泣していたが、興奮している自分にも気が付いていた。

「まだまだ、プリンセス・アルバーティナとフォルシェも残っているからね」

女子生徒の一人が残酷な笑みを浮かべゆかりの性器を見つめる。彩音は遠くから性器ピアシングをされているゆかりを震えながら見ていたが、本当に性器にたくさんのピアスを入れられてしまったゆかりの姿に涙を流していた。

・・こんな事されたら、もう渡邉さんは、戻って来れないよ……・・

惨めな姿にされてしまったゆかりが普通の生活に戻る事はもう望めない。彩音は、そこまでされてしまったゆかりが哀れでならなかったが、まだゆかりの奴隷化は終わりではなく続くのであった。

63、性器ピアシング2

63、性器ピアシング2

ゆかりは拘束されて性器にピアスを入れられていた。すでに大陰唇、小陰唇、クリトリスにピアスを入れられてしまっているが、ゆかりはまだ性器にピアスを入れられようとしていた。

「次は私の番だよ。フォルシェというピアスを入れてあげる。これは会陰に入れる珍しいピアスだよ。こんなの入れて貰えて嬉しいでしょう」

女子生徒は、ニードルを持って微笑むとゆかりの会陰部を、まず消毒する。アルコールの感触を自分の会陰部に感じたゆかりは、そんな処にもピアスを入れられるのかと恐怖で細かく震え泣いていた。

「あはは、震えて泣いてるよ、このメス奴隷。会陰にピアス入れられるの、そんなに嬉しいんだ。ほら、男子、このメス奴隷の惨めな姿、ちゃんと撮影しておいてよ」

女子生徒は男子に命令し、ニードルをゆかりの会陰に当てる。

ズブゥゥッ！

「ふごっ、ふごおぉぉぉーーーっ！！」

会陰にニードルを突き刺されゆかりは絶叫する。この女子生徒も、ゆっくりとゆかりの会陰をニードルで貫いていった。

プスッ！

「ふごっ、ふごっ、ふごおぉぉーーーっ！！」

ニードルがゆかりの会陰を貫通し、ここにもピアスが入れられてしまう。ゆかりの顔はもう涙と鼻水で汚れ酷い状態だったが、その顔もアップで撮影されていた。

「今度は私、待ちかねたわ。このピアスも入れられるの痛いよ。プリンセス・アルバーティナ。マンコの穴から、おしっこの穴へ貫通させるピアスだよ。さすがにこのピアス入れてる中学生の女子はいないと思うから、このメスが最初の一人かな。どう、嬉しいでしょう」

そう問われても、口を塞がれているゆかりは答える事は出来ず。それに、これだけ大量のピアスを入れられてしまったゆかりは、もう何も考える事も出来ずただ激しく泣いているだけだった。

「もっと、泣かせてあげる」

女子生徒は、性器にピアスを入れられて泣いているゆかりの姿に興奮し、このメス奴隷をもっと痛め付けたいと残酷に思っていた。

「それじゃ始めるよ」

女子生徒はゆかりの膣に指を入れぐいっと拡げるとニードルの切っ先を当てる。

「マンコの穴刺されて、どんな顔するかな楽しみ。男子、ちゃんと撮っておいてよ」

女子生徒は男子生徒に念を押すとニードルを持つ手に力を入れる。

プスゥゥッ

「ふごっ、ふごおぉぉぉーーーっ!!」

ゆかりは大きく目を見開き絶叫する。大量の涙と鼻水を流すゆかりの顔は高画質のカメラで鮮明に録画されていた。

「いいねえ、メス奴隷の顔。もっと苦しんで泣き叫べよ」

ゆかりを撮影している男子生徒も興奮していた。

プツゥゥッ!

「ふんごぉぉぉーーーーっ!!!」

絶叫するゆかりの尿道からニードルの先端が突き出ていた。

・・いだいぃぃっ、もう私のマンコぢぬぅぅーーーっ!!・・・

ゆかりは絶叫する以上に、心の中で激しく叫んでいたが、ゆかりは膣と尿道を貫通され、リングピアスを入れられてしまう。

「ふごっ、ふごっ、ふごっ、ふごっ」

号泣しているゆかりを見て女子生徒は興奮が治まらないようで、まだニードルを手に持っていた。

「ふふっ、面白いからもう1個マンコの穴に入れてあげるね」

女子生徒は、またゆかりの膣にニードルを突き刺す。よほど、ゆかりの反応とニードルを膣から尿道に突き通す感触が気に入ったのだろう。女子生徒は楽しそうにゆかりの膣から尿道へ穴を空けていく。

「ほら、もうすぐマンコの穴からおしっこの穴へもう一つ穴がつながるよ」

嬉々として言いながら女子生徒はニードルに力を込めた。

プツゥゥ

「ふががぁぁぁぁーーーーっ!!!」

・・もお、ゆるぢでぐだぢゃいぃぃーーーっ・・

口を塞がれているゆかりは心の中でまた絶叫する。しかし、ゆかりの絶叫を楽しみながら女子生徒はピアスを入れていった。

「ふごぉっ、ふごぉっ、ふごぉっ、ふごぉっ」

性器にピアスを大量に入れられて号泣するゆかりの姿は鮮明に撮影され、ネットにも投稿されてしまう。ゆかりは、メス奴隷としてこのクラスのみならず全世界にその無様な姿を晒す事になった。

ゆかりは性器にピアスを入れられ、ようやくメス奴隷化への第一歩が終了したが、ゆかりへのピアシングは性器だけではない。次にゆ

かりは休む間もなく体の別の場所にピアスを入れられていく。まず、乳首と恥丘だ。今度は女子生徒と二人の男子生徒がゆかりの恥丘と左右の乳首にピアスを入れていく。男子生徒は事前にゆかりの左右の乳首をそれぞれ摘まんだり口で吸ったりして勃起させていった。そして、勃起させられたゆかりの乳首の横にニードルを当てる。女子生徒もゆかりのつるつるの恥丘にニードルを当てている。

「私の合図で同時にいくからね」

女子生徒が二人の男子生徒に合図を送り、男子生徒は頷き手に力を込めた。

プスゥッ、プスゥッ、プスゥゥッ

「あんぎゃぁぁぁーーーーっ！！」

左右の乳首と恥丘の3ヶ所に同時にニードルを突き刺され、ゆかりはまた絶叫したが、女子生徒も男子生徒二人も笑みを浮かべながらゆかりの恥丘と乳首を貫通していく。

「あははっ、いいねえ。同時にニードル刺されて私も一緒に穴空けてあげるわ。男子、このメス奴隷の頭押さえておいてよ」

ゆかりの頭ががっしりと押さえられると、もう一人の女子生徒がゆかりの鼻を押しブタ鼻にする。そして、ゆかりの鼻の鼻柱にニードルを当て突き刺した。

「4ヶ所いっぺんに穴空けてピアス入れてあげるよ」

鼻、乳首、恥丘に同時にピアスを入れられるゆかりの無様な姿も撮

影され好評を得ていた。そして、ゆかりはピアスを入れられた後の姿も撮影される。恥丘に入れるクリスティーナにはバーベルタイプのピアスが、左右の乳首にはリングタイプのピアスが、そして鼻には牛などの家畜に入れる鼻輪のような大きなリングピアスが入れられた。この、ゆかりの姿を見れば、ゆかりは女子中学生ではなくてメス奴隷であるのは一目瞭然だった。しかし、ゆかりのメス奴隷化はピアスを入れただけでは終わらない。ゆかりの体はこれ以上もっとメス奴隷に相応しい姿に仕上げられていくのだ。もう、ゆかりは普通の生活には絶対に戻れない。メス奴隷としての生活以外生きている場所はないのだった。

ゆかりの元クラスメイトたちは、さらなるゆかりのメス奴隷化に興奮を隠せなかった。次の奴隷化は力が必要な為、男子生徒が中心になって行われる事になった。まず、ゆかりの口を塞いでいたギャグが外される。

「ぶはぁぁーーーっ」

ようやく楽に呼吸が出来るようになりゆかりは大きく息をするが、そのゆかりの口が大きく開かされたまま男子生徒に押さえつけられる。そこにペンチを持った委員長の山本和彦が笑みを浮かべてやって来る。

・・くくくっ、渡邉をこんなメス奴隷の姿に出来るなんて最高だよ。もう二度と人間に戻れないように思い切り無様な姿にしてやるよ。まずはメス奴隷が奉仕する時に不必要な歯を全て抜いてやる。もう、一生物を噛む事は出来ないな・・

和彦は、好意を持つゆかりをもう人間ではないメス奴隷に落とし徹底的に痛め付ける事を想像し興奮していた。その和彦の様子を東條佳純が笑いながら見ていた。

６４、奴隷化されるゆかり

６４、奴隷化されるゆかり

ゆかりは全身を拘束され、鼻、乳首、性器にピアスを入れられた。そして、今度は歯を全て抜かれていく事になる。和彦はペンチを持ってゆかりの前に立った。ゆかりは頭と口を押さえられ震えている。

「あわわわわわっ」

ぶるぶる震えるゆかりの前歯をペンチで挟んだ和彦は思い切りゆかりの歯を前後に動かす。

「あがあぁぁぁーーーーっ！！」

ゆかりが悲鳴を上げるが和彦は構わずゆかりの前歯を力尽くで引き抜く。そして、隣の前歯も同じ様に引き抜いた。ゆかりは頭と口を押さえられ泣きながら和彦に歯を抜かれている。

・・やるねえ、委員長。好きだった女をふられたからって、ここまで出来るなんて私、好きになりそうだよ・・

佳純は、ゆかりの歯を残酷に抜いていく和彦に好意を持ち始めた自分に驚いていたが、ゆかりに対する残酷な気持ちも芽生えてくる。

・・このメス奴隷、徹底的に痛め付けて地獄に堕としてやる。覚悟

しな・・

佳純は心の中で残酷で笑った。ゆかりはもう前歯の上下４本を抜かれてしまい口から血を流し震えながら泣いていた。

「もう許して、お願い山本くん、許して」

ゆかりは、ポロポロと涙を流し和彦に訴える。

「ちょっと、このメス奴隷の頭と口を放してくれるか」

和彦はゆかりの頭と口を押さえている男子生徒に指示を出し、泣きながら口から血を流し震えているゆかりを見つめる。

パァンッ！！

「あうううぅーーっ」

大きな音とゆかりの悲鳴が響く。和彦はゆかりの頬を平手で思い切り打っていた。

パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ

和彦はゆかりの髪の毛を掴み、ゆかりの頬に連続で平手を打ち込む。

「あぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶっ！！！」

ゆかりの頬が真っ赤に染まり、瞳からは更に大量の涙が溢れだした。

「メス奴隷の分際で何喋ってるんだよ。早く口開けろっ！」

「ううっ」

ゆかりは泣きながら、また口を開き男子生徒に頭と口を押さえつけられる。和彦はペンチを握り直し再びゆかりの歯を抜き始めた。

「あぎゃあぁぁぁーーーっ！！」

ゆかりは絶叫するが次々に歯を抜かれてしまい、ついに２８本の歯を全て抜かれてしまった。そして、ゆかりはまた口中に性具を模したギャグを喉奥まで突き入れられ口を封印されてしまう。つまり、ゆかりはこの後も絶叫するような痛みを与えられるという事だった。ゆかりは、性器と乳首にピアスを入れられ、鼻には鼻輪を入れられ、さらに全ての歯を抜歯されていた。

「うううぅぅっ」

ゆかりはもうずっと泣き続けているが、次の奴隷化への準備が進められていく。キャンプで使う焚き火台に炭が入れられ火がおこされていた。そこへ、焼き鏝が入れられ熱せられていく。ゆかりは、その様子を見て、さらに激しく泣き出していた。

「ふごぉっ、ふごぉっ、ふごぉっ、ふごぉっ」

ゆかりは激しく首を振って周囲に涙と鼻水が飛び散っていた。ゆかりもう自分の身体に焼き印が捺されるという事を確信していた。

・・怖い、怖いよお。絶対あれを私の身体に押し付けるんだ。もう絶対消せない焼き印。奴隷の証。私、何処に焼き印捺されるの・・

ここで一旦拘束が解かれたゆかりは、十字架のような拘束台の前に立たされ新たに大の字に拘束される。そして、焚き火台の中の焼き鏝が確認された。

「うーん、もう少し熱した方が良いね。このメス奴隷に二度と消せない焼き印捺すんだからね、ははは」

女子生徒の一人が残酷に笑い、念入りに焼き鏝を熱していく。そして、真っ赤に焼けた焼き鏝を取り出した。

「さあ、いくよ。まずは一文字目〝ブ〟だよ。メス奴隷の右胸に捺してあげるから」

女子生徒は楽しそうに焼き鏝を持ってゆかりの前に立つ。

「ふごっ、ふごっ、ふごっ、ふごっ」

ゆかりは近付いてくる焼き鏝の恐ろしい熱気に恐怖で号泣し無様に震えていた。

・・いやぁ、怖い。許して下さいぃぃ・・

無様に震えるゆかりに女子生徒は構わず焼き鏝を押し付けた。

ジュュュュューーーッ

「ふごおぉぉぉーーーーーっ！！！」

絶叫するゆかりに対し、女子生徒は冷静にゆかりの胸に焼き鏝を押

し付けたまま、確実にはっきりとゆかりの胸に文字が残るようにゆっくりと数を数えている。ゆかりの胸から肌が焼ける煙が上がり、肉が焼ける臭いが辺りに漂う。

「ふんごおぉぉぉーーーーっ！！！」

・・ゆるぢで、ゆるぢでぇぇぇ・・

ゆかりは絶叫しながら白目を剥いて失神してしまった。それでも女子生徒はゆかりの胸に焼き鏝を押し付けている。そして、ようやく焼き鏝が離された後には、ゆかりのつるぺたの右胸にくっきりと〝ブ〟という文字が捺されていた。

ゆかりはすぐに頬を打たれ覚醒させられる。女子生徒はもう次の焼き鏝を持っていた。

「次は左胸に二文字目いくよ。〝ス〟だからね。良かったね、メス奴隷」

女子生徒は楽しそうにゆかりに焼き鏝を近付ける。

「ふぅふぅふぅふぅふぅぅぅーーっ」

恐怖に歪むゆかりの鼻息が荒くなっていった次の瞬間。

「ふんごおぉぉぉーーーーーっ！！！」

再びゆかりの凄まじい絶叫が響き渡る。

ジュュュューーーッ！！

ゆかりの肉が焼ける音と、煙が辺りに拡がっていく。女子生徒はまたゆかりの胸に焼き鏝を押し付けたまま離そうとしない。そして、焼き鏝が胸から放された時には、ゆかりはまた白目を剥いて失神していた。ゆかりの胸には〝ブス〟と二度と消せない焼き印が捺されていた。

「何、寝てんだよ。まだ、焼き印は終わってないよ。私の番がきてないからね」

佳純がゆかりの頬をパンパンと叩き覚醒させる。そして、目を開いたゆかりに鏡で自分の胸に捺された焼き印を確認させる。

「ほら、はっきりと綺麗に捺されているね。メス奴隷にぴったりだよ。ふふっ、もっと無様にしてあげるから」

自分の胸に〝ブス〟と捺された焼き印を見て、二度と消せない焼き印を捺され号泣しているゆかりに女子生徒が再び焼き鏝を近付ける。今度はゆかりの胸の下、腹部に焼き印を捺すようだった。

「メス奴隷のお腹にとっても恥ずかしい焼き印捺してあげる。〝ブス〟だけでも恥ずかしいけどね」

女子生徒は楽しそうにゆかりの腹部に焼き鏝を押し付ける。

ジュュュュューーーッ！

「ふんごおぉぉぉーーーーっ！！！」

今度はゆかりの腹部が焼かれ、ゆかりは涙を流して絶叫する。

「今度は三文字だからね。さあ二文字目いくよ」

女子生徒はゆかりの腹部に捺した一文字目の焼き印の下に二文字目の焼き印を捺していく。泣き叫ぶゆかりは腹部に三文字の焼き印を捺されていた。

最終話、ゆかり完全奴隷化（前書き）

「ゆかりの記録」最終話です。
ゆかりの体に焼き印が捺されていきます。それは、ゆかりが自慰の際、妄想していた憧れの世界ではあるのですが……。

最終話、ゆかり完全奴隷化

最終話、ゆかり完全奴隷化

女子生徒は鏡をゆかりの前に置き、ゆかりの腹部に捺した焼き印を確認させる。ゆかりの腹部には〝マンコ〟という三文字がはっきりと捺されていた。

「あははっ、恥ずかしい。〝マンコ〟だって。このメス奴隷、一生マンコ奴隷として使用されるんだね。いい気味だわ」

女子生徒は泣いているゆかりの姿を見て爆笑していた。そこへ、佳純がやっと自分の順番がまわってきたと残酷な笑みを浮かべてゆかりの前に立った。

「男子、早くこのメス奴隷縛り直してよ。相当暴れるだろうから、絶対動けないようにきつく縛っておいて」

残酷な笑みを浮かべる佳純の指示でゆかりはまた性器にピアスを入れられた時のようにM字に開脚され縛り付けられる。しかも、僅かでも体を動かせないようにギリギリと完全に固定されてしまった。ゆかりのピアスを大量に入れられた性器が露に晒されている。ゆかりは、厳重に固定され性器を晒された事で、次に焼き印を捺されるのは自分の性器だと気付き発狂したように泣き叫んでいた。

・・お願いしますぅ。マンコに焼き印は許して下さいぃぃぃ・・

ゆかりはあの真っ赤に焼けた焼き鏝が、自分の敏感な性器に押し付けられるかと思うと体の震えが止まらなかった。

「あはっ、このメス奴隷、狂ったみたいに泣いてるけどマンコに焼き印捺されると思ってるのかしら。残念だけど少し違うね」

佳純は膣鏡を手に取ると、ゆかりの膣に挿入し大きく最大まで開口させる。ゆかりの膣の最奥に、ゆかりのピンク色をした可愛い子宮頸部がコロッと見えている。

「ふごぉぉっ、ふごぉぉっ、ふごぉぉーーっ！」

まさかと大きく目を見開いていたゆかりだったが、自分の体の何処に焼き印が捺されるのか気付いたゆかりは首を激しく左右に振り、ポロポロと涙を流し塞がれた口で必死に訴えている。しかし、ゆかりの体は厳重に拘束されている上に、両側から二人の男子生徒も押さえつけている為、逃れる事はもちろん、動く事も一切出来なかった。そして、ゆかりの頭も後ろから男子生徒に押さえつけられ、ゆかりが焼き印を捺される自分の姿を見ているように目も閉じられないよう指で押さえられる。ゆかりは自分に迫ってくる焼き鏝を強制的に見せられていた。これから、ゆかりは子宮に焼き印を捺される。女にとって大切な処に二度と消せない焼き印を捺されてしまうのだ。

「ふぅふぅふぅふぅふぅぅぅーーっ」

ゆかりの鼻息が荒くなっていく。佳純はもうゆかりの膣内に焼き鏝を入れていた。ゆかりは焼き鏝の発する凄まじい熱気に半狂乱になっていた。胸や腹部でも凄まじい苦痛であったのに、今度は体の中を焼かれてしまう。

・・そんなとこゆるぢでぐだぢゃいぃぃ。ゆかり、ぢんじゃうよぉぉーーっ！！・・

しかし、佳純は容赦なくゆかりの子宮に焼き鏝を押し付けてしまった。

ジュワァァーーーッ！！

「おっびゃあぁぁぁーーーーっ！！！！」

子宮に焼き印を捺され、ゆかりはまた白目を剥いて気絶してしまった。佳純はゆかりの子宮に焼き鏝を押し付けたまま、笑いながら数を数えている。

「あははっ、どう？子宮に焼き印捺されるなんて最高だろうね、変態のメス奴隷」

そう言いながらゆかりが失神している事に気付いた佳純は、ゆかりを押さえている男子にゆかりを起こすよう指示する。男子は遠慮なくゆかりの頬を何度も叩き、ゆかりを目覚めさせた。

「ふごおぉぉぉーーーっ！！」

目覚めた途端、また絶叫するゆかりの姿に佳純は焼き鏝を押し付けながら大笑いしていた。

「いい様だね。マンコの中にまで焼き印捺されて嬉しいだろう、ド変態のメス奴隷。ちょっと男子、こいつの口、話せるようにしてくれる」

ようやくゆかりの口が解放されると、ゆかりは大声で泣き出していたが、平手で頬をパンパンと打たれる。

「誰に許可得て泣いてんだよ。東條さんにお礼言えよ、このブスのマンコ奴隷」

ゆかりは髪の毛を掴まれ佳純の方に顔を向けられる。

「ううっ、ありがとうございます」

ゆかりは泣きながらお礼を言うが、また頬を叩かれる。

「ほんとに奴隷だけあって馬鹿だな。誰に何をしてもらったか言わないとお礼にならないだろう」

ゆかりは、また男子に頬を打たれていた。

「と、東條様、ゆかりのマンコの中に焼き印を捺して頂いてありがとうございます……」

ゆかりが泣きながら佳純にお礼を言うと、周りのクラスメイトが爆笑する。

「こいつ、ホントに頭おかしいわ。マンコに焼き印捺されてお礼言ってるよ」

「変な女と思ってたけど、ここまで変態だとは救いようがないね」

「多分こいつ今まで一人で変態的な事やってたんだよ。それを今度

は俺たちにやって貰おうと思ってんだ。どうしようもない変態メス奴隷だ」

「ふーん、多分そうだろうね。この変態メス奴隷、ネクラで何考えているか分からないから、そういう変な事をやってそうだよ。ほら、今までやってた事みんな言いなさいよ」

女子生徒はスマートフォンでゆかりを撮影しながら、早く告白しろと急かす。ゆかりは顔も性器も晒されたまま告白を迫られていた。もう、ピアスを入れられ鼻輪もされ歯も抜かれ焼き印も捺されたゆかりは、メス奴隷以外の何者でもなかった。ここまでされてしまい人間としての尊厳も人権もないゆかりは今さら恥ずかしがる事ではないのだが、それを自分の口で語る事に抵抗があった。

「お願いします。許して下さい……」

ゆかりはスマートフォンを構える女子生徒にお願いするが、女子生徒は激昂する。

「ふーん、奴隷の分際で逆らうんだ。それなら喋れないようにしてあげようか」

女子生徒はゆかりの口から舌を摘まみ出すと、そこに針をズブッと突き刺した。針はゆかりの舌を貫通し下に突き抜けている。

「あぎゃぁぁーーーっ」

「早く喋らないともう一本刺すよ」

女子生徒は躊躇いもせずにゆかりの舌にまた針を突き刺した。

ブスッ！

「いだいいいっ、しゃべります、しゃべりますぅぅ」

ゆかりは舌に二本も針を突き通され震えていた。

「私は学校の帰り、セーラー服を着たまま歩きながらおしっこを漏らして興奮していました。マンコや太ももが濡れていくのが気持ち良かったです（1話参照）」

ゆかりは今まで絶対に秘密にしていた自虐自慰を告白させられていた。それを聞いた元クラスメイトたちは唖然とした表情で改めて目の前のゆかりを見つめている。

「他には、浣腸してから近所の公園に行って、裸になってうんち漏らしながらオナニーしました。マンコにロープが食い込んでうんちだらけになって気持ち良かったです（2話参照）」

全員が信じられないという顔をしている。

「なに、こいつ。絶対、頭おかしいよね」

「こんなのと同じクラスだったなんて気持ち悪いわ」

佳純がゆかりを化け物でも見るような目付きで見て震えながら言う。

他のクラスメイトも、同感というように頷いていた。

「他にもあるだろう。全部言えよ、この変態のメス奴隷」

「はい、乳首とマンコのビラビラに錘をぶら下げて公園まで散歩していました。涙が出る程痛くて気持ち良かったです（3話参照）それから、自分のおしっこで浣腸して、そのうんちを子宮に注入した事もあります。子宮の中にうんちが流れ込んでくる感覚がたまらなく気持ち良かったです（9話参照）」

「子宮の中にうんち入れた……。嘘だよね……。信じられないよ」

「気持ち悪過ぎる。こいつ、やっぱり人間じゃないよ」

ゆかりの告白に誰もが口を開けたまま固まっていた。

「下着のクロッチに針を埋め込んで、それを穿いてマンコを針で突き刺して公園でオナニーもしました。マンコが痛くて気持ち良かったです（11話参照）それから、マンコの穴に火を点けた蝋燭を入れて子宮を火炙りにしました。とても気持ち良かったです（13話参照）それから……」

「もういいわ、このドブスでド変態のメス奴隷っ。こっちの頭までおかしくなりそうだよ」

佳純が、これ以上聞くに堪えないと大声でゆかりを止める。いつの間にか元クラスメイトたちはゆかりの周りから数歩後退りしていた。全員がゆかりを気持ち悪い物でも見るような目付きで眺めていた。ゆかりに同情的だった彩音でさえ、ゆかりの告白には両手で口を押さえて退いてしまっていた。もう、ゆかりには何もなかった。本当に人間のゆかりは消滅したのだった。

★　★　★　★

ゆかりの体の奴隷化は一通り終了した。性器ピアス、鼻輪、抜歯、焼き印。ゆかりは、もう二度と普通の暮らしには戻れない体にされてしまった。これから、ゆかりは毎日調教や拷問を受けていく事になる。それは、毎日自虐しながら自慰を繰り返していたゆかり自身が望んだ結果ではあるが、それが現実となった今、ゆかりの行く末が幸せなものになるとはとても思えなかった。

了

最終話、ゆかり完全奴隷化（後書き）

最後までお読み下さりありがとうございます。
遅筆な上に、こんな酷いお話にお付き合い頂いた皆様には感謝の言葉しかありません。
皆様の感想頂けると嬉しいです。
よろしくお願い致します。

「ゆかりの記録」はこれで完結ですが、「檻の中の幸福」ゆかりの章で、その後のゆかりを書いています。こんな変態のゆかりですから、その最後は悲惨なものになっていますが、宜しければ読んでみて下さい。

それでは、ありがとうございました。

番外編　小学生のゆかり（前書き）

小学生の頃のゆかりのお話しです。本編でも少し触れられていますが、ゆかりはこの頃から異常でした。

番外編　小学生のゆかり

番外編　小学生のゆかり

ゆかりは放課後の小学校の校庭にいた。もう、校庭にも数人の児童がいるだけで、多くの生徒は帰路に就いていた。ゆかりは一人鉄棒に跨がっていた。こうしていると、気持ちが良かった。ゆかりは自分の股間の割れ目を潰すと気持ちがいいと低学年の頃から学習していて、その行為に夢中になっていた。もちろん、ゆかりはようやく自慰という言葉の意味を覚えたばかりで、それが自慰行為であると知って納得していた。

・・女の子なら、みんな同じ事をするみたいだから、おかしくないよね。女の子はオマンコ潰すと気持ちいいんだから・・

ゆかりは、そう思って自分を納得させていたが、幼いながらゆかりはこの行為が親や大人に知られてはいけない行為だと思っていた。自分一人で密かに楽しむ行為だと考えていたが、この頃からゆかりは自分の快感の為には労を惜しまない女子だった。そして、その為に同級生の男子を利用しようと考えていた。そのターゲットに選ばれたのは沼田陽一という乱暴者と、伊藤博という大人しい男子だった。

放課後、鉄棒に跨がってグリグリと性器を押し付け気持ち良くなっていたゆかりは、さっそく陽一と博を見かける。陽一は博に自分のランドセルや荷物を持たせ、後ろから蹴りを入れて歩かせている。

それを見たゆかりは大声で叫んだ。

「あーっ沼田くん、いけないんだ。先生に言いつけるよっ」

ゆかりに言われてビクッとした陽一は、コノヤローとゆかりに向かって走って来ると、鉄棒に跨がっているゆかりの両足にぶら下がった。

「痛いいいいっ！」

ゆかりが悲鳴を上げるが、陽一は自分の体を揺らして更に体重をかける。ゆかりの割れ目に鉄棒が激しく食い込んでいた。

「痛い、痛い、痛いいいいっ！」

ゆかりが大声で泣き出していると、何事かと先生が飛び出して来て、それを見た陽一は一目散に逃げ出していた。

「渡邉さん、大丈夫？今のは沼田くんね。まったく乱暴で困るわ」

ゆかりは、泣いていたが自分の性器を襲った今までにない刺激に内心激しく興奮していた。自分の股間から脳天まで直接届いたような快感に、小学生でありながらゆかりは性器を濡らしてしまっていた。

・・オマンコ潰されて気持ちいい。もっともっとオマンコ痛くされたいよ・・

明らかにゆかりは、この頃から異常であったのである。ゆかりは親に建ててもらった自宅の庭の離れの子供部屋に籠っていた。そして、ノートに自分の願望を元に短い話を書いていた。そして、それを読

みかえしては興奮していたのである。それはこんなお話しだった。

★　★　★　★

――ゆかりオマンコノコギリ――

「きさまは死刑だ。すぐに準備しろ」

男の人の声にゆかりは裸にされると手を縛られ足にロープをかけられ逆さまに天井から吊るされた。そして、そのままギリギリと足を開かされオマンコが良く見えるようにされる。ゆかりはポロポロと涙を流して泣いているが、ゆかりのオマンコの割れ目にのこぎりの刃が当てられる。

「はじめろっ」

男の人の声にのこぎりの刃は勢いよく引かれる。

「ぎゃぁぁぁーーーー」

オマンコをノコギリで引かれ、ゆかりは大声を上げるが、ゆかりの悲鳴に関係なくのこぎりの刃は規則正しく引かれ、ゆかりのオマンコから血が噴き出した。

「イタイヨォ、ダレカ、タスケテヨォォーーー」

ゆかりは泣き叫ぶがのこぎりはどんどんゆかりのオマンコを切っていく。そして、ゆかりはオマンコを切られていき大量に血を流し死

んでしまった。

――ゆかりオマンコ串刺し――

「よし、ゆかりはオマンコ串刺しの刑にする」

さっそくゆかりは裸にされ縛りあげられた。そして大きく開いたゆかりの足の間オマンコの中心の穴に木の杭が当てられる。

「くくくっ。はじめろ」

男の楽しそうな声で大きなトンカチが振り下ろされ木の杭を思い切り叩いた。

「ぎゃぁぁーーーー」

ゆかりはオマンコの穴が裂け血を噴き出し悲鳴を上げる。

「どんどん、つづけろ」

男は楽しそうに言う。トンカチはまた木の杭に振り下ろされる。

「いたいよぉー。だれか助けてよぉーーーー」

ゆかりの絶叫が響き渡る。そしてゆかりは一メートル以上あった木の杭を根元までオマンコの穴に打ち込まれ死んでしまった。

――ゆかりオマンコ爆破――

「ゆかりのオマンコを爆破する。」

男はゆかりにそう言うと服を脱がせ裸にする。そして、ゆかりのオマンコの穴に火薬を詰めはじめた。

「くくくっけつの穴にも火薬を入れてやろう」

男はゆかりのけつの穴にも火薬を入れると導火線をつないだ。そして、オマンコの方にも導火線をつなぐ。

「よし、火をつけろ。」

ゆかりのオマンコとけつの穴から垂れる導火線に火がつけられる。

「ひぃっ、だれか助けてぇっー」

ゆかりは泣きながら大声をあげる。続いて・・

ボン

大きな音がしてゆかりのオマンコが爆破される。ゆかりはオマンコを爆破され死んでしまった。

★
★
★
★

ゆかりは自分の性器が破壊される話ばかりを興奮しながら書いていた。ゆかりは小学生の頃から異常な性癖を持っていたのである。そ

して、ゆかりは陽一から自分がいじめのターゲットにされる事に成功する。翌日の放課後、ゆかりは陽一に校庭にある体育の用具室に連れ込まれていた。

「お前のせいで先生に怒られたから、そのお返しをさせてもらうからな」

陽一は昨日ゆかりにした事で、職員室に呼ばれ大目玉をくっていたのである。陽一は、それをゆかりのせいにしてリンチしようとしていた。陽一はゆかりをマットの上に仰向けに寝かせると、ゆかりの両脚を抱えた。そして、ゆかりのスカートが捲れて丸見えになっている股間に自分の足を当てる。

「ほーら、電気あんましてやるからな」

「やだっやめてっ」

ゆかりは一応嫌がってみせるが内心は早くやって欲しくてたまらなかった。陽一はそんな事も知らずに足を小刻みに動かし、ゆかりの股間に電気あんまする。

「あわわわわわわわわわっ」

性器を電気あんまされ、声を上げていたゆかりだったが、そのあまりの気持ちよさに失神しそうであった。

「もっと強くやってやる」

陽一はゆかりの股間にガシガシと足をぶつける。それはもう電気あんまというより蹴りみたいなものだった。ゆかりは両脚を抱えられ

たまま、性器に蹴りを入れられていた。ゆかりは泣き出していたが、陽一はさらに激しくゆかりの股間に蹴りを叩き込む。

「痛いっ、オマンコ痛いよおぉぉ」

泣き叫ぶゆかりの股間から尿が溢れだしていた。ゆかりは性器に蹴りを入れられ失禁してしまったのだ。白い下着から尿が止まらずに溢れている。

「うわっ、きったねえっ」

陽一はゆかりから手を放すと、縄跳びでゆかりの両手を縛り、両脚を大きく開かせたまま足首も縄跳びでポールに縛り閉じられないように固定した。さらにゆかりの口に雑巾を押し込む。

「また大声で先生を呼ばれたら怒られるからな」

陽一は開脚した状態で固定されたゆかりの股間を見つめる。

「ブスのオマンコにお仕置きしてやるよ」

陽一はゆかりの性器に思い切り蹴りを入れた。それも足の甲ではなく爪先だ。

バスゥッ！

「ふぐうぅぅっ」

ゆかりが塞がれた口で悲鳴を上げ、涙がポロポロ零れるが、陽一はかまわずゆかりの性器に蹴りを入れ続けた。

バスゥッ、バスゥッ、バスゥッ、バスゥッ、バスゥッ、バスゥッ！！！

「ふごおぉぉぉぉーーーーっ！！」

連続で性器に蹴りを入れられ絶叫するゆかりの股間、白い下着が赤く染まってきていた。激しい蹴りでゆかりの性器から出血しているのだ。ゆかりは白眼を剥いて失神してしまっていた。陽一は股間を赤く染め無様に失神しているゆかりを見下ろし小馬鹿にした笑いを浮かべる。そして、ゆかりを叩いて気付かせると髪の毛を掴んでさらに頬をパンパンと打った。

「いいか、先生に告げ口したらもっと酷い事するからな」

ゆかりの両手だけほどいた陽一はさっさと用具室から出ていった。一人残されたゆかりは、さっそく先生に言いつけないと、と思い口許に笑みを浮かべていた。

番外編　小学生のゆかり（後書き）

まだ小学生の頃から自分の性器を痛め付ける事に執着するゆかり。
その後、ゆかりが奴隷に堕ちていくのは当然の帰結といえた。

番外編　小学生のゆかり2

番外編　小学生のゆかり2

ゆかりは用具室のマットの上で泣いていた。性器を激しく蹴られ出血している。

「痛い、痛い、痛い、痛い」

ゆかりは声を上げて泣いていた。すると、跳び箱の陰から伊藤博が現れた。

「渡邉さん、大丈夫。ご免なさい、昨日も僕を助けてくれたのにお礼も言わないで」

博は申し訳無さそうにゆかりに頭を下げるが、ゆかりは博が跳び箱の裏に隠れている事を知っていた。多分、陽一に連れ込まれたゆかりが心配で見に来たのだろう。ゆかりにしてみれば、自分の無様な姿を第三者に見られる事でさらに興奮していたのだ。気掛かりだったのは、途中で博が先生に報告に行ってしまう事だったが、気の弱い博の事だから動く事はないだろうと思っていたが、案の定博は陽一が立ち去るまで跳び箱の裏でじっとしていた。

「痛い、痛いよ。血が出てるの。伊藤くん、見てくれる」

ゆかりは泣きながら博にお願いすると、博も責任を感じているので、

分かったと頷いてゆかりの脚を開いて股間を確認する。

「パンツが真っ赤になってるよ。早くお医者に行った方がいいよ」

「嫌だ、お医者さん嫌いなの。パンツ脱ぐから伊藤くん、見てくれる」

ゆかりはマットに寝たまま腰を上げ下着を降ろし脱いでしまった。そして、大きく脚を開く。ゆかりの割れ目が博の前に晒され、博は生まれて初めて見る女子の性器に目が釘付けになっていた。

「渡邉さん、マ、マンコが腫れて赤くなって血が出てるよ　薬つけて包帯巻かないと」

「薬なんてないから伊藤くん舐めてよ。私のマンコじゃいや?」

博は首を振ると、ゆかりの股間に顔を埋め、ゆかりの割れ目を舐め始めた。ゆかりは博が自分の性器を舐めやすいように腰に手を当てて持ち上げている。

「伊藤くん、マンコの中も舐めて」

博は、ゆかりの割れ目をくぱぁと開けると、割れ目の中もきれいに舐めていく。程なくしてゆかりの性器はきれいになっていた。

「ありがとう、伊藤くん。まだ、血が出てる?」

「うん、まだマンコの穴から少し出てるよ」

「じゃあ、私の脱いだパンツ、マンコの穴に押し込んでくれる。そ

うすれば、止まると思うから」

「分かった」

博は返事をすると、ゆかりの綿の白い下着を手に取り、ゆかりの膣に押し込んでいく。

「全部はとても入らないよ」

「大丈夫。無理矢理全部入れて、マンコの穴は拡がるから」

「うん」

博は力任せにゆかりの膣に、女児用の綿の大きな下着を全て押し込んでしまった。

「凄い、本当に全部入るんだ」

「女の子のマンコの穴はけっこう拡がるんだよ。先生には私が言うから伊藤くんは黙ってた方がいいよ。また沼田くんに何かされるといけないから」

「でも、そうしたらまた渡邉さんが……」

「私は大丈夫。あんなのに何されても負けないから。だから、伊藤くんは黙っててね」

「うん、分かった。渡邉さん、気を付けてね」

ゆかりは用具室から何事もないように外に出て帰路についた。これ

で、また先生に告げ口すれば陽一が仕返ししてくるだろうと思い、股間がウズウズとしていた。

★　★　★　★

案の定、ゆかりは放課後用具室に連れ込まれていた。

「今度、告げ口したら酷い目に合わせると言ったよな」

今日は陽一の他に、陽一の取り巻きの一人、宮田道雄が一緒にいた。

「女の子一人いじめるのに、二人じゃないと出来ないんだ」

ゆかりは強がってみせるが、陽一は鼻で笑う。

「別に、俺一人でもいいけど二人の方が効率いいからな。それに、道雄も女のマンコが見たいって言うからさ」

「へへっ、ブスの渡邉でも女だからマンコはあるだろう。じっくり見させてもらうからな」

陽一に続き、道雄が笑いながら言う。そして、二人がかりでゆかりに飛びかかると、ゆかりの服を脱がしていき、忽ちゆかりは全裸にされてしまった。

「よし、痛い目にあいたくなかったら、そのまま手を上げて足を開くんだ」

陽一がゆかりに命令するが、ゆかりは足を閉じ、股間を両手で抑えたまま動かない。そこで、陽一が道雄に命令する。道雄はゆかりの背後に回り髪の毛を掴むと顔を上げさせた。そのゆかりの頬へ陽一の平手が飛んでくる。

パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ

「あうっ、あうっ、あうっ、あうっ、あうっ」

連続の激しいビンタで、ゆかりの頬は真っ赤に染まっていた。それだけでは陽一の気が済まないのか、今度は道雄にゆかりの両腕を抑えさせ、ゆかりの腹にパンチを打ち込む。

ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ

「おごっ、おごっ、おごっ、おごっ、おごぅぅ」

ゆかりは涙と鼻水で顔を汚し泣き出していた。

「もう、許して下さいぃぃ」

ゆかりは泣きながら許しを乞うが、陽一は早く両手を上げて股を開けと命令する。ゆかりは、泣きながら陽一の命令に従い言われたままの姿勢をとる。ゆかりのほとんど膨らみのない胸、寸胴の体型、つるつるの恥丘の下にはゆかりの割れ目が見えている。道雄は喜んでゆかりのその姿を撮影していた。ゆかりは、全身、胸や股間のアップ、尻の割れ目も開かれて肛門まで撮影されてしまった。

「道雄、もう撮影はいいか?。それじゃ準備しようか」

陽一の言葉で道雄は頭上に上げたゆかりの両手を縛りつける。そして、天井から滑車を通して垂らしてあるロープに結びつけてしまった。ゆかりは、これから何をされるのか分からず震えていた。

「よし、口塞ぐの忘れるなよ。こいつ、すぐ大声で泣き叫ぶから」

道雄は楽しくてたまらないというように、ゆかりの脱がせた下着をゆかりの口に詰めていく。大きな綿の下着を全てゆかりの口の中に押し込んだ道雄は、さらにゆかりの口の上にガムテープを何重にも貼っていく。ゆかりは口も塞がれてしまい恐怖で大きく震えていた。

「さあ、始めるぞ。渡邉の処刑執行だ」

陽一と道雄の二人は滑車に通したロープを引き、ゆかりの体を持ち上げていく。ゆかりは縛られた両手をロープで引かれ空中に体が浮き、ぶらぶらと揺れていた。二人はロープを縛り、ゆかりの体が宙に浮いたままにすると、工事等で使う大きなカラーコーンを持ってきてゆかりの下に置く。ゆかりは二人が何をしているのか分からず不安な顔をしている。

「道雄、ロープ緩めて少しずつ降ろしてくれ」

陽一の命令でゆかりを吊っているロープが緩められる。ゆかりの体が少しずつ下がってきた。

「よし、そこで一旦ストップだ」

二人はそこでゆかりの足を大きく広げ、コーンバーを間に入れて縛り付けゆかりが足を閉じられないようにする。そして、開脚した状態で吊るされているゆかりを再び降ろし始める。

「よーし、いいぞ、いいぞ」

どうやら、陽一はカラーコーンでゆかりの性器を串刺しにするつもりのようだった。陽一はカラーコーンの位置を微調整して、上手くゆかりの膣にコーンの先端が入るように調整している。そして、ゆかりの膣にカラーコーンの汚れた先端が当たる。

「んっ、んっ、んっ、んっ」

ゆかりが塞がれた口で必死に訴えているが陽一は聞く耳持たなかった。

「いいぞ、道雄。手を離せ」

道雄がロープを持つ手を離し、ゆかりの体がガクンと落ちる。

「んごおぉぉぉーーーーーーっ！！！」

ゆかりの膣にカラーコーンが激しく突き刺さり、ゆかりの膣から血が噴き出した。

「うわっ、渡邉、マンコから血が出てるけど大丈夫なの」

道雄がゆかりの性器の惨状を見て驚いているが、陽一は平気な顔だった。

「女はマンコから血を出すのが普通らしいからな。心配する事ないよ。それより、処刑なんだからもっと渡邉を痛め付けないとな。足に錘付けてもっと串刺しにしてやろうぜ」

陽一の提案で、隅に重ねてあった土嚢を持ってくると、ゆかりの両足にぶら下げてしまう。ゆかりの膣にさらに激しくカラーコーンが突き刺さりゆかりの膣がビリビリと裂けていく。

「んごおぉぉーーーーーっ！！！！！」

ビシャァァーーーッ

ゆかりは膣を裂かれる激痛に失禁していた。ゆかりの血塗れの股間から湯気を立てて尿が勢いよく迸る。

「うわっ面白いね。マンコ処刑されて渡邉、おしっこ漏らしてるよ。もっと錘付けたらどうなるかな」

それじゃ、やってみようと二人はまたゆかりの足に土嚢を追加する。ゆかりの膣にさらにカラーコーンがメリメリとめり込んでいく。

「んごおぉぉーーーーーっ！！！！！」

ブリブリブリィィ

ゆかりはぼとぼとと大便も漏らしていた。辺りに悪臭が漂う。

「うわっ、くっせぇ。渡邉、女なのにウンコも漏らしやがった」

二人は大便を漏らしているゆかりから思わず飛び退いていた。ゆかりは幼い膣を容赦なく裂かれ、白目を剥いて哀れにも失神していた。しかし、それでも陽一たちの、ゆかりに対する仕打ちは終わらなかった。ゆかりは失神してもなお錘を追加され性器を痛め付けられて

いた。それは、見廻りの教師が気が付くまで続けられた。

番外編　卒業前の体験

番外編　卒業前の体験

ゆかりは、小学校の講堂で「蛍の光」を歌っていた。もうすぐ、卒業式。その予行演習が行われていた。

・・もうすぐ、私も中学生。中学生になったら胸も大きくなって、マンコも大人になるのかな・・

ゆかりは期待していた。子供用の月刊誌「○○時代」「○○コース」で見る中学生は、ゆかりにとっては大人に見えた。

・・大人になれば、今よりもっと気持ちいい事出来るんだよね・・

当然まだ自分の運命を知らないゆかりは無邪気に早く中学生になりたいと考えていた。中学生になった自分がどんな運命を辿るかも知らずに……。それは、これから僅か2年後のことだった。

★　★　★　★

「おい、渡邉。中学は学区が違うから別々だな」

沼田陽一から声をかけられゆかりは振り向いた。陽一はゆかりにも

うすぐお別れだから付き合えよと、ゆかりに今までゆかりを痛め付けた時に撮影した画像や動画を見せる。カラーコーンで性器を串刺しにされ号泣しているゆかりの姿が鮮明に写っている。さらに動画では、性器を串刺しにされたゆかりが大便も漏らす様子が、ぶりぶりと漏らす音までリアルに記録されていた。

「別に付き合わなくてもいいけど、この画像や動画、誰かに見せちゃうかも知れないな」

明らかに強迫である。変態で異常な性格であるゆかりは、むしろそれを大勢の人に見てもらって蔑んでもらいたいと思っていたが、その気持ちは隠し嫌々付き合うという雰囲気で陽一についていった。陽一の家は本人が言ったように学区が違う為、ゆかりの家とは随分離れている。ゆかりの家は住宅街の中にあるが、陽一の家は住宅街から離れた山の中にあった。陽一は、そのさらに裏の山に登っていく。しばらく登ると畑が広がり小さな小屋が一軒建っていた。

「ここはうちの畑で、この小屋もうちの小屋だ。今日は親は親戚の家に行っていないから、ここでゆっくり渡邉に付き合ってもらうぞ。先生も誰も来ないからな。夜までまだたっぷり時間があるし、好きな事やらせてもらうからな」

「ひっ……」

ゆかりが小さく悲鳴を上げ逃げる素振りをすると、陽一は素早く用意していた天井からのロープをゆかりの首に回し縛りあげてしまう。ゆかりはロープをほどこうとするが固く結ばれていてゆかりの力ではほどく事が出来なかった。ゆかりは首輪で繋がれたペットのように小屋の中につながれてしまった。

「ちゃんと俺の言うことを聞けよ、渡邉」

そう言うと陽一はゆかりの頬を平手で打った。

パンッ、パンッ、パンッ、パンッ

「ううっ」

ゆかりの目に涙が滲むが、それを見た陽一はさらに激しくゆかりの頬を打った。

パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ!!

「ううぅうっ」

ゆかりの瞳からポロポロと涙が零れる。

「よおし、それじゃ服を脱げよ。全部脱いで素っ裸になるんだぞ。言うことをきかないと、もっと打つからな」

陽一の言葉で、ゆかりは泣きながら服を脱いでいく。最後に下着も脱いで全裸になった。

「両手を後ろにまわしな」

ゆかりが命令に従うと陽一はゆかりの両腕をガムテープでぐるぐると貼りつけ動かないように固定する。

「次は脚を大きく開きな」

ゆかりは、きたっと思っていた。やはり、自分の性器に何かするつもりなんだ。今度はどんな事をされるんだろう。ゆかりは期待で一杯だったが、そんな素振りは微塵も見せず脚を大きく開いていた。すると陽一はゆかりの足首にロープを縛り、ゆかりが脚を閉じられないように固定する。

・・やっぱり、私のマンコに何かするんだ。どんな事をするんだろう。また串刺しにしてくれるのかな・・

ゆかりの本心は、また性器を串刺しにして欲しかったが、それを口にするのは、まだゆかりには恥ずかしかった。ゆかりが色々妄想を膨らませているうちに、陽一は自分も裸になっていた。そして、ゆかりの口に自分が穿いていたパンツを無理矢理押し込み、その上にガムテープを貼りゆかりの口を塞いでしまった。ゆかりは自分の口が塞がれた事で、おそらく自分が大きな悲鳴を上げる程の事がされるのだろうと考え興奮していた。

・・おしっこの味がするパンツで口ふさがれちゃったよ。わたし、何されるんだろう・・

ゆかりが、ドキドキしていると陽一は手に花火を持っている。そして、花火に点火する。シューッと花火の先から火花が噴き出した。

・・綺麗……。でも、なんで花火なんか点けるんだろう・・

ゆかりが疑問に思っていると陽一がゆかりに近付いて来て、手に持った花火の火花をゆかりの胸に浴びせる。

「ふぐうぅぅぅーーっ！」

ゆかりは至近距離から火花を胸にあてられて悲鳴を上げていた。

・・熱いよぉぉ・・

ゆかりは心の中でも絶叫していたが不満だった。

・・どうして、マンコにしてくれないの。マンコ、焼いてくれなきゃ詰まらないよぅ・・

ゆかりは胸に激しく火花を浴び号泣しながらも、早くその火花を自分の割れ目にも浴びせて下さいと願っていた。そして、出来れば割れ目を開いてその中に浴びせてくれれば、もっと嬉しいと心の中で祈っていた。ゆかりの変態で異常なマゾメスの性癖は、この頃から顕著に現れていたのである。ゆかりが、あのような運命を辿ったのは必然であったのだ。ゆかりの頭の中には自分の性器を痛めつける事しかなかった。幼いゆかりはいつか本当に自分の性器が破壊される事を夢見ていた。ただ、それが実際に現実となった時、ゆかりは性器を破壊されるその地獄の激痛に後悔と絶望の中、文字通り本当に発狂して無様に壊れていく事になるのだが、それはまた後日の話になる。

★　★　★　★

しばらくゆかりの体に花火の火花を浴びせて楽しんでいた陽一は、次の段階に進む。まず、ゆかりの目にもガムテープを貼りつけ塞いでしまった。そして、ゆかりの周りにぐるっとゆかりに先が向くように花火を立てていった。目を塞がれたゆかりには分からないが、ゆかりは周囲を数十本の花火に囲まれていた。

「じゃあ、渡邉。いくぞ」

陽一はニヤニヤしながら花火に点火していった。

「ふごっ、ふごおぉぉーーーーっ！！」

ゆかりは前後左右から花火の火花を大量に浴びせられ絶叫していた。

・・熱いぃぃ、熱いよぉぉ、もお許してぇぇ、焼くならマンコにしてぇぇ・・

ゆかりの全身を針で刺されたようなチクチクとした鋭い痛みが襲う。陽一は、目も口も塞がれ動けないように拘束され、全身に火花を浴び号泣しているゆかりを見て興奮していた。陽一の性器が硬く勃起して、陽一はまだ皮の被った自分の性器が性器を握りしめ、しごき始めていた。誰に教えられた訳でもないが陽一は自慰していたのである。陽一は自分の下腹部が気持ちよくなってくるにつれ残虐な気持ちが沸き起こってきていた。

・・渡邉のマンコ、もっと痛めつけたい・・

ゆかりの性器を痛めつける。この点で両者の気持ちは一致していた。陽一は燃え尽きた花火を、水を入れた大きなバケツに入れると次の準備にかかった。ゆかりの開いた足の下に噴き出し花火の〇ラゴンを置く。そして、興奮しながら点火した。

シュゥゥーーッ！

「ふごおぉぉーーーーっ！！」

花火から激しく火花が噴き出し、ゆかりの性器を焼いている。性器を焼かれたゆかりは絶叫し、陽一はそれを見て激しく性器をしごいていた。

「あっ……」

ドピュッ、ドピュッ

陽一の初めての精通だった。陽一は女子の性器を痛め付けて自慰すると気持ちいいと学習してしまった。陽一の運命もこれで決まってしまったのだ。彼は成人した後も性犯罪を繰り返し、何人もの小学生の女子を中心に性器を破壊し地獄に堕としていく、そして最後には女に復讐され自分の性器を破壊され命を失う事になるのだった。

「渡邉、お前みたいな女子の汚いマンコなんか壊してもいいよな」

陽一は今度は噴き出し花火ではなく、打ち上げ花火をゆかりの股の下に固定する。

「五連発の打ち上げ花火だ。いくぞっ」

陽一は花火に点火する。

ポンッ、ポンッ、ポンッ、ポンッ、ポンッ！

「ふごっ、ふごっ、ふごっ、ふごっ、ふごおぉぉーーーーっ！！」

打ち上げ花火の直撃を性器に受けてゆかりは絶叫していたが、これで終わりではなかった。もう興奮して歯止めの効かない陽一は今度

は１５連発の打ち上げ花火を手に取る。そして、それをゆかりの性器の下に置くのではなく。なんと、ゆかりの膣に花火の筒先を押し込んでいた。さらに、ゆかりの膣から花火が抜けないようにしっかりと固定する。

ハァハァハァハァハァ

陽一の股間ではまた性器が硬く勃起していた。陽一は、この上なく楽しそうな顔で花火の筒の横から出ている導火線に点火する。

ジジジジッ

導火線が燃えていく。そして……。

ボシュッ、ボシュッ、ボシュッ、ボシュッ、ボシュッ、ボシュッ、ボシュッ、ボシュッ、ボシュッ、ボシュッ、ボシュッ、ボシュッ、ボシュッ、ボシュッ、ボシュッ、ボシュッ、ボシュッ、ボシュッ、ボシュッ、ボシュッ！！

「ふんぼおぉぉぉぉーーーーっ！！！」

シャァァァーーッ

１５連発の花火がゆかりの膣内に打ち出され、ゆかりは自分の性器を襲う凄まじい激痛に失禁しながら失神していた。陽一がゆかりの膣から花火の筒を抜いてみると、血がどろりと流れ出してきた。陽一は、打ち上げ花火を性器に打ち込まれ血を流すゆかりを見ながら自慰をしてまた射精していた。

・・最高だ。こんなに興奮した事ないぞ・・

陽一はまだ大量に用意してある花火を見て笑みをもらす。時間もまだたっぷりあった。先生に邪魔される恐れもない。ゆかりは許される事なく、まだまだ痛め付けられる事になる。

「今度は30連発の打ち上げ花火をマンコに入れてやるよ。最大火力を味わわせてやる。あと、ケツの穴にも5連発入れてやるからな」

陽一は気を失っているゆかりに告げると、ゆかりの血を流す膣に30連発の花火を挿入し、さらに肛門にも打ち上げ花火を挿入した。そして、抜けないように厳重に固定する。

「さあ、2本同時にいくぞ」

ゆかりの膣と肛門に突き刺された花火に点火した陽一は、また自分の性器をしごき始めた。

ボシュッ、ボシュッ！！

ポスッ、ポスッ、ポスッ、ポスッ、ポスッ！

「んんんんんごおぉぉぉぉーーーーっ！！！！」

ゆかりは絶叫していた。もう自分の性器がどうなっているのか感覚がなくなり分からなかった。ただ自分の性器が大変な事態になっているとは理解できた。

・・ううっ、マンコ痛いぃぃ。私のマンコ、何されているの・・

ゆかりは無様に小便を漏らし号泣しているが、ゆかりが許される事は当分ない。今度は陽一はゆかりの膣に2本の打ち上げ花火を無理矢理入れようとしていた。おそらく、その次には3本の花火を入れようとするだろう。それは、置いてある花火が全てなくなるまで続けられるのだ。ゆかりが、この時発狂もせず絶命しなかったのは奇跡といえるかも知れなかった。

番外編　春休みの事件（前書き）

番外編の最終話となります。
変態で異常なゆかりが、自ら事件に巻き込まれていきます。

番外編　春休みの事件

番外編　春休みの事件

無事、小学校を卒業した卒業したゆかりは自宅の離れの部屋に籠っていた。そして、部屋に吊るしてあるセーラー服をうっとりと眺めながら、これから始まる中学校生活に期待していた。ゆかりにとって中学生は格段に大人に見える。自分も大人の仲間入りをすれば、もっと色々な情報も集めて今まで出来なかった事も出来るのではと期待していた。
しかし、その反面、小学校に通学していた時にはゆかりの性器を痛め付けて楽しんでいた沼田陽一からは卒業後、一切連絡もなく寂しく思っていた。

・・別に友達でも恋人でもないし、当たり前だよね・・

ゆかりは、それでも自分の顔がもっと可愛いくてスタイルも良ければ、今でも陽一に折檻して貰えたのかなと考え、姿見に映る自分の姿に嫌悪感を抱いていた。

・・これからは自分でマンコ痛め付けないとね。もう大人なんだから・・

ゆかりは鏡に映る自分の姿を見ながら考えていた。そして、思い付く。

・・パンティのマンコが当たるところに針を付けたらどうだろう。
そうすれば、いつもマンコに針が刺さるし、穿いてる間ずっとマンコを痛め付けられるよ・・

ゆかりは、この素晴らしい思い付きに興奮していた。さっそく、お気に入りの白い綿の女児用下着を用意して製作に取りかかる。といっても、それほど大層な物ではない。下着のクロッチの中心に画鋲を縦に並べ、その上から綿の布を被せ縫い付けただけで、割りと短時間で完成していた。ゆかりは、その完成した針付き下着を見て激しく興奮していた。下着の股間中心に一列に飛び出している画鋲の針。それが自分の性器に突き刺さる様子を想像し、ゆかりは太ももの内側まで濡らしてしまっていた。しかし、結局ゆかりはこの時はまだ針付きの下着を穿く事が出来ず、しまい込んでおく事になる。この下着を実際に穿くのは中学生になり、さらにゆかりの変態異常性が膨らんできてからの事になるのだった。

★
★
★
★

ゆかりがコンビニで買い物をしていると、他のお客様の話し声が耳に入ってきた。聞き耳を立てていたわけではないが、その女性客の声が大きく自然に耳に入ってきたのだ。

「ねえ、あの三丁目の公園ヤバイよ。変質者が出るらしいよ」

ゆかりは、ドキッとしていた。ゆかりが野外自慰をしている公園だ。誰かに目撃されて噂になっているのかと思い、ドキドキしていた。もしそれを盗撮でもされてネットに拡散されてしまったらと想像すると、ゆかりは興奮して下着を濡らしていた。しかし、女性客の話

は違う事だった。

「コート着た男が近づいて来て、いきなりコートの前を開くんだって……」

「ああ、よくあるパターンね。下には何も着ていないんでしょう。自分のちんぽ見せて喜ぶ変態でしょ」

「確かにそうなんだけど、少し違うのよ」

「何が違うの？実は女だったとか……」

「ううん、男なんだけどさ。その男、自分のちんぽに紐巻き付けて錘ぶら下げているらしいよ」

「なにそれ、変態にもほどがあるね。でもそれ見てみたいよ。ちんぽに錘って興味あるぅ」

「ああ、ダメダメ。その男、見せるだけならいいけど、女縛ってマンコの中に〝かんしゃく玉〟詰めこんで爆発させるんだって。マンコ、大火傷した人もいるらしいよ」

「マンコ爆破って、ヤバすぎるじゃない」

「だから、すぐ逃げた方がいいよ。春になるとおかしな奴が沸いてくるからね」

ゆかりは自分の事ではないと思ったが、違う意味でドキドキしてきていた。

・・ええっ、マンコ爆破って凄い。私、マンコ爆破してもらいたい・
・

女性客二人の会話にゆかりは興奮していた。そして、コンビニから外に出ると、その足で三丁目の公園に向かった。しかし、昼下がりののどかな公園は親子連れやカップルで賑わっており、こんな時間に噂の変態男が現れるとはとても思えなかった。

・・そうだよね。あの女の人たち、時間言っていなかったけど、こんな人の多い昼間に現れる訳ないよね。暗くなってからで間違いないよ・・

ゆかりは考える。ゆかりがこの公園で野外自慰をする時間は深夜である。その時には公園には当然ながら誰もいない。という事はそこまで遅い時間ではないという事だった。この公園は住宅街へのショートカットで、夜帰宅するのに公園内を歩く人もいる。おそらく、そんな人を狙っているのだろう。ゆかりは一旦自宅に戻ると、夜に備える事にした。

・・あまり早い時間ではないよね、人も多いから。電車の終電あたりかな・・

ゆかりは時刻表で電車の終電の時間を調べてみると、それは深夜になってしまう。

・・ちょっと違うなぁ。私がオナニーしてる時、人なんかいないし・
・

ゆかりはさらに考え、仕事をしている人が都心で仕事を終えた時間から電車に乗る時間を計算して、このぐらいの時間に駅に着くので

はと想像する。

・・夜、１０時くらいが一番狙い目かも・・

ゆかりは、その時間に公園に行ってみるつもりだった。そして、うまくその男に遭遇出来れば……。

・・私もマンコ爆破してもらえるかな・・

想像しているうちにゆかりは我慢出来なくなり手が股間にむかい自慰を始めていた。右手でクリトリスを激しく擦り、摘まみ、潰す。左手の指は膣と肛門に突き刺さっていた。

「おっ、おっ、おっ、おっ」

ゆかりは小さな声を上げていた。

「おっ、おっ、おっ、おぉぉぉーーっ」

ゆかりは声を上げて絶頂に達していた。その姿はとても１２才にはみえず、ゆかりは性の部分だけは異常に成長が進んでいると言わざるを得なかった。

９時前にゆかりはもう出かける準備を始めていた。１０時近辺と予想はしていたが、余裕をみて早めに公園に向かうつもりだった。そして、ゆかりは普段着ではなくセーラー服を着ていた。さすがに普段着では子供にみえてしまって敬遠されると思い、春から着るセーラー服を一足早く着用したのだった。姿見に自分の姿を映したゆかりは満足した。普段着の子供っぽさがなくなり大人になったようにみえる。ゆかりは鏡の中の自分に向かって頷くと、適当にテキスト

を詰めた鞄を持ち、ソッと離れから外に出た。

★　★　★　★

公園に着いたゆかりは、塾で帰りが遅くなった女子学生を装い公園内を歩いていたが、出会う人は皆普通のサラリーマンのようであった。ゆかりは、あまり同じ所を歩き回っていたら不審に思われると感じ、公園内の林の中に入り、そこから公園を観察しようとしたが、冷えてきた事もあり尿意を催してきていた。

・・トイレは遠いし、ここでいいよね・・

ゆかりは下着を下ろしスカートを捲りしゃがみこむと、シャーッと放尿していた。そして、ティッシュを取ろうと鞄に手を伸ばし顔を上げた時、目の前にコートを着た男がいた。

「ひっ……」

単純にゆかりは驚いて小さな声を上げたが、男はまさに電光石火の動きでゆかりの目と口にガムテープを貼り付け、両腕を縛り上げていた。そして、自分の着ているコートの前を開く。そこには、コンビニで噂されていたように自分の性器を紐で縛り錘をぶら下げている男の姿があった。ゆかりは噂の変態男の性器を見たかったが、目を塞がれて見る事が出来ず残念に思いながら、これで性器が爆破してもらえると期待していた。

「こんなところで、おしっこしたら駄目だろう」

男はゆかりの髪を乱暴に掴むと平手でゆかりの頬を打ち据えた。

パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ

連続でビンタされゆかりはガムテープで塞がれた目から涙が滲んできていたが、心の中ではこれから性器を爆破される興奮で濡らしてしまっていた。男の方も目と口を塞がれ涙ぐんでいるゆかりの顔に興奮したのか、なんと錘をぶら下げている男性器が硬く勃起し天を衝いていた。

「言うことをきけば解放してやる。パンティを脱いで立って股を大きく開くんだ」

男の命令にゆかりは従い、下着を脱ぐと立ち上がり大きく足を開いた。男はゆかりの下着を奪い取ると、その匂いを嗅いで満足そうに笑い、そのままゆかりの下着をジップロックに入れ持っていたバックにしまった。そして、そのバックから〝かんしゃく玉〟を取り出す。

「動くなよ、面白い事をしてやる」

男は笑いながらゆかりの膣に〝かんしゃく玉〟を一粒ずつ入れていった。

「くくくっ、なにされているのか分からないだろうが、一杯まで詰めてやるからな」

男はゆかりが、自分が今何をされて、この後どうなるのか分からないだろうと残酷に微笑んでいたが、ゆかりは知っている。今、自分が何をされ、そしてどうなるか。

・・私のマンコの穴に〝かんしゃく玉〟詰めてる。これから私のマンコ、爆破されるんだ・・

ゆかりは期待で胸が高鳴っていた。〝かんしゃく玉〟というのは子供の玩具で、アスファルトなどの固い地面に叩きつけて爆発させて遊ぶ。その仕組みは単純で、火薬と小石を紙で包んだ1センチ程の丸い玉を固い物にぶつけると、中の小石同士がぶつかり火花が飛び火薬に引火して爆発するという代物だ。ゆかりはネットで調べてその詳細を知っていた。男はそれを大量にゆかりの膣に詰めて、金槌で叩きショックを与えて爆発させるつもりなのだろう。ゆかりは、早く爆破して欲しいと待ちきれない思いだった。性器を爆破される。今まで想像した事もなかったが、それを実際に経験出来るのだ。

・・どれくらい痛いのかな。マンコの穴、壊れちゃうのかな・・

ゆかりは男に膣に〝かんしゃく玉〟を詰められながら妄想する。男はゆかりの膣に20粒の〝かんしゃく玉〟を詰めると、ゆかりの性器にガムテープを貼り付け〝かんしゃく玉〟が膣から落ちないように封印した。そして、バックから金槌を取り出す。

「覚悟しろよ、ブスッ」

男は思い切りゆかりの股間に金槌を叩き込んだ。〝かんしゃく玉〟が、ゆかりの膣内で一気に破裂する。

バアァーーンッ、バンッ、バンッ、バンッ、バンッ、バンッ、バンッ！！

「あっぼおぉぉぉぉーーーーーっ！！」

ゆかりの膣内で次々に〝かんしゃく玉〟が連鎖して爆発していく。ゆかりは、股間から脳天に突き抜ける激痛に、地面に転がり両脚をばたつかせ、のたうち回っていた。ゆかりの膣からは煙と血が噴き出していたが、それだけではなく女の粘液も噴き出していた。それを見た男は意味ありげに笑う。

「まだ若いくせに相当変態のようだな。マンコ爆破されて嬉しいのか。おい、返事しろよ、ブス」

男はゆかりの口からガムテープを剥がし、頬をパンパンとビンタしながら言う。

「ううっ、はい嬉しいです。マンコ爆破して頂きありがとうございました」

泣きながら答えるゆかりに男は満足したように笑い、地面に転がるゆかりの足首をそれぞれ木の根本に縛り付け、１８０度近く足を開いたまま閉じられないように固定する。

「くくく、それなら特別に、もう一回マンコ爆破してやるよ」

いつもは一度だけの爆破だが、男はさらにゆかりの性器を爆破する事に決めたようだった。大開脚されたゆかりの膣にまた〝かんしゃく玉〟を詰めていく。そんなに詰められたらゆかりの膣が壊れてしまうのではと思われる程の数を無理矢理押さえながら詰めていき、一回目の５倍の１００個もの〝かんしゃく玉〟をゆかりの膣に詰めガムテープで塞いでいた。

「くくく、特大の爆発だ。ショックで死んじゃうかもな。何か言い

残す事はあるのか」

「はい、それなら、もし生きていたら、もう一回マンコを爆破して下さい」

男は、ぎょっとしたようにゆかりを見る。そして、わかったと答える。

「こうなったら徹底的にやってやるよ」

男はゆかりの股間に金槌を叩き込んだ。１００連発の爆発が起こる。

バアァーーンッ、バンッ、バンッ、バンッ、バンッ、バンッ、バンッ、バンッ、バンッ、バンッ、バンッ、バンッ、バンッ、バンッ、バンッ、バンッ、バンッ、バンッ、バンッ、バンッ！！！！！

「あっびゃあぁぁぁぁぁーーーーっ、あばばばばばばばばばばばぁぁっ！！！！！」

ゆかりの膣から血と白煙が噴き出し、ゆかりの絶叫が響き渡る。ゆかりは、がっくりと動かなくなっていたが、男が平手でゆかりの頬を打つと、ゆかりはうーんと声を上げた。

「……もう一回、もう一回マンコ爆破してくれますよね。約束ですよね、マンコ爆破して下さい」

うわ言のように呟くゆかりのその異常性に、男は正直寒気がしてきた。性器を爆破され性器から血を流しながら、もっと性器を爆破して下さいと懇願するゆかりに男は恐怖も感じていた。勃起していた男の性器もすっかり萎れてしまっている。逆にゆかりの乳首とクリ

トリスは硬く勃起していた。男は、再びゆかりの膣に〝かんしゃく玉〟を詰めようとしたが手が震えて上手く詰める事が出来なかった。そうしているうちに、ゆかりの絶叫を聞きつけ警察に通報した人がいて、駆けつけた警官に男は逮捕されていた。

番外編　春休みの事件（後書き）

お読み下さりありがとうございます。
ゆかりの小学生時代も、これで一旦終了とさせて頂きます。
また、何か良いアイデアが思い付きましたら書いていきますので、
たまに見に来て頂けると嬉しいです。
ありがとうございました。

番外編　蜂須賀彩音の覚醒（前書き）

ゆかりの姿が消えてからも彩音は、ゆかりの身を案じていた。
その彩音の耳に、ゆかりの現状が飛び込んでくる。

番外編　蜂須賀彩音の覚醒

番外編　蜂須賀彩音の覚醒

ゆかりが彩音の学校の教室から姿を消してから、すでに半月が経過していた。何時までもメス奴隷になったゆかりを教室で飼育している訳にはいかないという尤もな理由でゆかりはとある施設のオークションに出品されてしまった。そして、ゆかりがオークションで落札され、購入されていった事は学校側からの通達で知っていたが、今ゆかりがどこで何をされているのか彩音の周りでは知っている者はいなかったが、風紀委員室の前を通った時に、中で話す声が彩音に聞こえてきた。その話し声に〝渡邊ゆかり〟というワードが聞こえた為、彩音は身を隠し聞き耳をたてていた。

「あの〝渡邊ゆかり〟さんの購入者が決まった事は御存知でしょう」

委員長の理津子の声だ。彩音は耳を澄まして聞き逃さないように注意していた。

「学校側には誰が落札したのかは連絡がなかったようですが、私の家に落札した本人から連絡がありました。驚きましたよ。渡邉さんは一番酷い人間に落札されてしまったようです」

「一番酷い……」

「ええ、麗華さんは覚えていますか。あの豪徳寺葉月ですよ」

「えっ、あの明らかに頭のネジがとんでる女ですよね」

「そうです。おそらく渡邉さんは近いうちに処刑されてしまうでしょうね。性器を壊して処刑するのが何より楽しみな女ですから……。まあ、渡邉さんも自分でメス奴隷になったのですから、それも本望かも知れませんがね……」

「あの女の事ですから、理津子さんの言う通りすぐに処刑してしまうのでしょうね。姫野順子と柏木結衣の二人もすぐに処刑してしまいましたからね。あの真面目で大人しい渡邉さんがマンコ壊されて泣きながら死んでいくのでしょう。少し可哀想ですね」

・・しょ、処刑……・・

彩音は息が荒くなってきた。

・・処刑って、渡邉さん、処刑されちゃうの・・

彩音は恐ろしさで膝がガクガク震えてきていた。そして、廊下の壁に足をぶつけてしまう。大きな音はしなかったが、彩音は気付かれないように急いで委員会室の前から離れていた。

・・渡邉さん、マンコ壊されちゃって、処刑されちゃうの。どんなに痛くて苦しいんだろう。処刑されるって渡邉さん、本当に怖くてたまらないよね・・

ゆかりの哀れに絶命する姿が頭に浮かんできて離れない彩音は、なんとなく歩いているうちにゆかりの家の前に来ていた。ゆかりの家はごく一般の家庭のような郊外の戸建ての住宅だった。密集してい

る都市部とは違い多少の庭があり、その小さな庭にはゆかりが過ごしていた、これも小さな離れが建っている。ゆかりの両親は、ゆかりを提供した見返りで莫大な報酬を受け取っており、今は都心のタワーマンションに移り住んでいた。もう、誰もいないゆかりの家はシーンと静まりかえり、少し不気味な感じも漂っていたが、彩音が離れのドアに手をかけてみると、それは鍵がかかっておらず錆び付いた音を立てて簡単に開いてしまった。彩音が中を覗いてみると、そこはおそらくゆかりがいた頃のまま誰も手をつけずそのまま残されているようであった。ゆかりの両親は、変態で自分から奴隷になった娘の部屋などもう触るのも嫌で、貰った報酬でさっさと憧れのタワーマンションに引っ越して行ったのだろうと思われる。彩音は部屋の中に入ってみた。そこには、ゆかりがまだいるような気配を感じた。机の上のパソコンの電源を入れてみるが、パスワードが分からず起動する事は出来なかったが、机の引き出しには常に使用していたからなのか鍵がかかっておらず、スッと引き出す事が出来た。引き出しの中には、錘付きのピンチが大量に入っていた。

・・渡邉さん、これを自分の体に着けて外を歩いていたんだ・・

ゆかりの告白を思い出した彩音はピンチを一つ取り出して指を挟んでみた。

・・痛いっ・・

ゆかりがバネを強化しているそれは思ったより強力に彩音の指を潰す。そして、錘も見た目より重く感じた。

・・渡邉さん、これを乳首とマンコに着けて公園までお散歩していたって言ってたよね・・

衣服を着て外からは見えないとはいえ、こんな物を着けて外を歩く。彩音にはとても理解出来ない世界だった。彩音は、ゆかりがどんな気持ちで錘を付けて外を歩いていたのだろうと考える。そして、ゆかりの作成した錘付きのピンチを眺めているうちに、自分でも試してみたくなってきていた。

・・どうしたんだろう、私。これでマンコ挟んでみたい・・

彩音は辺りを見渡す。当然だが人の気配はない。彩音は下着を脱いで、足を開いた。

・・渡邉さん、これでビラビラやクリトリス挟んだって言ってたよね・・

彩音は、自分の小陰唇にピンチを一つ挟んでみた。

「あうぅぅっ！」

思わず声を上げてしまい彩音は、慌てて口を押さえて辺りを見るが勿論人影などなかった。

・・凄い痛いよ。これを渡邉さん、大量につけたって言ってたよね・・

彩音は涙ぐみながら、自分の小陰唇にピンチを装着していった。そして、結局片側４個、計８個のピンチを取り付けていた。

・・あとはクリトリス。でも、小陰唇でこんなにじんじんと痛いのに、本当にクリトリスにつけて大丈夫なの？・・

彩音は躊躇していたが、せっかくここまでやったのだからクリトリスにもつけなければ意味がないと考え、自分のクリトリスに触って愕然とする。

・・えっ、どうして?・・

彩音のクリトリスは、すでに硬く勃起していた。彩音は、クリトリスを摘まむとピンチを当て、ゆっくりと挟んでいく。

「いだあぁぁーーっ!」

彩音は悲鳴を上げ涙を流していたが、性器が熱くなっている感覚があった。彩音は、ゆかりの部屋の隅に置いてある姿見の前にそろそろと歩いていく。そして、足を開いてスカートを捲り、姿見に映る自分の姿を眺めていた。鏡の中で彩音の性器から、ぶら下がるいくつもの錘が鈍い光を放っている。彩音の小陰唇は、びろーんと無様に伸びていた。その時、彩音は自慰の時感じている性器が熱くなる感覚を確かに感じていた。

・・私、マンコに錘ぶら下げて濡らしているの?私も渡邉さんと同じ……?・・

彩音は信じたくなかったが、このまま外を歩きたい衝動に駆られていた。

・・これで外を歩いたら渡邉さんの気持ちもわかるかな・・

彩音は、自分の脱いだ下着を学生カバンに入れ、ドアを開けるとそっと外に足を出した。そして、道路に出ると、ゆかりが行ったという公園に向かって歩き出した。しかし、ゆっくり歩かないと錘同士

がぶつかるカチカチという音が響き、それに錘が揺れると小陰唇とクリトリスに激痛がはしった。

「ううっ……」

彩音は、スカートの上から軽く下腹部を押さえゆっくりと歩いていた。

「あれっ、蜂須賀さん、どうしたの？蜂須賀さんのお家は1丁目の方だよね」

彩音が声の主を見ると同級生の青柳広子だった。犬を連れて散歩していたようだ。

「あ、うん。私もふらふらと散歩していたんだ」

彩音は、なんとか広子をやり過ごそうとするが、広子は偶然会った同級生に、ちょうど良い話し相手が出来たと話しかけてくる。

「ああ、そういう時あるよね。別に意味ないけど外を歩きたくなる時って」

「そうだよね」

彩音は、広子に話を合わせるが早く行って欲しいと願っていた。もう、性器の痛みがかなり激しくなってきて、歩き方がおかしくなっている自覚があった。このまま一緒に歩いていては広子に気付かれてしまう恐れがある。その時、他の犬を見かけた広子の飼い犬が急に走り出した。広子も犬の首輪につけたロープを握ったまま走っていく。

「ごめーん、蜂須賀さん。また学校でねぇ」

広子の姿が小さくなっていくと彩音はホッとため息をついた。

・・ワンちゃん、グッジョブ・・

彩音は、まだ明るい時間にこのまま公園まで行くのは危険かなと考えた。また誰に会うかわからない。彩音は、引き返そうとまたゆっくりと歩き出した。その時、彩音は自分の太ももが濡れている感覚があった。

・・えっ、こんなに私、マンコ濡らしちゃったの・・

彩音は驚いて確認してみるが、それは性器を濡らしたのではなく。彩音は本人も気付かないうちに尿を漏らしてしまっていたのだ。性器の痛みが凄くて彩音は歩きながら尿を漏らしていたのだ。幸い彩音は、太ももの付け根近くまであるサイハイソックスを穿いていたため、尿は地面に垂れる事なくソックスに吸収されていた。そのおかげで広子にも気付かれる事はなかった。

彩音は、なんとかゆかりの部屋まで帰り着き性器につけていたピンチを外していく。

「ううぅっ」

ピンチを外す時に、急に血流が回復するために、また激痛が彩音の性器を襲った。

「はっ、はっ、はっ、はっ」

しばらく放心状態だった彩音は、自分でも気付かないうちに股間に手を伸ばし自慰を始めていた。

「おっ、おっ、おっ、おっ」

何時もより激しく興奮した彩音は、絶頂に達し頭の中が真っ白になっていた。そして、明日もまたやろうと心に決めていた。

番外編　蜂須賀彩音の覚醒（後書き）

ゆかりの部屋を訪れた彩音は、まるで取り憑かれたようにゆかりと同じ行為をする。
そして、彩音の中にもゆかりと同じ被虐願望が芽生えてしまっていた。

番外編　蜂須賀彩音の決意（前書き）

ゆかりと友達になりたかったという思いから、もうゆかりは居ない家に通い詰める彩音。
そんな彩音の心は、だんだんとゆかりと同じ危険な思いに侵食されていく……。

番外編　蜂須賀彩音の決意

番外編　蜂須賀彩音の決意

彩音は放課後、またゆかりの家まで来ていた。ゆかりが過ごしていた離れに上がり込み、ゆかりの部屋の中を物色していた。明らかに不法侵入であるが、彩音にはその意識はなく、ただゆかりの事が知りたい、その一心だけだった。

彩音は、ゆかりがクラスのみんなの前で告白させられた時の事を思い出す。あの時、ゆかりは色々な恥ずかしい事を告白させられていた。それを思い出し、ゆかりの部屋にはまだ錘付きのピンチ以外にも、ゆかりが使用していた道具や器具があるはずだと思い物色していたのである。そして、箪笥の中に大量のスクール水着を発見する。どれも、旧タイプあるいはスカートタイプと呼ばれるスクール水着だった。

・・渡邉さん、スクール水着が好きなのかな・・

もちろん彩音もスクール水着は持っているが、こんなワンピースタイプではなく、セパレート式のスパッツタイプだ。このワンピースタイプのスクール水着より、遥かに肌の露出が少ない。ゆかりも授業の時は彩音やみんなと同じ水着を着ていた筈だった。

・・こんなにあるけど、どこで着ていたんだろう・・

彩音は不思議に思ったが、考えても分からないので再び探索に戻っ

た。そして、ゆかりの日記を発見してしまった。それは、机の上の本立てに普通に挟んであったので、初めは気付かなかったのだが一冊だけ背表紙に何も書かれていない本を見つけ、なんだろうと見てみたら、ゆかりの日記だったのである。

・・読んじゃいけないよね・・

当然、ゆかりのプライバシーが書かれていると思うので彩音は読んではいけないと頭ではわかっているのだが、ゆかりを知りたいと思う気持ちには勝てなかった。それにゆかりの日記には鍵がかけられていなかった事もあり、彩音はついページを捲っていた。そこには、ゆかりの日々の自慰や自虐の様子がこと細かく記載されていた。それに、文字だけではなく写真が添えられているページもある。その写真の一枚には、全裸で黒いサイハイソックスだけを穿き両手を上げ足を大きく開いているゆかりが写っている。ゆかりは頭に何か被っているようだが、それが下着だと気がついて彩音は顔を赤らめていた。そして、その写真のゆかりは例の錘付きピンチを乳首と股間に大量にぶら下げている。下着に隠されてよくは見えないが、そんな状態なのにゆかりは微笑んでいるように見えた。

次の写真では、同じ状態のゆかりが放尿しているような姿が写っていた。ゆかりの大きく開いた股間から透明な液体が噴き出している。それは、ゆかりの太ももも濡らし、サイハイソックスも濡らしてしまっているのが確認出来た。そして、下着の隙間から見えているゆかりの眼はどこか虚ろに見える。

・・渡邉さん、マンコ痛め付けてイッちゃったのかな。この写真、渡邉さんが潮吹いちゃった瞬間なの……？・・

タイマーかリモコンで操作したのかは分からないが、その写真は見事にゆかりがイッた瞬間を捉えているようで彩音は目が釘付けにな

っていた。しばらく、写真のゆかりの姿を脳裏に焼き付けていた彩音だったが、我に返り日記の本文を読んでみる。

――今日もマンコにピンチで錘をさげて痛め付けました。変態のゆかりはマンコを痛め付けるのが大好き。もっともっとマンコ痛め付けたい。今度はもっと重い錘にしてみよう。クリトリスやビラビラが伸びて楽しそう。でも、一人だと限界があります。自虐だと出来ない事も多いから不満が残っちゃう。私と同じマンコ痛め付けるのが好きな変態の女の子がお友達でいればなぁ。そうすればお互いにマンコ調教して気持ちよくなれるのに……。――

・・渡邉さん、本当にマンコ痛め付けて気持ちよくなっているんだ。マンコ、痛め付けるとそんなに気持ちいいの・・

彩音はゆかりの日記を読みながら、ゆかりが自作した性器潰し機や鞭打ち機がある事を知った。それがどこかこの部屋に隠されている筈だった。

・・渡邉さん、こんなのも作っていたんだ・・

日記を読んでいるうちに彩音は自分の性器が濡れてきている感覚があった。

・・今日も錘、ぶら下げよう・・

彩音は下着を脱ぐと、クロッチ部はすでにぐっしょりと濡れていた。彩音はティッシュで性器を拭くと、もう放課後の恒例になっている錘付きのピンチで自分の小陰唇をはさんでいく。

「うっ、うっ、うっ」

小さな声を上げながら彩音は自分の小陰唇に錘を下げていった。彩音は、これでゆかりのように気持ちよくなったりはしなかったが、この行為に自分が激しく興奮しているのは理解していた。

・・私も、渡邉さんと同じ事してたら気持ちよくなるのかな・・

彩音は、自分ではゆかりの気持ちが分からないと思っていたが、すでに自分がその道に踏み込んでしまっている事には気がついていなかった。普通の女子が自分の小陰唇に錘を下げるなどすることないという当たり前の事に気がついていなかったのである。

彩音は姿見の前に立ち、足を大きく開いてスカートを捲ってみた。彩音の股間で大量の錘が吊り下がり小陰唇がびろーんと伸びている。その自分の姿を見ているうちに彩音は、日記にはさまっていたゆかりの写真を思い出し、自分もセーラー服を脱ぎ始めていた。そして、ゆかりと同じ様にサイハイソックスだけの全裸になると、やはり、ゆかりと同じ様に脱いだ自分の下着を頭に被る。自分の性器の匂いがツーンと鼻をつき、彩音はまた興奮していた。

「うっ、うぅっ」

乳首にもピンチで錘をつけた彩音は、写真のゆかりと同じポーズをとった。両手を万歳のように上げ、足を限界まで大きく開く。鏡に映るその自分の姿を見ているうちに彩音は、自分の乳首とクリトリスが硬く勃起し、熱をもってきたのを感じ、堪らなくなり自然と腰を前後に振っていた。

「あっ、おっ、おっ、おっ」

彩音が腰を振る度に錘が揺れ、乳首をクリトリスを小陰唇を引き千

切ろうとする。

「あうぅぅーーーーっ！」

その痛みに彩音は悲鳴を上げるが、腰を振るのを止められず、さらに激しく腰を振っていた。

・・な、なに？　痛いのに気持ちいいよぉ。止められない。私も渡邉さんと同じなの……・・

「おぅっ、おぅっ、おぅっ、おぅっ」

彩音は頭の中が真っ白になっていた。もう、ただ激しく腰を振る。錘同士がぶつかり合う、カチカチという音が響き渡り、乳首とクリトリス、小陰唇に千切れそうな痛みがはしる。そのカチカチという音が彩音の興奮を物語っていた。そして、その音がさらに激しく大きくなった時……。

「イ、イグぅぅぅっ」

プッシャァァーーーッ

彩音は生まれて初めて潮を吹いてイッてしまった。そして、そのまま床に座り込み放心状態になっていた。

・・もっと、錘重くして乳首やマンコ千切れたら、もっと気持ちよくなるのかな・・

彩音は、ゆかりの気持ちが少しわかった気がした。そして、ゆかりの気持ちを理解する為に自分もこの日記に書かれている事と同じ行

為をしようと決意していた。だがそのゆかりの気持ちは普通の人間の気持ちとはかけ離れている事に彩音は気がついていなかった。この時、彩音の中に芽生えてはいけないものが、しっかりと芽を出してしまっていた。そして、それは芽を出してしまうと、どんどん成長し大きくなっていく。彩音がゆかりに惹かれたのは、実は本質が同じ人間だったからだと後に気付く事になるのだった。

★　★　★　★

彩音は学校にいる間、授業以外の時間は風紀委員の委員会室の近くにいる事が多かった。また、ゆかりの噂が聞こえてこないかと期待していたのだ。
その日の昼休みも、委員会室の前の廊下を何度も行ったり来たりして聞き耳をたてていた。

「そういえば、また豪徳寺から連絡がきましたよ」

「どういう連絡ですか？」

「渡邉さんの処刑の日程が決まったそうです」

「やはり早いですね。もう渡邉さんは処刑されてしまうのですね」

「まあ、マンコ壊されて処刑されるのは彼女の夢でもありましたからね」

「でも、夢と現実は違います。渡邉さん、その現実に耐えられるでしょうか」

「無理でしょうね。豪徳寺の処刑は常軌を逸しています。耐えられる筈がありません。なにしろ女の性器を痛め付ける事に異常に快感を覚える女ですからね」

「それでは渡邉さんは……」

「おそらく酷い処刑をされ、性器を完全に破壊されるでしょうね。渡邉さんは恐怖と絶望と苦痛と後悔で発狂しながら絶命するでしょう」

「哀れですね。せめて早く発狂してしまえば多少楽かも知れませんね」

「そうですが、豪徳寺は少しでも長く渡邉さんを苦しめる為に、薬剤を使用して発狂しないようにすると思いますよ」

「本当に残酷な女ですね」

「そうそう、渡邉さん。もう四肢は切断されてしまったようですよ。万が一、処刑を免れてもロボトミー手術で脳を弄られて感情を奪われて一生、生きた性具として使用されるのではないですか」

「それなら、処刑されてしまった方が幸せかも知れませんね」

廊下で聞き耳をたてていた彩音は、またガクガクと膝が震えてきた。

・・性器を完全に破壊ってなに……。渡邉さん、何をされるの。普通の処刑じゃないの。それにロボトミー手術って……・・

彩音には、ゆかりが行ってしまった世界が、この世界とは違う別の世界のように感じていた。

番外編　蜂須賀彩音の決意（後書き）

ゆかりの処刑執行日決定の話に衝撃を受ける彩音。
せめて、ゆかりの最後を見届けてあげたいという思いから、ある決意をする。

番外編　蜂須賀彩音の覚悟（前書き）

廊下で、ゆかりの処刑決定の話を聞いてしまった彩音は、その処刑されるゆかりの姿を想像し恐怖で震えていた。

番外編　蜂須賀彩音の覚悟

番外編　蜂須賀彩音の覚悟

彩音は廊下で立ち聞きしながら膝がガクガク震えていた。ゆかりが、どの様に処刑されていくのかまるで想像もつかなかったが、性器を破壊され楽には処刑して貰えない。徹底的に苦しめられて処刑されるという事だけは理解出来た。

「それで……」

部屋の中ではまだ会話が続いていた。

「その渡邉さんの処刑を見学に来ませんかという招待状を送ってきたのですよ。どうやら渡邉さんは公開処刑されるようで、大勢の観客が集まるようです。処刑を見る為に豪徳寺の屋敷の会場に参加するには目の玉が飛び出るような高額な費用がかかるようですが、私は渡邉さんをオークションに提供した学校の人間なので無料で特別招待という事のようですよ」

「それで、理津子さん行かれるんですか」

「私は人の処刑を見て楽しむ趣味はありませんからね」

「ああそうですね、理津子さんは自分で処刑する方ですからね」

「人聞き悪いですよ、麗華さん。それで、私の代わりに麗華さんが行きませんか。招待状貰っておいて誰も行かないと豪徳寺が機嫌を悪くしますからね。今は豪徳寺と変な関係になるのは避けたいところなので」

「いや、理津子さん。私も処刑を見て楽しむような趣味はありませんよ。西園寺くんあたりにでも行ってもらえばいいかと……」

麗華が辞退した時、ガラッと部屋のドアが開いた。理津子と麗華が顔を向けると、真剣な表情の彩音が立っていた。

「あ、あの……。蜂須賀彩音といいます。廊下を歩いていたらお話が聞こえてきてしまって……。私、渡邉さんとお友達なんです。それで、その話が本当なら渡邉さんの最後に立ち会ってあげたいなと思いました。私に行かせてくれませんか」

理津子と麗華は、彩音の顔をじっと見つめてから口を開いた。

「大丈夫ですか？　どこから聞こえていたのか分かりませんが、渡邉さんは相当酷い処刑をされますよ。おそらく、マンコを壊されて処刑されます。それを見て精神が病む程度なら良いですが、廃人になってしまう可能性もあります。普通の人の精神ではおそらく耐えられません。ですから簡単に、それではどうぞという訳には参りません」

「はい、分かっています」

「そこまで言うなら、まずあなたの覚悟が本気か試させて貰いましょう」

理津子は、彩音に向かって冷たく言い放った。彩音は理津子の雰囲気が変わった事に息を呑むが、ここで引き下がる訳にはいかない。彩音は、はいと頷いていた。

「それでは蜂須賀さん、これから、あなたを拷問します。この拷問に耐えられたら、渡邉さんの処刑に立ち会って貰う事にいたしましょう。いいですか？」

・・ご、拷問……・・

彩音は恐怖で体が硬直するが、処刑されるゆかりよりはましなのは間違いないと考え、震えながら頷いていた。

「拷問と言われて逃げ出さないのは立派です。本当に渡邉さんの事を思っているのですね。でも、それで豪徳寺が行う処刑を見て耐えられるかは別問題です。本当に拷問しますからね、覚悟して下さい」

「は、はい。よろしくお願いします」

彩音は小さく震える声で答える。すると、麗華が近付いてきて耳元で囁く。

「ここでは色々支障があるので処置室まで来て貰えますか」

その麗華の言葉に彩音は更に震えあがっていた。噂では聞いた事がある〝処置室〟。そこでは風紀を乱した者が酷い仕置きを受けるという。二度と性器を使用出来ないようにされた女子も何人もおり、退学扱いになっている姫野順子と柏木結衣も、実はこの処置室で処刑されてしまったのでは噂されていた。彩音は先日の理津子と麗華の話から、順子と結衣を処刑したのは豪徳寺葉月だと知っていたが、

そんな噂が校内で流れる程、この風紀委員の処置室というのは恐怖の対象だったのである。彩音もぶるぶる震えながら処置室に連れられて行った。

「偉いですね、逃げずにここについて来るとは。それでは拷問を開始しますよ。午後からの授業はこちらから欠席の連絡を入れておきますので心配ないです。まずはセーラー服とスカートを脱いで貰いましょうか」

理津子から命令され彩音は衣服を脱いでいくが、午後の授業を欠席するほど長時間拷問されるのかと思うと彩音は失神しそうな程の恐怖に襲われていた。それでも彩音は命令されたままセーラー服とスカートを脱ぎ、下着姿になる。

「では、残った物も全て脱いで下さい」

彩音は、それでも躊躇せずに下着もソックスも脱いで全裸になる。逆に理津子と麗華は、ここまで素直に従う彩音に呆れたような顔になっていた。

「これが最後の確認です。これから、あなたのマンコを拷問します。噂で聞いているかも知れませんが、あなたのマンコは使用出来なくなるかも知れませんよ。それでも本当に構いませんか」

「はい、構いません。渡邉さんに比べればなんでもありません」

彩音は小さいがはっきりと答えていた。ここまで言っても意思を曲げない彩音に、理津子と麗華は顔を見合せ、拷問の準備を始める。彩音は手首足首をまとめて一つに縛られ吊るされた。駿河問いの拷問である。

「うぎぃぃぃーーーっ、痛いぃぃーーーっ」

手足の関節が壊れそうな、これだけでも相当な拷問である。当然だが拷問などされた事のない彩音は悲鳴を上げていた。

「さあ、本格的な拷問はこれからですよ。蜂須賀さん、あなたのマンコに竹刀で突きを入れます。マンコの力を抜いて下さいね。力を入れていると本当にマンコ使えなくなりますよ」

・・マンコに竹刀で突き……・・

彩音は手足の激痛も忘れ、恐怖で言葉が出なかった。

「うっ、あぁっ、こ、こわいぃぃっ」

ようやく小さな声が出た彩音だが、許して下さいという言葉は飲み込んでいた。

「怖いですよね、蜂須賀さん。でも処刑はもっと恐ろしいですよ。覚悟が決まったら言って下さい。それとも、もう終わりにしますか」

「彩音のマンコの拷問を始めて下さいっ！」

彩音は泣きながら大声で叫んでいた。次の瞬間、竹刀を構えていた麗華が高速の突きを彩音の膣に見事に突き入れる。

ズボオゥッ！！

「あっ、びゃあぁぁぁーーーーっ！！」

彩音が絶叫し、彩音の膣から血が噴き出す。しかし、麗華は突きを止めない。

ズドゥッ、ズドゥッ、ズドゥッ、ズドゥッ、ズドゥッ、ズドゥッ、ズドゥッ、ズドゥッ、ズドゥッ!!

「あびゃっ、あびゃっ、あびゃっ、あびゃっ、あびゃっ、あびゃっ、あびゃっ、あびゃっ」

激しく連続で容赦なく彩音の膣に竹刀を突き入れる。涙と鼻水で顔面を汚していた彩音は、ジョーッと小便も漏らし始めていた。すると、麗華はその小便を漏らす彩音の尿道に狙いをつけ強烈な一撃を突き入れる。

ビッシャアァァーーッ!!

「あんびゃあぁぁぁーーーーっ!!」

彩音は鋭い突きを尿道に突き入れられて尿道が裂けてしまっていた。すると今度は彩音はぶりぶりと大便まで漏らしていた。それを見た麗華は大便を漏らした彩音の肛門にも鋭い突きを入れる。彩音は肛門に突きを３０センチも入れられ血が噴き出し絶叫していた。そして、その大便がべったりと付いたままの竹刀がまた彩音の膣に突き入れられる。容赦がなかった。

ズドゥッ、ズドゥッ、ズドゥッ、ズドゥッ、ズドゥッ、ズドゥッ!!

彩音の膣からも激しく血が流れ出す。それでも、彩音は耐えていた。

「なるほど、蜂須賀さんの覚悟は見届けました。これなら、渡邉さんの処刑を見ても廃人になる事はないでしょう。では、最後に特別な突きを入れてあげます。もう、耐える必要はありませんが、あなたがどこまで耐えられるのか試してみたくなりました」

麗華は理津子の言葉で竹刀の先にアタッチメントを取り付けていた。それは、竹刀に被せる太い鉄のカバーで、先端には鋭く太い針が突き出ていて、カバーの表面には無数の棘が植え込まれていた。

「うっ、あっ、あぁっ」

彩音は涙で霞む目で、その凶悪なアタッチメントを見て恐怖でぶるぶると震えていた。

・・あんなのでマンコ突かれたら私のマンコ壊れちゃうよ。私のマンコ、どうなっちゃうの。もう二度と使えなくなるのかな。マンコ壊された時って、どんな気持ちになるんだろう。オナニーも出来なくなっちゃうよね。あぁ、早く彩音のマンコ、それで突いてください・・

彩音は震えながらも、自分がそれを期待している事に気付いて愕然とした。

・・嘘だよぉ、そんな事ない。マンコ、壊されるの期待するなんてあり得ないよぉ・・

彩音は自分の奥底の気持ちを否定するが、彩音の性器は火照り粘液を分泌し始めていた。そして、アタッチメントを装着し終えた麗華が定位置に戻る。

「あっ、あっ、あっ、あっ」

いつ自分の膣にあの凶器が突き入れられるか分からず彩音は息が荒くなっていった。そして、それはヒュッという音の後、突然きた。しかも、ただの高速の突きではない。回転が加えられている。それが容赦なく彩音の膣に突き入れられる。

ドスゥウウッ！！

「あびゃあぁぁぁーーーーっ！！」

ビシュゥウーーッ！

絶叫する彩音の膣から激しく血が噴き出す。彩音の膣はズタズタに切り裂かれ、子宮は串刺しにされていた。彩音は、性器から脳天に突き抜ける真っ二つに体を裂かれたような激痛に、口から泡を吹いて白目を剥き無様に失神していた。

★　★　★　★

彩音が気が付くとベッドに寝かされていた。どうやら医務室のようだった。そして、彩音の枕元には、ゆかりの処刑への招待状が置かれていた。彩音は、それを制服のポケットに大切に入れていると、カーテンがさっと開いた。

「良かった、気が付いたのね、蜂須賀さん」

声をかけてきたのは青柳広子だった。

「先生が、蜂須賀さんは風紀委員にお仕置きされるので午後は欠席と言っていたけど、なにしちゃったの」

「えっ、うん、ちょっと……」

「びっくりしたよ。真面目な蜂須賀さんがお仕置きされるなんて。でも、誰だってつい魔が差しちゃう事だってあるもんね」

広子は聞きたい事を我慢しているような顔だったが、ついに我慢仕切れずに切り出す。

「蜂須賀さん、マンコ大丈夫？　風紀委員のお仕置きって、マンコにするって噂だから……。壊されちゃった人もいるらしいし……」

「えっ、ああ……。あ、あの今日は頭が混乱していて上手く話せないの。ごめんなさい、明日でいいかな。必ず青柳さんに話すから」

うつむきながら言う彩音の言葉に広子は、そうだよねと素直に頷き退室していった。彩音がズキズキと痛む股間に手をのばしてみると、彩音の性器はきっちりと治療されているようであった。彩音は、自分の性器にされた拷問を思い出していると興奮してきて性器を激しく擦っていた。

「あうっ、あうっ、あうっ」

小さな声を出し自慰しながら彩音は自分の本性が分かった気がしていた。

・・私、本当は渡邊さんと同類なんだ。私も、マンコ拷問されて興

奮する変態マゾなんだ・・

彩音は、処刑を執行され泣きながら性器を破壊され絶命する自分の姿を想像し、イッてしまっていた。

番外編　蜂須賀彩音の覚悟（後書き）

ゆかりの処刑を観る権利を手に入れる為に拷問を受けた彩音だったが、それで自分の隠されていた本性に気付いてしまう。
これから先の彩音の運命はどう動いていくのだろうか……。彩音も近い将来、処刑されてしまうのかも知れません。

番外編　蜂須賀彩音の性癖（前書き）

風紀委員の拷問を受け、ゆかりの処刑を観覧する権利を手に入れた彩音。そして、それと同時に自分の本性にも気付いてしまった。

番外編　蜂須賀彩音の性癖

番外編　蜂須賀彩音の性癖

彩音は、ゆかりの実家の離れにいた。もうそこにはいないゆかりに、ゆかりの処刑を観に行く事を報告していた。

・・私、渡邉さんが処刑される姿を観に行きます。私、渡邉さんの気持ちがようやく分かりました。もっと早く分かっていれば、渡邉さんとお友達になれて、お互いにマンコ痛め付けて気持ちよくなれたのに……・・

彩音は性器を拷問されて気絶していたが、それは激痛だけで気絶したのではない事に彩音本人はもう気付いていた。ここまできて、それを認めない訳にはいかない。彩音は、性器に突きを入れられ膣を裂かれ子宮を串刺しにされた瞬間、激痛と同時に快感が全身を駆け巡りイッてしまい失神したのだった。

「私も、徹底的にマンコ処刑されたい……」

彩音は誰もいないゆかりの部屋で呟いていた。そして、彩音はゆかりの部屋を漁りながら、まだ委員会室で性器を拷問された感覚が抜けなかった。思い出すだけで体が火照ってくる。もう一度、今度はもっと酷い目にあいたい。そんな気持ちが頭を離れなかった。明日になったら広子に、こんな事をされたと話すつもりだ。自分がされた事を話したくて仕方なかったのだ。自分が話した時の広子の顔を

想像して彩音は一人笑みを浮かべていた。その時、彩音は気が付いた。今まで部屋の隅に置いてある箱だとばかり思っていた物が、それをばらして組み換えると三角木馬になるのだという事に……。彩音は興奮していた。ゆかりの日記にも自作の三角木馬で性器を痛め付ける記述がある。これが、その三角木馬なのだと思った。

・・渡邉さん、これに跨がってマンコ痛めつけていたんだ・・

彩音はドキドキしてきた。

・・今日はもう遅いから、我慢して明日これに跨がってマンコ調教しよう。渡邉さんが使ってた足に着ける錘もある筈だから、それも探さないと……。でも、試しに一回跨がってみたいな・・

彩音は踏み台に乗ると、三角木馬に跨がってみた。そして、恐る恐る踏み台から足を外す。

「あぎぃぃぃぃーーーーっ」

彩音の割れ目に全体重がかかり、彩音は悶絶する。それは想像以上の激痛だった。彩音の割れ目に三角木馬の鋭角が激しく食い込んでくる。

「ひぃぃぃぃーーーーっ！」

彩音は慌てて両手をつき足を抜こうとするが、ゆかりが製作したこの三角木馬は、普通の三角木馬よりも大きく足が開かされる形状になっており容易に足に力が入れられず抜け出すのが困難になっていた。ゆかりが、自分の性器を痛め付ける為に製作した物なので当然の改良と云えた。が、その為に彩音の脱出は両手を使えてもなお困

難を極めていた。

・・うぎぃぃぃぃーーっ、痛いぃぃぃぃーーっ・・

彩音は少しずつ重心をずらして、転がるように床の上に倒れこんでいた。そして、股間を押さえて転げ回る。

「うぎっ、うぎっ、うぎっ」

ほんの少し体験しただけで彩音は激痛で泣き出していた。

・・こんな痛い事、渡邉さんは両腕を縛って足に錘を着けてやっていたの。そんな事したら、もう逃げられないよ……・・

彩音は三角木馬を見つめ、そこに跨がって泣きながらイッているゆかりを想像していた。そして、そのゆかりの姿を想像しているうちに、彩音の性器も大量に粘液を分泌し、グショグショに濡れていた。

・・明日、私も渡邉さんと同じ様に両腕を縛って足に錘をぶら下げて三角木馬に跨がろう・・

彩音は、その時の性器の痛みを想像し、さらに激しく性器を濡らし始めていた。

★　★　★　★

翌日、登校すると彩音は東條佳純に声をかけられた。

「蜂須賀、ちょっと聞きたい事があるんだ」

彩音は、佳純とは同じクラスであるが今までほとんど会話した事がなく、彩音はどちらかというとこの佳純は苦手な女子だった。彩音は、その佳純が突然どうしたのだろうと訝しみながらも立ち止まっていた。

「蜂須賀、風紀委員にお仕置き受けたって本当なの　真面目な蜂須賀がお仕置きなんて信じられないからさ　何をやったのかと思って……」

彩音は、ゆかりの処刑を観に行くためと正直に答える訳にはいかないと思い、男の人とエッチしてるのが風紀委員にばれちゃったと嘘をついていた。

「蜂須賀、お前……。真面目な奴だと思っていたけど、やる事はやっているんだな。それで、風紀委員に何されたの？やっぱり、マンコにお仕置きされたの？」

「うん、そうだけど……。あまり話したくない……」

佳純に詳しく話すと、あっという間に学校中に広まりそうで、彩音は花壇にお水をあげる当番だからと言って逃げ出していた。そして、水をあげてから教室に入るとクラスメイトの彩音を見る眼が昨日までと変わっていた。今までは、ゆかりと同じ様にほとんど存在感がない彩音だったが、一躍有名人を見るような眼で見られていた。

「蜂須賀さん、本当にマンコにお仕置きされたんだって……」

「マンコ、壊されちゃったみたいよ」

「男の人とエッチしてたみたいだけど、相手はどんな男なのかな。まさか同じクラスの男じゃないよね」

「蜂須賀かぁ、俺けっこう好きだったけど、マンコ壊されたならもう要らないや」

何やら好き勝手な事が言われているが彩音は聞こえない振りをして席に座る。

・・もう東條さんに話した事が広まってる・・

彩音は佳純の姿を探したが教室内には見当たらなかった。もう他の教室にも出張して話しているのかも知れない。彩音は、この時深くは考えていなかったが、この事が後に彩音の運命を大きく変える事になっていくのだった。

★
★
★
★

放課後、彩音はゆかりの部屋に来ていた。この部屋に入っただけで息が荒くなり興奮してくる。もう彩音の下着の股間はグショグショだった。

彩音は急いで三角木馬を組み立てる。そして、ゆかりの日記に書いてあったように氷の上に三角木馬を乗せた。何故、大きな冷凍庫が部屋にあるのか不思議だったが、こういう事なのかと理解した。ゆかりの部屋にあるものは、みんなゆかりが自虐自慰をする為に用意してある物のようだった。そして、彩音は部屋の隅に重ねて置いてある取っ手付きの漬け物石を発見した。漬け物など漬けていないこ

の部屋に置いてあるのは不自然極まりない。この漬け物石を、ゆかりは錘の代わりに使っていたのだと彩音は考えた。そして、セーラー服とスカートを脱ぎ、続けて下着も脱いで全裸になる。その後、ゆかりの箪笥からスクール水着を取り出すと、それを着用した。ゆかりの日記によると、ゆかりはスクール水着を着て自分の性器を調教していたという記述が多く見られる。彩音もそのゆかりに倣ってスクール水着を着用したのだ。そして、漬け物石を踏み台の上に運ぶ。その重量はけっこう重く、彩音は両手で抱えるようにして、やっと運んでいた。そして、準備を整えた彩音は三角木馬に跨がり足首に足枷を装着し鎖で錘をつなげる。それから、自分が今まで穿いていた下着を口に詰め込み、その上からガムテープを貼って口を塞いだ。絶叫してしまうのを防ぐ為だった。これも、ゆかりの日記に書いてあったので参考にしたのだ。最後に彩音は自分の両腕を背中に回して自縛する。

・・渡邉さんの日記に自縛のやり方書いてあったけど、これで良いのかな・・

彩音は、縛り終えてから腕を動かしてみるが、けっこうしっかりと縛られていて、腕を拘束から抜く事は出来なかった。

・・これで、準備ＯＫだよ。もう、昨日みたいに両手で三角木馬を押さえて抜け出すなんて出来ないよ。覚悟はいい、彩音・・

彩音は、自分に確認する。昨日、跨がっただけで性器を裂かれるような激痛だった。今日は、腕も縛り、足には錘も着けている。凄まじい激痛が襲ってくるのは想像出来た。それを想像すると彩音の性器は、また濡れ始めていた。

・・早くしなさい、彩音・・

彩音は、自分で自分に命令する。そして、ついに踏み台を蹴り飛ばした。その瞬間、彩音の割れ目に全体重プラス錘の重量が集中する。三角木馬の鋭角が彩音の割れ目に激しく食い込んでいた。

「ふんがぁぁぁーーーーっ！！」

彩音は、天を仰いで塞がれた口で絶叫する。

・・いだいぃぃぃーーっ、じぬうぅぅぅーーーっ・・

漬け物石は一つ３０キロ、両足で６０キロの重さになる。彩音は自分の体重以上の物を足にぶら下げているのだ。彩音の両足はピーンと一直線に伸びきり動かす事も出来なかった。

「おぶぶぶぶぶぶぅぅぅっ」

彩音の瞳からは涙が滝のように流れ、鼻からも大量の鼻水が垂れていた。

・・いだいぃぃっ、マンコ死んじゃうよおぉぉっ・・

彩音は性器を襲う激痛に、なんとか足を動かして少しでも位置を変えようとするが、三角木馬は彩音の割れ目に激しく食い込んで動かす事は出来なかった。だがそれも当然と云えた。ゆかりが自分の性器を痛め付ける為に作ったのだ。鋭角であれば足を動かす余地はあるが、ここまで足を開いて跨がると、もう足を動かす事など出来ない。そこまで考えてゆかりは製作していたのだった。彩音は、もう逃れる事は出来ず、三角木馬の下の氷が溶け、足が床に届くまでは性器を襲う凄まじい激痛を味わい続けるのだった。だが、彩音はそ

の性器を潰す激痛に興奮している自分に気が付いていた。

番外編　蜂須賀彩音の性癖（後書き）

ゆかりが作成した三角木馬に跨り、自分の性器を痛めつける彩音。
もう、彩音も引き返せない道に入ってしまった。

番外編　蜂須賀彩音の転落（前書き）

ゆかりの部屋に入り浸り、どんどん普通の生活から転落していく彩音。
彩音は、もう自分の性器に対する自虐が止められなかった。

番外編　蜂須賀彩音の転落

番外編　蜂須賀彩音の転落

彩音にとって、ゆかりが住んでいた自宅離れは夢のような場所になっていた。マンションに住んでいる彩音にとって自分の部屋はあるが、すぐ近くに両親がいる状態では思う存分声を上げる事など出来ない。集合住宅ではゆかりの家の離れのような場所は望むべくもない。彩音はゆかりの部屋に勝手に上がり込み、自虐に明け暮れていた。

・・渡邉さん、この為に離れを作って貰ったって日記に書いてあるけど、自分のマンコを痛め付ける為にここまでするって本当に凄いよ・・

彩音は改めてゆかりの情熱に敬意を表していた。そして、いつものようにゆかりの部屋の中を漁っていた。

・・これ何だろう?・・

押し入れの奥の箱の中から木製の部品のような物を見つけ、彩音は部屋の中に広げてみた。それは以前見つけた三角木馬のように組み立てて使用する物のようだった。彩音は試行錯誤しながら、それを組み立てていく。ある程度組上がると、それが何か想像でき、そこからは完成まで早かった。彩音は組上がった物を見て興奮していた。しかも、日記に記述がある物から、さらにゆかりは改良を加えてい

るようだった。

・・これが渡邉さんが日記に書いていたマンコを潰す〝マンコギロチン〟だよ（5話、参照）・・

彩音は興奮していた。

・・私もマンコぐちゃぐちゃに潰したい・・

彩音は制服を脱ぐと、ゆかりと同じ様に旧スクール水着と太ももに食い込むサイハイソックスを身につける。そして、ゆかりの日記に倣って口の中に自分の脱いだ下着を詰め、その上からボールギャグを装着する。さらにガムテープを何重にも貼り付け自分の口を完全に塞いでいた。

「ふぅ、ふぅ、ふぅ」

もう彩音は興奮して鼻息が荒くなっている。彩音は仰向けになり腰を持ち上げ、ギロチン板の下に自分の性器がくるように位置を調整した。そして、日記には書かれていなかったが、革のベルトで脚が閉じられないよう太ももを2ヶ所きつく固定する。これで彩音は脚を閉じて性器を守る事が出来なくなる。

・・渡邉さん、自分のマンコを本当に容赦なく痛め付けていたんだ。たぶんギロチンが落ちてくる高さも高くなってるよね・・

ギロチン板は2メートルの高さの位置にある。その重さも、組み立てた時の感じでは5キロ程度は有りそうだった。

・・あの重い板が、あの高さから私のマンコを直撃するんだ。私の

マンコどうなるんだろう。クリトリス、潰れちゃうかな・・

彩音はドキドキしながらも興奮し、スクール水着の股間に染みが拡がっていた。そして、彩音はギロチン板を操作するモーターのスイッチを入れ、両腕も動かせないように腕枷に入れ固定する。これは、ゆかりが更に改良した部分だった。元々は手動でギロチン板をロープで持ち上げて落としていたが、それをモーターで自動的に持ち上げ、タイマーで設定した時間内は止める事が出来ず繰り返しギロチン板が落ちる事になる。モーターを使う事で両腕も解放される為、それも枷で固定してしまう事で、もう性器を守る事は出来ずに設定した時間内は性器をギロチン板で容赦なく潰され続ける事になる。ゆかりが自分の性器を痛め付ける為に、ここまで徹底的に情熱を注いでいたのが彩音にも理解出来た。

・・渡邉さんは凄い。私なんか考えもしない事を考えて、それを実際に実行しているんだ・・

彩音が感慨に耽っているうちに一回目のストッパーが外れる。ギューンと落ちてくるギロチン板を彩音は目を大きく見開いて見つめていた。

グシャアァァッ！

「お、ぼおおぉぉぉーーーーっ！」

彩音は絶叫していた。彩音の目から涙が溢れ、鼻水が垂れている。

・・いだいぃぃぃっ、だじげでえぇぇぇっ・・

5キロのギロチン板の性器直撃は、彩音の想像以上の激痛だった。

彩音はタイマーの設定を最長の６０分にしてしまった事を後悔していた。

・・私のばか。最初は短く設定しておけば良かったのに……・・

グシャアァァッ！！

「おぼおぉぉぉぉーーーーっ！！」

そうしているうちに二度目のギロチン板が落ちてくる。２メートルの高さから5キロのギロチン板が落ちてくるのだ。もし彩音が物理の授業を覚えていたのなら、それはもう人の耐えられる限界を越えている事に気付いただろうが、元々理系は苦手の彩音は、それが何キロニュートンに達するのか分からないのは勿論、考える事もなかった。

グシャアァァッ！！！

「おぼぼぼぼぼぼぼぼぼおぉぉぉぉーーっ」

彩音が苦痛に苦しんでいる時に、すぐに次のギロチン板が落下してくる。彩音は知らなかったが、ゆかりはだんだんと落下するタイミングが短くなるよう設定していたのだ。

グシャッ、グシャッ、グシャッ、グシャッ、グシャッ！！

「おっ、ぼおおぉぉぉぉーーーーっ！！！」

・・だじげでえぇぇぇっ、もお、ゆるじでえぇぇぇーーっ・・

シャァァーーッ

連続で性器を潰され彩音は絶叫しながら尿を漏らしていた。スクール水着の股間から止まらない尿の染みが拡がっていく。彩音はもう自分が漏らしている感覚も分からず白眼を剥いていた。

グチャッ、グチャッ、グチャッ、グチャッ、グチャッ！！

「おぼぼぼぼぼぼぼぼおぉぉぉぉーーっ」

それでもギロチン板の落下は当然ながら止まらない。さらに落ちる間隔が短くなり彩音の性器を潰していく。彩音は尿を漏らし白眼を剥きながら容赦なく性器を潰されていた。

グチャッ、グチャッ、グチャッ、グチャッ、グチャッ、グチャッ、グチャッ！！

「おばばばばばばばばばばばぁぁぁぁーーっ」

ぶり、ぶり、ぶりいぃぃぃっ

ギロチン板から連続で受ける衝撃で肛門の弛んだ彩音は惨めに大便まで漏らしていた。スクール水着の股間臀部がもりもりと盛り上がり悪臭が漂ってくる。

グチャッ、グチャッ、グチャッ、グチャッ、グチャッ、グチャッ、グチャッ、グチャッ、グチャッ！！！

「ぶぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぉぉぉぉーーっ」

ほとんど意識のない彩音は、それでもギロチン板で性器を連続で潰され続けていた。そして、ようやく彩音がこの激痛から解放されたのはタイマーで設定したきっかり60分後だった。彩音は、それでもしばらく動けずにいた。彩音の恥骨が割れなかったのは奇跡といえたが、彩音の性器が負ったダメージは相当なものだった。彩音は呻き声を上げながら太ももものベルトも腕枷も外す事が出来ず激しい性器の痛みに号泣していた。

★　★　★　★

「あの噂は本当なのですかね、麗華さん」

「噂ですからね。真偽のほどは分かりませんが……。彼女は真面目そうに見えるので、私は誰かが勝手に流しているのだと思いますが……。一度本人に確認してみるのが一番ではないですか」

「そうですね。それでは〝あれ〟が終わったら訊いてみるとしますか」

★　★　★　★

翌日も彩音はゆかりの部屋に来ていた。明らかに不法侵入で、ゆかりの私物も持ち帰ったりしているので窃盗の罪も加わる。しかし、彩音はそんな事を気にもしていなかった。ゆかりの物は自分が勝手に引き継いだと思っているのである。彩音は昨日の性器を潰す器具を再び組み立てていた。昨日、あんな目にあいながら、また自分の

性器を潰したくなったのである。そして、組み立てながら昨日使わなかった部品に気がついた。

・・これ何だろう?・・

彩音はしばらく考えて、それがギロチン板の交換パーツだと思い付いた。昨日のギロチン板はゆかりの日記にあったように厚く重い板を落として性器を潰す物だったが、この板は大きさや重さは同じだが片側が平らではなく三角形に削られていた。

・・こんなの落としたらマンコの割れ目、本当に裂けちゃいそうだよ・・

彩音は、その鋭利なギロチン板を見て息を呑んでいた。

・・でも、こんなの作ってあるって事は渡邉さん、これでマンコ痛め付けていたんだよね・・

そう思うと彩音は、昨日のギロチン板ではなく、この発見した新たなギロチン板を取り付けていた。彩音はそれが自分の性器に落ちた時の事を想像し、胸がドキドキと高鳴り、息が荒くなり、性器を濡らしてしまっていた。さっそく彩音はスクール水着に着替えるが、さすがにそれだけでは怖かったのでスクール水着の上にブルマも重ね穿きしていた。そして、昨日のように入念に自分の口を塞ぎ、大きく脚を開いて太ももをベルトで固定する。あとはモーターのタイマーをセットし腕を固定するだけだが、頭上のギロチン板の鋭く尖った形を見て彩音は恐怖にかられていた。

・・あんなのが私のマンコに落ちてくる。怖い、怖いよ・・

彩音は震えながらもこの行為を止めようとはしなかった。

・・見えるから怖いんだ。目も塞いじゃえばいい・・

彩音は先にタイマーをセットし、急いで自分の目にガムテープを何重にも貼る。そして、両腕を枷で固定した。しかし、彩音は自分の体を拘束してしまってから気付いた。

・・見えないと、いつ落ちてくるか分からないよ・・

彩音は、いつくるか分からない自分の性器を襲う激痛に暗闇の中で怯えていた。そして、それは突然きた。

グシャッ！！

「ふぼおおおぉぉぉーーーっ！！！」

それは昨日の比ではなかった。重さ5キロのギロチン板の鋭角が2メートルの高さから彩音の性器の割れ目に落ちるのである。三角木馬で片足に１００キロの錘を下げられた以上の衝撃と激痛だ。ブルマを穿いたくらいでは何の役にも立たなかった。

グシャッ、グシャッ、グシャッ、グシャッ、グシャッ、グシャッ、グシャッ！！

「ふぼっ、ふぼっ、ふぼっ、ふぼっ、ふぼっ、ふぼっ、ふぼおおおぉぉぉーーーっ」

体を拘束し目も口も塞いでしまった彩音は、無様に泣きながら大小便を漏らしていた。

・・マンコ、じぬうぅぅっ、だじげでえぇぇぇっ・・

彩音は、本物のギロチンのように性器から体を真っ二つに裂かれるような耐えられない激痛に体をビクンビクンと痙攣させていた。さすがにタイマーは昨日の半分３０分に設定してあるが、それでもまだ時間はかなり残っている。彩音は気が遠くなっていく中で自分の無様な姿を想像して興奮していた。

・・渡邉さん、マンコ処刑されるのが夢って書いてあったけど、私も今なら渡邉さんの気持ちが分かる。私もマンコ処刑して貰いたい。私も奴隷になればマンコ処刑して貰えるのかな。どうすれば奴隷になれるのかな・・

彩音は、激しく性器にギロチン板の衝撃を受け、泣きながら笑っていた。彩音は自分が転落していくのは分かっていたが、もうそれを止められなかった。どうせ転落するなら、どん底まで堕ちたい。ゆかりのようにメス奴隷になって処刑されたい。彩音は、もうはっきりと自分の本当の願望を認識していた……。

番外編　蜂須賀彩音の転落（後書き）

彩音は、ゆかりと同じように性器処刑を望むようになってしまった。
どんどん堕ちていく彩音は、もう自虐する事が一番の快感になってしまっていた。

1、破瓜（前書き）

今回から始まる2部の主人公は、ゆかりの妹“しずく“です。しずくが生まれた経緯については「檻の中の幸福」ゆかりの章最終話を参照して下さい。

しずくは姉のゆかり同様、変態マゾになっていくのでしょうか。今回は本人にその気が無くても、しずくの周囲が、しずくを変態マゾに育てようと画策していきます。

1、破瓜

1、破瓜

「おはようございます、しずく様。朝食の用意は出来ていますよ」

「うん、お早う。ありがとう、理恵さん」

離れの自分の部屋から母屋に来た渡邉しずくは、ダイニングのテーブル席に着く。テーブルの上にはベーコンエッグとカリカリに焼いたトーストにバター、胡麻ドレッシングをかけたサラダ、それに甘くしたホットミルクが湯気を立てている。しずくはパクパクと朝食を採りながら、理恵の姿を目で追っていた。理恵は、今日の学校の時間割を見てしずくのランドセルに教科書やノートを詰めている。

ここ渡邉家では、ごく普通の光景だった。しずくの両親は、仕事で長期不在が多いという理由で、この家にいる事はほとんどなかった。だが、それは表向きの理由で、実はもう仕事もせずにタワーマンションの高層階に住んでいたのだった。なので、しずくが物心つく頃から既にこの加納理恵が母屋に住み込みでしずくの世話をしていた。しずくにとって理恵は何時でも何でも相談できる信頼できる大人の一人と云えた。

「しずく様は今週の日曜日がお誕生日でしたね」

「うん、9才になるの。パパとママも週末帰って来るって」

「良かったですね。そうそう、お祝いの儀式をするって言っていましたよ」

「うん、ケーキ買ってくれるかなぁ。楽しみ」

そこで、しずくは壁のカレンダーを見る。日曜日のところに赤丸がしてあり、その下に文字が書いてある。

「ねえ、理恵さん。これなんて書いてあるの」

しずくはカレンダーの文字を指差して理恵に訊ねた。理恵はフッと意味深な笑いを口許に浮かべながらしずくに説明した。

「しずく様、これは〝はか〟って読むのですよ」

しずくはカレンダーに書かれた〝破瓜〟の文字を見つめていた。読み方は分かっても意味が分からなかった。が、その意味も理恵は説明してくれる。

「破瓜の意味は、わたくしたちメスが初めてオマンコの穴に男の方のおチンポを入れて頂き、処女膜という膜を破ってもらう事をいいます。分かりますか、しずく様」

「オマンコの穴におチンポ入れてもらう事なんだ。私、まだ絵の具の筆や鉛筆しか入れた事ないけど、おチンポも入るんだね」

「そうですよ。でも、それだけではないですよ。オマンコの穴は、色々と使い道があるのです。しずく様も少しずつ覚えていくと良いでしょう」

「うん、分かった。それなら色々入れてみた方が良いよね」

「そうですね。しずく様のお誕生日が終わったら、わたくしもお手伝いしますので試してみましょう」

理恵はニヤリと笑い、唇を舐めていた。

★　★　★　★

「あっ、パパ、ママ、お帰りなさい」

離れの部屋で机に向かっていたしずくは、ドアを開けて入って来た両親を見て、笑顔を浮かべていた。それは、両親がリボンの付いた綺麗に包装された箱を抱えていたからだ。

「お誕生日おめでとう、しずく」

「しずくも、もう9才になったのね。おめでとう」

「ありがとう。パパ、ママ」

ここで、しずくの両親は改まった顔になると、二人とも床に座布団を敷いて腰を降ろし、しずくにも前に座るように言う。

「しずくが大きく成るまでと思って黙っていたけど、しずくにはお姉さんがいたの」

「お姉ちゃん？」

「そう、若くして死んじゃったけど、とても親孝行で立派なお姉さんだったんだよ。この部屋はそのお姉さんが使っていた部屋。今日からここにある物は、みんな妹のしずくの物にしていいから、大切に使ってあげてね」

「お姉ちゃんの……。うん、みんな大切に使うよ」

「ふふっ、しずくは偉いねぇ。しずくは今日でもう9才だから将来の事もきちんと考えないとね。今日はパパが、しずくを大人にしてくれるからね。ふふっ、じゃあ今すぐ全部、服を脱いで、しずく」

女の言葉で驚いたしずくだったが、立ち上がるとスカートを脱ぎ、上着も脱いでいく。そして、下着や靴下も脱いで真っ裸になっていた。男と女は、しずくの裸体を値踏みするように眺めていた。ツインテールの茶色がかった髪に、ようやく膨らみ始めた胸で、まだ桜色の小さな乳首がツンと上を向いている、寸胴の腰にツルツルの滑らかな形良い恥丘。そして、その恥丘に存在を主張する一筋の幼い割れ目。

「しずく、足を大きく開いてパパとママにしずくのオマンコをよく見せて」

「はい、ママ」

しずくは素直に大きく足を開いて、自分の一筋の割れ目を晒していた。幼い割れ目は、まだ本当に一本の線にしか見えなかった。二人は満足したように頷くと拘束具で、しずくの両腕を背中に回し拘束する。しずくは驚いたようだったが、顔を朱くして息が荒くなっていた。

「やっぱり、しずくはお姉さんに似ているね。縛られると気持ち良いでしょう。ふふっ、じゃあ、そのまま仰向けになって足を大きく開きなさい」

女の言葉に従いしずくは横になって足を開く。女はしずくの頭の方にまわると、しずくの首に首輪を着けた。

「さあ、しずく。大きく口を開きなさい」

「は、はい、ママ」

しずくが大きく口を開くと女は男根型のギャグをしずくに見せる。

「これはメスに使うギャグというもの。メスは、これをされると気持ち良くなるの。しずくも慣れると気持ち良くなるわよ。ママはこれされちゃうと、すぐオマンコ濡れちゃうから」

女は大きく開いたしずくの口に男根を挿入し、喉奥まで押し込んできつくベルトを締め固定してしまった。

「ふぐっ、ふぐっ」

しずくは息が上手く出来なくなり苦しそうに声を上げ、瞳からポロポロと涙が零れ落ちるが、そのしずくの目にもガムテープを貼られたうえ黒い布を何重にも巻かれ塞がれてしまう。

「目も塞がれるとメスはもっと気持ち良くなるの。しずくもそうなるわよ」

そして、女はしずくが動けないよう小さな肩を押さえつける。

「さあ、しずく。パパのおチンポを入れて貰うからね。しずくはこれから破瓜を迎えるの。最初は痛いけど、しずくならその痛みがすぐに気持ち良くなるからね」

男の性器は既に硬く大きく勃起している。男はしずくの幼く小さな陰核にローターを当てていた。

「ふぐぅっ、ふぐぅっ、ふぐぅっ」

しずくは自分の陰核に与えられる刺激で声を出し始めてしまっている。男がしずくの一筋の割れ目をくぱぁと開いて確認すると、膣穴から粘液が溢れだしていた。

「良いぞ、さすがしずくだ。パパは嬉しいよ。でも、しずくのマンコの穴は裂けちゃうからね。相当痛いだろうから、しずくの気が紛れるようにママがしずくのおっぱいに針を刺してくれるからね」

男は女に合図すると自分の陰茎の鬼頭をしずくの小さな膣口に当て、しずくの粘液を自分の性器に塗っていく。

ヌチョ、ヌチョ、ヌチョ

性器と性器が擦れ合う淫らな音が響いていた。そして、男はしずくの腰を押さえつける。しずくの破瓜の瞬間がやってきた。

ズリュウッ

「ふごおぉぉぉーーーーっ！」

ブチッ、ブチッ、ブチッ

しずくが絶叫するが男は構わず根本まで陰茎をぶち込む。しずくの処女膜を突き破り、膣が裂ける感覚が伝わってくるが、男は構わず腰を振りだした。そして、女はしずくの小さな乳首に針を貫通させていた。目隠しされていても涙が滲み零れる程、しずくは号泣していた。

1、破瓜（後書き）

まだ幼いしずくが犯され破瓜を迎えました。
これから、しずくがどの様に育っていくのか。
ゆかりの部屋を引き継いだしずくは、そこで様々な器具を発見していきます。そして、まるでゆかりの影を追うように……。

2、血脈

2、血脈

「ふぐぅっ、ふぐぅっ」

ブチッ、ブチッ、ブチィィッ！！

しずくの幼い膣穴が哀れに裂けていくが、男は構わず腰を振り続けている。しずくは号泣しながら男に犯されていた。しずくの膣穴からはどす黒い血が男の陰茎が動くたびに溢れている。男はしずくの破瓜の血を見て、さらに興奮して激しく腰を振りだした。

じゅぼっ、じゅぼっ、じゅぼっ、じゅぼっ、じゅぼっ

男の陰茎が出し入れされる淫靡な音が響き渡る。しずくの幼く小さな両乳首には針が十字に刺され、その少し膨らんだ胸にも数えるのが大変な程大量の針が突き立てられていた。

「しずく、痛いよね、苦しいよね。ママにはよく分かるわ。ママもしずくと同じ年に破瓜を迎えたから。それからママはオマンコを調教される事を夢見ていたのかも知れない。しずくのお姉さんも、きっとそうだったの。お姉さんはね、本当に偉いんだよしずく。自分一人で夢を叶えたんだから。パパとママにとっても自慢のお姉さんなのよ。しずくも、そんな娘に育ってね」

女はしずくに語りかけながら、しずくの胸に突き刺した針をライターの火で炙り始めていた。しずくの顔が苦痛で歪み、絶叫がさらに大きくなる。そのしずくの苦しむ姿を見て男は絶頂に達しようとしていた。

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

男は、幼い娘の内に大量に射精していた。男は満足したようにしずくの膣穴から自分のイチモツを抜いた途端……。

ブシュゥゥッ！

しずくの膣内に溜まっていた血、精液、粘液が噴水のように噴き出した。まだ小学生のしずくは胸を針山にされ、膣穴が裂けるほど犯されビクビクと体を痙攣させていた。

「まだ終わりじゃないからね、しずく。最初が肝心だから今日が終わるまで徹底的に犯し続けてあげるからね」

男に代わって今度は女がペニスバンド（注）を装着し、しずくの幼い膣穴には巨大過ぎるペニスを突き入れていた。

ブチッ、ブチッ、ブチィィッ！！

「んぶうぅぅぅーーーーっ！！」

また、しずくの小さく幼い膣穴が裂けていく。今度は男に押さえ付けられている為、しずくは動く事も逃れる事も出来ず、膣穴を裂かれて号泣している。男は針山になっているしずくの小さな胸を見て、バーベキューに使用するような長い串を手に持った。

「しずく、マンコの穴、ママに犯されて痛いだろう。もうおっぱいの針山くらいじゃ駄目だろう。もっと痛い方がそっちに気がいくから良いよな。今からしずくのおっぱいを二つとも串で貫通するからな。相当痛いからマンコの痛み忘れられるぞ」

男はしずくの小さな胸の膨らみの横から鋭く太い串の先を当てる。そして、乳首を上に引っ張り上げ、しずくの胸の横に串をズブッと突き刺した。

「んんごおぉぉぉーーーーっ！！！」

しずくは絶叫し激しく暴れ逃れようとするが、両腕を拘束されている上、大人の男の力で押さえ付けられては女子小学生のしずくの力では動く事も出来ない。しずくは泣き叫びながら胸の膨らみにズブズブと串を突き刺されていく。

プツゥッ

しずくの左胸を貫通した串は、次にそのまま右の胸の膨らみにも切っ先が当てられ突き刺される。

「んぐうぅぅぅぅーーーーっ！！！」

そして、しずくの胸に横一直線に串が貫通していた。その、しずくの哀れな姿を見た女は頂点に達していた。

「イ、イグゥゥゥッ！」

プッシャァァァーーーッ

女はしずくの中に潮を吹いていた。しずくは性器と胸を襲う激痛で号泣しながら、ビクビクと体を痙攣させている。するとそこへ離れのドアを開けて理恵が入って来た。

「ナイスタイミング、加納さん。代わって貰って良い。まだ、しずくを犯し続けるから」

「はい、畏まりました。それでは、わたくしが代わりましてしずく様の膣穴を犯しましょう」

理恵はスカートを捲ると下着は着けておらず、すでにペニスバンドが装着されていた。それは女が装着していた物と同じ、ペニスの先端から潮を吹く事が出来るペニスバンドだった。

「ああ、加納さん。このアダプタを付けて貰えるかしら。もう、しずくの膣穴はかなり裂けているから、もう一回り太くしてもっと裂いてあげたいのよ。最初の調教は大事だからね。しずくにも、中途半端じゃなくて徹底的にやられるという事を覚えて貰いたいの」

「畏まりました」

理恵は、自分のペニスの上に特大のアダプタを被せていく。それはもう大人の拳程の太さになっていた。しずくは破瓜を迎えたその日に、フィストファックもやられるような激しい調教を受ける事になる。

「それでは、しずく様。お覚悟を……」

理恵はペニスの先端を、しずくの血塗れの膣口に当てる。

ズリュウゥゥッ！

ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチッ、ブチィィーーッ

「ふんぎゃあぁぁぁぁぁーーーーっ！！！」

盛大に膣穴を引き裂かれしずくは断末魔のような悲鳴を上げ、失神してしまった。哀れにも、しずくはビクンビクンと大きく体を痙攣させている。それでも、勿論しずくの調教は終わらない。しずくの体は、運ばれてきた台の上に載せられ、本革のベルトでしっかり固定されてしまった。そして、しずくは失神したまま、また代わる代わる犯され続けていた。

ジュポッ、ジュポッ、ジュポッ、ジュポッ

しずくの膣穴が犯され、裂かれる音が響いていた。女二人のペニスバンドのペニスにはどんどん太いアダプタが着けられ、男も自分の男根にサックを被せ太くしていく。もう、しずくは大人の太もも程もあるペニスで膣穴を貫通され裂かれていた。さらにしずくのツルツルの恥丘にも針が何本も射ち込まれる。そして、その針もライターの火で炙られる。幼いしずくにとって地獄のような時間が過ぎていった。

「処刑される時、すぐ死んでしまって興醒めされてはいけないからな。耐性をつけておかないとな」

「そうね。改めてゆかりは凄い娘だったと思うわね。しずくも、ゆかり以上になって貰いたいわ」

男と女は、しずくを犯しながら楽しそうに会話していた。そして、日付が変わると男と女は理恵に、あとはお願いしますと告げ自分たちは、快適に過ごしているタワーマンションに帰っていった。

★★★★

生まれて初めて膣を犯されて、激しい調教を受けたしずくはベッドの上で目を覚ました。そこは自分の部屋で、性器と胸はきれいに治療されていた。部屋の明かりは落とされ、そこにはもう両親も理恵の姿もなかった。しずくは自分の性器に手を当ててみる。まだ、自分の内にペニスが入っている感覚だったが、そこには何も入っていなかった。そして、ふと気付くと机の上のＰＣの電源が入りモニターに何か映っていた。ゆかりのＰＣ。蜂須賀彩音はパスワードが分からず起動出来なかったが、そこは腐っても両親であった。ゆかりがパスワードに使いそうな言葉を推察し、見事に起動させたのである。しずくは椅子に座るとＰＣのモニターを見る。そこには一人の眼鏡をかけた黒髪で三つ編みお下げの少女の顔が表示されていた。

「お姉ちゃん……」

渡邉ゆかりと書かれた画像を見てしずくは、それが姉のゆかりであると理解した。そして、机の横に置かれていたリボンのかけられた箱に気付く。

「パパとママのプレゼントだ」

しずくが包装をといて開けてみると中には巨大なディルドゥが入っていた。添えられていたカードには、「お誕生日おめでとう。これ

を毎日使ってオマンコの穴を調教してね。しずくはお利口さんだから分かるよね。パパとママはしずくが大好きです」と書かれていた。しずくは、あんな酷い事をされながら“大好き“と書かれていた事が嬉しくて感激していた。

・・しずくも大好き。プレゼント、ちゃんと毎日使います・・

しずくはディルドゥを手にしながら再びＰＣを見る。デスクトップには動画ファイルが幾つも置かれており、しずくがクリックしてみると、それは姉のゆかりが自分で撮影した自虐自慰の動画だった。しずくは、その動画ファイルに引き込まれるように飽きることなく見続けていた。

・・私もお姉ちゃんみたいに立派なメスにならないといけないんだ・・

しずくは、ゆかりの動画を観て興奮している自分に気付いた。膣穴が子宮がズキズキと何かを求めるように疼いていた。しずくは、ゆかりの机の引き出しの奥からバラ鞭を発見した。ゆかりの動画に映っていたのと同じ場所に鞭は隠されていた。しずくは鞭を持つと立ち上がり足を開いた。そして、自分の開いた股間に思い切り鞭を叩き込んだ。

パシィィッ！

「あうぅぅぅっ」

しずくは自分の性器を鞭で打ち、その激痛と快感に悶絶していた。そして、鞭打つ手を止める事が出来ず、自分の割れ目を鞭で打ち続けていた。

（注）しずくの姉ゆかりの脳を犯す為に使用したペニスバンド。尿道と肛門にチューブを挿入し、ペニスの先端から潮や大便を吹き出せる仕様になっている。詳しくは「檻の中の幸福ゆかりの章」３１話参照でお願いします。

3、暴行

3、暴行

「渡邉さん、またねぇ。サヨナラ」

「うん、また明日ね」

一緒に下校していた本多茜と別れたしずくは、一人で自宅まで歩き出した。しずくは淡いブルーのワンピースを着て、ワンピースの下には黒いスパッツを穿いていた。そして、黄色い帽子を被り赤いランドセルを背負ったしずくは公園の中に入って行った。この公園はゆかりのパソコンに入っていた日記なのか覚書なのかに頻繁に登場する公園だった。

・・お姉ちゃんが好きだった公園。あの林がお姉ちゃんが一人エッチしていた林かなぁ・・

しずくは林に向かって歩きながら、他の事も考えていた。

・・お姉ちゃん、歩きながらおしっこすると気持ちいいって書いてあった。私もやってみよう・・

しずくは歩きながら下腹部に力を入れた。

「あっ……」

しずくは小さく声を上げる。しずくの股間からチョロチョロと尿が漏れ、スパッツに染みが拡がっていく。

・・気持ちいい……。本当に気持ちいいよ、お姉ちゃん・・

しずくは歩きながら放尿し、顔を火照らせていた。股間は尿以外のものでも濡れ初めている。

「ハァハァ、ハァハァ」

しずくは息が荒くなっていた。そのしずくの前に急に人影が現れる。しずくが顔を上げると、三人の男がしずくの行く手を遮っていた。

「お嬢ちゃん、おしっこ漏らしちゃったのかい。お兄さんがパンツ替えてあげるよ」

一人の男が目をぎらつかせながら言い、他の二人がしずくの両側から腕を掴む。しずくはそのまま公園の林の中に連れ込まれてしまった。

「お嬢ちゃん、お利口だから分かるよね。大人しく俺たちの言うことを聞いていれば、すぐに済むよ。まずはスカートを捲って、足を大きく開いてね」

男は優しいが有無を言わせぬ口調でしずくに命令する。しずくは震えながらスカートを捲り上げ足を開く。しずくのスパッツに尿がぐっしょりと染み込み、そこに顔をつけて匂いを嗅いだ男は、尿以外の匂いにも気が付く。

「良いねぇ、お嬢ちゃん。まだ小さいのに期待しているのかよ。マンコ、濡らしてるじゃないの」

男はしずくの顎を手でグイッと握ると顔を上げさせた。

「ち、違いまちゅ……」

「へへっ、違いまちゅ、だって可愛いねぇ。お嬢ちゃん、いくつ？」

しかし、答えないしずくに頭に血が登った男は、しずくの頬を平手で打つ。

パァーンッ！

激しい音が響き、しずくの目から涙が零れるが、それでも口を開かないしずくを男はさらに激しく頬を打つ。

パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ！

「ひぐぅっ、9才でちゅぅ」

「9才かぁ……。こんな小さい娘は、俺も初めてだなぁ」

男は自慢のナイフを取り出す。ナバリスのトライデント。バタフライナイフと呼ばれるナイフで男はしずくのワンピースを切り裂いていく。

「ううっ、やめてぇ。これはお姉ちゃんのお下がりのワンピースなの」

しずくは抵抗するが男の力にかなう訳もなく、ワンピースを剥ぎ取られ、スパッツと下着もズタズタに切られ下腹部を晒される。そして、男二人がかりで左右の足をそれぞれ持ち上げらる。さらに男の手で口を押さえられ塞がれた。

「おぉ、良いねぇ。見事なツルツルマンコの一本スジだな」

男は我慢出来ないというように、自分のイチモツをポロリと出すと、しずくのスジをくぱぁと開き膣穴に鬼頭を当てる。

「ひひっ、お嬢ちゃん、いくよ」

男は下卑た笑いを浮かべ、しずくの膣穴に乱暴に突き入れた。

ズリュゥゥッ！

「うん……？」

男は不思議そうな顔をする。他の男が、どうしたと顔を向けるが、しずくを犯している男はそのまま腰を振り、しずくの中に放出した。

ドピュッ、ドピュッ

男はずるりとしずくの膣穴から自分のイチモツを抜くと、お前らもやってみろと場所を譲った。その後、二人の男が順番にしずくを犯すが、どちらも不満を顔に表す。

「このガキ、９才なのにガバガバだぞ。どうなってる、破瓜の血も出ないし」

しずくは両親の言い付け通り、毎日贈られたディルドゥを使い膣を拡張していたので、この男たちの普通より小型の陰茎では、快感を得る事も出来なかった。男たちは、しずくに馬鹿にされたように感じ、しずくの首にロープを巻くと、両腕と両足も動かせないように縛りつけた。そして、近くの丈夫そうな木の枝に吊るしてしまった。首吊りにされたしずくは涙と鼻水を流し、苦しそうに口を開け舌を突き出している。

「このクソガキ、なんか気に障るからバラしちまおうぜ」

「いいね。へへっ、写真撮っとけよ。もう少しすればションベンとウンコも漏らすぞ」

男たちは期待していたが、しずくは首を絞められて変な声を出していた。

「えひっ、えひっ、えひっ、えひっ」

なんだコイツと男たちが見ていると……。

プッシャァァァーーッ

なんと、しずくは勢いよく潮を吹き出していた。

「お、おい、このメスガキ。ションベン漏らすんじゃなくて、潮吹いたぞ」

「首吊られて潮吹くメスガキなんているのか」

男たちが狼狽えていると大声が響いた。

「あなたたち、何をしているのですかっ！」

怒気を含んだ声で男たちが振り向くと、林の中に淡いブルーのボウタイブラウスにグレイの柔らかな巻きタイプのスカートをコーディネートした細身の女性が立ち、男たちを睨み付けると首を吊るされているしずくに向かって一直線に駆け出していた。そして、ステンレス鋼の鋭いメスでしずくの首を吊っているロープを切断する。しずくを抱き抱えて地面に降ろした女性は、すぐに首のロープをほどき気道を確保する。唖然として見ていた男たちは、我に返り女性を取り囲んだ。

「おいおい、姉さん。せっかく楽しんでいるのに何すんだよ。さっさと消えろよ」

「このクソガキの代わりに、この姉さんで楽しむのも良いんじゃないか」

「それは良いな。この姉さんの方がマンコの具合良さそうだ」

しかし、女性はしずくの前から動こうとしない。すると、しずくがゲホゲホと気が付き女性の姿を見る。

「り、理恵さん……」

「しずく様、御安心下さい、わたくしがお守りします。しずく様は隙をみて、ランドセルに下げている緊急通報ボタンを押して下さい」

理恵はしずくに小声で告げると立ち上がり、男たちを睨み付けると特殊警棒をシャキーンと伸ばした。

「あら、この姉さん、俺たちとやる気なの」

男たちは馬鹿にしたように理恵を見る。

「あまり、わたくしを甘くみない方がよろしいですよ」

理恵はスッと動くと一人の男との間合いに入り特殊警棒を脛に叩き込む。

「あぎゃーーっ！」

男は脛を押さえて絶叫し地面に転がった。それを見て残った男たちの顔つきが変わった。

・・多人数との闘いは、まず相手の機動力を潰す。しずく様はわたくしが守ります・・

理恵は次の男に狙いを定めるが、男たちも警戒レベルを上げバタフライナイフを手にしていた。刃物を持った相手には迂闊に飛び込めない。理恵は右手で特殊警棒を持ち、左手を背中に回し巻きスカートのホックを外す。そして、男たちに向かって脱いだスカートを投げつけた。男たちは一瞬視界を遮られ理恵の姿を見失う。理恵は一人の男の鳩尾に突きを入れ、すぐに次の男に特殊警棒を叩き込もうとしたが残った男は闇雲にナイフを突いてきた。そんなものに当たる理恵ではなかったが鳩尾を突かれた男が呻き声を上げ倒れ理恵にぶつかってきた。一瞬、気を取られた理恵の左の太ももにナイフが突き刺さっていた。理恵は歯を食いしばり激痛に耐えながら退こうとしたが、そこへ男のアッパーカットが理恵の顎にヒットした。

「おぶうぅぅーーっ」

理恵は悲鳴を上げ地面に倒れていた。男は仰向けに倒れた理恵に馬乗りになると、理恵の顔面を殴り付けた。

バキャッ、バキャッ、バキャッ、バキャッ、バキャッ、バキャッ

もう抵抗も出来ずに顔面を殴られ続ける理恵の横に、最初に脛を殴打された男がヨロヨロと立ち上がってきた。

「この、クソアマ。殺してやる」

男は殴られ続ける理恵の右腕を掴むと間接を極め、バキッとへし折った。

「あぎゃあぁぁぁーーーっ！！」

腕を折られ絶叫した理恵は、チョロチョロと尿を漏らしてしまった。もう理恵の顔面も血と涙と鼻水で汚れ、ボコボコになっていた。男はようやく殴るのを止めると、ズボンを下ろしていた。

「犯しまくってやるよ」

男は凶悪な目で理恵を見下ろすと、理恵の漏らしてしまった濡れた黒い下着を剥ぎ取り、理恵の口の中に詰め込む。そして、理恵の膣口に自分の性器を当てた。

ズリュゥゥッ！

「ふぐっ……」

理恵の膣に男の陰茎が根元まで突き刺されていた。

「おっ、この女。あのメスガキより具合良いぞ」

男は嬉しそうに激しく腰を振る。もう一人の男は理恵の顔の上に立っていた。

「そんなに顔が腫れたら火照って暑いだろう。冷ましてやるよ」

男は理恵の顔面にジョーッと放尿していた。

「あははっ、さっきの勢いはどうした」

男は、腕を折られ顔面に小便を浴びせられ犯されている理恵を見て爆笑していた。そして、男は理恵の中に射精する。

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

一人の男の行為が済むと、次の男が理恵を犯す準備に入る。

「おい、脚押さえておいてくれよ」

「また、あれやるのか。そこまでしなくても、この女、そこそこ具合良いぞ」

「いいだろ、俺の趣味だ」

大きく脚を開いて押さえつけられた理恵の丸出しの性器の左右の小陰唇を摘まんだ男は、その理恵の小陰唇に安全ピンを突き刺し左右

まとめて留める。

「ふごおぉぉぉっ！」

悲鳴を上げる理恵の小陰唇に男は、もう一本安全ピンを留める。

「こうするとマンコの絞まりが良くなるんだ。お前らもこれでやれよ。少し緩くなったら、もう一本安全ピンを使って留めればいい」

男は楽しそうに笑い、理恵の膣に陰茎を突き入れた。その後も、理恵は男たちに交互に犯され続けた。

4、遭遇

4、遭遇

理恵は男たちに犯され続けていた。理恵の小陰唇には、もう１０本もの安全ピンが突き通され、左右の小陰唇が縫ったように、まとめて留められてしまっている。それだけではなかった。興奮した男たちは、理恵を全裸にし乳首や乳房にも安全ピンを留め、クリトリスや大陰唇、恥丘にもプチプチと安全ピンを留め理恵の体をまるで物のように飾り立てていた。何度も犯された理恵の膣穴からは白い精液が溢れ出している。それだけではなく理恵は肛門と口腔も犯され、そこからも白い精液を溢している。理恵はもう死んだようにグッタリとして動かなかった。

「確かに安全ピンでマンコ留めて犯すと絞まりが良くなるな」

「そうだろう。少しは俺を尊敬しろよ」

「でも、さすがに飽きてきたな。そろそろ殺すか」

男たちは、グッタリしている理恵の手足を近くの木々に縛り付け大の字に固定する。そして、理恵のボコボコにされた顔面と犯された性器に液体燃料を振りかけた。

「これでサヨナラだな。顔突っ込んでこなければ、まだ生きてられたのにな、馬鹿な女だ。惨めに死ぬ事になって後悔してるだろう」

「まあ、でも最後にこれだけ全部の穴、犯して貰えたんだ。満足したんじゃね」

「ははっ、違いねえな。おーい、最後に言い残す事はあるか」

理恵は腫れ上がり塞がってしまい涙が溢れる目を僅かに開ける。

「わたくしが、しずく様を守ります……」

男たちは呆れたように理恵を見つめる。

「馬鹿か、お前。もうお前は死ぬんだよ。顔とマンコを燃やされてな。お前が死んでからガキもゆっくり殺してやるよ」

男は残酷に言い放つが、理恵は笑みを浮かべる。

「それを聞いて安心しました」

「はぁっ？」

男たちは意味が分からなかったが、理恵は自分が出来るだけ長く生きていれば、しずくが殺されるのがそれだけ遅くなると考えた。そして、男たちは手足を縛られているしずくが何も出来ないだろうと考えているが、理恵はしずくがランドセルにぶら下げている緊急通報のボタンを口で噛んで押しているのを見ていた。一番近い派出所からここまで警官が駆けつけて来るまで、少しでも粘ろうと考えていた。文字通り、命をかけてしずくを守るつもりだったのだ。そんな理恵の気持ちなど解る筈もなく、男たちは笑いながら理恵の顔面と性器に火を点ける。理恵の顔面と性器から、燃料が燃え青い炎が

立ち上がり、陰毛が焼ける嫌な臭いが周囲に広がった。

「あははっ、この女、顔とマンコ燃えてるよ。もしこれで万が一生き延びても、もう女として終わりだな」

「いや、待てまて。もう1ヵ所残ってるじゃないか」

男は理恵の二つの胸の膨らみにも液体燃料をかけ点火した。理恵の胸からも炎が燃え上がる。

「これで、もう完全に女終わりだ。コイツはもう女として使い物にならないな。苦しんで死ね」

男たちは理恵の哀れな姿を見て爆笑していた。理恵は苦しみから叫びたいのを必死にこらえていた。もし叫んで炎や熱波を吸い込んでしまったら、肺の中が焼け即死するだろう。少しでも長く生きるには息を止めるしかない。理恵は、顔面と性器と胸を焼かれる苦痛に耐えながら手足を暴れるように動かし自分が生きている事を男たちにアピールしていた。

「あははっ、狂ったように暴れてるな」

「顔とマンコと胸、焼かれて本当に狂ったんじゃないか」

「どこまで生きていられるか、楽しみだな」

しずくは木の陰で、理恵が残酷に殺されていく様子を見て震えながら涙を流していたが、女の大切な処を燃やされている理恵を見て性器から粘液も垂れ流していた。

・・私が、こんな男に捕まらなければ理恵さんは、こんな目に会わずに済んだんだ。みんな私のせい……。お巡りさん、早く来て……。でもなんで私のオマンコ、熱くなってるの・・

理恵の手足の動きがだんだんと弱々しくなってきていた。

「もう、この女、死ぬだろう。ガキも早く吊るしちまおうぜ」

男たちは、理恵に言った言葉も守らず、理恵が絶命するのを待たずにしずくを吊るしにやって来た。しずくは男たちに持ち上げられ、また木の枝に吊るされようとしている。その時、男は背後から腕を掴まれていた。

「なんだ?」

男が振り向こうとした瞬間、間接を逆に極められ投げ飛ばされる。しずくの眼に、黒いスーツに黒いタイトスカート、黒いストッキングに黒いヒールを履き、茶色がかった髪をボブにした冷たく恐ろしい目をした女性が映っていた。そして、その女性の背後にいた同じく黒いスーツを着た男性が、理恵の下に駆けつけ火を消していた。

「かはぁっ」

理恵は息を吸って、スーツの女性の姿を見た。

・・あのお方が、どうしてこんな処に・・

理恵は、まだ信じられなかった。それは、ここにいる筈のない女性の姿だった。男たちは再び入った邪魔に激怒していた。投げられた男も立ち上がるとバタフライナイフを手にした。他の二人も既にナ

イフを手にして女性を囲んでいる。

「全く今日は邪魔が多いな。でもまあ、滅茶苦茶いい女じゃないの。この女もやっちまおうぜ」

「俺たち今日ついてるんじゃないの。なんか、やり放題じゃん」

「やった後、この女も殺しちまおうぜ。俺を投げやがって許せねえ。多少、合気道でも知っているからっていい気になっているんじゃねえよ」

スーツの女性は、ナイフに持った男に囲まれても余裕の表情に見えた。普通、凶器を持った人間に悪意を持って囲まれれば、萎縮してしまうのが当然だ。しかし、この女性は腕を組み堂々と立っている。

「私とやる？笑わせますね。あなたたちのような頭の悪いクズ、本来なら私の視界に入る事さえ許されませんよ。それに合気道？違いますね、私の武術は強いて言うなら〝鬼道〟とでも言いましょうか」

女性はユラッと体を動かした思うと、あっという間に男との間合いに入っていた。男は慌ててナイフで突くが女性は軽くかわす。次の瞬間、男は目、鼻、耳から血を噴き出して倒れていた。女性のハイヒールの爪先が男の急所、こめかみに見事にヒットしていたのだ。一瞬でタイトスカートを捲り上げ、下着を丸出しにしながらのハイキック。それを不安定なハイヒールで軽くこなしていた。

「この女、平気で殺しやがった。普通じゃねえぞ」

圧倒的に有利だと思っていた自分達の足場が崩れていく感覚があった。男たちは逃げ出そうとするが、その男たちの背後には理恵の応

急処置を済ませた黒いスーツの男が立っていた。

「近藤、手出しは無用ですよ」

女性の言葉で黒いスーツの男は頷いている。理恵は、男一人を瞬殺した女性を見て、本物だと確信した。

・・あのお方に、間違いない・・

男たちは、黒いスーツの男近藤よりも多少与し易いと思われた女性の方へ攻撃を仕掛ける。女性は一人の男のナイフを避けるが、間髪入れず次の男のナイフが迫る。

ズバァッ

血飛沫が飛び散った。女性は男のナイフを掌で受けていた。女性の掌をナイフが貫通している。しかし、女性はそのまま男のナイフを持つ手を握りしめ、グイッと引き込んだ。そして、バランスを崩した男の股間に鋭い蹴りを入れる。

グシャッ！

鈍い音がして男の睾丸が女性のハイヒールの直撃で潰されていた。男は白眼を剥いて泡を吹き崩れ落ちる。残り一人。だが、残った男はもう戦意喪失しナイフを地面に投げ捨てると許しを乞うように土下座していた。

「あらあら、大の男が情けない。ほら手を貸しなさい、起こしてあげるわ」

男がホッとしたように女性に手を伸ばすと、女性は男の指を握った。

パキッ

「うわぁぁっ」

指が折られ悲鳴を上げる男は背後から黒いスーツの男近藤に羽交い締めにされた。そして、女性は楽しそうに次々と男の指を折っていく。

「うぎゃぁぁぁーーっ！」

男の絶叫が響いている時に、しずくの緊急通報でやって来た警官が到着する。

「君っ、何をしているんだ」

若い警官が、男の指を折っていく女性を見て叫ぶが中年の警官が慌てて若い警官の口を塞ぐ。そして、中年の警官は直立不動の姿勢をとり、女性に向かって敬礼していた。その中年の警官の怯えるように震える表情を見て若い警官も敬礼していた。

「豪徳寺葉月（注1）様、ご苦労様でございます。若い警官が失礼を申しました。何卒、御容赦下さい」

葉月は、若い警官を冷たい瞳で見つめる。

「正義感に溢れた良い警官ではないですか。でも正義というのは人それぞれ……。あなたたち警察と私の正義は違う。私は自分の正義を執行しているだけ、お気になさらずに……」

「はい、申し訳ありません」

中年の警官は震えるだけではなく全身汗でびっしょりになっていた。若い警官もそれが伝染したのか震え始めていた。葉月は警官の見ている前で男の指を全て折ってしまう。

「このクズ男たちはまだ生かしてありますが、私が処刑します。クズに相応しい最後を与えてやりましょう。あなたたち、車まで運ぶのを手伝って貰えますか」

「はい、喜んで」

男たちは、黒いスーツの近藤と警官二人に運ばれていった。そして、公園の外に停めてあった黒塗りのベントレーのトランクに詰め込まれる。公園に残った葉月はしずくを見つめていた。

「私は、渡邉ゆかりが今でも忘れられずに、渡邉ゆかりが変態行為を行っていたというこの公園にたまに訪れているのですよ。渡邊ゆかりを思い出してオナニーする為にね」

葉月は、しずくの前にしゃがみ込むとニコリと微笑んだ。

「お嬢さん、お名前は？」

優しくしずくに声をかける葉月だったが、しずくは本能的にこの女性に逆らってはいけないと瞬時に理解した。

「わ、渡邉しずく、です」

しずくの声は震えていたが、はっきりと答えていた。葉月は満面の笑みを浮かべると今度は理恵に目を向ける。

「あなたの名前は？」

「は、はい、葉月様。わたくしは加納理恵と申します」

「そうですか、加納さん。この娘を、大輪の花が咲くように立派に育てて下さいね。渡邉ゆかりは１３才で大成しました。この娘も１３才になる頃には良い状態に熟れているでしょうね。想像するとゾクゾクするわ」

葉月は股間に手を伸ばし下着の上から性器を擦っていた。そして、理恵がロープを切断するのに使用した木の根元に落ちているメスに目を止める。

「あら、そのメスは……」

「はい、葉月様があの時（注２）使用されたメスです。わたくしでは他のものを落札する事が出来ませんでしたが、どうしても記念に何か一つ手に入れたかったのです。幸い、このメスを落札する事が出来ましたので光栄です」

「あなたも、あの時会場にいたのですね」

「はい、至福の時間を過ごさせて頂きました」

「そうですか。それで、この娘を……」

「はい、渡邉夫妻に頼み込みお世話をさせて頂く夢が叶いました」

「あなたの虫けらのような命でも、この娘を守る為に役立ったようですね。先程は見事でしたよ。この娘を守ってくれて感謝します。私の宝を守ってくれたお礼に、渡邊ゆかりの真っ二つにした子宮の左側を差し上げましょう。少しは手元に残しておきたかったのでオークションに出品せずに取っておいたのですがね」

「わたくしごときに……。よろしいのですか、葉月様」

「ええ、そのかわり今日のように、この娘の為には命を捨てなさい。この娘の命は、あなたの命と比較にならないほど貴重なのですから」

葉月は、そう言うとしずくの頭を優しく撫で車に向かって歩き始めた。

「私の宝を壊そうとしたあのクズどもには、すぐには殺さず地獄の苦痛を与えてゆっくりと処刑しましょう。全く不愉快極まりない連中です」

小さくなっていく葉月の後ろ姿を見送りながらしずくは、いつか自分はこの女性にオマンコ壊されて処刑される、と漠然と感じていた。

（注1）この作品の「一部・渡邉ゆかり」にも時々登場する豪徳寺葉月は「檻の中の幸福」の主要キャラです。「真弓の章」「秋穂の章」以外に登場する主役と言っていいキャラクターかも知れません。また「スク水少女戦士ウテルス」では黒幕として最後に正体が判明します。

（注2）「檻の中の幸福」で、葉月がゆかりの膣を切り裂いたメスである。

5、回想（前書き）

すいません。
今回、変態シーン、エッチシーン共ありません。
ごめんなさい。

5、回想

5、回想

しずくは日課のディルドゥによる膣穴拡張を済ませ、離れから母屋に向かった。母屋では顔に包帯を巻いた理恵が、朝食を並べていた。といっても、理恵は右腕がまだ完治していない為、出前で配達して貰った店屋物を並べているだけだったが、しずくは慌てて理恵の前に回り自分で袋から取り出し並べ始めた。

「理恵さんは座っていて、私が並べるから大丈夫」

しずくは、二人分の朝食を並べていく。今日はハンバーガーにポテト、それにナゲットとサラダにジュースだった。

「頂きます」

朝食を食べ始めた二人は、互いに何か言おうとして口を開き顔を見合わせて止まっていた。

「しずく様が、この家の主人でありますから、どうぞ先に仰って下さい」

しずくは包帯に巻かれた理恵の顔を見つめると、ごめんなさいと頭を下げた。あれから毎日しずくは理恵に謝っている。

「謝る事はありません。わたくしにとってしずく様が無事だった事が何よりです」

理恵もいつもの返答をするが、このままでは、いつまでもしずくは責任を感じてしまうだろうと考えた。

「しずく様は責任を感じる事はありませんよ。これはわたくしが自分で望んでした事です。わたくしは、しずく様のお姉さま、ゆかり様に大恩を受けました。それを妹さまであるしずく様にお返ししているだけなのです。ですので、わたくしの事は気になさらないで大丈夫ですよ」

「お姉ちゃんの事を知っているの」

「はい、知っております。ゆかり様はわたくしにとって憧れのお方。まさに雲の上の存在です。あの葉月様にも気に入られ、多くの人に興奮を与えてくれたのですよ。わたくしもゆかり様のように成りたかった。でも、私は成れなかった。ゆかり様は太陽のようなお方、対してわたくしはその太陽の熱で干からびていく哀れなミミズのような存在です。ゆかり様の最後の時、わたくしはゆかり様のご学友の隣にいました。そして、運ばれていくゆかり様はわたくしの顔を見て下さった。その時のゆかり様の表情は忘れた事がありません。ゆかり様は泣き叫んでいましたが、わたくしにはまるで信じるものの為、命を捧げる殉教者のような全てを超越した表情に感じられました。わたくしは思ったのです。わたくしも信じるものの為に命を捧げようと。わたくしはゆかり様の妹さまであるしずく様を守り育てる事を信念としました。しずく様を、ゆかり様以上のメス奴隷に育てる。それ以外にわたくしの望みはありません。ですので、しずく様が、わたくしを案ずる必要はないのです」

話し終わった理恵は、オレンジジュースを口に含んだ。しずくもジュースを飲むと口を開いた。

「お姉ちゃんの最後ってどうだったの？お姉ちゃんはどうして死んじゃったの？」

「しずく様、それはしずく様がもう少し大きくなられてからお話ししますね。今、話してもまだしずく様には理解が難しいと思いますので」

「そう、なんだ……」

しずくは、またジュースを口に含んだ。

「じゃあ、その時がきたら絶対話してね、理恵さん」

「勿論ですよ」

二人は、それからハンバーガーを食べ、ポテトとナゲットを摘み、サラダをシャクシャク食べていた。

「あの、理恵さん」

「何ですか？」

「パパとママはオマンコの穴におチンポを入れて貰うと気持ちよくなるって言ってたけど、あの変な男の人のおチンポ入れられた時、全然気持ちよくなかったの。でもね、首吊りされた時、凄い気持ちよくてオマンコが熱くなったの。それと……」

「どうしました？」

言葉に詰まったしずくを見て理恵は訝しむ。

「あのね……。理恵さん、怒らないでね。私、理恵さんがオマンコ燃やされてるの見て、オマンコ濡らしちゃったの」

しずくは申し訳なさそうに言うが、理恵は微笑んでいた。

「ふふふ、嬉しいですよ、しずく様。やはり、しずく様はゆかり様の妹ですね。しずく様は、メス奴隷としての資質を持っているという事です。わたくしのオマンコが燃やされているのを見て、しずく様は御自分のオマンコが燃やされていると感じ濡らしてしまったのですよ。しずく様もオマンコ燃やされたかったのだと思いますよ。わたくしの腕が治ったら、調教のお手伝いが出来ますので、それまでは、ゆかり様の動画を参考に自慰なさって我慢していて下さいね」

「うん、分かった」

しずくは元気に答えると、最後のナゲットを口に放り込んだ。

★　★　★　★

しずくを学校に送り出した後、理恵は豪徳寺葉月の屋敷に向かっていた。そして、葉月の屋敷に着き、来意を伝えるとメイドが葉月の部屋まで案内してくれた。

「どうですか、あの娘の状態は？あの夫婦、私に娘の存在を黙って

いたのですよ。私も渡邊ゆかりは一人っ子だと確認していましたので、まさかあの後に子供を作るとは想像もしていませんでした。それで私に黙ってオークションに出品して価格を吊り上げようとしていたのですよ。本当にクズな夫婦ですから処刑したい処ですが、あの渡邉ゆかりの両親で、あなたの雇い主でもある訳ですからね思いとどまりました」

「申し訳ございません。わたくしもしずく様の事は内密にと申し付けられていましたので」

「渡邉ゆかりの妹となれば、それこそ喉から手が出るほど欲しいという者が多いですからね。あなたも色々気を付けた方が良いでしょう。斎藤という男がいます。渡邊ゆかりの脳を最初に犯し、絶命させた男です。その男が、あの娘の存在を知ったら、手に入れようとするでしょう。もし、何か困った事があったら遠慮なく言ってきなさい」

「ありがとうございます。心強いです。それと、あのう……。この、ゆかり様に触ってもよろしいでしょうか」

理恵は葉月の部屋に展示してある渡邉ゆかりの剥製に触れたくて仕方がなかった。

「ああ、良いですよ。ただし、気を付けて下さいよ。この世に一つしかない本物ですからね」

「はい、ありがとうございます」

理恵は興奮で卒倒しそうであった。理恵は震える手でゆかりの剥製に触れる。

・・ううっ、ゆかり様・・

理恵は、我慢出来なくなりゆかりの唇に自分の唇を重ねていた。

・・しずく様を育てあげたら、わたくしもゆかり様の“後“を追います。その時はどうかお側に置いて下さい・・

理恵の瞳からは涙が溢れていた。

★
★
★
★

約束通り葉月から、ゆかりの子宮の入った硝子瓶を貰った理恵は有頂天だった。

・・これから、ずっとゆかり様と一緒にいられる・・

理恵は年甲斐もなくスキップを踏んで歩きたい気分だった。理恵は幸せの頂点にいるように感じた。しかし、気をつけなければいけない。頂点まで登ってしまったら後は堕ちるだけなのである。その頂点を維持するためには、揺るがない信念と、折れない強い心が必要になる。理恵には信念はあるだろう。後は強い心を持ち続けられるのか。そこに、かかっている。高い頂きに立つほど、堕ちる時は真っ逆さまに堕ちていく。理恵にとって、しずくが立派なメス奴隷に育たなかった時、全てが崩れ去ってしまうだろう。

★
★
★
★

男と女は意気消沈していた。

「あの豪徳寺の奴、どこでしずくに会ったんだ。勘付かれないように、なるべくしずくに会わないようにしていたのに」

「仕方ないわね。あとは加納さんに、しずくをなるべく変態に育てて貰って金額吊り上げるしかないわね」

「まあ、また大金が手に入るのは間違いないから良しとするか。そうしたら世界一周でもするか」

「あっ、私。マチュピチュに行ってみたいわ」

男と女は、楽しそうに会話していた。この男と女にとって、しずくはただの商品だった。少しでも高く売りつける。それしか頭になかったのである。

こうして、しずくは本人の知らないところで争奪戦に巻き込まれていく。それは、ゆかりの時には想像さえ出来ない事態であった。

6、発覚

6、発覚

しずくは部屋の押し入れで見つけたボックスを漁り、幾つかの器具を見つけていた。どうやら、ゆかりが使用していた器具のようだった。スチール製の下着のような器具に鍵が付いている。そして、股間に当たると思われる部分には、２本のプラグが突き出ていた。１本は直径３センチ位の太さで、長さが１０センチ程でお尻の穴に入れる物とすぐに分かったが、もう１本が分からなかった。太さが８ミリ位で、４センチ位の長さだった。

・・オマンコの穴じゃないよね。位置が違うし、小さ過ぎるもん・・

しずくは分からないので実際に穿いて確かめてみた。

・・おしっこの穴だ。この前のプラグはおしっこの穴に入れるんだ。これは、おしっこの穴とお尻の穴を塞ぐ為の器具なんだ。お姉ちゃんも、これで二つの穴を塞いでいたんだよ・・

ようやく理解したしずくは、今日学校に行く前に穿こうと考えていた。

・・今日は体育の授業はないから大丈夫だよね。学校に行く前に穿いて鍵かけて、鍵は机の中に入れておけば帰ってくるまで脱げないからちょうどいいよ・・

しずくは、姉であるゆかりと同じ行為を行うのが嬉しかった。自分の姉のゆかりという存在を知ってから、ゆかりを知る全ての人がゆかりを絶賛していた。しずくの信頼する理恵も、ゆかりを崇拝していると分かってからは、それまで以上にゆかりの様になりたいと思っていた。しずくは、ゆかりを目標に据え、その生き方もトレースしようとしていた。だから、ゆかりがやっていた事は全て経験しようと思っていたのだ。幼いしずくには、一人では出来ない事もあるだろうが、協力者の理恵がいる。無理な事は理恵に頼めばいい。幼いしずくはゆかりと違い、まだ自発的に自分の性器を痛め付けようというのではなく、とにかくゆかりの後を必死に追いかけようとしていた。

・・お姉ちゃんみたいな、みんなに凄い人と言われたい・・

しずくは綿の下着を脱ぐと、スチール製の貞操帯を装着していく。肛門にはニュルリとすんなりプラグが装着出来たが、尿道の方は激痛があり、なかなか奥まで入らない。通常はプジーを使い、少しずつ調教し拡張していくのだが、経験のないしずくには辛いものがあった。

・・おしっこの穴、痛い。痛いよ。でも、お姉ちゃんも痛いの我慢してたんだよね。しずくも頑張るよ・・

しずくは涙を流していた。本来はアナルプラグにはローション、尿道詮には滅菌ジェルを塗布するものだが、そのような知識もまだないしずくは、何もつけずにそのまま挿入していた。当然、激痛が尿道を襲う筈である。それに無菌である膀胱にプラグを直接入れてしまえば雑菌が入り込み、後で膀胱炎になる可能性は高かった。

「あぐうぅぅーーっ」

それでも、しずくは無理矢理自分の尿道にプラグをスッポリ挿入してしまった。尿道がヒリヒリしてしずくは経験した事のない感覚に戸惑うが、そのまま貞操帯をカチッとロックしてしまう。そこで、しずくは鉄板に覆われた自分の割れ目を見て気が付いた。

・・もう、オマンコ触って気持ちよくなる事も出来ないんだ。これ、オマンコも封印しちゃうんだ・・

ロックする前にオナニーしておけば良かったと思うが、もう後の祭りである。やり直すほど時間も残ってない。しずくは急いでお気に入りのゆかりのお下がりのミニのワンピースとスパッツに着替えを済ませ、母屋に向かうと理恵からランドセルを受け取り、行ってきますと登校していった。

集団登校の集合場所に着くと上級生が列を作るように下級生たちを並べていく。しずくの同級生の本多茜も走ってきた。

「渡邉さん、おはよう」

茜が元気に声をかけてくる。しずくも元気に挨拶を返していた。そう、しずくは元気だった。この時はまだ。だが、しずくにとって長く苦しい一日の始まりだった。

★　★　★　★

・・ううっ、おしっこしたい。お腹、破裂すりゅう・・

４限目の途中からしずくはトイレに行きたくて仕方がなかった。下腹部が痛くなり、脂汗が浮き出ていた。昼になると茜が、様子のおかしいしずくに気付き心配して声をかけてくるが、しずくは大丈夫と引きつった笑顔で答えていた。お腹が痛いなどと保健室に行ってしまったら、貞操帯を着けているのがバレてしまう。別にバレる事など気にしないしずくであったが、姉のゆかりが耐えた調教を自分が耐えられなかったら、ゆかりに対して申し訳ない気持ちになってしまう。

・・お姉ちゃんは、やっぱりしゅごいよぅ・・

しずくは椅子から立ち上がる事も出来ず、下腹部を押さえて耐えていた。が、脂汗がダラダラと流れ落ち、スーッと意識が遠くなっていった。

★
★
★
★

まだ、下校時間でもないのにタクシーで送られ、白衣を着た保健の先生に背負われて帰ってきたしずくを見て、理恵は飛び上がっていた。葉月に注意されていた、しずくを狙う奴らに何事かされたのかと慌ててしずくの下に駆け寄ろうとしたが、保健の先生が大声で叫ぶ。

「鍵っ！早くっ、膀胱が破裂しちゃいます」

背負われているしずくのワンピースの下に貞操帯を確認した理恵は、すぐに理解して離れの部屋に飛び込み机の引き出しから鍵を見つけ

出した。そして、しずくをベッドの上に寝かせ、先生に足を開いたまま押さえて貰うと、貞操帯のロックを外してプラグをズボッと引き抜く。本当は柔らかな尿道を傷つけないように、慎重にゆっくりと抜くものであるが、そんな余裕はないと理恵は判断した。

プシャァァーーーッ

プラグが抜けた途端、しずくの尿道から大量の尿が噴き出していた。しずくの小さな体の中に、こんなに溜まっていたのかと思う程の量だった。

★
★
★
★

しずくが気が付くと、そこは母屋の畳の上に布団を敷かれて寝かされていた。ダイニングのテーブルで理恵と白衣を着た人が話しているのが見える。

・・保健の先生だ・・

そこで、しずくは貞操帯が外されているのに気が付いた。

・・私、気を失っちゃったんだ。私のおしっこの穴やお尻の穴、封印している姿、茜ちゃんにも見られちゃったのかな・・

しずくは、自分の無様な姿をクラスメイトに見られたと思うと、興奮している自分に気付いた。自分の性器が火照っている感覚にしずくは更に興奮する。

・・私、みんなの見ている前で恥ずかしい事したいのかも……。みんなに見られていると思うと興奮するよ。今度、教壇の机に乗ってオナニーしたら、みんな、どんな目で私を見てくれるんだろう・・

しずくは一人妄想に耽っていたが、テーブルでは理恵と先生のやり取りが続いている。

「お漏らしを防止する為と言われましても、やり過ぎですよ。御両親にも相談されたのですか」

保健の先生は厳しく理恵を問い詰めていた。理恵は、どうやら全部自分がやった事だと主張しているようだった。

「今回の件は、幸い私以外の者は知りません。私の胸の中に納めておきますので、二度とこんな事はしないで下さいよ」

保健の先生は、怒り心頭でプンプンしながら帰っていった。しずくは、先生の姿が門から消えるのを見て、理恵に頭を下げていた。

「しずく様がわたくしに謝る必要はありません。が、今日しずく様が身に付けた物は貞操帯といいます。ゆかり様が中学生に成られてから使用した物ですね。しずく様には、まだ早いと思われます。ゆかり様のお部屋に残っている器具の中には、そういった物も多く含まれているでしょう。とはいえ、わたくしが取り捨て選択してしまいましたら、しずく様の自主性に悪影響を与えてしまうでしょう。しずく様は、よく考えて使用するようお願いします」

しずくは身に染みて分かった。自分のした事で周囲の人に迷惑をかけてはいけない。姉のゆかりのように、周りの人から喜ばれるように成らなければ……。

・・お姉ちゃん。お姉ちゃんに会いたかったよぅ・・

しずくは、一度も会った事のない姉のゆかりに無性に会いたかった。
今ここにゆかりがいてくれれば、それはどんなに嬉しかっただろう。
しずくが、そう思った時にポトンと何かが落ちた音がした。

・・なんだろう?・・

しずくが手にとってみると、それは口枷のような物に長い透明なチューブが付いた器具だった。

7、尿道

7、尿道

しずくは貞操帯の一件以来、闇雲にゆかりの道具を使うのではなく考えるようになっていた。そして、同じ物を使用するにしてもＴＰＯを考え、効果的になるよう頭を悩ませていた。この時、既にしずくには、自分の苦しむ姿を見て楽しんで貰いたいという意識が芽生え始めていた。この歳で、その境地に達したしずくは、ゆかりより更にメス奴隷に適しているのは間違いなかった。

貞操帯事件の翌日、しずくはドキドキしながら登校した。自分のあんな姿を同級生たちに見られて、間違いなく変態扱いされ、誰も口をきいてくれなくなり、イジメられると思い、興奮していたのだ。しかし、登校時に会った茜はしずくの心配をしており、教室に入っても同級生たちもしずくの体を心配してくれた。素直にしずくは嬉しかったが、反面ガッカリしていたのも事実だった。後で理恵にきいた話しでは、保健の先生がみんなを遠ざけて一人で対応し、あの事も胸の中に治めてくれたと聞いた。

・・いい先生なんだ・・

しずくは思ったが、いい先生が必ずしもしずくにとっていい先生とは限らない。そのまま裸にして貞操帯だけの惨めな姿で苦しむ私を撮影してくれれば良かったのにと、助けてくれた人に対して失礼な事を考えるしずくだった。そして、しずくはこの時からしずくは新しい性癖に目覚めていた。

・・おしっこの穴って、おしっこするだけじゃないんだ。おしっこの穴も太いの入れて貰えると気持ちいいよ。私も頑張れば、おしっこの穴にも、おチンポ入れて貰えるのかな・・

しずくは貞操帯のプラグを尿道に挿入した事で、尿道を犯される快感に目覚めていた。

・・お姉ちゃんの道具でも、おしっこの穴を痛め付けるのあるかな・・

しずくは、ゆかりの部屋を探し回ってプジーのセットを発見した。そして、同時に尿道プラグのセットも見つけていた。プジーは6ミリ程度の細い物から、一番太い物は3センチ位はあった。プジーの長さは一様に20センチ程である。そして、プラグも太さはプジーと同程度のサイズが揃っているが、長さは4センチ程で、抜け防止の為先端部が笠のように広がっている。プラグの笠の反対側には色硝子の珠が嵌め込まれ綺麗に輝いていた。

・・お姉ちゃん、おしっこの穴にこれを入れていたんだ・・

しずくは、想像しただけで興奮していた。さっそく、プラグを入れて尿道を封印したくなったが、いきなり挿入して抜けなくなって、また周りに迷惑かけてはいけない。しずくも学習していた。

・・まず、このプジーでおしっこの穴拡げていかないと、そして、プラグを入れて封印するんだ・・

しずくはワクワクしていた。そして、すぐに一番細いプジーを手に取ると、理恵に教えて貰った通り滅菌ジェルをプジーに塗って、幼

い縦スジをくぱぁと開き尿道口を剥き出しにする。前に置いた鏡を見ながらしずくは尿道口にプジーを突き入れた。

・・あれっ??・・

しずくは拍子抜けしていた。プジーはジェルを塗った事もあり、抵抗も痛みもなくスルッと尿道に入ってしまった。

・・もっと太いので痛くしないと気持ち良くない・・

しずくは、一回り太いプジーを取り尿道に入れる。

「あうっ！」

さすがに尿道に痛みがあり、しずくは声を上げるが、それでもまだ満足出来る痛みではなかった。しずくはプラグの方を見る。先端で笠の開いたプラグは尿道に挿入したら、抜くのは困難だろう。入れる時よりも相当な痛みがあると想像出来る。しずくはプラグを入れたくてウズウズしていた。しかし、しずくは馬鹿ではない。プラグを持って母屋に行き、理恵に相談していた。

「理恵さん、このプラグおしっこの穴に入れたいんだけど、入れていいかにゃあ」

しずくが甘えたように言うと、理恵は爆笑していた。

「しずく様、なんですか。その言葉遣い。年相応ではありますけど、しずく様には似合いませんね。それと、そのプラグはしずく様にはまだ早いので却下です。でも、しずく様がおしっこの穴に目覚めてくれた事はとても喜ばしいです。今度わたくしが調教して差し上げ

ます。ふふっ、しずく様に調教するのはワクワクしますね」

「ちょ、調教してくれるの理恵さん」

「ええ、もう右腕も動きますから大丈夫です」

「ホントッ、あの破瓜の時みたいにして欲しいなぁ」

しずくは、もう興奮して性器を濡らしてしまっていた。

★　★　★　★

それから数日後、しずくは、離れの部屋の柱の間に両腕、両足を開いて大の字に拘束されていた。理恵は先日しずくが見つけた口枷にチューブが付いた物を説明する。

「これは、ゆかり様が使用していた飲尿装置ですよ」

「飲尿？」

「ええ、メスが強制的に自分のおしっこを飲まされてしまう嬉しい装置です。ゆかり様はよく使用していたようですよ。これを、しずく様に装着します。勿論、これだけでは済みませんよ」

「お姉ちゃん、おしっこ飲んでいたんだ。私も自分のおしっこ飲むと思うだけでオマンコ濡れちゃう」

「良いですね、しずく様も充分に変態になってきましたね」

理恵は嬉しそうにしずくに口に漏斗を差し込み水を注いでいく。

「2リットルは飲んで貰いますからね」

理恵は苦しそうにしずくが噎せても無理矢理水を飲ませていく。そして、水を飲ませ終わった理恵は、しずくに口枷を装着していった。きっちりと装着された口枷を見た理恵は、口枷に付いているチューブの先に金属のプラグを差し込んだ。

「これは、しずく様が尿道に目覚めたと知った葉月様が送ってくれたプラグです。これも尿道に入れ膀胱まで押し込むと笠が開き抜けなくなりますが、この底の小さな穴にピンを差し込むと笠が閉じ抜けるようになります。このプラグは中空になっているので、おしっこは、このプラグの中を通ってチューブにいき、それからしずく様の口に入ります。ただし、プラグの中に圧力弁があり一定の圧力がかからないと弁が開きません。その弁の圧力は、しずく様の膀胱が破裂する寸前に設定してあります。しずく様、良かったですね。また膀胱が破裂する寸前の恐怖と痛みを味わえますよ」

理恵はしずくに告げると、しずくの尿道にプラグを挿入してしまう。カチッと音がしてしずくの膀胱内でプラグの笠が開き、もうプラグは抜けなくなってしまった。

「さて、あとはオマンコの穴にもプラグを入れてあげますね、しずく様」

しずくの幼い割れ目を開いた理恵は太いプラグをしずくの膣穴にニュルリと挿入した。そして、プラグの底から出ているチューブを尿道からのチューブにジョイントで接続する。つまり、しずくの尿が

チューブに入ってきた場合、途中で二股に分かれ一つは口へ、もう一つは膣に挿入したプラグの方へ流れていくのだ。

「こちらのプラグも葉月様から頂いたもの。葉月様はいろんな性器具を開発しておられます。このプラグはゆかり様が提案されたアイデアを実用化したそうです。ゆかり様の考えた性具が、時を経て妹のしずく様に使用される素晴らしいですね」

理恵は、興奮して饒舌になっていた。

「このプラグに、おしっこが流れ込んできて中のスイッチが作動すると、バネが動きプラグの周囲から無数の針が飛び出すのですよ。オマンコの穴の中が針で串刺しにされる素晴らしい装置です。さすが、ゆかり様。尊敬致します」

そこで理恵は言葉を切り、自分を落ち着かせていた。そして、画鋲を手に取るとニヤリと笑う。しずくは、自分がこれから何をされるか想像し性器を大量に濡らしていた。

8、遥夜（前書き）

遥夜……長い夜という意味です。
今回、しずくは長く苦しい夜を過ごす事になります。

8、遥夜

8、遥夜

しずくは拘束されて身動きが出来ない状態で、尿道にプラグを挿入されチューブで口まで連結されていた。その、しずくの膣穴にもプラグが挿入されている。しずくは、それだけでもう興奮してしまい大量に性器を濡らしてしまっていた。

「あらあら、しずく様。もうオマンコの穴がゆるゆるですか。今度もっと太いプラグを用意しますから、もう少しオマンコに力を入れて締め付けて貰えますか。思ったより拡張が進んでいるのですね。それに、こんなに濡れていては、せっかく入れたプラグが出てきてしまいますよ」

理恵の言葉通りしずくの膣から挿入したプラグが少しずつ抜けてきていた。

「まあ、想定内ではありますけどね」

理恵は画鋲を手に取ると、しずくの小陰唇を伸ばし、そこに画鋲の針先を当てるとプチッと刺した。そして、そのまま小陰唇を貫いた針をプラグに突き刺した。

「ふぐぅぅぅっ」

しずくが悲鳴を上げるが理恵は、プチップチッとしずくの小陰唇に画鋲を刺し、プラグに留めていく。しずくは片側４個ずつの画鋲を圧され泣いていた。

「ふふっ、画鋲でしずく様のビラビラに止めましたから、これでプラグが抜ける事はなくなりましたね。それと念のため、これも付けておきましょう」

理恵は膣穴に挿入したプラグの底にチューブを避けるように金具を取り付け鎖をかけると受け皿をぶら下げた。理恵はしずくの開いた脚の間でぶらぶら揺れる受け皿を見ながら満足した笑みを浮かべていたが、そのしずくの無様な姿を見ているうちに理恵も興奮して性器を濡らしてしまっていた。

「せっかくですから、もう少し飾り付けしましょうか。しずく様も破瓜の時の仕打ちを希望されているようですし」

理恵は今度はしずくの膨らみかけた胸の先端で勃起している桜色の乳首に狙いを付ける。

「この長い串でしずく様の乳首を横一直線に２つとも貫通してあげますね」

長く鋭い金属の串をしずくに見せながら胸の方に持っていった理恵は、鉄串の先端を乳首の横に当てる。

「ふひっ、ふひっ、ふひっ」

しずくの息が荒くなるが理恵は乳首を摘まみ串に力を入れていく。

プツゥッ

「ふぐうぅぅーーっ！」

小さな手応えの後、鉄串はしずくの乳首に突き刺され、しずくが悲鳴を上げた。しかし、理恵はしずくの乳首にグリグリと鉄串を突き刺していく。

「ほら、もうすぐ一つ目の乳首貫通しますよ。すぐ次の乳首にいきますからね」

プツッと乳首から飛び出した鉄串は反対の乳首にも突き刺され、そのまま貫通される。

「ひぐっ、ひぐっ、ひぐっ、ひぐうぅぅっ」

しずくは号泣しているが、理恵は軽く横一直線にしずくの乳首に貫通している鉄串を指でピンと弾くとニヤリと笑う。

「乳首に針貫通なんて初歩の初級の行為ですからね。上級者のしずく様にとって、これくらいでは不満でしょう。御安心下さい。これで終わりではありませんよ」

理恵は、横一直線に貫通している鉄串に錘を下げ始めた。

「この錘は一つ１００グラムあります。しずく様なら5個は楽でしょう。でも、しずく様。今夜はこのまま放置しますからね。今は、それほどでもなくても時間が経つにつれだんだんと苦しさが増してきますよ」

理恵は、大の字に拘束されているしずくの姿を確認する。そして、しずくがどれだけ暴れても動けない事をチェックして満足気に頷いていた。

「時間感覚が分からなくなるように目隠しもしてあげますね、しずく様」

理恵は、しずくの目の上にガムテープを貼り視覚を奪う。さらに、しずくの両耳にも耳栓を入れ聴覚も封印した。そして、それだけでは満足出来なかったのか理恵は、革の全頭マスクをしずくに被せていく。この全頭マスクは鼻の部分しか開口部がないので、これだけでもしずくの感覚はかなり失われるのは勿論、しずくはもう自分の意思を外部に伝える術がなくなっていた。口枷をされた上に、さらに全頭マスクを被せられたので、今まで聞こえていたしずくの苦しむ声も聞こえない。

「しずく様、もうわたくしの声も聞こえないでしょうが長い夜になると思いますよ。時間が経つにつれ、乳首も引き千切れる程の激痛になるでしょう。それに、おしっこが溜まってくれば膀胱の痛みも始まります。そして、膀胱が満杯になって圧力が高まった後が楽しみですね。オマンコの穴が無数の針に突き刺されて同時に口の中におしっこが大量に入ってくる。ああ、もうわたくしも同じ事をして頂きたいです」

理恵は自分の性器に手を当て息が荒くなっていたが、なんとか自制する。

「ふう、わたくしが興奮してはいけませんね。それでは、しずく様。長く苦しい夜をお楽しみに下さい」

理恵は、離れのドアをバタンと閉じると母屋に戻っていった。

★　★　★　★

しずくは、目も見えず音も聞こえず動く事も出来ずに震えていた。
勿論、声を出す事も出来ない。理恵がいるのかさえ分からなかった。
そして、しばらくするとジンジンと乳首の痛みが大きくなってくる。
さらに、大量に水を飲まされた為、排尿したくなってきた。しずくは、もう随分時間が経ったのではと思っていたが、実際にはまだ３０分も経ってはいなかった。

・・ううっ、おっぱい痛い・・

胸の痛みに耐えていたしずくだったが、そのうちにまた膀胱が痛くなってくる。それは先日の貞操帯の時と同じ様に耐えられない痛みへと変わり、しずくの体から脂汗が噴き出す。

・・いだいぃぃっ、お腹破裂すりゅう！だじげでえぇぇっ！！・・

しずくは拘束された体を狂ったように動かすが、しずくの力では大の字になったまま動く事は出来ない。

・・だじげでえぇぇっ、ホントにじぬうぅぅっ、おなか破裂すりゅうぅっ・・

大量の脂汗を流し天を仰ぐしずくは、破裂寸前の膀胱の痛みに発狂しそうであった。しずくは、こうなったら弁が解放されて尿が排泄されると言っていた理恵の言葉を信じていたが、いくら下腹部に力

を入れても尿が排泄される気配がなかった。

・・もう、らめえぇぇっ。ぐるじいぃぃっ、じぬうぅぅっ！おじっこ、させでえぇぇぇっ！・・

しずくは、唯一動かせる首を左右に激しく振って、膀胱が破裂する寸前の激痛に苦しんでいた。しずくはもう下腹部の痛みで忘れていた。これで弁が開き尿が排泄されたその時には、次の装置が作動する事を……。そして、ついに……。

パシュッ

小さな音が響き、尿道プラグの弁が開く。しずくの溜まっていた尿が一気にチューブに流れ込んだ。

パシュウッ

そして、しずくの膣穴に挿入されているプラグの装置も作動する。

・・おっ、びゃあぁぁぁーーーっ！！・・

ぶり、ぶり、ぶりぃぃっ

しずくは膣壁を数十本の針で一斉に串刺しにされ、その激痛で大便を漏らしてしまっていた。しずくの開いた脚の間に下げられている受け皿に、ぼとぼとと汚物が落ちていき悪臭が漂っている。そして、その汚物の重みで膣穴に挿入されているプラグが下に引かれていた。しずくの画鋲で留められた小陰唇と針が突き刺さっている膣壁に更に激痛が加わる。そして、しずくは口腔にも自分の尿が大量に流れ込み、一瞬呼吸が出来なくなりパニックになっていたが、口腔一杯

の自分の尿を飲み込みなんとか気道を確保していた。

・・オマンコの穴、じぬうぅぅぅっ、もう頭もおかしくなっちゃうようぅぅっ・・

しずくは今度は違う激痛で苦しんでいた。それに、気を抜くと自分の尿で溺れてしまう。

まだ、夜明けまではたっぷりと時間が残っていた。しずくは動く事も出来ず暗闇と静寂の中放置され、苦しみ抜くのである。

9、友人

9、友人

しずくは、歩き放尿を日課にしていた。一度、経験してしまうと、もう病みつきになり止める事は出来なかった。そして、いつもは下校時に放尿しているしずくだったが、今日は登校時に放尿しようと考えていた。その為の準備もしてある。替えの下着とスパッツ、それに濡れてしまった汚れ物を入れるファスナー付きビニール袋も用意してあった。あとは我慢出来なくなった時の為、尿道プラグも用意してあった。このプラグは中空タイプのプラグで、尿道に挿入すると膀胱内で笠が開き抜けなくなるが、中空の為尿は排出出来る。というか排出されっ放しになってしまう。笠を閉じるには理恵の持っているピンが必要になるため、一度挿入してしまったら理恵に頼んで抜いて貰う以外なかった。そして、更に今日はスパッツの下に下着を三枚重ね穿きしている。足下まで尿が漏れて発覚してしまうのを防ぐ為だったが、しずくは別にお漏らしがバレても構わなかった。むしろ心の底では、バレてみんなに蔑んだ目で見られたいとさえ思っていた。では何故三枚も重ね穿きしているかというとバレた時に、予め下着を重ね穿きして計画的に漏らすつもりだったと周囲に分からせる為である。自分はこんなに変態だと知らしめる為だった。

しずくは集団登校で上級生たちの後ろをついて、本多茜と会話しながら歩いていた。

・・そろそろ、いいかな・・

しずくは自分の尿意が高まってきたのを確認し、下腹部に力を入れる。尿道の括約筋が緩み尿が漏れだした。

ショォォォーーッ

「……ぁっ、んんっ……」

しずくは小さく声を出してしまっていた。しずくの割れ目から漏れだした尿は、下着三枚を滲み通り、スパッツを濡らし始めている。

「んっ、んっ、んっ、んっ」

歩きながら尿を漏らししずくは、尿以外の汁も漏らし始めていた。

・・気持ちいい、気持ちいいよぉ。あぁ、おしっこの穴に太いの突き刺してえぇぇっ・・

しずくはもう我慢の限界だった。早く学校に着いてトイレに駆け込みたい。そして、プラグを挿入したい。しずくは顔も火照ってきていた。そのしずくの様子に茜が心配するが、しずくはいつもの様に大丈夫と答えていた。そして、校門を入るとしずくは茜の手をとりトイレに向かって駆け出していた。

「渡邉さん、どうしたの？」

茜はしずくに引きずられるように走っていた。

「本多さん、ううん茜ちゃん、友だちだよね」

急にどうしたのかと茜は首を傾げるが、しずくは茜を連れてトイレの個室に一緒に入り鍵を閉めた。しずくにしても、何故茜を連れて来たのかはっきりとは分からなかったが、自分のこの気持ち良さを誰かに伝えたくて仕方がなかったのだ。

「茜ちゃん、一緒に気持ちいい事しよう」

「えっ？」

「私、お姉ちゃんに凄い気持ちいい事いっぱい教えて貰ったの。だから、それを茜ちゃんにも教えてあげたいの」

「あれっ、渡邉さん。お姉さんがいたんだっけ？」

しかし、それには答えずしずくは茜の手を取ると、その手を自分のぐっしょりと濡れた股間に当てる。茜は、その濡れた感触に驚いて手を引こうとしたが、しずくは茜の手を股間に当てたまま、また尿を漏らしていた。

ジョォォォーーッ

スパッツを滲み出たしずくの尿が茜の手を濡らしていく。茜は、その生暖かい感触に自分の手を濡らしている液体が、しずくの尿だと気が付いた。

「し、しずくちゃん……」

いつの間にか渡邉さんから、しずくちゃんに呼び方が変わっていた茜は、しずくのもう片方の手を取ると自分の股間に押し付けた。

「ハァハァハァハァ」

茜の息も荒くなっていた。

シャァァァーーーッ

茜の股間からも湯気を立てて尿が溢れ、しずくの手を濡らしていく。

二人は自然とお互いの股間に手を当て、尿を漏らしながら唇を重ねていた。

★　★　★　★

日曜日の早朝から茜はしずくの家に遊びに来ていた。

「しずく様はゆかり様と違い社交的と言いますか。お友達を作るのがお上手でありますね。それでこの茜さんも一緒に調教して欲しいのですね」

「うん、理恵さん良いよね。私一人気持ちいい事ばかり経験してたらお友だちに悪いもん」

「もちろん結構ですよ。茜さんもよろしいのですね」

「はい、お願いします」

全裸で立っているのが恥ずかしいのか、茜は俯いて小さな声で答える。

「それでは茜さん。まずきちんとしたメス奴隷の姿勢をとりましょう。背筋を伸ばして胸を張り顔を上げて両手を上に上げるのです。そして、足は限界まで大きく開く。はい、やってみて下さい」

茜は理恵に言われた通りの姿勢をとる。

「いいですか、茜さん。メス奴隷はまずこの姿勢をとる事、頭に叩き込んでおきなさい。分かりましたか」

「は、はいっ」

「それで、茜さんはまだオマンコの穴を貫通して貰った経験がないそうですね」

「はい、オマンコの穴には何も入れた事がありません。しずくちゃんに聞きましたけど、オマンコの穴を犯して貰えると口では言えないくらい気持ちいいと言うから、私のオマンコの穴も犯して下さい」

「未経験のまま調教されるのも楽しいと思うのですが、よろしいのですね。後戻りは出来ませんよ」

「はい、私もオマンコの快感を味わってみたいです。構いません、私のオマンコも貫通して下さい」

「分かりました、良いでしょう。ただし、茜さんのオマンコを犯すのは、しずく様にやって貰いましょう」

「わ、私……」

しずくは驚いて声を上げるが、理恵はしずくを犯す時に使用したペ

ニスバンドをしずくの性器に装着し始める。しずくの股間の3つの穴、尿道、膣穴、肛門、それぞれにカテーテル、ディルドゥ、管を挿入し、ベルトでかたく固定する。しずくの股間に凶悪なイチモツが天を向いて聳え立っていた。それを見た茜は、ゴクンと唾を呑み込む。茜の体は震えてきていた。

「茜さん、この歳での破瓜は地獄の苦痛になりますが、その苦痛が快感に反転していきます。これから、あなたの体を拘束します。あなたが、どれ程泣き叫ぼうがオマンコの穴を犯され続けます。覚悟はよろしいですね」

「……はいっ……」

茜は震える声で返事をしていた。

１０、悲鳴（前書き）

すいません。
活動報告にも書きました通り、毎日更新はこのお話しで一時休止します。
我儘で申し訳ありません。
これからは、ゆっくりと更新していきますので、他の作品と合わせて読んで頂ければ幸いです。

１０、悲鳴

１０、悲鳴

しずくの部屋のテーブルの上に茜の体が仰向けに乗せられ、手足を四方のテーブルの脚に厳重に拘束される。脚は大きく開かれ、膝から曲げてテーブルの脚に縛り付けられていた。テーブルの縁に茜の性器がくるように位置も調整されている。

「当然ですがローション等は使用しませんよ。わたくしがしずく様の後ろからサポートして、無理矢理突き入れます。純粋な破瓜の痛みを存分に味わって下さい。そうそう、このお部屋は防音になっていますが、あまり騒がれるのも不快ですので、あなたの下着を口に詰めた後、ギャグを咬まして口も塞ぎますからね。なにか言いたいことがあったら、今のうちに言って下さいね」

理恵の言葉で茜はしずくに目を向ける。

「しずくちゃん、どれだけ痛いの？本当に気持ちよくなるの？」

茜に問いかけられたしずくは大きく頷いていた。

「最初は凄く痛いよ。たぶん茜ちゃん、おしっことウンチ漏らしちゃうんじゃないかな。でも慣れてくると気持ちいいの、ホントだよ」

しずくの言葉に涙を浮かべて茜は、わかったお願いと言っていた。

理恵は、もう良いだろうと茜の口腔に下着をぎゅうぎゅうと詰め込んで、その上からボールギャグを押し込みベルトできつく固定する。

「ふぐっ、ふぐっ、ふぐうぅぅっ」

茜はもう何も喋れなくなっていた。

「それじゃあ始めましょうか。しずく様、茜さんのオマンコを開いて、オマンコの穴にペニスの先端を当てて下さい。そして、ペニスの先端でオマンコの穴の周囲を刺激して下さいね」

しずくは理恵の指示通り茜の縦スジをくぱぁと開き小さな膣口にペニスの先端を当てる。そして、茜の性器にペニスを当てたまま、膣前庭やクリトリス、縦スジの中を擦りまくる。

「ふっ、ふっ、ふっ、ふっ」

茜の鼻息が荒くなってきていた。

「少しはオマンコがほぐれてきたでしょう。しずく様も先日経験しましたでしょうが、次の瞬間がメス奴隷にとって至福の瞬間です。生まれて初めてオマンコの奥に、この場合しずく様の装着しているペニスが突き刺さるのです。わたくしが後ろから腰を押して差し上げますので遠慮なく根元まで突き刺してあげて下さい。それでは、いきますよ、しずく様」

グリュゥッ

「ふーっ、ふーっ、ふーっ、ふーっ」

しずくはペニスの先端を茜の小さな膣口に少し突き入れる。茜の鼻息がさらに荒くなっていく。そして、次の瞬間、口を塞がれていても響く茜の悲鳴がしずくの耳に突き刺さる。

ズリュゥゥッ

ぶちっ、ぶちっ、ぶちぃぃぃっ

「ふごおぉぉぉぉぉぉーーーーーっ！！！！」

プッシャァァーーーッ！

ぶりっ、ぶりっ、ぶりぃぃぃっ！

理恵に背後から押され、しずくの装着したペニスは根元まで茜の膣に突き刺されていた。哀れにも茜の幼く小さな膣穴はブチブチと裂け、案の定、茜は大小便を漏らしてしまっていた。茜の瞳から涙がポロポロ零れ落ち、鼻水も垂れている。理恵はしずくの背後から茜の頭の横にまわると、茜の耳に口を寄せた。

「いいですか茜さん。この痛みをよく憶えておきなさい。この痛みがメス奴隷の原点となります。だんだんとこの痛みを超える痛みを欲するようになります。調教されるにつれ痛みが恋しくなってきますよ。そして、誰しもがオマンコを処刑される事を望むようになるのです。茜さん、必ずあなたもそうなります。しずく様は、ゆかり様の血を引くメス奴隷のサラブレッドですが、あなたもこの歳から頑張れば優秀なメス奴隷になれるでしょう。しずく様と共に切磋琢磨される事を期待しますよ」

茜は破瓜の痛みに涙しながらも、理恵の言葉がスッと胸に入ってき

た。これ程胸に沁みる言葉はなかった。

・・立派なメス奴隷……・・

まだ幼い茜だが、自分の将来の目標が出来たように感じた。

・・しずくちゃんと一緒にメス奴隷になる・・

茜は涙で滲む目で自分を犯しているしずくを見る。しずくは下を向いて茜の腰を押さえ必死に腰を動かしていた。その、しずくの姿には茜を屈服させようとする姿勢が感じられた。

・・ああ、私は誰かに支配されたかったんだ・・

茜は、しずくに犯され膣穴を裂かれる激痛に泣きながら笑みを浮かべていた。

★
★
★
★

「また明日遊びに行っていい」

「うん、勿論いいよ。明日の土曜日も天気よさそうだから外で放置調教してくれるって理恵さん言ってたよ」

学校の昼休み、しずくと茜は校庭のブランコに座りながら楽しく会話していた。茜は、しずくに処女貫通されて以来、しずくにべったりになっていた。しずくの姉のゆかりの話も聞き、そのゆかりに追い付こうとしているしずくに、茜もついていこうと考えていた。そ

して、二人でもう何度も理恵の調教を受けていた。鞭に蝋燭に針に浣腸。基本的な事はもう全てこなしてきていた。

「放置調教かぁ。楽しみだね」

「理恵さんも色々大変だから、放置調教だと自分は休めるから楽だと言ってたよ」

「あっそうだ。今度理恵さん私にクリピアスしてくれるって言ってたよ。クリにピアスされるなんて嬉しいなぁ。メス奴隷の証だよね。考えるだけでオマンコから恥ずかしい液が出てくるの」

「えっ?私には理恵さん、そんな事言ってくれないけどどうして?」

「しずくちゃんはね、まだクリが小さいんだって。だから、もう少し肥大してからと理恵さん言ってたよ」

「うぅ、そうなんだ。私も早くクリピアス入れて欲しい。お姉ちゃんはオマンコにいっぱいピアス入れてたみたいなんだ。クリやビラビラはもちろん、おしっこの穴やオマンコの穴にも入れてたみたい」

「えーっ、やっぱりしずくちゃんのお姉さんって凄いねぇ」

「そうだよ。お姉ちゃんは大人の人からも凄いっていわれているんだよ。私にとって最高で大好きなお姉ちゃんなんだ」

茜に、ゆかりを凄いと言われしずくは嬉しくてたまらなかった。

・・早く私もお姉ちゃんみたいなメス奴隷になりたい・・

しずくはブランコを漕ぎながら、ゆかりのように身体中にピアシングされ、焼き印も捺された自分の姿を妄想していた。そして、座っているブランコの踏み板が濡れてしまう程、激しく性器を濡らしていた。

★★★★

しずくと茜は庭の大きな木から背中合わせにされ開脚逆さ吊りにされていた。二人の体は革のベルトでかたく重ね合わせられ、尿道に入れられたカテーテルは口枷に繋がっている。

「水分補給は自給自足でね」

理恵は笑いながら二人の膣に膣鏡を挿入し最大まで開口し、膣の奥の桜色の子宮を確認すると、パラパラとなにかを入れていた。そして、二人の肛門にも開口具を挿入して開いた穴に何かを入れていた。

「さあ、最後にもう一つ、二人の穴に入れれば準備完了です」

理恵は庭の地面に巣を作っている蟻を摘まみ上げると、しずくと茜のぽっかりと開いている膣と肛門の中にポトリと落とした。

「お二人の穴には砂糖を入れてあるのですよ。そこへ蟻を数匹ずつ落としました。蟻は餌を持ち帰る時にフェロモンを出しながら帰ります。そして、また餌を取りに行きます。段々と蟻の数が増えフェロモンも濃くなっていきますので行列が出来ていくでしょう。オマンコの穴とおしりの穴の中に大量の蟻が集まり蟻酸でチクチクと溶かしてくれる筈ですよ。子宮口から子宮の中にも入ってくれるかも

知れませんね。おしりから入った蟻はあなたたちの体の中を歩いて口から出てくるかも知れませんよ。楽しみですねぇ。それではわくくしは用事があるので外出致します。ゆっくりと楽しんで下さいね」

「「ふぐうぅぅぅーーーーっ！！」」

自分の体の中に大量に入ってくる蟻の群れを想像し、しずくと茜は絶叫していた。

「そうそう、目隠しもしておいた方が良いですね」

理恵は二人の目の上にまとめてグルグルと黒い布を巻いていく。二人は目と口を塞がれ開脚逆さ吊りで拘束されたまま放置された。しばらくすると蟻の行列が出来始めていた。二人は自分の体の中を蠢く蟻の感触に涙を流し絶叫していた。

★　★　★　★

一刻の後、二人が解放された時、二人の膣穴と肛門の中は蟻の群れで、モゾモゾと黒く埋め尽くされていた。それぱかりか二人の鼻の穴からも蟻が溢れ出ていたのだった。

11、資質

11、資質

放置調教されてから暫くはしずくと茜は、蟻の姿を見る度に恐怖で失禁してしまっていた。体の中を蠢く蟻の感触を思い出すだけで、もう体が硬直してしまい、チョロチョロと尿を漏らしてしまうのだ。

「私まだオマンコやお腹の中で蟻が動いているような気がするよぅ」

「私もダメ。時々オマンコの穴やおしりの穴に指入れて確認しないと安心出来ないよ」

昼休みの校庭でブランコに座りながらしずくと茜は、まだ怖そうに話していた。体内を虫に這われる。それは幼い二人にとっては衝撃的な出来事であったようだ。

「理恵さんは楽しかったとみえて、今度はオマンコの穴大きく拡げて中に水入れて金魚を入れてみるって言ってたよ」

「私には、オマンコの穴に蜜を入れて蜂を誘い込むと言ってたけど本当にやるつもりなのかな。結構怖いよね」

「蜂は怖いよ。毒針、持ってるもん。オマンコの穴に入れられたら、刺されて腫れ上がって大変な事になりそう。でも……」

「茜ちゃん、どうしたの？」

急に股間を押さえてモジモジしだした茜を見て、しずくが首を傾げる。

「あのね、でも私、やられてみたいかも……。オマンコの穴やおしりの穴に蜂入れられて刺されちゃうの想像すると恥ずかしい液出てきちゃうよ」

「大丈夫だよ。私もオマンコ濡れてるよ。お姉ちゃんは、いつも自分のオマンコ痛め付ける事を考えてたみたいなんだ。自分のオマンコが酷い事されるのを想像して、濡れちゃうのは立派なメス奴隷として成長してるんだよ」

「しずくちゃんは本当にお姉さんが好きなんだね」

「うん、大好きだよ。お姉ちゃんが作ったオマンコ痛め付ける機械も色々見つけたんだ。凄いんだよ。オマンコを自動で鞭打つ機械とか、オマンコギロチンていうのもあるんだよ。今度、茜ちゃんにも使ってあげるね」

「えーっ、オマンコギロチンって何？オマンコの割れ目、本当に切っちゃうの？」

「ううん、違うよ。ギロチンの刃の代わりに重い板が落ちてきてオマンコを潰す機械みたい。使ってみればわかるから茜ちゃんに使ってあげるよ」

「うん、凄い楽しみ。オマンコ潰されるってどんな感じなのかな。絶対気持ちいいよね。ああ、もう考えるだけでオマンコ、グショグ

ショ」

しずくと茜はブランコで揺れながら、性器を濡らし楽しそうに話していた。二人はこれから調教され続け、ゆかりのようなメス奴隷になる事を夢見ていた。

★
★
★
★

その週末の夜、茜はしずくの家にお泊まりに来ていた。

「お泊まりだと、ゆっくり調教して貰えるからいいね」

「今日は私たちを繋げてくれるって理恵さん言ってたよ」

「繋げるって？」

「うーん、分からないよ。でもきっと凄い調教なんだよ。理恵さん張り切っていたもん」

二人はもう全裸になり、お互いの性器を刺激しあって準備を整えているとドアを開けて理恵が入って来た。

「それじゃ二人とも背中合わせで立って。ぴったり背中着けてね」

理恵の指示通り立つと、理恵は二人の体をまとめてベルトを閉めて固定してしまう。二人は背中合わせのまま動けなくなっていた。

「次にこれを飲み込んで貰おうかしら」

理恵は銀色に輝く小さな球を二人の口にそれぞれ入れる。球にはステンレス糸が付いていた。二人がそれを飲み込むと、当然糸も体の中に入っていく。

「早く出して貰う為に水も飲んで貰うわよ」

理恵は二人の口に、それぞれペットボトルを押し込み無理矢理水を飲ませていく。次に理恵は、エネマシリンジをしずくと茜の肛門に挿入しグリセリン液を注入していく。二人の腸内に大量にグリセリンを注入した理恵は太いアヌス栓を二人の肛門に押し込み塞いでしまった。

「どう?苦しいでしょうけど少し我慢して貰うわよ 」

理恵は笑いながら、苦しむ二人を見て股間に手を当て自慰を始めていた。

・・ゆかり様、あなたの妹は間違いなくあなたと同じ立派なメス奴隷になります。わたくしがきちんとお育てしますので見ていて下さい・・

理恵にとって絶対のものは、しずくでも葉月でもなく、渡邉ゆかりだった。理恵は自慰しながら、ゆかりと共に処刑される自分の姿を妄想し頂点に達していた。

「そろそろ、いいですかね」

理恵は、二人の肛門からアヌス栓をズボッと抜く。

ブッシャァァーーーッ

アヌス栓が抜かれた瞬間、二人の肛門から液便が噴水のように噴き出し、二人が飲み込んだステンレス糸の付いた球も飛び出してきた。

「ふふっ、それじゃ調教を始めましょうか　今二人の体の中を一本のステンレス糸が通っているのよ　だから、あまり動かないようにね　動くと、この鋭い糸で体内が切れちゃうからね　苦しくても我慢してね　このステンレス糸は導電性が高いのよ　もう分かるでしょう　これから、この糸に通電してあげるわ　あらあら、泣いちゃって　でも本当に動かないようにね　死んじゃうからね　」

しずくと茜はあまりの恐怖でガクガク震えて泣き出していた。今までの調教も厳しいものがあったが、痛みさえ我慢すれば命に関わるものはなかった。だが今回の調教は本当に命に関わる。幼いしずくと茜が恐怖で号泣するのも無理はなかった。しかし、理恵はその恐怖を快感に変えてこそメス奴隷になれると考えていた。しずくを立派に育てる為には必要不可欠な調教なのだ。理恵は、それぞれの糸に電線を繋ぎ発電機のスイッチに指を当てる。

「それじゃ、苦しみなさい」

理恵は、パチッと容赦なくスイッチを入れた。

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！！！」

大きく口を開け舌を突きだし、涙と鼻水を垂れ流ししずくと茜は絶叫する。二人の体は細かくぶるぶると震えていた。理恵は、通電されている二人に容赦なく鞭を叩き込み、微笑んでいた。

・・これが、お姉ちゃんが憧れた処刑？……。ううん、まだまだ私はそこまでいっていないんだ。もっともっと調教されなきゃ、お姉ちゃんに追い付けない・・

体内を流れる電流と鞭打たれる激痛にしずくの意識はだんだんと遠くなっていった……。

★　★　★　★

そして時は過ぎていき、しずくと茜は中学校に入学していた。しずくが入学したのは、ゆかりの母校でもある桜桃中学校であるが、当時の教職員は皆転勤したり退職したりして〝渡邉ゆかり〟を知る者はもういなかった。なので、しずくも極普通の中学校生活を表面上は送っていたのである。そして、本多茜とは学区が違い、別の中学校に別れてしまったが、茜は休みの度にしずくの家を訪問し現在でも調教を受けていた。

そんな薫風香る快晴の日曜日、しずくと茜は公園内を歩きながらお漏らししていた。しずくは制服の中間服の白い長袖セーラー服にプリーツのミニスカート。茜も白いブラウスにジャンパースカートの制服だった。

「気持ちいいね、しずくちゃん」

「うん、歩きながらお漏らしするって最高だよね。やっぱりこれを考えて実行していたお姉ちゃんは天才なんだよ」

「また、しずくちゃんのお姉さん自慢だ」

「ゆかりお姉ちゃんは私の目標だから……。あっ、理恵さんいた」

しずくは公園の中で理恵の姿を見つけていた。理恵は黒いスーツの女性と黒いスーツの男性と話していたが、しずくに気付くと手を振っていた。しずくは今日、ゆかりの最後をお話しますのでと理恵に言われていた。中学生になったのでもう自分で理解する事が出来るでしょうと……。そして、ゆかりの最後を記録した動画もあるので見せてくれるという事だった。その為に、その動画を保有している方のお屋敷に行きますと言われていた。その待ち合わせがこの公園だった。しずくは、理恵と話している黒いスーツの女性を見て胸がズキンと高鳴り、子宮がキュウッと締まる感じがした。その女性の顔を忘れた事はなかった。幼い時、しずくと理恵の命を救ってくれた女性だ。しずくは、その時にも思った事を、また強烈に感じていた。

・・私のオマンコを徹底的に壊してくれるのは間違いなく〝この人〟だ。絶対間違いない。私は〝この人〟にオマンコ壊されて処刑されるんだ・・

その女性は恐ろしく冷たい目をしているが成長したしずくを見て微笑んでいた。それは、しずくが〝食べ頃〟になったのを喜んでいるようだった。

12、憐憫

12、憐憫

しずくたちは公園の駐車場に停めてあった黒塗りのベントレーに乗り込むと女性の屋敷に向かっていた。しばらくして助手席のシートから女性が振り向いて、後部座席のしずくたちに笑顔を向ける。

「きちんと挨拶していなかったかしら。私は豪徳寺葉月と言います。よろしくね、しずくちゃん。そして、お友達の方も……」

「はい、よろしくお願いします。私は渡邉しずく。隣はお友達の本多茜です」

しずくと茜は緊張した顔で葉月に頭を下げていた。そんな二人を葉月は笑顔を浮かべながら、恐ろしく冷たい瞳で、まるで値踏みをするかのように見つめていた。

「あなたの姉の渡邉ゆかりには大変楽しませて貰ったのよ。感謝しているわ、とっても。あの時の興奮は今でも忘れられない。まあ、私だけではなく、あの時会場にいた全ての者がそうでしょうね。あなたもそうでしょう、加納さん」

会話を振られた理恵は大きく頷き、ゆかり様はわたくしにとって神のごとき存在ですと言った。そこで、葉月は話を変える。

「ところで、茜ちゃんのご両親はどんな方なのかしら？」

「はい、うちの父は小さな会社の従業員です。母はスーパーでパートをしています」

「今日は何て言って家を出てきたのかしら？」

「お友達とお出かけすると言って来ました」

なぜそんな事を訊くのだろうと不思議な顔をする茜であるが、葉月の性格をよく知る理恵の顔は強張っていた。葉月は、しばらくスマートフォンを操作していたが、運転している男に声をかける。

「近藤、車を停めなさい。商談をします」

「はい、葉月様」

近藤と呼ばれた黒いスーツの男はすぐにウインカーを点け、道路の路側帯に車を寄せると停車させた。葉月はスマートフォンを持ったままドアを開ける。

「ごめんなさいね。少し待っていて貰えるかしら」

明るくしずくたちに声をかけると葉月は車を降り、スマートフォンで誰かと通話していた。車に戻ってきた葉月に近藤が伺いをたてる。

「如何でしたか？」

「1億で済んだわ。彼らにしてみれば目の玉が飛び出る程の大金でしょうが、私にとっては安い買い物ね」

「それは、ようございました。急いで会場の準備をさせますか？」

「必要ないわ。格安で手に入れた物だし、私が一人で楽しみたいから」

「はい、畏まりました」

近藤は、ウインカーを点けると車を発進させていた。今の会話を聞いて、しずくと茜は意味が分からなかったが、理恵は改めて葉月の恐ろしさに震撼していた。そして、しずくと茜二人の横顔を見つめる。その理恵の二人を見つめる瞳には憐憫の情が浮かんでいた。

★　★　★　★

葉月の屋敷を見て、しずくも茜も驚いていた。豪邸といわれる屋敷よりも、さらに大きくまるで西洋の城のようであった。そして、その庭も広大な公園のように広かった。屋敷内に案内されたしずくたちはメイドについて応接室に入っていた。そして、豪華なソファーに座りメイドに出された果汁１００％のジュースを飲んでいた。

「これ、何のジュースだろう。色々な果物がミックスされているよね」

「うん、初めて飲んだよ。美味しいね」

しずくと茜は無邪気にジュースを飲み楽しそうに話している。理恵は、そんな二人を見ながら複雑な表情をしていた。葉月は準備があ

るからと席を外していて、理恵に先にゆかりの最後を話していなさいなと言っていた。おそらく今、葉月は楽しそうに処刑の準備をしているのだろうと思いながら、理恵はコーヒーを飲んで二人を見ていた。どうしても憐憫の瞳で見てしまう。今日が自分の最後の日だとは知らずにいる、あの娘を……。そして、理恵は二人の会話が落ち着いた頃を見計らって話を切り出した。

「それでは、しずく様。ゆかり様の最後をお話し致します」

理恵の言葉で、しずくと茜はソファーに座り直し姿勢を正していた。

「ゆかり様はメス奴隷になりオークションに出品されました。そこで、落札され処刑される事になりました。もうお気付きでしょうが、落札されたのはこのお屋敷の主、豪徳寺葉月様です」

しずくにとって驚きはなかった。うすうす感づいていたのもあったが、処刑されるなら一流の、その界隈で一目おかれる程の人物にして貰った方が嬉しいのは当たり前だ。

「そして、ゆかり様はこのお屋敷のお庭の会場で大勢の人に観られながら処刑されました。詳しい処刑内容は口で説明するよりも、画像で観た方が分かりやすいと思いますが、ゆかり様はマンコを全て破壊され、頭を、脳を犯されお亡くなりになりました。わたくしも、その処刑の一部始終を観ていた者の一人です。ゆかり様は神々しい光に包まれていました。わたくしはあれだけ美しい人間を観た事がありません。ゆかり様はわたくしにとって神となられたのです」

もう、理恵は夢見るように空中に視線を漂わせ、恍惚の表情をしていた。その理恵の熱に影響されたのかしずくも火照った顔をしていた。そこへ葉月が動画を収録したメモリーを持って入ってくる。

「おや、加納さん。随分熱弁を振るっていたようですね。楽しそうです」

「すいません、興奮してしまいました。それで、ゆかり様の動画はございましたか」

「勿論ですよ。私にとってもお宝ですからね。様々な媒体にコピーしてあります。不測の事態が起こっても紛失しないようにね。それに渡邉ゆかりの動画は過去最高の売上げでしたからね。所有している方も多いと思いますが、加納さんは所有していないのですか」

「ええ、確か当初数量限定の販売ではありませんでした。わたくしはその抽選に漏れてしまったので購入する事が出来ませんでした」

「あら、その後に完全版ではなくて、無駄かもと思われる部分をカットした編集版を、申し込みがあった方全員に販売したのですが、知りませんでしたか」

理恵は口を開けたまま呆然とした顔で固まっていた。

「葉月様、その動画の在庫は残っていますでしょうか。もし、ありましたら是非わたくしにお譲り下さい。代金は必ずお支払いしますので……」

理恵は、テーブルに額をつけ葉月にお願いしていた。葉月は、その理恵の姿を見つめていたが、頭を上げなさいと言うと、残念ながら編集版の在庫はもうないわ、全て売り切ってしまったものと言う。力の抜けたような顔をしている理恵に葉月は、完全版のコピーを差し上げましょうと笑いながら言った。

「あなたは、この娘を順調に育ててくれた。感謝の意味で差し上げるわ」

その時の理恵の顔をしずくは忘れない。あんなに涙を流して喜ぶ理恵の顔を、しずくは見た事がなかった。

・・お姉ちゃんの動画が貰える事が、理恵さんはそんなに嬉しいんだ・・

しずくも何故か嬉しくなっていた。そして、葉月はメモリーを差し込み動画の再生を始める。大勢の観客がゆかりの処刑を観る為に集まって来ていた。その中には若い理恵の姿もあった。

13、衝撃（前書き）

別作品のようになってしまっています。
「ウテルス」程ではないですが、しばらくグロ多めになってしまうかも知れません。
苦手な方は飛ばして下さい。

13、衝撃

13、衝撃

ゆかりの最後の動画の再生が始まり、全員が姿勢を正して大画面のモニターを見ていた。まず、ゆかりが処刑場に引き出されて来るところで、しずくと茜は小さな悲鳴を上げていた。それは、ゆかりが既に四肢を切断されている状態だったからだ。ゆかりは泣き叫びながら処刑場の中央に運ばれていく。

そこからは、もう怒涛の展開だった。ゆかりの性器はどんどん壊されていき、回転ノコギリで性器を切断されたところで、ゆかりは無様に発狂してしまっていた。そして、その後ゆかりは頭蓋骨に穴を空けられ、脳を犯され頭の中に精液のみならず糞尿も入れられ、もうメスとしても思われず物として扱われ惨めに絶命した。（注・詳しくは「檻の中の幸福ゆかりの章」を参照）

この、ゆかりの動画を見終わった後、さすがにしずくと茜は声がその凄まじさに出なかったが、性器はしっかりと濡らしてしまっていた。まだ若い二人の匂いが漂い、それに気付いた葉月は笑みを浮かべていた。

「どうかしら？お姉さんの最後を観た感想は？」

「は、はい、さすがお姉ちゃんです。あんなに凄い事をされているのに、嬉しそうに私は感じました。ううん、本当に嬉しかったんだと思います。あそこまでマンコ壊されて、頭まで犯して貰って、頭の中にウンチやおしっこも詰められて、もう思い残す事はなかった

と思いました。わ、私もお姉ちゃんと同じ事されたい……」

「私も興奮しました。あんなに泣いても一切許されずに、マンコ壊されてしまって凄いです。頭の中にウンチやおしっこされるのなんて初めて見ました。それなのに、私もお姉さんが喜んでいるように感じました。やっぱり、しずくちゃんのお姉さんは凄い人だと思います。私もあんな風に恐怖と絶望の中、処刑されてみたいと思いました」

二人の言葉を聞いて葉月も、楽しくてたまらないと笑みを浮かべていた。

「ふふっ、二人とも満足してくれたみたいで私も嬉しいわ。それでは、場所を変えてお話ししましょうか。お姉さんの話を一杯してあげるわ」

葉月の言葉でメイドが、どうぞこちらへと案内するが、茜だけ葉月に呼び止められる。

「茜ちゃんは、すこーし、用があるから待っていてくれる」

「はい、わかりました」

茜は、なんだろうという顔で返事をすると、しずくに向かって、また後でねと声をかけていた。しずくも、うん後でねと応えていたが、これが二人の最後の会話になるとは、しずくも茜も想像さえしていなかった。理恵は葉月の笑顔を見て、何か言おうとしていたが、口を閉じると何も言わずメイドについて行った。

★
★
★
★

しずくと理恵は、メイドに案内された部屋を見回していた。明るい白い壁紙の部屋は、かなり広い。４０人くらいは楽に入れそうである。しずくの中学校の教室よりも広い印象だが、壁の一面にカーテンが引いてある以外、窓らしき物はなかった。そして、部屋にはクッションの効いたゆったりとしたソファーが置いてある。不思議なのは、そのソファーがみんな壁にかけられた大きなカーテンの方を向いている点だ。ソファーに座った人たちが、みんなカーテンの方を向く事になる。

・・カーテンを開けると綺麗な庭園でも見られるのかな・・

しずくは豪徳寺邸の広大な庭を思い出して、そう考えていたが、このカーテンの向こう側はそんなものではなかった。

「どうぞ、お掛けになってお待ち下さい」

メイドがソファーの横のサイドテーブルに飲み物を置き、二人に声をかける。しずくと理恵は一番カーテンに近いソファーに腰を降ろすと、思った以上にクッションが沈み、まるで何かに包まれているようなゆったりした気分になっていた。すると、その時、部屋に設置されているインターフォンがプルルッと音を出した。メイドは受話器を取り話していたが、最後に畏まりましたと言うと二人の前に歩いて来て頭を下げる。

「葉月様より準備が整いましたとの連絡がありました。それと、葉月様のご友人の方が偶々見えられたそうで、その方も是非拝見したいとのご要望なのでご一緒させて頂きます。すぐ来られますと思い

ますので、それでは皆さん、ごゆっくりとお楽しみ下さい」

メイドは、部屋の照明を落としカーテンを開けていく。しずくは、映画でも始まるのかなと思っていたが、カーテンの向こうに現れたものは映画のスクリーンなどではなかった。

「何、これ？」

しずくが思わず声を上げる。カーテンを開けると、そこには大きな一枚のガラスが嵌め込まれ、その向こうには、やはり大きな部屋があった。どうやら、しずくたちのいる部屋は、向こうの部屋で行われる何かを観賞する為の部屋のようだった。しばらくすると大きなU字型の物体が奥から移動してきた。そして、近付いてくるに従い、そのU字の中に人のようなものがいるのが分かった。それは、だんだんと近付いて来る。U字の中にいるのは若い全裸にされた女性のようだった。女性はU字の底辺の部分に、脚の付け根まで埋め込まれている。そして、両腕は左右の壁に、やはり肩口まで埋め込まれていた。その時、カチャッとドアが開く音がして一人の人物が入ってきた。葉月の友人という人物だと気付いたしずくと理恵は頭を下げていた。その人物は黒いスーツに黒いボーラーハットを被り、黒い大きなマスクにサングラスをかけている為、性別も年齢もまるで分からなかった。それどころか、まるで人間ではないような儚げな雰囲気を醸し出しており、音も立てずに歩いてくるとしずくたちに軽く頭を下げ後ろのソファーに静かに座る。それも、座面に腰を降ろすのではなく、その上に正座していた。

・・なんだろう、この人。まるで幻みたい。本で読んだ事あるけど、幻神……？・・

しずくは不思議に思ったが、近付いてくるU字型の装置に固定され

ている女性の顔がはっきりと見えるようになり、その驚きでこの人物の事はもう頭の中から抜けていた。しずくが驚いたのは、目隠しされ口にもギャグが押し込まれている、その全裸の女性の顔が茜だったからだ。いくら顔が少し隠れていても、友人の顔だ。しずくには分かる。

「あ、茜ちゃん……」

茜は、必死に体を動かして逃れようとしているが、手足が抜けないようになっているのだろう。U字型のこの奇妙な装置から抜け出す事は出来なかった。

「このガラスはペアガラスで、それを三重にしてあります。あまり煩いと不快に感じるお客様がいらっしゃるので、その対策の為です。ですが、悲鳴や絶叫が聞こえないと詰まらないと言うお客様もいらっしゃるので、その為のマイクとスピーカーも取り付けてあります。加納様と渡邉様には、声を聞こえるようにしてくれと言う葉月様のご命令ですので、音声も聞こえるようにしますね」

メイドがスイッチをパチンと入れると、隣の部屋の音がスピーカーから流れてきた。

「ふごっ、ふごっ、ふごおぉぉぉぉっ」

口を塞がれている茜の声だ。その激しい声から恐怖で号泣しているのが分かる。しずくはソファーから立ち上がり、ガラスに顔をつけるようにして茜を見ていた。

「渡邉様、モニターに映像を出せますので、ゆっくりソファーに座ってご覧下さい。疲れずに楽しめますよ」

・・楽しめるって、何を？・・

しずくはまだ事態が理解出来ずにいると、メイドは１００インチ程の大画面モニターをしずくの横までスライドさせ電源を入れる。モニターに茜の顔がアップで映し出されていた。茜の顔は、目の上にきつく巻かれた目隠しに涙が滲み頬にまで流れている。鼻水も垂れ、よだれも垂れ酷い顔をしていた。先程までの笑顔の欠片もない。そして、茜は唯一動かせる首を左右に激しく振って絶叫している。そこへ、コツコツとハイヒールの音を響かせ葉月がやって来た。葉月は茜を固定している装置の横に立つと、しずくに顔を向ける。

「さて、これから本多茜の処刑を執行します。ゆっくりと苦しむ姿を楽しんで下さいね。勿論きちんと絶命させてあげるから安心してね」

・・しょ、処刑……、ぜ、絶命……・・

しずくは、葉月の冷たい瞳で残酷な笑みを浮かべる顔を見て、ようやく理解した。茜は本当にこの場で処刑され絶命するのだと……。しずくの体が震えてくる。

「この処刑具は私が１０年以上前に開発したものです。（注・檻の中の幸福彩音の章、２話参照）四肢を溶解する処刑具なんですよ。茜ちゃんの手足は中でロックされているので抜く事は出来ません。作動させれば手足を溶かされていきダルマになります。なかなか楽しい処刑具でしょう。ですが、開発して完成したのはしずくちゃんのお姉さんの処刑を執行した後なんですよ。だから、渡邉ゆかりには使用出来なかったのです。渡邉ゆかりの四肢はギロチンで切断してしまいましたからね。まあ、それも良いのですが、この処刑具も

是非使ってあげたかったですね」

葉月は残念そうな顔をすると、茜に顔を向ける。

「茜ちゃん、怖いですか？これが、処刑される時の恐怖です。憧れていたのでしょう。こうして味わえて良かったですね。この後、実際に処刑される恐怖と苦痛と絶望も味わう事が出来ますからね。さっき、あなたが言っていたでしょう。どんなに泣き叫んでも、もう許されませんよ。あなたは苦しみぬいて絶命するのです」

「ふごうぅぅぅぅーーーーっ！」

・・嘘っ、嘘だようっ。私まだしずくちゃんと一緒に調教されたい。死にたくないよぉぉっ。まだ処刑は許して下さいぃぃっ。パパ、ママ、助けてぇぇっ・・

葉月の言葉で茜は狂ったように絶叫し、その股間からは激しく尿が漏れていた。しかし、当然、茜が許される事はもうあり得ない。葉月は溶解液の注入スイッチをオンにする。U字型の中に溶解液が勢いよく流れ込んでいった。

13、衝撃（後書き）

次回も茜の処刑シーンが描写されます。
苦手な方はスルーでお願いします。

１４、処刑（前書き）

今回、茜の処刑シーンのみです。
「檻の中の幸福」と同じような内容なので、苦手だと思う方は飛ばして下さい。

１４、処刑

１４、処刑

葉月はスイッチを押し、処刑具を作動させる。処刑具の中に溶解液が注入されていき、茜の手足を包み込んでいった。

「ふごうぅぅぅぅーーーーっ！！ふごうぅぅぅぅーーーーっ！！」

茜が激しく絶叫するが、溶解液は満たされてしまった。茜の手が、腕が、脚が残酷に溶かされていく。誰もが経験あるだろう。理科の実験で誤って自分の手や腕に塩酸を飛ばしてしまった時の激痛を……。その激痛が四肢全てを襲うのだ。茜は尿のみならず大便まで、ぶりぶりと漏らしていた。そして、茜は上下左右に激しく首を振り、四肢を溶解される耐える事など出来ない地獄の激痛に狂ったように暴れている。

「どうですか？お友達の茜ちゃんが処刑されていく様子は？この苦しむ姿、最高ではありませんか。四肢の溶解が完了するまで６０分かかるよう濃度を調整してあります。その間、メスの苦しむ姿を存分に楽しむ事が出来るのが、この処刑具の良いところ。ふふっ、何か要望がありますか？」

葉月はガラス越しにしずくの顔を見つめる。しずくは初めて目の前で見る本物の処刑に震えていた。しかも、処刑されているのが友人

の本多茜であるのだから尚更だった。が、しずくは考える。葉月がもう処刑を止める事はまずないだろうし、茜ももう取り返しのつかない事をされてしまっている。それなら、茜の願いを叶えてあげる方が喜んでくれるのではないか。しずくは小学生の時、茜と二人でブランコで揺れながら話していた会話を思い出していた。

「あの、もし出来るなら茜ちゃんの口枷を外してあげて下さい。茜ちゃん、思い切り泣き叫びたいと思うから……。それと、あの……。焼き印も捺してあげて下さい。茜ちゃん、焼き印を捺されてメス奴隷になるのが夢だったんです。今日が茜ちゃんの最後の日になるのなら、茜ちゃんの意識があるうちに夢を叶えてあげたいんです」

「ほう、焼き印ですか。分かりました、それでは私の家の家紋を捺してあげましょう。鳳凰を象った鳳凰紋です。この私の紋を捺されたメスは、メス奴隷の中でも高く評価されるでしょう。これを胸と恥丘に捺してあげます。いかがですか」

「ありがとうございます。そんな凄い焼き印を捺されたら茜ちゃん、きっと本望です。よろしくお願いします」

しずくは、これで茜も喜んでくれると思ったが、四肢を溶解されている茜は、もうそれどころではなかった。すでに茜は自分の手足がまだ存在するのかさえ分からなくなっていた。ただ、剥き出しの神経を焼かれているようで、その激痛から頭を激しく振っている。それは頭がポロッと取れてしまうのではと思われる程の勢いだった。

「だじげでえぇぇぇっ!!もう、いやあぁぁぁっ!!ゆるぢでぐだぢゃいぃぃぃっ!!!」

そして、ギャグを外された茜は狂ったように唾を飛ばして絶叫する。

茜はもう全身汗まみれで、股間の部分の床は尿と大便で激しく汚れていた。葉月は用意した炉の中で、焼き印用の鏝を熱しながら苦しむ茜の姿を楽しんでいる。そして、鏝が真っ赤に焼けた事を確認し炉から取り出すと、苦しむ茜の右胸の膨らみに近づけていく。凄まじい熱気が自分の胸に迫ってくる気配に茜はもう発狂しそうだった。

「もう、しょけいなんて、いやあぁぁぁぁっ！おうちにがえじでぐだじゃいいいいっ！！」

ジュウゥゥゥーーーーッ！

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！」

しかし、無情に茜の胸に焼き印が捺される。葉月は、しっかりと綺麗に焼き印が残るよう茜の胸から焼き鏝を放さずに押し付けている。

「もう聞こえないでしょうけど、茜ちゃん。あなたには、もう帰るお家はないの。あなたは売られたのよ。可哀想にね。でも、悲しむ事はないわ。あなたの夢が叶うんですもの。良かったわね、茜ちゃん」

しずくは、車の中での葉月の会話を思い出し、あれはそういう意味だったのかと震えていた。そして葉月は、焼き印を捺した皮膚が剥がれてしまわないように慎重にゆっくりと冷めた焼き鏝を剥がしていた。茜の右胸には豪徳寺家の家紋がしっかりと残っている。

「ふふっ、綺麗に残りましたね。急ぎますか、そろそろ溶解がかなり進んでいますからね」

葉月は、念のため焼き印を茜の左胸に捺す前に、茜の胴体を背後か

らステーで固定していた。

「四肢が全て完全に溶解されてしまうと胴体が転がってしまいますからね。さあ、それでは残りの焼き印を捺しましょう」

葉月は炉に入れてあった2本目の鏝を取ると、茜の左胸に押し付ける。ゆっくり茜の胸に焼き印を捺した後は、最後の恥丘に真っ赤に焼けた鏝を押し付けた。茜の肉が焼ける音が聞こえる。ガラスで遮られていなければ、茜の肉の焼ける臭いも漂っている筈だった。

「おぼぼぼぼぼぼぼぼぼっ！」

茜の悲鳴にも力がなくなってきていた。茜は、口から泡を吹いて、先程までは激しく動いていた頭もがっくりと項垂れている。葉月は茜の髪を掴むと顔を上げ、茜がまだ呼吸している事を確認する。

「四肢溶解と焼き印くらいで終わっては悔いが残るでしょう。処刑して貰えるのは一度きりですからね。あなたは幸せですよ、私に処刑されるのですから、これ以上の名誉はないと思いなさい。ふふっ、私だからあなたも満足出来るよう、もっと責めてあげられるのですよ。知識も設備も、それに処刑を最後まで執行する精神力も充分にありますからね。だから、安心して下さいね」

葉月が優しく茜に語りかけていると、茜の体がガクンと大きく揺れる。しずくはどうしたのと思ったが、四肢の溶解が完全に済みダルマにされてしまった茜の体が、U字型の処刑具から解放され後方からのステーだけで支えられた為だった。葉月はリモコンを操作して処刑具を移動させる。処刑具は現れた時と反対に部屋の奥に移動していき見えなくなった。あとには四肢を溶かされてダルマにされた茜の体だけが残っていた。その茜の体がクルッと反対にされる。茜

は頭を下に性器を上にされ、その汚物で汚れてしまった性器を晒されていた。

「最後ですからね。きれいにしましょうね」

葉月は洗浄機で茜の性器に水を噴射し、汚物を洗い流し、そのあとタオルできれいに拭いていた。中学生になったばかりの茜の桜色の性器がモニターにアップで映し出されている。それは、まだきれいな状態だった。

「マンコを何もされないで処刑が終了してしまったら死んでも死に切れないでしょう。安心しなさい。きちんとマンコも壊してあげるから」

葉月は茜の膣に膣鏡を挿入する。

ズリュッ

特大サイズの膣鏡がすんなりと茜の膣の最奥まで入ってしまった。

「あらあら、あんな目にあっていたのにマンコこんなに濡らして……。あなたも相当異常な変態メスだわね」

膣鏡を最大まで開口した葉月は、茜の膣の奥の子宮を確認する。そして、炉の中に入れてあった物を火箸で取り出す。それは白く高温で燃えている炭だった。

「これは白炭の最高級品です。高温が長く続くので処刑には持ってこいですね」

・・あれは、お姉ちゃんがやられた子宮とマンコの穴の炭火焼きだ。
茜ちゃん、そこまでして貰えるんだ・・

しずくはもう瞬きするのも惜しんで、一瞬でも見逃さないように瞳を凝らしていた。しずくたちの後ろに座る人物も身を乗り出すようにして、処刑される茜の姿を凝視していた。その態度から、この人物も興奮している事が窺えた。

１５、切開（前書き）

今回のタイトルを見て、ヤバいと思った方は逃げ出して下さい。

茜の性器が切開されるグロ描写などがあります、

15、切開

15、切開

四肢を溶解されダルマにされた茜の膣内に白炭が落とされようとしているが、その時しずくたちの後ろのソファーに座っていた黒いスーツの人物が、いつの間にかインターフォンを鳴らしていた。ガラスの向こうで葉月がインターフォンの受話器を取り、何か話している。そして、葉月は一旦受話器を戻すと、別の所に発信し通話していた。黒いスーツの人物は、またソファーに戻り悠々と座っている。心なしかその人物が笑っているように、しずくは感じていた。

・・何を話していたんだろう。葉月さんのお友だちという話だけれど・・

その人物の声は小さく聞き取る事は出来なかったが、何か葉月に要求したように感じた。その葉月にスタッフが大きな姿見を持ってくる。葉月はその姿見を茜の前に置き、茜の目隠しを外し気付け薬を静注すると茜の頬を叩いて覚醒させた。

「ひいやぁぁぁぁぁぁーーーーっ！！」

自分の姿を見た茜が絶叫する。鏡の中には四肢を溶解されダルマにされ、焼き印を捺された自分の姿があった。

「ふふっ、自分の姿をはっきりと認識させた方が絶望感が深まるだ

ろうと指摘があったものでね。持つべきものは友ですね。どう、茜ちゃん。素晴らしい体になったでしょう。嬉しいでしょう」

「あああぁぁぁぁぁぁーーーーーっ！！！」

茜は自分の体を見て悲鳴を上げ続け、ポロポロと涙が零れ落ちていた。

「いやじゃあぁぁぁぁっ！おねがいじまぢゅうぅぅっ、もどのがらだにもどじでぐだぢゃいぃぃぃぃっ！！」

葉月は火箸をカチカチ鳴らしながら、泣き叫ぶ茜を楽しそうに見ていた。

「残念ね、茜ちゃん。あなたの手足は溶けちゃったから、もうこの世に無いの。さて、それじゃ茜ちゃんのマンコの穴と子宮を焼いていくからね。茜ちゃんもさっき動画で見たでしょう。この高温の白炭できれいに焼いてあげるからね。しっかり中まで火が通るから頑張ってね。まあ、無理だったら発狂してしまってもいいわよ」

改めて火箸で白炭を挟んだ葉月は茜の拡げた膣の上に炭を持っていく。茜は大きく目を見開いて過呼吸になっていた。

「はひゅーっ、はひゅーっ、はひゅーっ、はひゅーっ」

ガチガチと歯の根が合わずに鳴っている。その茜が叫んだ瞬間だった。

「もお、ゆるじでえぇぇぇぇっ！おねがいじまぢゅうぅぅっ！！」

ポトッ……

「あびゃあぁぁぁぁぁーーーーっ！！！」

茜は膣内に白炭を落とされ、絶叫し白眼を剥いてぶくぶくと泡を吹いていた。茜の体が激しく痙攣しているが、葉月は構わず2個目の白炭を火箸で摘まむと茜の膣内に落とした。そして、3個、4個、5個……。次々に茜の膣内に高温の白炭を落としていく。

「うーん、茜ちゃんの膣と子宮が焼けるいい匂いが漂ってきたわね」

葉月の言葉でメイドが換気扇を作動させる。すると、茜が処刑されている隣の部屋の匂いが、しずくたちのいる部屋にも漂ってきた。

・・こんな設備も備わっているの・・

しずくは茜の膣の焼ける匂いで、間違いなく隣の部屋では茜の処刑が行われていると実感していた。つい先刻まで一緒にジュースを飲んで話していた茜がダルマにされ、今、性器も壊されている。しずくは茜の姿に自分を重ねていた。

・・もし私があっち側にいたら、どんな気持ちだろう。間違いなく泣いて命乞いしてるよね。でも、許されない。私のマンコは徹底的に壊される。私は、お姉ちゃんみたいに頭が狂って惨めに死んでいくんだ・・

しずくは、太ももの内側まで濡らす程激しく粘液を分泌していた。息も荒くなってきていた。しずくは茜の処刑を見て激しく興奮してしまっていた。それはしずくが、明らかに一般の人間とは一線を画している証拠だった。

・・茜ちゃん、あんなに苦しそうなのに私はそれを見て興奮している。かわいそうとは思わない。むしろ羨ましいと思ってる。私のマンコが早く壊してと言ってくる・・

しずくはもう我慢出来なかった。メイドに向かって声をかける。

「渡邉様、お呼びでしょうか」

「は、はい、葉月さんに伝えて下さい。しずくのマンコも壊して下さいと……。お願いします」

「畏まりました」

メイドはインターフォンで葉月を呼び出し、しずくの伝言を伝えていた。

・・言っちゃった、言っちゃったよ。これで私のマンコは壊される。調教じゃなくて、本当に今の茜ちゃんみたいに壊されちゃうんだ。でもそれが待ち遠しい。今すぐ壊して欲しい。私のマンコは口を開けてそれを待ってる・・

葉月はしずくの伝言を受け取って笑みを浮かべていたが、それを悟られないように表面上は平静を装っていた。そして、茜の膣に入れた炭を火箸でならし団扇で扇いでいく。ボウッと茜の膣から炎が上がった。

「んんんびゃあぁぁぁぁーーーーっ!!」

茜の顔が苦痛で歪み絶叫する。

「ほーら、いい具合にマンコが焼けてきたわよ、茜ちゃん。きちんと焼けるまで、もう少し苦しみましょうねぇ」

葉月は優しく茜に声をかけながら団扇で風を送り続け炭の温度を高めたまま維持をする。茜は、もう発狂してしまったかのように叫び続け、必死に逃れようと体を動かすが、もう手足がなく背後から厳重に固定されている為、それは無駄な努力だった。葉月は、じっくりと時間をかけて茜の膣を焼いていく。

「さて、そろそろいいですか」

葉月は茜の膣内から火箸で炭を取り出していく。

・・茜ちゃんのマンコの穴、もう壊された。この後、何されたっけ……。お姉ちゃんは、この後どうなったんだっけ……・・

しずくは、先程観たゆかりの処刑動画を思い出そうとするが記憶が甦る前に葉月はメスを持って茜の前に立っていた。

「さあ、それじゃ切開してあなたのマンコの中身を取り出しますよ」

葉月は薄ら笑いを浮かべて茜の焼け爛れた膣口にメスを入れる。茜は自分が何をされるのか、もう考える事は出来なかった。しずくは、茜の膣に挿し込まれたメスを見て、次に何が起きるか期待していた。

・・茜ちゃん、マンコ切られちゃうんだ・・

しずくの期待通り葉月はメスに力を入れ、ツゥーッと茜の性器を切り裂いていく。膣口から膣前庭、尿道、クリトリス、そして恥丘ま

で茜の性器から下腹部まで切開してしまった。

「あっびゃあああぁぁぁぁーーーーっ！おぼぼぼぼぼぼぼぼうぅぅっ！」

再び茜が激しく絶叫するが、葉月は構わずメスでぐりぐりと茜の内性器を切り解体していく。そして、恥骨を摘出した葉月は、まず茜の白く細い紐のような尿道と尿管の付いた膀胱を摘出しトレイの上に載せる。次にはホースのようなパイプ状の膣を器用に切り出しトレイに載せた。

「さあ、次は大物いきますよ」

葉月は鉗子で子宮に繋がる血管の血流を止めると茜の子宮を慎重に取り出していた。そして、摘出した子宮もトレイに載せる。続いて小さな卵巣も二つとも摘出してしまう。固定されている茜の体はもう最後の時を迎えるかのようにビクンビクンと大きく痙攣していた。

「せっかくだから、こっちも抜き出してあげましょうか」

葉月は茜の肛門の周りをぐるりと丸く切断すると、そこに手を入れ茜の直腸を握り締めた。

「うひっ、さあいきますよ」

葉月は茜の腸を握ったまま、ずぼっと手を抜いた。そして、茜の腸を引き摺り出していく。

「ぶぼっ、ぶぼぼぼぼぼぼぼうっ」

それはもう悲鳴ではなかった。ただ声帯が振動している。それだけの事だった。直腸、S状結腸、下行結腸、横行結腸。どんどん茜の体から腸が抜き出されていく。茜はもうピクリとも動かず叫び声を上げる事もなかった。

「あらあら、茜ちゃん、死んじゃいましたね。もう少し頑張って欲しかったですけど仕方ありませんかね。満足してもらえたら良かったですが……」

葉月は茜の腸をクーパーで切断すると、もう動かない茜を残念そうに見つめていた。

16、少女

16、少女

茜の処刑が終了し、しずくはソファーに座り放心状態になっていた。生で見る処刑はしずくに衝撃を与えていたのは勿論、葉月に自分の望みを素直に言ってしまった以上、自分もすぐに処刑されるのではとドキドキしていた。

・・私のオマンコ、どんな風に壊されるのかな。お姉ちゃんみたいに徹底的に壊して欲しい。串刺しも鋸曳きも刺すのも切除も焼くのも溶かすのも、みんなやって欲しいよぉ。でも、オマンコは一個しかないから全部一片には無理だよね。体中、いろんな所にオマンコあったら全部やって貰えるのに……。でも、クチマンコとケツマンコがあるから、それも使えばいけるかなぁ・・

しずくは一人で妄想に耽っていたが、理恵も隣で息を荒くしていた。

「しずく様、少し待っていて頂けますか」

理恵はしずくに声をかけるとメイドに話しかけ、部屋を出ていった。その時にはもう葉月の友人だという黒いスーツの人物の姿は、いつの間にか部屋の中から消えていた。印象通り、まるで幻のような人物だと、しずくは改めて思っていた。すると、メイドがしずくにジュースのおかわりとトランクのようなケースをコロコロと引いて来た。

「渡邉様、私も加納様に頼まれまして少し席を外しますので申し訳ありませんが、このケースの中の物を使用してお待ち頂けますか。中の耐水シートを使用して頂ければ、お部屋を汚す心配もありませんのでお願いします」

「はい、分かりました。大丈夫です」

しずくが答えるとメイドは頭を下げて部屋から出ていった。しずくはジュースを一口飲み、このケースには何が入っているんだろうと開けてみると、中には様々な性具が入っていた。ディルドゥ、バイブ、プラグ、プジー、カテーテル、シリンジ、それに針や画鋲、蝋燭も入っている。

・・お姉ちゃんがやってた、あれやってみよう・・

しずくはケースから色々と道具を取り出し、準備していった。

その時、理恵は屋敷の葉月の部屋にいた。葉月から、この部屋を自由に使ってよいと許可を貰っていたので、やって来たのだ。そして、ゆかりの剥製を見つめながら衣服を脱いでいた。全裸になった理恵は、ゆかりの剥製の反対側に設置されている三角木馬に両腕を背中に回し自縛し跨がっていた。

「あうぅぅぅっ」

小さく声を上げる理恵の割れ目に、三角木馬の鋭角が食い込んでいる。そこへ、メイドが部屋に入ってきた。

「すいません、わたくしの両足に錘をぶら下げて頂けませんか」

「畏まりました、加納様」

メイドは心得ているように、この部屋に用意してある重さ１０キロの錘を理恵の足に一つずつ装着する。

「うひいぃぃぃっ」

理恵の割れ目に三角木馬が更に深く食い込み、理恵の瞳から涙が零れ落ちる。

「ううっ、お手数かけますが、ここに用意してある錘を全て下げて下さい。そして、わたくしの目と口も塞いで鞭で打って下さい。しずく様を、あまりお待たせする訳には参りませんが、出来るだけ長い間、鞭で打って頂ければ有難いです。時間はお委せ致しますので、よろしくお願い致します」

「承知致しました、加納様。渡邉様には時間潰しの道具を御用意してきましたので、加納様が満足する時間は苦しむ事が出来ると思いますよ」

メイドの言葉に理恵は恍惚の表情を浮かべていた。

・・ゆかり様の剥製の前で、責められる。なんと光栄な事でしょう。ゆかり様、わたくしの痴態を、苦しむ様をご覧になっていて下さい・・

理恵は、ゆかりに見られているかと思うと激しく興奮していた。その理恵にメイドは粛々と作業を進めていく。ガムテープで目隠しをし、口にも理恵の脱いだ下着を詰め込み、ガムテープで塞ぐ。そし

て、理恵の両足に次々に錘を装着していった。錘は片足に5個。両足合わせて１０個。１００キロの錘が足に装着されていた。理恵の足はピーンと一直線に伸びきりギシギシと音をたて、理恵の割れ目は恥骨が砕けそうな程、激しく、そして深く三角木馬の頂点が食い込んでいた。

「おぶうぅぅぅぅーーーっ！！」

呻き声を上げる理恵の顔は、涙と鼻水で激しく汚れている。その苦しむ理恵の体にメイドは容赦なく鞭を叩き込んだ。

ピシッ、ピシッ、ピシッ、ピシッ、ピシッ、ピシッ、ピシッ、ピシッ、ピシッ、ピシッ！！

「ひぶうぅぅぅぅっ、ぶぶぶうぅぅぅぅーーーっ！！」

理恵の胸や背中や、それに顔面にも容赦なく鞭が叩き込まれる。理恵は塞がれた口で絶叫していた。

・・ゆかり様、あなたの妹しずく様は立派なメス奴隷に育ちました。もう、わたくしの手が必要になる事はないでしょう。もう、わたくしの役目は終了しました。近々わたくしも、ゆかり様の下に送って頂きます。どうか、その際はお近くにおいて下さいませんか・・

理恵は、三角木馬で性器を裂かれる激痛と、同時に鞭で打たれる激痛で意識が朦朧としながら一心にゆかりの姿を思い描いていた。

★　★　★　★

しずくは尿道にカテーテルを挿入し、反対側を肛門に挿入していた。そして、肛門からチューブで子宮と連結する。途中のコックを捻れば、しずくの尿が肛門から腸内に流れ込み、その後大便と一緒に子宮内に流れ込む仕組みだった。姉であるゆかりが詳細に記録資料を残していたので、しずくはそれを正確に辿る事が出来ていた。

・・お姉ちゃん、私がそっちにいったら一緒に色々楽しもうね。お姉ちゃん、喜んでくれるかなぁ・・

しずくは、ゆかりの喜ぶ顔を想像しコックを開いていた。しずくの尿が一気に直腸に流れ込み、しばらくすると便意を催してきた。しずくは脂汗を流しながら耐えていたが、便意が最高に高まった時に肛門からのチューブのコックも開ける。

ぶりっ、ぶりっ、ぶりいぃぃっ

しずくの尿と混じった排泄物がチューブに流れ込み、そのまま子宮の中に注入された。しずくは自分の子宮の中に入ってくる、どろどろとした固形物の感触に気を失いそうな程、興奮していた。

・・お姉ちゃん、私もやったよ。子宮の中におしっこことウンチ入れた。どろどろしたのが一杯入ってくる。気持ちいいよ、お姉ちゃん・・

しずくは息を荒くして自分の乳首と陰核を擦っていた。その時、カチャッとドアが開く音がした。しずくは理恵が戻ったのかと思い顔を向けると、そこにはしずくと同じセーラー服を着た見知らぬ少女が立っていた。年の頃もしずくと同じに見える少女は、しずくに向かってツカツカと歩いてくる。

「それは〝渡邉ゆかり〟がやっていた変態行為ですね。私の〝母〟も同じ事をやっていたようですよ。母とあなたのお姉さんは、お友達というか知り合いの様ですから」

・・えっ……。誰っ……？どうして、これをお姉ちゃんがやっていたと知ってるの。お姉ちゃんの日記にはお友達が出てこないから分からないよ・・

しずくは、その可愛い顔立ちの少女を見つめるが、やはりその顔に見覚えはなかった。そこへ、今度は本当に理恵が戻って来た。何故か歩き方がぎこちないが満足した顔をしている理恵は、振り向いた少女の顔を見て、その場で硬直してしまった。

・・どうして、あの時の女の子が……。いえ、そんな筈はありませんね・・

理恵の驚いた表情を見て少女が呟く。

「私は……」

少女の名前を聞いて理恵は理解した。

・・そういう事ですか。ゆかり様、まだわたくしの役目は終わっておりませんでした。ゆかり様の名誉の為にも、しずく様が負ける訳には参りません。頂点に立つのは一人なのです・・

理恵は、少女の顔を睨みつけるような厳しい顔で見つめていた。

17、母娘（前書き）

今回、エロいシーン、グロいシーンはありません。
申し訳ないです。
ただ、今後の展開に関わるエピソードなので読んで貰えると嬉しいです。

17、母娘

17、母娘

茜の処刑を終えた葉月は、満足した顔をしていた。本音をいえば、もう少し楽しみたかったが、メス奴隷になっていない一般女子では仕方がないだろう。頑張った方だと茜を評価していた。

・・後は〝渡邉しずく〟ですね。良い具合に育ってきている。自分から処刑を望む程に……。もう少し、もう少しですね。パブロフの犬のように、処刑と聞いただけで潮を吹くような、そんなメス奴隷まで後一歩です・・

葉月はスタッフに指示を終え、しずくと理恵に挨拶に行こうとして、ふと思い付いた。

・・そろそろ、渡邉しずくにも会わせておいた方が良いでしょうね。二人とも頃合いです。二人が会う事でお互い刺激になれば、さらに高みに行けるでしょうからね・・

葉月は廊下を少し遠回りして、ある少女に与えてある部屋の前に立ち、ノックもせずにドアを開けた。広い部屋の中を見回すが、そこには少女の姿は見えない。葉月は部屋に入ると、念のためベッドや机の陰も覗いてみる。

・・もう子供ではないですから、さすがにこんな所に隠れてはいま

せんか・・

葉月は苦笑いしながら、ふと机の上を見る。そこには写真立てが置いてあり、その中には少女の母親の写真が入っていた。葉月は、少女の母親を処刑した時の事を思い出す。

・・〝渡邉ゆかり〟と遜色ないメス奴隷でしたが、惜しい事に熟成が足りませんでしたね。〝渡邉ゆかり〟は幼少の頃より、その異常性を開花させていましたが、このメスは自分の異常性に気付くのが遅かった。かといって、それが本当に熟成されるまで待っていては、メス奴隷として旬の年齢を過ぎてしまう。致し方ありませんでしたね。狩り時を誤った訳ではありません。まあ、処刑されて幸せだったでしょう・・

数多くのメス奴隷を残酷に処刑した葉月の記憶に残っているのは、それだけメス奴隷として優れていたのは間違いなかった。

・・直前に〝渡邊ゆかり〟の処刑があったのは不運でしたね。あの強烈な印象がある為に他のメス奴隷の印象が無くなっています。それでも記憶に残っているのは、このメスも優れていたのでしょうね・・

葉月は写真から目を離すと部屋を出て廊下を歩き出した。

・・まったく、どこに行ったのでしょうか、あの娘は……。これも私の躾がなっていないからでしょうか・・

葉月は途中行き合ったメイドに娘の行方を尋ねる。

「私の娘を見かけませんでしたか?」

「はい、葉月様。先程、処刑観覧室に入って行くのをお見かけしました」

・・今日、渡邉しずくが来ると話したものだから、自分で会いに行ってしまったようですね。やれやれですね・・

葉月はため息をついていた。

★　★　★　★

「こんにちは、しずくさん。私は、琴音。蜂須賀琴音といいます」

「蜂須賀さん？」

しずくはピンとこなかったが理恵はやはりと思っていた。ゆかりの処刑を観ていた時に自分の隣にいた少女。ゆかりの友人だと言っていた特別に招待されていた少女と瓜二つだった。その少女が、その後どうなったか。それも知っている。しかし、まさかその少女に子供がいたとは思いもしなかった。

「私の母はしずくさんのお姉さんとお友達だったようですよ。いや、正確にはお友達に成りたかったと言った方が良いのかな」

ここで琴音は言葉を切ると、しずくの隣に腰を降ろした。

「私は母とは直接話した事はないんですよ。私が物心ついた頃には母はもう亡くなっていましたから……。でも母は私に詳細な日記と

記録を残してくれました」

「お母さん、亡くなっているんですか」

「ええ、母は処刑されました。私は最近になって動画を見せて貰いましたが、私はそれを観て興奮してしまいました。母は、女の子の大切なマンコを壊されて、泣きながら命乞いして、惨めに発狂して死んでいきました」

・・お姉ちゃんと同じだ・・

しずくは琴音の顔を見つめていた。

「でも、同情などは要りませんよ、しずくさん。あなたも、お姉さんを処刑されている。それで同情など欲しいとは思わないでしょう。私も同じです。むしろ私の母〝蜂須賀彩音〟は私の誇りです。母はあなたのお姉さんに決して負けてはいません。私にとっては、〝渡邉ゆかり〟よりも〝蜂須賀彩音〟の方が上ですよ。それなのに界隈では〝渡邉ゆかり〟の名前は未だに輝いているのに、母の名を口にする人はおりません。私は、それが許せない。その上、母自身も日記の中で〝渡邉ゆかり〟を称賛している。だから私は、しずくさん。あなたには負けません。今度は私の名前で、あなたの名前を歴史から消してあげます」

しずくは言葉がなかった。自分の知らない過去にこんな事があり、そしてこんな勝負を挑まれるとは思いもしなかった。

「琴音さん、わたくしはあなたのお母さんの事も存じていますが、あなたのお母さん、彩音さんはゆかり様を尊敬していましたよ。決して勝ち負けなどに拘ってはいませんでしたよ」

理恵は、あの時見た彩音の印象から確信していた。

「そうですね。母はそうでしょう。日記を読んでも〝渡邉ゆかり〟ともっと早く友だちになっていれば二人で楽しめたと、そこかしこに書かれています。ですが、私は違います。私は、私を育ててくれた養母である葉月様の気持ちを私に取り戻す為、しずくさんに負ける訳にはいきません」

「養母が葉月様？お父さんは居られないのですか」

理恵は、葉月が父親からこの娘を購入したのかと思ったが、琴音の返事は違うものだった。

「父など知りませんよ。何処の誰とも分かりません。最低のクズ野郎のようです。私の母は犯されたんですよ。よってたかって複数の男に……。その中に父がいたんでしょうが、そんなクズ、父でもなんでもありませんし、母を犯した男たちはその場で沙也加様に殺されていますので、もうこの世にはいませんよ」

琴音は吐き捨てるように言う。そんな血が自分に混じっているのが汚らわしいとでも云うように……。

「ですから私は葉月様に育てられました。幼い頃からメス奴隷として育てて貰ったのです。それが、ある時急に私に対する態度が変わりました。表面上は変わらなく見えますが、私が調教で音をあげると、それまでは耐えなさいと厳しく責められたものですが、そこで終わりにしてしまうのです。気が入っていないというか、他のものに気を取られているという感じでした。私は気になって訊いてみましたよ。私が何か粗相をしてしまったのかと思ったからです。そう

したら、葉月様はあなたの存在を確認したと嬉しそうに言うのです。あの〝渡邉ゆかり〟の妹がいるのが分かったと……。葉月様の心は私よりもあなたに向かってしまった。だから、しずくさん、私はあなたには負けません。あなたより私の方が立派なメス奴隷であると認めて貰う為に……」

しずくも理恵も、恐ろしいまでの琴音の気迫に圧されていた。その時、カチャッとドアが開く。

「まったく、私が紹介しようと思っていたのに、仕方ないですね、琴音。まあ、一般の躾が上手く出来ていないのは私の責任です。すいませんね、しずくちゃん、加納さん」

入って来た葉月が頭を下げていた。琴音も慌てて二人に頭を下げていた。

18、友情

18、友情

葉月はしずくたちに琴音を紹介するが、それは既に琴音本人から聞いていたので驚きはなかった。

「これで紹介も済んだし、うちの琴音と仲良くしてあげてね、しずくちゃん」

「はい、葉月さん」

しずくは元気に答えていた。ある意味、同じ境遇で同じような性癖を持つ琴音にしずくはシンパシーを感じていた。そして、それは琴音も同じようでしずくに向かってにっこりと微笑んでいた。

「では、せっかく二人の友情が芽生えたところで、しずくちゃんと加納さん、是非食事をしていって下さいな。今日は新鮮な食材がありますので、ご馳走しますよ」

「はい、喜んで」

また、しずくは元気に返事をするが理恵は、まさかという顔をしていた。

・・葉月様は新鮮な食材と仰った。それは、もしや先程の……・・

葉月ならやりかねない。平気で提供してくるだろう。理恵は心の中で震撼していた。

・・でも、食べてみたい。こんな機会は滅多にない・・

理恵は心の中で恐怖しながらも、その食材を食べてみたい誘惑に捕らわれていた。

「それでは、食事の準備が出来たら声をかけるので、それまでご自由に寛いでいて下さいな」

「あっ、それでは葉月さん。またお姉ちゃんの動画見せて貰って良いですか」

「もちろん良いですよ。応接室に動画のメモリーを運ばせますから、用意が出来るまでゆっくりと観て下さい。処刑だけじゃなく、他の動画もありますから楽しんで下さいね」

「それでは、葉月様。わたくしは葉月様のお部屋でゆかり様を観させて貰っています」

「お姉ちゃん？」

「ええ、しずく様も後でご覧になると良いですよ。ゆかり様の本物の剥製がございますので」

「お姉ちゃんの剥製……」

「後で私が案内してあげるよ。早く応接室に行って動画観ようよ、

しずくちゃん。私も、しずくちゃんのお姉さんの動画は観た事ないんだ。養母さんがまだ観ちゃいけないって、先入観を持つのはよくないって言ってたの。でも、もうしずくちゃんと会ったから観られるんだ」

琴音がしずくの手を引き、部屋を飛び出して行った。

「まったく落ち着きがないですね、琴音は……」

葉月がやれやれという顔をしていた。理恵は、その葉月の顔を見て、葉月も子供を育てて何か変わったのかと思い質問してみた。

「葉月様は、あの二人を本当に処刑されてしまうおつもりですか？」

理恵に顔を向けた葉月の瞳を見て、理恵は自分の甘さを痛感していた。葉月の返事を聞くまでもない。その冷たく残酷な瞳が全てを物語っていた。

「当然ですよ。その為に今まで我慢してきたのではないですか。どちらも良い具合に育っています。どちらが私をより一層満足させてくれるのかしら。とても楽しみです。もう興奮が止まりませんね。私の記憶に残る〝渡邉ゆかり〟と〝蜂須賀彩音〟。そのＤＮＡを受け継ぐ二人のメス。妹と娘。ああ、こんなに興奮する事があるかしら。加納さんも、そう思いませんか」

「はい、勿論です。ですが、葉月様。ゆかり様の妹であるしずく様の方が優れているとわたくしには思われます」

「ほう、私が育てた琴音より〝渡邉しずく〟の方が上だという訳ですか」

「あっ、いえ、そういう訳では……。わたくしが言いたいのは、その元の部分が、ゆかり様の方が彩音さんより優れていると言いたいだけです」

「そうですかね。私はおそらくあなたより〝蜂須賀彩音〟の事をよく知っていますよ。神楽坂さんから詳細な報告も貰っていましたからね。〝蜂須賀彩音〟の異常性は決して〝渡邉ゆかり〟に遅れをとるものではありませんよ。もし、二人がもっと早く出会っていたら、そしてお互いの異常性に気付いていたら楽しかったと思いますよ。それが今、〝渡邉しずく〟と〝蜂須賀琴音〟で実現したのです」

熱弁を奮っていた葉月は、そこで何かを思い付いたと顔を輝かせた。

「加納さん、あなたのおかげで良いことを思いつきました。準備に時間と資金がかかりますが、これは歴史に残るイベントになるのではないでしょうか。早速私はその準備に取りかかるとしましょう」

葉月は興奮した顔で部屋を出ていった。理恵も立ち上がると部屋を出て、葉月の部屋に向かい、そこでゆかりの剥製に対面していた。

・・ゆかり様、しずく様はもうすぐあなたと同じ歳になります。おそらく葉月様は、しずく様をあなたと同じ歳で処刑するつもりでしょう。しずく様は立派なメス奴隷だとわたくしは信じております。葉月様が何を考えているのか分かりませんが、もうすぐ、しずく様もあなたの所へいくと思います。その時は姉妹仲良く過ごして下さいね・・

理恵は、もうしずくの命は長くないだろうと感じていた。

★
★
★
★

琴音は、当初しずくにライバル意識を剥き出しにしていた。今でもしずくをライバルと思う気持ちに変わりはないが、実際にしずくに会ってみるとその気持ちに変化が訪れていた。

・・この女の子も私と同じ運命を背負っている。いつか、ううん、近い将来に私と共に処刑される。それは決してもう逃れられない運命。なんだろう、こうして会ってみると、まるで自分がもう一人いるように感じる・・

琴音はしずくに惹かれている自分を感じていた。

・・私の産みのお母さんも〝渡邉ゆかり〟に惹かれていた。私も〝渡邉しずく〟に惹かれている。お母さんの血は確かに私に受け継がれているんだ。お母さんは〝渡邉ゆかり〟と友だちになりたいと思っていた。そのお母さんの思いを私が叶えます・・

琴音が物思いに耽っていると、メイドが動画の収録されたメモリーを持ってきた。それは、ゆかりの処刑動画だけでなく、ゆかりが四肢切断された動画、ゆかりが膣の型をとられた動画など多岐に渡っていた。

「せっかくお姉さんの動画観るんだから、私たちも立派なメス奴隷になった姿見せてあげようよ」

琴音の提案にしずくも賛成する。まだ二人ともメス奴隷の証、ピアシングや焼き印を捺されていない。そこで安全ピンをピアスの代わ

りに入れ、焼き印の代わりにマジックペンで身体に落書きすることになった。二人は全裸になるとお互い安全ピンを持ち、じゃんけんで順番を決める。

「私が勝ったから先にしずくちゃんの身体に安全ピンを入れるよ。はい、両手を上げて足を大きく開いて」

琴音は、まずしずくの左乳首を摘まんだ。

「しずくちゃん、胸はあまり大きくないんだね」

「お姉ちゃんも小さかったから遺伝なんだよ、きっと。でも小さい方が良いって人もいるから私は気にしてないよ」

「そうだね。それじゃいくよ。ピアッサーと違ってすごく痛いよう」

琴音は脅かすように言い、しずくの乳首に安全ピンを突き立てる。

プスッ

「あうっ……」

小さく声を上げるしずくの乳首に琴音は安全ピンを突き通していく。しずくの乳首の中をズルズルと安全ピンの針が突き通っていく。

プスッ

再び小さな音がして針はしずくの乳首を貫通していた。琴音は安全ピンの針を閉じると、しずくの顔を見た。しずくは涙を滲ませてはいたが、姿勢も崩さず、そのままの姿勢で立っている。命令された

ら、その通りに姿勢を保つ。メス奴隷の基本は出来ていると琴音は思っていた。

「じゃあ、反対側にも入れるね」

琴音はしずくの右の乳首にも安全ピンを突き通し眺めていたが、何か物足りなかった。

「錘も下げようよ、しずくちゃん。その方が奴隷らしいし」

しずくも、ゆかりが乳首や性器に錘を下げていた事を思いだし異存はなかった。すぐに琴音はしずくの左右の乳首に入れた安全ピンに錘を取り付ける。

「うびっ……」

その重さで乳首が引かれ激痛がはしったしずくは、また小さく声を上げる。

「良いねえ、しずくちゃん。奴隷っぽいよ。それじゃ、次はクリだね。ここに入れなきゃ奴隷じゃないもんね」

「うん、お姉ちゃんもクリ虐めるの大好きだったみたい。お姉ちゃんはマンコに１０個以上ピアス入れて貰っていたんだよ」

しずくがうっとりした顔で言う。

「あっ、ダメだよ、しずくちゃん。そんなに濡らしたらクリ摘まめないよ。他の事を考えてて」

・・ううっ、他の事って何考えるの。意識したら余計濡れちゃうよ・
・

しずくは学校の勉強を頭に思い浮かべていると、クリトリスに激痛がはしった。

「うぐうっ……」

しずくはクリトリスを安全ピンで貫通され、そこに〝渡邉しずく〟と書かれたネームプレートを下げられていた。

「どう、クリに名札って無様で奴隷らしくて良いよね。じゃあ、次は私の番。同じ様に安全ピン入れてね。その後、お互いに落書きしようね」

「私、琴音ちゃんに〝公衆便女〟とか〝フリーマンコ〟とか色々書いて上げる。本当は消せない焼き印が良いけど、それもそのうちに捺して貰おうね」

二人は本当に仲の良い昔からの友人のように楽しく語り合っていた。その姿は、ゆかりと彩音が楽しそうに会話している姿にも見えていた。

18、友情（後書き）

おそらく次回、皆さん想像通りの非常に危険な展開になっていくと思いますので、ヤバいと思った方はスルーして下さい。

19、食卓（前書き）

今までの流れと、今回のタイトルでヤバいと思った方は逃げて下さい。

今回は非常に危険な描写があります。
はっきり書きますとカニバリズムです。
読む方は自己責任でお願いします。

19、食卓

19、食卓

琴音の乳首と陰核に安全ピンを突き通したしずくは、マジックペンで琴音の身体に卑猥な言葉と侮蔑する言葉を書きながら興奮していた。

・・今日はマジックで書いたけど、こんな恥ずかしい言葉を消せない焼き印で捺されたら嬉しいよね。もう人とは扱わないで、物として扱ってマンコ壊していって欲しいよ。お姉ちゃんみたいにマンコ、バラバラにされたら嬉しいな・・

しずくは、自分が残酷に処刑されていく様子を想像し、太ももの内側まで光るほど濡らしてしまっていたが、琴音の太ももヌルヌルに光っていた。二人は興奮しながら、ゆかりの処刑動画を再生する。

「お母さんだっ」

琴音が声を上げた場面は、彩音がゆかりの乳首を切断するシーンだった。しずくも最初に観た時には気付かなかったが、確かに琴音によく似ている少女がゆかりの乳首に針を貫通させ、バーナーで焼き、カッターで切断していた。その彩音の姿も普通ではなかった。拘束され、性器に大量に錘を下げているのが分かる。

・・琴音ちゃんのお母さんも、お姉ちゃんと同じ変態で頭のおかし

い女の子だったんだ・・

しずくは、だから私たちはこんなに気が合うんだと納得していた。その後も彩音は登場し、ゆかりを抱きしめながら脳を犯し、ゆかりの頭の中に大便も排泄していた。

・・琴音ちゃんのお母さんも処刑されたって言ってたけど、これを観れば分かる。琴音ちゃんのお母さんはこの時、お姉ちゃんに自分の姿を重ねて興奮していたんだ。自分が処刑されていると妄想して・・

しずくは、ゆかりの頭を犯す彩音の表情を観て確信していた。そして、琴音も自分の母彩音の姿を観て興奮していた。処刑される時とはまた違う彩音の姿は、琴音にも新たな刺激を与えていた。

★★★★

「お待たせしました、皆さん。それでは遠慮なく歓談しながら食事に致しましょう」

葉月の屋敷の広い食堂のテーブルに5人の人間が席に着いていた。上座に葉月、その次に向かい合わせに琴音と黒いスーツの人物、そして少し離れてしずくと理恵が向かい合って座っていた。テーブルの大皿にはサラダが山盛りに盛り付けてある。それぞれが自分のお皿にサラダを取り分け、テーブルに置かれた小瓶に入った白いドレッシングをかけて食べ始めた。

「美味しいです、この白いドレッシング。サラダにとても合います

ね」

しずくが思わず声を上げる。琴音もウンウンと頷いていたが、理恵は複雑な表情をしていた。

「ありがとう、しずくちゃん。彼女も喜ぶでしょうね」

葉月が微笑んで答えるが、しずくは彼女って誰だろうと思う。

・・このドレッシングを作った料理人の人なのかなぁ・・

しずくは漠然と考えていたが、黒いスーツの人物が葉月に顔を向ける。

「私は、もう少しレモン汁を加えた方が良いと思うぞ、葉月。少し味が濃厚過ぎるように感じる。まあ、せっかくの新鮮な食材だ。あまり手を加えたくないのもわかるがな」

「そうですね、今回たまたま新鮮な物が手に入ったので、出来るだけ素材の良さを味わって貰おうとしましたが、確かに少し濃厚過ぎるようですね。まあ、でも脳ミソが原料のドレッシングにしては及第点ではないでしょうかね」

葉月の言葉でしずくは仰天していた。

「ねえ、理恵さん。脳ミソって、海外で食べられている羊や猿の脳ミソなのかな。私、食べるの初めて」

しずくの無邪気な質問に理恵は曖昧に頷いていた。

・・間違いない、これはあの娘の脳ミソだ。つまり、これから後に出てくる料理も……。しずく様に言った方が良いものか……・・

理恵が戸惑っているうちに、皿に乗せられた腸詰めが運ばれて来た。メイドがそれぞれのテーブルの前に皿を置いていく。そして、その脇にカップに入ったスープも置かれていた。ボイルされた大きな腸詰めが2本、お皿に乗っている。湯気を立て、いい匂いが漂っている。スープからも食欲をそそる匂いが漂っていた。

「新鮮なお肉の腸詰めです。たっぷり香辛料を効かせてボイルしてあります。スープは、ボーンブロススープです。じっくり煮込んであり、雑味を取ってありますので美味しく召し上がれると思いますよ」

葉月がナイフとフォークで腸詰めを切りながら楽しそうに解説し口に運ぶ。

「理恵さん、教えて。ボーンブロスって何？」

しずくは、また理恵に質問する。

「骨髄を長時間煮出したスープですよ、しずく様。しずく様も豚骨ラーメンなどお召し上がりになった事がございますでしょう。ああいった物をイメージして頂けると分かりやすいかと思いますよ」

「ふーん、でも何かいい匂いがするね。豚骨はもう少し臭い匂いだと思うけど。それが良いんだけどね」

しずくがスープを一口飲むと、黒いスーツの人物が説明してくれた。

「これは、お嬢さん。ハーブを入れてあるんですよ。普通は少量の塩で味付けするのですが、葉月はハーブが好きですからね」

「あ、ありがとうございます。そっか、ハーブかぁ。私もハーブ好きかも」

しずくはスープを美味しそうにごくごくと飲んでいた。理恵もゆっくりと味わうように腸詰めを食べ、スープを飲んでいる。琴音も腸詰めを食べ、スープを飲み、嬉しそうな顔をしていた。いつも一人で孤独に食事をしているので、こうして大勢で食事をするのが嬉しくてたまらなかったのだ。

そして、みんなが腸詰めとスープを食べ終わると、次の皿が出てきた。細くスライスされた肉を焼いた物にソースがかかっている。

「ほう、ポワレですか。これは美味しそうですね」

黒いスーツの人物が口に入れ、しずくたちもナイフで肉を切ると口に運んでいた。

「カリカリに焼いてあって美味しいです」

しずくも顔を綻ばせていた。だが、しずくの次の質問に答えた葉月の言葉で、しずくは失神しそうになっていた。

「葉月さん、このお肉とても美味しいです。何のお肉なんですか？」

葉月はニヤリと笑って答えた。

「これは一体からあまり獲れない希少な部位の肉なのですよ。これ

はね、小陰唇をポワレしたものですよ」

「しょう、いん、しん……」

「そうですよ、わかりますよね、小陰唇。今日はちょうど新鮮な食材が手に入ったものでね。どうですか、美味しいでしょう」

しずくは葉月の言葉で全てを察した。身体が震えてくる。自分で、自分の事を異常者だと思っているしずくでさえ、これには身体の震えが止まらなかった。

「こ、これ……。あの……、あか……」

唇が震えて言葉が続かなかった。

「そうですよ、しずくちゃん。このお肉は本多あ……」

「いいですっ！すいません、言わないで下さいっ！」

しずくは席から立ち上がり、叫んでいた。しずくの顔が硬直している。

・・私、食べちゃった。美味しいって食べちゃったよ。こんな事して、もう私なんか生きている資格がないよ・・

しずくは力なく椅子に座っていた。

・・ふふ、これで渡邉しずくは自責の念に捕らわれる。そして、それは強烈な自己否定へと繋がる。その結果がどうでるか、楽しみです。かつて渡邊ゆかりが、殺人を犯したかもと悩み苦しんだように

……・・

葉月は、斜め前の席にいる琴音に目を向けた。琴音は、何でもないように小陰唇のポワレを食べていた。

・・異常という点では、琴音の方が勝(まさ)っているようですね。この体験が二人にどう影響するのか楽しみです・・

葉月は、しずくと琴音を見比べて微笑んでいた。

「さあ、まだまだ料理はありますよ。皆さん、食事を楽しんで下さい」

葉月は大きな声で手をパンパンと鳴らす。その合図でメイドたちがワゴンに乗せて次の料理を運んで来て、テーブルの上に並べていく。今度はビーフシチューのような煮込み料理だった。しずくはとても食欲がなかったが、そこで考えてみる。

・・でも、私が残して捨てられちゃったら茜ちゃんに悪いよ・・

しずくはナイフとフォークを持つと、お皿の上の柔らかな肉を震える手で切っていた。

・・これは何処の肉なんだろう・・

しずくは、もうそれを訊くのも怖かった。そして、切った肉を怖々と口に運んでいた。

２０、転換

２０、転換

しずくは終業のチャイムが鳴ると、とぼとぼと一人教室を出ていった。今日は掃除当番でもないので、誰もしずくを呼び止める者はいない。しずくは校庭に出ると、小学校の時のブランコを思い出していた。茜と二人でブランコに座り、揺れながらお喋りしていたのが昨日の事のように思い出される。その茜はもういない。茜は、虫けらの様に簡単に処刑されてしまった。そして、その茜の体をしずくは……。

・・私、やっちゃいけない事をやっちゃった・・

しずくは一人校門から出ると、そこにセーラー服を着た琴音の姿があった。

「しずくちゃん、こんにちは」

葉月に指導されたのか琴音は、きちんとスカートを持ち膝を曲げて挨拶していた。

・・カーテシーだ。葉月さん、躾を気にしてたから琴音ちゃんに教えたのかな・・

しずくは、その琴音の姿勢の美しさに感動していた。

「少し歩きながら話そうよ」

琴音はしずくの隣を並んで歩きながら話しかけてきた。

「うちから帰る時も元気なかったから、どうしたのかと思って」

「ううん、なんでもない。大丈夫だよ」

明るく話しかけてくる琴音にしずくも、無理して明るく答えていた。しかし、それが無理していると誰が見ても分かってしまうほど、しずくの態度は不自然だった。

「お友達が処刑されちゃったから?」

「ううん、違うよ。茜ちゃんも処刑して貰いたいと言っていたから、ちょっと突然だったけど茜ちゃんも満足したと思う」

「じゃあ、食べちゃったから?」

しずくは、うっと言葉に詰まっていた。

「えぇっ、食べちゃったの気にしてるんだ。別に良いじゃない。だって私、自分のオマンコ食べられると思うと興奮するよ。ビラビラもクリもオマンコの穴も、食べられちゃうと思うと濡れてくるよ。オマンコ処刑された後、食べられちゃうなんて最高じゃない。しずくちゃんは違うんだ」

琴音の言葉でしずくは、目から鱗が落ちた感覚だった。自分が処刑されて、それを観ていた人たちに自分が食べられていく。

「あふっ……」

しずくは興奮して小さな声を上げてしまっていた。自分の性器がバラバラに解体され調理され食べられていく。しずくは、その妄想に激しく興奮し、下着をグショグショに濡らしてしまっていた。

「そうだね。琴音ちゃんの言う通りだ。なんか興奮するね。うん、私も食べられたいかも」

明るくなったしずくを見て、琴音も嬉しかった。

「今度、しずくちゃんの家に遊びに行っていい？」

「もちろんだよ。お互いに調教して楽しもうよ」

二人は笑顔で笑いながら仲良く歩いていた。それは、運命が違っていればゆかりと彩音が演じていた姿かも知れなかった。すると、その二人の前に人影が立ち塞がった。スーツを着た男と、ジャケットにジーンズのラフな格好の男が二人。後ろを見ると、いつの間にかそこにも迷彩柄のパンツにタンクトップ姿の男を筆頭に三人の男が立っていた。

「渡邉しずくさん、だよね？渡邉ゆかりの妹で間違いないかな」

スーツの男が、しずくに声をかける。

「はい、そうですが……」

しずくが緊張した声で答える。男たちはどう見ても普通の職業の人

間には見えなかった。琴音はしずくを庇うように、しずくの前に立っていた。

「そちらのお嬢ちゃんには用はないから帰っていいよ。早く行きなさい」

男は琴音に立ち去るよう促すが、琴音はしずくの前で男たちを睨みつけ動かなかった。

「大人しく言っているうちに消えないと痛い目にあって貰うことになりますよ」

「はぁ？あなたたちこそ、私が誰か分かっていないようですね。私に手を出せば、あなたたちは家族含めて皆殺しになりますよ」

「おやおや、随分威勢のいいお嬢ちゃんだ。我らの心配などしないでいい。そんなに死にたいなら、すぐに殺してあげますよ」

男が言い終わったとたん、他の男たちが琴音に襲いかかってきた。しかし、琴音は強かった。殴りかかってきた男の拳をかわすと、カウンターで男の眉間に肘を入れる。そして、そのまま腰を落とし、次の男の鳩尾に肘を突き入れ、あっという間に二人の男を倒していた。しずくは幼い時に自分を助けてくれた葉月の姿を思い出していた。女子の身体の中でも硬く武器になる肘を有効に使い、敵の急所に一撃を叩き込む。琴音は、葉月に格闘の手引きも受けているのだとしずくは思った。しかし、やはり多勢に無勢。残った男たちに同時に飛びかかられ琴音は抵抗したが取り押さえられていた。

「まったく、なんだこのメスは……。このメスには用がない。もう殺しておけ」

スーツの男が命令し、迷彩柄の男たちがナイフを取り出した時、何か周囲の空間の雰囲気が変わった。しずくも訳がわからずキョロキョロと見回している。結界……。しずくたち、この世界の人間には理解出来ないが、これはその結界がしずくたちを取り囲んでいたのだった。

・・なに、これ……・・

男に取り押さえられながら琴音が思った時、迷彩柄の男たちの首が一瞬で切断され、頭が地面に転がった。血を噴き出しながら男たちの身体もナイフを持ったままゆっくりと倒れていく。琴音に倒されていた男二人の首もはねられていた。

「ひっ……」

一人残ったスーツの男が小さく悲鳴を上げ逃げようとするが、それはもう遅かった。黒いスーツにボーラーハットを被り、マスクとサングラスをかけた人物が立っていた。

・・葉月さんのお友だちの人だ・・

しずくは、その幻のような人物が助けてくれたのだと思った。

「この世界で力を行使するのは自戒しているのですが、私の楽しみを奪おうとする者には是非もありません。この両名は今後私を楽しませてくれる貴重な人間ですからね。とはいえ、これ以上力を使うのは憚られますので葉月に連絡して後始末して貰いましょう。あなたのバックが何者なのかを訊き出す必要がありますからね。いや、でも葉月はオスは好みではありませんでしたか。それでは、沙也加

にしますか。あなた、少し気の毒ですね。葉月ならともかく、あのオスに対して狂気を宿した沙也加ですからね。あなたの性器がどんな目にあい壊されていくのか。少し見てみたい気もしますね。まあ、絶望しながら死んでいきなさい」

黒いスーツの人物は男を拘束すると、しずくと琴音に顔を向ける。

「葉月が膨大な賞金をかけたイベントを計画しています。その為に、あなたたちを狙う輩がまた現れるでしょう。くれぐれも慎重に行動して下さい。私は、あなたたちが処刑され惨めに絶命する姿を見るのが非常に楽しみなのですから。どちらが欠けても楽しみが半減してしまいます。まあ、今回の件で葉月も警戒を高めて、あなたたちの守りを固めるでしょうけど、あなたたちも油断しないように」

しずくと琴音は、ありがとうございましたと頭を下げて顔を上げると、もう黒いスーツの人物の姿は幻の様に消えていた。しばらくすると神楽坂沙也加が黒塗りのベントレーでやって来て、死体を処分し拘束され泣き叫ぶ男を車のトランクに詰め込み、しずくたちに笑みを送る。

「渡邊しずくを狙うなど、私たちに喧嘩を売っている様ですね。しずくちゃんも琴音お嬢様も安心しなさい。私が全て狩り尽くしておきますので」

沙也加は残酷に笑うと、男を詰めたトランクをトントンと叩き、戻って行った。後には数人の黒いスーツを着た男たちが残っていた。

「無事で良かったです、琴音お嬢さん」

「ありがとう、近藤さん。あの方に助けて貰ったので、今度、養母（おかあ）

さんからもお礼を言うよう伝えて下さい」

「畏まりました。これからは私たちが交代で警護にあたります。勿論、視界に入らないように注意しますので気になさらないで普通にお過ごし下さい」

近藤は、しずくと琴音に頭を下げると、すぐにしずくたちの視界から消えていた。

「あの助けてくれた人も謎だけど、なんで私が狙われるのか全然分からないよ」

しずくは、本当に心当たりなどなかったが、琴音は思い当たる節があるようだった。

「これはまだ内緒なんだけど、養母（おかあ）さんがイベントを開催するみたいなんだよ。あの方も言ってたでしょう。優勝すると莫大な賞金が貰えるらしいの。そこに、しずくちゃんが出場したら自分達が勝てないから邪魔しに来たんだよ、多分ね」

「私が……」

「そう、私もそのイベントに出場するように養母（おかあ）さんから言われているから……。私も一番の強敵はしずくちゃんだと思ってる。でも私は、しずくちゃんと競うのが楽しいから邪魔なんてしないよ」

「競うって、何を競うの。私、そんなに凄い能力なんてないよ」

「謙遜しなくていいよ、しずくちゃん。しずくちゃんは、あの〝渡邉ゆかり〟の妹。それだけで驚異に思う人は大勢いるから」

「えっ……」

「メス奴隷処刑トーナメント。それが開催されるイベントの名前。まだ秘密の筈なのに、誰か嗅ぎ付けた人がいるみたいね。ふふっ、しずくちゃん。私も〝蜂須賀彩音〟の娘として絶対に負けないからね」

・・メス奴隷処刑トーナメント・・

しずくは、言葉もなく琴音の顔を見つめていた。

21、拉致

21、拉致

ある街中を一人の男がトランクを転がしながら歩いていた。男の名前は佐瀬伸也。下町の中小企業に勤めるごく普通の会社員である。彼はそこで営業を担当していた。成績は中の上と云ったところか。毎月のノルマはこなしているが称賛を受ける程の成績は残していない、まったく普通のサラリーマンだった。だが今日は、佐瀬は外回りの営業で街を歩いていた訳ではなかった。獲物を物色していたのである。佐瀬の会社員の姿は周りを欺く為の、彼の本性とはまったく別の姿だった。彼の本当の姿は、メス奴隷を調教する調教師。その界隈では調教師エスとして名が通った男だった。

その佐瀬の耳に、ある噂が入ってきた。豪徳寺葉月が、メス奴隷処刑トーナメントを開催するという噂だ。他の者が主催であったなら佐瀬も本気にはしなかっただろうが、葉月が主催者となると噂の信憑性が高くなる。佐瀬が密かに探りを入れてみると、確かに葉月が色々動いているのが確認出来た。

・・どうやら噂は本当らしい・・

佐瀬は確信した。

・・メス奴隷処刑トーナメントか、面白い。俺がそこで優勝してやる・・

佐瀬は、そのトーナメントに葉月の育てた琴音も参加するという情報も掴んでいた。

・・ふん、しょせん豪徳寺はメスを処刑する事に興奮する異常者だ。上手く育てられる訳がない。それよりも、やはり気になるのがあの渡邉ゆかりの妹というメスだ。生まれながらに持っている資質は、他の平凡なメス奴隷に比べて大きなアドバンテージだ。どうする？今、手持ちのメスを調教を重ねて参加するか、それとも……・・

佐瀬は目に入ったベンチに腰を降ろしスマートフォンに目を向けた。

・・まったく世の中病んでいるのか、自殺希望者のＳＮＳが賑わっている。でも、こんなものではダメだ。自分から拷問されたい、処刑されたいと思うメスが重要なんだ・・

佐瀬は、しばらくスマートフォンの画面を見ていたが顔を上げ、一人の女性に目を止める。佐瀬はベンチから腰を上げると、その女性の後をトランクを転がしながら歩き出した。佐瀬は長年調教師としてメス奴隷を調教するうちに、一見してその女性の本質がある程度見抜けるようになっていた。その佐瀬の前を偶然通り過ぎた女性が目に止まったのだ。

・・ほう、こいつは掘り出し物かも知れない・・

佐瀬は女性の後をつけながら観察する。薄いグレーのパンツスーツを着た落ち着いた感じの女性だ。肩からショルダーバックを下げ、ショートヘアーの派手さはない髪型だが清潔感がある。歳の頃は三十代前半と云ったところか。佐瀬は女性を物色しながら、このメスに決めたと心の中で思っていた。多少、歳がいっているがそんなものは関係ない。ハイヒールをコツコツ鳴らして歩く姿は、均整のと

れたスタイルを連想させ、この女性を調教して処刑すれば映えるだろうと佐瀬は考えていた。

・・良いね。このメスを確保して俺もトーナメントに参加するぞ。そして、豪徳寺に勝ってやる・・

女性は、そんな佐瀬の思惑など分かる筈もなく公園の中に足を運んだ。道路をぐるっと回って行くよりも、この公園の中を通り抜ける方が早いからだが、それがこの女性の運命を決定づけてしまった。女性は公園内の林の横を歩いたところを、後ろから佐瀬に襲いかかられる。チャンスと見ると躊躇しないのが佐瀬の一番の長所であり、恐ろしいところでもあった。女性は林の中に連れ込まれ、股間にスタンガンを当てられ強烈な電撃を浴びせられる。

「ひいっ……」

女性は体が硬直し小さく悲鳴を上げるが、すぐに口を押さえられ鳩尾に拳を思い切り突き入れられた。

「おぼうっ……」

急所に拳を突き入れられ女性は白眼を剥いて失神してしまった。女性のパンツスーツの股間に染みがどんどん広がっていく。どうやら女性は漏らしてしまったようだった。佐瀬は女性の手足を結束バンドで自由を奪い、口にもタオルを詰め、その上にガムテープを貼りつける。そして、トランクの中に詰め込むと何気ない顔でトランクを転がし歩き出した。

こうして、一人の女性が世の中から人知れず姿を消していた。

★　★　★　★

「ねえねえ、二人でマンコに錘下げて公園まで散歩に行こうよ。ビラビラとクリにいっぱい着けて」

しずくが楽しそうに提案する。

「じゃあ私はしずくちゃんよりたくさん錘下げて行くよ」

琴音が、しずくには負けないと対抗意識を剥き出しにして言う。そして、二人は自分の性器に錘をぶら下げていく。錘の付いたクリップは、バネを強化してある上に針も飛び出していて容易に外れないようになっている。二人は争うように涙を流しながら性器に錘を下げていた。結局二人はクリトリス、小陰唇、大陰唇、会陰などクリップを着けられる限界まで錘を下げ、その数は同じだった。

「しずくちゃんのマンコ、伸びきってるね」

「琴音ちゃんもいっぱいに伸びてるよ。スカートの下に見えちゃうんじゃない」

「平気だよ、わざわざ昼間からスカートめくってくる人なんていないでしょう」

琴音のスカートの下から錘の底が見えてしまっているが、琴音は気にした様子もなく早く行こうと急かしてくる。二人はそっとしずくの離れから外に出た。母屋の方に理恵の姿はなかった。

「静かに歩かないと錘同士がぶつかって大きな音が出ちゃうからね」

しずくが琴音に注意すると、琴音はわざと腰を振って錘をぶつけカチャカチャと音を鳴らしていた。

「あはっ、マンコ痛くて気持ちいい。こんなの着けて表に出るなんて興奮しちゃう。ドキドキするね。しずくちゃんのお姉さんはやっぱり凄いね。こんなの毎日やっていたんでしょう。お母さんも真似してやってたって日記に書いてあったよ。お母さん、痛くて途中で漏らしちゃったみたい」

「お姉ちゃんも漏らしてたよ。最低、漏らすくらいマンコ責めないと駄目みたいに書いてあったよ」

二人は楽しく話しながら公園の中に入って行ったが、だんだんと口数が少なくなっていく。ここまで歩いてきた二人の性器は大量の錘で引き伸ばされ強力なクリップで血流を止められ、刺すような激痛が襲ってきていた。二人の目には涙が滲み、二人とも本人が気付かぬうちに尿を漏らしてしまっていた。尿は太ももを伝い二人の靴下に吸い込まれていく。幸い公園の中に人は少なく、二人の異常な姿に気付く者はいなかったが、一人トランクを転がした男が前方から歩いてきていた。その男はすれ違う時、しずくと琴音に目を向けぎょっとしたような顔をしたが何も言わず、そのままトランクを転がし歩いて行った。

しずくと琴音は公園から戻ったが、まだ母屋に理恵の姿はなかった。二人は離れで自分の性器から錘を外していた。クリップ等で長時間挟んだ場合、それを外す時にも急激に血流が回復するため激痛が走る。二人はまた涙を流しながらクリップを外し、理恵さん遅いねと話していた。

それから、加納理恵の姿は消えた。琴音はしずくに頼まれて葉月に捜索を依頼したが、理恵の消息は不明のままだった。

★　★　★　★

佐瀬は公園で会った二人の少女を思い出していた。

・・あの二人は間違いなく只者ではない。一人は渡邊ゆかりに似ていたようだったが、まさかな・・

佐瀬は頭を振ると部屋の中を見回した。薄暗いコンクリート打ちっぱなしの飾り気のない部屋の中で、一人の女性が全裸にされ鎖につながれていた。

「気がついたようだな。お前はもう人間ではない。これからメス奴隷として徹底的に調教され、マンコを破壊され処刑される。だが悲観する事はない。お前は、メス奴隷処刑トーナメントで優勝するのだ。そして、輝かしい名誉に包まれて華々しく絶命していく。どうだ、嬉しいだろう。お前の本性はそれを望んでいる筈だ」

「わたくしがメス奴隷……」

女性は小さく呟く。

「もう、お前は人間ではないが、最後に人間だった頃の名前を聞いてやろう。俺はエスと呼ばれている調教師だ。俺に選ばれたのだ、誇りに思え」

女性の口が動いた。その声は、震えているようでもあり興奮しているようでもあった。

「わたくしは……。理恵、加納理恵という名前だったメス奴隷です、御主人様」

22、服従

22、服従

「よし立って両手を上げろ。足も大きく開け」

佐瀬は理恵に命令する。

「はい、御主人様」

理恵は佐瀬の命令通りの姿勢をとる。佐瀬は舐めるように理恵の体を観察する。

「引き締まった良い体をしている。若い娘には絶対に出せないエロさがあるな。それに、きちんとツルツルに剃毛してるがいいな。そのくせ腋毛は少し伸びてるところが無様でいいな。そのまま、動くなよ」

佐瀬は理恵に近付くと、その頬に思い切り平手を打ち込んだ。

パアァァーンッ

大きな音が響き理恵の瞳に涙が浮かぶ。

「良い顔だ。そのまま動くなよ」

パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ！！

連続で理恵の頬を叩く佐瀬は笑みを浮かべていた。理恵の頬が赤く染まり、唇が切れ血が出ている。しかし、佐瀬は理恵を叩く手を休めない。

パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ！！

「ううぅっ」

理恵の瞳からポロポロと涙が零れ、頬が腫れてきていた。

「いい顔になってきたな。もっと酷い目に合わせてやるからな」

佐瀬は天井からの鎖で理恵の頭上に上げている両手を固定する。そして、左右の壁からの鎖で理恵の足を閉じられないように固定した。

「さて、ここからが本番だ。絶対に俺に逆らえないように、まず体に刻み付けてやる」

佐瀬は自分の手に格闘用のグローブをはめていた。これは自分の拳を傷めず、理恵の体に思い切り拳を叩き込む為の準備だった。つまり、理恵はこれから佐瀬のサンドバッグにされるのだ。佐瀬はニヤリと笑うと理恵の顔面に思い切り拳を叩き込んだ。

「あうううぅっ」

理恵は、その一撃で鼻の骨が折れ、鼻血が噴き出していた。

「俺は女の顔でも容赦しない。まず、お前の体と心に圧倒的な暴力の怖さを覚えさせる。全身滅多打ちにしてやる。途中で許されるなんて思うなよ」

佐瀬は理恵の顔面を破壊するかのように拳を叩き込んでいく。

バキャ、バキャ、バキャ、バキャ、バキャ、バキャ、バキャ、バキャ

「ひぐうぅぅぅーーっ！」

理恵の顔は腫れ上がり、目や口からも血を流し、前歯は折れてしまっていた。しかし、それでも佐瀬は理恵を殴るのを止めない。

「ううっ、もう許して下さいっ」

それまで佐瀬の暴力に耐えていた理恵が、ついに許しを乞うが、それを待っていたかのように佐瀬は笑みを浮かべる。

「ようやく、口にしたか。だが当然ながら許される事などない。もう、お前は人間ではないのだからな。こちらの気の済むまで一方的に痛め付けられるのだよ。そのメスの体は、もう責められるだけに存在するただの肉袋だ。それを心に刻みつけろ」

佐瀬は理恵に残酷に告げると、今度は理恵の股間に蹴りを叩き込んだ。

「あぴゃあぁぁぁぁーーっ、だじげでえぇぇぇーーっ！」

理恵の絶叫が部屋の中に響く。佐瀬は楽しそうに今度は理恵の股間

に蹴りを入れ続けた。

★　★　★　★

日曜日の昼、しずくは母屋のダイニングのテーブルで両親と向き合っていた。

「まったく、こんな大切な時に加納さんは何処に行ってしまったのかしら」

女が困った顔をして言うが、しずくも連絡もなしに姿を消した理恵が気になっていた。

「豪徳寺さんからイベントへのお誘いがきたんだよ。しずくにも是非出場してくれというお願いだった。出場するだけで参加料も特別に貰えるようだからな。大会を盛り上げる為にというたっての希望らしい。そこで、父さんたちが参加すると返事をしておいたから、しずくもそのつもりでな」

葉月にとっては、どうしてもしずくに参加して欲しい為、金銭を支払っても、それを実現したいようだった。そしてどうやら、しずくの両親はそのトーナメントに参加する事で貰える金に目が眩み、しずくに内緒で勝手に参加を決めていたようであった。しずくは、琴音に話を聞いた時からトーナメントに参加したいと思っていたので、これで参加が決まった事で内心喜んでいた。トーナメント戦なので、当然勝ち抜き戦なのだろう。処刑トーナメントというからには、おそらく負けたらそこまでの一発勝負になる筈だ。琴音が、自分の母の為にも負けられないと言っていたが、しずくもゆかりの妹である

からには負けられないと密かな闘志を燃やしていた。そこで、不安なのが理恵の不在である。トーナメントまで、理恵に調教して貰うつもりでいたが、その理恵の所在が不明では、どうすればいいのか。ゆかりの日記や動画を参考にして自虐に明け暮れるという方法もあるが、自虐ではどうしても無理な事もある。おそらく、琴音は葉月や沙也加に調教して貰い万全の態勢で出場してくるだろう。しずくは両親の顔を見るが、この二人ではとても葉月には勝てないだろうし、理恵の代わりが務まるとも思えなかった。するとそこへ、ごめんくださいと声が聞こえた。しずくが玄関に出ていくと、そこには三人の男女がいた。車椅子に座った女性の両脇に男女が立っている。しずくは覚えのない顔だったので両親の知り合いかと思ったが、それにしては歳が若いようだった。

「父さんたちのお知り合いの方ですか。少しお待ち下さい」

しずくは奥に両親を呼びに行こうとするが、呼び止められる。

「私たちはあなたのお姉さん、渡邉ゆかりさんの知り合いの者です。今度、豪徳寺葉月がトーナメントを開くと聞きまして、しずくさん、あなたに会いに来ました」

「お姉ちゃんの……」

「はい、私は香坂麗華。この車椅子の女性は橘理津子。そして、あちらの男性は西園寺晋作です。私たちはしずくさん、あなたの意思を確認に来たのです。そして、あなたが渡邉ゆかりさんと同じ性癖であったなら私たちのお願いを聞いてくれないかと思い訪ねて来たのです」

しずくは、相手が何を言っているのか理解出来なかったが、この三

人に感じるものがあり家の中に招き入れていた。

★　★　★　★

とある場所で男女二人がヒソヒソと話していた。

「先生、いったい何ですか。僕は〝ヒノミ屋〟の仕事で忙しいんですが」

「ふふっ、実は君の故郷で面白いイベントがあるらしいのだよ。あぁ、私のオマンコ壊れりゅう♡」

「な、なに言ってんの先生。息荒くして大丈夫？」

「という訳で二人で旅立つのだ。いざアサヒ君の故郷へ」

「いやいや僕の故郷で先生が喜ぶようなエッチなイベントなんてやらないから」

「正確には君の故郷なんだけど、少し違う。超ひも理論って知ってる。その理論で導きだされる多重世界（パラレルワールド）。そこへ行くのだ」

「嘘だ、先生がそんな理論知っている訳がない」

「むうっ、これでも先生なんですから知っていますよ。と言いたいところですがエル君の受け売りです♡」

「やっぱりね……」

「とにかく、君は謎の調教師アサヒ。私はそのメス奴隷という設定でいくよ……ん♡……あふぅ♡らめぇ♡」

「ちょっ、先生。何妄想してパンツ、グショグショにしてるんですか。僕の故郷にこんな恥ずかしい生き物連れて行けませんよ」

「おりょ……？なにこれ……？」

「貞操帯ですよ。もう脱げませんよ。吸水機能も消臭機能もついてますから、それ穿いてて下さい」

「いやらぁぁっ……♡、これはらめぇぇぇっ……♡」

なにやら得体の知れない男女が、揉めた挙句メス奴隷処刑トーナメント参加の為、旅立っていった……。

23、受付

２３、受付

しずくは、理津子たちに話を聞き自分の気持ちを正直に話していた。

「やはり、あの渡邉ゆかりさんの妹でありますね。思った通りでした。私たちは、このチャンスに豪徳寺葉月の身辺を探りたいのです。そこで、しずくさんの主人に私たちを指名してくれませんか。普通に観客としても入れるのですが、メス奴隷の主人という立場であれば、さらに自由に行動出来るのでお願いしたいのです」

麗華の言葉にしずくは別に異論はなかったが、トーナメントまでの間に自分を調教してくれる人を探して下さいと逆にお願いしていた。

「それなら私たちが調教しましょう。あなたのお姉さんのゆかりさんにも調教してきましたので同じ事をあなたにもやってあげますよ」

その言葉にしずくの両親も、是非お願いしますと頭を下げていた。彼らの頭の中では、しずくが優勝した時に貰える賞金を、もう貰った気になり目が輝いていた。

・・西園寺くん、私たちに学校の風紀委員の処置室をまた使用出来るよう手配して貰えるかしら・・

理津子の言葉に西園寺は、すぐ手配しますと即答していた。こうし

て、しずくは頼りになるブレーンを手に入れたが、一方で未だに行方が分からない理恵の身を案じていた。

★　★　★　★

「先生、耳と尻尾は隠しておいて下さいよ」

アサヒは連れの女性というよりは幼女に声をかける。金髪に翠玉色の瞳をした幼女は興味深そうに辺りをキョロキョロと見回している。ここはメス奴隷処刑トーナメントの開催される豪徳寺葉月の屋敷の庭園だった。広大な庭園の中央に大きな長方形の鉄枠があり、そこから鎖が下がっている。どうやら、その鎖でメス奴隷を開脚逆さ吊りにするようだった。それを見ていた幼女の瞳が潤み、足をもじもじし始めた。

「アシャヒ君♡、これ早く脱がしてくらちゃい……♡」

幼女が切ない瞳でアサヒを見つめるが、アサヒは頑として許さなかった。

「駄目ですよ。先生は発情すると何するか分かりませんからね。多重世界とはいえ俺の世界ですからね。大人しくしておいて貰いますよ。さあ、早くエントリーを済ませておきましょう」

アサヒは幼女の首輪から伸びているロープを掴んで歩き出し、受付へと向かう。受付には既に大勢の主人とメス奴隷が集まり、順番にエントリー票に記入していた。アサヒたちも列に並び、受付の様子を見ていた。どうやら、エントリー票を記入した後、メス奴隷の撮

影もあるようだった。おそらく、メス奴隷が入れ替わったりする不正防止の為だろう。そのメス奴隷たちは、処刑されてしまうというのに誰もが誇らしい顔をしていた。日の当たる事のないメス奴隷たちにとって、たとえ処刑されるとしても、この華々しい舞台に立てる事が嬉しいのであろうと二人は想像していた。

「はい、次の方。このエントリー票にご記入お願いします」

エントリー票を渡されたアサヒは、主人名に〝アサヒ〟、メス奴隷名に〝ミアン（注）〟と記入した。受付していた女性は、奴隷名とその容姿からニコリと微笑んでいる。

「これはこれは、外国産のロリ奴隷ですか。この国では珍しいですね。金髪に瞳の色、これは映えますね。この容姿なら人気トップクラスになるのは間違いないでしょうね。このメス奴隷のお歳はいくつなのですか」

「９７歳です」

アサヒが答えると受付嬢は硬直していた。

「へっ……？」

「あっ、いえ。９歳か、７歳かなぁと……」

「ああ、なるほど。出自がはっきりしないメス奴隷は多々いますからね。それでは、メス奴隷の着ている物を全て剥ぎ取って撮影します。そちらで、全裸にさせて両手を上げて足を開かせて下さい。マンコも撮影しますからね」

「裸になりゅ……♡パンツ、脱げりゅの……♡マンコも撮影されりゅ……♡あふぅぅ、こんにゃこと想像すりゅと……♡」

どうやらミアンは既に発情してしまっているようだった。アサヒはまったく仕方ないという風に肩をすくめ能力を解除すると、ミアンは喜んでつるぺたの胸を突きだし両手を上げ、足を大きく開いていた。

「あらあら、しっかり調教されているようですね。もう、一本筋のマンコがグショグショじゃないですか。太ももまで濡らしちゃって……。それにしても見事につるぺたの胸ですね。これはコアなファンがつきそうですよ」

受付嬢は笑いながらも、ミアンの体を撮影していく。そして、撮影終了後一枚の誓約書を渡し神妙な顔をして言う。

「この誓約書にサインすれば終了ですが、サインしてしまえばもう後戻りは出来ません。最後にこのトーナメントの説明をしておきます。まず1回戦が行われます。他のメス奴隷との一対一の戦いです。どんな内容になるのかは、その時に発表になるそうです。まあ、1回戦では軽い拷問程度なのではないかと予想されますが、その拷問に耐えられなかったメス奴隷は敗北となります。どちらかが失神するまで続けられ勝敗を決っします。勝利したメス奴隷が2回戦に駒を進め、敗北したメス奴隷はその場で完全に絶命するまで徹底的に処刑されます。つまり、最後には優勝したメス奴隷以外全員処刑されている事になります。さあ、それでもよろしい場合は、ここにサインして下さい。メス奴隷の主人のサインと、メス奴隷のマンコのマン拓を頂きます。メス奴隷は文字も書けないメスもいますので……。さあ、決断お願いします……」

受付嬢が言い終わらないうちにミアンは自分の性器に墨を塗り、べちょっと用紙に押し付けていた。

「わらしのマン拓りゃあ……♡」

アサヒは慌てて誓約書にサインし、首輪のロープを引きその場を逃げ出した。

・・この先生、ヤバすぎ。羞恥心とか欠片もないだろ・・

アサヒはミアンを引き綴りながら恥ずかしくて顔を真っ赤にしていたが、ミアンは首のロープを引かれながらピュッピュッと尿を漏らし、何を考えているのかアヘ顔を晒していた。

（注）前回から登場していた謎の少女の名前が判明し、やはりと思った方もいるかも知れません。彼女は、天月ゐる先生の「魔法学園幻術科　幼狐先生は頑張ります！」の主人公ミアン＝シュメールであります。私の不躾な希望でしたが天月先生の寛大なお心で、今回メス奴隷処刑トーナメントに出場が実現しました。先生の作品を未読の方は、変態エロファンタジーでありながら、リョナありスカありの楽しい作品でありますので是非お読みになって下さい。私の作品と違いグロとリョナだけではないのが素晴らしいです。ダンジョン攻略等の胸熱な展開もありますよ。それにミアン先生が処刑トーナメントに出場した理由も、読めば想像出来ると思います。それと最後にミアン先生が誤解されるといけませんので、この作品では先生の一部を誇張して書いています。先生は変態ドMですが生徒思いで正義感溢れ、そして強い熱血先生です。

24、刺客

24、刺客

黒いスーツにボーラーハットを被った人物がメス奴隷処刑トーナメントの受付の列に並んでいた。その人物が握っている鎖の先にはポニーテールの少女が繋がれている。

「おやっ」

たまたま歩いてきた葉月が列に並んでいる黒いスーツの人物を見つけ声をかける。

「どうしました。この列に並んでいるという事は参加するつもりですか」

「ええ、こんな楽しいイベント、観ているだけでは詰まらないでしょう。そこで私も取って置きのメス奴隷を連れてきましたよ」

黒いスーツの人物は鎖を引き少女を近くに引き寄せると髪の毛を掴み、少女の顔を葉月に向けた。

「ひいぃぃぃっ！」

少女は葉月の顔を見たとたんに悲鳴を上げ、地面に座り込みチョロチョロと尿を漏らし、カチカチと歯を鳴らし激しく震えている。

「おやおや、私の顔を見ただけでこの反応はどういう事でしょう。私と何かありましたか」

黒いスーツの人物は残酷に笑うと、葉月に説明する。

「そうですよ、このメス奴隷は毎日あなたに徹底的に壊され続け心も破壊されてしまったのです」

「私が……？はて、その娘の顔を全然覚えていませんが、いつ頃の話でしょうか」

「覚えていないのも当然ですよ。このメス奴隷は遥か未来から連れてきたのです。このメス奴隷は、未来にあなたのクローンによって捕獲され、そして解体され全身をバラバラにされた上に、心まで破壊されたのです」

「私のクローン……。それは楽しいですね。それでは、未来の私が現在の私に挑戦してきたという訳ですか。やはり、あなたは面白い。私に楽しみを与えてくれる。これは、このトーナメント最高に盛り上がりそうではありませんか」

「ふふっ、葉月。私はただこのイベントを盛り上げる為だけに、このメス奴隷を連れてきた訳ではありませんよ。あなたは一度、このメス奴隷に滅ぼされているのですよ。あなたの持つ黒の波動に対して、白の波動を持つこのメス奴隷〝二階堂遥（注）〟によってね」

「私を滅ぼす……。あなたの言う事です、信じましょう。それほどの力のあるメス奴隷という事ですか。面白い。なるほど、未来の私が壊したくなるのも頷けますね」

「まあ、そういう事なので葉月、油断しないようにしなさい。私は刺客のつもりで連れて来たのですから……」

「本当にあなたは楽しいわ。私を退屈させない術を知っている。もう、興奮が止まらないわね。トーナメントが楽しみだわ」

葉月と黒いスーツの人物は笑いあっていたが、遥は恐怖で涙と尿を流し震えていた。

★　★　★　★

「あら、あなた。そっち側の人間だったの」

神楽坂沙也加はエントリー会場で見つけたメス奴隷を見て声をかけていた。メス奴隷は全裸にされていて、四つん這いになっているその体には多数の鞭の痕が痛々しく残っている。そして、首輪につけられた鎖で近くの外灯に犬のように留められていた。メス奴隷は沙也加を見るが、その口にも口枷が装着されており、唾液がポタポタとだらしなく垂れ、声を出す事は出来なかった。そして、その目もどこか虚ろで、とても人間の目とは思えなかった。

「ほう、これは神楽坂さん。お久しぶりです。今回のイベント盛況でなによりですな」

「佐瀬、お前ごときが参加するつもりですか。まあ、せいぜい頑張りなさいな。1回戦を突破出来るよう祈っていますよ」

「あはは、これは有難いですな。ですが、今回は良いメス奴隷を確保しましたので、是非優勝を狙いたいですな。ほら、リエ。挨拶の放尿をしなさい」

犬のように外灯に繋がれていた理恵は、四つん這いのまま片足を上げるとシャーッと犬の様に放尿していた。それはもう沙也加の知る理恵ではなく人間ではない、人格も尊厳も剥奪されたただのメス奴隷の姿だった。そして、放尿が終わった理恵は手でシャッシャッと砂をかけていた。

・・ここまで調教され従順になっているとは、もう人間だった頃の威厳も何も無い。ここまで仕上げてあるとは驚きです。これは強敵かも知れないですね。葉月様にも報告しておいた方が良いかも知れません・・

沙也加は、すっかりメス奴隷になっている理恵を見て用心に越した事はないと考えていた。

★
★
★
★

ミアンとアサヒは、葉月の屋敷のトーナメント参加者に貸し出している調教室の中にいた。

「同じ地球とは思えないほど違うんだけど先生、どうしてかなぁ」

「それはいろんな可能性の中の一つの地球だからね。アサヒ君の地球とは違うのは当たり前だよ。それよりちょっとアサヒ君、ダメだよ。私はメス奴隷なんだから、先生なんて言っちゃダメ。ちゃんと、

ミアンと呼び捨てにしなさい。メス奴隷らしく扱わないと私も気分出ないでしょ♡くちゅっ……♡」

「そ、そうか……。分かったよ、ミアン。それなら、これからミアンはメス奴隷だ。俺が本当のメス奴隷に調教してやるよ」

「ひゃい、ご主人ちゃま♡お願いしまちゅう……♡」

「よし、顔を上げろミアン」

ミアンが顔を上げるとアサヒはミアンの頬を思い切りぶっていた。

パアァァーンッ

大きな音が調教室に響く。ミアンの瞳から大粒の涙が零れていた。しかし、アサヒは連続でミアンの頬を叩いていく。

パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ

ミアンの頬が朱く染まり瞳からは涙が流れ落ち、鼻水も垂れていた。

「いい顔だよ、ミアン。それじゃ、口を開けろ」

ミアンは何をされるのだろうとドキドキしながら口を開けていると、アサヒはペンチを持ってミアンの口を覗きこみその鋭い牙をペンチで挟んだ。そして、グリグリ捻りながら牙を抜いていく。

「あひゃあぁぁぁーーーっ……♡」

ミアンは悲鳴を上げるが、アサヒは構わずミアンの牙を抜いてしま

った。そして、ミアンの尖った犬歯を全て抜いてしまうが、アサヒはもう止まれなかった。

「ミアン、せっかくだから全部歯を抜いてあげる。もう堅いものや、お肉を噛みきれなくなるけどメス奴隷に相応しいだろう」

「ひゃい♡うれちいでちゅ、御主人さまぁ♡」

アサヒはミアンの歯をペンチで挟むと次々に抜いていく。

「ひゃあぁぁーっ♡いぢゃいぃぃぃーーっ♡ひゃあ、れんぶぬかれりゅうぅぅっ……♡」

アサヒはミアンの歯を全て抜歯してしまい、血だらけの口中に自分の陰茎を突っ込んでいた。そして、ミアンの頭を両手で押さえつけ、無理矢理喉奥まで挿入すると激しく腰を振りだした。

パンッ、パンッ、パンッ、パンッ

「おぎょっ、おぎょっ、おぎょっ、おぎょっ♡」

ミアンの顔面がアサヒの下腹部で殴打される。ミアンは呼吸が出来ず、無様な声を出しながら号泣していた。

「良いぞ、ミアンのクチマンコ具合が良いぞぉぉ」

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

アサヒはミアンの喉の奥に放出していた。

「はひゅーっ、はひゅーっ、はひゅーっ……♡いっぱい、だしてくりぇてありがとうごにゃいまちた……♡」

ミアンは口から白濁した液を溢れさせ、うっとりした口調でアサヒにお礼を言う。

「よし、次は横になって股を開け」

「ひぇっ♡オマンコに入れちゃうにょ……♡」

「当たり前だろっ、口答えすんな、ミアン。メス奴隷の穴は全部俺の物なんだ。好きに使わせて貰うからな」

「はい、ごめんらちゃい♡私のメス穴、ちゅきなようにちゅかってくらちゃい♡」

蕩(とろ)けた顔で言うミアンを見ながらアサヒは、再び勃起した自分のモノをミアンの膣口に当てる。ミアンの膣はもう準備ＯＫというようにヌルヌルに濡れていた。

「いくぞ、ミアン」

ズリュウウウウッ

「いひぃぃぃっ♡ごめんらちゃい、フィアン、エリナ♡私、入れられちゃったぁぁっ♡あふぅぅぅっ♡」

ミアンは二人に謝罪しながら、アサヒを受け入れていた。

・・うぴぃぃっ♡子宮まで突き上げられりゅう♡もっちょ、つらぁ

ぬいちぇぇっ……♡・・

アサヒはミアンの膣に根本まで突き刺した自分のモノを激しく動かしだした。

・・あぁ俺、一目惚れしたミアンをメス奴隷にして好きに出来るなら、このままこの世界にいたいかも・・

「あっ……」

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

あっという間にミアンの膣内に中出ししてしまうアサヒだった。

・・は、早ええよ、お前……。早過ぎるりょ♡殺すりょ……♡・・

これからという時に終わってしまった行為に、ミアンは心の中でアサヒに激しい罵声を浴びせていた。

・・いけない、いけない。私は教師だ。こういう行為もしっかり教えてあげないといけないよ・・

ミアンは、アサヒの萎れた陰茎を抜歯された口に含み刺激を与える。アサヒの陰茎はたちまち硬く勃起していった。

（注）二階堂遥。「スク水少女戦士ウテルス」の2代目ウテルスである。葉月のクローン豪徳寺文月を仲間たちと滅ぼしたが、新たに現れたクローン豪徳寺皐月に捕らえられ、ウテルスの秘密を探る為、

バラバラに解体されてしまう。その後も実験と称する拷問で体だけではなく、その心まで壊されていった。

25、陰謀

25、陰謀

机の上に置かれたしずくの私物の中でスマートフォンが着信を知らせていた。麗華はＢｌｕｅｔｏｏｔｈのヘッドセットをしずくの頭に装着し、通話出来るようにセットする。

「はい、もしもし。あっ、琴音ちゃん。今、ちょっと動けないんだけど、お話なら出来るよ」

しずくは風紀委員の処置室の処置台の上で大の字、いや土の字に固定されていた。そう固定である。拘束等という甘いものではなく、完全に動けないように固定されていた。しずくの体のデータは事前にスキャンされ入力されている。そして、西園寺は最後の機器の調整をしていた。

「私は今ねぇ……」

自分の現状を話そうとした時、麗華が唇に人差し指を当てているのが見えた。

・・そうか、これは秘密だった・・

「トーナメントに向けて調教して貰うところだよ。理恵さんがいないから他の人に頼んだんだ」

しずくは詳しい状況は話さずにいたが、琴音はしずくの思いもしない事を言ってきた。

「その理恵さんだけど、トーナメントに参加するらしいよ。メス奴隷として。沙也加さんから報告があって、養母（おかあ）さんが確認したらエントリー票に記載されていたって言ってた。メス奴隷名がリエだし、沙也加さんが見た姿も理恵さん、そっくりで間違いないって。もうすっかりメス奴隷になってたって言ってる。理恵さんの姿を見なくなってから、この短期間で沙也加さんが驚く程の完全なメス奴隷に仕上げられてたそうだから、厳しい調教を毎日休みなくされていたんだよ。ゆかりさんの事も私の母の事も知っている理恵さんは間違いなく強敵だよ。しずくちゃんも気を緩めない方がいいよ」

「うん、わかった。ありがとう」

理恵がメス奴隷としてトーナメントに参加するのは驚きだが、それでも理恵の所在が分かったので、しずくは安堵していた。

「それと他にも要注意のメス奴隷がいるって教えてくれた。ハルカというメス奴隷とミアンというメス奴隷。ハルカは、あの黒いスーツに帽子を被った方が連れてきたメス奴隷で、ミアンもその方の知り合いのようで要注意だって。特にミアンは究極のドMらしいから優勝候補の1体だって言ってたよ」

「そんな凄いメス奴隷が出てくるんだ」

「でも私は敗けないよ。〝蜂須賀彩音〟という母の名にかけて。しずくちゃんも私と当たるまでは絶対に敗けないでよ」

「うん、それなら私だって〝渡邉ゆかり〟の妹の名にかけて敗けないよ」

強敵が増えた事でしずくも今まで以上に闘志を燃やしていた。しずくはこれから串刺しにされる。ニードルで性器から子宮を貫き口まで完全に串刺しにされていく。これは、かつてしずくの姉ゆかりが受けた調教である。コンピューター制御で入力したしずくの体のデータを見ながら、本当に串刺しにされるのである。様々な調教を受けてきたしずくであるが、串刺しにされるなど初めての経験である。いくら大丈夫と言われても体の震えは止まらなかった。

「この串刺し機はここだけの唯一の物だからね。そもそも豪徳寺は処刑にしか興味がない。串刺しにして絶命させる機器は持っているだろうが、この串刺し機のように生かしたまま串刺しにするなど考えもしないのさ。だから、串刺しにされるのは処刑される時のみ。それを生きたまま体験出来るこの串刺し機は、今度のトーナメントにはかなり有利に働くだろうね」

西園寺が自信たっぷりに言いながら機器を操作していく。

「もう少し足を開いた方がいいな」

すると固定されているしずくの足がぐいっとさらに大きく開脚されていく。

「ひぃっ、痛い、痛いぃぃっ」

無理矢理大きく開脚されしずくが悲鳴をあげるが、西園寺は構わず作業を進めていく。麗華はしずくを串刺しにするニードルを丁寧に滅菌していた。しずくは頭も倒されたまま固定され、性器から口ま

で一直線になるようにされている。

「しずくちゃん、怖いでしょう。でもそれが当たり前。あなたのお姉さんのゆかりさんも、みっともないくらい泣き叫んでいたわよ。許してっ、助けてってね。当然だよね、串刺しにされるんだから。とても、耐えられる痛みではないからね」

麗華が、その時のゆかりの姿を思い出しながら、しずくに事細かに説明する。しずくは恐怖で涙を流していた。

「あら、しずくちゃん泣いちゃった。でもメス奴隷は何時でも泣けるようにしておかなければダメだからね。しずくちゃんが泣いて苦しむ顔をするほど観ている人は喜んでくれるから、これからはそういう事も意識していってね」

麗華がしずくに話しかけているうちに、しずくを串刺しにする準備が完了していた。

「よし、それじゃ始めるぞ」

しずくの耳にウイィーンとニードルが動き出した音が聞こえる。そして、しずくの膣口にニードルの鋭い先端が触れた。

「ひぃっ、ひぃっ、ひいぃぃぃーーっ」

その冷たい感触にしずくは悲鳴をあげ、逃れようとするが、完全に固定された体は一ミリも動かす事が出来ない。悲鳴をあげるしずくの膣にニードルはどんどん侵入していく。そして、その先端がしずくの子宮口に到達した。

「怖い、怖い、怖い、怖いよおぉぉぉーーっ！」

子宮口がこじ開けられ、ニードルは容赦なくしずくの子宮内に入っていく。

「はひゅーっ、はひゅーっ、はひゅーっ、はひゅーっ」

ニードルが子宮内を進み、しずくの息がどんどん荒くなっていく。

「ひっ……」

そして、しずくが一瞬息を止めた次の瞬間。

「ひぎゃあぁぁぁぁーーーーーーっ！！！」

シャァァァーーーッ

ぶりっ、ぶりっ、ぶりぃぃぃっ

子宮をニードルで貫通され、凄まじい絶叫を発したしずくは尿道から小便を、肛門から大便を漏らしてしまっていた。しかし、そんな事は関係なくニードルはしずくの体を貫通していく。

「だじげでえぇぇーーっ！じんぢゃうよおぉぉーーっ！もお、ゆるじでぐだぢゃいぃぃーーーっ！あぶうぅぅぅーーーーっ！」

苦悶の表情でボロボロ涙をこぼし泣き叫ぶしずくだが、西園寺は一切構わずにニードルをしずくの体内に突き刺していく。そして、しずくは口から激しく血を吐いた。

「ぎょっ、ぱあぁぁっ」

麗華は慣れたようにしずくの鼻の穴からチューブを奥深くまで挿入し気道を確保し、吐いた血液を吸引機で吸い取っていた。

「胃まで貫通したからな少し速度を早めるぞ」

西園寺はニードルの侵入速度を早めていった。

「ごっばあぁぁぁっ」

そして、しずくの口からニードルが現れ、それはどんどん突き出ていく。

「さあて、じゃあお姉さんと同じ様に通電してあげるからね」

西園寺は、しずくを貫いているニードルに電流を流す。

「おぼおぉぉぉっ、おぼぼぼぼぼぼぼぼっ」

串刺しにされたまま通電され、しずくの体は細かく震えていた。しずくは、白眼を剥いて、口から血の泡を吹き、失神したように動かなくなっていた。

★　★　★　★

その頃、琴音も理恵も遥もミアンもそれぞれ厳しい調教を受け、全員白眼を剥き泡を吹いて動かなくなっていた。それぞれがトーナメ

ントに向けて最後の追い込みに入っている。厳しい調教はもちろんだが、それでトーナメント当日に、メス奴隷の体調が万全でないと思わぬところで不覚をとりかねない。その辺りのバランスが問題であった。それはトーナメント出場者全ての悩みであったが、ここで一組だけ、そのような事は関係なくいさかいを起こしている出場者がいた。

「冗談じゃないわ。なんで私がメス奴隷なの。それにトーナメント出場なんてあり得ないでしょう。私に死ねって言ってるの」

「どうやら、あいつのエントリー票を書いた時に間違って記入して提出してしまったようなんだよ」

男は頭を掻きながら言うが、女が寝ている間にマン択も採ってしまっているので気付かれたら言い訳も出来ない。

「豪徳寺さんの恐ろしさは君も知っているだろう。もう、書類は受理されてしまったし、今さらキャンセルは出来ないし逃げられないよ。もし逃げたら捕まって酷い殺され方をする。それならトーナメントに参加して、優勝に賭けようじゃないか。とにかく我慢して失神しなければいい。それに同時に失神した場合は、観客の入れる人気投票で勝敗が決まるらしいから、君なら優勝出来る望みがあるだろう」

女は唇を噛んでいたが、もし逃げても豪徳寺からは逃げられない。そして、捕まれば見せしめとして凄惨な殺され方をするだろう。それなら、賭けてみるしかない。女は男を睨みつけた。

「あなた、まさかわざと間違えて提出したんじゃないでしょうね」

「そんな訳ないだろう。とにかくトーナメントまでは楽しくいこうじゃないか」

男は女をなだめると肩に手を回し、窓から外を見る。超高層階の窓から見る眺めは、窓一面に拡がる夜景がキラキラと輝き、まるで夢の世界のようであった。

・・この世界を一緒に楽しむ為には若いとびきりの女がいい。こいつがトーナメントで勝ち残れるなんて万にひとつもない。早々に敗けて処刑されるのが目に見えている。だけど、娘が勝ってくれるだろう。優秀なブレーンもついてくれた。その金で若い女を手に入れる。最高じゃないか・・

男は女に気付かれないように笑みを浮かべている。その男の股間では、硬く勃起したものが天を衝く様に、そそり立っていた。

26、立腹（前書き）

今回、ファンタジー要素あり。ちょいグロもあるので苦手な方は要注意です。
ヤバいと思った時には遅いかも知れないので、先に飛ばすのが無難です。

26、立腹

26、立腹

ミアンは葉月からレンタルした調教ルームでアサヒに調教されていた。元々、変態ドMであるミアンは自分がメス奴隷としてトーナメントに参加するのが待ち遠しくてたまらなかった。

・・こんな楽しいイベントがあるにゃんて、とっても良いところではにゃいか♡私のマンコ、どうなっちゃうにょらろう……♡えひゃひゃっ♡・・

ミアンは妄想を繰り広げ性器をグショグショに濡らしていたが、アサヒは三角木馬を用意してきた。

・・さ、さんかくもくばぁ♡こわい、こわいりょぉぉっ♡・・

ミアンは三角木馬に嫌な思い出があり、それがちょっとしたトラウマになっていた。三角木馬で股を裂かれるのは大好物なのだが、あのダンジョンのリューイン形式の建物で妖怪ぬらりひょんにされた行為が忘れられず記憶に残っているのである。

・・いやらぁぁっ♡ゆるちてくらちゃい、御主人様ぁ♡・・

ミアンは泣きながら許しを乞うが、アサヒは構わずにミアンの両腕を高手後手に縛りあげていく。そして、ミアンの首にロープを巻く

と、そのまま滑車でギリギリと吊り上げていった。

「おぎょおっ♡」

完全に首吊り状態にされ、舌を突きだし苦しむミアンは、もう人として扱われず、物として扱われていた。その物扱いのぶらぶら揺れているミアンの下に三角木馬を運んだアサヒは、ミアンの脚を開き位置を調整する。そして、滑車を緩めたアサヒはミアンの身体を一気に三角木馬の上に突き落とす。

グチャッ

「あびゃあぁぁぁーーーっ♡♡♡」

三角木馬の鋭角に叩き落とされ絶叫するミアンの股の割れ目から血が飛び散った。しかし、アサヒは黙々と作業を進めていく。アサヒは、ミアンの両脚に錘を取り付けていった。ミアンの両足は一直線にピーンと伸びきり、三角木馬の鋭角が激しくミアンの性器に食い込み血が流れ出している。

「あぶうぅぅぅーーっ♡さけりゅぅ、本当にマンコさけりゅーーーっ♡♡」

「ふうん、まだ喋れる余裕があるのか。じゃあミアン、もっと錘を下げてあげるわ」

アサヒは、ミアンの伸びきった脚にさらに錘を追加していった。ミアンは、なんと片足に１００キロもの錘を付けられ惨めに絶叫していた。こんな重量、人の耐えられるものではない。その重量がミアンの割れ目に集中して襲いかかる。ビキビキとミアンの脚の筋が伸

びきり千切れる音がし、恥骨もギシギシと割れる寸前の嫌な音を発している。当然、ミアンのクリトリスは潰れてしまい、割れ目からも激しく血が流れ出し、三角木馬の下に血溜まりを作っている。

「がはあぁぁっ♡おぼっ、おぼっ、おぼおぉぉぉっ♡♡」

アサヒは性器から裂かれる激痛に苦しむミアンに目隠しをして、さらに口枷を装着し、耳栓も着けてしまった。アサヒはそのままミアンを放置する考えで外出の準備をしていた。

・・にゃにも見えにゃい♡にゃにも聞こえにゃい♡にゃにも喋れにゃい♡マンコの感覚ももうにゃいよおぉっ♡・・

ミアンは１０００年放置された時を思い出し、絶望で気が狂いそうであった。しかも、今度は三角木馬に跨がされて合計２００キロもの錘を吊るされたままである。

「じゃあな、ミアン。２４時間経ったら来るから、それまで頑張っていな」

アサヒは、軽くもう耳も聞こえないミアンに声をかけると部屋から出ていってしまった。

・・へへっ、久しぶりの地球だし、この外見なら俺は無敵だ。この地球でも楽しんでやるぞ・・

アサヒは意気揚々とステップを踏みながら外に出ていった。一人残されたミアンは何も感覚がない中、ただ絶望で泣いていた。そこへ突然頭の中に声が響く。

・・おい、変態狐。お前、私に断りなく何故ここにいる・・

目隠しされているミアンには見えないが、ミアンの前には黒いスーツにボーラーハットを被った人物がいた。しかし、ミアンは見えなくてもそこにいるのが何者か、すぐに気付いていた。

・・お、おゆるちくだちゃい、お願いしまちゅう・・

ミアンは本当に心底震えていた。その怯えている証拠に隠していたケモミミと尻尾が現れてしまっている。

・・今は三学期で忙しいのではないのか。生徒を放っておいて教師失格だな。だから、お仕置きをしてやる・・

もっともな意見だった。

・・大丈夫ですぅ、みんな自分でクエスト受注して頑張っていますし、ここことは時間流が違うので、あっちでは、ほとんど時間が経過していまちぇん・・

・・そんな事は言われるまでもない。分かっているよ。教師としてどうなのかと言っているのだが、まあいい。お前の性癖は一番よく分かっているからな。このトーナメントに惹かれるのは仕方のない事なのだろう。ただし、いいか私の顔に泥を塗るようなまねはするなよ。私が〝一行書く〟だけでお前は世界から完全に消滅するんだぞ。肝に銘じておけ・・

・・ひゃい、分かりまちたぁ・・

・・ふふっ、それじゃお仕置きだ。お前の痛覚を感度アップしとい

てあげるよ・・

・・ひぇっ……・・

・・痛覚、１０００倍だ・・

・・ひゃめっ、ひゃめてえぇっ・・

しかし、ミアンの痛覚は感度アップされ、いきなり全身生皮を剥がされたように空気が動くだけで激痛が走った。それが、三角木馬で裂かれている性器の激痛をも１０００倍化する。もうそれは極度のドMミアンであっても耐えられるものではなかった。何度も何度も繰り返し股間の割れ目からブチブチと膣も子宮も真っ二つに裂かれるような激痛。筋肉や臓器も引き千切られていく感覚。それが途切れる事なく永遠に続いていく。

「あひゃあぁぁぁーーーっ♡」

ミアンの口枷の隙間から大量に泡が吹き出し、目や鼻や耳から血が噴き出していた。このままではミアンは、耐えきれず発狂してしまうのは間違いなかった。そんなミアンの精神が突然抑制され落ち着きを取り戻すが、次の瞬間また自分を襲う激痛で発狂寸前になる。

・・発狂して楽になろうなんて許しませんよ。寸前で精神が平静に戻るようにしました。自分の精神が狂っていく過程を何度も楽しめて嬉しいでしょう、ミアン。ああ、そろそろマンコの方も限界ですね・・

バキャッ

「あぶうぅぅーーっ♡あぶぶぶぶぶぶぶぶうぅぅぅぅっ♡♡」

ミアンの恥骨が粉々に砕ける音が響き、三角木馬の鋭い鋭角が一気にミアンの性器を本当に切り裂き、裂け目が臍の下まで拡がっていた。ミアンの腸や卵巣等様々な臓器が裂け目から飛び出してしまっている。そこで錘が床についた為、身体が裂けるのは止まったが、痛覚を感度アップされていたミアンの心臓は、股からビリビリと裂かれた凄まじいショックに耐える事が出来ず動きを止めてしまった。

「あらあら、死んでしまいましたか。痛覚１０００倍の効果は抜群ですね」

ミアンの無様な死に様を見て黒いスーツの人物は仕方ないと肩を竦めながら、ミアンの身体に触れる。

トクン、トクン、トクン

ミアンの心臓がまた動き出していた。

翌日、アサヒがすっきりした顔で戻って来るとミアンは三角木馬に跨がったまま、夥しい排泄物と血で床を汚し、激しい恐怖と絶望で可愛い顔を醜く歪め無様に失神していた。（注）

★　★　★　★

二階堂遥も葉月に責められていた。四つん這いの状態で拘束され、鼻の穴から肺まで挿管チューブが挿入され気道が確保されていた。幼い遥は涙と鼻水と涎で顔面を汚し、大声で号泣している。そして、

遥の肛門にも太いチューブが深く挿入されていた。その肛門に挿されたチューブには巨大なイルリガートルが接続され、その中にはグリセリン溶液が満たされている。いったい何リッターあるのだろうか。それを葉月は小さな遥の体に全て注入しようとしている。

「さあ、いきますよ遥。苦しみなさい。未来の私とどちらが厳しいでしょうかね」

葉月はイルリガートルに接続しているチューブのコックを捻る。グリセリン液が勢いよく遥の肛門から注入されていった。

「あなたの体内をきれいに洗浄してあげますからね。きれいに洗浄した後は、当然ながら痛め付けます。私を滅ぼしたというあなたには苦しんで苦しんで苦しんで貰いますよ。容赦などしません。覚悟して下さいね」

「もう許して下さい……。私を殺して構いませんから、もう苦しいのは許して下さいぃぃっ」

パアンッ!!

「ひぐうぅぅっ」

葉月は遥の頬を叩いていた。遥の頬が朱く変色する。

「何甘えた事を言っているのですか。トーナメントに出場する以上、あなたにも頑張って貰ってお客様を喜ばせて貰わねばなりません。入場申し込みが殺到していますからね。あなたも写真入りで出場者として紹介されているのですよ。メス奴隷として自覚を持ちなさい」

葉月の言葉に遥は恐怖を覚え、余計に号泣していた。

（注）なぜミアンが無事なのか。それは天月先生の「魔法学園幻術科　幼狐先生は頑張ります！」を読んでみて下さい。可愛いミアンちゃんが、もっと酷い事されちゃったりしています。容赦ない先生の責めがきっと好きになりますよ。

27、親子

27、親子

とあるSM設備の整っているホテルの一室に男と女がサービスタイムを利用して籠っていた。食糧等も調達し準備万端である。このホテルは、サービスタイムの始まる朝10時のチェックインから、そのまま宿泊に移行して、翌日の昼12時まで、最長26時間ホテルで過ごす事が出来る。男は、その間女を責め続けトーナメントに備えようとしていた。

ホテルの部屋に入るとすぐに男は、女の衣服を脱がし両腕を後ろ手に拘束し、部屋の中を見渡した。女を拘束して自由を奪う為の鎖が、そこかしこに設置されている。滑車がついた鎖もあるので女を吊るのも可能だろう。部屋の隅には三角木馬も置かれているし、剥き出しの便器もある。壁の棚の中には数種類の鞭や、シリンジやカテーテルなどの器具も収納されていた。

「いいか、これからはもうお前はメス奴隷だ。俺の命令に逆らう事など許されないからな。それでは足を大きく開いて貰おうか。トーナメントでは間違いなくここを集中的に責められるからな。ここを鍛えて耐性を上げておくのが肝要だ」

男が女に命令すると、女は素直に足を開いていた。女にとっても自分が生き残るには、もうトーナメントを勝ち残る以外ない。その為には男に調教して貰い、痛みや苦しみに慣れておく以外方法はなかった。

「まず今日は定番の鞭、蝋燭、浣腸、針といくか。最低こんな一般人でも楽しむプレイを耐えられないようでは初戦敗退もあり得るからな。相手はメス奴隷として調教されてきた本物だ。出来ればそのメス奴隷たちに近い調教までやりたいものだな。そうすれば、勝ち目が出てくる」

「絶対やるわよ。あなたのせいで命がかかっているのよ。早く始めてよ」

「口のきき方も気を付けろよ。お前はもうメス奴隷。ただのメス穴だと自覚しろ。自分は汁を垂れ流す穴でしかないメスだと思え。俺の前では常に股を開いて穴をすぐに使えるようにしておけ」

「ううっ、申し訳ありません……。私のメス穴全てお好きな時にご使用下さい」

女は男の言葉で自分が置かれてしまった立場を思い知っていた。もう自分は人間ではない。これからは、ただの穴として扱われる。そう考えると女は絶望で涙が出てきた。しかし、その時女はまさかの感情と感覚を抱いていた。自分がもう人間ではない。ただのメス穴だと心の底から認めてしまった事で、下腹部が熱くなり性器がグショグショに濡れ始めていた。

・・そうか、私もともと人間ではなかったのね。ただの穴が空いた肉袋。今まで自分が人間だと勘違いしていた私が愚かだった・・

それは、昔ゆかりがメス奴隷に堕ちた時とまるで同じだった。ゆかりも自分が人間である事を捨てメス奴隷になり、性器を処刑されて絶命していった。女もまた先刻までの処刑される恐怖から、意識が

裏返り処刑される事に幸せを見出だしていた。考えてみれば、あの渡邉ゆかりとしずく姉妹の母親なのである。二人の異常性を考えれば、その母親も異常であっても驚くには値しない。

「はひっ、はひっ、はひっ、はひっ」

女の態度がそれまでとまるで変わり、男もその変化に気が付いた。

・・おいおい、こいつは瓢箪から駒か。ゆかりとしずくの母親だからな。もともとはこいつの異常性が子供に受け継がれた訳だな。くくくっ、これは俺に運が向いてきたようだ。こいつとしずく、どちらが優勝しても俺にとって問題ない・・

男は目の前で開いた足の中心から糸を引いて粘液を垂らしている女を見て満面の笑みを浮かべていた。

・・こいつをトーナメントまでにゆかり並みのメス奴隷に仕上げてやる。しずくの部屋にゆかりの資料がある。それを参考にすれば、こいつにもゆかり並みの異常性が顕著に現れてくるだろうよ・・

しかし、男は楽観的に考えすぎていた。しずくは本当に串刺しにされる程の調教をされているのである。優勝候補と云われているミアンも股を裂かれる程の信じられない責めを受けている。いかに潜在的な資質があったとしても、それだけではトーナメントを勝ち抜く事は不可能だ。これから僅かの間に、そこまでの経験を積ませ、メス奴隷として仕上げる事が出来るのか。そこに全てがかかっていた。

「よし、始めるぞ。まずは定番のマンコ打ちからだ。そのままの姿勢で動くなよ。腰を前に出してマンコを突き出すのだ。足ももっと大きく開け」

男は女に命令する。女は従順に男の命令に従っていた。男は、〝キャット・オ・ナイン・テール〟、九尾の猫鞭と呼ばれる鞭を手に取る。バラ鞭の一種だが、編み上げられた革の鞭が九本纏めてある鞭だ。男は、その鞭を構えて女の股間の中心、性器に狙いを定めた。

「ふっ、ふっ、ふっ、ふっ」

女は自分の性器に叩き込まれるであろう鞭を、息を荒くしてうっとりとした瞳で見つめていた。半開きの口からは涎が垂れている。そして、男は女に身構える隙を与えず、いきなり何の前触れもなく思い切り鞭を女の性器に叩き込んだ。

バシィィィッ

「あひいいいいっ！」

女は性器を鞭打たれ悲鳴をあげるが、その悲鳴はどこか嬉しそうでもあった。男は笑みを浮かべると連続で女の性器に鞭を叩き込む。

バシィッ、バシィッ、バシィッ、バシィッ、バシィッ、バシィッ

「あひゃっ、あひゃっ、あひゃっ、あひゃっ、あひゃっ、あひゃあぁぁぁーーっ！」

・・くくっ、良いぞ。メス奴隷を痛め付けるのが、こんなに楽しいとはな。豪徳寺の気持ちがよく分かる。このまま、こいつのマンコを壊してしまいたいところだ・・

女の性器に鞭を叩き込む男の股間では、今までにない程カチカチに

硬く勃起した陰茎がどくどくと脈動していた。

・・イグッ、イグッ、イグッ、イグウゥッ。わたしぃ、マンコ鞭で打たれてる。もっと、強く激しく鞭で打ってくだちゃい。あひぃいっ、マンコ、壊されたいぃいぃっ・・

女もまたかつて味わった事のない快感に絶頂に達しそうになっていた。そして、激しい一撃が女の割れ目の中に直に叩き込まれる。

パシィィィッ！

「イグうぅぅーーっ」

プッシャァァーーーッ

女は性器を鞭打たれ、なんと絶頂に達し潮を吹いてしまっていた。

・・マンコを鞭打たれて潮を吹くか。これは、ゆかりやしずく以上の変態なのではないか・・

男は、絶頂に達し膝から崩れ落ちた女の姿を見て腕組みをしながら考えていた。

★　★　★　★

一方、まだ母親のトーナメント参加を知らないしずくも変わらず元風紀委員の面々から厳しい調教を受けていた。

「これから、ゆかりさんが受けた石抱きの拷問をするね。これは一人では出来ないから、ゆかりさんは私たちにやって貰えて喜んでいたわよ」

麗華はしずくに床に置いたギザギザの板の上に正座するよう命令する。

「ううっ」

しずくの脛に板の鋭角が食い込み、しずくは顔を歪めて涙を流すが、麗華はそのしずくの太ももの上に１０キロあるコンクリートブロックを乗せる。

「い、いだいぃぃっ」

しずくが悲鳴をあげるが麗華は次のブロックを持ち上げていた。

「ゆかりさんと同じ数は積んであげるからね。しずくちゃんも頑張ってね」

「ううっ」

呻き声をあげるしずくの上にどんどんブロックを積んでいく麗華。そして、ブロックの高さがしずくの胸まで達した時、今度はブロックの代わりに木製の板を乗せた。

「さあ、お姉さんがやられて泣き叫んだ釘打ちをやってあげるわね。トーナメントが近いから、五寸釘じゃなくて、この細い釘で留めてあげる」

麗華は銀色に輝く釘をしずくに見せるが、それでも充分凶悪な釘であった。麗華は板の上にしずくのぺったんこな胸から乳首を引っ張ってのせ釘を当てる。

「さあ、しずくちゃん思い切り泣きなさい」

「ううっ」

恐怖で自分の乳首に当てられた釘を見つめるしずくの瞳から涙が流れていた。自虐で乳首に針を刺しているしずくでも怖いものは怖い。まだ釘のような太い物は突き刺した経験がないため、その苦痛度が分からない。

・・お姉ちゃんも経験したんだ。私だってお姉ちゃんに負けられない・・

しずくがそう思った時、麗華が金槌を釘に振り下ろした。

ガイィィーン

「ぶぎゃあぁぁぁーーっ!!」

しずくの乳首に釘が突き刺さり、しずくが絶叫する。しかし、麗華は構わず金槌を振り続け、しずくの乳首に釘を打ち込み、下の板に固定していく。

ガンッ、ガンッ、ガンッ、ガンッ、ガンッ

「ひぎぃぃぃぃーーーっ!!」

しずくの乳首はしっかりと板に打ち付けられてしまった。麗華はもうしずくの反対側の乳首に釘を当てていた。しずくは涙で滲んだ目で、麗華が振り下ろす金槌の動きを追っていた。

28、黎明

28、黎明

一大イベントである、メス奴隷処刑トーナメントの開催がいよいよ迫ってきていた。エントリーは締め切られ、それぞれの調教師の元にはトーナメントの案内状が送付されていた。

日野宮朝陽のところにも分厚い案内状とトーナメント表、さらに写真入りでメス奴隷のプロフィールが紹介された冊子が届き、アサヒはその内容を読んでいた。

基本的に各対戦は一対一の戦いとなり、メス奴隷が失神した方が敗北となる。敗北したメス奴隷は、その場で処刑される。勿論、完全に絶命するまで壊されていく。そして、そのメス奴隷を責めるのは、互いの調教師が入れ替わって責める事になる。つまり、敵のメス奴隷を責め早く失神させれば良いわけだ。メス奴隷の耐久力だけでなく、それを責める者の手腕も問われる事になる。

とはいえ、アサヒは楽観していた。ミアンが他のメス奴隷に遅れをとるなど考えられない。ミアンは膣だけではない。尿道も肛門もクリも小陰唇も針を刺されたり、切除されたりと幾度も経験している変態ドMなのだ。内性器である子宮でさえ痛め付けられ壊されるなど普通の事だと思っている。そんなミアンが先に失神してしまうなど想像も出来なかった。

「アサヒ君、油断しちゃダメだよ。ここは、キャロル様がアサヒ君に特注した、あの下着の発祥の地だよ。あれを好んで穿くメスのい

る世界。あんなのを日常的に穿いていたら、相当の事がないと失神したりしないよ。それに向こうの調教師が私を責めてくる訳だから思いもよらない責めをしてくるかも……。むふっ……♡望むところだけどね。私のマンコ、跡形もなく壊すくらいしてくれないと逆に泣いちゃうよ♡アサヒ君も相手のメス奴隷を思い切り責めてあげないと失礼だから、責め方を勉強しなさい。大勢のお客さんもいるみたいだから、観ている人も楽しませるようにね。いい、良く覚えておきなさい。メス奴隷を痛め付けるには、メス奴隷のメスの部分を徹底的に容赦なく責める事。一番効果があるからね。今回、他の処は無視していいよ。とにかく、マンコ、オンリー。そこだけを徹底的に責めなさい」

アサヒは大きく頷くと、じゃあ早速調教始めようとミアンを全裸にして、両腕を高手後手に縛り開脚逆さ吊りにした。アサヒは鞭を手にしながら、同封されていたトーナメント表に疑問を持っていた。ミアンはBブロックのAシードになっていたのである。この世界でミアンを知っている者はいない筈なのに、なぜAシードなのだろう。アサヒは、もし誰かがミアンの性癖や本性を見抜いたのだとしたら、確かに油断は出来ないと心を引き締めていた。これは、B級冒険者として培った勘であるともいえた。アサヒは、ミアンの性器に鞭を叩き込む前に、もう一度トーナメント表を確認してみた。間違いなくミアンはシードになっている。Aシードの為、1回戦は不戦勝であるし、シード同士は対戦が進まないと顔が合わないように組まれている。

・・当然だね。シード同士が早々に潰しあっては観ている人の興味も薄れるからね。コミックとかでも強敵同士がいきなり戦うパターンはあまりないからね。でも、これで思わぬ伏兵が出てくる事もパターンなんだよな・・

アサヒは、もう一人の変態ドMである、ある人物を頭に浮かべていた。もしかするとミアン以上の変態ドMかも知れない。

・・まさか、あの人もこのイベント嗅ぎ付けて姿変えて来ていたりしないよな・・

アサヒは一抹の不安をもったが、ぶるぶると頭を振る。余計な事は考えない方がいい。とにかくミアンの初戦は〝雌豚・エム〟と〝ロリータ・マイ〟の勝者との対戦となる。アサヒとしては〝ロリータ・マイ〟に勝って貰いたかった。

・・ロリ同士の戦いは萌えるぞ。それに責めるならロリの方がいいに決まってる・・

アサヒは〝ロリータ・マイ〟の性器に鞭を叩き込む自分の姿を妄想しながら、ミアンの性器に思い切り鞭を叩き込んでいた。

「あひゅぅっ♡あひゅぅっ♡気持ちいいれしゅうぅぅっ♡」

ミアンはアサヒに性器に鞭を叩き込まれ、性器をグショグショに濡らしてしまっていた。

「もっちょ、づよくぅっ♡もっと、づよくオマンコ打ってくらちゃい♡」

ミアンはもうメス奴隷になりきり、アサヒにもっと激しい責めを要求していた。

★　★　★　★

琴音もトーナメント表を見て、気を引き締めていた。このトーナメント表を作成したのは葉月なので、こうするのではないかと思っていたが、それは琴音の予想通りだった。琴音がBブロック、しずくがAブロックに分かれている。つまり、二人が戦う為にはどちらも決勝まで残らなければならない。かなり長い道のりになりそうだった。

・・ハルカとミアンもBブロックにいる。ハルカがBシード、ミアンがAシードだ。この二人に勝たないと、しずくちゃんと戦えないよ。お母さん、私頑張るから応援して下さい・・

琴音は、母彩音を思い浮かべ祈っていた。ハルカとミアン。どちらも強敵だと認識している。それでも琴音は敗ける訳にはいかないと思っている。自分は〝蜂須賀彩音〟の娘であり、あの豪徳寺葉月に育てられたのだ。それは超一流のサラブレッド。二人の母の為にも、優勝以外考えられない。琴音は断固たる意思を持ってトーナメントに挑もうとしていた。

★　★　★　★

その頃、しずくもまた送られてきた案内状を見て衝撃を受けていた。トーナメント表の中に見知った名前があり、もしやと思いメス奴隷のプロフィールを確認してみると、そこにはしずくの想像通りの顔があった。

・・お母さん……・・

しずくの母である〝アヤコ〟のアヘ顔の写真が掲載され、メス奴隷の一言が添えられていた。

――メス奴隷のアヤコです。他のメス奴隷より年をとっていますが、その分お客様を楽しませたいと思います。私がマンコを壊されて泣き叫ぶ無様な姿をご覧になって下さい――

しずくは唖然としたが、考えてみれば自分とゆかりの母親なのだ。元々の因子はそこにあったのだろう。しずくのAブロックには理恵の名前もある。つまり、しずくは順調に勝ち進んでいけば産みの親と育ての親、どちらの親とも対戦しなくてはならなくなるのだ。

・・琴音ちゃんとの約束を守る為には、お母さんと理恵さんに勝たないといけない。それに他のメス奴隷たちも凄そうだよ。お姉ちゃん、私頑張るから見守っていて下さい・・

しずくもまたゆかりを思い浮かべ祈っていた。

★　★　★　★

「くくくっ、誰が相手だろうと関係ない。俺が相手のメス奴隷を壊して、こいつが耐えれば良いだけだ。俺の責めに耐えられるメス奴隷などいないだろう。このトーナメントで俺の名をもっとひろめてやる。豪徳寺を抜くのも時間の問題だな」

佐瀬は目の前で開脚逆さ吊りにしている理恵の赤くみみず腫れが無数に浮き上がっている股間を見つめ笑みを浮かべていた。理恵は哀

れにも白眼を剥き口から泡を吹いて無様に失神していた。

「ほら、いつまで寝てやがる。さっさと起きろっ。お前のマンコ、もっと痛め付けてやる」

佐瀬は理恵の頬を打ち、無理矢理覚醒させていた。

★　★　★　★

男は葉月の動画を観て、仰天していた。

・・こいつは確かに怪物だ・・

それは葉月がメス奴隷を開脚逆さ吊りにして性器を鞭で打っている動画だったが、葉月は正確にメス奴隷の性器の割れ目に鞭を打ち込んでいた。一発でも外さない。それに、その鞭さばきの早さは驚嘆ものだった。普通の調教師が一発打つ間に、数発は打っているだろう。あっという間にメス奴隷の柔らかな縦割りの中、メス奴隷の膣前庭は皮膚が裂け血が飛び散っている。そして、メス奴隷の陰核は無様に叩き潰され、千切れ飛んでいった。メス奴隷は白眼を剥き口から泡を吹いて失神してしまっていた。

・・このトーナメント表を見ると、もし決勝までいってBブロックのAシード、コトネというメス奴隷と当たると豪徳寺葉月が調教師として出てくる。アヤコが豪徳寺の責めを耐えられるとは思えない。コトネがもう一人のAシード、ミアンやBシードのハルカに敗けてくれれば良いのだが……・・

男はトーナメント表を見ながら如何にして勝ち上がり大金を手に入れるか、そればかりを考えていた。

29、襲撃

29、襲撃

メス奴隷処刑トーナメント開催まで残り数日。葉月は、これからの時間は調教を止め、琴音の体を休ませる事にした。それと、もう一つは琴音にとって最後の数日になるかも知れない、トーナメントが終了した時点で、琴音は敗北していて処刑を執行され、もうこの世にいない可能性もあった。この数日を琴音の自由にしたのは、まさかと思うが葉月の親心なのかと、葉月を知る周囲の人間は驚いていた。ただ当の葉月本人はそんな気持ちなど毛頭なかった。さすがに連日の調教で自分が疲れた。ただ、それだけの事だった。気分を変えてリフレッシュする。それで、これから始まる楽しいトーナメントに集中するつもりだったのだ。

・・この公園は良いですね。何故か心が安らぎ落ち着きます・・

葉月は、しずくと出会った、ゆかりが野外自慰に度々訪れていた公園に来ていた。葉月の後ろには近藤が控えている。昼下がりの公園にはあまり人影がなく、ゆかりを思い出し妄想に耽るには格好の公園であるといえた。

・・我ながら今度のトーナメントはいいアイデアでしたね。優勝賞金を破格の金額に設定した為に参加希望者が多数申し込んできましたし、観覧希望者はそれ以上に殺到しています。入場料だけでペイできますが、他にも処刑具や性具の販売、それにトーナメント動画

の購入予約だけでも凄まじい数がカウントされていますからね・・

葉月は笑みを浮かべ公園を歩いていた。そこへ突然男が数人襲いかかってきた。近藤が葉月の前に出てガードしようとするが、葉月は手で近藤を制していた。男たちは銃やナイフを持っている。その殺気はビリビリと空気を震わせる程であった。

・・ほう、銃が二人にナイフが三人。少し面倒なので早めに片付けますか・・

葉月は服の袖の内側に仕込んであるメスをスッと取り出し密かに握る。それは超硬質のタングステン鋼のメスである。葉月にかかれば金属でも切断出来る。そして、その次の葉月の動きはまるで電光石火。人の目で捉えられるものではなかった。襲撃してきた男たちが行動する前に勝負はついていた。葉月がメスを袖に戻した時には、男たち全員の手首から先が切断されていた。銃の引き金を引こうとしていた男は、手首から先が失くなった自分の腕を見て絶叫し、膝から崩れ落ちていった。男たちは何もする事が出来ず全員地面に転がりのたうち回っている。

「近藤、一人残して後は始末しておきなさい」

「は、はい。葉月様」

近藤が、銃を取り出し地面に転がる男たちの頭に銃弾を撃ち込んでいく。そして、４人の男を始末すると最後の男を拘束し地面に転がしたまま回収要請の連絡をとる。

「どこの馬鹿の差し金か吐かせて、家族恋人子供、一族郎党関係あるもの全て殺しなさい」

「はい、早急に」

近藤は改めて葉月に畏怖を感じていた。戦力的に圧倒的に有利だった男たちが瞬殺される。それは、人間である以上どうしても人の命を奪う事に躊躇いがあるからだった。襲いかかった瞬間、引き金を引き、ナイフを突き立てれば良かったのであるが、それは殺人鬼であっても同じであった。人を殺す事に喜びを感じる殺人鬼でさえ、狙いを定めたターゲットを付け狙い時間をかけて殺していく。一見、なんの躊躇いもなく殺しているように見えても、そこに僅かな躊躇いがあるのだ。だが葉月には、そのような感情自体がない。葉月にとって人の命など虫けらの命程もない。なので一切の躊躇いがないのだ。真っ黒な悪でありながら、遥か未来でスク水少女戦士ウテルスの問答無用の必殺技〝審判（ジャッジメント）〟を受けても消滅しないのは葉月に悪の感情がないからである。そんな感情が欠落している葉月は、まさに怪物といえた。そんな葉月に、フラフラとホームレスの男が近付いてきた。その気配はまったくの素人。ただのホームレスが食料でも求めて歩いているようにしか見えなかった。葉月は不快な物でも見るように目を逸らして通り過ぎようとした。その時、そのホームレスの男は、手に持ったナイフで葉月の腹を突き刺していた。一瞬の油断。そう思われるが葉月は不意討ちに備える為油断などしていない。では何故と問われると、このホームレスの男が警戒するに値しないちっぽけな極普通の人間だったからに他ならない。葉月にとって男は地面を這う蟻のように見えていたのだ。

「娘の敵だ……」

男がポツリと呟く。葉月は驚愕したように目を見開き、近藤は憤怒の表情でホームレスの男を殴り飛ばしていたが、葉月の腹にはナイフが深く突き刺さったまま残っていた。

★　★　★　★

琴音はしずくの家に来ていた。お互いトーナメントでは競いあうライバルであるが、それ以上に二人はお互いを友人だと思っていた。この二人の姿に、きっとゆかりと彩音も喜んでいるのは間違いなかった。その時、琴音はゾクッと背筋が寒くなった。

「どうしたの、琴音ちゃん」

しずくは琴音が急にブルッと震えたので、どうしたのかと思ったが、琴音は頭を振ると、ちょっと寒気がしただけ何でもないと答えていた。

「ねえねえ、養母（おかあ）さんから体を休めておけって言われてるけど、浣腸くらいなら大丈夫だよね。どっちがたくさん入れられるか競争しようよ」

「そうだよね。私も麗華さんたちから休むよう言われてるけど、浣腸くらいしておかないと体鈍っちゃうよね」

二人はすぐに浣腸プレイの準備をする。床に防水のブルーシートを敷き、イルリガートルを用意し中に薄めたブランデーを満たしていった。

「ブランデー浣腸は亡くなった人もいるから注意が必要だけど、一番苦しい浣腸だから、やってみたいよね」

「うん、直接腸から吸収されるから、もうお腹がネジ切れるくらい苦しくて痛いらしいから興奮するよね」

しずくと琴音はドラム缶程もある巨大なイルリガートルに一杯までブランデー液を満たし興奮していた。その容量はドラム缶と同じ２００リットル。そんな量が体の中に収まる訳がない。当然、肛門から注入した浣腸液は逆流して口から噴き出す事になる。二人は、その自分の無様な姿を想像し、激しく性器を濡らしてしまっていた。

「どうしようか、トーナメントと同じで失神した方が敗けでいい？」

「うん、それでいいよ。一番分かりやすいし、トーナメントの前哨戦みたいでいいと思うよ」

「ようし、それじゃあ始めようか。このイルリガートルから出ているチューブの先の注入部を入れっこして同時にコック開けようよ」

琴音の提案で互いの肛門にチューブの先端を挿入する。先端には簡単に抜けないように〝かえし〟がついているのでチューブが抜けてしまう心配はなかった。

「じゃあ、コック開けるよ。いちにのさんっ、開門っ」

琴音の合図で二人同時にコックを開ける。その途端二人の中にブランデーを薄めた浣腸液が流れ込んできた。

「いぎいぃぃぃーーーーっ！いだいぃぃぃーーーっ！」

「あぶうぅぅーーーっ！やげるぅぅっ、お腹のなか、やげるうぅぅーーーっ！」

二人はあまりの激痛に絶叫していた。

「じぬうっ、じんじゃうぅぅぅーーっ！！」

「だじげでえぇぇっ、もおゆるじでえぇぇーーーっ！！」

相当に薄めたつもりであったが、刺激物であるアルコールの威力は絶大だった。二人は体の中から焼かれる激痛で発狂したように泣き叫んでいた。二人は肛門に挿入されているチューブを抜こうと必死になるが、先端の〝かえし〟がしっかりと肛門に食い込んでおりチューブを抜く事が出来ない。その間にもブランデー液はどんどん注入され、二人の腹部はカエルのように膨らんでいた。そして、二人は四つん這いで、まったく同じ姿勢をとりながら苦しげに口を開く。

「おげえぇぇーーっ」

「ごぽあぁぁぁーーっ」

二人は同時に口から浣腸液を吐いていた。勢いよく逆流した浣腸液で二人の体に残っていた大便も口から排泄されている。二人は口から大便を垂れ流し、涙と鼻水を流しながら白眼を剥いて無様に失神してしまっていた。

30、謝罪

30、謝罪

「まったく、あなたたちには呆れてしまいますね」

しずくと琴音は、ちょうど打ち合わせの為にやってきた理津子と麗華に助けられ説教されていた。

「「すいません」」

しずくと琴音は頭を下げ素直に謝罪していた。

「もう済んでしまった事ですから、これ以上は言いませんが、あんな大量の浣腸をしたら呼吸が出来なくなって死にますし、アルコール系の浣腸は腸から直接吸収されてしまうからショック死や急性アルコール中毒で死にますよ。まったく、あなたたちの変態マゾぶりには恐れ入ります。せめてマンコ鞭で打つくらいにしてくれませんか」

麗華に愚痴愚痴言われていると、来客があった。しずくが玄関に出てみると驚いた事にそこに立っていたのは豪徳寺葉月だった。

「ここが〝渡邉ゆかり〟の家ですか。こんな極普通の家から、あの類い稀なる変態マゾのメス奴隷が生まれたのですね。感慨深いですね」

挨拶もそこそこに葉月が感想を漏らす。それは聖地を訪れた巡礼者のようであった。

「あっ、いえ。お姉ちゃんはあっちの離れで生活していました。お姉ちゃんはずっと一人で自分を調教していましたから……。ど、どうぞ、上がって下さい、琴音ちゃんも来ていますから」

「知っていますよ。橘から連絡がありましたから」

葉月は玄関から上がると、しずくについて歩いていった。葉月の後ろに控えていた男は、そのまま玄関に残り警戒するように周囲を見回している。

「すいません、養母（おかあ）さま」

葉月の顔を見た琴音は、葉月が口を開く前に謝っていた。

「まったく、橘から連絡受けて驚きましたよ。渡邉しずくと一緒に大量浣腸して、口からウンコ出して気絶していると聞きましたからね」

葉月も呆れたように言うと理津子が葉月に顔を向ける。

「血の匂いがするが、怪我でもしているのか豪徳寺」

理津子の言葉で、琴音もしずくも驚いて葉月を見つめると、葉月は苦笑いしていた。

「虫けらかと思っていたものに少々噛まれましてね。まったく、虫

の分際で身の程をわきまえてほしいですね」

「ふふふっ、豪徳寺ともあろう者が不意を突かれて不覚をとったわけか。これは面白い。そのまま死んでいれば、もっと楽しかったのだがな。まあ、そんな素人ではお前を倒すのは無理だな。武術の達人になると内臓の位置も僅かに動かせる。だが、こいつ程の怪物になると内臓の位置も大きく動かせるからな。不意討ちされても咄嗟に急所を外すなど造作もない事だ。それにしても愉快であるのは変わりない」

「ふん、そんな無様な姿のお前から言われたくないですね、橘。まあ、でもこれで丁度いいハンディになるのではないですか。いかに香坂家の娘といっても私とは経験の差がありますからね」

葉月は余裕で麗華の顔を見ながら笑みを浮かべていた。

「もう決勝まで勝ち残るつもりでいるのですね。でも、気を付けた方がよろしいですよ。ハルカにミアン、どちらも一筋縄でいくような相手ではありませんよ。足をすくわれないようにする事ですね」

「トーナメント表を組んだのは私ですからね。私がマンコを処刑してみたいと思った相手と当たるように組んだのですよ。ハルカにミアン、それにしずく。私にとって、他のメス奴隷は単なる飾り。大会を彩る為に必要なだけの駒ですよ。そんなメスのマンコ壊しても、興奮も何もありません。それより、あなたたちこそ途中で敗退などしないで下さいね。あの加納理恵と渡邉文子。そこそこ良いメス奴隷でしょう。まあ、私がマンコ壊したくなる程ではありませんが、自分の子供が自分たちに敗けてしまったら親はがっかりするでしょうからね」

葉月は残酷に笑っていた。

★　★　★　★

トーナメント開催が近いこの時期でも佐瀬は理恵を痛め付けていた。佐瀬にとって理恵は自分の名声をアップさせる為のただの使い捨ての駒だった。それに、佐瀬は女を、メスを痛め付ける事がなにより好きな完全な倒錯者であった。なので、一切の容赦がない。理恵は両腕を後ろ手に縛られ開脚逆さ吊りにされていた。その理恵の体に向かって佐瀬は自分で改良したピッチングマシーンを向ける。バッティングセンターに設置されている大型の機械だが球速を上げ１８０キロまで出せるように改造してあった。このピッチングマシーンで理恵の体に硬式のボールを射ち込むつもりだ。

「ゆ、許して下さい……」

理恵は泣きながら佐瀬にお願いするが、佐瀬は構わずピッチングマシーンを作動させる。

シュパッ

「あうぅぅぅーーっ！」

１８０キロの豪速球が理恵の陰毛を処理した恥丘に射ち込まれる。そして、一定の間隔で次々に無慈悲に理恵の恥丘に硬球が射ち込まれていった。

「いだあぁぁぁーーーっ！あぶぶぶうぅぅぅっ！！」

理恵の絶叫が響き渡り、理恵の体の至る所にボールの跡がくっきりと痣になり残っていた。そして、ようやくセットした１００球全て射ち込み終わった佐瀬は、次に理恵をＭ字開脚に固定する。

「ようし、今度は股間のマンコに射ち込むからな。いい声で泣いてくれよ」

佐瀬は理恵のダメージなど一切考慮せず、すぐに次の責めに移る。

「もう許して下さい、お願いしますぅぅっ」

理恵が震えながら許しを乞うが、佐瀬はもうスイッチを入れていた。

ズボウゥッッ

「あびゃあぁぁぁぁーーーっ！！」

ぶりっ、ぶりっ、ぶりぃぃぃっ

その豪速球はうまい具合に理恵の膣に嵌まり、膣の中にめり込んでいた。そして、理恵の肛門からは大便がぶりぶりと排泄され床に落ちていった。

「おお、ど真ん中ストライクだっ」

佐瀬は嬉しそうに叫んでいた。その佐瀬の股間では、理恵の哀れで惨めな姿に興奮したモノが硬く大きく勃起していた。

★
★
★
★

アサヒは様々な太さと長さのプラグを見つめ悩んでいた。

「アシャヒ君♡はやくうぅ♡はやく、私のアニャ、うめてくりゃちゃい♡」

開脚逆さ吊りにされたミアンがせがんでいる。よしとアサヒはようやくセレクトしたプラグを手に取った。

「いくぞ、ミアン。ミアンの穴を封印する」

アサヒはミアンの鼻の穴にプラグを深く挿入していく。ミアンの二つの鼻の穴にプラグを詰めたアサヒは今度は太く長いプラグをミアンの口に入れていた。ミアンが苦し気にえずくがアサヒは構わずミアンの口から喉、そして食道へとプラグを挿入していく。

「おぼっ、おぼっ、おぼっ、おぼっ」

ミアンの瞳から涙が大量に流れているが、アサヒはミアンの胃までプラグを挿入してしまう。

・・ぐ、ぐるじいっ♡息ができにゃい♡窒息プレイきもちいいりょう♡・・

鼻と口を塞がれてミアンが苦しそうに体を捩るが、性器はぬるぬるに濡れていた。

「どうしようもない変態だな。下の穴も塞いでやるよ」

アサヒがプラグを手に取った時には遅かった。呼吸困難で意識が朦朧となったミアンの尿道から尿が噴水のように噴き出した。それだけではない。肛門からも、ぶりぶりと大量の大便を漏らしている。逆さ吊りにされているミアンは自分の排泄物で自分の体を汚していた。

・・でりゅう、でりゅうぅぅ♡とまらにゃい♡ぎもちいいりょうぅぅ♡・・

「まったく締まりの穴だな。選んだのよりもっと太いので封印してやるよ」

アサヒは直径2センチもあるプラグをミアンの尿道に突き入れていった。

・・ひぎいぃぃーーっ♡ちゃけるぅ、ちゃけちゃうぅぅっ♡・・

ぶちぶちとミアンの尿道が裂けていくがアサヒは構わずミアンの膀胱までプラグを突き入れた。

「次はこっちの穴だ、ミアン」

直径8センチで長さ30センチあるプラグの先端をミアンの大便を漏らす肛門に突き刺す。アサヒはプラグをどんどん押し込んでいった。すると、ズブッというおかしな手応えがあった。

・・いだあぁぁぁーーーっ♡なにか、つきにゅけりゅうぅぅっ♡・・

プラグはミアンのS状結腸を突き破ってしまっていた。しかし、ア

サヒは構わず次のプラグをミアンの膣口に当てていた。それはなんと直径２０センチもあるプラグというよりは杭といった方がいい代物だった。

「ほーら、ミアンの大好きな膣裂きと子宮串刺し、いくぞ」

ズリューーッ

ぶち、ぶち、ぶち、ぶち、ぶちぃぃぃっ

「ふごうぅぅぅーーーっ♡♡」

塞がれた口で絶叫するミアンの膣は裂け、激しく血が溢れだしていた。

「ふふ、メス穴3本挿し完了。それじゃ、これを繋いであげる」

アサヒはミアンの穴に深く挿入したプラグに電源コードを繋いでいく。そして、それを発電機にも繋ぐとスイッチを入れた。

・・ひゃうぅぅっ♡おにゃかのにゃか、やかれりゅうぅぅっ♡もう、らめぇぇぇっ♡・・

ミアンは強力な電流を通電され子宮、膀胱、腸を焼かれ、体を激しく痙攣させると白眼を剥いて失神していた。

★　★　★　★

そして、ついにメス奴隷処刑トーナメント開催の日がやってくる……。葉月は、その開催の日の早朝、一人の女性と会っていた……。

31、開幕

31、開幕

メス奴隷処刑トーナメント開幕の日、空は快晴だった。トーナメントが開催される葉月の屋敷には参加者と観戦者でごった返していた。葉月の屋敷のメイドや執事だけでは手が足りず、沙也加の家からも応援のメイドたちを送り込んでいた。

「葉月様、物凄い盛況ですね。今まで公開処刑した時の何倍でしょうか。私もワクワクしてしまいます」

沙也加が興奮した口調で葉月に告げると、葉月は残酷な笑みを沙也加に向ける。

「そうですね。それでは更に盛り上げる為、この大勢の観衆の前であなたを処刑してみますか。このトーナメントの記念すべき第一回の開始を飾るに相応しいと思いませんか。是非、協力して貰いたいですね」

葉月の冷たい恐ろしい瞳が沙也加を射竦めていた。沙也加は緊張で体が強張り、全身から汗が吹き出し震えていた。

・・ここで返答を誤れば本当に処刑される。あの葉月様の妹の睦月様のように……・・

沙也加はごくっと唾を飲んで答えた。

「も、もちろん。葉月様が開催されるこのトーナメントの為、私の体がお役に立つなら是非もありません。どうぞ、残酷に処刑なさって下さい。それで、私の名前が後世に残ると思うと光栄の至りです」

葉月はニヤリと笑うと、傍らにいる近藤に目で合図する。近藤は、沙也加に向かって近付くと、沙也加の手を取り、こちらへと促し歩いていく。葉月の屋敷の広大な庭園の中央に設置された処刑台。それが近付くにつれ、沙也加の足はガクガクと震え、股間からは尿が漏れだしていた。処刑台の前に到着した近藤は沙也加を振り向く。沙也加が全身汗塗れで漏らしてしまっている事は一目瞭然だが、近藤は顔色一つ変えずに言う。

「それでは、神楽坂さん。機器の最終チェックお願いします。葉月様が神楽坂さんに任せれば安心だと仰っていましたので」

「は、はい。トーナメントが滞りなく進行出来るようにチェックします」

沙也加は安堵の息を吐いた。今までの恐怖は消え去り、葉月がそこまで自分の事を信頼してくれているのかと思うと心の中で狂喜乱舞していた。

★　★　★　★

葉月は応接室で一人の女性と会っていた。豪華なソファーに向かい合って座っている女性は、みすぼらしい格好で、まるで覇気がなく、

もう人生の全てが終わったような顔をしていた。

「御足労感謝します。私が伝えた事を理解した上でここに足を運んでくれた訳ですよね？」

ピクリとも動かなかった女性が、ここで葉月に顔を向けると小さく頷いていた。その瞳には涙が滲んでいるように見える。

「私はあなたを担保しておきたいのですよ。あなたは本当に運がなかったですね。ですから、ここからは自分を解放して生きませんか」

葉月の言葉にも女性は何の反応もなかった。

「あなたの配偶者は酷い男でしたね。大金を手に入れても全て自分の為に使い、大事に使えば仕事をせずに普通に生活出来たお金を全て風俗とギャンブルで使い果たしてしまった。それで、挙げ句の果てに私のせいだと襲ってきたのですよ。ナイフでね」

ここで葉月はテーブルの上にガラスの容器をコトッと置く。それはホルマリン浸けにされた男の根本から切断された性器だった。

「あなたの配偶者のものですよ。他の部分はもう失くなってしまったので、これが残った最後のものです。これは、あなたに差し上げます。どうされようと、あなたの勝手です。それで、どうされますか。私の元で働きますか。電話で伝えた通り、私はあなたの配偶者と娘を処刑した本人です。ここで返事を貰いましょうか、本多夕子さん」

夕子はここで初めて声を出した。

「茜はどのように処刑されたのでしょう。苦しんでいましたか」

「もちろん本多茜は四肢を溶解され、苦しみ抜いて絶命しましたよ。ですが、それは本人も望んでいた事、それに観ていた者を大いに楽しませてくれました。立派に処刑されていきましたよ。あなたなら、その気持ちは分かるでしょう。あなたの配偶者のあのがさつな男ではない。本多茜はあなたの因子を受け継いでいる。私は、そう思っています。ですから私は、あなたを必要としている。私は、あるメス奴隷を処刑して後悔しているのです。処刑した事を後悔しているのではありませんよ。処刑する前にやっておく事を失念していたのです。人間は後悔を重ねて成長するものですね。私も実感しましたよ。あなたも、このまま生きる屍のように生きていくよりも私の元で働いてみませんか。それが、本多茜の供養にもなるでしょう」

「茜はそんなに苦しんでいましたか。あの子は私に似ているのではと心配していましたが、そうですか、茜は望んでいましたか。でしたら、あの子は最高の幸せの中で絶命したのでしょう。ありがとうございます。今まで私の心を覆っていた霧が晴れたような気がします。豪徳寺様、私を雇って下さい。お願いします」

夕子は葉月に向かって頭を下げていた。葉月は満面の笑みを浮かべ、夕子の前にメス奴隷の冊子を置いた。

「良い返事が聞けて嬉しいですよ。そこで早速仕事をお願いします。あなたは結婚前は医療従事者でしたよね。そこで、今日から始まるトーナメントの参加メス奴隷全員から採卵をお願いします。膣の奥から採卵用の針を卵巣まで刺して吸い上げれば完了です。採取した卵子は凍結保存して必要な時に解凍して受精させるという訳ですよ。ああ、心配はいりませんよ。メス奴隷にはもう事前にＨＣＧ注射は射ってありますから。オープンセレモニーが終わったら声をかけま

すので待機していて下さい」

夕子は、はいと返事をするとガラス瓶に入った性器を見つめていた。

「ああ、それは持って帰って良いですよ」

葉月が部屋を出ようとすると夕子が、こんな物処分して下さいと言ってきた。その顔は訪れた時とはまるで違い、生き生きとした生気に満ちた顔だった。

★　★　★　★

特設の観覧席まで全て埋まり、全員が処刑台が設置された中央に目を向けていた。その中央の位置に葉月が歩いてくると、待ちかねたように歓声が上がる。葉月はマイクを取ると開会の宣言をした。

「皆さま、お待たせしました。それでは第一回メス奴隷処刑トーナメントを開幕します」

わーっという凄まじい歓声が治まるのを待ち、葉月が再び口を開く。

「本日はＡブロックの一回戦を行います。明日はＢブロックの一回戦と進行していきます。皆さまに告知しているように、敗れたメス奴隷はその場で処刑されます。勝敗は、シンプルで先に失神したメス奴隷の敗けとなります。なお責め手は調教師が入れ替わって行いますので、相手のメス奴隷を早く失神させる為に頑張ってくれると思いますよ。そして、公正を期すために使用出来る調教具は制限します。一回戦で使用可能調教具は鞭、蝋燭、針となります。この調

教具も一回戦はこちらで用意した物を使用して頂きます。オリジナルの調教具は一回戦では禁止させて頂きます。それでは、トーナメントに参加するメス奴隷の入場です」

神楽坂沙也加が先導し、その後に調教師が持つ鎖に繋がれた首輪が嵌められた全裸のメス奴隷がよろよろと歩いてくる。メス奴隷がよろよろ歩いているのは、両腕は後ろ手に拘束され、両足首にも足枷が装着され、そこに更に重さ１０キロある鉄球が付いているからである。勿論、それだけではない。顔面は鼻フックがかけられ無様に鼻の穴を晒し、ボールギャグを詰められた口からは涎が垂れている。そして、乳首とクリトリス、小陰唇には錘が下げられている。トーナメント前なのでクリップで留められているが、錘はかなりの重さのあるものだ。その為、メス奴隷はよろよろと歩いているのである。ＡブロックＡシードのしずくは先頭で麗華に鎖を引かれ歩いていた。動画で観た姉のゆかりの公開処刑の時よりも遥かに多い人が集まっている。しずくは、こんな大勢の人の前で調教され処刑されるかと思うと、太ももの内側まで濡らすほど激しく興奮していた。が、それはどのメス奴隷も同様で次々に歩いてくるメス奴隷の誰もが太ももの内側まで激しく濡らしてしまっていた。

32、焼印

32、焼印

メス奴隷たちはズラッと横に並ぶと、全員が足を大きく開いて、その股間を晒す。28個の性器が並ぶ。それは壮観な光景だった。この総勢28匹のメス奴隷が、これから対戦を繰り広げ、残るのはただ1匹。どのメス奴隷が、その最後の1匹になるのか。観客はメス奴隷たちの姿を目に焼き付けていた。メス奴隷全員を見る機会は、このセレモニーの間だけだ。もちろん、スマートフォンやデジタルカメラ等の撮影機器は持ち込みが禁止されている。なので観客はこの時に自分のお気に入りのメス奴隷を見つけ、そのメス奴隷を追いかけようと必死に配られたメス奴隷のプロフィールを見ながら品定めしていた。

「あれが渡邉ゆかりの妹、しずくか……。地味な雰囲気は似ているが、しずくの方が可愛いか。あの蜂須賀彩音の娘もいるぞ。ブロックが違うから、この2匹が、決勝を争いそうだが……」

「いや、この遥というのも幼いが凄い経歴だぞ。なんだ、マンコ切開って……。そんな事やられて死んでないのが凄い。これが本命じゃないか」

「それを言うならミアンというメス奴隷も凄まじいぞ。それに金髪つるぺた幼女だ。俺はミアン一推しだな」

「うーん、確かに若いメス奴隷もいいが、熟年の凄みもあるぞ。このアヤコ、この年で参加するとは……。それに若いのにはないエロい気配が漂っている。俺はアヤコを追いかけるぞ」

「それを言うなら俺はリエだ。ちょうど、一番メスとして乗っている最高の年齢じゃないか。このメスが泣き叫ぶ姿を想像すると興奮する」

「私は、やっぱりミアンね。金髪ロリが目茶苦茶にされるところを観たいわ。調教師の方もイケメンだし、期待しちゃう」

「私は、しずくね。ゆかりの処刑も観たけど、しずくも同じ様に処刑されるところを観たいわね」

「同感。私も観たい。あと琴音の処刑も観たい。だから、この二匹は早く敗けて処刑されて欲しいわね」

「僕はメス奴隷の処刑が観られればそれで良いから嬉しいですよ。こんなにたくさんの処刑を観られるなんて、他に類がありませんよ」

観客たちの興奮は一向に治まらないが、その間にも次のセレモニーに進んでいく。メス奴隷たちに、メス奴隷の証、焼き印が捺される。それは主催者である葉月の豪徳寺家の家紋、鳳凰紋だった。これを捺されてしまえばメス奴隷たちは豪徳寺家の所有物となる。ここにメス奴隷を連れてきた調教師からも捨てられる事になるのだ。それを承認出来なければ拒否する事も出来るが、ここで拒否してもメス奴隷に生きる道はない。豪徳寺家の焼き印を拒否したとあっては誰からも存在を否定される。一人、捨てられた動物のように生き、孤独の中で死んでいくしかない。もちろん今回のメス奴隷でそれを拒否するものはいなかった。各メス奴隷たちの前に真っ赤に焼けた焼

き印が用意され、それぞれの調教師が柄を握った。葉月も琴音の前にいるため、沙也加の合図で一斉にメス奴隷は焼き印を捺される事になる。無毛や剃毛済のメス奴隷は恥丘。陰毛のあるメス奴隷は腹部に捺される。メス奴隷の中には、もう焼き印を経験済みのメス奴隷もいるだろうが、これは調教師の腕を見る為のものである。一流の調教師であれば、きれいにくっきりと焼き印を捺すが、経験が足りない調教師は焼き印を離すのが早すぎたり遅すぎたりして、皮膚が剥がれてしまい紋章が上手く見えなかったりする。これを見れば調教師の腕前が一目瞭然なのだ。

・・お姉ちゃん、私もこれでやっとお姉ちゃんと同じ土俵に上がれるよ。私も人じゃなくなったよ・・

しずくは感無量だった。もう自分は本当のメス奴隷なんだという自覚が芽生える。

・・くそっ、こんなの全然タイミング分からない・・

アサヒは焦っていたが、視線を感じて上を見るとミアンが目をパチパチし、その後にギュッと閉じる。どうやら、ミアンが自分で合図を送ってくれるらしい。アサヒは分かったというように頷いた。

・・はあぁ、面倒くせぇ。こんなのただ押し当てれば良いんじゃねえの・・

佐瀬は面倒くさそうに理恵の恥丘を眺めていた。

「はい、それでは皆さん用意して下さい。いきますよ、3、2、1、ゼロッ！」

ジュウゥゥゥーーーーッ

「「「ふぐうぅぅぅーーーーっ」」」

メス奴隷全員が一斉に同じ様に天を仰ぐ。しずくも琴音も遥もミアンも、焼き印を捺される苦痛にメス奴隷全員が申し合せた様に同じ姿勢をとり、涙と鼻水を流し震えながら耐えていた。観客席の前方にはメス奴隷の肉が焼ける臭いが漂ってきている。そして、ようやくメス奴隷の苦痛の時間が終わる。綺麗に焼き印が捺されたのは、しずく、琴音、遥、ミアンの４匹だった。残りのメス奴隷は早すぎて輪郭が掠れていたり、逆に遅すぎて皮膚が剥がれたりしていた。

「おおっ、やはり、あの４匹は調教師の腕も凄いぞ」

「葉月様は当然として、残りの三人は見かけない顔だけど凄いわね」

「あのイケメンの彼、私、ファンになりそう。調教師としての腕も一流なんて、私も焼き印捺して貰いたいわ」

観客席はざわついていたが、沙也加は進行が遅れぎみな為、葉月の叱責を怖れて急いでいた。

「それでは、メス奴隷の退場です。その後に、この場所でＡブロック一回戦の対戦を行っていきます。一回戦は対戦が多いため、対戦時間が長引いた場合は、残りの対戦は明日に繰り越しになります。御了承下さい。この後の対戦は「夜蝶アゲハ」対「牝穴カレン」となります。準備が終わり次第開始されますので、少々お待ちになって下さい」

沙也加は観客に向かって御辞儀をするとマイクを置いて下がってい

った。

★　★　★　★

メス奴隷たちは一旦控え室に下がり、そこで各対戦毎に出ていくのだが、その前にやる事があった。採卵である。メス奴隷の御披露目の時と同じ順番で採卵になり、一番にしずくが処置室に入っていき診察台に横になり足を大きく開く。そこにいた白衣の女性が慣れているように手際よくしずくの脚と腰を革のベルトで診察台に固定していく。そして、カルテを見て名前を確認する。

「元名、〝渡邉しずく〟でよろしいですか」

そういう言われ方でしずくは、もう自分は人間ではないと実感した。

・・お姉ちゃんは６９番と言われていた。今回はトーナメントで一度にたくさんのメス奴隷が出るから、番号よりネームの方が分かりやすいだろうと言われて、しずくにしたけど、本当は私、もう名前もないんだよね・・

しずくが想いに耽っていると白衣の女性が、しずく、しずくと呟いている。しずくが何だろうと首を傾げると、白衣の女性はようやく思い出したとしずくの顔を見た。

「茜の友達だった渡邉しずくって、あなたなの。茜がよく話していたの、やっと思い出した。私は茜の母の本多夕子です。茜が色々お世話になったようで、本当にありがとう」

「えっ……」

しずくは驚いて女性の顔を見る。そういえば茜に似ているようだった。

「しずくさん、あなたもメス奴隷になったんだね。うちの茜もメス奴隷になって処刑されたようなんだよ。どうせなら茜も、こんな大きなトーナメントに出場すれば良かったのにね。そうすれば私も応援に来たのに……」

しずくは夕子の言葉に胸が詰まっていた。もし、あの日自分が茜を誘って葉月の屋敷に来なければ、茜もこのトーナメントに参加していたかも知れない。しずくは夕子に何て言って良いのか分からなかった。

「頑張ってね、茜がいたらきっとそう言うよ。しずくさんが一番の親友だって言っていたから……。だから、私も応援する。敗けないで下さいね」

「はい……」

しずくはもう絶対敗けられないと思っていた。

・・お姉ちゃんの為だけじゃない。茜ちゃんの為にも敗けられないよ。それに私自身の為にも……・・

しずくは優勝を心に固く誓っていた。

33、初戦　アゲハVSカレン

33、初戦

「メス奴隷はトーナメントがあるので麻酔は使うなと言われていますから、このまま採卵しますよ」

夕子はしずくの膣に膣鏡を挿入し最大まで開口する。そして、エコーを照射しモニターでしずくの卵巣の位置を確認した。

「じゃあ、刺しますよ。膣奥の子宮頸部横から一気に刺しますからね。ちょっと痛いけど、すぐ終わるしメス奴隷のしずくさんなら我慢出来るでしょう」

夕子はモニターを見ながら針をしずくの膣内に入れていき狙いを定める。そして、一気に長い針をしずくの膣に突き刺した。

「はうっ……」

しずくが小さく声を上げるが、夕子はずるずると針をしずくの中に刺し込んでいく。そして、卵巣に突き刺さった。

プツウッ

「あうぅっ……」

また小さくしずくが声を上げるが、すぐに夕子はスッと針を抜き、はい終わりましたと告げ、採取した卵子を液体窒素で覆われた容器に封入し、しずくと書かれたラベルを貼り付けた。そして、しずくを固定していたベルトを外し、はい次の方と、もう次のメス奴隷を呼んでいた。

しずくが控え室に戻ると、麗華と理津子が待っていた。傍らには葉月と琴音もいる。他のメス奴隷たちは、葉月と琴音に遠慮しているのか離れた場所に固まっていた。みんな、調教師がメス奴隷に確認を取ったりして作戦を立てているようだった。責める方と耐える方、どちらも重要であった。自分のメス奴隷の状態も常に把握し、自分のメス奴隷より早く敵のメス奴隷を失神させる。簡単なようだが、どれだけそのメス奴隷を調教し、メス奴隷が失神寸前にはどんな声を出し、どんな状態になるのか把握しているかが鍵になる。いかにそのメス奴隷の事が分かっているか、つまり、そのメス奴隷を入手して間もない組は不利になる。そう考えると、もう長い間調教を続けている葉月と琴音が、やはり圧倒的に有利なのは否めないだろう。だが、対戦が進むにつれ使用出来る調教具も増えてくる。そのメス奴隷の弱点をつければ一発で失神させる事も可能だろう。そんな中、アサヒは周囲を見回していた。メス奴隷に関してはミアンの右に出る者はいないと確信していたが、調教師としては自分より上の者が多いだろう。ミアンが頑張っても自分が相手を失神させる事が出来なければ勝負は分からなくなる。

・・あの二人は別格だ。あの二人のメス奴隷とは当たりたくないな・・

アサヒは葉月と麗華を警戒するが、トーナメントである以上勝ち進んでいけば必ず対戦する事になる。

・・強敵と当たる時の為にミアンの負担を軽くする。俺が出来るだけ早く敵のメス奴隷を失神させて勝つ。そうすれば、ミアンのダメージは少なくて済む・・

アサヒはぐっと拳を握りしめるが、当のミアンは両腕が拘束されていなければ自慰を始めてしまいそうなほど蕩けた顔をしていた。

★　★　★　★

トーナメント会場にメス奴隷と調教師が出てきた。いよいよ初戦が開始される。アゲハとカレンは処刑台の枠組みの中に入り、調教師が入れ替わってメス奴隷の拘束を始める。どちらのメス奴隷も開脚逆さ吊りにされていた。

「定番だな。一回戦の調教具は鞭と蝋燭と針だ。開脚逆さ吊りでマンコを剥き出しにすれば、どの調教具でも責めやすい」

「手っ取り早いのはマンコ針山にして鞭を叩き込めば良いんじゃないか」

「それだけじゃ、このトーナメントに出場するようなメス奴隷なら耐えるだろう。何か工夫をしないとな」

「私は、マンコの穴の中に蝋燭垂らして欲しいわね」

「それくらいじゃ失神しないわよ。尿道と肛門にも蝋燭垂らして入れてあげなくちゃ」

「まあいいじゃないか、俺たちは楽しければ良いんだ。あのアゲハというメス奴隷、なかなかいい体じゃないか。勝つにしろ敗けるにしろ、俺はアゲハが泣き叫ぶ姿が観られれば満足だね」

「カレンだって負けていないぞ。なかなか絞り込まれたナイスバディじゃないか。俺はカレン推しだな」

観客たちが好き勝手言っているうちに最終チェックが終わり、沙也加が右手を上げた。

「それでは、メス奴隷アゲハ対カレン、始めっ」

沙也加が右手を振り下ろすと同時に、アゲハの股間、性器に凶悪な一本鞭が振り下ろされた。対してカレンのクリトリスには針が突き立てられていた。

「「あびゃあぁぁぁーーーーっ!!」」

二匹のメス奴隷が絶叫する。観客席からは大歓声が沸き起こる。ついに始まったメス奴隷処刑トーナメントに観客たちのボルテージも最高潮に達していた。控え室のモニターで対戦の様子を観ている葉月も満足そうに頷いている。

「どうです、琴音、これを観て」

「どうも何も養母(おかあ)さま、こんな緩(ぬる)い責めでは欠伸が出てしまいますよ。私は、ずっと養母(おかあ)さまの責めを受けてきたのですよ」

琴音は、こんな対戦観るまでもないと思っていた。この控え室の中でも真剣に観戦している者もいれば明らかに興味ないという態度の

者もいた。琴音は、しずくに目を向けると、しずくは麗華と共に真剣にモニターを観ていた。

・・しずくちゃんは同じＡブロックのメス奴隷だからね。興味あるのかもね・・

琴音は、しずくがあまりに真剣にモニターを観ているので自分も観ていようかと目を向けていた。

「おびゃあぁぁぁーーーっ！！」

柔らかい性器に激しい一本鞭の連打を受け、アゲハは絶叫し続けている。アゲハの性器から血が飛び散り始めていた。おそらく膣前庭が裂けているのだろう。このままではアゲハの小陰唇も千切れていくのは時間の問題と思われた。

「これはもう勝負ありましたね。あの調教師は作戦を誤りました」

麗華が言うと葉月もその通りだと頷いていた。

「しずくちゃん、分かりますか」

麗華に訊かれしずくは素直に答えていた。

「カレンの勝ちじゃないの。だってマンコ針山にされてるけど、あれじゃ失神しないよね。痛いけど……。アゲハの方はもうマンコ、ぼろぼろにされてる。多分このままいくとビラビラも千切れて、クリトリスも無事じゃ済まないよ。もういつ失神してもおかしくないよ」

「しずくちゃん、残念。勝つのはアゲハですよ。これはメス奴隷の力もありますが、調教師の力が大きいですね。カレンを責めているアゲハ側の調教師は、おそらくカレンを一発で仕留める気です。その為に入念に場所を選んで針を刺しています。マンコの中でも敏感な部分、そこだけに集中して冷静に針をさしています。確かにこの短く細い針ではロングニードルと違い、これだけで意識を刈り取るのは無理でしょう。これだけではね。アゲハを責めている調教師は焦り過ぎています。確かにあの3つの調教具の中では鞭が一番破壊力があります。もし、アゲハを責めているのがここにいる豪徳寺だったらアゲハはもう敗けているでしょう。でも、ほらご覧なさい。カレンを仕留める下準備が終わった様ですよ」

麗華の言葉でしずくは目を丸くしてモニターを凝視していた。カレンを責めていた調教師は、針山にしたカレンの性器から離れると、ついに一本鞭を手に取った。そして、アゲハの方に目を向ける。アゲハの性器から血が飛び散り、アゲハが絶叫している姿は変わらないが、それを見た調教師は安堵の笑みを浮かべカレンの針山になった性器に慎重に狙いをつけた。

ヒュンッ！

鞭の鋭い風切り音が響きカレンの性器に一本鞭が叩き込まれる。

ピシイィィッ！

「あっびゃあぁぁぁぁーーーーっ！！」

プッシャァァーーーーッ

ぶりぶりぶりいぃぃぃーーーっ

カレンは絶叫し、尿と大便を漏らしていた。そして、計算されて打ち込まれていた無数の針が鞭で打たれた衝撃で、カレンの膣前庭は裂け、小陰唇は引き千切れ、クリトリスも根元から千切れてしまっていた。そして、カレンは白眼を剥き口から泡を吹いて無様に失神してしまっていた。

「ビクトリー、アゲハ」

沙也加の声が響き、対戦は終了した。アゲハを責めていた調教師は失神してしまったカレンを見て、顔を覆って涙を流している。

「あのメス奴隷のカレンは可哀想ですね。自分の調教師が馬鹿な為に敗けたようなものです。メス奴隷同士の力は拮抗していましたのに哀れですね」

葉月はわざと聞こえるように大きな声で喋っていた。それを聞いた控え室にいた調教師たちは気を引き締める。自分たちの力不足で敗北もあり得ると……。

とにかく、これでトーナメントの一戦目が終了した。この対戦を観て、残った者たちはこのトーナメント、ただの力押しでは勝ち残れないと実感していた。

33、初戦　アゲハVSカレン（後書き）

採卵後は通常一日の安静が必要ですが、物語の都合上、大目に見て下さい。

34、敗者

34、敗者

開脚逆さ吊りにされていたアゲハの体が、拘束が解かれ下ろされていく。対してカレンは拘束が解かれる事はなく、そのまま処刑されていく。観客席の盛り上がりも最高潮に達していた。贔屓（ひいき）のメス奴隷を応援する楽しみもあるが、やはり観客の楽しみは敗者が容赦なく処刑され絶命させられるところにある。楽しみの少なかった昔では、処刑は一大イベントで庶民の娯楽の一つだった。それは、娯楽が増えすぎた現代でも一番の刺激的なイベントなのだろう。観客たちの眼は血走り、対戦以上に盛り上がり、敗者のカレンに注目が集まっている。カレンは自分が敗けた事にはショックだったが、自分一人にこれだけの人間が注目している現状に興奮していた。日陰に住んでいるメス奴隷にとって、まさに最後の最高の晴れ舞台だと言えた。

敗れたメス奴隷を処刑する執行人は、そのまま勝った調教師が執行しても構わないし、豪徳寺家のスタッフに任せても問題ないというルールだった。この対戦に勝利したアゲハの調教師は、自分の手の内を晒すのを避けるため当初豪徳寺家のスタッフに処刑を依頼する考えだったが、自分が勝利した高揚感と、これだけの観客に注目されている事実で、興奮し自分を見失いカレンを処刑する気になっていた。

逆さに吊られたまま涙を流し嗚咽するカレンの胸に心電図のセンサーが装着されていき、そのモニター画面が大型のスクリーンに映し出された。これで観客はカレンが完全に絶命したとの確認が出来る

のである。
そして、メス奴隷処刑トーナメントの最初の敗者カレンの処刑が執行される。控え室のモニターでも全員が釘付けになっていた。それまで興味無さげにしていた面々も、処刑開始となると目の色が変わっていた。

・・あのメス奴隷、マンコ壊されりゅ♡どんな風に壊さりぇりゅの♡・・

それまでまったく興味を示さなかったミアンも食い入るようにモニター画面を見つめている。敗者が処刑される。これが、ただのトーナメントではないメス奴隷処刑トーナメントの醍醐味であるので、大いに盛り上がるのは当然であった。

「マンコ破壊処刑具〝三連ドリル〟」

調教師は、どこぞの猫型ロボットのように自分の道具箱から処刑具を取り出し観客に披露し悦に浸っていた。しかし、それは控え室でモニターを観ている、これから戦うであろう敵にも披露している事になるが、舞い上がっている調教師は得意満面で三連ドリルのスイッチを入れている。

・・なるほど、オリジナルの処刑具か。これは参考になるね。俺も作ってみようかな。レインやミストの真似すれば出来るかも・・

アサヒは調教師が取り出した処刑具を詳細に観察する。その処刑具は太さの違うドリルが縦に三つ並んでいる。察するに、そのドリルは尿道、膣、肛門、メスの三穴を壊す為のドリルだろう。同時にメスの三穴をお手軽に破壊する。やられるメスはたまったものではないが、やる方は一つずつ壊す手間が省けて楽なのだろうか。

・・俺なら一つずつじっくり壊したいけどな。でもまあ、時間がない急ぐ時にはいいかも・・

アサヒは、これなら錬金術など使わずに作成出来るなと考えモニターを見つめていた。

調教師はカレンの三つの穴に正確にドリルを突き入れる為、カレンの性器をくぱぁと開きテープで固定していた。カレンの尿道口、膣口の位置が、はっきりと確認出来る。そこへ高速で回転するドリルの先端が近づいていく。

「だじげでえぇぇぇっ、おねがいじまぢゅうぅぅぅっ！」

実際に処刑が間近に迫ったカレンが恐怖で涙を流して必死に命乞いするが、当然許される事などない。観客はみな、これを観に来ているのだ。三連ドリルがカレンの穴に微かに触れる。

チュイィィィーン

「んびゃあぁぁぁーーーーっ！」

カレンが叫び、性器から血と肉片が飛び散った。観客が息を呑んで見つめた次の瞬間、調教師は三連ドリルをカレンの三つの穴にグイッと強く押し込んだ。

ギュワァァーーーーッ

「あっ、びゃあぁぁぁぁーーーーっ！！」

カレンが絶叫し、カレンの股間から血と肉片がビチビチと激しく飛び散る。

「うびゃあぁぁぁぁーーーーっ！！！」

絶叫し続けるカレンの三つの穴を拡大するため調教師はドリルをグリグリと抉るように動かし、カレンの性器の肉を削っていく。ドリルは根元まで入れられてしまった為、カレンの膀胱や子宮、直腸もズタズタに破壊されていた。カレンは体をびくびくと痙攣させ、もう虫の息になっている。ドリルで削られている性器からは夥しい量の血が溢れだし、逆さに吊られているカレンの体を赤く染め、地面に血貯まりを作っていた。

「あぼぼぼぼぼっっっ」

獣のように絶叫していたカレンの声が小さくなり弱々しくなっていく。

「もうあのメス奴隷死にそうですね」

「メス奴隷が死ぬ前に、もう少し何かやって欲しいね」

「そうそう、このままじゃ私たち欲求不満だよね。葉月様なら私たちを楽しませる為に工夫してくれるのに」

「葉月様と比べたら可哀想ですよ。でも、ドリルだけじゃなくて、違う物も使って欲しいね」

観客席では好き勝手言っているが、それが聞こえたのか調教師は、三連ドリルでカレンの性器を破壊するのを中止し、一人では持てな

い巨大な二人曳きのノコギリを出してきた。これはノコギリの両端を二人で持って対象物を切断する道具であり、丸太など大きな物を人力で切断する際に使用される。調教師はスタッフに声をかけ、ノコギリの反対側を持って貰うと、カレンの股間の割れ目にノコギリの刃を当てた。それを見た観客の目の色がまた変わる。

「これこれ、やっぱりノコギリ曳きは良いねえ。メス奴隷のマンコから切断するの最高だよ」

「私も大好き。お臍の辺りまでは切断して欲しいなぁ」

「一人で人力で切断だと恥骨や腰骨を切断するのが苦労するけど、二人曳きなら楽にいけそうかな。ノコギリも中世の処刑用と比べて遜色ないし」

観客たちは無惨に処刑されていくカレンを楽しそうに見ながら歓談していた。カレンの股間ではノコギリが交互に曳かれ、カレンの性器が切断されていく。調教師とスタッフは息を合わせ、ノコギリをスムーズに曳いていき、カレンの性器は真っ二つに切断され、ノコギリの刃はもう恥丘を切断し終わり臍まで達していた。カレンはもうビクンビクンと体を大きく痙攣させ最後の時を迎えようとしているように見えた。

「もう、許してやってくれぇっ」

突然、カレンの調教師がノコギリを曳いているスタッフに飛びかかっていた。どうやら、自分のメス奴隷であるカレンの無惨な姿に耐えられなくなったようだ。しかし、その調教師は近藤や他のスタッフにすぐに取り押さえられる。

「葉月様主催のこのトーナメントで、楽しんでいるお客様に水を差した罪は大きいですよ」

沙也加の指示で調教師は全裸にされ、後ろ手に縛られていた。そして、残酷な笑みを浮かべた沙也加はコードの付いた筒のような物を観客に見せていた。

「皆さま、お楽しみのところ水を差し申し訳ありません。この不届き者は今すぐ処分しますので御容赦下さい。この筒はオスの陰茎に被せて使用します。メス用はマンコの穴を破壊する為外側に針が飛び出すのですが、オス用は筒の内側に無数の針が飛び出しチンポをズタズタにします。実際にやってみますね」

沙也加は調教師の陰茎に強力な媚薬を塗布し、強制的に勃起されると筒を被せていく。

「まったく、神楽坂さんも抜け目ないわね。自分の開発した商品をここぞとばかりに宣伝しているわ」

控え室でモニターを見ながら葉月が呆れたように呟いていたが、近くのスタッフを呼びつけると指示を出していた。

「神楽坂さんが開発したオス用の商品。在庫あるだけ全部売店に並べてあげなさい。これを見て購入するお客様が増えると思いますから」

それを聞いていたしずくが驚いたように言う。

「オス用の物も販売しているんですか。私はメス穴壊す物しかないと思ってました」

「もちろんありますよ。もっとも開発するのはほとんど神楽坂さんですけどね。今、神楽坂さんが使おうとしているのは、オスのチンポを無数の針で串刺しにして、通電して焼く拷問具ですね。これをやられたらオスのチンポはもう使い物にならないでしょう。他にも金玉潰しや性器ギロチンなんかもありますよ」

葉月の言葉にしずくは、変態マゾの世界は自分が考えるより遥かに広いんだと驚愕していた。そうしているうちに、沙也加は調教師の性器を針で串刺しにして、ギロチンで切断してしまっていた。そして、二つの睾丸を万力のような睾丸潰し機で潰す。

グチャッ

調教師は睾丸を潰されたショックで、あっさりと絶命していた。そして、時を同じくして性器からノコギリで曳かれ切断されていたカレンの心電図モニターもフラットになる。

こうして、トーナメント最初の敗者となったカレンは無惨に処刑され絶命した。しかし、これで終わりではない。沙也加とスタッフは急いで現場を片付け、次の対戦の準備をする。Aブロックだけでも一回戦は6戦あるので、とにかく巻いていかなければならなかった。

「次の対戦は「桃尻モモコ」対「雌玩具リエ」です。すぐ開始になりますので、席についてお待ち下さい」

沙也加の声が響き、売店に行っていたお客も慌てて席に戻っていた。佐瀬は、ようやく出番かと指をボキボキ鳴らし、普段会社の者には絶対に見せない凶悪な顔で笑っていた。

35、理恵　モモコVSリエ

35、理恵

Aブロック一回戦の二戦目のメス奴隷たちが調教師に引かれて歩いてきた。モモコが首輪の鎖に引かれて登場するとわーっと大きな歓声が上がる。ブラウンの髪をツインテールで揺らし、童顔だが形よく膨らんだ胸に小振りの引き締まったヒップ、それに続くすらりと伸びた脚。メス奴隷ではなく性玩具と言われた方が納得出来る容姿だった。続いて佐瀬に鎖を引かれ理恵が入場してきた。歓声はほとんどなかったが、控え室ではしずくや琴音が理恵の姿を凝視していたのは勿論、一人の調教師の男が驚きで目を見開いていた。

・・なんで加納さんがメス奴隷に……。トーナメント表の雌玩具リエって加納さんの事だったのか。勝ち進んでいけば準決勝で対戦するようになるな・・

男は早くも自分たちが準決勝まで行けると考えていた。

・・豪徳寺さんは俺らをAシードにしてくれた。多分、ゆかりの母親だからだろう。おかげで、一回戦はパス出来た。一回戦から勝ち上がったメス奴隷に比べて、無傷で対戦する事が出来る。これは大きなアドバンテージだ。そして、しずくと加納さんが潰しあってくれれば、アヤコにも勝ち目はあるかも知れないぞ・・

元々、男は文子を始末するため、このトーナメントに内緒で申し込

んでいたのだが、優勝賞金が獲れるなら、それに越した事はない。それに文子が優勝できたとして、無事である保証はないのだ。

・・優勝した後に死んでくれれば申し分ない・・

男は長年連れ添った文子に対して、何の感情も湧かなかった。

★　★　★　★

対戦会場では、どよめきが起きていた。それは、リエが開脚逆さ吊りにされているのに対して、モモコは立ったまま〝人〟の字型に拘束されていたからだ。

「あれじゃ、鞭でマンコ打つのも蝋燭垂らすのも針を刺すのも、やりにくくないか」

「なに考えているんだろう、あの調教師。勝つ気があるの」

観客の疑問も尤もで、メス奴隷の性器を責めるには、不利な拘束であるといえる。沙也加も、それを見て首を傾げていた。

・・佐瀬の奴、何を考えている。加納理恵がメス奴隷として優れていようと、こんな真剣勝負の場でふざけていると不覚をとるぞ・・

沙也加にしても、佐瀬の考えが分からなかった。が、控え室でモニターを見ている葉月と麗華は、ほうっという顔をしていた。

・・マンコを下向きに拘束する理由は一つだ。あの調教師、それを

やるつもりか・・

葉月と麗華は、面白いと微笑んでいた。

「それでは、両メス奴隷の拘束が完了しましたので一回戦の第二戦を開始します。メス奴隷モモコ対リエ、開始っ」

沙也加の掛け声で、調教師は一斉に動き出す。どちらの調教師も針を手にしてメス奴隷の性器に突き立てていた。

「「ひぐうぅぅぅーーーっ」」

まず、クリトリスに集中的に針を刺され二人のメス奴隷は同じ様に声を上げ苦しんでいる。この時点ではまだ優劣がつけがたい。

「麗華さん、理恵さん大丈夫かなぁ。勝てるよね」

しずくが心配顔で麗華に尋ねると、麗華ではなく理津子が答えていた。

・・大丈夫ですよ、しずくちゃん。私が保証します、勝つのはリエです。ただ、リエの側のあの調教師、自分の事しか考えていないようですね。まあ、それだけ自分のメス奴隷リエを信頼しているのかも知れませんが……・・

そのリエの股間の割れ目、性器はどんどん針山にされていく。クリトリスは、もう針を刺す場所がないほどの針を刺され、小陰唇は広げられ針で閉じないように留められている。そして、剥き出しになった膣前庭にもびっしりと針が突き立てられていた。勿論、会陰や肛門にも針が刺されている。まさしく、リエの股間は針山になって

いた。

一方、モモコを攻めている佐瀬は集中して針を刺しているようだった。佐瀬の邪魔にならないようスタッフがハンディカメラでローアングルからモモコの股間を狙うと、佐瀬はモモコの尿道に針を突き刺しているのが分かった。観客もカメラの映像が大型モニターに映し出され、佐瀬の行動が分かったが、その意図までは分からなかった。モモコの尿道はびっしりと針を刺され、まるでプラグを挿入されたように塞がれている。佐瀬はその後、モモコの小陰唇をくぱぁと開き、解剖されたカエルの腹のようにそのまま針で留めていた。しかし、その時リエの性器を針山にした相手の調教師は、鞭を手にしていた。第一戦でカレンの意識を刈り取った、針山にした性器への鞭の打撃を実行するつもりのようだった。だが、佐瀬はその相手の調教師の姿を見ても慌てずにゆっくりとモモコの性器に針を刺している。

・・あの佐瀬という調教師、エグい事を考えていますね。私は、あのリエというメス奴隷をよく知りませんが、これはリエが耐えられてこそ成立する責めです。豪徳寺、あなたには分かるでしょう。あのリエは耐えられますかね・・

「ふん、橘ともあろう者が分からない筈がなかろう。勿論、佐瀬は理恵が耐えると確信している。あの、今はメス奴隷に堕ちた加納理恵という女は、そこの渡邉しずくが幼い頃、暴漢から守るためマンコや顔を燃やされても耐えた女だぞ。今回、出場したからには、渡邉しずくと戦うのが目的なのだろう。渡邊しずくの成長を、その身で実感したいのだろうな。その目的を全うする為には耐え抜くだろうよ」

葉月の言葉でしずくも思い出していた。あの時の理恵の姿を……。

・・そうだ、理恵さんは敗けない。ここで勝って、その後もう一回勝てば、私と当たる。それを目標に耐えているんだ。私も次、勝って理恵さんの期待に応えてみせるよ・・

しずくが見つめるなか理恵の針山にされた性器に凶悪な一本鞭が振り下ろされる。

ヒュンッ

鋭い風切り音の後、理恵の性器に鞭が叩き込まれた。

バシイィィィッ

「あびゃあぁぁぁぁーーーっ！！」

プッシャァァーーーッ

ぶり、ぶり、ぶりぃぃぃっ

カレン同様、理恵も大小便を漏らし絶叫していた。だが、理恵は身体を海老のように反らしながらも歯を食い縛り、その激痛に耐えていた。そして、佐瀬はそんな理恵を見向きもせず、ようやく次の動きに入る。佐瀬が手にしたのは鞭ではなく蝋燭。

「なに悠長な事やってんだ、あの調教師。いくら自分のメス奴隷が一発耐えたからといって、もう失神するのは時間の問題だぞ」

観客たちは意味がわからず騒いでいるが、麗華はしずくに注意していた。

「しずくちゃん、よく見ておいてね。お互いにあと一つ勝てば、対戦する事になる。あなたは、これに耐えなくてはならないの」

麗華も、もう理恵が勝つ前提で話している。しずくはこれからモモコが何をされるのだろうと緊張していた。すると、理恵の性器に2発目の鞭が叩き込まれた。

「あびゃあぁぁぁぁーーーっ！！！」

理恵は、もう自分の尻に頭が付きそうなほど反り返り絶叫している。そして、佐瀬は蝋燭に火を点けると、なんと蝋を垂らすのではなくモモコの性器を火で炙り焼き始めた。

「マンコ、燃やしてるぞ。良いのか、あんな使い方して……」

「マンコ、燃やすってヤバくない」

観客たちが息を呑むが、沙也加が冷静にアナウンスする。

「用意された調教具しか使用しておりませんので、ルール違反ではありません。蝋燭の使い方も色々あるという事です」

公式に認められたので観客も盛り上がり始めた。鞭で理恵が失神するのが先か、モモコが性器を焼かれて失神するのが先か、今度はメス奴隷同士の戦いになっていった。

「あづぅぅぅっ、むり、むり、むりぃぃぃっ！」

佐瀬は二本の蝋燭をモモコの性器の下に吊るし、そのまま性器を焼き続けるようにすると、両手に一本ずつ蝋燭を持ち、モモコの乳首

も焼き出した。

「あびゃあぁぁぁぁーーーっ、だじげでえぇぇぇっ！！」

乳首を焼かれながらモモコは性器も焼かれていく。尿を漏らせば蝋燭の火を消せるだろうが、モモコの尿道は大量の針で塞がれてしまっている。その上、その針が熱せられモモコは体の中からも焼かれていった。辺りにモモコの肉が焼ける匂いが拡がっていき、モモコはぶりぶりと大便を漏らし始めていた。

36、決着

36、決着

理恵は針山にされた性器に鞭を叩き込まれ絶叫していた。もう膣前庭は裂け理恵の性器は血塗れになっていた。理恵は海老のように反り返り、大小便を漏らして絶叫している。理恵の顔は涙と鼻水と涎で汚れ、口からはブクブクと泡を吹き始めていたｔ。

「あびゃあぁぁぁぁーーーっ！！」

絶叫し続ける理恵の声も枯れてきたが、モモコももう限界に近付いていた。

「ゆるじでっ、もうだじげでえぇぇぇっ、むり、むり、むりいぃぃぃっ、あぶうぅぅぅーーーっ！！」

絶叫するモモコの乳首はもう黒い炭になってしまっている。モモコの乳首は焼き終えた佐瀬は、今度はモモコの形のよい胸の膨らみを焼き始めた。その間もモモコは性器を焼かれ続け、刺された針を炙られ中からも焼かれているクリトリスは、乳首同様炭になってしまっている。ここまでされて、まだ失神しないモモコも、メス奴隷としてかなりのレベルに達しているものと思われた。そんなモモコに対して佐瀬は、モモコの股間の蝋燭の位置をずらし、今度は会陰と肛門にも火が当たるようにする。

「あぶうぅぅーーーっ、あづいいいいーーーーっ！！」

新たに会陰や肛門を蝋燭の火で炙られ、じりじりと焼かれていくモモコは絶叫する。

・・何て事考えるんだ、あの調教師。しかも、こっちのメス奴隷、針山にされたマンコを何回も鞭で打たれているのに失神しねえ。どういう神経してやがるんだ・・

理恵を責めている調教師は焦っていた。前の対戦を見て、先にメス奴隷の性器を針山にして鞭で打った方が勝てると単純に考えていたため、まさかこの責めに耐えるメス奴隷がいるなど想像もしていなかった。

・・不味い、このままじゃ敗ける。もうモモコは限界だ。それほど長くはもたない・・

調教師は連続で鞭を打ち込もうとするが、一本鞭というのは本来熟練の業を要する。焦れば焦るほど狙いは外れ、理恵の性器に当たらなくなってきた。だが、モモコは着実にメスの急所を焼かれていく。

「もお、いやぢゃあぁぁぁっ、ぐるじいぃぃっ、ごろじでぐだぢゃいいいいっ！！」

「殺したらルール違反になるからな。今は殺せないんだよ、モモコちゃん。勝負ついたら目一杯痛め付けて殺してあげるからね。頑張るんだよ、モモコちゃん」

佐瀬はモモコの耳元で残酷に呟いていた。もうモモコの二つの胸の膨らみも焼け爛れている。モモコの股間もすっかり焼かれ炭と化し

ていた。

「あうっ」

しずくが小さく声を上げ、麗華がどうしたのかとしずくを見ると、しずくは座っている床が濡れるほどグショグショに性器を濡らしてしまっていた。

・・なるほど、さすがに渡邉ゆかりの妹だけの事はある。マンコを焼かれるメス奴隷の姿を見て、自分と重ねて興奮しているのですね。ある意味、頼もしいといえますね・・

麗華は、しずくの異常性を改めて認識していたが、モモコが性器を焼かれ苦しむ姿を見て興奮しているのは、しずくだけではなかった。

「えひっ♡マンコ、燃やされてりゅ♡私のマンコも焼いてくらちゃい♡マンコの中も焼いてぇぇっ♡赤ちゃんの部屋も壊してくらちゃい♡」

ミアンはもう洪水のように汁を垂らしていた。花の薫りが周囲に漂う。アサヒは慌ててミアンに防臭吸湿効果のあるぱんつを穿かせ、頭にも同様のぱんつを被せていた。

・・このメス奴隷、俺の手には負えないかも・・

アサヒは発情したミアンを見て、ため息をついていた。

★　★　★　★

理恵は、大きく身体を反らしたまま絶叫しているが、涙を溢れさせるその瞳にはまだしっかりと意思の光が宿っていた。

・・くそっ、これじゃこのまま鞭で打っていても敗ける。俺も蝋燭でこのメス奴隷を焼くか、でも今からではもう間に合わない。先にモモコが堕ちる。このメス奴隷、おそらくマンコを徹底的に責められてきたのだろう。マンコを責めても駄目だったのだ。針ならまだ間に合うか・・

理恵を責めていた調教師は、鞭を振るのを止め急いで針を手にすると、理恵の乳首や胸の膨らみに針を刺していく。

「うぎいいいいーーーーっ！！」

理恵が苦しそうに声を上げ、調教師は確信する。

・・こっちだ。このメス奴隷の意識を刈り取るにはマンコより、こっちだったのだ・・

調教師は理恵の乳首に何本も縦に針を深く突き刺し、胸の膨らみにもどんどん針を深く刺していく。理恵の二つの胸の膨らみは見るも無惨な姿に変わっていく。それまで、調教師の責めに耐えていた理恵だったが、胸を責められ明らかに今までとは違う反応を示していた。体はぶるぶると激しく痙攣を始め、汗が大量に吹き出し、もう獣のように絶叫している。

・・やはりな。このメス奴隷、マンコに特化していたんだ。くそっ、もっと早く気付けば楽に勝てたものを……。まあ、いい。こいつの胸を針山にして鞭を叩き込んでやる。今度は一撃で仕留めてやるよ・

・

理恵の瞳は先程までの強い光も失くなり、哀れにも許しを請う瞳に変わってしまっていた。

・・くくっ、良い顔だ。やっとその表情を見れたぜ。どうだ、怖いだろう。これから、お前の意識を刈り取る。自分でも、もう分かっているだろう。次に針山にされた胸を鞭で打たれれば、もう終わりだと……。いいな、その瞳。興奮するぜ。成す術なく責められ意識を刈られる。分かっているのに、どうする事も出来ないお前の恐怖が伝わってくる。そして、敗けたお前は残酷に処刑され絶命するのだ・・

調教師は大量の針で埋め尽くした理恵の二つの胸の膨らみを見て、勝利を確信した。何より、もう理恵の心が折れてしまっている。先程までの断固とした強い意思を漲らせていた理恵の顔は、今はもうただ恐怖に怯え涙と鼻水を流し号泣するだけのメスの顔になっていた。

・・さあ、最後の一撃だ・・

調教師は鞭を構えると理恵の胸に狙いをつけた。理恵はイヤイヤもう許してというように頭を振り、必死に止めてくれと訴えるが、調教師はその哀れな理恵の震える姿を見て興奮し、自分のモノを硬く大きく勃起させていた。

・・お前の事は憶えておいてやるよ、メス奴隷。これで、サヨナラだ・・

調教師は一本鞭を理恵の胸目掛けて思い切り振る。

ヒュンッ

今までにない鋭い風切り音のあと、調教師の渾身の鞭の一撃が理恵の胸に炸裂する。

ビシイィィィィッ！！

「あびゃあぁぁぁぁーーーっ！！！！！」

理恵は一際高い声で絶叫すると、まるで全身から力が失くなったように、ぐったりと逆さに吊られぶらぶらと揺れていた。理恵の瞳はくるりと白眼を剥き、口からはぶくぶくと泡を吹き、哀れにも理恵の意識は刈り取られ、理恵は無様に失神してしまっていた……。

37、狂気

37、狂気

理恵は針山にされた胸を鞭で打たれ無様に失神し、白眼を剥き泡を吹いてぶらぶらと揺れていた。理恵を失神させた調教師は、逆さに吊られ、だらーんと動かない理恵の姿を見て、会心の笑みを浮かべていた。そして、沙也加の右腕が上がる。

「それまでっ」

調教師は、勝ったと思っていた。その時までは……。

「ビクトリー、リエ」

「なにっ？」

調教師は耳を疑っていた。しばらく理解出来なかった。思考が追い付いてこない。そして、慌てて自分のメス奴隷モモコの姿を見る。モモコは、ガックリと頭を垂れ失神していた。それぞれのメス奴隷の失神の判定はスタッフが随時チェックしている。そして、失神したと認められた場合は手持ちの送信機のボタンを押す。今回、それで失神判定されたのが、モモコの方が僅かに早かったのだ。

「くくくっ、自分のメス奴隷の状態も把握出来ていないとは調教師として一流とは言えんな」

佐瀬が嘲笑うように無情に言い放つ。調教師は言葉がなかった。途中まではモモコの状態もチェックしていた。しかし、リエの弱点を探るうちに、そちらに意識が集中してしまっていた。調教師はガックリと肩を落とし自分の不覚を悔いていた。

「あの佐瀬という調教師は随分エグい事をしますね。わざと自分のメス奴隷を追い詰めるなど私には考えられませんね。自分のメス奴隷を大事に扱うなどという気持ちは微塵もないのでしょう」

麗華が吐き捨てるように言うが、葉月は首を振る。

「違うな、香坂の娘。あれはわざとではない。最初からそのつもりだったのだ。あの男は間違いなく異常者だ。あの佐瀬という男は、自分のメス奴隷リエの哀れに命乞いするような惨めなメスの姿を見たかったのだよ。メスのそんな姿を見て興奮する。奴はそんな男だ。見ろ、奴のズボンを。染みが出来ているだろう。おそらくリエの、メスに戻ってしまい恐怖に震える哀れな姿を見て射精してしまったのだろうな。全く異常者だよ。だがな、それだけではない。モモコというメス奴隷は子宮を責められた経験はあまりなかったのだろうな。それを事前に調べておいた佐瀬は最後に焼いておいた真っ赤に焼けた針をモモコの子宮に突き刺した。その一撃でモモコは意識を断たれたのだ。いつでもモモコの意識を刈り取る準備が出来ていたのに、リエが気絶する寸前まで待っているところが異常者たる所以だな。このままいけば、佐瀬とぶつかるぞ。奴の事だ渡邉しずくの弱点も当然調べているだろう。勝算はあるのか、香坂の娘？」

「豪徳寺さんこそ、私の事をみくびらないで頂きたいですね。あの男が何をしようとしても、その前に私が、申し訳ありませんがリエの意識を断ち切ります。それだけの事ですよ」

・・なるほど……・・

葉月は麗華の顔を見る。橘理津子の片腕と言われる麗華の瞳は、真っ直ぐに見つめる物を突き刺す様な鋭さを秘めていた。葉月も麗華もこの時は知る由もなかったが、遠い未来で二人は、文月や皐月となった葉月と、ペインとして再生した麗華で戦う運命にある。（スク水少女戦士ウテルス、参照）今ここで二人並んで座っているというのはまさに呉越同舟といえた。

★　★　★　★

そして、敗北したモモコの処刑が執行される。失神したモモコはスタッフによって覚醒させられていた。モモコの調教師は、自分は見たくないと既に退場してしまっている。そして、モモコの胸に心電図センサーが装着され処刑の準備が整う。モモコを処刑するのは当然ながら佐瀬だ。

「お待たせ、モモコちゃん。これから、モモコちゃんの望み通り殺してあげるからね。良かったね、モモコちゃん」

「ううっ、ゆるじでぐだぢゃい。だじげでぇぇっ」

「おやおや、モモコちゃん。この大勢のお客様がそれで納得すると思いますか。お客様はモモコちゃんが処刑されるところを楽しみに観に来ているんですよ。これからが盛り上がるとこではないですか。ふふっ、泣いちゃって可愛いな、モモコちゃん。例え生きていても、その体じゃもうメス奴隷としても需要がないだろう。どちらにせよ

処分されるんだ。この大勢の観客の前で処刑された方が嬉しいだろうよ」

佐瀬はモモコの顔面をペロペロと舐め、拳に薄いナックルガードを装着する。グローブより更に薄くなっており、殴った感触がダイレクトに伝わりながら自分の拳は保護するものだった。佐瀬は狂気に満ちた瞳で、人の字型に拘束されているモモコを眺めると、モモコの腹に思い切り拳を射ち込んだ。

「おぼうぅぅぅっ！！」

ゴハァァッ

モモコが胃液を吐き出し悶絶する。

・・良いね、良いねぇ。このメスの柔らかい肉の潰れる感覚、骨の軋む感覚、それにこのメスの恐怖と苦痛がダイレクトに伝わってくる。思う存分苦しんで貰うよ・・

佐瀬は、ぐったりと立ったままのモモコをサンドバッグのように容赦なく殴り付ける。胸、腹、下腹部。特に下腹部は集中的に狙われ、恥骨は砕けるかと思う程激しく殴られ、炭にされた股間にも下から鋭いアッパーが打ち込まれ、更にグチャグチャにされていた。

バキャッ、バキャッ、バキャッ、バキャッ、バキャッ、バキャッ、バキャッ、バキャッ

「おごっ、おごっ、おごっ、おごっ、おごっ、おごっ、おごっ、おごぅぅぅーーっ！」

哀れだった。逃げる事も防ぐ事も出来ないモモコの身体を佐瀬は拳で無慈悲に殴り続ける。まさに狂気を宿して人間だ。いくら相手がメス奴隷とはいえ無抵抗の拘束されたメスをここまで非情に殴り続けるなど普通出来ないだろう。しかし、佐瀬は、楽しそうに笑みを浮かべ殴っている。

「あううっぅぅぅーーっ」

モモコは佐瀬に殴られ続け、呻き声を上げているが佐瀬は一切手を抜かない。そして、モモコの髪を掴んで顔を上げると、今度は顔面に思い切り拳をぶち込んだ。

バキャッ

「あぶうぅぅぅーーっ」

苦しげな声を上げるモモコの顔は鼻が折れ前歯も折れ、鼻血が出て唇も切れ血が流れ出している。しかし、佐瀬は続けてモモコの顔面を殴り続ける。モモコの顔は腫れ上がりボコボコにされていく。可愛い童顔だったモモコの顔は、二目と見られない変形した醜い顔にさせられていた。

ハァ、ハァ、ハァ、ハァ

さすがに殴り疲れた佐瀬は静まり返ってしまった観客席に気がついた。モモコを見ると、もうただの吊るされた肉袋の様な状態になっているが、心電図モニターを見ると、まだ生きていた。

・・いけねぇ、つい興奮した。観客も楽しませてやらねえと、俺の評判が良くならねえからな。止めは周りが喜ぶ方法でやってやろう、

マンコ破壊だ。メス奴隷のマンコを壊すのが、一番人気だからな・・

佐瀬は、5センチ角の角材を取り出した。その角材には有刺鉄線が巻き付けてあり、所々に錆びた釘が飛び出している。佐瀬は、この角材をモモコの膣にぶち込み、モモコの膣や子宮を破壊するつもりだった。そして、もうほとんど反応のないモモコの膣に角材を当て、無理矢理押し込む。

ぶちっ、ぶちっ、ぶちぃぃぃーーーっ

「あびゃあぁぁぁぁーーーっ!!!」

それまで反応のなかったモモコが、膣に有刺鉄線、釘の突き出た角材を突き射れられ、膣を破壊される激痛で獣のように絶叫する。佐瀬は、その角材をグリグリと回転させ、さらに激しくモモコの膣を破壊する。モモコの膣から激しく血が流れ出し地面に血溜まりを作っていた。モモコの膣を徹底的に完全に破壊した佐瀬は、角材をモモコの膣に突き刺したまま両手持ちの巨大なハンマーを手にして角材の底を打ち、モモコの体内に角材を打ち込んでいく。モモコはハンマーで角材が打ち込まれる度に体を大きく震わせ、口からも血をピュッピュッとハンマーが打ち込まれるタイミングで吹き出している。まだ心電図モニターがフラットにならないのが不思議なほどであった。

・・モモコちゃん、頑張っているね。良いねぇ。いいメス奴隷だ。でも、次で終わりにするからね。もう耐えられない苦痛で止めをさしてあげるよ・・

角材を全てモモコの体内に打ち込んだ佐瀬は、角材に巻き付けてある有刺鉄線にケーブルを取り付け、それを発電機に繋げる。

・・直流より殺傷力の高い交流だ。残念だけど、もう耐えられないよ、モモコちゃん・・

佐瀬は発電機のスイッチを入れる。

ボンッ

モモコの体が一瞬大きく痙攣し、その後はもうピクリとも動く事はなかった。心電図のモニターもフラットになり、モモコが完全に絶命した事が確認された。

こうして、敗者モモコの処刑は終了した。

38、爆破　ミホVSメグ

38、爆破

理恵が勝利し、一回戦の2戦目が終了した。処刑されたメス奴隷の性器はクリトリスや小陰唇などにバラされて希望者にオークション形式で提供されるのであるが、モモコは外性器も乳首も炭にされており、もう原形も留めておらず崩れてしまうので廃棄処分にされていた。その点では、せっかくのメス奴隷の性器を売り物に出来なくしてしまった佐瀬に、観客からも冷たい視線が向けられていた。しかし、沙也加たちは、そんな事には拘っておれずまた急いで会場を整え次の対戦の準備をする。

「あー、俺の一推しのモモコがもう消えちゃったよ。あとはミアンかなぁ。でも、モモコに勝ったリエを応援してやるか」

「僕は、元々リエのファンだからね。リエが処刑されるまでは絶対観にくるよ。あぁ、早くリエが処刑される姿が観たい」

「でも、もう二匹のメス奴隷の処刑が観れてお得ですよね。一匹の処刑観るのにも、なかなか入場券が獲れなくて大変なのに、このトーナメントは何時もより会場も広くしてあって、たくさん処刑も観られるし最高ですよ」

「そうよね、通しの券購入しておけば決勝まで観られるものね。かなり高額だけど、これはある意味破格の金額だわ」

「このペースだと今日中にAブロックの一回戦全て終了するのか疑問だけど、日程が延びても追加料金なしに観戦出来るのが良いですよね」

対戦の間の時間に観客たちは談話しながら寛ぐ者もいるし、売店に行って処刑具や拷問具を購入している者も大勢いた。沙也加の目論見通り、オス用の処刑具も飛ぶように売れていた。沙也加はトーナメントの準備の合間に売店に商品を補充しようとしたら、それは既に葉月の指示によって済んでいて、その対応の早さに感謝していた。

・・葉月様は私の事も考えてくれている。このトーナメントの進行を任された以上、ご期待に応えなければ・・

沙也加はてきぱきと準備を済ませ、アナウンスする。

「次の対戦の準備が出来ました。メス奴隷「便女ミホ」対「糞穴メグ」です。それでは、メス奴隷の入場です」

入場してきた二匹のメス奴隷が、拘束されていく。ミホはモモコと同じ様に立ったまま〝人〟の字型に、メグは定番の開脚逆さ吊りにされていた。沙也加が開始の合図を告げると、調教師たちはそれぞれのメス奴隷の性器に針を突き立てる。

「「ひぎぃぃぃーーっ」」

悲鳴の二重唱が響き渡る。ここまではリエとモモコの対戦と全く同じ展開だった。その後、針山にした性器をミホは蝋燭の火で炙られ、メグは鞭で打たれようとしていた。そこもリエとモモコの対戦と全く同じだったが結果が違っていた。

「あづうぅぅーーーっ、マンコやげるうぅぅーーっ！」

絶叫するミホの性器が蝋燭の火で炙られ焼かれていく。ミホの性器が焼ける臭いが辺りに漂う。調教師は佐瀬を真似て、ミホの尿道を針で塞ぎ尿で火を消されないようにきちんと対策していた。かたや開脚逆さ吊りで性器を針山にされたメグは、鞭でその性器を打たれようとしている。調教師は慎重に狙いをつけ、メグの針山になった性器目掛けて鞭を振った。

パシィィィッ！

「おぎゃあぁぁぁぁーーーーっ！！！」

鞭の鋭い音に続き、メグの絶叫が響く。メグは、大きく反り返った後、力なくだらんと吊り下がり動かなくなっていた。スタッフが確認してみるとメグは白眼を剥き、泡を吹いて失神してしまっていた。

「ビクトリー、ミホ」

沙也加はミホの勝利宣言をしながら、あの調教師は何も分かっていないと冷たい瞳で眺めていた。

・・マンコを針山にされ鞭打たれて耐える事など、並のメス奴隷で出来るものではない。あれは、リエだから出来たのに、そんな事も分からないのか。愚かな調教師ですね・・

沙也加は失神したメグを見て、膝をついて傷心の調教師をスタッフに退かせると、メグの処刑の準備を始める。

・・哀れなものですね。マンコ針山にされて、そこを鞭で打たれて失神させられ、そして、そのまま処刑される。まあ、それでもこれだけの人に観られて処刑されるのですから、葉月様に感謝するのですね・・

沙也加は次の対戦の資料を見ていた。沙也加にしてみれば、次の対戦が控えているので手っ取り早くメス奴隷の処刑を済ませて欲しかった。それも片付けが楽なように、あまり血や肉片や内臓を飛び散らせないで処刑して貰えると助かるがと思ったそばから、どうやらメグを処刑しようとしている調教師は爆薬を使うようだった。

・・爆死させる気ですか。処刑する時間は短時間で済みますが、その後の清掃や片付けが大変ですね・・

沙也加はため息をつくとスタッフに声をかけ、すぐに動ける清掃人の数を増やしておくように指示していた。調教師はメグの股間の三つの穴から入念に爆薬を注入している。どうやら、メグの膀胱、子宮、直腸を爆破して破壊するつもりのようだ。メグは自分の最後を感じているのか、逆さに吊られたまま号泣しているが、その泣いているメグの口腔にも問答無用で爆薬が詰められた。爆発のショックで機器が破損するのを防ぐ為、今回は心電図センサーはつけられないが、頭部が爆破されれば絶命したのは一目瞭然であるのでクレームがくる事はないだろうと判断されていた。そして、各爆薬に信管がセットされる。そして、調教師は沙也加にマイクを要求した。

「これから、メス奴隷メグを爆破します。ご覧になっていたように、このメス奴隷の膀胱、子宮、膣、直腸に爆薬を詰めました。このメス奴隷のマンコは爆破され完全に消滅します。そして、マンコを破壊した後に、頭を爆破してこのメス奴隷を完全に絶命させます。爆薬の量は調整してありますが、前の方の席の方は血や肉片が飛んで

いく可能性がありますので気を付けて下さい」

調教師が観客に注意を促すと、スタッフが観客に血や肉片避けの一畳程の大きさのシートを手渡していた。その様子をメグは涙で滲む目で見ていた。調教師のアナウンスで自分がこれから何をされるか理解している。自分の命がもう残り数秒しかないと思うと涙が止まらなかった。そしてシートが行き渡ったのを確認した調教師は、自分もシートの陰に隠れあっさりと起爆ボタンを押す。

バスゥーーンッ！！！

鈍い音が響きメグの下腹部が爆破され一瞬で消滅していた。肉片となったメグの下腹部が血と共に雨のように降り注ぐ。逆さに吊られていたメグは下腹部が消滅した為、吊られている足だけぶらんと残し上半身は地面に落ち、爆破で千切れた腹から内臓を溢しながら芋虫のようにのたうち回っていた。そこで調教師は最後のボタンを押す。

ボンッッッ！！

メグの頭が粉々に爆破され、地面に転がっていたメグの体はもう動かなくなっていた……。

39、不正　クルミVSフミ（前書き）

すいません。今回、メス奴隷の処刑はありません。
オスの処刑になります。
そんなの読みたくないという方や、苦手な方は飛ばして下さい。

39、不正　クルミVSフミ

39、不正

Aブロック一回戦の半分3戦が終了した。つまり、もう3匹のメス奴隷が処刑された事になる。観客にしては、通常の公開処刑ではせいぜい2匹であるのに対して、このトーナメントではそれ以上の処刑を観る事が出来る為、高額な入場料であるにも関わらず即日完売するほどの人気ぶりだった。その進行の大役を任せられた沙也加は、期待通りてきぱきとスタッフにも指示を出しトーナメントを進めていた。

「本日4戦目「蜜壺クルミ」対「地味穴フミ」の対戦です」

沙也加のアナウンスで、調教師に引かれメス奴隷が入場してくる。そして、沙也加の前をメス奴隷が通り過ぎた時に沙也加は違和感を覚えた。普通の黒髪の大人しい顔つきのメス奴隷の瞳だけがギラギラと輝いている。

・・あのメス奴隷の顔……。目付きがおかしい気がしますが、どうしましょう?このまま進めてしまうか、一度止めてチェックしてみますか?・・

沙也加は悩んだ。時間は押している。少しでも早く進めていきたいが、これは豪徳寺葉月主催のイベントである。後で疑惑が出るような事はあってはならない。沙也加は決断した。

「対戦をお待ちの皆様、申し訳ありません。少し不具合の可能性がありますので、確認の為少々お時間を頂きます」

沙也加は、観客席に向かってアナウンスすると、すぐにスタッフに指示を出し入場してきたメス奴隷たちを一旦退場させる。

「あのメス奴隷フミの目付きがおかしいですね。薬物使用の可能性があります。厳重にチェックしなさい。葉月様主催のこのトーナメントで不正などあってはならない。もし不正が発覚した場合はメス奴隷、調教師共に処分します」

沙也加の言葉でスタッフも緊張した顔で走っていく。控え室でモニターを見ていたしずくたちも何事かと画面を見つめていた。

「何があったのでしょうか？」

「さすがにモニターの画面では分からないですが、神楽坂さんが何かに気付いたようですね。入場させたメス奴隷をすぐに退場させたという事は、メス奴隷に何かあったのでしょう」

麗華と葉月が話していると、スタッフの一人が葉月に駆け寄り耳打ちしていた。

「構いませんよ。神楽坂さんの判断に任せますと伝えて下さい」

葉月はスタッフに告げると立ち上がった。控え室にいる調教師とメス奴隷も何だろうと葉月を見つめていた。

「残念なお知らせがあります。皆さんが命を賭けて全力で挑もうと

しているこのトーナメントで不正を行った者が発見されました。薬物を使用して失神しないように興奮状態にしていたようです。ここにいる皆さんの中に、そのような者はいないと思いますが、もし何か薬物を使用してしまったという者は事前に申し出て下さい。不本意ですが、これから行う対戦前には薬物チェックを実施します。そこで発覚した場合は、有無を言わせず処分します。これから、その愚か者の処分を行いますのでご覧になって下さいね」

葉月の言葉に、みんな唖然としていた。不正をするなど、このトーナメントを汚す行為だと調教師は怒り、メス奴隷も、そんな事をして勝っても嬉しくはないと憤っていた。

「信じられないよ。私たちは人ではないメス奴隷だけど、不正をして勝つなんて許せないよ。私は琴音ちゃんと、どちらが本当に頭がおかしい変態マゾか競いたいのに、そんな人がいるなんて」

「本当だよ、しずくちゃん。私もしずくちゃんと戦う為に全てを賭けるのに、そんな奴許せないよ。養母さま、そんな奴処刑しちゃって下さい」

「琴音もしずくちゃんも、そんなに興奮しないで大丈夫ですよ。ほら、ご覧なさい。神楽坂さんも同じ考えのようですから」

モニターの中で全裸にされ目隠しと口枷が装着され拘束された調教師の男とメス奴隷が運ばれてきていた。そして、処刑場に打たれた一本の太い杭に男とメス奴隷は、両手を頭上に上げ縛りつけられ、脚は開かされ固定される。

「メス奴隷の対戦を楽しみにしていた皆様にお詫び申し上げます。この度、薬物使用という不正が発覚しましたので、その調教師とメ

ス奴隷を処分致します。公明正大であるべきトーナメントで、このような事態が起きまして心より謝罪致します。今後このような事が起きぬようチェック体制を厳しく致しますので、よろしくお願い致します。なお、今回対戦予定であったメス奴隷クルミは不戦勝と致します。ご理解よろしくお願いします」

沙也加と並んだスタッフ一同が深く頭を下げ謝罪すると、観客からもその不正を行った者に怒りの声が飛んでいた。

「そんな奴、調教師の風上にも置けんな。きっちり始末して下さい」

「メス奴隷は、そんな調教師に薬射たれていい迷惑だな。ホントに腹立たしい」

「私は葉月様の公明正大なところを信じていますからね。そこにこんな輩が紛れ込むなんて許せませんよ」

「本当だわ。立派に戦って敗れて処刑されたメス奴隷3匹に謝罪して貰いたいわね」

観客の怒りの声が治まらない中、調教師の男の処分が開始された。男は性器を強制的に勃起させられ、その前に針がびっしりと埋め込まれたプジーを持った沙也加が立った。

「この調教師の男の処分は私が行います。この男のチンポを破壊していきます」

沙也加は手にした針付きプジーをローションも塗らずに男の尿道に突き刺す。

「ふごおぉぉぉーーっ」

男が絶叫するが沙也加は、ズブズブと男の尿道にプジーを押し込んでいく。そして、２０センチ近く押し込むと、今度はグリグリとプジーを回転させ男の尿道を完全に破壊する。そして、プジーをずぼっと一気に引き抜くと尿道からピューッと血が噴き出していた。男はもう失神してしまったのか、口枷の隙間から泡を吹き動かなくなっていた。沙也加は次に自身が開発したオス用の性器破壊筒を、男の陰茎にすっぽりと被せると躊躇なくボタンを押した。

ザシュッッ！

「ふがあぁぁぁーーーっ！」

筒の中に飛び出した無数の針で陰茎を串刺しにされ、気絶していた男が覚醒し再び絶叫する。沙也加はそのまま電流のスイッチを入れ、男の性器に通電を始めた。

「ふごごごごごごっ」

男の体がぶるぶる震え苦しんでいる間に沙也加は男の性器に性器ギロチンをセットしていく。それは断頭台であるギロチンのサイズを縮小し、首の代わりに男の陰茎を固定し切断する処刑具であった。沙也加は男の体ぴったりにギロチンを寄せ、筒を抜いた男の性器の根元をギロチンに挟んで固定する。これで、ギロチンの刃を落とせば男の性器は根元から切断される。もちろん切断を容易にするため縮小した刃には錘を追加し、十分な重さに設計してある。

「さあ皆さん、この不正を行った調教師のチンポの最後です」

沙也加は笑いながらギロチンの刃を落とした。

ズバッッ！

「ふがあぁぁぁーーーっ！！」

絶叫する男の性器が根元から切断され、切断された陰茎はポロリと地面に落ちると転がっていき、男の陰茎があった場所からは血が噴き出していた。

「これでタマを潰してもいいですが、この男の罪は重いですからね。串刺しにして晒します」

沙也加の指示で男の股の下に鋭い槍を持ったスタッフが現れ、その切っ先を肛門に突き刺す。

「さあ、自分の罪を悔いて死になさい」

ズボゥッ！

肛門から突き刺された槍は男の胸から突き出ていた。男はしばらく呻き声を上げていたが、やがて静かになっていった。

４０、処分

４０、処分

薬物使用という不正を犯した調教師の男は殺処分された。次にメス奴隷の処分が検討される。沙也加は民意を測るため、観客に端末を渡しメス奴隷の処分について意見を入力するよう頭を下げていた。

「上手いやり方ですね。こちらで一方的に決定してしまっては不満のある方もいるでしょう。自分達の意見で処分が決まるなら、納得してくれるでしょうからね」

麗華がポツリと呟くが、葉月はどちらにしろメス奴隷の末路など決まっているだろうと思っていた。

「メス奴隷には罪はないよな。調教師が悪い訳だし」

「メス奴隷は逆らえないものね。とんでもない調教師で気の毒だわね」

「そうそう、全くその通りね。トーナメントで不正を考えるなんて最低の調教師に当たって不幸だわ」

沙也加の元に集計された結果を見ても、ほぼ全員がメス奴隷に同情的であった。これでメス奴隷を処刑してしまったら、運営側の是非が問われるだろう。事によると葉月の評価が下がってしまうかも知

れない。沙也加は、葉月から判断は任せると伝えられていたので、このメス奴隷フミを解放する事にした。このトーナメントで優勝者以外生き残るなどあり得ないが、この場合は仕方ないだろうと判断したのだ。沙也加の指示でスタッフがフミの目隠しと口枷を外し、拘束も解く。フミはどうしたらいいのか分からず、茫然と立っていた。

「メス奴隷フミ、あなたは解放されます。退場して帰ってもらって結構ですよ」

沙也加の言葉にもフミは戸惑った顔をしていた。

「私は、処刑もして貰えないのですか」

小さな声で呟いたフミは沙也加を見つめる。

「ここにいる大勢の観客があなたには罪はないと認めました。なので特例ですが、このまま帰って貰っていいですよ」

「ならば私も皆さんに伝えたい事があります」

フミは沙也加にマイクを貸してくれないかと懇願する。そこで沙也加がマイクを貸すとフミは大きく息を吸って話し出した。

「メス奴隷のフミです。皆様、ありがとうございました。でも私はメス奴隷として飼われていたので、もう帰る場所はありません。今までは陽の当たらない暗い部屋の中で調教して貰う毎日でした。ですから、このような大きなトーナメントに出場させると言われた時は嬉しかったのです。地味で人を惹きつける事などない私でも、こんな華やかな場所に立てて、大勢の人に観て貰える。これ程の喜び

はありません。ここで生き残って、メス奴隷として生きられるとしても、また暗い陽の当たらない世界に逆戻りでしょう。そして、再びこんなトーナメントに出場出来るという保証はありません。私は理由はどうあれ敗者です。敗者は処刑される。それがこのトーナメントのルールと聞いています。私は処刑されるべき敗者です。私は大勢の皆様の前で処刑されたいのです。どうか、私の我が儘を聞いて貰えませんか。メス奴隷が皆様にお願いするなど許される事ではありませんが、私のマンコを破壊して下さい」

フミの長い話は終わった。観客席は静まり返っている。沙也加もどうしたものかと悩んでいた。すると、まだ客の手元にあった端末からどんどん客の意見が入力されてくる。

「処刑して上げましょう。このメス奴隷は本物ですよ」

「さすがにこのトーナメントに参加するメス奴隷は凄いわ。このメス奴隷の望みを叶えてあげましょうよ」

「このメス奴隷は立派だ。まさかメス奴隷の言葉に心を動かされるとは……」

沙也加の元に、フミの処刑を執行するようにとの言葉が集まってくる。沙也加は、すぐに決断した。観客もメス奴隷自身も処刑を望んでいるのなら、何も躊躇う事はない。沙也加は腕時計をチラリと見る。かなり時間が押している。時間をかけずに処刑するには葉月の開発した処刑台を使用するのが一番だ。沙也加はスタッフに急いで処刑台を運んでくるよう指示した。そして、凶悪な処刑台がすぐに運ばれてくる。その処刑台を見たことのない一部の観客からどよめきが起こる。４基のギロチンとギロチンの刃の代わりにブロック状の錘が揺れる１基のギロチン。その不気味な姿の処刑台が観客の目

を引く。

「ほう、あれを使ってくれるとは嬉しいですね。なかなか良いＰＲになりますよ」

控え室で葉月が嬉しそうに呟いているうちに、沙也加は、スタッフと手分けしてフミの体を大の字にベルトで処刑台の上に拘束していった。

「ひぐっ、ひぐっ、ひぐうっ」

処刑台に拘束され、もう逃げられなくなったフミが泣き出している。無理もない。処刑台に固定されてしまうと、自分の四肢を切断するギロチンの刃が嫌でも目に入り、その恐怖で体が震えてくるのは仕方のない事であった。そして、更に恐怖を煽るのが、フミの頭上にあるギロチンの刃の代わりに吊り下がっているコンクリートブロックであった。これは通常のギロチンが首を切断するのに対して、これは頭を潰す為に巨大なコンクリートブロックが下げられているのである。

「それでは準備が整いましたので、これよりメス奴隷フミの処刑を執行します。今回は、私たち運営のスタッフが執行させて頂きます」

沙也加の言葉と共に鋭いハサミを持った5人のスタッフが、それぞれ所定の位置につく。

「では、まずメス奴隷フミの乳首、クリトリス、小陰唇の切除を行います」

ジャキィィーン

「はびゃあぁぁーーーっ！！」

フミは一斉に乳首、クリトリス、小陰唇を切除され悲鳴を上げる。フミは一瞬にしてメスの大切な部分を失っていた。そして、号泣するフミの頭が口が上を向くように固定される。これは、膣から口まで綺麗に串刺しにする為の作業だった。

「それでは、串刺しと四肢切断を同時に行います。お見逃しないようにお願いします」

沙也加はギロチンの作動スイッチを押す。中程で止まっていたギロチンの刃が最上部まで引き上げられていくと、そこで一旦停止して次の瞬間刃が鋭い光を放ちながら落下した。

ズバァッッーッ！

「あびゃあぁぁぁーーーっ！！」

フミの四肢が同時に切断され、フミは絶叫するが、ワンテンポ遅れてフミの膣に鋭く巨大なニードルが突き刺さる。

「おぼうぅぅーーっ！」

フミの口から血塗れのニードルの先端が飛び出ていた。この時点でフミはもう体を激しく痙攣させ、死へのカウントダウンが始まっていたが、これから最後のギロチンが落とされフミの頭は潰され完全に絶命させられる事になる。そして、沙也加は頭部のギロチンの作動ボタンを押した。コンクリートブロックは最上部まで上がっていき、そこから一気に落下してくる。

グシャアァァッ！

哀れにも首から千切れたフミの頭はそのままコンクリートブロックに押し潰され、もうただの醜い肉片になっていた。

41、接戦　マユミVSシズカ

41、接戦

メス奴隷処刑トーナメント、現時点での勝者はアゲハ、リエ、ミホ、クルミの4匹のメス奴隷だ。残り2戦でAブロックの一回戦が終了する。沙也加は腕時計を確認する。

・・残り2戦、なんとかいけるかも知れないですね・・

沙也加が次の対戦の準備を整えていると、スタッフの一人が小走りにやって来た。

「葉月様が照明設備を準備するそうなので、多少時間が遅れても構わないと神楽坂さんに伝えてくれとの事でした」

・・なるほど、葉月様は照明の事まで考え手配していたのですね。それなら今日中にAブロックの一回戦は終了出来るでしょう。最後の対戦は夜間、照明に照らされての戦いになりますね。なかなか幻想的で観客にとってもいい思い出になるでしょう。素晴らしい演出です。このトーナメントは語り継がれ、伝説になるような予感がしますよ・・

沙也加はマイクを持ち、次の対戦をアナウンスする。

「Aブロック5戦目、「汚穴マユミ」対「菊門シズカ」。それでは

メス奴隷の入場です」

入場してきたマユミとシズカは、それぞれすぐに拘束されていく。
今度は2匹共、両腕を高手後手に縛られ開脚逆さ吊りにされていた。

「やっぱり、これが定番だよな。一番、マンコを壊しやすい姿勢だ」

「安心感がありますね。開脚して逆さに吊られる事でメス奴隷も、自分が何処を責められるか明確に分かりますからね」

「そうそう、やっぱりこの姿勢でマンコぶっ壊されるのが、良いんだよな。かつての公開処刑でも、ほぼすべてのメス奴隷がこの格好でマンコ壊されて処刑されていったからね」

「私も、この格好でメス奴隷が吊るされると一番興奮するわね。間違いなくメス奴隷のマンコ壊されると思うと、私の子宮も疼いてくるわよ」

「ああ、分かる分かる。私も同じ。グショグショに濡れてくるわ。今ももう濡れちゃっているし」

先程の不正騒動の衝撃から観客たちも立ち直り、純粋にまたメス奴隷たちの対戦を楽しむ気持ちになっていた。

「マユミはいい身体をしているね。張りのある形良く膨らんだ胸も素晴らしい。16年物くらいかな。プロフィール写真では、よく分からなかったけど実物は素晴らしいな。俺はマユミを応援するよ」

「ロリ好みの私はシズカの方が良いわね。少し膨らんだ胸に寸胴の体型、つるつるの恥丘が可愛いわ。シズカを応援したいけど、敗け

て処刑される姿も観たいのよ。あのロリマンコが壊されていく。想像すると濡れてくるわね。シズカは12年物くらいかしら。メス奴隷として調教された期間は長くないでしょうから、そういう点では不利ね。早々に敗けてくれるかも知れないからワクワクするわ」

観客たちが期待で興奮する中、トーナメント一回戦第5戦が、沙也加の合図で開始される。二人の調教師は共に針を持っていた。

「やはり、これが一番だよな。マンコ針山にして鞭で打つ。これやられて耐えられるメス奴隷は、そうそういないだろうからな」

「あれっ、でも少し違うみたいですよ。ほら、あっちの調教師は蝋燭に火を点けて針を炙っていますよ」

「モモコというメス奴隷が一発で失神させられた責めをやるつもりだろう。でも、もうシズカの方はマンコかなり針山になってるぞ。もう鞭で打たれたら一発で失神しそうだぞ」

確かにシズカは、クリトリスにはもう針を刺す場所がないほど針を大量に刺され、小陰唇も開いたまま針で留められ剥き出しの膣前庭にも大量の針が刺されていた。

「いだあぁぁぁっ、いだいよおぉぉぉっ！」

幼いシズカは泣き叫ぶが、調教師は構わずシズカの性器に針を刺していく。もう、シズカの柔らかな膣前庭はびっしりと針が突き立てられ、こんなところを鞭で打たれたら間違いなく失神してしまうのではと思われた。対してマユミを責めている調教師は、蝋燭の炎で針を炙り真っ赤になった針をマユミの敏感なクリトリスに突き刺そうとしていた。まず横から包皮毎針を突き刺す。

プスッ

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！あづうぅぅぅーーーっ！」

マユミは絶叫するが、辛うじて失神せずに耐えていた。しかし、調教師はマユミのクリトリスに針を貫通させ、さらにもう1本の針で十字に交差するように針を貫通させる。マユミはクリトリスを貫通される激痛と、クリトリスを焼かれる激痛で狂ったように絶叫している。そして、もう1本。今度はマユミのクリトリスの頂点から縦に針を突き刺していく。

プスッ

「ひぎいぃぃぃーーーっ！ふかいっ、ふかいっ、ふかいぃぃぃーーっ！！」

調教師はマユミのクリトリスから、マユミの体内へ容赦なく深く焼けた針を刺していく。3センチ、4センチ。

「ひぐうぅぅっ、じぬうぅぅーーっ！！」

絶叫するマユミは口から泡を吹き出していた。しかし、ここから調教師は焼けた針をどんどんマユミの性器に刺していく。クリトリスの付け根にも、クリトリスを囲むように4本の針が深く突き刺された。そして、次には尿道にも針を突き刺していくが、針を刺されるのは性器だけではなかった。マユミの恥丘の両側ビキニラインにも焼けた針がプスプスと深く突き刺されていく。その頃シズカの性器も、針を熱していないぶんマユミより早く針山にされていた。もう、膣前庭は全て針で埋め尽くされ、会陰から肛門にかけて針を刺され

ている。

「ゆるじでぐだぢゃいぃっ、マンコ、じぬうぅうっ！」

シズカは性器を針山にされていきチョロチョロと尿を漏らし、ガクガクと震えていた。そして、肛門の括約筋にもぐるりと針を刺されていき、シズカはぶりぶりと大便まで漏らし始めていた。一方、マユミもビキニラインに深く針を刺された後、調教師に膣に指を入れられGスポットを探られていた。そして、位置を確認した調教師は、焼けた針を止めを刺すように容赦なくマユミのGスポットに深く突き刺した。

「あびゃあぁぁぁぁーーーっ！！！」

マユミは絶叫して、身体を痙攣させ始める。クリトリスに続きGスポット、マユミの性感帯が破壊されていく。そして、調教師は更に深く指をマユミの膣に突き入れ、子宮頸部の位置を探る。マユミのもう一つの性感帯ポルチオを狙っているようだ。おそらくマユミはもうここに針を突き刺されれば耐える事など出来ずに失神するだろう。しかし、その時、シズカの性器に針を打ち終えた調教師は、鞭を手にしてシズカの針山にされた性器に狙いをつけていた。シズカもここに鞭を叩き込まれれば、もう失神は免れないだろう。

マユミとシズカの対戦は余談を許さない状況になってきていた。

42、拮抗

42、拮抗

マユミとシズカの勝敗が、もうすぐ決着がつきそうだった。互いの調教師はメス奴隷に最後の一撃を加えようとしている。かたや子宮頸部ポルチオへの焼けた針の一撃、かたや針山にされた性器への激しい鞭の一撃。どちらもその一撃が決まればメス奴隷の意識を断つのに充分な一撃だ。

「はひゅーっ、はひゅーっ、はひゅーっ、はひゅーっ」

2匹のメス奴隷の激しい息遣いが聞こえる。どちらのメス奴隷も次に自分に与えられるのが、この対戦の勝敗を分ける一撃だと周囲の気配から察知していた。

・・私は負けない。これはメス奴隷の誇りの戦い。私にもメス奴隷としての矜持がある。こんな未熟なメス奴隷に負ける訳にはいかない・・

マユミは涙で滲む目で吊られているシズカを見つめる。その瞳には、何が何でも勝つという強い意志が込められていた。

・・私は負けないよ。私の方が若い。体力がある。私なら、これを耐えたあのメス奴隷のように耐えられる。私は自分を信じる。私の方がメス奴隷として高みにいる・・

シズカもまた涙が溢れる目でマユミを見つめる。シズカの瞳にも決して譲れないという決意が漲(みなぎ)っていた。そして、お互いの調教師が止めの一撃を放つ。マユミは子宮頸部ポルチオに真っ赤に焼けた針を容赦なく深く深く突き刺される。針の全てがマユミのポルチオに押し込まれマユミの体内を貫いていた。

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！！！」

・・ふがいぃぃぃーーっ、おなかのながぁ、やげるうぅぅぅーーっ・・

それは、マユミの想像を遥かに超える激痛だった。いくらマユミがメス奴隷としての経験を積んでいたとしても、それはとても耐えられる痛みではなかった。これが、針だけであったならマユミは耐えただろう。しかし、真っ赤に焼けた針を体の奥深く打ち込まれてしまっては、最早マユミに耐える事など不可能だった。マユミは無惨にぶりぶりと肛門から大便も漏らし、口からは泡を吹き白眼を剥いて完全に意識を断たれてしまっていた。もう、マユミの頭にはメス奴隷の矜持などなかった。

一方、シズカにも止めの一撃が打ち込まれる。夥しい針で針山にされたシズカの性器に向かって凶悪な一本鞭が叩き込まれる。九尾の猫鞭と呼ばれるようなバラ鞭と違い、打撃力が集約される一本鞭はその威力は計り知れない。古来は処刑用として中世の魔女狩りに使用されていたものである。つまり、人間を殺す為の道具なのである。記録によると一本鞭による処刑を行われた魔女と認定されてしまった人間は、この凶悪な鞭の打撃を数発受けただけで肌は裂けショックで絶命してしまっている。それが、シズカは針山にされた性器を鞭で打たれるのだ。リエが耐えられたのは奇跡と言っていいのか。

それとも、リエが普段からこの過酷な責めを受けていたのか。それは想像に頼るしかないが、今、鞭打たれようとしているシズカには、間違いなく耐える事など不可能だと思われる。そして、調教師は狙いを定めたシズカの針山の股間に容赦なく思い切り鞭を叩き込んだ。

ビシィィーーッ！！

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！！」

・・かはぁぁっ！・・

股間から脳天まで突き抜ける激痛にシズカは絶叫する。それは、身体を股間から真っ二つに裂かれたような激痛だった。そんな激痛に幼いシズカが当然ながら耐えられる筈がなかった。この一撃でシズカは哀れにも意識を刈り取られていた。びくびくと身体が痙攣し、口から泡を吹いて白眼を剥き失神してしまっている。シズカの頭にあったメス奴隷としての自分を信じる心など、哀れにも粉々に砕け散り、ただ闇だけが広がっていた。

★　★　★　★

沙也加は頭を悩ませていた。

・・同時とは参りましたね。ここで私がどちらかを勝者としてしまうと、それぞれのメス奴隷の支持者からクレームが出るでしょうね。仕方ないですね、それでは今度は調教師抜きで、改めてメス奴隷同士で決着をつけて貰いましょうか・・

沙也加は、以前葉月が考案し試作していたメス奴隷を痛め付けるだけの機材を使い、勝敗を決定する事にした。沙也加は、すぐにスタッフに機材を用意するよう指示を出し、また別のスタッフに葉月にある提案を伝えてくれと命令していた。

・・この機材を使用すれば、また同時に失神という事はないでしょう。メス奴隷のマンコにはかなりのダメージがありますから二回戦が不利になるかも知れませんが、仕方ありませんね。決着をつけられなかった自分たちが悪いのですから・・

沙也加はマイクを持つと観客にアナウンスする。

「マユミとシズカの対戦結果ですが、２匹のメス奴隷が同時に失神してしまいました。そこで改めてこの２匹には対戦して貰います。その準備の為、しばらくお待ち下さい。その間、このトーナメントでＡシードに選出されているメス奴隷のパフォーマンスをご覧下さい」

沙也加のアナウンスで調教師に首輪の鎖を引かれたメス奴隷たちが入場してくる。先頭はＡブロックのＡシードしずくが麗華に引かれ、次にアヤコが歩いていた。そして、ＢブロックＡシード琴音が葉月に引かれ、ミアンもアサヒに引かれて入場してきた。観客席からは、このそうそうたるメンバーに感嘆の声が漏れていた。４匹のメス奴隷は横一列に並ぶと、それぞれ大きく足を開き、その股間の割れ目を観客に良く見えるように腰を突き出す。そして、調教師たちが鞭を構えてメス奴隷の前に立った。これから、メス奴隷の性器に鞭を叩き込むパフォーマンスが行われるのだ。その時、しずくは隣に立つ母アヤコが気になっていた。しずくはアヤコが調教されている姿など見た事がなかったが、自分と姉であるゆかりの母親である以上、相当なポテンシャルを秘めているのではと思っていた。

・・これでお母さんの実力が少し分かるかも知れない。それにお父さんの腕も……。お父さんは、まだ小さい私を平気で犯してくれた。だから、きっとお母さんにも絶対手を抜かない。・・

順当に勝ち進んでいけば、準決勝で対戦する可能性がある。ここで僅かでも情報が得られるのは有り難かった。

・・私は、琴音ちゃんとの約束を守る為にお母さんと云えども敗けられない。お母さんには悪いけど私が勝たして貰うからね・・

ヒュンッ

しずくが物思いに耽っているうちに一斉に調教師たちが鞭を振り、メス奴隷たちの性器に鞭を叩き込む。

「「「「「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ!!」」」」」

メス奴隷たちが一斉に絶叫する。が、調教師たちは連続でメス奴隷の性器に鞭を叩き込んでいく。しずくは、こんな大勢の観客の前で性器を鞭打たれる生まれて初めての経験に興奮してしまっていた。

・・私、こんな大勢の人の前で無様にマンコ鞭で打たれてる。気持ちいいよぉ。お姉ちゃんも、きっとこんな気持ちだったんだ・・

しずくは性器を鞭で打たれ、なんと頂点に達しようとしていた。

・・イ、イグうぅぅーーっ、イッちゃうぅぅーーっ・・

プシャァァーーーッ

なんと、しずくは性器を鞭で打たれ潮を吹いて絶頂を迎えていた。
だが、それはしずくだけではなかった。琴音もミアンも、そしてアヤコも性器を鞭で打たれ潮を吹いてしまっていた。

43、競争

４３、競争

４人のメス奴隷が性器を鞭で打たれ一斉に潮を吹いていた。

「マンコ、鞭で打たれて潮吹くなんて考えられんな。さすがＡシードのメス奴隷たちだな」

「マンコ、鞭で打たれるとそんなに気持ちいいのかしら……。なんか、私も打って貰いたくなるわね」

「やっぱり、このメス奴隷たちが優勝候補なのかしらね。変態度で群を抜いているわよね」

観客たちはＡシードのメス奴隷たちの変態ぶりに満足していた。このメス奴隷たちなら、トーナメントを盛り上げてくれるのは間違いない。そう予感させるパフォーマンスだった。そして、シードのメス奴隷たちのパフォーマンスの間に準備の整ったマユミとシズカが再び入場してくる。２匹に突き刺されていた針は抜かれ、マユミとシズカは両腕を高手後手に縛られたまま、これから何が起こるのか、自分達に何がされるのか想像し身体が細かく震えていた。

「それでは皆さん、お待たせしました。対戦を再開します。２匹とも同時に失神してしまいましたので、今度は単純にメス奴隷同士の競争にしました。先に１０キロ走った方が勝者です。分かりやすく

結果も一目瞭然ですね」

沙也加が観客に向かって説明しているうちに、２匹のメス奴隷が競う為の機材が運ばれてきた。それは、一見して一輪車と見える物だった。一輪車が台座に固定され前方に観客に見えるようにモニターがあり、そこに走った距離数が表示されるようになっている。ジムなどに設置されているフィットネスバイクの一輪車版といったところであるが、このトーナメントで使用するからには普通の一輪車ではない。しかも開発が葉月であるとなると余計に普通の一輪車とは思えなくなる。

「それでは、メス奴隷２匹には、この一輪車に跨がって貰い競いあって貰います」

そう言いながら沙也加は、一輪車のサドルの部分に被せてあったカバーを外す。その下から現れたのは、なんと鋭く光るナイフのような凶悪な刃だった。その刃が上を向いて取り付けられている。観客からどよめきが起こった。

「あんなのに跨がってペダルを漕いだらマンコ、ズタズタになるぞ。ただの競争かと拍子抜けしたけど、これなら楽しめそうだな」

「これは、面白いですよ。早く１０キロ走る為にはペダルを早く回すしかないが、そうすると自分のマンコを切り刻む事になる訳ですからね。いやあ、実に楽しい」

「メスのマンコを痛め付けるというか破壊する事を第一に考えた一輪車ね。これで競争とか、絶対マンコ壊すつもりとしか思えないんだけど」

観客が興奮して見つめる中、マユミとシズカは一輪車に跨がされ、ペダルに足を乗せた状態でベルトで固定され足が抜けないようにされてしまう。そしてサドル、つまり刃の高さを調整される。静止状態で刃が性器に触れる位置で固定されてしまった。これで僅かでも動けば、性器は鋭い刃で無惨に切り裂かれる事になる。

「走行距離が半分まで到達すると、刃の高さが自動で1センチ上がります。そして、残り1キロになるとまた1センチ上がります。つまり、間違いなくマンコが切断されていくのですよ。今回はこれで2匹共に失神した場合は距離の多い方の勝利と致します」

沙也加が得意気に説明するが、マユミとシズカはこの恐ろしい一輪車に跨がらせられて、自分の性器はこれで壊されるのかもと内心思い震えていた。もし、この一輪車に跨がったのがゆかりであったなら、喜んで自分の性器を切って泣き叫んでいただろう。変態度という点ではマユミとシズカはゆかりに及ばないのは確かだった。

「ひゅーっ、ひゅーっ、ひゅーっ、ひゅーっ」

マユミとシズカ2匹のメス奴隷の息が荒くなるが、お互いの距離が見えないようにするため、目隠しが取り付けられ、口にもボールギャグが押し込まれる。そして、更に観客の声などで優劣が分からないように耳にも栓をされ聴覚も奪われる。マユミとシズカは両腕を拘束され、刃の上に跨がされ、足はペダルに固定され、視覚と聴覚も奪われた状態で競う事になる。

・・ううっ、何も見えない。何も聞こえない。相手の状態が分からないのは怖い。最初から全力でいかないと……。多分私のマンコ、ズタズタになる。でも、それがきっとお客様には楽しいはず。だから、私は頑張る。私が苦しむほどお客様は喜んでくれるから・・

マユミは冷たい刃の感覚を性器に感じながら、いつでもすぐにペダルを漕ぎ出せるよう準備していた。

・・目も見えない。耳も聞こえない状態で競争するの。これで思い切りペダルを漕いだらマンコ、スパッと切れちゃうだろうな。私、マンコ切られた経験はないから大丈夫かな。今度、失神なんてしたら確実に敗けるよね。あぁ、一回くらいマンコ切って貰って経験しておけば良かったな・・

シズカは、まず自分の性器に訪れる激痛に備えようと歯を食いしばる。最初の痛みに耐えたら、後は全力でペダルを回すだけだと考えていた。そして、マユミとシズカの尻が鞭で叩かれる。それが、スタートの合図だった。２匹のメス奴隷は弾かれたようにペダルに力を込め回し始める。その瞬間……。

スシャッ

「「ふごおぉぉーーーっ！！」」

股間の刃でマユミとシズカの性器が切れ血が飛び散り、同時に絶叫する。しかし、マユミとシズカはお互いの状況が分からない為、とにかく全力でペダルを回し、距離を稼ぐしか方法がなかった。２匹の顔は早くも目隠しから滲む涙と鼻水と涎で無様に汚れていた。

「ふんごおぉぉーーーっ！」

２匹のメス奴隷は必死にペダルを漕ぎ、どちらの股間からもペダルを回す度にピュッピュッと血が飛び散っている。２匹の太ももの内側は血で真っ赤に染まっていた。そして、２匹はほぼ同時に中間点

に差し掛かる。

ガコンッ！

「ふぐうぅぅぅーーーっ！！」

一輪車の刃の位置が上昇し、マユミとシズカの性器をスパッと切断する。２匹は性器を切り裂かれ硬直したように動きを止め、天を仰いで固まっている。

・・マンコ、切られた。でも半分まで来た。ここで止まってはダメ・・

マユミは性器を襲う激痛に耐え足を動かす。しかし、それは先程までの勢いはまったくなくなっていた。性器の痛みは、刃が性器を切断して肉の中に入った為、今度は足を動かす度に性器が抉られるような痛みに変わっている。マユミは意識が遠くなりながら必死に自分を鼓舞してペダルを漕いでいた。

・・大勢の人が私を見てくれている。もう二度と失神なんて無様なマネは出来ない。メス奴隷として敗ける訳にはいかない・・

マユミは夥しい涙と鼻水を垂らしながら、自分が勝っていると信じて必死に足を動かし続けた。そして、二度目の突き上げがきた。

・・あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！・・

もう声は枯れてしまって、マユミは頭の中で絶叫していた。深く性器に一輪車の刃が食い込み激しく血が流れ出す。マユミはまた動きを一瞬止めてしまっていた。しかし、残り１キロという希望がマユ

ミを奮い立たせる。マユミは激痛に耐えながら足を動かしていた。
そして、マユミの尻に再び鞭が叩き込まれる。終了の合図だった。
マユミの足がペダルから外され、そのまま持ち上げられ地面に降ろされる。しかし、マユミは立っている事が出来ず地面に座り込んでしまっていた。そして、マユミの口枷、耳栓が外される。その途端、大勢の観客の歓声が耳に入ってきた。何を言っているのか聞き分けられなかったが、いよいよマユミの目隠しが外された。そこでマユミが見た数字は……。

４４、悲哀

マユミはモニターに表示されている自分が走った距離数を確認する。

・・えっ……・・

そこには〝９．８〟という数字が無情に表示されていた。マユミは隣のシズカのモニターを見る。そこには〝１０．０〟と輝くように表示されていた。

マユミがシズカに目を向けると、シズカの性器はマユミ以上にすっぱりと切断され、血がどくどくと溢れ下半身は真っ赤に染まっていた。相当激しくペダルを回していたのが想像される。

「ビクトリー、シズカ」

沙也加の声が会場に大きく木霊する。

・・私は、あのメス奴隷が幼いと侮っていたんだ。メス奴隷である以上、年齢など関係ない。私はメス奴隷として精神も体も、あの幼いシズカに敗けたんだ。言い訳など出来ない、完敗だ。シズカの方が私よりメス奴隷として高みにいた。そういう事だ・・

マユミは幼いと思っていたシズカに敬意を表していた。自分としては精一杯戦ったが、相手の方が強く及ばなかった。それだけの事だ

った。

・・こんな大勢の人に観て貰えた。それだけでも幸せ。それにまだ終わりじゃない。最後の仕事が残っている。皆さん、私の処刑を楽しみにしている。思い切り無様に泣き叫んで処刑されるのが私の務め。敗けた私としては、最後までメス奴隷としての誇りを持って務めあげないとね。私に勝ったシズカにも失礼になってしまう・・

マユミの前を勝者のシズカが運ばれていく。そして、2匹がすれ違う時シズカが呟いた。

「凄いメス奴隷ですね。あなたと戦えた事を私は忘れないですよ。あなたを尊敬します……」

小さな声で辛うじてマユミに聞き取れたが、シズカのダメージも相当なものなのだろう。それでもマユミに伝えたかったシズカの気持ちが言葉に詰まっていた。

・・私もあなたが相手で良かった。頑張って勝ち進んで下さい・・

マユミもまた、シズカを尊敬していた。

★　★　★　★

敗者であるマユミの処刑の準備が進められていく。マユミは人型の鉄製の柩状の器に入れられていた。柩と違うのは手足だけが、その器から飛び出す仕様になっている点だ。マユミはその器の中にしっかりと拘束され動けないように固定されていた。今回もマユミを処

刑するのは運営側のスタッフに委ねられている。シズカの調教師はシズカのダメージが大きい為、その治療に立ち会っていた為だった。

「ひぐっ、ひぐっ、ひぐっ、ひぐっ」

自分の最後の時が迫ってくるにつれマユミは恐怖に捕らわれ泣き出していた。どんなに自分はメス奴隷だと言い聞かせても、処刑される恐怖は拭えなかった。そして、スタッフが大きな人型の柩の蓋を持ってきた。その蓋は、マユミの顔に当たる部分は丸く穴が空いており、蓋を閉じてもマユミの表情が分かるようになっている。そして、蓋の裏には鋭く長い棘がびっしりと埋め込まれていた。更に蓋の縁は鋭い刃になっている。

「お待たせしました。それでは敗者であるメス奴隷マユミの処刑を執行します。この処刑具は皆さまならば当然ご存知でしょう。中世、魔女狩りに使用された〝鉄の処女〟と云われる処刑具を改良したものです。蛇足ながら〝鉄の処女〟という処刑具は人型の鉄製の柩の蓋の部分一面に鋭く長い棘が突き出ており蓋を閉じると中の人間は無数の棘で串刺しになり殺されるというものです。メス奴隷マユミは手足を柩から出されていますが、この改良版は蓋を閉じる事で縁に取り付けられた刃で柩から外に出ている手足は切断されます。つまり、メス奴隷マユミは蓋を閉じられ体を無数の棘で貫かれると同時に四肢を切断される訳です。でも、それで処刑を終了しては面白くありません。この蓋の裏の棘は心臓は貫かないように調整してあります。ですので、マユミは蓋を閉じられても、まだ生きているのですよ。そして、この柩のこの部分、ここに三つの穴が空いているのが分かると思いますが、この穴から長いドリルを差し込んでマユミの三つの穴を破壊します。勿論穴だけではありません。尿道から膀胱を破壊し、膣から子宮、肛門から直腸、全てを完全に破壊します。そして、止めはこの鉄仮面をマユミの顔面に装着します。この

鉄仮面の裏には、目に当たる部分に長い棘が突き出ています。これが目を潰し、脳を破壊して絶命させるのですよ」

沙也加の説明で観客席から歓声が上がるが、柩に固定されたマユミは号泣していた。もう数分後には自分はこの世にいない。その強烈な恐怖でマユミは自分がメス奴隷である事も忘れ、必死に命乞いしていた。

「おねがいじまぢゅうぅっ、ゆるじでぐだぢゃいぃぃっ！だれがぁ、だれがぁ、だじげでえぇぇぇっ！！」

無様な姿だった。だがそのマユミの無様な姿が一層観客を興奮させていた。

「早くやれぇ、その無様なメス奴隷を処刑しろぅっ」

「あのメス奴隷、いくら泣き叫んでも許される筈がないのにね。早くマンコにドリル突き入れて欲しいわね」

「〝鉄の処女〟だけでも残酷な処刑具なのに、四肢切断にマンコ破壊までされるなんて、あのメス奴隷幸せね。私も処刑されたくなってくるわ」

観客席も異様な興奮に包まれていく。それは、これまで何匹ものメス奴隷の処刑を観た観客の精神も蝕んでいた。一人の観客が売店で購入したオス用の処刑筒を自分の勃起した性器に被せ作動させる。

ザシュッ

筒の内側に無数の針が飛び出し観客は悶絶して倒れていた。それを

見た隣の観客が、やはり売店で購入したメス用の膣破壊性具を自分の膣に突き入れボタンを押す。

ザシュッ

この観客も膣内を無数の針で突き刺され股間を押さえて地面に倒れ込んだ。そこかしこで観客が興奮のあまり自分の性器を破壊して倒れていく。その光景を沙也加は苦笑いして見ていた。

・・これだけ多くの処刑を一度に観ては、常人の神経では耐えられませんか。尤もな事ですね。今から行うメス奴隷の処刑を観て、まだまだ倒れる観客が出てくるでしょう。これは、観客にとっても生き残りを賭けたトーナメントのようなものですね。これで、明日の席はかなり空きが出来るでしょう。入場希望の予約者はまだ大勢いますからね。空いた席にその人間たちを埋め込んでいけば、更なる収入が見込めるでしょう。葉月様は、そこまで考えていたとしか思えません。恐ろしいお方です・・

沙也加は改めて葉月の恐ろしさに震撼していた。そして、その葉月に信頼されているという自負が沙也加を興奮させていた。

「さあ、それでは蓋を閉じますよ。少しの間、最高の苦しみを味わって下さいね。ちゃんとメスの三つの穴も忘れずに壊してあげるから安心して大丈夫ですよ」

沙也加はマユミに微笑みかけると、心電図のセンサーを取り付け〝鉄の処女〟の蓋を閉じていく。

「いやだぁぁっ、ゆるじでぐだぢゃいぃぃっ！」

普通のメスに戻ってしまったマユミが迫ってくる無数の鋭い棘を見て命乞いするが、沙也加は構わず〝鉄の処女〟の蓋を閉じていく。そして、ついに〝鉄の処女〟は完全に閉じられてしまった。

シュパァッ

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！！」

蓋が閉じられマユミの体は全身串刺しにされ、更に四肢が切断され、ボトンと地面に落ち転がった。そして、太さの違う長いドリルが柩の三つの穴から突き入れられる。

ギュィィィーーーッ

「あびゃあぁぁっ！あびゃびゃびゃびゃびゃあぁぁっ！！」

マユミは大きく口を開け、舌を突きだし絶叫する。しかし、3本のドリルはマユミの穴を完全に破壊していった。そして、ドリルが抜かれると柩の三つの穴から血と肉片がピューッと噴水のように噴き出していた。

「はふっ、はふっ、はふっ、はふっ」

マユミは串刺しにされ、四肢も切断され、膀胱も子宮も直腸も完全に破壊され、見えている顔面もピクピク痙攣しもう虫の息だったが、それでもまだ生きていた。心電図モニターでも弱々しいが心臓の動きが確認出来ている。沙也加は、マユミの止めを刺す為、鉄仮面を手に取り、仮面の裏の二つの棘をあっさりとマユミの両目に突き刺した。そして、そのままグリグリと押し込んでいき、一定の位置で止めた。

「おぼぼぼぼぼっ、おぼうぅっ」

おそらくもうマユミは意識が混濁して何を言っているのか分からない。ただの音を発していた。沙也加はそんな哀れなマユミの顔面に向かってハンマーを振り上げた。

「さあ、これで終わりです」

ガイィィーーンッ!!

「あぼうぅぅぅーーっ!」

鉄仮面がピタリと装着され、目の部分から血が勢いよく噴き出した。そして、血の勢いが弱まるとまるで仮面が血の涙を流したように、無表情な仮面を綺麗に彩っていた。心電図モニターもフラットになり、マユミは完全に絶命していた。

４４、悲哀（後書き）

あれ、どこかで見たことあると感じた方も居られるでしょう。手を抜いた訳ではありませんが、これは「檻の中の幸福」真弓の章の最後とほぼ同じ展開になっています。真弓とマユミ、同じ名前のメス奴隷が同じ運命を辿ったら面白いかなと思った次第です。そんな話を書いてみたかったのです。マユミは最初から運命が決まっていたようで可哀想でしたね。

４５、薄暮　サユリＶＳヤチホ

４５、薄暮

マユミの処刑が執行され、マユミは哀れに絶命した。その片付けをしていると照明器具が運ばれてきていた。既に辺りは薄暮の状態になっている。そして、設置された照明器具が点灯された。

・・葉月様の言うようにＬＥＤライトの灯りより、こちらのカクテル光線の方が趣があって良いですね・・

沙也加は暖かみのある光線が気に入っていた。カクテル光線とは以前は野球場のナイター設備で使用されていた白熱灯と水銀灯を合わせた照明器具である。その味わいある光線はＬＥＤライトにはないものだった。

・・ようやくＡブロック一回戦の最後の対戦になりましたね。これが無事終了すれば今日の仕事は終わりです。さすがに、この長丁場疲れてきますが、信頼して任せてくれた葉月様の為にももう一踏ん張りせねばなりませんね・・

「それでは、本日の最終戦を開始します。メス奴隷「変態娘サユリ」対「供物ヤチホ」となります」

沙也加は観客席に向かってアナウンスしながら、２匹のメス奴隷のプロフィールを見て、これは面白いと進行の立場を忘れ思っていた。

サユリのプロフィール欄の尊敬するメス奴隷の名前が〝ゆかり〟。対するヤチホの尊敬するメス奴隷が〝八千代〟となっていた。〝ゆかり〟と〝八千代〟。この2匹のメス奴隷は似ているようで、実はまるで似ていない。ゆかりが自分の性器が破壊されるのを望む性癖であるのに対し、八千代は自分の性器が壊されるのを観て楽しんで貰うという性格だった。どちらも頭がおかしいのには間違いないが、その考え方が違うのだった。そして、2匹のメス奴隷が拘束されていく。どちらも定番の開脚逆さ吊りに拘束されていた。カクテル光線に照らし出された2匹の肢体が浮かび上がる。沙也加はニヤリと笑うと、この2匹のメス奴隷に挨拶させてみようと考えていた。もうこれが最後の対戦で、照明器具もある。多少の時間はあるだろう。沙也加はメス奴隷の前にマイクを持っていき挨拶をするよう命令した。

「メス奴隷サユリです。これから、皆さんの見ている前でサユリのマンコを壊されると思うと興奮してしまいます。サユリはゆかり様のようにマンコを徹底的に壊してもらい二度と使用できなくして貰う為に、このトーナメントに参加しました。サユリのマンコが完全に破壊され、メスでなくなる惨めな姿を見て笑って下さい」

サユリは沙也加の思った通りの事を話していた。そして、次にヤチホが話し出す。

「メス奴隷ヤチホです。ヤチホの女の子の大切な場所が壊される姿を見て楽しんで下さい。私が苦しむ程、皆さまには喜んで頂けると思いますので、どうか私のマンコを徹底的に破壊して下さい。遠慮など要りません。私はマンコを壊されて皆さまに楽しんで貰う為のメス奴隷で、私の女の子の体はその為に存在してるのですから」

ヤチホの挨拶も沙也加の想像通りのものだった。沙也加は満足気に

マイクを握ると開始の宣言をした。

「これよりメス奴隷サユリ対ヤチホの対戦を開始します。始めっ」

沙也加の合図で調教師たちが動き出す。どちらの調教師もまずは針を握っていたが、その一人の調教師に視線が集まる。それは、その調教師が女であったからだ。別に葉月や沙也加のように女の調教師はいるが、それほど数は多くない。今まで男にしては小柄だと思われていた調教師が被っていたフードを外し、長い髪が落ちた為はっきり女と分かったのだ。

「ほう、あの女調教師、私があの時蹴り飛ばした女か」

葉月は控え室で思い出していた。あるパーティーでオブジェとして用意されたメス奴隷八千代をゲストが順番に痛め付けていた時、八千代の性器を火で炙り、興奮して自慰を始めてしまい次の順番だった葉月に蹴り飛ばされ退かされた女だった。（注）

「なるほど、あの時の不満から八千代に似たメス奴隷を手に入れ、このトーナメントに参加したのですね。でも、私と争いたいのなら決勝まで残らねばなりませんよ」

葉月はまた楽しみが増えたとわくわくしていた。そして、針を持った女の調教師は慌てる事なく落ち着いてメス奴隷の股間に針を刺していく。その調教師の態度から、自分の所有するメス奴隷に全幅の信頼を寄せているのが窺われる。つまり、自分のメス奴隷は失神などしないと信じているのだ。

・・このサユリというメス奴隷はマンコ専門だね。おそらく、マンコへの苦痛は耐えるだろう。例えクリトリスや、この小陰唇を切除

しても逆に喜ぶだろうね。だけど、肛門への調教はあまり経験がないと調べてあるよ。サユリの肛門をズタズタにしてやる。初めての苦しみに失神するといいよ・・

女調教師はサユリの小さな肛門の括約筋にプスプスと針を刺していく。サユリは狂ったように絶叫していた。

「あびゃあぁぁぁぁーーーっ！いだあぁっ、いだいよおぉぉぉーーっ！！」

さらに女調教師は指でサユリの肛門を拡げ、サユリの直腸にも針を刺していった。

「いやだあぁぁーっ！おじりは、いやでぢゅうぅぅぅーっ！マンコに、ざじでぐだぢゃいぃぃぃーーっ！」

しかし、女調教師はサユリの肛門を集中的に責め続ける。サユリの肛門から直腸を針山にした調教師は、今度は蝋燭に火を点け、熱蝋をサユリの肛門の中、直腸に垂らし始めた。

「お、ぎゃあぁぁぁぁーーーっ！あづいぃぃぃーーーっ！おなかのながあ、やげるうぅぅーーーっ！！」

サユリの直腸が蝋で埋め尽くされていく。サユリは、体をビクビクと痙攣させ失神寸前の状態に見えた。その頃、ヤチホを責めている調教師はサユリの状態を見て笑みを浮かべていた。

・・サユリを知らない奴は、もうサユリがヤバいと思うだろうな。だが、違う。サユリはあまりの興奮で痙攣しているのだ。わざとサユリの肛門は責めてこなかった。その初めての刺激であのサユリと

いうメス奴隷は興奮してマンコを濡らしているのさ。見ていろ、もうすぐ潮を吹くぞ・・

プッシャァァァーーーッ

サユリの調教師の読み通り、サユリは肛門を責められ絶頂に達し潮を吹いていた。サユリを責めていた女調教師は唖然とした表情で、潮を吹くサユリの性器を眺めていた。それを観ていた観客も度肝を抜かれていたが、ヤチホを責めようとしている調教師の動きにも戸惑っていた。

「何やってんだ、あの調教師。メス奴隷に針を刺さないで、蝋燭に針を刺しているぞ」

「確かにあのメス奴隷は何もダメージを受けていないな。やる気あるのか、あの調教師」

観客たちがブーイングを浴びせる一方で調教師は落ち着いて蝋燭に針を刺している。もちろん沙也加は初めから調教師の狙いに気が付いていた。

・・あの調教師が何をしようとしているのか分からないのですかね。さっき、佐瀬がメス奴隷を処刑するのに使用していたアレの模倣ですよ。針の突き出た蝋燭をメス奴隷のマンコの穴に突き刺して火を点けるつもりでしょう。しかし、あのヤチホというメス奴隷も筋金入りです。それだけでは意識を断つ事は出来ないと思いますよ・・

沙也加の考えた通り調教師は、ヤチホの膣に針が無数に飛び出した蝋燭をグリグリと無理矢理挿入していく。

「あびゃあぁぁぁぁぁぁぁーーーーーっ！！」

ヤチホが絶叫し、ヤチホの尿道から尿が噴水のように噴き出す。サユリが潮を吹いたのに対して、ヤチホは激痛で尿を漏らしていた。これだけ見るとサユリの方が優勢なのかと思われるが、ヤチホは自分が惨めな姿を晒す事で観客に喜んで貰えると思っている。そして、それがヤチホにとって喜びなのだ。なので自分の性器が壊される事はヤチホにとって願ってもない事であった。

・・八千代様、私も八千代様のようになりたいです。私のマンコ壊される姿を見て、こんなたくさんのお客様に楽しんで貰えたら最高です・・

女調教師も笑みを浮かべていた。メス奴隷八千代に憧れて、八千代のようになる事を目標にしているヤチホ。

・・ヤチホが、この一回戦程度で失神するなどあり得ない・・

女調教師は、それよりこのサユリを仕留めないとと思案していた。

（注）「檻の中の幸福」八千代の章の中でのエピソードです。

46、真髄

46、真髄

どちらのメス奴隷も相手の事などまるで考えていなかった。サユリは自分の性器が壊されるのが何よりの快感であったし、ヤチホも自分の性器が壊される姿を観客が見て喜ぶのが一番の喜びであった。この倒錯した精神を持つ2匹のメス奴隷は、まるで〝ゆかり〟と〝八千代〟が対戦しているようであった。〝ゆかり〟と〝八千代〟、2匹を知る者にとっては非常に興味深い対戦である。葉月もまたその一人であった。

・・参加申込みの書類を見たときに、これは面白いと思ってトーナメントで対戦するように組んでみましたが、なかなか良いですね。どちらもオリジナルに近いメス奴隷で感心します。まあ、本物には及びませんが、よくまあここまで育てあげたものですね・・

葉月の一番のお気に入りは〝渡邉ゆかり〟であるが、パーティーで見つけた〝八千代〟も気に入り、〝八千代〟の貸し出しも所有者に要求した程である。〝八千代〟もまた葉月のお気に入りのメス奴隷だったのである。

・・くそっ、とにかく責めていかないと埒が明かない・・

サユリを責めている女調教師は、サユリの直腸内を蝋で埋めつくし、予めサユリの直腸に入れておいた木綿の糸を指で摘まみ出す。それ

は、まるでサユリの直腸に蝋燭をすっぽりと押し込んだような状態になっていた。そして、女調教師はその木綿糸に点火してしまう。ゆらゆらと燃える炎は、だんだんとサユリの肛門から、その中に入っていった。

「あびゃあぁぁぁぁーーーっ、あづいぃぃぃーーーっ、やげるうぅぅぅーーーっ、じぬぅぅっ、じんぢゃうぅぅぅーーーっ！！！」

大きく口を開けて涙と鼻水を垂らしながら絶叫するサユリを眺め、女調教師は笑みを浮かべていた。

・・くくくっ、腹の中、直腸を焼かれているんだ。いくら貴様でも耐えられる筈がない。早く失神しろ。殺してしまっては、こちらの敗けになってしまうからな。マンコの穴などと違って、腸は生命維持に必要なもの。そこを壊されては長くは生きられない。死ぬ前に気絶するのよ・・

女調教師は、腸を焼かれ激痛に苦しむサユリを冷静に観察していた。サユリは、もう口からも泡を吹き失神寸前のように見える。

・・ふふっ、メス奴隷と云えど元は人間です。どんなに調教を重ねても耐えられない事があるんですよ。腸を焼かれ、死の恐怖に怯えなさい・・

その時、サユリの体がビクンビクンと大きく痙攣する。

・・勝ったね。もう、このメス奴隷は終わりだ・・

女調教師はサユリが失神すると思った。しかし、サユリは信じられない事に、なんと潮を吹いていた。

「イギますうぅぅーーーっ」

サユリは直腸を焼かれながら、なんと絶頂に達していたのだ。

・・なんだ、このメス奴隷は……。まさか、死ぬまでイキ続けるのか……。こんなの、あり得ないよ・・

女調教師は、恐怖で体が震えていた。目の前のメス奴隷が、まるで化け物のように見えていた。だが、その同じ気持ちをヤチホを責めている調教師も感じていた。

・・このメス奴隷、膣を破壊されているというのに失神しない。どういう事だ。過去に膣破壊を経験しているのか。いや、私の気持ちが甘かったのだ。殺してはいけないと、どこかで制御していたのだ。このメス奴隷を失神させるには、殺す気で責めなければいけないという事だ・・

調教師は自分のメス奴隷サユリの様子を見る。サユリも過酷な責めを受け、絶叫している。しかし、調教師はまだサユリは大丈夫だと確信した。それより、こちらのメス奴隷をどう始末するか。それで頭を悩ませていた。

・・葉月様の思惑通り、なかなか楽しい勝負になっていますね。これは、まるで結果が読めません。お互いのメス奴隷の力は五分に感じます。となると、それぞれの調教師の知識と経験が勝敗を分けるという事になりますか・・

沙也加は、自分ならこのメス奴隷をどう仕留めるだろうと考える。そして自分なら、こちらのメス奴隷を、これで仕留められると思い

付いた。

・・私と同じ考えに至れば、勝つのはあちらのメス奴隷になりますね。それに、あの調教師が気付けばですが……・・

沙也加もまた、この勝負を大いに楽しんでいた。そして、控え室ではしずくが拳を握りしめてサユリを応援していた。

・・お姉ちゃんを尊敬してくれている、このメス奴隷に勝って欲しいよ。お姉ちゃんも、こんなトーナメントがあったら絶対出場したかったと思う。だから、絶対勝ち上がって私と戦おうよ。それまで頑張って・・

しずくは、密かにサユリに声援を送っていたが、麗華は冷静に葉月に尋ねていた。

「私は〝八千代〟というメス奴隷は知りませんが、ここまで観た感じでは手強いメス奴隷ですね。出来ればここで潰し合って貰いたいですね。決勝にいくまでなるべくダメージを負いたくありませんからね」

「そうだな、どちらのメス奴隷が勝ち上がってきても、対戦する相手は大きなダメージを負うだろうな。早々に勝てる相手ではないからな。なかなかAブロックは楽しそうではないか、香坂の娘」

隣で琴音は、もう飽きてしまったというように葉月に売店に行ってきますと告げていた。琴音はAブロックを勝ち上がって来るのはしずくだと信じて疑わない。そして、決勝で戦うのは自分としずくだと思っている。自分が戦うBブロックならともかく、正直Aブロックには興味がなかった。それじゃ行って来まーすと琴音は軽い調子

出ていった。

★　★　★　★

・・とにかく責めを止めてはダメね。常に責めて、なんとかこのメス奴隷の弱い所を探さないと……・・

女調教師はサユリの肛門を責めるのを諦め、今度は定番の性器を責めていく事にした。針を持つとサユリの尿道に突き刺し、そのまま、ぐいっと針先を持ち上げるようにしてクリトリスを内側から突き刺し貫通させる。サユリのクリトリスの頂点から、尿道から刺された針先が飛び出していた。

「あひゃあぁぁぁぁーーーーっ！！」

サユリが絶叫するが女調教師は、もうそれに惑わされる事はなかった。

・・ダメだ、ダメだ。悲鳴を上げるようでは、まだ余裕があるよ。悲鳴すら上げられない一撃を、このメス奴隷のマンコに打ち込んでやるわ。次は子宮だよ。体の奥深く針を打ち込む。今までのメス奴隷を見ていると、ここまで調教されているメスはいない。このメス奴隷もマンコ専門に調教されていたとしても子宮までは調教されていないと信じたい・・

女調教師は指で乱暴にサユリの膣を拡げ、サユリの桜色のコロッとした子宮頸部を確認する。

・・さあ、いくよ。どんな反応をするか見せて貰うからね・・

女調教師はサユリの子宮に針を深く突き刺した。

47、痛虐

47、痛虐

女調教師はサユリの子宮に針を突き刺し押し込んでいく。

「あびょおぉぉぉーーーーっ、じぬうっ、じんぢゃうぅぅぅーーーっ!!」

サユリは激しく絶叫し、エビのように体をのけ反らせる。顔面は涙と鼻水と涎で汚れ、苦悶の表情が現れている。

・・よし、これだよ。こいつの子宮を針山にしてやるよ。抵抗できないメスのマンコ壊すのは最高だね・・

女調教師は、目は血走り興奮して服を脱ぎ始めていた。女調教師は、どうやらもうトーナメント中である事を忘れてサユリの性器を破壊する方にスイッチが入ってしまったようだった。太ももに食い込む黒いサイハイソックスだけの姿になった女調教師はサユリの子宮に次々に針を突き刺していく。

サクッ、サクッ、サクッ、サクッ、サクッ、サクッ、サクッ、サクッ

「はぶうぅぅぅーーーっ、ぶ、ぶぶぶうぅぅぅぅーーーっ!!」

女調教師は体をのけ反らせ絶叫するサユリの口から舌を摘まみ出し、

そこにも針を貫通させていった。

「少しうるさいですよメス奴隷の分際で」

女調教師はサユリの上下の唇にも合わせて針を貫通させ、その口も塞いでしまう。その女調教師は太ももの内側までカクテル光線の光を浴びて光るほど濡らしてしまっていた。

「ふぐっ、ふぐっ、ふぐうぅぅっ」

口を塞がれたサユリに容赦なく女調教師は、子宮に針を刺していく。もう桜色のサユリの子宮が見えなくなる程の針が突き刺され、サユリは号泣していた。しかし、女調教師は止まらない。今度は蝋燭を手に取ると残酷な笑みを浮かべる。

・・もうトーナメントなんてどうでもいいわ。このメス奴隷、気に入らない。ヤチホには悪いけど、ここで負けても構わない。このメス奴隷、処刑してやる・・

自制心を失った女調教師は、サユリを殺してしまい自分のメス奴隷ヤチホが反則負けになり処刑されても構わないと、手にもった蝋燭をサユリの膣にずぼっと突き刺した。

「子宮に刺した針を全て根元まで押し込んでやるわ。あなたはこれで終わり、残念ね。それっ！」

女調教師はサユリの膣に蝋燭を全て押し込んでいた。その蝋燭に押され、子宮に刺さった針が全て根元までサユリの子宮を貫通する。

「ふぶうぅぅぅーーーーっ！！」

サユリは尻に頭がつく程、反り返り絶叫する。塞がれた口からは、ブクブクと泡を吹いていた。

★　★　★　★

豹変した女調教師を見て、さすがに驚異を感じたヤチホを責めている調教師も、動きやすいようにフード付きの上着を脱ぎ、サングラスとマスクも外していた。

・・あの男は……・・

沙也加は、この調教師の男を知っていた。

・・６９番〝渡邉ゆかり〟の脳を犯し止めを刺した男。その男が、６９番に似たメス奴隷サユリの調教師だったのか・・

その頃、控え室でもざわめきが起こっていた。あの、ゆかりの処刑はここにいるほとんどのメス奴隷が、現地であるいは動画で観賞している。その処刑でゆかりの頭に陰茎を突き入れた男の顔がそこにあったからだ。

・・お姉ちゃんの頭の中、ぐちゃぐちゃにしてくれた人だ。お姉ちゃんの頭の中、気持ち良かったのかな。訊いてみたいよ・・

しずくは、ゆかりの最後を思い出して、また濡らしてしまっていた。そして、しずくと一緒にゆかりの処刑動画を観ていた琴音も思い出していた。

・・お母さんより先に、しずくちゃんのお姉さん、ゆかりさんの脳を壊した人だ。あの動画は最高の売上げだと養母さんが言っていたから、界隈では超有名人だよね。だから、顔を隠していたのかな・・

琴音も、この調教師にゆかりに止めを刺した感想を訊いてみたかった。

・・斎藤（注）の奴、わざわざ顔を隠して出場する事などないと思いますが、相変わらずシャイな奴ですね。そんな事だから〝渡邉ゆかり〟をものに出来なかったのですよ。あの公園で最初に会った時に確保してしまえば、まだ生娘の〝渡邉ゆかり〟を好きなように調教、拷問してマンコを壊して処刑する事が出来ましたのに……。それで〝渡邉ゆかり〟に似たメス奴隷を見つけて、このトーナメントに参加した訳ですか。〝渡邉ゆかり〟ならば、このトーナメントに必ず参加する。そう思い、その願いを叶えてやろうというのですね。でも、〝渡邉ゆかり〟ではこのトーナメントでは勝てませんよ。琴音の母親、蜂須賀彩音でも無理でしょうね。勝てるのは、琴音やしずくのようなメス奴隷です。しかし、あなたもそれほどまでに〝渡邉ゆかり〟に傾倒していたのですね。その点については私も同感です。私も毎日〝渡邉ゆかり〟を処刑出来たら、それ以上の望みはありませんね・・

葉月はプロフィール欄を捲ってみた。メス奴隷サユリの調教師には「M、S」とアルファベットが書かれていた。

・・斎藤無我……。まったくイニシャルなんかで記入するものだから、わかりませんでしたよ。でも、斎藤なら、こちらが用意した道具の仕掛けに気付きそうですね。一回戦では、それに気付く調教師がいるかもポイントになりますからね・・

葉月はモニターを観ながら、唇を舌で舐めニヤリと笑っていた。

★　★　★　★

サユリは女調教師の意図に反して、子宮を串刺しにされても失神していなかった。

・・なんなのこいつは、普通のメス奴隷ではないよ。針を刺しても、蝋燭で焼いても駄目。もう後は鞭で叩きまくるしかないよ。ごめん、ヤチホ。私には、こいつを失神させる方法がまるで浮かばない・・

女調教師は鞭を手に取ると、開脚逆さ吊りにされているサユリの股間を見る。そして、サユリの股間に鞭を叩き込む前に、サユリの両足を吊っている鎖の滑車を回し、さらに足を開脚させた。それまで両足は〝V〟字の形に開いていたが、今は〝T〟字のように横一直線に近い程開かされていた。サユリの骨も軋む音を出し、その状態で吊られているサユリは呻き声を上げていた。

・・もう、この剥き出しのマンコを鞭で打つ以外ないよ。このメス奴隷のマンコ、鞭で全て抉り取ってやるわ・・

女調教師が悲愴な覚悟で鞭を構えた時、対する斎藤はヤチホの膣に挿入した針付きの蝋燭に点火し、ヤチホの膣を焼いていた。そして、次の蝋燭を取ろうとした時、用意されている蝋燭の中に微妙に色の違う蝋燭が混じっているのに気が付いた。

・・これは、まさか全て同じ蝋燭ではないのか。同じ蝋燭と見せか

けておいて、違う蝋燭も混ぜてある・・

斎藤は、その蝋燭を抜き出して手に取ってみた。

（注）初出は「変態異常自虐少女ゆかりの記録」１２話。その後「檻の中の幸福」ゆかりの章にも登場。「ゆかりの記録」２部、５話にて名前が判明する。

48、花梨（前書き）

遅ればせながらAブロックのトーナメント表、載せました。見映えとか突っ込むのはご容赦下さい（笑）

48、花梨

48、花梨

＜i973767－47352＞

斎藤は普通の蝋燭に混じった僅かに色味の違う蝋燭に気が付いた。

・・これは、明らかに種類が違う蝋燭だ。運営が用意する際、間違えて紛れ込んだのか……。いや、あの豪徳寺がそんな過ちを犯すとは考えられない。とすると意図して入れてあるんだ。いずれにせよ、運営で用意してある物だ。これを使用してもルール違反ではない。しかし、何がどう違うのか分からない。豪徳寺の事だ、自分の開発した試作品をこのトーナメントを利用して試そうとしているのだろう。どうする？効果は分からないが使ってみるか？・・

斎藤は悩んでいた。この蝋燭があまり効果がなければ、時間の無駄になってしまう。サユリの状況を見ると、あの狂気の女調教師がもうサユリを殺す勢いで責めている。いくらサユリと云えども、このままではそう長くはもたないだろう。

・・どうする？これを使うか、他の責めでこのメス奴隷を追い込むか？・・

斎藤は早く決断しなければと思いながら動けずにいた。それを、控え室のモニターで観ていた葉月はため息をついていた。

・・まったく、肝心なところで決断力がないですね。〝渡邉ゆかり〟も別に拒絶していた訳ではないのですから、その場で犯して連れ去れば良かったのですよ。むしろ、〝渡邉ゆかり〟もそれを望んでいたのではないでしょうかね。本当にイライラしますね。もう、こいつのチンポ、輪切りにスライスしてあげましょうか。それにしても、女調教師の方は逆に頭のネジが飛んでいるようですね。あの狂気、スイッチが入った時の神楽坂さんに似ていますね・・

葉月は手元の資料を捲り、ヤチホのプロフィール欄を確認してみた。そこの調教師の欄には〝カリン〟と名前が記載されていた。

・・〝カリン〟……。どこかで聞いた名前ですね。あの、八千代がオブジェとして展示されていたパーティーに招待されているくらいですから、どこかの名家の娘でしょうね・・

葉月はスタッフに端末を持ってくるよう命じ、その端末で調べてみるとヒットした。

・・〝神無月花梨〟。なるほど、神無月家の娘ですか。名前の通り、毒を含んでいそうな気性ですね。でもカリンは砂糖やシロップ漬けにすれば毒が分解されて無害になりますからね。あのカリンも、サユリのマンコを責められて喜ぶ甘い性癖に、牙を抜かれないように気を着けた方が良いでしょうね。まあ、でもサユリを失神させるのは今の方法が有効ですね。そして、斎藤があの蝋燭を使ってみれば、メス奴隷ヤチホは自分でも気付かぬうちに失神しているでしょうね。さて、どちらのメス奴隷が残って勝ち上がってくるのやら・・

葉月は楽しそうにモニターを見つめていたが、それとは逆に真剣にモニターを見つめている調教師がいた。それは、既に勝ち残って二回戦進出を決めているシズカの調教師だった。このメス奴隷サユリ

とヤチホの勝者と、シズカが対戦する事になる。シズカはまさかの延長勝負でかなりのダメージを受けている。サユリとヤチホ、どちらが勝ち残ってくるにしても、出来るだけダメージを抱えていて欲しかった。

・・良いぞ、お互いにもっと潰しあえ・・

シズカの調教師は祈るような気持ちでモニターを観ていた。せめてシズカと同程度のダメージ、あるいはそれ以上のダメージを負ってくれれば申し分ない。調教師はサユリとヤチホの対戦から目が離せずにいた。が、それとは対照的に意気消沈している調教師もいた。アヤコの調教師である、しずくの父親だった。それは、分からないでもない。せっかくＡシードに選ばれ一回戦はパス出来たというのに、二回戦での対戦相手がメス奴隷クルミなのだ。相手の不正が発覚し、不戦勝で勝ち上がったクルミはダメージを受けていない。

・・くそっ、せっかくのＡシードの意味がないじゃないか。あの不正を行った調教師、許しがたい奴だ・・

もう既に性器を破壊された挙げ句、串刺しにされ処刑されている調教師に向かって男は悪態をついていた。

★　★　★　★

斎藤は手に取った蝋燭に点火してみた。ジジジッと音がして蝋燭が燃え始める。斎藤は蝋燭を観察して、通常の蝋燭とは違う事にすぐ気が付いた。

・・これは、おそらく融点が高めてある。しかも、蝋燭に何か混ぜ込んであるようだ。すぐに冷えて固まらないような工夫がしてあるという事か。それに何だろう、この臭いは刺激臭がする・・

斎藤は、開脚逆さ吊りにされているメス奴隷ヤチホの性器をくぱぁと指で拡げた。少し湿ったヤチホの膣前庭が現れる。斎藤は、蝋燭に充分に溶けた蝋を溜め、一気にヤチホの膣前庭に蝋を流し込んだ。

「あっ、びゃあぁぁぁぁーーーーっ!!!」

その途端、獣のような凄まじい絶叫を上げヤチホの体はえびの様に反り返り、肛門からぶりぶりと大便が漏れていた。そして、通常ならばすぐに冷えて固まる筈の蝋が、まだ液体のまま固まらずにヤチホの膣前庭で揺れている。つまり、蝋を垂らされた時の温度がまだ持続しているのである。これは葉月が蝋に鉄分を混ぜる事でその持続性を高め、メス奴隷に苦痛を与える事だけを念頭に開発した蝋燭だった。

・・〝渡邉ゆかり〟は、この試作品の前の段階の蝋燭で失神した。このメス奴隷は更に強化したこれに耐えるのか。面白い。だが、この蝋燭はそれだけではないぞ・・

葉月は琴音に声をかける。

「琴音、お前がやられて一発で失神した、この蝋燭の責めをメス奴隷ヤチホは耐えたようですよ。どうです、何か感じますかね？」

「いいえ、養母（おかあ）さま。私がこれで失神したのは、もう随分前の話。今の私なら問題ないですよ。それに、このトーナメントでの話なら尚更です。私はこのトーナメントに全てをかけています。養母（おかあ）さま

には悪いですが、あの蝋燭ごときで失神したりはしませんよ」

琴音は、真っ直ぐな瞳ではっきりと口にする。葉月はその琴音の顔を見て微笑んでいた。

・・そう、その決意と覚悟こそが、このトーナメントを勝ち抜く為の力。そして、〝渡邉ゆかり〟にはなかったもの。私が見る中で、この決意と覚悟を持っているメス奴隷は、琴音としずく以外にはほとんど居ないでしょうね。何がなんでも勝つ。その強烈な意志こそがトーナメントを勝ち抜く秘訣なのですからね・・

葉月は、琴音としずくの顔を眺めると再びモニターに目を戻した。そこでは、カリンがサユリの性器に休みなく鞭を叩き込み、斎藤がヤチホの性器を凶悪な蝋燭で埋め尽くしている姿が映っていた。

４９、失態

４９、失態

斎藤はヤチホの性器に蝋燭を垂らしながら、まだこの蝋燭の正体が把握出来ていなかった。通常の蝋燭より遥かに融点が高く高温であるのは間違いない。それに、その高温を維持する為にすぐに固まらないよう設計されている。なので、ヤチホの小陰唇の襞の隙間やクリトリスの包皮の間にも入り込んで、余すことなくヤチホの性器を焼いている。しかし、それだけではないような気がする。

・・この刺激臭、そしてさっきまでよりメス奴隷が激しく苦しんでいる。明らかにもう耐えられる限界まできている。この蝋燭がどんな物か、まだ分からないが、向こうの調教師が気付く前にこれを使って、このメス奴隷に引導を渡してやる・・

斎藤は、この色違いの蝋燭の本数を確認する。それは、このメス奴隷を仕留める為には充分な本数が残っているように感じられた。

・・斎藤の奴、あの蝋燭の仕掛けに気付いたのでしょうかね。あれは融点を高くして固まらない以外に蝋燭の中に小さなカプセルに詰めた塩酸が仕込んであるのですよ。あれは、もう調教具などではありません。メス奴隷を処刑する処刑具なのです。ですから、使う場所を誤ると簡単にメス奴隷を殺してしまいますよ。あのメス奴隷は斎藤にマンコに大量に垂らされていますから、もうマンコは二度と使用出来ないでしょうね。もう、このトーナメントで万が一優勝し

て生き残ったとしても、マンコが使えないのは致命的ですから廃棄処分になるしかないでしょうね。哀れですね。でもそれが、メス奴隷の運命ですから仕方ないでしょう。惨めに命乞いしながら処刑されていく。最高ですね・・

葉月は楽しくて大声で笑いだしたかった。このトーナメントの為に集まったメス奴隷が、次々に性器を壊されて処刑されていく。これだけのメス奴隷が無様に処刑されていく姿に葉月は感無量だった。しかし、観客はさらにおかしくなっていく。何度も葉月の開催する公開処刑を観覧に来ている者たちであるが、もう先程から異様な興奮に包まれ、多数の観客が自分の性器を破壊し倒れ続けていた。

・・さすがにここまで連続して処刑を観ていると感覚が麻痺してくるのでしょうね。普通の公開処刑の時には自慰する程度ですが、このトーナメントでは自分の姿を重ねてマンコやチンポを壊したくなってしまうようですね。まったく、どのメスもオスも頭がおかしいとしか思えません。もちろん、私を含めてですが・・

沙也加は観客にも目を配り、倒れた者はスタッフに連絡してすぐ応急措置をするよう指示を出していた。その一方で、メス奴隷たちの対戦にも目を配る。休む暇のない忙しさであったが、この大役を務められるのは自分だけであると誇りに思っていた。

・・この対戦で今日は終了ですからね。とにかく最後まで務めあげないと……・・

しかし、朝から緊張し続けトーナメントの進行をしていた沙也加は、本人が思うより遥かに疲労していた。沙也加は本人も気付かぬうちに意識が遠くなり地面に倒れてしまっていた。倒れた沙也加を見て観客席からどよめきが起こる。

控え室のモニターでも沙也加が倒れる様子が映し出され、その場の全員が葉月の顔を注視していた。葉月主催のトーナメントである。そのトーナメントの最中に進行役が倒れるなどという失態は許されない。その失態を演じてしまった沙也加は、もう誰もが葉月が激怒して即刻処刑されると思っていた。

「おやおや、ここが限界でしたか。もう少しでしたのに惜しいですね。まあでも、よく頑張ってくれましたね。後は私がやりましょう」

控え室にいた調教師やメス奴隷は信じられないという目で葉月を見ていた。普段の葉月であれば、倒れた沙也加に激怒してすぐさま処刑してしまうところだ。それがまさかの労い(ねぎら)の言葉をかけている。処刑を観続けた観客がおかしくなっていったのに対して、葉月は楽しくて上機嫌になっていたのだ。

「いや、葉月。主催者であるあなたが行く必要はありませんよ。私が行きましょう。近くで対戦を観るのも楽しそうですからね。メス奴隷が壊されていく姿には滅美(ほろび)を感じますよ」

「まったく、大人しくしていたと思いましたら、結局我慢できませんか。それでは、お願いしますよ。えーと？」

葉月はここで資料を捲り、メス奴隷ハルカの項目を確認する。

「調教師ルイですか。なるほど、それでは頼みましたよ。それで、ハルカはどうしておけば良いですか？」

「そうですね。それでは処置室でマンコを壊しておいて貰えますか。こちらに来てから、向こうであなたから受けていた凄惨な拷問を受けていませんからね。体がなまっているでしょう。また、しっかり

と恐怖と絶望を思い出しておいて貰わねばなりませんからね」

エントリー票に調教師ルイと書かれた、黒いスーツにボーラーハット、サングラスにマスクをかけた人物が楽しそうに笑いながら控え室を出ていった。ハルカも首輪に付けられた鎖を引かれ、控え室から連れ出されていく。葉月とルイの会話が聞こえていたのか、泣きながら必死に抵抗していたハルカであるが、鳩尾に強烈な拳をぶち込まれゲロを吐きながら運ばれて行ってしまった。

「対戦前にマンコ壊しちゃって大丈夫なんですか？」

運ばれていったハルカを見て、しずくが心配そうに葉月に尋ねる。

「あのメス奴隷と調教師は、少し理由ありでしてね。大丈夫ですよ。あと、もう一組、理由ありがいますけど、そちらもBブロックに集めてありますからね。しずくちゃんが心配する必要はありません。自分が勝ち進む事だけを考えて下さい」

葉月の言葉でしずくは、よけい疑問が湧いてくるが確かにAブロックも強敵が多い。他人の事より自分の事を考えなければと、しずくは思っていた。そして、控え室の中を見回す。奥の方には治療の済んだ理恵が鎖で繋がれている。前方にはモニターを食い入るように眺めている父親と、同じく鎖に繋がれた母親の姿もある。その後しずくは中央に鎖で繋がれているメス奴隷に目を向けた。

・・メス奴隷アゲハ。私の対戦相手だよ・・

しずくが見ていると、アゲハもしずくに目を向けた。2匹の視線が交差する。アゲハの口が動き、勝つのは私と言っているようだった。そこには一回戦を突破した自信が漲っている。しかし、しずくの闘

志も負けていなかった。

・・私は〝渡邉ゆかり〟の妹。敗けるわけにはいかないよ・・

しずくも断固とした瞳でアゲハを見つめる。その頃、モニターの中では沙也加に代わりルイが進行を務め、サユリとヤチホの決着がいよいよつこうとしていた。

50、失神

50、失神

カリンの鞭捌きはなかなかの腕前であった。慣れていない者だと、思った所に一本鞭を打ち込むのは難しいものだが、カリンは正確に同じ場所に一本鞭を叩き込んでいた。

・・このメス奴隷の腸は焼いて子宮も串刺しにしてあるんだ。普通ならとっくに失神しているか、ショックで死んでいるだろう。それなのに何だ、このメス奴隷は……・・

カリンはサユリの股間を鞭で打ちながら、自分が追い詰められている感覚に陥り、自分のメス奴隷ヤチホの状態など確認している余裕がなかった。とにかく、少しでも多くサユリの性器に鞭を叩き込む。それ以外、頭の中になかった。もう少し冷静になり、運営が用意した蝋燭を確認する余裕があったなら、斎藤と同じように違う蝋燭が混じっている事に気がついただろうが、もうカリンは鞭を振る事だけに集中しており、その他の事は目に入らなかった。蝋燭の違いは非常に微妙で、昼間の強烈な太陽光線の下では全て同じ蝋燭に見えてしまうだろう。カクテル光線を使う、この夜間の時間だけが違いに気付くチャンスがあったのだが、カリンはその機会を逃してしまっていた。

一方、蝋燭の違いに気付いた斎藤は、その刺激臭の正体にも気付いていた。

・・これは〝酸〟だ。塩酸か、何か似たような物がこの蝋燭に仕込まれている。なんて事考える、豪徳寺。これは、もう処刑具だ。下手に使うと簡単にメス奴隷を殺してしまうぞ。だが、これはチャンスだ。向こうの調教師はまったく気付いていない。これで、このメス奴隷のマンコを破壊してやる。向こうから見たら蝋を垂らしているだけに見えるだろうが、実際はこのメス奴隷のマンコは溶かされている。見ろっ、もうクリトリスが消滅した。この調子で全て溶かしていく。さすがに、このメス奴隷も失神するだろうよ・・

斎藤は、ようやくヤチホを失神させる目処を立てた。このまま、小陰唇や膣前庭、会陰などの外性器を溶かしていき、それでも失神しなかった場合は膣や子宮などの内性器も溶かしていく。気を付けるのは内性器を溶かした場合、そのままメス奴隷が死んでしまう可能性がある事だ。だから、一気に溶かさず少しずつ溶かす必要がある。細心の注意が必要だが、斎藤は自分なら問題ないと自負していた。

「そろそろ決着がつきそうですね」

葉月の呟きに控え室の調教師やメス奴隷も頷いていた。そして、シズカの調教師は会心の笑みを浮かべる。サユリとヤチホ、どちらが勝つにせよ、ここまでのダメージを受けていればシズカが優位であるのは間違いないが、それでもどちらかといえばサユリに勝って貰いたかった。それは、あのカリンという女調教師より、斎藤という調教師の方がやり易いと感じていたからだった。

・・あのカリンは神楽坂沙也加に似ている。あれをシズカにやられてはたまらない。オーソドックスな責めの斎藤の方が時間を稼げるだろう。その間に俺がダメージの大きいサユリを仕留めてやる・・

シズカの調教師は、密かに自分はもう三回戦、つまり準々決勝に進

出出来るだろうと考えていた。

★　★　★　★

・・やはり、モニターと違い間近で観戦できるというのは良いですね。メス奴隷の苦しみがダイレクトに伝わってきて、興奮してきますよ・・

ルイの前で調教師に責められているサユリとヤチホが顔を歪めて絶叫している。

・・ここまでされて死なないのは驚嘆に値しますね。ですが、精神力だけで何時までも耐えられるものではありません。それは突然やって来ます。自分は大丈夫と思っていても、無情に意識を断たれる瞬間は本人も気付かず訪れます。もう、これは運命ですね。このメス奴隷たちには、それが何時きてもおかしくありません。さあ、無様に失神する姿を私に見せて頂けますか・・

ルイは、その瞬間を見逃さないように2匹のメス奴隷を目を皿のようにして見つめていた。それは、控え室も観客席も同様だった。もう誰の目にも、もうすぐ決着がつくという確かな予感があった。サユリもヤチホも、口からブクブクと泡を吹き出し、もう失神寸前であった。

ヒュン、ヒュン、ヒュン

カリンの放つ鞭の一撃は、目に見えない程高速で、しかも連続でサユリの性器に叩き込まれている。

シュワァッ

斎藤は、ヤチホの膣を溶かし始めていた。会場内に歓声が沸き起こり、興奮が頂点に達しようとした時、それは突然やってきた。メス奴隷の瞳がクルッと白眼を剥き、その体から力が抜けたようにだらんと吊り下がっていた。もう1匹のメス奴隷は、口から泡を吹きながら、まだ絶叫している。誰の目にも勝敗は明らかだった。ルイの右手が上がる。

「ビクトリー、ヤチホ」

その、ルイの宣言が耳に入り斎藤は、自分のメス奴隷サユリの敗北を知りガクッと膝をついていた。

・・すまん、〝ゆかり〟。僕はまた失敗したみたいだ・・

斎藤はサユリにではなく、心の中の〝ゆかり〟に謝罪していた。

ハァハァハァハァ

カリンもルイの宣言が聞こえた瞬間、喜びよりも信じられない気持ちだった。その瞬間まで自分が勝てるなどと思っていなかった。カリンは、逆さに吊られて呻き声を上げているヤチホを見る。

・・これは、私の力で得た勝利じゃないよ。私のメス奴隷ヤチホが相手のメス奴隷サユリより少し優れていただけだよ。二回戦までに私自身の力を上げていかないと勝ち抜く事は不可能。気合いを入れ直さないと・・

カリンもまた精魂尽き果て、ガクッと地面に膝をついていた。そして、ヤチホは拘束を解かれ応急治療の為、運ばれていった。

「メス奴隷を処刑する体力は残っていますか？」

ルイがカリンに声をかけるが、カリンは弱々しく首を横に振るだけだった。ルイはスタッフに指示を出し担架を持ってこさせるとカリンを乗せ医務室まで運ばせていった。

「調教師カリンの体力が限界の為、敗者サユリの処刑はスタッフにて執行させて頂きます」

ルイがマイクを持ち楽しそうに宣言する。その時、控え室でも心の中で喜びを噛み締めている者がいた。シズカの調教師である。

・・あのメス奴隷のダメージは1日のインターバルで回復出来るものではない。調教師も担架で運ばれたあの様子では二回戦に万全の状態で挑むのは難しいだろう。どうやら潮目が俺に向いてきたようだな・・

シズカの調教師は、これで自分の調教師としての名前も知れ渡ると、ほくそ笑んでいた。

51、明暗

５１、明暗

斎藤は放心したように地面に座り、吊られたまま失神しているサユリを見つめていた。彼の頭に去来するのは、あの時と同じ思いだった。それは、強引に〝渡邉ゆかり〟を手に入れなかった時と同じ、今回もお互いの力は拮抗していた。斎藤が、早くにカリンのようになりふり構わずヤチホを責めていれば勝利の行方は変わっていたかも知れない。

「あなたのメス奴隷の最後を観ていきますか？」

ルイが斎藤に声をかけると、斎藤は大きく頷いた。

「僕のせいで敗けたようなものです。サユリの最後はきちんと見届けます」

斎藤は運ばれてきた椅子に腰かけると、しっかりとした眼でサユリを見つめていた。気付け薬を嗅がされたサユリは、しばらくして意識を取り戻し周りを見回し自分が敗北した事に気付いた瞬間、申し訳ありませんと号泣していた。斎藤は椅子から立ち上がりサユリに近付いていく。

「いや、サユリはメス奴隷として立派に戦った。サユリのおかげで僕も色々気付いたよ。メス奴隷として最後の務めだ。ここにいる皆

さんを楽しませるように無様に処刑されてくれ。今度は処刑されるのだから、もっと苦しいぞ。サユリのマンコは全て壊すように頼んでおくから、存分に泣き叫んで最後を迎えてくれ」

「は、はい。でも怖いです」

「いくらメス奴隷でも元は人だからね。当然だろう。でもサユリにもメス奴隷としての矜持があるだろうからね。ここは胸を張って処刑されなさい。でも、最後だからどんな姿を晒してもいいんだよ。僕もサユリが完全に絶命するまで観ているからね」

斎藤はサユリに最後の言葉をかけると再び椅子に腰を下ろしてサユリを見つめた。その斎藤の瞳からは涙が零れていた。その涙は、自分のメス奴隷サユリを失う事への涙なのか、同じ過ちを繰り返してしまった自分への後悔の涙なのか、あるいはその両方だったのか、斎藤自身にも分からなかった。

★
★
★
★

花梨は医務室のベッドで点滴を射たれながらトーナメント表を見ていた。

・・今日勝てたのは紙一重だった。私の力不足でヤチホに大きなダメージを与えてしまった。二回戦は速攻で勝負を決めないとヤチホがもたないよ。この相手のシズカの対戦は観ている。シズカも延長勝負でマンコが切断されてしまっている。それは、明日1日では完治など不可能だろう。悪いけど、そこを徹底的に責めさせて貰うよ・

・

花梨は、ヤチホの状態にもよるが次の二回戦はいけるのではと考えていた。今まで戦っていたサユリに比べると、シズカには恐ろしさは感じない。それに性器にダメージを負っている。

・・それより問題は準々決勝の方だよ。おそらくアヤコというメス奴隷が勝ち上がってくるだろうね。なにしろ、プロフィールを見るとあの〝渡邉ゆかり〟の母親だよ。今日のメス奴隷サユリは〝渡邉ゆかり〟に憧れていたレプリカだった。それでも、あれだけの強さだったんだ。それが、オリジナルの大元のメス奴隷が出てくる。それまでに対策を考えておかないと私は敗ける・・

花梨がベッドで頭を悩ませていると、トントンとドアがノックされた。花梨が、どうぞと答えると恐ろしく冷たい目付きに笑顔を浮かべた人物が入ってきた。

・・ご、豪徳寺……。なぜ……？・・

「神無月さんですね。お疲れ様です。そして、お久しぶりです。あの時は失礼しましたね」

葉月は笑みを浮かべて花梨の寝ているベッドに近寄ってきた。花梨は、何か武器になる物はないかと付近に目を走らせるが、ベッドの周りには何もない。

「な、なんでしょうか？」

花梨が震える声で答えると葉月は、ゴツいサバイバルナイフを持っていた。葉月はナイフを逆手持ちに握り花梨の寝ているベッドに腰かけていた。そして、ニヤリと笑うとダンッとベッドにナイフを突

き刺した。それは薄い掛け布団の上から花梨の足の間、股間の下に深く突き刺さっていた。

ショオォォーーッ

「う、うぅぅっ」

花梨の足の間から勢いよく尿が漏れ布団を濡らして染みを作っていく。その染みに僅かに赤いものが混じっていた。

「あらあら、私も腕が落ちたのかしら。神無月さん、ごめんなさいね。マンコ、少し切っちゃったみたいね」

わざとらしく笑う葉月に花梨は恐怖を感じていた。自分が何か葉月の逆鱗に触れる事をしてしまったのかと、ぶるぶる震え言葉を出す事も出来なかった。

「あら、神無月さん。そんなに震える必要はないわよ。私は激励に来たのよ。あなたの鞭の腕はなかなかね。あれだけの速さで正確に鞭を叩き込む。なかなか出来るものじゃないわね。でも体力がなさ過ぎるわね。私なら軽く一時間は振っていられるわよ。そんな事では決勝までくるのは不可能よ。明日のBブロックの一回戦もよく観ておきなさい。あなたが驚くようなメス奴隷が出てくるわよ。色々参考になると思うわ。それでもBブロックで勝つのは私ですけどね」

葉月は自分の言いたいことだけ言うと、ナイフを抜いてさっさと出ていってしまった。一人ベッドに残された花梨は、今度は漏らしてしまった布団をどうするか頭を悩ませていた。

★★★★

サユリの胸に心電図のセンサーが装着され、処刑の準備が整っていた。

「皆様、お待たせしました。これより敗者のメス奴隷サユリの処刑を執行します」

ルイが嬉しそうに処刑開始を告げ、右手にクーパーを握っていた。そのルイの姿から観客もすぐにサユリが何をされるか理解し大いに盛り上がっていた。

「やっぱり、これはやって貰わないとな。これをやられる瞬間のメス奴隷が一番好きなんだよ」

「そうですよ、マンコが切られていくって良いわよね。メスの大切な部分が壊されるのって最高ね」

「クリやビラビラを切っちゃうって何度見ても楽しいわね。今度、私のマンコも切除処置して貰おうかしら」

「あら、それならマンコ処刑して貰った方が良くない。女として終わらせて貰うと、メス奴隷以下になったみたいでゾクゾクするわ」

観客たちの興奮した声がダイレクトに聞こえルイも興奮していた。

・・このトーナメントも異常なら、それを観に来る観客も異常という事ですね。こんな人間ばかりで、この惑星（ほし）の行く末が心配になってきますが、私の知ったことではありませんね。さあ、それでは楽

しみますか・・

ルイは、観客たちが期待して見守る中、サユリの小陰唇を摘まむと、まず短冊切りにジョキジョキと切断していった。

「あぎゃあぁぁぁぁーーーーっ！」

サユリが涙を流して絶叫するがルイは構わず、左右の小陰唇を短冊切りにしてしまう。

「あぶぶぶぶふぅ、ぶぶうぅぅぅっ」

小陰唇を短冊切りにされたサユリは大量に涙と鼻水を流し号泣していた。

・・ふふふっ、このメスのビラビラを切る手応え、感触がたまりませんね。それでは、短冊に切ったビラビラを一つずつ根本から剪(き)っていきますよ・・

ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ

「あびゃあぁぁぁぁーーーっ、マンゴ、じぬうぅぅぅーーーーっ！」

泣き叫ぶサユリの性器からルイは小陰唇を全て切除してしまう。そして、今度はクリトリスをクーパーで鋏む。それも根本から切除するのではなく。一度、縦に二つに切断するつもりのようだった。

ジョキーン

「ふんびゃあぁぁぁぁーーーっ！」

サユリのクリトリスは縦に二つ割りにされていた。

・・あははっ、楽しくてたまらないですね。葉月がメス奴隷を処刑する気持ちが理解出来ますね・・

次にルイは、縦割りにしたサユリのクリトリスを根本からあっさりと切除してしまった。性器を壊されていくサユリの哀しげな絶叫が夜空に響いていた。

52、愉悦

52、愉悦

サユリの小陰唇とクリトリスを切除したルイは処刑の次のステップに進む。

・・肛門と直腸は、もう完全に壊されていますから、次は尿道、膣、子宮ですかね。そうそう、卵巣も忘れずにいきませんと。それでは、おしっこの穴からいきますか。葉月はよく尿道にロングニードル突き刺して、膀胱も貫通させて下腹部からニードルの切っ先を突き出させてましたけど、私もやってみたいですね・・

ルイは人の指よりも太いロングニードルを右手に持ち、左手でサユリの性器をくぱぁと拡げる。そして、膣前庭に尿道口を確認するとニードルの先端を軽くグニッと突き入れた。

・・ふふっ、これから、このメス奴隷の尿道を壊して膀胱も串刺しにすると思うと、ゾクゾクしますね。どんな声を上げてくれますかね。思い切り泣き叫んで苦しんでくれると嬉しいですね。・・

ルイは、その感触を楽しむ為、ゆっくりとサユリの尿道にニードルをズルズルと容赦なく挿入していく。

「ひぎぃぃぃぃーーーーっ！」

ローションもジェルも何も塗布せずに細い尿道に押し込まれていくニードルは、サユリの尿道をビリビリと割いていく。そして、３センチ程押し込むとニードルが何かに当たった感触があった。

・・膀胱の括約筋に当たりましたね。それでは一気に串刺しにしますか。このメスのおしっこの穴はこれで終わりです。ワクワクが止まらないですね・・

ルイはニードルの後端に手のひらを当てた。これで一気にサユリの膀胱を串刺しにするつもりである。

・・それ、いきますよ・・

ズボウッ！

「あびゃあぁぁぁぁーーーっ！！」

ルイはサユリの尿道に一気にロングニードルを押し込む。サユリは絶叫し、サユリの下腹部から血塗れのニードルの先端が飛び出していた。

・・あぁ、たまらないですねぇ。このメス奴隷の膀胱を串刺しにして腹を突き破る感覚。病み付きになりそうです。なるほど、葉月が何本ものニードルで尿道を串刺しにするのは、この感触が楽しいからですね。最高ですね、メス奴隷の膀胱を串刺しにして腹を突き破るのは。確か、あの〝渡邉ゆかり〟は葉月に９本ものニードルで膀胱を串刺しにされ壊されていましたね。あのメス奴隷の無様な姿は忘れられません。９本もニードルを打ち込んだのは葉月も初めてだと興奮していましたからね。確かにあのメス奴隷は特別だったのでしょう・・

ルイは、サユリの尿道を見るが、最初に太いニードルを使用した為、9本を打ち込むのはとても無理だった。

・・失敗しましたね。細いニードルを数多く打ち込んだ方が楽しめたのですね。迂闊でした。このメス奴隷の体を貫く感触。一度これを味わってしまうと、もう止められませんね・・

ルイは残念に思いつつ、次の膣破壊に進む。フードプロセッサーを改造してモーターを強化し、回転刃の部分を氷も砕くチタンカッターに換装した器具を手にする。

・・ふふっ、次にこのフードプロセッサーの回転刃を膣に入れて、このメス奴隷の膣をミンチにしてやりましょう。ミンチにした膣を後で皆で食するのも良いですね。なかなかの美味であるのは間違いないでしょうね・・

サングラスとマスクで隠れて見えないが、ルイの顔は残酷に微笑んでいるのは間違いないだろうと思われた。そして、ルイはフードプロセッサーの回転刃をサユリの膣に挿入していく。サユリは自分の性器に何をされているのか分からなかったが、観客の興奮した声と、自分の膣に入ってきた冷たいチタンカッターの感触に、これから自分の膣が破壊されるのだと理解した。

「はひゅーっ、はひゅーっ、はひゅーっ、はひゅーっ」

自分の性器が破壊されていく恐怖でサユリの息が荒くなっていく。もう、サユリの顔面は涙と鼻水と涎で激しく汚れていた。

・・ふははっ、良い顔ですよ。こんな間近で、メス奴隷の恐怖に怯

える無様で汚れた顔を観賞出来るなんて素晴らしいですね。さあ、それではその顔を苦痛で歪めなさい・・

ルイは、カチッとフードプロセッサーの電源を入れた。鋭いチタンカッターが高速でサユリの膣内で回転する。

キュイィィーーーン

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！あびゃびゃびゃびゃびゃあぁぁぁぁっ！！」

サユリは大きく反り返り絶叫する。サユリの膣口からは血と細かな肉片となった膣壁が噴き出していた。サユリはブクブクと泡を吹き、もし肛門や腸が破壊されていなければ大便も漏らしていたのは間違いなかった。

・・おっと、勿体ないですね。あまり外に飛ばさないようにしなければ・・

ルイは、ミンチにしたサユリの膣をなるべく外に飛ばさないように注意しながら、サユリの膣を破壊していく。そして、サユリの膣を完全にミンチにしたルイは、スプーンでその肉をタッパーに移していた。そして、ミンチにしたサユリの膣を全てタッパーに移し終えると、サユリの股間には丸くぽっかりと大きな穴が空いていた。その穴の奥には赤黒い子宮が顔を見せている。

・・次は子宮ですね。良いですね、メス奴隷のマンコを順番に壊していく。こんな楽しい事は他にありませんね。それでは、この電極棒を子宮口から挿入して通電してあげますか・・

ルイは気付け薬を嗅がせサユリを気付かせると、電極をサユリの子宮に突き刺し通電する。

「はぶぶぶぶぶぶぶうっ、ぶっぶうぅぅっ、ぶぶぶぶぶうぅぅぅっ」

サユリは舌を突きだし、体をぶるぶる震わせながら意味不明の言葉を吐き苦しんでいた。ルイは、そのサユリの苦しむ姿を楽しそうに眺めていた。

・・おっと、いけない。あまりに楽しくて時間を忘れていました。このまま、このメス奴隷の苦しむ姿を見ていたいところですが、先に進みませんとね・・

ルイは通電を止めると電極を抜き、細く長い注射針を2本用意した。本来、採卵に使用される注射針であるが、これを卵巣破壊に使用しようと考えているようである。ルイはサユリの子宮横に針を突き刺すと、そのまま奥深くまで針を押し込みサユリの卵巣に針を突き刺した。左右二つの卵巣に針を刺したルイは、なんと卵巣に塩酸を注入していた。

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ!!!」

サユリは狂ったように絶叫し、そしてそのまま本当に発狂してしまった。

・・メスの根源を壊されて発狂しましたか。このまま、腹の中もどんどん溶かされていきますから、もう長くは持たないでしょうね。でも、まだ痛め付けますよ・・

ルイはサユリの尿道に突き刺していたニードルを抜き、3本の筒状の物を取り出した。

・・これは特製の打ち上げ花火です。と言っても夜空に打ち上げる花火ではありません。葉月が〝渡邉ゆかり〟から聞いたというマンコ内に打ち上げる花火ですよ。通常の花火と違いマンコを壊す為に強化してあります。これで、このメス奴隷に引導を渡してあげましょう・・

ルイはサユリの尿道、膣穴、肛門に花火の筒を挿入し抜けないように固定する。

・・さあ、これでサヨナラです。15連発ですからね。体の中に拳銃の弾丸を射ち込まれるようなものです。もう生きてはいられませんね・・

ルイは楽しそうに3本の花火に点火した。

ボンッ、ボンッ、ボンッ、ボンッ、ボンッ、ボンッ、ボンッ、ボンッ、

サユリの体の中に花火が打ち込まれる。その度にサユリの体は人形が踊るように動いていた。そして、連発花火が打ち終わると、サユリの体はもう動く事はなかった。心電図のモニターもピーッとフラットになっていた。

53、散会

53、散会

サユリは哀れに絶命した。それを見届けた斎藤は椅子から腰を上げると歩き出していた。

・・僕はまだ力も経験も足らない。それを思い知らされた。せっかく、サユリという良いメス奴隷を手に入れたのに、それを失ってしまった。もっともっと精進しなければいけない。そして、いつかこのトーナメントで優勝してやる・・

斎藤は控え室に歩いていくと、葉月がそこにいる調教師やメス奴隷に声をかけていた。

「無事にメス奴隷処刑トーナメントの一日目が大いに盛り上がり終える事が出来ました。特に今日勝ち残ったメス奴隷はご苦労様。明日はゆっくりと休んで二回戦に備えて下さいね。調教師の方も今日はメス奴隷に栄養価の高い好きな物を与えて下さい。食堂のスタッフに申し付けて貰えば何でも用意しますよ。もちろん、お酒もですね。明日、対戦のBブロックの方たちも同じ様に寛いで下さいね。その後は各自に割り当てた部屋でお休み下さい。調教師の方とメス奴隷が同室になりますが、それが嫌な方は言ってくだされればメス奴隷用の個室の檻が地下にありますので、そちらにメス奴隷を繋いでおく事も出来ますよ。それでは、本日はお疲れ様でした。そして、明日対戦の方は今日以上に盛り上がるよう頑張って下さいね」

葉月の言葉でゾロゾロと控え室から出ていく中で、残っている者もいた。

「豪徳寺さん、今日も調教室は使えるのかい？」

質問してきたのは佐瀬だった。

「もちろん、自由に使って構いませんが、今日ダメージを受けたメス奴隷を回復させなくて良いのですか」

「ふん、俺のメス奴隷はそんなやわじゃない。それより、常にメスを痛め付けていないと俺の勘が鈍るんだよ。なにしろ、次勝てばそこにいる渡邉しずくと対戦になるかもしれないからな」

「ずいぶんな自信ですね。自信は美徳といいますから結構ですが、次に当たるミホというメス奴隷はあなたがモモコにした事と同じ責めを受けて耐えていたのですよ。あまり、甘くみない方がよろしいのでは。まあ、でもあなたのメス奴隷は非常に良いメス奴隷ですからね。私もよく知っていますので、あなたの失敗もあのメス奴隷ならカバーしてくれるでしょうね。あなたには勿体ないですよ、あの加納理恵というメスは」

「なんだとっ！」

佐瀬が怒気を含んで葉月に掴みかかろうとしたが、佐瀬の喉元に葉月のタングステン鋼のメスの切っ先が当てられていた。

「ここで解体して差し上げてもいいですが、トーナメントに穴が空いてしまいますからね。あなたもお腹が空いてイライラしているの

でしょう。空腹を満たして落ち着きなさい」

「くっ」

葉月の言葉で佐瀬は、理恵の首輪につけた鎖を引くと控え室から出ていった。控え室から出る前、理恵はしずくを見つめると嬉しそうな笑みを送ってきた。しずくも理恵に向かって微笑み返した。しずくと琴音は別にして、通常メス奴隷同士の会話など許されない。なので、しずくも理恵も言葉は交わさなかったがお互いの瞳で語り合っていた。

・・理恵さんは私の成長を確かめようとしているんだ。私は負けない。勝って理恵さんに今まで育てて貰ってありがとうという気持ちを伝えるんだ・・

「さて、それでは私たちも食事にしますか」

麗華が理津子の車椅子を押し、控え室から出ていく。しずくも鎖に引かれてついていった。

・・麗華さん、チャンスですね。この機に豪徳寺の屋敷を調べてみましょう・・

・・はい、さすがの豪徳寺もこのイベントの盛況で気が緩んでいるようですね・・

理津子と麗華はニヤリと笑みを浮かべていた。

★　★　★　★

野外の会場でも観客たちがぞくぞくと帰路についていた。サユリの遺体は既に運ばれ、スタッフが辺りの清掃を始めている。ルイは、その人の流れを眺めてから夜空を見つめた。

・・歴史は繰り返すというが、中世の魔女狩りが人々の娯楽だったように、この時代でもメス奴隷の処刑が娯楽と化している。人間というのは愚かな者だな。けっきょく、一部の人間だけが得をするというのにな。この先、どうなっていくのか。まあ、私の知ったことではないがな。せいぜい楽しませて貰うとしよう・・

ルイが夜空を見上げ物思いに耽っていると声をかけられた。顔を向けると沙也加が立っていた。

「葉月様に謝罪にいき許して貰えました。そして、私の代わりに進行や処刑をして下さったと聞きました。明日、Bブロックの対戦があるというのに申し訳ありません。ありがとうございました」

深く頭を下げる沙也加にルイは笑いかけていた。

「いや、私も楽しかった。礼には及ばない。葉月も、負担をかけてしまったようだと心配していたな。だから、気にする事はない。私も自分の世界で、こんなイベントやりたくなってしまうよ」

葉月同様、ルイも上機嫌であった。

「明日は私の連れてきたメス奴隷ハルカの出番ですからね。楽しみで仕方ないですよ。おっと、いけない。ハルカのマンコ壊して貰っているんだった。もう、済んでいるだろうから引き取りにいかねば。

それでは、後は任せましたよ」

ルイはそそくさと屋敷に向かって足早に歩いていった。沙也加はルイの後ろ姿にお辞儀をしてから、周りのスタッフに声をかけトーナメントの初日の後片付けに取りかかった。

★　★　★　★

二階堂遥は処刑台の上に仰向けで大の字に拘束されていた。さんざん性器を鞭で打たれ、針を刺され、これから性器を完全に破壊されようとしていた。

「ゆるじでぐだぢゃいっ、ごれいじょうわだちをいじめないでぐだぢゃいっ」

遥は号泣して許しを請うが、当然許されるはずがない。

「お前のマンコを二度と使用できないようにしとけという命令だからな。完全に壊させて貰うよ」

豪徳寺家のスタッフの男は残酷に遥に告げる。その時、後ろで荒い息が聞こえた。

「あ、あの……♡わらしのオマンコも二度と使用できないように徹底的に容赦なく完全に壊してくらちゃい♡」

「はぁっ」

男が振り向くとそこには金髪ロリの首輪をつけたメス奴隷が、興奮して息を荒くして立っていた。その金髪ロリのメス奴隷はもう、太ももの内側まで光るほど濡らしてしまっている。

「今日、一日メス奴隷の処刑を見ていて、もう発情して治まらないようなんですよ。構いませんから、マンコ壊してやって下さい」

そのメス奴隷の調教師と思われるイケメンの男がスタッフに告げていた。

「わたしのオマンコ壊されちゃう♡あひゃっ♡切開されれたりすりゅの♡オマンコ、ガバァッってひろげらりぇて、その中も壊されりゅう♡あひゃっ、あひゃっ♡」

金髪ロリの足下には、もう水溜まりが出来ていた。

54、淫獣

54、淫獣

金髪ロリのメス奴隷は自分から望んで性器破壊を申し出ていた。処刑台に拘束されている遥は信じられないという眼で金髪ロリのメス奴隷を見ていた。そのメス奴隷は開脚逆さ吊りにされていく。おそらく、まず性器を鞭で打たれるのだろうと遥が考えていると、案の定、男は鞭を手にしていたが、そのまま壁に付いているインターフォンの受話器を持ち上げていた。

「おい、誰か手を貸してくれないか。変なメス奴隷がマンコ壊してくれと言ってるんだよ。俺は葉月様に頼まれたメスのマンコ壊さなければならないからな」

男は他のスタッフに声をかけていたが、どのスタッフも今日の後片付けと明日の準備に手一杯のようで誰も男を手伝いに来てくれる者はいなかった。

「はぁ、俺一人でかよ。めんどくさいから爆薬詰めて爆破して手っ取り早く終わらせちまうか」

男がため息をつきながら棚に爆薬を取りに行こうとすると声をかけられた。

「それでは私が、金髪の方のマンコ壊して差し上げますよ」

男は、その声をかけてきた人物を見て息が止まりそうになり直立不動の姿勢をとっていた。その人物は黒いスーツにボーラーハットを被り、サングラスにマスクをしていた。

・・葉月様のご友人のお方だ。どうしてこんな所に。何か失礼な事をしてしまったら処刑されるぞ・・

男は緊張のあまり声が出なくなっていた。

「私のメス奴隷の様子を見に来たのですが、どうやら馬鹿どもが迷惑をかけているようですね。この淫乱ロリは私が始末しておきますよ。問題ないですよね」

「は、はいっ。よ、よろしくお願いします……」

男はやっと掠れた声を出していた。緊張で体は震え全身から汗が吹き出している。しかし、恐怖で震えているのは男だけではなかった。

「お、俺は部屋に戻っていますので……」

アサヒは逃げるように後退りして、クルッと向きを変えると一直線に走っていった。

「あ、あの私、明日対戦ないから少し調教して貰おうかなと思っただけですぅ♡ごめんなさい、ゆるじでぐだぢゃいっ♡」

吊られている金髪ロリがぶるぶる震えながら泣き出していた。

「何も謝る事はありませんよ。マンコ壊して欲しいのでしょう。私

が壊してあげますよ。また、痛覚も１０００倍にして発狂も失神も出来ないようにしてあげますから楽しいでしょう、ミアン。私もつい先程まで処刑を楽しんでいましたからね。まだ興奮が治まらないのですよ。あなた、相手ならどんな事をしても問題ないですからね」

「おねがいじまぢゅうぅっ♡ゆるじでぐだぢゃいぃぃぃっ♡」

「うーん、良いですね淫乱狐。もっと惨めに泣きなさい。あなたが以前逃げた責めを実行してあげますよ。これも葉月が大好きな責めのようなので私も興味ありましてね」

ルイはミアンの目の前で炭を起こし始めた。

「いやぢゃあぁぁっ♡そりはゆるじでぐだぢゃいぃっ♡」

「この白炭は葉月が用意した最高級の炭のようですからね。長時間安定して高火力を維持するそうですよ。きれいに中まで火が通るそうですから、上手い具合に焼けるでしょうね」

ルイはステータイプの膣鏡をミアンの膣に挿入しネジを締めてミアンの膣を大きく開口していく。膣の奥にミアンの子宮が顔を見せている。

「どうやら炭の燃焼が安定してきましたね。それでは、いきますかミアン」

「いやぢゃあぁぁっ♡ゆるじでぐだぢゃいぃっ、じんぢゃうよおぉおぉっ♡」

「そんな事言いながら、なんですかこれ?ヌルヌルに濡れているで

はありませんか。本当はマンコの穴に入れて欲しいのでしょう。正直に言うのですよ。ほら、私にお願いしなさい」

「うぅっ、私のマンコの穴に焼けた炭を落としてくらちゃい♡私のマンコの炭火焼きをしてくだちゃい♡お願いじまぢゅっ♡」

「はい、良く言えました。自分からマンコ焼いて欲しいなんて本当に頭のおかしい変態ですね。まあ、そんな風にしてしまったのは私ですが、ここまでドMに育つとは想像していませんでしたね。でも、メスのマンコ潰すのは楽しいですからね。それでは、いきますよミアン」

開脚逆さ吊りで膣鏡を操縦され大きく膣を開口されているミアンは次に自分の身に起こる事を想像し、ぶるぶる震え泣きながらも性器を激しく濡らしていた。ルイは起こした白炭を火箸でつまみ上げミアンの膣の上に持っていく。その激しい熱気でミアンはチョロチョロと尿を漏らしてしまっていた。

「ああ、先に尿道を潰しておかないと駄目ですね。今度は細いニードルを何本も使って串刺しにしてあげましょう。あぁ、心配しないでも大丈夫ですよ、ミアン。尿道から膀胱串刺しは先程経験しましたからね。もう立派な経験者です。ミアンなら〝渡邉ゆかり〟と同じ9本はいけるでしょうね」

ルイは楽しそうにニードルを手にするとミアンの尿道にスルッと挿れていく。そして、膀胱の手前でニードルの後端に手のひらを当てる。

「ここから膀胱を串刺しにして腹を突き破る感触が最高なのですよ。思う存分苦しみなさい、ミアン」

ルイは力を入れ一気にミアンの膀胱にニードルを突き刺した。

ブツウゥゥゥッ！

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ♡」

絶叫するミアンの腹を突き破り、膀胱を串刺しにしたニードルの先端が飛び出していた。

「あははっ、最高。まだまだいきますよ」

ルイは次々にミアンの尿道にニードルを挿入し膀胱を串刺しにしていく。ミアンの尿道はビリビリに割かれ、膀胱も穴だらけにされ、腹からは9本の血塗れのニードルが顔を出していた。

「いやぁ、楽しいですね。どうです、痛覚の感度あげているのでミアンも楽しいでしょう。そんな白眼剥いて泡吹いて気絶したふりをしても無駄ですよ。発狂と失神出来ないようにしてありますからね。それでは、マンコの穴に炭を入れてあげますね。一般的に炭の温度は６００度くらいですが、痛覚１０００倍にしてありますからね。６００，０００度、くらいに感じるでしょうね」

改めて白炭を火箸で摘まんだルイは、ミアンの膣の中にポトッと炭を落とした。

「あんびゃあぁぁぁぁーーーーーっ！びゃびゃびゃびゃびゃあぁぁぁっ！！」

ぶり、ぶり、ぶり、ぶりぃぃぃっ

大きく反り返り絶叫したミアンの肛門から大便が噴き出していた。

「締まりのない穴ですね。ウンコまで漏らしますか。これは後ろの穴も潰す必要がありますね」

ルイは肛門鏡をミアンの肛門に挿入し、肛門も大きく拡げてしまう。

「交互に入れていきましょうか」

ルイはミアンの肛門にも炭を落とし、次には膣に炭を落としていく。ミアンはもう獣のように絶叫し、膣と子宮、直腸を容赦なく焼かれていった。その凄まじい様子を処刑台の上から見ていた遥は、歯の根も合わぬほどガタガタと震え、声も出せなかった。そして、スタッフの男もその凄惨なミアンの姿に硬直していた。炭を一杯まで詰められ団扇で煽られたミアンの膣と肛門からは炎が噴き出していた。その炭の温度は推定1，０００，０００度には達しているだろう。ミアンの性器も腸も、もうドロドロと融け出している。それでも、失神も発狂も出来ないミアンの絶望的な断末魔の絶叫が調教室に大きく響いていた。

54、淫獣（後書き）

途中から読んで下さっている方へ
今回登場のメス奴隷は天月先生の「魔法学園幻術科　幼狐先生は頑張ります！」主人公ミアンちゃんです。実際はメス奴隷ではなく立派な先生でありますが、先生のご厚意でこの処刑トーナメントに参加頂きました。
本家の方では丁度地獄に堕とされ、もっと酷い責めを受けております。
すので是非お読みになって下さい。自分のお話を読んでくれている方なら、きっと気に入ると思いますよ。

55、感情

55、感情

カエデというメス奴隷がいた。調教師に首輪に付いた鎖を引かれてヨタヨタと歩いている。カエデは高手後手に両腕を拘束され、足首に装着された足枷の間には、1メートル以上長さのあるスチールパイプが取り付けられ、大きく足を開いたまま閉じられないようになっていた。メス奴隷は当然皆全裸にされているのでカエデの性器は丸見えだ。そんな足を閉じられない状態の為にカエデはヨタヨタと倒れそうな歩き方になっているのだった。

・・今日一回戦を観た限りでは思った以上に過酷なトーナメントだな。でも、想定外という程でもない。それに、重要なのは自分のメス奴隷との信頼関係だ。おそらく大概の調教師はそこがまだ不十分だ。今日観た中では佐瀬という調教師とリエというメス奴隷の信頼関係はゼロだな。どちらも自分の目的の為に動いているに過ぎないだろう。どちらかの目的が達成されてしまえば、そこで力尽きてしまうだろうな。だから、奴らは恐れるには値しない。それに比べて今日の最終戦はどちらも互いにメス奴隷との信頼が強かったようだな。だから、メス奴隷もあんな限界まで耐えられた。残ったのはカリンとメス奴隷ヤチホか……。ふふふっ、でも俺とカエデの信頼関係には及ばない。優勝するのは俺たちだと思っていた。だが、なんだあの豪徳寺葉月の友人だという調教師は……。メス奴隷サユリを処刑する様子を観ていたが、豪徳寺のように一切の迷いも躊躇いもない。豪徳寺にさえ勝てれば優勝だと思っていたが、とんだ伏兵が

いたものだ。あのルイという調教師も普通ではないな。メス奴隷との信頼関係も大事だが、豪徳寺とルイはそんなもの軽く吹き飛ばせる実力がある。別格の存在だ。そのルイが初戦の相手とはな。くじ運がなかったというべきか。でも逆にこれでルイに勝てれば豪徳寺に勝てる可能性も高くなる・・

調教師はカエデの鎖を引きながら思案していた。

・・とはいえ、ルイとメス奴隷ハルカはかなりの強敵だ。今夜がカエデにとって最後の夜になる可能性が高い。良い思いもさせておいてやらないとな・・

調教師は豪徳寺邸の広い庭園の中の一画に来ていた。そこには、芝の植えられた平らな広場に突き出るように何本もの杭が立っていた。杭の先端はオスの亀頭状に彫りこまれており、その杭がメスの自慰用のものであるのは一目瞭然だった。そして、その杭も、一本だけ地面から突き出ているものや、多いものでは三本縦に並んで突き出ているものもあった。そう、ここは葉月の屋敷の庭園の中でメス奴隷に公開自慰させて楽しむ場所になっていた。ここで、この杭をメス奴隷の性器に突き挿れて、メス奴隷が自分で腰を上下に動かして自慰する姿を楽しむのである。調教師はカエデに、まずは一本の杭に股がらせ膣に杭を挿入して高さを調整して杭が膣か抜けないようにする。そして、強力なクリップでカエデの乳首と小陰唇に錘を取り付けた。

「あううぅっ」

カエデが小さく声を上げるが調教師は楽しそうに錘を付け終わると、今度はシリンジでカエデの肛門から浣腸液を注入した。もちろん、一回ではないカエデの下腹がぷっくり膨れる程に何回も大量に浣腸

液を注入してしまった。

「よし、カエデ。思う存分自慰しろ。今夜が最後かもしれないからな。心残りないように自慰しておけ。ただし、いいかウンコは漏らすなよ。ウンコ漏らしたら、そこで自慰は終わりだ。お前がイッてなくても強制的に連れ帰るからな」

自分で大量に浣腸しておきながら調教師は残酷に告げるが、カエデは小さく頷いていた。

「ご主人様、お心遣いありがとうございます。最後という事であれば、一つ我が儘を言ってもよろしいでしょうか。私がオナニーしている間、私の体を鞭で打って頂ければ嬉しいです。ご主人様に鞭で打たれながら、ウンチを我慢してオナニーする。そんな変態の自分の姿を妄想すると私はもう幸せでマンコを濡らしてしまいます」

「心配するなカエデ。もちろん打ってやるさ、お前の好きな一本鞭でな」

調教師は革で編みあげた一本鞭を手に持っていた。カエデは、その鞭をうっとりしたように見つめ、腰を上下に動かし始めた。

ジュポッ、ジュポッ、ジュポッ、ジュポッ、ジュポッ

自慰用の杭がカエデの膣に抜き挿しされる淫靡な音と、吊り下げられた錘がぶつかるカチカチという音が響く。そして、調教師はカエデの体に鞭を叩き込んだ。

「あひゃあぁぁぁーーーっ！」

カエデは悲鳴を上げながらも腰の動きは止めない。それどころか、さらに速く膝の屈伸の速度が上がり、もうカエデの太ももと膣に突き刺さっている杭は、カエデが分泌した大量の淫汁で周囲の照明の光を浴びテラテラと輝いていた。

ジュポッ、ジュポッ、ジュポッ、ジュポッ、ジュポッ、ジュポッ

パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシッ

「あぶうぅぅぅーーっ、ウンチ漏れちゃうぅぅっ」

「漏らしたら、ここで終わりだぞカエデ」

残酷にカエデに調教師が告げ、カエデは必死に肛門を絞め排便を拒絶しながら自慰行為に耽る。

・・くくっ、そうだ我慢するんだカエデ。明日の初戦も我慢比べになる。この程度が我慢出来ないようでは勝てる可能性はなくなるからな・・

調教師はカエデの体に鞭を振りながら、排便を我慢しながら腰を上下に動かし続けるカエデの必死の表情に笑みを浮かべていた。

★　★　★　★

ミアンの性器破壊を終了し、上機嫌のルイは処刑台に寝かされているハルカの様子を見た。ハルカも既に外性器は全て抉り取られ、内

性器である膣も子宮も卵巣も取り出され虫の息になっていた。

「ご苦労様、あなたはもう帰って良いですよ。葉月には伝えておきますので」

「は、はいっ」

豪徳寺家のスタッフは、まるで恐ろしい魔物から逃げるかのように足早に去っていった。

「さて、ミアンはこのまま放置で構いませんが、ハルカは明日の為に治しておかなくてはなりませんね」

ルイはハルカの壊された性器に手を当てる。すると、ルイの手が白く輝き辺り一面目を開けていられない程の光に包まれていた。そして、光が消えた後ハルカの性器は元通りの状態に戻っていた。ルイの発した力。それはこの世界にはない力〝魔法〟だった。

・・ハルカの運命は毎日性器を破壊される事。それはこちらの世界でも変わらない。あなたは何時になったら、この運命から抜け出せるのでしょうね。姫川菜緒とエレシュキガル（注）、この二人があなたを性器破壊の螺旋から助け出してくれそうですが、どうですかね。豪徳寺もそうそう簡単に破れるとは思えませんしね・・

ルイは、ミアンはそのまま放置し、ハルカは部屋に連れ帰りベッドに寝かせた。

・・どうも、今日はかなり興奮しましたので、まだ体の火照りが治まりませんね。夜風にでも当たって来ますか・・

ルイは一人庭園を歩いて行くと、メス奴隷の公開自慰用の広場に人がいるのに気がついた。メス奴隷が地面から突き出た杭を膣に挿れ腰を上下に激しく動かしている。そこに調教師が容赦なく鞭を叩き込んでいた。

・・ほお、楽しい事をやっていますね。おやっ、あのメス奴隷は明日対戦するカエデですか。ご苦労な事ですね。それにしても、あの調教師。何か、私と同じような気配を感じますが、何者でしょうか・・

ルイは資料を照明の下で開いてみた。メス奴隷カエデの書類に書かれた調教師の名前は〝クラヤミ〟。

・・〝たそが○〟というスパイなら知っていますが、〝クラヤミ〟という調教師は知りませんね・・

ルイは首を傾げながら、後で葉月に訊いてみようと思い、カエデとクラヤミを見ていた。

（注）初代ウテルス姫川菜緒とその友人エレシュキガル。詳しくは「スク水少女戦士ウテルス」を参照して下さい。

56、自慰（前書き）

Bブロックのトーナメント表。今回は早めに作成しました。

56、自慰

56、自慰

＜i97500８－47352＞

「明日はBブロックの一回戦かぁ。これで琴音ちゃんの対戦相手が決まるんだね」

「うん、そうだけど。私は誰にも敗けないから、どちらが勝ち上がってきても一緒だよ。それより、今日はオナニーしてないから、しずくちゃん一緒にオナニーしようよ。庭にね、オナニー用の場所があるんだよ。そこなら思う存分オナニー出来るよ」

「そうだね、今日一回戦観てたけど、もうオナニーも出来なくなるかも知れないもんね。あのシズカというメス奴隷とヤチホというメス奴隷はもうオナニー無理だよね。オマンコの穴は辛うじて使えるのかな」

「養母（おかあ）さんが調教師とメス奴隷を一緒の部屋にしたのは、最後にメス奴隷が犯して貰えるようにする為なんだよ。女の調教師の人もいるけど、そういう人にはペニスバンドも貸与するし、本物がよければ男のスタッフを用意してくれるんだよ」

「本物かぁ。私もそうだけど、お姉ちゃんもあんまり男の人に興味

なかったみたい。お姉ちゃん、同級生とかに犯して貰っていたみたいだけど、それよりやっぱりオマンコ痛め付ける方が好きだったみたいだから。たぶん、お姉ちゃんも私も頭がおかしいんだよね」

「私も同じだよ。メス奴隷なんて、みんな頭がおかしいんだよ。それより早くオナニーしに行こうよ」

「うん、でも私たち両腕縛られてるから誰かに手伝って貰わないと。麗華さんたちは忙しそうだし、葉月さんは？」

「養母さんも、明日の準備で忙しいよ。大丈夫だよ。誰かいるかも知れないし、両腕使えなくてもなんとかなるんじゃない」

琴音はよほど自慰がしたいとみえて、急かすようにしずくを連れ出していた。そして、庭園の中の公開自慰用の広場に着くと、先客がいた。

「ほら、やっぱり誰かいた。あの調教師の人にお願いしてみようよ」

「でも、メス奴隷の私たちのお願いなんて聞いてくれるかな」

「大丈夫。いざとなったら養母さんの名前出すから」

「ずるいな、それ」

しずくがぷうっと膨れると琴音は楽しそうに笑っていた。そして、自慰しているメス奴隷に鞭を叩き込んでいる調教師に声をかける。

「おや、これは驚いた。メス奴隷のしずくと琴音じゃないか。Ａシードのメス奴隷が２匹揃ってどうしたんだいって訊くまでもないか。

ここに来たって事はオナニーしに来たんだろう。手伝って欲しいということか」

クラヤミはカエデに目を向けると声をかける。

「カエデ、珍客が現れたから少し自分でオナニーしていてくれ」

「はい、ご主人様。１回イッてしまってもよろしいですか？」

「おお、良いぞ。思い切り潮を吹きなさい」

クラヤミはカエデに指示を出し終えると、軽くしずくの体を持ち上げた。そして、地面から突き出ている男根型の杭の上に落とす。

「あぶうぅぅぅーーーーっ！」

いきなり膣の最奥まで杭が突き刺さり、子宮まで突き上げられしずくは声を上げる。

「次は、こっちだな」

次に琴音を持ち上げたクラヤミは、同じ様に杭の上に琴音を落とした。

「あぶうぅぅぅーーーーっ！」

琴音も、しずくとまったく同じように声を上げる。

「ははははっ、心配するな。別にお前らのマンコ壊したりはしないよ。俺は、そんな事して勝とうとは思わない。俺の名前 „M・クラヤミ

”の名にかけて卑怯な手は使わないから安心しろ。でも、少し楽しませて貰うぞ。自分の手でお前ら2匹を調教して見たかったんだよ」

クラヤミは巨大なシリンジを手に取る。

「ブランデー浣腸だ。お前ら経験があるだろう。浣腸されてウンコ漏らしながらオナニーするんだ。どうだ、気持ちよさそうだろう」

「は、はい、お願いします」

「いっぱい、遠慮なく注入して下さい」

クラヤミの言葉に、何故知っているのだろうと疑問はあったが、しずくと琴音は興奮して答えていた。クラヤミは笑みを浮かべ、薄めたブランデーをシリンジに満たすと、しずくの肛門に突き刺した。

ヂュウゥゥーーーッ

「はうぅぅぅーーーっ」

しずくの体内にシリンジ内のブランデーを全て注入したクラヤミはすぐにまたシリンジをブランデーで満たし、今度は琴音の肛門から注入する。

ヂュウゥゥーーーッ

「あうぅぅぅーーーっ」

琴音もしずくと同じ様に声を上げる。クラヤミは楽しそうに、しずくと琴音、交互にブランデー浣腸していった。そのうちに、2匹の

下腹がパンパンに膨れてくる。

「よし、これくらいでいいか。あまりやり過ぎてトーナメントに影響出ても困るからな。じゃあ、オナニーを始めろ。お前ら2匹はウンコ漏らして良いぞ。ウンコ漏らしながらオナニーしてイクところをしっかり楽しませて貰うからな」

「「はい、オナニーします」」

声を揃えてしずくと琴音、2匹のメス奴隷は腰を上下に動かし始めた。

ジュボッ、ジュボッ、ジュボッ、ジュボッ、ジュボッ、ジュボッ、ジュボッ

「あうっ、あうっ、あうっ、あうっ、あうっ」

「おっ、おっ、おっ、おっ、おっ、おっ、おっ、おっ」

2匹の腰の動きがどんどん激しくなり、声も大きくなっていく。

ブシャーーッ

そして、2匹の肛門から液状の便が噴き出していた。

「あぶうぅぅぅーーーっ、ぎもぢいいですうぅぅーーっ」

「イグっ、イグうっ、イっぢゃうぅぅぅーーっ」

2匹は液便を噴き出しながら、さらに腰を激しく上下に動かし絶頂

寸前になっていた。その姿をクラヤミは楽しそうに眺めている。メス奴隷が液便を漏らしながら、自分で腰を動かし自慰している。実に無様で楽しい見世物だった。

「「イギまずうぅぅーーーっ！」」

プッシャァァーーーッ

ブシャーーッ

2匹は潮と液便を二つの穴から噴き出しながら絶頂に達していた。

「「あひゅーっ、あひゅーっ、あひゅーっ」」

2匹のメスは息を荒くしながら、それでもまた腰を上下に動かし始めていた。

「さすが変態メス奴隷の筆頭といわれるしずくと琴音だ。1回イッたくらいでは満足出来ないか。よし、もう一度イクか。今度は鞭も入れてやるよ」

クラヤミはまた2匹のメス奴隷に浣腸する。今度はブランデーの濃度を上げて、さらに量も増やして注入する。

ヂュウゥゥーーーッ

「「いだあぁぁぁーーーっ!!あづっ、あづいぃぃぃぃーーーっ!!」」

濃くなったブランデーに腸を焼かれる激痛にしずくと琴音、2匹の

メス奴隷は無様に絶叫し腰の動きが止まってしまう。

「なにやってんだ、お前らメス奴隷だろう。腰を動かせ。泣きながらオナニーしろ。苦しみながらイケ」

クラヤミが2匹に鞭を打ち込んでいると、カエデが切なそうな声を上げてきた。

「ご主人様、私も鞭で打って下さい」

クラヤミが3匹のメス奴隷に鞭を叩き込むが、さすがに一人では無理があった。

「お手伝いしましょうか」

突然、背後から声がかかりクラヤミが振り向くと、そこには調教師ルイの姿があった。

「お一人では大変ですよね。私も手伝いますよ」

ルイも一本鞭を持っていた。木陰から様子を見ていたが、あまりに楽しそうなので出てきたのだ。

「それでは、そちらのメス奴隷カエデを鞭で打って下さい」

ルイは頷くと自慰しているカエデに鞭を叩き込んだ。

「あひゃあぁぁぁーーーっ！」

カエデが悲鳴を上げ、しずくと琴音がそれに続き悲鳴を上げる。夜

の闇に3匹のメス奴隷の悲鳴が木霊していた。

57、激突

57、激突

メス奴隷に最後に自慰させてやろうという調教師が多かったのか、公開自慰用の広場にはメス奴隷たちが集まって来ていた。当然みな明日初戦を迎えるメス奴隷たちである。初戦を終えたAブロックのメス奴隷たちは半数は処刑され、勝ち残ったメス奴隷も治療の為、今頃はベッドに寝ているものと思われた。

「なんで、メス奴隷ばかり1匹でやってくるんだ。調教師はどうしたんだ」

やって来るのはメス奴隷ばかりで調教師の姿はない。クラヤミが、頭を傾げるがルイは冷静に考察する。

「きっと自分達は中でメイドと飲んでいて、メス奴隷には一人で自慰させておこうという調教師が多いのではないですか」

クラヤミは仕方ないというように肩をすくめると、メス奴隷たちを一列に並ばせる。

「よし、順番にその杭を挿れてあげるから待ってなさい。まったく両腕を縛られてるメス奴隷じゃ1匹では自慰用の杭も挿れられないと分からないのかね」

クラヤミは、ぶつぶつ言いながらルイと手分けしてやって来たメス奴隷たちを杭に突き刺していった。しずくと琴音、それにカエデはすでにイキまくりぐったりとして芝生の上に横になっている。

「結構な重労働ですね」

「まったくです」

やって来たメス奴隷６匹を自慰用杭に突き刺したクラヤミとルイは、その前にしずくたち３匹にさんざん鞭を振っていた事もあり息が上がっていた。そして、公開自慰の観客用のベンチに腰掛け６匹のメス奴隷を眺めた。

「ようし、自由に自慰を始めていいぞ」

クラヤミの言葉でメス奴隷たちは一斉に腰を上下に動かし出した。

ジュボッ、ジュボッ、ジュボッ、ジュボッ、ジュボッ、ジュボッ

「おっ、おっ、おっ、おっ」

「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ」

「いひっ、いひっ、いひっ、いひっ」

「おふっ、おふっ、おふっ、おふっ」

「あうぅ、あうぅ、あうぅ、あうぅ」

「あひゃ、あひゃ、あひゃ、あひゃ」

それぞれ声を出しながら腰を動かすメス奴隷たち6匹の姿は壮観だった。そのうち1匹のメス奴隷がクラヤミとルイにお願いしてくる。

「お願いしますぅ。その持っている鞭で私の無様な体を打って痛めつけて下さい」

1匹が言い始めると、残りのメス奴隷も鞭で打ってくださいと懇願してくる。

「やれやれ」

クラヤミとルイは自慰するメス奴隷たちを鞭で打ち始めるが、今まで鞭を打っていた3匹の倍の6匹のメス奴隷である。いくらクラヤミとルイであっても二人で責めるのには限度があった。

「これは参りましたね」

「とても手が足りないな」

ぼやきながら二人が鞭を振っている所へ橘理津子を乗せた車椅子を押して香坂麗華がやって来た。

「これは面白いですね。メス奴隷の自慰用の場所のようです。麗華さん、私もこの義手と義足の性能を試してみたくなりました。私もあの3本の杭に突き刺して鞭で打って貰って良いですか」

「もちろん良いですよ、理津子さん。でも、私が鞭を使ったら理津子さんを壊してしまいそうで心配です」

「なに、これで壊れるなら構わない。私もそれまでだと云うことです」

「いや、理津子さんがいなくなられては困りますよ」

麗華が困っていると、横になっていたしずくが起き上がってきた。

「それなら私が鞭を振りますよ。理津子さんや麗華さんにはお世話になっていますし、前に茜ちゃんとお互いに鞭で打った事があるから、鞭は使えますよ」

麗華は渡りに船とばかりにしずくの両腕の拘束を解き、鞭を渡していた。そして、理津子を車椅子から持ち上げるとレギンスと下着を剥ぎ取り地面から突き出した3本の杭の上に運ぶ。

「いきますよ、理津子さん。覚悟して下さいね」

麗華はゆっくりと理津子の体を降ろしていく。理津子の尿道、膣、肛門に杭が突き刺さっていった。

「あっ、うっ、い、痛いっ、痛いぃぃっ、あぶうぅぅぅーーーーっ！」

無様に悲鳴を上げる理津子だが、麗華はずっぽりと奥まで杭を挿入してしまう。

「どうですか、理津子さん?」

「この痛みは久しぶりですよ。マンコの再生治療も上手くいってい

るようです。それではオナニーしてみます。しずくちゃん、鞭、お願いしますね」

理津子はゆっくりと腰を上下に動かし始めた。そこへしずくが鞭を叩き込む。

「あぶうぅぅぅーーーっ、ぶぶぶうぅぅぅーーーっ！」

理津子がメス奴隷のように無様に悲鳴を上げていると、クラヤミが麗華に声をかけてきた。

「そこの人、調教師の方ですよね、手が空いているなら手伝って貰えないですか」

「いやでも私は……。トーナメント中なのに、ここでメス奴隷を壊してしまっては不味いでしょう」

「大丈夫ですよ。このメス奴隷たちは、かなりのレベルだと思いますよ」

「それにメス奴隷をほったらかしにしている調教師が悪いのですよ」

ルイとクラヤミにそう言われ、麗華もそれならと腰を上げメス奴隷の前に立った。そして、一番端にいるメス奴隷に鞭を叩き込む。

ヒュンッ

その鞭の動きはクラヤミとルイでさえ見えなかった。

ピシイィィッ！！

「はぶうぅぅーーっ！」

プッシャアァァーーーーッ

その雷光のような麗華の鞭の一撃を受けたメス奴隷は絶叫し尿を漏らし失神してしまった。クラヤミとルイは、その麗華の鞭に驚嘆していたが、慌てて気絶したメス奴隷を抱える。

「危ない、危ない。危うく串刺しになるところだった」

「おそらく葉月はオナニーさせておいて、最後に串刺しにする為にこんなものを造ったのでしょう」

ルイが確信を持って言っていた。クラヤミも豪徳寺の事だから、そうだろうなと頷いていた。

「まったく、友人に対して酷い言い様ですね。それにしても、この自慰場がこんなに盛況なのは始めて見ますよ。それに良いものを見せて貰いました、香坂の娘。それが、遥か昔、鎖鎌の名手〝宍戸梅軒〟より派生したという香坂雷鳴流の鞭術ですか。見事なものですね。それなら大概のメス奴隷の意識は刈り取る事が出来るでしょう。ただの一撃でね」

全員が声の主に目を向けていた。

・・豪徳寺っ・・

突然の葉月の登場に全員が緊張した顔になる。葉月の後ろに控えている近藤からは、少しでも不審な動きをしたら問答無用で撃つとい

う殺気が漏れている。近藤にしてみれば、以前葉月に怪我を負わせてしまった失態があるので、同じ過ちを二度と繰り返さない覚悟であった。

「琴音を探しに来たのですが、皆さん大いに盛り上がっているではありませんか。橘まで参加して実に楽しそうですね。私も混ぜて下さいよ」

葉月はあっという間に下半身裸になると、理津子と同じ3本杭に跨がる。そして、三つの穴に杭を突き刺していった。

「あふうっ……。いい感じですね。これは、元々はメス奴隷用ではなくて私自身の自慰用に作ったのですよ。どうです橘、どちらが先にイクか競ってみますか」

「望むところだ、豪徳寺」

葉月から勝負を挑まれた理津子が喉に埋め込んである発声器の合成音で答える。

「それでは橘をルイ、あなたが鞭で打って下さい。そして、私は香坂の娘、あなたにお願いします」

「なんですって?」

不適な笑みを浮かべる葉月に、麗華は奥歯を噛み締めていた。自分を、自分の鞭を馬鹿にされたような気分だった。

・・私の鞭を見ていながら私を指名する。それなら望み通り私の必殺の鞭を叩き込んで、その余裕を砕いてやりますよ。ここで、あな

たが死んでも事故で済ませられるでしょう。これだけ大勢の目撃者いれば何も問題ありません。これは好都合ですね。千載一遇のチャンスです・・

麗華は心の中で舌舐めずりしていた。

58、同類

58、同類

理津子と葉月は腰を激しく上下に動かし始めた。

「おうっ、おうっ、おうっ、おうっ、おうっ」

「いひゃっ、いひゃっ、いひゃっ」

声を上げ始めた二人に向かってルイと麗華が鞭を構える。

・・この理津子という女は遥か未来でも葉月と敵対する関係です。こんな時から争っていたのですか・・

・・豪徳寺め、私を軽く見ているようですが、理津子さんの片腕としての、私の力を思い知らせて差し上げます。必殺の鞭を叩き込んでやりますよ・・

ルイと麗華はそれぞれの思いを込め鞭を思い切り叩き込んだ。

ピシィィィッ！

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！！」

二人の渾身の鞭の一撃。しかし、それでも理津子と葉月は腰の動き

を止めない。

「調教師ルイと言いましたか。まるで豪徳寺のような鞭さばきです。気持ちいいですよ。ですが、まだまだですね。さあ、もっと本気で打ち込んで私をイカせて下さい」

「香坂の娘。遠慮せず本気で打ってきなさい。それとも、これが本気の一撃ですか。そうだとしたら期待外れですね。これではとてもイケませんね」

ルイと麗華は驚愕していた。互いに今の一撃は相手の意識を断つつもりで打ち込んだのだ。それを耐えたばかりか、もっと本気で打てという。

・・この女は本当に化け物ですね。私の鞭に耐えるとは信じられません。私が甘かったようですね。意識を断つなどという考えではいけなかったのです。命を断つ。その一撃を叩き込んでやります。思いしるがいい・・

麗華は精神を集中して自分の一本鞭を空中で回転させる。

ヒュンッ、ヒュンッ、ヒュンッ、ヒュンッ、ヒュンッ！

麗華の鞭の姿はあまりの高速の動きで見えないが鋭い鞭の風切り音だけが響いている。そして、鞭と空気の摩擦で、麗華の一本鞭が火を噴いた。

ボウゥゥゥッ！

渦巻き状の炎だけが空中に見えている。

・・なんだ、あれは……。魔法のない、この世界であんな事が出来るのか。いけない、いくら葉月でも、あの鞭は耐えられない。致し方ない。その前に私が・・

麗華の驚異の鞭を隣で見たルイは自分の力を発動する。ルイの鞭が電撃を帯びて、パチパチと発光していた。

・・あの二人は何者だ。これではまるで某少年漫画のバトルの世界のようだぞ・・

周囲全体が二人の勝負に視線を送る中、クラヤミは考えていた。

・・ここで明日の対戦相手である。調教師ルイの力が見れたのは収穫だったが、この想定外の力はなんだ。こんなもの、どんなメス奴隷でも耐えられる訳がない。あの、橘という女、死んだぞ・・

全員が息を呑んで見守る中、麗華とルイは同時に鞭を叩き込む。

「ファイア・ウィップ」

「サンダー・ウィップ」

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ!!」

その一撃で、理津子も葉月も口から泡を吹き、白眼を剥いて失神していた。そして、二人が失神した瞬間力の抜けた二人の体を三つの杭が深く突き刺していく。尿道から膀胱を貫通し、膣から子宮を貫通する。そして、肛門から直腸を貫いていった。その光景にその場の全員の体が硬直して動かなかった。理津子と葉月の吹いている泡

が血の混じった赤い泡に変わっていく。

「ごっばあぁぁぁーーーーっ！」

そして、理津子と葉月の口から血塗れの杭の先端が飛び出した。理津子と葉月は無様に串刺しにされ、ビクンビクンと体を痙攣させている。尿道と肛門に突き刺さっていた杭は骨に当たり途中で折れてしまったようで、膣を貫いた太い杭だけが、完全に二人の体を貫通していた。無様な姿だった。性器から口まで一直線に貫かれ体を痙攣させる様子は、処刑されたメス奴隷とまったく同じ姿であった。が、これを設計した葉月の恐ろしい所はこれだけで終わりにしない所であった。串刺しを感知したセンサーで、二人を串刺しにしている杭がドリルのように回転し始めたのだ。

「おぼぼぼぼぼぼっ、おっぼうぅぅっ」

理津子と葉月は意味不明の声を出し、口から血と肉片が飛び散っていた。理津子の目から涙が大量に溢れ、鼻からも鼻水が流れて顔を汚している。そして、時折大きくビクンと手足が動き、死へのカウントダウンが始まっていた。それは葉月も同様で二人の死は確実に迫ってきていた。

「は、葉月様っ！」

我に返った近藤が駆け出し、葉月の体を抱くと杭からずぼっと抜き取った。すると、杭の抜かれた尿道から真っ赤な血尿が漏れだし、肛門からも血便がぼとぼとと零れていた。隣でも麗華としずくが二人がかりで理津子を杭から抜いていた。理津子も同様に血尿と血便を漏らしてしまっている。

「二人を医務室へ、急いで下さい」

ルイが冷静に指示を出していた。

・・そうか、葉月の奴、そういう事か……・・

ルイは医務室のベッドに二人を寝かせ、自分以外を退室させると、遥を治療した力を解放した。白い光に包まれた二人の傷が治っていく。ほどなくして二人の意識が戻ったので、理津子は麗華が用意していた車椅子に乗り、葉月はルイと自分の部屋に戻っていった。

「まったく、最初から私の力を当てにしていましたね」

「ちょうど、あなたがいたものでね。香坂の娘の力を見ておきたかったのですよ。それにしても、あれは不味いですね。あんなもの、いきなりやられたら耐えられる者などいませんよ。でも、私はこうして体験しましたからね。琴音に、これに耐えられるよう厳しい拷問をしていきますよ。それはそうと、橘の奴……」

「敵の手の内をみる為に、あんな無謀な事をしたのですか。恐れ入りますよ」

ルイは呆れたように肩をすくめていた。

・・橘は私と違い、ルイの力の事など知らない。しかし、臆することなく勝負に乗ってくる。奴のあの性質、やはり私と同類か・・

葉月は自分がなぜ理津子に惹かれ脅威を感じるのか分かったような気がした。

★
★
★
★

「麗華さん、やはり豪徳寺は危険ですね。ですが、色々分かった事もあります。信じたくないですが豪徳寺は私と同類なのです。私と豪徳寺は同じ。私が闇に墜ちれば豪徳寺になり、光に包まれれば私、橘理津子になる。まさに表裏一体と言っていいでしょう。つまり豪徳寺を倒すというのは、私自身を倒す事。どちらか片方が残るという結論はありません。私と豪徳寺、どちらも滅びなければならない存在という事です」

「そんな……」

麗華は車椅子を押しながら絶句していた。理津子の言う事であっても信じられない、と言うよりは信じたくなかった。

「この豪徳寺の医療チームは凄いですね。西園寺くんの所でもこんな短時間に何もないように治療出来ませんよ」

言葉に詰まった麗華は話題を変え、他の点を指摘していた。

「いや、これは化学療法とは違う気がしますよ。あの調教師ルイという人物、何者なのでしょうか。私の意識を断ったあの鞭の一撃も、考えられない一撃です。何か、この世界とは違う気配をかんじます。本で読んだのですが、私たちの世界とは次元の違うフェルガナという世界があるようです。そこでは〝魔法〟という力が存在しているようですが、それに近いものではないでしょうか」

「魔法っ……。私は小さい頃、魔法少女に憧れていましたよ」

ここで二人は笑いだしていた。何れにしろ要注意の人物であるのは間違いない。二人は警戒を強める事にした。

59、思惑

59、思惑

「あうううぅぅぅーーっ」

「どうですか？マンコの穴の具合は？」

「うぅっ、いいですよ。久しぶりです、この感覚。あそこでオナニーした時から、もう大丈夫かなという感覚があったのですが……。あひゅぅぅーーっ、イグッ、イギそうですぅ」

「10年以上経過していますからね。もっとメスの快感を味わって下さい。理津子さん」

麗華は、大の字にベッドに縛り付けた理津子の膣に特大のディルドゥを突き挿れ激しく責めていた。

「あうっ、あうっ、あうっ、あうぅぅーーっ」

「イっていいですよ、理津子さん。久しぶりでもう我慢出来ないでしょう。ふふふっ」

ブシャッ、ブシャッ、ブシャッ、ブシャッ

理津子の膣穴から激しく汁が溢れでて淫靡な音が響いている。もう

理津子は絶頂寸前だった。

「あっ、あっ、あっ、あっ、もう、らめえぇぇーっ、イグうぅぅぅーーーっ！」

プッシャアァァァーーーッ

理津子は潮を吹いて絶頂に達していた。

「ふふっ、良かったですね、理津子さん。潮吹きましたよ。今度はこんな性具ではなくて本物で犯して貰って下さい」

麗華は、放心状態の理津子に優しく語りかけていた。

★
★
★
★

様々な事が起こった夜、豪徳寺邸で突貫工事が行われていた。Ａブロックの一回戦を観た観客たちの口コミで評判が拡がり、観覧希望の問い合わせがサーバーをパンクさせる程あり、葉月は指示を出し観客席の増設と庭園に大画面モニターの設置を進めていた。生で観れなくても現場でモニターで良いので観たいという要望も多かったのである。当然であるが、このトーナメントの様子は実際に入場しなければ観る事は出来ない。なので、入場希望者の問い合わせが殺到したのである。そして、そんな工事が行われている陰で、人知れず一つの出来事があった。

・・くくくっ、思い知らせてやるわ。今のうちにいい夢を見ていなさい。ああ、どんな顔をして死んでくれるかしら、楽しみだわ・・

豪徳寺の庭園の一番外れにある巨大なゴミ焼却炉の前に一人の人物が立っていた。その足下には一人の人物が横になっている。立っている人物は、焼却炉の頑丈な蓋を開けると、中は激しい勢いで炎が揺れている。その人物は、笑みを浮かべると横になっている人物を持ち上げ焼却炉の中に落とした。落とされた人物は忽ち紅蓮の炎に包まれ見えなくなっていた。

・・ふふっ、明日が楽しみね・・

焼却炉の蓋を閉じ、その人物は暗闇の中に消えていった。

★
★
★
★

翌朝、まだBブロックの開戦まで間があるというのに大勢の観客が早くも詰めかけていた。あまり多くの人数が押し掛けたので葉月は、予定より早く開門し観客を入場させる事にした。

「これは、かなりの盛況ですね、葉月様。一回戦は多くのメス奴隷の処刑される為、それを目当てにやってくるのでしょう。もう少し入場料を上げても良かったのではありませんか」

「まあまあ、神楽坂さん。あまり高くしてもいけませんよ。観に来てくれる方にリーズナブルであると思って貰わねば、次回開催したときにリピートしてくれるとは限りませんからね」

葉月も、このお客の数を見て上機嫌で沙也加に答えていた。そこへ、メイドが失礼しますと入ってきた。

「葉月様、１０人の団体様なのですが、もう処刑場前は埋まってしまっていまして、１０名がまとめて座れる所がありませんが、ＶＩＰルームなら空いています。そこへお通ししてよろしいでしょうか」

「１０名の団体？それは何処の団体ですか？」

「はい、桜桃中学校のＺクラスだそうです。どうやら昨日のＡブロックの対戦が耳に入り申し込んできたようです」

「ああ、渡邉ゆかりと蜂須賀彩音の母校ですね。それに橘の母校でもありますね。ふふふっ、そのクラスからまた〝渡邉ゆかり〟や〝蜂須賀彩音〟のようなメス奴隷が出てくるかも知れません。ＶＩＰルームを使用して構いませんよ。原石が眠っているかも知れませんので、何かあれば便宜を図ってやって下さい」

「かしこまりました」

メイドは一礼すると下がっていった。

「Ｚクラスというと蜂須賀彩音と一緒に処刑した水野真理や水鳥川凛がいたクラスですよね。これは期待が持てますね」

沙也加も嬉しそうに葉月に言うと栄養ドリンクを腰に手を当てて一気飲み干し、それでは私も準備に参りますと部屋を出ていった。

★　★　★　★

ＶＩＰルームに通されたＺクラスの面々は前面の窓から処刑場を見下ろして興奮していた。噂には聞いていたが初めて観る処刑である。彩音が在籍していた頃に比べ、現在のＺクラスはメス奴隷予備軍のような位置付けになっていた。つまり、Ｚクラスは学校内で女子生徒を随時至る所でチェックし、その素行や性質、性癖などがメス奴隷に相応しいと判断されると学校側から家族に連絡がいき、そこで家族が了承すると本人の許諾なしにＺクラスに編入されるのである。そうして、Ｚクラスの生徒たちは在学中、あるいは卒業後にメス奴隷として巣立っていくのである。今では、メス奴隷はビジネスとして確立しているので、一攫千金を望む親は自分たちの娘をメス奴隷に仕立てるのが効率が良いと考えている者もいた。葉月はＶＩＰルームに目利きのスタッフを派遣し、生徒たちの査定をするよう指示を出していた。

・・ふふっ、ここで掘り出し物が見つかるかも知れませんね・・

葉月は、良い素材が見つかったらすぐにでも手に入れるつもりだった。ゆっくりと構えているとオークションに出品されてしまうかも知れない。安く入手する為には、青田刈りで他の者が目をつける前に手に入れるのが一番なのだ。

・・このトーナメントは、このような利用価値もありますね・・

葉月は、さらに上機嫌になっていた。

★　★　★　★

そして、いよいよＢブロックの一回戦が開始される。昨日以上の観

客の前で沙也加は紅潮した顔をしている。

「皆様、お待たせしました。それではＢブロック一回戦を開始します」

うおぉーっという大歓声の中、調教師に引かれメス奴隷が入場してくる。

「本日最初の対戦は、雌豚エムとロリータマイの対決です」

沙也加のアナウンスで会場がわーっと盛り上がる。ＶＩＰルームの生徒たちもこれから始まる凄惨な対決に心踊らせていた。

「ねえねえ、この大会。私たちと同じ学校のメス奴隷が出場するんでしょう。どのメス奴隷か知ってる？」

「私、知ってるよ。このＡブロックのＡシード、しずくと書いてあるメス奴隷だよ」

「凄い。こんな大きな大会でＡシードなの」

「しずく様は私たちの学校の代表だから頑張って欲しいよね。他のメス奴隷なんかに負けてほしくない」

「大丈夫よ。だって最強の風紀委員だといわれていた橘先輩や香坂先輩がついてるって話だよ」

ＶＩＰルームで桜桃中学校の女子生徒たちは大いに盛り上がっていた。そして、その心の中ではいつか自分もこの大会に出場出来るようになりたいと考えていた。

６０、相違　エムＶＳマイ

６０、相違

「それではＢブロックの一回戦を開始しますが、使用出来る拷問具が昨日とは異なります。昨日Ａブロックの対戦を観に来られた方も大勢いると思いますので、飽きてしまわないようにとの配慮でございます。昨日と変わりまして本日は鞭と浣腸と三角木馬となります。単独での使用でも組み合わせての使用でも、勿論ＯＫです。先に意識を失ったメス奴隷が敗北となるのは昨日と変わりません。そして、浣腸で注入出来るのは、こちらが用意した溶液のみとなります。それでは、各調教師、準備を始めて下さい」

沙也加の説明で調教師は頭の中でメス奴隷を責めるプランを構築していく。どちらの調教師も今回は三角木馬がメインになるだろうと考えていた。メス奴隷にとって尤も有効で効果があると思われる三角木馬。この三角木馬にメス奴隷を跨がらせて鞭で打つ。この複合責めが一番有効な責めだと確信した調教師は、互いのメス奴隷も三角木馬に跨がらせていた。

「それでは一回戦、エム対マイ、対戦開始っ」

沙也加の合図で調教師たちは動き出す。どちらも急いで三角木馬に跨がらせたメス奴隷の両足首に錘を下げていく。

「あひゃあぁぁーーーっ」

エムとマイは悲鳴を上げるが調教師たちは次々に錘を付けていった。エムは胸が大きく腰の括れたスタイルの良い体型で、痛め付けてみたくなる雰囲気を纏っていた。対してマイは貧乳、寸胴の幼児体型で、こちらもつい責めたくなる嗜虐性を満たす気配を放っていた。

「これは対照的な2匹だな。どちらも痛め付けて泣き叫ぶ姿を見たくなるな。しかも、どちらもいい声で泣く。たまりませんな」

「俺はエムが好みだな。このスタイルのいいメスが無様に泣き喚いて処刑されるのが観たい」

「処刑が観たいという事は、エムに敗けて貰いたいという事ですか。私はマイの処刑される姿が観たいので、マイに敗北して貰いたいですな」

「私もマイかな。マイみたいなロリが残酷に処刑されていくのが好みだもの。出来ればマイのロリマンコ、あの〝渡邉ゆかり〟みたいに徹底的に壊して処刑して貰いたいなぁ」

「それは無理ですよ。〝渡邉ゆかり〟は時間をかけて、あの葉月様が処刑されましたが、今回はトーナメントで一日に何匹も処刑されますからね、時間がありません。それに処刑を執行されるのも葉月様ではありませんからね」

「そうそう、このトーナメントは数多くのメス奴隷が処刑される所が醍醐味ですからね。マンコの徹底破壊は、葉月様が開催される別の公開処刑の方で楽しみましょう」

観客たちが楽しそうに歓談している前で、メス奴隷2匹は足首だけ

ではなく、太ももにも錘を下げられ悲痛な泣き声を上げていた。

「あびゃあぁぁぁーーーっ、いだいぃぃぃーーっ、マンコじぬうぅぅぅーーーーっ！」

2匹のメス奴隷の足首に3個、太ももに2個の錘がぶら下げられている。

「あの錘は一つ１０キロの重さがあります」

沙也加の解説で観客席から、おぉーっと歓声が上がる。メス奴隷は片足に5個の錘を下げられているので、両足で１０個、つまり１００キロもの錘を下げられている事になる。それはメス奴隷の体重を遥かに越えた数字だ。マイに至っては自分の2倍以上の重さの錘を下げられている事になる。メス奴隷の両足は棒のようにピーンと伸びきり、メス奴隷の割れ目には三角木馬の頂点が激しく食い込んでいる。恥骨からはミシミシと音がなり、砕けてしまうのではないかと思われた。そして、調教師たちは互いに鞭を持つと、容赦なくメス奴隷の体に鞭を叩きこんだ。

「あびゃあぁぁぁーーーっ、だじげでえぇぇぇーーーっ！！」

「ゆるじでぐだぢゃいぃぃーっ、あぶううぅぅぅーーーっ！」

エムとマイが激しく絶叫する。2匹のメス奴隷は連続で鞭を叩き込まれ、体を動かさないようにしていたが、どうしても動いてしまう。その結果、三角木馬の頂点が更に激しく性器を割っていく。

プチッ

小さな音が響いた。それは、メス奴隷を責めている調教師も気付かない程の何かが潰れた音だった。

「「あっびゃあぁぁぁーーーっ、あびゃびゃびゃびゃびゃあぁぁーーっ！」」

2匹のメス奴隷が同時に絶叫し、口から泡を吹き始めた。三角木馬の性器に食い込んでいる部分に血が流れている。それを気付いた最前列の観客たちは一斉に自慰を始めていた。

「メス奴隷のクリトリス潰れたみたいだな。これはたまらない。初戦から、楽し過ぎるぞ」

「クリ、潰されちゃって最高。あのロリ、まだそんなに使ってないクリ壊されちゃって無様で良いわね」

「2匹とも泡吹いちゃって、もうすぐ失神するわね。もっと激しく鞭を叩き込んで欲しいわね。どんな顔で失神するかしら」

メス奴隷の顔はどちらも涙と鼻水と涎で激しく汚れ、苦痛に歪んでいる。

「凄い……。本当にクリ潰されちゃったよ。どんな気持ちなんだろう、あの2匹」

「あんなに錘下げられて鞭で打たれているんだよ。マンコの他の所も無事なわけないよ。きっともう、あの2匹自分が何されているかも分かってないと思う」

「ねえねえ、今度私たちも授業でやって貰おうよ。西園寺先生に頼

んで」

ＶＩＰルームから、エムとマイの対戦を観ているＺクラスの生徒たちも、激しく興奮し自慰を始めていた。それを見ていたメイドが提案する。

「オナニーしながらでは、折角の観戦がおろそかになってしまうでしょう。私たちメイドがマンコを責めてあげますから、あなたたちはしっかりと観戦してはどうですか」

メイドの言葉に生徒たちはお願いしますと頷いていた。早速、彼女たちの足首にパイプ付きの足枷が装着され、全員足を閉じられないようにされてしまう。そして、極太のディルドゥが用意され膣に挿れられる事になったが、何人かは処女であるのが判明した。

「ほおっ、生娘ですか。それでは、あなたたちには更に太くて長い巨大なディルドゥでマンコを貫いて差し上げますよ。メス奴隷の泣き叫ぶ姿を観覧しながら、自分のマンコの破瓜を迎える。最高のシチュエーションでは無いですか」

メイドは残酷な笑みを浮かべ、他のメイドに特大のディルドゥを持ってくるよう命じる。そして、持ってきたディルドゥを処女の生徒に見せていた。それは、メイドの腕程の太さがあり、肘くらいまでの長さがあった。

「わ、私の処女マンコにそんなの入るんですか」

震える声で尋ねる生徒にメイドは残酷に答えていた。

「入らなくても無理矢理挿れるから大丈夫ですよ。メス奴隷目指す

ならこれくらい出来ませんと、購入したご主人様が落胆してしまいますよ。まあ、処女マンコにフィストファックするようなものですからね。どうしても嫌なら止めておきますが……。あなたたちは今日はまだお客様ですので」

しかし、生徒たちはそれを挿れて下さいと懇願する。そればかりか、他の生徒もそのディルドゥで責めてくれと言ってきた。

・・ふふっ、葉月様の狙い通りですね。この中から、あるいは全員が頭のおかしい変態メス奴隷に育つかも知れませんね・・

メイドは他のメイドにも特大ディルドゥを用意させ、生徒たちの膣口に先端を軽く突き挿れる。そして、男のスタッフに声をかけると生徒たちの後ろに並ばせた。

「いいですか、私の合図で一斉にマンコに刺さっているディルドゥを思い切り蹴り上げて下さい。それでは、いきますよ。3、2、1、それっ」

ズガァーンッ！

「あびゃあぁぁぁぁぁーーーーーっ！！！」

プッシャーーーッ

ぶり、ぶり、ぶりぃぃぃっ

ＶＩＰルームに生徒たちの絶叫が響き渡り、全員が白目を剥き泡を吹き、大小便を漏らして気絶していた。

61、追憶

61、追憶

「「あぶうううぅーーーっ」」

三角木馬に跨がされた上、大量の錘を下げられ性器を裂かれる激痛に絶叫するメス奴隷2匹に容赦なく鞭が叩き込まれている。クリトリスも潰され、口から泡を吹いているエムとマイの頭の中はもうその苦痛に耐える事に精一杯だった。もう、このままいけば、どちらかのメス奴隷が失神するのは誰が見ても間違いなかった。

パシィッ、パシィッ、パシィッ、パシィッ、パシィッ、パシィッ、パシィッ、パシィッ

連続で叩き込まれる鞭で2匹のメス奴隷の肌は全身みみず腫れになり裂けてしまっている部分もある。ここで使用されている鞭はプレイ用の鞭等ではなく、処刑に使用する鞭である。痛め付けるのではなく殺す為の鞭なのだ。それを使いこなすには、それなりの技量がいるが、この二人の調教師は鞭の技術をかなり高度に習得しているようだった。

・・ほほうっ、これはこの勝負どちらのメス奴隷が勝利するのか分かりませんね。面白いですね。それでも勝敗はついてしまいます。どちらかは処刑される運命にあります。どちらに死に神の鎌が振り下ろされるのか、興味深いですね・・

沙也加はメス奴隷エムとマイを見比べて残酷に微笑んでいた。その時、向かい合って二つの三角木馬に跨がされているエムとマイの視線が合った。その瞬間、2匹の頭に去来するもの、それは昔の思い出だった。この2匹のメス奴隷エムとマイは同じ施設の出身だった。互いにオークションで別々に購入されていき、それ以来顔を合わせた事はなかったが、このトーナメントで出会い互いに驚いていた。メス奴隷同士の会話など許されないので、2匹は言葉を交わしてはいないが、別れてから今までお互いに無事生きていたのが嬉しくて心の中で喜んだものだった。だが、運命は残酷である。そのメス奴隷のどちらかは、ほんの数刻後には処刑されて、もうこの世にはいないのである。

・・マイ、良かった。途中で破棄されなくて。立派なメス奴隷になっていたんだね。初めてマイと競争出来るね。私は負けないよ・・

・・姉さん、私の成長した姿を見て下さい。そして、安心してね。私はもう自分だけでやっていけますよ・・

施設で身を寄せあって生きていた2匹のメスが、この大きな舞台で勝負している。今、この会場にいる全ての観客の目が2匹のメス奴隷に注がれているのだ。エムとマイにとってそれはこの上ない誇りだった。

・・マイ、どちらが勝っても恨みっこなしだからね・・

・・姉さんと競えるまでに私は成長した。それを見て貰えて私は嬉しい・・

2匹のメス奴隷の中にほんのわずか浮かんだ感情。だがそれも耐え

ることが不可能な苦痛で塗り潰されていく。

「「あぶうううぅーーーっ、ぶぶぶぶうううぅーーーっ！」」

必死に耐えるメス奴隷2匹であるが、それももう限界だった。1匹のメス奴隷の目がクルッと白目を剥く。残酷に、だがはっきりと勝敗が決定した。

「ビクトリー……」

沙也加の右手が上がる。

★
★
★
★

VIPルームで倒れた生徒たちに気付け薬が嗅がされていた。

「ほら、早く起きなさい。勝負がつきましたよ。処刑が始まりますよ」

メイドたちが生徒たちを起こし、首輪を嵌めると天井からの鎖で固定していった。

「まったく、情けないですよ。あなたたちの先輩の蜂須賀彩音は、渡邉ゆかりの処刑を観ながら沙也加様にもっと酷い事をされていましたが、しっかりと最後まで観ていましたよ」

メイドは生徒たちを見下した眼で言う。

「蜂須賀先輩も渡邉先輩も伝説の先輩ですから、私たちみたいなただの変態女子とは格が違いますよ」

生徒の一人が比較されるのも畏れ多いと言うが、他の生徒が反論する。

「でも渡邉先輩も蜂須賀先輩も元々は一般の生徒だったじゃない。渡邉先輩は自分から申し出て奴隷に堕ちたんだし、蜂須賀先輩も一般クラスからZクラスに編入になったんだし、私たちと変わらないと思うよ。それよりメイドさん、蜂須賀先輩は何をされたんですか。私も同じ事やって貰いたいです」

生徒の一人がメイドにお願いすると、先程と同じ様に全員が彩音がやられた事を切望してきた。メイドはやれやれというように肩をすくめていた。

「それでは、全員にやって差し上げますが、このメス奴隷の処刑が終了してからにしましょう。せっかくのメス奴隷の処刑を見逃したら損でしょう」

生徒たちも分かりましたと頷いて処刑場に目を向けていた。そこではもう勝者のメス奴隷は担架で運ばれ、敗者のメス奴隷を処刑する準備が進められていた。メス奴隷を処刑するのは勝者の側の調教師。敗者側の調教師はがっくりと項垂れて椅子に座っていた。これから自分のメス奴隷が、他の調教師に処刑される姿を見なくてはならない。自分の手で処刑したいところであるが、それは叶わぬ願いだった。

「どんな風に処刑されるのかな。ギロチンとか首吊りかな。それとも、火炙りとかかな。私ならギロチンが良いな。仰向けに固定され

て、刃が落ちて迫ってくるところを見ながら首をはねられちゃうのって最高じゃない」

「ギロチンなんて詰まらないわよ。私なら串刺しだなぁ。マンコから口まで一直線に串刺しにされるの、やっぱり串刺しが一番よ」

「えぇーっ、私は回転ノコギリで切断されるのが良いなぁ。マンコから切断されて、お臍の辺りで一回止められてじっくり観察されて、最後には真っ二つに切断されちゃうの」

生徒たちは興奮した口調で喋っていたが、進行の沙也加の手が上がるのを見て急に大人しくなった。生徒たちにとっては初めて観る本物の処刑が始まる。生徒たちは期待で胸を高鳴らせていた。

★　★　★　★

クラヤミは控え室で途中までメス奴隷の勝負を観ていたが、退席して葉月の屋敷の中を歩いて食堂に向かっていた。メス奴隷の対戦に興味がない訳ではなかったが、ラガーを飲みたくなったのである。

・・この対戦の勝者が次に当たるのはAシードのミアンだ。どちらが勝っても、そこまでだろう。俺には関係ないな。注意するのは初戦で当たるハルカと勝ち進んで行くと当たる琴音だ。どちらの組も調教師も強敵だ。ルイに豪徳寺か。どうやって勝つか。取り敢えずラガー飲んで考えよう・・

クラヤミが食堂に向かっている頃、ルイは葉月にクラヤミの事を訊いていた。

「昨夜見かけたクラヤミという調教師を知っていますか、葉月」

「ああ、奴ですか、よく知っていますよ。奴はメスを処刑する以外能がない男ですよ。メスを調教なんて器用な真似が出来る訳がありません。自分では〝キルメーカー〟なんて気取って言っていますがね。処刑するだけの異常者です。気にする事はありません。普通にあなたが勝ちますよ」

葉月は、モニターを指差していた。

「今、勝った方の調教師は処刑方法をクラヤミから買ったと言っていましたから、処刑しか頭にないクラヤミの処刑方法の一つが観られると思いますよ。私も、これは興味深いです」

葉月はモニターを観ながらニヤリと笑っていた。

62、暗闇

62、暗闇

メス奴隷は目を開いた。もう対戦していたメス奴隷の姿はない。そして、がっくりと肩を落としている自分の調教師の姿を見て、メス奴隷は察した。

・・あぁ、私は負けたんだ・・

メス奴隷は三角木馬からは降ろされていたが、拘束は解かれていない。これから処刑されるのだから当然だった。観客席から大勢の観客の期待する声が聞こえてくる。

「これが観たくて来ましたからね。早く処刑されて欲しいですな」

「こんな楽しいものを観る為には金など関係ありませんな。下手な所だと処刑ショーとかいいながら、軽く拷問して終わりですからな。本当に絶命させる葉月様の処刑に勝るものはありません。それが何回も楽しめるとは至福のイベントですよ」

「私の期待通り、あのメス奴隷が処刑される事になって嬉しいわね。もう、形も残らない程無様に破壊されて欲しいわ」

観客たちの声がメス奴隷の耳に入ってくる。自分はメス奴隷だからと覚悟していても涙が溢れてきて止まらなかった。

「ひぐっ、ひぐっ、ひぐっ」

地面に仰向けに寝て泣いているメス奴隷〝マイ〟の姿は、観客の興奮を更に煽っていた。

「泣いているあのロリ体型のメス奴隷が処刑されるのは最高だね。早く絶命させてくれないかな」

「あはっ、なかなかいい声で泣くわね。このメス奴隷が絶命させられると思うとマンコ濡れてくるわ」

すると、マイを処刑する調教師が沙也加に何か告げていた。

「すいません。実はこのメス奴隷を処刑する方法をある方から購入したのですが、上手く出来る自信がありません。こんなに大勢のお客様がおられるとは想像していませんでしたので、その前で失敗する訳にはいかないと思うと緊張で手が震えてしまいます。そこで、私に売ってくれた方に処刑をお任せしてよろしいですか」

沙也加は、きちんとメス奴隷を絶命するまで処刑して貰えるなら誰でも構いませんよと答えると、調教師はホッとしたように屋敷に向かって走り出していた。

・・メス奴隷を処刑するのが楽しいというのに、あの調教師は変わっていますね。確かに昨日よりお客様の数が倍増していますが、むしろその前で処刑出来るのは誇らしいと思うのですが・・

沙也加は理解出来ないという顔で腕時計を見た。昨日に比較してスムーズに進行しているが、ここであまり時間を取られる訳にはいか

ない。やきもきしている所へ真っ黒いスーツを着、同じく黒い磨きこまれた革靴を履いた人物が走って来た。

「申し訳ない。ラガーを飲んでいたら急に処刑を代わってくれと言われまして。それで、あのメス奴隷でよろしいですか」

沙也加が頷くと、途端にその人物の目付きと顔付きが変わった。それまでは、何処にでもいるような普通の平凡な顔であったが、それが豹変していた。そして、その目を見た瞬間沙也加は背筋が凍りついていた。その冷たく残酷な瞳は人間のものとは思えなかった。悪魔というものが存在するのなら、まさにこの目の前の人物が悪魔ではないか、そう思える程に体からも邪悪な気配が溢れ出ている。

・・なんですか、こいつは。葉月様とは、また違う恐ろしい気配を感じる。底無しの闇が目の前に現れたようです。この人物からメス奴隷を処刑し続けてきた血の匂いが滲み出ています。いったい何匹のメス奴隷を処刑してきたのですか・・

思わず緊張する沙也加に、その人物は軽い調子で言う。

「ああ、すいません。クラヤミと言います。大丈夫ですよ。すぐ終わらせますし、会場も汚さないようにしますから」

クラヤミは処刑場にパッとシートを広げていた。そのシートには一面に画鋲のような太い針が埋め込まれていた。クラヤミは、マイの小柄な体を抱えると、ポイッとゴミを捨てるようにマイをシートの上に仰向けに落としていた。

「あぎゃあぁぁぁぁーーっ！」

いきなり全身を針で刺されマイは絶叫するが、クラヤミは自分もシートの上に歩いていくと、シートの上で横になっているマイの体を蹴り飛ばす。そして、うつ伏せになったマイの体を踏みつける。

「ふぐうぅぅぅぅーーっ」

マイの頭を背中を尻を脚を、体重をかけて踏みつける。マイの顔面に針が無数に突き刺さり、胸や下腹部や太ももも穴だらけになっていた。そんなマイの腰を持ち上げたクラヤミは軽く脚を開かせる。マイは尻を突きだし、性器を丸見えにされた状態で頭を踏みつけられ顔面を針がブスブスと深く刺さり号泣していた。もう、マイの頭の中にはエムの事など消え去っていた。ただ自分の体を襲う激痛に泣き叫んでいたのである。

「じゃあ、手っ取り早くマンコ壊して処刑するよ」

クラヤミは楽しくて仕方ないという顔で、自分の履いているストレートチップの尖った革靴の先端にアダプタを嵌める。それは表面に無数の鋭い棘が生え、両サイドには刃が取り付けてあり、先端にはニードルが飛び出していた。

「ショック死されると詰まらないから薬を射っておくよ」

ヂューッとマイの腕に注射したクラヤミは、マイの突き上げた尻の中心の割れ目に狙いを付けていた。冷静に腕時計で薬の効果時間を確認したクラヤミは足を上げると思い切りマイの性器にアダプタ付きの靴で蹴りを打ち込んだ。マイの膣にクラヤミの革靴が甲の辺りまでめり込んでいる。

「ふんがぁぁぁぁーーーーっ!!」

マイの絶叫が響き、蹴りを入れられた性器から噴水のように血が噴き出した。そして、マイは自分で針山のシートの上を転げ回り、全身血塗れになっていく。マイの性器は、この一撃でズタズタにされ破壊され、マイは過呼吸に陥っていた。

「ひゅーっ、ひゅーっ、ひゅーっ」

クラヤミは楽しそうにマイを見下ろすと、粘土状の物体を取り出していた。

「さて、では終わりにしますよ」

クラヤミはマイの破壊された膣に粘土状の物体を大量に詰めていく。そして、口も開けさせると、その中にも粘土状の物体を詰めていた。そして、その粘土状の物体に何かを差し込んだ。沙也加は、その物体を見て眉をひそめていた。

・・汚さないようにすると言いながら、これ一番清掃が大変になるやつではないですか・・

が、クラヤミは沙也加の非難の視線に気がつくと、パチンとウインクして下に敷いてある画鋲付きのシートでマイの体を包み出した。そして、きれいにマイの全身をシートで包んでしまう。クラヤミが腕時計を見ると、マイの処刑を始めてからまだ3分も経っていない。

・・まだウルトラ○ンでも活動出来る時間ですね。もう少し痛め付けてあげますか・・

クラヤミは画鋲付きのシートに包まれミイラのようになっているマ

イを、アダプタを外した靴で蹴りまくった。

「！！！！！！！！！！」

声にならない声を上げ、体をくねらせマイが苦しんでいる。しかし、クラヤミは容赦なくマイの体を蹴り続ける。観客はクラヤミがこのまま蹴殺すつもりかと思ったが、それは違うようであった。もうすぐ3分という所でクラヤミは蹴るのを止め、手に持った何かの発信器を観客に見せる。

「先程、メス奴隷のマンコと口に詰めていたのは爆薬です。それを起爆させてメス奴隷を処刑します。では、最初はマンコです。着火」

クラヤミは躊躇いなくボタンを押す。

ボンッ！！

鈍い音が響きシートに包まれたマイの体が一瞬地面から浮き上がっていた。

「はい、次は頭です」

ボンッ！！！

また、マイの体が浮き上がり地面に落下した後はピクリとも動かなくなった。時間はちょうど3分経っていた。

「えーっと、神楽坂さんでしたよね。シートを開けてメス奴隷が絶命したのを確認してみますか」

沙也加は丁寧に断ったが、もちろん観客も納得していた。地面から浮き上がる程の爆発で性器と頭を吹き飛ばされ生きている筈がない。シートの中はもう肉片である事は間違いなかった。それでもクラヤミは、少しでも疑われるのは嫌だったのだろう。沙也加にシートの上から踏んでみてくれと言っていた。

・・別に疑ってなどいませんが、葉月様主催のこのトーナメントで変な噂を立てられるのも不快ですからね・・

沙也加はシートに包まれたマイの頭の部分を踏んでみる。それは、グニャッとまるで抵抗がなく潰れていた。

「はい、問題ありません。完全に絶命していますね。処理班、このゴミを早く始末して下さい」

沙也加は、本当に清掃の手間がかからず御満悦の表情だった。メス奴隷マイは、たった3分で処刑され、ゴミのように処分された。

63、商談　ハルカＶＳカエデ（前書き）

今回は一部メタ小説の部分があります。
あまり気になる事はないと思いますので、さらっと読み飛ばして下さい。よろしくお願いします。

63、商談　ハルカVSカエデ

63、商談

控え室の中で葉月とルイがモニターを観て話している。

「ルイ、気を付けた方が良いですね。どうやら奴の、クラヤミのスイッチが入ってしまったようです。ああなると奴は処刑の事しか考えません。あなたとの対戦、もう勝負など忘れてメス奴隷ハルカを処刑しにきますよ。奴との対戦が今日の最終戦だったら良かったのですが、序盤を盛り上げる為に第二戦、次の対戦にしてしまいましたからね。奴は興奮が治まらないまま、出てきます。奴がハルカを処刑するより早く、奴のメス奴隷を失神させるしかありませんね」

「やれやれ、ゆっくり楽しもうと思いましたが、そうもしていられない訳ですね。仕方ありません、開始直後に勝負を決めますか。しかし、それでも彼が止まらず暴走したら……」

「それは心配いりませんよ。奴はルールには従います。どんなに狂気な状態になっても、それは変わりません。不思議な事にそういう所は真面目なのですよ」

「ふーむ、なかなか面白い人物ですね。今のメス奴隷を処刑した姿は人間とは思えませんでしたがね。葉月、あなたを見ているようでしたよ」

葉月はルイの言葉に苦笑いしていた。

「あんなのと似ているとは心外ですが、それは認めましょう。自分でも奴を見ていると、まるで自分がそこにいるように感じる時がありますからね」

葉月は肩をすくめて見せるとルイはハルカの鎖を持ち、それでは行ってきますと部屋を出ていった。葉月は、ルイを目で追った後、クラヤミが来るのを待っているカエデに目を向けた。そして、そのカエデの表情から、カエデ自身がもう自分の運命を悟っているのを感じた。

・・ほう、あのモニターで自分の調教師クラヤミの姿を見て、自分の最後を悟ったわけですね。なかなか太い絆を持っているではないですか・・

そこへクラヤミが戻って来るとカエデの鎖を持ち、対戦場所である処刑場に向かい出ていった。

★　★　★　★

処刑場へ向かう通路の中でルイはハルカに話しかけていた。

「今回の対戦の相手は普通ではありません。いいですか、よく聞きなさい。あなたに一時的に〝ウテルス〟の力を戻します。それで耐えなさい。それでも、奴はおそらく私と同等の力を持っていると推測されます。なので、結果がどうなるかは分かりません。ああ、気にしないで下さい。ルール違反ではないですよ、本来のあなたの力

を解放する訳ですからね。相手が普通の人間であれば、そんな事はしませんが、葉月以外に私を興奮させる者がいるとはね」

ルイの言葉が終わった途端、ハルカは自分の体に力が湧いてくるのを感じた。今なら逃げられるかも知れないと思ったが、その力以上の力が前を歩くルイから発せられている。普段感情を見せないルイが、これ程感情を露にしているのをハルカは初めて見ていた。地獄の業火のような凄まじい力に焼き殺されるような感覚を感じていた。すると、今度は地獄の闇に飲み込まれるような力が後ろから近付いてきた。

「おっと、良かった追い付いた。急遽処刑に呼び出されましてね。すぐに自分の対戦ですからね、慌てましたよ」

「それにしては楽しそうで何よりですね。メス奴隷を処刑するのは楽しいですか。何匹くらい処刑されたのでしょう」

「いやあ、これほど楽しいものはありませんね。何匹と言われても憶えてないですね。数えるのも大変なくらいとしか」

「まあ、良いでしょう。でも私のメス奴隷を普通のメス奴隷と思わない方が良いですよ」

「ええ、知っていますよ。2代目ウテルスさんでしょう。俺が知らないわけないじゃないですか。知らない事はないほどよく知っていますよ、二階堂遥さん。メス奴隷がお似合いですね。ぐちゃぐちゃにしてあげますからね」

ルイは驚いた様子もなくハルカの鎖を引いて歩いていた。

・・やはり、このクラヤミという人物は私と同じですね。となれば、後は運を天に任せるのみ・・

ルイは、むしろこれでその後どのように展開していくのか興味津々であった。

★
★
★
★

沙也加は右手を上げアナウンスする。

「それではBブロック一回戦、第二戦〝ハルカ〟対〝カエデ〟を開始致します」

観客席から、ウォーッという大歓声が上がる。ルイとクラヤミは、それぞれメス奴隷を縛りあげ準備していた。ルイはカエデを三角木馬に載せていたが、クラヤミはハルカを開脚逆さ吊りにしていた。

「どういう事だろう、あの調教師。どうして逆さ吊りに……」

「三角木馬、使わないのかしら。私、あれが好きなのに」

「鞭と浣腸だけでいくつもりなのかな。それで失神させるつもりなの。よほど鞭に自信があるのかしら」

観客席でも戸惑いの声が上がっているが、沙也加やルイも意表を突かれていた。ただ一人、控え室で葉月だけはクラヤミの意図を見抜いていた。

・・あのクズ野郎の考えそうな事ですね。早く気付いて下さい、ルイ。一発でハルカの意識を刈り取られるかも知れませんよ・・

葉月はハルカを案じていたが、そこは抜かりなくルイはハルカにウテルスの力を戻している。いくらクラヤミといえども、一発でハルカの意識を断つのは不可能と思われたが、クラヤミはハルカを失神させるつもりはない。ハルカを始末するつもりで一撃を放つのだ。ハルカが、それに耐えられるか、そこに全てがかかっていた。

★　★　★　★

「はひゅーっ、はひゅーっ、はひゅーっ」

ＶＩＰルームでＺクラスの女子生徒たちは、実際の処刑を見て全員過呼吸になっていた。たった３分で、それまで生きていたメス奴隷が、ただの物体になりゴミのように廃棄される。それを目の当たりにしたショックで、漏らしてしまっている女子もいた。

「さて、皆さんセーラー服で可愛いですけど脱いで貰いますよ。その後、蜂須賀彩音と同じ事をしてあげます」

男のスタッフが生徒たちのセーラー服を脱がし全裸にしていく。あっという間に生徒たちは靴下とローファーだけの姿にされていた。

「それでは、そのマンコに突き刺さっているディルドゥ抜いて拘束していきますよ」

女子生徒たちは彩音と同じように両腕を背中に回されるとアームバ

インドで二度と動かせないように固定されてしまう。そして、口にも大きな男根状の性具が押し込められベルトできつく締め付けられる。さらに鼻フックがかけられ彼女たちの鼻の穴の中が晒される。

「良い顔になりましたね。でもまだ足りません。もっと良い顔になって貰いますよ。恐怖で醜く歪み涙を流す顔が最高なのですよ。実は今、あなたたちの親と商談を行っているのですよ。もう何人かは話がまとまったようですね」

女子生徒たちはメイドの言っている意味がまだ分からなかったし、それより彩音がやられた行為の方に興味が向いてしまっていた。

64、慟哭

64、慟哭

・・奴は何をする気なのでしょう・・

ルイは考えたが分からなかったかった。しかし、それは当然といえた。頭のおかしい狂人の考える事など、同じ狂人以外理解出来る筈がない。それが分かった葉月もまた狂人であるのは間違いなかった。しかし、それでもルイは嫌な予感を感じていた。とにかく急いでカエデを失神させる。その思いでカエデの両足に錘を下げると鞭を手に取った。そして、クラヤミに目を向けた途端、その行為を見て驚愕した。

・・何を考えているんだ、奴は。あれでは確かにハルカを失神させるつもりはない。ハルカを殺すつもりだ・・

ハルカは背後でクラヤミが何をしているのか分からなかったが、息を呑むような観客の態度や進行の沙也加の驚きの表情と背後で膨れ上がっていく邪悪な気配に、危険を感じウテルスの力を最大限解放する。クラヤミは開脚逆さ吊りにしたハルカの股間、性器に狙いを付けている。そして、クラヤミは頭上で高速で振り回していた。麗華の様に鞭を振り回して発火させるのかと思ったが、クラヤミの振り回しているものは鞭ではなかった。

・・あんなもの叩き込まれたら、場所によっては即死ですよ。あの

まま、ハルカのマンコを狙ってくれれば一撃は耐えられるかも知れないですが・・

ルイも、もうゆっくりとはしていられないと鞭をカエデに叩き込む。こんなに大勢の観客の前では〝魔法〟は使う事は出来ない。〝魔法〟のない、この世界で使用してしまったら大変な事になるだろう。なのでルイは別の方法でカエデを失神させる方法をとった。これも鞭の名手であるルイならでは方法だ。クラヤミには、とても真似する事は不可能だろう。

ピシイッ！

鞭がカエデに叩き込まれるが、これは打撃でカエデにダメージを与える鞭ではない。メス奴隷であるカエデを打撃で失神させるのは、いかにルイでも時間がかかる。そこでルイは、この方法をとった。鞭はカエデの首にグルグルと巻き付き、ルイが鞭を引くと、鞭はカエデの首を締め付ける。

「おごうぅぅっ」

カエデは首を絞められ、舌を突きだし苦しんでいる。

・・早く落ちなさい・・

鞭でカエデの首を絞めながらルイがクラヤミに目を向けると、クラヤミは振り回していた三角木馬の責めに使用する１０キロある錘〝分銅〟をハルカの性器に叩きつけるところだった。

・・ハルカ、耐えなさい。壊され続けてきたマンコなら耐えられるでしょう・・

祈るようなルイの眼前で、ハルカの性器に分銅が激しく激突する。

バキャッッッッ！！

「あぐうぅぅぅぅぅーーーーっ！！」

激しく反り返ったハルカの股間は、ただの一撃で外性器をぐしゃぐしゃに潰されていた。しかし、クラヤミは攻撃の手を緩めない。ハルカの外性器を破壊したクラヤミは、今度はハルカの頭部に狙いを付けていた。

・・いけない。頭蓋を割るつもりですか。さすがに頭を潰されては生きてはいられません・・

ルイは鞭を引く手に、さらに力を込める。カエデの脳へ向かう血流が止まり、これはもう我慢のレベルではなかった。いかに厳しく調教されたメス奴隷でも、首を絞められ血流を止まられては成す術がない。カエデの意識は本人も気付かないうちに粉々に散っていった。

「ビクトリー、ハルカ」

沙也加の声が響いた時、ハルカの頭に分銅が叩き込まれる寸前だった。クラヤミは分銅を引き、カエデを見つめる。そこには意識を失ったカエデがいた。

・・初めからハルカの頭を破壊していれば殺せたのに残念だな。仕方ない、二階堂遥には元の世界に戻っても、もう少し酷い目にあって貰うとしようか・・

クラヤミは気持ちを切り替えると、ルイにカエデの処刑を宜しくと伝え、さっさと屋敷に戻ろうとしていた。

「処刑を観ていかないのですか」

「また喉が乾いたのでラガーを飲みにね。俺は自分でする処刑以外興味ないのですよ。それにカエデとは心が繋がっていますからね。観ていなくてもカエデの苦しみや絶命した瞬間は分かりますよ」

呆れるルイの前からクラヤミは消えていた。

・・なかなかにクズな人物ですね。面白くはありますが、人としては最低でしょうね・・

ルイは、沙也加に顔を向けるとカエデを処刑する道具を持ってきて貰うよう依頼していた。

★　★　★　★

ＶＩＰルームでは拘束された女子生徒たちに錘が取り付けられていた。蜂須賀彩音と同じ様に、釣り針に付いた錘を乳首、小陰唇、クリトリスに下げられていく。

「ふぐうぅぅぅーーっ」

塞がれた口で悲鳴を上げる彼女たちは、もう涙と鼻水で顔を汚し、苦痛に顔を歪めていた。膝もガクガクと震え、中には大便を漏らしてしまっている女子もいた。

「まったく、この程度の責めで、この様ですか。Zクラスというのも質が落ちたものですね。蜂須賀彩音のいた頃は、他の生徒ももっと質が良かったですけどね。それでは、この性具をあなたたちのマンコの穴に挿れますよ。この性具は、この底のボタンを操作すると……」

メイドが男根状の性具の底のボタンを押すと、シャッと鋭い針が、性具から無数に飛び出していた。

「ふがあぁぁっ、ふがあぁぁっ！」

女子生徒たちは一斉に泣き出し嫌々というように首を振るが、スタッフは全員の膣に性具を根元まで挿入してしまう。

「さあ、覚悟して下さい。メス奴隷への一歩ですよ」

スタッフは一斉にボタンを押した。

パシャッ！

「ふぐわあぁぁぁぁーーーっ！！」

生徒たちは絶叫し、体をぶるぶる痙攣させている。何人かの生徒は倒れてしまっていた。

「まったく、情けないですね。マンコの穴を蜂の巣にされたくらいで。いいですか、マンコを処刑される時は、こんな軽い痛みではありませんよ。あなたたちの先輩〝渡邉ゆかり〟も〝蜂須賀彩音〟も発狂しましたからね」

メイドが生徒たちに話していると、スタッフがメモを持ってやって来た。そして、メイドに何か囁く。それを聞いたメイドは、残酷な笑みを浮かべていた。

「商談のまとまった生徒をメス奴隷として、さっそく本日、処刑を執行するようです。対戦の合間にお客様へのサービスとして処刑するそうですよ。良かったですね。ええと、それではメス奴隷となる女子の名前を読み上げますね。名前を呼ばれた者は、その瞬間からもう人ではなくなります。ここから対戦を観る事も出来ません。地下の檻に収容して、処刑の際に引き出されます」

「ふごうぅぅっ、ふごうぅぅっ」

メイドの言葉で生徒たちは一斉に泣きながら騒ぎだした。実際に処刑されたメス奴隷を観ている以上、メイドが嘘を言っているとは思えなかった。メイドは、そんな泣いている女子生徒たちを楽しそうに見つめ、メモを見ながら商談のまとまった女子生徒たちの名前を読み上げていった。名前が呼ばれる度に、泣き声がさらに大きくなる。ＶＩＰルームの中は彼女たちの慟哭で、メイドにとっては心地よい雰囲気に包まれていた。

65、鉄棺

65、鉄棺

ルイの依頼で鉄の棺が運ばれてきた。大きさは1メートル四方で、深さも1メートル程であろうか。普通の棺と違うのは、蓋の部分が棺の両側から出ているステーにネジで取り付けるようになっている点だ。

・・さて、こんな楽しいイベントに参加させてくれた葉月に少しは協力してあげましょうかね。どうやらメス奴隷のこの部位は人気があるようですから高値で販売出来るでしょう・・

ルイは、カエデを開脚逆さ吊りにする。

・・マンコを捌くには、やはりこの状態が一番やり易いですからね・・

メスを持ったルイは、まずクリトリスを包皮ごと抉り取っていく。

「あびゃあぁぁぁーーーーっ！」

カエデは絶叫するが、ルイはクリトリスをきれいに切除し銀のトレイに乗せる。そして、次にカエデの小陰唇を摘まむと、びろーんと伸ばし、それもメスで切除していった。

「あっぶうぅぅぅーーーっ、ぶぶぶぶぶうぅぅぅーーっ！」

カエデの左右の小陰唇も切除され、トレイに乗せられる。その後に血止めの為、焼きごてが当てられカエデの性器は焼き潰された。カエデは口から泡を吹いているが、それでも失神していなかった。

・・このメス奴隷、かなりレベルが高いですね。厳しい調教に耐えてきたのでしょう。面白い。このメス奴隷が、恐怖で震え命乞いする様子を見たくなりました。これから使う〝リッサの鉄棺〟で恐怖と苦痛を存分に味わって下さい・・

ルイは用意された棺の中にカエデを入れる。〝リッサの鉄棺〟とは、鉄製の棺に入れたメス奴隷を押し潰して処刑する器具である。鉄製の頑丈な蓋をネジで押し込んでいき、メス奴隷の体を骨も内臓も全て押し潰していき圧死させるのが目的の凶悪な処刑具である。カエデは今、それに入れられてしまった。ギロチンや鉄の処女と異なり、瞬時に絶命出来ず、恐怖と苦痛が長引く事がさらに残酷であるといえた。棺の蓋を押し下げるネジの速度は処刑人が自由に回せる為、早く回して絶命させるのも、じわじわと回してゆっくり絶命させるのも自由なのだ。さすがに鉄棺に入れられたカエデは号泣していた。処刑されるのは覚悟していたが、よりによって〝リッサの鉄棺〟に入れられるとは思ってもいなかった。カエデは、全身の骨を粉々に砕かれ、内臓も破裂させられ、最後には薄い肉片になるまで押し潰されてしまうのだ。カエデは、泣きながら首の骨が折れればすぐに死ねるかもと考えたが、ルイはカエデの体を出来るだけ長く生きていられるよう向きを調整していた。そして、無情にも棺の蓋が閉じられる。もうカエデには光は見えない。暗い闇の中で少しずつ体を潰されていくのだ。ルイは、ゆっくりとネジを回し、棺の蓋を押し込んでいく。

「ひいいいいーーーっ！」

棺の中からカエデの悲鳴が響いている。カエデの姿は見えないが、観客たちも、その声だけで興奮していた。沙也加もまた笑みを浮かべていた。

・・これは派手さはないですが、なかなか良い選択ではありませんか。それにこれは処刑場を汚しません。血も肉片も飛び散らないし、清掃が楽で助かりますよ・・

棺の底の角から細いパイプが突き出ている。それは棺の中で潰されたメス奴隷の体液を排出するパイプだ。このパイプの先には容器が取り付けてあり、そこに体液が貯まるようになっている。その為、沙也加の思う通り、周囲を汚す心配はないのだ。

「だじげでえぇぇぇぇーーーっ！！」

棺の中からカエデの声が響く。カエデ程のメス奴隷でも、何も見えない闇の中、体を潰されていく恐怖には耐えられなかったようである。もうネジは3分の1ほど締められている。小さな棺の中でカエデはもう動くことも出来ず、恐怖と苦痛で苦しんでいるのは間違いなかった。しかし、ルイは容赦せずネジを締めこんでいく。

「あびゃあぁぁぁーーーーっ！！」

カエデの絶叫が棺の中から響き、バキバキという骨の砕ける音も聞こえてくる。そして、カエデの声から力が失われていった。

「だじげでぐだぢゃい……」

カエデのか細い声が微かに聞こえる。棺の蓋はもう半分以上押し込まれいた。さらにルイがネジを締めていくと、排泄パイプからとうとう赤い液体が流れ出てきた。カエデの声はもう聞こえない。しかし、ルイはまだネジを締めこんでいた。パイプから大量にカエデの体液が噴き出してくる。おそらく、もうカエデは棺の中で惨めに潰されて圧死しているのは疑いようもなかった。ルイが回しているネジにも、回す力がかなり必要になってきていた。

・・カエデ、サヨナラか。よく頑張ってくれたよ・・

クラヤミは、食堂でラガーを飲みながらカエデが苦しみ抜いて絶命したのを感じていた。

★
★
★
★

ＶＩＰルームでは名前を呼ばれた三名の女子生徒が泣いて暴れながら部屋から連れ出されていた。その三名は地下の檻に収容され、時間がくると1匹ずつ処刑される事になる。残された女子生徒たちも狂ったように泣き叫んでいた。

「ふごうぅぅっ、ふごうぅぅっ、ふごうぅぅっ」

「もう、いい加減うるさいですね。ほらメス奴隷の処刑が開始されましたよ。きちんと観なさい。あなたたちが、どう処刑されるのか。観ておく事も大切ですよ」

メイドは処刑されるメス奴隷に目を向けていた。

・・ほう、〝リッサの鉄棺〟ですか。葉月様の御友人だけあり渋い選択をされますね。派手な演出はありませんが、あれをやられるメス奴隷の恐怖と苦痛は格別ですよ。さっき連れていった3匹の中でも1匹くらいは、これで処刑して貰いたいですね・・

メイドは楽しそうに観ていたが、もう女子生徒たちはそれどころではなかった。自分が、あの残酷な処刑具で潰され、小さな肉の塊にされるかと思うと、まだその前の処刑の様に爆薬で爆破される方がマシだと思っていた。

・・嫌だぁ、誰か助けてぇ、もう私、真面目になりますからぁ・・

女子生徒の全員が心の中で助けを求めていた。ここで正義のヒーローやヒロインがいるのであれば助けに飛び込んで来るところであろう。しかし、残念ながら、そんな者は誰も来ない。ここにいる者、全てがメス奴隷の処刑を楽しみに集まった者たちである。この世の地獄に飛び込んでしまった自分たちの迂闊さを後悔する以外ないのであった。

66、悶絶（前書き）

すいません。また少しメタ要素入ってます。
あまり、気にせず読んで下さい。

66、悶絶

66、悶絶

ルイは、結局最後まで棺の蓋をネジ込んでいた。そして、今度はネジを緩めて蓋を持ち上げていく。どうやら、潰されたカエデの姿を見せてくれるようだった。観客たちは息を呑んで蓋が開く瞬間を期待していた。

「どんな状態になっているかな。この処刑は初めて観るから興奮してしまうよ」

「ぐちゃぐちゃに潰れて固まっているでしょうね。あのメス奴隷が薄い肉の塊になっているの想像すると、濡れてくるわ」

「髪の毛とか除去して焼いてくれないかしら、ステーキみたいで良さそうなんだけど」

「いや、骨取るのも大変だぞ。目茶苦茶入ってるだろうからな。いっそ擂り潰して粉末にすれば良いんじゃないか。それで出汁とるとか」

「それなら、肉のブロックのまま煮出しても良くないですか。長時間煮込めば……」

「いや、下処理してないから無理ですよ。食用にするなら、きちん

と排泄物など取り除いておかないと。でも今度、きちんと処理したメス奴隷を使えば、いけそうですね」

観客席から期待の声が高まる中、リッサの鉄棺の蓋が開けられる。その中には極限まで押し潰され、もう人の体ではないカエデの姿があった。ただ一枚の肉の塊。どこが頭か、どこが胸か、そんなものはまるで判別出来なかった。観客の誰かが言っていたように、まさに肉のブロック。そんな物が棺の中に入っていた。

★
★
★
★

ＶＩＰルームでは、カエデの成れの果てを見て発狂したように泣き叫んでいた。その女子生徒たちの頬がパンパンとスタッフの手によって打たれる。

「塞がれた口で騒がれてもうるさいだけですよ。残ったあなたたちも商談の結果次第で、メス奴隷になれますからね。これからの対戦をよく観て勉強しておくのですよ。今、あなたたちのマンコの穴に挿れてある性具も〝蜂須賀彩音〟に使用した時より、さらに進化改良されているのですよ。タイマーを内蔵していまして一定時間で、針が引っ込み、また飛び出すようになっているのです。マンコの穴から抜くまでは、無限に何度もマンコの穴を蜂の巣にされる苦痛を味わえるのです。素晴らしいでしょう。もうすぐ2回目が動作しますよ」

メイドは笑いながら告げるが、女子生徒たちはもうパニックになっていた。自分たちも本当に処刑されてしまうという恐怖と、無制限に無数の針で膣を貫かれる恐怖で泣き喚き大騒ぎになっていた。

パシャッッ！

「「「ふんごうぅぅぅぅーーーっ！！」」」

小さな音が響いた後、女子生徒たちが絶叫する。再び膣内を針で貫かれ、彼女たちは悶絶していた。

「本当にだらしないですね。お客様はメス奴隷の泣き叫び苦しむ姿を楽しみに来るのですから、もう少ししっかりして貰わねば困りますね。まあ、この生徒たちは、まだ商談がまとまっていませんから、この性具で痛みに慣れて貰いますか。１０分間隔で針が飛び出るようになっていますからね。今日中に慣れるでしょう。それでは、気付け薬嗅がせて起こして貰えますか」

メイドはスタッフたちに命じ、女子生徒たちを起こしていく。そして、いちいち倒れられては面倒なので、首輪に天井からの鎖を装着し、彼女たちがもう倒れられないようにしてしまった。

「いい姿ですね。もう壊したくなってしまいますよ。私も葉月様にお願いして、この中から１匹貰おうかしら。おやっ、ここであなたたちのお友達だったメス奴隷が出て来ましたよ。１匹目が処刑されるようですね」

女子生徒たちの見ている前で、１匹のメス奴隷がスタッフに引かれて会場に出てきた。大声で泣きながら必死に抵抗しているが、首輪に付けられた鎖で引き摺られるように歩かされている。

「だじげでえぇぇぇぇーーーっ、おねがいじまぢゅうぅぅぅーーーっ！！」

泣き叫びながらメス奴隷は処刑場に立たされていた。

・・ゆ、ゆめちゃん……・・

女子生徒たちは処刑場に全裸で立たされているメス奴隷を見て震えが止まらなかった。つい先刻まで一緒にいた同じクラスの仲間が処刑場に引き出されている。今まで観たメス奴隷の処刑も衝撃であったが、まだ面識のないメス奴隷であったので観る事が出来た。しかし、今度はよく知った仲間である。その仲間が残酷に処刑されようとしている。彼女たちの心中は抑えようもない恐怖で押し潰されていった。

★　★　★　★

クラヤミは食堂で、貸与された端末でカエデの処刑を見ながらラガーを飲んでいた。

「そんな小さなモニターで観なくとも調教師であるあなたは一番いい席で処刑を観られたではありませんか」

クラヤミが振り返ると葉月が立っていた。その後ろには何時でも飛びかかれるように近藤が控えている。

「処刑を肴に飲む酒は美味いのでね。どうしたんですか、近藤さん。ずいぶん殺気だっているようですが」

「今日、スタッフが庭園を巡回している時、焼却炉付近で異臭を感

じたのですよ。そして、焼却炉の中に燃え尽きかけた人間を発見しました。それが、あなたの仕業ではないかと疑いを持つ者がいましたので確認に来たのですよ。あなたは昨夜、庭園の自慰場にいましたが、その前は何処にいましたか」

クラヤミはラガーをグイッと一気に飲むと、心外だというように肩をすくめる。

「俺はメス奴隷を処刑する以外興味がない。そこらの殺人狂と一緒にしないでほしいな。それに俺に、そんな誰だか分からない人を殺す動機がない」

「動機ならあるじゃないですか。あなたにしかない動機が」

「へっ、俺に動機がある？」

「そうですよ。それは物語を盛り上げる為、どうですか？」

「あり得ないね。俺なら物語を盛り上げるなら、豪徳寺葉月という巨悪の首を切断して、頭を処刑場に吊るして、体は串刺しにして晒し者にしておくよ。その方がインパクトあるでしょう」

「き、貴様ぁ」

近藤がクラヤミに向けて飛びかかろうとしたが、葉月が制していた。

「大丈夫ですよ、近藤。この人物はそんな事はしません。ただ、この人物が犯人だと思う者がいましたので、ここでその可能性を潰しておいたのですよ。初めから私は疑ってなどいません」

すると、そこへ処刑を済ませたルイがやって来た。

「おやっ、二人で飲んでいるのですか。それなら私も交ぜて貰いたいですね」

ルイはさっさと席につくと、エールを注文していた。葉月も席につくとワインを注文する。近藤も葉月に命令され、渋々席につきバーボンのロックを注文していた。そして、葉月はスタッフに声をかけ大型のモニターを運ばせていた。

「ここで飲みながら処刑を観るのもいいですね。この後、今日手に入れたメス奴隷の処刑をサービスで執行しますので、それを肴に飲もうではありませんか」

そして、葉月は食堂の隅で一人やけ酒をあおっていた斎藤にも声をかけ、ちょうど食堂に入って来た麗華と理津子、そして花梨にも声をかけ酒盛りが始まっていた。

「辛気臭い顔して、だから負けるのよ」

花梨がレモンサワーを飲みながら斎藤に絡んでいた。

「うるさいっ、僕があの蝋燭の仕掛けに早く気付いていれば君なんかに負ける事はなかったんだ」

「そうですね。あなたは昔から優柔不断ですからね。あの仕掛けに気付いたのは流石ですが、神無月さん程度に敗けているようではまだまだですね」

ワイングラスを傾け葉月が小馬鹿にした顔で言うと、理津子が追い

打ちをかける。

「そうですね、私たちと当たる前に敗けたりしないで下さいね」

二人に小馬鹿にされ花梨は膨れているが、大いに盛り上がっていた。

・・けっ、アイツら何やってやがる。俺が、ここにいるの分からないのか。ふざけやがって。みんな、ぶっ倒してやる・・

声をかけられなかった佐瀬は、一人不貞腐れて純米大吟醸〝八〇山〟を飲んでいた。

67、悲哀

67、悲哀

「ここでトーナメントの対戦を一休みして、本日入荷したメス奴隷の処刑を執行します。入荷したばかりですのでメス奴隷として不手際な部分も多々あるかと思いますが、御容赦頂きたいとお願い致します」

沙也加のサプライズアナウンスに観客席から歓声が起こる。

「今日はラッキーですね。トーナメント以外にも処刑が観られるなんて嬉しい限りですよ」

「まったくですよ。私は葉月様の公開処刑に欠かさず来ていますけど、このトーナメントが一番良いですね」

「入場料は高額ではあるけれど、これだけのボリュームがあれば逆にリーズナブルですよね。メス奴隷の購入費用とか考えると、こっちが心配になってしまいますよ」

突然の処刑に観客たちからは喜びの声が溢れていた。その逆にメス奴隷として立たされている元Zクラスの〝緒川夢〟は泣き叫びながら遠目からも分かるほど大きく震えていた。そこへ、四肢を切断するギロチンが付いた処刑台が運ばれてくる。それを見た夢はさらに激しく泣き出していた。

「ほら、暴れないでくださいよ。ベルトが締められないではないですか」

処刑台の上に乗せられた夢は泣きながら必死に抵抗しているが、スタッフ数人がかりで押さえ付けられ、処刑台の上に仰向けで大の字に固定されてしまった。処刑台の上に固定されると、逃れようのないギロチンの恐怖が嫌でも襲ってくる。

「ゆるじでぐだぢゃいっ、おねがいじまぢゅうぅぅぅーーーっ」

夢は、大きく股を開かされ性器を丸出しにされ大勢の観客に観られている羞恥よりも、恐怖の方が勝っていた。そこへ、クーパー剪刀を持ったスタッフが現れる。

「処刑前にお客様から御要望の多い乳首、クリトリス、小陰唇を切除しておきます。後程、販売する予定ですので購入希望の方は端末より入力して下さいね。購入希望者が多数の場合は抽選となりますので御了承下さいませ」

「いやぢゃあぁぁっ、ゆるじでぐだぢゃいぃぃーーっ」

泣き叫ぶ夢の乳首がまずクーパーで挟まれる。そして、そのまま簡単に切除されてしまった。

ジョキィィンッ

「あびゃあぁぁぁーーーーっ！」

夢の、まだ桜色の乳首が左右二つとも切除され容器に入れられる。

次にクリトリスだ。

「はぴゅーっ、はぴゅーっ、はぴゅーっ、はぴゅーっ」

夢は、恐怖と激痛で過呼吸になっていたので、夢の口にビニール袋が当てられ、夢が落ち着くのを待ってクリトリスが切除された。

ジャキィィンッ

「あぶうぅぅぅぅーーーっ！！」

夢のクリトリスもあっさりと切除されてしまった。そして、それも容器に入れられる。三つの突起を切除されてしまった夢は、それまで以上に泣き喚く。

「もう、ゆるじでぐだぢゃいぃぃぃーーっ」

しかし、当然許される事などない。夢の小陰唇がびろーんと伸ばされるとクーパーで切除されていく。

ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ

「あびゃびゃびゃびゃびゃびゃやあぁぁぁぁーーっ！」

こうして夢はあっという間に大事な所を切除されてしまった。

「お待たせしました。それでは処刑を開始致します。まず、四肢切断を行い、先程御要望のありました〝リッサの鉄棺〟でプレスし、肉のブロックになって貰います。それではお楽しみ下さい」

沙也加のアナウンスが響き、夢はもう息が出来ないほど怯え震えていた。しかし、そんな夢に構いもせず沙也加はギロチンを作動させる。まず、右腕のギロチンが落ちた。

ズンッッッン！

「うびゃあああぁぁぁぁぁーーーっ！」

夢の右腕が肩口から簡単に切断される。夢は絶叫と共に尿道から激しく尿を噴き出していた。

★
★
★
★

食堂では相変わらず飲み会が続いていた。メス奴隷ユメの処刑されていく姿をモニターで観ながら盛り上がっている。他に食堂にいたお客は、葉月に遠慮したように出ていったが、本心はそんなもの観ながら御飯は食べられないという所だろう。この異常な団体は他にお客がいなくなった事で、さらに羽目を外していく。

「おい、豪徳寺。蝋燭に違う物を潜ませておくなど反則であろう。自分で入れているのだから、自分の対戦の時に有利になるではないか」

「心配することはないですよ、橘。誓って言いましょう、私の対戦時にはそんな物は使いません。そんな物は私には必要ないからですね。必要なのは斎藤や神無月さんのような小物でしょう」

「まあ、確かにあんな物に頼るのは小物でしょうね」

またも葉月と理津子に馬鹿にされてしまうが、二の句が出ない斎藤と花梨であった。その時、ルイを見た葉月が驚愕の表情をする。それに釣られてルイを見た理津子も絶叫していた。

「麗華さん、早く避難をっ」

盛り上がっていた葉月のグループが一斉に逃げ腰になるのを見て、何事かと他の客では一人残っていた佐瀬がルイの手元にあるものを見る。そして、佐瀬も慌てて腰を上げ逃げようとしたが遅かった。ルイは嬉々とした表情で、手元に置いた缶詰めに缶切りで穴を開けていた。

「そんなもの室内で開けては……ぐわぁっ」

「「「うびゃあぁぁぁぁーーーっ！」」」

葉月の絶叫に続いて、逃げ遅れた理津子やクラヤミ、その他全員が悶絶していた。ルイが開けた缶詰めから発酵した液体が噴き出し、辺りに凄まじい異臭が広がっていく。それは世界で一番臭いがきついと言われる缶詰めだった。ルイは平気で缶を開け、中身をパンに載せるとパクッと口に入れ、エールをゴキュゴキュと飲んでいた。

「どうしたのですか、皆さん。人の肉を平気で食する皆さんが、魚の缶詰めごときで悶絶するなど楽しいですね」

ルイは実に楽しそうにエールを飲み、缶詰めを食べていた。

★　★　★　★

食堂で惨劇が起こった頃、ＶＩＰルームでも夢の処刑を観て、再び気を失う生徒が続出していた。右腕を切断された夢は、次に左腕も切断されてしまう。そして、左脚も太ももの付け根から切断された。夢の絶叫がＶＩＰルームにまで、よく響いてきていた。メイドは、この生徒たちが塞がれた口でふがふがとうるさいので口に押し込んだ性具を抜いていた。

「もう、止めてあげて下さいっ、夢ちゃん、死んじゃうよおっ」

その途端、女子生徒たちはメイドやスタッフに向かって必死に懇願するが、彼女たちはこの事態を理解していないようであった。

「何か勘違いしているようですね。これはメス奴隷の処刑ですよ。それに、あのメス奴隷の処刑が済みましたら、次のメス奴隷が処刑されます。あなたたちも商談が済みましたら、その処刑リストに名前が載るわけです。ただ時間が長引けば、翌日に繰り越しになりますので、あのメス奴隷の処刑に時間がかかってしまえばトーナメント優先ですので、もう処刑は行われないかもしれません。それぞれの処刑に時間がかかれば、トーナメントが終了するまで誰かは生き残れるかも知れませんね」

メイドは生徒たちの顔を見て、ニヤリと残酷に微笑んでいる。その瞬間、彼女たちの膣に挿入されている性具から、また針が飛び出していた。

パシュッッッ！

「あびゃあぁぁぁぁーーーーーっ！！」

絶叫する彼女たちの膣から血が流れ出していた。

68、商魂（前書き）

今回、カニバリズムを連想させる描写があります。
苦手な方は飛ばして下さい。不快になる恐れがありますので、よろしくお願いします。

68、商魂

68、商魂

夢の処刑が続けられている。夢はもう四肢を切断され、惨めにダルマ状態にされていた。これから、夢は下処理をされた上、〝リッサの鉄棺〟に入れられプレスされる。手足が失くなり、もはや何の抵抗も出来ない夢は泣き叫ぶ以外出来る事はなかった。夢が、この場を逃れられる唯一の方法。それは、大勢の観客に訴え、自分を再度購入して貰う以外なかった。

「だれがあぁぁっ、おねがいじまぢゅうぅぅぅーーーっ、だじげでぐだぢゃいいいいーーーっ！」

しかし、夢の必死の願いも空しくそんな奇特な人間はこの会場には一人もいなかった。この会場の誰もが、処刑を楽しむために大金を投じているのである。メス奴隷を助ける為に金を使う者はいなかった。

夢の切断された手足は吊られて血抜きをされている。燻製にでもするつもりなのかと観客は期待していた。そして、夢の下処理が始める。尿道にカテーテルが挿入され、残った尿が排出されその後、膀胱内が洗浄される。肛門からも浣腸液が注入され排泄物を出した後、口から逆流するほどの大量の洗浄液が注入され、腸内も洗浄される。

「ごばっ、ごばっ、ごばっ」

夢は息も出来ずに苦しんでいるが、体内をきれいに洗浄され、次に体毛の除去が始まった。僅かに生えている陰毛も剃られ、毛根も脱毛剤で溶かされる。髪の毛も同様だった。ツルツルにバリカンでカットされた後、毛根毎死滅させられた。夢の可愛いツインテールが、ツルツルの丸坊主にさせられていた。その頭を鏡で見せられた夢は、さらに激しく号泣していた。

「今度は排泄物や体毛を予め除去してくれたんだ。という事は……」

「そうですね。プレスしたメス奴隷の肉を食用として販売してくれるのかも知れませんね」

「えぇぇっ、それなら私、ぜひ買ってみたいわ。あのメス奴隷、凄く良いじゃない。私好みのメス奴隷だわ」

「いけない、涎が出てくるわね。焼く、蒸す、煮る、揚げる。どれが良いかしら、迷ってしまうわね」

この会場に詰めかけている観客たちもまた異常者の集まりであるのは間違いなかった。沙也加はその観客の様子を見てほくそ笑んでいた。

・・なかなか好反応ですね。これは相当高額でも買い手がつきそうですね。葉月様に進言しておきますか・・

沙也加はスタッフを一人呼び、葉月に観客の様子を伝えるよう指示を出した。沙也加が葉月に重用されている一つの要因は、このように〝報連相〟がしっかりとしている点であった。

・・ふふっ、それではこのメス奴隷に〝リッサの鉄棺〟に入って貰

いますか・・

夢は泣き叫びながら抱え上げられ、仰向けに〝リッサの鉄棺〟にすっぽりと入れられてしまった。そして、重い蓋が閉じられていく。

「だじげでぐだぢゃいいいいーーーーっ！！」

夢の絶叫が響く中、蓋はピタリと閉じられた。そして、モーターの動作する音が聞こえだす。

「この〝リッサの鉄棺〟はモーターで自動的にメス奴隷を潰していきます。どのくらいプレスするかは設定で自由に変更出来る仕様です。興味のある方は会場内の処刑具受付カウンターで説明する事が出来ますのでいらして下さい。購入希望の方も同じカウンターで受付しておりますので、よろしくお願いします」

沙也加はアナウンスしながら、ルイに感謝していた。地味な処刑具の為に販売が今一つであったが、ルイが処刑に使用してくれたので注目を集める事に成功した。そして、飛び込んできたこのメス奴隷に再度使用する事により、さらに認知度を高められる。

・・良いですね。これで在庫もけっこうさばけると思いますよ・・

沙也加は、これで販売をアップさせれば、さらに葉月の信頼を得られると喜んでいた。

★　★　★　★

飲み会の最中、大惨事に会っていた面々は医務室にいた。

「まったくあなたは室内であんな物は開けてはいけませんよ」

葉月が、ふんふんと周囲の臭いを嗅ぎ安心しながら言う。

「まさか、斎藤さんと神無月さんはともかく皆さんが悶絶するとは思いませんでしたよ。案外、だらしないですね葉月もクラヤミさんも」

実際に悶絶した葉月とクラヤミは言葉もなかったが、理津子は麗華にひそひそと告げていた。

「豪徳寺の弱点が分かったのは収穫ですね」

「ええ、あの冷酷無比で残虐で隙がないと思われる豪徳寺葉月にこのような弱点があるとはね。あのルイという調教師、グッジョブですね」

「もう、食堂の消臭作業は終わりましたかね。俺は気分直しに、もう一度飲みたいのですが」

クラヤミの提案で葉月が確認すると、どうやら消臭作業は終了したらしいというので食堂に戻ってみると、左右の壁がぶち抜かれて吹きさらしになっていた。唖然とした表情の一同だったが、葉月は平然として席に座りワインを注文していた。

「なかなか野趣溢れる感じで良いではないですか。風に吹かれてメス奴隷の処刑を観ながらお酒を飲む。風情がありますよ」

「豪徳寺の口から風情などという言葉を聞くとは思わなかったが、確かに気持ちいい風だな。麗華さん、私たちも飲みなおしましょう」

理津子と麗華はバーテンにカクテルの〝サイドカー〟を仲良く注文していた。クラヤミはラガー、ルイはエール、近藤はバーボンのロック、そして、斎藤は芋焼酎のロック、花梨はレモンサワーで再び乾杯していた。

「良いですか、ルイさん。今後あの缶詰めは禁止ですよ」

「仕方ありませんね。それでは今度は〝くさや〟にしますか」

「あなた、臭いフェチですか。そういう物はお一人で楽しんで下さい」

葉月の言葉に全員が同意していた。そこへ怒りに満ちた声がかかる。床に倒れていた佐瀬が起き上がっていた。

「お前ら俺をずっと無視しやがって、何で俺だけ医務室にも運ばれないで放りっぱなしなんだ」

激昂した佐瀬は葉月に掴みかかるが、隣にいたクラヤミや近藤に簡単に取り押さえられてしまう。

「狂犬そのものですね。地下の個室に頭が冷えるまで入っていて貰いましょうか」

手足を縛られた佐瀬はスタッフに担がれて運ばれていった。そして、地下の窓がない個室に入れられ動けないように床から鎖で止められた。スタッフは佐瀬の体が届かない位置に缶詰めを並べていく。佐

瀬はまさかという顔で缶詰めを見つめているが、防護マスクを着けたスタッフは次々に缶詰めを開け、逃げるように部屋から飛び出しドアを固く閉めていた。

「うぎゃあぁぁぁーーーーっ」

佐瀬の絶叫が部屋の中で響いていた。

68、商魂（後書き）

トーナメントに参加しているミアンちゃんの本編、天月先生「魔法学園幻術科　幼狐先生は頑張ります！」が完結致しました。是非お読みになって下さい。ネタバレになってしまいますが、解体ラインが登場し、そこに固定されたメス奴隷が……、という私のようなリョナ好きの方には楽しいエピソード満載です。勿論、普通のエッチシーンもありますのでご安心下さい。

こちらのミアンちゃんはトーナメント終了まで登場予定です。

69、圧壊（前書き）

今回もまたカニバリズムを連想させる描写が続きます。注意して下さい。

69、圧壊

６９、圧壊

夢の入れられた〝リッサの鉄棺〟の蓋が押し下げられていく。

「だじげでぐだぢゃいいいいーーーーっ！」

夢の泣き叫ぶ声が棺の中から聞こえるが、モーターは止まる事なくどんどん蓋を押し込んでいき、もう半分以上下に沈んでいた。

「いやだあぁぁぁぁーーっ、じにだぐないでぢゅうぅぅぅぅーーっ！」

おそらく棺の中では仰向けにされた夢の鼻先まで蓋が迫っているだろう。ここからが本番である。ここから夢は残酷に体を潰されていく。

「この棺の中にはマイクも設置してありますので、潰されていくメス奴隷の声や音も楽しむ事が出来ます」

沙也加がスイッチを入れると、それまで微かに聞こえていた夢の声がクリアにはっきりと聞こえるようになる。

「だじげでっ、だじげでっ、だれがあぁぁ、だじげでぐだぢゃいいいいいーーーーっ！」

絶叫する夢の声と、ミシミシと骨の軋む音が聞こえてくる。観客たちは次の瞬間を期待して息を呑んでいた。

「はひゅーっ、はひゅーっ、はひゅーっ」

絶叫の合間の夢の荒い息遣いもリアルに聞こえ、観客の興奮も高まっていく。

「これはもうすぐ頭蓋が割れそうですね。考えてみればこれはかなり残酷ですな。暗い棺の中で潰されていく。メス奴隷の息遣いまで聞こえて興奮が止まりませんな」

「あぁ、ゾクゾクするわ。早くメス奴隷、潰れてくれないかしら。もう私、イキそうだわ」

「頭蓋骨が割れる瞬間がたまらないわよね。どれ程の恐怖と苦痛なのかしら。あのメス奴隷がぺっちゃんこに潰れるかと思うと、興奮で失神しそうだわ」

観客たちが盛り上がっているなか、棺の中では夢が苦しんでいた。

「うぐぐぐぐぐぐぅぅぅっ」

もう顔面も潰され話す事も出来ない。夢の苦しげな声だけが聞こえてくる。そして……。

パキャッッッ

小さな音が響いた。その後、ヒュゥゥッという空気の抜けるよう

な音が聞こえ、夢の息遣いは聞こえなくなった。そして、バキバキと骨の砕ける音や、何かが潰れるようなグチャグチャとした音が聞こえ続けていた。

「どうやら、あのメス奴隷、潰れてしまったようですね。後はどこまでプレスしてくれるのでしょう」

哀れにも圧死させられたメス奴隷夢は、まだまだ〝リッサの鉄棺〟でプレスされていく。それは、人の形を残さない肉のブロックになるまで続けられるのであった。

★　★　★　★

夢の頭蓋骨が割れた音が聞こえた瞬間、ＶＩＰルームでは悲鳴が上がっていた。

「夢ちゃん、本当に死んじゃった。酷いよ、こんなの。どうして、夢ちゃんが処刑されるの」

泣きながら訴える女子生徒にメイドは肩をすくめていた。

「物分かりが悪い生徒ですねぇ。いいですか、今処刑されたメス奴隷は葉月様が親と商談して買い取ったのですよ。あなたたちも商談がまとまればメス奴隷として処刑されます。何度言えば理解出来るのでしょう」

メイドは桜桃中学のレベルも下がったのかと失望していた。しかし、生徒たちは、はっきりと言われてようやく理解したようで泣き叫ん

でいた。

「パパやママが私を売るわけないよ。もう帰して下さい」

「もう嫌だ。見学はもういいです。私、帰ります」

メイドが、もうコイツら薬で眠らせて部屋に閉じ込めておくかと思った時、スタッフがやって来てメモを渡す。そこには商談が済んだ新たな二名の名前が書いてあった。

「大内くるみと古林乃梨子、返事をしなさい」

生徒たちは、ヒッと息を呑んで黙ってしまった。

「早く返事をしなさい。どうせこの入場審査表を見れば分かるのですよ」

それでも生徒たちは怯えたように震えて黙ってしまっている。仕方なくメイドは入場する際にチェックした用紙の顔写真を見て、スタッフに指示を出す。

「その二名を地下の個室に連れて行きなさい」

メイドに指差されたくるみと乃梨子は悲鳴を上げながらスタッフに担がれていった。残された生徒たちは、もう声もなくガタガタと震え尿を漏らしてしまっている。

・・69番が懐かしいですね。あのレベルのメス奴隷が、この中にいるのでしょうか。いなければ素質がありそうな者の中から創りあげるしかありませんか・・

メイドはメイドで頭を悩ませていた。

★
★
★
★

もう〝リッサの鉄棺〟の蓋は最下部まで下げられていた。排出パイプからも大量の体液が絞り出され容器の中に貯まっている。そして、棺の中が確認されると夢の体は哀れにも薄い板状に固まり、もうどこにもそれが人間のメスであった痕跡はなかった。

「このメス奴隷の肉板は切り分けて真空パックに詰めて後程販売致します。手足の方も、桜のチップで燻して同じく真空パックにして販売しますので、御希望の方は端末より入力お願いします」

沙也加のアナウンスで観客たちは我先にと端末を操作していた。

★
★
★
★

食堂での飲み会からトイレに行く為出てきた理津子と麗華は、葉月の部屋の前で鍵を開けようとしている人物に気が付いた。黒いフード付きのパーカーを被り顔は判別出来ない。今行われているメス奴隷夢の処刑に屋敷のスタッフたちの意識も集中している隙を狙って、何事か行おうとしている雰囲気であった。

「何者ですかね、理津子さん」

「私たちと同じ様に豪徳寺を探ろうとしている者のようですが、大胆ですね。昨夜、不審死があったようですので、それに関係あるかも知れませんね。問い詰めてみますか」

理津子たちは、その不審者に近付くと声をかけていた。

「あなた、何をやっているのですか？」

しかし、その不審者は答える代わりに光る物を理津子たちに向かって投げつけてきた。

ヒュンッ

麗華がそれを鞭で叩き落とすと、それは〝ククリ〟と呼ばれる大型のナイフの一種であった。ククリは刃が湾曲しており重心が前にあるため物を叩き斬るのに適している。不審者はククリを投げた後、両手にククリを持ち、一気に間合いを詰め理津子に襲いかかった。

「問答無用で襲いかかってくるという事は、敵とみなして構わないですね」

理津子は車椅子から立ち上がり不審者の一撃をかわすと木刀を手に構えていた。

「昨日、オナニーをしておいて良かったですね。おかげで手足の感覚が分かりますよ」

不審者は一旦退いて二刀のククリを構える。

「木刀で私のククリに対抗するだとは笑わせる。そんな物、叩き斬

ってお前の体も両断してやる」

不審者は飛びかかってくるが、冷静であったならば理津子の腕と木刀から高周波の音が聞こえてくるのに気付いた筈だった。

ザシュッッッ！

「うぐうぅっ」

不審者のククリの刃が切断され、そのまま左腕も肘から切断され床に落ちていた。

「私の腕は超振動を発生出来るのですよ。それを木刀に伝導させました。私の木刀に斬れないものはありませんよ。あなたには色々聞きたい事がありますので、ここで確保させて貰います」

理津子が木刀の切っ先を不審者に当て、尋問を始めたようとした時、背後から突然声がかかった。

「いやあ、ビール飲むとトイレが近くなって困りますね」

脳天気なクラヤミが歩いて来ていた。

・・馬鹿な……。私が気配も感じない？・・

理津子と麗華が一瞬クラヤミに気をとられた隙に、切断された腕だけ残し不審者の姿は消えていた。

・・まさか、こいつ、奴を逃がす為に……・・

理津子はトイレに入っていくクラヤミの後ろ姿を見つめていた。

70、血脈　ノゾミVSアオイ

70、血脈

メス奴隷夢の処刑が終了し、会場は再びトーナメントに戻っていた。Bブロックの一回戦、メス奴隷ノゾミとアオイの対戦が始めるところであった。

「養母(おかあ)さん、どこ行ったの。この対戦の勝った方が私とあたるんだよ。観てなくていいのかな」

さすがに琴音も、自分の対戦相手は観ておくのが良いように思うが、葉月が帰ってくる気配はなかった。

「しずくちゃんの調教師もいないけど、どこ行ったの。養母(おかあ)さんと一緒なのかな」

琴音は、やはり一人でモニターを観ているしずくに話しかけていた。通常メス奴隷同士での会話など許されないが、琴音としずくは別である。琴音の養母は葉月であるし、しずくは渡邉ゆかりの妹である。スタッフが気を遣うのは勿論、メス奴隷たちも一目おいていた。

「トイレにでも行ったのかと思ったけど、全然帰って来ないね。このお屋敷広いから迷っちゃったのかな?」

かなり脳天気な事を言うしずくに、琴音は苦笑していた。しずくも

琴音も、まさか葉月たちが食堂でお酒を飲んで盛り上がっているなど思いもしなかったのである。

その食堂でテーブルの上に置かれた切断された腕とククリを見て酔っぱらいどもは好き勝手言っていた。

「クラヤミ、本当に関係ないのですね？」

理津子から話を聞いた葉月はクラヤミを問い詰めるが、クラヤミはラガーを飲みながら首を振る。

「俺がそんな面倒くさいことするわけないだろう。少しは信用しなさい」

「そんな酔っぱらいを信じろと言われましてもね。しかしまあ、この馬鹿は処刑以外頭が回らないのは確かですからね」

「葉月の部屋に侵入しようとしていたと言いましたが、それはもう侵入が終わって帰る時だったのではありませんか」

ルイがエールを飲み、くさやを噛りながら別テーブルで言う。全員から、それを食べるのであれば別テーブルで食べてくれと言われてしまったのだ。

「なるほど、それも考えられますね。部屋の中の捜索や仕掛けを済ませて、ドアに鍵をかけて何事もないように見せかけて立ち去ろうとしていたのかも知れませんね」

理津子もルイの言葉に頷いていた。

「別に私の部屋には重要な書類や金品は置いていませんがね」

葉月はそれなら事務室を狙うだろうというが、クラヤミははっきりと口にしてしまった。

「豪徳寺を殺したい奴なんて星の数ほどいるだろう。暗殺しようと狙ったんだろう。爆薬とか仕掛けてあるんじゃないか」

面白そうに言うクラヤミに近藤は顔をしかめるが、葉月はそれは面白そうだと確認に歩いて行った。

「どこも変わった所はないようですね。引き出しや棚も異常ないようです。やはり、侵入する前に見つかったようですね」

葉月は詰まらなそうに言うが、一緒に着いてきた理津子と麗華は、渡邉ゆかりの剥製に目が釘付けになっていた。

「それは私の宝物ですからね。それが無事なら良かったですよ。長期保存するためにケースに入れてきちんと管理するようにしたのです。どうです、今にもマンコ壊して下さいと言いそうでしょう」

二人の視線に気付いた葉月が自慢気に解説していた。

★　★　★　★

処刑場ではトーナメントの対戦が進められていた。ノゾミは三角木馬に跨がされ、アオイは〝駿河問い〟の形に吊られていた。ノゾミもアオイもスレンダーな体型で、なかなかスタイルがよく、顔も美

人系の人目を惹き付ける顔立ちだった。その2匹の顔が涙と鼻水で汚れ、苦痛で歪んでいる。

「あんな形に吊ってどうするつもりかしら。三角木馬は使わないの」

「駿河問いはきつい拷問であるけど、あれで勝てるのかね。短時間で失神させるなら三角木馬で錘を下げて鞭で打った方が早いと思うがどうだろう」

「いや、でもあれを見てご覧なさい。三角木馬用に用意された錘を腰に縛り付けていますよ」

「なるほど、さっきの調教師が錘を単独で使用してメス奴隷を壊そうとしたけど、それの応用か。用意された物は単独で使用してもルール違反にはならないという意味だね」

観客が興奮して見つめる中、ノゾミは足に、アオイは腰に錘を下げられていく。

「あっびゃあぁぁぁぁーーーっ、いだいいいいっ」

2匹のメス奴隷は激しく絶叫する。ノゾミの性器の割れ目には三角木馬の鋭角が激しく食い込み、ノゾミの体は両足をピーンと伸ばしたまま痙攣している。対するアオイも両手首足首をまとめて縛られ吊るされている状態で腰に三角木馬用の錘をいくつもぶら下げられ骨が折れそうな程反り返っている。そして、アオイを責めている調教師は、この状態のアオイの肛門に浣腸器を突き刺し、グリセリン液を注入していく。それも一度ではない。何度も何度も肛門から浣腸液を注入する。

「ぐ、ぐるじいいいーーっ、あぶうぅぅぅーーっ！」

アオイは悲鳴を上げるが調教師は、アオイの体をグルグルと回し始めた。ここからが、この拷問の真骨頂である。それを知っている観客も期待に胸を高鳴らせていた。

★
★
★
★

・・あれは、ゆかり姉(ねえ)が好きだった拷問・・

ＶＩＰルームで一人の少女が駿河問いにされているアオイを興味深く見つめていた。少女は黒髪をポニーテールに結び、その顔つきはどことなくゆかりに似ていた。そして、その体型もお世辞にもスタイルが良いとは言えず、寸胴の幼児体型だった。少女は資料で読んで知っていた。駿河問いは渡邉ゆかりが好んで吊るして貰っていた拷問だ。資料では知っていたが実際に見るのは初めてだった。

・・私はゆかり姉(ねえ)には会った事はないし、しずくとも小さい頃に一度会っただけ。その、しずくと文子叔母さんがトーナメントに出場しているなんて驚いたけどね・・

ＶＩＰルームでは、すでに5匹のメス奴隷が地下に連れられていたが、この少女にはまだ声がかかっていなかった。

・・うちの親は強欲だからね。すぐに首を縦に振ったりしないよ。私が可愛いなんて、これっぽっちも思ってないだろうけど・・

この少女以外の４人は、もう生きた心地がしないという様な顔をし

ている。いつ自分の親が自分を売り飛ばしてしまうのか。その恐怖に涙を流していた。

・・まったく、普段メス奴隷になって処刑されたいなんて言っているくせに、実際そうなったらだらしないじゃない。栄子、あなたは違うよね・・

少女は隣の生徒を見ようとしたが、その瞬間また膣に挿入されている性具が作動し、膣壁に針が突き刺さった。

パシュッッッ！

「あぶうぅぅぅーーっ！！」

ぶりっ、ぶりっ、ぶりぃぃっ

少女は絶叫し、無様に大便を漏らしていた。

・・ウンコまで漏らして無様な姿。こんな姿を、あんな大勢の人の前で晒したら絶対気持ち良いよ。それにこんなに何度も針でマンコの穴を貫かれたら、私のマンコもう絶対使い物にならない。唯一残った使い道は壊して貰う事。私も、ゆかり姉(ねえ)みたいに徹底的にマンコ壊して貰いたい。もう、いつまでも駄々こねていないで妥協しなさいよ。吹っ掛けて過ぎてなかった事にされたらどうするの・・

少女は商談が白紙にされてしまう事を危惧していた。

71、御門

71、御門

「あひっ、あひっ、あひっ、あひっ」

少女は、ぶりぶりとまだ大便を漏らしていた。

・・人の見ている前で無様にウンコ漏らしてる。マンコも針刺されて錘で引き伸ばされて痛くて熱いよ。もう夢ちゃんみたいに乳首とクリ、切って貰いたい。あうぅぅっ、気持ちよくて気を失いそう・・

「あふっ、あふっ、あふうぅぅっ」

少女は小さく声を出してしまっていた。

・・ほう、1匹いい反応をしているメスがいますね・・

メイドは書類を捲り、顔写真を確認しその女子生徒の名前を確認する。

・・”御門つぐみ”ですか。このメスは少し期待が持てそうですね・

・

メイドはニヤリと笑みを浮かべると、書類に付箋を貼っていた。

・・まだここに残っているという事は商談が難航しているのでしょうね。でも、このメスは是非確保しておきたいところです。交渉のこちらの上限を上げる為に、このメスに少しパフォーマンスをして貰いますか・・

メイドはスタッフに指示して、つぐみの拘束を解き錘も外した。

「御門つぐみ、私の後について来なさい」

つぐみは、自分も購入済みになったのかと思ったが、それにしては今までのメス奴隷になった生徒に対する扱いと違う気がする。不思議に思いながらメイドの後ろを歩いて行くが、膣に刺さった針の激痛で、がに股でよたよたと歩いていた。そして、窓のない周囲が白い壁の個室に入れられる。

「これから、あなたを撮影します。私の指示に従って貰いますよ。まず、この下着を穿きなさい」

メイドに渡された下着は、普通の女児用の白い無地の綿の下着に見えたが、つぐみが受け取って穿こうとすると股間に当たるクロッチ部に針がびっしりと埋め込まれていた。

・・これ、ゆかり姉の穿いてた針付き下着だ・・

つぐみは恐る恐る針付き下着を穿いていくと、性器にチクリとした針の冷たい感触があった。

・・私のマンコのここに刺さるんだ。私はマンコの穴とマンコ、両方に針を刺されるんだ・・

「早くしなさい。股を開いて、きちんと下着を穿くのですよ」

つぐみが躊躇しているとメイドが急かしてくる。つぐみは足を開いて一気に下着を引き上げた。

プツウッッ

「あうううぅっ、痛いいいいっ」

つぐみの性器に針が突き刺さり、つぐみは悲鳴を上げるが、メイドは冷酷に次の指示を出す。

「足をもっと大きく開いて、両手を上に上げなさい。きちんと胸を張って、顔も上げるのですよ。そして、そのまま動かずにいなさい」

メイドの命令でつぐみは、立っていられる限界まで足を大きく開き、両手を万歳のように頭上に上げ、胸も張り顔を上げた。メイドは短い乗馬鞭を持つと、つぐみの背後に回る。

「いいですか、そのままの姿勢でいるのですよ。カメラから顔を逸らさないように気を付けなさい」

ビュンッ

メイドの言葉が終わるや否や、鋭い風切り音が聞こえる。

パシイィィッ！

「あぶうぅぅぅーーっ！」

続いて股間から体が裂けたような激痛がつぐみの脳裏に衝撃を与え、つぐみは絶叫していた。

パシィィッ、パシィィッ、パシィィッ、パシィィッ、パシィィッ！！

「あぶうぅぅーーっ！ぶぶぶぶぶぶぶうぅぅーーっ！！！」

つぐみは針を大量に刺された性器を鞭で痛打され、絶叫し続けていた。

・・いだいいいいいっ！いだいようぅぅぅっ！・・

つぐみの白い下着の股間が、赤く染まってきていたが、メイドは容赦なくつぐみの性器に鞭を叩き込んでいた。

★
★
★
★

メス奴隷ノゾミは両足に大量の錘を下げられて呻き声を上げていた。三角木馬の頂点はノゾミの性器を深く割り、クリトリスを潰そうとしている。そして、恥骨もミシミシと音を出し今にも割れそうであった。両足も無事ではない。ノゾミの両足に付けられた錘は、調教や拷問の比ではない。メス奴隷を股から裂いて処刑する程の重さである。ノゾミの両足は棒のように一直線に伸びきり、ブチブチと腱や筋が裂けるような音が聞こえている。それだけでも耐えることが困難な激痛であるのに、そこに容赦なく鞭が叩き込まれていた。鞭はノゾミの顔面、胸、下腹部に容赦なく執拗に叩き込まれる。

パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシィィッ！

「あびゃあぁぁぁぁーーーっ、あびゃびゃびゃびゃびゃあぁぁぁっ！！」

ノゾミは鞭で打たれる度に激痛で体を動かしてしまう。すると、三角木馬の鋭い鋭角がさらに厳しくノゾミの性器を割ってくるのである。ノゾミの体重と錘の重量がすべてノゾミの性器の割れ目に集中している。その、脳天まで体を裂かれるような激痛にノゾミは限界に達しようとしていた。

ぷつっ

「あっぶうぅぅぅぅーーーっ、ぶっぶぶぶぶぶうぅぅぅーーっ！！」

小さな音が聞こえノゾミがこれまでにない絶叫を上げ、口からぶくぶくと泡を吹きだした。ノゾミの三角木馬が食い込む股間から血が流れている。どうやらノゾミのクリトリスは過酷な責めで潰されてしまったようだった。ノゾミは天を仰いで泡を吹いているが、まだ辛うじて失神はしていなかった。

一方、アオイは駿河問いで吊るされ錘を下げられた上に浣腸もされていた。そして、グルグルと回されていく。

「さあ、苦しんで貰うよ」

調教師はきつく捻れたロープを見つめ、アオイの体を押さえていた手を離した。

「ひいいいいいっ」

悲鳴を上げるアオイの体が、独楽のように高速で回転する。遠心力でアオイの頭に血流が集中し、アオイの顔が真っ赤に染まっていく。

「うぶうぅぅぅっ」

アオイは悲鳴を上げながら回転しているが、肛門から液便が漏れ始めていた。

ブッシャアァァーーーッ！

そして、ついに回転しているアオイの肛門から噴水のように排泄物が噴き出した。グルグル回転しながら便を噴き出すアオイの姿は観客の笑いを誘っていた。

「いいね、あのメス奴隷。ウンコ漏らしながら、回っているよ」

「顔も真っ赤になっているし、そろそろ破裂するよ。あははっ、無様で良いねえ」

観客たちが期待する中、アオイの毛細血管が回転による遠心力でついに破裂する。

「あぶうぅぅーーっ！」

アオイの眼、鼻、耳から血が流れ出ていた。アオイは悲鳴を上げながら、口からはぶくぶくと泡を吹き出し回転していた。

★
★
★
★

・・くそっ、なんだあの女は……。これでは、もう調教師に成り済ましして、ここに潜入しているのは不可能だ。抜け出すしかないか・・

左腕が肘から先がない人物は、周囲の観客に紛れ会場から外に出ようとするが、入場用に開いている大きな門の前には、既に葉月の指示で警備員が目を光らせていた。

・・やはり、正面から脱出は無理か。このトーナメントの終わりまで潜んで帰りの混雑に紛れるのが一番か・・

その人物は、そのまま観客の中に溶け込み気配が消えていた。

72、痛檄

72、痛檄

クロッチ部に針の付いた下着を穿かされ、性器を鞭で痛打されているつぐみの股間が赤く染まっていく。

パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシッ

「あぶうぅぅーーっ！あぶぶぶうぅぅぅっ！」

休む間もなく性器を鞭で打たれつぐみは悲鳴を上げながらも、メイドに命じられた姿勢をなんとか維持していた。

・・やはり私の期待通りのメスのようですね。これは、この動画を観て頂いて是非こちらの提示金額の上限を上げて貰いたいところです。このメスの価値は、その金額に見合うだけのものはあると思います・・

つぐみの顔はもう夥しい涙と鼻水で無様に汚れ、針を刺された性器を鞭で打たれる激痛で醜く歪んでいた。

・・いだいぃぃぃぃっ、もうマンコの感覚がないよう・・

つぐみは必死に耐えているが、それも限界に近付きつつあった。下着のクロッチも一面真っ赤に染まっている。

「うぅっ、もうゆるじでぐだぢゃいっ、わだじのマンコ、もおごわれでまずうぅぅっ」

ついにつぐみは号泣しながら許しを請うが、メイドは本来の目的を忘れ、つぐみの性器を責める事に興奮していた。

・・このメス、いい声で泣きますね。もっと泣かせてあげますよ・・

パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシッ、パシッ

「うぐうぅぅぅーーーっ！」

メイドはさらに鞭を連続でつぐみの性器に叩き込む。大きく開いたつぐみの両足は、もうぶるぶる震えつぐみは倒れそうになるのを、なんとかこらえていた。

ぶっ、ぶっ、ぶっ、ぶっ、ぶうぅっ

鞭の痛打に耐えるために下腹部に力を入れていたつぐみは、連続で放屁してしまう。悪臭が辺りに漂うが、メイドもつぐみもその臭いに気付かぬほど、プレイに熱中していた。

「もうマンコはゆるじでぐだぢゃいっ、ほかのところ打ってぐだぢゃいっ」

つぐみは泣きながら懇願するが、当然ながら許される事はない。さらに激しくつぐみの性器に鞭が叩き込まれる。

「ふふふっ、良いですね。あなたの泣き声はたまりませんね。マン

コ、徹底的に壊したくなりますよ」

メイドは、荒い息をしながら鞭を打つ手を止めていた。

「危ない、危ない。本当にマンコ壊すまで止まらなくなりそうですよ。ここで壊してしまったら葉月様に叱られてしまいます」

メイドは撮影したデータをメモリーに移すと、葉月様に渡して下さいとスタッフに指示していた。

★　★　★　★

ノゾミは三角木馬でクリトリスを無惨に潰され、久地から泡を吹き絶叫していた。ノゾミを責めている調教師は、もうすぐノゾミは落ちると確信し、ノゾミの体に鞭を激しく叩き込む。

「あびゃあぁぁぁぁーーーっ！！」

絶叫するノゾミの体は一面にみみず腫れが浮き上がり、見るからに痛々しい。

・・もう私、マンコから裂かれて、ぢぬっ・・

調教師が予想した通りノゾミの精神も崩れていく寸前であった。しかし、ノゾミはそこからしぶとく意識を保っている。それは、ノゾミの中にあるメス奴隷の矜持だった。

・・こんな大勢の人に私の責められる姿を観て貰っている。すぐに

失神なんかしたらメス奴隷として恥ずかしい。私の苦しみ姿を、みんな楽しんでくれているのだから。真弓さんは、許して下さいなんて絶対言わないって私に言ってた。私も、真弓さんみたいに頑張るんだ・・

ノゾミは自分の性器や体を襲う激痛に必死に耐えながら意識を保っていた。そのノゾミの姿に調教師はこのままでは自分のメス奴隷アオイが先に失神してしまうのではと危機感を覚える。

・・くそっ、想定外に時間がかかっている。アオイの様子を見るとかなりヤバイ状況だ。このままでは、それほど時間がかからずに気絶するだろう。用意されている拷問具で残っているのは浣腸か。これを使って現状を打破しなければ）・・

調教師は浣腸用のシリンジを持つと、何を注入するか急いで用意された溶液を見ていった。

・・これは……。こんな物が用意されているという事は、なるほどアレをすれば、このメス奴隷を落とせる・・

調教師は急いでその液体をシリンジに吸い上げ、メス奴隷の前に立った。

「おいおい、今さら浣腸なんかで間に合うのか。向こうのメス奴隷はもう眼や鼻から血を流してヤバいぞ」

「別に良いじゃない。私たちは、どっちが勝とうと処刑が観られればいいんだから」

「そうね。これは処刑前の遊びみたいなものだよね。メス奴隷がマ

ンコ壊されて処刑される姿さえ観られれいいわ」

勝手な事を言っている観客たちであるが、実際に対戦しているメス奴隷や調教師は真剣である。自分の評価や命がかかっているのである。この調教師も、浣腸用のシリンジを持ちながら、当然勝つ気でいた。

・・ふふっ、どうしてここまで耐えられるのか分からんが、もう耐えられないぞ。いくら、精神力で耐えても、その精神毎断ってやる・・

観客たちは調教師が肛門からメス奴隷に浣腸すると思っていたが、そうではなかった。

・・こんな粘度の高いローションを用意してあるって事は、運営側もこの責めを想定しているって事だ。遠慮なくやらせて貰うぞ。このメス奴隷の呼吸を止めてやる。失神して、すぐに蘇生すれば反則負けにはならない・・

調教師はメス奴隷の肛門ではなく、鼻の穴にシリンジを突き刺していた。

ヂュウゥゥーーーッ

そして、ノゾミの鼻の穴にローションを注入する。鼻浣腸といわれるプレイであるが、この場合調教師はノゾミを殺すつもりで注入している。手加減など一切なかった。

「がはっ、がはっ、がはっ」

ノゾミが苦し気に嘔せるが、調教師はノゾミの口を手で押さえローションを、どんどん注入していく。二本、三本。次々にローションを注入され、口を押さえられ吐く事も出来ないノゾミは呼吸が出来なくなり目を大きく見開く。

・・私、殺されるんだ。三角木馬でクリトリス潰されて、足も駄目にされて、鼻から浣腸されて息を止められる。惨めでメス奴隷に相応しい最後かな・・

口を押さえられ鼻から浣腸されるノゾミの瞳から大粒の涙が溢れていた。

★
★
★
★

メス奴隷たちの控え室で1匹のメス奴隷が周囲を気にしていた。昨夜は、メス奴隷用の地下の個室に入れられ、今朝そこからスタッフに出されて、この控え室に鎖で繋がれているのだが、昨夜別れたきり自分の調教師の姿が見えないのだ。

・・そろそろ、私の順番なのに・・

メス奴隷は、胸騒ぎがしていた。昨夜、焼却炉の中で焼け焦げた人間らしきものが発見されたようで、スタッフたちの動きが慌ただしい。それに、豪徳寺葉月の姿がここにないのも、その不審死を調べているのではと思っていた。実際は葉月は食堂で飲み会を開いているのだが、メス奴隷にはそんな事分かる筈もなかった。

・・もうこの対戦の勝負がつきそう。その後、処刑が終わればすぐ

に私の順番だよ・・

メス奴隷は控え室の出入り口を見つめているが、自分の調教師が現れる気配はなかった。

73、敗残

73、敗残

・・どうしたら良いんだろう。もう時間がないよう。このままだと私どうなるの・・

メス奴隷は不安で潤んだ瞳でモニターを見つめていた。もう画面の中で、勝負の決着がつくところであった。

・・もうあのアオイというメス奴隷は限界だよね。これ以上回されたら死んじゃうよ。でも、ノゾミというメス奴隷も呼吸止められているみたい。もうすぐ決着ついちゃうよ・・

メス奴隷は気が気ではなかった。未だ自分の調教師の姿はない。もしや、昨夜焼却炉で燃やされていた人物が自分の調教師であったなら、そう考えるとメス奴隷にはどうして良いか分からなかった。こんなに長時間、調教師が何も言わず不在の事はなかった。何か不測の事態が起こったのは間違いなかった。

★　★　★　★

佐瀬は地下の個室からようやく解放されて外の庭園に出ていた。空気がこんなに美味しいと思ったのは佐瀬の生涯で初めての事であっ

た。

「くそっ、アイツら。絶対俺をバカにしてやがる。全員一発ぶん殴ってやる」

佐瀬は拳を固めて、ふらふらと歩いていた。トーナメントの会場からは大きな歓声が聞こえている。佐瀬は、庭園の至る所に設置されているモニターで対戦の様子を見ていると、片腕の人物が歩いて来た。

・・服を着ているという事は豪徳寺の関係者か、調教師か、或いはＶＩＰ待遇のゲストということか・・

凛津の時も、ゆかりの時もそうであったように葉月が公開処刑する際は、葉月の屋敷に入場する為にはセキュリティを確保する目的で全裸になる必要があった。なので、この片腕の人物が服を着ているという事はトーナメントを観に来た観客ではないというのは明白だった。佐瀬は豪徳寺の関係者か、自分と同じ調教師かと思い、一応頭を下げて挨拶したが、向こうはまるで佐瀬を無視して歩いている。

・・こいつまで俺を無視しやがって・・

佐瀬は、ついカッとなっていた。

「おい、なにしかとしてんだよ。礼儀ってやつを教えてやろうか」

佐瀬がその人物に近付くと、その調教師風の人物は片腕にシュッと大型のナイフを握り佐瀬に斬りかかってきた。

「うおっ、テメエ何しやがる」

かろうじて初撃をかわした佐瀬に構える隙を与えずその人物は連続で斬りかかってくる。

・・くそっ、問答無用かよ。だがよ、片腕で俺を倒せると思うとは愚かな奴だ・・

佐瀬は攻撃を避けながら地面に手をつき土を握っていた。そして、その土を相手の顔面に投げつける。

「うっ」

小さな声を出し相手の動きが止まった瞬間、佐瀬は間合いに入り相手の鳩尾に強烈な拳を叩き込んだ。

「おげえぇぇぇっ」

相手はたまらず地面に崩れ落ちる。佐瀬はすかさず相手の靴を脱がし、タイラップで両足の指をまとめて固定し逃げられないようにしたが違和感を感じていた。

・・この足は、男の足じゃねえな・・

佐瀬は、相手が被っていたフードを外すと、その下からは女の顔が現れていた。

「ほう、おまえ女か。それならちょうどいい。ここには自由に使用出来る調教部屋があるんだよ。そこで、おまえがメス奴隷に堕ちるまで徹底的に調教してやるよ」

佐瀬はニヤリと笑うと、その女を肩に担いで歩き出した。

★　★　★　★

アオイはもう意識が朦朧としていた。駿河問いで吊るされて高速で独楽のように何度も回転させられる。頭に血流が集中し毛細血管は破裂し、目や鼻、耳から血が流れ出している。

「あぶうぅぅぅーーっ！」

アオイは肛門から排泄物も噴水のように噴き出しながらクルクルと回転している。

・・うぐうぅぅっ、もうぢぬうぅぅぅっ・・

アオイの意識は途切れる寸前だった。苦痛ならある程度耐える自信があるが、この拷問では耐える事は不可能だ。即、失神というわけではないが、アオイはもう自分が何をされているのかも分からず意識が混濁としてきた。そんなアオイにも観客席からの歓声が聞こえてくる。何を言っているのか分からないが盛り上がってくれているとは理解出来ていた。

・・私が拷問されて苦しむ姿を、みんな楽しんでくれている・・

アオイは苦しみの中で小さな幸福を見つけていた。

・・ああ、私は幸せだったんだ・・

アオイは心の中で微笑むと、その意識はだんだんと薄くなり、そして、散り散りに霧散していった。

★　★　★　★

「決着がつきましたか。順調に進んでいますね、良いことです。これで私の対戦相手も決まりましたね。楽しみですねぇ。琴音をシードなんかにしないでおけば良かったですよ。待つのはけっこうしんどい物ですね」

葉月はご機嫌でいるが、他のメンバーは酔っている者がほとんどであった。

「ところで、この腕を見るとコイツ女だろうな。豪徳寺が処刑したメス奴隷の関係者なんじゃないの」

クラヤミが軽口を叩き、近藤がまたムッとした顔をする。

「処刑したメス奴隷なんて、よほどのお気に入りでなければいちいち覚えていませんよ。それに、メス奴隷の関係者など警戒するに値しませんね」

ワインを一人でデキャンタ何杯分も飲んでいる葉月であるが特に酔った様子も見せず平然と答えていると、モニターから沙也加の声が聞こえてきた。

「ビクトリー、アオイ」

どうやら鼻からローションを注入され呼吸を止められたノゾミの方が早く失神してしまったようだった。とはいえ、それは紙一重。どちらのメス奴隷が勝ってもおかしくない勝負だった。

★　★　★　★

会場では敗れたメス奴隷の処刑の準備が進められていた。ノゾミは覚醒させられ、三角木馬から降ろされて両腕を縛られたまま地面に寝かされている。もう、ノゾミの脚は超重量の錘で引き伸ばされ、ズタズタに腱が千切れてしまい立つ事が出来なかったのである。

・・どう処刑するのでしょう。ちょうどBブロック一回戦の半分が終わったところですか。昼過ぎて小腹が空いてきましたね・・

沙也加は処刑の準備を進める調教師と手伝っているスタッフを見ながら、この間に食堂に行って何かお腹に入れておこうかと考えていた。

74、昼食（前書き）

また、やってしまいました。今度は直接的なカニバリズム表現があるので、耐性のない方、苦手な方はは読まないで下さい。気分を害する恐れがありますので、よろしくお願い致します。

74、昼食

74、昼食

メス奴隷ノゾミの処刑の準備が整っていく。

・・これは食堂に行って昼食をとるのは勿体無いかも知れませんね・

・

沙也加は運ばれてきた道具や機材を見て調教師に注文しておこうと近付いた時、スタッフの一人が駆け寄ってきた。

「すいません。葉月様より、食堂の方に9人分運んで来るよう命令されました。ここで待機させて貰います」

スタッフの言葉で葉月も、そう考えていると知り、やはりこの調教師は、あれをやるつもりだと確信した。沙也加も見て分かったように観客たちもこれから何が行われるのか感づいていた。処刑会場に巨大なグリルが設置されていたのである。それを見れば想像がつくであろう。ノゾミも、それを見て自分の運命を察しガタガタ震えていた。

・・私、処刑されながら調理されちゃうの・・

グリルに火が起こされ、大量の野菜や香菜、それにスパイスも用意されている。調教師が沙也加に説明しているのが聞こえてくる。

「処刑しながら、すぐ始めますよ。新鮮なうちに済ませたいですからね。ええ、手足は切断しておきます。人気のあるマンコも先にばらしておきますから」

「楽しみですねぇ。あなたはなかなか考えている。処刑した後の事も我々の為に何が出来るか、そこまで考えてくれる調教師はなかなかおりませんよ」

沙也加も上機嫌で答えていた。

「さてと、準備が整ったようですので早速始めますか。まずマンコから捌いていきます」

号泣しているノゾミは開脚逆さ吊りにされ、性器を無様に晒される。

「クリトリスは潰れてしまっているけど、仕方ありませんね。小陰唇はいい状態で残っています。希少部位ですから、ここはどなたが食するのか運営側に決めて貰いましょう」

調教師は沙也加に話しかけながら、キッチンバサミを手にし、ノゾミの小陰唇をびろーんと伸ばす。そして、根元から切り取っていく。

ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！」

小陰唇を切り取られる激痛でノゾミは絶叫するが、調教師は構わずノゾミの左の小陰唇を切り取ってしまう。そして、切り取った小陰唇を銀のトレイに置いたキッチンペーパーの上に載せ、今度は右の

小陰唇をキッチンバサミで挟んだ。

ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ、あびゃびゃびゃびゃあぁぁぁっ」

ノゾミは右の小陰唇も切り取られ銀のトレイに載せられた。そして、上からもキッチンペーパーで挟み余分な水分を除去する。

「さてとこれはソテーとムニエルにしてみますか」

調教師は素早く塩胡椒を小陰唇に振り、フライパンに油を入れ、もう一つのフライパンにはバターを入れた。そして、切り取った小陰唇をフライパンに入れ炒めながら、もう片方の小陰唇には小麦粉をつけていた。慣れているように二つの小陰唇を手早く調理した調教師は、それを皿に盛り付けソテーにはカボスを、ムニエルにはレモンを添えて沙也加に渡していた。

「膣壁も剥がしてソテーにします。膀胱は中に詰め物をしてボイルしましょう。子宮は柔らかく煮込んで味噌味の煮込みにでもしますか。卵巣は串焼きが良いでしょう。時間があれば腸も、腸詰めにしたいところですが、臭みをとる時間がないため冷凍保存しておいて後で調理するしかありませんね。最後にメス奴隷の身体は中に香菜を詰め串刺しにしてからスパイスを振りかけ、あのグリルで丸焼きにします。ぱりぱりに香ばしく焼きあげますのでカットしてお食べになって下さい」

楽しそうに沙也加に説明しながら調教師は手を休めずノゾミを解体していく。ノゾミは絶叫しながら性器を解体されていく。当然、止血など施されない。処刑場は屠殺場と化していた。獣のように絶叫

していたノゾミの声に力がだんだんと失くなっていく。ノゾミは膣壁を引き剥がされ、膀胱を抜き取られ、今、子宮を摘出されようとしていた。もう、大量出血でノゾミの残り時間は僅かなものになっていた。ノゾミの意識は自分の体の中で何か重要なものがブチッと断ち切られた感覚を最後に暗い闇に堕ちていき、そこから戻ってくる事はなかった。しかし、ノゾミの生死など関係なく作業は進められていく。膀胱のボイル、子宮の煮込み、卵巣の串焼きと次々に調理が進み、ノゾミの体から臓器が取り出され、代わりに香菜や野菜が詰め込まれる。そして、股間から串刺しにされたノゾミの体はスパイスを入念に摺り込まれた後、グリルに載せられグルグルと回転しながら丸焼きにされていく。しばらくすると香ばしい良い匂いが処刑場に漂ってきていた。

「いやぁ、これは食欲を誘う匂いですなぁ。ちょうど昼過ぎでありますし、是非あれを食べてみたいですな」

「これ、販売してくれるのよね。匂いだけ嗅がされて食べられないなんて酷い事はしないわよね」

「もう、涎が出てくるわね。私、煮込みが好きだから早く食べてみたいわ」

観客席から期待に溢れた声が聞こえてくる。確かに昼時に、この匂いを嗅がされては我慢出来ないのも無理はなかった。

「皆さん、もうしばらくお待ち下さい。それに数に限りがありますので、お一人様一つの部位でお願いします。希少な部位は抽選となります。御了承下さい。すぐに端末の方に注文画面が表示されるようにしますので、よろしくお願い致します」

これは思わぬ収入になると沙也加はウキウキしながらアナウンスしていた。

★　★　★　★

佐瀬は地下の調教室で捕らえた不審人物の衣服を脱がし全裸にしていた。衣服の下からスタイルの良い女の体が現れていた。

「なかなかいい体じゃないか。これは責めがいがあるな」

佐瀬は舌嘗めずりをすると、女の足の指を止めていたタイラップを切り足首に重量のあるごつい足枷を装着した。これで、この女は素早く動く事も、逃げる事も出来なくなった。さらに佐瀬は女の首に首輪を付ける。この首輪は内側に針が飛び出す仕掛けになっており、この女を始末したくなったらリモコンのスイッチを押すだけで簡単に始末出来る首輪だった。もう、この女は佐瀬に運命を握られてしまった事になる。佐瀬は満足気に女を見つめていたが、肉切り包丁のようなごつい刃物を女の右腕に当てていた。

・・せっかく左腕が無いんだ。右腕も切り取ってやるよ・・

ダンッッッ！！

「あぎゃあぁぁぁぁーーーーっ！」

右腕を無情にも切断され、気を失っていた女が絶叫していた。

74、昼食（後書き）

このトーナメントにミアンちゃんをお借りしている天月先生の新連載が始まりました。「魔法学園風術科　白翼の教師と禁断の夢」です。

今度の主人公は眼鏡っ娘の変態ロリ処女ですぞ。期待で胸が膨らみます。是非、お読みになって下さい。

75、木馬　アヤカＶＳイチゴ

７５、木馬

食堂に着いた沙也加は驚くと同時に感激していた。せっかくのメス奴隷を使った料理であったが、お客の注文があまりに多く自分の分は諦めていたところ、葉月は沙也加の分も確保していてくれたのである。

・・９人分というのは私も人数に入っていたのですね。葉月様、ありがとうございます・・

沙也加は感激していたが、食堂の壁がぶち抜かれている事に驚いていた。さらに、トーナメントを観ながら飲み会を開いているのも驚きだった。

「さあ、神楽坂さんも早く席に着きなさい。進行は別の者に頼みましたから心配しないで飲んで食べて下さい」

沙也加は、ありがとうございますと葉月に礼を言い、席に座るとウォッカをショットグラスで注文していた。そして、葉月に取り分けてもらったメス奴隷のパリパリに焼かれた皮に甜麺醤をかけるとフォークで口に運び、ウォッカをぐいっと飲み干す。

・・最高ですね、これ・・

沙也加の隣で近藤も舌鼓を打っている。その近藤の顔は酔っているのか仄かに赤くなっていた。

「近藤さん、良いのですか。お酒など飲んでいて」

沙也加が心配して近藤を肘でつつくと、近藤はあまり見たことがない笑顔で上機嫌に答えていた。

「葉月様からの命令ですからね。飲ませて頂いています」

そう言いながら近藤はバーボンのロックを嬉しそうに口に運ぶ。沙也加は、それなら問題ないと安心したが近藤がここにいるとなると誰が進行をするのだろうとモニターに目を向けた。

「それでは本日の４戦目、メス奴隷アヤカ対イチゴの対戦を行います。神楽坂に代わりまして進行を務めるのは、わたくし加納と申します。よろしくお願いします」

その理恵の姿に観客も驚いたが沙也加も驚いていた。

「葉月様、メス奴隷に進行を任せたのですか。大丈夫でしょうか。それによく佐瀬が了承しましたね」

「メス奴隷とはいえ加納理恵は私のよく知る人物ですからね。進行もこなしてくれるでしょう。あの狂犬は、その辺に倒れていたと思いましたら、いきなり私に襲いかかってきましたので地下の個室に頭を冷やすよう入れましたよ。でも、もう解放されているのではないですか。私に無礼を働いたのです。メス奴隷を使われるくらい文句はないでしょう。処刑されずに済んだのですからね」

沙也加は何があったのか分からなかったが、葉月が言うなら問題ないだろうと思い、目の前の料理とお酒を楽しむ事にした。

★　★　★　★

アヤカとイチゴの拘束が終わり対戦が開始される。アヤカは三角木馬に跨がされ、イチゴは開脚逆さ吊りにされていた。アヤカは如何にも地味な雰囲気のメス奴隷で特に人目を惹く事もなく、おそらくこのトーナメントに出場していなければ人の記憶に残る事はないだろうというメス奴隷だった。対してイチゴは、その名前のように華やかさがあり小柄なロリ体型は多くの観客の注目を浴びていた。開脚逆さ吊りにされたという事は、その幼く見える桜色の割れ目に鞭が叩き込まれるのだろうと観客は期待していた。

「あのアヤカというメス奴隷詰まらんな。見た目地味なんだから、せめてもっと激しく泣いてほしいもんだな」

「早くイチゴちゃんのマンコを鞭で打ってくれないかな。あの割れ目が無茶苦茶にされるのを早く観たいわ」

「今回、調教師の体格もずいぶん違うな。アヤカを責めている調教師は小柄だけど、イチゴを責めている調教師はかなり大きいぞ。しかも見えている腕の筋肉も凄い」

「メス奴隷も対照的だけど、調教師もまるで違うね。あの大きい調教師が鞭でイチゴちゃんのマンコ打ったら壊れちゃうんじゃない。凄い楽しみ」

観客席からの声の通り、調教師の体格に大きな違いがあった。イチゴの調教師、つまりアヤカを責めている調教師は子供かと思うほど小柄な体格で、その分動きが素早く、アヤカの両足に次々に錘を下げていく。アヤカはあっという間に最大重量の錘を装着され、足はピーンと伸びきり、アヤカの性器には三角木馬の鋭い頂点が深く激しく食い込んでいる。

「あううぅっ、マンコ痛いですうぅぅっ！」

それでも、アヤカは絶叫する事なく耐えている。もっとメス奴隷に泣き叫んで貰いたいと思っている観客からは、その地味な反応も不評であった。そのアヤカの反応もあって観客の視線は必然的にイチゴの方に多く向けられる。そして、観客は目を疑っていた。

「嘘だろう。あんなの有りなのか」

観客の疑問に答えるように理恵がアナウンスする。

「運営側が用意した物を使用しておりますので、ルール違反ではありません」

進行の理恵の言葉は公式のアナウンスとして認識されるので、それがルール違反ではないと納得するが、その想定外の責めに観客席はざわついていた。

「いくらルール違反ではないと言っても、あれは少し常軌を逸しているな。でも観てみたいけどね」

「イチゴちゃん、可哀想。もう終わりね。やるなら早くやってほしいわね」

「もう間違いなくイチゴちゃん失神する。マンコも壊れちゃうんじゃない。イチゴちゃんの可愛いマンコ壊れるところ早く観たいわ」

観客のほとんどがイチゴに注目していた。その開脚逆さ吊りにされたイチゴの背後で調教師が巨大な物を持ち上げていた。そう、それは三角木馬。調教師は三角木馬を持ち上げて、その頂点の鋭角部分をイチゴの性器に落とそうとしているのだ。重量１００キロ近くある三角木馬を性器に落とされては、性器はもちろん恥骨も砕けてしまうだろう。それどころか、イチゴの体が性器から裂けてしまう可能性もある。イチゴは自分の背後にいる調教師が何をしようとしているのか分からないが、観客席の興奮した声から何か凄まじい責めを自分はされるのだと感じていた。

★　★　★　★

「は、葉月様。あの調教師、うちのスタッフの岡田ではないですか。近藤さんの部下の……」

食堂で肉を食べ、ウォッカを飲みながら沙也加は驚いていたが葉月も近藤も平然とした顔をしている。

「どうやら焼却炉で燃やされていたのが、あのアヤカというメス奴隷の調教師だったようなのです。でも、メス奴隷がどうしてもトーナメントに出場したいと言うのでね。急遽スタッフで代用した訳ですよ。メス奴隷の変更は当然不可能ですが、調教師の変更は問題ありませんからね」

「岡田は調教など経験ないから、あんな事をしても仕方ないですよ。殺す事は経験豊富なので、メス奴隷を殺すつもりでいけば良いとアドバイスしておきましたから」

葉月と近藤の言葉で、やはりあの調教師は岡田だったのかと納得した沙也加だったが、イチゴというメス奴隷は運が悪かったと思わざるを得なかった。

・・まあ、観客はメス奴隷の処刑が観られれば良いのだし、私の知ったことではないですがね・・

沙也加はウォッカを一気に飲むとモニターに目を向けた。

76、落下

76、落下

女の腕を切断した佐瀬は、悲鳴を上げる女の顔面を足で踏みつけていた。

「へへっ、残念だな。もうナイフを使う事もオナニーする事も出来なくなったな。でも心配するな。お前のマンコ、徹底的に調教して、蝋燭や鞭を見ただけでイケるように調教してやるよ。あぁ、それから逃げようとするなよ。逃げたら、その首輪に仕込んである針で首を刺して殺す。まあ、足にも１０キロある足枷をつけてあるからな、こんな状態では逃げられないだろうけど、俺の命令にも絶対服従だ。逆らったら殺す」

佐瀬は女に有無を言わせず命令する。女は自分の身に何が起こったのか、まだ把握出来ずに戸惑った顔をしているが、だんだんと理解してきたようで、その顔は険しくなっていった。

「ははっ、いい顔付きだな。その顔を絶望に変えてやるよ。もう助かるなんて思わない方がいい。それからお前はもう人間ではない、メス奴隷だ。俺への返事は豚の鳴き声で答えろ。いいな」

「ふざけるなっ、貴様は絶対殺す」

パアァーン！

鋭い音が響き、女の頬が赤く染まった。佐瀬は女の頬を思い切り打っていた。

「言ってるそばからそれか。馬鹿なのか。教育が必要なようだな」

佐瀬は女の腹を思い切り蹴り上げた。

「おげえぇぇっ」

女は涙を流し、口から反吐を吐き苦しんでいるが佐瀬は構わず女の腹を蹴り続ける。

「命令には絶対服従と言ったろう。この馬鹿女。このまま蹴殺してやろうか」

佐瀬は呻き声をあげる女を仰向けにすると、足を大きく開かせて間に鉄パイプを入れ閉じられないようにする。

「二度とその生意気な口がきけないようにしてやる」

佐瀬は、女の股間、性器に狙いをつけると思い切り蹴り上げた。

「あびゃあぁぁぁぁぁぁーーーっ！」

絶叫する女に構わず佐瀬は連続で、女の性器を蹴り続ける。

「まだ分かっていないようだな。もっとマンコ痛め付けてやるよ」

佐瀬は一旦女の性器を蹴るのを止めるとゴルフのクラブを出してき

た。ドライバーと呼ばれるそのゴルフクラブを見た女が、許して下さいというように首を横に振る。しかし、佐瀬は女の性器目掛けてドライバーを振り上げていた。

「ぶひっ、ぶひっ、ぶひいぃぃーっ」

女が許しを請うように、ぶたの鳴き声で佐瀬に訴える。

「ようやく分かってきたようだな。でも少し遅かったな」

佐瀬は振り上げたドライバーを女の性器目掛けて振り下ろしていた。

バキャッ!!

「ぶひいぃぃぃぃーーーーっ!!」

プッシャーーーーッ

ぶりっ、ぶりっ、ぶりいぃぃぃっ

女は尿と大便を噴き出し、また失神してしまっていた。しかし、佐瀬はまだ女を許さない。女を気付け薬で起こし、自分が出した排泄物を食うよう命令する。

「全部食え、そして、きれいに舐めろ」

「ぶ、ぶひっ」

女は泣きながら自分の排泄物を食べ、舐めていた。その間に佐瀬は、この女を自分の所有物であると証明出来るように焼き印を捺す準備

をしていた。火の中に入れた焼き鏝が真っ赤に熱せられていく。

「喜べ、これでお前は俺の所有物になる。マンコ、大陰唇に焼き印を捺してやるよ。俺のイニシャルＳＳだ。きれいに捺したいから動くなよ」

佐瀬の持つ真っ赤に焼けた焼き鏝を見て女は恐怖で震えていた。

「ぶひっ、ぶひっ、ぶひっ」

泣いて許しを請う女だったが佐瀬は容赦なく女の性器に焼き鏝を押し付ける。

ジュウゥゥゥーーッ！

「ぶひいぃぃぃぃーーーーっ！」

女の絶叫が響き、辺りに肉の焼ける臭いが漂うが佐瀬は冷静に数を数え、しっかりと女の性器に焼き印を捺していた。

★　★　★　★

つぐみは開脚され性器が上を向く姿勢で固定されていた。まだ針付きの下着は穿かされたままである。その、つぐみの股間の上には重量のあるブロック状のコンクリート板が吊るされ揺れている。

「これは渡邉ゆかりが自作したマンコギロチンを改良したものですよ。ギロチンと言っても切断するのではなく、マンコを潰す装置で

す。渡邉ゆかりはこれで自分のマンコを潰して楽しんでいたようですよ」

メイドに説明されるまでもなくつぐみは知っていた。自分でも作ってみようと思ったが、ゆかりのように工作が得意ではなかったつぐみは上手く製作出来ずに途中で投げ出してしまったのだった。それが図らずもここで体験出来る事になったのだ。内心つぐみは興奮していた。

・・ゆかり姉（ねえ）がやっていたオナニーを私も体験する事が出来る。どれだけ痛いのかな。マンコ壊れちゃうのかな。でもどうせ私のマンコ、もう壊してもらう以外価値がないから・・

つぐみの興奮に比例するようにバルトリン腺から大量に粘液が分泌されていく。あれだけ膣内を針で刺されていながら、つぐみのバルトリン腺はまだ機能しているようだった。

「さあ、いきますよ。覚悟しなさい」

「はい、つぐみのマンコ潰してお楽しみ下さい」

・・なかなか良いメスではないですか。本当に壊したいですね・・

メイドは必死に自制しながらギロチンを落とした。

グシャアァァーーッ！

「あっ、ぶうぅぅぅーーーーっ！」

つぐみの性器にコンクリートブロックが落ち、下着の針がさらに深

く突き刺さる。つぐみは性器から脳天まで突き抜ける激痛に泡を吹いていた。

「まだまだ終わりじゃありませんよ。１００回は落としてあげますからね。存分に苦しみなさい」

メイドは続けてコンクリートブロックを吊り上げると、再び落とした。

グチャアァァーーーッ！

「あっぶうぅぅっ、ぶぶぶぶうぅぅぅーっ！」

メイドは激痛で悲鳴を上げるつぐみの姿を楽しそうに見ていた。もう、つぐみの股間は真っ赤になり、その大きさが広がっていく。

「ゆるじでっ、もうゆるじでぐだぢゃいっ」

「まだ残り９８回ありますよ。寝言を言っては困りますね」

楽しそうにまたコンクリートブロックを吊り上げていくメイドの姿を見て、つぐみは号泣していた。

★　★　★　★

アヤカを責めている小柄な調教師は驚愕していた。

・・あんなの調教でも拷問でもない。あれはイチゴを殺すつもりだ。

イチゴを殺されてしまったら、相手の反則でこちらが勝っても次の対戦に出場出来ない。仕方ない限りなく反則に近いグレーだが、ルールには記載されていない。あの技を発動する。この大勢の見ている前で成功させねばならない。だいたい、あの調教師もあんな反則すれすれの事をしているのだ。遠慮する事はない・・

小柄な調教師は、岡田が三角木馬をイチゴの性器に落とすタイミングを計っていた。

77、秘術

77、秘術

岡田は三角木馬を頭上に持ち上げ、その鋭角をイチゴの性器に叩き落とそうとしている。それをまともに受けてしまえばイチゴの性器は裂け恥骨も粉々に砕かれ、吊られている両足も千切れてしまうのではと思われた。小柄な調教師は三角木馬に跨がらせたアヤカを鞭で責めながら、岡田が三角木馬を落とすタイミングを見極めようとしていた。観客も、その瞬間を固唾を飲んで待ち構えていた。

「そりゃっ」

岡田が気合いと共に三角木馬をイチゴの性器に叩き落とす。

・・今だっ・・

小柄な調教師の姿は一瞬消えたように見えなくなっていた。

グシャアァァーーッ！

「あびゃあぁぁぁぁぁーーーっ！！」

イチゴの性器に三角木馬の鋭角の頂点が叩き落とされ、イチゴが絶叫し性器から血が飛び散る。しかし、観客の予想に反してイチゴの性器は裂ける事なく恥骨も無事のようであった。逆に、観客がイチ

ゴに集中して観戦しているうちにアヤカは口から泡を吹き白目を剥いて失神してしまっていた。

「ビクトリー、イチゴ」

理恵が右手を上げコールする。理恵は進行を任された以上、両方のメス奴隷から目を離さずにいたが、その間近で見ていた理恵にも何が起こったのか分からなかった。結果としてイチゴが岡田の責めに耐え、アヤカが泡を吹いて失神したという事実があった。

★　★　★　★

「ほおっ」

「へえっ」

「ふうむ」

「なるほど」

食堂で飲み会を開きながらモニターでトーナメントを観ている葉月、クラヤミ、ルイ、理津子から感嘆の言葉が漏れていた。

「葉月、これはルール違反ではないのですか」

ルイがエールをあおりながら葉月に目を向ける。

「体術使用禁止とはルールに記載されていませんからね。まさか、

あなた以外にあんなマネが出来る者がいるとはね、想定外でした。世の中は広いという事ですね。限りなくグレーですが、こちらが用意した拷問具を使用するのは勿論ですが、その拷問具で失神させろとは記載されてないのでね。まあ、違反にはならないでしょう。加納さんのジャッジの通りイチゴの勝利ですね」

葉月の説明にも沙也加は意味が分からないようで、ウォッカを飲みながら葉月に詳しい説明を求めていた。

「あの小柄な調教師は、仙術の流れを汲む古武術をマスターしているのでしょう。仙術の一つに〝縮地〟というものがあります。地脈を縮め、距離を無にする技です。それで岡田が三角木馬を受け止めイチゴへの瞬間メス奴隷イチゴの前に移動して、三角木馬を落とした衝撃を緩和します。そして、すぐにアヤカの前に戻り、今度はアヤカの人中、あるいは水溝と呼ばれる経穴を突いて失神させたのですよ。用意した拷問具以外で失神させてはいけないとは記載していませんし、他の拷問具を使用した訳でもない。それに観ていた観客は、あの調教師が鞭でアヤカを失神させたと思っているでしょうしね。今回は仕方ありませんね。あの調教師の力ということで不問に付しましょう。すぐにルールを追加して、こちらが用意した拷問具以外での失神は認めないとしましょう」

葉月は溜め息をつきながらワイングラスを傾けるが、ルイがそれには及ばないと口を開く。

「今からルールに追加などしたら不信に思われたり、このトーナメントにも傷がつくでしょう。あの調教師と次に当たるのは私です。私が潰しますよ、葉月」

「ああ、あなたなら問題ないでしょうね。それではお願いしますか。

ルール改編は今回のトーナメントをふまえて次回開催までに済ませる事にしましょう」

「もう、めんどくさいルールなんていらないんじゃない。メス奴隷を先に処刑した方が勝ち。俺は、そんなシンプルな方がいいな」

「処刑馬鹿のあなたは少し黙っていてくれますか」

葉月に一喝されクラヤミは、膨れながらラガーのジョッキを一気にあおっていたが、近藤は怒りでぶるぶる震えていた。

・・岡田の馬鹿者、負けて葉月様の顔に泥を塗りやがって、どうしてくれようか・・

その近藤の態度を隣で感じた沙也加が一言ぼそっと呟いた。

「処刑するなら私がやって差し上げますよ、近藤さん」

沙也加の顔は恐ろしいほど残酷に微笑んでいた。

★　★　★　★

「ほら、早く奉仕しろっメス」

佐瀬は自分のイチモツをメス奴隷にしゃぶらせていた。メス奴隷は佐瀬の亀頭を咥え、裏筋に舌を這わせている。

「お前に名前をつけてやるよ。マンコとつけてやりたいが紛らわし

いからマコだ。分かったか、返事をしろっ、マコ」

「ぶ、ぶひっ」

「よし、いいか自分はメス奴隷だと認識しろ。マコはもう人間ではない、メス奴隷だとな」

佐瀬は満足気にマコに性器をしゃぶらせているが、その姿を覗き見している人物がいた。それも二人。

「もう、あの娘は駄目ね。後は私たちだけでやるしかない」

「無念でしょうね。妹の敵も討てず、あんな男に奴隷にされるとは。でも私は必ずやり遂げてみせるよ、妹の柚月（注）のために」

「あの動画を観た時には息が止まりそうだった。確かに莉子（注）は頭がおかしい妹だったけど、あんなに残酷に処刑した豪徳寺葉月は許せない。絶対に復讐してやる」

二人の女は全裸だった。つまり観客としてこの会場に入ってきたのだ。武器は、昨夜三人で始末した調教師の物が隠してある。三人は復讐の為に１０年以上格闘技や様々な武術を習い習得していた。隙を見て葉月に近づければ殺せると確信している。しかし、二人は豪徳寺葉月の恐ろしさを表面的なものしか知らなかった。葉月はまさに人間の負の感情が集まった存在。今、この世界で葉月を倒せる可能性がある者は、クラヤミとルイを除けば、二代目スク水少女戦士ウテルスの二階堂遥と橘理津子以外いなかったが、遥はメス奴隷に堕とされ理津子はまだその能力が完全ではない。つまり、この二人の女は非常に危険な行動をとっている事になる。

「どうする？あの男も殺す？」

「いや、けっこう使えるかも知れないよ。こっちに巻き込もうよ」

二人の女は口許に笑みを浮かべると作戦を練り始めた。

★　★　★　★

岡田は茫然としていた。殺すつもりでイチゴの性器に三角木馬を落としたのに、それはイチゴを殺すどころか外性器に損傷を与えた程度で終わってしまった。

・・あり得ないだろう。このメスのマンコ、鋼鉄で出来ているのか。これでは葉月様や近藤さんに顔向け出来ない・・

近藤は棒立ちになったまま敗者アヤカの処刑の準備が進められていくのを、ぼんやりと見ていた。

77、秘術（後書き）

（注）「檻の中の幸福」3人少女の章で、葉月に処刑された少女たち。詳しくはそちらを読んでみて下さい。

78、懇願

78、懇願

トーナメント敗者アヤカの処刑の準備が進められていく。アヤカは三角木馬から降ろされ、両腕は高手後手に縛られたまま、自分の処刑される準備が整うのを静かに泣きながら見つめていた。そして、進行を務めている理恵に目を向ける。

「あの……。メス奴隷の私がこんな事をお願い出来る立場でないのは分かっていますが、あなたはメス奴隷として出場しているリエさんですよね。私は、あの渡邉ゆかりに関する映像や書籍、資料を集めていました。私は、処刑されるときは渡邉ゆかりと同じ様にマンコを徹底的に壊されて処刑されたいのです。そして、マンコを壊された後は最後にマンコを爆破されてマンコそのものを消滅させてもらいたいのです。私は、頭のおかしい華のないドブスの変態メス奴隷ですが、それが唯一の夢なのです。このお願い叶えていただけないでしょうか。ゆかり様を知って以来、その事だけを夢見て今まで過ごしてきました。どうかお願いいたします」

アヤカの言葉に理恵は感動していた。自分以外にも、ゆかりに心酔している者がいる。このメス奴隷の願いは叶えてあげねばならない。今は自分はメス奴隷ではなく、このトーナメントの進行を委されている。理恵は迷うことなく決心した。そして、小柄な調教師に歩みよると、今回の処刑はわたくしが担当しますと告げていた。調教師も仙術を使用し疲労していたため、特に何も言わず理恵に処刑の権

利を譲っていた。

「わたくしが、あなたの望み通りに処刑して差し上げますよ」

理恵がアヤカに告げると、アヤカは嬉しそうに理恵に礼を言い、小さな声でもう一つ我が儘言って良いですかと理恵の目を見つめていた。理恵が耳を近づけるとアヤカは小さな声で理恵にお願いしていた。理恵は、それを聞いて本気なのかと耳を疑っていた。アヤカは、もう一つと言ったが、幾つかお願いがあった。その一つはポニーテールにしている髪をほどいて、ゆかりのように三つ編みお下げにして欲しいという事だった。理恵はすぐにアヤカの要望を叶え三つ編みに編んであげていた。そして、他の要望を叶えてあげるため、小さな台の上にニードルを上向きに固定していた。そして、アヤカがその上に跨がると理恵はアヤカの拘束されていた両腕を解放させてしまう。観客は驚いたが、アヤカはニードルの先端が尿道に刺さるように自分で性器をくぱぁと開いて位置を調整していた。

「皆様、これから処刑して頂くメス奴隷のアヤカです……」

アヤカが話し始めたが声が小さくて最前列の観客にさえ届かなかった。理恵は慌ててマイクをアヤカの口許に当て、もう一度話すよう促す。

「あ、あのメス奴隷のアヤカです。メス奴隷になる前はゆかり様の書籍を見て自分のマンコを痛め付けて喜ぶ毎日でした。少しでもゆかり様に近づけたいので私は、ゆかり様が処刑の際にやって頂いた膀胱串刺しを含め、出来るだけ自分で処刑を執行したいと思います。これが最後なので本当にマンコを壊します。自分でマンコを壊していく私の無様な姿を見てお楽しみ下さい」

観客たちも、まさかのアヤカの言葉で盛り上がってきていた。

「華のない不細工で面白くないメス奴隷だと思っていたけど、なかなか良いじゃないか。少し見直したぞ。ブスなのは間違いないが楽しませてくれるじゃないか」

「自分がドブスなの分かって、ドブスなりに私たちを楽しませようと考えてるのが良いわね」

「セルフ処刑してくれるの。面白ーい。頭のおかしいメス奴隷の考える事って、想像出来なくて良いわね」

「地味ブスで取り柄がないからな。精一杯考えたんだろうよ。普通に処刑されたんじゃ、すぐに忘れられてしまうからな。良いねぇ、どこまで出来るか楽しみだ」

「やるじゃない、このメス奴隷。髪を三つ編みにすると、なんとなく渡邉ゆかりに似ているかも知れないわね。ブスなのは変わらないけどね」

それまで、アヤカの処刑にそれほど期待していなかった観客席が大いに盛り上がっていた。アヤカは足を開き、両手を万歳のように頭上に上げ、少しづつ膝を曲げていく。

「うっ……」

アヤカが小さな声を上げる。

「今、ニードルが私の膀胱に入りました。ここから一気に膀胱を串刺しにします。私のお腹からきちんとニードルが突き出るよう覚悟

を決めて腰を落としますので、お楽しみ下さい」

アヤカは目を瞑り、両手を握りしめた。

「ふうっ、ふうっ、ふうっ、ふうっ、ふうっ」

アヤカの呼吸が荒くなっていく。

「ふうっ、ふうっ、ふうっ、ふうぅぅぅーっ」

アヤカは大きく息を吸い込むと、腰を一気に落とした。

ブツウゥゥッ!!

「あぶうぅぅーーーっ!い、痛いぃぃぃーーっ!!」

小さく悲鳴を上げたアヤカの臍の下辺りから血塗れのニードルの先端が飛び出していた。

「おお、本当にやったぞ。あのブス、頑張ったじゃないか。でも一本じゃ物足りないな、もっと串刺しにして貰わないとな」

「ブスだから必死だね。ホント、一本くらいじゃ面白くないよ。最低3本だね。それくらいやってくれなきゃ、ブスなんだから」

「ブスの顔が涙と鼻水で汚れて、苦痛で歪んでようやく見られるようになったじゃない。早く2本目やりなさいよ」

観客たちは、言いたいことを言いながらもアヤカに視線が釘付けになっていた。すでに理恵は2本目のニードルをセットしている。ア

ヤカは再びニードルを尿道に突き刺すと腰を落としていった。

プツウゥゥッ！

「あうぅぅぅぅっ！」

アヤカの腹から2本目のニードルが顔を出していた。アヤカの膝はガクガク震え、倒れてしまいそうだったが、アヤカはなんとかこらえている。

・・ゆかり様は9本ものニードルでおしっこの穴を裂かれ膀胱を串刺しにされた。私もせめてあと1本くらいはおしっこの穴に突き入れて、おしっこの穴を裂かないとゆかり様に近づけない・・

アヤカは3本目のニードルを突き刺していく。さすがに尿道がビリビリと裂けていく感覚がある。

「あうぅぅぅっ、私のおしっこの穴が裂けています。うぅ、すごく痛いっ。自分でおしっこの穴を裂いている頭のおかしい私を思い切り笑ってください」

アヤカは泣きながらニードルを突き刺していき、ふんっと腰を落とした。

プツウゥゥッ！

「あうぅぅぅっ！」

アヤカの腹部から3本の血塗れのニードルが飛び出していた。アヤカは自分で尿道を裂き、膀胱を串刺しにし破壊していた。だが、こ

れで終わりではない。アヤカの胸に心電図のセンサーが貼り付けられ、次に用意されたのは直径１０センチ、長さ５０センチある上を向いたドリルだった。

「うぅ、次は皆様お待ちかねのマンコの穴を壊していきます。マンコの穴にドリルを突き入れて膣壁を全て削って、その後子宮もドリルでぐちゃぐちゃに破壊します。こんな事を自分でやってしまう頭のおかしいブスの私を思い切り笑って罵って下さい。私がこれで絶命しましたら、マンコを爆破してくださるようお願いしてあります。残った卵巣もこれで吹き飛びますので、私のマンコは完全に消滅します。こんなブスの処刑などお見苦しいと思いますが、お付き合い頂ければ嬉しいです」

アヤカは両手で性器を開き、ドリルの位置を確認する。

「ふうっ、ふうっ、ふうっ、ふうっ」

アヤカは呼吸を整えて目を瞑った……。

★　★　★　★

「ああいう男は実はハニートラップに弱いのよ。私たちの穴で、あの男を虜にしてあげましょう」

「確かにあのチンポ咥えられて興奮している顔見るとそのようね。こっちから近づいて骨抜きにしてあげましょう」

二人の女は一旦佐瀬の偵察を中断し、機会を待つ事にした。このト

ーナメントは長丁場である。焦らずに進めていくのが重要だ。あのメス奴隷にされた女のようになってはいけない。慎重に進めていかなければ……。二人の女は、また観客の中に紛れていき、その姿は見えなくなった。

79、哀悼

79、哀悼

「ふうっ、ふうっ、ふうっ、ふうっ」

さすがにアヤカはすぐには踏み切れないでいた。ここでドリルを自分の膣に突き入れれば、自分の夢は完成する。自分がずっと描いていた性器の完全破壊という妄想が現実となるのだ。膣を子宮を完全に破壊する。直径10センチ長さ50センチものドリルを膣に突き入れれば、膣壁諸ともバルトリン腺も抉り取られ肉片と化すだろう。メスとしてオスを喜ばす機能は失くなる。そして、その後子宮も、まず子宮頸部と子宮口が破壊され、それから子宮そのものも完全に破壊される。そうなれば、もうメスとしての価値は完全になくなる。アヤカは頭では早く性器を破壊したい。そう思っていても腰が動かなかった。

「なにやってんだ、ブス。早くしろっ、早くマンコ壊せよっ」

「ブスのくせに何ためらってんだ。ブスの価値はマンコ壊して、俺たちを楽しませる以外ないんだ。早くマンコにドリル突きさせ」

「みっともないわね。イライラするわ。頭がおかしいくせに、こんな時だけまともになるの、信じられないわ」

観客席から怒りの声が飛んでくる。それは当然アヤカの耳にも入っ

ていた。

・・ごめんなさい、どうしたの私。みんな期待してくれているんだよ。私がマンコ壊して惨めに絶命する姿。それに私だってそれを妄想して興奮していたのに。後は腰を落とすだけ、そうすれば私のマンコは死ぬ、それなのに……。このままじゃ私、頭のおかしい変態ブスのまま誰にも記憶されないで消えていく。それでいいの・・

アヤカは頭上に上げていた拳を固く握りしめる。見上げた空は涙で滲んでいたが、その青さは確認出来た。

・・こんな晴天の中、大勢の人がドブスの私を注目してくれている。私のマンコも壊されたくて、こんなに濡れているのに……・・

チュイーーーン

高速で回転するドリルの音が誘惑するように聞こえる。アヤカは再び目を瞑った。

・・覚悟を決めなさい、私は自分のマンコを殺す。徹底的に殺す。自分の夢を叶えるの。マンコを壊されて絶命するのが私の夢だから……。その為に今まで生きてきた。今日が私にとって最高の日になるの・・

観客が見守る中、覚悟を決めたアヤカの腰が落ちていく。高速で回転するドリルがアヤカの性器に軽く触れる。

「ふうっ、ふうっ、ふうっ、ふうっ、ふうっ」

酸欠のように息を荒くするアヤカは一気に腰を落とすと、ついにド

リルがアヤカの膣を無情に削り始めた。

ギュバアーーッ!!ビチッ、ビチッ、ビチィィッッ!!

「あっ、びゃあああぁぁぁぁーーーーーっ!!!あびゃびゃびゃびゃびゃあぁぁぁぁーーーっ!!!」

ぶりっ、ぶりっ、ぶりいいいっ

今まで大人しく小さな悲鳴だったアヤカが、獣のように激しく大声で絶叫する。そして、アヤカの肛門から大便が大量に漏れ始め、ドリルが突き刺さった膣からは血と肉片が辺りに飛び散っていた。

「あびゃあああぁぁぁぁーーーーーっ!!!あびゃびゃびゃびゃびゃあぁぁぁぁーーーーっ!!!」

ビチッ、ビチッ、ビチッ、ビチッ、ビチッ、ビチィィィッ!!

直径１０センチのドリルは膣壁だけではない、アヤカの性器周辺を全て肉片に変えていく。アヤカの頭上に上げていた両腕がだらんと力なく下がっていた。そして、ガクガクと震えていた足にも力がなくなったのかアヤカの腰がストンと落ちてしまう。長さ５０センチのドリルが根元までアヤカの膣に一気に突き刺さっていた。

「おごごごごごっ……」

アヤカの悲鳴にも力がなくなっていた。おそらくもうアヤカの子宮も完全に破壊されたのは間違いなかった。５０センチもの長さの太いドリルが全てアヤカの体の中に入っているのである。それでも、アヤカの心電図モニターがフラットになるまでドリルが止められる

事はなかった。

ピーーーーッ

そして、ついにモニターの波形が失くなりフラットの状態が続いたのが確認され、ようやくドリルが止められもう動かないアヤカの膣から抜かれていく。しかし、これで終わりではない。これからアヤカは性器を爆破されるのだ。卵巣まで完全に破壊する。それがアヤカの望みである。理恵は、自分と同じゆかりの信者であるアヤカの望みを叶えてあげるつもりだった。理恵はアヤカの体を寝かせると〝C４〟と呼ばれる爆薬をアヤカの膣のあった穴の奥に少量詰める。量を間違えると付近一帯が吹き飛ばされる強力な爆薬である。理恵は慎重に爆薬を詰めると信管をセットした。そして、アヤカの体から離れると胸の前で十字をきり点火した。

ボンッッッ!!

鈍い音が響きアヤカの下腹部全てが肉片となり消滅した。アヤカの顔は凄まじい苦痛で激しく歪んだまま固まっていた。それを人目にさらすのは可哀想だと思った理恵はアヤカの口を開け、その中にも爆薬を詰めた。そして、点火する。

ボンッッッ!

再び鈍い音が響きアヤカの頭部も木っ端微塵に吹き飛んでいた。

「ブスでもやれば出来るじゃないか。ブスに相応しい惨めな死に方だな」

「良いねぇ、メス奴隷全部自分で処刑して貰うのも楽しいかも。興

奮したわ」

「マンコ、ドリルで削られて爆破されて、頭も爆破されちゃって最高。このブスのメス奴隷気に入ったわ。アヤカというのね。覚えといてあげる」

観客たちの声も当初とは打って変わり、好意的なものが多かった。

・・わたくしもすぐに参ります。ゆかり様の下で待っていて下さい。同じ信者としてあなたを誇りに思いますよ・・

理恵は、胸と腕だけになったアヤカに対して哀悼の意を表していた。

★
★
★
★

「やはり渡邉ゆかりという存在は希有のものですね。渡邉ゆかりが現れた事でメス奴隷の世界が変わった気がしますよ。自分のマンコを壊すのが夢。そんな事、以前は思ってはいても誰も口にしていませんでしたよ。それを渡邉ゆかりが変えてしまった。自分のマンコを壊したいと思うのは普通の当たり前の事なのだと認識させた。これから、メス奴隷はわざわざ調教して教育しなくても、自分でマンコを壊したいという気持ちに染まっていくのではないですかね」

葉月がモニターでアヤカの最後を見てしみじみと語っていた。しかし、クラヤミが異を唱える。

「みんなそれじゃあ詰まらないだろう。俺も渡邉ゆかりは好きだが、恐怖に怯えるメス奴隷を無理矢理処刑するのも大好きだ。マンコを

壊されるなど考えてもいないメス奴隷のマンコを壊して処刑していく。最高じゃないか」

「だから、処刑馬鹿は少し黙っていて下さいますか」

再び葉月に一喝されクラヤミはヤバイと思ったのだろう、葉月の隣から逃げ出し理津子の隣に座りラガーを飲み出した。

「おやおや、葉月。彼に逃げられてしまいましたよ」

ルイが楽しそうにエールを飲むが、近藤や斎藤、それに花梨や沙也加は、葉月が激怒するのではないかと気が気ではなかった。しかし、クラヤミも葉月が怒ろうと知った事ではないという態度で理津子と麗華と楽しそうにラガーを飲みながら談笑していた。

８０、無垢　ナギサＶＳアカリ

８０、無垢

Ｂブロックの一回戦も残り2戦となった。沙也加はモニターを見ながらすっかりと寛いでいる。画面の中では爆破したアヤカの肉片の清掃に理恵が苦労していた。

・・良かったわ、この処刑、私が進行でなくて、あれの清掃は大変ですからね。次の対戦の為にきれいに清掃して下さいよ。ふふっ・・

沙也加は、まるで他人事でウォッカを気持ちよく喉に流し込んでいた。進行で何が大変かって、それは滞りなく時間内に全てのプログラムをきちんと終了させる事である。この清掃も、いかに素早くきれいに済ませるか、それが進行に大きく影響するのだ。なので、このように血や肉片が広範囲に飛び散る爆破等という処刑は、進行係としては避けて貰いたい所であった。だが今回理恵はアヤカの望みを叶えてあげる為に、爆破を選んだ。同じゆかりの信者として万難を排してでも叶えてあげたかったのだ。

・・さすがにここまで粉々になると大変ですね・・

理恵は苦労しながらもてきぱきと周囲を清掃していく。この辺の手際の良さは、沙也加とは比べ物にならない。しずくを１０年以上ほぼ一人で育て上げた経験も生きていた。

・・メイドとしても超一流になれると思うのに勿体ない・・

沙也加はメス奴隷に堕ちた理恵を惜しいと思ったが、それが理恵の本心であれば致し方ないと考えていた。そして、ようやく清掃が終了し次に対戦の準備が整う。

「お待たせしました。Bブロック一回戦第5戦を開始します。それではメス奴隷の入場です」

引き続き理恵の進行でトーナメントが進んでいく。その入場してきた2匹のメス奴隷を見て、観客席がざわついていた。2匹のメス奴隷を引いている調教師も今までとは雰囲気が違い、どちらも黒いスーツを着用している。その内の一人は大きな体にスーツが張ち切れそうな印象だった。その今までとは違う様子に観客たちは、慌てて2匹のメス奴隷のプロフィール欄を確認する。

「これはまた、今までとは違う対決だな。これは楽しい対決だ。俺はこういうメス奴隷も大好きだからな。実に良いぞ」

「この2匹が対戦するようにトーナメント表を組んだ葉月様は、よく考えているわね。どっちのメス奴隷が勝っても負けても、これは楽しいわよ」

「この2匹のどちらかが敗れて処刑されるのよね。早くどちらか処刑される姿が観たいわ」

「こんなメス奴隷がよくトーナメントに出場したわね。物凄くわくわくするわ。早くこの2匹が壊れていく姿を観たいわ。どんな声で泣き叫んでくれるのかしら」

先程のアヤカの凄まじい処刑の興奮が収まらぬ観客は、この2匹のメス奴隷を見て更に興奮していた。あまりの興奮で早くも自慰を始めている観客の姿も多々確認出来る。その2匹のメス奴隷は首輪に繋がれた鎖に引かれ四つん這いで犬のように引かれている。今までと違うのはメス奴隷が全裸ではなく昔のワンピースタイプのスクール水着と膝上まで長さのあるニーハイソックスを穿いている点と、頭には白い綿の女児用下着を被せられている点だ。そして、2匹のメス奴隷は所定の位置まで来ると立ち上がる。どちらのメス奴隷も小柄というより小さく華奢に見える。そして体型も成長したメスのような凹凸のある体ではなく、無乳に寸胴の幼児体型である。それもその筈、この2匹のメス奴隷のプロフィール欄には、11年物との記載がある。つまり、正真正銘のロリータなのであった。さらに2匹ともまだ処女であり、驚くべき事にメス奴隷となって初めての調教、拷問がこのトーナメントなのである。この純真無垢なメス奴隷の登場に観客席の興奮は止まらなかった。

「皆様、今回のメス奴隷ナギサとアカリは主催者の葉月様が皆様の為に探して用意しました、まだまだ何も知らない無垢なメス奴隷でございます。この純真無垢なメス奴隷が厳しい拷問で泣き叫び、処刑される姿を存分にお楽しみ下さい。なおそういった事情でありますので今回の調教師は運営のスタッフが代行致します。御了承下さい」

理恵のアナウンスで会場は更に興奮する。

「さすが葉月様だ。よくこんなメス奴隷を探してきたものだ。これはある意味貴重な対戦になるぞ」

「本物のロリね。ははっ、震えているわね。初々しいわ。これから自分が何をされるか理解しているのかしら、もっと怯えなさいな」

「正真正銘のロリを探してくるとは凄いですぞ。こんなメス奴隷、滅多に見られませんからな。とてもレアな体験ができて嬉しい限りです」

観客の興奮は高まり、早くも精液を放出したり、潮を吹いている者も数多く見受けられた。

★　★　★　★

「凄いじゃないか豪徳寺。よくこんなメス奴隷探してきたな。俺は渡邉ゆかりなんかより、こっちの方が好みだ。どっちのメスも処刑したいな」

理津子の隣に座っていたクラヤミが、また葉月の隣に座り興奮した口調でラガーを飲みながら言った。

「このトーナメントは長いですからね。集客力を高める為には工夫が必要です。これで、これがまた噂になれば、更に入場者は増えるだろうし、後に発売する予定の動画も話題になり売れ行きは好調に推移するでしょうね。それから、あの2匹は正確にはメス奴隷とは言えませんね。私が購入したばかりで、プロフィール欄に記載してある通り処女で無調教。いってみればまるで素人という事ですよ。まあ、このトーナメントで勝ち抜ける訳はありませんが、ずっとトーナメントを観ているお客様には口直しになって良いかなと組み込んでみた訳です」

「さすがに葉月様です。処刑を見慣れたお客様にも新鮮で宜しいで

すよ。あの観客席の盛り上がりを見れば分かります」

沙也加が葉月を持ち上げるように言うが、沙也加の言う通り観客席は葉月の思惑通り大いに盛り上がっている。

「あれを単独で出しても、ここまで盛り上がりませんからね。所詮、素人ですから……。トーナメントに組み込む事で新鮮味があり効果が発揮できるのです。あの観客の盛り上がり狙い通りですよ。それにメス奴隷を手に入れるよりも安く購入出来ますからね。これからメス奴隷へと調教していく前に購入しましたから、向こうも手間がかかる前に売れましたからね。いつもの縁もありますので格安にしてくれましたよ」

「いつもと言いますと、あのオークションを開催している〝グルーム・アグリカルチャー〟ですか」

「ええ、きちんと飼育していますので一般物よりは値が張りますが、変な風に育っていないのと、手っ取り早く手に入れるには間違いないですからね」

葉月は残酷に笑うとモニターに目を向けワイングラスを傾けた。

★　★　★　★

会場内でこそこそ話している女がいた。

「あのメス奴隷、要は素人っていう事だよね。豪徳寺葉月の奴、私達の妹と同じように、また何処からか素人の女を持ってきたわけか」

「許せないね。早くなんとかしないと不幸になる女が増えてくるよ。まずは、あの男を蘢絡しないとね」

二人の女は、今トーナメントの進行を務めている理恵に接触しようと考えていた。前日もトーナメントを観戦していた二人は、佐瀬が理恵の調教師であると知っている。そこで理恵から佐瀬の情報を聞き出そうと目論んでいた。

81、貫通

81、貫通

ナギサとアカリは大勢の観客に好奇の目で見られ震えていた。今まで閉鎖された環境で育てられ、葉月に購入されてからも地下の個室に閉じ込められていたので、これだけ大勢の人間など見た事もなかった。ナギサとアカリの表情は頭に被せられた下着に隠れ窺えないが、その瞳から怯えているのが見てとれた。

「まずエキシビションとして、この2匹の公開処女膜貫通を行います。開脚逆さ吊りにして、この巨大ディルドゥで破瓜を迎えてもらいます。なお、ここでの失神はノーカウントとさせて頂きます。トーナメントとは関係ありませんので」

理恵のアナウンスの後にすぐナギサとアカリはそれぞれ両腕を高手後手に縛られ開脚逆さ吊りにされる。まだ教育も調教もされていない2匹は、逆さに吊られただけで恐怖で小さく悲鳴を上げていた。

「このメス奴隷2匹は自慰もしたことがありませんので、ローターと媚薬を使用しマンコを濡らしていきます」

理恵のアナウンスで、またも観客席がざわついていく。

「全く何も知らないメスなのか。これはますます面白いな。メスの絶頂を知った日に処刑されたりしてしまう訳か。これは惨めで最高

だよ」

「媚薬とローターで強制的にメスの快感を開発して、あの巨大ディルドゥをマンコに突き刺しちゃうのね。あのメス、一瞬にして天国から地獄を味わえるんだから、ここは喜ばないといけないわよ」

「性具で破瓜を迎えるなんてメス奴隷らしくて良いわね。そのまま、マンコ壊して貰いたいところだけどトーナメントがあるから無理か。でも、どちらかは処刑されちゃうのよね。楽しみだわ」

「僕の興味はただ一つ。あの2匹のメス奴隷がどれだけ泣き叫んで苦しんでくれるかだ。あのロリメスが痛め付けられる姿を想像すると僕は……。あっ、あっ……」

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

「あぁ、良いわね。何も知らないマンコが壊されていく。私が調教師になって、あのメス奴隷のマンコ壊したいわ……。おっ、おっ、おっ……」

プシャァァァーーッ

早くも興奮し射精や潮を吹く観客の前で、ナギサとアカリはスクール水着の上から股間にローターを当てられ、その初めての感覚に声を上げ出していた。

「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ」

「おっ、おっ、おっ、おっ、おっ」

何も知らなくとも体は正常に機能し、小さなクリトリスは硬く勃起し、ぽっちりとその存在感を主張する。そして、それに伴いスクール水着の股間の中心にも染みが拡がりつつあった。

「やめて下さい。マンコ熱い」

2匹のメス奴隷は吊られたまま腰を振り、ローターの刺激から逃れようとするが、そんな事は許されず別のスタッフに腰を押さえつけられてしまう。そして、スクール水着の上から勃起したクリトリスに注射器の針が刺された。

「「うぴゃあぁぁぁぁぁーーーっ」」

クリトリスに針を刺される事など初めての2匹はたまらず悲鳴を上げるが、そのままヂューッと媚薬を注入されてしまう。この媚薬は慣れたメス奴隷でも瞬時に昇天させてしまう強力かつ即効性のあるものであり、それが経験のないメスに注入されてしまったのだからたまらない。

「あうぅぅっ、助けて下さい。マンコおかしいですぅ」

生まれて初めての感覚に惨めに悶えるメス奴隷2匹に、更に容赦なく2本目の媚薬が注入されローターで刺激してしまう。2匹の体はビクビクと痙攣している。

「「あわわわわわわっ」」

プッシャアァァァーーーッ

ナギサとアカリは生まれて初めて潮を吹いてしまっていた。しかし、

更に媚薬が追加されてしまう。そして、いよいよ破瓜の時がやってきた。直径5センチ、長さ20センチのディルドゥが2匹の処女マンコに突き挿れられ処女膜が貫通される。まず、スクール水着の股間が縦に切り裂かれ2匹の性器の状態を確認された。そして、幼い縦筋から僅かにのぞく小陰唇をくぱぁと広げられ膣口にディルドゥの先端が当てられる。膣口からは泉のように粘液が湧き出していた。ここで、メス奴隷の破瓜の瞬間の表情を楽しむ為、2匹の頭に被せられていた下着が取り払われた。2匹は媚薬を大量に注入された影響で、その幼い顔は赤く火照り鼻血を出してしまっていた。

「さて、それではディルドゥを根元まで突き挿れますよ。2匹の初めての瞬間です。お見逃しのないように……」

理恵の言葉が終わると背後の巨大モニターに数字が映しだされた。それは、カウントダウンの表示であり、その数字が〝0〟になった時2匹の処女膜貫通は執行される。観客たちは期待に満ちた目で、自分でもカウントダウンしながらモニターの数字を見ていた。

「3、2、1……、ゼロッ」

グリィィッ、ビチ、ビチ、ビチィィッ

「「はぶうぅぅぅぅっ！」」

ついに2匹の処女マンコにディルドゥが抉るように突き挿れられる。まだ未使用だった幼く小さな膣は、処女膜はもちろん膣そのものもビチビチと裂かれていく。しかし、ディルドゥはねじ込むように無理矢理力任せに2匹の膣に容赦なく挿れられていった。そして、なんと最後はディルドゥをハンマーで打ち込まれ、きれいに根元まで挿入されてしまった。ナギサとアカリは生まれて初めて膣に挿れら

れた物で、膣を破壊され激しく号泣していた。が追い討ちをかけるように理恵がアナウンスする。

「エキシビションなので処刑はしませんが、ここで皆様の期待通り膣は破壊しておきます。今2匹のメス奴隷に挿入してあるディルドゥは表面から針が飛び出す仕掛けになっております。リモコンのスイッチで無数の針が飛び出しメス奴隷の膣をズタズタにします。そして、この針先には小さな孔が空いておりディルドゥの底面にチューブを繋ぎ、そこから注入したものを針先から放出出来る仕様になっております。今回はそこから塩酸を注入し、針でズタズタにした膣を、更に塩酸で溶かし、膣の完全破壊を実行しようという趣向でございます。未使用だった膣が無惨に壊される姿をお楽しみ下さい」

観客たちは、まだトーナメントの対戦が開始される前に膣を破壊されてしまうメス奴隷の姿に興奮していた。ナギサとアカリは、今日初めて破瓜を迎えた、そのすぐ後で膣を破壊され二度と使用出来なくされてしまうのだ。まあ、もっとも優勝した1匹以外は処刑され、膣を使う機会などないので、ここで破壊されても何の支障はない事は確かだった。

★　★　★　★

「あの2匹マンコ壊されちゃうよ。助けてあげたいけど、こんな大勢の人の前じゃ、とても私たちでは無理」

「せめてこれが最後の対戦で辺りが暗くなっていれば良かったのに」

二人の女はすぐ目の前で、これから膣を壊されようとしているナギ

サとアカリに何も出来ず唇を噛んでいた。

★　★　★　★

ＶＩＰルームに戻されたつぐみは、まだ針付きの下着を穿かされていた。凄まじい性器拷問で性器の感覚が失くなっていたが、ここにきて感覚が戻りつつあり、その激痛に必死に耐えながら外のメス奴隷２匹を見つめていた。

・・マンコの穴、針でズタズタにされて塩酸で溶かされる……。凄い、これが本当の拷問なの。私も、それをやられてみたい。お願いしたらやってくれるのかな・・

つぐみはドキドキしながら自分の膣が壊される様子を想像していると、スタッフが飛び込んできてメイドに何か告げていた。それを聞いたメイドの顔色も変わっていた。

「不味いですね。この対戦が終わるまでに探し出さないと。でも、どうして地下の個室から……」

メイドは昨夜の事件といい、何か得体の知れない者がこのトーナメントに紛れ込んでいるのは間違いないと確信した。

82、策略

82、策略

ナギサとアカリは一度も使った事のない膣に、いきなり巨大なディルドゥを突き挿れられ、哀れにも物で処女膜を貫通され号泣していた。しかし、これでナギサとアカリが許されるかと思うと、そうではない。ナギサとアカリは、今この場で膣を破壊されてしまうのだ。処女膜を突き破ったディルドゥから飛び出す無数の針で膣をズタズタにされた挙げ句、その針から放出される塩酸で膣を溶かされてしまう。未使用だった2匹の膣が、無情にも完全に破壊されてしまうのだ。

「いや、良いね。さっきまで無垢だったメスのマンコの穴が本来の意味に使う前に壊されるなんて最高だね」

「本当ね。もうメス奴隷でもない〝モノ〟扱いされて壊されるなんて無様でいいわ」

「あはっ、もうらめぇっ。あのメス奴隷のマンコの穴壊されると思うと、イキそうっ」

観客の興奮が充分高まったのを確認し、理恵はリモコンのスイッチを観客席から見えるように高く掲げる。

「えーっ、それではまず、この2匹のメス奴隷のマンコの穴を針で

ズタズタにします」

観客が息を止めて理恵の指先に注目する。会場内がシーンと静まりかえる中、ナギサとアカリの泣き声だけが響いていた。そして、理恵の指がリモコンのスイッチを押す。

パシュッッ

「ひぎゃあぁぁぁぁぁぁーーーーっ！」

小さな音が響いた後に、一呼吸おいて2匹のメス奴隷の絶叫が会場内に響き渡る。そして、すぐにディルドゥの底面にチューブが装着され、そこから塩酸が注入された。

「あびゃびゃびゃびゃびゃあぁぁぁぁーーーっ！」

ナギサとアカリの股間から白い煙が上がり、異臭が辺りに漂っていく。スタッフはすぐにサーキュレーターを複数設置し、会場内の観客がこの異臭の元を吸い込まないように空気を拡散させていた。逆さに吊られたメス奴隷は激しく体を揺らし、絶叫している。しかし、まだ塩酸は注入されていた。最初の説明の通り、この2匹のメス奴隷の膣を完全に破壊してしまうようだった。しばらく体を揺らし暴れながら絶叫していたナギサとアカリは、そのうちに口から泡を吹き始め、やがて白目を剥いて失神してしまった。

★　★　★　★

メイドはスタッフからの報告でＶＩＰルームを離れ地下のメス奴隷

になったZクラスの生徒を見にきていた。トーナメントに参加しているメス奴隷が逃亡したとの報告を受け、最悪の場合このZクラスの生徒の中から代替えを選んでおくようにと葉月の命令だった。逃げ出したのは、この後の対戦に出場するメス奴隷〝フウカ〟だった。地下の個室に鎖で繋がれていた筈であるが、鎖を切断し牢の扉を破壊して逃亡したのだ。フウカの調教師は一人でゆっくりしたかったのでメス奴隷は地下の個室に入れて貰ったと、自分は悪くないアピールを必死に食堂で葉月にしていた。それまで上機嫌でワインを飲んでいた葉月の顔が強張っていくのを見て、周囲のスタッフは生きた心地がしなかった。

「あなたたち、何をボサッと突っ立っているのです。早くメス奴隷を探しなさいっ」

葉月より先に沙也加が、そんなスタッフを一喝していた。スタッフは慌てて駆け出していく。

「豪徳寺の部屋に侵入しようとしていた賊の仕業ではないですかね。目的は定かではありませんが、善からぬ事を企んでいそうです」

理津子が言うがクラヤミが別の意見を言う。

「もしかしたら、ここに潜入するためメス奴隷になりすましたんじゃないか。メス奴隷ならチェックも緩いだろうから」

「大事なのはトーナメントに穴を空けない事です。このナギサとアカリの対戦中にメス奴隷フウカを探すよう全スタッフに指示を出しましょう」

葉月の一言で全員がテーブルから立ち上がっていた。

「せっかくのトーナメントですからね。私も探すのを手伝いますよ、葉月」

「私たちもトーナメントの進行が邪魔されるのは本意ではありませんからね。手伝いましょう。麗華さん、行きますよ」

飲み会はお開きにして、それぞれグラスやジョッキを置くと、食堂を後にするのだった。

★　★　★　★

進行を務めている理恵の下にもスタッフがやって来て耳打ちしていた。

・・メス奴隷が逃亡？それはあり得ない事態ですね。このトーナメントに参加しているメス奴隷は、この華やかな舞台に立てる事が嬉しいのです。後はわたくしのように目的がある筈なので、逃亡するなど考えられません。逆に拉致されたのでは・・

理恵にも、理恵の考えがあったが何れにしろ行方不明になっているメス奴隷の捜索を行い、早急に発見する事が望まれていた。そして、理恵への指示はお客様に不快を感じさせない程度に進行を遅らせる事だった。

・・このメス奴隷たちは、ほとんど素人ですからね。対戦が始まればすぐに決着がついてしまうでしょう。仕方ありませんね。時間を稼ぐ為に、子宮やおしっこの穴も壊してしまいますか・・

理恵はスタッフを呼び、炭を用意させていた。

・・これなら炭を起こすのに多少時間がかかりますが、これを何に使うか分かっているお客様は文句を言わないでしょう・・

理恵はゆっくりと慎重に炭を起こす。それを見て観客も次に2匹のメス奴隷が何をされるのか悟り、期待して理恵の様子を見つめていた。

「処刑ではないのに、ここでマンコの炭焼きをするとは珍しいですね。私としては嬉しいですがね」

「あのメス奴隷2匹、これやられたらもうマンコ完全に壊れるわね。まさか自分のマンコが壊されるなんて思ってもみなかったでしょうね。無様で哀れで、笑いたくなってくるわ。それにしても、この時点でマンコ壊すなんて今までにないパターンね」

「オスと一回も交尾しないうちにマンコ壊されるって、あの2匹哀れね。普通メス奴隷はまず犯されまくるところから始めるのに、いきなり最後まできちゃった。もう早く壊して欲しいわ」

観客たちも今までと違う進行に多少違和感を覚えていたが、メス奴隷の性器破壊が観られるなら特に不満を言う者はいなかった。が、二人の女だけはひそひそと周りに聞かれないように話していた。

「あの進行役の理恵、今までてきぱきと上手く進行していたのに、何か急に段取りが悪くなった気がするわね」

「周りの豪徳寺のスタッフの動きも何か慌ただしくなっているわよ。

焼却炉の死体なら、もうとっくに発見されているしね。他にも何かあったのかしら」

二人の女は、何が起こったのか探る為に会場の隅に移動すると、そこから身を翻して屋敷の中に入っていった。

★　★　★　★

メス奴隷フウカを探している葉月のところにスタッフが駆け寄ってきた。

「葉月様、〝グルーム・アグリカルチャー〟の百目鬼（どうめき）様より連絡が入っております。葉月様の携帯に連絡をいれたそうですが葉月様がでないので、今かけても大丈夫かと伝えてくれとの事です」

葉月は、このメス奴隷逃亡の件かもしれないと思いスタッフに、分かりましたと返事をすると自分の部屋に携帯を取りにいった。葉月は数多くの携帯を所持しており、交渉や仕事の内容によって使い分けていた。百目鬼（どうめき）に教えてあるのはプライベート用の携帯だ。つまり、葉月と百目鬼（どうめき）は親しい間柄といえる。このプライベート用の番号を知っているのは沙也加やルイを含めてほんの数人である。そして、百目鬼（どうめき）からの電話で葉月はメス奴隷フウカが何者なのか知る事となった。

83、対策

83、対策

葉月に呼び戻され、再び食堂に集まった沙也加たちは、そこで葉月からメス奴隷フウカについての情報を聞いていた。

「ここにいたメス奴隷フウカは偽物のようです。本物のフウカは殺害されていたのが発見されたと連絡がありました。オークションで落札されずに廃棄処分にされたメス奴隷の残骸の中に紛れて混ませていたのを、たまたまフウカの教育担当だった者が廃棄整理の当番で、落札されて出荷されていった筈のフウカを発見して報告を上げてきたそうです。グルーム・アグリカルチャーでは、密かにこの問題を処理しようとしているようですが、私の友人がメス奴隷フウカが私のトーナメントに出場しているのを知って連絡してきた次第です。今のフウカが何者なのか確定は出来ないそうですが、友人の想像では〝弥勒院〟家の手の者ではないかという事です」

葉月の説明で沙也加と近藤は緊張した顔つきになっていたが、他の者は特に表情に変化はなかった。

「何、その弥勒院家って？初めて聞くワードなんだけど」

クラヤミが呑気そうに言うが、沙也加は緊張した声でクラヤミに言い返していた。

「弥勒院家は、簡単にいうと葉月様の敵対勢力になります。葉月様、私もうちから人を呼んで警戒させますよ」

途中から葉月に向かって沙也加は言っていたが、葉月は笑っていた。

「ありがとう、神楽坂さん。でも、それには及びませんよ。むしろ刺激があって楽しいではないですか。それに、いい機会です。ここで弥勒院を潰しておくチャンスですね。まあでも、そういう事ならもうフウカを探すのは諦めましょう。発見するのは無理でしょうから。メイドに、他のメス奴隷を選抜しておくように指示を出してありますので、フウカの代わりに、そのメス奴隷を使います。お客様には加納さんから、フウカはトーナメントに出場したものの、次々に酷い処刑をされていくメス奴隷を見て恐怖にかられ自殺してしまったと説明して貰いましょう。という事で飲み直しますか」

葉月の豪胆さに沙也加は驚き、近藤は心配していたが、クラヤミとルイはさっさとラガーとエールを注文していた。理津子と麗華もカクテルを注文し終えると、ひそひそと二人で話していた。

「弥勒院というのは噂でしか聞いたことありませんが、狂信者といわれる一族でしょうか、理津子さん」

「ええ、私もはっきりとは分かりませんが、確か自分たちこそが人類を救う救世主だと信じている一族のようですね。なるほど、人類を滅ぼしかねない豪徳寺と敵対している訳ですか。面白い構図になってきましたね」

理津子と麗華は、内心笑みを浮かべていたが、斎藤と花梨は、自分たちが巻き込まれるのは御免だという顔をしている。

・・冗談じゃないわ。私は関係ないんだから巻き込まないでくれる。でも、豪徳寺が殺られちゃうのは見てみたいわね・・

花梨は逃げ出そうと思っていたが、葉月がやられるのも見てみたいと、自分も改めてレモンサワーを注文していた。

★
★
★
★

炭の準備が出来た理恵はナギサとアカリの膣に挿入されているディルドゥを針を出したまま引き抜く。

グビョッッッ！

「あぎゃあぁぁぁぁーーーーっ！！」

おかしな音を立ててディルドゥが抜かれ、ナギサとアカリの膣は飛び出した無数の針で引き裂かれ完膚なきままにグシャグシャに破壊され、２匹のメス奴隷は絶叫していた。２匹のメス奴隷の膣は、もうどろどろに溶け、針でグシャグシャにされたただの肉穴に成り果てていた。そこへ理恵はステータイプの膣鏡を挿入し大きく拡げる。そして、まだ生理も始まっていない子宮を確認した。

「ひぐっ、ひぐっ、ひぐっ、ひぐっ」

何をされるか分からないナギサとアカリは、ただ泣き続けている。そこへ、それぞれスタッフが白炭を一つ火箸で掴み、大きく開いたナギサとアカリの膣の上に持っていく。観客たちはみな、男は性器をしごき、女は性器を擦ったり潰したりつねったり挿れたりしなが

ら、息を止めてその瞬間を待っていた。そして……。

ポトッ

なんでもないように2匹のメス奴隷の膣の中に超高温の白炭を落とす。白炭は、無情にもナギサとアカリの子宮の上に落ち、一瞬で子宮を焼き潰す。

「はびゃあぁぁぁぁぁぁーーーーっ！！」

ショウウウウーーーッ

ナギサとアカリは、尻に頭がつきそうなほど大きく反り返り、噴水のように尿を噴き出していた。それは、まるで双子のように同じ姿勢だった。

「あぶっ、あぶっ、あぶっ、あぶっ、あぶうぅぅぅーーっ」

2匹のメス奴隷は吊られたまま、のたうち回るが腰をがっしりと押さえつけられ、今度は炭の中に入れられて真っ赤に焼けている火箸が尿道に突き挿れられる。

ジュウウウウーーッ

「ふんびゃあぁぁぁぁーーーーっ！」

ナギサとアカリの尿道も焼き潰され壊されていく。これまで手付かずだった2匹のメス奴隷の性器が、あっという間に破壊される現実に観客も興奮していた。そして、続いて2個目の白炭が容赦なく膣の中に落とされてしまう。狂ったように絶叫する2匹のメス奴隷の

壊され、ただの穴になった膣に白炭がどんどん詰められ火箸でつつかれ団扇で煽られる。

「んびゃあぁぁぁぁーーーっ、んびゃびゃびゃびゃあぁぁぁーーっ」

ナギサとアカリの股間から炎が大きく燃え上がった。燃え上がった炎で、2匹のメス奴隷のクリトリスや小陰唇などの外性器も焼かれていく。切り裂かれたスクール水着にも火が燃え移っていた。凄まじい光景だった。メス奴隷2匹の股間が炎に包まれ、のたうち回っている。観客たちは、それを見て放出し、潮を吹いていた。

★
★
★
★

つぐみは、性器を中から燃やされているメス奴隷の凄まじい姿に興奮していた。

・・ゆかり姉の動画でも見た。でも、実際見ると迫力が違うよ。凄い、あんな事されたらもうマンコ二度と使えない。私も、あれされてみたい。あの2匹のメス奴隷、どんな気持ちなんだろう。私もマンコ炭で焼かれれば分かるよね・・

つぐみの性器も内と外から針で突き刺され、相当酷い状態であるのだが、つぐみはここまでされた以上、それ以上の行為を望んでいた。

84、栄子

84、栄子

「いやだぁ、なにあれっ。マンコ、燃やされている。マンコ、燃やされているよっ」

「くるみちゃんや、乃梨子ちゃんも連れていかれちゃったけど、夢ちゃんみたいに処刑されちゃうの。私たちも、あんな風にマンコ燃やされたり、潰されたりしちゃうの」

「もう帰して下さい。助けて下さいっ」

まだ処刑ではないのに、性器を燃やされ吊られたまま激しくのたうち回っているナギサとアカリの姿を見て、ＶＩＰルームの生徒たちは半狂乱になっていた。

「私たち、Ｚクラスだよね。卒業したら全員メス奴隷になるのが確定しているクラスだよ。あなたたちだって、いつも教室で処刑されたいって言っているのに実際処刑を見ただけで、なんでそんなに怖がっているの。私たちの先輩には凄いメス奴隷もいるのに、後輩の私たちがこんな姿、晒してみっともないと思わないの」

つぐみの隣の吉川栄子が叫んでいた。つぐみは、一瞬驚いたがやはり栄子だと微笑んでいた。

「私はあのメス奴隷たち凄いと思う。マンコ燃やされるなんて、なかなか経験出来ないよ。あなたたちが嫌なら、私が始めに処刑されるよ。こんな大きなトーナメントで処刑されるなんて凄い名誉でしょう。メス奴隷になるしかない私たちの記録が永遠に残るんだよ。卒業してメス奴隷にされて、誰にも知られずにひっそりと処刑されて消えていくよりずっと良いと思うんだけど」

栄子の言葉は、半狂乱になっていた他の生徒を落ち着かせていた。

★
★
★
★

進行係の理恵にまたスタッフが駆け寄り葉月からの伝言を伝えていた。

・・そうですか。もう引き延ばしはしなくて良いのですね。このメス奴隷たちは哀れですね。ここまでされてしまっては、もう……。でも寂しがらないで下さい。近いうちにわたくしも同じところにいくと思いますから・・

燃えているナギサとアカリに消火剤が吹き掛けられ炎が消火され、ようやくトーナメントが開始された。

「これより、メス奴隷処刑トーナメントBブロック一回戦第5戦ナギサ対アカリを開始致します」

理恵が右手を上げ、大きく宣言する。

「この状態でトーナメント開始とは、これは鞭一発で勝負がつくの

ではないかな」

「もうすっかり2匹とも処刑されているつもりだったけど、これからトーナメント開始なのね。まあ、勝負はすぐにつくでしょうね」

凄まじい拷問を受けていたメス奴隷2匹を見ていた観客たちも、この勝負はすぐに決着がつくと予感していた。ナギサとアカリは開脚逆さ吊りのままトーナメントに突入していく。運営のスタッフである今回の調教師はお互い鞭を手にとっていた。調教師たちにも、この多大なダメージを受けているメス奴隷は、もう一撃で落ちると思われていた。

・・今度こそ一撃で決めてやる・・

ナギサの焼けただれた性器に狙いをつける黒いスーツが張ち切れそうな体の大きなスタッフが決意を込めた瞳でナギサの性器を睨み付けていた。そして、大きく鞭を振り上げナギサの性器目掛けて振り下ろす。

ビシィィィッ!!ビチッ、ビチッ、ビチィィィッ!

「あびゃあぁぁぁぁーーーっ!」

燃やされ焼けただれた性器に鋭い鞭を打ち込まれ、ナギサの性器からクリトリスや小陰唇が引き千切れ辺りに飛び散り、ナギサは絶叫する。そして、白目を剥き口からブクブクと泡を吹いて哀れに失神してしまっていた。

対してアカリも同じ様に性器に鞭を叩き込まれていた。しかし、アカリは同じく焼けただれた性器を鞭で打たれ絶叫しながらも耐えていた。

「ビクトリー、アカリ」

理恵がアカリの勝利を宣言する。大方の予想通り、勝負の決着は一撃でついていた。今回の勝負は調教師であるスタッフの力量が明暗を分けていた。どちらも本物の調教師ではなく、鞭なども目の肥えた者が見れば、まるでなっていない一撃であったが、それでも一度失態を演じ後がない岡田の一撃は気迫が違った。それが、アカリを勝利に導いたのである。アカリは拘束を解かれ、治療のため担架に乗せられて退場して行ったが、ナギサはそのまま逆さまに吊られていた。ナギサの処刑は、もう性器は破壊されているため、簡単なもので手早く執行する事になり準備が進められていった。

★
★
★
★

「今度は岡田も頑張りましたね」

沙也加が近藤に声をかけると、近藤も嬉しそうに頷いていた。

「今回、スク水を着ていたので炎が燃え拡がって良かったですね」

「なかなか派手な演出になりましたね。弥勒院の奴も派手に手を出してくれると楽しいのですがね」

ルイと葉月が楽しそうに会話しているが、相変わらず斎藤と花梨は硬い表情をしていた。早くここから逃げ出したいという思いが表情にも表れているが、へたに逃げようとすると葉月の機嫌を損ねてしまうだろう。それも恐ろしかった。

「神無月さん、おとなしいけど飲みが足りないのではないですか。お金の事は気にしないで良いですから遠慮せずにどんどん飲んで下さい。斎藤も飲みが足りないですね。少しは、この二人を見習いなさい」

葉月に指差されたクラヤミとルイは、まるでそんな事気にせずにラガーとエールでいい気もちになり乾杯していた。そして、どこからそんな話になったのか、理津子と麗華も一緒になって映画の話をしていた。

「「ナイト・オブ・ザ・リビングデッド」「ドーン・オブ・ザ・デッド」「ディ・オブ・ザ・デッド」のゾンビ三部作が好きですね。夜、夜明け、昼とタイトルが進むにつれ登場するゾンビの数も増えてきて絶望感が半端ないのがぞくぞくしますね」

麗華が意外にホラー映画好きのようで、ペラペラと話の中心になっている。それにクラヤミが乗ってきていた。

「俺は「テリファー」のあの開脚逆さ吊りにした女を股間からノコギリで真っ二つにするシーンが大好きで、そのシーンを何度も見返しているよ。「0」と「2」も観たけど、やっぱり無印「テリファー」が一番だね」

「そんな作り物観て楽しいのですか。私は本物の処刑の方が全然楽しいですよ。でも、しいていうならタイトルは忘れましたが、ゴキブリに体の中を喰われて、最後に口からゾロゾロ出てくるのが楽しかったですね」

葉月までが話に乗ってきて、飲み会はまた盛り上がっていた。

85、苦悩

85、苦悩

岡田は悩んでいた。これからナギサの処刑を執行するのであるが、葉月からのオーダーが届いていたのである。

《なるべく時間をかけずに素早く。そして、清掃も楽で、お客様も喜ぶ方法で処刑を執行しなさい》

岡田が調教師であれば好きなように処刑出来るが、岡田はここのスタッフの一員である。葉月の指示は絶対だった。

・・どうする？ここでミスすれば葉月様の怒りを買うぞ。メス奴隷の調教や拷問を長年やっている調教師なら良いアイデアが浮かぶのだろうけど、俺は全く素人だ。俺が出来る方法で処刑するしかないが……・・

岡田は悩みながら、逆さに吊られているナギサを見つめている。

・・ナギサのバルコニー、なんて歌があったな・・

岡田はその巨体の体に似合わず意外にもアイドル好きであった。

・・バルコニーなんかに立っている標的は狙い放題なんだけどな。そういう仕事なら楽なんだか、今回は勝手が違う・・

岡田は、しかし葉月の無茶振りにも答えようと頭を働かせていた。葉月は、時に無茶苦茶な命令をしてくる事があるが、それでその命令を見事にこなしていくと、どんどん重要な地位に登用してくれる。もちろん失敗すれば容赦なく始末される。そこに葉月の甘さは微塵もない。だが岡田は知っている。葉月が無茶な命令をしてくるのは、その者に期待しているからだと。岡田は、その葉月の期待に応えたかった。

・・近藤さんのように葉月様に認められる男、いや駒になりたい・・

それが岡田の願いだった。

・・そうか、別に調教師の処刑方法に拘る必要なんかない。俺の得意な方法で処刑すれば良いんだ。大口径の拳銃で頭をふっとばしてやるか。いや駄目だ、清掃が大変になる。葉月様のオーダーを満たしていない・・

岡田は仕事柄銃器の扱いには慣れている。そのなかで何かこの場合に打ってつけの物はないかと思案していた。そして、ようやく思い当たる。

・・よし、これでいこう・・

岡田はスタッフに指示を出して逆さに吊られているナギサの体を、そのまま水平になるように吊って貰った。つまり、ナギサは空中で仰向けで開脚され吊られている事になる。観客席からはナギサの表情は直接は見えなくなるが、そこはカメラで撮影し背後のモニターに映るように調整する。さらに大きく開脚され、ナギサの焼けただれクリトリスや小陰唇が千切れた性器が観客席から丸見えになった。

そして、そのナギサの性器に膣鏡が挿入され開口される。ナギサの穴の奥に、これも焼けただれた子宮が確認された。

「もうこのメス奴隷、マンコぼろぼろだな。マンコの中もぐちゃぐちゃだ。まだ何も知らないというのに、ここまで壊されるとはね。ここのショーは徹底しているから俺は好きなんだよ」

「そうそう、へたに同情や憐れみをかけないで完全に壊してくれるからね。こんな楽しい見世物はないよね」

「早く処刑を執行して絶命させてくれないかな。まだ11年しか経っていない何も知らないロリがマンコ壊されて絶命させられるなんて最高よね」

観客たちが処刑執行を待ち望んでいると、岡田が銃を構えてナギサの性器に狙いを付けた。

「ほう、あれで射つのですね。これはなかなか楽しい。深く射ち込んで欲しいですな」

「あんなのでマンコ射たれちゃうのか。ホント、マンコ徹底的に壊して絶命させる気ね。どれくらい射たれれば絶命するかしら。楽しみね」

観客が期待して見ているのは岡田が構えているクロスボウだった。ボウガンとも呼ばれるこの武器は、弾丸の代わりに矢を射ち放つ。

パシュッ

鋭い音が響き矢が射ち出された。

ドスッ

「あぶうぅぅーーっ！」

絶叫するナギサの右の大陰唇に矢が深く突き刺さっていた。岡田は続けて矢を射ち出す。調教とは違い手慣れたもので、次々にクロスボウに矢を装着し連続で矢を射ち出していた。

パシュッ、パシュッ、パシュッ

ドスッ、ドスッ、ドスッ

「あぶうぅぅーーっ、ぶぶぶぶうぅぅぅーーーっ！」

ナギサの左の大陰唇、クリトリスのあった場所、会陰にクロスボウの矢が深く突き刺さっていた。そして、次の一本が射たれる。

ドスッ

「あうううぅぅぅーーーっ！」

その一本は開口されたナギサの膣の奥、子宮に見事に突き刺さっていた。さらに岡田はナギサの子宮に矢を射ち込んでいく。ナギサの膣は大量の矢で一杯になっていた。ナギサの体はビクンビクンと大きく痙攣しだしている。岡田はナギサに近寄ると、刺さっている矢をずぼっと抜いた。そして、ナギサの膣穴に今度は通常の拳銃を当てる。それは岡田愛用の拳銃〝グロック１７〟だ。９ｍｍ弾を１７発も撃ちだせるフルサイズの拳銃だった。その銃頭をナギサの膣穴に入れ引き金を引く。

パシュッ、パシュッ、パシュッ、パシュッ、パシュッ、パシュッ、パシュッ、パシュッ、パシュッ、パシュッ、パシュッ、パシュッ

「！！！！！！！！！！」

引き金が引かれ、弾が撃ち込まれる度にナギサの体がまるで人形のように動いていた。

「さあ、もう終わりだ」

パシュッ、パシュッ、パシュッ、パシュッ、パシュッ、パシュッ、パシュッ、パシュッ

グロック17の装填されていた全弾丸を全て性器から撃ち込まれたナギサは、もう何も言わぬ物体になっていた。しかし、岡田は念には念を入れるように、グロックに弾を装填するとナギサの体を、また逆さ吊りにし今度はナギサの眉間を撃ち抜いた。さらに、目、鼻、口を撃ち抜き、わずかに膨らみかけた胸にも銃弾を撃ち込んでいく。

パシュッ、パシュッ、パシュッ、パシュッ、パシュッ、パシュッ、パシュッ、パシュッ、パシュッ、パシュッ、パシュッ、パシュッ

ナギサの体は文字通り蜂の巣にされていた。観客もメス奴隷の処刑で銃を使うところなどあまり見たことがなく。その光景に興奮していた。

「マンコから、あれだけの弾丸を撃ち込まれるの興奮しますね。いや、良いものを見られました」

「私、マンコから銃で撃たれて処刑されるのなんて見たの初めて。超興奮する。私も処刑されるならマンコから銃で撃たれたいわ」

岡田の処刑は観客に好意的に受け止められていた。

★　★　★　★

「銃で処刑なんて安易だけど、マンコから撃つのが良いね。普通に頭や胸撃ってたら詰まらないけどね」

クラヤミが相変わらずラガーを飲みながら感想を述べると、葉月も満足気に頷いていた。

「岡田は調教師ではないですからね。このように自分の得意な物で処刑すれば良いのですよ。お客様も、いつもと違う方法で処刑すれば喜んでくれますからね。岡田も変に気をまわさずに、よく気がつきました。近藤、岡田に特別賞与を与えてあげなさい。これからも精進するように伝えるのですよ」

近藤もようやく安堵した顔になりバーボンのロックをぐいっと飲み干した。

「近藤さん、ホッとしたからってあまり油断してはいけませんよ。弥勒院の手の者が何処かから狙っているかも知れませんから」

沙也加が近藤に小さな声で忠告する。どうやら、この酔っぱらい集団の中にあって神楽坂沙也加が一番まともな人間のようであった。

86、変更

86、変更

ナギサの処刑が無事に終了し理恵やスタッフは清掃と次の対戦の準備にかかっていた。Bブロックの一回戦も次が最後である。これで二回戦に進むメス奴隷が全て確定し、二回戦からはAシードのメス奴隷も参戦してくる。一回戦を戦ったメス奴隷はダメージを抱えているので不利になるのは否めないが、そこは調教師の腕の見せ所であった。それぞれの調教師は、自分の次の対戦相手の調査に余念がない。誰もが映えある優勝目指しているのである。メス奴隷の命をかけた真剣勝負なのだ。どの調教師も自分が調教してきたメス奴隷に誇りを持っている。その自慢のメス奴隷を披露できる最高の場が、このトーナメントであるといえた。が、一人の調教師は憮然としていた。

「という訳ですので、よろしくお願い致しますね」

運営側からの突然の申し出で調教師は困惑した。このトーナメントで、お互い天塩をかけて調教したメス奴隷同士で競いあう。それが最大の喜びであったのに、それが目前になって消えてしまったのだ。

・・俺の相手をまだ調教された事もない素人のメス奴隷に変更？当初の相手が自死してしまったとはどういう事なのだ。調教師が事前に厳しい調教をやり過ぎてしまったというのなら、まだ分かるが自死だと……。ふざけるなよ、素人相手では勝つのが当然ではないか・

・

調教師は、望んでいた真剣勝負に水を注されたようで怒りに燃えていた。

・・ふん、それなら速攻勝負を決めてやる。このトーナメントの最短記録を打ち立ててやる・・

調教師はそれも悪くないなとニヤリと微笑み、拳を握りしめていた。

★　★　★　★

女はまず何をするべきか考えている。

・・まず服だね。このままではいずれ発見されてしまう。二度と消せない焼き印を捺されてしまっているからね。観客に紛れているのにも限度がある・・

女は、この屋敷のスタッフやメイドに目を向ける。女性スタッフの制服は黒いスーツだ。上着の下には白いブラウス、スカートはミニのタイトスカートで黒いストッキングを着用し、同じく黒いヒールを履いている。対してメイドは同じく黒いゴスロリ調の衣服だ。女は少し考えるが、自分の好みにあった方の衣服を調達する決心をした。調達する。それは、もちろん衣服のストックを探して手に入れるなど悠長な事は考えていない。手っ取り早く誰かを殺害して手に入れるつもりであった。

・・スタッフやメイドの姿をしていれば豪徳寺も油断するだろう。

これで私は人類の救世主となれるのだ。焼き印を捺されたくらい何でもない・・

女は早速行動に移る。まず自分の体型に似た相手を探す。そして、そのターゲットを始末する。女にとってそれは朝食のスクランブルエッグを作るより簡単な作業であった。

★★★★

佐瀬は、地下の調教部屋でメス奴隷に堕としたマコをさらに仕込んでいた。マコの心はすっかり折れ、もう佐瀬の命令のまま従順に動いているが、佐瀬はまだマコの心を壊そうとしていた。一片たりとも人の心を残さない。マコをただの生体玩具にする。佐瀬は残酷な笑みを浮かべマコに足を開くよう命令する。マコは何の抵抗もなく大きく足を開き、自分の性器を露に晒していた。テーブルの上で仰向けで足を開くマコの性器に佐瀬は自分の硬く大きく勃起したイチモツを近づけると先端を膣口に当て、縦割りに沿って擦り付け刺激を与えていると、ねっとりとした粘液が溢れてきた。

・・よしっ・・

佐瀬はマコの腰を押さえつけ、マコの膣に自分のモノを突き挿れた。

「あうっ」

小さく声を上げるマコの腰を押さえたまま佐瀬は激しく腰を振る。

・・こいつのマンコ、なかなか具合が良いぞ。いい穴を手に入れた

な。後で他の穴も試してみるか・・

佐瀬は腰を振りながら満足気に頷いていた。

「ほら、子宮を突き上げてやる。もっと無様に声を上げろ」

「おぉっ、おぉっ、おぉっ、おぉっ」

佐瀬の性器で激しく子宮を突かれマコは喘ぎ声を出しているが、佐瀬はそんなマコの頬を片手で打ち出した。

パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ、パンッ

「いひっ、いひっ、いひっ、いひっ、いひっ」

マコの頬は赤く染まり、涙と鼻水も溢れだした。佐瀬は、そのマコの顔を見てさらに興奮していく。

・・くくく、こいつの泣き顔と泣き声も最高じゃないか。ぐちゃぐちゃに壊したくなってくるな。一通り犯したら壊しちまうか・・

佐瀬は自分の下で仰向けで泣いているマコの姿を見て考えていた。

・・いや、待てよ。ロボトミー手術をして完全な生体玩具にして売り飛ばすか。需要はあるからな。結構な値で売りさばけるのは間違いないしな・・

佐瀬は、マコの脳の一部を破壊するロボトミー手術を施し、ただ生きているだけの玩具にしてしまうのも一つの手だと考えていた。

・・感情を残したままだと面倒だからな。ただの穴にしてしまえば良いだろう。我ながら良いアイデアだ。調教師より、生体玩具製造に力を入れた方が良いかもな・・

そんな事を考えていると佐瀬はさらに興奮し、マコの膣の中に激しく射精していた。

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

佐瀬はマコの中に放出してもすぐには抜かずに、今度はマコの中に放尿しだした。

ジョゥゥーーーッ

マコの膣から佐瀬の精液と尿が溢れだす。

「お前の汚ないマンコの穴の中もきれいにしてやったぞ。感謝しろ」

「うぅ、ありがとうございます」

マコが返事をすると佐瀬はずぼっと自分の性器を抜いた。すると、じょろじょろとマコの膣から尿が流れ出してきた。佐瀬はマコの頭の方に回ると今度は、マコの顔面に向かって放尿した。

「何やってんだ、このバカ。顔に小便かけられたら口を開けて飲むのが普通だろう。殺されたいのか、このメス奴隷」

佐瀬に怒鳴り付けられマコは慌てて口を大きく開く。その開いた口に向かって佐瀬は放尿していた。

ごぼっ、ごぼっ

すぐにマコの口の中は佐瀬の小便で一杯になる。

「飲めって言ってるだろう。使えねえメスだな」

マコは、また慌てて口を閉じ、ゴクンと口に溜まった小便を飲み干すと、また口を開いた。そこへ、また佐瀬の小便が溜まっていく。マコはそれも飲み干した。

★　★　★　★

調教師は、運営から渡された変更後のメス奴隷の呼称と調教師の名前が書かれた用紙を見ていた。

・・メス奴隷クルミに調教師リツコか。ふん、素人なんかに敗ける道理がない。しかも、女の調教師だと。俺を馬鹿にしているのか・・

調教師は、その用紙をぐちゃぐちゃに丸めるとゴミ箱に投げ捨てていた。

87、発見　くるみＶＳリョウコ

87、発見

いよいよＢブロック一回戦最後の対戦が開始される。

「それでは、クルミ対リョウコを開始します。メス奴隷、入場」

理恵のアナウンスで調教師とメス奴隷が入場してくる。全身を衣服で覆い頭にもフードを被りマスクをした調教師に続き、まだ若いメス奴隷が鎖に引かれ震えながら歩いている。その若いメス奴隷の太ももの内側が濡れていた。どうやら恐怖で漏らしていると感じた観客たちは興奮していた。

「あれが急遽引き出されたメス奴隷か。焼き印も捺されていないし、まだ調教も進んでいないようですね。怖くて漏らしてしまうところなど初々しくて、すぐにでもマンコ処刑されて欲しいくらいですな」

「ふふっ、良いわね。どうせメス奴隷になりたての素人なんか、すぐに気絶するでしょう。早くあの若いメス奴隷がマンコ壊されて処刑されるところを観たいわね」

観客たちが興奮して見つめるなか、メス奴隷の鎖を引いて歩いていた調教師も、何でもない所で躓き転びそうになっていた。

「メス奴隷も素人なら、あの調教師も素人だな。緊張してるのか」

「これはもうやる前から勝負ついているわね。メス奴隷も調教師も素人なら勝ち目なんかないわね」

それに比べて後から入場してきたメス奴隷と調教師は実に堂々とした態度で歩いてくる。誰の目にも、もう勝負は見えていると感じていた。

★　★　★　★

「まったく、橘の奴、飲み過ぎだろう。足がもつれているではないですか。香坂の娘、奴はいったいカクテルを何杯飲んだのですか」

葉月が呆れたように麗華に尋ねていた。

「さあ……。〝サイドカー〟〝やら〟〝ロングアイランド〟、〝カンパリソーダ〟〝なんか楽しそうに飲んでいましたから、相当飲んでいるのではないですか」

「まったく、カクテルのベースはジンやウォッカで強い酒が多いという事を分かっているのですかね。大丈夫ですか、あれで……。あまり、みっともない姿を晒したら橘といえど許しませんよ」

「大丈夫ですよ、理津子さんですから。先程、鞭の使い方もレクチャーしましたから問題ないです」

麗華は何も心配はいらないと胸を張って葉月に答えていた。

★
★
★
★

ＶＩＰルームからトーナメントを観ていたＺクラスの生徒たちは入場してきたメス奴隷を見て騒いでいた。

「くるみちゃんだ。くるみちゃんだよ。くるみちゃん怖くて漏らしちゃってるよ。今度はくるみちゃんがマンコ壊されて処刑されちゃうの」

栄子の言葉で一旦落ち着いていた生徒たちがまた恐怖で騒ぎ始めていた。だが、つぐみは冷静に鎖に引かれて歩いているくるみを見つめていた。

・・違う、大内は怖くて漏らしているんじゃないよ。嬉しくて濡らしているんだよ。大内は私といつも話していた大内のままだ。大内は私と同じ、マンコを壊されて処刑されるのが何よりも好きな女子だよ。私が話す、ゆかり姉（ねえ）の話を目を輝かせて聞いていた。自分でも画鋲を埋め込んで針付きの下着を作って穿いてみたと言ってた。でも、あまり痛くなかったから今度はもっと長い針を埋め込んでマンコの奥まで突き刺したいって、そして、ゆかり姉（ねえ）みたいにそのまま三角木馬に跨がりたいって言ってたもんね。大内はこれで夢を叶えたんだよ。羨ましい……。私もマンコを、クリも膣も子宮も徹底的に壊されたいよ。さっきの女の子みたいに、マンコの穴に炭落とされて燃やされたい。ゆかり姉（ねえ）みたいに、おしっこの穴から膀胱を串刺しにされたい・・

つぐみはもう我慢の限界だった。自分の親も、いつまでもごねていないで早くサインして下さいと心から願っていた。

★
★
★
★

・・メス奴隷も素人なら調教師も素人かよ。馬鹿にするにも程がある。早いとこ、そのメス奴隷を気絶させて処刑してやる。俺のメス奴隷リョウコはほぼ無傷で二回戦に進める訳だ。そうすれば二回戦は、あのかなりダメージを受けているメス奴隷アカリと対戦だ。これは俺に運が向いてきたのかも知れないな・・

調教師は気持ちを切り替えて微笑んでいた。その時、理津子は用意された拷問具の中におかしな機材があるのに気がついていた。

「あの、すいません。ここに用意されているものは全て使用して構わないのですよね」

「はい、こちらで用意した物であれば問題ありません」

理恵から回答を貰った理津子は改めて運営側が用意した拷問具を確認していた。数種類の鞭、三角木馬に錘、浣腸に使うシリンジや注入する溶液などと共に、その機材が置いてある。理津子は浣腸用に置かれている瓶容器を一つ一つ見ていった。そして、確信する。

・・豪徳寺の奴、えげつない事を考える。今まで誰もこれに気付かなかったのか。あまりに何気なく置いてあるからなのか。あのクラヤミという調教師もルイという調教師も気付いていない。もし気付いていれば、クラヤミなら喜んで使用しただろうな。とはいえ私もこの高圧ミキサーに気付かなければ見逃していただろうな・・

理津子は相手の調教師の様子を見るが、気付いている気配はなかった。理津子は急いでメス奴隷リョウコを開脚逆さ吊りにする。くるみは三角木馬に跨がされていた。そして、理恵の右手が上がる。

「それでは、クルミ対リョウコ、始めっ」

くるみを責める調教師は素早くくるみの両足に錘をさげていく。

「うひいぃぃぃーーーっ！」

くるみの割れ目に三角木馬が深く食い込んでいき、くるみは悲鳴を上げていた。生まれて初めての調教。くるみは自分の性器を襲う裂けるような激しい激痛に泣き叫んでいたが、心の中ではまるで別の事を考えていた。

・・あはっ私、本当に調教されてる。これが本物の三角木馬の痛み。もっと、もっと錘付けて私のマンコ痛めつけて下さい・・

くるみの両足に次々に錘が下げられていき、あっという間にマックスの重さ１００キロに到達する。

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！じぬうぅぅぅーーーっ」

絶叫するくるみの足は動かす事も出来ず一直線にピーンと伸びきり、びちっびちっと筋が切れるような音がしている。天を仰いで苦しむくるみの顔面は大量の涙と鼻水で無様に汚れていた。その頃、理津子は高圧ミキサーを作動させていた。

・・これはおそらく水浣腸の水でしょう。そして、こちらは空気浣腸用の気体と考えてしまうので見向きもされなかったのでしょうね。

浣腸で失神させるにはブランデー浣腸や、口から吐き出す程の大量浣腸が必要になります。単独で注入するならですけど……」

理津子は高圧ミキサーで液体に気体を混合させていた。

８８、混合

８８、混合

理津子は高圧ミキサーで浣腸用に用意された二つの瓶の中身を混合させる。それは水と塩化水素。水に塩化水素を高圧で溶けこませる事で、それは完成する。理津子は完成した物に、更に水を加えて濃度を調整する。

・・１００％で注入しては、このメス奴隷を殺してしまいますからね・・

理津子は適度に薄めた溶液をシリンジ一杯に吸い取り、開脚逆さ吊りにされているリョウコの肛門にシリンジの先端を突き刺した。そして、くるみの様子を確認する。

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！」

くるみは三角木馬に跨がらせられたまま、激しく鞭で打たれ絶叫していた。

「マンコ、ざけるうぅぅーーっ！」

くるみは鞭打たれる事で思わず身をよじってしまい、その度に三角木馬の頂点がくるみの割れ目にさらに深く食い込んでいく。その、くるみの苦しむ姿から理津子は、もうあまり時間がないと判断し、

リョウコの肛門からシリンジ内に満たした溶液を全て注入する。

ヂュウゥゥゥーーッ

「あっ、びゃあぁぁぁぁーーーーーっ！！」

リョウコが断末魔のように絶叫し、シリンジを抜かれた肛門から白い煙が上がり、異臭が周囲に漂った。

「あびゃびゃびゃびゃあぁぁーっ、あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！」

リョウコの絶叫は止まらない。その凄まじい絶叫に観客たちも驚きを隠せなかった。

「いったい何を浣腸したんだろう。浣腸されて、あんなに絶叫するメス奴隷を見たことないぞ」

「あの調教師、何かを混ぜていたみたいだけど、何なのかしら。あのメス奴隷、そんなに凄いものを注入されたの？」

観客たちが首を傾げる中、理津子は二本目のシリンジをリョウコの肛門に突き刺し浣腸する。すると、さらにリョウコは激しく絶叫し吊られたまま、のたうち回る。

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ、ほんどにじぬうぅぅぅーーーっ！！」

リョウコは口から泡を吹き始めていた。そして、理津子は三本目のシリンジをリョウコに浣腸する。リョウコはもう限界のようだった。何年も調教され、もう完成していると思われるメス奴隷のリョウコ

は、理津子に浣腸されただけで白目を剥き泡を吹いて失神してしまっていた。

「ビクトリー、クルミ」

理恵の右手が上がる。くるみを責めていた調教師は唖然とした顔で、自分のメス奴隷リョウコを見つめていた。

・・どういう事だ。リョウコが浣腸されただけで失神するだと。信じられん。リョウコのあんな絶叫は聞いた事がない。何が起こったのだ・・

素人コンビなど楽勝と考えていた調教師は、思いもしない自分の敗北に、ガックリと膝を落としていた。

★　★　★　★

食堂でも何が起こったのか理解できず、葉月と麗華を除き皆困惑した顔をしている。

「香坂の娘、お前は驚いていないようですが、分かったのですか」

「いえ、分かりませんが、理津子さんが勝つのは当たり前ですよ。あんな調教師ふぜいに敗ける訳がありません」

「ふん、盲信ですか。だけど、あれに気付くとはさすが橘ですね」

したり顔をしている葉月にルイが話しかける。

「あの橘は、何かを高圧で混合していましたね。それを浣腸されたメス奴隷が失神する程の威力となると相当です。片方は気体のように見えました、私ははなから浣腸は選択肢になかったので、どがんな容器が並んでいた見てないのですよね」

「俺も浣腸は目に入ってないな。メス奴隷を破壊するのに、良いものがあったからな」

三角木馬用の錘を振り回しメス奴隷を殺害しようとしたクラヤミが、ルイに同意する。

「あれは〝塩化水素〟ですよ」

葉月が種明かしをするように、皆の顔を見回し正体を明かしていた。

「え、塩化水素？それじゃ、まさかあれは……」

「塩酸」

クラヤミの言葉を引き継ぐようにルイが呟いていた。

「塩酸なんて、そんな良いものが作れるなら、そっちを使った方が良かったな。という事はあのメス奴隷、腹の中はもうどろどろか。まあ、どうせすぐ処刑されるから関係ないか」

クラヤミが残念そうに言うが、斎藤は運営側の悪意に恐れをなしていた。

・・僕の時は蝋燭に殺傷能力の高い特別な蝋燭が紛れ混まされてい

た。今度は、組み合わせる事でメス奴隷を殺せる程の物が用意されている。どちらも早い段階で気づいた者がいれば、みんなそれを使い始めるだろう。そうなれば、もうメス奴隷の経験も何も関係なくなる。分かってはいたが、これはメス奴隷を壊して楽しむイベントなんだ・・

斎藤は改めてこのトーナメントの恐ろしさを思い知っていた。

★　★　★　★

ＶＩＰルームでは、違う意味で大騒ぎになっていた。

「くるみちゃん、勝ったよ。私たちのクラスメイトが、あのメス奴隷に勝ったよ」

「凄いよ。私たちでも、調教され続けてきたメス奴隷に勝てるんだよ」

先刻までの暗い雰囲気が払拭され、ＶＩＰルームには歓声が飛び交っていた。だがまだこの生徒たちはよく分かってはいない。このトーナメントに出場したという事は優勝者以外、全員処刑されるのだ。一度勝利したくらいでは、本来喜べる筈ではなかった。しかし、つぐみは違う考えだった。

・・大内、勝っちゃったのか。多分、大内も残念がっているだろうね。ゆかり姉（ねえ）みたいにマンコ壊されて処刑されたいって言ってたからね。でも、もしかしてこのまま勝ち続けて、決勝でしずくと戦ったりして……。まあでも、大内はしずくには敵わないかぁ。しずく

は、ゆかり姉と同じ、生まれながらの頭がおかしい変態だからね。だから、心配しないで、大内。大内の夢は叶うよ・・

つぐみは、三角木馬から降ろされて少し不満そうな顔をしているくるみに向かって微笑んでいた。

・・御門は大内と仲が良かったから、大内が勝って嬉しいのかな・・

吉川栄子は微笑むつぐみを見て、勘違いしていた。

・・あのメス奴隷、大内みたいな素人に負けて無様だね。私なら浣腸くらいで失神しないし、大内なんかに負けたりしない。私が大内の代わりに、あそこに立っていたかったよ・・

栄子は、自分もトーナメントに参加したかったと、くるみを羨んでいた。

★
★
★
★

女が一撃で倒されていた。その、倒れた女から衣服を剥ぎ取り、自分に着用したメス奴隷フウカに成り済ましていた女はなに食わぬ顔で倒れた女をスーツケースに詰め歩き出した。

・・これでしばらくは発見されないでしょうね。さて、どうすれば豪徳寺を倒せるか、ゆっくり考えるとしましょう・・

フウカはスーツケースを転がしながら屋敷の地下を探し回っていた。この地下のどこかに以前葉月が処刑に使用した塩酸プールがある筈

だった。そこで、まずこのスーツケースに入れた女の体を消滅させるつもりだったのである。

・・外の焼却炉は、トーナメント中のこの時間では人目につきやすいですからね。塩酸プールで溶解させてしまうのが簡単です・・

フウカが地下の際奥の部屋のドアを開けると、その奥にお目当ての塩酸プールが静かに佇んでいた。フウカはニヤリと笑うとプールに向かって足を進めていった。

88、混合（後書き）

実際には、こんなに簡単に生成出来ませんが、そこは大目にみて下さい。
よろしくお願い致します。

89、溶解

８９、溶解

会場ではこれから敗者であるメス奴隷リョウコの処刑が執行されようとしていた。開脚逆さ吊りのままのリョウコは注射器で気付け薬を注射され意識を取り戻していた。そして、胸に心電図のセンサーを装着され、呻き声を上げるリョウコにいよいよ処刑が執行される。

「あなたのマンコ、きれいな状態なので、クリトリスとビラビラは切除して保存してあげるわね。あなたが処刑されても、これだけは後世に残るから嬉しいでしょう。他にも残して欲しい所ある？希望があれば言ってみて下さいね。あっ、でも膀胱や子宮は駄目ですよ、これから壊してしまいますからね」

理津子がリョウコの耳元に口を近付け聞き取れるようにゆっくりと話す。

「うぅっ、私の乳首も残して下さい。乳輪からきれいに切り取って下さい。お願いします」

リョウコは泣きながら理津子にお願いすると、理津子は葉月から借りてきたタングステン鋼のメスを持ち、リョウコの乳首を摘まむ。

スパッ

「ひぎいいいいっ！」

見事な手捌きで理津子はリョウコの乳首を乳輪ごと切除した。そして、もう片方の乳首も切除し、今度はリョウコの小陰唇をびろーんと伸ばす。

ツウゥゥゥーーーーッ

「あぶうぅぅぅぅーーーっ！」

理津子はリョウコの小陰唇も簡単に根元から切除してしまった。

「どうですか、私もビラビラやクリトリスを切り取られた経験があるのですけど、気持ちいいですよね。自分のメスの部分を壊されてしまって、その絶望感はたまらないですね。自分のメスが破壊されていく。ああ、いけない。今はあなたの処刑中でしたね。それでは残りの部位も切除しましょうか」

理津子は自分の性器が破壊された事を思いだし興奮してしまっていた。その為か、リョウコのもう片方の小陰唇は一度短冊切りに切断し、その後根元から切除した。そして、クリトリスは深く抉るようにグリッと切除する。

「ほら、あなたのマンコの大切な所が失くなりましたよ。どんな気分ですか。嬉しいでしょう。このなんともいえない興奮分かりますよ。不満ですか？あぁ、そうか膀胱や子宮だけでなく膣穴も壊して欲しい訳ですね。そうですね、それは不満でしょうね。ごめんなさい、ちゃんとマンコの穴も壊してあげますよ。私もマンコの穴、壊して貰いましたから」

理津子は自分がされた事を鮮明に記憶している。当然、あれだけの事をされたのだ。忘れようと思っても忘れられない経験だろう。理津子はリョウコの膣に膣鏡を挿入し最大まで開口させる。そして、強力な冷却スプレーをリョウコの膣内に噴出していた。

シューッ

理津子はスプレーが無くなると、さらに次のスプレーを噴射した。リョウコの膣壁は白く凍りついていった。理津子は膣鏡を抜き出すが、リョウコの凍りついた膣は拡がったままの穴になっていた。その凍りついた穴を理津子はさらに冷却スプレーで凍らせる。哀れにカチカチに凍りついたリョウコの膣穴を見て理津子は嬉しそうに微笑んでいた。

「どうです、マンコの穴、カチカチに凍ってしまいましたよ。これから、ノミでこのマンコの穴を削っていってあげますね」

ノミと金槌を持った理津子は、凍りついたリョウコの膣にノミを当て、カンカンと削り始めた。

カンカン、カンカン、カンカン、カンカン

リズミカルな金槌の音が響き、リョウコの凍りついた膣が彫刻のように削られていく。リョウコは痛みは感じていないが、その自分の膣が削られる様子をモニターで見せられ過呼吸になっていた。

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ、ハァ、ハァ」

理津子は削り取った膣壁を膣内から掻き出し、一回り以上大きくなった穴を満足気に見つめていた。

「これで、あなたの膣は消滅しましたね。それでは最後にしましょうか。それに、そろそろ凍っていたマンコの穴も溶けて痛覚が戻ってくるでしょうから、地獄の苦しみが襲ってきますよ。楽しみですよね。メスである以上、マンコを壊される痛みは是非体験して起きたいですからね」

理津子はシリンジの先にカテーテルを装着すると、そのカテーテルをリョウコの尿道にズブズブと押し込んでいく。3センチ程押し込むとカテーテルが何かに当たったように止まった。膀胱の括約筋に当たったと理解した理津子は、グイッと一気に押し込んでしまった。本来なら括約筋をほぐしてから突き入れるのが手順だが、どうせもう処刑されるリョウコに手順など関係ない。そして、膀胱内壁を傷つけない為にカテーテルは最小限突き入れるのが常識だが、理津子は構わずカテーテルを押し込んでいた。

「暴れても抜けないように長く押し込みましたからね。存分に苦しんで下さい。それでは、注入しますよ」

ヂュウゥゥゥゥーーッ

「あびゃあぁぁぁぁーーーっ、あびゃびゃびゃびゃあぁぁーっ！」

「もう一本いきますか。膀胱をパンパンにされた方が嬉しいでしょう。それに今度は薄めていませんから、強烈でしょうね」

理津子は二本目のシリンジをカテーテルに取り付け、リョウコの膀胱に塩酸を注入した。

「だじげでえぇぇーーっ、お腹の中燃えてるうぅぅっ」

リョウコはのたうち回るが、その腰を押さえつけられ今度は子宮口から子宮内にカテーテルが挿入される。

「今度は子宮ですよ。早くしないとあなたは死んでしまいますからね。急いで注入して子宮を焼かれる痛みも経験させてあげますよ」

理津子はシリンジのピストンを押し込み、リョウコの子宮内に塩酸を注入する。それも一本ではない。次々にシリンジを取り換え、リョウコの子宮内に塩酸を満たしていった。

「あぶうぅぅぅーーーっ、あぶぶぶぶぶぶうぅぅぅぅっ！！」

リョウコの体が大きく痙攣を始めたところで理津子は、開脚逆さ吊りにされていたリョウコの体を降ろし、今度は足を開いて立たせたまま固定していた。リョウコの開いた足の中心から、ボトボトと赤黒い溶けた肉の塊が落ちてくる。リョウコの子宮は溶かされてしまい、もう消滅してしまったようだった。

「さあ、これで最後の仕上げです」

理津子は、リョウコの顔を上に向けると口に漏斗を差し込み固定した。そして、その漏斗に塩酸を注ぎ込む。リョウコは死に物狂いで頭を振って逃れようとするが、リョウコの頭は屈強なスタッフに押さえられ動かす事が出来なかった。理津子は塩酸一瓶を全てリョウコの口に注ぎ込んでしまった。涙を流すリョウコの瞳から光がどんどん失われていく。リョウコの体は細かくビクビク震え、心電図のモニターも弱々しい波形に変化していった。

・・もうすぐ終わりですね・・

理津子がそう思った時、心電図のモニターがフラットになった。リョウコは苦しみ抜いて絶命していた。理津子は念のため更に塩酸を流し込み、リョウコの体内を溶かしていく。そして、頃合いを見計らってリョウコの下にたらいを置き、首の下にメスを突き刺すと正中線を真っ二つに切り裂いた。その途端、下のたらいにどろどろに溶けかかった内臓が落ちていく。理津子はホースで水を噴射し、ほぼ空洞になってしまったリョウコの体の中を洗い流していた。観客たちは、そのリョウコの体を見て涎を垂らしていた。

・・あれに香辛料摺り込んで表面には飴を塗り込んで、こんがりと焼けば美味しく頂けそうだわ・・

・・あれも販売してくれるのかしら、楽しみだわ・・

こんなトーナメントを観に来る観客である。リョウコを見つめる観客たちも、また異常であるのは間違いなかった。

９０、帰宅

９０、帰宅

リョウコの処刑が執行されている時、屋敷地下の塩酸プールの前で一人の女がシートの上に転がされ背中から皮を剥がされていた。フウカは慎重に女の全身の皮を剥がし、剥がした皮の内側をきれいに洗う。そして、取り出した女の中身は塩酸プールに投げ込んだ。女の体はプールの中で白い泡を吹き出し溶解されていく。

・・ふふふ、これで準備万端だ・・

フウカは剥いだ女の皮を、まるで着ぐるみを着るように着用していた。そして、まるで別人になったフウカは、悠々と部屋から出ていった。

★　★　★　★

リョウコの処刑も滞りなく終わり、トーナメント二日目も無事に終了した。しかし、なにやら怪しげな輩も紛れ込んでいるのも発覚している。お客様に迷惑がかからないように、それを排除しなければと葉月は考えていた。実際、今日もメス奴隷の失踪という事態を招き、トーナメントに穴が空く寸前であった。

・・お客様に迷惑をかける訳にはいきませんからね。これから、近藤と岡田、それに奴らを使って危険な因子は排除させますか・・

葉月はモニターを見ながら考えていた。会場では理恵が本日のトーナメント終了の挨拶をしている。観客たちもぞろぞろと帰り支度を始めていた。

「なんだかお腹が空きましたね、帰りに中華街でも寄りますか」

一人の観客の声が聞こえるが、リョウコの処刑を観ていた他の観客の頭の中にもパリパリにこんがりと焼かれた料理の姿が、等しく浮かんでいた。

★
★
★
★

ＶＩＰルームでも本日トーナメント中に商談のまとまらなかった生徒たちは拘束を解かれ帰宅出来るようになり、生徒たちは涙を流し喜んでいたが、つぐみは一人メイドにお願いしていた。

「あ、あの……。今日穿かせてもらった下着、私に売ってもらえないでしょうか。あ、あのオナニーする時に使いたいんです。あれ穿いてマンコ痛めつけたい」

「それなら、差し上げますよ。元々、６９番が発案して作成した物を、さらにマンコを痛めつけるよう改良した下着ですからね。調教師がメス奴隷に穿かせる為に購入するのがほとんどですが、あなたは自分で穿くのですか」

メイドはつぐみに新品の針付き下着を渡しながら微笑んでいた。

・・やはり、このメスは確保しておきたいですね。これを自分で穿けるメスは数少ないですからね。それに、これを穿いてオナニーするなど、相当に頭がおかしいのは間違いありません。間違いなく掘り出し物です・・

つぐみも嬉しそうに下着を受け取ったが、その重さに驚いていた。

「あの、随分重く感じますが、これはあの針が付いた下着ですよね？」

「そうですよ。ただし、それは最新モデルの試作品です。バッテリーを搭載してあって、マンコに刺した針から通電出来るようになっています。通電の強さは微弱から最強までリモコンのダイヤルで変更出来ますので試してみて下さい。試作品ですので、あなたがモニターになるという名目で差し上げられるのです。ですので使用した後に感想を教えて下さいね」

「は、はい。分かりました」

つぐみは興奮していた。さすがにこんな物はつぐみには制作出来ない。思いもしなかった良品を手に入れて、つぐみは一刻も早くこの下着を穿いて自分の性器を痛めつけたかった。そんな、つぐみとメイドのやり取りを信じられないという顔で見つめていた生徒たちは逃げるようにＶＩＰルームから退出していた。ただ、吉川栄子だけは、つぐみとメイドのやり取りが始まる前に、真っ先にＶＩＰルームを飛び出していた。栄子は両親に、商談をまとめてくれなかった文句を言うつもりだった。

・・どれだけ強欲なのよ・・

もし今日中に商談がまとまっていれば、くるみの代わりにトーナメントに出場出来ていたのは自分かも知れない。そう思うと怒りさえ湧いてくる。

・・あんなに大勢の前でマンコ壊される最高の舞台だったのに。観客のみんなだって大内より私のマンコ壊される姿の方が見たいに決まっている・・

栄子は、プンプンと怒りながら家路を急いでいた。

★
★
★
★

つぐみは、ゆかりの家の前に立っていた。ここに来るのは何年ぶりだろう。つぐみは実際のゆかりの記憶はないが、しずくの事は憶えている。だけど、今ではゆかりについては実の妹のしずくよりも知っていると思っていた。

・・ゆかり姉（ねえ）についてはありとあらゆる資料や動画を集めた。ゆかり姉（ねえ）がどんなオナニーをしていたか。それは「ゆかりの記録」というブログに詳細に掲載されている。今日は家政婦の理恵さんも、しずくも、どちらもメス奴隷になって、この家には帰ってこない。ゆかり姉（ねえ）の離れの鍵が開いていると良いけど・・

つぐみは、そろそろとゆかりの家の庭に入ると離れの前に行きドアノブに手をかける。そして、ノブを捻る。

カチャ

小さな音がしてドアが開いた。つぐみは部屋に入ると明かりを点けた。

・・ゆかり姉(ねえ)、そして、しずくの部屋・・

つぐみは部屋の中を見回した。母屋の方には何度か来た事があるが、この離れに入ったのは始めてである。

・・ここで、ゆかり姉(ねえ)は変態自虐オナニーをしていたんだ。私も今夜はここで一晩中オナニーするよ・・

つぐみは両親には、今夜は友人宅に泊まるとメールを送り、ドアに内側から鍵をかけた。これでもう誰からも邪魔される事はない。つぐみは安心してセーラー服を脱いでいき全裸になった。つぐみは別に自分の裸を見られる事も、自慰している姿を見られる事にも抵抗がない。いや、むしろ誰かに見られて思い切り軽蔑されたいと思っていた。ただ、自分が満足する前に自慰の途中で止められたりするのが嫌だったのである。

・・たぶん私のオナニー見て興奮して犯してくるでしょうね。それが嫌なの。別に犯されるのは良いけど、私はマンコ壊したいから、それを邪魔されるのが一番嫌。マンコ壊すって女子しか経験出来ないから、きっと羨ましいんだよね。マンコって壊される為に存在しているんだもの。犯されるより、壊される方が、ずっと興奮して気持ちいいもの・・

つぐみは、メイドから貰った下着を袋から取り出す。ベースとなっている下着は、白い無地の綿の女児用下着だ。股間のクロッチ部を

見ると、びっしりと長い針が突き出ている。そして、臀部にあたる部分の上部には薄型の小型バッテリーが搭載され、そこからコードが伸びリモコンに繋がっていた。

・・さあ、これを穿くのです、つぐみ・・

つぐみは、ゆかりのように自分に命令する。そして、下着を穿いていく。ゆっくり下着を上げていくと性器に針が当たり、チクッとした微かな刺激が感じられた。

・・私のマンコのここに針が刺さるんだ・・

つぐみは、足を大きく開いて息を整える。両手でここから下着を引き上げれば、つぐみの性器に大量の針が突き刺さる。

「ふうっ、ふうっ、ふうっ、ふうっ、ふうっ」

つぐみは、自分で自分の性器を壊す興奮で眩暈がする程、息が荒くなってしまっていた。

91、玩具

91、玩具

つぐみは針付きの下着を穿くため、興奮で息を荒げていた。

・・ゆかり姉(ねえ)、私もマンコ壊すよ。女の子は誰でも処女膜を壊されて1回は経験するけど、それだけじゃ勿体ないよね。もっと徹底的にマンコ壊さなきゃ。女の子のマンコって、壊してくれって言ってるようなもんだもんね・・

つぐみは、そこでふと気がついた。

・・そうだ、動画を撮影しておかなくちゃ。ゆかり姉(ねえ)も自分の自虐する様子を撮影してた。私も自分の記録になるし、後で見せる事も出来るから撮っておかないと・・

つぐみは一旦針付き下着を脱ぐと、スマートフォンをスタンドにセットする。そして、位置を調整すると、また下着を穿き太ももまで上げた。

・・それじゃ、いくよ。覚悟しなさい、つぐみ・・

つぐみは、リモコンで撮影を開始し、目を瞑り両腕に力を込める。
そして、一気に下着を引き上げた。

「おぶうぅぅぅーーーーっ！！」

つぐみの性器に長い針がズブズブと突き刺さり、つぐみの瞳から涙が溢れ絶叫する。つぐみは、そのまま股間に手を当てると、さらにクロッチ部を股間に押し付ける。

「あうぅぅぅーーーっ！」

つぐみの瞳から涙がポロポロこぼれ落ちるが、つぐみ自身はこれだけでは満足出来なかった。つぐみは撮影を一度止めると、泣きながらゆかりの部屋の押し入れの中を探し始めた。この中に、ゆかりが作った自動鞭打ち機がある筈だった。ごそごそと押し入れの中を漁っていると、それはあった。

・・これで、このパンツ穿いたままマンコを鞭で打つんだ。それを撮影するの・・

つぐみは、一応動作を確認してみる。

・・しずくが使っていた筈だから、問題なく動くと思うけど……・・

つぐみが電源を入れるとモーターは高速で回転し、それに取り付けてある鞭も高速で回転する。それを見ているうちにつぐみは、針を刺している股間を濡らしてしまっていた。

・・早く鞭で打たれたい・・

つぐみははやる心を抑えながら、自分の性器に鞭がうまく当たるように高さを調整し、これも、ゆかりやしずくが使用していたであろうパイプ付きの足枷を装着し足を閉じられないようにする。そして、

部屋の柱に自分の体をベルトで拘束し、リモコンを握った両手も後ろ手に縛ってしまう。これで、つぐみは逃げる事は出来なくなった。

・・それではマンコ処刑を開始します。苦しみなさい、つぐみ・・

撮影を開始したつぐみは、自動鞭打ち機のスイッチも入れる。すぐに鋭い鞭の一撃がつぐみの股間を直撃した。

ビシィッッッ！

「あぶうぅぅぅーーーっ！」

股間を鞭打たれた衝撃で、性器に刺されている針が震えつぐみの性器の肉を激しく抉っていた。

「あぶうぅぅぅーーーっ、あぶぶぶぶうぅぅぅーーーっ！」

鞭は休みなくつぐみの股間に正確に叩き込まれる。つぐみは涙と鼻水で顔面をぐしゃぐしゃにしながら、下着の通電スイッチも作動させる。

「あぶぶぶぶぶぶぶうぅぅぅぅーーーっ！」

自分の性器を徹底的に痛めつけたいと思っていたつぐみは、当然ながら通電のスイッチを最強の位置にしていた。電流と鞭、ダブルの衝撃でつぐみは無様に口から泡を吹き始めていた。

「あぶうぅぅぅーーーっ、だじげでえぇぇぇっ」

プッシャァァーーーッ

ゆかりと同じ様につぐみも激しく尿を漏らしてしまっていた。しかし、つぐみがどんなに泣き叫べこうとタイマーの時間が切れるまでは性器を鞭で激しく打たれ続ける。さらにつぐみは、通電でぶるぶる細かく体を震わせながら全身汗まみれになり、白目を剥いて失神してしまった。それでも、つぐみは鞭で打たれ続け、通電され口から涎を垂らし肛門も弛み大便までぶりぶりと漏らしてしまっていた。

★　★　★　★

佐瀬はマコに凌辱の限りを尽くし、もうマコにはメス奴隷はおろか動物つまり、自分で動く事も考える事も出来ない只の生きている性具に墜とすつもりであった。マコはメス奴隷以下の性具にされる。佐瀬は、今夜中にマコの処理を終わらせるつもりで、マコをスーツケースに詰め込むと豪徳寺邸を後にした。

・・くくく、今日が最後の日になるぞ。明日になればお前は只の物だ。もう何にも悩む事も恐れる事もなくなるんだ。ある意味、幸せだろう・・

佐瀬はとある組織にマコを持ち込む。その組織でロボトミー手術を施してもらい、マコの脳の機能の一部を破壊するつもりだった。

・・グルーム・アグリカルチャー……。ここか・・

佐瀬は、名前を告げ黒い建物の中に入っていった。

「豪徳寺様より紹介がありました、佐瀬様ですか。どうぞ、こちら

へ」

佐瀬は、真っ赤なスーツを着た長身の女の後についてスーツケースを引きながら歩いていた。

「私は百目鬼と申します。どうぞ、よろしくお願い致します。ロボトミー手術ですね。ブツはそのスーツケースの中ですか」

「ええ、そうです。今日、手に入れたメス奴隷でね。生体玩具にしようと思うのですよ」

百目鬼と歩きながら話し、佐瀬は百目鬼の後ろ姿を観察していた。

・・なんだ、この女は……。豪徳寺と同じ様な威圧感を感じる。それに、俺に背中を見せていながら一片の隙も感じない。もし、俺が少しでも不審な動きをしたら即、対応できる雰囲気がある。何者なのだ・・

佐瀬も油断なく周囲にも注意を払っていた。佐瀬は、マコを生体玩具にするため、葉月に頭を下げロボトミー手術を施せる場所を紹介してもらっていた。それがこのグルーム・アグリカルチャーであった。

「ここが処置室です。施術するメス奴隷をこの台の上に固定して下さい」

百目鬼は青い部屋の中の施術台を指差して、自分は手術の準備を始めていた。スーツケースから出されたマコは、その異様な雰囲気に怯え泣き叫んでいる。

「いいですか、しっかり固定して下さいね。少しでも動くと脳の他の部分も壊してしまいますから」

百目鬼の言葉でマコは狂ったように泣き喚き暴れるが、両腕を切断されているマコは抵抗も虚しく台の上に載せられベルトで堅く固定されていった。

「いやだぁっ！お願いしますっ、助けて下さいぃぃっ！」

マコは自分の運命を悟り必死に懇願するが、ここまできてその願いが叶う事はない。

「麻酔はかけませんよ、その方が面白いですからね。この泣き喚いているメス奴隷が、糸が切れたように無表情になって静かになるのですよ。その変化が何度やっても楽しくて病み付きになります」

百目鬼は、完全に固定して動けないマコの頭蓋をぐるっと切断し、蓋を取るように頭頂部を外す。マコの脳が露に晒される。もう、マコは恐怖で発狂したように絶叫していた。

「この電極を脳に突き入れて前頭葉の神経を切断します。扁桃体や海馬も破壊します。面白いですよ。よく見てて下さい」

百目鬼は楽しそうにマコの脳に電極を刺し次々にマコの脳を破壊していく。その度にマコの態度や表情が変化していった。佐瀬が気が付くと、あれだけ泣き喚いていたマコが無表情になり、静かになっていた。こうして、マコは人から物にされた。その後、マコは両足も膝から切断され、キャスター付きの台座に四つん這いの状態で固定され、口中の歯も全て抜歯される。この台座は高さを調整でき使用する人間の腰の高さに合わせられるように設計されている。つま

り、立ったり座ったりしながら使用出来るのだ。

「なかなか見事な生体玩具になったな。このメスも俺に関わらなければ、まだ人でいられたのにな。哀れなメスだ。くくく」

佐瀬は百目鬼にこれをオークションで売ってくれと依頼し、満足気に微笑んでいた。

92、興奮

92、興奮

佐瀬は興奮していた。つい先程まで泣き喚き必死に懇願していたメス奴隷が、今では大人しく四つん這いに固定されている。佐瀬は、マコの膣に指を挿れ具合を確かめてみる。しばらく刺激していると、粘液が溢れだし濡れてきていた。

「心配せずとも喜怒哀楽の部分以外は元のままですよ。ですから、毎日栄養を与える事はもちろん、排泄の処理もしなければなりません。尿の方は尿道にカテーテルを挿れて容器に入るようにすれば良いでしょう。大便は、普段はプラグを挿れて塞いでおき、時間を決めて排泄なり、浣腸するなりすれば良いでしょう。簡単なこの道具の取説も付けておきますから大丈夫ですよ」

百目鬼（どうめき）は笑顔で佐瀬に説明する。

「なるべく高額になるようお願いしますよ」

「勿論ですよ。私どもも高値で売れるほど実入りが多くなりますからね」

佐瀬と百目鬼（どうめき）は笑いあっていた。

「また、ご依頼がありましたら、よろしくお願い致します」

百目鬼（どうめき）に見送られ佐瀬はグルーム・アグリカルチャーを後にし、トーナメントの会場に向かった。

・・豪徳寺の話では、得体の知れない輩が紛れこんでるらしいな。そいつらも捕まえて性具にしてやるか。メス奴隷を調教するより金になるぞ・・

佐瀬は残酷な笑みを浮かべトーナメント会場に戻っていった。

★　★　★　★

しずくはメス奴隷用の個室の壁に付けられているディルドゥを自分の膣に挿入し自慰していた。いよいよ二回戦が始まるため、いきなり自分の性器が壊されてしまうかも知れない。一回戦の様子を観ていると、もう性器を壊されてしまったメス奴隷も多くいる。自慰出来るのも、これが最後なるかも知れないので、念入りにこのメスの快感を味わっておくつもりだった。

「おっ、おっ、おっ、おっ、おっ」

しずくは壁から突き出ているディルドゥを根本まで突き刺し腰を激しく振っているが、どこか物足りなかった。

・・私もお姉ちゃんと一緒でマンコ痛めつけないと、もう気持ちよくなれない。早く対戦したいよ。私、勝ち進んで琴音ちゃんと対戦したいけど、でも途中で敗けて処刑されちゃうのも良いかも。お姉ちゃんみたいに大勢の人の観ている前で、マンコ徹底的に壊されて

惨めに絶命するの。たぶんそれが一番気持ちいい。でも、だから下手な調教師には処刑されたくない。私のマンコ、全部壊してくれる葉月さんのような人がいいな。そうすると、やっぱり決勝まではいかないといけないんだ・・

しずくは自分の為にも決勝まで勝ち抜く決意を新たにしていた。

★　★　★　★

「どうでした、理津子さん。メス奴隷を処刑した気分は」

「あれは不味いですね。豪徳寺が夢中になる気持ちも分かります。病み付きになってしまいますよ。一度処刑しただけで、またメス奴隷を処刑したくなります。これは、かなり不味いですよ。恐ろしい魅力を持っています。よほど、強い意思を持ってかからないと呑み込まれてしまいます。ミイラ取りがミイラになるパターンですね」

「なるほど、理津子さんでさえ引き込まれそうになる訳ですね。やはり、早めに豪徳寺を潰しておかないと不味いですね。西園寺くんの方は上手くいっているのでしょうか」

「彼の運営する学校から課外授業という名目で、人を送り込んでいるようですよ。卒業したらメス奴隷にされてしまうクラスがあるのですが、その生徒に情報を掴めば解放するという条件を与えているそうです。とはいえ、まだ中学生ですからね。あまり当てには出来ませんね」

「ああ、Ｚクラスですね。私たちがあの学校に在籍していた頃とは

随分変わりましたね。確かにあのクラスに入る子は異常者ばかりでしたが、今はメス奴隷育成クラスになっているのですね」

「懐かしいですね。渡邉ゆかりや蜂須賀彩音、あそこまで頭のおかしい女子はなかなか出てこないでしょうね」

「ふふっ、私は今でも渡邉ゆかりを串刺しにした時の興奮が忘れられませんよ。なので、妹のしずくちゃんを串刺しにした時も、渡邉ゆかりとオーバーラップして興奮してしまいました」

「その、しずくちゃんもいよいよ初戦ですね。もう少し豪徳寺の懐に入るため、是非初戦は突破して下さいね、麗華さん」

「はい、大丈夫ですよ理津子さん。私の相手のメス奴隷アゲハは一回戦でマンコを鞭打たれて相当なダメージを受けています。そこを、更に責めて勝負を決めます。問題は、豪徳寺がトーナメント前に発表すると言っている、二回戦で使用できる拷問具です。もし、理津子さんが気づいたように一撃でメス奴隷を失神させられる物があった場合、相手に先に気付かれたら敗けですからね。いくら、しずくちゃんでも塩酸浣腸なんて耐えられませんよ。心配は、その点だけです」

「いや、おそらく豪徳寺は二回戦では、それはしないでしょう。二回戦では豪徳寺自身も出場する訳ですからね。自分は知っているのに狡いではないかと批判が出るのを防ぐ為に、そういう仕込みはしない筈です。あの異常者はそういう所は公正にやるのですよ。でも、それはそれだけ自分の力に自信があるという表れですから、かえって恐ろしいですけどね」

理津子と麗華は、まずしずくの初戦突破を目指す為に作戦を練って

いた。

★　★　★　★

翌朝、Ｚクラスの教室では生徒数が半減していた。担任の西園寺響子には生徒の親から連絡があり、うちの娘は昨日からメス奴隷になりましたのでと嬉しそうに連絡が入っていた。余程の金額で売れたのだろう、どの親も喜びを隠せないウキウキとした声で連絡してきた。

・・晋作の奴が、豪徳寺家のトーナメントに課外活動として見学に行かせてくれというから、行かせたのに、これはどういう事なの・・

響子は、この学校の経営者である甥の西園寺晋作の顔を浮かべてため息をついていた。今日もトーナメントを見学させるように指示が出ている。指示に従わない生徒は、卒業を待たずに強制的にメス奴隷のオークションに出品されるというペナルティが与えられる。響子は残った生徒の顔を見渡す。

・・残ったのは４名ですか。この４名の親は相手が提示した金額に納得しなかったのですね。私としては私の教育した生徒が高く売れるのは名誉な事ですが、複雑な気分です。それに御門さんの顔もありませんか。彼女は高く売れると思っていたのですが、意外です・・

響子が、そう考えながら、今日も課外授業としてトーナメントの見学ですと言おうとしたとき教室のドアが開き、遅れましたとそのつぐみが入ってきた。つぐみは、ゆかりの家で失神してしまい、気がついたら朝になっていたのだ。

・・御門さん、まだ残っていたのですね・・

響子は何故かホッとした気持ちになっていた。そして、今日の予定を生徒たちに告げる。

「「えぇーーーっ」」

生徒たちから大きな声が上がり、行きたくありませんと泣きながら訴える生徒もいた。

「行かなくても良いですが、その場合、すぐにメス奴隷のオークションに出品となりますよ、藤野早智さんはそれでも良いですか？オークションに出品された場合、落札者がいなければ廃棄処分となりますよ」

早智と呼ばれた生徒は、響子の言葉で更に激しく泣き出していた。それを見ていた栄子は、早智の両腕をあっという間に拘束してしまう。そして、足も拘束する。

「先生、こんなメスはもうオークションに出品していいですよ。こんなのがいると私も恥ずかしいです」

栄子は、早智の目と口も塞ぎながら答えていた。早智は、涙を流しふごふごと何か言っているようであるが、そのまま呼ばれた職員に運ばれていってしまった。それを見ていた他の生徒は、急に泣き止み静かになっていた。

93、恐怖（前書き）

今回、まるで別作品「檻の中の幸福」のようですが、間違えて投稿した訳ではありませんので安心して下さい。ここは「ゆかりの記録」です。

93、恐怖

93、恐怖

藤野早智は手足を拘束され運ばれていく。早智があまりに泣き叫ぶので改めて厳重に口にギャグが咬まされ、その上から更にガムテープが貼られてしまっていた。

「うぐっ、うぐっ、うぐっ、うぐっ」

早智は、それでも恐怖で小便を漏らしながら必死に喚き暴れているが、さすがに鬱陶しいと思った職員は早智の鳩尾に拳を叩き込む。

「うぐうぅぅぅっ」

早智は哀れに失神してしまった。次に早智が気がついた時は、どこかのステージの上だった。自分は膝上までのオーバーニー以外全裸にされ、その姿を大勢の観客が見つめていた。

・・なに、ここ？・・

早智は異様な熱気が溢れるこの場所に身体がすくんでいた。すると、頭上のスピーカーより合成音が流れる。

「これより、オークションを開催します。このメスを購入希望の方は、まず購入希望ボタンを押して下さい。それではメス奴隷、自己

紹介をしなさい」

有無を言わせぬ口調で命令された早智の前にマイクを持った男が現れ、早智の口許に差し出す。早智は、ぶるぶる震えながら教室での事を思い出していた。

・・トーナメントを観に行きたくないって言ったから、オークションに出品されちゃったんだ。ここで誰も私を買ってくれなかったら廃棄されちゃう。いやぁ、誰かたすけてぇ・・

早智は口も震えてしまい声が出せなかった。こんな事なら、行きたくないなんて言わなければ良かった。今さらながらに、そう思う早智であったが、もう後の祭りであった。このオークションに出品されたメス奴隷で生きているメスはいない。どのメスも例外なく最後には性器を破壊され絶命している。八千代からゆかりまで、全て性器を破壊され絶命させられていた。その歴史を授業で学んでいた早智は、自分がその中に入ってしまった事に恐怖と絶望で、再び失神しそうであった。

「早く立って自己紹介をしなさい。出来ないのであれば廃棄処理にします」

スピーカーから冷酷な命令が告げられ早智は必死に立ち上がり口を開いた。

「あ、あの……。ふ、ふ、ふ、藤野早智といいます。ちゅ、中学生です」

話しているうちにようやく口が動くようになってきた早智は、廃棄処分を回避するため自分をアピールしなければと混乱する頭で考え

た。

「処女でしたが昨日特大ディルドゥで処女膜を突き破ってもらいました。ですが、異性との経験はありませんので、私のマンコを痛めつけて楽しんで下さい」

早智の自己紹介が終わると、次の命令がくだされる。早智は、授業で習っているため次に何をされるか知っている。このオークションでは、メス奴隷の性器を鞭で打ち、そのメス奴隷の反応を見て購入するか否か判断する仕組みだった。

・・この後、マンコを鞭で打たれる。でもそれに耐えて私を買ってくれる人がいれば、廃棄処分からは逃れられる・・

早智は自分の延命の為に必死だった。しかし、そこへ男が何かを持ってやって来た。それは白い綿の下着だった。早智は、自分の頭に被せるのかと思ったが、その考えは甘かった。男は下着のクロッチ部を観客に見せる。そこには長い針が大量に埋め込まれていた。観客席から、おぉーっと期待に満ちた声が上がる。早智は男の陰で見えなかったが、観客の反応からそれが普通の下着ではないと本能的に感じていた。

「それでは、この下着を自ら穿いてもらいます。そして、その後、性器への鞭打ちを開始します」

男から下着を渡された早智は、そこで初めてこの下着の凶悪な針を見て固まっていた。

・・これ、あの渡邉ゆかりの記録に出てくる針付き下着だ。こ、こんなの穿けないよ。怖いっ・・

早智は下着を持ったまま、ぶるぶる震えている。

・・大丈夫、昨日マンコの穴に針を刺された時より痛くないよ、きっと。それに廃棄処分より、ずっといい・・

恐る恐る早智は下着を穿いていく。針の長さは１０センチもあり、それが下着のクロッチ一面にびっしりと埋め込まれている。早智はもう泣き出していた。これを穿かなければ廃棄処分になってしまう。早智は目を瞑り、一気に下着を引き上げた。

「はぶうぅぅぅーーーっ！」

早智の股間一帯に深く針が突き刺さる。早智はガクガク震える足で必死に立っていた。

「それでは、足を大きく開き、両手をあげなさい」

スピーカーからの声で命令され、早智はその通りの姿勢をとった。そこへ、鞭を持った男が現れる。

「では性器への鞭打ちを開始します。メス奴隷はその姿勢のまま動かぬようにしなさい」

また冷酷な命令が告げられる。早智はごくっと息を呑んだ。早智はZクラスにいたとはいえ、自虐をしたり調教を受けた事もなかった。小便を飲まされたり、浣腸されたり、縛られたりする事に憧れを持っていた普通より少し変態といえる女子だった。つぐみとはまるで違う女子といえる。メス奴隷への拷問や処刑を実際に見たのは昨日が初めてであった。それが、今日はもう自分がメス奴隷としてオー

クションの場に立っている。正直、早智はこれがまだ現実とは受け入れ難かった。しかし、早智はすぐにこれが現実であると思い知る。鞭を持った男が早智の性器に狙いを付け、思い切り叩き込んだのだ。

ピシィィィッ！

「あぶうぅぅぅーーーーっ！」

針が突き刺さっている股間に鋭い鞭の一撃を浴び、早智は絶叫し両手で股間を押さえるとステージに転がり、のたうち回っていた。

・・ひぎぃぃ、マンコ痛いぃぃぃっ・・

しかし、のたうち回る早智の髪の毛が乱暴に掴まれ無理矢理ステージに立たされていた。

「足を開き、両手を上げなさい」

激痛で泣いている早智の様子など一切考慮されず、命令がくだされる。

「ううぅっ……」

早智は、それでも命令に従い大きく足を開くと両手を頭上に上げていた。そこへ、間髪入れず鋭い鞭の一撃が早智の股間に叩き込まれる。

「あぐうぅぅぅーーーーっ！」

今度は早智は倒れずに耐えていた。使い物にならないメス奴隷だと

判断されてしまえば、そのまま廃棄されてしまうかも知れない。早智は必死だった。すると、続けざまに早智の性器に鞭が叩き込まれる。

ピシィッ、ピシィッ、ピシィッ、ピシィッ、ピシィッ、ピシィッ

「あぶうぅぅーーーっ、ぶぶぶぶうぅぅっ！」

涙と鼻水で顔面をぐしゃぐしゃにしながら耐えている早智の股間が赤く染まってくる。さらに異臭が辺りに漂い始めた。早智は、どうやら大便を漏らしてしまったようだが、本人はその事に全く気がついていなかった。

「残り5分となります。購入希望の方は、是非ボタンを押して下さい」

無情なアナウンスに早智は、ぶるぶると震える太ももに力を入れ、早く購入希望ボタンを押して下さいと祈っていた。しかし、無情にもボタンは押されなかった。早智は誰からも購入したいと思われなかったのだ。

「いやぁぁぁぁっ、誰かだじげでぇぇぇーーっ！」

早智は絶望と恐怖で狂ったように泣き叫ぶが、男二人に押さえつけられ動く事も出来なかった。そこへ、ギロチン付きの処刑台がガラガラと運ばれてくる。ギロチンが四つも付いたその処刑台を見て早智は、あまりの恐怖に失神してしまっていた。その様子をステージの袖から見ていた百目鬼（どうめき）は、昨夜の手術を思い出し、このメスも廃棄しないで性具にすれば売れるのではと考えていた。

９４、製造

９４、製造

早智は泣きながら処刑台の上に固定されていく。大の字に固定された早智の手足の上にはギロチンの刃が凶悪な光を放っていた。この処刑台の上に固定されてしまえば、嫌でも次に自分が何がされるのか想像出来てしまう。中学生の早智も、その事態を分かっていた。

・・私、手足を切断されちゃう。もう一人では何も出来なくされるんだ。嫌だ、嫌だよ。誰か助けて下さい・・

早智の涙で滲む眼に赤いスーツの女性が映っていた。その女性はステージの男に何か命令しているようだった。そして、天井のスピーカーから声が流れる。

「このメス奴隷は購入希望者が現れなかった為、廃棄処分にされる予定でしたが、加工され再出品される事になりました。当方の厳しい事情も考慮していただき御理解頂ければと存じます」

「まあ、全部廃棄していたら赤字になるだろうからな。再利用したくなるよな」

「どんな風に加工してくれるのかしら?こちらのニーズに合っていたら、手間が省けるので嬉しいわね」

観客たちも、早智を廃棄処分にせずに加工再出品する事に特に抵抗はないようであった。その観客の反応を見て赤いスーツの女性は早智に向かって微笑むと、早智の拘束を解いていく。早智は、この赤いスーツの女性を天使のように感じたが、これから自分の身に何がおこるのか想像出来ていなかった。勘のいい者なら〝加工〟という言葉に良くないものを感じただろうが、早智にはその意味が分かっていなかった。

「さあ、それでは二人で楽しみましょうね」

赤いスーツの女性は早智に声をかけると、運ばれてきたストレッチャーに早智を乗せ運んでいった。

・・ふふっ、これでもう一体製造出来ますね。なかなかに楽しいうえに、これが売れれば、まさに一石二鳥。今までも廃棄せずにこうしていれば良かったですよ。あの、佐瀬という男のおかげで上手い方法が見つかりました。これは感謝しないといけませんね・・

赤いスーツの女性、百目鬼は楽しそうに早智を乗せたストレッチャーを押していた。

★　★　★　★

結局、Ｚクラスの生徒たちはまたトーナメントの見学に来ていた。目の前でクラスメイトが連行されていくのを見てしまっては、トーナメントを見学に行く方が良いと思ったのだろう。御門つぐみ、吉川栄子、そして、大瀧桃子、小日向詩織の４名は昨日同様ＶＩＰルームに通されていた。

「さっちゃん、どうなったの。オークションに出品って、売られちゃうんだよね。好い人に買って貰えれば良いけど」

詩織が早智を心配して言うが、栄子は冷たく言い放った。

「あんな藤野みたいなメス、誰も買わないよ。今頃廃棄されて、もうこの世にいないんじゃない」

「酷いよ、そんな言い方。さっちゃんだって立派なメス奴隷になれるよ。それに、さっちゃんを気に入る人も絶対いるから」

「ふうん、あんなだらしないメスをねぇ」

桃子の言葉を鼻で笑う栄子だったが、自分たちはソックス以外全裸にされているのに一人だけ下着を身に付けているつぐみが気になっていた。それに、よく見ると下着の股間部分が赤く染まっているように見える。

「あの御門さん、どうしてあなただけ下着穿いてるの許して貰えてるの？」

栄子は、恐る恐るつぐみに尋ねていた。誰に対しても強気な栄子であるが、つぐみに対しては強気に出れない。それは、本能的につぐみには決して勝てないと思っているからであった。いや、それは栄子だけではなかった。他のZクラスの生徒も、つぐみには一目置いていた。その雰囲気、オーラというものが自分たちとは違う、別格の存在であると感じられ言葉を交わす事もあまりなかった。それを、つぐみは別に気にした様子もなく平然としていたが唯一平気でつぐみに話しかけていたのが、今回急遽トーナメントに参加する事にな

った大内くるみだった。くるみは、クラスの誰とでも楽しそうに会話していたが、特につぐみとは楽しそうに話していた。そんな孤高のつぐみに栄子が尋ねた事は、桃子も詩織も気になっていた。

「ああ、これ。なんだ、みんなも穿きたいのか。それならお願いしてあげるよ。最初は勇気がいるけど穿いてみると気持ちよくてマンコ濡れてくるよ」

つぐみの言葉で桃子と詩織は、まさかと思っていた。昨日帰りがけにつぐみとメイドが話していた会話を思い出したのである。

「あの、それって……」

「それなら私たちの分もお願いして下さい」

桃子が、針付きの下着ですかと尋ねる前に栄子がつぐみにお願いしてしまっていた。栄子は昨日さっさと帰ってしまった為、つぐみとメイドの会話を聞いていなかったのだ。つぐみは、分かったと返事をするとすぐにメイドに向かって行ってしまった。桃子と詩織は顔を見合わせて震えていた。

★　★　★　★

理恵の様子を見に行こうとしていた佐瀬は、全裸の女性二人に声をかけられていた。

・・全裸でこの屋敷を歩いているという事は観客の女か。俺に何の用だ・・

佐瀬は警戒しながら二人の女を眺める。

「あのぅ、調教師の佐瀬さんですよね。私たち昨日トーナメント見に来ていて、佐瀬さんを見てファンになってしまったんです。わざと自分のメス奴隷が追い込まれるのを待って勝つなんて、ゾクゾクしてしまいました。佐瀬さんが優勝するのは間違いないですよ」

女性二人はやたらと佐瀬を持ち上げていた。普通ならここでにやけたり、あるいは不信感を持つところであるが、佐瀬の感想は違った。

・・コイツら、なかなか良い身体をしているな。調教して泣き叫ぶ姿を見るのもいいし、人間辞めさせて性具にするのもいいな。どちらにしろ高額で売れそうだ。ここは、コイツらを手懐けて確保しておくか・・

佐瀬は内心、これでまた売り物が出来たと喜んでいた。

「俺のファン？俺にそんなものがいるとはね、驚きだ」

「そんなぁ、佐瀬さんのような凄い調教師の方にはファンがたくさんいると思いますよ」

そう言いながら女二人は佐瀬に自分の体を押し付けてくる。足も絡め、胸の膨らみも押し付けていると、佐瀬の股間のものが大きくなってきた。

・・くくく、オスなんてチョロいわ。このまま、やらせてこのオスを虜にしてあげる・・

女二人は佐瀬の股間に手を伸ばすと、ズボンの中に手を入れ、一人は佐瀬の大きくいきり立ったモノをしごき始めた。そして、もう一人は佐瀬の肛門に指を這わせ、肛門をほぐしていく。

・・ほら、気持ちいいでしょ。ちゃんと射精させて、おしりからも快感を与えてあげる・・

女はさらに激しく佐瀬のモノをしごき始め、肛門にも指を突き挿れた。その時、一人の女は自分の股間に何か金属のような物を当てられた冷たい感触に思わず指を止めていた。次の瞬間、女の意識は飛んでいた。

95、売物

95、売物

女が意識を取り戻すと、そこは薄暗い部屋の中だった。部屋の端に三角木馬が置いてある。その頂点の部分は何匹のメスの股を裂いたのか、ツルツルに磨かれ異様な光を放っていた。女は廊下で佐瀬に会った事までは憶えていた。その後、佐瀬を籠絡しようと近づいていき佐瀬の性器を握りしごいていた時、一緒にいた仲間がいきなり気絶し、その後自分も股間に何かを当てられたと思ったら意識が飛んでいた。女は動こうとして自分が拘束されているのに気付いた。両腕は後ろ手に縛られ、両足も開いたまま閉じられない。自分が良くない状態にされているのを感じていた。

「あびゃあぁぁぁーーっ！」

突然、絶叫が聞こえ女は目を見開いた。ようやく目が慣れてくると、部屋の奥で一人の女が責められているのが分かった。その女は、開脚逆さ吊りにされて性器に針を刺されているようだった。

「うーん、こんな基本的な責めでここまで絶叫するか。あまり耐性がないのかも知れないな。メス奴隷としては失格かな。こっちは、あの女みたいに性具に加工するか」

責めている男の呟きが聞こえる。その男は、女たちが籠絡しようとしていた佐瀬で間違いなかった。

・・メス奴隷、性具……。冗談じゃない、私たちは豪徳寺に復習するの。こんな所で終われないよ・・

女は必死に脱出出来る方法を探すが、まずこの拘束を解かなければならない。縄脱けの基本、少しずつ腕を動かして縛っているロープを弛めていく。女は佐瀬に気付かれないように腕を動かしていた。

・・もう少しで腕が抜ける・・

女は、部屋の出口を確認した。右の壁にあるドア。他にドアらしきものはない。それに、佐瀬が出入りしているのを確認した。鍵はかかっていないようだ。女は、佐瀬がもう一人の女を責めるのに夢中になっているのを冷静に観察していた。佐瀬は今、女の歯を抜いているようだった。こちらに背を向け、屈み込み一本一本女の歯を残酷に抜いている。女は歯を抜かれる度に絶叫している。

・・今がチャンスだ・・

女は自由になった腕で、両足につけられた足枷を外していく。そして、足を軽く動かし息を整える。佐瀬は、全く気付いていないようで、もう一人の女の抜歯に夢中になっている。

・・ごめんなさい、あなたの無念は私が晴らしてあげるから・・

女は仲間を見捨てて逃げる自分を卑怯者だと思うが、あの佐瀬が相手ではまともに戦っては勝てる気がしない。ここは、どちらかが犠牲になる必要があると思い込み自分を正当化していた。

・・今だっ・・

佐瀬は気付いていない。ダッシュでドアまで走れば追い付かれる事はない。女はダッシュで勢いよく飛び出した。

ブチッ！

「あびゃあぁぁぁーーっ！」

飛び出した女は股間を押さえて床に転がっていた。女の股間からじわっと血が流れ出している。

「あーあ、自分でクリトリス引き千切ったよ。馬鹿な女だ」

佐瀬は床に倒れている女の頭を踏みつけていた。

「あんたのクリトリスに釣り針が刺さっていたんだよ。その釣り針は細いピアノ線で壁の留め具に結んである。気がつかなかったのか。クリトリスが無くなっては、メス奴隷は無理だな。性具にした方が高く売れるか」

「ひぐっ、ひぐっ、ひぐっ、ひぐっ」

女は股間を押さえたまま佐瀬に頭を踏みつけられ、もう自分はここまでだという絶望で号泣していた。佐瀬は、そんな女の股間から両手をどけ、女の性器に始めに女たちを気絶させたスタンガンを当てる。

バシュッ

女の意識はまた飛ばされ、女はがっくりと床に横たわっていた。

★　★　★　★

「ほら、これだよ」

つぐみから渡された下着を受け取った3人はまずその重さに驚いていた。

「マンコに通電する為にバッテリーが搭載されているんだよ。私的には通電しながらはとても歩けないから、コンセントに差し込むプラグ付きの方が軽くていいと思う。それも含めて伝えてあるから次の商品は改良してくれると思うよ。早く穿いてみんなの感想も聞かせてよ」

つぐみは簡単に言うが3人が通電という言葉に驚き、次にクロッチに埋め込まれた長い針を見て萎縮してしまっていた。

「これ、本当に穿くの」

桃子が震えながら言うと、またつぐみが解説を始めた。

「この針もね、全部同じ１０センチなのが工夫がないよね。私ならマンコの穴に入る位置の針は、もっと長くしてもらった方がいいな。だって、これじゃ子宮に針が刺さらないんだよ。だから、その部分だけ針の長さを倍にして、子宮も串刺しに出来るようしてもらいたいよ。まあ、すぐ改良してくれるって言ってたから楽しみだよね。ほら、早くみんなも穿きなよ。手伝ってあげようか」

つぐみは親切心で言うが、３人ともそれは遠慮すると丁寧に断ってきた。３人は下着を穿いて太ももまであげるが、そこから先が進まなかった。イライラしたつぐみは桃子の後ろに回ると下着を掴みグイッと引き上げてしまった。

「あぎゃあぁぁぁぁーーーーっ！」

無数の針で性器を貫かれた桃子が絶叫するが、それに気を取られていた詩織の下着もつぐみは一気に引き上げてしまう。

「はぶうぅぅぅぅーーーーっ！」

絶叫する詩織。そこに目がいった栄子の下着もつぐみは引き上げた。そして、栄子には引き上げただけではない。その栄子の股間につぐみは膝を思い切り叩き込んでいた。

「あぶうぅぅぅぅーーーーっ！！」

絶叫して床に転がった栄子をつぐみは残酷な眼で見下ろすと、自分も床に腰を下ろし栄子の両足首を掴み股を開かせると、右足で思い切り栄子の股間を蹴った。

「あびゃあぁぁぁぁぁーーーーっ！！」

涙を流し絶叫する栄子の股間に、つぐみは足の裏を当て、ガスガスと何度も強く押し付ける。いわゆる電気あんまという子供の遊びであるが、それを針が無数に突き刺さっている股間にやられてはたまらない。

「あぶぶぶぶぶぅぅぅぅっ、もうゆるじでぐだぢゃいっ！」

栄子は両手でつぐみの足を掴んで止めようとするが、つぐみは構わず栄子の股間を何度も足の裏で蹴っていた。

「あぶうぅぅーーーっ、だれがあ、だじげでえぇぇぇっ！」

栄子はみっともなく泣きながら救いを求めるが、桃子も詩織もつぐみの鬼気迫る表情に恐れをなして止められずにいた。そのうちに絶叫していた栄子は、ブクブクと口から泡を吹き始め、くるりと白目を剥くと失神してしまっていた。栄子の反応がなくなったので、つぐみがようやく足を放すと栄子の股間は真っ赤に染まっていた。それを満足気に確認したつぐみは、桃子と詩織に顔を向ける。

「ひっ……」

二人が、今度は自分の番かと小さく悲鳴を上げるが、つぐみの言葉はまるで違うものだった。

「今度は私に同じ事をやってよ。早くっ、どっちがやっても良いから」

つぐみの言葉に息を呑んでいた二人は顔を見合わせると、それぞれがつぐみの足を両手で掴み、右足と左足をつぐみの股間に当てる。つまり、二人で電気あんまをするつもりのようだった。

「あはっ、良いねぇ。思い切りやってよ。早く私のマンコ壊して」

つぐみは興奮して息が荒くなっていたが、二人は同時につぐみの股間を蹴りだした。

「あぶうぅぅぅぅーーーーっ！！」

つぐみは絶叫していたが、その顔はまるで絶頂を迎えたかのように恍惚とした表情をしていた。そこへ、ドアを開けてメイドが入ってくる。

「おやおや、楽しい事をしていますね。どうです、少し一休みして、お漬け物でも食べませんか。手に入れた漬け物壺で漬けてみたのですよ」

メイドは大きな漬け物壺と云うよりは、ドラム缶を横に半分にしたような円柱の壺を台車に載せて運んで来ていた。つぐみは、涙で滲む眼でその壺を見て異様な雰囲気を感じていた。

９６、蜜壺　６９番しずくＶＳアゲハ

９６、蜜壺

運ばれてきた漬け物壺はかなり大きな物であるが、その大きさに反して実際に漬け物を漬ける部分は中央の直径３０センチ程の丸く開口された部分だった。メイドは、その部分に置かれた漬け物石を取り除くと、中にはキュウリの漬け物が入っていた。

「乱切りにしたキュウリに塩を振って漬けてあります。どうぞ召し上がってみて下さい」

つぐみたちは用意された椅子に腰掛け箸をのばしていた。ちょうど漬け物壺の周囲が丸テーブルのような感じであり、そこに置いた皿に中央の開口された壺からキュウリを菜箸で取っていた。そして、恐る恐る口に運ぶ。

「美味しいっ、ちょうどいい塩味で良いね」

「うん、でもこれ塩だけじゃないですよね。何か他にも混ぜて漬け込んでいるような気がするよ」

桃子と詩織は美味しそうにキュウリの漬け物をパクパクと食べている。つぐみも、美味しいと思うが、何かどこかで味わった事のある味に似ていた。

・・うーん、なんだろう。どこかで食べたか飲んだりした記憶がある味だけど思い出せない・・

つぐみは、まだ失神したままの栄子を見つめる。

・・せっかくだから栄子も起こして食べさせてあげようかな・・

つぐみは栄子を起こそうと近寄った時にツーンとメスの匂いを感じた。

・・ふふ、栄子もマンコ壊されて気持ち良かったんだね・・

栄子も間違いなく変態のZクラスの仲間だねと思ったつぐみは、ハッと気がついた。

・・まさか……。そんな事、許されるの・・

つぐみはメイドを振り返っていた。メイドは桃子と詩織に得意気に説明しているところだった。

「この壺は受注生産で、なかなか手に入らないのですよ。しかも、壺によって味が変わるのです。味の濃さも変えられるので濃い味が好きな方は、このボタンを押して貰えればいいのです」

桃子と詩織は、へえーっと頷きながら漬け物を食べている。キュウリを掴む箸が止まらない感じで、とうとう壺に入っていたキュウリの漬け物を全て食べてしまっていた。

「でも、こんなに外側はおっきいのに、実際は小さな壺なんですね。普通に小さい壺でもいいと思いますけど」

「この大きさには理由があるのですよ。これだけの大きさがないと、この味は出せません」

「へぇーっ、何か秘密があるんですか。味の濃さも変えられるっていうし、今流行りのＡＩ制御の調理装置でも入っているんですかね」

つぐみは、メイドと桃子たちの会話を聞いていて、やはりと思った。そして、壺に近付くと中央の穴の中を覗く。そして、メイドにそのボタンを押してみて下さいと言っていた。

「いいですよ」

メイドが、パチンとボタンを押すが特に何も変化は見られなかったが、桃子と詩織も気がついた。

「なんか、声みたいの聞こえない……」

「この壺の中から聞こえてくるような感じだけど……」

気味悪そうに言う桃子と詩織につぐみは壺の中を覗いてみてと言う。二人は椅子から立ち上がり、そーっと壺の中を見る。

「なに、これ……」

壺の壁の部分はヌメヌメと濡れ脈打っている。そして、底には見たことのあるコロッとしたピンク色の物が突き出ていた。

「う、嘘っ……。これって……」

桃子と詩織は口を押さえて固まっていた。

「仕方ありませんね。あなたたちには見せてあげますよ」

メイドは坪の上部の蓋をパカッと外す。すると、壺の中には手足を根本から切断され、乳首にバイブレーターが貼り付けられたメスの姿があった。キュウリの漬け物が入れられていたのは、このメスの膣だったのである。

「ほら、このボタンを押すと乳首のバイブレーターが作動するのです。すると、壺から粘液が溢れてきて味が濃くなるのですよ」

メイドがまた得意気に説明するが、桃子と詩織はそれどころではなかった。目隠しされ、口にはギャグを装着されているメスの顔に見覚えがあった。

「さっちゃん、さっちゃん。いやぁーーっ！」

「しっかりして、さっちゃんっ！」

それはZクラスの早智だった。今朝、教室から運び出されていった早智が、今はこんな変わり果てた姿になっている。早智は意識はあるようだが、いくら二人が呼び掛けても反応がなかった。

「無駄ですよ。このメスはロボトミー手術を施されて、もう脳を破壊されています。ただ生きて、刺激に反応しているだけです。只の道具ですよ。でも道具にされて、このメスは良かったですね。なにしろオークションで売れ残って廃棄処分になるところでしたから、こうして命拾いして漬け物壺として役に立っているのです。幸せだと思いますよ」

メイドは、恐怖で固まっている桃子と詩織を楽しそうに見ていた。

「そんな……。もう、さっちゃんいないの。朝まで一緒だったのに」

「でも、さっちゃんだよ。ここにいるの、さっちゃんだよ」

二人は半狂乱になっていた。

「さて、あなたたちは何にして貰いたいですか。もしメス奴隷に成れなかった時、廃棄ではなくて道具として残る道も出来ました。希望があれば聞いておきますよ」

「冗談じゃないよ。誰が道具なんかに。私はマンコ壊して処刑して貰うのが夢なんだよ。そんなので生きているなんて絶対嫌だよ」

やっと気がついた栄子がメイドに向かって怒鳴っていた。が、メイドは気にした様子もなくメモをとっていた。

「なるほど、吉川栄子さんは処刑希望と……。あなたは、どうですか、御門つぐみさん」

つぐみは、早智の姿に衝撃を受けていた。こんな事は今まで考えた事もなかった。

「私は、どちらも魅力があってまだ選べない。でも道具になるなら漬け物壺より灰皿の方がいいな。私のマンコの穴に煙草の火を押し付けられるんだ。もちろん、子宮も焼かれて、子宮の中にも吸い殻を入れられちゃう。おしりの穴や、おしっこの穴も活用してほしいな。脳ミソ壊されても良いけど、痛みは感じるようにしておいてほ

しい。私は生きてる間、マンコを壊される痛みだけを感じて生きるんだ。そのうち狂っちゃって棄てられちゃうんだ。むふふっ」

つぐみは、うっとりとした顔で話していた。この、つぐみの姿に桃子と詩織はもちろん、栄子も引いてしまっていたが、メイドだけは嬉しそうに微笑んでいた。

★　★　★　★

そんなＶＩＰルームでの騒ぎをよそにトーナメントは開催されていた。今日から、いよいよ二回戦。一回戦を勝ち残ったメス奴隷とＡシードのメス奴隷も参加してくる。観客たちも一回戦に比べ、さらに人数が増えていた。

「やはり、無傷のＡシードが有利だろうと思うが、勝ち抜いてきたメス奴隷も、その経験と自信があるからな。勝負は分からないな」

「そうね。一回戦を耐えた自信は相当なものでしょうからね。その耐えたメス同士が戦うわけだから楽しくなりそうね」

「今日の初戦からいきなりＡシードが登場するのか。これは楽しみだな。俺は、あの６９番（注）のファンだったんだよ。その妹だからな、期待してしまうよ」

「私も６９番のファンだったけど、６９番はこのトーナメントに参加しても優勝は出来ないでしょうね。６９番は自分がマンコ壊されて処刑されるのが願いなのだから、もしかしたら一番先に敗けて処刑されるかもね。でも、そういうところが良いのよねぇ。ドブスで

頭のおかしい私のマンコを徹底的に壊して下さいって、６９番の台詞思い出すだけでマンコ濡れてくるわ」

そこへ、再び進行に戻った沙也加が登場してくる。

「お待たせしました、メス奴隷処刑トーナメント二回戦を開始します。なお、メス奴隷しずく側から要望があり、メス奴隷しずくの名称を変更致します。今後、メス奴隷しずくは〝６９番〟と呼称します。御了承お願いします」

沙也加のアナウンスで会場は大きく盛り上がっていた。

「マジか。あの６９番の復活。すげぇ、気合い入ってるぞ、これは」

「実の妹だけど、６９番には負けないって意味かしら。なんにせよ、それだけの覚悟があるって事ね。６９番と名乗った以上、恥ずかしいまねは出来ないわよ」

沙也加は観客の驚きを見て微笑んでいた。

・・驚くのはまだ早いですよ。あの、しずく、いや６９番の覚悟は並大抵ではないですよ。くくく、刮目しなさい・・

沙也加が右手を上げアナウンスする。

「それでは、二回戦一戦目、６９番対アゲハ」

大きな歓声の中、メス奴隷が入場してくる。調教師麗華の後に入場してきた６９番の姿を見て、観客は驚愕の声を上げていた。

（注）６９番というのはこの作品の第一部での主人公渡邉ゆかりが別作品「檻の中の幸福」で処刑される際に付けられた番号。そこで、ゆかりが性器を残酷に破壊され絶命する姿を観た者からは、ゆかりは６９番と呼ばれている。

97、変貌

97、変貌

時間は少し遡る。二回戦開始の前夜。しずくはメス奴隷用の地下の個室で自慰に耽っていた。気持ちよくなるのだが、何か物足りない。

・・やっぱり私もお姉ちゃんと同じ。マンコ壊されないと本当に気持ちよくなれないんだ。お姉ちゃんが処刑されたのが、今の私と同じ年。私も今が一番いい時なのかも。それに、こんな大きなトーナメントに出場出来ているし、これ以上最高の舞台はないよ・・

しずくは覚悟を決めた。今までは漠然とこのトーナメントで優勝して、姉のゆかりの妹だと知らしめるんだと思っていただけだったが、自分が求めているのは違う事だと気がついた。そのためにしなければならない事がある。自分の覚悟が鈍らない為に……。しずくは、設置されたインターフォンで葉月と麗華を呼んでいた。

★　★　★　★

麗華に続いてしずくの姿が現れた時、観客は驚きの声を上げていた。しずく、いや69番は、それまでの茶色がかった髪を黒く染め、ツインテールだった髪型を三つ編みお下げにして左右に垂らしていた。そして、クリトリスにピアスを挿れ、そのピアスに69番という番

号札が誇らしげに揺れている。だが、なにより観客が驚いたのは、６９番の手足が切断されて失くなっていた事だった。６９番の肘から先、膝から下が無かった。６９番は台座から突き出た二本の杭に、膣と肛門を突き刺されたまま台車に載せられ麗華の持つ鎖に引かれて進んでいく。

・・お姉ちゃん、やったよ。私もお姉ちゃんと同じ体になったよ。私の一番の望みは、大勢の人の前で惨めな姿で笑われて蔑まれてマンコを壊されていって絶命する事だと気がついたんだ。私もお姉ちゃんみたいに大きな声で叫びたい。ドブスで頭のおかしい私のマンコを徹底的に容赦なく壊して下さいって……。もう、今までの調教や拷問では我慢出来ないの。お姉ちゃんみたいに徹底的にマンコ壊されたら、私、最高に幸せ・・

理恵は控え室で身を乗り出していた。しずくの姿がまるで渡邉ゆかりのように見えていた。

・・これは……。しずく様が、まるでゆかり様のようです。あぁ、有り難い。わたくしもあと一勝して必ずこの６９番と戦います・・

同じく琴音も拳を握りしめていた。

・・しずくちゃんは本気だ。もうこのトーナメントの後の事なんて考えていない。今までのしずくちゃんと違う。冗談じゃないよ、私も本気出さないと蜂須賀彩音の娘、琴音も負けていられない・・

アサヒの隣でミアンも目を見開いていた。

・・６９番……。似ているよ、あの六九番ちゃんに……。見た目だけじゃないよ、その醸し出す雰囲気が六九番ちゃんにそっくりだ。

なにか関係があるの。もし関係があるのなら、あの６９番、私と同じだ。マンコを壊される事で絶頂を迎える頭のおかしい超変態娘・・

ミアンは、マンコギロチンされたり串刺しにされたり、挙げ句は胸の膨らみを切除され食材にされ食べられてしまいながら喜んでいたカナメ商会の雌奴隷六九番（注）を思い出していた。

・・あの処刑の時に観たゆかりにそっくり。あの子もやっぱりゆかりと同じ道を行くのね・・

文子もまたしずくの変貌に驚いてはいたが、これは当然の変化だろうと思っていた。自分の子供であれば、こうなるのは必然だ。自分も含めて、それほど頭がおかしいという事だと自覚していた。そして、ＶＩＰルームではつぐみが微笑んでいた。

・・しずくの奴、やっと自分の本心に気がついたみたいだね。ゆかり姉も私もあなたも、みんな頭がおかしいんだよ。私もこのトーナメントに出ていたら当然ゆかり姉と同じに四肢切断して出てくるよ。そして、最後にはゆかり姉みたいに脳ミソも壊して貰いたいな。ゆかり姉みたいに頭の中にウンチされたいよ・・

つぐみは、しずくの姿を見ながら股間に手を伸ばしていた。股を開いて腰を突き出して股間に当てた手を激しく動かす。その度に性器に突き刺さっている針が肉を抉った。

「あひっ、あひっ、あひっ、あひっ」

つぐみは激痛で涙を流しながらも手を動かすのを止めなかった。いや、止められなかったのだ。

★
★
★
★

葉月は、今日は一人食堂でワインを飲んでいた。そして、モニターに映るしずくの姿に微笑みを浮かべている。

・・昨夜はいきなり呼び出されて驚きましたが良いですね。これでこそ渡邉ゆかりの妹です・・

葉月はモニターを見ながら昨夜の出来事を思い出していた。しずくに呼ばれて地下の個室に行くと、すでに理津子と麗華が来ていてお互いの話は済んでいるようだった。そこで、しずくは葉月に頭を下げてくる。

「お姉ちゃんみたいに私の手足も切断して下さい」

本当にこいつは頭がおかしい。もう、マンコを今すぐ壊したい。葉月はその誘惑を抑えるのに苦労した。しずくを処刑する時には当然四肢切断するつもりだったので葉月に異存はなかった。すぐに処刑室に連れていき、しずくをギロチン台に乗せベルトできつく固定する。しずくが見上げると、手足の上にそれぞれギロチンの刃が揺れ鋭く光っていた。どんなメス奴隷でも、この状態になると恐怖で体が震えてくるのが普通だ。しずくの体も細かく震え、瞳からは涙が溢れていた。

「切断して良いのですね。渡邉ゆかりも四肢を切断されて、オナニーや自虐が出来なくなって泣いていましたよ」

「構いません。ブスで変態で頭のおかしい私が勝手にオナニーして

気持ちよくなるなんて許されません。私はメス奴隷ですからマンコを壊されて泣き叫ぶ以外価値がないんです」

「ほうっ……」

葉月はしずくがいい方向に変化してきたと内心喜んでいた。しずくは確かに変態であるが、ゆかりのように自分を破滅させるという感情が足りないと思っていた。それが、ここにきて開花したのだ。ゆかりは、とにかく自分の性器を痛め付ける事に全てを捧げていた。おそらく、ゆかりがメス奴隷にならず、処刑もされなかったとしても、けっきょく自分で性器を壊して絶命しただろう。他人に壊されるか、自分で壊すかの違いだけで、ゆかりはどんな運命を辿ったとしても性器を壊して絶命する。それは間違いない事実だと思われた。しずくには、その点が足りなかったのだが、その欠けていたピースが埋まったのだ。葉月が喜ぶのも無理がなかった。

「ふふっ、それではどこからいきますか。それとも全部一遍にいきますか」

「一番、残酷な順番で切断して下さい。それと私に69番という番号を使う許可を下さい。それから絶対全部切断して下さい。私がどんなに許しを求めても無視して下さい」

「69番……。良いですよ、今のあなたならそれを名乗るのに相応しいでしょう。それでは右腕から順番にいきますよ。利き腕が失くなるのが一番こたえますからね。それに、ここまでくれば私は許したりしませんよ。分かっているでしょう。そうそう、これはプレゼントです。ルイに貰った痛覚をアップさせる注射です。これのいいところは痛覚をアップさせながら、気絶する事を防ぐのですよ。どんなに地獄の激痛でも失神する事が出来ないのです。これを射って

あげますね」

葉月は、しずくの返事も聞かず注射を射ってしまう。しずくの会陰に深く針を突き刺し、ヂューッと中身を全て注入する。

「つ、痛覚アップ？」

「そうです。嬉しいでしょう。普通に切断される痛みより、遥かに激しい痛みを味わう事が出来ますよ。気絶もしませんから存分に味わって下さい。ではいきますよ。まずは右腕」

「ふうっ、ふうっ、ふうっ、ふうっ」

しずくの息が荒くなるが、葉月はギロチンのボタンを押す。

ズガァァン！

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ、いだいぃぃぃぃっ！！」

プシャアァァーーーーッ

ギロチンの刃が落ち、しずくの右腕の肘から先が切断されていた。

しずくは絶叫し、小便を噴出している。

「いだあぁぁぁっ、いだいようぅぅぅっ、あぶうぅぅぅーーーっ」

「ふははっ、右腕本当に失くなっちゃいましたね。痛いでしょう。痛覚もアップしてますしね。どうです、利き腕が失くなった感想は。無様ですねぇ、これでオナニーも出来ませんね。それでは、次いきますよ。今度は無様にウンコも漏らして下さいよ」

「やめでぇ、もうゆるじでっ、おねがいじまぢゅっ」

「おやおや、もう弱音ですか。まあ痛覚アップしてますからね。普通のメスなら発狂しているレベルでしょう」

パン、パン、パン、パン、パン、パン

「あぶぶぶぶぶぅぅぅーーっ」

葉月は、しずくの頬を平手で連続で打ち続けた。

「あぁ、いいわぁ６９番、あなたの泣き声。もう、あなたを壊してしまいたい。では、次、左腕切断ですよ」

冷酷に告げると葉月はギロチンのボタンを躊躇なく押した。

ガシュゥウン

「あぎゃあぁぁぁぁーーーっ！」

ぶりっ、ぶりっ、ぶりぃぃぃっ

しずくの左腕も簡単に切断されてしまった。そして、葉月の予想通りしずくは大便も漏らしてしまっていた。しずくの肛門から、排泄物がぶりぶりと止まる事なく噴き出し、両腕を切断された体はビクビクと痙攣していた。

（注）天月先生の完結した「魔法学園幻術科　幼狐先生は頑張ります！」に登場する雌奴隷。その正体は……。是非読んでみて下さい。

そして、新連載が開始されております。「魔法学園風術科　白翼の教師と禁断の夢」タイトルで分かるように前作の外伝となっております。主人公は、またまた酷い目にあっちゃいます。前作、前々作のキャラも登場してきます。面白いので是非読んでみて下さい。

98、風花（前書き）

二階堂遥はずっと散々な目にあっているので今回少し活躍させてみました。とはいえ、この物語ではメス奴隷であるのにかわりありません。ご安心下さい。

98、風花

９８、風花

葉月は、食堂でワインを飲みながら昨夜の事を思い出していた。何度、思い出しても興奮して笑顔になってくる。それは、あの渡邉ゆかりを処刑した時と同じ興奮だった。

・・あの娘もよく熟成しました。もう、刈り取ってもいい頃合い。なのに、こうなるとこのトーナメントは歯痒いですね。いいですか、必ず私のところまで勝ち上がってくるのですよ。途中で負けたりしたら許せませんよ。その時には、相手の調教師を殺して、私があなたを処刑します。あなたを処刑する権利は誰にも渡しません・・

花梨は食堂の入り口で硬直していた。葉月が周囲に発散するオーラが凄まじく、今下手に近づけばあっという間に処刑されてしまう。そんな恐ろしい雰囲気に呑み込まれ、花梨は一歩も動けずにいた。その花梨の隣でも、事務報告にでも来たと思われる黒いスーツを着た女性が、立ち止まったまま動けずにいた。

・・あれが豪徳寺葉月。まさに怪物。あんな化け物をどうすればいいの。いけない、私の力ではとても太刀打ち出来ない。一度、弥勒院家に戻って報告しないと・・

しかし、そう思いながら黒いスーツの女性の脚はガクガクと震え、動く事が出来なかった。そして、その足の間には水溜まりが床に広

がっていた。

「おや、今日は一人なのか」

そこへ、なんの緊張感もないクラヤミが入って来て葉月の隣に腰を降ろした。

「負けたあなたがまだいたのですか」

葉月が冷たい視線をクラヤミに送るが、クラヤミは気にせずラガーを注文していた。

「せっかくだからトーナメントを観ていこうと思ってね。ここで飲みながら観るのが一番気持ちがいいからな。あの、しずく、いやもう69番か、良いねぇ。以前よりずっとよくなったよ。あれぞ、メス奴隷という感じだね。相手はもう69番の姿を見て完全に萎縮しているね」

クラヤミが呑気に解説しているが、葉月はまだ興奮が治まらず、もう誰かを処刑したくてたまらなくなっていた。そこで、食堂の入り口に立ちすくんでいる花梨と黒スーツの女に目を止める。花梨は葉月の鋭い眼光で見つめられた時、生きた心地がしなかった。

・・ダメ、もう私ここで処刑される・・

花梨の足もガクガクと震えだしシャァァッと尿が溢れだしてしまっていた。葉月は立ち上がると歩いてくる。もう、ダメだと花梨は覚悟したが、葉月が選んだのは黒スーツの女の方だった。

「あらっ、神無月さんどうしました。震えているようですが、体調

には気をつけて下さいね。トーナメントはまだ終わっていないのですから、二回戦頑張ってもらわないと困りますよ」

花梨にそう言いながら葉月は、黒スーツの女の両手の指を、あっという間に結束バンドでまとめて固定してしまう。

「さて、あなたはこれからマンコを処刑してあげますね。光栄に思って下さい。私に処刑されるのですから」

「ひいぃぃぃっ」

女は悲鳴をあげながら葉月に連れられていった。

「神無月さん、ほら一緒に観ましょうよ」

クラヤミの脳天気な声で花梨はようやく足が動くようになっていたが、漏らしてしまった下着が気持ち悪く、着替えてきますとクラヤミに伝え足早に立ち去っていた。

★　★　★　★

両腕を切断されたしずくは激しく絶叫し号泣していた。

「いだいぃぃぃぃっ、だれがあ、だじげでえぇぇぇっ！」

「良いですよ、その顔。両腕、失くなっちゃって痛いですよね。無様な体になりましたね。ふふふっ、それでは、もっと痛くしてあげますからね」

葉月は、なんと痛覚アップの薬をしずくの右の乳首に射ちこんだ。
さらに左の乳首にも、そして、クリトリスにも射ちこんでしまった。

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ、いだい、いだい、いだい、いだいいぃぃっ！」

「あははっ、良いですよ６９番。次は右足です」

葉月はしずくの右足にギロチンの刃を落とした。

ズバアァァァッ！

「あんびゃあぁぁぁぁーーーーっ！！」

しずくの右足も切断され残りは左足だけとなっていた。しずくは狂ったように号泣している。

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ」

左足一本だけの無様なしずくを見て葉月の息も荒くなっていく。

「うひひっ、それでは最後の一本いきますよ」

最後のギロチンが落ちていく。

ズガァァァッ！

「あっびゃあぁぁぁぁーーーっ！！」

ズンという重い音に続き、しずくの左足も切断され宙に舞った。ワンテンポ遅れてしずくの絶叫が響き渡る。しずくは、しずくの望み通り四肢を切断されてしまった。理津子と麗華は、これで処置も終わりとしずくの拘束を解こうとするが、葉月は鉄槍を持ちしずくの性器に狙いを付けている。

「不味い、豪徳寺はしずくを串刺しにするつもりだ。私が止める。麗華さんは神楽坂に連絡して下さいっ！」

理津子は、葉月の前に飛び出すと槍の切っ先を両手で掴み、しずくの串刺しを阻止する。

「豪徳寺ともあろうものが我を失ってどうする。しっかり、しろっ！」

理津子の叫びにも葉月は反応せず、理津子の手を振りほどいて高速で槍を突いてくる。

「くくくっ、邪魔をするなら橘、お前も殺す」

「くっ、三段突き……。なんて速さだ。まだ完全に感覚が戻っていない私の状態では豪徳寺を止められない」

理津子はしずくを守りながら防戦一方になっていた。そこへ麗華から連絡を受けた沙也加が駆けつけて来た。ルイと遥も一緒に駆けてくる。

「これは不味いですね。まず葉月様を止めなければ」

「遥っ、力を戻した、いけっ」

「はいっ」

遥は最後尾から飛び出し一瞬で葉月の前に立ちふさがる。

「理津子さん、どいてください」

遥が懐かしそうに、そして嬉しそうに理津子に声をかける。

・・なんだ、このメス奴隷、私を知っているのか。それに、この動きはなんだ。人間離れしている・・

理津子は驚愕しながらも、一歩退いていた。

「レッドセンセイション　（注1）」

遥の拳が火を噴きながら葉月にヒットする。が、葉月は何事もなく槍を振り回してくる。これには、ルイも度肝を抜かれていた。

・・こらこら葉月、これでダメージを受けないなんて反則過ぎるでしょう。あの異生物ヴァギナ（注2）でさえも一撃で倒す技ですよ。あなたが私に干渉出来ないように、私もあなたに危害を加える事は出来ない。これは困りましたね・・

ルイもどうすべきかと頭を悩ましていると、理津子が遥に向かって叫んでいた。

「豪徳寺の腹を狙え。そこは刺されてから、まだ完治していない筈だ。そこに一撃を浴びせてやるんだ」

遥は頷くと麗華に顔を向ける。

「ペイン（注３）、そこの電源を落として下さい」

「えっえっ、ペイン？わ、私の事……」

麗華は戸惑いながら電源を落とす。部屋の証明が消え、周囲が暗闇に沈む。しかし、遥には葉月の姿が見えている。

「そこだっ、エレクトリカルハンマー（注１）」

暗闇の中に光の軌跡が走った。

「おごぉぉっ」

遥の電気を帯びた回し蹴りは葉月の腹部にヒットしていた。麗華が再び電源を入れると、葉月は腹部を押さえて倒れていた。

「悪いな、豪徳寺。怪我してる所を狙って」

理津子が葉月に頭を下げ、沙也加が葉月にミダゾラムを含む鎮静剤を飲ませていた。

「落ち着きましたか、葉月様。何があったのです。メス奴隷しずくの手足も切断されていますが」

葉月は立ち上がるとみんなに頭を下げていた。

「いや、面目ないですね。６９番を破壊したくなってしまい、その衝動が抑えられませんでしたよ」

「６９番？」

「そうです、神楽坂さん。今日からメス奴隷しずくは６９番と名前を変えました」

「あの、一つ訊いていいですか。豪徳寺が化け物なのは知っているが、その化け物を倒したメス奴隷は何者なのだろう。私や麗華の事も知っているようですが」

理津子も麗華も不思議そうに遥を見つめていると、ルイが仕方ないですねと口を開いた。

「一緒にお酒を飲んだ仲ですからお話ししましょう。ただし他言無用ですよ。このメス奴隷は私が未来から連れてきました。未来では、二代目スク水少女戦士ウテルスと呼ばれていますね。あなたたちとも関わりがあるとだけ言っておきましょう。未来の事はあまり知ってはいけませんので、これくらいにしておかないとタイムパラドックスが起きてしまいますからね」

理津子と麗華は、それならあなたは何者ですかという言葉を飲み込んでいた。それも答えられない質問だろうと察したからだった。

★　★　★　★

「あ、あの、トーナメントの勝負観なくてよろしいのですか、もう開始されると思いますよ」

黒スーツの女は、なんとか時間を作って逃げ出そうと考えるが葉月は女を引きずるように地下まで連れていき処刑室にポンと放り投げた。

「心配しなくても、どちらが勝つか私には分かっていますよ。調教師、メス奴隷とも、あまりに格が違いますよ。言ってみれば人間と蚤の戦いです。蚤などプチッと潰されておしまいですよ。それより、私のこの興奮を抑える方が先決です。また暴走してしまっては、さすがにみっともないですからね。そこで、あなたに協力して貰いますよ。くくっ」

葉月は残酷な笑みを満面に浮かべていた。そして、女の服を脱がしていく。

「おやっ、なんですか、これは？」

何かに気がついたように葉月は、女の顔を掴むとビリッと引き裂いた。すると、引き裂いた顔の下から、もう一つの顔が覗いていた。

「ずいぶん変わった趣味を持っているようですね。人の皮を被るのが趣味なんですか」

葉月は女の全身の皮を剥いでいくと、下からまったく別の女の姿が現れた。そして、その顔には見覚えがあった。

「なるほど、メス奴隷フウカはここにいたのですね。これはちょうどいい。私の塩酸プールを勝手に使用したのもあなたですか？名前と私の質問に正直に答えなさい。それによってあなたの運命が決まりますよ」

「わ、私は弥勒院風花。本家ではなく分家の一員です。塩酸プールを使ったのは私です。知ってる事は何でも話しますので、お助け下さい」

風花は、土下座して葉月の足に顔を近づけると服従の証のように、ペロペロと舐めていた。

★　★　★　★

佐瀬は、自分の出番まではまだ間があるので捕えた2匹のメス奴隷をオークションに持ち込み、性具の素材として出品して貰うように依頼していた。

「加工は俺がするから、道具として落札するよう手配してくれ。一匹はクリトリスが欠損してるから、それも説明するの忘れないように頼む」

佐瀬は、すっかり懇意になった赤いスーツの女、百目鬼に早口で依頼するとトーナメント会場に急いで戻っていった。

（注1）どちらもスク水少女戦士ウテルスの必殺技の1つ

（注2）ウテルスの世界での敵の名称であるが、本当の敵は別に存在している

（注３）ウテルスと共に戦う仲間の１人。圧倒的な戦力を誇る

９９、塗壁

９９、塗壁

アゲハはしずくの変貌に度肝を抜かれていた。控え室で見た時には普通のメス奴隷に見えた。この程度のメス奴隷がどうしてＡシードなのか疑問に思っていた。渡邉ゆかりの妹だとは知っていたが、それだけでシードになった自分以下のメス奴隷だと感じて、負ける気がしなかったが、それがどうだろう。実際対戦する時になって、その体から放たれるオーラに圧倒されていた。四肢切断されて入場している６９番の姿は、自分とは遥かにレベルの違うメス奴隷に思えた。自分の受けている調教など、６９番にしてみたら遊びのようなものなのだろう。アゲハは本物のメス奴隷の姿に、始まる前から心が折れてしまっていた。だがそれは調教師も同様であった。６９番の覚悟が乗り移ったかのように麗華の体から発散される気迫に調教師は自分など到底及ばない高い壁を見た。一回戦を勝ち抜いたアゲハ組であるが、葉月の予想通り戦う前からもう自分達の敗北を受け入れてしまっていた。

「それでは二回戦のルールを説明します。二回戦は一回戦より対戦数が少ないので、一回の対戦に時間がかけられます。そこで、二回戦はこのルーレットで出た拷問具を双方とも使用して頂きます。それでは、ルーレットを回しますね」

沙也加は回したルーレットに玉を入れる。そして、ルーレットが止まった時、玉が落ちたマスには鞭と書かれていた。

「この対戦の拷問具は鞭と決定しました。鞭はこの１キロ先にある焼却炉の前に用意されています。数種類の鞭が用意されていますので早い者勝ちで一本ずつ取って来て下さい。二回戦は総合的に勝負しますので、メス奴隷の拘束もそれからお願いします。それでは、メス奴隷６９番対アゲハ、開始」

沙也加の右腕が上がり、調教師はすぐに駆け出した。

・・早い者勝ちという事は先に鞭を選んだ方が有利になるに違いない。俺はあんな女に走りでは負けない。先に着いて一番有効な鞭を選んでやる・・

調教師が走り出した後、麗華は羽織っていたフード付きのマントを脱いでいた。そして、軽く屈伸運動をしてロケットのように飛び出していく。そして、調教師にあっという間に追い付いていた。

・・なんだ、この女。後から出て、どうして俺に追い付けるんだ・・

調教師は麗華を振り切ろうとするが逆に麗華に遅れをとっていた。麗華は調教師を抜いた後、さらに加速して余裕で先着していた。

・・なるほど、一本鞭や乗馬鞭、バラ鞭など色々ありますね。さて、どうしますか・・

麗華が悩んでいると調教師がようやくやって来て、ゼイゼイと苦しげな息をしながら、すぐに一本鞭を手に取り走っていった。

・・ふーん、相手は一本鞭を選びましたか。ずいぶん簡単に選んでいきましたが、よく見たのでしょうか、一本鞭にも種類があります

よ・・

麗華も鞭を手に取ると走り出した。麗華が戻ってきた時、調教師は６９番の残っている太ももにロープをかけ開脚逆さ吊りにしていた。そして、６９番の股間を見て驚きの声を発する。

「な、なんだこれは」

クリトリスのピアスに付けられた番号札で見えなかったが、こうして逆さに吊るして開脚して６９番の性器を見るとそこには左右の小陰唇を貫いて南京錠が装着されていた。それも１つではなく４つも。かなり大きく頑丈で重さもある南京錠だ。６９番の性器に南京錠が一列に並んでいる姿は異様なものだった。

・・貞操帯のつもりか。こんなもの装着してそこを鞭で打たれたら、小陰唇が引き千切れるぞ。馬鹿なのかこのメス奴隷。わざわざこんな物装着して、普段付けていても外してくるだろう・・

しかし調教師は、気を取り直して鞭を構える。

・・こいつが自分でこうして出て来たのだ。構うことはない。こいつのマンコ、ぶち壊してやる・・

調教師は、鞭を振り上げ６９番の性器に強烈な一撃を叩き込んだ。

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！」

６９番は絶叫し大きく反り返る。調教師は連続で鞭を６９番の性器に叩き込んだ。

ピシィ、ピシィ、ピシィ、ピシィ、ピシィ、ピシィ、ピシィ

「あびゃびゃびゃびゃびゃあぁぁぁっ、あっびゃあぁぁぁぁーーーっ！！」

６９番の絶叫が会場に響き渡る。６９番は大きく反り返ったまま、尿も漏らし始めていた。

ピシャッ、ピシャッ、ピシャッ、ピシャッ、ピシャッ

鞭の打撃音も変化し、鞭が６９番の性器に叩き込まれる度に尿の飛沫が周囲に飛び散った。６９番の顔は涙と鼻水で汚れ、絶叫する大きく開けた口には歯も見えなかった。どうやら６９番は全ての歯も抜歯されているようだった。６９番は激しく性器を鞭打たれ、尻に頭がつくほど反り返り絶叫している。その頃、麗華もアゲハを開脚逆さ吊りに吊り上げ鞭を構えていた。

・・鞭が選ばれたのは私にとっては幸運。あなたにとっては不運だったわね。鞭は私の得意とする得物、香坂雷鳴流の鞭術、味わって貰うわ・・

控え室でこの様子を見ているあの時自慰場にいたメス奴隷たちは、もうこれで勝負あったと思った。あの電光石火の見えない鞭。あれを性器に叩き込まれて意識を保っていられるメス奴隷など存在しないだろう。琴音も、この時ばかりは真剣にモニターを見ていた。あの時の麗華の鞭さばきを、もう一度目に焼き付ける。決勝で会う可能性の高い調教師である麗華の責めは、絶対に見ておく必要があった。

・・あの調教師は選択を誤りましたね。彼が選んだ一本鞭は革を編

んだ物、軽くてシャープな動きは肌を切り裂く凶悪な鞭です。対して私が持つ鞭はラバー鞭といわれる重い鞭。切り裂くのには向いていませんが、この鞭の一撃は革鞭の比ではありません。さあ、味わいなさい。そして、終わりです・・

麗華はラバー鞭をアゲハの性器に向かって打ち込んだ。ブオォォッという通常の鞭の風切り音とは異なる音だけが聞こえ、鞭の姿は見る事が出来なかった。

バキャッッッ!!!

鈍い音が響き渡る。なんとアゲハは絶叫する間も無く意識を刈り取られていた。麗華の鞭の一撃でアゲハの外性器は肉片となって飛び散り、恥骨や腰骨も砕けていた。

・・これは……。鞭に関しては義母(おかあ)さんでさえも負けるかも知れない・・

琴音はモニターの前で固まっていた。

★ ★ ★ ★

佐瀬は、あまりに早く決着がついてしまったので焦っていた。百目鬼から、依頼されていたメス奴隷の1匹がすぐに落札され、早急に加工して欲しいと連絡があったのだ。

・・あのメス奴隷、一発で失神なんてしやがって、情けないにも程があるだろう。もう少し粘れよ・・

佐瀬は心の中でアゲハに毒づきながら百目鬼に連絡をとっていた。

「そちらのロボトミーはすぐ終わるのか。ああ、それなら大丈夫だ。速乾性のブツを用意して現地に持っていってくれ。俺も直接現地に向かう」

佐瀬は改めて今日の対戦予定を確認する。

・・メス奴隷アゲハの処刑が終わったら次がメス奴隷シズカとヤチホの対戦だ。そして、次が俺の出番になる。処刑や対戦が俺の予想した時間ならば余裕があるが、今みたいに速効で終わってしまえば不味いな。間に合わなければ棄権と思われてしまう・・

佐瀬は駆け出して正門前に置いてあった自転車に飛び乗ると全速力でペダルを漕ぎ出した。そして、現地で百目鬼と合流する。

「ここの壁ですね。ここに埋め込んで欲しいようです」

「分かった。準備するからロボトミーの処置を済ませてくれ」

「分かってますよ。ここでは開頭している時間はないので穿孔術式で前頭葉の神経を焼きます。すぐ終わりますよ」

百目鬼はスーツケースからメス奴隷を取り出す。このメス奴隷は自分でクリトリスを引きちぎってしまったメスだった。口にガムテープを貼られたメス奴隷は、許してというように涙を溜めた眼で百目鬼を見つめるが、百目鬼はそのメス奴隷の頭蓋に小さな穴を空け、そこから細い電極を突き刺した。

パシッ

小さな音がしてメス奴隷の脳の処理は終わった。もう、ここにあるのは哀れにもただのメスの形をした物になっていた。それを佐瀬が壁の穴に突き入れ速乾性のコンクリートで塗固めていくと、すぐに壁から尻と性器だけが突き出たオブジェとなっていた。そして、壁の反対側ではメスの頭だけが壁から飛び出ている。最後に両方の壁に、このオブジェのネームプレートを取り付けた。そのプレートには「公衆便女」と書かれていた。

「よし、完了だ。すまない、急ぐのでこれで失礼する」

佐瀬は百目鬼に告げると自転車に飛び乗っていた。

「まったく忙しい男ですね。落札者に取扱い説明していきなさいよ。仕方ないですねぇ。まあ、でも見ただけで使い方は一目瞭然ですか」

百目鬼は壁から突き出た割れ目に針を刺してみた。すると反対の壁から悲鳴が聞こえた。

「よしよし、痛覚は無事機能していますね。ただのオナホールでは詰まらないですからね。痛めつけて苦しむ声が聞けるのが良いですよね」

百目鬼はニヤリと笑うと、これを商品名ライブウォールとして売り出そうかと真剣に考えていた。

・・教育や調教の手間がかかるメス奴隷より、素材さえ入手すれば簡単に商品化出来ますね・・

百目鬼は、壁から突き出たメスの尻を撫でながら思案していた。

１００、附子

１００、附子

「いやぁ、あっさり勝負がついたね。どうだい、同じブロックだから勝ち進んでいけば当たる可能性があるだろう。感想を聞かせてよ」

クラヤミが軽く花梨に話しかける。花梨は下着を着替えた後、律儀に食堂に戻ってきていた。そして、朝食はトーストとベーコンエッグで済ませたが今日はアルコールは控えて、甘くしてもらったホットミルクを飲んでいた。

「さすがにＡシードですね。ですけど、まだ分かりませんよ。私は今日の三戦目でメス奴隷リエが勝つと思っています。そうすると三回戦で６９番とリエが当たる事になりますが、リエの調教師佐瀬という男。この男が非常に危険だと感じています。Ａシードといえども油断していると不覚をとるのではないかと……。でも、それより、この処刑が終わった後の私の対戦ですよ。クラヤミさんは、どう見ていますか？」

クラヤミは逆に自分に振られて苦笑していたが自分の予想を疲労する。

「まあ、普通に考えればメス奴隷ヤチホの勝利だろうな。ヤチホのダメージも大きいが、それよりもシズカのダメージが大き過ぎる。これでヤチホが負けたとすると、それはメス奴隷のせいではなくて、

君が何かしくじったという事だね」

「私があんな調教師なんかに負けませんよ」

花梨は声を荒げるがクラヤミは平気な顔で、その油断が勝敗を分ける事があるからねと花梨を見つめていた。

★　★　★　★

会場ではアゲハの処刑の準備が進められていた。なるべく清掃が楽なようにしてくれると助かりますという沙也加の言葉で麗華は大きな強化ガラスの水槽を用意していた。人1人が楽に横になれる大きさで、麗華はその中に両腕を後ろ手に縛り、太ももにパイプの付いた腿枷を装着し足を閉じられなくなったアゲハを横たえていた。アゲハの外性器は麗華の鞭の一撃で消滅していたが、膣や尿道などはかろうじて残っていた。そして、ガラスの水槽に入れられてしまったアゲハはこれから自分がどんな処刑をされるのか、その恐怖で号泣していた。

・・怖い、怖い、怖い、怖いぃぃっ・・

一回戦は勝ち抜いたアゲハだが、今度は自分が敗れて処刑される側になってしまった。毎日、調教され痛めつけられていたアゲハだが処刑されるのは怖かった。負けたメス奴隷が処刑される姿を見てしまったのも良くなかった。自分が、あんな風に処刑されるかと思うと発狂しそうであった。

・・狂っちゃえば幸せなのに……・・

アゲハは発狂してしまえば何も分からず楽なのにと思うが、無情にも発狂を抑制する薬剤が乳首に注射される。

・・うぅ、嫌だ。もう、耐えられない。すぐに殺して下さい・・

アゲハはギロチンなどで首をはねられ瞬時に絶命する事を願うが、その願いが叶う事はなかった。そして、アゲハの処刑が執行される。アゲハの入れられている水槽に何かが入れられていく。アゲハは水槽に入ってくるそれを見て絶叫していた。

「なんだろう?動いているね」

「大小色々なものがにょろにょろ動いているけど……。にょろにょろ?」

観客の疑問に答えるように背後の大型モニターに拡大画像が映し出される。水槽に入れられたもの、それは様々な大きさの蛇だった。そして、蛇が入れられた後に、酒も水槽に注がれる。この酒で蛇は、さらに荒れ狂っていくのだ。

「ひいぃぃぃっ!」

アゲハは悲鳴を上げるが、その開いた口に蛇が雪崩れ込む。そして、鼻や耳、膣や尿道、肛門にもアゲハの穴という穴に蛇が入りこんでいた。蛇の鱗は前に進むには適しているが、逆に戻るには引っ掛かってしまい戻る事が出来ない。なのでアゲハの穴に入り込んだ蛇はどんどん体内深く入り込み、アゲハの体内を食い千切っていく。古来、実際に行われていた蛇責めの処刑を麗華が再現したものだった。この処刑の残酷なところはすぐには死ねないという事だった。ここ

に入れられているメス奴隷は長時間苦しみ抜いて絶命するのである。
アゲハはもう眼球も抉りだされ、眼窩からも蛇が入りこんでいた。
口や膣や肛門からはもう何十匹もの蛇が入りこんでいる。アゲハは、もう動く事もなくなりビクビクと体を痙攣させていた。そのアゲハの腹を食い破り何匹もの蛇が顔を出してきた。それを合図にアゲハの体の至る所から、蛇が顔を出す。

「香坂さん、これは助かりますね」

アゲハを水槽の中だけで無事絶命させ、清掃も楽な沙也加は上機嫌だったが、蛇が苦手な一部観客からは不評をかっていた。

★
★
★
★

「さて、私の出番です」

花梨が席を立つと、クラヤミが頑張って下さいと肩を叩いてきた。

「ありがとうございます。必ず勝ちますよ」

花梨が気合いを入れて食堂から出ていくと、入れ違いに理津子と麗華が入ってきた。麗華はアゲハの処刑を終え、医務室でしずくの様子を見た後、理津子と合流して朝食を摂りに来たようだ。

「お疲れ様、実は俺、爬虫類が苦手だったりするから今の処刑はけっこうきつかったな」

「あらあら、あんな残酷な事をする方が蛇が苦手とは意外ですねぇ」

理津子が笑いながら言うが、クラヤミは大真面目だった。

「メス奴隷の手足切断するのは大好きだけどね、元から手足ないのは気持ち悪いんだよ。そういえば、昨日69番の手足切断してる時、とんでもない事が起こったようだね。それがまだ残っているみたいで豪徳寺の奴、さっき一匹のメスを拉致して出ていったよ。今頃、そのメスを処刑して楽しんでいるかもな」

「まったく、いないと思うと酷い言われようですねぇ。まあ、否定できない面もありますが」

3人がぎょっとして振り向くと葉月が立っていた。そして、その足下には全裸で四つん這いになったメスが首輪に付けられた鎖を葉月に持たれ、おとなしく葉月の足を舐めていた。そのメスは目隠しをされ、鼻には鼻フックが装着され豚鼻にされている。そして、乳首とクリトリスにはピアスが挿れられ、そのピアスには錘が下げられていた。

「どうですか、私のペットにしてみました。どうやら弥勒院のイヌのようですが、今では私の従順なペットですよ。まあ、飽きたら処分して弥勒院に送り返してやりますがね」

葉月は得意気にペットにした風花を3人に見せつけていた。

「大丈夫ですか、ペットになったふりして、こちらの情報を探ろうとしているのでは」

理津子が心配したように言うが、葉月はまるで面白がっているようであった。

「このペットの体内や脳にはナノサイズの爆弾を注入してあります。この屋敷から離れたら自動で爆発します。さらに、この屋敷内でも仲間と会うような事があれば、その脳波を関知して爆発します。死にたくなければ私の命令を従順に聞いている他ないという訳です」

「へぇ、面白い。外に投げてみたくなるな」

クラヤミが言うと風花は怯えたように葉月の足にすり寄っていた。

「こらこら、私のペットを脅す気ですか。それに、このペットには名前をつけたんですよ。〝ブス〟と言います。ちゃんと名前を呼んで可愛がってあげてください」

「なんだ、その名前。そんなにブスじゃないだろう。でも面白いな。おい、ブス、お手」

クラヤミが面白がってブスに声をかける。ブスは床についていた右手を上げていた。

「ブス、おまわり」

それを見ていた理津子が面白がって言うと、ブスはくるくると回っていた。それを見て麗華もつい笑ってしまう。葉月は、さらに面白くしましょうと薄いアルミのケースを取り出し蓋を開ける。中には3本の注射器が入っていた。

「これは強力な媚薬の試作品です。これを1本射たれれば、どんなメスも発情して我慢出来なくなります。このブスに射って様子を見てみましょう」

葉月の提案に皆、それは面白そうと目をギラつかせていた。葉月はブスの会陰に注射針を深く突き刺すと、ヂューッと中身を全て注入してしまう。しばらくするとブスの息が荒くなってくる。そして、太ももを擦り合わせて必死に我慢しているようであったが、ついに手を股間に持っていってしまった。

「何をしているのですか、ブス。ペットのあなたが私の命令なしに、していいと思っているのですか。爆発させますよ」

葉月の言葉でブスは、また四つん這いに戻り必死にこらえていたが、乳首とクリトリスは硬く勃起し、太ももの内側が光ってみえる程濡らしていた。

「どうです、なかなかのものでしょう。ではもう1本いきますか」

葉月は、今度はブスの膣口と尿道の間、膣前庭に注射針を刺し媚薬を注入した。

「あぶぶぶぶうっ」

ブスは、声を上げ床を転げ回っていた。

「くだちゃい、くだちゃい、くだちゃい」

ブスは転がりながら葉月に懇願していた。

「なるほど、2本でこうなるのですね。毎日射ってずっと発情状態にしてあげますか。もう他の事は考えられないようにね」

「くだちゃい、くだちゃい」

ブスは、もう葉月の言葉も聞こえないようで尻を突きだし割れ目からポタポタと汁を垂らしていた。

「仕方ないですね。ではこれを挿れてあげましょう」

葉月が取り出したディルドゥは、あの周囲から針が飛び出す特大のディルドゥだった。

ズリュウゥッ

「はぶぶうぅぅぅっ」

ディルドゥは抵抗なく根本までブスの穴に入ってしまった。葉月はすぐに底のボタンを押してしまう。

パシュッ

「ぶびゃあぁぁぁぁーーーっ！」

プシャァーーーッ

ブスは膣内を無数の針で突き刺され、潮を吹きながら無様に失神してしまっていた。

「あーあ、床が大変だ。あのZクラスのメスが要望した改良済みの下着があるんだろう、豪徳寺。躾もかねて、このブスにそれを穿かせておけよ」

汚れた床を見てクラヤミが葉月に提案していた。こうして、風花は人間としての尊厳は奪われ葉月のペット”ブス”として過ごす事となった。

１０１、商品　ヤチホＶＳシズカ

１０１、商品

「それでは二回戦、第二戦目を開始します。メス奴隷ヤチホ対シズカ」

沙也加の号令で花梨は鎖を持ち、ヤチホを引き連れて入場する。ヤチホの性器は一回戦で斎藤によって大きなダメージを受けているが、ダメージという点では一回戦で延長戦まで戦ったシズカの方が大きい。シズカの性器はあの刃付きの一輪車でズタズタにされているので、一日のインターバルで回復しているとは思えない。そのシズカ側に勝機があるとすれば、ヤチホの性器のダメージも大きいので、シズカがやられる前にヤチホを速攻で失神させる以外なかった。その為にはルーレットで指定される拷問具が攻撃力の高い鞭や三角木馬になって欲しいとシズカの調教師は考えていた。

「それではルーレットを回します」

沙也加がホイールを回し玉を入れる。勢いよく回転していたルーレットが止まった時、玉が落ちた所には〝ニードル〟と書かれていた。

・・ニードル……・・

「長さや太さの違うニードルが用意してあります。勿論、早い者勝ちですよ。それでは、メス奴隷ヤチホ対シズカ、始め」

花梨と調教師は一斉にダッシュした。到着したのは調教師の方が早かった。調教師は素早くニードルの束を見回し、一番太く長いニードルの束を手にして、すぐに駆け戻る。とにかく、相手より早くメス奴隷ヤチホを失神させるのだ。幸いニードルなら、メス奴隷の意識を一発で刈り取る事も可能だ。調教師は、この長く太いニードルでヤチホの子宮を串刺しにするつもりだった。

・・一回戦の普通の針とは違う。ニードルはいわば処刑用の大型の針だ。これで、メスの大切な部分を串刺しにしてやれば、意識を手放すだろう。それで無理なら、あの豪徳寺がよくやる様に尿道から膀胱を串刺しにして腹から突き出してやる・・

調教師は、両腕を拘束されているヤチホをうつ伏せにして尻を高く持ち上げた。ヤチホは尻を突き出した格好をさせられ、調教師の目の前に性器と肛門を晒される。そして、調教師はニードルをヤチホの膣に挿れていく。調教師はヤチホを拘束する時間も惜しみ、このままヤチホの子宮を串刺しにするようだった。そこへ、息を切らせて花梨が戻ってきた。

・・あいつ、ヤチホの子宮を串刺しにするつもりだ・・

ヤチホのとらされている格好を見て花梨は瞬時に理解した。

・・ヤチホも私も舐められたもんだわ。私のメス奴隷ヤチホは、あの八千代の模倣。八千代は子宮に針を無数に刺されていた。当然ヤチホも子宮に針を刺す責めは経験済みだよ。ヤチホの変態ぶりに驚くがいいよ・・

花梨は、ヤチホなら子宮をニードルで串刺しにされても、ある程度

は耐えられると思っていた。

・・ニードルで思い出すのは豪徳寺が好んで行うアレだよ。尿道破壊に膀胱串刺し。あれはさすがにヤチホも経験がない。見経験の責めはメス奴隷に大きな衝撃を与えるから、ヤチホでも失神してしまうかもしれない。その前に私が、このメス奴隷シズカを仕留めないと・・

花梨はシズカを立たせて足を大きく開いた姿勢で拘束する。シズカの性器は一回戦のダメージでズタズタだった。

・・鞭だったら、このマンコに叩き込んで楽に勝てたのに・・

花梨はシズカの体の何処にニードルを突き刺すか思案していた。

★　★　★　★

「しずく、いや６９番と呼んだ方が良いのかな。起きてるか」

しずくはベッドの上で目を開けて声の主を見つめて驚いた顔をした。

「つぐみちゃん、どうしたの？」

「何年ぶりだろうな。このトーナメントの見学に来てたんだよ。そこで、しずくを見つけた。驚いたよ、しずくだけじゃなくて、叔母さんや理恵さんまで出場してるとはね」

「うん、私もびっくりしたよ。理恵さんやお母さんも出ているなん

て」

「しずくが羨ましいな。みんな同じメス奴隷なんて良い家族じゃない」

「うん、でも私は負けないよ。私はお姉ちゃんの妹だから、理恵さんやお母さんにも負けない」

「そうだね。でも一つ残念だな。そこに私がいない。私がいれば、私が勝っていたのに」

「えっ、つぐみちゃんも……」

つぐみは、しずくに目の前で穿いていた下着を脱いでいく。

「うっ、あっ……」

小さな声を上げ脱いだ下着をつぐみはしずくに見せていた。下着の股間、クロッチには長い針がびっしりと埋め込まれていた。

「それ、お姉ちゃんの……」

「私もゆかり姉の真似して穿いてるんだ。気持ちいいよね、これ。こんなトーナメントがあると知っていれば私もエントリーしたのにホントに残念だよ。悔しいからホントはしずくの顔見たくなかったけど、もうしずくと話す機会もないだろうからさ。しずくのこの姿見れば分かるよ。このトーナメントで処刑されるつもりなんだろう」

つぐみにズバリと言われてしずくは観念していた。

「やっぱり、つぐみちゃんは頭いいね。このトーナメントで優秀すれば、葉月さんが望みを叶えてくれると言ってた。だから私は優勝して、お姉ちゃんみたいに処刑してもらうの。マンコ、徹底的に壊してもらうんだ」

「やっぱりね、そんな事だと思ったよ。本当に羨ましいよ。こんな事なら、もっとしずくの家に遊びに行っていれば良かったな。そうすれば、このトーナメントの事も早くわかったのに……。ああ、いけない、もう時間だ。クラスの連中と見学に来てて、ここのメイドさんに許可を貰って来たんだ。もう戻らないと」

「うん」

しずくが軽く返事をすると、つぐみは手を振ってドアに向かって歩き出すが、途中でくるりと振り返った。

「今回は間に合わなかったけど、次回またトーナメントが開催されたら、私は必ず出場するよ。うちのクラスもけっこういいメス奴隷になれそうなの多いから、出場するメス奴隷独占するかもね」

つぐみは、そう言うと今度は笑みを浮かべてドアから出ていった。

★　★　★　★

ブスは、両腕を押さえつけられ仰向けにされていた。そこへメイドが新型の下着を持ってくる。葉月が広げて確認すると、つぐみの要望通り膣の位置に当たる数本が他の針の長さの倍以上になっていた。

「良くできていますね。早速ブスに穿かせてみましょう」

葉月は押さえつけられたブスの両足に下着を通し穿かせていく。ブスはまだ薬の効果が残っていて、その凶悪な下着を見ても、ずっと息を荒げているだけで反応がなかった。

「今度は足を開かせて、腰を持ち上げて下さい」

理津子と麗華がブスの脚を開き、クラヤミがブスの腰を持ち上げる。

「さあ、それではいきますよ。それっ」

「はぶうぅぅぅーーーーっ！！」

ブスの股間に針が深く突き刺さり、ブスは悲鳴を上げ暴れだした。両手で股間を押さえ理津子と麗華を振り払い転げ回る。

「おほぉ、なかなか強烈みたいだな。やっぱり、マンコから子宮まで針を刺されると気持ちいいのかな」

そのブスの様子を見ていた理津子が葉月に、あの下着はまだありますかと尋ねていた。

「私も穿いてみたいので、あるなら私にも譲って下さいよ」

理津子の、その言葉に麗華は驚いていたが、それなら私にもと葉月に申し出ていた。

「くくく、あなたたちも大概ですね。大丈夫、Zクラスの生徒にも穿かせる予定なので大量に用意してあります。あなたたちの評価が

良ければ売店にも並べておきますか。スタンダードな針付き下着と改良型針付き下着」

「それでは今すぐ試してみるので、早く用意して下さいよ、豪徳寺」

理津子に急かされて葉月はメイドを呼び、急いで下着を持ってこさせる。下着を受け取った理津子はすぐにレギンスを脱いで下着を脚に通していた。

「私のマンコに針先が当たってチクチクします。ここに針が刺さる訳ですね。これはドキドキしますね。興奮します」

理津子はがに股のように脚を開き呼吸を整える。

「ふう、ふう、ふう」

そして、下着の左右を掴み一気に引き上げた。

「おぶうぅぅぅーーーっ！」

理津子の性器に針が深く突き刺さり、理津子の太ももがぶるぶると震えるが、理津子は自分の股間に手を当て、さらに深く針を押し込んだ。

「おっ、ばあぁぁぁーーっ」

理津子は悲鳴を上げるが、興奮したように喋りだした。

「これは売れますよ、豪徳寺。マンコから子宮に電流が流れるように快感が走ります。これを一度穿いたら病みつきになるでしょう。

たまりませんよ、メスの大切なマンコに針が深く刺さっているかと思うと……。これをさらに改良するなら、針の表面に加工して棘を着けるとか、抜くときに苦痛を与えるように〝返し〟を着けるとかすると、もっと良いかも知れません」

「なるほど、さすが橘。参考にします。売店にはすぐに並べましょう」

葉月の指示で針付き下着はすぐに売店に並べられ、折しも対戦でニードルが使用されている事もあり飛ぶように売れていった。

１０２、卵巣

１０２、卵巣

「あうううぅぅっ」

ヤチホの声が聞こえる。どうやら、ヤチホは子宮を串刺しにされたようだ。一回戦で膣や子宮頸部を破壊されているヤチホの子宮その物も破壊されていく。だがヤチホはその激痛に耐えていた。

・・ヤチホ、頑張って。子宮なら経験あるから耐えられるでしょう。すぐにこのメス奴隷を仕留めてあげるから・・

花梨はシズカの卵巣に狙いを定めた。子宮はまだ調教される事がある。このメス奴隷も子宮を調教された経験があるかも知れない。あまり一般的ではないが針責めや酸責めバルーン責めなど子宮を責める調教が存在する。だが卵巣を責める調教などないだろう。不妊治療の一環として採卵の際に細い採取用の針を刺す事があるくらいだ。花梨はその卵巣をニードルで破壊しようと考えた。

・・このメス奴隷シズカのメスの機能を奪って失神させてやる・・

花梨は立たせたまま拘束してあるシズカの卵巣の位置を確認する。卵巣は臍の下、子宮の両側にある。花梨は選んできたニードルを手に持った。太く長いニードルは取られてしまったが、花梨の選んだニードルは一見普通のニードルだが、触ってみるとその表面にも棘

が生えている、刺した部分を破壊する凶悪なニードルだった。

・・こいつの二つの卵巣を完全に破壊してやる。その激痛も当然だけど、メスの大切な部分を破壊される精神的なショックも計り知れない。このメス奴隷はまだ若い。そのショックには耐えられないだろうよ・・

花梨は残酷な笑みを浮かべニードルをシズカの下腹部に突きさしていく。

「あうううぅぅっ」

シズカが恥骨の脇にニードルを刺され声を上げるが、その声をヤチホの絶叫が塗り潰していた。

「あびゃあぁぁぁぁぁーーーーっ！」

花梨は、そのヤチホの絶叫に驚いてヤチホを見た。

・・しまった、やられた。やはり、あの調教師も考えていたんだ・・

ヤチホの下腹部からニードルの切っ先が飛び出ていた。ヤチホは尿道からニードルを突き刺され、そのまま膀胱を串刺しにされ腹を突き破られたのだ。調教師は二本目のニードルをヤチホの尿道に突き挿れようとしている。

・・不味いよ、もうヤチホは耐えられないかも知れない・・

とにかく花梨は急いでシズカの卵巣にニードルをズブッと突き刺す。それも、ただ突き刺すだけではない。ニードルをひねりながら突き

刺していく。

プツッ

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！」

今度はシズカの絶叫が会場に鳴り響いていた。シズカの卵巣は貫かれるだけではなく、ニードル表面の棘によってズタズタにされ破壊されていた。しかし、シズカはその激痛と卵巣を破壊されたというショックに耐えていた。シズカにしても一回戦を延長勝負までして勝ち残ったのだ。この二回戦も勝つという強い意思で耐えていた。

・・くそっ、このメスしぶといな・・

花梨はすかさずもう一つの卵巣にもニードルを突き刺す。そして、突き刺した二本のニードルを持ち、グリグリと卵巣を抉っていた。

「あぶうぅぅぅーーーーっ！」

シズカは天を仰いで悲痛な声を上げるが、それでもまだ耐えていた。

・・このメス奴隷、卵巣を破壊したのにまだ耐えている。なんという執念なの。このままでは不味いよ・・

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！」

再びヤチホの絶叫が響き、花梨はビクッと体を震わせた。ヤチホの下腹部を二本のニードルが突き破り血塗れの顔を出している。

・・不味い、不味い。ヤチホがやられちゃうよ。もう、こいつの体、

何処でも良いから串刺しにしちゃおうか。でも、それじゃ殺しちゃうかもしれない・・

花梨は、シズカのズタズタの性器を見つめる。もう何処が膣か尿道かも分からない状態だ。花梨は焦っていた。

★
★
★
★

「ありがとうございました」

つぐみはＶＩＰルームに戻り、メイドに礼を言っていた。

「まさか、あなたも６９番の血族だったとはね。まあ、それで色々納得ですよ。そうそう、あなたが要望した改良した針付き下着が届きましたよ。さっそく試してみますか」

「あっ、はい。すぐに穿いてみます」

つぐみはメイドから下着を受け取ってクロッチを見る。そこにはつぐみが要望したように膣の部分の針は、他の場所の針よりも倍近い長さになっていた。つぐみは、その鋭い針を見て興奮し息が荒くなっていた。

・・この針が私の子宮に刺さるんだ。どんな感じだろう。私、子宮に針を刺した経験はないからドキドキするよ。女の子の大切な子宮に針を刺すんだ。今日は私の記念日だね・・

つぐみは今まで穿いていたスタンダードの下着を脱ぐと、改良型の

下着を穿いていく。それを桃子たちは息を飲んで見つめていた。つぐみは、太ももまで下着を引き上げて、ふと何かを思い付いたようで桃子たちに目を向ける。

「ちょっと、この下着を穿かせてくれないか。自分で穿くより、無理矢理穿かされた方が処刑されるみたいで興奮するから、桃子と詩織で両側から引き上げてよ。栄子は、その後私のマンコをそこのスパンキング板で打ちつけてくれる」

つぐみの言葉に桃子と詩織は退いていたが、栄子はスパンキング板を持ち笑みを浮かべる。

「面白いじゃない御門。あんたのマンコ、壊してやるよ」

栄子からも、早く下着を穿かせなさいと命令され桃子と詩織はつぐみの左右に立ち下着を掴む。つぐみは脚を開き、両手を頭上に上げ、自分の性器を襲う激痛を想像し、激しく性器を濡らしてしまっていた。

「ハァハァハァ、早く、早く、壊してぇ」

つぐみは、しずくの姿を間近で見た事で我慢も限界にきていた。もう自分も性器を壊されたい。その思いで頭が一杯だった。

★ ★ ★ ★

豪徳寺家の事務スタッフの女性が、二日目までのトーナメントの収支をまとめていた。

・・これは凄いです。入場料や売店の売上げ、それに動画の予約、処刑したメス奴隷の性器の部分販売や加工肉などに、沙也加様が使用したおかげで処刑台も、今までにない売上げになっています。今回のトーナメントは、いつものメス奴隷を購入して行う公開処刑と違い、メス奴隷の方からエントリーしてきていますので利益が大きいですよ。今回入手したのは、あの中学生のメス奴隷くらいですからね。経験のない中学女子など微々たる金額で入手出来ますから、営業スタッフも仕事が楽だと喜んでいますし、葉月様も大喜びでしょうね・・

女子事務員は、書類をまとめバックに詰めると葉月に報告するため席を立った。そして、廊下に出て食堂に向かう。すると、前方からフードを被った男が歩いて来た。女子事務員はトーナメントに参加している調教師かと思い、廊下の脇に寄り頭を下げて挨拶していたが、その事務員が頭を下げた瞬間、男は事務員の鳩尾に拳を叩き込んでいた。

「おぼうっ」

事務員は悶絶して倒れるところを男がだき抱え、そのまま連れ去っていった。

・・風花と連絡がとれない。何かあったに違いない。この女を締め上げて吐かせるしかないな・・

男は、豪徳寺の屋敷から抜け出し、確保した女を拷問し情報を得ようと考えていた。

１０３、拷問

１０３、拷問

女性事務員を連れ去った男は、自分の所有するビルの地下に女の体を横たえた。その両腕は拘束してあり、この殺風景な部屋から女が逃げられる可能性はなかった。そして、男はじっくりと女の体を確認する。グレーのスーツを着た、ごく一般の事務員のようだ。ストレートの黒髪が肩までかかっている。顔は何処にでもいる地味な顔だが、不細工という訳ではない。年の頃は三十路前といったところか。男はニヤリと笑みを浮かべた。

・・この女なら拷問に耐性などないだろう。すぐに情報を吐いてくれそうだ・・

男の名前は弥勒院天道。弥勒院本家の長男だ。天道は女のスーツの上着を脱がし、スカートも脱がしていく。スカートの下からは黒いパンティストッキングに包まれた肢体が現れた。

・・ほお、服を脱がせるとなかなか良い身体だ。このストッキングに包まれた股間からはメスの匂いが発散しているな。くくく、せっかくだ、拷問で壊す前に犯してやるか・・

天道は、女の股間に手を伸ばしストッキングの上から触れてみた。

「んっ？」

天道は違和感を感じていた。そこには柔らかい性器があるはずだが、手で触れた感触は何か固いものだった。

・・なんだ、いったい・・

天道は、女の下着の中に手を入れ確かめてみる。何か金属の塊のような物が幾つもある印象だった。

・・貞操帯か？・・

天道は、ストッキングを脱がさずに股間の部分を下着毎ナイフで切り裂いてみて驚愕した。それは確かに貞操帯であったが、こんな貞操帯は見た事もなかったのである。女の性器には左右の小陰唇を貫いてゴツい南京錠が幾つも装着されていた。

・・豪徳寺の奴がやったのか。この事務員のマンコを使用させない為に。でも、こんな貞操帯、小陰唇毎切断すれば何でもない。おそらく男に犯されるのではなく、この女が自慰出来ないようにしているのだろう・・

天道は、すぐにキッチンバサミを用意してきて、この南京錠を取り除く作業を始めた。南京錠が装着されている部分の小陰唇を切断していく。

ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ

「あひゃぁぁぁぁーーーっ！」

小陰唇を切断される激痛に女が気付き悲鳴を上げていた。しかし、

男は構わず女の小陰唇を切り、南京錠を外していく。

「まったく、こんな物を幾つもマンコに付けて変態か」

「それは葉月様が私に付けた物。私の穴は葉月様のものなのに。それを勝手に外したら葉月様に殺されるわよ」

女は泣きながら男を睨みつけるが、男はそんなこと知ったことではなかった。そして、女の膣に指を入れてみる。

「驚いたな、この年で処女かよ。特別天然記念物だな。いや、数の少なさでいったら絶滅危惧種か」

天道が指で刺激していると、あっという間に膣は洪水になっていた。

「こんな貞操帯をつけられているから、余程溜まっていたようだな。心配するな、俺が満足させてやるよ。このストッキングを穿いたまま犯してやるよ。たまらんな、この太もも。生身の脚よりずっと良い」

天道が自分の物を女の膣口に当てる。その硬く熱い感触に女は体を動かし激しく抵抗するが、男の力の前ではそれは無駄な抵抗だった。

「やめてっ、私の穴は葉月様のものと言ったでしょう。そこは、私の穴ではないのっ」

ズリュッ

「あっ！！！！！」

しかし、天道は女の膣に深く挿れてしまう。そして、腰を動かし出した。

「あふっ、あふっ、あふっ、葉月様の穴なのに……。もう、私は殺される。あなたも間違いなく殺されるわ。あうぅぅぅっ」

女は天道に犯され声を上げはじめていた。だんだんと抵抗も少なくなり、そのうちに自分から腰を使い出した。

「おっ、おっ、おっ、おっ、おっ」

女の嬌声と、男と女の肉が擦れあう淫靡な音が地下室に響いていた。女はもう初めての快感に虜になっていた。女の膣穴からは果てしなく粘液が溢れだし、子宮が降りてくる。その子宮を天道のイチモツが激しく突き上げていた。

「いぐっ、いぐっ、いぐうぅぅぅっ」

女は無様なアヘ顔を晒し絶頂に達しようとしていた。天道もまたその女の痴態に興奮し放出寸前だった。

「おふうぅぅっ」

プシャァァーッ

処女膜を貫かれた女は無様に潮を吹き果てていた。

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

女が果てたとほぼ同時に天道も女の穴の中に放出していた。しばら

く惚けていた女だったが、自分が破瓜を迎えたと同時に、自分の中に射精されてしまった事で半狂乱になっていた。

「葉月様の物を勝手に使用して汚してしまった。一度も使用していない事に価値があったのに……。私のマンコは使用されないまま処刑すると言って下さっていたのに……。そのマンコが汚れてしまいました。葉月様ぁ、もう汚れた私のマンコを破壊して絶命させて下さい」

「くだらねえな。豪徳寺葉月というのは処女信者か。マンコを汚された？それなら、もっと汚して壊してやるよ」

天道は女の頬を平手で何度も打つと、女を無理矢理立たせブラウスを脱がしていく。ブラウスの下には、スポーツブラに包まれた小さな胸の膨らみがあった。

「年のわりには小さいが形の良い胸だな。しかし、スポーツブラとは色気がねえな。まあ、処女では仕方ないか。これから、お前の女の場所、マンコと胸を壊していってやるよ。女に生まれた事を後悔するほど苦しめて少しずつ殺してやる。だがな、俺にとって有益になる情報を言えば楽に殺してやるよ。よく覚えておくんだな」

凄みのある天道の声で女は震えあがっていた。葉月に南京錠の貞操帯を装着されていたとはいえ、女はメス奴隷ではない。ごく普通の事務員である。つぐみやしずく、琴音であれば性器を壊されるとなると逆に喜んでしまうが、女にとってそれは恐怖でしかなかった。

「きちんと全部壊してやるから心配するな。外性器だけじゃなく、膣や子宮、卵巣も壊してやるよ。胸も痛め付けた後、抉り取ってやるからな。お前は女ではなくなって死んでいくのだ」

女の体はぶるぶると震え、女は子供のように大声で号泣していた。

★　★　★　★

花梨は、シズカを仕留めようと頭を悩ませるが、何処を責めたら良いのか見当がつかなかった。その間にも自分のメス奴隷ヤチホはどんどん追い詰められていく。

・・ヤバいよ、このままじゃ負ける。こんな半死半生の幼いメス奴隷も仕留められないなんて・・

花梨は改めてシズカの状態を見る。シズカの性器はボロボロで卵巣も破壊されている。しかし、シズカは必死に耐えていた。シズカの幼く可愛い顔は涙と鼻水で激しく汚れていた。

・・そうか、私はマンコに拘り過ぎていた。メスにとって大切なのはマンコだけじゃないよ。私の持ってきたニードルは棘付きだ。突き刺しただけでグズグズに破壊出来る。これで、このメス奴隷の顔面を破壊してやるよ。幼く経験のないメス奴隷だ。この顔なら自分で自信を持っているだろう。そこを二目と見られないように壊してやるよ。自分の容姿に自信があるほど絶望とショックで心が折れるだろう・・

花梨はシズカの頭を押さえると右頬にニードルを突き刺し、そのまま口腔を突き抜け左頬まで突き出していた。

「はびゃあぁぁぁぁーーーーっ！」

絶叫するシズカの頬に花梨は二本目のニードルを突き刺し抉る。そして、シズカの口を開け舌を摘まむと、そこにもニードルを突き刺した。だが、花梨の責めは終わらない。シズカの上唇と下唇を合わせてニードルで突き通す。

「うぐうぅぅぅっ！」

何本ものニードルで唇を貫通され塞がれてしまったシズカは瞳から大粒の涙を流し号泣している。

「ほら、早く失神しないと自慢の可愛い顔が二度と見られない化け物のような顔になるぞ」

そう言いながら花梨はシズカの鼻の穴にもニードルを突き刺し、そのまま鼻をニードルで貫く。シズカの鼻の上にニードルの先端が突き出ていた。自分の目の前に鼻を突き抜けて飛び出してきたニードルを見てシズカの眼は大きく開き焦点が合わないように震えていた。そして、次の瞬間シズカの瞳はクルッと白眼を剥いていた。

１０４、指切

１０４、指切

「ビクトリー、ヤチホ」

沙也加の宣言を聞いてようやく花梨は安堵の息を漏らした。ヤチホの姿を見ると、３本のニードルの切っ先が下腹部から飛び出している。おそらく尿道は裂け、膀胱の機能も破壊されているだろう。よくあの責めに耐えてくれたと花梨は心の底からヤチホに感謝していた。そして、敗れたシズカは気付け薬が嗅がされ意識を戻される。シズカは破壊された自分の顔の激痛で、また絶叫していたが、ようやく自分が負けた事を理解すると号泣していた。それは、体を襲う激痛はもとより、自分が負けてしまったという精神的なショックも大きかった。

・・ごめんなさい、マユミさん。あなたに勝って二回戦に進んだのに私はもう負けてしまった。許して下さい・・

シズカは、自分に負けて処刑されたマユミを思い涙が止まらなかった。明暗を分けたあの時、処刑されるマユミと医務室へ運ばれるシズカは、そのすれ違いざま目が合った。

・・必ず次も勝って下さい・・

・・大丈夫、絶対勝ちます・・

二人はお互いの目を見て、そこに確かな意思を感じとっていた。それは、古来の指切りに似た約束。古来、遊廓の遊女が客に小指を切って渡したのが発端とされる〝指切り〟。それは本当に大切な約束。シズカとマユミは、あの刹那、間違いなく心の中で指切りをしていた。

・・約束を違えた私は処刑される。マユミさん、ごめんなさい。私が処刑される姿を、天から楽しんで許して下さい・・

シズカが最後に思う事、それは命をかけて競い合ったマユミとの約束を守れなかった謝罪の気持ちだった。

★　★　★　★

つぐみは桃子たちに改良型下着を穿かされて、股間に手を当て絶叫してのたうち回っていた。

「いだあぁぁっ、いだいよおぉぉっ！」

子宮の奥まで針で刺され、惨めにもつぐみは尿を漏らし、大便も少し漏らしてしまっていた。

「なんだ、御門。みっともない姿だね。せっかくの新品のパンツ、汚しちゃって……。これじゃ私がスパンキング出来ないよ。口ほどにもない雑魚奴隷みたいだわ。ちょっと、御門の手をどかして縛っておきな」

栄子が桃子たちに命令するが、二人はなかなか動こうとしない。

「なにやってるの、早く御門の腕を縛りなさいよ」

栄子の剣幕に桃子と詩織は仕方なくつぐみの腕を縛りあげていた。さすがに子宮まで針で貫通されて、余程の激痛なのだろう。つぐみは抵抗も出来ず二人に両腕を縛られていった。

「よし、それじゃあ、御門を仰向けにして足を開かせて押さえときな」

二人は意味が分からず、それぞれ左右の足を開かせてがっしりと押さえつけた。その股の間に栄子が入ってきて、屈みこむ。栄子は右手にスパンキング板ではなく、金槌のような物を持っていた。そして、左手には黒くて太く長い五寸釘を持っている。

「さあ、御門。お望み通り、お前のマンコ壊してやるよ」

桃子と詩織が、まさかと目を見開く中、栄子はつぐみの恥丘に五寸釘を当て金槌を振り下ろしていた。

ガンッッッ！

「おぎゃあぁぁぁぁーーっ！」

五寸釘はつぐみの恥丘に突き刺さり、つぐみは目を拡げて絶叫する。しかし、栄子は構わず金槌でつぐみの恥丘に五寸釘を打ち込んでいく。

ガンッ、ガンッ、ガンッ、ガンッ、ガンッ、ガンッ、ガンッ、ガンッ、ガン

ッ！

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！」

つぐみの絶叫が響き、金槌で五寸釘が打ち込まれる度につぐみはピュッピュッと尿を漏らしていた。そして、栄子は実に楽しそうにつぐみの恥丘に五寸釘を根元まで打ち込んでいた。

「んっ、なんか臭いね」

栄子が、クンクンと鼻を動かしていると桃子がつぐみの股間を指差していた。つぐみの下着に茶色い染みが出来、もりもりと盛り上がっている。つぐみは、恥丘に五寸釘を打ち込まれ、大便を大量に漏らしてしまったようだった。

「汚ないメスだね。ウンコ漏らすなんてなってないよ。これは、もっとお仕置きが必要だね」

栄子は2本目の五寸釘を手に持つと、打ち込んだ1本目より少し下に釘を当てた。

「もう、ゆるじでぐだぢゃい。ももこ、しおり、たぢゅげでえぇぇぇーーっ」

つぐみが泣きながら懇願するが、栄子はつぐみの口にガムテープを貼ってしまう。それも、念入りに何重にも貼り付けていた。

「うるさいよ、御門。お前の大好きなマンコ処刑をしてやるんだ。大人しく壊されていな」

吐き捨てるように栄子はつぐみに告げ、金槌を振り下ろしていた。

ガイーーンッ！

「ふぐうぅぅぅーーーっ！」

つぐみは塞がれた口で絶叫し、嫌々というように首を振るが、栄子は容赦なく金槌を振り下ろす。

ガンッ、ガンッ、ガンッ、ガンッ、ガンッ、ガンッ、ガンッ、ガンッ！

「ふぐぐぐっ」

つぐみの眼から大量の涙が溢れ、鼻水も流れだし、苦痛に歪むつぐみの顔を見てメイドは興奮していたが、ようやくハッと気がつく。

パン、パン、パン

栄子が3本目の五寸釘を手にしたところでメイドが手を叩き歩いてきた。

「はいはい、そこまでです。あなたたちはまだ調教師でもメス奴隷でもありません。ただ変態の中学生です。ここまでにしておきましょう。これ以上やると、罪に問われますよ。葉月様でも守りきれません。ここから先をやりたいのであれば、この御門つぐみをメス奴隷にして、あなたが調教師になる必要がありますよ。調教師になるにはメス奴隷を手に入れなければなりませんからね。相当な資金が必要となります。昔から調教師は富豪の人間が多いですね。このトーナメントに出場している斎藤氏や神無月さんも富豪の家の者です

し、他の方も裕福な家の者ですね。裕福だから調教師になるのか、裕福な家の者は頭がおかしい者が多いのか分かりませんけれどね」

メイドは間に入って栄子の行為を止めると、つぐみを医務室に運ばせていた。

・・ふむ、これで医務室にいる渡邉しずく、６９番とゆっくり話せるでしょう。もうすぐ別れがやってきます。それまで、しっかりと６９番の系譜を受け継いでおいて下さいよ・・

メイドは御門つぐみこそが次のメス奴隷の筆頭になるのではと密かに期待していた。ゆかり、しずく、つぐみ、その流れを想像するとメイドは自然に笑みが溢れてきていた。

★
★
★
★

シズカは自分の処刑の準備が整うのを涙が滲む目で眺めていた。

・・私のマンコで残っているのは、もう子宮だけだ。たぶん、そこを壊されるんだろうな。怖い、怖いよう。マユミさんも怖かったよね。私が、そっちに行ったら一杯お話しして下さい・・

シズカは拘束用の頑丈な椅子に縛り付けられていた。そして、沙也加のアナウンスが響く。

「それでは、やぶれましたメス奴隷シズカの処刑を執行致します」

観客席から、わーっという歓声が上がる。つい先刻、処刑されたア

ゲハの無様な死に様が脳裏に残っている観客は、これから処刑されるシズカの惨めな姿を期待して大いに盛り上がっていた。そこへ、観客席から白い下着を穿いた女が駆け寄ってきた。下着以外全裸の女は沙也加を突き飛ばし、シズカに近寄ると、シズカの舌と唇を貫通しているニードルを乱暴に抜き取っていた。ニードルの表面の棘がシズカの舌と唇をズタズタに引き千切っていた。

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！」

シズカが絶叫するその口へ女は手に持っていたディルドゥを突き刺している。シズカは喉奥までディルドゥを突き挿れられ天を仰いで苦しんでいた。

・・いけない、あのディルドゥは・・

沙也加は、女の体をシズカから引き離そうとし、花梨も慌てて女の体に飛び付いていた。他のスタッフも駆け寄ってくる。しかし、女はディルドゥの底面についたボタンを押していた。

パシュッッ！！

乾いた音が会場に響き渡る……。

１０５、無惨

パシュッッ！

乾いた音が響き、初めは何が起こったのか分からなかった観客も次第にその意味が分かってきた。

「こ、これ演出なんだよね。あのメス奴隷、まだ生きてるよね」

「いや、口の中で無数の針が飛び出したんだぞ。生きていられる訳がないよ」

観客たちも、あまりにあっけないシズカの最後が信じられないでいたが、シズカは脳と延髄を貫かれもう既に絶命していた。

「貴様ぁ……。塩酸プールを運んできなさい、早くっ！」

沙也加は激怒して叫んでいた。数名のスタッフが慌てて走り出していく。沙也加の怒りは凄まじく、取り押さえられた女の顔面を容赦なく殴打していた。その悪魔のような姿には花梨でさえも一歩退いていた。

・・この糞メス、ぶち殺してあげます。こんな大失態をしでかしては葉月様にあわせる顔がありません。貴様を殺して、私も死にまし

ょう・・

沙也加の殺気の篭った恐ろしい目に、花梨やその場のスタッフは動く事すら出来ずにいた。

★　★　★　★

「ありゃ、これは神楽坂さん、自分も死ぬ気じゃないか。あのメスと一緒に塩酸プールに飛び込む気だろうね」

クラヤミの言葉に葉月はため息をついていた。

「まったく、短絡的過ぎますね。そこが神楽坂さんの良い所でもありますが、彼女にはまだ働いて貰わねばなりません。だいたい初めて開催したトーナメントです。予想外のトラブルもあるでしょう。でも、その全てに責任を問う訳ではないですよ。責任があるとしたら主催者の私の落ち度です」

「おやおや、豪徳寺も随分丸くなったものだ。気をつけた方がいいな。急に善人になったりすると、死亡フラグが立つぞ。弥勒院に不覚をとる事も考えられるな」

「くくく、クラヤミ。あなたの方こそどうしたのです。どんなメスでも容赦なく処刑してきたあなたが人を心配するなど考えられませんね」

葉月に言い負かされクラヤミは苦笑していたが、席を立つとラガーをグイッと一気に飲み、止めてくるわと歩いて行った。

「ほう、あのクラヤミが人の為に動くなど信じられませんよ。まぁ、飲み友達がいなくなるのが寂しいだけかも知れませんね」

葉月がそう言った時、葉月の足元にいたブスもクラヤミを追って飛び出していた。葉月は突然の事で鎖を握り直そうとしたが間に合わず、ブスはクラヤミを追って出ていってしまった。

「まったく、ブスの奴。クラヤミにすっかり餌付けされましたね」

葉月の言葉で理津子たちは、クラヤミがブスにビールを飲ませたり、おつまみを食べさせていた姿を思い出していた。

「あの馬鹿、昔から人間のメスには容赦ないくせに動物にはまるで態度が違いますからね。ブスも本能的に気がついたのかもしれませんね」

クラヤミとブスが飛び出して行った出入り口を葉月は見つめていた。

★　★　★　★

会場では、まだ沙也加が女を殴り続けていた。女はぐったりとして、もう意識がないようだったが沙也加の怒りは治まらず、殴る拳は止まらなかった。

「あの女、メス奴隷の処刑が開始される時、やたらに興奮して売店で買った下着を穿いたんだよ。そう、針付きの下着。それで、声をあげたと思ったら突然飛び出して行ったんだ。売店で買ったディル

ドゥを握りしめてね。頭がおかしくなったとしか思えないよ」

「耐性の低いメスが処刑を見て、針付き下着を自分で穿いて発狂したのかもね。馬鹿なメスだわ。そんなメスがトーナメントを楽しもうなんておこがましいわね」

観客席がざわついている中、塩酸プールが重機で運ばれてきた。巨大な水槽に塩酸が満たされている。沙也加はぐったりとしている女に気付け薬を注射し意識を取り戻させるとスタッフに持ち上げさせる。

「この、糞メス。葉月様のトーナメントの邪魔をするなど万死に値する。この塩酸プールで死ぬまで泳ぎなさい」

沙也加がスタッフに向かってパチンと指を鳴らすと、女は塩酸プールに投げ込まれた。

バシャッ

「あぎゃあぁぁぁぁーーーーっ！」

絶叫しながら女は手足をバタつかせ必死にプールから上がろうとするが、スタッフがそれを許さない。棒でつつかれプールの中央に押し戻されてしまう。女はそれでも必死に暴れていたが、その動きにだんだんと力が失くなり、やがてプールに沈んでいった。プールは赤黒く染まり、ジュワーッと白い泡がたち、刺激臭が辺りに漂っていた。女の最後を見届けた沙也加は、プールの縁に立ち今度は自分が飛び込もうとしていた。そこへクラヤミとブスが駆け寄ってくる。

・・いけない、これは間に合わない・・

クラヤミが諦めかけた時、ブスがクラヤミの脚にぶつかってきた。
そして、走りながらクラヤミの顔を見つめる。

・・そうか、これだ・・

クラヤミはブスを持ち上げると沙也加に向かって思い切り投げた。
ブスは沙也加にがっしりと両腕、両足で抱きつくが、そのぶつかった勢いで沙也加とブスは塩酸プールに落ちていく。がしかし、ブスの首輪に付けられた鎖をクラヤミが思い切り引いていた。

ドスンッ

沙也加とブスは鎖で引かれ塩酸プールの外に落ちていた。ちょうど会場に戻ってきた佐瀬は、この場面に直面しいったい何事なのかと頭を悩ませていたが、これから自分の出番の為、準備を整えようと控え室に飛び込んで行った。

★　★　★　★

天道は号泣する女事務員をまだ犯していた。地下室に肉と肉がぶつかるびしゃびしゃという淫靡が音が響いていた。女事務員は何度も何度も自分の内に射精され惚けたように動かなくなってしまっていた。

「具合のいい穴だったが、もう終わりだな。ゆるゆるになっちまったよ。そろそろ拷問に入るか」

天道はぐったりとしている女を定番の開脚逆さ吊りにしていく。女はブラとパンストを穿いたまま吊られていた。

「いいねぇ、このメス、よく見るといいじゃないか。これが豪徳寺の好みなのか」

天道は逆さに吊られた女の姿を見て興奮していた。

「俺もさ、メス穴を壊すのが趣味という点では豪徳寺と一緒なんだよ。あんなくそ女と同じ趣味なのは癪に障るがな。どうやら、このマンコ、豪徳寺が壊すつもりだったらしいが、俺が先に壊してやるよ」

天道は喋りながら女事務員の口に布を押し込みガムテープを貼り付け塞いでいく。そして、目の上にもガムテープを貼りつけた。

「俺はこうして縛られて抵抗も出来ず、口も塞がれて助けも求められないメスのマンコ壊すのが好みなんだよ。そうそう、ストッキングも穿いたままがいいな。やはり、色は黒だろう。それ以外なら脱がした方がいい。じゃあまずはマンコ針責めだ。初歩の初歩だからな。メス奴隷ではない素人のメスでも経験あるだろう。まあ、こいつはどうか分からんがな。針山にされたマンコの無惨な姿は大好きだからな、この一箱５０本は突き刺してやるよ」

天道は針を持つと、女事務員のクリトリスを摘まみ刺激する。女の意思とは関係なくクリトリスは硬く勃起してきてしまっていた。

「よーし、まずはクリトリスだ」

天道は女事務員のクリトリスの横に針を当て、力を込めていく。

プツッ

「ふごうぅぅぅっ」

女事務員が呻き声をあげるが構わず天道は針でクリトリスを貫通させる。そして、針をもう1本とると女事務員のクリトリスに交差するよう十字に針を貫通させていた。さらに今度はクリトリスの頂点から針を刺し、そこから女事務員の体の奥まで深く針を突き刺していた。

・・うぅ、深いぃぃっ・・

女事務員はクリトリスを縦に深く針を突き刺され、体をビクビクと痙攣させていた。

１０６、片吊　リエＶＳミホ

１０６、片吊

佐瀬は控え室で、ようやく何が起こっていたのか理解した。

・・観客も馬鹿だし、運営も馬鹿だな。どんなイベントでも興奮した観客が飛び込んで来るなど普通に考えられるだろう。お粗末な事だ。殿様商売をしているからこんな事になる。俺はあの時の事は忘れない（注）貴様らを見返してやる・・

佐瀬はギリギリと歯ぎしりしながら理恵の首輪についた鎖を握った。そして、控え室を出ていく。佐瀬にとっては今日の二回戦など眼中になかった。次の三回戦、しずくとの対戦が一つの壁だと考えていた。佐瀬も当然、渡邉ゆかりの事は知っている。その妹であるしずくは佐瀬にとっても脅威を感じる相手であった。

・・あのメス奴隷に有効な責めがまだ見つからない。一発で失神させるのは不可能だろう。それに、なんだあの調教師は、今まで聞いた事のない名前だが、どこかで名の通っている者に間違いない・・

佐瀬は、麗華の鞭にも脅威を抱いていた。理恵が麗華の責めにどれだけ耐えられるか、その間に自分がしずくを仕留められるか、そこにかかっている。そして、次の三回戦さえ突破出来れば決勝まで進めるだろうと目論んでいた。

・・当然、Ｂブロックは豪徳寺の組が出てくるだろう。そこで俺が勝利して、俺の名前を世間に轟かせるのだ・・

佐瀬は、もう自分が勝利したように微笑み、理恵の鎖を引いて会場への通路を歩いていた。

★
★
★
★

「つぐみちゃん、大丈夫なの」

「ああ、大丈夫だよ、しずく。上手く誘導して私のマンコ、クラスメイトに壊して貰おうとしたんだけど、どうやらメイドさんに見抜かれていたみたい。止められて、ここに連れて来られちゃった」

「もう、つぐみちゃんはメス奴隷じゃないんだから、そんな事しちゃダメだよ。医務室に運ばれるなんて何しちゃったの」

「たいした事じゃないよ。マンコと子宮串刺しにして、恥丘に五寸釘打ち込まれたんだ。まだ釘が打たれたままだからズキズキ痛いよ。ここで抜いてもその後の治療が出来ないから、病院に連れていくと言われたんだけどさ。そうするとトーナメントが見られないじゃない。だから、今日の対戦が全部終わるまで待って下さいってお願いしたんだよ。だから、こうして大人しく抗生物質の点滴射たれてる」

さらっと言うつぐみにしずくは苦笑していた。

「もう、つぐみちゃんも大概にしないと私みたいに戻れなくなっちゃうよ。私はもう戻れない。ううん、戻れないようにこんな体にし

て貰った。つぐみちゃんはまだ間に合うから」

「悪いな、しずく。残念だけど私はもうずっと前から進んでいて、もう戻れない。私も頭がおかしいんだよ。考えるのは自分のマンコを壊される事ばかりだ。それ以外考えられない。だから絶対メス奴隷になる。その道をゆかり姉は教えてくれたんだ」

「つぐみちゃんもなの……。その気持ちは分かるから、もう何も言えないよ。じゃあ、一緒にここでトーナメント観ようか」

ベッドの頭上に設置されているモニターを観ながら二人は微笑んでいた。モニターの中では理恵が佐瀬に鎖を引かれて歩いていた。

・・理恵さん、絶対勝って。私は理恵さんと戦って成長したところを見て貰いたいの・・

しずくは、モニターに映る理恵に心の中で声援を送っていた。もちろん、しずくは理恵の方がメス奴隷として上だと信じている。だが、理恵は胸を責められると弱いという事実が露呈していた。あの一回戦の戦いは当然相手の調教師も観ているだろう。集中的に理恵の胸を責めてくるのは間違いない。そこがしずくにとって心配であった。

★　★　★　★

「それでは、メス奴隷リエ対ミホのルーレットを回します」

ルーレットが回され玉が落ちる。それを見て二人の調教師は舌打ちをしていた。

・・蝋燭かよ・・

素人ならともかく調教を毎日受けているメス奴隷が蝋燭で失神するとは思えなかった。性器や膣の中に垂らしても絶叫こそすれメス奴隷であれば気絶する事はないだろう。となると、蝋を垂らすのではなく、その火で焼くしかないのではと思いつく。佐瀬は相手の調教師を見ていた。

・・おそらく、奴が今考えているのは理恵の乳首を蝋燭の炎で焼いていく責めだろう。一回戦で弱点を見せておいたからな。もう他の考えは浮かばないだろう。だがな、確かに理恵は胸が弱点だ。鞭で打たれれば素人のように泣き叫ぶだろう。くくく、しかし、蝋燭の炎なんかで理恵の意識を刈り取れるかな。その前に俺があんたのメス奴隷を始末してやるよ・・

佐瀬は不敵に笑っていた。そして、沙也加の手が上がる。

「メス奴隷リエ対ミホ、開始」

佐瀬と調教師は走りだし蝋燭の束を持ち戻ってくる。調教師はリエを開脚逆さ吊りにしていた。対して佐瀬はミホを片足吊りにする。ミホは片足だけで逆さに吊られ、もう片方の足は膝で曲げられ伸ばせないように縛りつけられた。

・・すまんな、今度はすぐに決着をつけさせてもらうぞ。俺も忙しいからな。集まった観客も詰まらんかも知れんが、知った事か。俺は俺の為に動く・・

佐瀬の想像通り相手の調教師はリエの胸に蝋燭の炎を近付け乳首を

焼こうとしていた。

「あびゃあぁぁぁぁーーーっ！」

リエの乳首が直火で焼かれ、リエは絶叫する。しかし、佐瀬はまだ蝋燭に火も点けず吊られているミホの足首に巻いたロープを位置を動かすように縛り直していた。

★　★　★　★

天道はプスプスと女事務員の性器に針を刺していた。性器の割れ目に沿って縦に一列に刺された針の隣にも刺していく。

「ふごっ、ふごっ、ふごうぅぅっ」

呻き声をあげる女事務員を楽しそうに見ながら天道は針を刺していく。

・・おいおい、マンコに針を刺されたくらいで大袈裟なメスだな。針を刺し終わったら、もっと酷い事をしてやるから楽しみに待っていろよ・・

「ぶはっ、ぶはははははっ」

天道はあまりに楽しくてつい声を出して爆笑していた。

★　★　★　★

天道が女事務員を拷問しているビルの周囲に幾つもの人影があった。

「ここが弥勒院の拠点の一つですね」

「そのようだな。事務の麻田さんのおかげで場所が割れたな。麻田さんは葉月様がマンコ処刑するストックの一人だから、出来るだけ奴にマンコを壊される前に救い出したいところだが……」

「なら、すぐに踏み込んで皆殺しにしてやりましょうや、近藤さん」

「まったく、メスを調教したり処刑するのは苦手な癖に、こういう時には生き生きとしてやがる。まあ、葉月様もそういう所を認めているのだろうけどな、岡田」

近藤と岡田は他の部下も従え、天道のいるビルを包囲し動き出した。

（注）「檻の中の幸福・彩音の章」１０話、参照

１０７、襲撃

１０７、襲撃

「ふぐぅ、ふぐぅ、ふぐうぅぅぅっ」

南京錠の貞操帯を装着された時には麻酔をかけられていた為、痛みを感じる事はなかったが、今、天道に生まれて初めて性器調教をされ麻田葉子は塞がれた口で呻き声をあげていた。

・・誰かぁ、助けてぇ……。私のマンコ壊すのは葉月様なのに……。もう葉月様に合わせる顔がありません・・

麻田葉子もまた葉月に惹かれていた。葉月はメスを壊す事を何とも思わない生まれながらの悪といえる。よくある、悲しい過去が悪に堕とした。悪人ではあるけれど仕方のない事情があった。葉月はそんな甘いものではない。メスを破壊する事を空気を吸う事と同じに感じている純粋な悪そのものだった。だが、そんな純粋悪に強く惹かれる者も存在する。麻田葉子もその一人だった。葉子は普通の会社員であった。葉月に出会わなければ、そのまま普通に人生を終えていただろう。だが、会社の役員の付き添いで葉月の主催するパーティーに赴き、そこで葉月を見てしまった事で葉子の運命は変わった。その時に見た葉月と睦月の姿が目に焼き付いて離れなかった。そして、補佐として動いていた睦月が葉月に処刑されたと聞いた時、葉子は自分を事務員として葉月に売り込んでいた。採用は呆気なく決まった。睦月の抜けた穴を葉子が埋める形で事務を引き継ぐと同

時に、葉月から性器を処刑されるメスの一人だと言い渡されていた。そして、性器に南京錠がかけられ自分で自慰する自由を奪われたが、葉子は葉月に認められたようで天にも昇る気持ちだった。そんな葉子である。自分の性器は葉月の所有物であると固く思っていたのであるが、その性器が天道に好きなように壊されていくのが何より許せなかった。

「うーん、良いねぇ」

天道は黒いパンストに包まれた股間に突き刺された針の山を見てうっとりとしていた。性器が露出する分だけ切り裂き、破いてはいないので黒いパンストに無数の銀色の針が輝き、天道はそれをカメラで撮影していた。

「もっと恥丘の方まで針山にしてみるか」

針の詰まった箱を、もう一箱手に取ると天道はチクチクと葉子の恥丘にも針を刺し始めた。そして、葉子の恥丘を三角形の形に針山にする。

「良いぞ、これはなかなか映えるな」

天道は様々な角度から撮影し、近付いて接写も試みた。この時天道は、近藤たちがすぐ近くまで迫っている事にまったく気がついていなかった。天道が、それに気がついたのはまったくの偶然。夢中で撮影していたカメラのメモリーが一杯になり、それを持ってくるよう伝えようとしたが、誰も出ない。天道から連絡があれば何をしていても最優先で出るのが当たり前である弥勒院家で、連絡に出ないという事は不測の事態が起こった事を意味する。

・・これは、おかしい・・

天道の決断は早かった。早く適切な決断が出来なければ生き残る事は出来ない。天道は危険を察し、通常の出口ではなく非常用の出口に身を入れた。何事もなければそれでいい。天道は葉子を置いたまま駆け出していた。近藤が、地下室に飛び込んで来たのは、天道が逃げ出してから僅か数秒後だった。近藤は銃を構えながら警戒するが、地下室にいたのは逆さ吊りにされ性器を針山にされた葉子だけだった。

★　★　★　★

「ほぎゃあぁぁぁーーーっ！」

乳首を蝋燭の炎で焼かれ理恵は絶叫している。理恵の乳首は焼け爛れ変色し焦げ臭い臭いと煙が上がっている。

「早く失神しろっ、メスっ」

調教師は持っていた蝋燭を固定し、理恵のもう片方の乳首も蝋燭の炎で炙り始める。

「ほーら、早く失神しないと両方の乳首が炭になるぞ」

「あびゃあぁぁぁぁーーーっ！」

絶叫する理恵が体を仰け反らそうとするが、調教師は理恵の頭を持ち、理恵に逃れる事を許さない。佐瀬はようやく2本の蝋燭に火を

点けミホの体を炙り始めた。

「あづうぅぅぅっ」

ミホが悲鳴をあげるが、それよりも観客は佐瀬が蝋燭の火を当てている場所に驚いていた。

「あんな所を炙って意味あるのか。それは熱いだろうけど」

「なんで、マンコや胸を炙らないのかしら。あんな所炙られても観てる方も面白くないわね」

「やる気あんのか、あの調教師。俺の方が上手くメス奴隷を責められそうだぞ」

「でも、あの佐瀬という調教師、一回戦では見事にメス奴隷を責めていたわよね」

観客席からは戸惑いの声が漏れていた。理恵を責めている調教師も、何が起こっているのか気になり、自分のメス奴隷ミホに目を向ける。

・・馬鹿な……。奴は何を考えている・・

調教師は腕を止めてミホを責めている佐瀬を見つめていた。佐瀬はミホの吊られた足首を蝋燭の炎で焼いていた。

・・まさか、足首がミホの急所なのか。そんな所責めた事がないから俺でも分からんぞ・・

それでも、調教師は嫌な予感がして慌ててまた理恵を責め始める。

理恵の乳首は焼け爛れたのを通り越して炭のように黒く変色してきていた。

★　★　★　★

「ちっ、あの狂人がとんでもない事を考えていますね。まったく犯罪者の脳ですよ」

葉月がモニターを観ながら、佐瀬を見て舌打ちしていた。

「犯罪者の脳って、何ですかね。あなたの事ですか」

他の者なら恐ろしくて口に出せない事を平気で理津子は葉月に向かって言っていた。足元にいたブスが、理津子の一言で怯えたようにクラヤミの後ろに隠れていた。

「否定はしませんよ、橘。犯罪者の脳というのは、法に触れなければ何をしてもいいという考えです。そういう犯罪者は、法に触れてませんよね、これはグレーの部分ですとほざいていますが、確かに法に触れていないでしょうが私に言わせれば犯罪者であるのに変わりませんね。むしろ、捕まるのを恐れ、こそこそと犯罪を犯す小物でしょう」

「あの佐瀬が何をするというんだ。メス奴隷の足首を焼いて何かルールに関わるグレーの部分があるのかな」

クラヤミがブスの頭をよしよしと撫でながら葉月に訊く。

「このトーナメントのルールは私が作りました。簡単なルールですよ。こちらで用意した道具を使ってメス奴隷を痛めつけ失神させた方の勝ちという単純なルールです」

「ええ、分かっていますけど」

理津子も麗華もクラヤミも首を傾げていた。

「どうやら、あなたたちは犯罪者脳ではないようですね」

「ほら、俺だって普通じゃないか」

クラヤミが何故か嬉しそうに言うが、葉月は、あなたは処刑しか考えられない馬鹿ですからと冷たく言い放つ。

「見ていなさい。もうすぐ分かりますますよ」

何が起こるのか全員がモニターを注視していると、それは起こった。佐瀬が焼いていたミホの足首を縛っていたロープが燃え、メス奴隷ミホが地面に落下すると頭を打ち付けて気絶していた。

「えっ」

思わず理津子たちから声が漏れるが、観客席からも戸惑いの声が漏れていた。進行の沙也加も、これは事故なのか、佐瀬の勝利なのか判断がつかず、すぐに葉月に連絡してきた。そして、沙也加が右手を上げる。

「ビクトリー、リエ」

観客席からもブーイングの嵐が起こり、理恵を責めていた調教師も沙也加に食って掛かっていたが、沙也加の判定は変わることがなかった。

１０８、事業

１０８、事業

天道は非常口への地下通路を走っていく。当然、この通路の出口は天道のビルとは離れた位置に口を開けている。万が一ビルの周りを包囲されたとしても、その包囲網を抜けられる位置にある。

・・襲撃してきた者がいたとしたら間違いなく豪徳寺の手の者だろう。あの事務員を取り戻しに来たか。それほど重要な情報を持っているとは思えなかったが、何かあるのか。俺としては、あの事務員のマンコ壊せなくて残念だがな・・

走りながら天道は、撮影などしていないで早くあの事務員のマンコ壊しておくのだったと後悔していた。そして、非常口から外に出る。途中、連絡してあるので、もうすぐ迎えが来るはずだった。

パシュッ

小さな音が聞こえた次の瞬間、天道の腿に激痛が走った。

「おぉっ」

天道は腿を押さえて地面に転がっていた。

・・くっ、銃撃。まさか、どうしてここが分かった・・

天道は身を伏せながら周囲を見回す。相手の姿は見えないが、続けて第2弾が天道の倒れているすぐ横に着弾した。

・・くそっ、姿を見せずに撃ってくるとは冷静で嫌な奴だな・・

狙撃手はまるでチェスのように天道を追い詰めていく。転がりながら逃れている天道であるが、もう逃げる場所がない位置に追い詰められていた。

・・不味いな、敵は恐ろしくて冷静だ。このままでは……・・

そこへ銀色のロールス・ロイスが突っ込んで来た。

「お兄様、早くっ」

声と共に後部席のドアが開いた。天道は転がるように乗り込んでいた。そこへ、まるでマシンガンのような銃撃が襲う。だが、ロールス・ロイスはその銃撃をものともせず走り出していた。

「首尾はどうだ、岡田」

インカムから近藤の声が聞こえてきた。

「ええ、奴ら狙いどおり逃げていきましたよ、近藤さん。凄いものですなタイヤまで完全防弾のロールスですよ、葉月様のベントレーほどではないでしょうがね。予定通りＧＰＳ装置をつけました。銃撃の合間にやりましたので奴ら気付いていないでしょう」

「ふふ、これで葉月様の読み通り奴らの本拠地が判明するだろうな」

近藤と岡田は大声で笑いあっていた。

★　★　★　★

桜桃中学校に通う女子生徒、水澤ひまりは本日プレオープンの体験型アトラクションを訪れていた。ネットの申し込みで抽選に当たった者が、正式オープン前に体験出来るのだ。ひまりが周囲を見ると、ひまりと同じ年頃の女子の姿が多い。中にはかなり年配の女性の姿もちらほら見えるが、圧倒的に若い女子の姿が多かった。中には小学生ではないかと思う子供の姿もある。共通しているのは、みんな頬を赤らめ興奮しているという事だ。

・・けっこう大勢の人がいるけど、ここにいる人みんな同じ目的なんだよね。凄い・・

ひまりは正直驚いていた。こんな施設にこれだけ人が集まるなど思ってもいなかったのだ。ここは、グルーム・アグリカルチャーが経営する体験型施設だった。最近はメス奴隷を飼育してオークションで販売するだけでなく様々な分野に手を広げているグルーム・アグリカルチャーの新事業の一つだった。ひまりは元々はまるで興味のないものであったが、この年頃の好奇心で応募し見事当選したのだった。真面目で優等生であるひまりは当選したからには楽しんでみようと、その体験型の設備でしっかり体験して楽しめるようにと事前に勉強する事を厭わなかった。そして、今日ここにやって来たのである。

・・ワンディパスだから一日中楽しめるわけだけど、これ正式オー

プンしたらワンディパスって1万円もするんだよね。今日、フルに楽しまないと損だよ・・

ひまりはパスを握りしめて時間を無駄にしないため頭の中でシミュレーションする。是非、体験しておきたい事が幾つかある。それは必ず体験するとして、残った時間で何を体験するか綿密に考えていた。

★　★　★　★

・・理恵さん、勝った・・

しずくはベッドの上で喜んでいた。隣でつぐみも笑顔を浮かべていた。

「良かったな、しずく。これで次は理恵さんと戦えるな。でも、私が見ても理恵さんは強敵だと思うよ」

「うん、分かってる。理恵さんはマンコや顔面燃やされても耐える人だから。でも私はその理恵さんに育ててもらった。だから、負けるわけにはいかないよ。私が負けたら理恵さんが悲しむから」

・・しずくの覚悟は本物だ。今のしずくは本当にゆかり姉のようだ。でも、理恵さんの調教師の佐瀬という男。あの男は危険だと感じる。勝つためには何でもやってくるだろうな。普通ならメス奴隷の力が拮抗していれば、調教師の力の差で勝負が決まるだろう。理恵さんの調教師佐瀬はかなりの腕だと思う。でも、しずくの調教師もとんでもない。なにしろ私たちの先輩、もう伝説になっている橘理津子

と香坂麗華、この一人なのだから。もし、しずくの調教師が麗華先輩でなければ、いくらしずくの力があっても勝てなかっただろう。ふふふ、でも麗華先輩なら必ず勝つ・・

つぐみは、自分より遥かに年上で会った事はないが、二回戦を鞭の一撃で突破した麗華の姿を思い浮かべ、やはり伝説は間違いではないと考えていた。

・・いくら理恵さんでも、あの鞭には耐えられない。理恵さんのマンコは一撃で壊される。あぁ、私も麗華先輩に鞭で打たれてマンコ壊されたい。私も風紀委員のお仕置き受けたかったよ・・

つぐみはまた自分がこのトーナメントに出場していない事に憤りを感じていた。

★　★　★　★

会場では敗れたメス奴隷ミホの処刑の準備が進められていく。ミホは両腕を後ろ手に縛られたまま号泣していた。今回、佐瀬は忙しいという理由で運営スタッフに処刑を任せていた。とはいえ沙也加もそれほど処刑の知識があるわけではない。自分で処刑を楽しむ時は、ほとんどメスやオスの性器を破壊して始末している。こういった公開処刑で観ているお客を楽しませる派手な処刑など思い付かなかった。沙也加はスタッフが会場の準備をしている間に葉月を探していた。そして、食堂で談笑している葉月を発見し助言を求めていた。

「まったく、あの男は何がそんなに忙しいのですか。きちんと処刑してお客様を楽しませてくれないと困りますね」

葉月の機嫌が悪くなったのを敏感に感じたブスは、またクラヤミの後ろに隠れていた。

「この前、俺が提案した処刑具が完成したって言っていたろう、豪徳寺。それの試運転してみればいいんじゃないか」

クラヤミがすっかりブスを気に入ったようで撫でながら葉月に言う。

「そうですね、それではその処刑具の御披露目としますか。でもこれはマンコ破壊する処刑具ではありませんからね。神楽坂さん、まずメス奴隷のマンコを破壊して下さい。ここに観に来ているお客様のほとんどはメス奴隷のマンコが破壊されるのを観に来ているのですからね」

沙也加は葉月にお礼を言い、トーナメント会場に戻っていった。沙也加が戻って来たのを見てメス奴隷ミホは、いよいよ自分の処刑が開始されるのだと理解し、さらに大声で泣き出していた。

１０９、食糞

１０９、食糞

ぶるぶる震え泣き叫ぶミホの体が開脚逆さ吊りにされていく。ミホは惨めに泣き喚いていた。ミホにしてみれば、あんな事で自分が負けた事に納得がいかないのだろう。だが、ミホがどんなに泣き叫ぼうと勝敗が覆る事はない。ミホはここで残酷に処刑され絶命するのだ。

「それでは皆様、これよりメス奴隷ミホの処刑を執行しますが、今回皆様にもご不満があると思います。そこで、お客様の中より抽選で、このメス奴隷ミホのマンコを壊す執行人を選びたいと思います。御希望の方は端末より入力お願いします」

沙也加の言葉でブーイングを上げていた観客も我先にと端末を操作していた。なかなかメス奴隷の性器破壊など経験出来るものではない。観客たちは先程までの不満も忘れて夢中になって入力していた。

・・さすが葉月様、これで先程の佐瀬の行為への不満も吹き飛ぶでしょう。もう、目の前のメス奴隷のマンコを破壊する行為に意識が集中してしまっていますね。まったく愚かな者たちです・・

沙也加は心の中で嘲笑いながら、それを表面に出さず端末のモニターを見ていた。その希望数は、おそらく全ての観客が申し込んだと思える数を示していた。

「それでは、その都度お客様の入場の際に渡した整理券の番号を呼びますので、呼ばれた方は前に出て下さい。まず、左の小陰唇切除の方、番号が〝Ｚ１３〟の方、前に出て下さい」

しかし、沙也加が呼び掛けてもなかなか姿を現さない。

・・離れた所のモニターで観戦していたお客様なのですかね・・

沙也加は、それなら先に右の小陰唇切除を始めようと次の番号を呼ぶ。今度はすぐに一人の男が現れた。全裸の男は嬉しそうに沙也加から切除用の鋏を受け取っていた。男の股間では、メス奴隷ミホの小陰唇を切除出来る興奮で性器が反り返っている。

「さあ、どうぞ。それから、よろしければメス奴隷の口を犯しながら、切除しても良いですよ」

沙也加はニヤリと笑いながら男に告げていた。もちろん男は喜んでミホの口に自分の硬くなったモノを喉奥まで突き挿れていた。両腕を縛られ何も抵抗出来ないミホは涙を流し苦しんでいる。男はミホの口を犯し、目の前に見えるミホの性器に興奮していた。

「あぁ、メス奴隷の口マンコ犯しながら、マンコのビラビラ切れるなんて最高ですよ。こんな経験が出来るならいくら払っても惜しくはないです」

男は感激しながらミホの右の小陰唇を摘まむとビローンと引き伸ばす。そして、器用に腰を動かしながら小陰唇を鋏で挟んだ。

ジャキーン

「ふぐうぅぅぅっ！」

ぶり、ぶり、ぶり、ぶりぃぃっ

ミホは口が塞がれて絶叫出来ないからなのか、肛門から大便を漏らしてしまっていた。男は自分の目の前で排泄されるミホの大便に、さらに興奮しミホの喉を硬く突き刺していた。

「こんな目の前でメス奴隷のウンコが見られるなんて最高ですよ。料金払いますから、このウンコ、メス奴隷に食わせて良いですか」

興奮した男は沙也加に了承を貰うと、一旦自分のモノを抜き、ミホの口に大便を詰めていく。そして、ミホの口中一杯に大便を詰めると再び自分のモノを突き挿れて喉奥に大便を押し込んでいった。興奮した男は激しく腰を振りながら、またミホの小陰唇を切除し始めた。

ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ

「ん、ん、ん、ん、んーーーっ」

哀れにもミホは自分の大便を食わされ喉奥を犯されながら小陰唇を切除されていく。

ジョキーン

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

そして、ミホは右の小陰唇を完全に切除されてしまい、男はミホの

喉奥に大量に射精していた。

「スタッフが容器を用意しますので、どうぞそれは記念にお持ち帰り下さい」

沙也加の言葉に男は小躍りして観客席に戻っていった。そこへ、Z13ですと一人の女子がやって来た。全裸ではなく白い下着を穿いているが、その恥丘の部分に何か打ち込まれているように沙也加には見えた。

「すいません、医務室にいたので遅れました」

そこで、この女子は沙也加の視線に気づいたようで、あぁこれは五寸釘を打たれているんですと何事もないように答えていた。白い下着の股間部分が赤く染まっているのも、もしやあの下着を穿いているのかと沙也加は思い、この女子は何者なのかと思ったが整理券を持っている以上トーナメントを観戦に来たお客様であるのは間違いない。沙也加はどうぞと鋏を渡していた。

・・これが毎日調教を受けている本物のメス奴隷。やっぱり、どんなメス奴隷でもマンコを壊されるのは怖いんだね。それを思うと私やゆかり姉、そして、しずくは本当に頭がおかしいと実感するよ・・

つぐみは躊躇いなくなくミホの小陰唇を切断していく。

シャキ、シャキ、シャキ、シャキ、シャキ

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！」

口に残っていた大便を撒き散らしながらミホは絶叫する。つぐみは

あっさりと切り取ったミホの小陰唇をミホの肛門に押し込むと、ありがとうございましたと沙也加に鋏を渡し戻っていった。

★　★　★　★

ひまりはドキドキしてきた。今までこんなに気持ちが高鳴る事はなかった。通路の両側に等間隔でドアがズラリと並んでいる。そのドアにはそれぞれ番号がふられていた。ひまりは自分の３５番と書かれた札を確認した。

・・３５っていうと随分奥の方だよね・・

ひまりはドアの番号を確認しながら進んでいく。ここだけ見るとカラオケボックスのようであるが、ここは当然そんな物ではなかった。この設備の名称は〝シム６９〟と外の看板に書いてあるが、この名前から、その内容が分かる者は数少ないだろう。ひまりも最初は何の事かまるで分からなかった。新規オープンするテーマパークくらいにしか思っていなかったが、好奇心で調べているうちに、それがとんでもない物だと感じていた。一人の少女の人生を実際に体験するという触れ込みである。まず、この少女の原点である。勉強部屋からスタートし、そこから様々な課題をクリアし先に進むというアドベンチャー的な要素もあり、最後までクリア出来れば商品とクリアの証が入手出来ると記載されていた。プレオープンでは、この最初の勉強部屋が体験出来るのである。

・・一人の少女と書かれているけど、私が調べた限りでは、渡邉ゆかりというメス奴隷の事だよね。要はそのメス奴隷の一生を体験出来るという事だよね。かなり異常なメス奴隷みたいで、自分のマン

コを破壊する性癖を持っていると言われているけど、そんな事信じられないよ。破壊するんじゃなくて、ただのオナニーなんじゃないの・・

ひまりは、ゆかりを調べれば調べる程、半信半疑になっていった。

・・後から出てきた資料や噂なんて、事実と違う事を大袈裟に言ってるのが多いからね。本当はただのオナニーで気持ちよくなってるだけなんだよ・・

ひまりは、自分がそのゆかりの姿を創られた虚像であると実証するつもりで意気込んでいた。そして、自分に割り当てられた部屋を見つけドアを開ける。そこは、ごく普通の勉強部屋に見えた。

１１０、惨女

１１０、惨女

ミホの性器破壊の当選者３人目に沙也加はメスを渡した。３人目の男はメス奴隷のクリトリスを抉り取れる事に興奮し、自分の性器をしごきだしミホの顔面に精液を飛ばしていた。

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

ミホの顔面が白いドロリとした大量の精液で汚されていた。男は射精した事で若干落ち着き、ミホのクリトリスを摘まむと刺激する。

「おぅっ、おぅっ、おぅっ」

ミホは小陰唇を切除され大便を喰わされながらも、無様に声をあげ始めていた。男はミホのクリトリスが硬く勃起してきたのを確認し、クリトリスの根元にメスの刃を当てる。

「うひっ、まさか僕がメス奴隷のクリを切除出来るなんて、こんな幸運があるとは嬉しくてたまらないよ。トーナメントを観にきて良かった」

男はメスに力を入れる。

「うっ、あぁぁぁぁーーっ」

ミホは歯を喰いしばって痛みに耐えている。ミホのクリトリスから血が滲み出し、男は笑みを浮かべて更に力を入れた。

スパッ

「あひいぃぃぃーーーっ！」

ミホが悲鳴を上げ、クリトリスが切除されていた。

「うっ、うぅっ」

泣き続けているミホを尻目に男は切除したクリトリスを串に刺すと、沙也加にこれを食べていいかと確認していた。沙也加に了承を貰った男はやはり小躍りして観客席に戻っていく。

・・さすがにこのトーナメントを観に来るお客様ですね。変態の方ばかりで嬉しい限りです・・

沙也加はニヤリと笑いながら次の当選者を読み上げる。

「さあ、次はこのメス奴隷の割れ目を切開する権利です。尿道から膣、肛門まで一気に切開して頂きます。えーと、Ｙ４２の方」

沙也加のアナウンスで会場が、おぉっと盛り上がる。整理券を持って出てきたのはまだ胸も膨らんでいないような少女だった。全裸で嬉しそうに走って来る幼女を見て沙也加は、逆にこの幼女の性器を破壊したいと思わず考えてしまった。

・・い、いけませんね。私情に囚われては……。我慢しないといけ

ません・・

沙也加は苦笑しながらメスを幼女に渡していたが、ここで幼女の名前を訊いておくのを忘れない。

「可愛いお客様ですね。お名前はなんと言いますか」

「はい、京極紬です」

幼女は元気に答えると用意して貰った踏み台に乗りミホの性器を眺める。

「ここ、全部切っちゃっていいの？」

紬がミホの性器を指差して沙也加に尋ねる。沙也加は大きく頷いていた。

「いつもはお医者さんごっこで男の子にマンコ解剖してもらっているんだけど、今日は私が解剖していいんだよね」

「そうですよ。このメスのマンコ切り裂いて上げましょうね」

沙也加が柄にもなく優しく言うと幼女は嬉しそうにミホの割れ目にメスを当てた。ミホは必死に恐怖に耐えているが、その体は大きく震えていた。幼女はそんなミホの状態など関係なく尿道にメスを突き挿れる。

シュパッ

「ひゃうぅぅぅぅーーっ！」

ミホが悲鳴を上げるが幼女は、ツゥーーッとメスを滑らせミホの尿道から膣前庭を切り裂いていった。

「あばばばばばばあぁぁぁーーっ」

「あはっ、おもしろーい。ホントに血が出てきたよ」

幼女はミホの性器を肛門まで切り裂き嬉しそうに歓声を上げていた。沙也加の視線はミホの性器より、紬の割れ目に集中していた。

「はい、それじゃ一回席に戻ろうね。ご苦労様」

沙也加は観客席に戻っていく紬の姿を追い、紬の親らしき人物を確認する。

・・あれが親ですかね。このメス奴隷の処刑が終わったら、話しに行ってみますか・・

沙也加は自慰したくなるのをこらえ、ミホの処刑を進めていく。

「それでは、メス奴隷の性器処刑の最後の当選者の発表です。このメス奴隷のマンコの穴からドリルを突き挿れる権利です。当選者はＧ０８の方、どうぞ前へ」

今度も整理券を持って出てきたのは女性だった。

・・観客の割合は女性の方が多いですからね。こうなりますか・・

沙也加は女性に電動ドリルを渡す。このドリルはバッテリーが分離

された軽量タイプの為、女性でも扱い易いが、そのドリル部分は直径１０センチ、長さ４０センチある凶悪な仕様である。こんな物を膣に挿れられたら膣は消滅し、子宮もぐずぐずに破壊されてしまうだろう。ドリルを受け取った女は凶悪な笑みを浮かべていた。他の女の大切な部分を破壊する事が嬉しくてたまらないようであった。

「うひひっ、さああなたのマンコ、二度と使用出来ないように徹底的に破壊してあげる。どうせ、処刑されるんだけど、その前にマンコ壊されてメスじゃなくなる絶望を味わいなさい」

女は狂喜の表情で電動ドリルのスイッチを入れる。

チュイーン

高速に回転するドリルの先端がミホの膣穴に迫っていく。もうミホがメスでいられる時間は残り僅かになっていた。

「だじげでえぇぇぇーーっ！」

大便と精液で汚れた顔でミホが泣き叫ぶが、女は嬉しそうにミホの膣にドリルを突き挿れた。

ヂュイィィィーーン

「あびゃびゃびゃびゃびゃあぁぁぁーーっ」

ミホの絶叫と共に、ミホの性器の肉片と血が飛び散る。女はどんどん深くドリルを突き挿れていく。ミホはビクンビクンと体を痙攣させ性器を破壊されていった。

★
★
★
★

ひまりは部屋に入り、ぐるっと周囲を見るがごく普通の子供の勉強部屋に見える。ここでのクリア条件は、この部屋の持ち主であった〝６９番〟と呼ばれる少女の行った行為を体験してみる事。その為には、この部屋に隠されたアイテムを発見し、その行為を行う必要があった。

・・簡単にいえば、道具を見つけてここでオナニーすればいいんだよね。確かに特殊なオナニーしてたみたいだけど、それだけでしょ。でも、これだけ人が集まるという事は、それだけじゃないのかな・・

ひまりは勉強机に座りパソコンを起動してみる。すると、パスワードを求められてきた。

・・こんなの事前に調査済みだよ・・

ひまりはキーボードから〝ブスユカリ〟と打ち込んだ。パソコンはパスワードを確認し起動した。すると、入場時に貸与された端末がぶるっと震える。ひまりが確認してみると、１つのミッションがクリアされた事が示されていた。

・・ふーん、これでクリアした数が分かるんだ。でもパスワードに〝ブスユカリ〟なんて渡邉ゆかりは頭がおかしかったのは間違いなさそう・・

次にひまりは机の引き出しを開けてみそうとしたが鍵がかかっていた。ひまりは部屋にかかっているセーラー服のスカートのポケット

に手を入れてみた。

・・あった・・

ポケットには鍵が一つ入っていた。

・・簡単すぎるね、このアドベンチャー。私の調べた通りだと机の引き出しにはアレが入っているはず・・

ひまりが引き出しを開けると想像通り錘付きのピンチが大量に入っていた。ひまりは、それを手にとってみる。それは、ひまりの想像より遥かにずっしりと重い物だった。次にやる事は分かっている。ひまりは服を脱いでいった。しかし、ひまりを含む半数以上が失念していたことがあった。それは、この部屋に入る前、入場した時点で発生していた。それに気付いた者は、もうそれを実行しクリアしていた。ひまりは、そのまま部屋に入ってしまったが、通路をよく見ると至る所に水溜まりが出来ていた。

★　★　★　★

「止まりましたね、近藤さん」

「よし、行くか」

近藤と岡田は車に乗り込み部下にも合図し走り出す。今日は目立つのを避けるためベントレーではなく、レクサスである。とはいえレクサスが何台も連なって走っていたら目立ってしまうので、連絡をとりながら離れて走っていく。

「観念しろ、弥勒院」

二人は、もう天道の首をとったように上機嫌だった。

★　★　★　★

「どうだった、つぐみちゃん」

「うん、楽しかったけど、どうせなら私のビラビラ鋏で切って貰いたかったな。あの進行の人、私のマンコの所ばかり見ているから、もしかしたら私も処刑されちゃうのかと思ったんだけどね。あの人はどんな人なのか知ってる」

「沙也加さんは怖いけど真面目だからね。つぐみちゃんがお客様である以上、何もしないよ。メス奴隷になれば別だけどね。私もお姉ちゃんみたいに葉月さんに壊して貰えなかったら沙也加さんがいいな」

「ふーん、確かに近くで見ると怖い感じがしたけど、やっぱりそうなんだ」

二人が話していると応急処置が終わった理恵が運ばれてきた。

「お久しぶりです、しずく様。突然、いなくなり申し訳ありませんでした。葉月様や琴音様にも、よろしくお伝え下さい。そちらは、つぐみ様ですよね。しずく様を応援に来てくださったのですか。ありがとうございます」

3人だけになると理恵は突然消えた事を謝罪していた。それから、しばらく時間が戻ったように会話に花が咲いていた。

★　★　★　★

「これはこれは百目鬼さん、どうですか客足は？」

「おかげさまで順調に推移してますよ、渡邉さん。これも渡邉さんの全面的な協力のおかげです」

「いや、こちらこそ百目鬼さんから企画を聞いた時には驚きましたが、順調でなによりです。それでこのアトラクションをクリアしたメスは……」

「これをクリアしたという事は、もう渡邉さんの娘と同じメスだという事ですから、高額で販売出来ますので、渡邉さんにもそれなりの謝礼をお渡ししますよ」

「ふふふ、早くクリアするメスが現れる事を期待したいですな。正式オープンまでに設備は間に合うのですか」

「ええ、もう第二ステージ教室の建設は終わっています。その後の最終ステージ、豪徳寺邸もほぼ終了していますのでオープンに支障はありません」

「楽しみですな。クリアの証を手にしたメスを早く見たいものです」

賞品とクリアの証。賞品は住居が提供される、そして、クリアの証を持つ者は一生飲食費が無料なうえに電気、ガス等の料金も免除される。それに釣られて多くの者が参加してくるだろう。しかし、それは檻の中の住居で一生飼われる事なのだ。男は百目鬼との電話を切った後、笑いが込み上げてくる。これでトーナメントで敗退したとしても心配する事はない。

「さて、そろそろ俺の出番かな」

男はモニターを見る。性器を破壊されたミホの最後の処刑が執行されようとしていた。

１１１、薄切

１１１、薄切

性器を破壊され股間から血を流すミホの元に処刑用の機材が運ばれてくる。それは、上部１／３が黒く、残りの部分が透明な強化ガラスで作られた円柱形の筒にクレーンが付いた大型の処刑具（注）だった。ミホは、その異様な処刑具を見て顔面蒼白になりぶるぶる震えていた。それは噂で聞いた事があるからだった。豪徳寺葉月が新しい処刑具を開発している。それは筒の中にメス奴隷を入れて、その体を１センチ間隔でスライス、輪切りにしていく処刑具だという。それが今ミホの目の前にある。自分が、その処刑具でスライスされ処刑されるのが明白だった。

「だじげでえぇぇーーっ、おねがいじまぢゅうぅぅぅーーっ！」

泣いて懇願するミホだが、当然だが許される事はない。むしろ、号泣するミホの姿は観客を興奮させていた。ミホは後ろ手に縛られたままクレーンから伸びたワイヤーのフックをかけられ吊り上げられていく。

「皆様、この処刑具は葉月様が開発した新型であります。まだ試作品でありますので販売はしておりませんが、早急に量産化の体制を整えますので検討よろしくお願いします」

ここで沙也加は一息つくと処刑具の説明をする。

「この処刑具の機能は単純で、この円筒に上から入れたメス奴隷をスライスしていきます。スライスの幅は5ミリから3センチまで調整出来るようになっていますので、お好みに応じて楽しんで下さい」

沙也加が説明しているうちにミホは処刑具の円筒の上に吊り下げられていた。

「ひいぃぃぃっ、こんなの嫌あぁぁぁっ、だじげでえぇぇぇーーっ！」

ミホは自分の下に見える高速で回転するカッターに恐れをなし助けを求めていた。

「それでは、メス奴隷ミホの処刑を執行します」

しかし、沙也加は無情に宣告していた。すると、ミホの体を吊り下げているクレーンが下降を始める。ミホの体がどんどん円筒に向かって下がってきた。

「ひいぃぃぃーーーっ！」

ミホは必死に自分の足を上げ、円筒から逃れようとするがミホの体はどんどん下がっていく。ミホは力の限り足を上げ、自分の足がスライスされるのを防いでいた。

「みっともないですね。もうマンコ壊されてメスでもない不良品が廃棄されるのは当然でしょう。お客様もあなたが廃棄されるのを心待ちにしているのです。そんなに往生際が悪い事をするなら、こちらにも考えがありますよ」

沙也加は一旦ミホの体を戻すと、ミホの両足を縛り付け膝も曲げられないように固定する。それだけではない。ミホの両足首にゲル状の錘を塗りつけていく。そして、再びクレーンで吊り上げていった。ミホは今度は足を上げる事も出来ず、ピーンと体を一直線に伸ばしたまま円筒の処刑具の上に運ばれていった。

「おねがいじまぢゅうぅぅーーっ、ギロチンでも串刺しでもいいですうぅぅっ、これはゆるじでぐだぢゃいぃぃぃーーーっ！」

ミホは泣き喚くが、ミホの体はどんどん下ろされていく。そして、ミホの足先が円筒の黒い部分に入っていった。

「だれがあぁぁぁっ、だじげでえぇぇぇーーっ！」

ミホが叫んだ次の瞬間、円筒のカッターがミホの足をスライスしていく。

シュッ、シュッ、シュッ、シュッ、シュッ、シュッ

「あびゃあぁぁぁーーーっ！」

1センチ間隔で輪切りにされたミホの足が透明な円筒の部分にボトボトと落ちていく。ミホの体は止まる事なく下げられていき、ミホはもう膝上までスライスされていた。ミホの体はビクンビクンと大きく痙攣しだし、もうミホの残り時間は僅かであると観ている者全てが感じていた。そして、ミホの恥丘までスライスしたところで一旦下降は止められ、今度は頭を下に吊り下げられる。ミホは今度は頭から円筒に入れられていった。

シュッ、シュッ、シュッ、シュッ

円筒の中にミホの髪の毛が落ちていく。観客は次に起こる出来事を期待し息を呑んでいた。そして、それはすぐにやってきた。

「うぼうぅぅぅーーーっ」

ミホの最後の悲鳴だった。ミホの頭頂部からスライスされた頭がボトボト落ちてくる。それに伴ってミホの脳がどろりと落ちてしまっていた。そして、あっという間にミホの頭はスライスされ消滅してしまった。こうして、メス奴隷ミホは残酷に処刑されていった。

★　★　★　★

ひまりは恐る恐るピンチを開いて乳首を挟んでみる。

「いだあーいっ……」

思わずひまりは叫んでいた。ゆかりが制作したとされるピンチは想像以上に強力だった。

・・これをマンコにもつけるの……。やっぱり渡邉ゆかりは頭がおかしいよ・・

ひまりはそれでも反対の乳首もピンチで挟む。涙が滲んでくるが、ひまりは痛みに耐え自分の性器につけるピンチを手に取っていた。ひまりは、このアトラクションをクリアして賞品とクリアの証が欲しかったのである。そうすれば、住むのにも食べるのにも困らず、ずっと好きな小説を書いていられると夢を見ていた。その為には多

少の苦痛など耐えられる。所詮、一人の少女がやっていた事だ。私に出来ない訳がない。ひまりは自分の小陰唇を摘まむとピンチで挟んでいく。そして、片側４個。計８個のピンチを小陰唇に付けていた。ひまりの小陰唇はびろーんと錘で伸ばされ無惨な姿になっている。

・・あと、クリにつければ終わりだよね・・

ひまりは涙を流しながら自分のクリトリスをピンチで挟んだ。

・・いだあぁぁぁぁっ、クリ、千切れるうぅぅぅっ・・

ゆかりのように乳首と性器に錘付きのピンチを装着したひまりは、ふと姿見に映った自分の姿が目に入った。

・・なに、この姿……。これが私なの？・・

鏡に映る涙と鼻水を流し大量のピンチを乳首と性器につけた自分の姿は、真面目なひまりにとって衝撃だった。

・・なにこれ、こんな無様な姿許せない。私みたいな頭のおかしい変態はもっと無様にしてやる・・

ひまりはピンチを掴むと舌を出しピンチで挟んでいく。鼻の穴や頬や耳もピンチで挟んだ。さらに太ももや恥丘の肉にもピンチで挟んでいく。そして、姿見の前に立つと両手を上げ足をがに股のように開いた。

・・なに、マンコが熱い。私、こんな無様な自分の姿見て興奮しているの・・

ひまりは知らず知らずのうちに腰を振っていた。

「いひっ、いひっ、いひっ、いひっ」

ひまりの顔面、胸、性器に太ももの肉が振り回される錘の重さで引き千切れそうになる。しかし、ひまりは腰の動きを止められなかった。ひまりはその激痛に快感を得ている自分に驚愕していた。

・・なんで気持ちいいの。これが渡邉ゆかりのオナニー。私も渡邉ゆかりと同じなの・・

ひまりは、さらに激しくぶんぶんと腰を振っていた。錘がぶつかるカチカチという金属音が室内に響いている。

「あひっ、あひっ、あひっ、あひっ、あひいいいいいっ」

プッシャアァァァーーーッ

「あっ、あっ、あっ、あっ」

ひまりは生まれて初めて潮を吹いていた。ひまりは、かつて経験した事のない快感でそのまま床に腰を落とし、ぐったりと放心状態になっていた。

★　★　★　★

ミホの処刑が終了した沙也加は、先程目をつけた京極紬の元へ歩い

て行った。そして、紬の隣に立つ女性にぺこりと頭を下げる。

「こんにちは、京極紬ちゃんのお母様ですか。私はこのトーナメントの進行を務める神楽坂沙也加と申します。少しお話しよろしいですか」

沙也加は笑みを浮かべ、紬の隣に立つ女性に話しかけていた。

（注）「スク水少女戦士ウテルス」３７話リリス惨殺で登場する処刑具と同じ物である。このメス奴隷ミホを処刑するのに使用した試作品が未来においても稼働しているのです。

１１２、幼婬　アヤコＶＳクルミ

１１２、幼婬

沙也加は会心の笑みを浮かべていた。あの幼女、京極紬の母親との商談がまとまったのだ。親の方でも自分の娘の異常性に気付いており、将来はメス奴隷にするしかないと考えていた事もあり、どうせ売却するなら自分が若い早い時期の方が良いと計算したのだった。これで、下町の一軒家暮らしから、憧れである都会のタワーマンション生活が実現出来ると沙也加に感謝していた。

「神楽坂さんのような方にうちの娘を所望して頂きまして嬉しい限りです。ここに連れてきて良かったです。娘の将来を考えてメス奴隷とはどういう物か教えるつもりでしたが、まさかこの場でスカウトされるとは、ありがとうございます」

紬の母親は思わぬところで大金が転がりこんできて、もう夢見心地だった。娘の事など頭から抜け、また子供を産めば高く売れるかもしれないと、まるでゆかりの父親と同じ事を考えている始末だった。母親が夢見ている間、沙也加はスマートフォンを操作して、この母親に対する振り込みを終了する。

「どうぞ、お確かめ下さい」

沙也加の言葉で自分の口座を確認した母親は、その見た事のない金額にぶるぶる震えていた。

「ありがとうございます、神楽坂様。なんとお礼を言ったらよろしいか」

「例には及びませんよ、お母様。この娘には、それだけの価値があると私は面っていますから」

沙也加は母親に軽く頭を下げると、紬の目に黒い布を巻き付け目隠しし、口にもボールギャグを押し込んでいた。紬は幼いながらも何かを感じたのだろう。暴れる事もなく沙也加のされるがままになっていた。そして、沙也加は紬の手を引き歩いて行ったが、もう母親は娘の姿を見る事もなくスマートフォンに表示されている自分の口座の残額を何度も何度も見返し笑みを浮かべていた。

★
★
★
★

ひまりは端末で確認すると幾つかのミッションがクリアされた事が表示されていた。ひまりは次にクリア出来るのは何かと考えていた。もちろん、ゆかりの性癖を調べていたひまりは、頭の中に何を探して何をすればいいのか分かっているものが幾つもある。

・・でも、ダメージを受けそうなものは後にしないと効率が悪くなるよね。並べく軽そうな行為からやっていかないと・・

ひまりは頭を整理しようと椅子に座りパソコンの画面を見ながら考えていた。そこで、何気なく見ていた画面でひまりは気が付いた。

・・そうだ、渡邉ゆかりは自分をヒロインにした小説を書いていた。

確か無限浣腸されたり、マンコを爆竹で爆破されたりする頭のおかしい小説。きっと、これを書くのもクリア条件の一つだと思う・・

ひまりは、実際の自虐行為にばかり目がいっている他の参加者は気が付いていないだろうとほくそ笑んでいた。

・・要は自虐小説や処刑小説を自分をヒロインにして書けばいいんでしょう。簡単だよ・・

ひまりは普段からファンタジー系や動物を主人公にした童話系の小説を書いているため、文を書くのはお手の物と思っていた。

・・それに、これなら体のダメージはないからね。まず、これから片付けよう・・

さっそくひまりはパソコンでワープロソフトを立ち上げるとキーボードに向かった。

★　★　★　★

『変態ひまりの末路』

地下の薄暗い部屋に閉じ込められていたひまりに、ついに最後の時がやってきた。全裸にされ両手は手錠がかけられ足首にも足枷が装着され、そこに付けられた太い鎖で動ける範囲も規制されている。そんなひまりにとって唯一気持ちを紛らわせる事が出来るのは自慰だけであった。ひまりは、ここに監禁されてから、とにかく自慰行為を行い続ける事で恐怖に呑まれそうな自分の心を正常に保ってい

た。すると。扉が開き数人の頭巾を被った男が入ってくる。男は頭巾以外全裸で、その股間では男のモノが大きく硬く反り返っていた。ひまりは男の股間を凝視してしまうが、男たちが押してきているものに気がつき目を向ける。それはキャスターの付いた台車に載せられた巨大なニードルだった。そのニードルが天を突き刺すように上を向いて固定されている。男たちはひまりの前までニードルを運んでくると自慰しているひまりの頬をパンパンと何度も叩いて立ち上がらせた。

「これから撮影を行う。上手く撮影出来れば解放してやろう」

男の言葉にひまりは、それまで絶望で真っ黒に塗り潰されていた心に一筋の光がさした気がした。だが、その光も男の次の言葉で塗り潰される。

「このニードルで子宮を串刺しにしろ。自分で、このニードルが真っ赤に染まるまで何度も実行するんだ。心配するな、子宮などなくなっても生存に影響ない」

確かにそうだろう。だが、それは女としては死刑宣告に等しい。ひまりは涙を流して許して下さいと男にすがり付くが、男はひまりを振りほどき早くしろと冷たい目を向ける。

「ううっ」

ひまりは泣きながらニードルに跨がると先端を膣に挿入する。

「両手を上げ、顔も上げてカメラの方を向け」

ひまりは男に命令されるままカメラに視線を向ける。

「早く、やれ。どこまで突き挿れれば子宮が串刺しになるか俺たちは分かっているからな。ごまかそうとしても無駄だぞ」

男の言う通りニードルには先端から４０センチの位置に線がひかれている。そこまでニードルを挿れればひまりの子宮が串刺しになったという確かなラインなのだろう。ひまりは泣きながらがに股になり腰を落としていく。冷たいニードルの感触がひまりの膣内を進んでいった。そして、すぐに先端が子宮に突き当たる。ここからは力を入れて腰を落とさないと子宮を貫けない。

「ううっ、怖い、怖い、怖いっ」

ひまりはぶるぶる震えながら腰を落とせないでいた。

「早くしろっ、ブス！！」

一人の男が癇癪をおこしたようにひまりを怒鳴りつける。ひまりはビクッと体を震わせ、拳を握りしめて腰を落とした。

ズボゥゥゥッ

「あぶうぅぅぅぅっ！」

ひまりは自分で子宮を串刺しにしていた。

「惜しいな、まだラインは下だ。仕方ねえ、最初は手伝ってやるよ」

一人の男がひまりの後ろに回り、ひまりの腰を掴むとそのまま下にニードルのライン迄ずり下ろしてた。

「はぶうぅぅぅぅーーーっ！」

ぶりっ、ぶりっ、ぶりぃぃぃっ

ひまりはビクビクと体を痙攣させながら、ぶりぶりと大便を漏らしていた。

「よし、どんどん続けろ。まだニードルは全然赤くなってねえぞ」

ひまりが腰を上げると、膣口から血が流れだしニードルを赤く染めていくが、ニードルが全て赤く染まるには量が足りなかった。ひまりは泣きながらまた腰を落としていく。カメラのレンズはそんなひまりの姿を正確に捉え記録していた。

★
★
★
★

ひまりはキーボードを叩きながら自分が異常に興奮しているのに気が付いていた。小説の中の自分をもっと目茶苦茶にしたい。ひまりは、その誘惑に耐えながら書いた小説を保存する。すると、端末が震えクリアの印が点灯していた。

・・やっぱり、小説を書くのがミッションだったんだ・・

ひまりは他の参加者より自分が先行していると思い優越感に浸っていた。すると、また端末が震える。ひまりが目を向けると、そこには既に１０のミッションをクリアした参加者が出た事が表示されていた。

・・嘘っ、私より全然早いよ。どんな人なの・・

ひまりは信じられないという気持ちで端末を見つめていた。

★　★　★　★

「それではＡブロック二回戦の最終戦メス奴隷アヤコ対クルミを開始します。メス奴隷入場」

沙也加の気合いの入ったアナウンスは最終戦だからというだけではなく良いものを手に入れた事でテンションが上がっているのは間違いなかった。

「お母さん」

「叔母さん」

医務室でしずくとつぐみが声を出していた。後ろ手に縛られ首輪に付いた鎖に引かれアヤコが歩いている。その前を歩く調教師であるしずくの父親渡邉は何故か余裕の表情を浮かべていた。しずくは、その表情を見て勝てる自信があるのかと思ったが実際は、もう渡邉は勝っても負けてもどちらでも良かった。百目鬼に協力してアトラクションの方で継続的に大金が入ってくる。もうトーナメントで無理して勝つ必要などないのだ。それより、早くアヤコが負けてくれた方が楽だとさえ考えていた。それに対してクルミ側の調教師は、このチャンスを絶対生かすと気合いが入っていた。一回戦は相手の不正で不戦勝で勝ち上がったクルミは無傷である。この幸運を生か

してＡシードであるアヤコを仕留めてやると燃えていた。クルミはあの６９番にも負けていない。調教師はそう信じていた。

１１３、資質

１１３、資質

・・まさか奥様までこのトーナメントに参加されてるなんて・・

理恵は当初信じられぬ気持ちでいたが、ゆかりとしずくの母親である。それを思えば納得できる参加であった。理恵はゆかりの狂信者であるが、それ以外はごく一般的な常識人である。自分の雇い主であったアヤコと対戦したくはなかった。

・・わたくしが次にしずく様に万が一勝ってしまったら、奥様と戦う可能性も出てきてしまう。それは避けたいところです。出来れば奥様には、ここで敗退して頂きたいですね。幸いにも相手のメス奴隷は不戦勝で無傷です。それに相手の調教師の方が旦那様より経験豊富であるのは間違いありません。ここは彼らに頑張って頂きたいところです・・

理恵は同じ医務室のベッドでモニターを見ているしずくに目を向ける。しずくはつぐみと話しながらモニターを見ていた。その表情からは、しずくが何を思っているのか伺う事は出来なかった。

★　★　★　★

「それでは、ルーレットを回します」

沙也加がルーレットを回し、玉を入れる。カラカラと回っていた玉は、大勢の観客が見守るなか、コトッと落ちた。それを見た沙也加は一瞬戸惑った顔をしたが、顔を上げマイクに向かって話し出す。

「ルーレットは《評価》のマスに落ちました」

沙也加が宣告するが、観客席の客も調教師もメス奴隷も、それがなんなのか意味が分からずにいた。

「鞭や蝋燭とかなら分かるけど、評価ってなんなの？どうやって責めるの？」

「意味分かんないわね。評価？いったいなんで責めろっていうの」

観客席から戸惑いの声が多数聞こえてくる。調教師の二人も面食らったような顔をしている。沙也加はマイクを取ると説明を始めた。

「えーっ、評価というのは文字通り観客席にいる皆様に評価して頂くという勝負です。制限時間一時間の間にお客様からポイントを多く獲得したメス奴隷の勝利となります。もちろん、その間に気絶してしまったら、その時点で敗北です。殺してしまうのもＮＧです。調教師は観ているお客様の喜びそうな調教具でメス奴隷を責めて頂きます。調教具は何種類使用しても構いません。高ポイント獲得を狙って下さい。お客様の方は、これは良いと思いましたら端末からポイントを入れて下さい。ポイントを入れても、途中で変更も可能ですのでお願いします。ポイントは各自１０ポイントです。１０：０でもいいですし、どちらも良いと思いましたら５：５でもＯＫです。時間内であれば変更可能ですので入力お願いします。注意して

頂きたいのは、このトーナメントはメス奴隷主役のトーナメントです。この評価のマスに止まった場合に限り、調教師は自分のメス奴隷を責めて頂きます。ですから、お客様は単純に激しく責められるメス奴隷の姿に興奮したと思う方にポイントを入れて下さい。ただし、調教師がメス奴隷が気絶しないように手を抜いていると感じた場合は、端末の廃棄ボタンを押して下さい。その累計が基準を越えた場合、そこで敗北となります。この場合は調教師、メス奴隷とも処刑となります。また、入力されたポイントはメス奴隷背後に表示されます。制限時間内に多くポイントを獲得したメス奴隷の勝利となります。それでは、調教師もお客様も準備はよろしいですか」

沙也加はいったん言葉を切り調教師と観客席を見る。どうやら今の説明で、評価の意味が分かったようだ。沙也加は右手を上げる。

「メス奴隷アヤコ対クルミ、始めっ」

渡邉は沙也加の合図と共に走り出したが、クルミ側の調教師はクルミの拘束を始めていた。

・・冗談じゃない。処刑になるのはアヤコだけでたくさんだ。要は手を抜かなければ良いんだろう・・

渡邉は走りながら、それなら早くアヤコを気絶させて終わりにしようと考えていた。そんな渡邉の考えを読んだように、この時点でクルミにポイントが既に入っていた。観客席がわーっとどよめく。

★　★　★　★

「ねえ、栄子ちゃん。なんで始まったばかりでポイントが入っているんだろう。おかしくない」

ＶＩＰルームで桃子が栄子に尋ねていた。

「それは見た目でポイントを入れた奴がいるんだろう。どうみても若いメス奴隷クルミの方がよく見えるからね」

「えーっ、なんかそれ公平じゃない感じがするよ。メス奴隷がどれだけ頑張れるかじゃないの」

詩織が、それはおかしいとチラッとメイドに視線を向ける。

「メス奴隷というのは体も評価の対象になりますからね。仕方のない事ですね。ただし、それはこうした処刑を観て楽しむ場合ですね。自分で購入する場合になると、きちんとした調教を受けたメス奴隷が人気です。若いメス奴隷は購入してもすぐ壊れるので敬遠されて売れ残るパターンが多いのですよ」

メイドの説明に、それならこうしたトーナメントに出場する場合は若い方が有利なのかと桃子と詩織も納得していたが、その間にもメス奴隷クルミにポイントがどんどん入っていく。アヤコはまだ責めが開始される前から劣勢に立たされていた。

★　★　★　★

「よし、どうやらこの屋敷のようだな。周囲を取り囲むように伝えろ。ここで決着をつけてやる」

近藤は岡田に指示を出し、弥勒院のロールス・ロイスが止まった屋敷を見つめていた。これで葉月の宿敵である弥勒院を滅ぼせる。近藤は葉月からの称賛を想像し、子供のようにウキウキしていた。葉月の側近といえる者は皆葉月に心酔している。葉月に一言でも褒められると思うと、どんな事でもやり遂げるという気持ちになるのであった。

「この屋敷のセキュリティに侵入しました。防犯設備、ロック共に全て無効にしてあります」

部下からの報告を受け、近藤たちは銃を構えて屋敷に踏み込んでいった。

「一気に制圧するぞ。弥勒院天道の首をあげろ」

近藤たちは、ここで決着をつけるつもりで飛び込んでしまった。それが罠であると気付かずに……。

★　★　★　★

「近藤たちが弥勒院の屋敷に踏み込んだ？」

葉月は報告を聞いて腰を上げていた。

「どうしたのですか、葉月？」

ルイが葉月に問いかけるが、葉月は出かける準備をしていた。

「私の出番は今日はありませんからね。近藤たちが突き止めた弥勒院の屋敷に行ってきます。あの弥勒院の屋敷ですからね、普通の屋敷ではないでしょう。仕掛けがあるのは間違いありませんからね」

「おやおや、葉月が部下の心配ですか」

「心配？滅多に見られないと思うので、どんな仕掛けか楽しみに行こうと思ったのですが。ウキウキしますね」

「それなら、一緒に行きましょう」

ルイもウキウキした顔で同行しようとするが、葉月は自分の代わりにトーナメントの面倒をみてくれとルイを留まらせていた。ルイは渋々頷いたが葉月にカプセルを渡していた。

「一人では面倒な事もあるでしょう。その時にはこれを使いなさい。忠実な兵隊が入っています」

葉月は、何の事か分からなかったがカプセルを受け取ると、いそいそと出かけていった。

１１４、臨場

１１４、臨場

渡邉はアヤコを気絶させる術は心得ている。当初の予定と異なり、別にこのトーナメントで勝つ必要はなくなったので、早々にアヤコを気絶させ、この対戦を終了させるつもりでいた。気絶すればアヤコの負けである。そうすれば、もう邪魔以外の何者でもないアヤコを始末する事が出来る。渡邉は邪悪な顔で、まず三角木馬を抱え駆け戻っていた。その頃、クルミを開脚逆さ吊りにした調教師は拷問具を取りに走り出していた。

・・お客を喜ばせるには性器拷問だ。クルミの性器を痛め付ける。だが、やり過ぎると次の勝負に支障が出てしまう。手を抜いていると思われない程度に厳しく責めなくてはならない。まず鞭は必須だ。それから蝋燭と針も持っていこう・・

調教師は冷静に考え、クルミを責める手順もシミュレートする。

・・出来るだけクルミに負担をかけずに勝つ。次に当たるメス奴隷ヤチホはもうかなりのダメージを受けている。軽いダメージでここを突破出来れば、次も勝てる可能性が大幅に上がるぞ・・

調教師は、このチャンスを最大限に活かす為、頭をフル回転させていた。

★
★
★
★

ひまりは押し入れの中からゆかりが製作したギロチンを発見していた。ひまりは自虐する順番も考えていたが、自分より先行している者がいるという事実に、もう発見した物から使って自分がトップに立つと考えを改めていた。

・・これは６９番が度々使用していたマンコギロチンだよね。刃の代わりに錘が落ちてきてマンコを叩き潰すギロチン・・

ひまりはギロチンを部屋に出し組み立てる。錘の部分はひまりの想像以上に重く、こんな物が自分の性器に落ちてきて本当に大丈夫なのかと不安になったが、一方で錘に叩き潰される自分の性器を想像し興奮してもいた。そして、箪笥の引き出しから下着も発見していた。

・・この下着、６９番が穿いていたというアノ下着・・

それは、ゆかりが作成した針付き下着だった。長針ではなく、ゆかりが一番最初に作成した画鋲をクロッチに埋め込んだ下着だった。

・・穿くとマンコに針が刺さる下着。６９番はこれを日常的に穿いてたようだけど、そんなに気持ちいいのかな。６９番は自分のマンコ壊すのが夢って記録が残っているけど、本当にそんな人いるの。でも、これ穿いてみれば分かるか・・

ひまりは、この画鋲が埋め込まれた下着を穿いてみようと思ったが、こんな下着を穿こうと思ってしまう事がすでに頭がおかしい証拠で

あると気付いていなかった。

★　★　★　★

弥勒院の屋敷に踏み込んだ近藤たちは油断なくサーモセンサーで人の気配を探りながら進んでいた。体温のある人間が潜んでいればモニターに赤く表示される。天道が隠れていても発見出来る筈であった。

「近藤さん、この部屋にも人の気配はありませんね」

「残るは、あの奥の部屋か。慎重に調べるぞ」

サーモセンサーを部屋に忍ばせ中の様子を探るが、この部屋にも人の気配はなかった。

「屋敷の周りは包囲している。天道はここから出られない。とすると何処かに潜んでいるのは間違いない。何処かに仕掛けがあるかも知れない。この部屋から徹底的に調べるぞ」

近藤たちが奥の部屋の入ると、そこは会議室のような広間であった。

「よし、床、壁、徹底的に調べろっ」

岡田の号令で手分けして調べ始めた時、突然入ってきたドアに鉄のシャッターが落ちる。そして、周囲の窓にも鉄のシャッターが降りていた。近藤たちが戸惑っていると、四方の壁から多数の銃身が現れた。

「伏せろうっっっ！」

近藤が叫んだ瞬間、四方の銃身が火を吹いた。全身に銃弾を浴び蜂の巣になった部下たちが次々に倒れていく。閉じ込められた部屋の中は悲鳴と血の臭いで阿鼻叫喚の地獄絵図と化していた。

★　★　★　★

花梨はアヤコとクルミの勝負をモニターを真剣に見つめていた。この勝負の勝った方と自分たちが対戦する。どちらが勝つのか花梨には全く想像がつかなかったが、メス奴隷には出来るだけ大きなダメージを負って欲しかった。

・・ヤチホはもう大きなダメージを受けてしまっている。もう長くは耐えられない。このメス奴隷2匹もヤチホに匹敵するダメージを受けて欲しい。私には一撃で相手を失神させるような技はない・・

花梨は理津子と麗華をぼんやりと見つめていた。そして、理津子の前に歩いていくと土下座していた。

「すいません、私に武術を教えてくれませんか」

花梨は見栄も外聞もなく理津子にお願いしていた。

「神無月さん、それは無理ですよ。私は今は調教師として登録されてしまいました。戦うかも知れない相手に自分の技を伝授したら、よく思われないでしょう。八百長と思われてしまうかも知れません

よ」

当然ながら理津子は花梨の申し出を断っていた。花梨にしても、それが不可能な願いであると分かってはいるが、そこへクラヤミ抱っこされていたブスがやって来ていた。そして、花梨の顔をペロペロと舐める。まるで、自分が教えてあげるとでもいうような態度だった。

「神無月さん、ブスに教えてもらいなよ。ブスならペットだから問題ないでしょう。ブスは元々弥勒院の手の者だからね、それなりの力を持っているよ。ペットにされたのは相手が悪かったからね。豪徳寺が相手では、勝てる奴なんてそうそういないだろう」

「良いんですか、クラヤミさん。葉月が怒るかも知れませんよ」

ルイが注意するが、クラヤミは面白そうだから良いでしょとまるで気にした様子もなかった。

「ブスはみんなのペット。可愛がってくれと豪徳寺も言っていたから、神無月さんはブスと遊んでたと言えばいいんだよ」

理津子と麗華は、葉月の恐ろしさを知らないのかと呆れていたが、ブスもすっかり乗り気で花梨の体にじゃれついていた。

★　★　★　★

葉月は弥勒院の屋敷の中をコツコツとヒールの音を響かせて堂々と歩いていた。屋敷の中に入った途端、奥の方から葉月の鼻に銃の火

薬の臭いと血の臭いが漂ってくる。葉月は何が起こるのか期待で興奮していた。

・・がっかりさせないで下さいよ、弥勒院・・

葉月は奥の部屋のドアを開けると、中に入った。シーンと静まりかえった部屋では多くの人間が倒れ、動くものはなかった。そして、ドアと窓に鉄のシャッターが降りる。四方の壁からは無数の銃身が突き出していた。

１１５、殺意

１１５、殺意

・・手っ取り早く気絶させてやる。アヤコ、お前とも今日でお別れだな・・

後ろ手に縛られたアヤコを立たせると渡邉は足を大きく開かせる。

・・これはまだ経験した事がなかったよな・・

渡邉は巨大なディルドゥを持っていた。それは観客席のお客には見覚えのあるディルドゥ。針が無数に飛び出し膣内をズタズタに破壊するディルドゥだった。渡邉はそれを躊躇なくアヤコの膣に挿れていく。

「力を抜け、このメスブタッ」

渡邉はアヤコを罵りながらディルドゥを根元まで無理矢理アヤコの膣に挿入してしまった。

「メスブタのマンコ処刑開始だ。お前のマンコ、二度と使えないように破壊してやる。ほら、嬉しいだろう。きちんと礼を言え、メスブタ」

「うぅ、ありがとうございます。私のマンコを徹底的に容赦なく壊

して下さい。メスの証の全てを壊して下さい、お願いしますご主人様」

「さあ、いくぞ。無様に泣き喚けっ」

渡邉はあっさりとディルドゥのボタンを押す。

パシュッッ！！

「はびゃあぁぁぁぁぁーーーっ！！」

アヤコの膣は一瞬にして無数の針に串刺しにされ破壊される。アヤコの膣からはボタボタと血が溢れ出し、全身から汗が大量に噴き出していた。渡邉はアヤコの前に屈むと、アヤコの膣に挿入したディルドゥの底にU字型の取っ手を付けていた。そして、立ち上がりアヤコの鼻にフックをかけ上部の拘束枠に通し、鼻の穴を思い切り引き上げる。

「おううぅぅっ」

呻き声を上げるアヤコは少しでも動けば鼻が千切れるほど、無様に鼻の穴を晒し涙を流している。しかし、渡邉は容赦なく取り付けたU字型の取っ手に三角木馬用の錘をカチッと装着していた。

「あっぶううぅぅーーーっ！！」

膣内に針が突き刺さっているディルドゥに錘をさげられ膣から激しく血が噴き出していた。それに、思わず動いてしまった為にアヤコの鼻の穴の一部が切れてしまい鼻からも血が流れていた。

「1個じゃあ足りないか。もう1個つけてやるよ。お前のマンコからディルドゥが抜けるまで錘を付けてやるからな」

渡邉は容赦なくアヤコに告げ、2個目の錘を取り付ける。

「はぶうぅぅぅぅーーーっ、ぢぬうぅぅぅっ、マンコぢんぢゃうぅぅぅっ！！」

2個も錘をつけられアヤコの膣から血塗れのディルドゥが顔を出してくる。

「良いぞ、メスブタ。もう少しだ、腰を振れ。自分でディルドゥを抜くのだ、メスブタ。これは命令だ、早くしろ」

「うひぃぃぃっ」

アヤコの体を鞭で打ちながら渡邉が命令する。アヤコは泣きながら腰を上下左右に振りだしていた。

「あぶうぅぅぅぅーーーっ、もうゆるぢでぐだじゃいぃぃぃっ」

アヤコは泣きながら懇願するが、当然許される事などない。アヤコが腰を振る度にズルズルと錘を付けられたディルドゥが、アヤコの膣を引き裂いて抜けてくる。アヤコが腰を振る度に周囲に血が飛び散っていく。その凄まじい光景に観客も目を釘付けにされていた。そして、いつの間にかアヤコのポイントが、クルミのポイントを大きく上側っていた。それは、当然といえた。アヤコに対する渡邉の凄まじい責めを見てしまうと、クルミにダメージを少なくする責めは見ていて物足りなさを感じてしまう。クルミを責めている調教師は自分の失敗を悔やんでいた。

・・くそっ、作戦を誤った。次の対戦の事などどうでも良かったんだ。この一戦で負けては意味がない。ここで、全力でクルミを責めればあんなメス奴隷に負ける事はなかった。いや、まだ終わりではない。あんな激しく責めていては最後までもつ訳がない。気絶してしまうだろう。そうすれば俺の勝ちだ・・

調教師は唇を噛みながらクルミの性器に鞭を叩き込んでいた。

★　★　★　★

「ハァハァ、ハァハァ」

「どうしたの、しずく」

呼吸を荒くするしずくにつぐみが尋ねていた。

「私とお姉ちゃんが生まれた場所が壊されちゃう。お母さんのマンコ。なんか、私とお姉ちゃんの存在も壊されていくようで苦しくなってきたの」

「はぁ？確かにお前たちが産まれてきた所だけど、関係ないだろ。叔母さんのマンコは叔母さんのマンコだ。しずくには、もう関係ないよ」

「うん、でも、そんなお母さんのマンコを平気で壊しているお父さんを見ると、私もお姉ちゃんもお父さんにとっては必要なかったのかななんて思っちゃったんだよ」

「別にいいじゃない。しずくはしずく。ゆかり姉はゆかり姉だよ。私はゆかり姉は幸せだったと思うよ。自分の描いていた夢を叶えたんだから。それに、ゆかり姉は多くのメスに影響を与えている。ゆかり姉の存在が力を与えているんだよ。私もゆかり姉に力を貰っている一人だしね」

「そうだね、ありがとうつぐみちゃん。私も頑張る」

しずくはつぐみに微笑むと、またモニターに目を移した。

★
★
★
★

・・おやおや、これは閉じ込めて蜂の巣にする作戦ですか・・

葉月は、がっかりしたように首を振っていた。しかし、その葉月に向かって無情に周囲の銃が火を吹いた。

バスッ、バスッ、バスッ、バスッ、バスッ、バスッ、バスッ、バスッ、バスッ、バスッ

四方八方から銃撃を受け葉月は蜂の巣になったと思われた。

「やった、豪徳寺を倒した。いくら豪徳寺でも、これだけの銃弾を撃ち込まれて無事でいられる筈がないよ。お兄さま、見て下さい」

天道を助けたロールス・ロイスに乗っていた女性が姿を現しガッツポーズをとっていた。だが、その顔が青ざめていく。

「そんな……。あり得ない……」

銃の硝煙や、舞い上がった埃がおさまった後に葉月が悠々と立っていたのだ。

「馬鹿な、あんた人間なの」

「失礼な物言いですね。勿論私は人間ですよ。少し変わっているかも知れませんがね。あなた、知っていますか。人間は命の危機に晒された時、脳内にドーパミンが分泌されます。これは人間の集中力や運動力を増加させる作用があります。いくら愚かなあなたでも火事場の馬鹿力くらい聞いた事があるでしょう。それに命の危機に瀕した時、周りの動きがスローモーションに見えると聞いた事はありませんか。それは一般の人間の話です。私は、このドーパミンの分泌量が飛躍的に多いのですよ。私には撃たれた弾丸など止まって見えます。そして、このタングステン鋼のメスは弾丸など簡単に砕く事が出来るのですよ。そして、どうして私があなたに種明かしをしたと思いますか。それは、あなたはもう今ここで死ぬからですよ」

葉月は両手にメスを持ち、恐ろしいほど残酷な笑みを浮かべていた。

116、悪魔

116、悪魔

ズボウゥゥッ！

「あびゃあぁぁぁーーーっ！」

振り回していたアヤコの腰の勢いで、ついに針が突き出しているディルドゥがアヤコの膣から飛び出していた。アヤコは絶叫し屈み込もうとしたが、鼻のフックで激痛が走り、立ったまま小便を漏らしている。

「ふふふ、やっと抜けたな。だが、これで終わりじゃないぞ。お前のマンコは壊されるんだ」

渡邉は白い下着を取り出していた。

「これはお前の娘が作った物が改良された物だ。自分の娘が作った物を親が穿くのは当然だろう。相当凶悪に改良されているようだな。これでお前の子宮まで串刺しになるな」

渡邉は、鼻吊りにしたままのアヤコに下着を穿かせていく。そして、太ももまで上げた所で後ろに回り下着の両側を掴んだ。

「さあ、今度は子宮の串刺しだ。もう、お前のマンコは終わりだな」

残酷に告げた渡邉は、掴んでいた下着を一気に引き上げる。

「あびゃあぁぁぁーーーっ！」

絶叫するアヤコは思わず屈んでしまい、鼻の穴にかけられたフックで鼻が少し切れ血が流れ出していた。そして、アヤコの太ももはブルブル震えたっているのがやっとの状態だった。おそらく、このまま放置すればアヤコは力尽きて倒れ、鼻の穴は引き千切れていただろう。渡邉は、ここでアヤコの鼻フックを外していた。観客席からは、がっかりしたような溜め息が漏れるが渡邉は次の責めに移っていく。鼻フックを外した小柄なアヤコの体を持ち上げた渡邉は用意しておいた三角木馬の上にアヤコのを落とした。針付きの下着を穿いたままのアヤコの股間に三角木馬の鋭角が激しく食い込んでいた。

「は、ぶうぅぅぅぅーーーっ！」

アヤコは天を仰いで悲鳴を上げるが、渡邉はアヤコの腰を抱えると、アヤコを持ち上げ、また三角木馬の上に股間を落とした。そして、それを何度も繰り返す。

ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ

「あっ、ぴゃあぁぁぁーーーっ！！」

何度も三角木馬の頂点に落とされるアヤコの股間は針で抉られ真っ赤に染まっていた。

「ぢぬぅぅぅっ、だじげでえぇぇーーーっ！」

「マンコ壊されたくらいじゃあ死なないさ。もっと念入りに壊してやるからな」

今度は渡邉はアヤコの足首に錘を装着していく。まず、片足に３０キロ。両足で６０キロだ。つまり、アヤコは米１俵の重さを足に吊るされていることになる。

「あぶうううぅぅーーーっ！」

アヤコの性器に激しく三角木馬の頂点が食い込み、さらに針付き下着の針がアヤコの性器に深く突き刺さり抉っていた。

「まだまだ終わりではないぞ」

渡邉は苦しんでいるアヤコの足首にさらに錘を吊り下げる。

「おぶうううぅぅぅーーーっ！」

錘を追加されアヤコの足には１２０キロもの重量がかかっている。アヤコの足はピーンと一直線に伸びきり、動く事も出来ないアヤコの股間の割れ目に、その全ての重量が集中する。アヤコはもう口からブクブクと泡を吹き始めていたが、渡邉はそんなアヤコの体を鞭で打ちつける。アヤコは鞭の激痛から逃れる為、無意識に体を動かしてしまい針で性器を抉ってしまう。アヤコは自分で性器にダメージを与えていた。

・・くくく、そろそろ終わりかな・・

渡邉は、さらに激しく鞭を叩き込んでいた。そんな渡邉の姿は、観

客からはまるで悪魔のように見えていた。そして、アヤコの眼がくるっと反転し白眼を剥く。アヤコの意識は刈り取られ、アヤコは暗い闇に堕ちていった。

★　★　★　★

「ふふふ、最後に名前くらい訊いてあげましょうか」

葉月はメスの光を楽しむように両手を上げ微笑む。もう女性は蛇に睨まれた蛙のように動けずにいた。

「わ、私は弥勒院天子。このままでは殺られない」

天子が壁のスイッチを押すと、その壁が崩れていき中から様々な銃器を持った男が多数現れた。マシンガンやライフル、ロケットランチャーを持っている男もいる。

「豪徳寺を殺せ。休みなく撃て。息の根を止めろっ」

天子の命令で一斉に葉月に向かって火器が火を吹いた。

「やれやれ、無駄だと云うことを教えてあげたつもりでしたが弥勒院家というのは頭が悪いのですかね。とはいえ、この数は面倒ですね」

葉月は飛んでくる弾丸を叩き割りながら思案していた。

・・ああ、ルイがくれたカプセルを使用してみますか・・

葉月はふと思いだしカプセルを手にとってみた。何が入っているのか、まるで分からないが使ってみるのも面白そうと考えていた。

・・忠実な兵隊と言っていましたが、この局面で役に立つのでしょうか。範囲制限を解除してブスを連れてきた方が役に立ったかも知れませんが、せっかくルイがくれたのですから試してみますか」

葉月は手に持ったカプセルを床に投げつけた。カプセルは激しく床に叩きつけられるが、壊れもせず転がっていた。

・・おやおや、普通こういったカプセルは叩きつけると中身が現れるものですが違うようですね。かなり頑丈なようです。それなら……

葉月は拾ったカプセルをポンと宙に投げる。そして、それをメスで切り裂いた。

シュパッッ

するとカプセルの中から黒いケムリガ噴き出した。

「いひっ」

声が聞こえたと思った次の瞬間、葉月に向かって銃を乱射していた男たちの首が落ちていた。そして、茫然とする天子の前にそれは立っていた。

「豪徳寺……葉月……。何故、二人もいる……」

天子だけでなく葉月も驚いていた。

・・これが未来の私のクローンという訳ですか。まったく恐ろしいくらいにそっくりですね・・

シュパパパッッ

天子の前のクローンは電光石火の動きで天子の手足の腱を切断する。天子は糸の切れた操り人形のように床に転がっていた。

「豪徳寺葉月?違いますね、私は豪徳寺皐月（注）。これからお前を処刑して差し上げます。思う存分泣き叫びなさい。私に処刑されるのです、光栄に思いなさい」

皐月はあっという間に天子の衣服を切り裂いて全裸にする。そして、右手に持ったメスで天子の正中線に狙いをつけていた。

・・ううっ、もう私はここで死ぬ。だけど、こいつの情報も残しておかなくては・・

天子は気付かれないように奥歯に仕込んだスイッチを入れる。このスイッチで天子の左目に仕込んだカメラが作動した。天子は情報を集めるのが仕事であった。その為に自分の体を改造していたのだ。そういう意味では弥勒院家も狂人の一家であるのは間違いなかった。

・・ふーむ、傍から見るとこのクローン明らかに狂人ですね。という事は私も周囲の人間から狂人と思われているのでしょうか・・

葉月は、皐月の行動を見て今さらながら頭を抱えていた。

（注）「スク水少女戦士ウテルス」で2部から登場する葉月のクローン。勿論、敵である。

１１７、衝動

１１７、衝動

開脚逆さ吊りにされたクルミの性器に針を刺し蝋燭を垂らし鞭で打っていた調教師は、アヤコが三角木馬に乗せられ鞭で打たれているうちに失神したのを確認した。

・・やった。向こうのメス奴隷は失神した。俺の勝ちだ・・

調教師はニヤリと笑みを浮かべていた。

・・あんな激しい責めをしていればメス奴隷が失神するに決まっているだろう。そんな事も分からないのか・・

調教師は内心ホッとしていると沙也加の右手が上がる。

「ビクトリー、アヤコ」

「何っ？」

調教師は聞き間違いだろうと思ったが、失神したアヤコが三角木馬から降ろされ担架に乗せられている。

「どういう事ですか？」

調教師は沙也加に詰めよっていたが、沙也加は何を言っているのか分からないと肩をすくめていた。

「最初にルールを説明しましたが分かりませんか。制限時間内にポイントを多く集めたメス奴隷の勝利と伝えましたが」

「だが、気絶したら負けと言っていたろう」

「何を言っているのですか。よく時計を御覧なさい。とっくに制限時間は過ぎていますよ。勝負はついていましたが、せっかくお客様が楽しんでいるので気絶するまでやらせたのですよ。お客様に楽しんでもらうのが一番ですから当然でしょう」

沙也加の言葉で調教師は時計を見る。確かに制限時間の一時間は過ぎていた。自分が時計を確認する事さえ忘れていた調教師は、がっくりと肩を落としていた。こんな最大のチャンスを活かす事の出来なかった自分の不甲斐なさに怒りが湧いてくる。

・・こうなったらクルミを残酷に処刑して、お客に楽しんで貰い記憶に残るようにしないと、俺もすぐに忘れられてしまう。最後に華を咲かせないとな・・

今回は相手の調教師ではなく、自分でメス奴隷を処刑する事になる。調教師はクルミをどうやって処刑するか考えていた。

★　★　★　★

ひまりはクロッチに画鋲の突き出た下着を太ももまで上げ、そこで

止まっていた。

・・６９番も最初は怖がっていた。あの頭のおかしい６９番でも、自分のマンコに針を刺すのは流石に怖かったんだよね。でも、けっきょく６９番は穿いていた。私もこれを穿けば６９番の気持ちが分かるはず・・

ひまりは下着の両端を持ち足を開く。

・・こうすればマンコに上手く針が刺さるよね・・

ひまりは徐々に下着を上げていく。ひまりの性器に冷たい針の感触とチクッとした痛みが走った。

・・もう少し……。もう少しパンツを上げればマンコに本当に針が刺さる。痛いかな。痛いよね。マンコに本当に針が刺さるんだから。どうしよう、マンコに針を刺すなんて怖い。でも、針を刺してみたい。心の奥にマンコを目茶苦茶に壊したいという欲望があるの。小説を書いている時興奮してマンコが熱くなってた。私、本当に串刺しにして貰いたいのかな。串刺しに比べたらこんな小さな針なんてなんでもないよね・・

「ハァハァハァハァハァ」

ひまりは息が荒くなっていた。膨らんだ二つの胸の先では乳首が硬く勃起している。ひまりの中で恐怖より興奮が上回っていった。そして、ひまりは下着を一気に引き上げていた。

プツッ

「いだあああぁぁぁーーーーっ！」

ひまりは性器に画鋲の針が刺さり悲鳴を上げていた。

・・あはは、私本当にマンコに針刺しちゃった。痛いのに気持ちいい。私、マンコに針刺して気持ちよくなってる。もっと、マンコに酷いことしたい。もっとマンコ壊したい・・

ひまりは、そのまますぐにギロチンをセットする。そして、自分の体をタイマー付きの拘束具でギチギチに拘束していく。

・・そうそう、口も塞がないとね。６９番もそうしてたし・・

ひまりはここに来るまで穿いていた自分の下着を口の中に詰めると、自分の尿の味と匂いが口中に広がり、何故か興奮していた。そして、それだけでは生温いと考え、口の上にガムテープを何重にも貼り付け完全に自分の口を塞いでいた。それからギロチンの錘が正確に自分の股間に落ちるように位置を調整し、ギロチンのタイマーを入れると最後に両腕を拘束した。ギロチンのタイマーが動作し、錘がゆっくりと引き上げられていく。

・・えっ、あんな上から落ちてくるの・・

下から見るギロチンの錘は、ひまりから見るととんでもなく高い位置まで引き上げられていく。ひまりはあの錘の重さを思いだし、それがあの高さから落ちてくるのを考えると恐怖で体が震えてきた。

・・どうしよう、止めればよかった。私のマンコ、画鋲も刺さってるんだよ。あんなの落ちてきたら、私のマンコどうなるの・・

ひまりは拘束から抜け出そうと身を捩るがギチギチに拘束した体はピクリとも動かす事は出来なかった。ひまりがギロチンの動作設定もゆかりと同じい1時間にしてしまっていた。そうしているうちに錘が一番上まで引き上げられたようで動きを止める。この後にこの凶悪な錘はひまりの股間目掛けて落ちてくるのだ。

・・怖い、怖いよ。動けない、もう動けないよ・・

プシャァァーーッ

ひまりは、もういつ落ちてくるか分からない錘の恐怖に尿を漏らしてしまっていた。噴き出した尿は下着を濡らしていき、ひまりの体を伝って床も濡らしていく。と、その時最上部で揺れていたギロチンの錘が落ちてきた。

「ふぐうぅぅっ」

迫ってくる錘を恐怖に満ちた目で見つめ、ひまりは悲鳴を上げていた。

グシャッ！

「ふごおぉぉぉーーーーっ！！」

ひまりの性器は錘に叩き潰され、ひまりは絶叫していた。しかし、性器ギロチンの錘はまた上部に引き上げられていく。そして、最上部に到達すると、また落下した。

グシャッ！

「ふごおぉぉぉーーーーっ！！！」

小便の飛沫が飛び散り、またひまりの性器が潰される。画鋲の針は深くひまりの性器に突き刺さり、錘が落ちる衝撃でひまりの性器の肉を抉っていた。ひまりの体は痙攣しだし、目は白眼を剥いて失神したようになっていた。しかし、自動で動くギロチンはタイマーで設定した時間が経過するまでは止まらない。再び錘は最上部まで引き上げられていった。そして、容赦なくひまりの股間に落ちてくる。

グチャッッ！

「んんんんんんんんんんんんんっ」

ひまりの下着のクロッチはもう真っ赤に変色していた。だが、錘は落ちてくる。

グチャッッ！！

もう、ひまりから声が上がる事はなかった。ひまりは完全に失神していた。それでも、ひまりは性器を叩き潰され続けた。

グチャッッ、グチャッッ、グチャッッ、グチャッッ、グチャッッ！！

ひまりの性器を潰す音だけが部屋の中に響いていた。

１１８、奥義（前書き）

あーっ、やっちゃった。皐月が出てきたから、ついウテルスの調子で書いちゃった。グロシーンありますので苦手な方は逃げて下さい、お願いします。

１１８、奥義

１１８、奥義

「お母さん、勝った」

「叔母さん凄いな。あの叔父さんの責めにあそこまで耐えるなんて」

しずくとつぐみは保健室でモニターを見て感慨深く話していた。

「次は私は理恵さんと、お母さんはヤチホというメス奴隷だ。私は理恵さんに勝つよ。でもお母さんは勝てるかな。ダメージが大きいし、それにあのカリンという調教師は凄いよ。私の調教師、麗華さんには敵わないだろうけど、たぶんお父さんじゃ相手にならない」

しずくの言葉につぐみもその通りだと考えていた。

・・このトーナメントではメス奴隷の力だけでなく、調教師の力も重要だ。私が見た中ではＡブロックではカリン、佐瀬が目を引いた。そして、やはりその二人のメス奴隷は勝ち残っている。だけど、なにより凄いのは私たちの先輩、風紀部だった麗華先輩。この先輩がいる限りしずくが圧倒的な優位の立場にいるのは間違いない。次の対戦で麗華先輩と佐瀬がぶつかる。理恵さんには悪いけど、いくら佐瀬でも麗華先輩には敵わないだろう。そして、叔父さんではカリンには敵わない。しずくは次の三回戦で産みの母と育ての母を失う事になるんだ。残酷な運命だけど、このトーナメントに参加してし

まった以上、その運命からは逃れられない。肝心なのは、それでしずくの心が折れないかだよ。もし、心が折れてしまったら、いくら麗華先輩が別格の調教師でも優勝は出来なくなってしまうよ」

つぐみは、しずくの顔をチラッと見る。しずくの横顔は自分の母親が勝った事を単純に喜んでいる顔だった。そこに悲壮な思いを感じなかったので、多少つぐみの心も軽くなっていた。

★　★　★　★

・・なにこいつ、ただのペットどころか、私より強いのは間違いないよ。これなら鞭の名手、香坂麗華にも勝てる・・

花梨はブスの特訓を受けていた。鞭のようで鞭ではない蛇腹鞭。ブスの操る蛇腹鞭は変幻自在で花梨には最強の武器のように思えた。

・・私がこれをマスターして、ルーレットで鞭が選択されれば、次の対戦でアヤコを一撃で仕留める事が出来る。そして、Ａブロックの決勝で香坂麗華にも遅れをとる事はないよ・・

花梨はブスに感謝していた。自分一人では決して到達出来なかった高みに登る事が出来る。

・・くくく、あの化け物の豪徳寺にも負ける気がしないよ・・

花梨はブスの繰り出す鞭技を必死に頭と体に刻み込んでいた。そして、ブスは蛇腹鞭を花梨に渡すとやってみろという感じで自分で股を開いていた。花梨は精神を統一すると蛇腹鞭を振る。

ギュイーーーン

通常の鞭とは違う風切り音で蛇腹鞭の先端がブスの開いた股間に突き刺さっていた。

ずぼうぅっっ

「あびゃあぁぁぁーーーっ！」

絶叫するブスの膣に蛇腹鞭が突き刺さり下着に血が滲んでいた。ブスは、良くできましたという様に泣きながら親指を突き出す。蛇腹鞭・奥義〝雷（いかづち）〟。ブスから伝授された技の名前だった。弥勒院分家に伝わる奥義のようであるが花梨にはそんな事は関係ない。今は手を抜いて放ったが、本気でやれば膣から子宮まで串刺しにする上、回転も加えるので、膣や子宮を抉り、ドリルを突き挿れられた様に完全に破壊する。例え調教され鍛えられたメス奴隷であっても膣と子宮を破壊されれば気絶する以外にないだろう。

「ブス師匠、大丈夫ですか」

花梨はブスに駆け寄ると、ブスも嬉しそうに花梨に飛び付いて顔をペロペロ舐めていた。

★　★　★　★

「いひひっ」

皐月は手足の腱を切断され動けない天子に迫ると、恐怖で震える天子の臍の下にメスを当てる。

プツッ

「ひぎぃぃぃぃーーっ」

天子の腹部にメスが食い込んでいた。皐月はそのままメスを正中線にそって動かしていく。

ツウゥゥゥーーッ

「あびゃあぁぁぁーーーっ！」

天子の性器の手前までメスで切開され、赤い血の筋が出来ている。天子は夥しい涙と鼻水を流しガクガクと震え、全身に汗も噴き出していた。

「ううぅ、もう一思いに殺しなさい」

天子は震える声で皐月に懇願するが、皐月の目を見てその願いが叶えられる事は万に一つもないと確信した。

・・私は最後まで苦しめられて殺される。こいつの眼。こんな眼を見たことがない。私は生きながら解体される。嫌だ、怖い。誰か助けて・・

天子はあまりの恐怖で過呼吸になっていた。ヒューヒューという荒い息遣いが天子の口から漏れる。しかし、皐月は一切構わずに天子の切開した腹を両手でガバッと開いていた。

「あぎゃあぁぁぁぁーーーーっ！！」

絶叫する天子の姿を皐月は楽しそうに眺め、膀胱を掴むとグシャッと握り潰した。そして、天子の尿道から尿が勢いよく噴き出す姿を見て皐月は爆笑していた。

「面白いですねぇ。ウンコも出しましょうよ」

皐月は天子の腹の奥に手を入れると直腸を両手で搾る。すると、天子の肛門から大便がニュルリと排泄されてきた。

「おやおや、ずいぶん溜まっていましたね。すっきりしましたか」

大量に絞り出された天子の大便を見て皐月は、その大便を天子の切開した腹の中に詰めていた。

「ほら、汚ないから、またお腹の中に戻してあげますよ」

皐月は天子の子宮や卵巣に大便を塗りつけると天子の様子を見る。天子は、あまりの激痛に口から泡を吹き、白眼を剥いて失神していた。

・・まったく情けないですね。二階堂遥の方がずっと楽しませてくれますよ・・

皐月は、早くも失神した天子に失望したように肩をすくめると、メスを手に持ち今度は臍から上に向かって正中線を切開していった。そして、頭頂部まで切り裂いた皐月は、そのままバリバリと天子の生皮を剥がしていく。その胸で天子の心臓はまだ動いていた。皐月

は楽しそうに心臓と肺を残し、天子の内臓をメスで切除しながら抜き取っていく。食道、胃、腸、肝臓、腎臓、次々に抜き取りボタボタと投げ捨てていく。

・・おや、これは?・・

天子の眼球を抜き取った時、違和感を感じた皐月は、それを調べてみると眼球にカメラが仕込まれ記録出来る装置のようだった。

・・ナンですか、これは……。私にはこんな物必要ないですね・・

皐月は天子の眼球をグシャッと握り潰していた。すると、今まで感じた事のない圧倒的な殺意が背後から皐月を襲ってきた。

・・いったい、なんですか・・

皐月は自分の体が震えている事に気付いた。

・・私が恐怖で震えている。違う、そんな事はあり得ない・・

皐月は、恐る恐る自分の背後を振り返った。そして、そこに立っている者を見て驚愕した。

・・こんな事あり得ない。何がどうなっているのですか・・

皐月は、その者から向けられる怒りの篭った視線に動く事が出来ずにいた。

１１９、焼牛（前書き）

今回はカニバリズム要素入ってます。気を付けて下さい。

１１９、焼牛

１１９、焼牛

「何をしているのですか。貴重な情報源を潰すとは。それがあれば弥勒院が何を探っているのか推測出来たというのに」

皐月の前に、怒りに満ちた表情の葉月がいた。

・・なぜだ、私が恐怖で動けないなどあり得ない。このままでは殺られる。私は豪徳寺皐月、全てを支配するのは私だ・・

皐月は渾身の力を込めて立ち上がる。葉月と皐月はお互いタングステン鋼のメスを持ち至近距離で対峙する。二人の間に緊張した空気がピーンと張りつめている。その緊張に耐えられなくなった皐月が葉月に襲いかかった。

ヒュンッ

空気を切り裂く鋭い音が響き、皐月のメスが宙を斬る。葉月は皐月の攻撃をかわしながら、何か異様な気配に気付いていた。

・・変な気配を感じますが、なんでしょう。もしや、私たち以外にも誰かいるという事ですか・・

シュパッッ

葉月の腕を皐月のメスが掠めていた。葉月の左腕から血が飛び散る。

・・まったく、この馬鹿者は厄介ですね。私のクローンだけあって、なかなかやるではないですか。それより気になるのは、この気配です。正体が掴めないのはイライラしますね・・

葉月は、その正体不明の気配に注意しながら皐月の攻撃を防いでいた。そして、その気配が皐月の後ろに回り込んだと思った次の瞬間。

「うがぁぁぁっ！」

皐月の胸からナイフの先が飛び出していた。そして、皐月の背後には天道の姿があった。

・・なぜ、豪徳寺が二人いる？ふん、でもまあ1匹は倒した。残りの1匹もすぐ始末してやる・・

天道は床に横たわる天子の変わり果てた姿に目を向ける。

・・すまん、天子。助けられなかった・・

天道はグリッとナイフを抉りながら皐月から抜く。当然、心臓を貫かれた皐月は崩れ落ちると天道は思っていた。しかし、皐月はくるりと振り向くと天道の胸にメスを突き刺す。

ドスッ

「！！！！」

天道は驚愕した顔で皐月を見つめていた。

「いひっ」

皐月はさらに天道の胸を突き刺した。天道は崩れ落ちたように見えたが、その気配は消え姿が見えなくなった。そして、胸を刺された皐月も膝から崩れ落ちると細かな粒子状になり消えていった。

「おやおや、これはどういう事でしょう。少し整理してみる必要がありますね」

葉月はこの一連の出来事を考察してみた。

・・あの気配は天道であるのは間違いないですね。天道は何らかの方法、あるいは自身の力で気配を消し私たちに認識されないようにしていたのだと考えられます。そして、皐月の背後に回り皐月の胸を突き刺した。だが皐月は私のクローン。私と同じように咄嗟に心臓の位置を動かして致命傷を避けた。そして、天道に反撃する。天道の胸を突き刺し、さらに自分と同じ様に心臓の位置を動かされた場合も考え、さらにもう一撃加えている。だが、それでも天道は再び気配を消した。皐月のメスは完全に天道の心臓を貫いていたはずですが、どういう事でしょう・・

葉月は考えるが結論が出なかった。今はもうあの気配は感じられない。天道も深傷を負ったのは間違いなかった。きっと撤退していったのだろう

・・それにしても私のクローンにしては天道如きにやられるのは情けないですね。未来の私というのは何をやっているのでしょうか。もっと、しっかりしなさいと発破をかけたいものですね・・

葉月は腕組みをして、床に転がる天子の無様な亡骸を眺めていた。

★　★　★　★

会場に巨大な牛の作り物が運び込まれてきた。沙也加は調教師から説明を受けマイクを握る。

「お待たせしました。それでは準備が整いましたのでメス奴隷クルミの処刑を執行致します。ご存知の方も多いと思いますが、古来ヨーロッパで行われていた〝青銅の牛〟という処刑でございます。簡単に説明すると、この牛の作り物の中にメス奴隷を入れ、下から火で炙っていきます。メス奴隷はこの牛の中で炙り殺されていく訳です。そして、メス奴隷の悲鳴は、内部の筒状の装置で牛の鳴き声に変換されます。もーもーと鳴く牛を楽しんで下さい」

沙也加の説明で観客席はワーッと盛り上がるが、メス奴隷クルミは号泣していた。クルミは後ろ手に拘束されたまま立たされている。

「それでは、牛に入れる前に性器を破壊します。お楽しみ下さい」

クルミは立ったまま足を大きく開かされてガタガタ震えている。クルミの調教師はクルミの左右の小陰唇に錘をぶら下げ引き伸ばす。そして、ハサミを器用に使いクルミの小陰唇をジャキジャキと切断していく。

「うぎゃあぁぁぁーーっ、いだいぃぃぃーーっ！」

調教師は切断したクルミの小陰唇に扇打ちで串を打っていく。そして、きれいに扇状に串を打った小陰唇をトレイに載せた。次にクリトリスをカッターを使い根本から抉(えぐ)り取る。

「んぎゃあぁぁぁーーっ、だじげでえぇぇぇーーっ！」

クルミのクリトリスも串を打たれトレイに載せられた。そして、今度は鋭いナイフを手に取るとクルミの膣に挿れ、膣を捌(さば)いていく。その後きれいに六等分に切断した膣壁を剥がしていった。

「あぶうぅぅーーーっ、ぢぬうぅぅーーっ！」

クルミから引き剥がした膣壁にも串を波打ちにするとトレイに載せた。まだ、終わりではなかった。もうただの穴になったクルミの膣に丸カンナを挿れ、子宮頸部を抉り取る。コロッとした子宮頸部が取り出され調教師はそれにも串を打つ。観客席からは期待する視線がトレイに載せられたクルミの性器に集中していた。その間にも青銅の牛の下に薪が集められ点火する準備が整えられている。クルミは切断された部分に焼きごてを当てられ、出血を止めるため焼き潰されていた。

「うあぁぁぁぁーーーーっ！」

クルミは子供のように大声で号泣している。ここで沙也加のアナウンスが入った。

「今メス奴隷から切除しました新鮮な部位を抽選で販売致します。調理もこちらで行いますので、当選した方は塩焼きかタレか指定して下さい」

沙也加のアナウンスがあるや否や端末から購入希望の応募が殺到していた。それを見た沙也加は困った顔をしていた。提供出来る数に対して希望者の数が圧倒的に多いのである。

・・これは……。さすがにこのトーナメントを観に来るようなお客は、もう頭のネジが飛んでいる方が多いですね。嬉しい限りではありますが、どうしますか・・

沙也加は頭を悩ませていた。

★　★　★　★

しずくは端末から入力しているつぐみを見て声をかけた。

「つぐみちゃんも食べたいの？」

「うん、食べた事ないからさ。こんな機会滅多にないだろう。是非食べてみたいよ。マンコってどんな味するのかな」

「私は食べた事あるけど、もっとしっかり調理してあったから、美味しい料理としか思わなかったよ。あの串焼きだと素材の味が楽しめそうだよね」

「しずく……。人の肉、食べた事あるの？」

「うん、葉月さんがお友達の茜ちゃんを処刑した後、料理して私たちに振る舞ってくれたの」

つぐみは平気な顔で言うしずくを、ポカンと口を開けたまま見つめていた。

★　★　★　★

「栄子ちゃんも応募した？」

「もちろんだよ。こんなの普通食べられないぞ」

「誰か当たるといいね。そしたら、みんなで分けて食べようね」

ＶＩＰルームで桃子、詩織、栄子の三人は興奮した面持ちで話していた。

「それにしてもメス奴隷ってマンコも食べられたりするんだね」

「はぁ、当たり前だろう。メス奴隷は楽しんで貰うための道具なんだよ。その為にはなんだってやるんだよ」

「じゃあ私たちもメス奴隷になったらマンコ食べられちゃうかも知れないのか」

桃子が怖そうに顔を曇らせるが栄子は見下すように二人に言っていた。

「マンコ食べられるのは上位のメス奴隷だよ。このトーナメントに出場しているのはメス奴隷でも最上のクラスのメスだからね。心配しないでもお前たちのマンコなんて臭くて誰も食べないよ」

「それなら、私もマンコ綺麗にしておかなくちゃ。ご主人様に美味しく食べて貰う為に」

「私は今でもマンコの穴の中まで綺麗にしているから、いつ食べられても大丈夫だよ」

栄子の言葉にカチンときた桃子と詩織は自分の方が上だと主張していた。その様子をメイドは微笑ましく見守っていた。

１２０、下拵（前書き）

今回もグロ、カニバリズム要素あります。気を付けて下さい。

１２０、下拵

１２０、下拵

沙也加は希望者の人数があまりに多数の為、食材を追加する必要があると考えていた。クルミはもう青銅の牛で処刑すると宣告してしまったので、今さら変える訳にはいかない。観客はもうそれを楽しみにしているのだから。

・・さてそうなると、どうせすぐ処刑してしまうので他の臓器を抜き取っていくしかありませんね。なるべく多く提供する事を考えると・・

沙也加は調教師に依頼していた。調教師も沙也加の提案に頷く。そして、クルミの肛門をぐるりと切っていくと、そのまま肛門毎、腸を引きずり出していた。

「ひぎぃぃぃぃぃぃーーーーっ！！！」

目を見開き絶叫するクルミの体内からずるずると腸が引き出されていく。直腸、Ｓ状結腸、小腸。どんどん引きずり出され、ある程度の所で切断される。調教師は急いで取り出したクルミの腸を開いて洗浄する。そして、適度な長さに切断するとボウルに入れ塩もみを始めた。その手慣れた様子と先程の串打ちの手際の良さから、この調教師は調理経験者でもあるのかと観客たちは思っていた。

「あの調教師、事によるとカニバリズム専門の地下倶楽部の関係者か調理師なのか。ただの調教師では、ここまで手際よく出来ないだろう」

「モツは下処理が大変だけど、美味しいからね。あの調教師をみるときちんと下処理してくれそうだから期待出来るわね」

観客たちが期待に胸を膨らませている内に、内臓を抜き取られたクルミは青銅の牛の中に入れられ、蓋を閉められていた。そして、牛の下の薪に火が点火される。火は勢いよく燃え上がり青銅の牛を熱していく。その頃、調教師は下茹でしたクルミの腸を牛乳に浸けていた。調教師は、これで一段落したと牛に入れられたクルミに目を向ける。青銅の牛は激しく熱せられ近くにいるだけでその熱波が襲ってくる。

「んもぉぉぉーーーーっ！」

牛が鳴いた。観客たちも牛の中でクルミがどんな状態になっているのか想像し興奮して自慰を始めていた。

「んんもぅぅーーーーーーっ！！」

また、牛が鳴く。

「ハァハァ、いいなあ。あのメス奴隷、好みだったんだよ。そのメス奴隷が牛の中で苦しんで泣き叫んでいるかと思うと、もう僕も我慢出来ないよ」

観客の一人がしごいていた自分の勃起した性器に売店で購入したオス用性器処刑具の筒を装着していた。そして、次に牛が鳴いた瞬間、

その観客は処刑具のスイッチを押していた。

パシュッ

「ひぎゃあぁぁーっ」

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

その観客は性器を無数の針で串刺しにされ、その瞬間、射精し悶絶していた。その観客だけではなかった。そこかしこで売店で購入した性器処刑具を使用し倒れていく観客が激増していた。

「あはは、ほら僕はチンポギロチンを幾つも買ったんだ。見てて下さいね」

観客の一人は勃起した自分の男性器に4個ものギロチンをセットしていた。

「あははっ、チンポをスライスしまーす」

その観客は自分の男性器にセットしたギロチンを一斉に落とす。

「あぎゃあぁぁぁーーーっ！」

観客の男性器は綺麗にスライスされ、その観客は地面に倒れビクンビクンと痙攣していた。

「あひゃひゃ、ほらほら、私、針が飛び出すディルドゥたくさん買ったの」

観客の女は、そのディルドゥを自分の膣と肛門と口腔に突き挿れる。
そして、膣、肛門、口腔と順番にボタンを押していった。

パシュッ、パシュッ、パシュッ

その女も地面に倒れ動かなくなっていた。観客席は阿鼻叫喚の地獄絵図になっていた。それは、おそらくメス奴隷の体が調理されていくという興奮と期待。それに、モーモーと鳴きながら殺されていくメス奴隷の哀れな姿を想像した結果、自制心が失われ暴走してしまったのだろう。

「んもぅぅーーっ、んもぅぅーーっ」

牛は、ひっきりなしに鳴いている。メス奴隷の姿が見えないだけに、その姿を想像してしまい観客たちの暴走は止まらなかった。

★
★
★
★

「兄様、大丈夫ですか?」

ぼろぼろの天道を見て一人の女性が駆け寄ってきた。その後に男も続いてくる。

「兄貴を助けに行った天子はどうしたんだ?」

男も天道に尋ねていた。

「すまん、天子は殺された。助けられなかった」

二人は絶句していた。

「やはり、豪徳寺は化け物だ。天界、天美、気を付けろ。警戒を厳重にするんだ。トーナメントで受かれている豪徳寺を始末するつもりでいたが、風花からの連絡もない。おそらく、豪徳寺に消されたのだろう。我らの一族の天子と風花を殺された。豪徳寺の奴、絶対に許す訳にはいかないが、迂闊に手を出すのは危険だと思い知った。お前たちも気を付けてくれ」

そこまで話し天道は気を失っていた。二人は急いで救護班を呼び天道を運ばせる。

「どう思う、天美。兄貴がここまでやられるなんて考えられないのだが」

「私も信じられません。事によると豪徳寺も何か特殊な力があるのでは……。姉様の眼が回収出来れば何か分かるかもしれません。兄様は脳内物質セロトニンが一般人より大量に分泌出来ます。それで気配を消して、認知出来ない筈なのに豪徳寺には悟られたという事でしょうか。でも姉様を殺した罪は許せません。私が必ず姉様と風花の仇を討ちます」

「それは俺も同じだ。だが兄貴がやられる程の相手だ。兄貴の胸を見たろう。正確に心臓の位置を貫いている。兄貴が普通の体だったら殺されていただろう。完全内臓逆位だったのが幸いしたな。とにかく今まで以上に慎重にいく必要があるな」

もし、葉月がこの天界の言葉を聞いたら、聖帝サ〇ザーですかと昔のコミックを思いだし言うだろう。そして、ネタがばれれば何でも

ない事ですと爆笑するに違いなかった。

★　★　★　★

ひまりは、ハッと気が付いた。どうやら、性器ギロチンの途中で失神してしまったらしい。ひまりは拘束を解き恐る恐る自分の股間を見た。白い下着の股間部は真っ赤に染まっている。よろよろと立ち上がったひまりは、下着を脱いで自分の性器を確認してみた。出血はしているが触った感じでは無事のようであった。潰されたと思ったクリトリスも触っているうちに、むくむくと硬く勃起してきた。そうなると、またひまりは自分の性器を痛めつけたくなっていた。

・・マンコ、もっと痛めつけたい。あの６９番みたいにマンコ処刑されたら、どんな気持ちなんだろう・・

ひまりは自分の性器に触れてみると、少し想像しただけでぐっしょりと濡れてしまっていた。ひまりは、そのまま止まらず自慰を始めてしまっていた。

１２１、煮込

１２１、煮込

「んもぅぅーー……」

牛の鳴き声にだんだん力がなくなり小さくなっていく。それは、クルミが弱ってきた証だった。おそらくもう、牛の中でクルミは天国への階段を登り始めているのだろう。

「んもぅ……」

牛が小さく鳴いた。そして、それが最後でそれきり牛が鳴く事はなかった。そして、ちょうど調理師が煮込んでいた鍋も完成する。ゴボウや大根と煮込んだ鍋からはいい匂いが漂っていた。隣で炭火で焼かれていた串も完成したようだ。沙也加は端末を操作して当選者の番号を読み上げていた。その中でＺ１３の番号が読み上げられていた。

★　★　★　★

「当たった、当たった。しずく、私当選したよ。マンコじゃなくて煮込み鍋の方だけど、でも食べるの初めてだから興奮する。急いで貰ってくるから、しずくも一緒に食べよう。食べさせてあげるから

心配するな」

つぐみはいそいそとベッドから起き上がると医務室を出ていった。
その頃、ＶＩＰルームでも歓声が上がっていた。

「やった、当たったよ桃子ちゃん。串焼きの方じゃなくて残念だけど、煮込み鍋の方だからみんなで食べてみようよ。栄子ちゃんも食べるでしょう？」

メス奴隷の鍋に当選した詩織は嬉しそうにＶＩＰルームを飛び出していった。
会場ではメス奴隷の串焼きの当選者から配布が始められていた。つぐみが煮込み鍋に当選した列に並んでいると声をかけられた。

「あれ、つぐみちゃんも当たったの。でも、それより動いて大丈夫なの。栄子ちゃんに、けっこう酷い事されてたけど」

詩織は、まだ五寸釘が打ち込まれたままのつぐみの恥丘に目を向ける。つぐみは、それを隠そうともせず堂々としていた。

「別に吉川の事は気にしてないよ。私も吉川にけっこうな事をしてるしね。それより、この煮込み鍋に当選して嬉しいよ。こんなの食べるの初めてだからね」

「私も、みんなで分けて食べるんだ。いい匂いだねぇ、美味しそう。そうそう、栄子ちゃんが言ってたけど、メス奴隷って、こうしてマンコとか食べられちゃうの普通にあるみたいだね」

「メス奴隷が飽きられて廃棄される時は色々あるみたいだよ。八千代というメス奴隷みたいにゴミと一緒に焼却されたり、私の従姉妹

みたいに剥製にされたりね」

「そうか、いろいろあるんだね。でも結局処刑されちゃうんだよね。なんか怖いなぁ。私、メス奴隷になるのは良いけど、処刑は怖いよ」

「はは、小日向はもうZクラスなんだからメス奴隷になるのは確定じゃない。だから、小日向が望むと望まざるに関わらず最後は必ず処刑されるよ。基本はマンコ壊されて絶命するのが多いかな。ご主人様たちは最後にメス奴隷のマンコ壊すのを楽しみにしているだろうからね」

つぐみと詩織が話しているうちに二人の順番がきていた。二人は見ただけで上等な物だと分かる椀に入った煮込み汁を受け取っていた。

「その椀は返却せずともけっこうですので、記念にお持ち帰り下さいね」

沙也加が笑顔で言葉をかけ、はい次の方とてきぱきと列に並んだ当選者に煮込みの入った椀を渡していた。そして、ようやく冷えてきた牛が開けられる。牛の中から出されたクルミの姿は酷いものだった。直火で焼いたようなパリパリの状態ではなく、熱波に晒された為、皮膚が溶けたようにどろどろになっている。二つの眼球も破裂して硝子体が流れ出し顔面に焼き付いている。その苦悶に満ちた表情は、いかにクルミが苦しんで死んでいったのかを見る者に感じさせた。青銅の牛で処刑されたメス奴隷の特徴でもある口を大きく開けた状態でクルミの表情も固まっている。この牛で処刑されたメス奴隷のほとんどが熱波を吸い込んでしまい肺が焼かれ呼吸困難で絶命する。その苦しさは筆舌に尽くし難い。その哀れなクルミの姿は台座の上に置かれ、観客が自由に撮影出来る撮影スポットとして解放された。さっそく観客が無惨なクルミの姿と一緒に笑顔でカメラ

に写っていた。

★　★　★　★

ひまりは後悔していた。やはり自分の考えたように順序よく自慰すれば良かったと唇を噛んでいた。

・・もう時間がないよ。あんな気絶するかもしれない自虐自慰はやっぱり後回しすればよかった。もう、オープンに備えて他のアイテムを探しておこう。そうすれば、すぐに第一ステージはクリア出来るはずだよね・・

ひまりはゆかりの部屋の中を隅から隅まで調べていった。そして、思いがけない所から蝋燭やアナルプラグ、カテーテル等を発見していた。

・・これなら、正式オープンの時には、すぐに第二ステージに進められる・・

ひまりは笑みを浮かべたが、気になったので端末を見てみる。そこには、ひまりより多くのミッションをクリアしたメスが多数いる事が示されていた。

・・本格オープンしたら負けない。私が一番にクリアしてみせるから・・

ひまりは、ズキズキと痛む自分の性器に手を当てながら固く心に誓っていた。

★　★　★　★

葉月は弥勒院天道に逃げられた事で部屋に転がっている多数の死体に八つ当たりし、蹴りを入れていた。

・・まさか私から逃げられる者がいるとは、私も気を引き締めねばなりませんが、イライラしますね・・

「近藤、早く起きてこないと沙也加に処刑して貰いますよ」

葉月はイライラの鬱憤を晴らすように怒鳴っていた。すると、山の様に重なりあった死体がもぞもぞと動く。そして、なんとその死体の山の下から近藤ともう一人の男が出てきた。

「まったく、この程度の罠で全滅とは私は恥ずかしいですよ。近藤、岡田、お前たち帰ったら神楽坂さんにお仕置きして貰います。覚悟しておきなさい」

近藤と岡田は葉月の前で土下座し震えていた。

★　★　★　★

ひまりは、とぼとぼと帰り道を歩いていた。

・・もっと、６９番の事を勉強しなくちゃ……。確か西園寺響子先

生はうちの学校にずっといるから６９番の事、詳しいかも知れない。明日、学校で訊いてみよう・・

ひまりは、なぜ自分がここまでこのアトラクションにのめり込んでいるのか自分でも分からなかったが、今日体験した事で６９番の言っている意味が理解出来たような気がした。

「ブスで頭のおかしい、どうしようもない変態の私のマンコを処刑して下さい」

ひまりは、最初小さな声で言ってみた。自分の下腹部が熱くなってきたのを感じる。

「ブスで頭のおかしい私は、マンコを徹底的に壊して貰う為に産まれてきたんです。どうか私のマンコを二度と使えないように破壊して下さい」

自分の性器から溢れ出たものが下着を濡らしていくのを感じた。ひまりは、えへっと笑うと歩きながら放尿を始めた。尿はひまりの太ももを伝い、靴下に吸い込まれていく。

・・気持ちいい・・

ひまりは尿を漏らしながら家路についていた。

122、仕置

122、仕置

Aブロックの二回戦が全て終了し、スタッフたちは片付けを始めていたが、沙也加はまだ煮込み汁の配布を続けていた。

「なかなか良い匂いですね」

いきなり声をかけられて沙也加が顔を上げると、帰ってきた葉月が立っていた。

「モツ煮込みのようですが、美味しそうですね。あまりそうですか？」

「ええ、かなり余裕をみて多めに作りましたので」

「それなら、食堂の方へ持って来て貰えますか。少しお腹が空いてきましたので」

「はい、喜んで」

沙也加が答えると葉月は屋敷の方へ向かって歩いていった。その後ろに近藤と岡田が萎れた花のように項垂れて続いていた。沙也加は何があったのか分からなかったが、近藤たちのあの様子では仕事をしくじったのだろうと想像していた。

・・まったく、近藤は仕事が出来る方だと思っていましたが、葉月様の仕事を失敗するなど言語道断ですね。私がお仕置きしてあげたいですよ・・

沙也加は葉月たちを見送りながら観客に煮込み汁の椀を渡していた。

★　★　★　★

渡邉は百目鬼からの連絡を受け、ほくほくしていた。

「プレオープンは盛況のうちに終了しました。特に大きなトラブルもなく無事閉館しましたので報告致します。感想や要望をまとめていますが、概ね好評でありますね。高得点を獲った強者も数多くいますよ。中には、渡邉ゆかりはこの程度なのか、私ならもっと激しい自虐オナニーをやるなんて書いている参加者もいますし、オープンが期待できますね。間違いなく最上級のメス奴隷が誕生するでしょう」

「それは、ワクワクしますね。みんな、うちのゆかりを目標にしているかと思うと感無量ですね。それで、メス奴隷が誕生した際にはリベートを頂けるのですよね」

「ええ、もちろんです。それと、お好みのメス奴隷も1匹差し上げますよ」

「それは有難いですね。若いメス奴隷を欲しいと思っていましたので……。それにしても、オープンが待ち遠しいですね」

「ええ、なるべく急いでオープン出来るよう進めています。私共としても、早く稼働させたいですからね」

渡邉は百目鬼との電話を切り、笑いが止まらなかった。

・・ふふふ、上手く回ってるじゃないか。６９番の体験アトラクションか、すべてゆかりのおかげだな。ゆかりは本当に親孝行な娘だ。俺は、良い娘に恵まれて幸せだな。くくく・・

渡邉は、これからの更に薔薇色の人生を想像し興奮しながら葉月の屋敷の中を歩いていた。すると、渡邉の前を一人の女性事務員が歩いていた。渡邉は、その形の良い尻に目を奪われていた。

・・なかなか、良い尻をしているじゃないか。そういえば、このところ忙しくて御無沙汰だったな・・

下衆な笑いを浮かべながら渡邉は、その事務員に近付いて行った。

★　★　★　★

本日プレオープンの〝シム６９〟から出てきた少女は、帰り道を歩いていた。少女の顔は、まだ興奮が覚めないようで薄く紅潮している。

・・私の家じゃ、こんな事出来ないから体験できて嬉しいよ。痛いのもあったけど凄く気持ちいい。オープンしたら毎日でも通いたい。もう普通のオナニーなんかじゃ詰まらない・・

少女は1日体験した行為を思い出し、まだ全然興奮が治まらなかった。そして、夕暮れの街を1人歩いていた。だが〝シム69〟の噂は少女ばかりが知っていた訳ではない。その名称や体験型という説明で、メス奴隷69番を知っている者たちにとっては、その内容を推察するのは訳のない事であった。そんな男たちは、このアトラクションから出てくる少女を狙っていたのである。男たちにとっては、このような変態施設に来るような女は、将来メス奴隷になるのは間違いないので、拐って暴行して問題ないだろうと考えていたのである。今、歩いている少女も男たちに狙われていた。男たちは気付かれないように少女の後をついていく。セーラー服にプリーツミニスカートの少女は、そんな事にも気付かずに歩いていた。その時、少女は前を歩く自分と同じセーラー服を着た少女に気がついた。それは同じく〝シム69〟に行っていた水澤ひまりだった。

「水澤さん、こんにちは。偶然だね」

「あっ、武田さん……。こ、こんにちは」

声をかけられたひまりは、ドキッとしたように顔を伏せていた。

「こんな所で会うなんてビックリだね。なにか用事があったの?」

「う、うん……。ちょっと……」

はっきりしないひまりに武田真由子は考えていた。自宅付近でもなく、こんなファーストフードも喫茶店や塾もない通りを真面目で優等生のひまりが1人で歩いているなんて不自然極まりなかった。

「ねえ、気になるんだけど何処行ってたの。内緒にするから教えて」

真由子の追求にもひまりは答えず顔を赤くしている。その様子から真由子は察した。ひまりも自分と同じ所に行っていたのだと。そこで真由子は自分から話してみる事にした。

「私ね、今日プレオープンのアトラクションに行ってきたの。楽しかったよ」

真由子のその言葉にひまりがピクッと反応する。真由子は、やはりと思った。

・・クラスでも大人しくて目立たない優等生の水澤さんが、まさかあのアトラクションへ。でも、この時間にここを歩いているのは他に考えられないよ・・

その時、真由子はひまりの太ももや靴下が濡れているように見えた。ひまりは、知っている６９番が好んで歩きながら放尿していた事を。

・・間違いないね。ここはそれほど人通りが多くない。６９番と同じ事をするには、うってつけ。という事は水澤さんは、私と同じ〝シム６９〟に行っていた。隠す事ないのに……・・

真由子がひまりに向かって口を開こうとした時、背後から狙っていた男たちが飛び出して来た。そして、二人の首筋に何かを当てる。ひまりと真由子が冷たい金属の感触に声を上げようとした瞬間。その首筋に電撃が走った。

バチッ！

ひまりと真由子は道路に崩れ落ちていた。二人はスタンガンの電撃

で意識を失い哀れに倒れている。男たちは慣れたように二人の両手を背中に回し、結束バンドで左右の指を一緒に固定していた。そして、両目と口にはガムテープを貼り塞いでしまう。

「くくく、あんな変態のアトラクションに行くような女だ。犯されたくて仕方ないんだろう。お望み通り、俺たちが犯してやるよ」

男たちは、ひまりと真由子を1人ずつスーツケースに詰めると、仲間が乗ってきた車のトランクに詰め走り去っていった。

★
★
★
★

つぐみはようやく五寸釘を抜かれ、治療の為に移送される事になった。

「何日か、かかるみたいだから、しずくとはもう会えないかもしれないな。観には来れないかも知れないけど、応援しているから頑張ってな」

「うん、ありがとう。つぐみちゃんもあまり無理しないようにね」

しずくは笑顔でつぐみを送り出していた。つぐみはＶＩＰルームにも寄って貰って、桃子たちに伝言を頼んでいた。

「響子先生に明日から私、欠席すると伝えておいてくれないか。なるべく早く登校するから心配しないようにとも言っておいてね」

つぐみの言葉に桃子と詩織は頷いていたが、つぐみをこんな目にあ

わせた栄子はさっさと帰ってしまっていた。

★　★　★　★

近藤と岡田は全裸にされ拘束されていた。二人の前には沙也加と理津子が、それぞれ鞭と竹刀を持ち立っている。

「さあ、お仕置きの時間ですよ。オチンポに鞭１００発、竹刀１００発です」

強制的に勃起させられ大きく反り返った二人の性器目掛けて沙也加と理津子が鞭と竹刀を叩き込む。

「うぐうぅぅぅっ」

鞭の打撃で近藤の性器が左右に揺れる。岡田の性器も竹刀の突きで潰されていた。

「さすがに我慢しますね。でも、ここは我慢出来ないでしょう」

理津子は岡田の睾丸に狙いをつけていた。

ダァーーン！

理津子の踏み込む鋭い音と共に竹刀の先が岡田の睾丸に突き入れられた。

「ぶぎゃあぁぁぁぁーーーつ」

岡田は睾丸に突きを入れられ、口から泡を吹くと白目を剥いて失神してしまった。

「あらあら、面白いわね。それでは私も」

沙也加も近藤の睾丸目掛けて鞭を振る。

ヒュンッ

「おぼおぉぉぉぉーーっ！」

睾丸への鞭の鋭い一撃で、近藤も絶叫すると岡田同様泡を吹いて失神していた。

１２３、要請

１２３、要請

ひまりたちが連れ去られた様子を物陰から見ていた人物がいた。グルーム・アグリカルチャーの職員であるその人物はスマートフォンを手に取ると発信する。相手はすぐに電話に出てくれた。

「百目鬼主事、やはり予想通りうちのアトラクションを出た者を狙っている者がいますね。今、２名の顧客が拉致されました」

「ふむ、他にも報告が上がってきています。私が危惧したように良からぬ輩が、湧いてきていますね。うちのアトラクションに来る顧客は、大事なメス奴隷候補です。それに、変な噂が拡がってはオープン時の集客に影響が出るでしょう。こんな所で襲ってくる連中はメス奴隷を購入する金もない連中でしょう。プレオープン入場の記念品はもれなく顧客に渡してありますね？」

「はい、それは間違いなく」

「それでは、その記念品に仕込んだＧＰＳ発信器で位置が判明しましたら連絡下さい。実行部隊を送り込んで駆除します。どうせ、社会の役には立たないクズ共でしょうから世の中に支障はありません。消えて貰います」

「了解しました。あの、私も現場が判明しましたら行ってもよろし

いですか、百目鬼主事」

「ああ、構いませんよ。ただ実行部隊の邪魔にならないように気をつけて下さいね」

「はい、心得ています。それでは」

百目鬼との連絡を切った職員は興奮していた。グルーム・アグリカルチャーのメス奴隷養成施設で育てられているメス奴隷の中から、その性格や資質をみて選抜された実行部隊。主に邪魔になる者の駆除、つまり処刑を専門に扱う部署である。その実態は一般の職員では窺い知る事は出来ない。その実行部隊を見る事が出きるのだ。職員が興奮を抑える事が出来ないのも無理はなかった。

★　★　★　★

ひまりと真由子は窓一つないコンクリート打ちっぱなしの殺風景な部屋の中で気がついた。蛍光灯が二本白く点灯している。

・・ここは何処？・・

ひまりは自分が何者かに捕えられたのを思い出した。そして、どうやら自分が拘束されている事にも気付いた。椅子に座らされて両足は椅子の脚に縛り付けられ、両腕も背中で縛られている。それに口にもガムテープが貼られ塞がれているようだった。隣の真由子も同じ様に拘束されている。

・・私、ここで犯されちゃうの？・・

真面目で優等生のひまりでも、この状態で自分が何をされるのか容易に想像出来た。未経験の女子であるひまりは、自分の初体験が綺麗な部屋のベッドの上ではなく、こんな薄汚れた部屋の中で自分の意思に関係なく散らされる事に震えていた。すると、ガチャッとドアが開く音がして男が一人入って来た。

「おっ、メス共気がついたみたいだな」

男は舐めるように二人の姿を見つめると下卑た笑いを浮かべている。

「おい、メス共のお目覚めだ。みんな呼んでこい」

男がドアの外に声をかけると、ぞろぞろと１０人近い男女が入って来た。

「さあ、パーティーの始まりだ。楽しもうぜ」

男の一人がひまりの下着の中に手を入れてきた。

「ふぐっ」

男はひまりの膣に指を入れていた。

「おい、ちょっとこいつ立たせろよ」

男の命令で、もう一人の男がひまりを立ち上がらせ押さえつけていた。

「ふっ、ふっ、ふっ、ふっ」

ひまりは涙を流し男に膣に指を入れられている。

「よし、そっちのメスも立たせろ」

真由子も椅子に脚を縛られたまま立たされ膣に指を入れられていた。

「思った通りコイツらまだ処女だな。初めて経験する日に俺たちに壊されるんだ。楽しいな」

「ちょっと、壊すのは私たちにやらせてくれるんだよね。私たちはマンコ壊すのを楽しみに来ているんだからね。忘れないでよ」

男たちに混じっていた女二人が声を上げる。

「良いねえ、セーラー服の処女マンコ。まぁ、すぐ処女じゃなくなるけど、私たちが最後に徹底的に壊してあげるからね。あんな変態アトラクションに行ってたんだ。マンコ、壊されたくて仕方ないんだろう。夢を叶えてやるよ、この変態メスブタ」

女子二人は凶悪な目でひまりと真由子を見つめていたが、男たちも我慢出来なくなったようで、ひまりたちに命令する。

「手の拘束解いてやるから立ったままオナニーしろ。変態のお前らは男の見ている前でオナニーするの嬉しいだろう。ほら、早くやれよ。それとも、何か道具が必要か。いいか、ちゃんと濡れたか確認するからな。濡れてなかったらぶち殺してやる」

周りの男から卑猥な目で見られ、ひまりも真由子も固まっていた。

パァーンッ！

「ふぐっ」

しびれを切らした男がひまりの頬を打っていた。

「早くしろや、このブスッ。殺されたいのか」

如何にも気の短そうな男がナイフを取り出したのを見て、ひまりも真由子も股間に手を当て指を動かしていた。泣きながら自慰をする二人のセーラー服の中学生女子を見て男たちの股間は膨らんでいった。

「よーし、お前ら。そっちのメスを犯して良いぞ。俺はこっちのメスの処女膜を切り取って楽しむからな」

ナイフを持った男はひまりの腕をまた縛りあげていた。そして、ひまりの白い下着を切り裂く。

「なんだ、これ？」

ひまりの下着を切り裂いた男が不思議な物を見たように声を上げる。残った男たちは真由子を犯すため全員真由子の方に集まっていたが、残っていた女子二人がやって来て、男の持っている下着を覗き込む。ひまりの穿いていた下着のクロッチには画鋲が埋め込まれていた。ひまりは退室する際、職員に許可をとって、この下着を購入し穿いてきたのだった。

「やっぱり、このメス、頭がおかしいね。あんたが処女膜切り取ったら、あたしたちにコイツのマンコ壊させてよ。あんたもこんな頭

のおかしいメス犯すの気持ち悪いでしょう。何やってるか分からないから変な病気とか持ってるかもよ」

女二人にそう言われると男も怖くなってきた。確かに自分の性器に画鋲刺してるメスなんて普通ではない。あの69番がやっていた行為だと知っていたが、目の前で見ると薄気味悪くなってきた。

「ああ、分かった。こっちのメスはお前たちで楽しめ」

男はひまりを見てゾクリと寒気がしていた。勃起していた男の性器も萎れてしまっていた。

「ああ、処女膜もお前たちがやっていいや。なんか、もう触るのも気持ち悪くなってきた。こんなのが世の中にいると思うと不気味過ぎる。マンコ壊して、こいつを始末しておけ」

「もちろん、そのつもり。このメスも、メスの大切な処を壊されて始末されるの嬉しいでしょうよ」

「あら、頭のおかしい変態のメスが震えているよ」

「違うわよ。嬉しくて震えているのよ。今日があなたの最後の日、もっと喜んでね」

迫ってくる女二人にひまりは首を左右に振り号泣していた。

「ふごうぅぅっ」

しかし、二人の女は椅子の座面にナイフを立て、その切っ先をひまりの肛門にツプッと入れる。

「これで動いたらあんたのケツの穴切れるからね。動くんじゃないよ」

ひまりは自分の肛門に感じるナイフの冷たい感触に、もう生きた心地がしなかった。そして、今度は膣に膣鏡の先端が挿れられる。

「あまり奥まで挿れないように気をつけて。せっかくの処女膜突き抜けちゃったら詰まらないからね」

女たちは慎重に膣鏡を挿入し開口していく。

「ほーら見えた、処女膜だよ。コイツの特に小さい穴だね。小指も通らないよ」

「どうする、すぐ切っちゃう？」

「せっかくだから切る前に煙草の火で焼いてやろうよ」

「あはは、面白そう。おい、メス。動くなよ。動いたらお前のケツマンコ、ザックリ切れるからな。マンコなんて壊れても良いけど、腸が壊れたら死ぬからな。よく覚えておけよ」

女二人はひまりに告げると煙草を旨そうに吸い始めていた。ひまりは次に自分の性器に与えられる激痛を想像し涙と震えが止まらなかった。

１２４、駆除

１２４、駆除

近藤と岡田は性器に鞭１００発、竹刀１００発のお仕置きを受け、陰茎はみみず腫れと裂傷で酷い状態になり、睾丸は潰されてしまっていた。つまり、もうオスとしての機能は奪われていたが、沙也加の興奮は治まっていなかった。理津子はもう自分のノルマは済んだとばかりに引きあげていたが、沙也加のお仕置きはまだ続いている。沙也加は棘の生えたプジーを二人の尿道に突き刺し、そのままグリグリと抉り尿道を完膚なきままに破壊する。そして、その破壊した尿道にスポイトで激辛の香辛料の液体を流し込んでいた。

「うがあぁぁぁぁーーーーっ！」

大の大人である近藤と岡田が号泣し、沙也加に許しを求めていたが、沙也加はオス用の性器ギロチンを二人の性器にセットしていく。近藤と岡田は自分の性器にセットされたギロチンを見て、もう声もなく震えていた。

「いひっ、それではお仕置きもオチンポ切断して終わりにしましょう」

楽しそうに二人に告げた沙也加はギロチンのスイッチを押す。

ズガァァーン

「あぎゃあぁぁぁぁーーーーっ！」

根本から性器が切断され、近藤と岡田は絶叫して意識を失っていた。

★　★　★　★

「〝M〟、どうする？もう踏み込んで制圧する」

「いや、せっかくだからもう少し静観しましょう。あのメスの適正も見ておきたいので。〝Y〟にも伝えて下さい、〝G〟」

〝G〟と呼ばれた女は暗闇の中に消えていった。それを見ていたグルーム・アグリカルチャーの職員は、あれが実行部隊の方たちかと目を皿のようにして見ていた。〝M〟と呼ばれた女はショートの黒髪に昔のワンピースタイプの紺のスクール水着に太ももの付け根近くまである黒のサイハイソックス。そして、黒いスニーカーらしき靴を履いている。顔は暗視用なのかゴーグルを着け、マスクも着けているので判別出来ないが、その体つきから若い女であるのは想像できた。

「社の方ですね。それ以上近づかないようにお願いしますね。何があるか分かりませんので」

いきなり耳元で声をかけられ職員は声を上げそうになったが、相手の手が職員の口を押さえていたので悲鳴をあげずに済んでいた。そして、自分の口に指を当てシーッという動作をすると気配が消えていった。

★　★　★　★

「お前ら、押さえておけよ」

真由子は椅子から降ろされて床に大の字に押さえつけられていた。男は真由子のスカートを捲ると下着をナイフで切り裂いていく。そして、クロッチを確認し、こちらには画鋲が埋め込んでいない事に安堵していた。

「どうやら、こっちのメスは少しはまともらしいな。あそこまで頭がおかしくなくて助かるぜ。じゃあ、さっそく処女戴きますか」

男は自分のいきり立ったモノを真由子の膣口に当てる。真由子は首を激しく左右に振り、許しを乞うように声を上げるが口は塞がれており、真由子の必死の懇願も意味を成さなかった。

「さあ、いくぞっ」

ずりゅうぅぅぅっ

「ふごうぅぅぅっ！」

男はいきなり真由子の膣に根本まで突き挿れていた。こんな所で強制的に処女を奪われた真由子は、涙を流し塞がれた口で絶叫するが、男は構わず腰を激しく振りだす。そんな、男の様子を女二人は冷ややかな眼で見ていた。

「まったく処女なんて汚くて臭いのになんでオスは喜ぶのかな。理解できないわ」

「ホント、あんな汚い穴に突っ込むより綺麗に洗ってる穴に挿れる方が余程良いと思うけどね。まあ、勝手にやってればいいわ。それよりさ、煙草に針刺しといて、コイツの処女膜針で刺して焼いてやろうよ」

「へぇ、面白い事思いつくね」

二人の女は吸っていた煙草のフィルター側から火の方に縦に針を突き通す。煙草の火の先に鋭い針先が光っていた。

「さあて、それでは楽しみますか。いいか、メスブタ動くなよ。動いたら直腸ズタズタになって死ぬからね」

「ああ、ちょっと待った。せっかくブタなんだから、もっとブタらしくして動画も撮っておこうよ」

そう言った女は、ひまりの首に首輪を着け、鼻フックをかけると思い切り引き上げた。

「ふぐぐぅっ」

ひまりが悲鳴を上げるほど思い切り鼻の穴を引いたままフックを固定する。

「ほら、メスブタがもっとメスブタらしくなったよ」

女は無様に鼻の穴の中を晒すひまりの顔を見て笑っていた。その間

にもう一人の女はカメラをセットし撮影の準備を整えていた。

「じゃあ、始めるからね。死にたくなければ動くんじゃないよ」

「そうそう、破瓜なんて女なら誰でも経験するんだから何でもないよ。もっともその後マンコ壊して上げるけどね」

女二人は軽く言うがひまりにとって他人から調教されるなど初めての経験だった。しかも、それが性器調教となれば尚更だった。どうやら、この二人はひまりの性器のみに集中して責めを与えるつもりのようだった。ひまりは抑えようと思っても自然に体がガタガタ震えていた。

・・うぅっ、怖い、怖いよう。でも69番も怖がっていたよね。誰だって最初は怖いんだよ。ここで調教に慣れれば、きっと後で楽になるよ・・

ひまりは自分に言い聞かせるが、そんなものは何の力にも成らなかった。

プツッ

鋭い痛みを感じたと思ったら、次に耐えようもない痛みが襲ってくる。

ジューーッ

「ふごうううぅぅぅーーーっ!!」

処女膜に針を刺され、そのまま煙草の火を押し付けられひまりは絶

叫していた。だが一本で終わる筈がなかった。

プツッ

ジューーーーッ

それは二本、三本とひまりの処女膜に押し付けられる。

「ふごうううぅぅぅーーーっ！！！」

ブスゥゥゥッ

絶叫するひまりは、つい腰を落としてしまいナイフが肛門に突き刺さり肛門の括約筋が切断され血が流れ出してきた。

パァーン、パァーン！

「動くなと言ってんだろ、このメスブタ」

女がひまりの頬を思い切り叩くが、ひまりはもうパニックになってしまっていた。

「ちょっと、コイツ押さえてよ」

女が真由子を犯している男たちに声をかけるが、どうせ始末するんだから関係ないだろうと無視している。そうしている間にも、ひまりは処女膜を刺され焼かれる激痛と肛門がナイフで切り裂かれていくダブルの激痛で更に腰を落としてしまい、もうナイフの刃が半分も肛門に突き刺さっていた。

「ふごうううぅぅぅーーーっ！！」

泣き叫び暴れるひまりは、とうとう椅子に腰を降ろしてしまい自分で肛門にナイフを全て突き刺してしまった。そして、ひまりはまるで断末魔のように体を大きく痙攣させ意味不明の声を出していた。

「あーあ、馬鹿だねコイツ。動いたら死ぬよって忠告してるのに」

「いいじゃん、こんなの死んでも世の中困らないし」

女二人は、まだマンコ壊してないのにと残念そうにひまりを見つめていた。その時、何かが室内に投げ込まれていた。

コトンッ

床に落ちた物から激しく煙が噴き出す。室内にいた男女が逃げ出そうとするが、先頭にいた男の頭が砕けたスイカのように肉片となって吹き飛んでいた。

「こら、〝G〟。ダムダム弾なんか使うんじゃないよ」

女の声がしたと思ったら、次に続いていた男の両足が吹き飛んでいた。両足を失い床をのたうち回る男の頭も吹き飛んだ。

「あらあら、ホローポイント弾でも駄目だわ。こんなに簡単に死ぬなんて情けない。コイツら、もっと体を鍛えておきなさいよ。それにしても困りましたね、ナイフでいくしかありませんか」

「構わないさ、〝Y〟。こんなの死んでも世の中困らないからね。ただし、女二人と男一人は生かしたまま確保。百目鬼主事からの指

令だからね。贈り物に使うと云うから、あまり傷つけないように意識を刈ってくれる」

「了解しました、〝M〟」

腰が抜けて動けない女子二人はあっさりと確保され、残りの男は一人を残してダムダム弾とホローポイント弾で破壊されていた。

「さっ、後はこいつを確保して制圧終了だね」

〝G〟と呼ばれていた少女があっという間に男との間合いを詰めると、男の鳩尾に拳を叩き込んでいた。

ご、ぼうぅぅっ

男は口から吐瀉物を溢れさせ床に転がり動かなくなっていた。〝Y〟と呼ばれた少女はひまりと真理子の様子を確認し〝M〟に報告する。〝M〟はすぐに医療班の出動を要請し、ひまりの応急手当てを施す。その時、〝M〟は背筋が凍るほどの寒気を感じた。それは〝G〟も〝Y〟も同様で体が硬直したように動かなくなっていた。

・・あり得ない。私が恐怖で動けないなど考えられない・・

〝M〟や他の者も必死に体を動かそうとするが、筋肉が硬直したように痙攣し動く事が出来なかった。そして、その気配はどんどん近づいて来て、ついにドアを開けて入ってきた。その瞬間、室内の空気が凍りついた気がしていた。

・・くそッ、私たちはこのまま殺される・・

”M”も”G”も”Y”も覚悟を決めていた。

「百目鬼から贈り物があるというので直接受け取りに来たのですが、オスは1匹なので分かりますが、メスはどちらでしょう。セーラー服の2匹でしょうかね」

「ち、ち、違います。そ、そこに転がっている2匹です」

”M”はこの人物が百目鬼の知り合いらしいと気付き、ようやく僅かに体が動かせるようになったが、本能的にこの人物に逆らってはいけないと察していた。部屋に入ってきた人物は、肉片が飛び散っている室内の惨状にも顔色ひとつ変えず、配下と思われる男に命令している。

「近藤、岡田。早く運び出して積んでおきなさい」

命令された部下が男女を運び出して行った後も、その人物は床に倒れているセーラー服の水澤ひまりをじっと見つめていた。

★　★　★　★

渡邉は目を疑っていた。

・・なんだ、これは・・

背後から事務員を襲い、連れ込んだ部屋で下着を脱がせてみると、その事務員の性器には幾つもの南京錠が装着され、性器がロックされていた……。

１２５、推察

１２５、推察

渡邉は事務員の性器に装着された南京錠を見て狼狽えていた。

・・なんだこの中途半端な貞操帯らしきものは・・

はっきり言って、こんな南京錠貞操帯の機能はない。小陰唇に取り付けられているが、小陰唇を切ってしまえばそれで済む。だが自分で小陰唇を切るメスはいないだろうから、これはメスの自慰を制御する為の南京錠と思われた。

・・他のメスにもこんな物が装着されてるのか。普通の人間の考える事ではない、狂人の考える事だ・・

そう思ったとき渡邉の頭に葉月の顔が浮かんだ。

・・これは不味い予感がする。手を出さない方が良いだろう。せっかく今上手くいっているんだ。気をつけるにこした事はない・・

渡邉は事務員を置いて逃げるように駆け出していた。渡邉のこの判断は正しかったといえる。渡邉は、すんでのところで危機から逃れられたのだ。どうしようもないクズな男であるが、自分を守る嗅覚だけは優れているといえた。

★
★
★
★

「天界兄様、トーナメントを開催している今こそが豪徳寺を倒すチャンスだと思います。普段の豪徳寺邸に忍び込むのは容易ではありませんが、今なら観客に紛れて潜入出来ます。私に潜入許可を与えて下さい、天界兄様。天道兄様が動けない今、天界兄様が弥勒院家のトップです」

天美は天界の瞳を見て訴えていた。

「でも天道兄貴が怪我を負う程の相手だぞ。何か策があるのか。無策であれば、とても許可する訳にはいかない」

「策はありますよ。天界兄様は御存知ですか。とある漫画で格上の敵の王を相手に戦った協会トップのハンターが最後に使った手段ですよ。私はそれで豪徳寺を倒します」

「馬鹿な……。天美、お前それでいいのか」

「私は天子姉様の仇を必ず討ちます」

天美は、覚悟を決めた残酷な笑顔で笑っていた。天界は、その天美の笑顔にゾッとしていた。

・・コイツもまるで狂人だ。天子を殺されて心の箍(たが)が外れてしまったようだ。だが狂人に対抗するには狂人だ。今の天美なら豪徳寺を仕留める事が出来るのではないか・・

天界は、天美の命と葉月の命を天秤にかけて考える。

・・確かに今が豪徳寺を倒すチャンスであるのは間違いない。ここを逃せば機会は遠のくだろう。これは最大のチャンスかもしれない・・

天界は妹の肩をがっしりと抱くと、その眼を見つめて笑みを浮かべた。

「分かった、天美。やってみろ。必ず豪徳寺を倒せ」

「はい、天界兄様」

二人は互いに笑みを浮かべ、しばらく見つめあった後別れていった。

★　★　★　★

「ほう、葉月が目に止めていたメスがいたのですか？」

「はい、昨夜救出したセーラー服を着たメスです。主事、昨日の方が豪徳寺葉月様なのですか？」

「そうですが、どうかしましたか？まさか、お怒りを買うような事はしていませんよね」

「も、もちろんです。動く事も出来ませんでした。恐ろしいお方ですね」

「怒らなければ普通の女性ですよ。私の古くからの友人であり、うちにとっては最上級の顧客の一人です。くれぐれも失礼のないようにお願いしますよ。それと、葉月が目を止めたというメスが気になりますね」

百目鬼は、職員に昨日の入場者リストを持ってきて下さいと告げていた。そして、受け取ったリストを〝M〟に渡し、どのメスか教えて下さいと言う。

「ああ、このメスですね。間違いありません」

〝M〟はリストの中から水澤ひまりを指差していた。その備考欄には、画鋲付き下着購入後着用して帰ると記載されていた。

・・ふうん、なるほど。葉月は一目でこのメスの資質を見抜いたのですね。ふふっ、それではこちらでもマークしておきますか・・

百目鬼は、上手く使えばこのメスで利益を上げられるだろうと考え、〝M〟にしばらくこのメスに張り付いてくれと命令していた。

★　★　★　★

「今日は琴音ちゃんの初陣だね。相手のメス奴隷アオイさんって強いの？」

「一回戦を勝ち抜いてきたのだから実力はもちろんあると思うよ。でも、私は負けない。しずくちゃんが勝ったのに私が負ける訳にはいかないよ。それに私の調教師は義母（おかあ）さんだよ。正直、相手のメス

奴隷が可哀想だよ」

「あはっ、それもそうか。じゃあ琴音ちゃんも私と同じで次が問題だね」

「うん、たぶんメス奴隷ハルカが勝ち上がってくると思うからね。調教師のルイさんは義母さんのお友達だし、ハルカってメス奴隷も強そうな感じがする」

「ハルカちゃんは強いよ。私、葉月さんを倒すところ見たから」

「義母さんから聞いた。私もまだまだですね、なんて言ってたけど義母さんを倒すなんて信じられないよ。そんな人がなんでメス奴隷なのか分からないけど、間違いなく強敵だよ。でも私は負けないよ。決勝でしずくちゃんと戦うんだから」

「うん、私も決勝で待ってるよ」

二人はお互いに見つめあい、琴音は気合いを入れた顔で出ていった。

★　★　★　★

「近藤さん、もう俺たちメス奴隷を犯す事も出来ないんですね」

「当たり前だろう、あんな失態を演じたんだ。しかも葉月様に助けられているんだぞ。これだけで済んだのは葉月様の恩情だよ」

「でも、チンポを処刑されてすぐに仕事にも駆り出されて、とても

恩情とは思えないですよ。俺はともかく近藤さんは今までどれだけ貢献してきたのか。それを考えると悲しくなってきます」

「おい、岡田。今回の俺たちの失態で何人の部下が死んだと思っているんだ。普通なら、その場で処刑だ。そんな大罪を犯した俺たちを軽い刑罰で済ます訳にはいかないだろう。それに、すぐに仕事に連れ出したのも周りから俺たちが変な目で見られない為だ。任務を失敗してチンポ切り取られても、すぐに仕事をこなしてる。失敗した馬鹿者というより、同情的な目の方が多いだろう。葉月様はそこまで考えているのさ」

「俺たちの事まで考えて……。近藤さん、さすがです。俺はそこまで分かりませんでした」

「当たり前だ。俺が何年、葉月様に仕えていると思っているんだ。俺は葉月様の為なら命も惜しくない」

きっぱりと言い切る近藤に、岡田は今まで以上に尊敬の念を抱いていた。

★　★　★　★

天美は豪徳寺邸にトーナメントの観客として入場していた。セキュリティの為、全裸になる必要があるが、それは事前に分かっていたので何も問題はない。

・・まず、屋敷や庭園、トーナメント会場を把握しよう。そして、どこで豪徳寺を殺るのが一番いいか検討するんだ。まだトーナメン

トの日程は長い。焦らずに慎重に動いていく。ふふっ、豪徳寺、お前の命運ももうすぐ尽きる・・

天美は観客に紛れ堂々と歩いていた。天道や天界と違い、ほとんど表には顔を出さない天美は顔も、もしかしたら、その存在も知られていないかも知れない。こうして、屋敷に入ってさえしまえば自由に動き回れる。天美は何食わぬ顔で葉月の屋敷を観察していた。だが、天美は一つ見逃していた事がある。

・・あれはよもや、本家の天美様。トーナメントを観に来たとは考えられない。間違いなく私のご主人葉月様を害する為にやって来たのでしょう。でも、そう思い通りにはいきませんよ・・

天美は迂闊にも自分の後ろ姿を見つめている瞳には気が付かなかった。

１２６、暗躍　琴音ＶＳアオイ（前書き）

しばらく登場していなかったので改めて補足しておきます。今回登場しているミアンちゃんとアサヒ君は天月ゐる先生の作品に登場する主人公であります。剣と魔法の世界のお話なので当然魔法を使えますが、こちらの世界では魔法はＮＧです。トーナメントの勝敗にあまり影響ない所で使ってしまう時もありますが大目にみて下さい。ちなみにミアンちゃん、私の作品内ではメス奴隷ですが、本来は幻術科の先生であります。お目付け役の方も存在し無茶苦茶にならないように気を付けていますのでよろしくお願い致します。

１２６、暗躍　琴音ＶＳアオイ

１２６、暗躍

いよいよトーナメント４日目、Ｂブロック二回戦が開始される。この二回戦で今まで登場していなかった残りのＡシード２匹も含めて全てのメス奴隷が登場する事になる。観客席でも大いに盛り上がっていた。

「順当に考えれば、やはりＡシードのメス奴隷は強いだろうな。琴音とミアンか。コイツらがどんな声で鳴くのか楽しみだな」

「でもＡシードのメス奴隷が負けて処刑される姿も観たいわね。強そうにみえるメス奴隷が無様に泣きながら処刑される姿を想像するとゾクゾクするわ」

「私は処刑さえ見れればいいわ。メス奴隷がマンコ壊されて処刑される姿は、何度観ても興奮するわ。今日もメス奴隷の処刑が観られると思うとワクワクする。このトーナメントが終わってしまったら私どうしようかしら」

観客たちが待ちわびる中、本日も進行を務める沙也加が姿を現した。

「皆様、お待たせしました。メス奴隷処刑トーナメントＢブロック二回戦を開始します。それでは、本日の１戦目、メス奴隷琴音対アオイ、入場です」

沙也加のアナウンスでメス奴隷たちが入場してくる。颯爽と登場してくる葉月と、その葉月に鎖を握られ両腕を縛られて後に続く琴音の姿に観客席はヒートアップする。

「葉月様ぁ、頑張って下さいぃぃっ」

「最短記録更新、期待していますぅ」

ほとんどが葉月に対する声援で、後に続いて登場したアオイと調教師はすでにこの時点で会場の雰囲気に呑まれていた。しかし、調教師もメス奴隷も会場の雰囲気に呑まれていただけではない。一回戦を勝ち上がった調教師とメス奴隷である。葉月と琴音組に一泡吹かせてやると意気込んでいたのだが、実際に葉月と琴音を間近に見るとすっかり萎縮してしまっていた。

・・こんな所であの葉月様と当たってしまうなんて俺はくじ運がなかったな・・

・・私が葉月様の責めに耐えられるわけがない。もう私の命も尽きる・・

調教師、メス奴隷とも心身共に戦う前から打ちのめされていた。その時、二人の頭の中に不思議な声が聞こえる。

・・何を恐れていりゅのです♡こんな相手と戦えりゅにゃんて光栄ではにゃいですか♡私なら嬉しくてたまりゃにゃいですよ♡・・

調教師とアオイは、はっと辺りを見回すが誰もいない。しかし、はっきりと声が聞こえた。

・・そうだ、こんなチャンスはない。あの葉月様と競えるのだ。俺がどこまで出来るか精一杯やってみよう・・

・・そうよね、こんな大観衆の前で葉月様たちと競えるなんて身に余る光栄。少しでも長くそれを噛み締めないと、勿体ないわ・・

二人の顔つきも変わっていた。葉月たちと同じ様に颯爽と歩いていく。もう何も考えない。自分たちのベストを尽くす。調教師とアオイは清々しい顔つきで堂々と歩いていた。

★
★
★
★

「ちょっと、先生。伝心の魔法なんか使って誰かにばれたらどうするんですか」

「ふふん、この世界で魔法に気付く人なんていにゃいよ♡」

控え室の隅でこそこそ話している二人がいた。調教師アサヒとメス奴隷ミアンである。

「今日は私の出番がやっとくるから楽しい1日なのに、あんな辛気臭い顔してちゃダメでしょう♡だから、先生として指導してあげたのりゃ♡うんうん、明るい顔になったりょ♡せっかく、マンコ壊されるのに楽しまなきゃ損でしょ♡また、心が折れそうになったらまた励ましてやりゅのら♡」

しかし、ミアンが魔法を発動したのに気づいている人物がいた。朝

から食堂でエールを飲んでいたルイは異世界の力の発動を感じていた。

・・ミアンですね。あの馬鹿狐、この世界で魔法は禁止ですよ。しかも、真剣勝負のトーナメントに干渉するなど言語道断です。これはお仕置きが必要ですかね・・

ルイが腰を上げようとした時、同じ席でラガーとレモンサワーを飲んでいたクラヤミと花梨が同時に声を上げる。

「「あっ、ブス帰って来た」」

食堂の入り口にブスが入ってきていた。そして、クラヤミたちの姿を見つけるとアナルプラグに付けられた尻尾を嬉しそうに振りながら駆け寄ってくる。クラヤミと花梨も嬉しそうにブスにつまみをあげていた。ブスはつまみを食べながら何か言いたそうな顔でクラヤミと花梨を見ている。

「ルイさん、豪徳寺の友人の君なら、このブスの首輪外せないかな」

クラヤミに言われてルイは戸惑っていた。

「何故、首輪を外したいのですか?」

「ブスが何か言いたいようだけど、首輪で声帯を制御されてるから分からないんだよね。何か緊急のような気がするんだけど」

「なるほど。でも私でも無理ですね。これは葉月の生体認証が必要です。葉月が戻ってくるまで待つしかないでしょう」

「仕方ないか、無理に外そうとすると爆発するし……。ブス、いい子だから少し待っているんだよ」

クラヤミと花梨はブスの体を撫でて可愛がっていた。その頃、控え室でミアンは青ざめていた。いつの間にかアオイたちの周囲に結界が張られ、ミアンが魔法で干渉出来ないようにされていた。

・・不味いりょ♡ルイ様の事忘れていたりょ♡ひぃぃっ、どうすりゅ、どうすりゅ♡・・

ミアンはガタガタ震えながら、チョロチョロと尿を漏らしてしまっていた。

★　★　★　★

天美は豪徳寺邸の庭園外れの焼却場の付近に来ていた。さすがに何もないこの辺りでは人の姿もほとんど見えない。天美は考えていた。

・・人混みの中では豪徳寺に近付くのは容易だろう。でも、邪魔される可能性も大きいよね。ここなら誰にも邪魔されないだろうが近付くのが大変だよ・・

天美は豪徳寺の性格も考えていく。

・・近付くのが大変なら、奴の方から来させればいい。豪徳寺が私に興味を持つように仕向け、奴が近付いて来たら始末する。奴が興味を持つ事といえば……。メス奴隷の処刑だね。私が奴の目に止まるようなメス奴隷になれば、自然に奴の方から近付いて来る筈だよ。

その為には豪徳寺の好みのメス奴隷を探る必要があるね・・

天美は、そう考えると屋敷の方に引き返していた。

・・豪徳寺の部屋に忍び込んで、探っていこう。奴の好みが分かれば、それでけりがつく。天子姉様、待っていて下さい。私が必ず敵を討ちます・・

天美は素人ではない。以前、葉月に恨みを持つメス３人組の一人が葉月の部屋に侵入しようとして失敗していたが、天美はあっさりと部屋の中にいた。そして、ガラスケースの中に保管されている渡邉ゆかりの剥製と対面する。

・・これだ。これが豪徳寺の好みのメス奴隷で間違いないよ。豪徳寺は今、対戦中。しばらくは戻って来ない。このメス奴隷に関する資料を出来るだけ探していこう・・

天美は、ゆかりに関する資料を探し始めていた。

★　★　★　★

グループ・アグリカルチャーの一室で〝シム６９〟のプレオープンの報告がされていた。

「アンケートによると概ね好評であり、早く次のステージに進みたいという声が多く上がっております。ステージ１勉強部屋では自虐が中心でありますが、ステージ２教室では他の者からの調教が中心になりメス奴隷に堕とされていく訳ですが、それを待ち望んでいる

メスが多数いるようです。ですので百目鬼主事、顧客を逃がさない為にも早急なオープンが必要かと進言します」

「そうですね、急がせましょう。ただ設備の方は大丈夫ですが、ステージ2で69番を奴隷に堕とす生徒役の教育が遅れています。仕方ありませんね、少し値が張りますが教育が終わるまでプロの調教師に依頼してみますか。私に当てはあるので急いで手配します。それでも、しばらく時間がかかるのは事実です。プレオープンは1日だけの予定でしたが、それを延長して対処しましょう。それでは急いで明日の準備に取り掛かって下さい」

百目鬼の号令で一斉に皆が動き出す。百目鬼はスマートフォンで電話をかけていた。

・・葉月に依頼すれば簡単ですが、あそこは調教師も超一流の方ばかりですので値がはります。なので、今回はあの男にしましょう。少しランクは落ちますが、こちらの教育が済むまでの話です・・

百目鬼のスマートフォンに男の声が聞こえた。

「佐瀬だが……」

百目鬼は満面の笑みを浮かべながら、佐瀬に話しかけていた。

１２７、僥倖

１２７、僥倖

「それでは、Ｂブロック二回戦初戦の開始です。ルーレットを回します」

沙也加が緊張した面持ちでルーレットに玉を入れる。玉はカラカラと回り、ルーレットが止まるとストンとマスに落ちた。会場の全員が息を呑んでルーレットのマスに注目する。

「今回は〝任意〟のマスに玉は落ちました。〝任意〟とは調教師がこちらで用意した拷問具の中から自分の得意な、あるいは好きな物を１セット選んで頂けます。１セットとは例えば三角木馬の場合、木馬本体と足に吊るす錘は１セットという事です。では、メス奴隷琴音対アオイ、対戦開始っ」

沙也加の右手が高く上げられ、葉月と調教師は走り出す。それを目で追いながら観客は声援を送っていた。

「好きな拷問具とか、葉月様が有利なんじゃない」

「いや、同じ拷問具を使うのでは調教師側に勝ち目がないだろう。でも得意な拷問具を使えればワンチャン葉月様を出し抜けるかも知れない」

「そうか、それならここで先着出来れば得意な拷問具を確保出来て、葉月様より有利になれるのね。これは公平なシステムね」

走りながら調教師も思っていた。

・・ここでなにがなんでも先着して最強の拷問具を手に入れる。そうすれば、絶対的に俺が有利になる・・

調教師はチラッと後ろを見た。葉月はだいぶ遅れているようだった。

・・葉月様、舐めすぎですよ。走る事がわかっているのにローヒールのパンプスならともかくハイヒールで出場するなんて。おかげで俺が先に拷問具を選ばせて貰います・・

そして、先着した調教師は用意されている拷問具に素早く目を走らせた。そして、ある物に目が惹き付けられる。

・・これだっ・・

調教師は選んだ拷問具を持ち、ダッシュしてトーナメント会場に戻っていた。

・・くくく、これは拷問具というより処刑具に近い。これを使えばこの琴音というメス奴隷の意識も刈り取れるぞ。まさか、この俺が葉月様に勝てるんだ・・

調教師は琴音を、性器を責める為の定番開脚逆さ吊りに拘束していく。琴音は大きく足を開いて吊るされていた。

・・ふふ、これでマンコを壊してやる。マンコを壊されて失神しな

いメスはいない。あの６９番も無様に失神していた・・

調教師はチラッと葉月の様子を見た。葉月は、ようやく拷問具を手にしてこちらに走ってくる所だった。

・・よし、覚悟しろ。お前のマンコも今日で終わりだ・・

調教師は左手で琴音の割れ目をくぱぁと開く。琴音の桜色の膣前庭に尿道口と膣口が見えている。

・・まずは尿道だ。それっ・・

調教師は右手に持った物を琴音の尿道に突き刺した。

「いだぁぁぁーーーっ」

琴音が悲鳴を上げるが、調教師は構わず琴音の尿道にそれを押し込んでいく。

「あれはニードルだよね。もしかして、あの調教師、葉月様得意のあれをやるつもりなのかしら。なんか興奮しちゃうわね」

「おしっこの穴にニードル刺してるんだから間違いなくあれよ。私もあれ大好きだから嬉しいわね」

「これは、朝一から良いものが観れそうで嬉しいですな。あのメス奴隷は可哀想にいきなりマンコ処刑ですか。どんな声で泣いてくれるのかな、楽しみですよ」

琴音は自分の尿道に挿入された物で、自分が次に何をされるのか予

測出来ていた。

・・膀胱串刺し、それか、膀胱に塩酸や熱湯注入されて膀胱破壊かな。どちらにしても私の膀胱は壊される。嬉しいよ、お母さん。私もやっとお母さんと同じ舞台に立てた。これからマンコ壊されていくんだ。お母さんも天国から私がマンコ壊される姿見ていてね・・

琴音は実際に自分の膀胱が破壊されると思うと感無量だった。

・・しずくちゃんのお姉さんは、おしっこの穴を9本のニードルで串刺しにされていた。私もそれくらいやって欲しい。マンコを徹底的に壊されたいのは私も同じだから・・

調教師はニードルが琴音の膀胱の括約筋を突き抜けた感触で笑みを浮かべる。

「あうっ」

琴音は小さく声を上げていた。

・・さあ、いくぞメス奴隷。それっ・・

調教師は琴音の尿道にニードルを深く強く押し込んでいた。

プツッ

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！」

琴音は尻に頭が着きそうなほど反り返り絶叫する。その琴音の下腹部からは血塗れのニードルの先端が飛び出していた。

「あぶうぅぅーーっ！」

涙と鼻水を流し苦しげな声を上げる琴音の完全に串刺しにされた尿道に調教師は2本目のニードルを突き挿れようとしていた。そこへ葉月がようやく到着する。その葉月が持ってきた物は、縄と錘だった。

「やはり、ハイヒールでのランニングはするものではないですね。こたえますね、これは」

到着した葉月は息を切らしながら、あっという間にメス奴隷アオイを縛り上げていく。その早さに調教師も観客も思わず目を見開いて固まっていた。

★　★　★　★

天美は葉月の部屋で発見したゆかりの記録を読んでいた。

・・このメス奴隷は頭がおかしいのは間違いないね。自分のマンコを壊す事が夢だなんてあり得ないわ。でも、どうやら豪徳寺はそういう倒錯したメス奴隷が好みなのは間違いないよ。まさか、ただのメス奴隷ではなくて、こんなどうしようもない変態が好みとは・・

天美は途方に暮れていた。容姿は似せる事が出来る。メス奴隷にもなることが出来るだろう。だが、ゆかりのような変態にはどうすればなれるのか。天美は、何かヒントがないかと葉月の部屋の中を見回していた。そして、1枚のチラシが目に止まった。それは、グル

ーム・アグリカルチャーのチラシだった。

《好評につきプレオープン期間延長。これを機会に是非皆様も伝説のメス奴隷〝６９番〟の生涯を体験してみませんか。〝シム６９〟は皆様のご来場をお待ちしております。＊プレオープンではステージ１勉強部屋を体験出来ます＊》

ポップな文字がチラシの上で踊っている。しばらく、そのチラシを眺めていた天美だったが、ふとその重要な意味に気づいていた。

・・これだっ。確か６９番というのは渡邉ゆかりの事。その変態のゆかりを体験出来る。これは願ってもないチャンスだ。どうやら天は私に味方してくれているようだよ・・

天美はチラシに記載されていた、そのアトラクションまでの地図と住所を記憶する。

・・〝シム６９〟か。いいタイミングでオープンしてくれたものだね。もうこの屋敷には用はない。急いでこの〝シム６９〟に行って、体験してみよう。そして、豪徳寺が自分から寄ってくるようなメス奴隷になってみせる・・

天美は気付かれないように葉月の部屋を後にし、屋敷を出て観客に紛れると何食わぬ顔でトーナメント会場も後にしていた。

１２８、思惑

１２８、思惑

Ｚクラスの生徒は今日もトーナメントを見学に来ていた。つぐみは入院中で欠席であったが、栄子、桃子、詩織の三人は今日はＶＩＰルームではなく観客席でトーナメントを観戦していた。当初は１０人ほどいた生徒も、半数はメス奴隷として購入されていき、その中の１匹は早々に処刑されていた。そして、他にも生体家具にされた生徒もおり、人数は大幅に減っていて、その為に本日は観客席の最前列での観戦となったのである。ＶＩＰルームはトーナメント会場を見下ろすような位置にあり、肉眼で見る事も出来るが、大型モニターでの観戦がメインになる。モニターは複数用意されており、詳細にトーナメントを楽しむ事が出来るが、やはり迫力という点では会場で間近に見る観客席の方が勝っていた。今も目の前で繰り広げられるメス奴隷の対戦に生徒たちは息を呑んでいたのだった。

「全然迫力が違うね。メス奴隷の絶叫とか凄いよ」

「ふん、当然だよ。今、目の前で本当にマンコ壊されているんだから。これが本当のメス奴隷の処刑だよ」

「ど、どっちが勝つんだろう。出来れば私たちの先輩のお子さんの琴音の方に勝って貰いたいね」

Ｚクラスの生徒は、メス奴隷の処刑にも慣れてきたのか、目を背け

ずに苦痛に喘ぐメス奴隷を見ながら話していた。もう、琴音の尿道には2本のニードルが突き刺され、その血塗れの切っ先が下腹部から飛び出していた。琴音は号泣しているが、3本目のニードルが突き刺されようとしている。対するアオイは両手首足首をまとめて一つに縛られ吊り上げられていた。

・・これは一回戦と同じ〝駿河問い〟の拷問。でも違う、一回戦の時よりもはるかに苦しい。同じ拷問なのにどうして？・・

アオイは疑問に思ったようだが、それは単純に葉月の方が拷問に対する経験が豊富であるという点だ。同じ縛りでも葉月はメス奴隷を痛め付ける事を第一に考える。ただ拘束しているわけではない。その細かな違いがアオイに更なる苦痛を与えているのだ。元々〝駿河問い〟は背中側で手首足首だけをまとめて吊るされる。それだけでも相当な苦痛であるが、さらに腰に錘を下げられる。それはもう背骨が折れるほどの激痛であった。

「あなたは一回戦で〝駿河問い〟の拷問に耐えたようですけど、あんなものは〝駿河問い〟とは言えませんね。甘過ぎます。せっかくですから私が本当の〝駿河問い〟を体験させてあげますよ。さて、耐えられますかね」

苦痛に歪むアオイの耳に顔を近づけて葉月が囁いていた。そして、吊られて錘を付けられたアオイの体をグルグルと回していく。まだ回すのかと思えるほど葉月はアオイを体を回していき、アオイを吊っている縄はどんどん捩(よじ)れていった。そして、琴音をチラリと見る。琴音は執拗に膀胱を破壊され、もう5本のニードルが下腹部から突き出ていた。琴音は涙と鼻水で顔面を激しく汚し、大きく反り返ったまま絶叫している。

・・ふむ、琴音は楽しんでいるようですし、もう少し待ってあげますか・・

葉月は琴音の様子を見て、更に念入りにアオイを回転させ縄を捩っていく。これで葉月が手を放したらアオイはどれだけ高速で回転するのだろうと観客も息を呑んでいた。

「さあ、それではいきますよ。心配しないで下さい。あなたが勝てるチャンスもありますよ。それは死んでしまう事ですよ。ここまで回せば脳血管が破裂して死ぬ事もありますからね。さて、あなたは失神して処刑されるか、死んでしまって勝利するか、どちらになるでしょうね」

どちらも死の運命しか待っていない事を葉月は残酷に告げると琴音の様子を見ていた。琴音はいよいよ9本目のニードルを尿道に突き刺されようとしている。もう琴音の尿道は8本ものニードルで裂けてしまっているが、その隙間に9本目のニードルが突き刺された。

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！」

更に激しく絶叫する琴音の下腹部から9本目のニードルが飛び出していた。

・・69番と同じ数のニードルで膀胱を串刺しにされて満足しましたか琴音。もっとマンコ壊されたいでしょうが、それは後の楽しみに取っておきなさい・・

「さあ、メス奴隷、最後です。失神するにせよ、死ぬにせよ、もうあなたと会う事はありませんね。お別れです」

葉月はアオイの体を押さえていた手を放す。その途端アオイの体は超高速で独楽のように回転する。

「おぶうぅぅぅーーーーっ！！」

悲鳴を上げるアオイは、これが一回戦で受けた責めとはまるで違うものと感じていた。そして、あまりに高速で回転しているのでアオイの表情は観客にも分からないが、血流が遠心力で頭部に集中しアオイの顔面は赤く紅潮し毛細血管が破裂し始めていた。

ブシュッ

アオイの鼻から鼻血が噴き出し、耳からも血が流れ始めていた。そして、眼球の中、眼底の毛細血管も破裂していく。アオイの眼の硝子体の中に血液が流れだし、アオイは文字通り目の前が真っ暗になり何も見えなくなっていた。それでも、まだまだアオイの体は高速で回転したまま止まらない。アオイは次第に意識がはっきりしなくなり、そのまま闇の中に堕ちていった。

★　★　★　★

天美は〝シム６９〟の近くまで来ながら道に迷っていた。

・・おかしいですね、この辺りのはずなのに・・

その時、天美を後ろから歩いてきたセーラー服の少女が追い越していった。

・・中学生くらいの娘ですね。今日は学校があるはずですが、こんな時間に一人で歩いているのはおかしいですね・・

その少女の歩き方は一切の迷いがなく、目的地に向かって真っ直ぐに進んでいるような感じであった。天美は、もしやと思いセーラー服の少女の後をついていく。すると、大きな物流センターのような巨大な建物が見えてきた。少女はその門の中に平気で入っていく。

・・両親か兄弟がここで働いていて用事があって来たのでしょうか・・

一瞬、天美はそう考えたが、自分を追い越していった時の少女の顔が興奮したように紅潮していたのを思い出す。

・・いや、そんな筈はありませんね。あの顔つきは親兄弟に会いに行く顔ではありません。何か秘密の楽しみに興奮しているメスの顔です・・

天美は少女の後について建物の中に入っていく。すると、受け付けカウンターがあり、その上には〝シム６９〟と描かれていた。ここで始めて天美は合点がいった。

・・なるほど、このアトラクションの内容を考えると、あまり目立つようにすると入るのに恥ずかしくて引き返してしまうメスも多いでしょう。だから、目立たなくしているのですね・・

天美は少女に続いて受け付けを済ませ、ステージ１への通路に進んでいった。

★　★　★　★

ブスとクラヤミたちは豪徳寺邸に備え付けてある防犯カメラの映像を確認していた。もちろん、そんな映像を勝手に見る事は出来ないが、葉月の友人であるルイがいるので警備員も文句も言わず映像を見せてくれている。すると急にブスがフーッフーッと手を上げていた。

「止めて下さい」

クラヤミの言葉で警備員が映像を止めると、そこには一人の女が映っていた。

「この女か。でも何者なのかな。ブスは今喋れないから豪徳寺が戻ってくるまで分からないな」

画面には全裸の天美がはっきりと映っていた。

「へっ、なかなかいい体じゃないか。どんな奴だか知らんが俺が調教してやるよ」

佐瀬が偉そうに言うので花梨がムッとした顔で言い返していた。

「ちょっと、おっさん。何であんたがここにいるのよ。それに、この女の人が何者かも分からないのに。豪徳寺さんの知り合いだったらどうするの」

「はぁ？この顔見れば何か企んでるの分かるだろう。それに俺はおっさんじゃない、小娘のブスは黙ってろっ」

佐瀬は花梨を恫喝するが、ブスは自分が呼ばれたのかと勘違いし佐瀬の前に行き座り込むと、じぃーっと佐瀬の顔を見つめていた。

１２９、同調

１２９、同調

・・琴音ちゃん、勝った。でもマンコの穴は手付かずで可哀想。どうせならマンコの穴や子宮にもニードル刺して貰いたかったよね。あぁダメだ。私もマンコの穴責めて貰いたいよ。次の対戦まで我慢出来ない・・

しずくは医務室のベッドで悶々としていたが、ついに我慢できず枕元のナースコールのボタンを口で噛んで押していた。するとすぐに紺の看護衣を着た看護師が現れる。

「いかがなされました、６９番」

「あの……。あの、お姉ちゃんが処刑前にやられたアレをやって欲しいです。お願いします」

「えーと、６９番……。メス奴隷ゆかりがやられた事ですか。申し訳ありません。私はゆかりが何をやられたのか存じていないのです」

「それは……」

看護師はしずくの口許に耳を近づけると真剣に耳を傾けていた。

「なるほど、分かりました。それでは準備致しますので、しばらく

お待ち下さいね」

部屋を出ていく看護師を見送りながらしずくは興奮した顔で息を荒くしていた。

・・ごめんなさい、麗華さん。もう我慢出来ないの。ちょっとくらいマンコ壊しても良いよね・・

しずくはこれから自分の性器に行われる行為を想像し激しく濡らしてしまっていた。

★　★　★　★

トーナメント会場では尿道から膀胱をニードルで串刺しにされた琴音が懇願していた。

「マンコの穴も壊してくだちゃい。私のマンコ、徹底的に壊してっ……」

葉月はそんな琴音を呆れた眼で見ていた。

「まったく困った娘ですね。我慢というものが出来ないのですか。まあ、でも私もあのメス奴隷では少し欲求不満ですからね」

葉月はアオイを見て冷たく言い放つと琴音の尿道に突き刺さっているニードルの束を握る。そして、途中までニードルを引き抜く。葉月はそこでニヤリと笑うと再びニードルを琴音の膀胱に突き刺した。

プツゥゥッ！

「あびゃあぁぁぁぁーーーーーっ！！」

琴音の下腹部から9本のニードルが一斉に飛び出す。

「相変わらず良い声で泣きますね、琴音。私もゾクゾクしますね」

葉月は何度も何度も琴音の膀胱を串刺しにする。

「あびゃあぁぁぁぁーーーーーっ、あびゃびゃびゃびゃびゃあぁぁぁぁっ！！」

琴音の尿道と膀胱は何度も9本のニードルで串刺しにされ完全に破壊されていた。それでも葉月は止まらない。絶叫する琴音の体は細かい痙攣が始待っていた。

・・これは不味いですね。あの、しずくの四肢を切断した時と同じです・・

沙也加はスタッフを呼び指示を出していた。沙也加の命令を受けたスタッフは慌てて駆け出していく。観客たちは何が起こったのかと最初は戸惑っていたが、これもパフォーマンスの一つだろうと絶叫する琴音を楽しそうに見ていた。

★　★　★　★

天美はステージ1の勉強部屋に入っていた。

・・ここが、あの６９番と呼ばれたメス奴隷の部屋なのか。ここで、６９番と同じ自慰を８０％以上体験する事でステージクリアとなって次のステージに進めるわけか。これを体験する事で豪徳寺好みのメス奴隷になれる。ククク、待ってろ豪徳寺・・

天美は部屋の中を見回す。ここに来る前に当然６９番ゆかりの性癖は調べてきてある。天美はこんなアトラクションクリアするのは簡単だろうと考えていた。

・・まず何処かに画鋲を埋め込んだ下着があるはず……。下着のクロッチに画鋲を埋め込むなど常軌を逸している。この、ゆかりというメスは本物の狂人だよ。でも、その狂人の心理を理解しなければ・・

天美は、とにかく６９番の自慰を体験して自分もその境地に近付こうと考えていた。

・・深淵を覗き込む者は……か。ふん、私は深淵に取り込まれたりなどしない。とにかく、このステージをクリアする・・

天美は洋服箪笥の引き出しを開ける。そこには白い下着がびっしりと詰まっていた。

・・全部、白か。しかも綿の下着。これも６９番の趣味なのか・・

天美は下着を手にとってみた。目指す物はすぐに見つかった。引き出しにしまわれた下着には全て画鋲が埋め込まれていた。

・・本当にこんな下着を穿いていたの。信じられないよ、こんなの

穿いたらマンコに画鋲の針が刺さるのに。絶対にゆかりっていうメスはただの変態じゃなくて頭がおかしいよ・・

それでも天美は服を脱いで全裸になると、画鋲付きの下着を穿きだした。

・・でも、部屋が埋まっている状況から見て、このアトラクションは繁盛しているようだし、今の若い子には信じられないがこれが普通なのかな・・

天美は下着を腰まで引き上げて止めていた。あと僅か引き上げればぴったりと下着を着用する事が出来る。しかし、それは自分の性器に画鋲の針を突き刺す事を意味する。

・・怖い……。どうして、こんな下着が穿けるのか理解できないよ。今、さっきのセーラー服の少女の含めて他の部屋ではみんなこの下着を穿いているのかな。どれだけ頭のおかしいメスがいるの・・

天美は決心がつかずに下着の両端を持ったまま固まっていたが、無惨に殺された天子の姿を思い出す。

・・天子姉様の仇を討つ為には、これくらい耐えないといけないんだ。なにを躊躇しているんだ、私は・・

天美は歯を食いしばると両手で下着を引き上げた。そのとたん自分の性器に画鋲の針が突き刺さる。

「うびいぃぃぃぃーーーっ！」

悲鳴を上げた天美の割れ目に針が一列に突き刺さっていた。

・・私、自分のマンコに本当に針を刺しちゃった・・

天美は生まれて初めての経験に少なからずショックを受けていたが、気を取り直して次の道具を探し始める。そして、押し入れの中のケースでカテーテル付のアナルプラグを発見した。アナルプラグの先端には穴が空いている。

・・これは、子宮の中に自分の排泄物を注入する装置だよ。確かゆかりの記録という資料に記述があった・・

事前に調べておいたので天美は、すぐにそれの使い方を理解した。

・・アナルプラグから出ている細いカテーテルはおしっこの穴に挿れて、もう一つのチューブは子宮に挿れるんだよね。自分のおしっこで浣腸して、自分の排泄物を子宮に注入する頭の狂った道具だよ・・

そう思いながら天美は、マンコに針を刺すよりも、子宮に排泄物を注入する方がまともだと考えていた。

・・子宮の中にウンチ詰めると思うと、こっちの方が興奮するね・・

とはいえ、まだ尿意がないので部屋の冷蔵庫を開けてみた。そして、用意されていたスポーツ飲料のペットボトルを手にすると一気に飲み干す。その後しばらく部屋の探索を続けていると、ようやく尿意が襲ってきた。

・・今がこの装置を使用するチャンスだよ・・

天美は下着を脱いで床に座ると肛門にアナルプラグの先端を押し付けた。そして、そのまま肛門に押し込んでいく。

・・うぅ、い、痛いかも。こんなの本当に入るの・・

経験のない天美はアナルプラグにローションを塗布する事さえ知らず、ただプラグを肛門に挿入すれば良いとしか認識していなかった。他の部屋にいる中学生女子が聞いたら笑ってしまう事も天美は知らなかった。ごく普通の性行為しか経験のない天美には、通常の変態といわれるものより、さらにランクの高いあの渡邉ゆかりの体験をしてしまう事で、自分の性器のみならず精神まで破壊されてしまう危険が伴う事に気付いていなかった。

１３０、演技

１３０、演技

沙也加からの報告を受けて理津子と麗華、クラヤミや花梨たちも集まってきた。

「これは不味いですね。先日の場合と同じ様な状態ですね。とにかく麗華さん、いきますよ。豪徳寺を止めねば」

理津子と麗華が木刀と鞭を持ち葉月に向かって行った。

「いひひっ」

葉月は構わず琴音の尿道と膀胱にニードルを突き刺している。そこへ、理津子と麗華が襲いかかった。

「超振動ブレード」

全ての物を切り裂く理津子の必殺剣が葉月に打ち込まれるが、葉月はその剣をあっさりとかわす。しかし、理津子もすぐに剣を返し二撃目を繰り出す。だが、それも豪徳寺はかわしていた。

「ファイヤーウィップ」

その時、理津子の背後で準備していた麗華が見えない炎の鞭を体勢

の崩れた葉月に叩き込む。二人のコンビネーションプレイで葉月を抑える事が出来たと誰もが思ったが、葉月はその麗華の見えないほど高速の鞭を切断していた。

「いひっ」

そして、葉月はタングステン鋼のメスを両手に持ち麗華に襲いかかる。

「麗華さん、どいてっ」

麗華がメスで切開される寸前、理津子が割って入り葉月のメスを木刀で受けていた。

「くっ、超振動ブレードで破壊出来ない。このメスは原子結合が私の木刀を上回っているのか……。ルイさん、先日のメス奴隷ハルカでなければ無理です。呼んできて貰えますか」

理津子がルイに向かって叫ぶが、ルイは難色を示していた。

「それは無理ですね。ここでは大勢の観客の目があります。ハルカが未来の人間だとばれては大変な事になりますよ。ここはクラヤミさんに任せましょう」

「えっ、俺……。一人でこうなった豪徳寺を止めるのは無理ですよ。でも、仕方ないなぁ。神無月さん、ブス、力を貸して下さいね」

「む、無理、無理、無理、無理ぃぃぃっ。私なんか瞬殺されますよ」

「大丈夫、作戦があります」

クラヤミは花梨とブスに耳打ちしていた。花梨は不安そうに頷いていたが、ブスは嬉しそうにアナルプラグに付けられた尻尾を振っていた。

「それでは、行くよ」

クラヤミと花梨が飛び出しブスがそれに続く。葉月は向かって来るクラヤミに狙いを定め飛びかかる。

「大風呂敷作戦、開始だっ」

クラヤミは葉月の前に風呂敷をパッと広げる。一瞬視界を遮られた葉月であったが、風呂敷など瞬時にメスで切り裂き、クラヤミに迫ろうとするが今度は花梨が葉月の前に風呂敷を広げていた。葉月は、その風呂敷も難なく切り裂くが、その時葉月の視線は前方に集中していた。その瞬間をブスの眼は見逃さない、葉月の死角下方からブスの超高速の掌底が葉月の顎をかち上げていた。葉月は予想外の攻撃を無防備に受け、がっくりと地面に倒れていく。

「ふぅ、よくやったブス。それに神無月さんもありがとう。いくら豪徳寺でも意識外の攻撃を受け、脳を揺らされては成す術もないだろう。ブス、おいで後で御褒美あげるからな」

ブスは、もうすっかりクラヤミに懐いたように脚にすりすりしていた。クラヤミもブスの頭を撫でている。そして、葉月をストレッチャーの載せると全員が横に並んでカーテンコールのレヴェランスのように頭を下げ退場して行った。

「はい、皆様お楽しみ頂けたでしょうか。それではメス奴隷アオイ

の処刑に移らせて頂きます」

何事もなかったかの様に進行する沙也加の言葉で、観客たちは今の一幕が自分達を楽しませる為の演技だと思い込んでいた。

「いやぁ、もの凄い緊張感だったな。俺はてっきり葉月様、ご乱心かと思ったよ」

「そんな事あるわけないでしょ。あの葉月様なんだから。でも確かに凄い演技だったわね。あの人たち役者としても、やってけるんじゃないの」

「こんな芝居も挟んでくれるなんて運営側も飽きさせないように考えてくれているんだな。さすがだよ」

観客席は楽しい見せ物だったと好意的な意見が溢れていたが、天美にとってはこの一連の出来事を見逃した事は致命的と言って良かった。もし、トーナメント会場を去らずに、葉月が倒されたこの場面を見ていたなら……。おそらく、天美の運命も変わっていただろうと思われた。

★　★　★　★

その、天美は〝シム６９〟のステージ１勉強部屋でようやく肛門にプラグを押し込むのに成功していた。肛門が裂かれそうな激痛に耐えプラグの最大直径部分を越えると、ニュルリとプラグは肛門に吸い込まれていったのだ。

・・やっと入ったよ。お尻にプラグが入ってるって変な感じだけど、これが気持ちいいって感覚なのかな。なんか、マンコ熱くなってる感じがする・・

天美は熱くなって濡れている膣にアナルプラグから伸びているチューブを挿れ先端を子宮口に当てる。そして、力を込めて子宮内にチューブを押し込んだ。

ツプッ

「あうぅっ」

声を上げながら天美は自分の子宮内にチューブを押し込んでいく。

・・うぅ、こんな処にチューブなんて挿れて大丈夫なの・・

天美は不安になりながらも子宮の中にチューブを抜けないように長く押し込み。今度はプラグに付いているカテーテルを手に取った。

・・こっちをおしっこの穴に挿れるのよね。まったく、こんな事を考える〝ゆかり〟というメス奴隷は本当に狂人だわ・・

天美は、その狂人と同じ事をやろうとしている自分も頭がおかしいとは考えていなかった。そして、やはりカテーテルにローションもジェルも塗らずに尿道に挿れていく。

「あうっ、い、痛い……」

天美は涙を流しながら尿道にカテーテルを挿入していた。

★
★
★
★

「メス奴隷アオイの処刑は、葉月様から私に任されましたので、御了承お願いします」

沙也加の言葉に不満を言う観客はいなかった。観客はメス奴隷が処刑されれば良いのだ。それが観られれば文句を言う者はいなかった。

「葉月様は、あのメス奴隷に興味なかったのだろう。気に入ったメス奴隷のマンコは徹底的に破壊して処刑するけど、それ以外はどうでもいいんだろうね」

「その冷たい所が葉月様らしいわね」

観客たちがヒソヒソと話し合っているうちに沙也加は処刑の準備を整えマイクを握る。

「メス奴隷アオイの処刑を開始します。古代中国で行われていた〝牛裂き〟の刑で処刑します。〝牛裂き〟の刑は両足に縛り付けたロープに牛を繋ぎ、左右に曳いて股を裂くという処刑ですが、今回は牛の代わりに、ここにいるお客様にロープを曳いて貰います。メス奴隷を処刑する感覚を味わってみたいという方は、是非端末より入力お願いします。希望者が多い場合は抽選とさせて頂きます」

沙也加が言い終わると同時に希望者が殺到していた。両足をロープで縛られ開脚逆さ吊りにされているアオイは、その様子を見せられ号泣していた。

１３１、股裂

１３１、股裂

いよいよアオイの処刑が執行される。アオイの両足首に結ばれたロープは滑車に通され左右に延ばされている。そのロープを抽選で選ばれた観客がしっかりと握っていた。その数は左右に３０人ずつ、合計６０人の観客が選ばれていた。

「栄子ちゃんだけ抽選に外れちゃって残念だね」

「仕方ないよ。みんな参加したいんだから公平に抽選しないとね」

Ｚクラスの桃子と詩織は手の平を怪我しないように支給された肩まである黒いロンググローブを着用しロープを握っていた。そして、これから自分たちが処刑するメス奴隷アオイを見つめていた。アオイは逆さに吊られ狂ったように号泣している。

「この処刑前のメス奴隷の気持ちってどうなんだろうね？泣いてるけど、怖いのかな。それとも、本当は嬉しいのかな。詩織ちゃんはどっちだと思う？」

「えーっ、処刑方法によるんじゃない。私なら、押し潰されたり、蛇のやつは嫌だけど、これなら良いかな。だって、マンコの割れ目を本当に裂かれるなんて気持ちよさそうだよ。たぶんこのメス奴隷も心の中では期待していると思うよ」

「詩織ちゃんは、そうなのか。私は処刑は怖いなぁ。マンコ壊されるのは良いけど、処刑は怖いよ」

桃子と詩織はロープを握りながら開始の合図があるまで何気なくお喋りしていたが、その二人のお喋りを聞いていた者がいた。そして、沙也加が開始の合図を告げようとした時、スタッフが一人走ってきて沙也加に耳打ちしていた。沙也加は頷くと右手を上げる。

「お待たせしました。それではメス奴隷アオイの処刑を開始します。始めっ」

沙也加の合図で観客は左右のロープを一斉に曳き始める。

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！」

一気に両足が左右に一直線に伸びきりアオイは悲鳴を上げていた。その悲鳴を聞いてロープを曳いている観客は興奮しさらに力を入れてロープを曳いていく。

「あぶうぅぅぅぅーーーーっ！！」

アオイは尻に頭がつくほど反り返り絶叫し続けているが、その姿がさらに興奮を加速させていた。

プシャァァーーッ

絶叫しながらアオイは噴水のように小便を噴き出していたが、バキバキと骨の砕ける音と共に、ビリビリと肉の千切れる音も聞こえてくる。ロープを曳く観客たちの顔には一様に残虐な笑みが浮かんで

いた。そして、ついに……。

ぶちっ、ぶちっ、ぶちぃぃぃぃっ

筋肉の裂ける音が響きアオイの性器の割れ目から血が流れ出した。

「あぐぅぅぅぅーーーーっ！！」

一旦裂け始めてしまうとあとは早かった。あっという間にアオイの割れ目は本当に裂け、血が溢れだしてくる。

「あぶぅぅぅぅぅーーーーっ、ぶぶぶぶぶぅぅぅぅぅーーーーっ！！」

アオイの股間の割れ目がどんどん裂け、割れ目が広がっていく。その割れ目からは血や内蔵が零れ落ちていた。アオイはもう臍の下まで股から裂かれ、だらんと力なく吊られ、ピクピクと体を痙攣させていた。

★　★　★　★

しずくは別室で逆さ吊りにされていた。そして、しずく自身の要望で目隠しされ、口には布を詰められたうえボールギャグを装着され声も出せない様にされていた。さらに耳にも耳栓を入れられ聴覚も封じられる。視聴覚を奪われたしずくは、触覚が敏感になっていた。そのしずくの膣に膣鏡が挿入され限界まで開口される。

「ふうっ、ふうっ、ふうっ、ふうっ、ふうっ」

次に自分がされる事を分かっているしずくは興奮で鼻息が荒くなっていた。そして、しずくが期待している物が膣に挿れられる。

ザーッ

画鋲一箱全てがしずくの膣の中に空けられていた。そして、さらにもう一箱。続いてもう一箱。しずくの膣が画鋲で一杯になったのを確認し、膣鏡が抜かれる。そして、今度は直径3センチ程のすりこぎ棒が用意され、しずくの膣に挿れられようとしていた。

「ふっ、ふっ、ふっ、ふっ、ふっ、ふっ」

しずくは、次に自分を襲う激痛に耐えるよう息を整えようとしていたが、それはとても耐えられるものではなかった。すりこぎ棒でしずくの膣に入れられた画鋲が、押し込められグリグリと膣の中で捏ねられていく。

「ふごうぅぅぅぅーーーーっ!!」

画鋲の針がしずくの膣に子宮に突き刺さり抉っていく。そこへ、さらに一箱がザーッと追加された。

・・だじげでえぇぇーーっ、マンコ、ぢぬうぅぅぅーーーっ・・

しずくは心の中で絶叫していたが、当然この程度で終わりではない。グリグリとすりこぎ棒で画鋲が押し込められている膣に、今度は激辛香辛料の真っ赤な液体が1本全て注がれていた。

「ふごうぅぅぅぅーーーーっ、ふごうぅぅぅぅーーーーっ、

ふごうぅぅぅぅーーーーーっ！！！」

プッシャアァァーーーーッ

ぶり、ぶり、ぶりぃぃぃーーーっ

ただでさえ膣内にそんな物を注がれては、とんでもない激痛あるのに、画鋲で傷ついた膣に注がれては我慢できるものではない。しずくも大小便を漏らし塞がれた口で狂ったように絶叫していた。

★　★　★　★

栄子は一人残された観客席で、股を裂かれていくアオイを見て興奮していた。

・・シンプルな処刑だけど、マンコから二つに裂かれるって興奮するよ。あぁ、私もマンコ裂かれたい・・

栄子が辺りを見回すと残った観客は一様に自慰を始めていた。栄子も、もう我慢出来なくなっていた。急いでメイドから渡されたディルドゥをトートバックから取り出す。それを、すでにぬるぬるになっている膣に深く突き刺す。

・・いくよ、栄子・・

栄子はディルドゥの底面にあるボタンを押していた。

パシュッ

鋭い音が響きディルドゥから無数の針が飛び出す。

「あうぅぅぅーーーーっ！」

プシャァァーーッ

なんと、栄子は膣を針で突き刺され潮を吹いてイッってしまっていた。そして、そのまま呆けた顔で地面に座り込み、よだれを垂らしながら笑みを浮かべていた。

★
★
★
★

ひまりは我慢できずに学校を早退して〝シム６９〟に来ていた。

・・早く私も〝６９番〟のメス奴隷になる所まで体験したい・・

ひまりの目標は、当初の目標とは全然違う目標に入れ替わっていた。なぜなら、ひまりは先日襲われた時の刺激が忘れられないようになっていた。

・・女の子の大切な所に煙草の火を押し付けられる。何も抵抗できない自分が惨めで、泣いても許して貰えない。あの時の痛みを思い出すとゾクゾクする。これが、メス奴隷の快感なら私も早くメス奴隷になりたい・・

ひまりは門をくぐり〝シム６９〟の受け付けに向かって歩いていた。すると、その時スーツを着た男性が近寄ってきた。

「こんにちは。ここに来たお客さんでいいんだよね」

ひまりは、相手をじっと観察した。グレーのスーツにきちんとネクタイも締めている。ノータイの人が多いなか、きちんとした人物に見えた。足元を見ても高級な靴ではないが磨きこまれた綺麗な革靴を履いている。左手の腕時計も嫌みのないシンプルなものだった。ひまりは、男のその身だしなみから、先日自分を襲ってきた男のような下卑た感じは感じなかったので、はいと返事をしていた。

「その制服から君はまだ中学生くらいだよね。ここに来るくらいだから変態なのだろう。どうだい、ボディピアスに興味はないかい。僕はピアスショップを経営しているから、僕のお願いを聞いてくれたら特別に無料で施術してあげるよ」

男の言葉にひまりは心を動かされていた。ボディピアスには大いに興味がある。

・・あの69番も性器や胸にピアスを入れていたんだよね。私もマンコにピアス入れてみたい。無料でできるなら尚更・・

「あの、それでお願いって何ですか?」

ひまりは男に尋ねていたが、男は心の中ですでに手応えを感じていた。

・・こんな施設が出来て、もしかしたら、ここに来るのは〝ゆかり〟のような女の子かと張り込んでいたけど、僕の予想は当たったな。この女の子は僕の〝ゆかり〟に似ている。今度こそモノにしてやる。もう後悔はしない・・

斎藤は、ひまりに向かって口を開いた。

１３２、従順

１３２、従順

斎藤は、ひまりに向かって口を開いた。

「えーと、ここに来る子ならボディピアスに関心があると思っていたんだよ。君も興味があるようで嬉しいよ。それで、えーと……。ど、どこにピアス入れて貰いたいのかな」

「それは、マンコですよ。一番メス奴隷らしいじゃないですか。６９番もマンコにピアス入れてたので私も入れたいんです。ホントに無料で良いんですよね」

「うん、僕のお願いを聞いてくれたらね」

「それでお願いって何ですか？」

ひまりは大抵のお願いなら聞くつもりでいた。お小遣いの乏しい中学生のひまりにとって、ピアス本体や施術代など高額で払えない。それが無料になるのだ願ってもない事だった。

・・どうせ体が目当てなのは分かってる。いつか誰かに犯されるんだから、どうせなら自分にメリットがあった方が良いよね。マンコの穴を提供するだけでピアス装着して貰えるなら、喜んで差し出すよ。まあ、見た目も悪くないし、清潔そうだし問題ないよね・・

ひまりは斎藤を見つめながら答えを待っていた。しかし、斎藤はなかなか口を開かない。やっと、口を開いたと思ったら全然別の話をしていた。

「ここに来たって事は69番のファンなのかな。僕は69番と知り合いなんだ。そして、69番に止めをさしたのも僕なんだよ。君は雰囲気が69番に似ている。僕も普段はこうじゃないんだよ、でもどうやら君を気に入ってしまったようなんだ。だから、特別なんだからね。他の人には言わないでほしい」

「それがお願いですか？」

「あっ、いや。これもそうなんだけど本当のお願いは……。僕は前に失敗して後悔しているんだよ」

斎藤はなかなか口に出さなかったが、ひまりは辛抱強く待っていたが、だんだんと我慢出来なくなってきた。

「私に出来る事なら何でもしますから早く言って下さい。私、マンコにピアス入れて貰いたいんです」

「ああ、分かったよ。それじゃ、僕に君のマンコの穴を犯させて欲しい。もちろん嫌だったらいいよ。でも僕は調教師でもあるからね。ピアス入れる以外にも君が調教して貰いたい事があれば喜んで協力させてもらうよ。僕は君をたまらなく犯したいんだ。そして、君のマンコを僕のモノにしたい」

斎藤はひまりに断られるのではないかとビクビクしていたが、ひまりにしてみれば想定内の事であるし、斎藤が調教師でもあると知り

感激していた。

・・本物の調教師さんと知り合いになれる機会なんて滅多にないよ。このチャンスを逃す手はないよ・・

ひまりは内心の自分の喜びを隠すように斎藤に答えていた。

「分かりました、あなたのモノになればいいんですね。その代わり、約束通り無料でピアス入れて下さい。それとマンコの調教もお願いします」

ひまりは答えながら自分の下腹部が熱くなり、自分の下着が漏らしたように濡れてしまっているのを感じていた。

「ど、どうしますか。今ここで犯しますか、私は構いませんけど」

ひまりは自分で妄想して興奮し、もう性器がひくひく動き我慢出来なくなっていた。しかし、斎藤は冷静に周囲を見回し、移動しましょうと告げ、〝シム６９〟の門を出てすぐの森の中にひまりを連れ込んでいた。

「それでは、両手を上げて足を大きく開いて下さい」

斎藤の命令でひまりは言われた通りの姿勢をとる。斎藤はひまりのその姿を見ると嬉しそうに微笑んでいた。

「そのポーズはゆかりが好んだポーズなのですよ。ゆかりは自分では絶対服従の姿勢と言っていましたね」

斎藤は言いながらズボンのファスナーを降ろすと下着の脇からポロ

リと勃起した自分の性器を出していた。

「服、脱がないんですか」

ひまりの問いに斎藤は、僕は服を着たままやるのが趣味なんだと笑いながら答える。

「特に君みたいなセーラー服を着た女の子は着たままの方が絶対良いね。それでは、そのままの格好でおしっこをして貰えるかな。僕は女子のお漏らしが大好きなんだよ」

そう言いながら斎藤は左手でスマートフォンを構え撮影を始める。そして、右手は自分のモノを握りしごき始めた。

「さあ、早くおしっこをして下さい」

斎藤はひまりを急かすが、ひまりもお漏らしの経験はあるが異性が自慰をしながら見ている前でお漏らしをするのは初めての経験である。

・・男の人が見ている前でお漏らしするなんて初めて……。私のお漏らしする姿を期待してオナニーしてるんだ。なんだろう、おしっこ以外のものが溢れてくる。私もお漏らしする姿を見られると思うと興奮してるんだ。これがメス奴隷の気持ちなの・・

ひまりは顔を赤らめながら息んでいると、チョロチョロと尿が漏れ始めた。そして、一度漏れ始めてしまうと、あとは蛇口が緩んだように勢いよく尿が溢れ出した。

シャアァァーーーッ

ひまりの開いた足の中心に尿が溢れ落ち、太ももも濡らしていく。
斎藤はひまりの小便を漏らす姿を凝視し、右手の動きが速くなっていく。

「あっ」

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

斎藤が小さく声を上げた後、斎藤の性器から白い精液が放出されていた。

★
★
★
★

その頃、天美は〝シム６９〟の部屋の中で尿道にカテーテルを挿入していた。そして、自分の尿道の奥、膀胱の括約筋に先端が突き当たったのを感じ、あと一息だと安堵していた。

・・これで膀胱に突き挿れれば準備完了だよ。後はチューブに付いてるコックを開ければいい・・

天美はカテーテルを持つ手に力を入れる。

ツプッ

「あうっ」

小さく声を上げる天美は自分の膀胱内にカテーテルが入ったのを感

じた。天美は念を入れるようにカテーテルを押し込んでいく。すると、カテーテルの中を天美の尿がアナルプラグの方へ流れていくのが見えた。

・・これで、自分のおしっこで浣腸できる。それで便意を催したら排便用チューブのコックを開けばいい。そうすれば私の子宮の中にウンチが注入されるんだ・・

天美は、こんな頭のおかしい事をやっていながら興奮している自分に気付き体が震えていた。

・・まだ、間に合う。こんな事止めれば普通の生活に戻れる。でも、やってみたい。私の子宮の中にウンチ入れてみたい・・

自分の尿で浣腸した天美は、充分便意が高まってからチューブのコックを開けてしまった。すぐにチューブの中を排泄物が流れていく。そして……。

・・は、入ってくる。本当に私の子宮の中にウンチが入ってきた。うひっ、私もう普通じゃない。こんな事して大丈夫な訳ないけど、もっともっと子宮にウンチ詰めたい。頭のおかしい私の子宮はウンチ詰められるのが相応しいの・・

天美は、そのままクリトリスを擦り自慰を始めてしまった。この異常な行為に天美は、異常に興奮し、その頭は静かに狂い始めていったのは確かだった。

１３３、暗雲

１３３、暗雲

「イグッ、イグッ、イグウゥゥゥーーッ」

天美は絶叫するとビクンと体を震わせ、そのまま放心したように動かなくなっていた。しばらくして、ようやく動き出した天美はカテーテルとチューブを抜き、アナルプラグもズボッと抜く。そして、立ち上がると股を開いて下腹部に力を入れ息んでいた。

「うん、うん、うん、うん」

息む天美の膣から、むりむりと大便がひねり出されてきて、ぼとぼとと床に落ちていく。

・・あはっ、私マンコの穴からウンチしてる。こんなメスいる？こんな事してる私って変態なのかな・・

天美は自分が変態なのかと疑っているが、こんな行為をするのは既に変態の中でも〝ド〟がつくド変態である事には気がついていなかった。

★　★　★　★

「弥勒院本家の天美様に間違いありません」

一時的に声帯を制御している首輪を外して貰ったブスは防犯カメラの録画映像を見て、はっきりと答えていた。

「ふむ、でも今は姿が見えないようですが隠れているのですかね」

「いえ、天美様は自分の屋敷からほとんど外にでないので顔を知っているのは弥勒院家の者だけです。だから、隠れる必要はないと思いますので、もう立ち去った可能性が高いです」

「その引き籠りの女が何しに来たのでしょう」

「それは私と同じくご主人様を害する為に来たのだと思います。それが早々に立ち去ったのは、緊急の事態が起こったのか、何かいい方法を思い付いたのかもしれません」

「なるほどですね。その天美というのはあなたより強いのですか」

「いえ、本家の人たちは指示役ですので天道様を除いて殆ど動きません。その代わりに指示を実行するのが私たち分家の役割になります。ですから天美様もご主人様の足下にも及ばないでしょう。ですが、天美様は姉である天子様を深く尊敬していました。その天子様の仇を討つ為、相討ちを狙ってくる可能性もあります。お気をつけ下さい」

「ブス、お前は本当に頭もいいですね。そんな頭のいいお前が、戦いもせず私のペットになったのは何故ですか」

「それは一目見て私の敵う相手ではないと感じましたから、それに私が本当にお仕えすべきはこの方だと思いましたので」

「なるほど……。でもそれは見せかけで、私の懐に入り内部情報を探っているという可能性もありますね」

葉月は言葉を切り、冷たい瞳でブスをじっと見つめる。普通の人間であれば葉月のこの瞳で見つめられると恐怖で失神するほどであるが、ブスは葉月のこの視線も真っ直ぐ受け止め耐えていた。

・・改めて思いますが流石ですね。弥勒院の実行部隊が皆、ブスくらいの力があるとするなら侮れませんね・・

葉月は、ブスとの面談を終え、また首輪を装着するとブスを連れ食堂に戻っていった。

「おっ、良かった。ブス、無事に戻って来た」

「ブス、おいでっ。なでなでしてあげる」

クラヤミと花梨がブスに向かって嬉しそうに声をかけ、ブスも嬉しそうに尻尾を振って駆けていった。

「ずいぶん仲が良いようですね」

葉月がびっくりした顔で言うと、それに対してクラヤミが言った次の言葉で花梨は心臓が止まりそうになっていた。

「そりゃあ俺たちは豪徳寺葉月というラスボスを倒した英雄トリオだからね」

青ざめる花梨に比べてブスは実に誇らしげな顔をしてクラヤミに撫でられていた。

★　★　★　★

「それでは下着だけ脱いで貰おうか」

斎藤がひまりに命令する。ひまりは、いよいよきたかと心臓の鼓動が早くなってきていた。まだ経験のない処女であるひまりは、先日襲われた時真由子が犯され号泣しているのを見ている。あの涙は苦痛の涙なのか、それとも自分の意思と関係なく犯された事への涙なのか、それとも自分が大人になった事への嬉しさだったのか、ひまりには分からなかったが、ここで自分も経験出来る。ひまりはドキドキしながら下着を脱ぐと、その下着を渡すように斎藤が手を伸ばしてきた。ひまりが斎藤に下着を渡すと、斎藤は驚いた後に懐かしそうな顔をしていた。

「驚いたな、君もこれを穿いているんだ。これは、ゆかりが一番最初に作ったタイプだね。僕と出会った時のゆかりは、これを改良したタイプを穿いていたよ。その下着を穿いたゆかりの股間に僕がロープを食い込ませたら、ゆかりは失神しちゃってね。とても、可愛かったんだ」

斎藤は、嬉しそうに言いながらひまりの下着の匂いを嗅いでいた。ひまりは直接性器の匂いを嗅がれるより、下着の匂いを嗅がれる方が恥ずかしいのか顔を真っ赤に染めていた。それを見て斎藤の性器は再び硬く勃起していく。

「いい匂いだ。思った通り君のマンコの匂いは僕の好みの匂いだよ。鼻にツーンとくるおしっこの匂いも合わさってとても興奮するよ。じゃあ、いこうか。そのまま動かないで」

両手を上げて足を大きく開いているひまりの腰に両手を当てると斎藤は自分の亀頭をひまりの膣口に当てる。そして、しばらくひまりの割れ目に沿って亀頭を動かしていると、その割れ目が激しく濡れてきていた。

「あっ、あっ、あっ、あっ」

ひまりは小さく声も上げ始めている。ひまりの性器もぬるぬるになり準備万端のようであった。斎藤はひまりの腰を掴む手に力を入れる。そして、自分の腰を突き上げるように動かした。

ずりゅうううっ

「あっ、あぁぁぁーーっ」

ひまりが悲鳴を上げ腰を動かし逃げようとするが、斎藤はひまりの腰をがっしりと押さえたまま、陰茎を根本まで突き刺していた。

「い、痛い……」

ひまりは小さく呟くが斎藤は構わず腰を動かし始める。その激しい腰の動きに、ひまりは子宮まで突き上げられ、声を上げていた。

・・いい声を出すじゃないか。僕の思った通りこのメスはゆかりのようないいメス奴隷になるぞ・・

斎藤はひまりを調教する姿を想像し、ひまりの内に大量に射精していた。

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

ひまりも自分の内に放出された斎藤の熱い精液を感じて激しく興奮しイッてしまっていた。

★
★
★
★

アオイの処刑が終了し、抽選に当たり処刑を執行した観客たちがゾロゾロと席に戻り始めた時、詩織は沙也加に声をかけられていた。

「小日向詩織さんでよろしいですか。桜桃学園Zクラスの」

詩織がハイと頷くと沙也加は、こちらへと手を取ってきた。桃子が何だろうと心配そうな顔で見ているが沙也加は、あなたはお戻りになって結構ですと、詩織だけを引いて行ってしまった。そして、二人になると沙也加はいきなり詩織の両腕を後ろ手に拘束する。沙也加の顔も、それまでの穏やかな笑顔から、メス奴隷を処刑する時のような冷たい残酷な笑顔に豹変していた。

「小日向詩織さん、いいえ、もうメス奴隷シオリと言った方がいいかしら。先ほど連絡がありまして、ようやく商談がまとまったようです。それで先程の話が聞こえていましたが、股裂きが御希望のようですね。早速、これから処刑を執行してあげますよ。今度は人力ではなくモーターで引き裂いてあげますね」

「へっ……」

沙也加の言葉に詩織は卒倒しそうなほど震えていた。そんな事を突然言われても、すぐに受け入れられる筈がない。逃げようとしても無駄だった。詩織は４人の男性スタッフに押さえられ足首に厳重にロープが巻かれていく。そして、ブラーンと逆さに吊られていた。その詩織の涙で霞む目に最前列の席で驚いた表情をしている桃子と栄子が見えていた。

１３４、再演

逆さに吊られた詩織の耳にモーターの作動する音が聞こえる。

ウイィィーーーン

そして、詩織の足が左右に広げられていった。

「ひいぃぃぃーーーっ！」

詩織が悲鳴を上げ、詩織の股間が露に晒された所でモーターの回転は止まっていた。

「今ここにおられるお客様は運が良いですね。たった今、入荷したメス奴隷の処刑が楽しめます。正真正銘メス奴隷として無垢の状態です。このメス奴隷の股裂きを楽しんで頂きます」

沙也加のアナウンスで会場は大きく盛り上がっていた。

「これがあるから葉月様の企画したイベントは楽しみなんですよ。訪れたお客を楽しませようとする気遣いがありますからね」

「昨日か一昨日もそうだったけど、こういうサプライズがあって嬉しいわよね。あの時もユメとかいう元中学生のメス奴隷ではなかっ

たかしら」

「そうそう、あの潰されたメス奴隷よね。私、あの潰されたメス奴隷煎餅買ったわよ。ここに来るとどうしても散財してしまうけど、止められないのよねぇ」

大いに盛り上がっている観客席の中で、栄子と桃子だけは違う感想を持っていた。

・・なんで私じゃなくて小日向なんだよ。家の親に、もう充分な金額にばっている筈だから早く契約書にサインしてって言ったのに、まだしてないの。卒業すれば自分の意思でメス奴隷になれるけど、そうしたらあんたたちにはお金は入らないよ。今がチャンスでしょ。ホントに馬鹿なんだから・・

栄子は、開脚逆さ吊りにされている詩織を見て歯軋りしていたが、桃子は青ざめていた。

・・家の親は詩織ちゃんの親と仲が良い。詩織ちゃんの親がサインしちゃったなら、家の親も多分サインしちゃう。嫌だ、メス奴隷になるのは良いけど処刑されるのは嫌だよ。怖い……。今なら私はまだお客さんだ。逃げられる。今のうちに逃げて隠れちゃえば助かるかも……。でも、どこに行くの。私一人で行くとこないよ・・

桃子は最前列の席でガタガタ震えていた。しかし、それ以上に震えているのは詩織だった。左右からロープで引かれ吊るされている詩織は遠目で見ても分かるほど激しく震えていた。

「許して下さい。許して下さい。許して下さい」

詩織は呪文のように繰り返しているが、もちろん詩織が許される事などない。沙也加は、またモーターを少し動かして詩織の足をぎりぎりと引き、もう９０度以上詩織の足は開いていた。

「せっかくですので、皆様には少しマンコ調教を楽しんで貰います。このメス奴隷も調教の経験もなく股裂きされたら不満も残るでしょうから、一通りの調教で責めてから股を裂いて止めをさしたいと思います」

沙也加の言葉ですぐに鞭を持ったスタッフが現れ詩織の性器に鞭を叩き込む。

ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシィィッ

「ひぎいぃぃぃーーっ、いだいぃぃぃーーっ！」

大開脚された股間の中心、性器を鞭で打たれて詩織は泣き叫ぶが、鞭は休みなく詩織の性器に１０００発打ち込まれた。詩織の性器は真っ赤に腫れ上がっているが、今度はそこに高温の蝋燭が垂らされていく。しかも、詩織の割れ目をくぱぁと開かれ、敏感で柔らかい膣前庭に直接至近距離から蝋燭を垂らされていた。

「あぢゃあぁぁぁーーっ、だぢげでえぇぇぇーーっ、マンコやげるうぅぅーーっ」

しかし、続けて詩織の性器を焼いた蝋燭は詩織の膣の内にも垂らされる。

ポタ、ポタ、ポタ、ポタ、ポタ、ポタ、ポタ

詩織の膣内が蝋燭でどんどん埋め尽くされていった。そこで再びモーターが作動を開始した。

キュイーーーン

モーターの音が大きくなり詩織の足が左右に容赦なく引かれていく。詩織の足はもう１８０度開かれ左右に一直線になっていた。ここからが股裂きの真骨頂であり、詩織にとってはこれから股が裂けるまで地獄の苦痛に泣き叫ぶ事になる。

「あびゃあぁぁーーーっ、いだいぃぃぃーーっ！！」

詩織は絶叫し、アオイと同じ様に頭が尻につくほど反り返っていた。しかし、モーターはまるで無慈悲に詩織の足を引いていく。

プッシャアァァーーーッ

詩織は、またもアオイと同じ様に小便を噴水の様に噴き出していた。しかし、詩織はもう自分が尿を漏らしている事など気付いていなかった。自分の性器を襲う激痛に何も考えられなくなっていたのだ。反り返った詩織の顔は涙と鼻水とよだれで汚れ、性器を襲う激痛で醜く歪んでいた。

「あびゃあぁぁぁーーーーっ、ゆるぢでぐだぢゃいぃぃぃーーーっ！！」

・・くくく、喋れるって事はまだまだですね。マンコを裂かれる本当の苦痛をこれから味わう事になるわ。どんな顔して逝ってくれるかしら、楽しみですね・・

沙也加は苦しむ詩織の姿を見て興奮していたが、それは沙也加だけではなかった。会場中が股を裂かれていく詩織に注目し目が離せなくなっていた。その会場の様子を見た栄子は一人嫉妬に胸を焦がしていた。

・・なんで、あんな小日向なんかに注目するの。私の方がずっと良いよ。みんな私を見てよ・・

栄子は無意識に観客席からフラフラと詩織が股裂きされている会場の方に歩き出していた。それでも詩織に目が釘付けになっている観客もスタッフも誰も栄子に気がつかなかった。

★
★
★
★

天美は、膣から大便を溢しながら、しばらく呆けたように動かずにいたが、ようやく我に返ったようにキョロキョロと目を動かしていた。

・・私、こんな頭のおかしい事をして気持ちよくなっていた。ううん、違う。こんな施設が出来て、これだけ人が集まるって事は、これは普通の事なんだ。だから気にする事なくもっともっと69番の自慰を体験してみれば、もっと気持ちよくなれるんだよ。だからこれだけの女子が集まってくるんだよ・・

天美は自分の中で理論付けると、次の自慰の道具を探していた。そして、すぐに見つかった膣鏡と蝋燭で早速次の自慰を開始する。

・・確か69番が子宮火炙りと言っていた自慰だね。クスコで開い

たマンコの中に火の点いた蝋燭を入れて、子宮を火炙りにするんだ。想像するだけで興奮してくるよ・・

天美はすぐに自分の膣に膣鏡を挿入し最大まで開口する。そして、蝋燭を台の上に立てると高さを調整する。蝋燭の上に跨がって膝を曲げた時に、蝋燭が膣の中に入り、子宮につくくらいの高さがベストといえる。天美は蝋燭が溶けて短くなる事も考慮して高さを調整していった。そして、いよいよ蝋燭に火を点け、その上に跨がる。それだけも蝋燭の熱気で太ももや股間が熱く感じる。天美は両手を上げ足を開いたまま少しずつ腰を降ろしていった。股間に感じる熱気が熱くなるに比例して、天美の興奮も高くなっていった。

１３５、詩織

１３５、詩織

「あびゃあぁぁぁーーーーっ！」

詩織は自分の股間がぶちぶちと裂けていく感覚に恐怖し絶叫していた。見た目にはまだ普通の状態を保っているが、その内部では実際に裂け始めているのかも知れなかった。詩織の尿道から噴き出していた小便は勢いは弱くなったが、まだチョロチョロと噴出している。詩織はアオイと同じ様に大勢の観客に放尿姿を見られながら股を、性器を裂かれていく事になる。詩織の足を左右に引くモーターは少しずつ、だが確実に詩織の性器を裂いていく。

ぶちっ、ぶちっ、ぶちっ

詩織の性器の筋肉が裂ける音が大きくなってくる。

「はぶうぅぅぅーーーーっ！」

ぶり、ぶり、ぶり、ぶり、ぶりぃぃっ

詩織は大便まで漏らし始めていた。性器を裂かれる激痛に耐える為、下腹部に力を入れていた詩織は観客が注目する中、無様に大便まで漏らしていた。それは、詩織がそれだけの苦痛を与えられている証といえた。詩織は反り返ったまま、目は大きく見開かれ涙が滝のよ

うに溢れている。口は歯を食いしばり必死に耐えているようであったが、これは処刑である。そもそも耐えられる痛みではないのである。詩織の頭も、もう何も考えられなくなり本能的にただ絶叫しているに過ぎなかった。そして……。

ピリッ

ついに詩織の股間、会陰部の皮膚が小さく裂け血が滲む。観客たちは、いよいよその時が訪れるかと息を飲んで見つめていた。

「この瞬間がたまらないのよね。ここからは一瞬でも見逃せないわ」

「あのメス奴隷のマンコもうすぐ裂けるわね。おしっこやウンチ漏らしてマンコ裂かれるなんて無様でいいわね。やっぱりメス奴隷はマンコ壊されて処刑されるのが一番ね」

「あのメス奴隷、中学生という事だが最高だな。まだ若いメスがマンコから裂かれて死ぬなんて最高の見せ物だろう」

観客席が大いに盛り上がる中、もうすぐ最後を迎える詩織の前に、フラフラと歩く栄子の姿が重なっていた。

「なんだ、あれは。早く、退けっ。一番いいところが見えないぞっ」

「ふざけないで、何やっているのよ。見えないじゃないのっ」

観客席から怒声が浴びせられるが、栄子は動こうともせず、股を裂かれている詩織を見つめていた。スタッフが慌てて栄子を取り押さえようとするが遅かった。性器の一部が裂けた詩織は狂ったように絶叫していたが、その詩織の性器の裂け目が広がっていく。

ズバァァァッ

「あっ、びゃあぁぁぁぁーーーーっ！！」

ついに詩織の性器の割れ間が本当に裂けていく。詩織の割れ目から大量の血が噴き出し、前に立っている栄子にも降りかかっていた。それまで反り返っていた詩織は力が抜けたように、だらんとぶら下がり目は白目を剥き口からもだらしなくよだれが垂れていた。それでも機械的に詩織の足は左右に引かれ、裂け目はどんどん広がっていく。詩織の体はビクンビクンと痙攣し、もうすぐ最後の時を迎えようとしていた。視界を遮っていた栄子はスタッフに取り押さえられていたが、そのまま開脚逆さ吊りに拘束されていく。

「ふざけないで、何なのそのメス。一番いいところが見られなかったじゃない」

「もう、そのメスのマンコも壊して処刑して貰いたいわ」

「許せないわね、そのメス。メス奴隷が命をかけて私たちを楽しませようとしているのに、それを踏みにじったのよ」

最大の見せ場を見逃してしまった観客からは、栄子に対して激しいバッシングが浴びせられていた。しかし、栄子は悪びれた様子もなく観客の視線が自分に集まっている事に興奮していた。

・・ふふっ、ほらみなさい。みんな、小日向より私の方を観てる。私の方が上なのが証明された。ふん、私はあの６９番より上なんだ。今日、私は伝説になる。そして、吉川栄子の名前が永遠にみんなの記憶に残るんだよ。もう渡邉ゆかりなんて過去の名前となって消え

ていくんだ・・

栄子は開脚逆さ吊りにされながら、不適な笑みを浮かべていた。だが、その吉川栄子も本当の性器処刑の地獄の苦痛に耐えられる筈がなく、命乞いしながら無様に発狂し、そして、完全に絶命させられていく事になる。栄子がいい気持ちでいられるのは、残りわずかな時間だけだった。

★　★　★　★

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

ひまりは何度も何度も斎藤に犯され続けていた。斎藤も獣のようにひまりの性器を乱暴に凌辱し、ひまりの膣からは斎藤の精液がどぶどぶと溢れだしていた。

「はひゅーっ、はひゅーっ、はひゅーっ」

ひまりは全身汗まみれになり、もう立っているのもやっとの状態だったが、斎藤はひまりの腰を押さえつけ逃がさないようにしながら腰を振り続けている。そんな、ひまりと斎藤を木の陰から観察している者がいた。百目鬼から依頼されている〝M〟である。〝M〟は百目鬼にひまりの様子を報告していたが、ひまりが自主的に行動している場合は手を出さないよう指示されていた。しかし、これは観察している〝M〟にも辛いものがあった。〝M〟は長袖の黒いレオタードに太ももの付け根近くまである黒のサイハイソックスを穿いているが、その股間と太ももの内側がぐっしょりと濡れていた。正直、飛び出して行って、自分も斎藤に犯して貰いたいところである

が必死に耐えていたのである。〝M〟が悶々としているうちに、ようやくひまりの性器から自分の陰茎を抜いた斎藤は、ひまりを跪かせ口を開くよう命令していた。ひまりも従順に斎藤に言われるままの姿勢をとると、斎藤はひまりの口に狙いをつけ放尿していた。ひまりは自分の口中に斎藤の小便が注がれた時、一瞬ビクッと体を動かしたが、その後は動かずに口の中に斎藤の小便をごぼごぼと大人しく注がれていた。

「こぼさないように飲みなさい」

ひまりの口の中が小便で一杯になると斎藤が命令した。ひまりは、目を閉じて口も閉じるとごくりと喉を鳴らして斎藤の小便を飲み干していた。

「よし、また口を開くんだ」

斎藤はまた、ひまりの口に小便を注ぎ、それをひまりに飲ませていた。そして、何度かひまりに自分の小便を飲ませた後、今度はひまりの顔面に小便を浴びせた。ひまりは、ビックリして目を閉じたが斎藤はそれを許さず、目を開けていろと命令する。ひまりは健気にも斎藤の小便を浴びながら目を開いていた。

「どうだ、これが飲尿と浴尿だ。ほんの軽い調教だが感想を言って貰おうか」

「はい、私は男の人に調教して貰うのは初めてなので興奮しています。おしっこを飲んだりかけられたりするよ自分が本当のメス奴隷になったみたいで嬉しいです。もっともっと調教して下さい」

斎藤は内心歓喜に満ちた声を上げていた。

・・やはり、こいつはゆかりに似ている。今度こそ逃がさないぞ・・

斎藤は、小便を飲まされ頭からかけられながら恍惚の表情を浮かべているひまりを宝物でも見るような表情で見つめていた。

１３６、級友

１３６、級友

桃子はガタガタと震えていた。詩織は性器から裂かれ処刑されてしまった。そして、栄子も自ら処刑されるように会場に向かい拘束されてしまっている。前にトーナメントを妨害した観客が処刑されたように栄子も同じ運命を辿るのだろう。当初１０人いたクラスメイトが誰もいなくなり、桃子は不安と恐怖に囚われていた。

・・うぅっ、もう私しか残ってない。みんなメス奴隷になったり処刑されていなくなっちゃった。夢ちゃん、くるみちゃん、さっちゃん、詩織ちゃん・・

桃子は級友の顔を思い出して涙が流れていた。そして、今度は栄子が処刑されようとしている。そこで、桃子はもう一人級友がいた事を思い出し受け付けに駆け出していた。入場の際、持ち物は全て受け付けに預けてしまっている。桃子は受け付けでスマートフォンを受けとると電話をかけていた。

「もしもし、つぐみちゃん。私、怖い。もう私しか残っていないの。詩織ちゃんも処刑されちゃったし、栄子ちゃんも今から処刑されちゃう。私、まだ処刑されたくないよ。助けてっ、つぐみちゃん」

桃子は必死に入院しているつぐみに助けを求めたが、つぐみの返事は面白そうだから観にいくという素っ気ないものだった。一方的に

つぐみから電話を切られた桃子は、一人会場に戻る気にもなれず、スマートフォンを持ったまま受け付けに立ち尽くしていた。

★　★　★　★

しずくは、膣の中に大量の画鋲を押し込められた上、刺激物である真っ赤な激辛液体香辛料を注ぎ込まれ半狂乱になっていた。膣が内性器が火を噴いたように焼けている。

「ふごうぅぅぅーーーーっ！」

・・あぢゃあぁぁぁーーーっ、ゆるぢでえぇぇぇーーーっ！・・

口を塞がれているしずくは心の中で絶叫していた。そして、しずくは吊られたまま激しく暴れていたが、どぶどぶと膣内に液体の香辛料を流し込まれていく。

・・うびゃあぁぁぁーーーっ、ぢぬうぅぅーーーっ！・・

しずくは大きく反り返えり、目は飛び出すほど見開かれ涙は大量に溢れていた。看護師は面白そうにしずくの膣に真っ赤な液体を注いで苦しむしずくの姿を楽しんでいた。

・・葉月様や沙也加様が夢中になるのも分かるわ。メス奴隷を調教するのって楽しい。私も調教師になりたい・・

「小島さん、いますか？」

そこへ、一人の年配の女性が顔を出してきた。その女性は逆さに吊られて苦しんで暴れているしずくを見て目を丸くしていたが、それがしずくと気がつくと笑みを浮かべていた。入って来たのは本多夕子だった。

「本多さん、どうしました？」

「豪徳寺さんから、これを持っていくように頼まれまして」

夕子が看護師・小島沙織に渡したのは非吸収糸と針のセットだった。

「これで画鋲を詰めたまま縫合して下さいと言われてましたけど、これで伝わりました？」

夕子は意味が分からないようだが、沙織はすぐにピンときていた。

「ええ、もちろん分かりますよ。ありがとうございます、本多さん」

「それでは、私はこれで」

夕子は、しずくにチラッと顔を向けると部屋を出ていった。

・・あんなに苦しんで、しずくちゃんも頑張っているのね。茜もメス奴隷になっていれば同じ様に苦しみながら頑張っていたのでしょうね・・

夕子は処刑された自分の娘を、しずくの姿に重ねていた。沙織はすぐに、しずくの割れ目を縫い付ける準備を始めた時、自分の下着がビショビショに濡れているのを感じていた。

・・ああ、もう我慢出来ない。葉月様にお願いして今まで貯めたお金でメス奴隷１匹手に入れられないか相談してみよう。調教済みのメス奴隷でなくてもいいから安いメス奴隷売ってないか尋ねてみよう。葉月様なら存じているのは間違いないから・・

沙織はすっかりメス奴隷を調教する魅力に取り憑かれてしまっていた。

★　★　★　★

武田真由子は教室のドアを開けようとして手を止めた。

「あん、あん、あん、あん、あん」

教室の中から声が聞こえる。それは明らかに女子が一人で慰めている行為の声だった。真由子はドアの前で固まってしまった。今日からＺクラスに編入になったと伝えられた真由子は、教室の前でどうしたら良いのか思い悩んでいた。真由子は、〝シム６９〟に行っていた事が学校にバレ、その結果Ｚクラスに移動させられたのである。

・・どうしよう、これ絶対オナニーしてる声だよね。中に入りにくいんだけど・・

真由子は、帰ってしまおうかと考えたが、Ｚクラスというのは、そういうクラスだと知っている。校内の変態メス奴隷になる女子が集められるクラスだ。別に教室でオナニーしていても普通なのだろう。そう思うと真由子は、意を決して教室のドアを開けた。

「あん、あん、あん、あん」

教室の中には一人の女性がスカートを捲り上げて机の角に股間を押し付け、真由子の予想通り自慰をしていた。女性は真由子がドアを開け入って来た事にもまるで気付いていなかった。

「あのぅ、西園寺先生ですか？」

真由子は自慰している黒いスーツの女性に声をかけると、その女性はやっと気が付いたというように顔を上げ、笑顔を向けてきた。

「ああ、連絡は受けています。武田真由子さんね。私が担任の西園寺響子です。よろしくお願いしますね」

「あの、Ｚクラスというのは、まさか私一人なのですか？」

教室の中には響子の他には誰もいない。真由子は、このクラスなら同じ変態仲間がいると期待していたのだが、この教室の様子を見て肩を落としていた。

「すいませんね。うちのクラスの生徒は今日は朝から課外授業でトーナメントの見学に行っているんですよ。と言っても1人は入院で、残り3人ですけどね。どうします、あなたも行ってみますか。まだ充分に間に合う時間ですので」

「そうなんですか、トーナメントって何の試合なのですか。私、あまり運動は得意ではないので強制でなければ遠慮したいのですが」

「あなたは今日からＺクラスなので、強制ではないですが明日からは授業の一環なので見学に行って貰いますよ。それにスポーツのト

ーナメントではなく、メス奴隷処刑トーナメントというイベントですので、あなたも興味あると思いますが」

「メス奴隷処刑トーナメント？」

「ええ、なかなか楽しそうなイベントじゃない。メス奴隷を調教し合って負けた方が本当に処刑されるらしいわよ」

響子の言葉に真由子は心臓の鼓動が早くなっていた。

・・メス奴隷……。あの６９番のようなメス奴隷が処刑されるところを観られるの・・

真由子は、響子に開催場所を訊き教室を飛び出していた。

１３７、会話　ハルカＶＳイチゴ

１３７、会話

桃子は一人で会場内に戻る事が怖くて出来ず、つぐみの来るのを受け付けで待っていた。

「あれっ、大瀧。ここにいないで観てれば良かったのに」

つぐみは急いで服を脱ぎ、学校から渡されている入場整理券を受け付けに見せ門を入ってくる。

「う、うん。つぐみちゃん、まだ治ってないでしょう。倒れたら大変と思って」

桃子は、つぐみが来た事で多少気持ちに余裕が出てきていた。じゃあ行こうかとつぐみが歩きだそうとした時、つぐみと桃子の目に駆けてくるセーラー服姿の少女の人影が映っていた。

「あれっ、うちの制服じゃないの」

「ホントだ、誰だろう」

二人が立ち止まって見ているうちにセーラー服の少女は受け付けに入場券を見せていた。

「トーナメントを観にきた子なのか。一般には知られていないのに、どこで知ったんだろう」

「こんなの観に来るのなんて私たちのクラスだけだと思うのに。まさか、一般の人じゃないよね。この入場券かなり高額なのに」

桃子も先程までの恐怖も忘れて、つぐみと謎の少女について考察していた。その少女は服を脱ぐ所で一瞬戸惑っていたが、あっさりとセーラー服を脱ぐと持ち物を預けて歩いて来た。

「うちの学校の生徒だよね。私も桜桃中学Zクラスの御門つぐみと言うんだ。こっちも同じクラスの大瀧桃子。あなたは？」

つぐみの問いに少女は驚いたようだが、自分もZクラスで武田真由子だと名乗っていた。

「今日からZクラスに編入になりました。先生から皆さんトーナメントを見学に行っているというので私も来たんですよ。3人って先生は言ってましたけど、後お一人は？」

真由子に言われつぐみは桃子に顔を向けた。つぐみも今日の出来事を知らないので桃子に説明して貰いたかった。桃子は二人に見つめられ緊張した顔をしていたが、おずおずと口を開いていた。

「そうかなのか、もう小日向は処刑されたんだ。それで今は吉川が処刑されようとしてるんだ」

桃子の説明で一通り事情が分かったつぐみは、それなら早く観に行こうと、桃子と真由子を急かしていた。

「吉川も知ってる人に観て貰った方が嬉しいだろう。私ならクラスのみんなに、私が無様に処刑されるところを観て貰いたいもんね」

「ああ、御門さんはそうなんですね。私もそうかも知れないです。この前、男の人たちに犯されて回されたんですけど、無理矢理暴力的に犯される事に凄く興奮してしまって、一緒にいた友達にその姿見られていたのが余計興奮したんですよ。その後、知らない人たちに助けられたんですけど、本当はマンコもっとズタズタにして欲しかったなって。だって、友達はマンコの穴に煙草の火を押し付けられたり、お尻の穴にナイフ突き立てられたりしてたんですよ。羨ましいと思っちゃいました」

「へぇっ、マンコの穴に煙草の火か……。良いね、私煙草吸わないから思い付きもしなかったよ。それで、その友達はどうしたの。Zクラスに入ったんじゃないの」

「ううん、その子は入ってないです。多分、バレてないんだと思います。私は〝シム69〟に行ったのがバレてしまったので」

「何、〝シム69〟って？」

「知りませんか、あの有名なメス奴隷〝69番〟の体験が出来るアトラクションです。グランドオープンに向けて最近プレオープンしたんですよ。企画協力に〝69番〟の実の父親も参加しているらしい本格的なアトラクションですよ」

つぐみは真由子の言葉に茫然としていた。

・・ゆかり姉の体験、それに叔父さんが関わっているのか。しずくは知っているのかな、それに理恵さんも・・

「私、そこに行って来たんですよ。自分で体験してみて〝69番〟は本当に頭がおかしい女子だと実感しました。早くグランドオープンして貰いたいです。是非とも最後まで〝69番〟の体験をしてみたいんですよ」

「あのぅ……」

二人の話を聞いていた桃子が口を挟んできた。真由子は何ですかという顔で桃子を見つめていた。

「武田さんは〝69番〟が好きなんですか？」

「好きというより憧れの存在かな。私もあんなメス奴隷になりたいと面っているんだよ。大勢の人が注目する前でマンコ徹底的に破壊されて泣きながら絶命するの。想像しただけでマンコ濡れてくるよ」

「武田さんもそうなんですね。私は処刑は怖いです。でも、それならつぐみちゃんと仲良くなれますよ。だって、つぐみちゃんは〝69番〟の従姉妹ですから」

桃子の言葉に真由子は絶句していた。そして、つぐみを穴が空きそうなほど見つめる。つぐみは照れたように笑っていた。

★　★　★　★

天美は前に置いた姿見を見ながら慎重に腰を降ろしていく。股の間に置いた蝋燭の火が、天美の股間に近付き物凄い熱気が天美の股間

を焼き始めていた。

・・これから、マンコの穴に蝋燭を挿れる。私は自分で子宮を火炙りにするんだ。こんな事考えて実行する〝69番〟は絶対に狂っている。でも、私もこの行為を止められない。それどころか、早く子宮を焼きたい衝動を抑えられない。このアトラクションに来ている女子はみんな私と同じなのかな・・

蝋燭の火は天美の膣に挿入してある大きく開いた膣鏡の中に入っていく。

「うぴいぃぃぃーーーーっ」

・・あづい、あづい、あづい、あづい、あづいぃぃぃーーーっ・・

天美はポロポロと涙をこぼし、鼻水とよだれを垂らしながらも少しずつ腰を落としていく。もう、蝋燭の火は天美の膣の中に入っていた。

「あひいぃぃぃーーーーーっ！」

・・マンコのなが、あぢゅいぃぃぃーーっ・・

もう天美の子宮に火が触れるほど蝋燭は膣の中にすっぽりと入っていた。

「あぶうぅぅぅぅーーーーーーっ！」

ぶり、ぶり、ぶりぃぃぃーーっ

天美はぼとぼとと脱糞していたが、天実自身は自分の性器の内部を襲う凄まじい激痛に、大便を漏らしている事に気付いてもいなかった。そして、さらに腰を落としていく。

じゅっ！

「あぢゃあぁぁぁぁーーーーっ！」

天美は膣内に挿れた蝋燭を子宮に押し付け火を消していた。膣内から煙が流れ出し、肉の焦げた匂いが漂っていた。

・・一回で許されると思ってないでしょうね・・

天美は自分自身に呟いていた。

・・マンコの中、子宮が黒焦げになるまで繰り返すのです・・

「はい、私のマンコが壊れる様を楽しんで下さい」

自分に命令した天美は、声を出して答えると再び蝋燭に火を点け、腰を落としていった。

★　★　★　★

「少し時間が押して参りましたので、この不届き者の処刑は次の対戦が終了した後に執行致します。御了承下さい」

沙也加のアナウンスで観客席の怒声もひとまず落ち着きをみせてい

た。最大の見所を邪魔した許しがたい罪人を、処刑するのは当然の事であるが、トーナメントの対戦も楽しみなのである。

「それでは、Ｂブロック二回戦、メス奴隷ハルカ対イチゴの対戦を開始します」

沙也加の宣誓でメス奴隷たちが入場して来る。調教師ルイに鎖を引かれたハルカは俯いて自信なさ気に歩いて来るが、イチゴの方は胸を張って堂々と歩いていた。

・・葉月が多少ルールを改正しましたが、どうせこの調教師、仙術なるものを使用してくるでしょう。面白いですね。私相手にどこまでやれるか楽しみです・・

ルイはボーラーハットにサングラスにマスクという、いつもの出で立ちで微笑んでいた。

138、哀願

チリ、チリ、チリ、チリ、チリ

「あぢゅうぅぅぅーーーーっ！」

天美は膣に蝋燭を挿れる前に今度はクリトリスも焼いていた。そして、次に会陰や肛門も火で炙っていき、その後膣内に蝋燭を挿れていた。

・・あひゃひゃ、もっともっとマンコ壊すにょ・・

天美はまるで別人のように人が変わり、自分の性器を痛め付けていく。そして、膣火炙りを何度か繰り返しているうちに天美はあまりの興奮で卒倒して倒れていた。

・・あうっ、マンコ痛い。マンコの奥も痛いよ・・

しばらくして気が付いた天美は自分の性器の痛みに顔を歪めたが、まだまだ物足りない思いが頭を占めていた。

・・もっともっとマンコ徹底的に壊したい。この部屋にはまだ〝69番〟がマンコ壊すのに使用した器具があるはず。それを見つけてマンコ壊すんだ・・

天美は押し入れの中の物を外に出して眺めていたが、それは組み立てて使用するものだと気が付いた。そして、試行錯誤して組み立てたそれは、刃の代わりに板状の錘の下がったギロチンのような物だった。

・・これが〝６９番〟が使用していたマンコギロチン。〝６９番〟はこれで自分のマンコ潰して興奮していた。でも、どうせならマンコ潰すだけじゃなくて、もっとマンコ壊したいよ・・

天美は、さらに何かないかと探していると木製の杭を見つけた。長さ３０センチ、直径１５センチ程度の円柱の杭は片方の先端が円錐形に尖っている。天美はその杭を見て興奮していた。

・・マンコギロチン使って、この杭を私のマンコに打ち込む。固定されて動けない私のマンコにギロチンの錘で、この杭を根元まで打ち込むの。あははっ、マンコに杭打たれて封印されちゃうなんて最高・・

天美は、自分の考えに興奮し、それを実行する為準備を進めていく。ギロチンをセットし、自分の膣に杭の尖った先端を当て固定する。そして、口も封印し自分の体を動けないように完全に拘束していった。

・・ふふっ、あとはタイマーをセットして目隠しして両手を拘束すれば終わり。これで私のマンコに杭が完全に打ち込まれるまで逃げられない。私のマンコ裂けて、子宮も壊れちゃうかな・・

天美は自分のその惨めな姿を想像するだけで膣口から粘液が溢れだしていた。そして、天美は素早くタイマーをセットし目隠しをする

と、残った両腕も手枷で固定する。これで天美は、もう逃れる事は出来ない。天美の耳にはモーターの動作する音と、錘が引き上げられていく音が聞こえてくる。

カチッ

錘がギロチンの最上部まで引き上げられた音が天美に聞こえた。次の瞬間、錘が落とされ、そして膣口に固定してある太い杭が天美の膣内に打ち込まれるのだ。

「ふぐ、ふぐ、ふぐ、ふぐ」

天美は恐怖と期待で、これから自分の性器を襲う激痛を想像していた。

・・あれだけ太い杭を打ち込まれれば私のマンコの穴、裂けるよね。１回でどれくらいの深さまで打ち込まれるんだろう。タイマーは１分間隔で１時間にセットしてあるから、杭全部マンコに打ち込まれるよね・・

天美が想像しているうちに、シューッと錘が解放され落ちてくる音が聞こえてきた。

ズガァッ！

「ふぐうぅぅぅーーーっ」

天美の膣に一気に１０センチ近く杭が打ち込まれていた。そして、錘はすぐにまた自動的に引き上げられていく。天美の膣はビリビリと裂け、血が流れ出していた。

ズガァッ！

「ふぐうぅぅぅーーーっ！」

プッシャァァーーーッ

再び錘が落ち、天美の性器に杭が打ち込まれる。杭はさらに深く天美の膣に打ち込まれ、天美は尿道から小便を噴水のように噴き上げていた。天美は自分の膣を裂かれる激痛に必死に逃げようとするが、厳重に拘束された体は動かす事が出来ない。そこへ、また錘が落ちてくる。

ズガァッ、ズガァッ、ズガァッ！

「ふんがぁぁぁーーーーっ！！」

休む事なく錘は機械的に天美の性器に落ちてくる。杭はその度に天美の膣に打ち込まれ、天美の膣は大きく裂け、杭の先端は子宮にまで達していた。それでもまだタイマーは１０分を経過した所だった。

ズガァッ！

「ふぐおぉぉぉーーーーっ！！」

ぶり、ぶり、ぶりぃぃぃっ

天美は今度は大便まで漏らし始めた。肛門から太い便が排泄され、ぼとぼとと落ちていった。悪臭が辺りに漂ようが天美は塞がれた口で獣のような声を上げ、肛門から漏れだした大便は止まらずにムリ

ムリと床に落ちていく。そして、ついに杭は子宮口を抉じ開け、その中にも打ち込まれていった。

・・もお、ゆるぢでえぇぇぇっ。マンコ壊れるうぅぅぅっ・・

目隠しの下の天美の眼は白目を剥き、天美はもう失神寸前だった。しかし、タイマーはまだ半分以上残っている。天美は大小便を漏らし、全身汗まみれになりながら絶叫していた。

★　★　★　★

・・ふふっ、厳重に縫ってあげますよ。私、お裁縫は得意なんです・・

沙織は画鋲を大量に詰められたしずくの膣をそのまま左右の小陰唇を縫い合わせ封印しようとしていた。

・・画鋲入れられたまま閉じられちゃうなんて変態のあなたは嬉しいでしょうね。でも、まだ物足りないですかね。どうせもう使う事ないでしょうから、もう少し壊してあげましょうかね・・

沙織はトレイの上でガラスのグラスをパリンと割り、それをまた細かく割っていく。そして、小さく鋭いガラス片になった破片を、そのままザーッとしずくの膣内に落としていく。

「ガラス片で隙間を埋めましたけど、まだ画鋲が足りませんね。旧〝６９番〟は膣に１０箱画鋲を入れられたようなので、あなたにも同じだけ入れてあげるわね」

沙織は残りの画鋲の箱を開けザーッとしずくの膣内に挿れ、すりこぎ棒でそれを押し込んでいく。

「ふぐおぉぉぉーーーーっ！」

しずくは人間とは思えない絶叫を発し苦しんでいるが、沙織は、その絶叫でむしろ興奮したように画鋲を押し込み、小陰唇をチクチクと縫い始めた。

「あぶうぅぅぅぅーーーーーっ！」

「いい声ですね。こんな声を聞くと余計興奮してしまいますよ。厳重に細かくしっかり縫ってあげますからね」

沙織は言葉通りしずくの小陰唇をしっかり縫い、しずくの性器は封印されていた。

★　★　★　★

「さあ今度は針でいこうか。このプレイは一般人でも経験のあるメスが多いし、君もあんな下着穿いてるくらいだから何でもないだろう。取り敢えず、乳首とクリトリスに１００本程針を刺してみようか。分かってると思うけど、その姿勢のまま動かないようにな」

斎藤はひまりに残酷に命令していたが、ひまりは生まれて初めての調教ですっかり興奮してしまい、その顔を紅く上気させていた。

・・私、男の人に初めて調教されてる。これから乳首とクリに針を刺されるんだ。でも、もっと刺して欲しいな。もっと惨めな姿にして欲しい。やっぱり早くマンコにピアス入れて欲しいよ・・

ひまりは自分の性器にピアスを入れられた姿を妄想して濡らしてしまっていた。

１３９、浣腸

１３９、浣腸

「それではルーレットを回します」

沙也加がルーレットを回し、玉を入れる。そして、止まった時に玉が落ちたマスには〝浣腸〟と書かれていた。

「この対戦はメス奴隷への浣腸で争われます。それでは始めっ」

沙也加の合図で調教師の二人は走り出す。これでまたメス奴隷の苦しむ姿が見られると観客席から、ワーッと声援が起こる。

「浣腸ですか。浣腸で失神させる事が出来るのかな。俺には想像出来ないけど」

「私は大量に浣腸されて気を失った事があるわよ。お腹が破裂するほど入れられて苦しくて失神したの。だから、浣腸でも可能だけど、メス奴隷は慣れているだろうからね。よほど大量に注入しないと無理かもね」

「それは楽しみね。ハルカもイチゴも小柄なロリ体型だから、そのお腹がぷっくりと膨らむのは楽しいわね」

観客たちはまだ幼い２匹のメスが大量浣腸され、肛門から液状の便

を噴水のように噴き出す姿を想像し興奮していた。中にか気が早く自慰を始めている者もいる。

・・浣腸ですか、なかなかマニアックですね。この場合、一発で失神というのは難しいでしょうね。問題は何処の穴に、何を注入するかですね。気をつけるのは、まだ殺してはいけないという事ですね。あの、イチゴというメス奴隷、まだそれほど経験がないでしょう。あまりきつい責めをするとショックで死にかねません。その辺の力加減が難しそうですね・・

ルイは走りながら考えていた。同時に走り出した筈の相手の調教師は遥か先を走っている。

・・なるほど、早速仙術とやらを使っていますね。気付かれないように少しずつ〝縮地〟を使用している訳ですか。今回のトーナメント方式では早く器具を手に入れ、早く責めを開始した方が有利ですからね。よほど力量の差がない限り、先攻した者が勝利する確率は高いでしょう。でも、あなたと私ではどうでしょうかね・・

ルイは遅れをとりながらも、焦る事はなく冷静に状況を把握していた。

・・後から着いた場合の有利な点が一つ。それは先着した調教師が何を持っていったのか分かる点です。それで、どのような責めをするのか予め予想する事が出来ます。逆に先着した調教師は私が何を持ち帰ったのか分からない。そこが、付け入る隙となるでしょう。私のメス奴隷ハルカは葉月のクローン皐月に調教ではなく拷問を毎日受けているメスですよ。多少の事では失神などしませんね・・

ルイは相手の調教師に遅れて器具置き場に到着すると、空白になっ

ている器具を確認する。

・・イルリガートル関係ですか。シリンジではなく、これを選んだとすると大量浣腸を狙っている訳ですね。それに、塩酸も持っていっているようです。一歩間違えるとメス奴隷を殺してしまいますが、そのギリギリを責めるつもりですね・・

ルイは敵の戦略を瞬時に理解し、自分の責めを構築する。そして、必要な器具を手に取ると会場に向かい走り出した。その頃、縮地を使い一足早く戻っていた調教師は、ハルカをうつ伏せにし首と両手首を一つの板状の枷で固定し、尻を高く突きだす格好で固定していた。ハルカの性器や肛門が丸見えになっている。その肛門にイルリガートルから伸びているチューブを挿入していった。そして、塩酸を入れていくが、調教師はどの程度に希釈するか悩んでいた。

・・濃すぎるとメス奴隷を殺してしまう。かなり薄めて試していくよりないな。それでも、こんな幼いメス奴隷なら耐えられる訳がない。俺の勝ちは決まったようなもんだな・・

調教師は薄めた塩酸を満たしたイルリガートルのコックを開ける。チューブの中を塩酸が流れていきハルカの肛門からハルカの中に入っていった。

「はぎゃあぁぁぁぁーーーーっ！」

ハルカが絶叫し、逃れようと暴れるが完全に拘束されているハルカは動く事が出来ない。ハルカの腸内に塩酸がどんどん注入されていた。

★
★
★
★

つぐみたちが観客席に戻って来ると、ちょうどハルカとイチゴの対戦が始まったところであった。

「あーっ、小日向と吉川の処刑、終わっちゃったのか残念」

つぐみがため息をついていたが、桃子は会場の隅に移動されていた逆さ吊りにされている栄子を発見する。

「あの隅にいるの栄子ちゃんだよ。まだ処刑されてないみたいだよ」

つぐみと真由子が桃子の指差す方を見ると、確かに吊られている栄子を確認出来た。

「そうか、トーナメントの進行に支障をきたすといけないから吉川の処刑は後回しにしたんだね。小日向の処刑は見られなかったけど、吉川の処刑は見られそうで良かったよ。吉川もクラスメイトに見て貰った方が嬉しいだろうからね」

平気でそんな事を言うつぐみに、桃子は恐れをなして一歩退いていたが、真由子は本当に処刑するのですか、私見るの初めてだから興奮しますと、ウキウキした顔で言うのを見て、真由子からも一歩退いていた。

・・この人たち、絶対おかしいよ。クラスメイトが処刑されちゃうのに何にも思わないの。それに、その後は私たちなのかも知れないんだよ・・

桃子は一人ぶるぶると震えていた。

★　★　★　★

「ひぎぃぃぃーーーっ、いだいぃぃぃーーーっ！」

ひまりは両方の乳首に針を刺されて悲鳴を上げていた。画鋲を埋め込んだ下着を穿いたりしていても、痛いものは痛い。ひまりは両方の乳首に十字に針を刺されていたが、針責めはまだ始まったばかりだ。１００本のうち、まだたった４本しか刺されていない。それでも、ひまりは涙と鼻水を流し顔面をぐしょぐしょに汚していた。

「まだ、乳首に少し針を刺しただけなのに大袈裟だね。今度は乳首の頂点から君の中に深く打ち込むよ。この十字針より痛いと思うから、思い切り泣き叫んで良いからね」

斎藤の言葉にひまりは顔を硬直させ、ぶるぶると震え始めていた。乳首を横に貫通されたのには、なんとか耐える事が出来た。だが、今度は乳首から自分の内に深く針を刺される。それが、どれ程の激痛なのか、まだ中学生のひまりには想像も出来なかった。

・・ゆるしてくだぢゃい・・

ひまりは心の中で許してと訴えていたが、それは口に出さず泣きながら針を持つ斎藤の手を目で追っていた。そして、その手が自分の胸に迫ってくる。

「あ、あ、あ、あ……」

小さく声を出すひまりの乳首の先端に針先が当たる。その、チクッした刺激でひまりは更に大きく震えていたが、斎藤はひまりの乳首を摘まんで力を入れていく。

プツッ

「はぶうぅぅぅーーーっ！」

ひまりが絶叫するが斎藤は構わず、ひまりの乳首の先端から深く針を打ち込んでいった。

１４０、沸点

１４０、沸点

「ひぎゃあぁぁぁーーーっ、あぢゅいぃぃぃーーっ、おなかのながぁやげるうぅぅーーっ！」

ハルカは希釈された塩酸を肛門から浣腸され泣き喚いていた。しかし、３リッターもあるイルリガートルのボトルには、まだ並々と塩酸が残っている。当然ながら調教師はこれを全てハルカの肛門から注入するつもりであった。ハルカの下腹部がどんどん膨らんできて注入速度が遅くなってきていた。それを見た調教師はハルカの下腹部に掌を当てる。観客から見たらハルカの腹に手を当て揉みほぐし浣腸液をスムーズに流し込もうとしているように見えるが、そうではなかった。調教師はハルカの腹に仙術でいう〝発勁〟を打ち込むつもりだった。〝発勁〟、いわゆる衝撃波である。最大出力で打ち込めば心臓の動きを止める事もある技である。調教師は浣腸していると見せかけ、その技でハルカを失神させるつもりであった。その為に両手を使うシリンジではなく、両手がフリーになるイルリガートルを選んだのだ。

・・くくく、こんな小娘なら簡単に失神させてやる。今回の器具が浣腸で良かったぞ、これなら両手でこの小娘を始末出来る・・

調教師は隣の自分のメス奴隷イチゴの様子を見る。イチゴは開脚逆さ吊りにされ、これからシリンジで浣腸されるところであった。

・・ふふふ、いくらイチゴでも浣腸程度で失神はしない。危険な塩酸は俺が持ってきてしまった。残っているのは水やグリセリン、ミルク等だ。どれを選んでも塩酸程の破壊力はない。仙術を使える俺にとって楽な勝負になったな。これなら、あの豪徳寺にだって勝てただろうに惜しいな・・

調教師は、もうこれで決着がつくだろうと掌に力を込める。

ドンッ

小さな音が響きハルカの体がビクンと動いた。ハルカの体に衝撃波が叩き込まれ、これでハルカは無様に失神している筈だった。

「あびゃあぁぁぁーーーーっ！」

しかし、ハルカは失神せず絶叫していた。

・・なにっ……。しまった、殺してはいけないと手加減し過ぎたか。あまり、繰り返しては浣腸ではないと見破られる恐れがある。くそっ、少し間をおかないと・・

調教師は慌てたが、イチゴの方は失神する恐れはないと考えていたので、進行の沙也加に気付かれなければ問題ないと考え、ハルカの膨らんだ腹を擦ったりして誤魔化していた。

・・少しこのメス奴隷を見くびっていたようだ。小娘に見えてもメス奴隷。それなりの経験と耐久力はあるという事か・・

次はもっと強烈なやつをお見舞いしてやろうと調教師は笑みを浮か

べていた。その頃、ルイは持ってきたグリセリン液を温めていた。

・・ハルカをなめてはいけませんよ。豪徳寺皐月に性器を解体されるような拷問を受けているのです。少しくらいの拷問や苦痛で音を上げる事はありません。それに、あなたは工夫するという事を知りませんね。このグリセリンの沸点は２００度以上です。これを沸かして注入すれば塩酸以上の危険物になりますよ。そして、それを肛門から腸に注入しては殺してしまいますが、子宮にゆっくり注入すればショックで死ぬ事もなく、失神してくれるでしょうね・・

ルイはグリセリンを温めながらシリンジにカテーテルをセットし、イチゴの子宮にグリセリンを注入する準備を進めていく。

・・あなたはメスじゃなくなるけれど、子宮なくても生きていけるでしょう。遠慮なく注入させて貰いますよ・・

ルイはイチゴの子宮口にカテーテルを押し込むとシリンジにぐらぐらに沸いたグリセリンを満たしていた。

「ショックで死なれても困るから、これからあなたが何をされるか教えてあげましょうね。あなたは今子宮口にカテーテルを挿れられているのは分かりますね。そこから、この沸騰したグリセリンを注入してあげますね。御存知かも知れませんがグリセリンの沸点は水の１００度より遥かに高いですからね。あなたの子宮は焼け爛れて使い物にならなくなるでしょうね。嬉しいですか」

ルイの言葉にイチゴは震えていた。唇のぶるぶる震えて言葉も出せなかった。

「可愛い顔ですね。そういう顔をしてくれると余計壊したくなって

しまいますよ。それじゃ、注入しますよ」

ヂューーーッ

「うびゃあぁぁぁぁーーーーっ！」

ぶり、ぶり、ぶりぃぃぃっ

イチゴは子宮にグリセリンを注入され、絶叫すると脱糞までしていた。

「おやおや、お尻の穴には浣腸していないのにウンチ出てしまいましたね。いい姿ですよ。ほらもっと出しなさい。少しずつ注入してあげますから、子宮が徐々に壊れていく感覚が楽しめるでしょう」

ルイは残酷に笑いながらイチゴの子宮にグリセリンを注入し、イチゴの下腹部が膨れてくる。

「あぶうぅぅぅーーっ」

イチゴの悲鳴に力が失くなってくる。もうイチゴの子宮内は焼き爛れて、ベロベロと組織が剥がれ落ちていた。それでもまだイチゴは子宮に沸いたグリセリンを注入されていく。そして、イチゴの大きく見開いていた目が、ぐるんと白目を剥いた。反り返っていたイチゴの体も、だらーんと力なく垂れ下がっていた。大便を漏らしながら失神したイチゴの腹が異様に膨らんでおり、その惨めさを引き立たせていた。

★　★　★　★

「さあ、一応乳首はこれで一旦終わりにして次はクリトリスにいこうか。君も待ちきれないだろう。クリトリスも乳首と同じ様に十字針に頂点から深く打ち込んであげるからね。それじゃ、アルコールで消毒だ」

斎藤はセーラー服を捲られスポーツブラを上にずらされて乳首に針を刺されているひまりの胸を嬉しそうに眺めた後、今度はひまりのスカートの裾を腰の部分に挟むとクリトリスをアルコールで丁寧に拭いていく。ひまりのクリトリスは、これから針を刺されるというのに硬く勃起していた。

「君は本当に良い子だ。僕の大好きだったゆかりの様だよ。いいかい、そのまま大人しく動かずにいるんだよ」

ひまりは涙と鼻水で汚れた顔で、こくんと頷いていた。斎藤はひまりの腰の前にかがみ込むと、クリトリスの側面に針を当てた。そして、徐々に力を込めていく。

プツッ

「いだあぁぁぁっ」

ひまりは悲鳴を上げていたが、心の中では別の事を考えていた。

・・私、男の人に本当にマンコに針を刺されてる。これは、オナニーの時の妄想じゃなくて現実なんだ。痛いのに気持ちいい。もっともっと針を刺して欲しいよ。そして、６９番みたいに針山のマンコを鞭で打って欲しい。この人なら本当にやってくれそうだから、ど

うしても期待しちゃう・・

ひまりは、自分の中で被虐嗜好がどんどん高まっていくのを止められなかった。

・・私が69番に惹かれたのは、私も同じ願望を持っていたからなんだ・・

ひまりは思わず叫んでいた。

「頭のおかしい変態ブスのひまりのマンコを徹底的に容赦なく二度と使用できないよう破壊して下さいっ！」

それを聞いた斎藤は一瞬びっくりした表情を見せたが、すぐにニヤリと満面の笑みを浮かべていた。

１４１、当選

１４１、当選

「ビクトリー、ハルカ」

沙也加の右手が上がりメス奴隷ハルカの勝利が確定した。イチゴは失神してぐったりと逆さに吊り下がっていた。

・・なんだ、このメス奴隷は何発〝発勁〟を打ち込んだと思っているんだ。最大出力でも打ち込んだ。心臓が止まり内蔵がぐちゃぐちゃになって死んでいる筈なのに、なぜ気絶すらしない。有り得ないだろう・・

調教師は呻き声を上げているハルカを化け物でも見るような瞳で見つめていた。そして、イチゴの姿も見る。

・・まったく情けないメス奴隷だ。ウンコ漏らしてすぐ失神しやがって。お陰で俺は二回戦で敗退だ。もっとましなメス奴隷を連れてくれば良かったぜ。それにしても納得がいかねえ。あのハルカとかいうメス奴隷、薬でも射っているんじゃないか・・

調教師は進行の沙也加に近付くと自分の不満をぶちまけていた。

「ちょっと確認して貰いたいんだが、あのメス奴隷の薬物検査してくれないか。薬を使っていそうなんですよ。そうでないとおかしい」

調教師は沙也加に検査依頼をするが逆に沙也加にギロリと睨まれていた。

「検査はトーナメント出場前に行っているのをあなたも確認していますよね。それからも常にカメラの画像に映っていますから薬物を使用するのは不可能ですよ。それより何故薬物を使用していると思うのか説明して貰えますか」

「いや別に……。ず、ずいぶん耐えられるメス奴隷だと思ったものだから」

「そうですか。私は逆にあなたの方が怪しいと思っていますよ。浣腸勝負なのに明らかにおかしな挙動があります。これから録画している動画でチェックしようと思っていたところです」

「俺は何も……」

調教師は、そう言いながら沙也加の目を盗んで逃げようとしたが、既に周りはスタッフに取り囲まれていた。

「チェックが終わるまで拘束しておきなさい」

沙也加の命令で調教師は悲鳴を上げながら拘束され運ばれていった。

「それでは敗者のメス奴隷イチゴの処刑を執行します。今回もお客様参加型としますので御希望の方は端末より申し込みお願いします」

前回抽選に漏れた観客は、今度こそと端末に入力していた。もちろん、つぐみと真由子も申し込んでいたが桃子は、前回一緒に当選し

た詩織が処刑されてしまった事で怖じ気づき、今回は申し込まずにいた。観客たちが端末を操作している間にイチゴは仰向けの水平状態で開脚され拘束されていた。つまり、イチゴは観客席に向かって大きく足を広げ、性器が丸見えの状態で固定されていたのである。

「さて、それでは当選者の方の番号を呼びますので、呼ばれた方は前に出てきて下さい。ここからマンコを的にして矢を射って貰います。上手くマンコの穴から子宮に当てた方には豪華賞品を差し上げますので皆様頑張って下さいね。それでは一番目の方は……」

空中で仰向けにされているイチゴは自分の性器が矢の的になると知り悲鳴を上げていた。しかし、洋弓と矢が用意され最初に当選した観客が弓を構える。和弓と異なりスコープや補助する為のスタビライザーもついている洋弓は、命中精度が高い。一番目の男はスコープを覗き慎重にイチゴの性器に狙いをつけていた。

★　★　★　★

「もう一度言ってくれないか、君の本心を」

斎藤は、興奮が止まらなかった。

「はい、ブスで頭のおかしい変態ひまりのマンコを徹底的に容赦なく壊して下さい。オナニーも出来ないように完全に跡形もなく壊して下さい」

斎藤は興奮を通り越して感動していた。体がぶるぶると震えている。

・・こいつは本物だ。本当に頭のおかしい変態だ。ゆかりと同じ性器破壊願望に取り憑かれた本物の変態だ。ようやく巡り会えたぞ。こいつのマンコは望み通りクリトリスも小陰唇も尿道も膣も子宮も全て壊してやる。お前も、ゆかりの様にマンコを壊されて無様に死んでいくんだ・・

「あぁ、望み通り君のマンコを壊してやるよ。君は本当にマンコを壊されて、絶望と後悔と苦痛の中、無様に死んでいくんだ」

斎藤の言葉にひまりは天にも昇るような気持ちで笑顔を浮かべていた。斎藤は、そのひまりの顔を見て手を止めていたクリトリスへの針責めを再開する。ひまりのクリトリスを針でズゥーッと突き通していく。

プツッ

「あうぅぅぅーーーーっ！」

ひまりの悲鳴と共に針はクリトリスを突き抜けていた。そして、すぐに斎藤はひまりの小さく硬く勃起している突起に、一本目と交差するように針を当てると、その針を持つ手に力を入れていった。

プツッ

「あうぅぅぅぅーーーーっ！」

ひまりのクリトリスにまた針が突き刺さり、ひまりはまったく同じ様に悲鳴を上げるが、両手を上げ足を大きく開いたまま姿勢を崩さずに耐えていた。

・・ふふふ、良いぞ。ゆかりのマンコに針を刺しているようだ。マンコに針を刺す感触は最高だ。こいつは僕の意識の中では〝ゆかり〟だ。僕はついにゆかりのマンコに針を刺しているんだ。僕に針を刺されてゆかりも喜んでいる。もっともっと喜ばせてやるぞ、ゆかり・・

斎藤は、ひまりのクリトリスに十字に針を刺し、次にクリトリスの頂点から針を打ち込んでいた。

「いだあぁぁぁーーーっ、ふかい、ふかい、ふかいぃぃぃーーっ」

泣き叫ぶひまりに構わず斎藤はクリトリスに針を打ち込んでいく。５センチ、そして１０センチ。斎藤はひまりのクリトリスに針を根元まで打ち込んでしまった。ひまりの太ももがぶるぶる震え、ひまりは立っているのもやっとの状態になっていた。しかし、斎藤はひまりを許す気配などない。次の針を持った斎藤は、今度はひまりの会陰に針を突き立てた。

プツッ

「あひいぃぃぃーーーっ、いだいぃぃぃーーーっ！」

ぶり、ぶり、ぶりぃぃぃっ

肛門に近い会陰に針を突き刺されてひまりは脱糞してしまっていた。中学生のひまりが性器に針を刺され大便を漏らす姿に斎藤の欲望はもう止まらなくなっていた。

・・あぁ、ゆかり。もっと針を刺して苦しめてあげるからね。その後、乳首とクリトリスを燃やしてあげるよ。ゆかりが処刑された時

みたいに黒焦げの炭にしてあげる・・

斎藤の瞳には狂気の火が燃えていた。

★　★　★　★

シム６９は一応一般向け変態のアトラクションである為、最低限の安全性は考慮されている。特にステージ１は一人で体験する為、入室時に貸与される端末に１２０分操作がないと自動的に運営事務所に信号が伝わるようになっている。そして、その信号が発せられた部屋に救護班が駆けつけるようになっていた。

この日、信号が事務所に伝わり救護班が駆けつけてみると、部屋の中でマンコギロチンを使用した女が白目を剥いて失神した姿で発見された。その女を運び出そうとした救護班は、ギョッとして目を疑った。マンコギロチンで失神したのかと思ったが、それだけではなかった。その女は性器に杭を打ち込んでいたのである。杭は完全に性器に打ち込まれ、そのままでは抜く事が出来なかった。救護班は苦労して杭の底に取っ手をネジで取り付け、ようやく杭を性器から抜く事が出来たが、その凄まじい自虐行為に震えあがっていた。そして、その女は〝ピケット・モンスター〟、略して〝ＰＭ〟と呼ばれるようになっていた。

１４２、射手

１４２、射手

「私、弓道部だったのよ。私が抽選に当たれば、あのメス奴隷のマンコ一発で仕留めてやるのに。当たらないかなぁ」

「あれは弓道の和弓じゃなくてアーチェリーの洋弓だよ。似てるけど洋弓の方が命中精度高いから素人でもマンコ当てられるからさ。和弓は経験者じゃないと無理だから、当てやすい洋弓にしたんでしょ。運営も考えてくれてるのよ」

イチゴの性器を的にしたゲームで観客席も盛り上がっているうちに最初の男が矢を射っていた。

ドスッ

「あぎゃあぁぁぁーーーっ！」

矢はイチゴの大陰唇に見事に突き刺さりぶるぶる揺れている。

「くそっ、マンコの穴を狙ったのに外した」

男は悔しそうに洋弓を戻すと席に戻っていった。そして、次に当選した観客が弓を手に取る。今度の射手は女だった。

「マンコを矢で射貫けるなんて面白いわね。私、弓には少々自信あるのよ」

女はスコープで狙いをつけながら弓を引き絞っていく。そして、指を放した。

ヒュンッッッ

放たれた矢は先程の男のものとは、まるで別物だった。食堂で酒盛りしながらモニターを見ていた面々も、思わず矢を注視していた。

「ほう、なかなか鋭い矢を放ちますね。この客は経験者でしょうね。その所作からも素人ではない気配が漂っています。放った矢にも回転を加えていますので、貫通力も増しているでしょう。もし、マンコの穴に命中すれば間違いなく子宮を串刺しにするでしょうね」

葉月の解説で他の面々も確かにその通りだと頷いていると、モニターを見つめていたブスが、何かを言いたそうに葉月やクラヤミの顔を見て唸っていた。

「どうしたのです、ブス」

どうやらブスは射手である女を見て唸っているようで合った。

「ふむ、あの客の女に何かあるようですね。近藤、あの女を調べなさい。確証を見つけるまでは手を出してはなりませんよ。今のところ、大切なお客様ですので」

葉月の命令で、近藤は素早く食堂を出ていった。その後ろ姿をブスが不安そうに見つめている。

「心配は要りませんよ、ブス。ああ見えて近藤は信頼出来る部下でありますから、この前は少し不覚を取りましたけどね」

「そうだぞ、ブス。近藤さんは先日の失敗でチンポ切断されちゃったから、もう失敗出来ない事くらいわかっているさ。ほら、おいで。このモツの煮込み、新鮮で美味いぞ」

ブスが嬉しそうにクラヤミに寄って行くのを見て葉月は嘆いていた。

「またそうやってブスを餌付けしようとして、そんなに可愛がってもブスは譲りませんよ」

すると花梨までが、串揚げの串を持ちブスに声をかける。

「ほら、ブス。この小陰唇の串揚げも美味しいよ。ブスは嬉しそうにアナルプラグについた尻尾を振り、花梨から串揚げを受けとるとソースにつけようとした。

「こらこら、ブス。ソースの二度づけはダメ。ルール違反だからね、覚えておきなさい」

花梨に注意されブスは慌てて手を引っ込めていた。みんなの顔に笑顔が浮かび和やかな時間が過ぎていた。

「そういえば今日は斎藤さんは来てないね」

「あいつは神無月さんに負けて敗者ですからね。あいつの興味はあの〝69番〟だけですから、トーナメントにはもう興味ないのではないですか。今頃〝69番〟の代わりを求めて探し回っているので

しょう」

「なるほどね。でも〝６９番〟と同じメス奴隷がいるなら俺も欲しいな。犯されたい、調教されたいと思ってるメス奴隷はたくさんいるけど、マンコ壊されて処刑されたいと思ってるメス奴隷はそうそういないだろうからね」

「ふふふ、実は友人の百目鬼がアトラクションを立ち上げようとしているのですよ。それは、まさしく〝６９番〟のような真性の倒錯者を探し出す為のアトラクション。これをクリア出来るのは〝６９番〟のような頭のおかしい性器破壊願望を持つ者以外考えられません」

「へぇ、そんなアトラクションが出来るんだ。それは楽しみだな。でも、そんなに集まって来るのかな。かなり特殊な性癖だと思うけど」

「いや集まって来ますよ。砂糖に集まる蟻のようにね。メスは心の奥底でそういう欲望を抱えています。そして、それを体験してしまったら、もう逃げられません。自分でも気付かぬうちに深みにはまっていくでしょう。ほんのちょっとした興味が、逃れられない沼になっていくのです。百目鬼によると、最初のステージは全て自分で考えて体験するようになっているそうです。簡単な自虐から、厳しい自虐まで自分で考えて自分で実行するのです。あくまでも、そのメスの意思で堕ちていく。いや、堕ちていくのではありませんね。もともと、そういうメスだった事に本人も気付くのですよ。あの〝６９番〟の忘れられない台詞〝ブスで頭のおかしい私のマンコを徹底的に壊して下さい〟。それを誰もが言い懇願するようになるのです。実に楽しいではありませんか。まだ、このアトラクションはプレオープンですが、それに参加したメスを見た事があります。あの

メスは間違いなく〝69番〟のようになっていくでしょう。おそらく、他にも同様のメスがいるでしょう。私は楽しみです仕方ありませんよ」

葉月の話の途中で放たれた矢は、イチゴの会陰に深く突き刺さっていた。

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！！」

自分の体に股間から深く突き刺さった鋭い矢の激痛にイチゴは狂ったように絶叫していた。

★
★
★
★

斎藤は、オイルライターを取り出すとカチッと火を点けた。もっと、ゆっくり楽しまないといけないと思いながら、斎藤は自分を止める事が出来なかった。

「もう我慢出来ないよ。君のクリトリスから火炙りにしてあげるね」

斎藤の言葉にひまりは一瞬ビクッと体を震わせたが、そのまま大きく足を開いていた。

「ふーっ、ふーっ、ふーっ、ふーっ」

ひまりの鼻息が荒くなり、顔面は恐怖で歪んでいたが、ひまりは逃げようともせず、そのままの姿勢でいる。それはまるで自分のクリトリスが焼かれる事を期待しているように斎藤には見えた。

・・ああ、やっぱりこいつはゆかりだ。ゆかりが僕に逢いに来てくれたんだ。ゆかりも僕に逢いたかったんだよね・・

斎藤は勝手に自分の頭の中で妄想し悦に浸っていた。実際は、渡邉ゆかりはとうの昔に葉月によって性器を破壊され完全に絶命させられている。これは明らかに斎藤の妄想以外の何者でもなかった。斎藤の頭も相当おかしくなっていると断言できた。

「ひまりの臭くて汚いマンコを処刑して下さい」

息を荒くして呟くように懇願するひまりも、自分で自分を見失っているように見えるが、ゆかりがそうであった様に、これこそがひまりの心からの望みであると斎藤は信じていた。そして、ライターの炎をひまりのクリトリスに近付けていく。

「あひゃあぁぁぁーーーーっ、あぢゅいぃぃぃーーーっ！」

ひまりは絶叫しながらも腰を前に突き出し、斎藤がライターで自分のクリトリスを燃やし易い姿勢をとっていた。

１４３、賞品

１４３、賞品

大陰唇、会陰に続き３本目の矢がイチゴの股の付け根に突き刺さっていた。

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！」

性器は外したがイチゴのダメージは大きかった。イチゴの股間に３本の矢が突き刺さっている。その姿に観客席も大いに盛り上がっていた。

「なかなかマンコの割れ目に当たらないですな。早くあの割れ目に矢が突き刺さる場面を見たいですな」

「本当にそうね。早く子宮を串刺しにして欲しいわ。メスの大切なところが壊されるのはワクワクする。メス奴隷が無様にマンコ壊されるの最高だわ」

「ああ、私が当たれば思い切り射ち込んであげるのに。太もものあの辺は動脈通ってるから早く当選しないとメス奴隷死んじゃうよ」

観客席からやきもきする声が聞こえる中、４番目が矢を放っていた。

ドスッ！！

「あっぶうぅぅぅーーーっ！！」

絶叫するイチゴの尿道に矢が深く突き刺さっていた。かなり深く矢は突き刺さっているので、イチゴの膀胱まで貫通しているのは間違いなかった。続けざまに次の観客が矢を放つが、その矢は大きく外れイチゴの性器はおろか体にも命中しなかった。

「何やってんだ。自信ない奴は辞退しろっ」

「下手な人はでないでほしいわね」

観客席から罵声が飛び、沙也加も苦笑いしていた。

・・これで自分が絶対的を外さない自信があるのですかね。まったく、的を外したら処刑と言いたいところですね・・

沙也加がそんな事を考えているうちに放たれた矢が見事イチゴの膣に入り、子宮を串刺しにしていた。

「あっ、びゃあぁぁぁぁーーーっ！！」

一際高く絶叫したイチゴの膣から血が流れ出している。観客は、矢を放った女に大きな喝采を浴びせていた。

「おめでとうございます。それでは見事、メス奴隷の子宮を射ち抜いたあなたにトーナメント期間中、何回でも使用出来る無料お食事券を進呈致します。小陰唇の串揚げ、クリトリスの串焼き、膣の鉄板焼き等、お好きな物を好きなだけ食べる事ができますのでご活用下さい。あっ、今からすぐ使う事が出来ますので食堂でこの券を提

示して下さいね」

沙也加から食事券を受け取った女は嬉しくて手が震えていた。他の観客から羨望の眼差しで見られながら女はスキップするように観客席に戻っていったのだった。

「そんな物が貰えるのか。絶対メス奴隷の子宮に当てたいね。私たちはお金ないから、メス奴隷のマンコ料理なんて高くて食べられないけど、あの券があれば食べ放題だよ。武田さん、頑張ろうね」

「うん、まだ終了じゃないんだよね」

「商品は1名だけとは言ってないし、進行の人もこれで終了とは言ってないからね。まだ子宮に刺さっているのは1本だけだから、あと何本かは刺さる余地があると思うよ」

つぐみと真由子の瞳はメラメラと燃えていた。この抽選に申し込みしていない桃子であるが、確かにメス奴隷の性器料理を堪能してみたかった。端末を見ると、まだ申し込みは締め切られていない。桃子も密かに参加ボタンをタップしていた。

★　★　★　★

天美は救護室のベッドの上で気がついた。

・・ここはどこ?・・

天美がキョロキョロとしていると、それに気付いたナース服を着た

看護師が近寄って写真を渡して説明してくれた。

「あなたはステージ１の勉強部屋で〝６９番〟を体験中、危険な状態になり救助されました。写真を見て下さい。その状態であなたは１２０分近く気絶していたようです。度が過ぎる方も中にはいるので、あなたも程々にして下さいね。ステージが進んで行けば、あなたも満足出来ると思うので、マンコ壊すのは後でいいと思いますよ」

天美は看護師から渡された写真を見ると、性器に杭を打ち込んで白目を剥いて失神している自分の姿が写っていた。あの太く長い杭が完全に根元まで自分の性器に打ち込まれたいるのを見て、天美はまた興奮し始めていた。

「あの、もうあの部屋は使えないのですか」

「いや、そんな事はありませんが、まだ何かするつもりですか」

「もちろんですよ。頭のおかしい私は自分のマンコを壊すのが唯一の生きてる証なんです。マンコを徹底的に壊します」

天美のその時の顔を見た看護師は思わず呟いていた。

「モ、モンスター……」

しかし、天美は聞こえなかったのか平気な顔でベッドから起き上がり出ていこうとしていたが看護師が声をかける。

「膣が裂けていたので縫ってあります。今は鎮痛剤が効いて痛みは感じないと思いますが、薬が切れたら痛みが襲ってきます。早めにお医者に行ってきちんと治療を受けて下さいね」

天美は小さく頷くと救護室を出ていき、またシム６９の勉強部屋の中にいた。

・・まだやり足りない事がある。オープンまでにステージ１はクリアしておかないと・・

天美は、机の引き出しから錘付のピンチを発見していた。いつでも出来ると思って体験していなかったものだ。こういう時に体験しておこうと天美は乳首をピンチで挟んでみた。

「いたっ……」

思わず天美は声を上げていた。たいした事はないと思っていたピンチだが、それは天美の想像以上に強力だった。ゆかりがバネを強化し、挟む部分もヤスリで鋭角に削ってあるので普通のピンチとは別物の拷問具に変化しているのだ。天美は涙を滲ませながら両乳首と胸の膨らみをピンチで挟んでいった。そして、次に当然性器にもピンチを取り付けていく。

・・ううっ、痛いっ・・

大陰唇、小陰唇、恥丘、太もも、天美は挟む所が無くなる程、大量のピンチを自分の性器一帯に取り付けていた。そして、その自分の惨めな姿を姿見で確認してみる。

・・あはっ、みっともない姿。でも頭のおかしい私にはお似合いね・・

胸と性器に大量に錘をぶら下げた天美は、そんな自分の姿を見て濡

らし始めていた。

★　★　★　★

「ひぎぃぃぃーーっ」

ひまりはクリトリスをライターの炎で炙られ悲鳴を上げていた。針を刺された上に炙られている為、刺さっている針も熱せられ真っ赤に変色している。つまり、ひまりは焼けた針で内側、そして、外側は直接ライターの炎でクリトリスを焼かれているのだ。斎藤は手心加える事なく、ひまりのクリトリスを容赦なく焼いている。辺りに肉の焼ける匂いが漂っていた。

「んぎぃぃぃぃーーーっ」

それまで斎藤の責めに耐えていたひまりの瞳がくるっと白目を剥くと、そのまま崩れるように地面に倒れていった。斎藤は、倒れたひまりを見て両足をぐいっと広げると、今度は剥き出しの性器をライターで炙り始めていた。

・・ふふっ、マンコ壊されるのが望みなら、このままマンコも焼いて黒焦げにしてやるよ・・

斎藤は、くぱぁとひまりの性器を広げると性器の中身も入念にライターの炎で炙り始めていた。

１４４、命中

１４４、命中

イチゴの股間にはもう十数本の矢が打ち込まれていた。それでも上手く膣に入り子宮を串刺しにしたのは僅か1本のみだった。

・・そろそろ股間には矢が刺さる場所が無くなってきましたね。あと5、6人でマンコを的にするのは終了して、メス奴隷イチゴを処刑する方に切り替えますか・・

沙也加はイチゴの性器を矢の的にされている無惨な姿を満足気に眺め、そろそろ絶命させるかと考えていた。そして、次の射手の番号を呼ぶ。

「あっ、当たった。私だ」

桃子の声につぐみたちは驚いていた。

「大瀧、申し込んでたの？」

「う、うん、だって賞品欲しかったから」

「やったぞ、武田。大瀧はZクラスにくる前はアーチェリー部に入っていたんだ。弓道では一般的に的中制で的に当たった矢の本数で勝敗を決める事が多いけど、アーチェリーは得点制で指定されたエ

リアに近い部分に当てた方が得点が高くなる。大瀧はアーチェリーに慣れているから、あのメス奴隷の子宮を串刺しに出来る」

「ええ、それなら大瀧さん。賞品獲得したら私たちにも御相伴させて下さい」

「えっえっ、つぐみちゃんも真由子さんもあまりプレッシャーかけないでよ」

桃子は、そう言いながらも自信たっぷりに歩いていった。そして、弓と矢を受けとると構えてスコープを覗き込む。

・・調整はされているよね。そこは運営を信じるしかないけど、風もない。絶好の射的日和・・

桃子は観客席で怯えていた桃子とは思えない程、堂々とした所作で洋弓を構えている。そして、矢を放った。

ヒュンッ

今までにない鋭い風切り音が響き、イチゴの性器に命中した。

ドスッ

「んびゃあぁぁぁーーーーっ！」

イチゴの絶叫が響き、沙也加が確認してニヤリと笑う。

「おめでとうございます。見事メス奴隷の子宮を串刺しにしました。それでは、これをどうぞ」

桃子は顔を真っ赤に紅潮させ、沙也加から賞品のお食事券を受け取っていた。そして、前の的中者と同じ様にスキップして観客席に帰っていく。

「やったじゃないか、大瀧」

「凄い、さすがですよ。大瀧さん」

つぐみと真由子に笑顔で迎えられ、桃子も鼻が高かった。

「どうする、すぐ食べに行く？」

「うーん、この後栄子の処刑もあるから、早く食べたいけど、それ観てから行こうよ。栄子の晴れ舞台だから、栄子も私たちに観て貰いたいと思ってるよ、きっと」

つぐみの提案で桃子たちも栄子の処刑を観てから食堂に行こうと意見が一致していた。

「栄子の奴、そんな強引な手で処刑されるようになったのか。栄子らしいといえば栄子らしいけどね。武田さんは栄子を知らないだろうけど、栄子も自分のマンコを壊して貰いたいと思っている頭のおかしいメスだからね。でもね、同じ様に頭がおかしかった私の従姉妹も実際に処刑される時には泣き叫んでいたからね。栄子も本当にマンコ壊されたら、きっと泣き叫ぶだろうな。ふふっ、あの栄子がどんな声で泣き叫んでくれるのか楽しみだね」

つぐみは心の底から楽しそうに笑っていた。真由子は、そんなつぐみを見て成る程あの〝69番〟の血筋だけあると感心していた。

★
★
★
★

近藤は、ブスが指摘した観客の女をマークしていた。今のところ怪しい動きはないが、ブスが反応したのだから弥勒院の関係者であるのは間違いない。近藤は、弥勒院の罠に嵌められて自分の部下を失ってしまった事を、苦々しく思い出していた。

・・くそっ、弥勒院の奴らは許せない。全員、始末してやる・・

近藤は胸に怒りを秘め、その女を監視していた。女は矢の的になっているメス奴隷イチゴを楽しそうに見つめている。イチゴの股間はさすがにもう矢が刺さる場所がない程、矢が突き刺さっていた。そこで、沙也加はイチゴの性器への射的を終了しイチゴの体を立たせ正面を向ける。そして、心電図のセンサーをイチゴの胸に装着していた。

「ここからは、この状態のメス奴隷に矢を当てて貰います。今度は絶命させないように矢を射てメス奴隷を出来るだけ苦しめて下さい。絶命させてしまった方にはペナルティとして、１０分間豪徳寺家の愛犬ブスよりお仕置きを受けて貰います」

沙也加は楽しそうに笑いながら言っていたので、観客もペナルティとは言っても犬と戯れるだけのものだと安心していた。だが、近藤は沙也加のアナウンスを聞いて、俺ならわざと矢を外してメス奴隷を殺さないようにするなと震えていた。

★
★
★
★

「メスのマンコを焼くのは楽しくて興奮する。それに、こいつはゆかりだ。僕はゆかりのマンコを焼いているんだ」

斎藤は楽しくてたまらなかった。いつか、ゆかりの性器を焼きたいと思っていた秘めた思いが実現出来たのだ。斎藤は我慢出来ずに、一旦ひまりの性器を焼く作業を止め、仰向けのひまりの上に６９の形に四つん這いになると、半分焼けたひまりの性器を間近に見ながら、自分の性器をしごき始めた。

・・いい匂いだ。ゆかりのマンコの焼けた匂い。この後、黒焦げの炭にしてやる。そして、マンコの穴も子宮も壊してあげる。どうやって壊すのがゆかりは喜ぶかな。子宮吊りにしてあげるのも良いな。子宮だけで吊られるなんて、死ぬ程の激痛だろうからゆかりは喜んでくれるよね・・

斎藤はひまりの性器に口づけた時、顎にチクッと痛みが走った。

・・おっと、いけない。クリトリスに針を刺していたんだ・・

斎藤は自分の性器をしごいていた手を止めるとペンチを掴んだ。そして、そのペンチで針が刺さったひまりのクリトリスをギュッと挟む。ひまりのクリトリスは刺された針がぐにゃぐにゃに曲がり見るも無惨な姿になっていた。

・・ふふふ、もうこれでクリを切開しないと針を取り出せないな。無様なクリだな・・

斎藤はひまりのクリトリスを眺めながら、また右手で性器をしごき始めた。

「はっ、はっ、はっ、はっ」

斎藤の息が荒くなっていく。

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

ひまりの顔面に斎藤の白濁した精液が大量に飛んでいた。斎藤は、自分の放出した精液を性器の先でひまりの口や鼻、そして目にも入れていく。

・・ほら、顔も可愛くなったよ・・

斎藤は射精した事で少し理性を取り戻し、こいつの意識が戻っても逃げられないように縛っておこうと考えた。そして、ひまりの両足を左右に大きく開き、そのまま足首をロープで縛り太い木に縛り付け閉じられないように固定した。当然、両腕もまとめて縛り付ける。これで、ひまりが逃げようとしても逃げられなくされてしまった。

・・ふふ、さあゆっくり楽しみながらマンコを壊してあげるよ。マンコ、焼く前にビラビラを短冊切りにしてあげようかな・・

斎藤はステンレスのハサミを持って、シャキーンと開いた。

１４５、針鼠

１４５、針鼠

イチゴの処刑が執行されている。そこへ、全裸にされたイチゴの調教師が拘束されて運ばれてきた。調教師は〝人〟の字型に足を開脚されている。

「皆様、この調教師は拷問具以外に特殊な力を使用していたのがデータを精査した結果、判明致しました。そこで、この調教師も処刑致します。メス奴隷に矢が突き刺さる度に、この調教師のチンポに錘を追加していきます。この調教師のチンポが千切れるまで何キロ耐えられるでしょうかね。楽しみにして下さい」

「ふがあぁぁぁーーーーっ！」

調教師は塞がれた口で絶叫するが、処刑は滞りなく進行していく。すぐに最初の男が現れると弓を構えてイチゴの体に狙いをつけた。

パシュッ

放たれた矢がイチゴの体に向かって飛んでいく。

ドスッ！

「うぎゃあぁぁぁーーっ！」

悲鳴を上げたイチゴの臍（へそ）に矢が突き刺さっていた。そして、調教師の陰茎に錘が一つ吊るされる。

「ふぐぅっ」

調教師も悲鳴を上げるが、まだ３００グラムの錘が一つである。観客たちは早くもっと錘を付けるように射手を急かしていた。

「あれ、面白いね。オスのチンポって何キロくらい耐えられるんだろうね。私のクリやビラビラだったら、どれくらい耐えられるだろう」

「私、シム６９でマンコに錘付けてみたけど、クリには５００グラムで千切れそうに痛かったよ。でも、千切れてないからね。うーん、だから千切れるまでは3キロくらいいけるんじゃないかな」

「そうか、私もマンコに錘下げた事あるけど、重さ確認してなかったからね。でも、武田さんのその経験からいうと、オスの方が太くて大きいから１０キロはいけそうだね。あのオスのチンポに下げられた錘が一つ３００だとすると、３３個で約１０キロか。それじゃあ、早くあのメス奴隷に３３本矢を突き刺して欲しいね。オスのチンポ、千切れるところなんて滅多に見られないからね」

「うん、私も見た事ないよ。絶対見たいよね」

「そうそう、だからチンポ千切れるまではメス奴隷を殺さないように注意して欲しいよね」

Ｚクラスの生徒たちは、調教師の性器が千切れる様子を想像し興奮

して会話に花が咲いていた。そのうちに、イチゴの体にはどんどん矢が打ち込まれていく。

ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ

「あぶうぅぅーーーっ！」

心臓や頭、首等の急所を避けるようにイチゴの下腹部を中心に矢が打ち込まれる。恥丘、ビキニライン、太もも、イチゴの体は針鼠のようになっていった。

「あぶうぅぅーーーっ、ゆるじでえぇぇーーっ、もお、ごろじでぐだぢゃいぃぃーーっ」

イチゴはその激痛に早く楽になりたいと願うが、そんな事は許されない。少しでも長くイチゴを苦しめる為と調教師の性器を引き千切る為、矢は急所から外れた場所に打ち込まれる。そして、調教師の性器にも、もう１０個以上の錘が追加されていた。

「ふごうぅぅーーーっ」

調教師も涙を流し絶叫し続けている。

「すごーい、チンポあんなに伸びてるよ。面白いねえ。痛いのかなぁ。でも、もっと痛め付けてやりたいね」

桃子が興奮して叫んでいると、その声が聞こえたかのように鞭を持ったスタッフが現れ、調教師の性器に鞭を叩き込み始めた。

バシッ、バシッ、バシッ、バシッ、バシッ、バシッ、バシッ、バシッ

嵐のような激しい鞭に調教師の錘の下げられた陰茎は上下左右に激しく動き回る。

「んぐうぅぅーーーっ！」

調教師は天を仰いで絶叫していた。

「あははっ、惨めに泣いちゃって最高だよね。早くチンポ千切れないかなぁ」

あの怯えていた桃子とは思えない程、大瀧桃子は楽しそうに錘を付けられ鞭で打たれている調教師の陰茎を見てはしゃいでいた。その時、イチゴに向かって矢を放った射手が小さく呟く。

「しまった……」

矢を放った瞬間、手がぶれて狙いが狂ったようだった。矢は、イチゴの右胸の乳首を貫いて命中していた。

ゴバァァッ

肺を貫かれイチゴは激しく吐血するが、まだ生きていた。しかし、これでもうイチゴの命のカウントダウンは始まっていた。射手たちは自分の順番の時にイチゴが絶命しないように狙いもそこそこに素早く矢を放つようになっている。

ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ

1本の矢はイチゴの喉に突き刺さっていた。イチゴは声も出せなく

なり、更に血を吐き出した。次はイチゴの口中に矢が突き刺さった。頭の後ろまで矢が突き抜けていたが、延髄は損傷しなかった為、即死は免れていたが、イチゴにしてみれば、この一撃で死にたかっただろうと思われる。そして、右目にも矢が突き刺さる。眼球は破壊されたが、脳までは損傷しなかった。イチゴは、なかなか死ぬ事が出来ず地獄の苦しみを味わっていた。それは、調教師も同様だった。もう１０キロ近い錘を追加され、ブチブチと肉が千切れる音がする。

「ふごうぅぅうーーーーっ！！！」

調教師はもう大量の涙を流し絶叫し続けていた。鞭打つスタッフは手応えを感じたのか、更に激しく調教師の性器に鞭を叩き込んでいる。そして、ついに調教師の性器から血が噴き出した。

「ふがあぁぁぁーーーーっ！」

調教師の絶叫が響いた後、ブチブチと陰茎が千切れて宙に舞った。

「とうとう千切れたよ。気持ちいいねえ。あれ、なんかあの調教師、泡吹いて動かなくなっちゃったよ」

桃子が首を傾げるが、調教師は性器を引き千切られショックで死亡したようだった。

「なんだ、オスはだらしないね。チンポ千切られたくらいで死んじゃうなんて。メスならマンコ壊されても耐えるよね。そうだ、あの千切れたチンポもこのお食事券で食べられるのかな」

桃子は商品として貰ったお食事券を確認していた。そして、イチゴを狙う射手は、もう調教師の性器が千切れたので、更に早く矢を放

ち自分のところでイチゴが絶命しないようにしていたが、もうイチゴの命は耐えられなかった。イチゴの右目に2本目の矢が突き刺さったところで心電図のモニターがフラットになっていた。イチゴは、まるで針鼠のように全身に矢を打ち込まれ息絶えていた。

★★★★

斎藤は、拘束したひまりの頬を叩き目覚めさせていた。

「ほら、起きろ。これから君のマンコを破壊するんだ。早く起きて泣き叫んでくれ。一度しか経験出来ないマンコ処刑だぞ。早く起きないと後悔するぞ」

斎藤がパンパンとひまりの頬を叩いていると、うーんとひまりが目を覚ました。

「マンコと乳首、痛い……」

ひまりは覚醒した瞬間、針を刺されている乳首とクリトリスの激痛に涙を流していた。

「ふふ、これから君のマンコ処刑を執行する。望み通り完全に壊してあげるからね。まずは君のマンコのビラビラを短冊切りにしてあげる」

斎藤はハサミを開いてひまりの左の小陰唇を伸ばすと、その中央にハサミの刃を当てた。

「あうっ、あうっ、あうっ、あうっ」

ひまりはガタガタ震えながら頭を上げ自分の股間を見つめている。

「中学生でマンコ壊されるなんて最高だろう。思う存分泣き叫んでね」

斎藤は、もう我慢出来ないと、ひまりの小陰唇を挟んだハサミを閉じた。

ジャキーン

「あびゃあぁぁぁーーーっ、いだいぃぃぃーーーっ、ゆるじでえぇぇぇーーっ！！」

ひまりの絶叫が響き渡っていた。

１４６、裁断

１４６、裁断

ジョキーーン

「うびゃあぁぁぁーーーーっ、ゆるじでえぇぇぇーーっ！」

無慈悲にハサミが閉じられ小陰唇の中央から切断されたひまりは絶叫していた。本当に性器を壊される。その取り返しのつかない恐怖と激痛にひまりはまるで罠に捕らわれた獣のように暴れていた。しかし、厳重に拘束された体は戒めから抜け出す事は出来ない。

「だれがあぁぁっ、だじげでえぇぇーーーっ」

ひまりは、あまりの恐怖と激痛に必死に体を動かし助けを求めている。

「どうだい、本物のマンコ処刑は……。君のその絶叫が聞きたかったんだ。想像通り、いい声で泣くね。また、興奮してくるよ。まだまだ、マンコの処刑は始まったばかりだからね。もっともっと泣き叫んで下さいね。あぁ、遠慮しないでおしっこやウンチ漏らしていいからね。そうだな、早く漏らしてくれた方が良いかな。おしっこの穴も、おしりの穴も壊しちゃうからさ」

斎藤はギラギラした目でひまりの性器を見つめている。そして、切

断した部分より5ミリ程ずらして、またハサミを小陰唇に当てた。

「いやぁぁぁっ、ゆるじでえぇぇぇーーっ、おねがいじまぢゅうぅぅうーーーーっ！」

ひまりは子供のように号泣しながら許しを求めていた。しかし、斎藤はハサミに力を込め閉じていく。ひまりは小陰唇を短冊切りにされる恐怖から尿を漏らし失神してしまっていた。

・・ふふ、こんな事で失神してしまうとはトーナメントに出場していたら、呆気なく敗退してしまっていただろうな。でもここはトーナメントではない。失神しようが構わない。君のマンコは徹底的に壊してやるよ・・

斎藤はゾクゾクした気分に体が震えていた。

・・ふはは、最高の気分だよ。メスのマンコを完全に破壊する。これほど、興奮するものはないだろう・・

斎藤は残虐な顔でひまりの性器を破壊する為、手に力を入れていく。その時、斎藤の首筋に冷たい物が当てられた。首にチクッとした痛みがある。

「そこまでにして貰おうか」

恐ろしく冷たい声が耳元で囁かれた。斎藤は硬直したように動きを止めていた。その冷酷な声が、もし動いたら容赦なく首を刈ると本気で言っている事を瞬時に悟ったからであった。

「よし、そのまま動かずにいろ。このメスは大切なメスだ。これ以

上、傷つける事は許さん。商品価値が下がってしまうからな」

斎藤は、ここで葉月の顔が頭に浮かんだ。

・・くそっ、ゆかりに続いてこのメスも豪徳寺に持っていかれるのか。いや、待てよ。豪徳寺なら手に入れたメス奴隷を再販したりはしない。自分で処刑して楽しむだろう。という事は、他の者がこのメスに目を付けていたのか・・

斎藤は、何か手はないかと考えるが首に凶器を突き付けられたこの状態では素直に指示に従うより他なかった。

「お前もなかなかの奴だな。メスのマンコを躊躇なく壊して興奮するとはな。その気持ちは分かるが、私も仕事なので見過ごすわけにはいかない。お前に、その気があるのなら今度、私のマンコを壊させてやろう。私の名前は〝M〟。その名の通りのマゾだ。私は性交などには興味がないが、マンコを壊される事には大いに興味がある。幼い頃から、そればかり妄想してきたからな。こんな仕事をしているのも、いつか捕まってマンコを処刑されるのではと期待しているからだ」

ここで〝M〟は、ふうーっと一息ついていた。斎藤の性器に冷たい感触があった。何かを性器に押し付けられたようだった。

「仕事でなければ私もこのままマンコを壊されていくこのメスを一緒に見ていたかったが仕方ないですね」

耳元で〝M〟が囁いた次の瞬間、バリッと斎藤の性器から電流が流されていた。斎藤の性器に当てられていたのは強力なスタンガンだったのだ。斎藤の意識は闇に沈んでいった。

★
★
★
★

ひまりが気が付くと、そこはシム６９のステージ１勉強部屋の中だった。今までの事は自分の夢だったのかと思ったが、胸と股間に包帯が巻かれているのを確認し、現実に起こった事だと認識していた。

・・私、本当にマンコ処刑されていたんだ。途中で気絶しちゃったけど、私もうマンコ壊されちゃったのかなぁ・・

ひまりは途中で気絶してしまった自分が情けなかった。

・・もう壊されちゃったなら私、肝心のところ何も憶えていない。せっかく、マンコを処刑して貰ったのに何も憶えてないなんて最低だよ。でも、マンコの外側はズキズキと痛むけど、マンコの中は痛くない。何かはさまっているような気分がするだけ。これは犯して貰ったからだと思うけど、まだマンコの穴と子宮は壊されていないのかな・・

ひまりは包帯の上から自分の性器に触れてみるが、クリトリスと小陰唇に痛みを感じるだけで、それ以外に痛みを感じる事はなかった。そして、ひまりは自分の横に置いてある豪華な装飾がされた封筒が目に入った。

・・なんだろう・・

ひまりは封筒を開けてみると中から〝特別優待券〟と書かれたチケットと１枚の便箋が出てきた。その便箋を読み、ひまりは興奮して

いた。便箋には、シム６９がグランドオープンした際、ステージ１を飛ばしてステージ２から開始する事が出来ると記載されていた。

・・ステージ２は６９番がメス奴隷になっていく体験だよ。６９番はここで歯を全部抜かれたり、ピアシングされたり、焼き印を捺されたりするんだよね。嬉しい。すぐにそこから始められるんだ・・

ひまりは優待券をじっと見つめ、シム６９のグランドオープンを待ちわびていた。

★
★
★
★

会場ではイチゴと調教師の処刑の後片付けが行われていた。そして、綺麗にされた会場に拘束された栄子が運ばれてきた。イチゴや調教師の処刑を目の当たりに見た栄子は、これからいよいよ自分の処刑が開始されると思うと表情が強張っていた。

「ふっ、ふっ、ふっ、ふっ、ふうぅっ」

栄子の荒い鼻息は観客席で見守るつぐみたちにも聞こえていた。

「見て、あの吉川の顔。みっともないねぇ。自分で処刑されたいとか言っておきながら恥ずかしいよね」

「え、栄子ちゃんでも、あんな顔するんだね。でも良いねぇ。なんかあの顔見ると笑っちゃうね。いつも偉そうにしてるのに、いい気味だね。夢ちゃんや詩織ちゃんの時は、どうしようって怖かったけど、栄子ちゃんは早く処刑して欲しいな。思い切り苦しむようにね」

笑顔を見せている桃子を見て真由子は、最初に桃子に抱いた印象とはまるで違うと感じていた。

・・あの怯えた表情から本当にZクラスの生徒なのかと思ったけど、やっぱり本当に間違いなくZクラスの一員だったんだ・・

真由子は、桃子を大いに見直していた。

★
★
★
★

「ブス、出番ですよ。ペナルティとはいえあくまでお客様ですからね。殺してはダメですよ。マンコ壊すくらいにしておきなさい」

葉月はブスに向かって注意していた。もちろんブスも心得ている。こんなトーナメントを観戦に来ている変態の客である。機会があれば自分の性器を壊されたいと考えているだろう。でも、変態とはいえメス奴隷ではない素人だ。ショック死しないように加減して性器を破壊する必要がある。ブスは考えながら葉月に連れられて会場に向かって行った。

１４７、出陣（前書き）

今回、カニバリズム展開がありますので苦手な方はスルーして下さい。
というか、最近ちょこちょこカニバリズム要素出てきて苦手な方、申し訳ないです。

１４７、出陣

１４７、出陣

「それでは拘束させて貰いますよ」

沙也加は、イチゴに向かって最後に矢を放った観客の女を拘束していた。隣でその様子を見ていた栄子は、その客が狙ってイチゴを射殺したのだと思っていた。その客がイチゴを狙っている顔が、明らかに殺意が籠っていた。あの客はイチゴを殺し、わざとお仕置きを受けようとしたのだと思っていた。

・・きっと、あの女も大勢の観客の前でお仕置きされる事に興奮しているんだよ。でも、残念。ここにいる大勢の観客は処刑される私の方に注目する。お仕置きより処刑の方が面白いからね。それに私の方が全然若い。若いメスが処刑されるんだから、みんな私から目が離せないよ、きっと・・

先程まで処刑される恐怖で精神が押し潰されていた栄子は、隣の女の姿を見て多少余裕を取り戻していた。そこへ葉月に連れられたブスが登場してくる。観客の目は一斉にブスに注がれていた。

「えっ、愛犬ブスって、あの綺麗なメスの事なのか。確かに尻尾ついてるし四つん這いで首輪に引かれてるし……」

「あれなら私も飼いたい。売ってくれないかしら。メス奴隷は買え

ないけど、メス犬なら買えそうな気がするけど、高いのかなぁ」

「葉月様が飼っているんだから、血統書付きのメス犬だろう。高いに決まってるよ」

「あの犬、進行の人を助けてた犬だよね。結構使える犬みたいだから、あんな犬に懐かれてみたいなぁ。可愛いでしょうね」

ブスを見た観客は様々な感想を述べていたが、それが耳に入った沙也加は、メス奴隷以外にもメス犬も商売になるかもと考えていた。

「時間も押して参りましたので、愛犬ブスによるお仕置きと処刑を開始します。あなた、お名前は？」

沙也加は拘束されている女に名前を訊くと、貴子ですと答えていた。

「それでは、貴子へのお仕置きと、栄子の処刑を開始します。始めっ」

沙也加の合図で鎖を離されたブスは一直線に貴子に走っていき、いきなり貴子の股間を爪先で蹴り上げた。

ドスゥウッ

「あびゃあぁぁぁーーーっ」

貴子が天を仰いで絶叫する。貴子の股間、膣に深々とブスの爪先がめり込んで血が滴っている。ブスは絶叫する貴子に構わず、貴子の性器に何度も蹴りを入れていた。そして、隣では栄子の処刑も開始されていた。点火され青い炎が噴き出すガスバーナーを持ったスタ

ッフが、お食事券を獲得したお客を呼んでいる。スタッフは、これから目の前で小陰唇の串焼きを調理し召し上がって頂きますと説明していた。

「タレと塩、どちらが良いですか?」

スタッフの問いに桃子は、タレと答えていたが、もう一人のお食事券を持つお客は、塩と答えていた。

「かしこまりました。新鮮なまま素材を活かしたいので、このまま調理しますね」

スタッフは栄子の左右の小陰唇を伸ばすと串を打っていき、片方の小陰唇には塩を振るとバーナーの炎で炙り始めた。

「あぢゃあぁぁぁぁーーっ、ゆるじでえぇぇぇーーーっ」

栄子は涙と鼻水を垂らし絶叫するが、スタッフは淡々と調理を進めていく。焼き上がった片方の小陰唇を根本から切断するとお客に差し出していた。栄子は自分の小陰唇が食べられていく様子を涙で滲む目を大きく見開いて見ていた。スタッフはもう一枚の小陰唇も切り取りタレにドプッと浸けると桃子に差し出した。桃子は串を受けてると嬉しそうにかぶりついていた。

「美味しいっ。臭いかなと思ったけど美味しいです」

桃子は嬉しそうに感想を述べていたが、観客席ではつぐみと真由子が悔しそうに桃子を眺めていた。

「大瀧の奴、一人で美味しそうに食べちゃって。後で食堂でお腹い

っぱい食べさせて貰うから」

「ホントですね。いい匂いがこっちまで漂ってきてますよ。羨ましいです」

夢中になって小陰唇串を食べている桃子は二人の視線にまるで気付かなかった。スタッフは次に栄子の乳首に串を打っていた。

「いだあぁぁぁーーっ」

栄子が悲鳴をあげるが、スタッフも桃子たちも気にもせず、早く次の料理を急かすような目で乳首を見つめていた。スタッフは串を打った栄子の乳首の根本をハサミで挟むと、ジョキッと切断した。

「あびゃあぁぁぁーーーーっ、だぢげでえぇぇぇーーっ！」

栄子は無様に泣き叫ぶがスタッフはもう片方の乳首もあっさりと切断してしまう。そして、手早く炭で焼いていく。観客席にも香ばしい匂いが漂うが、観客たちは自分が食べられない料理を見るよりも、ブスによるお仕置きの方に注目していた。栄子の思惑はまるで外れ、栄子の処刑を観ているのは同じZクラスのつぐみと真由子くらいであった。哀れな事に栄子は最後の処刑でさえも注目を浴びることなく寂しく絶命していくのである。

「うぅぅっ……」

ズキズキ痛む性器と胸の痛みに耐えながら栄子は、誰も注目してくれない自分が悲しくて号泣していた。だが、そんな栄子の気持ちに関係なく処刑は進行していく。次は栄子の胸の膨らみの下に肉切り包丁の刃が当てられた。どうやら、そのまま栄子の胸の膨らみを切

除するようだった。

「うびいいいいーーーっ」

それを察した栄子は一際高く泣き出したが、スタッフは構わず包丁に力を入れていく。

スパッ

「ふげえぇぇぇーーーーっ！！」

再び栄子の絶叫が響くが、もう栄子を見る人もいなかったが、栄子の乳房は丸ごと切除され鉄板の上にべちゃっと置かれる。そして、もう一つの乳房も切除され鉄板の上にのせられた。二つの胸の膨らみを切除された栄子は胸に焼きごてが当てられ止血されていた。鉄板の上では栄子の乳房がいい音を立てて焼かれている。そして、焼き上がった乳房をスライスすると皿に乗せ二人の前に置いていた。

「今度は量も多く脂っこいと思いますので飲み物を用意しますね」

スタッフは電動ドリルで栄子の恥丘に穴を空けていた。

キュイーーン

「あばばばばばばばばばっ、あっばあぁぁぁぁっ」

栄子の恥丘に穴を空けたスタッフは、そこにコックを差し込むと、コックを捻る。するとコックから栄子の尿が流れ出てきた。スタッフは硝子製のグラスでそれを受け、氷と炭酸水を入れカボスを添えて二人の前に置いた。

「どうぞ、メス奴隷の尿の炭酸割りカボス添えです」

桃子は早速口をつけ、感激していた。

「美味しいーっ、おっぱいの鉄板焼きは脂っこいけど、おしっこの炭酸割りはカボスの風味もあってさっぱりして美味しいです」

桃子の食レポのような解説に、つぐみと真由子はよだれを垂らしていた。

★
★
★
★

天美は、シム６９の部屋から出て受付で退室時の会計をしていると、少々お待ち下さいと言われ、受付のソファに座っていると、赤いスーツを着た目付きの鋭い女性がヒールの音を響かせてやって来た。

・・豪徳寺に似ている・・

天美は一瞬緊張したが、ここの経営には葉月は関与していないと調べてある。おそらく、こんな仕事をしていると見た目が似てくるのだろうと考え、そもそも葉月は私の顔を知らないと安堵していた。しかし、天美はブスの存在を知らないという致命的な過ちを犯しているが、確かにこの時点では百目鬼は天美を知らなかったのである。

「本日は御利用下さりありがとうございます。プレオープンで高得点の方には特別優待券を差し上げております。よろしければ御利用下さい」

赤いスーツの百目鬼の言葉で天美は喜んで優待券を受け取っていた。

１４８、完食　ミアンＶＳエム（前書き）

タイトルからも分かるように今回もカニバリズム要素あります。苦手な方は飛ばして下さい。
よろしくお願い致します。

１４８、完食　ミアンＶＳエム

１４８、完食

栄子は食材とされ、桃子たちに食べられていた。しずくはその様子をモニターで視ながら、自分が友人である茜を食べてしまった事を思い出していた。

・・私は知らないで料理された物を食べてしまったけど、あの人たちは目の前で調理されている料理を平気で食べている。私とは違う意味で、頭がおかしいのは間違いないよ・・

しずくは、傍から見たらどちらの方が頭がおかしいと思われるのだろうと考えていた。栄子はもう下腹部も正中切開され、子宮や膣、卵巣も取り出され調理されている。

「ああ、もうお腹いっぱいになってきちゃった」

桃子がお腹を擦りながら呟くのを聞いて、もう一人女も自分ももう満腹だとお腹を押さえていた。それを聞いたスタッフは、それでは最後に一品お出しして、残りは冷凍保存しておきますと笑顔を見せていた。ここにきて隣で行われていたお仕置きは終了していたので、栄子の処刑への視線も集まってきていた。栄子は最後の最後で大勢の注目を浴びる事が出来たのである。とはいえ栄子本人はそれを意識出来ていたのか疑問であるが、再び会場の視線は栄子に集まっていた。その栄子の頭にバリカンが当てられ髪の毛が剃られていく。

そして、丸坊主にされた栄子の頭にぐるりと線が引かれていく。栄子は自分がもう何をされているのか分からないかの様に虚ろな瞳であらぬ所を見つめていた。

「ああ、大瀧の奴羨ましいな。たぶんあれ脳ミソ料理だね。脳ミソのソテー辺りかな。クリーミーな味わいらしいけどね。私はまだ味わった事がないんだよ」

「えっ、私も食べた事ないです。一人で贅沢しちゃって、後で絶対食堂で大瀧さんに奢ってもらいましょうね」

つぐみと真由子は観客席から桃子の姿を羨ましそうに眺めていた。そのつぐみの予想通り電動ノコギリで栄子の頭蓋がぐるりと切断され、カパッとまるで蓋を開ける様に栄子の頭頂部が外された。栄子の脳が剥き出しになる。スタッフは慎重に手を入れ、栄子の脳を崩さないように取り出していた。

「ひょおぉぉぉーーーーっ」

栄子の口から笛のような声が出る。それが栄子の最後の言葉だった。脳を摘出された栄子は、もう物言わぬ物体になっていた。スタッフは取り出した栄子の脳をフライパンでソテーし、お皿に盛り付け二人の前にどうぞと置き、栄子の身体が傷まないように冷凍庫にすぐ運ぶように別のスタッフに指示していた。こうして栄子は脳を摘出され完全に絶命させられ、その身体は食材として保存される。しかし、栄子が注目されていたのはそこまでで、栄子の処刑が終了すると観客たちは早くも次の対戦が始まらないかと、もう話題は移ってしまっていた。

★
★
★
★

栄子が絶命する前、ブスはイチゴに止めを刺した貴子という観客にお仕置きを与えていた。貴子の股間に蹴りを何度も打ち込み、性器をぐちゃぐちゃにした後に、今度は貴子の性器に鋭い手刀を突き挿れていた。

ドスゥッ！

「あひゃあぁぁぁーーーっ」

それは貴子の身体が浮き上がる程の衝撃で、貴子の膣にブスの肘までめり込んでいた。ブスはそのまま貴子の膣内で拳を硬く握りしめると一気に拳を抜いていた。

ズボゥッ！

「あぶうぅぅぅーーーっ」

貴子の膣が壊され、激しく血が流れ出していた。貴子の身体はガクガクと震えている。

「ひひっ……」

ブスは、もう一度手刀を突き挿れ貴子の子宮も破壊しようとしたが、もう時間でもあるしと自制していた。葉月はそんなブスの姿を見て、疑問が湧いていた。

・・これ程優秀で自分の行動もしっかり制御出来るブスが、なぜ私

に向かって攻撃を仕掛ける事なく屈服したのでしょうか・・

ブスは葉月に正体を見破られた時、あっさりと土下座して葉月の足を舐めていた。葉月自身は疑問に思っているようだが、それは葉月の持つカリスマ性に、魅了されてしまったからに他ならない。ブスは自分の一族弥勒院よりも敵対勢力である豪徳寺に惹かれてしまったのだ。その事がブスの運命も劇的に変えてしまった。ブスは、今までにない程幸せな気持ちに包まれているのは間違いなかった。

★
★
★
★

「アサヒ君のいたこの世界ってのも普通ではないのりゃ♡この世界にも暴食の魔王が潜んでいりゅのかにゃ♡フェルガナと違ってメス奴隷の解体ラインはないりょうだけど、好んでメス奴隷を食べる者はやっぱりいるんだ♡違う世界で同じ文化があるのは非常に興味深いよ♡そのうちレインみたいな人間が現れて解体ラインも作っちゃうのかにゃ♡」

「先生、物騒な事言わないでね。これ一般的じゃないから。特殊な例だからね。勘違いしないでね」

「うむ、もう待ちきれないりょ♡こんなのばかり観てたら全部オマンコから水分出ちゃって干からびてしまうりょ♡」

「せ、先生、我慢我慢。次は俺たちの出番の筈ですから……」

アサヒがミアンを宥めていると控え室にスタッフが、メス奴隷ミアン出番ですと呼びに来ていた。

「ほら、先生……。じゃない、ミアン。いきますよ」

アサヒはミアンの首輪に付いた鎖を引き立ち上がったがミアンはそのまま腰が抜けたように動こうとしなかった。

「らめ、これからオマンコ壊されると思うと興奮して動けないりょ♡りょうしりょう♡」

ミアンの座っている周りには、まるで漏らしたように水溜まりが拡がっていた。

★　★　★　★

「続きましてBブロック二回戦、メス奴隷ミアン対エムの対戦を開始します。メス奴隷入場」

沙也加のアナウンスで観客席が、また大いに盛り上がっていた。

「いよいよ最後にAシード、ミアンの登場だ。俺はAシードの中ではミアン推しだからな。ミアンの処刑されるところを視たいけど、勝ち残ってくれないと詰まらないからな。勝って欲しいよ」

「まあ、順当にいけばAシードのミアンの勝ちだと思うけど、問題は調教師ね。エムの調教師は一回戦を勝ち抜いてきてるから経験があるけど、ミアンの調教師はこれが初戦になるから拷問具によっては不利な状況になる事も考えられるわよね」

「それでも勝つのはミアンでしょう。シードに選ばれている以上、おそらく気絶なんかしないわよ。それこそ処刑されるくらいじゃないとね。だから、勝つのはミアンだと思うわ」

観客たちの予想は圧倒的にAシード、ミアンの勝利に傾いていた。ミアンはそんな観客の前を堂々と胸を張って歩いていく。

「あはは、無い胸を精一杯張って可愛いなミアンちゃん」

「一本筋の割れ目も本当の幼女みたいね。あぁ、もうあの割れ目、壊したくなってくるわ」

観客の視線はミアンに集中してしまい、アサヒはその視線の多さに戸惑っていた。

・・け、けっこう緊張するな、これ……・・

アサヒは緊張しているがミアンは早く対戦が始まって欲しいとウズウズし性器を激しく濡らしていた。そして、沙也加がルーレットを回し、玉を入れる。玉は勢いよく転がっていた。

１４９、爆弾

１４９、爆弾

対戦で使用する拷問具を決定するルーレットの回転が止まった。転がっていた玉はポトリとマスに落ちていた。沙也加は覗き込むように玉が落ちたマスを確認する。そして、ほうという顔になった。

・・本当にこのトーナメントは公正だ。これなら、どちらが勝利するのか、まるで分からないですね・・

沙也加は感心しながら右手を上げアナウンスする。

「今回は〝爆弾〟です」

沙也加の言葉に観客席でどよめきが起こった。

「爆弾？爆弾でどう勝負するのかイメージ湧かないな。処刑なら分かるけど」

「メス奴隷の手足、吹き飛ばして耐えさせるのかしら……。処刑する前に死んじゃいそうだけど」

「処刑でマンコ吹き飛ばすなら分かるけど……。ダメ、全然思いつかない」

観客たちは戸惑いながら沙也加の説明を待っていた。

「勝負の方法は簡単です。お互いのメス奴隷のマンコの穴に爆弾を詰めて頂きます。そして、導火線に点火して貰います。ここからが勝負です。この導火線の火をメス奴隷はおしっこで消して貰うのですが、火を消した時に残っている導火線の短い方が勝者です。分かりますか。つまり、爆弾が爆発するギリギリまで導火線の火を消さずにいた方が勝者となります。とはいえ、いきなり本番で失敗して2匹共にマンコを爆破してしまったら、引き分け再勝負が難しいですから、練習として2回程チャンスを与えます。練習は爆竹1本をマンコの穴に挿れ行います。爆竹1本ですから、それほどダメージを受ける事はないでしょう。もちろん、それなりの苦痛はあるでしょうがね。この練習で各調教師が合図を出すタイミングを掴んで下さいね」

沙也加の説明でアサヒは、なんて事を考えているんだと内心、運営に怒りを感じていた。

「それでは、各自メス奴隷を拘束して下さい。良いですか、この拘束も調教師の腕の見せ所ですよ。メス奴隷がギリギリで導火線の火を消しやすいように考えて拘束する必要があります。では、爆竹と水を取りに来て下さい」

沙也加はアサヒとエムの調教師に、それぞれ2本ずつの爆竹とペットボトルに入ったミネラルウォーターを与えていた。

「練習は自由に開始して構いません。水も飲んでおいた方が良いですよ。本番でおしっこが出なければ負け確定してしまいますからね。まあ、私やお客様にすれば、おしっこ出なくてマンコが爆発した方が楽しいですけどね。マンコ爆破されて無様に失神しているメス奴

隷の姿を眺めるのも良いものですからね」

アサヒは最初、ミアンを開脚逆さ吊りにしていた。これで放尿すれば噴水の様に尿が噴き上がり導火線の火を消せると考えたからだ。さっそくアサヒは試してみる事にした。ミアンの膣に爆竹を挿れ導火線を伸ばす。導火線は規定で膣口から3センチは真っ直ぐ伸ばし、そこから先は自由に出来る。導火線の長さは2メートルだ。アサヒはミアンに放尿の準備はいいか確認して導火線に点火した。

シューッ

導火線がどんどん短くなっていく。アサヒは導火線が短くなっていく速度も頭に入れていた。ミアンが放尿するまでのタイムラグも考慮しなければいけない。そして、アサヒはミアンに合図を送る。

「今だっ、ミアン」

プッシャーッ

ミアンの尿道から尿が噴き出し、導火線の火を消していた。だが、燃え残った導火線の長さは３０センチもある。もっと短くなるまで合図するタイミングをずらさないと負ける可能性が高い。アサヒが隣で練習しているメス奴隷を見ると、メス奴隷は逆さ吊りではなく開脚して立った姿勢〝人〟の字型に拘束されている。そして、残った導火線の長さは遠目に見ても自分たちより短いのは明らかだった。

・・いけない、このままでは負ける。もっとギリギリまで合図を遅らせないとダメだ。でも、練習はあと一回だけ、それでタイミングを掴まないといけない・・

アサヒは、これはメス奴隷の勝負というよりも調教師の勝負ではないかと考えた。いくらメス奴隷ミアンが優れていても、調教師としての自分は経験がない。

・・あの調教師は、長い事調教師を続けてきたのだろう。その経験は俺とは比べ物にならない・・

アサヒはすっかり自信喪失していた。一方、エムの調教師は内心笑みを浮かべていた。

・・メス奴隷の耐久力が試されるような勝負だったら、Ａシードのメス奴隷には敵わないだろうが、これなら充分勝機はある。爆竹でマンコ爆破の調教は俺もエムも経験してるからな。本番は爆竹の代わりに爆弾なのは緊張するが、俺とこいつなら大丈夫。ギリギリまで耐えて勝ってやる。俺たちがＡシードのメス奴隷に勝利するんだ・・

エムの調教師は自信に溢れていた。その姿を見たアサヒは更に自信を失っていく。その時、ミアンがこっちに来いと目で合図していた。

「何をビビっているのら♡君は私の教え子だろう♡私を信じなさい♡私は楽しくて仕方ないのら♡」

アサヒは、ミアンのその姿に驚愕していた。

・・そうだ、思い出した。ミアンは俺の先生だ。先生は、どんな時でも生徒の事を考えてくれた。先生は俺の成長を期待しているんだ・・

アサヒは覚悟を決めた。

・・俺たちが負ける訳にはいかない・・

先程まで自信を失って俯いていたアサヒの姿はもうなかった。

★　★　★　★

斎藤は気が付くと懐かしい感じのする部屋の中にいた。子供の頃の勉強部屋みたいだなと思いながら辺りを見回し、そこでハッと気付いた。

・・ゆかりの部屋……。これが〝シム６９〟というアトラクションの中なのか・・

部屋の中は細部まで再現されているようだ。それはまるで本物のようだった。いや、全てが再現されているなら、これは本物と云えた。斎藤が感慨に耽っているとドアが開いて赤いスーツの女が入って来た。

「こんにちは、初めまして。私はこのアトラクションの責任者、百目鬼と申します」

百目鬼は部屋に上がると斎藤の前にまるで無防備に座っていた。斎藤は、この女を殴りとばし尋問しようかと一瞬考えたが、飛びかかりかけて動きを止めていた。隙があるように見えて、百目鬼という女からは葉月のような恐ろしさを感じたからだった。この斎藤の判断は正しかった。ここで斎藤が飛びかかっていたなら、斎藤の人生は終わっていただろう。斎藤は九死に一生を得たと云えた。

「私は斎藤といいますが、私はどうしてここにいるのでしょう?」

斎藤は何者かに気絶させられた事を思い出していた。

「それより、まず確認させて下さい。あなたは調教師という事で間違いありませんか」

「ええ、その通りです」

斎藤は、調教師などこの世界に数え切れない程いるだろうと思いながら百目鬼の質問に答えていた。

１５０、優遇

百目鬼は斎藤を見つめ話し出した。

「あなたが気を失っている間に多少調べさせて貰いました。それで実はあなたに相談がありまして、うちのこのアトラクションに調教師として手を貸して貰えませんか。勿論、待遇についてはご要望に沿うようにと考えております。具体的には、うちのスタッフに指導して貰いたいのですよ。おかげさまでプレオープンが好評なのでオープンを早めたいと思っていますが、指導するスタッフの数が不足しておりまして、そこであなたの力を貸して頂ければと思った次第です」

「なぜ、僕なんですか？優秀な調教師は他にも大勢いると思いますが」

斎藤は自分が選ばれた理由が分からずにいたが、百目鬼は明瞭に説明する。

「まず、あなたは、ある所で行われているメス奴隷処刑トーナメントに参加されていましたよね。それが理由の一つ。あのトーナメントに参加出来るくらいですから調教師としての腕は信頼出来ます。そして、もう一つの理由はあなたが〝渡邉ゆかり〟に執着していると分かったからです。この部屋を見て貰っても分かるように、ここ

はご存じでしょうけどメス奴隷〝渡邉ゆかり〟の生涯を体験するアトラクションです。そのステージ2を担当するスタッフの教育とステージ3を担当して頂きたいのですよ。ステージ3豪徳寺邸の意味はあなたなら分かりますよね。ステージ2でメス奴隷に堕ちた〝渡邉ゆかり〟がもう普通の生活は不可能な完全なメス奴隷にされるステージ3。あなたにはオープン後は、このステージ3を任せたいと思います。あなたが処刑しようとしたメス〝水澤ひまり〟に優待券を贈ってあります。あのメスは間違いなく、このアトラクションにまた訪れるでしょう。そして、あのメスはステージ3に進んでいくでしょう。あなたが協力してくれれば、この水澤ひまりを差し上げますよ。今度は誰も邪魔しませんよ。あのメスをあなたの好きなように処刑出来ます。どうですか」

百目鬼の言葉に斎藤は心を動かされていたが、あのメスを処刑出来る。しかし、斎藤はそれなら何故あの時邪魔されたのか納得出来なかった。

「いや、でもあの時僕の邪魔してきたのは、あなたたちではないのですか」

「それは、あの時はあなたと渡邉ゆかりが関係あるとは思わなかったですからね。あのメスは有望なメスだったので高額で取り引きされるのは間違いない。私にとって上客が既に目を付けていましたので、商品に傷をつけられないよう気をつけていたのですよ。ただし、あなたが引き受けてくれるならば、その上客には私の方で話をつけましょう」

「その上客というのは、まさか豪徳寺葉月ですか」

「ええ、そうですよ」

百目鬼は軽く答えたが、斎藤には信じられなかった。あの豪徳寺葉月が自分で目を付けた物を諦める筈がないと思い、百目鬼に念をおす。

「僕の知る豪徳寺葉月であれば、それはあり得ないですね。ですが、もしあのメスを僕が自由に出来るなら、喜んで協力させて貰います」

「心配は要りませんよ。私と葉月は友人です。私は、もう1人優待券を差し上げたメスがいます。そのメスを葉月に無償で献上します。それで葉月も納得してくれるでしょう」

自信たっぷりに言う百目鬼に、斎藤は協力を了承していた。

・・今度こそ、あのメスを処刑出来る。あのメスのマンコを徹底的に壊して、最後はゆかりのように脳を犯してやる・・

斎藤は、ひまりを処刑する時の様子を想像し、性器を硬く勃起させていた。

★　★　★　★

アサヒが観察していると、エムの方は導火線をかなり短い位置で消す事に成功していた。だが練習と本番は違う。爆竹ならば失敗しても多少のダメージで済むが、本番の爆弾であれば性器が無事で済む筈がない。そのプレッシャーの中でメス奴隷が普通に放尿出来るとは思えなかった。アサヒはミアンの膣に爆竹を挿れ、最後の練習を行う。

・・導火線の燃えるスピード。それに僕が合図してからミアンが放尿するまでのタイムラグ。それを見極めないと・・

アサヒはそんな事を考えながら導火線に点火した。

シューッ

導火線が短くなっていくが、まだエムに比べたら長過ぎる。ギリギリまで待ちアサヒは合図した。

「今だっ、ミアン」

ここでミアンが放尿すればエムよりも短い位置で導火線が消える筈だった。しかし、ミアンの尿道から尿の出る気配はない。

「あひゃ、あひゃ、あひゃ♡」

ミアンはアサヒの声が聞こえていなかったのか、逆さに吊られたまま興奮しているようだった。

・・不味い……。早く、ミアン・・

アサヒは再び身振りも交えて合図するが興奮したミアンは気付いていないようだった。

パーンッ

「あひゃぁーっ♡」

鋭い音がしてミアンの膣内で爆竹が破裂していた。ミアンの膣から白い煙が上がっている。アサヒは慌ててミアンに駆け寄るが、ミアンは今頃になって尿道から潮を噴き出し、体をビクンビクンと痙攣させていた。

「それでは、双方練習が終了したようなので、これから本番を開始します。本番では爆竹等という子供の玩具ではなく強力な爆弾を使用します。万が一失敗したら、お客様には被害が及びませんが、メス奴隷のマンコは吹っ飛ぶでしょうね」

沙也加はそう言いながらアサヒと調教師に小型の爆弾を手渡していた。小型といっても直径5センチ、長さ15センチある爆弾だ。それを膣内にセットされるメス奴隷の恐怖は並大抵のものではないだろう。その爆弾を見たメス奴隷エムはガタガタ震えだしていたが、調教師は慎重にエムの膣に爆弾を押し込んでいた。そして、すっぽりと爆弾をエムの膣に挿れてしまう。沙也加は2匹のメス奴隷にきっちりと爆弾が装着された事を確認すると残酷に笑っていた。

「それでは準備が整いましたので、メス奴隷ミアン対エムを開始します。点火っ」

ミアンとエムの膣に挿入された爆弾の導火線が同時に点火された。

シューッ

導火線はどんどん短くなっていく。アサヒと調教師は真剣な顔で導火線を見つめていた。

★　★　★　★

食堂の戻ってきたブスは皆に暖かく迎えられていた。

「ブス、俺のとこで一緒に調教師やらないか」

「私の方が良いよね、ブス」

クラヤミと花梨がさっそくブスの争奪戦を始めるが、葉月がバシッと拒絶する。

「前にも言いましたがブスは私の愛犬です。譲る気などありませんよ。諦めなさい」

どうやら葉月もブスの事がお気に入りのようで、希少なメス奴隷のクリトリスの串焼きをブスに与えていた。そして、ブスから話を逸らすように話題を変える。

「ところで皆さん、この勝負はどちらが勝つと思いますか」

葉月はモニターを見ながら言うが、クラヤミはその隙にブスをもつ煮で呼び寄せていた。

「なんだ、ブス。身体が汚れてるじゃないか。お仕置きした後は身体を洗わないとな。豪徳寺、ブスを洗ってきてやるよ」

葉月に一言告げたクラヤミはブスを連れて立ち上がっていたが、それを見た花梨も、私も手伝いますと腰を上げていた。

「まったく、奴は人間には冷酷なくせに動物だと思うと人が変わり

ますね。まあ、ブスを可愛がってくれるのは嬉しいですが……」

そんな葉月をルイは、あなたも同じでしょうと心の中で突っ込んでいた。

１５１、勝者

１５１、勝者

導火線がジジッと短くなっていく。しかし、まだこんなところで止める訳にはいかない。少しでも相手より短くしなければ負けてしまう。だが、タイミングがずれれば爆弾は爆発し、メス奴隷の性器は無事では済まないだろう。導火線が短くなっていくにつれアサヒと調教師の額に汗が滲んでくる。

・・まだだ、まだ。もっと我慢だ。でも練習みたいにミアン先生が合図に気が付かなかったら・・

拘束されているメス奴隷からは導火線がどこまで燃えているのか分からない。調教師の合図を信じて放尿する以外にない。メス奴隷は、合図が出されたらすぐに放尿出来るよう準備しておくのが肝心だが、エムは極度の緊張で上手く尿意をコントロール出来るか不安で震えていた。対するミアンは失敗すれば爆弾が爆発し性器が吹き飛ばされるという興奮で、こちらも身体を震わせていた。傍からみれば同じ様に震えているメス奴隷であるが、その実、精神状態はまるで別のものであった。

・・くそっ、まだあの調教師、合図を送らないのか。もうだいぶ短いぞ。あのメス奴隷、合図と同時に放尿出来るのか。ミアンはまた発情してるし、俺の声聞いてくれよ・・

メス奴隷エムは、その表情からすぐ放尿出来る様に備えているのだろう。しかし、ミアンは先程失敗した時と同じく興奮して声を上げている。

「あひゃ、あひゃ、オマンコ爆破されりゅう♡」

相変わらずミアンは爆弾を膣に挿入されて吊られたまま興奮して腰を振っている。アサヒは不安で仕方なかった。

・・先生、変態にも程があるだろう。マンコ爆破されるの喜んでてどうするの。でも、先生、カナメ商会の売れ残り雌奴隷六九番と仲いいんだよな。六九番は、この世界で語り継がれているメス奴隷６９番渡邉ゆかりの転生した姿だから、その六九番と仲の良いミアン先生も……・・

アサヒの不安がどんどん大きくなっていくが、導火線は容赦なく短くなっていく。

・・もう、限界だっ・・

アサヒとエムの調教師は、ほとんど同時に合図を出していた。

ジョバァーッ

すぐにエムの尿道から尿が噴き出す。そして、導火線の火が消えていた。だが、ミアンはアサヒの不安が的中したようで、またも声を上げたままアサヒの声が聞こえないようだ。

「先生ーっ、早くぅーっ」

思わずアサヒは先生と言ってしまうが、ミアンは腰を激しく振って声を上げている。

「あひゃ、あひゃ、あひゃ♡」

導火線はもう燃え尽きようとしている。そして、アサヒが必死に伝えようとしている前で、導火線は燃え尽きた。

ボスゥゥゥーーッ!!

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ♡」

鈍い音が会場に響き、続いてミアンの絶叫が大音量で観客の耳に突き刺さった。細かな肉片がバラバラと地面に落ちてくる。ミアンの大小陰唇やクリトリス、膣等が爆発で粉々になり飛び散ったもののようであった。そして、ミアンの股間からは血が噴水のように噴き出ている。沙也加は、そのミアンの状態を見て右手を上げた。

「ビクトリー……」

勝者のメス奴隷の名前をコールしようとして沙也加は目を疑っていた。当然、失神していると思われたミアンが腰を振っているのである。

「イグッ、イグッ、イグゥゥゥゥーーッ♡」

プッシャーーーッ

信じられない事にミアンは、性器を爆破され絶頂を迎え潮を噴いていたのである。沙也加は茫然としながらも勝者の名前を告げた。

「ビクトリー、ミアン」

観客席からも驚きの声が上がっていた。

「爆発させたら負けではないからね。ミアンの導火線の残りは〝0〟だ。これは堂々の勝利だよ」

「気絶したら負けだと云うのに思いきった事をする。さすがAシードのメス奴隷だな」

「私は勝ち負けよりもマンコが爆破される所を見られて良かったわ。このメス奴隷、次も楽しみね」

「私も勝負よりも、マンコ爆破されないで終わっちゃうのかと残念だったけど、あのメス奴隷がやってくれて最高だったわ。やっぱり、お客様の要望を叶えるのが一流のメス奴隷よね」

敗者となったエムの陣営は信じられないという顔だった。爆弾を爆破させて勝つ。そんな事が出来るメス奴隷がいるとは思わなかった。だが、常識から逸脱しているのがAシードと呼ばれるメス奴隷なのだ。調教師は、その事実を思い知っていた。

・・先生は六九番と一緒にマンコギロチンで何度もマンコを潰されているんだ。しかも最後には本当のギロチンの刃でマンコから裂かれているんだぞ。それに、地獄の拷問では串刺しにされたり腸も抜き出されたり、脳も溶かされたりしてるんだ。考えてみればマンコ爆破くらいで気絶する訳がない・・

アサヒは、まだ爆破が足りないように腰を振って声を上げているミ

アンを誇らしそうに見つめていた。

★　★　★　★

つぐみたちはエムの処刑に入る前に腹ごしらえしておこうと食堂に向かっていた。桃子が持っているお食事券を当てにしていたのである。そして、食堂の中央のテーブルにデンと座っている葉月たちの姿が目に入った。

・・私も、ゆかり姉みたいに、あの人クラスの方に処刑して貰いたいな・・

つぐみは葉月の恐ろしい雰囲気に惹かれていた。そして、ゆかりが葉月にやられた処刑を思い出し性器を濡らしてしまっていた。葉月はつぐみたちが入って来た事にも気付かないようにスマートフォンで誰かと話していた。葉月たちのテーブルの下からは綺麗にして貰ったブスがひょっこりと顔を出し、人懐こい笑顔をつぐみたちに向けていた。

「可愛いね、犬でいいのかな。呼んだら来るかな」

「いや、無理だよ。でも食べ物あげれば繰るんじゃない」

「私たちも食べたいから早く注文しようよ」

真由子が急かす様に言うが自分はもう満腹な為、桃子はゆっくりメニューを見ていた。それに、痺れを切らしたつぐみと真由子が桃子体をメニューを取り上げ、ばんばん注文する。

「そ、そんなに食べられるの」

桃子が呆れた顔をするが、つぐみと真由子にギロッと睨まれていたが

「大瀧が食べてる所、私たちはじっと見てたんだよ。もう、お腹ペコペコなの」

ワイワイ騒いでいるつぐみたちのテーブルに次々に料理が運ばれてくる。テーブルの周りに良い匂いが漂い、いつの間にかブスが隣にちょこんと座っていた。

「ほら、来たぞ大瀧。食べさせてあげなよ」

つぐみは桃子に言いながら、自分は料理を食べる事に完全に集中していた。なので、電話を終えた葉月が自分たちの入場票を確認しているのに気付かなかった。

「御門つぐみ、ですか。成る程、確かに渡邉ゆかりと血を分けたメスですね。今、私の友人から電話がありまして当初のメスが事情があって提供出来なくなったので、同程度のメスを提供すると言ってきたのですが、今、私の目の前にも遜色ないメスがいたのですね。私の周りにレベルの高いメスが集まって来ているようで嬉しいですよ」

葉月はつぐみの後ろ姿を見て、ワクワクしていた。その時、モニターの中でミアン対エムの決着がついていた。

「これでBブロック三回戦に進むのは、琴音、ハルカ、ミアンが決定しましたね。残り一組はどちらのメス奴隷になるでしょう。楽し

くなってきましたね」

葉月の笑顔を見て花梨は、私はＡブロックで良かったと心の中で思っていた。

１５２、提案

近藤は、監視しているメスが自慰を始めたのを見ていた。どうやら、メス奴隷ミアンの性器が爆破されたのを見て興奮したようだった。

「おっおっおっおっ……」

小さく声を出し、そのメスは自分の性器を刺激している。そして、指の動きはだんだん激しくなっていった。

・・このメスも、あれを見て興奮するなど頭がおかしいのには間違いない・・

近藤が隠れて様子を見ていると、そのメスは急に指の動きを止め、歩き出した。そして、トーナメント会場から離れ、人気のない方へと歩いていく。近藤は気付かれない様に後をつけていた。しばらく歩いた対象のメスは周囲に人と監視カメラのない事を確認すると、自分の膣に指を入れ、膣から何かを取り出していた。近藤が隠れて見ていると、それはどうやら小型の通信機のようであった。入場の際、観客は全裸にされ持ち物も預けるルールになっているが、このメスは膣内に機器を忍ばせ持ち込んだようだ。

・・葉月様は、そこまで確認しなくて良いと言っていたが、やはり、こういう奴も紛れ込んでくるのが現実だな。まあ、葉月様は、その

方が面白いでしょうと軽く笑っていたが・・

近藤は、もしかしたら葉月は敵を誘き寄せる為にわざとセキュリティを緩くしているのかと思った。そうしているうちにメスは、連絡を済ませたようで通信機をまた膣の中に隠すと何食わぬ顔で歩き出した。近藤も、その後を追い歩き出していた。

・・怪しいメスだが、まだ弥勒院と繋がっているのか確証がない。早く繋がりを見つけないと・・

近藤は、多くの部下を失う失態を演じた自分を処刑ではなく、まだ信頼して使ってくれている事に、今まで以上に忠誠を誓っていた。勿論、葉月は恩情などではなく、ただ有能である近藤を排除してしまうのは惜しいと思っただけで、それ以外の感情はなかったのだが、心酔している近藤はそれ以外を考えてしまっているのである。

・・葉月様に少しでも敵対する者は全て排除してやる・・

近藤は、歩いているメスの動きを少しでも見逃さないように目を皿のようにしていた。

★　★　★　★

エムが処刑される会場に大掛かりな装置が運ばれてきていた。ベルトコンベアらしき機器と、それに連動したローラーが付いている。沙也加が、空き缶をベルトコンベアに載せると、空き缶はコンベアの上を運ばれていきローラーにポトンと落ちる。そして、空き缶はぺちゃんこになりローラーから吐き出された。

「ご覧のように、これはベルトコンベアに載せた物をローラーで潰して圧縮する装置です。今回は敗者であるメス奴隷もギリギリまで粘って健闘してくれましたので、生き延びるチャンスを与えたいと思います。このコンベアの上に乗り、３０分間ローラーに巻き込まれず耐えられたら成功です」

沙也加は残酷な笑みを浮かべながら説明していた。

「勿論、敗者であるのは間違いないのでペナルティは受けて貰いますよ。そのままでは今まで処刑されたメス奴隷たちに申し訳が立たないでしょう。その上でチャンスが与えられます。このチャンスを生かせるかは、メス奴隷次第ですね」

沙也加は震えているメス奴隷エムを見つめる。メス奴隷エムは目を瞑り何かを決意しているように見えた。

・・マイ、あなたに勝って二回戦に進みましたけど、私もここまでした。やはり、世の中には凄いメス奴隷がいると思い知らされました。でも、私にもチャンスが与えられました。なんとしても生き残って、マイのお墓を作ってあげるからね・・

エムは一回戦で戦った同じ施設出身のマイを思い出していた。苦しい中で身を寄せあって生きてきた二人はメス奴隷になる以外道はなかった。そして、このトーナメントで再開した二人は、堂々と戦いエムが勝利したのだった。妹のように思っていたマイが処刑され、エムはマイの分も頑張ってトーナメントを勝ち残ると誓っていたのだが、それは叶わぬ夢となってしまった。だが、ここに巡ってきたチャンス。エムは、何としてもこのチャンスを生かそうと決意していた。

★
★
★
★

つぐみたちは出された料理を急いで口に入れ、エムの処刑に間に合うように観客席に戻ろうとしていたが、そこへブスを連れ戻しに葉月が来ていた。

「お嬢さんたち、まだ若いのに関心ね。うちのブスを可愛がってくれてありがとう。処刑なら、あのモニターで見られるから私たちと一緒に見ましょう。せっかくの料理ですから、ゆっくり味わって食べた方が良いですよ」

葉月の誘いにつぐみと真由子は二つ返事で了承していたが、桃子は顔を強ばらせ固まっていた。

「どうしたの、大瀧。せっかくだから行こうよ。あの席ならよく見えるよ」

「ほら、大瀧さん行くよ。ほらほら」

真由子に背中を押されて桃子はギクシャクと歩を進めていた。桃子にしてみれば、葉月のような恐ろしい人間と一緒にテーブルを囲めるつぐみと真由子が信じられなかったのである。そこに、理津子と麗華がどやどやと入って来た。

「この処刑が終わったら私の出番ですからね。急いで食事しに来ました」

理津子と麗華は中央のテーブルに腰を降ろしメニューを見始める。
その理津子たちの姿を見て桃子はようやく安堵したように息を吐いていた。

「どうですか、橘。次も勝てそうですか」

葉月が理津子に声をかけると、つぐみも心配そうに理津子に声をかけていた。

「あ、あの、先輩。Zクラスの御門つぐみといいますが、先輩のメス奴隷大内くるみは勝てるでしょうか。クラスメイトなので心配で……」

その言葉で驚いたように真由子が小声で桃子に、うちのクラスでトーナメントに出場してるメス奴隷がいるのと訊いていた。

「うん、急遽契約がまとまってメス奴隷になった子が、つぐみちゃんの言ってた大内くるみって子なんだけど、トーナメントのメス奴隷に欠員が出来たみたいで、それでくるみちゃんが代わりに選ばれたんだよ」

成る程と真由子は頷いていたが、テーブルの下ではブスが自分のせいだと申し訳無さそうな顔をしていた。

「次のメス奴隷アカリには勝てるでしょう。アカリは一回戦で多大なダメージをマンコに負っていますからね。だから、御門さん。次は大丈夫ですよ。安心して見ていなさい。だけど問題はその後、三回戦のミアンですね。あのメス奴隷はとんでもないですよ」

理津子は心底困ったという顔をして、その顔を見たルイは苦笑して

いた。

★　★　★　★

その大内くるみは控え室で、これから行われるメス奴隷エムの処刑をモニターで見ていた。この後、自分も同じ運命を辿るかも知れない。くるみは、すっかり人影の減った控え室の中でアカリに目を向ける。自分よりも幼いと思うアカリは落ち着いているように見えた。

・・私の調教師は憧れてた橘先輩が引き受けてくれた。あぁ、もっと時間があれば橘先輩に色々調教して貰えたのに。私、もし負けて処刑されるなら橘先輩にして貰いたいけど駄目なのかなぁ・・

どうせ自分の残り時間は僅かなのだろうと察しているくるみは、最後の時は理津子に処刑して貰いたいと願っていた。

・・夢ちゃん、詩織ちゃん、栄子ちゃんが処刑されちゃって、うちのクラス誰が残っているんだろう。さっちゃん、気が弱いけど大丈夫かな。つぐみちゃんはきっと大丈夫だよね・・

くるみはZクラスの仲間の顔が浮かんできて、最後に一目会いたいなと思っていた。

１５３、試練

１５３、試練

「それでは、メス奴隷エムにペナルティを受けて貰います。皆様、お待ちかねのマンコ破壊です。マンコをそのままにしては勿体ないですからね。せっかく爆弾の勝負でしたので、このメス奴隷のマンコも爆破しますね」

ひっと小さく声を上げるメス奴隷エムを見ながら沙也加は楽しそうにアナウンスし、メス奴隷エムはスタッフの手によって開脚逆さ吊りに拘束されていく。

・・マイ……。マイも処刑される時、怖かったよね。ごめんね、私のせいだよね。でも私、耐えるから。このペナルティにも耐えて、処刑も乗りきってみせるよ・・

固く決意するエムだったが、トーナメントで使われた爆弾よりも一回り大きい爆弾を見て硬直していた。そして、その爆弾がエムの膣に無理矢理挿れられる。

「うぎぃぃぃっ、いだいぃぃーっ」

エムは悲鳴を上げるが、爆弾はスタッフの手できっちりとエムの膣に埋め込まれていた。そして、今度は尿で消せないように、尿道にプラグが挿入され塞がれてしまう。これから、導火線に点火され爆

弾が爆発するまでメス奴隷は恐怖に怯える事になる。この状態で興奮するなど通常のメス奴隷であれば考えられない事だ。だが、それに興奮する一部特殊なメス奴隷もいる。それが、自分の性器が破壊される願望を持つゆかりの様な真に頭のおかしいメス奴隷だ。エムが戦ったミアンも間違いなくその一人であった。

「ふっ、ふっ、ふっ、ふっ、ふっ、ふっ」

エムの鼻息が荒く早くなっていく。今度は導火線を消す事は出来ない。確実に自分の性器が爆破されるのだ。エムの膣も子宮も粉々の肉片にされる。エムは膣に挿入されている爆弾の冷たい感触に恐怖で震えながら、その時を待っていた。そして、無慈悲に導火線に点火された。

「ふっ、ふっ、ふっ、ふっ、ふっ、ふうっ」

数秒後には自分の性器は消滅する。エムは今までメス奴隷として犯されたり、公開自慰や公開放尿させられた事を思い出していた。その性器が消滅する。メスとしての価値がなくなるのだ。それでも、エムはその後の処刑も耐えて生き残ろうとしていた。

・・マイのお墓を作って、私が墓守りするんだ・・

固い決意を心に秘めるエムの膣に挿れられた爆弾の導火線が燃え尽きる。

ボスッ!!

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ!!」

エムの性器が爆弾で吹き飛ばされ周囲に肉片と血が飛び散る。エムの股間にはぽっかりと穴が空き、そこにはもうクリトリスも小陰唇も膣も子宮も無かった。エムの性器は文字通り消滅していた。

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

プッシャーーーッ

エムの性器が爆破された瞬間、観客席では多くの観客が射精したり潮を吹いたりしていた。そして、食堂でも密かに自慰していたつぐみが潮を吹いてしまっていた。

「おやおや、御門さん。メス奴隷のマンコ爆破されるのを見て潮を吹くなんて可愛いですね」

葉月は、つぐみの姿を見てゾクゾクと興奮していた。

「す、すいません、汚してしまって。今、舐めてきれいにしますから」

つぐみが、自分の潮で汚れた床を舐め始めると、ブスも寄って来て一緒に舐めはじめていた。そして、あっという間に床を舐め尽くす。

「すいません、私、マンコが壊されたりするの見ると興奮して我慢出来なくなるんです」

床をきれいにしたつぐみは葉月に頭を下げていた。

「ほう、それならあなたのマンコも爆破してあげましょうか」

「ありがとうございます。爆破して貰いたいのですが、爆破は最後にしたいのでまだ遠慮しておきます。クリトリスや小陰唇、膣や子宮、全部壊してからでないと勿体ないので、その時にお願いします」

つぐみの言葉に葉月はニヤリと微笑んでいたが、桃子はそんな事ここで言ったらと心配していた。

「大丈夫ですよ、それが望みならそのようにして差し上げます。いずれにしろ、今はトーナメントで忙しいので、これが終わってからですね。それまで、あなたが我慢出来なければマンコを調教してあげますので、何時でもいらして下さい」

そう言うと葉月はスタッフを呼び指示を出していた。スタッフは足早に食堂を出ていき、しばらくして戻って来ると葉月にカードの様な物を渡していた。

「これは、うちのＩＤカードです。これを渡しておきますので、何時でもいらして下さいね」

「ありがとうございます。嬉しいです。マンコ調教を一人では限界があるので、調教して貰えると助かります。それも豪徳寺さんの様な方にして貰えるとは光栄です」

つぐみは嬉しそうに瞳を輝かせて葉月からカードを受け取っていた。桃子は、そんなの貰っちゃっていいのという顔をしていたが、真由子は羨ましそうな顔をしていた。そうしているうちにエムの処刑の準備が整っていた。エムはベルトコンベアの上に乗せられていた。ベルトコンベアの幅は3メートルはあり、左右には逃げられない様に透明アクリルの壁が設置されている。コンベアの右にはローラーが有り、左側はコンベアから降りられる様になっていた。エムは長

さ２０メートルあるコンベアの中央にぶるぶる震える足で立たされていた。性器を爆破されたエムは、立っている事さえやっとなのだ。

「それではメス奴隷エムの処刑を開始します。メス奴隷が３０分間逃げ延びたら解放されます。さあ、メス奴隷が解放されるか、ローラーで潰されるか。お楽しみ下さい」

沙也加の合図でベルトコンベアが動き始める。エムはその衝撃でコンベアの上に倒れていた。そして、起き上がろうとするが性器を爆破された影響で足が上手く動かない。その間にエムの身体は数メートル、ローラーに近づいてしまっていた。

「ははっ、無様ですねぇ。マンコ爆破されているから足も満足に動かないでしょう。私はこのまま潰されると思いますよ」

「あのメス奴隷、自分は助かると思っているでしょうけど甘いわね。だいたいメス奴隷が生きて解放されるなんてあり得ないのよ」

「希望を与えられて、それが叶わないと気づいた時のメス奴隷の絶望に歪む顔が見たいわね。その絶望した顔のまま潰されて欲しいわ」

エムの処刑を見ている観客の全てが、エムがローラーで潰される姿を期待していた。エムは立ち上がるのを諦め、這って前進していた。しかし、足に力を入れる度に激痛が身体を突き抜け、思うように前進出来ないでいた。エムは腕の力だけでコンベアの上を進み、中央まで位置を戻したが腕にももう力が入らなくなっていた。エムはそれでも歯を食いしばって腕を動かす。そして、時計を見る。

・・あと２０分……・・

エムは必死に腕を動かすが徐々に身体はローラーの方に近づいてしまっていた。

★　★　★　★

Ｚクラスから商談が成立しメス奴隷になった古林乃梨子は葉月の屋敷からグルーム・アグリカルチャーの経営する〝シム６９〟に運ばれていた。一緒に商談がまとまった大内くるみはトーナメントに出場させられているが、乃梨子の方は別の用途に使われる事になったのだ。

「斎藤さん、それではステージ２のスタッフの指導をお願いします。この娘を〝６９番・渡邉ゆかり〟役として使用して下さいね」

百目鬼は、乃梨子を斎藤の前に座らせ、その頭をポンポンと叩いていた。

「このメスは、もうメス奴隷ですので斎藤さんの好きに使用して構いませんよ。ステージ２ですので抜歯、ピアシング、焼き印、どれも本当に実行して構いません。スタッフがよく分かるように指導して下さいね。それに、このメス奴隷はあなたの御執心の水澤ひまりと同じ中学ですからね。あなたが気持ちを入れて仕事が出来るよう手配しました」

「それは、お心遣いありがとうございます。勿論、仕事は精一杯務めさせて頂きますよ」

斎藤は、百目鬼に感謝していた。もう誰にも邪魔される事なくひま

りを処刑出来るのだ。それまで、この〝シム６９〟の仕事を楽しむのが一番だ。百目鬼と斎藤は顔を見合わせて笑っていた。

１５４、次戦

１５４、次戦

エムは必死に腕を動かしベルトコンベアの上で少しでも先に進み逃げ切ろうとしていた。それはまるで柔道の練習の〝腹這い〟のように腕を締めて進む方法で、その姿からエムが柔道の経験者である事が窺える。しかし、どんなにエムが頑張ってもローラーがどんどん近付いてくる。見ている観客は、早くエムがローラーに巻き込まれろと期待していた。

「くくく、あのメス奴隷、もうすぐローラーに巻き込まれますな。一度巻き込まれてしまえば、もう逃れられませんからな。後は潰されていくだけでしょう」

「早く潰されないかな、あのメス奴隷。リッサの鉄棺の圧縮して処刑するのも良いけど、こうして見える状態で潰されていくのも興奮するわよね」

「メス奴隷がぺちゃんこに潰される姿を想像すると、マンコが熱くなってきちゃうわ。誰か私のマンコも調教してくれないかしら」

観客は適当なお喋りを楽しんでいるがエムはそんな観客の声も耳に入らない程必死だった。全身汗まみれになり必死に腕を動かしている。だが、それも限界だった。ついにエムの足の爪先がローラーに巻き込まれる。

バキッ、バキッ、バキッ、グシャーーッ

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！！！」

エムの足の骨が砕かれ、肉が潰されていく。そして、それはエムの足首から脹ら脛とだんだんと腰の方に上がってきていた。

バキッ、バキッ、バキッ、バキッ、バキッ、バキッ

「だじげでえぇぇーーーーっ！！！」

エムはベルトコンベアに両手の爪を立て、必死にローラーから脱け出そうとするが、それはもう無理な注文であった。エムの爪は全て剥がれ、ローラーはもう太ももまで潰している。エムの身体は人形の様に上下に激しく揺れていた。

バキッ、バキッ、バキッ、バキッ、バキッ

「ごばぁぁぁっ……」

あっという間にエムは下腹部までローラーに巻き込まれ、潰されてしまった。そして、エムは口から大量に吐血する。もうエムは動く事なく、どんどんローラーに巻き込まれ潰されていく。

「ひょ、ひょ、ひょ、ひょ、ひょ……」

エムの口から空気が漏れる様な音がして、目、鼻、耳からも血が漏れ出す。もうエムの眼球も半分飛び出ていた。そして、エムの身体が胸まで潰された時、両方の眼球がポンッと飛び出していた。それ

でも、ローラーは止まらずエムの身体を潰していく。

ゴキッ、ゴキッ、ゴキッ、ゴキッ

ついにエムの頭がローラーに巻き込まれ潰されていった。そこで、ようやくローラーは止まる。コンベアの上にはエムの両腕だけが、この世にしがみつく様に残されていた。

★　★　★　★

「さあ、それでは行ってきますか」

理津子は食堂のテーブルから飲みかけのカクテルグラスを手に取ると一気に飲み干し腰を上げ歩いていった。そして、控え室でメス奴隷くるみの鎖を持つと会場に向かう。その理津子の後ろをメス奴隷アカリを連れた黒いスーツの岡田が続いていた。

「あなたでは橘には歯が立たないでしょう。レベルが違いますからね。だから心配せずとも大丈夫ですよ。この対戦で負けても責任を問う様な事はいたしません。気楽にやってきなさい」

葉月にそう声をかけられた岡田は、自分がまったく期待されていないのではと不安になっていた。

・・それなら、俺が橘理津子に勝ってやる。そうすれば葉月様は俺の力も認めてくれる筈だ・・

岡田は前を歩く理津子の後ろ姿を見つめ、固く決意していた。

★
★
★
★

乃梨子は、茶色がかった髪を黒く染められ三つ編みに結われていた。そして、ゆかりと同じ様に白いスポーツブラと白い綿の女児用下着にセーラー服を着せられる。最後にオーバーニーソックスを穿き、伊達メガネをかけた乃梨子の姿を見て斎藤はドキッとしていた。

・・ああ、ゆかり。今すぐマンコを処刑してあげたいよ・・

斎藤は乃梨子の姿をゆかりに重ね合わせて性器を硬く勃起させていた。

・・いかん、我慢だ。これは仕事だ。上手く仕事をこなしていけば、あのメス水澤ひまりを処刑出来るんだ。あのメスのマンコを好きなように壊していける。このメスは指導に使う教材だ。指導が終われば壊していいが、それまでは壊さない様に気をつけねば・・

斎藤は、早速ステージ2のスタッフたちに指導を開始するつもりだった。もう設備の建築はほぼ完成している。後はスタッフの教育が終わればオープン出来る。斎藤にしてみても、早くオープンすれば、それだけ早くひまりを処刑出来るのだ。オープンを1日でも早くする為には時間を惜しんではいられない。斎藤はステージ2担当のスタッフを呼び教室に集合させた。ステージ2教室も同じ教室が幾つも作られている。ステージ1をクリアした者しか進めない為、ステージ1程の数はないが、そこそこの数は作成されていた。斎藤は隣の教室の前を通った時、見たことのある男がスタッフに指導していた。

・・あれは、トーナメントに出場している佐瀬という男だ。アイツはトーナメントで勝ち残っているのに、ここで指導なんかしてて大丈夫なのか・・

斎藤は心配になったが、人の心配している場合じゃないと思い返し自分の担当の教室に入っていった。教室の中には男女合わせて３０人程のスタッフが待機していた。生徒役なので、男はワイシャツに黒ズボン、女はセーラー服にプリーツスカート姿だった。

「それでは、まずゆかりのマンコを鞭で打つ練習だ。いいか、このステージに来るお客様はゆかりに成りきってる。ゆかりはマンコを壊される事を夢見ている頭のおかしい女子だ。だから、遠慮などいらない。マンコを思い切り鞭で打つんだ。今日はお客様ではなく代用のメス奴隷を用意した。一人ずつ、このメス奴隷のマンコを鞭で打って貰おう。ただし、この時点では下着は穿かせたままで鞭打って貰う。それでは、そっちから順番に並んで教壇に上がって」

斎藤の指示で生徒役のスタッフは教壇に乗って並んでいた。斎藤は乃梨子に足を開いてスカートを捲るように命令する。乃梨子は言われた通りに足を大きく開き、スカートの裾を持ち捲り上げた。乃梨子の白い綿の下着が露になる。そして、一人目が斎藤から鞭を渡され、乃梨子の股間に鞭を叩き込んだ。

バシィィィッ！

「あうぅぅぅぅーーーっ」

乃梨子は性器を鞭で打たれ足を閉じそうになるが、なんとか堪えていた。

「ダメだな。もっと手首のスナップを効かせて激しく打ち込め。いいか、ここに来るお客様はステージ1をクリアした、メス奴隷になりたいと思っている超変態のお客様だ。そんな気合いの入っていない鞭ではお客様は失望してしまう。ステージ2では万が一マンコが壊れても許諾するという誓約書を書いて貰う。なので遠慮せずに容赦なくマンコに鞭を打ち込め。その方がお客様も喜んでくれる」

斎藤の言葉でスタッフは次々に乃梨子の性器に鞭を打ち込んでいった。乃梨子の顔は激しく涙と鼻水で汚れ、太ももは痙攣した様にぶるぶる震えていたが、それでも乃梨子は足を大きく開いたまま性器を鞭で打たれるのに耐えていた。

１５５、気概　くるみＶＳアカリ

１５５、気概

「これよりＢブロック二回戦、メス奴隷くるみ対アカリの対戦を行います。これで二回戦は全て終了。本日の最終戦ともなります。最後までお楽しみ下さい」

沙也加のアナウンスに続き、メス奴隷が入場してくる。一回戦の時には調教師、メス奴隷共にまるで素人に見えていた理津子・くるみ組であるが、二回戦に進んだ事で自信が芽生え、実に堂々とした態度で進んでくる。むしろ、後に続く岡田・アカリ組の方が自信無さげに見えていた。が、それも仕方のない事であった。どちらの調教師もメス奴隷も、このトーナメントでデビューした新人なのである。ただ、その性格から理津子・くるみ組の方が自信を深めていったに過ぎない。

・・少しでもアピールして葉月様に認めて貰うんだ・・

岡田は、この対戦の拷問具が何になるか気になっていた。鞭のように経験の差が現れてしまう拷問具では、かなり不利になるだろう。岡田は、ニードル辺りが選ばれてくれればと思っていた。あちらの、くるみというメス奴隷は、このトーナメントが始まってからメス奴隷になった素人だ。それまではただの変態中学生である。こちらのメス奴隷アカリもメス奴隷としては駆け出しだが、くるみに比べれば一日の長がある。岡田は、チラッと後ろを振り向いてみる。一回

戦ではスクール水着を着用していたアカリだが、二回戦では他のメス奴隷同様、全裸になっている。前を歩くメス奴隷くるみの身体もまだ未成熟であるが、１１年物のアカリの身体はそれより更に未成熟、まさしくロリータと呼ぶに相応しい身体であった。

・・選ばれた拷問具次第では俺にも勝つチャンスは巡ってくる。神楽坂さんのルーレットに運命がかかっている。頼みます、神楽坂さん。良いマスに入れて下さい・・

岡田は沙也加を祈るような気持ちで見つめていた。そして、沙也加はルーレットを回す。理津子と岡田が真剣な表情で見つめる中、玉はコロコロと転がっていた。

コトン

ルーレットが止まり、小さな音を立てて玉が落ちた。沙也加は、そのマスを見て右手を上げアナウンスする。

「メス奴隷くるみ対アカリに使用する拷問具は〝ハサミ〟に決定しました。それでは対戦を開始します」

沙也加の右腕が下ろされ対戦がスタートした瞬間、岡田は猛ダッシュしていた。

「うおぉぉぉーーっ」

雄叫びを上げ全力で走っていく。岡田の頭の中では鋭利なハサミを獲得する事を考えていた。このトーナメントを観ていて岡田も色々勉強していた。

・・鋭いハサミでメス奴隷の乳首やクリトリスを切断してやる。小陰唇は苦痛を長く与える為に、短冊切りにしてから切除だ。調教もされていない、あのくるみというメス奴隷なら間違いなくそれで失神するだろう・・

岡田は理津子に差をつけて拷問具置き場に到着すると、急いで置いてあるハサミの中から一番鋭い光を放っているハサミを手に取り会場に戻っていった。その時、理津子も走りながら考えていた。

・・あのメス奴隷アカリは一回戦でマンコを壊されている。小陰唇もクリも燃やされていて、もうないだろう。つまり、他の部分を切断して失神させなければならない・・

理津子が考えた通りメス奴隷アカリは一回戦ナギサとの対戦で膣に炭を落とされ、その後性器を燃やされていた。アカリの性器は、もう二度と使用出来ない程壊されているのだ。

・・乳首を切断したくらいで失神してくれるかしら……。少し疑問ですね。それなら手足の指を全て切断していけば、あの幼いメス奴隷なら耐えられずに失神しそうです。その為には、指を切断出来る程の強力なハサミが用意されているかですね・・

普通のハサミでは到底指の切断など不可能だ。それを可能にするようなハサミが用意されているのかであるが、理津子は用意されていると確信していた。

・・豪徳寺の性格なら必ず用意されているでしょう。ですが、それを先に取られてしまったらアウトです。その場合の次善の策を考えておかねばなりませんね・・

理津子は岡田に遅れて到着したが、理津子の目当てのハサミは用意されており、そしてまだ残っていた。

・・どうやら、あの岡田という調教師は小陰唇やクリトリスの方に目がいってしまったようですね。まあ、普通であれば誰でもそちらを選ぶでしょうから当然ですがね・・

理津子も目当てのハサミを手にすると、会場に向かって全力で走り出した。

★
★
★
★

自宅に戻ったひまりは特別優待券を見つめ、自然に笑みがこぼれていた。胸と性器は治療されているようで包帯が巻かれているので、すぐにでも自慰をしたいところであったが控えていた。ひまりは机の引き出しの鍵を開け、一冊の本を取り出す。

「ゆかりの記録」

そうタイトルが示された書物は、数年前に初版が僅かに刷られたきり絶版になっており、現在では入手がほぼ不可能な本と言えた。ひまりはそれをオークションで手に入れて以来、毎日のように読み耽っていた。まさにひまりにとって座右の書とも云える書籍であった。ひまりは、その本を開くと渡邉ゆかりが教室で奴隷宣言をしたページから読み始めた。ほとんど、もう頭の中に入っている内容ではあるが、ステージ2のおさらいをしておこうと思ったのである。ゆかりは、ここでメス奴隷の身体に改造されていく。何回読んでも興奮する。ひまりは、これまでゆかりの姿に自分を重ねて自慰していた

が、ステージ2に進めば本当にそれが体験出来るのだ。ひまりは本を読みながら、シム69のオープンが待ち切れなかった。

★　★　★　★

「あぶうぅぅーーーっ」

乃梨子は、休みなく次々に性器に鞭を叩き込まれ悲鳴を上げていた。涙と鼻水で顔面は激しく汚れ、太ももはぶるぶる震え、もう立っているのもやっとの状態のようである。時々、斎藤に向けて許しを乞う目を向けてくる。斎藤は、そんな乃梨子の姿を見て、頬を平手で思い切り打った。

パシィィィッ

乾いた音が教室に響く。

「いいか、お前はここのみんなに仕事を覚えて貰う為の教材だ。僕の命令を務められないようなら廃棄するしかないからな。もっと気合いを入れて務めないと、この先はないぞ」

斎藤の言葉に乃梨子は泣きながら頷いていた。

「よーし、次は股間蹴りだ。みんな、このメス奴隷のマンコに蹴りを入れるんだ。これは、君たちの為の教材なんだから遠慮なくいけよ」

スタッフに伝えた後、斎藤は乃梨子に向かう。

「いいか、大きく股を開いてマンコ蹴られるんだ。動くんじゃないぞ。お前は、黙ってマンコ蹴られ続けるんだ」

斎藤にまた頬を打たれて乃梨子は泣きながら教壇の上で股を開いていた。

「よし、それじゃ鞭と同じに順番にいくぞ。いいか、狙いを外さず股の中心マンコを蹴るんだぞ。その出来具合で〝東條佳純〟役を決める」

生徒役のスタッフたちは斎藤の言葉で緊張しながら乃梨子の性器に蹴りを入れていた。

ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ

「あぶうぅぅーーーっ!!」

乃梨子は次々に性器を蹴られ、だんだんと腰が退けてきてしまっていた。

「なにやってんだ、腰を前に出せ。おい、男子役のお前ら、こいつの腰と足を押さえていろ」

乃梨子は二人の男に左右から腰を押さえられ、また性器を蹴られ続けていた。

「だじげでえぇぇぇーーーっ!」

乃梨子が泣き叫ぶが、当然許される事はなく、乃梨子は全員が終了

するまで性器を蹴られ続けていた。

１５６、裁断

１５６、裁断

「あぶうぅぅーーーっ！」

股を大きく開いたまま押さえつけられた乃梨子は、その股間、性器に蹴りを入れ続けられ白い下着の股間が赤く染まってきていた。斎藤は、乃梨子の性器に蹴りを入れるスタッフたちを見ていたが、最後の一人が終わった時点で天を仰いで考え込んでいた。そして、一人のセーラー服を着た女子スタッフを呼び、君を〝東條佳純〟役にすると告げていた。

「東條佳純は女子なので、女子スタッフの中から選んだ。佳純は特にゆかりを痛め付ける役回りだ。君の蹴りは良かった。そこで、君には蹴る時に佳純と同じ様に蹴って貰いたい。「ゆかりの記録」に記載があるが、そのやり方でこいつのマンコを蹴って貰う。ゆかりでさえ悶絶した蹴り方だ」

斎藤は、女子スタッフの耳に口を近づけ蹴り方を伝授していた。女子スタッフは、そんな事して良いのかという顔をしていたが、斎藤はやってみろと促していた。女子スタッフは、自分の性器が蹴られるように感じて、それでも躊躇していたが覚悟を決めたように乃梨子の前に立った。

・・くくっ、これをやられるとこのメスも悶絶するだろう。本当は

俺がストレートチップの革靴を履いて蹴りたいところだが、それは水澤ひまりまで我慢してやるか・・

「よし、早くこいつのマンコを蹴るんだ」

女子スタッフは乃梨子の股間に狙いをつける。それも、ただ乃梨子の性器を狙うだけではない。乃梨子の膣を狙うのだ。その女子スタッフの緊張感が乃梨子にも伝わり、乃梨子は息を呑んでガタガタ震えていた。そして、女子スタッフは足を振り上げると思い切り乃梨子の性器に蹴りを入れた。

ドスゥゥッ！

「んぎぃぃぃーーーっ！」

乃梨子の膣にスタッフの爪先がすっぽりと突き刺さり、乃梨子は絶叫して飛び上がると両手で股間を押さえて教壇の上をのたうち回っていた。しっかり、乃梨子の腰を押さえていたスタッフは、簡単に振りほどかれ呆気に取られた顔をしている。それほど乃梨子の受けた苦痛は凄まじかったのだと推測出来た。

「あぶうぅぅーーーっ」

股間を押さえてのたうち回る乃梨子をよく見ると、下着の股間部がどんどん赤く染まってくる。どうやら、膣に激しい蹴りを突き入れられ、膣が裂けてしまったようだ。そして、下着の尻の部分にも茶色い染みが出来、もっこりと膨らんでいる。乃梨子は膣を裂かれる激しい痛みで、大便を漏らしてしまっていた。

「臭いな、このメス。ウンコ、漏らしやがった」

斎藤は、外のスタッフを呼ぶと乃梨子を洗浄してくるように指示を出していた。

★　★　★　★

一足早くトーナメント会場に戻ってきた岡田はメス奴隷くるみを開脚逆さ吊りに縛りあげていく。岡田の目の前にくるみの割れ目がある。岡田が盛ってきたハサミは、〝剪刀・クーパー〟と呼ばれる医療用の外科手術などで使われるハサミだ。葉月や沙也加が使用しているのを見て、切断するならこれだと思い選んできたのだ。

・・ふふ、これでこいつのマンコ切り刻んでやる・・

岡田はくるみの性器を見つめ、どこから切断しようか考えていた。早くしないと理津子が戻ってきてしまう。早くこのメス奴隷にダメージを与えて失神させるのだ。岡田は、やはり敏感なクリトリスからいこうと考えた。

・・このメス奴隷の小さな突起を痛め付けて切断する。まだ若いこのメスでは耐えられないだろう・・

岡田は、さっそくくるみのクリトリスの包皮を剥き指で擦り刺激を与える。そして、舌で舐めているとくるみのクリトリスは硬く勃起してきた。

「あっ、あっ、あっ、あっ」

こんな状態でありながらくるみの息が荒くなっていく。岡田はくるみのクリトリスを摘まみクーパーを当てる。いきなり切除しないで、まずはくるみのクリトリスを縦に切開するつもりだった。岡田はくるみに自分が何をされるか分からせる為に、少しずつクーパーに力を入れていく。くるみは自分のクリトリスに当たるクーパーの冷たい刃の感触に、クリトリスが切開されてしまうと理解した。

・・私のクリ、ここで壊されるんだ。どれだけ痛いんだろう。どうせなら針で刺されたり、火で燃やされたりされたかったけど、クリ壊してくれるならいいや。これで私、クリ失くなっちゃうんだ。つぐみちゃんの従姉妹のお姉さんみたいにマンコぐちゃぐちゃにしてくれるのかなぁ。あぁ、早くクリ壊して下さい・・

くるみは、岡田の意図した狙いとは異なり、自分のクリトリスが壊される事に興奮してしまっていた。しかし、くるみが興奮していたのもここまでである。実際にクリトリスが壊されると、くるみは恐怖と激痛で泣き叫び、許しを乞う事になる。実際の性器破壊は、中学生のくるみの妄想などより遥かに苦しく耐えられない行為であるのだ。くるみはそれをこれから実際に味わい、後悔していくのだ。

・・くくく、さあいくぞメス。泣き叫べ・・

岡田はクーパーに力を込める。クーパーに鋏まれたくるみのクリトリスに血が滲みだした。

ジョキィィィンッ

「あっ、びゃあぁぁぁぁぁーーーーっ!!」

クリトリスを縦に切開され、くるみは大きく反り返り絶叫していた。

しかし、岡田はここで手を休めない。くるみのクリトリスを摘まんだまま、今度は十字に切開されるようにクーパーを当てる。

ジョッキィィーーッ

「あっ、ぶうぅぅぅーーーーっ！！」

大きく反り返ったままくるみはまた絶叫する。くるみのクリトリスは十字に切開され血が流れ出す。そして、岡田はいよいよくるみのクリトリスを切除する為クーパーで挟んでいく。だが、岡田も少し成長したのだろう。一回でクリトリスを切除しようとは思わず、くるみのクリトリスの先端から1ミリの所を挟んでいた。岡田は、くるみのクリトリスを先端から少しずつ切除していく考えだった。くるみは敏感な部分を徐々に切られていく。こんな事をやられては調教に慣れたメス奴隷でもたまらないのに、くるみはメス奴隷になったばかりの中学生だ。耐えきれずに失神してしまう可能性も大いにあった。

・・どうだ、嬉しいだろう。もう、ここで自分を慰める事も出来ない。いくら変態でも我慢出来ないだろう。まあ、どうせ負ければ処刑されるんだ。こんな物が失くなっても関係ないか・・

岡田は、くるみのクリトリスを挟んでいるクーパーに力を入れる。

ジョキッ

「あびゃあぁぁぁぁぁぁーーーーーっ！！」

くるみは、尻に頭がつきそうな程反り返り絶叫する。しかし、岡田は容赦しない。

ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ

「はぶうううぅぅぅぅーーーーっ！！」

くるみのクリトリスは完全に切除され、くるみの股間から消滅していた。くるみは、だらんと力なく身体を垂らし、ひゅー、ひゅーと小さな息をしていた。

★　★　★　★

近藤は、一人の観客の女を監視しながら、会場で奮闘している岡田の姿を微笑ましく見ていた。

・・やるじゃないか岡田。頑張れ。橘さんが到着したぞ。早く、そのメス奴隷を失神させるんだ・・

岡田がここで勝てば葉月の評価も上がるだろう。が、葉月の知り合いでもある橘理津子が到着してしまった。ここまで有利にトーナメントを進めていた岡田だったが、岡田よりも拷問に慣れている理津子が到着し、その手に持つハサミを見ると逆転されるのではないかと気が気ではなかったよ。

１５７、哀願

１５７、哀願

ようやく会場に戻った理津子は、くるみの様子を確認する。くるみは岡田に性器を切断されているようで大きく反り返って絶叫していた。

・・ふむ、どうやらあちらの調教師を甘く見ていたようですね。ですが、こちらのこの素人に近いメス奴隷が、これからの拷問に耐えられるという可能性は皆無です・・

理津子はアカリの身体を拘束していく。腕を動かせないように縛り上げ、宙吊りにして足もまとめて縛り上げていた。そして、まずはアカリの足の指から切断していこうと考えた。

・・ふふ、何本切断されて失神しますかね。出来ればある程度耐えて欲しいところですが、この幼いメス奴隷では無理ですかね・・

理津子は、持ってきたハサミでアカリの右足の小指を鋏む。そのハサミを見た観客席から思わず声が漏れていた。

「確かにあれもハサミだな。あれなら楽にメス奴隷の指を切断出来るだろう」

「あのメス奴隷、一回戦でマンコ壊されているから、他の所を責め

ないといけないよね。これ、ある意味ハンディキャップがあるのと一緒だよね。でも、あんなので指切断されたらメス奴隷も我慢出来ないでしょうね」

「あはっ、面白そう。あの幼いメス奴隷、指が全部切断されるまで耐えて欲しいわね。その後、腕も切断しちゃえばいいのに」

観客たちは理津子の持っているハサミを見て興奮していた。理津子の持っているのは、庭木の剪定に使用する枝切り鋏だった。硬い木の枝を苦もなく切断する枝切り鋏であれば、幼いメス奴隷の指など簡単に切断出来る。岡田の使用しているクーパーは細かい切断に向いているが、理津子の枝切り鋏は骨等を切断するのに適している。アカリは利津子が戻ってきて拘束された事から、ついに自分に対しての責めが始まるのだと震えていた。

「これ以上は、もう許して下さい。私をいじめないで」

アカリは泣きながら哀願するが、そんな事を言っては逆に会場の全ての観客の残酷な心に火を点けるようなものだった。

「おいおい、許す訳ないだろう。早くこのメス奴隷が処刑される所を観たいわ」

「このメス奴隷、わざと言ってるのかしら。私たちを興奮させるツボを心得てるみたいね」

「うふふ、そんなに泣かれたら、もっと壊してあげたくなってしまいますね。早くもっともっと泣かせてあげて下さい」

観客たちから異様な興奮が理津子にもアカリにも伝わってくる。ア

カリは、その気配に怯え更に激しく泣き出していた。

「可哀想ですが、どんなに泣いても無駄ですよ。これから、あなたの指を一本一本切断していきます。無理に我慢する事はありません。早く失神した方が楽だと思いますよ」

理津子はアカリに告げるとハサミに力を入れる。

ジャキーンッ

「んんぎゃあぁぁぁーーーっ、んばばばばばばあぁぁぁっ」

アカリの小指が切断されポンッと飛んで地面に落ちる。アカリは涙と鼻水で汚れた顔で絶叫する。

「いやでじゅぅぅっ、ゆるじでぐだぢゃいぃぃぃっ！」

絶叫するアカリに構わず理津子は、今度は左足の小指を切断した。

ジャキーン

「あぎゃあぁぁぁぁーーーっ、だじげでえぇぇぇーーーっ、だれがあ、だじげでぐだぢゃいぃぃぃーーーっ」

拘束され吊るされているアカリは逃げる事も出来ず蓑虫のように身体を振りながら指を切断されていく。理津子は、今度は親指にハサミを当てた。そして、あっさりと切断する。

「おぼおぉぉぉぉーーーっ、もういやでずぅぅっ、だれがだずげでえぇぇーーーっ！」

吊られながら指を切断されていき、激しく泣き叫ぶアカリの姿に観客も興奮していた。

「くくく、本物のロリータが泣き叫びながら壊されていく姿は興奮しますな」

「このロリメス奴隷だったら、こういった拷問でも映えるわね。あぁ、もっと泣かせてちょうだい」

「ふふ、指を全部切断したら次は鼻や耳も切断して欲しいわね」

観客たちの視線は激しく泣き叫び苦しむアカリの姿に集中していた。くるみを責めている岡田も、アカリの方から聞こえてくる凄まじい絶叫に思わず振り向いていた。

・・不味い、なんだあれは……。メス奴隷の指を切断しているのか。なんて事、考えやがる。俺はマンコを壊す事しか考えていなかったが、あっちの方が効果的か・・

岡田は慌ててくるみの小陰唇をびろーんと引っ張り出しクーパーを当てた。

・・早いとこ、このメス奴隷を気絶させないと……。小陰唇を短冊切りにすれば相当なダメージの筈だ・・

岡田はくるみの小陰唇をクーパーで切断し始めた。

ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ、ジョキッ

「あびゃあああぁぁぁぁぁーーーーっ！」

小陰唇を切断されくるみも激しく絶叫する。岡田は、くるみの小陰唇を5ミリ幅で短冊切りにしていた。自分の性器がどんどん壊されていく事を実感し、くるみはもう興奮よりも、その苦痛で泣き叫んでいた。

★　★　★　★

「あひゃ、あひゃ、あひゃ、あひゃ」

二匹のメス奴隷の対戦を観ながら女は自慰を始めている。もっとも周りの観客も、そのほとんどが自慰をしているので、その女が目立っているという事ではなかった。近藤は、その女に近付いてみるが、女は本当にメス奴隷の苦しむ姿を見て興奮し自慰しているようであった。

・・本当にただ処刑を見に来た観客なのか・・

近藤が手の届く位置まで近付くと突然女が振り向いた。近付いてきた近藤の気配を察知したらしい。女は鋭い瞳で近藤を観察していたが、股間に目を向けるとふっと笑みを浮かべ、もう興味ないという体でメス奴隷の方に顔を戻していた。近藤は怪しまれないように他の観客と同様全裸でいる。女は性器が切除されている近藤の股間を見て、近藤がトランスジェンダーであると思ったようだった。それなら、それを路用して近付いてやろうと近藤は考えていた。

「あの、すいません。少し良いですか。私、あなたみたいに胸を大きくしたいのですが。方法を教えて貰えませんか」

近藤はいきなり失礼な事を言うが、女の方は気にした様子もなく、むしろ興味を引いたようで近藤に顔を向けてきた。

「私は豊胸手術はやっていませんから、詳しくは知りませんが、まずはホルモン注射から始めてシリコンを埋め込むのではないですかね。オチンポを切除している所を見ると、あなたは本気のようですね。私も、オスがどれだけメスになれるのか興味がありますので私の所に来ませんか。実は私、あの渡邉ゆかりの膣の型を持っているのですよ。渡邉ゆかりが処刑される前に膣型をとられたようで、それが一時期販売されていたのですよ。あなたに、その渡邉ゆかりの膣を埋め込んであげますよ。どうですか、整形や豊胸も試してあげます。あなたは見た目とマンコの穴は渡邉ゆかりそっくりになるのです。あなたも、こんなトーナメントを見に来るようでは渡邉ゆかりに憧れているのではありませんか」

女は満面の笑みを浮かべて近藤を見つめていた。

「私は弥勒院月花。この対戦と処刑が終わったらさっそく施術に向かいましょう」

近藤は、やはりと思っていた。

・・こいつはやはり弥勒院の者か。葉月様の愛犬ブスの本当の名前は弥勒院風花だ。関係があるように思えるが、まさか姉妹なのか。いずれにしろ、それも含めて目的がまだ不明だ。もう少し近付いて探ってみるか・・

近藤は月花の誘いに乗ってみる事にした。

・・俺と葉月様の関係には気づいていないようだし、これはちょうどいいチャンスだ。上手くこいつの懐に入りこんでやる・・

近藤は仲良く月花と並んで、くるみとアカリの対戦を見始めた。

１５８、接近

１５８、接近

理津子は、バチバチと木の枝を切るようにアカリの指を落としていく。対する岡田はくるみの小陰唇を短冊切りにしていた。

パチン、パチン、パチン、パチン、パチン、パチン

ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ

トーナメント会場にアカリの指が切断される音と、くるみの小陰唇が切られていく音が響いていた。２匹のメス奴隷は叫び過ぎて声が枯れ、今は口を大きく開け声にならない悲鳴を上げている。どちらのメス奴隷が勝ち残るのか予測が出来ない展開であったが、メス奴隷を責めている理津子と岡田には、もう勝敗が分かっていた。

・・駄目だ、勝てない。俺はマンコにばかり拘っていた。このトーナメントの勝負に勝つにはメス奴隷の弱い所をつかなくては駄目なんだ。マンコに拘らず俺があのハサミを選んでいたら勝っていたのは俺だったかもしれない・・

岡田はくるみの小陰唇を切断しながら悔いていたが、要因はそれだけではない。岡田が枝切り鋏をとっていても理津子には及ばなかっただろう。理津子は先に岡田に枝切り鋏を取られた際の策も考えていた。その場合、理津子はクーパーでアカリの顔面を破壊するつも

りだった。理津子は同じ様に一回戦で性器を破壊されていたメス奴隷シズカを花梨が顔面を破壊して勝利した場面を見ていた。それを忘れずにいたのだ。どんな事態が起きようとも即座に対応する。その心構えこそが理津子の真骨頂といえた。そんな理津子であったからこそ、これから遥か未来まで豪徳寺葉月と戦い続けていく事が出来たのである。（この未来のお話は「スク水少女戦士ウテルス」参照）

・・そろそろ、終わりですかね。このメス奴隷もここまでよく頑張りましたが、もう限界でしょう・・

理津子はアカリがもう限界であるのに気づいていた。声が枯れて悲鳴は出ていないな口からブクブクと泡が吹き出している。目の焦点も合っていないように見える。まだ１１年物の幼いロリータにとって指をどんどん切断されていくのは、その激痛もさることながら精神的なショックも大きかった。この様子を食堂から観ているつぐみでさえも、少なからず衝撃を受けていた。

・・マンコを壊されるのは、ゆかり姉と同じ私の夢だけど、指の切断は出来れば遠慮したいな。指を切断されるなら腕や足を切断して欲しいよ。多分、指だと興奮しないからかな。手足だとダルマにされるようで興奮するから、ＯＫなんだけど・・

つぐみは、それでも勝つ為には有効な方法だと認識していた。

・・私はやっぱり勝負よりマンコを処刑されたいんだよ。はっきり分かった。ゆかり姉のようにマンコを徹底的に壊されて処刑されたい。それが全てなんだ・・

つぐみがモニターを視ながら物思いに耽っていると桃子が話しかけ

てきた。

「くるみちゃん、勝てるかなぁ。どんどんマンコ壊されてるけど大丈夫なの？私ならとっくに気絶してると思うよ」

「大内なら大丈夫だよ。大内も私と同じで頭がおかしいからね。苦しんでるけど、マンコを責められている限りきっと大丈夫だよ。多分、大内はマンコ濡らしていると思うよ」

「ええっ、あんなにマンコ責められてるのに濡らすなんて私には無理。絶対、無理だよ」

桃子は驚いたように言うが、真由子もマンコ責められて濡らすのは当然という顔をしていた。当のくるみ本人は、とても興奮などしておらず恐怖と激痛で泣き叫んでいたが、身体の方は反応していて膣口からは粘液が湧き出していた。その部分がアップでモニターに映し出された時、つぐみはほら見なさいとドヤ顔をしていた。そして、モニターを視ている食堂の面々にも、もうすぐ決着がつくだろうと予想出来た。声にならない悲鳴を上げ身体を揺らし暴れているくるみに対してアカリの方はぐったりと動かない。もう、１０本以上の指を切断されたアカリは時々身体をビクッビクッと動かす以外、俯いた顔で上目遣いのまま指を切断される時にだけ顔を上げ苦悶の表情を見せていた。そして、足の指が全て切断され、手の指も残り少なくなった時、ついにアカリは白目を剥いて反応しなくなっていた。哀れなアカリは、理津子に指を切断されていき、とうとう失神してしまったのだ。

「ビクトリー、くるみ」

沙也加が宣言し、食堂では桃子が大喜びしていた。

「くるみちゃん、また勝ったよ。ベスト8の仲間入りだよ。これ、うちのクラスの歴史に残るよね」

桃子ははしゃいでいたが、これは普通のトーナメントではない。負ければ処刑されるのだ。つぐみは、どう考えてもくるみが優勝出来るとは思えなかった。ここまでくるとメス奴隷の力だけではなく調教師の力も必要になる。つぐみはトーナメント表で残ったメス奴隷たちの面子を見て、いくら調教師が理津子であってもくるみが勝ち進むのは苦しいと思わざるを得なかった。

「完敗です。さすが橘さんだ。俺の力の及ぶ所では有りませんでした」

岡田は素直に負けを認めていた。

「惜しかったですね、岡田さん。選択は良かったのですが、方法を誤りましたね。が、観ているお客様は楽しかったと思いますよ。これから、メス奴隷の処刑ですが、岡田さんが使ったクーパーで、こうすれば勝てていたという方法をお見せしますよ」

理津子の言葉に岡田は驚愕していた。

・・俺が勝てていた?クーパーじゃ骨は断ち切れないぞ。指を切断するのは無理だ・・

岡田は理津子が何をしようとしているのか皆目見当がつかなかった。その理津子はアカリを処刑するため、今度は開脚逆さ吊りにアカリを拘束する。そして、枝切り鋏ではなくクーパーを手にしていた。

「私のメス奴隷のマンコがまだそこそこキレイだったから、そちらに目を奪われてしまったのでしょうね。でも、クーパーでも他の使い方をすれば良かったのですよ」

理津子は残酷に笑いながら、アカリの一回戦で燃やされた性器に目を向けていた。

★　★　★　★

月花はパチパチと指を切断されるアカリを見て自慰をしていた。そして、アカリが失神した瞬間勢いよく潮を吹いて果てていた。

・・こいつも相当頭のおかしい奴だ。何を考えてここにいるんだ。年の頃から見てブスより若そうだ。ブスの妹なのか。風月姉妹という事か。ブスの身体能力は一流だ。この月花というメスも相当な能力を持っていると思った方がいい。油断しないでいこう・・

近藤は、月花の横で観察しながら気を引き締めていた。

「いやぁ、良いですねぇ。主催者はよくこんなトーナメント思いつきましたね。頭が翔んでるとしか思えませんね。だって、生き残るのは優勝した1匹のみなんて普通あり得ないですよね。そう思って観に来たのですが、これはいけませんね。観てしまったら虜になりそうです」

月花の呟きで、近藤はますます訳が分からなくなってきていた。

・・トーナメントを潰しに来た訳ではなさそうだし、葉月様の動向

を探るようでもない。何がしたいんだ、こいつは・・

「おっ、処刑が始まりますよ」

月花は実に楽しそうに呟き、また右手を股間に持っていっていた。

★
★
★
★

「ゆかりの記録」を読んでいたひまりは我慢出来なくなり、机の角に股間を当てていた。そして、クリトリスを机の角で潰し自慰を始めてしまっていた。

「おっ、おっ、おっ、おっ」

小さな声がひまりの口から漏れ股間が湿ってきていた。

・・早くオープンして、もう待ち切れないよう・・

ひまりは机の角でクリトリスを潰し、足をピーンと一直線に爪先まで伸ばし身体を痙攣させていた。

１５９、変貌

斎藤はスタッフの前で一人前に講釈していた。スタッフたちも斎藤の話を真剣に聞いている。このスタッフたちは運営会社であるグループ・アグリカルチャーがシム６９の為に募集したスタッフたちであるが、採用の際もともとＳっ気のある者を選択していた。更に厚待遇であるので、採用されたスタッフは趣味と実益を兼ねたこの仕事の為に真剣になっていたのである。彼らの頭の中は、こんな楽しい事をしてお金が貰えるなんて最高の仕事だという意識があった。

「このステージ２へやって来るお客さんには誓約書を記入して貰う。なので、プログラムに沿った行為であれば何をしようとＯＫだ。お前たちの仕事は、このステージ２でお客さんを心身共にメス奴隷に堕とす事だ。そして、ステージ３へ送る。いいか、ステージ２では改造だ。やって来たお客さんをメス奴隷に変貌させるのだ。ただし必要以上に痛め付けないようにな。でもプログラムに含まれている、抜歯、ピアシング、焼き印、これは徹底的にやれ。あの渡邉ゆかりも全ての歯を抜かれ、顔面、乳首、マンコにピアスを数多く入れられた。焼き印も何ヵ所にも捺された。マンコの中にも焼き印を捺されたからな。お前たちにも、その辺はしっかりとやって貰う。どうだ、出来そうか」

斎藤の問いに、スタッフたちはギラギラした眼で大きくハイと答えていた。そんな事をやっていいのかと興奮しているように見える。

・・会社の方も考えたものだ。施設で一から育てるのは時間も手間も金もかかる。この方式ならメスが勝手に集まってくるわけだ。ステージ1で自分のマンコを破壊するという変態性癖を植え付けられてしまって、ステージ2で奴隷化されていく。そして、ステージ3で完全に頭のおかしいメス奴隷に仕上げられる・・

斎藤は、早くこのシム69をオープンさせ、水澤ひまりがやってくるのを心待ちにしていた。水澤ひまりをすきにする事が出来ると確約されているのだ。その為には早くこのスタッフたちの教育を完了させねばいけない。斎藤は今日中に抜歯、ピアシング、焼き印の教育を済ませて起きたいと考えていたが、このメス奴隷乃梨子がもつかどうか心配であった。

・・ゆかりの様な元々の超変態であれば問題ないだろうが、このメス奴隷では耐えられないだろうな。もう1匹手配しておいて貰うか。会社も早くオープンしたいだろうから、それくらいの要望は聞いてくれるだろう・・

斎藤は、百目鬼に電話するとメス奴隷の手配を要請していた。百目鬼はすんなりOKしてくれたが、斎藤にも条件をつけてきた。それは、一週間以内にスタッフの教育を終える事。もちろん斎藤もOKする。斎藤は出来れば、その前に教育を終わらせたかった。

・・よし、気合い入れていこうか・・

斎藤は自分に活を入れ、スタッフたちに向き合った。

「これから、このメス奴隷の抜歯を行う。二人こいつの頭を押さえて動けないようにして貰う。残りでこいつの歯を抜いていって貰お

うか」

体格のいい男のスタッフが二名選ばれ、乃梨子の頭を左右からがっしりと押さえる。乃梨子は腕も足も縛られているので抵抗など出来ずに、ただ震えているだけだった。

「ここから僕は口を出さないで見ているから自分で考えて順番にやってみなさい。分からない事があったら質問するように。といっても歯を抜くだけだから深く考えないで良いぞ。こいつを将来メス奴隷に成りたがっているお客さんだと思ってやるように。それでは、始め」

さっそく一番目の女子スタッフがプライヤーを手に乃梨子に近付いてきた。

「ひ、ひいっ」

乃梨子は小さく悲鳴を上げるが、女子スタッフはギラギラと興奮した瞳で震える乃梨子を見つめる。

「口を開けなさい」

冷たい声で命令するスタッフに乃梨子は怯えてしまい口を閉じていたが、女子スタッフは乃梨子の頬を思い切り打っていた。

パァーン

鋭い音が響き乃梨子の目に涙が浮かんでいた。

「早く口を開かないと、その鼻引き千切ってやるよ」

女子スタッフは乃梨子の鼻の穴をプライヤーで挟むと力を入れてきた。

「ひいいいいっ」

乃梨子は泣きながら口を開く。その状態で左右の男が乃梨子の口を押さえつけていた。そして、女子スタッフは乃梨子の前歯をプライヤーで挟んでいた。

「うご、うごうぅぅっ」

泣き声を上げる乃梨子の前歯をグリグリと動かしながら引き抜いていく女子スタッフの顔は実に嬉しそうであった。

ズボゥゥッ

勢い余って後ろに倒れそうになった女子スタッフであったが、無事乃梨子の前歯を抜く事に成功していた。乃梨子は口から血を流し号泣している。しかし、乃梨子のその姿が他のスタッフの残虐心に火を点けてしまった。次の女子スタッフも興奮した顔で乃梨子の歯をプライヤーで挟むと抜いていく。その様子から斎藤は、思ったより早く済みそうだと、こちらも興奮した顔で考えていた。

★　★　★　★

理津子はクーパーを持ちアカリの前に立つと、アカリの焼かれた性器を観察していた。外性器は焼けてしまっているが、尿道や肛門は

まだ穴として残っているようだ。膣も、もう本来の用途としては使用するのは無理だろうが、穴としては残っている。

・・11才でここまでマンコ壊されて、ある意味羨ましいと言った方が良いですかね。せっかくですから、もっとマンコ、ズタズタにして処刑してあげますよ。まだメスとしての意識も薄いでしょうが、メスである以上マンコを壊されないで処刑されては悔いが残るでしょうからね。それに岡田さんにお手本を見せてあげなくてはいけませんからね・・

理津子は指を落とされ気絶しているアカリに気付け薬を嗅がせ意識を戻すと、アカリの口に自分が穿いていた下着を詰めていた。そして、更にその上にガムテープを何重にも貼り付ける。

「ロリの泣き叫ぶ声も良いと思いますが、近くで処刑する身としてはうるさいですからね。塞がせて貰いましたよ。それでは、もうサヨナラですね」

理津子はアカリの尿道と膣にクーパーの刃を挿れると、そのまま切り裂いていく。

ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ

「ふぐおぅぅぅぅーーーーっ！」

アカリの塞がれた口から凄まじい絶叫が飛び出るが理津子は、アカリの尿道と膣を切る手を止めない。理津子はアカリの膀胱まで切り進み、尿道と膣を繋げてしまった。

「さあ、次いきますよ」

理津子はクーパーを抜くと、今度は膣と肛門にクーパーの刃を挿れる。そして、膣と肛門を一つにするように切っていく。

ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ、ジョキ

「んごうぅぅぅぅーーーーっ！！」

アカリの目が飛び出る程見開かれ、涙と鼻水が滝のように流れている。理津子はクーパーで切開して一つにしてしまった尿道と膣と肛門に手を入れガバッと拡げる。

「んんんごがあぁぁぁぁーーーーっ！！」

アカリは絶叫しながら身体はビクンビクンと大きく痙攣し始めていた。

「おやおや、ウンコがいっぱい詰まってますよ。仕方ない、掻き出してあげますね」

理津子はアカリの開いた腸から大便を取り出すと、それをアカリの顔面に塗り付けていった。そして、鼻の穴に入念に大便を詰めていく。

「！！！！！！！」

アカリは呼吸が出来なくなり、吊られたまま激しく暴れているが当然理津子は許す気などない。これは処刑なのだ。

・・さて失血死するか、窒息死するか、それともこれから抜かれる

子宮と卵巣の激痛でショック死するか。さあ、もう時間がないですよ・・

理津子は切開したアカリの股間に両手を突っ込み、ブチッとアカリの卵巣を二つ共引き千切る。

「ふごっ！！！！！！」

一際大きく身体を痙攣させたアカリはそれきり動かなくなっていた。

１６０、本性

１６０、本性

「さあ、最後の仕上げです」

理津子はクーパーを持ち、アカリの股間の割れ目に再び手を突っ込んでいた。予定通りアカリの子宮を抜き取るつもりである。理津子はクーパーでアカリの子宮の周りを切断していく。だが、もうアカリは反応する事もなかった。それでも、理津子は僅かにアカリに血流があるのをかんじていた。

「これで本当に終わりですね」

理津子はアカリの子宮に指を立て、両手で子宮を引きずり出していた。

ズボゥゥッ

切開されたアカリの股間から赤黒い臓器が取り出されていた。子宮が取り出された瞬間、観客席から歓声が上がる。しかし、アカリの身体は動く事はなかった。

・・可哀想ですが、これもメス奴隷の運命です。怨むなら私を怨んで下さって結構ですよ・・

ただの物体になったアカリの身体を見て、理津子は沁々と思っていた。

★　★　★　★

月花はアカリが絶命した瞬間、また潮を吹いていた。近藤は、この月花という人間がまるで理解不能だった。

「ああ、今日のイベントはこれで終わってしまいましたね。実に楽しい催しでした。このトーナメントを考えた方は天才ですね。私は、主催者の方を尊敬しますよ。これがまだ決勝まで続くのは楽しみですありますが、このトーナメントが終了した後、なんで自分を慰めれば良いのか不安になってきますよ」

月花は独り言のように呟くと歩き出していた。周りの観客たちも今日のプログラムが終了した為、帰り支度を始めている。近藤も月花に続いて歩いていると、月花が振り返った。

「会場を後にする前に売店に寄らせて下さい。興味深い物があるので買っておきたいのですよ」

月花は近藤の了解も得ずに売店に向かっていた。近藤にしてみれば、どんどん購入して貰いたい。売上げアップに繋がるし、月花の趣味思考が分かるかも知れないのだ。近藤は期待して月花についていくと、月花はいきなりメス奴隷処刑台を購入していた。あのギロチンが四基ついたメス奴隷の四肢を切断し、性器から串刺しにする処刑台だ。かなり高価な物であるが、月花はなんの迷いもなく即決で購入していた。そうそう売れる物ではないが、それがポンと購入され

売店のスタッフも笑顔が零れていた。そして、これは上客と思ったのだろう。細かなアイテムも勧めていく。

「あの、メス奴隷をスライスした処刑具も売っているのかしら」

月花の放った言葉で他のスタッフもお茶とお茶菓子を持ってやって来ると、どうぞこちらのお席にと応接室並のソファーを勧めていた。そして、あのスライサーは処刑台より大きくなりますので、分解された状態で発送し、組み立てて頂く事になりますがよろしいですかと説明する。月花は簡単に、構いませんと返事をしていた。あまりにも簡単に月花が高額商品を購入するものだから、近藤の方が逆に心配になっていた。

・・こいつ、商品だけ手に入れて金を払わない気ではないだろうな・・

しかし、それは近藤の杞憂に終わった。月花は一度自分のスマートフォンを取りに受け付けに行き、戻って来るとその場で送金を済ませていた。

・・やはり、こいつは正真正銘弥勒院家の者で間違いないな。葉月様の考案した処刑台を手に入れて何をするつもりだ。類似商品を開発するつもりか・・

近藤は、月花の考えがまるで読み取れなかった。月花は処刑台を購入した後も、メス奴隷の食材も購入していく。月花の周りには、これも買って貰おうというスタッフが集まって来ていた。そして、月花は集まってきたスタッフからも購入していく。

「ああ、これも欲しかったんだ。すぐ濡れる私のだらしないマンコ

にお仕置きしてあげないといけませんからね。ここで穿いて良いですか」

月花は針付きの下着を購入し、その場で穿いていく。

「ドキドキしますね。こういう下着を穿くのは初めてなんですよ」

そう言いながら月花は躊躇う事なく下着を穿いて、左右の端を持つとぐいっと引き上げた。

「あうっ、い、痛いです。本当にマンコに針が刺さっています。よく出来ていますね、この下着。ちゃんと針が刺さって欲しい所に刺さっていますよ」

自分で性器に針を刺す月花を見て近藤は、針付き下着を穿かされたブスを思い出していた。

・・こういう所は似ているのかも知れない。少し突っ込んで訊いてみるか・・

近藤はこれだけ周囲にスタッフがいる状況では、逃げられる事はないだろうと考え、月花にあなたに似た人を見た様な気がするんですが、お姉さんとかいますととぼけて訊いてみると月花は隠さずに姉がいますよと答えていた。

「へえ、姉は風花と言いますけど、姉の知り合いですか。姉は今、何やっているんですか」

「いや、顔を見た事があるだけで何をやっているのかは知りませんよ。あなたの方が知っているのでは」

「私たち姉妹はお互い干渉していないので知りませんよ。姉は真面目ですから本家にいわれた仕事をしてるんじゃないですかね。私はあんな本家の言うことなんか知ったことではないですし、自由に過ごしてますよ」

・・なるほど、こいつは自由に動いている訳か。ならば、こいつから弥勒院家の情報を残らず聞き出してやろう・・

近藤は内心ニヤリと笑い月花を見ていると、月花は針付き下着を穿いたまま大きく足を開いていた。

「私のマンコに蹴りを入れてくれませんか。針が刺さったマンコを蹴られると思うとゾクゾクしますよ。さあ早くお願いします」

月花の表情は、まるで自分の性器が壊れる事を望んでいる様に恍惚の表情をしていた。

・・こいつはやはり普通ではない。渡邉ゆかりについても詳しいようであるし、やはり渡邉ゆかりに惹かれているメスは皆こうなっていくのか。ふふ、面白い。こいつの信頼を得る為に言われた事はやってやるさ・・

近藤は月花の性器目掛けて思い切り蹴りを叩き込んだ。近藤の蹴りは素人の蹴りではない。敵を倒す為の蹴りだ。その近藤の体重を乗せた蹴りが月花の性器に炸裂していた。

「あびゃあぁぁぁぁーーーーっ！」

絶叫した月花であるが、その表情はまるで絶頂を迎えたような見事

なアへ顔を晒していた。

「ぎ、ぎもちいい……。マンコに針が深く刺さって、マンコの肉を抉ってくれる。もっと蹴って下さい。早く、早く」

月花はおねだりするように恍惚の表情で近藤を見つめる。近藤は、まるで月花に誘導されるように、月花の股間に蹴りを叩き込んでいた。

★　★　★　★

一刻の後、乃梨子の歯は全て抜かれていた。乃梨子は口の周りを真っ赤に染め号泣している。

「よしみんな、なかなか才能あるな。この調子なら早くこのアトラクションをオープン出来そうだ。教育係として嬉しいぞ。次はこのメス奴隷にピアスを入れていこう。これでマンコにピアスが入れば、お前たちにもこのメスがメス奴隷らしく見えてくるぞ」

斎藤は楽しそうに告げる。斎藤にしてみれば、水澤ひまりを処刑出来る日が早まるのだ。思わず頬が緩むほど上機嫌だった。

・・待ってろ、ひまり。もうすぐお前は僕のモノになる・・

斎藤の股間では、ひまりの処刑を妄想して性器が硬く勃起していた。

１６１、改定

１６１、改定

「今日も無事進行に滞りなく終了しました。残りの日程も無事終了するよう乾杯しましょう」

葉月の言葉で食堂にいた面々はグラスを上げ乾杯する。

「いよいよ葉月と対戦ですか。楽しみですね。私のメス奴隷ハルカはなかなかのものですよ。あなた、自分でメス奴隷琴音のおしっこの穴壊してましたけど大丈夫ですか？」

「あの時は少し興奮してしまいましたからね。でも琴音は大丈夫ですよ。あの子はマンコ壊されたくてたまらないのですよ。あの子を産んだ蜂須賀彩音によく似ています。トーナメントもここまでくると楽しみしかないですね。どの組が勝ってもおかしくないですよ。ここまでに、弱い組は全て負けていますからね」

「おいおい、それは俺に対する嫌味なのか豪徳寺」

クラヤミがテーブルについている面々の顔を見回して文句を言う。

葉月、ルイ、理津子、麗華、花梨、全てトーナメントで勝ち残っている者たちだった。トーナメントで敗退しているのはクラヤミだけだった。足元でブスが慰めるようにクラヤミの足にすり寄っていた。

「あぁブスは可愛いなぁ」

クラヤミはブスを撫でながら煮込みを箸でつまむ。ブスも嬉しそうにパクッと煮込みを食べていた。

「まあ、この中で必ず誰かは負ける訳だから、俺の仲間もすぐ出来るな」

クラヤミは今度は面白そうにみんなの顔を見ていた。そこへ、食堂の隅で酒を飲んでいた佐瀬が席を立ってやって来た。

「豪徳寺、一つ提案があるんだがな」

「なんですか。あなたから提案など珍しいですね。ハンデをくれとでも言うのですか。まあ、あなたでは、この香坂の娘には敵わないでしょうからね」

「私は別に構いませんよ。どうしますか、最初の１０分間私は寝ていましょうか」

葉月に続いて麗華にもバカにされたようで佐瀬は顔を赤くしてダンッとテーブルを叩いていた。

「お前ら俺をバカにしやがって、いいか俺は観客の為を思って提案するんだ。負けたら終わりのトーナメントだ。みんな勝つ為に頭を使うだろう。でも、その結果がお客さんを喜ばせるとは限らない。俺は前の対戦で勝つ事に拘り過ぎてお客さんを失望させブーイングされたからな。反省したんだよ。見に来てくれるお客さんの為にも楽しませてやらないとな。どうだ、豪徳寺。三回戦からは一撃で勝負を決めるのは止めよう。メス奴隷の耐久力と調教師の責めという

本来の対戦でいこうじゃないか」

熱弁をふるう佐瀬に葉月も仕方なく了承していた。

「確かに勝敗よりお客様に楽しんで貰うのが一番ですからね。良いでしょう、ルールを改定してそのようにしましょう。皆さんもよろしいですね。ここにいない渡邉とアサヒには私から伝えておきましょう」

葉月が頷くと佐瀬は、それでは宜しくと食堂を出て行った。

「良いのか、豪徳寺。あれは次の対戦で香坂さんに勝つ為の布石だぞ。香坂さんの鞭の威力を見たあの男はそれを封じる為に提案してきたんだ。香坂さんのあの鞭を喰らってはメス奴隷が耐えられないと考えたんだろう。だから、あのメス奴隷の弱点と思われる胸も責められないんじゃないか。お客を楽しませるとか上手いこと言って、自分が勝つ事だけを考えてる奴だな。香坂さんも切り札を失う事になるよ」

クラヤミの言葉に、花梨もそういう抜け目ない所がありそうな男に見えると同意していた。だが、当の麗華は自信たっぷりに言う。

「一撃で決めずにお客様を楽しませて勝てば良いのでしょう。別に私はあの鞭を使わずとも、普通に鞭で打って勝ちますよ。まあ、鞭が使用出来る前提ですが、他の責め具でも問題ないでしょう」

「これ以降の対戦は何を使って責めても構いませんよ。自分の得意な責めでメス奴隷を失神させて下さい。何をやろうとＯＫですが、佐瀬が言ったようにお客様を盛り上げる為に一撃で失神させるのは不可とします」

葉月が言うとクラヤミが反発していた。

「それなら一回戦からそうしてくれないとズルくないか。俺だって得意な責めが出来れば勝ってたかもしれない」

「始めは調教師のレベルにも高低がありますからね。公平を期す為に、こちらで責め具を指定しました。でも、ここまでくれば調教師のレベルも同じくらいに高いでしょう。ですので、自由にやって貰うのですが、あなたは駄目ですよ。あなたを自由にしたらメス奴隷を間違いなく殺すでしょう。一回戦でもメス奴隷を殺す気でいましたからね。まったく、ルイが相手で良かったですよ」

他の皆からも、あれは間違いなく殺す気だったねと突っ込まれクラヤミも言葉がなかった。

「麗華さんなら問題ないでしょう。それより私が心配ですよ。マンコ爆破されて潮を吹いてイッてしまうメス奴隷ミアンが相手ですからね」

理津子を見てルイが苦笑しながら言う。

「あのメス奴隷は、それこそ殺す気で責めなければ無理でしょう。遠慮なく殺しなさい。おそらくそれで丁度いいと思いますよ」

ルイの助言に理津子は驚いて目を広げていたが、分かりました、ありがとうございますと頭を下げていた。

★　★　★　★

沙也加は会場の片付けを終え、背中を伸ばしていた。トーナメントも残り少なくなり、次はＡブロックの三回戦だ。全体で見ると準々決勝となる。一日に行われる対戦数も少なくなり余裕が出来てきた。

・・ここで少し調教しておきますかね。トーナメントが終るまで我慢しようと思いましたが、ここで息抜きもかねて責めておきましょう・・

沙也加は、周りの状況を確認する。まだ、売店の付近にはお客が残っているようであるが、他の所には人影は見えない。沙也加は念のため、ぐるりと歩いて設備の破損等がないか確認してから売店に顔を出してみた。

・・近藤さん……・・

近藤が一人のメスの股間に連続で蹴りを入れていた。売店のスタッフも残っているお客もそれを遠巻きにして楽しそうに見学している。沙也加は状況が分からなかったが、メスの下着の股間部分が赤く染まっているのに気がついた。

・・あれは、あの下着を穿いているのですかね。そこに蹴りを入れて貰うなんて、なかなかの変態ですね。マンコ壊して貰いたいなら私が壊してあげますが・・

沙也加は、そこでメスの顔を見て葉月のペット、ブスに似ていると思っていた。

・・ブスに似ているメスに近藤さんが関わっている。これは葉月様

が依頼した仕事なのでしょう。私が下手に顔を出さない方が良いでしょうね・・

沙也加は近藤が仕事で動いていると察し、そのまますっと退いていた。そして、屋敷の地下室へ向かう。そこは葉月より宛がわれている沙也加が自由に使用出来る調教部屋だった。

・・さて、元気でいますかね・・

沙也加が調教部屋に入ると、部屋の中央に天井から吊るされている幼女の姿があった。両手首足首をまとめて縛られ駿河問いの拷問にかけられている。もちろん幼女の腰には錘が下げられ、目隠しにボールギャグも咬ませられている。幼女は漏らしてしまったとみえて、幼女が吊るされている下には水溜まりと汚物の山が出来ていた。そして、沙也加が近付くと、その気配に気付いたのかうめき声を上げていた。

「放っておいてすいませんでしたね。これから、もっと酷い事をしてあげますからね。京極紬ちゃん」

沙也加はまだ１０にも満たないだろうと思われる幼女に向かって話しかけていた。

１６２、幼女

１６２、幼女

京極紬。紬はメス奴隷ミホの性器破壊に抽選で当選し、ミホの性器を切開した幼女である。その処刑の際に沙也加の目に止まり、後に母親との交渉で沙也加に購入されていたのだった。

・・幼いながら真性の変態ですね。早くこの幼女のマンコを壊したいところですが、そこそこの金額を支払いましたからね。少しずつマンコ調教していって最後に処刑して差し上げましょう。ふふふ、ゾクゾクしますね。この幼い割れ目が壊されていくのは・・

沙也加はしばらく紬の様子を眺めていたが、ふと思い付いて革製の全頭マスクを持ってきた。

・・これで被せて視覚、聴覚や嗅覚も失くしてあげましょう。ほぼ無の世界に放置されて耐えられますかね。楽しいですよ、あなたが狂っていく様子を想像すると・・

沙也加は一旦目隠しを外すと、紬の頭に全頭マスクを被せていく。紬が涙が溢れる目でなにか訴えていたが、沙也加は構わずマスクを被せていく。このマスクは厚い革で制作されており、後頭部の編み紐でしっかりと装着出来るようになっている。一度これを被せられてしまうと革の厚みで視覚は勿論、聴覚も奪われる。呼吸用に口の部分に小さな穴が幾つか空いているが、ボールギャグを咬まされて

いる紬は話す事も出来なくなっている。沙也加は後頭部の編み紐をぎゅーっときつく絞め上げ、隙間がないようにチェックし、さらに南京錠で誰かが脱がせようとしても不可能なようにロックしていた。

「もう聞こえないだろうけど、乳首とクリにも錘をつけといてあげるわね。最初はピンチで挟んで着けてあげる。５００ｇからでいいかな」

沙也加は楽しそうに紬の小さな桜色の乳首をピンチで挟んでいく。つるぺたの胸で乳首だけが錘の重さで無様に伸びている。紬の苦しむ声が小さく聞こえている。

・・この年で調教され処刑されるのは嬉しいでしょう。次はロリマンコの小さな豆につけますよ。こっちは１ｋｇからいきますか・・

沙也加は紬の幼い割れ目をくぱぁと拡げるとクリトリスを刺激する。しばらくすると紬の身体は汗ばんできて、小さなクリトリスも硬く勃起していた。

・・このピンチは６９番が作成した強力な仕様ですからね。針で刺されるよりもきついでしょうね。楽しみですねぇ・・

沙也加はゆかりが自分の性器を痛め付ける為に作ったピンチで紬のクリトリスを挟む。

「！！！！！」

声にならない悲鳴が全頭マスクを被せられた紬から漏れる。紬のクリトリスが千切れそうなほど伸び、錘がゆらゆらと揺れている。紬は駿河問いに吊るされ、全頭マスクを被せられ、腰、乳首、クリト

リスに錘を下げられ、塞がれた口で苦悶の声を上げていた。幼い紬にとって、このような調教も拷問も初めての経験である。泣き叫ぶ以外なかった。

・・うう、これは我慢するのが苦痛ですね。このメスのマンコを直ちに壊したい。それに口を塞いだのは失敗でした。このメスの絶叫を聞いた方が楽しめますね・・

沙也加ははやる心を抑えながら、一度全頭マスクを脱がしてボールギャグも外していく。その途端、紬は泣き叫んでいた。

「いだあぁぁぁーーっ、いだいぃぃぃぃーーーーっ、もう、ゆるじでえぇぇーーーっ！！」

「あははっ、これですよ、これ。いくら泣き叫んでも許されずにマンコを壊されていく。それがたまらなく興奮しますね」

沙也加は、興奮で手が震えながら再び全頭マスクを被せていった。今度はボールギャグを外しているので紬の泣き声がよく聞こえる。

「さてさて、まだ調教はたくさん残っていますよ。基本的なものでも、鞭や蝋燭、針なんかありますからね。あなたの幼いマンコはどれも初めてでしょう。順番に経験させてあげますからね」

沙也加は紬の割れ目を見つめ、残酷に笑っていた。

★　★　★　★

しずくはベッドに寝ていた。性器の中がズキズキと痛み、その興奮で眠る事が出来なかった。それもその筈、しずくの膣内には画鋲が大量に詰め込まれ、さらに画鋲が落ちないように左右の小陰唇を閉じて縫われてしまっているのだ。少し身体を動かしただけで、しずくの膣から強烈な痛みが脳内まで貫いていく。しずくは、その自分の性器の中を襲う痛みに興奮していたのだった。

・・いよいよ理恵さんとの決戦だ。理恵さんは私をお姉ちゃんだと思って全力でくると思う。でも私は負けない。理恵さんには悪いけど私が勝つ。そして、理恵さんに私はお姉ちゃんじゃなくて、しずくだと認めて貰う。私は、頭のおかしいメス奴隷のしずくなんだよ。お姉ちゃんと同じ格好をしたのは、同じに見えても中身は違うと分かって貰いたいから。私もお姉ちゃんに憧れている。でもやっぱりお姉ちゃんに勝てないのは分かっている。私はお姉ちゃんがいたから、こうしてメス奴隷にもなれたし、こんなトーナメントにも出場出来た。全部、お姉ちゃんが用意してくれていたんだ。だから、お姉ちゃんの期待を裏切らないようにしたい。私はお姉ちゃんの姿で、渡邉しずくとして闘う・・

しずくは、それでも自分が負ける場合も考えていた。二回戦の戦い方を見ていると相手の調教師の佐瀬は勝つためには手段を選ばないように見えた。二回戦のメス奴隷みたいに逆さ吊りから地面に落とされて気絶する事態も考えられるのだ。しずくはまだルールが改定された事を知らなかったので、予想外の責めで失神させられる可能性もあると思っていた。そうなると明日が最後の日になる可能性もある。

・・でも、あの調教師の人ならマンコ徹底的に壊してくれるよね・・

しずくは処刑されるのなら、姉のゆかりと同じ葉月が良かったのだ

が、そんな我が儘をメス奴隷の自分が言える筈もないと理解していた。

・・ここまできた調教師の人なら、誰でもマンコ完全に壊してくれるはず・・

しずくは、動画で観たゆかりの最後を思い出していた。泣き叫び命乞いしながらも容赦なく徹底的に性器全てを壊され、発狂して絶命したゆかり。

・・お姉ちゃん、私ももうすぐそちらにいくよ。そしたら、いっぱいお話ししようね・・

ゆかりは最後の夜も精神的に追い詰められていたが、しずくはゆかりを想い落ち着いた気持ちで夜を過ごしていた。

★
★
★
★

近藤は、月花に誘われてついていく事になったが、会場から出て衣服を着る際に、月花から女の子になるつもりなら女の子の服を着なさいと言われ、月花が売店で用意したブラと下着を身につけ、セーラー服とプリーツミニスカートを着せられていた。

「うーん、可愛い。似合いますよ。これは楽しみですねぇ」

月花はそう言うが、近藤がセーラー服を着た姿はどこから見ても不気味なものだった。

「この姿をよく覚えておきなさい。私が、このセーラー服が似合う身体にしてあげますから」

月花は股間が血で赤く染まった下着を穿いたまま自分もセーラー服を着て、さあいきましょうと近藤を促していた。

・・こんなふざけた格好させやがって。でも何も気づいていないようだしチャンスだ。このまま、こいつの拠点まで案内して貰おう・・

近藤はセーラー服で月花の後について歩きだした。

１６３、決意

１６３、決意

花梨はベッドに寝ている自分のメス奴隷ヤチホの様子を見ていた。ヤチホも二回戦で性器に多大なダメージを受けた。ニードルで子宮を串刺しにされ、尿道から膀胱も串刺しにされ腹まで突き破られたのだ。今は点滴を射たれ静かに眠っている。

・・ヤチホが今度戦うのは、伝説のメス奴隷渡邉ゆかりの実の母親のアヤコだよ。アヤコも二回戦で相当なダメージを負っているけど、あの６９番の親かと思うと安心出来ない。多分もっと自分のマンコが壊される事を願っている。勝機があるとすれば、それはヤチホの方が若いっていう点だ。同じ責めを受けてもヤチホは耐えられると思う。だから、休みなく徹底的にアヤコのマンコを壊していく。ここで勝ってメス奴隷しずくとの対戦に挑戦したい。それが私とヤチホの願いだから。あと少し頑張ろう、ヤチホ・・

静かな寝息を立てているヤチホを花梨は見つめ、決意を新たにしていた。

★　★　★　★

理恵は両腕を縛られバックから犯されていた。佐瀬は理恵の腰を押

さえ激しく腰を動かしている。

・・明日、勝つにしろこいつのマンコは壊されるだろう。最後にメスの幸せを与えといてやるよ・・

佐瀬に背後から貫かれ理恵は泣きながら声を上げていた。もともと、ゆかりの影響を受け異性にはあまり興味を示さず、自分の性器を痛め付けるのが最上の喜びであった理恵は、長年しずくを育てていた事もありメスとしての経験は、同い年のメスに比べ遥かに少なかった。本人は、敬愛するゆかりのようにメスの穴は壊される為にのみ存在すると思っている。この穴で快楽を得るなど許されるものではないと信じていたが今、理恵は佐瀬に媚薬を注射され、飲まされ、塗られ、初めてのメスの絶頂に何度も堕とされていた。

「あひぃぃぃっ、イグッ、イグウゥゥゥッ」

理恵は無様に何度も潮を吹かされ、中に放出されていた。

・・あぁ、わたくしのマンコの中が熱い。その熱い中にもっと熱いものが放出されています。あひゃぁぁっ、もう、らめぇぇぇっ、またイギます・・

理恵は、もうトーナメントの対戦など頭の中になかった。全ては快楽で塗り潰され、理恵は狂ったように子宮を突かれる快感に溺れてしまっていた。

・・もう、らめぇぇぇっ。おかしくなる。ううん、わたくしはもう狂っている。マンコ、気持ちいい。このまま串刺しにされたい・・

理恵は、佐瀬に犯され快楽に溺れながらも、ゆかりがやられた性器

から口までの完全な串刺しを自分と重ね合わせて、また潮を吹いていた。

★　★　★　★

アヤコはテーブルの上に仰向けに固定され、頭だけテーブルから出され倒されると、喉奥まで一直線に犯されていた。

「お前のズタボロの汚いマンコより、こっちの方が遥かに具合がいいな」

渡邉は、妻であるアヤコの口に自分の性器を根元まで突き刺し激しく腰を振っていた。アヤコは呼吸も出来ず、目から涙を流しながら口を犯されている。渡邉は、そんな妻の姿に逆に興奮しさらに激しく腰を振っていた。

ジュボッ、ジュボッ、ジュボッ、ジュボッ

喉の奥の奥まで犯されアヤコはえずきながらも性器を濡らしてしまっていた。

・・ああ、今なら分かるわ。ゆかりがマンコ処刑を望んでいた理由。メスにとってマンコを壊されるのは究極の快感。これ以上の喜びはないわ。私もやっと理解できた。あなたには悪いけど私はもうトーナメントなんてどうでもいい。早くゆかりの様にマンコを徹底的に完全に破壊されて処刑されたい。ゆかり、あなたは本当に私にとっていい娘だったわ。あなたの絶命した時の顔は忘れられない。私もあんな顔して絶命したい。明日こそ、私の願いは叶うのかしら・・

アヤコは妄想を抱きながら、失神していった。渡邉はそれでも構わずアヤコの口を犯し、アヤコの喉の奥に射精していた。

★
★
★
★

「百目鬼主事、お願いがあるのですが」

ひまりの監視を続けている〝M〟は、その仕事を〝Y〟と交代しグループ・アグリカルチャーの本部に戻って来ていた。赤いスーツの百目鬼はすらりとした脚を組みながらソファーに座り〝M〟を見ている。

「なんでしょう?休暇のお願いですか。このところ休み無しで働いて貰っていましたからね。うちもブラック企業と思われては困りますからね。有給なら申請して頂ければ良いですよ。日数が残っている分お好きに申請しなさい。ただ私からのお願いですが、出来ればあまりまとめて取らないようにしてくれると助かります」

「ああ、それなら大丈夫です。2、3日でけっこうですので」

「それなら、何も問題ありませんよ。申請書を提出して下さい。それにしても珍しいですね、あなたが自分から休みたいと願いでるなんて」

「ええ、少し興味が湧いてきまして、私も体験してみようかなと」

「体験?いったい何を体験するつもりですか」

「水澤ひまりを観察しているうちに、あのメスをあそこまで夢中にさせる、うちのアトラクション〝シム６９〟に興味を持ったのですよ。私も社員である以上体験しておいた方が良いかなと思いまして」

「シム６９ですか。あれは、どのメスでも夢中になるという代物ではありませんよ。あなたにとってはただの頭のおかしいメスのオナニーとしか思えないかも知れません」

百目鬼はここで言葉を切るとソファーから立ち上がり、机の引き出しから白い物を取り出した。

「それでは少し適正を試してみましょう。そのスクール水着を脱いで、これを穿いてみて下さい。最低限これを自分で穿けるようでなければ〝シム６９〟は楽しめません。もっとも、これは初期型ですから大概のメスは穿けると思いますがね」

百目鬼から受け取った白い綿の下着を見て〝M〟は、これがそうかと思っていた。下着のクロッチに画鋲が埋め込まれている。ひまりを最初の暴漢から救出した時に、ひまりも穿いていたようだった。

・・６９番こと、渡邉ゆかりが自分のマンコを痛め付ける為に作成した下着。こんな下着を考える自体頭がおかしいけれど、この下着に惹かれるメスも多いようだ。そういう私も惹かれている。これを穿けばマンコに画鋲の針が突き刺さる。でも、穿きたい。穿いてみたいと私は思っている・・

〝M〟は下着を手にしたまま、性器を濡らしてしまっていた。

★
★
★
★

ひまりは悶々としていた。自慰ではもう自分の気持ちを抑えられない。一刻も早くシム６９がオープンして欲しかった。そんな時、ひまりは学校の噂を思い出していた。今、Ｚクラスでは課外授業と称して、あるトーナメントに見学に行っているという。それは、とても普通の人間では正視出来ないトーナメントらしいが、特殊な性癖の人間にとっては一度見たら目が離せなくなる程の中毒性があるらしい。

・・明日、Ｚクラス担任の西園寺先生に訊いてみよう・・

ひまりは、そのトーナメントが自分の望むものであるならば、是非観戦したいと思っていた。

１６４、早朝

１６４、早朝

早朝の豪徳寺邸の庭園を花梨はヤチホを連れて歩いていた。花梨は大きなリュックを背負い、ヤチホは両腕を後ろ手に縛られ、首輪に付けられた鎖に引かれてヨタヨタと歩いている。今日は花梨とヤチホにとって大事な日である。６９番ゆかりの両親との戦いだ。しかも、今日から責め具も自由。メス奴隷を殺さずに気絶させるだけの簡単なルールだが、一撃で失神させるのはＮＧとなる。花梨は何を使って責めるか、考えあぐねていた。

・・何を使用してもいいって、逆に選択肢が多すぎて決められないよ。得意な責め具があれば迷う事はないだろうけど、私は得意な責めなんてない。今までトーナメントを見た中で有効な責めを見つけていかないと・・

花梨は早朝の爽やかな風に吹かれながら、ふとヤチホを振り返った。ヤチホは花梨が急に立ち止まったので驚いた顔で、花梨の顔を見返していた。そして、ヤチホはニコリと微笑んでいた。

「御主人様、調教して貰えますか。これが最後になるかも知れませんので」

「分かったよ。それなら、ここで野外調教してやるよ」

調教室でない場所での調教も葉月から許可されている。花梨は背負っていたリュックを下ろし、ファスナーを開けた。中には様々な調教具が入っている。花梨はその中から浣腸器を取り出した。浣腸器といっても普通の肛門から浣腸するだけの浣腸器ではない。

「ヤチホの好きな三穴浣腸をしてやんよ。どう、嬉しいだろう」

「はい、嬉しくてヤチホのマンコはもう濡れています。どうぞ、遠慮なく楽しんで下さい」

ヤチホは地面に顔をつけ、尻を高く突き出し足を開いていた。花梨の前にヤチホの肛門と性器が丸見えになっている。花梨は浣腸器から延びている3本のチューブをそれぞれヤチホの尿道、子宮口、肛門に挿入していった。

「さて、準備ＯＫだね。最初は私のおしっこを注入してあげる。ありがたく下の口から飲みなさい」

花梨は下着を脱いで自分の性器に浣腸器のシリンジを当てる。そして、その中にジョーッと放尿し、シリンジをいっぱいに満たすと、それをヤチホの膀胱、子宮、直腸に注入していった。

「ああ、私の中に御主人様のおしっこが入ってきます。とても熱くて嬉しいです」

ヤチホは自分の中に花梨の小便を注入され恍惚の表情を浮かべていたが、花梨はヤチホの尿道に挿入しているチューブを抜いて栓を閉めていた。

「せっかく治療して貰った膀胱をまた壊しちゃいけないからね。こ

こはもう止めとくよ。でも、他の穴にはまだまだいくよ」

花梨はヤチホに浣腸しながら、ヤチホの尿道から抜いてチューブを自分の肛門に挿れる。そして、チューブの栓を開いた。花梨はヤチホの子宮と肛門に浣腸しながら、自分の肛門にも自分の尿を浣腸していた。

「それじゃ、次の浣腸いくよ。今度は私のウンチをあんたの子宮と腸に注入してやるよ。６９番は自分のウンチを子宮に入れてオナニーしてたようだけど、他人のウンチを入れられるのも興奮するだろう、ヤチホ」

花梨は自分の肛門にシリンジを当て、その中に排便していた。そして、シリンジを汚物で満たすとプランジャで押し込み、ヤチホの子宮と肛門に汚物を注入していく。

「ううっ、私の中に御主人様のウンチが入ってきます。子宮の中に固形物が入ってくる感覚、とても興奮します。私の子宮の中をウンチで満たして下さい」

ヤチホが興奮して顔を赤らめている姿を見て花梨は、メス奴隷を失神させるには苦痛系で責めるしかないと実感していた。

・・私では豪徳寺や香坂さんのように鞭で失神させるのは難しい。橘さんがやったように、メスでメス奴隷のマンコを解体してやる。でも、気を付けないと殺してしまう。細心の注意でやらないと墓穴を掘ってしまう。それに私はメスを持っていない。誰かに借りないといけない・・

花梨は、ヤチホをそのまま放置してメスを借りるため屋敷に向かっ

て走り出していた。

「御主人様、最後は放置プレイで辱しめてくれるのですね。観客の皆さんが入場してくるまで脱糞を我慢しろという事ですね。皆さんが来られたらお尻の穴とマンコからウンチを排泄してる姿を見て貰うのですね。さすが御主人様、私を人と思っていない仕打ちに興奮してしまいます」

ヤチホはポツンと庭園に残されて興奮していた。

★　★　★　★

ひまりは朝のホームルームが終わってから急いで別棟のＺクラスの教室に向かっていた。ノックして教室のドアを開けると教室には３人の女子生徒がいた。

・・あれ、確かＺクラスには１０人くらいの生徒がいた筈だけど、みんなお休みなのかな・・

ひまりが教室内を見回していると、一人の女子がひまりを指差してアーッと声を上げていた。ひまりも改めてその女子を見ると、暴漢に襲われた時に一緒にいた女の子であった。

「あの時、一緒だった子だよね。どうしたの、やっぱりＺクラスに回されたの」

「えっ、いや私は違うんだけど西園寺先生に用事があって……。あっ、私は水澤ひまりと言います」

「先生ならもうすぐ来ると思うよ。私は武田真由子。こっちは御門つぐみで隣が大瀧桃子。ほんとはもう二人いたんけど昨日処刑されちゃったんだ」

・・処刑……・・

ひまりは心臓の鼓動が早くなり、性器が濡れ始めていた。そこへ響子が入ってきた。

「あら、あなたは？」

自分のクラスではない生徒がいたので響子は驚いていた。普通クラスの生徒はZクラスのある別棟に近付くのさえ嫌がるのに教室に入っているなんて信じられなかった。

「あの……。先生に訊きたい事がありまして……。今Zクラスは課外授業をしているそうですが、実際どんな授業をされているのですか」

ひまりは正直に響子に訊ねていた。つぐみたちは顔を見合わせて響子がどう説明するのか期待しているようだった。

「ええと、あなたお名前は？」

「水澤ひまりと言います」

「水澤さんはZクラスではないので教える事は出来ませんね。ほら、もう授業が始まるでしょう。早く自分の教室に戻りなさい」

響子がひまりに冷たく言うが、つぐみたちがそれに反発していた。

「先生、それは差別ですよ。クラスが違くても同じ学校の仲間ですよ。知りたいと言ってるのに教えてあげないのはおかしいです」

つぐみの言葉に桃子も真由子も賛成する。

・・まったく、この子たちはこういう時にはすぐに団結するんだから・・

響子は心の中で舌打ちしながら、どうせあのトーナメントの高額な入場料は個人では払える筈がないと確信していた。

「仕方ないわね。この子たちに見学に行って貰っているのは、メス奴隷処刑トーナメントよ。行きたいなら御自由にどうぞ。ただし入場料はかなり高額ですから覚悟しておきなさい」

しかし、つぐみがまた反対する。

「私たちの入場料は学園が出してくれているのに水澤さんの分は出せないのですか」

「あなたたちの分は特別にオーナーが出してくれているのです。私が決められる訳がありませんよ」

逆ギレ気味に言う響子を見てつぐみはどこかに電話をかけていた。

そして、暫くして響子のスマートフォンが鳴り出した。

「はい……。ええっ……。ちょっと、オーナー……。分かりました」

響子は電話を切るとつぐみに目を向ける。

「ちょっと、御門さん。何をしたの」

「橘理津子さんと知り合いになれましたので、電話でお願いしただけですよ」

つぐみは、しれっと答えていたが、響子は苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

「水澤さん、特別にオーナーがあなたの分も入場料を出してくれるそうです。この子たちと一緒に見学に行って下さい。あなたのクラスには伝えておきますので。ただし、何があっても自己責任ですよ」

ひまりは、ありがとうございますと響子とつぐみたちに頭を下げていた。

１６５、驚愕　ヤチホＶＳアヤコ

１６５、驚愕

いよいよＡブロック三回戦が開始される。会場にはトーナメントを観戦する観客がゾロゾロと入場していた。その中にはひまりを含むＺクラスの生徒たちの顔もあった。

「すごい人……。このトーナメントにこれだけの人が集まるんですね」

ひまりが驚いて言うが、つぐみはそれだけ世の中にはおかしな性癖の人がいるんだよと笑っていた。

「昔は人に言えないような性癖でも、今は個人の権利が尊重されていますもんね。それを指摘すると逆にハラスメントと言われてしまいますからね。凄い世の中ですよ」

桃子が物知顔で言うが、それ授業で西園寺先生が言ってた事でしょうと、つぐみに指摘され舌を出していた。

「それでは、Ａブロック三回戦メス奴隷ヤチホ対Ａシードアヤコの対戦を開始します。メス奴隷、入場」

沙也加のアナウンスが響き、会場に渡邉とアヤコ、そして、花梨とヤチホが入場してくる。

「おや、神無月さん緊張しているのかな。かなり表情が固いね」

食堂でクラヤミがモニターを見ながら呟いていた。

「まあ相手があの渡邉夫妻ですからね。無理もないでしょう。それにしても、あの渡邉というオスは本当にクズですね。自分のメスを始末しようとしているのは明白ですからね。気をつけなければいけないのは、奴は相手のメス奴隷を殺す気ですよ。それで負けても次の準決勝ではメス奴隷のいなくなった神無月さんは戦えません。奴は、６９番が勝ち上がってくると予想しているのでしょう。そうなると６９番は不戦勝で決勝に駒を進める事になります。つまり、最悪でも自分の娘が準優勝の賞金を手に入れます。その金を自分の物にするつもりでしょう。お金に執着するクズの奴が考えそうな事ですね」

葉月は、渡邉の考えている事をずばり言い当てていた。その場にいるクラヤミとルイも、成る程と頷いている。

「でも神無月さんなら、そうそう簡単に自分のメス奴隷を殺されないでしょう。その前に相手のメス奴隷を失神させるのではないでしょうかね」

「確かに普通に考えればルイの言う通りですが、神無月さんはメス奴隷を失神させて勝とうとしています。対して渡邉はメス奴隷を殺して負けてもいいと考えている。心構えの違いです。真剣勝負では、この精神面が大きく影響してくるのですよ」

「こいつは驚いた。豪徳寺から精神論が出てくるとはね。俺には豪徳寺には狂気しか感じないけどな。誰が頭がおかしいかと訊かれた

ら俺は間違いなく豪徳寺と言うよ」

クラヤミは葉月を馬鹿にして笑っていたが、その時食堂内の空気は凍りついていた。食堂にいた客はそろそろと逃げ出し、食堂のスタッフも厨房の奥に隠れていた。そして、葉月はだんと立ち上がりクラヤミを睨みつける。ルイはやれやれという顔をしていた。葉月はシュッと袖からタングステン鋼のメスを取り出しクラヤミに迫るが、クラヤミの膝の上にブスが乗りクラヤミに撫でられて嬉しそうに身体を丸めていた。ブスはまるで葉月に気がつかないように幸せそうな顔で笑っている。それを見た葉月も思わずつられて笑顔になっていた。

「ブスがそれだけ懐いているのですから仕方ないですね。私に対する無礼は不問にしましょう」

葉月もクラヤミと一緒になってブスを撫で始めていた。

★
★
★
★

Mは画鋲付きの下着を腰まで上げて手を止めていた。それは、自分の性器に画鋲の針が刺さる恐怖からではなかった。Mは自分の気持ちに戸惑っていたのである。

・・なんだろう、私は自分のマンコに針を刺そうとしてるのに興奮してマンコ濡らしてる。私はマンコに針を刺したいと思っている。マンコに針を指したらどんな気持ちなんだろう。本当に試してみたい。マンコに針を刺す痛みを味わいたい・・

Mは息を荒げながら股を開き、下着を一気に引き上げていた。

プツッ

皮膚に針が刺さる小さな音がしてMの性器に画鋲が刺さっていた。

「あうううぅっ」

Mは声を上げていたが、それに反して性器は漏らしたように激しく濡れていた。

・・ううっ、痛いのに気持ちいい・・

そのMの姿を見ていた百目鬼は、Mに命令する。

「どうやら適正はあるようですね。それでは、もっと大きく股を開きなさい。そして、両手を頭上に上げ目を瞑るのです。そのまま動かないように」

Mは百目鬼に命じられた通り手を上げ、足を開き、目を瞑った。百目鬼は短い乗馬鞭を手に取るとMの股間に狙いを着けた。

パシィィッ

「はぶうぅぅぅーーーっ」

百目鬼はMの股間に鋭い鞭の一撃を加えていたが、Mは百目鬼の指示通り動かずに耐えていた。百目鬼は連続でMの股間に鞭を叩き込む。

パシィッ、パシィッ、パシィッ、パシィッ、パシィッ

「あぶうぅぅぅーーーっ、ぶぶうぅぅぅーーーっ」

Mは動かずに耐えていたが、そのMの股間から透明な液体が湯気をたてて溢れだしてきていた。

ピシャッ、ピシャッ、ピシャッ、ピシャッ、ピシャッ、ピシャッ、ピシャッ

「あぶうぅぅぅぅーーーっ！」

鞭の打撃音が変わる。Mは画鋲が刺さった性器を鞭で打たれ、本当に尿を漏らしてしまっていた。

「良いですね、M。適正があるというより、あなたも立派なメス奴隷になれますよ。あなたも、人間を捨ててみませんか」

「はい、私も自分で頭がおかしいと自覚しました。もっと激しくマンコ鞭で打って下さい。あぶうぅぅーーーっ気持ちいい。私のマンコ、徹底的に壊して下さいぃぃぃっ」

Mは大きく叫ぶと白目を剥いて失神してしまった。

・・これは、いいメス奴隷が出来そうですね・・

百目鬼は倒れたMを見下ろして笑みを浮かべていた。

★　★　★　★

近藤は気が付くと手術台のような物の上に全裸で寝かされていた。起き上がろうとしてみるが、手足を拘束されているようで動く事が出来ない。

・・どうして、こうなった？・・

近藤は思い出してみるが、月花と共に郊外の古びた屋敷に来たのは覚えている。玄関のドアから邸内に入り、月花が早速始めましょうと笑いながら言った瞬間から記憶がなかった。

・・あの時、何かされたのか・・

近藤は油断していた訳ではなかった。常に月花にも周囲にも気を配っていた筈だった。

・・それ以前に何かされていたのだ。あの売店……。そこで、月花の股間に蹴りを入れていた時、興奮した残っていた客が私にも蹴らせてと割り込んできた。それを止めていた時、あのメスから目を離した。その時だ、それ以外考えられない。薬か無痛注射か。くそっ迂闊だった・・

近藤は自分の失敗を後悔するが、月花が脇に現れると今度は麻酔マスクを口に当ててきた。近藤は再び深い闇の中に堕ちていった。

１６６、決意

１６６、決意

花梨は隣の渡邉の様子を見る。

・・これが６９番渡邉ゆかりの父親なの。普通の人間のように見えるけれど、６９番も見た目は真面目そうな女の子だったもんね。でも、その内側に凄まじい狂気を隠していた。今までの対戦を見るとこの人間も相当な狂気を潜めているよね。けれど私たちは負ける訳にはいかないよ、絶対勝つよヤチホ・・

花梨は手に持ったメスを握りしめる。葉月に借りてきたタングステン鋼のメスだった。

・・これを使って相手のメス奴隷アヤコのマンコを壊す。次に進むためには容赦しないよ・・

花梨は沙也加の開始の合図を今か今かと待っていた。そして、沙也加の右手が上がる。

「Ａブロック三回戦メス奴隷ヤチホ対アヤコ、開始」

花梨と渡邉は素早くメス奴隷を縛りあげていく。その早さはほぼ同等。程なくしてヤチホとアヤコは、どちらも開脚逆さ吊りにされていた。この体勢で縛られるという事は、お互いの狙いはメス奴隷の

性器であるのは明白だった。花梨はすぐにメスをアヤコの性器に当てる。

・・まずはオーソドックスに小陰唇と陰核を切除していく。おそらくそれだけでは失神しないだろうから、そこからは膣切開と子宮頸部切除と進めていく。その後は子宮内部を切り刻む。メスの象徴である子宮を破壊されれば、このアラフォーのメス奴隷では耐えられないだろう。あんたも、こんなトーナメントに出て来なければ、まだ生きていられたのに残念だね・・

花梨はアヤコのクリトリスをメスで深く抉り取っていく。

シュパッッ

「あんぎゃあぁぁぁぁーーーっ！」

絶叫するアヤコのクリトリスが簡単に切除されぽとっと落ちる。葉月や沙也加のメス捌きに比べると数段落ちる花梨ではあるが、クリトリスや小陰唇を切除するのに支障はない。花梨は、続いてアヤコの小陰唇を引き伸ばしメスを当てる。ヤチホのダメージを最小限に留めるため出来るだけ早くアヤコを失神させる必要があるのだ。

・・次の対戦を考えるとヤチホにこれ以上ダメージを与えたくない。メス奴隷６９番は強敵だし、調教師の香坂麗華も強敵だ。でも、私はブスに教授して貰った奥義がある。ここでヤチホのダメージを防げれば、６９番にだって勝つ事が出来るんだ。その為に早くこいつを仕留める・・

花梨はアヤコの小陰唇にメスを滑らせていく。

ツゥウーーーーッ

「うぎゃあぁぁぁーーーーっ！」

アヤコの悲鳴が響くが、それとは別の音が花梨の耳に聞こえてきた。

キュイーーーン

何かの回転音だった。花梨は、その音の正体を知って愕然とする。それは渡邉が手にしている電動ドリルの回転音だった。渡邉は、そのドリルをヤチホの性器に突き入れようとしていた。

・・あいつもヤチホのマンコを徹底的に壊そうとしている。あんなドリルで穴を空けられていったらヤチホのマンコはすぐに壊されるよ。豪徳寺や神楽坂のメス捌きと違って、私のメスなんかじゃとても対抗出来ない。どうすれば……・・

花梨が悩んでいるうちに渡邉はヤチホの尿道にドリルを突き入れていた。

チュイィィィーーン

「あびゃあぁぁぁぁーーーーーっ！！」

ヤチホの絶叫と共に、ヤチホの股間から血と肉片が飛び散っていた。それを見た花梨は決意する。

・・香坂麗華に隠しておきたかったけど、ここで負けたら本末転倒だね。ブス、ありがたく使わせて貰うよ・・

花梨は、バックの中から禍々しい形の鞭を取り出していた。

★　★　★　★

天美はシム６９のオープンまで処刑トーナメントを観ようと豪徳寺の屋敷の会場に来ていた。会場はすでに満員御礼の状態で後ろから観るには苦しいので天美は、少し離れた場所に設置してあるモニターで観戦する事にした。そのモニターな周りも人が多いが、それでも観戦するのに支障はない。もし、天美が昨日会場を訪れていれば月花と会えたかもしれなかったが、月花は今日は自分の屋敷でお楽しみの真っ最中だった。

・・どういう事、あれは……・・

何気なくトーナメントを観ていた天美だったが、モニターに映った花梨の取り出した鞭を見て驚いていた。

・・あれは蛇腹鞭。弥勒院の分家に伝わる武器だよ。あれを継承しているのは風花の筈だけど、風花とは今連絡がとれない。まさか、あのメスが風花を殺して手に入れたのか・・

天美には風花が大切にしている伝家の鞭を他人に貸すなど考えられなかった。殺されて奪われた、それ以外ない。天美は豪徳寺を倒す前に、このメスも始末しなければと決意していた。

★　★　★　★

麗華は食堂でモニターを見て天美と同じ様に驚いていた。

「蛇腹鞭……。どうして神無月さんが、あれを……」

麗華はそこでクラヤミの膝に乗って撫でられているブスに目を向ける。

「ブス、そういえば神無月さんと特訓していましたね。あなたが教えたのですか」

麗華がブスに問いかけるが、ブスは黙ったままだった。

「無理ですよ香坂の娘。ブスは声帯を制御する首輪を付けられているので喋れません。ペットなので当たり前でしょう」

葉月に言われても麗華はブスを見つめていた。

「どうしました麗華さん。あの鞭が気になりますか」

理津子が心配して訊くと麗華はやっとブスから視線を外していた。

「ええ、あの蛇腹鞭は鞭であって鞭でありません。人を殺すためだけの邪悪な鞭です。あれは人が使ってはいけない鞭なのです。今では使える者もいなくなった筈ですが、まだその技を伝えている者がいたのですね。もし神無月さんが力加減を間違えたら、しずくちゃんのお母様は殺されるでしょう。いずれにしろ、失神は免れません。つまり、あのメス奴隷アヤコの運命は確定してしまいました」

「うははっ、面白いですね。神無月さんもそんな隠し球を持ってい

るなんてやるじゃないですか。それにブスも素晴らしいですね。それで私に襲いかかってくれば良かったのに。そうだ今度、改めて私と勝負しましょう、ブス」

葉月は楽しそうに言うが、ブスは怯えたようにクラヤミに身体を押し付けていた。

「やめろ、豪徳寺。ブスが怯えているだろう。ブスだって、拳銃の弾が止まって見える奴なんかと戦いたくないってよ」

「あなたは黙っていなさい。拳銃の弾の軌道は直線ですが、鞭は変幻自在。まるで違いますよ。あぁ、ワクワクしますね。蛇腹鞭ですか。是非、相手にしてみたいですね」

葉月はもうすっかりブスとの対戦を決めているようだった。

「心配するなブス。みんな、ブスの味方だからな」

クラヤミは震えているブスを優しく撫でていた。

★　★　★　★

近藤は目覚めて青ざめていた。

「まだしばらくは組織が安定するまで動いてはいけませんよ」

月花がそう言いながら大きな姿見で近藤に全身を見せていた。月花は会心の笑みを浮かべているが、その鏡に映る姿は近藤ではなく幼

い少女のように見えた。

「俺なのか、このメスが……」

「どうです、嬉しいでしょう。マンコもあの69番の型を使って膣の襞まで作り込んでいます。外性器も69番と変わりませんよ。それから、気をつけて下さい。69番は〝俺〟なんて言いません。〝私〟と言うように。もう、あなたはメスなのです。チンポを切断している程のあなたの夢が叶ったのですよ。しばらくはメスの身体を楽しみなさい」

近藤は信じられないという顔で鏡に映る自分の姿を眺めていた。

１６７、失敗

１６７、失敗

花梨が構えた鞭を見て沙也加も渡邉も度肝を抜かれていた。

・・なんですか、あの鞭は……。見たことありませんが非常に危険な匂いがします・・

・・なんだ、あれは。だが何を使おうが俺は構わない。俺は勝っても負けても構わないからな。ここであの調教師がアヤコを殺してしまっても、俺にはなんの影響もない。むしろ、すっきりするな。しかし、後学のために、あれをどう使うのか見ておこう・・

渡邉は、ドリルをヤチホの性器に突き入れる作業を一旦止め、花梨の動きに注目していた。花梨は蛇腹鞭（じゃばらむち）を振り、アヤコの性器に狙いをつける。

・・奥義〝雷（いかづち）〟（注１）。ブスから伝授して貰った必殺技をメス奴隷アヤコのマンコの穴にぶち込む。これでアヤコは間違いなく失神する。お客様はみんな次の対戦で、６９番とアヤコの親娘対決を期待しているだろうけど悪く思わないでよ。私たちが勝つから・・

花梨は、蛇腹鞭を高速で振り回し、鞭に勢いをつける。蛇腹鞭は麗華の見えない鞭のように、その姿が見えなくなっていた。

ゴバァァァーーーッ

通常の鞭とは異なる異様な音だけが周囲に響き渡り、観客たちはその後はどうなるのか期待していた。花梨は蛇腹鞭を振りながらブスと特訓した時の力加減を思い出していた。

・・殺してしまっては私たちの敗けになってしまう。万が一にも失敗する訳にはいかないよ・・

花梨のその姿を食堂でブスも心配そうに見ていた。そして、麗華も歴史の闇の中に隠れていた蛇腹鞭の挙動を見極めようと、花梨の一挙一動に注目している。それは、他の食堂にいるメンバーも同じであった。全員が花梨に目を奪われていたのだ。会場の観客も同様で花梨は、そのプレッシャーも感じていた。

・・手の内を曝してしまった以上、ここで決めないといけないよ。何度も見せては攻略法を考えられてしまうかも知れない。特にあの香坂麗華には気を付けないと・・

花梨は精神を集中する。そして、アヤコの性器に向かって奥義を放った。

ズガァァァッ！

蛇腹鞭の先端はアヤコの性器ではなく、手前の地面に突き刺さり5センチ程の穴を穿っていた。

・・しまった……・・

花梨は力をセーブするあまり、狙いを外してしまっていた。しかし、

すぐに蛇腹鞭を引き抜くと再び鞭を振る。

・・いけない。もう失敗は許されないよ。これ以上時間をかけたらヤチホがもたない・・

渡邉は、花梨の失敗を見ると肩をすくめ再び電動ドリルを起動させヤチホの性器に突き入れようとしている。今度は膣を破壊するつもりのようだ。花梨は、次に失敗したら自分たちの勝利はないと追い詰められていた。

★
★
★
★

斎藤は百目鬼に申し訳なさそうに頭を下げていた。

「あの乃梨子というメス奴隷を壊してしまいました。どうやら発狂してしまったようで、もう何をしても反応がおかしくて、教材としては使えません。処刑用に出荷するか、別の用途に使用するようにして新しいメス奴隷を1匹まわしてくれませんか。もうすぐスタッフの教育も終了しますので」

「要請は受けていましたからね。構いませんよ、すぐに別のメス奴隷を用意しましょう。それにしても、さすがですね。おかげで予定より早くオープン出来そうですよ、感謝します。それで、どこで壊れたのでしょうかね。それによってこれからの用途が変わってきますので」

「ええ、全ての歯を抜歯して、マンコや乳首にピアス入れて、次に焼き印を始めたのですが、マンコの中、子宮に焼き印したところで

発狂してしまいました」

「ほう、それならマンコは壊れている訳ではないですね。それに肛門も……」

百目鬼はグルーム・アグリカルチャーのスタッフに指示を出していた。そして、スタッフがすぐに新しいメス奴隷を連れてくると、百目鬼に引き渡していた。

「どうぞ、新しいメス奴隷です。前のメス奴隷と同じく桜桃中学校Zクラスの生徒だったモノです。元の名前は田頭亜紀といいますが、好きに呼ぶと良いでしょう。前のメス奴隷乃梨子はスタッフに回収させますので箱に入れておいて下さい」

「分かりました。それでは失礼します」

斎藤は、亜紀の首輪についた鎖を引き出ていった。一人になった百目鬼は、今までオークションでメス奴隷を購入した顧客リストをモニターで見ていたが、その中で生体家具を所望している顧客がいた。

・・ふむ、ちょうどいいですね。メス奴隷乃梨子を生体家具に仕立てて出荷しますか。多数ピアスを入れられたマンコを灰皿にして活用して貰いましょう。子宮にうちの社の焼き印もされてますからね。そこで煙草の火を消して貰えれば、うちの社の宣伝にもなるでしょう。さっそく手足を切断して加工していきますか・・

百目鬼は再びスタッフを呼び、指示を出していた。

★　★　★　★

近藤は手術台の上で大きく股を開かされ性器の状態をチェックされていた。

「外性器は本物のメスと変わりないですね。ビラビラの伸びもこんなものでしょう。さすがにクリトリスを勃起させる事は出来ませんが神経は繋いで快感は得られるようにしてあります。膣内にも擬似バルトリン腺を作成して予め体内に入れた粘液を興奮と同時に放出するようにしてあります。これでマンコが濡れる様子を再現出来るのですよ。子宮はただの袋ですから、当然子供なんて産めませんし、そもそも卵巣はありません。安定してきたらオナニーでもして楽しんで下さいね」

月花は実に楽しそうに近藤の性器をチェックしながら説明していた。

「何か質問はありますか？あぁ、そうそう、あなたはこれから蔵満穂乃果（注2）と名乗りなさい。私がもう随分前に処刑してあげたメスの名前ですよ。あの頃は私もまだ小さかったですからね。でも初めて処刑したメスの名前なので忘れず覚えているのです。自分から処刑希望で来たくせに、いざ処刑が始まるとびーびー泣いて楽しかったなあ」

月花は、昔の出来事を思い出しうっとりした顔になり性器を濡らしてしまっていた。

★　★　★　★

・・お母さん、あの変な鞭をマンコに当てられたら負けちゃうよ。お父さんもゆっくりしてないで早く相手のメス奴隷を失神させれば良いのに・・

しずくはモニターを視ながらやきもきしていたが、自分も花梨の蛇腹鞭で性器を壊されたいとも思っていた。

・・あの変な鞭を見てるとドキドキする。私もあの鞭で責められたい。でも、その為にはお母さんがここで負けないと戦えない。私がお母さんの立場だったら、負けてもいいから味わってみたいよ。お母さんも、私やお姉ちゃんと同じだったら、そう思っているかな・・

しずくは、モニターに映るアヤコの姿から気持ちを読み取ろうとするが、それは不可能だった。しかし、会場で観戦しているつぐみは確信していた。

・・叔母さんは待っている。あの鞭が自分のマンコに叩き込まれるのを。私でも、そう思う。あれでマンコをぐちゃぐちゃにされたい・・

つぐみはアヤコの気持ちを推し量りながら、自分の性器を濡らしてしまっていた。

（注1）二部「118、奥義」で花梨がブスから伝授された奥義。

（注2）少女無惨、「穂乃果からの手紙」に登場する少女。あの事件の犯人は……。

この作品の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://novel18.syosetu.com/n8098ik/

変態異常自虐少女ゆかりの記録

2025年10月5日02時14分発行